

裁きが 神の家から始まる

全能神教会

序 文

神を信じている人はたくさんいるが、神への信仰とは何を意味するか、神の心に従うためには何をしなければならないかを理解している人はほとんどいない。人々は「神」という言葉や「神の働き」のような語句はよく知っているが、神を知らないし、ましてや神の働きなど知らないからである。それなら、神を知らないすべての人々がでたらめな信仰に取りつかれているのは無理もない。人々は神への信仰を真剣には受け止めない。なぜなら神を信じることは彼らにとってあまりにもなじみのないものであり、あまりにも不慣れなことだからである。これでは、彼らが神の求めに応えることなどできない。言い換えれば、人々が神を知らなければ、神の働きを知らなければ、神に使われるには適さないし、ましてや神の望みに応じることなどできない。「神への信仰」とは神の存在を信じることを意味し、これは神に対する信仰の最も単純な考えである。さらに、神の存在を信じることは、真に神を信じることと同じではない。むしろそれは強い宗教的含みを持つ単純な信仰である。神への真の信仰とは、神はすべてのことに支配権を持つという信念に基づいて神の言葉と働きを経験することを意味する。墮落した性質から解放され、神の望みに応じ、神を知ることができる。そのような道程を経てのみ、神を信じていると言える。しかし、人々はしばしば神に対する信仰を、何か単純で取るに足らないものだと考える。このような形で神を信じる人は、神を信じることの意義を失っており、最後の最後まで信じ続けるかもしれないが、神の承認を得ることは決してない。なぜなら、彼らは間違った道を歩んでいるからである。今日でも、文字上でだけ、空しい教義上でだけ神を信じている人々がいる。彼らは自分たちの信仰には本質がないことや、自分たちが神の承認を得られないことに気が付かず、依然として平安と神からの十分な恩恵を願って祈っている。わたしたちは立ち止まって次のように自問するべきである。神を信じることは本当に地上で最も容易なことなのだろうか。神を信じることは神から十分な恩恵を得ることではないのだろうか。神を信じているが神を知らない人々、神を信じているが神に反抗している人々は本当に神の望みを満たすことができるのだろうか。

神と人を同等なものとして語ることはできない。神の本質と神の働きは人にとって最も深遠で理解しがたい。神が人の世で自ら働きを行わず、言葉を話さなかったら、人は決して神の旨を理解することはできないし、全生涯を神に捧げてきた人々でさえ、神の承認を得ることはできない。神の働きがなければ、人の行いがどんなによくても無駄である。神の考えはいつも人の考えより高く、神の英知は人にとって測り知れないものだからである。そのため、神と神の働きを「完全に理解してい

る」と主張する人たちは無能な輩で、皆自惚れていて無知だとわたしは言う。人は神の働きを決め付けるべきではないし、その上、人は神の働きを決め付けることはできない。神の目には人は蟻よりも小さいのに、どうして人が神の働きを推し測ることなどできようか。「神はあんな方法やこんな方法では働かない」とか「神はこのような、あのようである」といつも言っている人々——彼らは皆高慢ではないだろうか。わたしたちは皆、肉なる人々は残らずサタンによって墮落させられていることを知るべきである。神に反抗するのは彼らの本性であり、彼らは神と同等ではなく、ましてや神の働きに助言することなどできない。神が人をいかに導くかは神自身の働きである。人は服従するべきであり、これこれしかじかの意見を持つべきではない。人はちり芥にすぎないのだから。わたしたちは神を見つけようとしているのであり、神が考慮すべき神の働きの上に自分たちの観念を重ね合わせるべきではないし、神の働きに故意に反対するために自分たちの墮落した性質を用いることなどもってのほかである。そのような行為はわたしたちを反キリストにさせるのではないだろうか。どうしてそのような人々が神を信じているなどと言えるだろう。わたしたちは神の存在を信じているので、神を満足させ、神を見たいと望んでいるので、真理の道を求め、神と融和するための道を探すべきである。わたしたちはかたくなに神に反抗するべきではない。そのような行動に何の益があるだろう。

今日、神には新しい働きがある。あなたはこれらの言葉を受け入れないかもしれない。あなたには奇妙な言葉に感じられるかもしれないが、わたしはあなたに本性を表さないよう忠告する。神の前で本当に義に飢えかわいている人々だけが真理を得ることができ、本当に敬虔な人々だけが神によって啓かれ、導かれることができるからである。口論を通して真理を求めてもそこからは何も生じない。静かに求めることによってのみわたしたちは結果を得ることができる。わたしが「今日、神には新しい働きがある」と言う時、わたしは神が再び肉となることに言及している。おそらく、あなたはこれらの言葉を気にしないか、これらの言葉を軽蔑するか、あるいはおそらくあなたにとって極めて興味深い言葉であるかもしれない。いずれにせよ、わたしは神の出現を本当に切望するすべての人々がこの事実を直視し、慎重に考慮することを希望する。結論に飛びつかない方がよい。これが賢い人々の行動すべきやり方である。

このようなことを考察するのは難しいことではないが、わたしたちそれぞれにこの真理を知ることが要求される。受肉した神は神の実質を有し、受肉した神は神の表現を有する。神は肉となるので、なそうと意図している働きを打ち出し、また神は肉となるので、自分が何であることを表して、人に真理をもたらし、人にいのちを授け、人に道を指し示すことができる。神の実質を含んでいない肉体は決して受肉

した神ではなく、これについて疑う余地はない。受肉した神かどうかを人が考察しようとするならば、その者が表す性質や話す言葉からそれを裏付けなければならない。つまり、神の受肉した肉体かどうか、それが真の道かどうかを裏付けるには、その者の実質を基に判別しなければならないのである。そこで、受肉した神の肉体かどうかを決定するとき、鍵となるのは、外見よりもむしろその者の実質（働き、発する言葉、性質、およびその他多数の側面）である。外見だけをじっくり見て、結果として実質を見落とすならば、その人が暗愚で無知であることを示している。外見は本質を決定しない。その上、神の働きは決して人の観念と一致することはない。イエスの外見は人の観念とはまったく違っていただろうか。イエスの外見と衣服はイエスの真の正体に関し何らの手がかりも与えることができなかったのではないだろうか。古代のパリサイ人がイエスに反対したのは、彼らがイエスの外見を見ただけで、イエスの語る言葉を真剣に受け止めなかったからではないだろうか。神の出現を求める兄弟姉妹には歴史の悲劇を繰り返さないで欲しい。あなたがたは、現代のパリサイ人になって神を再び十字架につけるようなことをしてはならない。あなたがたは神の再来をどのように歓迎するか慎重に考え、真理に服従する人になるにはどうしたらよいか、はっきりした考えを持つべきである。これが、イエスが雲に乗って再臨するのを待っているすべての人の責任である。わたしたちは霊的な目をこすり、非現実的な考えに満ちた言葉の餌食になってはならない。わたしたちは神が現実に行う働きについて考え、神の実際的な面を見るべきである。イエスをまったく知らず、見たこともなく、イエスの旨をどう行ったらよいかわからないあなたがたを引き上げるために、主イエスが突然雲に乗ってあなたがたのもとに降りて来る日をひたすら楽しみにしながら、調子に乗ったり、空想にふけて自分を見失ったりしてはいけない。現実的な事柄を考えているほうがよい。

あなたは研究のため、あるいは受け入れるつもりでこの本を開いたのかもしれない。あなたの態度がどうであれ、わたしはあなたがこの本を最後まで読み、簡単に脇に押しやってしまうのを希望する。おそらく、これらの言葉を読んだ後、あなたの態度は変わるだろうが、それはあなたの動機と理解度次第である。しかし、あなたが知っておくべきことが一つある。神の言葉は人の言葉として語ることはできないし、ましてや人の言葉は神の言葉としては語ることはできない。神に使われる人間は受肉した神ではなく、受肉した神は神に使われる人間ではない。ここに実質的な違いがある。これらの言葉を読んだ後、あなたはこれらが神の言葉であることを受け入れず、ただ啓示を受けた人の言葉として受け入れるかもしれない。そうだとすれば、あなたは無知ゆえに目が見えなくなっているのだ。どうして神の言葉が啓示を受けた人間の言葉と同じでありえようか。人の姿になった神の言葉は

新しい時代を開始し、人類全体を導き、奥義を明らかにし、人に新しい時代に向かう方向を示す。人が獲得する啓示は単純な実践、あるいは認識にすぎず、人類全体を新しい時代に導くことはできないし、神自身の奥義を明らかにすることもできない。神は結局神であり、人は人である。神は神の本質を持っており、人は人の本質を持っている。神によって語られた言葉を単に聖霊による啓示と見なし、使徒や預言者の言葉を神自らが語る言葉として受け取るならば、それは間違っている。とにかく、あなたは決して正しいものを誤りとするべきではないし、高いものを低いものとして話すべきではないし、深いものを浅いものとして話すべきではない。とにかく、あなたは真理であると知っていることを決して故意に論駁するべきではない。神の存在を信じる人はすべてこの問題を正しい観点から考察すべきであり、神の新しい働きと新たな言葉を神の被造物の観点から受け入れるべきである――さもないと神に淘汰されるであろう。

ヤーウェの働きの後、人のあいだで神の働きを行うためにイエスは受肉した。イエスの働きは単独で実行されたのではなく、ヤーウェの働きの上に築かれた。神が律法の時代を終わらせた後に行ったのは、新しい時代のための働きだった。同様に、イエスの働きが終わった後、神は次の時代のための働きを続行した。神による経営全体はいつも前進しているからである。古い時代が過ぎると、それは新しい時代に置き換えられ、古い働きが完了すると、神の経営を続行する新しい働きがある。今回の受肉は神の二回目の受肉であり、イエスの働きに続くものである。もちろん、この受肉は単独で起こるのではなく、律法の時代と恵みの時代の後の第三段階の働きである。神が新たな段階の働きを始めるたび、そこには常に新たな始まりがあり、それは必ずや新たな時代をもたらす。また、神の性質、神の働く様式、神の働く場所、神の名にも、それに付随する変化がある。ゆえに、新しい時代の神の働きを受け入れるのが人にとって難しいのも無理はない。しかし、いかに人が反対しようと、それには関係なく、神はいつも自分の働きを行っており、いつも人類全体を前方に導いている。人の世に誕生したイエスは恵みの時代を開始し、律法の時代を終わらせた。終わりの日において、神はもう一度肉となり、この受肉とともに、恵みの時代を終わらせ、神の国の時代を開始した。神の二回目の受肉を受け入れられる人はすべて神の国の時代に導かれ、それ以上に、神の導きを直接受け入れることができるだろう。イエスは人のあいだで数多くの働きをしたが、全人類の贖いを完了させ、人の贖罪のためのささげものとなるだけだった。人から墮落した性質のすべてを取り除くことはなかったのである。サタンの影響から完全に人を救うには、イエスが罪のささげものとなって人の罪を背負うことだけでなく、神がさらに偉大な働きを行い、サタンによって墮落させられた性質を完全に取り除くことが

必要だった。そこで、人が罪を赦された今、神は人を新しい時代に導くために肉へと戻り、刑罰と裁きの働きを開始した。この働きは人をより高い領域に連れてきた。神の支配の下に従う人はすべてより高い真理を享受し、より大きな祝福を受けるだろう。彼らは本当に光の中に生き、真理、道、いのちを得るだろう。

人々が恵みの時代に留まっていれば、彼らは墮落した性質を決して免れないし、ましてや神の本来の性質を知ることはない。人々がいつも豊かな恵みの中に生きていても、神を知り、神を満足させることを可能にするいのちの道がなければ、いくら神を信じていても決して本当に神を得ることはないだろう。それはなんと哀れな形の信仰ではないか。あなたがこの本を読み終えた時、神の国の時代における受肉した神の働きの各段階を経験した時、あなたは長年の希望がついに実現されたことを感じるだろう。あなたはそのとき初めて本当に神を直接見たとを感じるだろう。初めて神の顔をじっと見つめ、神自らの発言を聞き、神の働きの英知を正しく理解し、神がなんと現実的で全能かを本当に感じるだろう。あなたは過去の人々が決して目にしたり、所有したりしたことのない多くの事柄を獲得したことを感じるだろう。この時、あなたは神を信じるとは何か、神の心に従うとは何かをはっきりと知るだろう。もちろん、あなたが過去の考えに執着し、神の二度目の受肉の事実を否定、あるいは拒絶するならば、あなたがたは手ぶらなままでとどまり、何も獲得せず、ついには神に反抗するという罪を犯すだろう。真理に従い、神の働きに服従する人々は再び受肉した神——全能者の名の下に集うだろう。彼らは神自らの導きを受け入れ、さらに多くの高い真理を手に入れ、本当の人生を受けるだろう。彼らは過去の人々がそれまで決して目にすることのなかったビジョンを見るだろう。「そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎが突き出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであった」（ヨハネの黙示録 1:12-16）。このビジョンは神の全性質の現れであり、このような神の全性質の現れは、今回人の姿となった神の働きの現れでもある。刑罰と裁きを連発する中で、人の子は言葉を話すことによって本来の性質を表現し、その刑罰と裁きを受け入れるすべての人々が人の子の本当の顔、ヨハネが見た人の子の顔の忠実な描写である顔を見ることを認める。（もちろん、このすべては神の国の時代の神の働きを受け入れない人々には見えないだろう。）神の本当の顔は人間の言葉では十分明確に表現することはできないので、神

はその本来の性質の表現を用いて人に本当の顔を示す。すなわち、人の子の本来の性質を経験した人々はすべて、人の子の本当の顔を見たのである。神はあまりに偉大なので、人の言葉で十分明確に表現することができないからである。いったん神の国の時代における神の働きの各段階を経験したら、ヨハネが燭台の明かりの中にいる人の子について語った言葉の意味を人は知るだろう。「そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであった」。その時、あなたは、これほどの多くの言葉を語ったこの普通の人間が、本当は二度目の受肉した神であることをまったく疑う余地なく知るだろう。そしてあなたは自分がいかに祝福されているかを本当に感じ、自分をもっとも幸運であると感じるであろう。あなたはこの恩恵を受け入れたくないだろうか。

目次

1. キリストの初めの言葉：第一章	12
2. キリストの初めの言葉：第二章	13
3. キリストの初めの言葉：第三章	14
4. キリストの初めの言葉：第五章	15
5. キリストの初めの言葉：第十五章.....	16
6. キリストの初めの言葉：第八十八章.....	19
7. キリストの初めの言葉：第百三章.....	22
8. 全宇宙に向かって語った神の言葉：第四章	26
9. 全宇宙に向かって語った神の言葉：第五章	29
10. 全宇宙に向かって語った神の言葉：第六章	32
11. 全宇宙に向かって語った神の言葉：第八章	36
12. 全宇宙に向かって語った神の言葉：第十章	39
13. 神の国の賛歌.....	43
14. 全宇宙に向かって語った神の言葉：第十二章	45
15. 汝ら民よ、みな喜びなさい！	48
16. 全宇宙に向かって語った神の言葉：第二十六章.....	49
17. 全宇宙に向かって語った神の言葉：第二十九章.....	52
18. 信者はどのような観点をもつべきか	55
19. 墮落した人間は神を体現できない.....	57
20. 宗教的な奉仕は一掃されなければならない	59
21. 神への信仰において、あなたは神に従うべきだ.....	61
22. 完全にされた人々への約束	64
23. 悪人は必ず罰を受ける	68
24. 神の心になうように仕えるには.....	71
25. 神が人間を用いることについて.....	75
26. 新時代の戒め.....	77
27. 千年神の国は訪れた	80
28. 実際の神は神自身であることを知るべきである	83
29. 今日の神の働きを知ること	87
30. 人が想像するほど神の働きは簡単なものか	93
31. 神を信じるなら真理のために生きるべきである	96
32. 七つの雷が轟く――神の国の福音が宇宙の隅々まで広まることを預言	99

33. 受肉した神と神に使われる人との本質的な違い.....	102
34. 信仰においては現実に集中せよ——宗教的儀式を行うことは信仰ではない.....	108
35. 今日の神の働きを知る者だけが、神に仕えてもよい.....	110
36. 神の最新の働きを知り、神の歩みに従え.....	114
37. 神は自身の心にかなう者を完全にする.....	123
38. 真心で神に従う者は、必ずや神のものとされる.....	128
39. 神の国の時代は言葉の時代である.....	133
40. すべては神の言葉が達成する.....	142
41. 完全にされる者は精錬を経なければならない.....	153
42. 辛い試練を経験することでのみ、神の素晴らしさを知ることができる.....	165
43. 神を愛することだけが本当に神を信じることである.....	171
44. 「千年神の国が到来した」についての短い話.....	179
45. 神を知る者だけが神に証しをすることができる.....	183
46. ペテロはいかにしてイエスを知るに至ったか.....	189
47. 神を愛する人は永遠に神の光の中に生きる.....	198
48. 聖霊の働きとサタンの働き.....	206
49. 真理を実践しない人への警告.....	211
50. あなたは生命を吹き込まれた人か.....	216
51. 性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである.....	219
52. 神を知らない人はすべて神に反対する人である.....	224
53. 神の働きのビジョン（1）.....	229
54. 神の働きのビジョン（2）.....	234
55. 神の働きのビジョン（3）.....	241
56. 受肉の奥義（1）.....	257
57. 受肉の奥義（2）.....	270
58. 受肉の奥義（3）.....	275
59. 受肉の奥義（4）.....	282
60. 二度の受肉が、受肉の意義を完成させる.....	297
61. 三位一体は存在するのか.....	304
62. 征服の働きの内幕（1）.....	315
63. 征服の働きの内幕（3）.....	325
64. 征服の働きの内幕（4）.....	333
65. 将来の使命にどう取り組むべきか.....	339
66. 祝福をあなたがたはいかに理解しているか.....	340

67. 神に対するあなたの認識はどのようなものか	342
68. 本物の人とは何を意味するのか.....	348
69. あなたは信仰について何を知っているか	353
70. 落ち葉が土に還る時、あなたは自分の行なったあらゆる悪事を後悔する	359
71. 血肉に属する者は誰も怒りの日から逃れられない.....	364
72. 救い主はすでに「白い雲」に乗って戻ってきた.....	370
73. 福音を広める働きはまた人間を救う働きでもある	374
74. 律法の時代における働き	378
75. 贖いの時代における働きの内幕.....	382
76. あなたは全人類がこれまでどのように発展してきたかを知らねばならない	386
77. 呼び名と身分について	401
78. 地位の祝福は脇に置き、人に救いをもたらす神の心意を理解するべきで ある	416
79. 自己の観念で神を規定する人がどうして神の啓示を受け取れるのか.....	423
80. 神とその働きを知る者だけが神の心にかなう	428
81. 受肉した神の職分と人間の本分の違い	436
82. 神はすべての被造物の主である	444
83. 成功するかどうかはその人が歩む道にかかっている	449
84. 神の働きと人の働き	462
85. 神の三階の働きを認識することは、神を認識する道である	479
86. 墮落した人類は、受肉した神による救いをさらに必要としている	494
87. 神が宿る肉の本質.....	510
88. 神の働きと人間の実践	520
89. キリストの本質は父なる神の旨への従順さである	538
90. 人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点へと導き入れる	545
91. 神と人は共に安息へと入る	562
92. あなたがイエスの霊体を見る時、神はすでに天地を新しくしている	577
93. キリストと相容れない人は疑いなく神の敵である	581
94. 招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない	585
95. あなたはキリストと相容れる道を探さなければならない	589
96. あなたは本当に神を信じる人なのか	593
97. キリストは真理をもって裁きの働きを行う	597
98. あなたは知っていたか。神が人々のあいだで偉大な業を成し遂げたことを	601
99. 終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる	605

100. 終着点のために十分な善行を積みなさい	609
101. あなたは誰に忠実なのか	613
102. 終着点について	616
103. 三つの訓戒	620
104. 過ちは人間を地獄へ導く	624
105. 神の性質を理解することは極めて重要である	628
106. どのように地上の神を知るか	632
107. 極めて深刻な問題——裏切り（１）	637
108. 極めて深刻な問題——裏切り（２）	640
109. あなたがたは自分の行いを考慮すべきである	644
110. 神は人間のいのちの源である	648
111. 全能者のため息	652
112. 神の現れによる新時代の到来	655
113. 神は全人類の運命を支配する	658
114. 神を知ることこそ、神を畏れ悪を避ける道である	663
115. 神の裁きと刑罰に神の出現を見る	671

キリストの初めの言葉：第一章

シオンに讃美がもたらされ、神の存する場所が現われた。栄光に満ちた聖なる名が万民に讃えられ、広まる。ああ、全能神よ。宇宙の頭、終わりの日のキリスト。この方こそ、全宇宙に堂々と威厳に満ちてそびえ立つシオンの山に登った輝く太陽である。

全能神よ！ わたしたちは喜んであなたに呼びかけ、踊り、そして歌う。あなたは真にわたしたちの贖い主、全宇宙の偉大なる王！ あなたは勝利者の一団を作り、神の経営（救いの）計画を全うした。すべての民がこの山に集い、玉座の前に跪く。あなたこそ唯一の真の神であり、栄光と栄誉はあなたにふさわしい。すべての栄光、讃美、権威がその玉座にあるように。いのちの泉が玉座から流れ出て、神の民の群衆を潤し、養う。いのちは日々変化し、新しい光と啓示がわたしたちに伴い、神についての新たな識見が絶えず与えられる。わたしたちは経験の中で、神についての完全なる確信を得る。神の言葉が絶え間なく現われ、正しい人に現われる。わたしたちはまさに祝福されている！ 日々神に対面し、万事において神と交わり、すべてを神の統治に明け渡す。神の言葉を注意深く思い巡らし、心は神の中で静まり、かくしてわたしたちは神の前に出て、そこで神の光を受ける。自分の生活、行動、言葉、思い、考えにおいて、わたしたちは毎日神の言葉の中で生き、常に識別することができる。神の言葉は針に糸を通す。つまり、わたしたちの内面に隠されたものが不意に次々と現われる。神との交わりは少しの遅れも許さず、わたしたちの思いや考えは神によって露わにされる。わたしたちは一瞬一瞬をキリストの座の前で生きており、そこで裁きを受ける。わたしたちの身体のどの部分もサタンに占領されたままである。今日、神の統治を取り戻すため、神殿を清めなければならない。完全に神のものとされるため、わたしたちは生死を賭けた戦いに加わらなければならない。古い自己が礫にされて初めて、キリストの復活したいのちによる至高の統治が可能となる。

今や聖霊がわたしたちの隅々に突撃し、争奪戦を戦う。自己を否定し、進んで神に協力する覚悟がある限り、神は必ずやわたしたちを内面から照らして清め、サタンが占領していたものを取り戻す。それにより、わたしたちが一刻も早く神によって完全にされるためである。時間を無駄にしてはならない。一瞬ごとを神の言葉の中で生きよ。聖徒とともに築き上げられ、神の国に連れて行かれ、神とともに栄光に入れ。

キリストの初めの言葉：第二章

フィラデルフィアの教会が形を整えたが、これはひとえに神の恵みと憐れみによる。神への愛が無数の聖徒たちの心に生じ、聖徒たちは霊の旅路においてよろめくことがない。聖徒たちは、唯一の真の神が肉となり、その神はすべてを司る宇宙の頭であるという信仰を固守する。それは聖霊によって確証され、山のように揺るぎない！そしてそれが変わることはない！

ああ、全能神よ！ 今日あなたはわたしたちの霊の目を開き、盲人を見えるようにし、足の不自由な者を歩けるようにし、重い皮膚病の者を癒やした。あなたは天の窓を開き、わたしたちに霊の世界の奥義を見せた。あなたの聖なる言葉に満たされ、サタンに墮落させられた人間性から救われること。これがあなたの計り知れないほど偉大な働き、計り知れないほど偉大な憐れみである。わたしたちはあなたの証人である！

あなたは長きにわたり、沈黙して謙虚に隠れていた。あなたは死からの復活と磔の苦しみ、人間として生きる喜びと悲しみ、迫害と苦難を経験した。人の世の痛みを経験してそれを味わい、時代に見捨てられた。受肉した神は神自身である。あなたは神の旨のためにわたしたちを汚物の山から救い、右手でわたしたちを持ち上げ、思うままにわたしたちに恵みを施した。労を惜しまず、わたしたちにあなたのいのちを注いだ。あなたが血、汗、涙で払った代価は聖徒たちの上に凝縮している。わたしたちはあなたの血のにじむような努力の産物^[a]であり、あなたが払った代価である。

ああ、全能神よ！ あなたの慈愛と憐れみ、義と威厳、聖さと謙遜ゆえに、すべての民はあなたの前にひれ伏し、永遠にあなたを拝する。

今日、あなたはあらゆる教会、フィラデルフィアの教会を完全なものとし、それにより六千年にわたる経営（救いの）計画を実現した。聖徒たちはあなたの前で謙虚に従うことができ、霊において互いに繋がり、愛の中で互いに伴い、泉の源に繋がっている。いのちの生ける水は絶え間なく流れ、教会の汚れた泥水をすべて洗い流し、あなたの神殿を再び清くする。わたしたちは実際の真なる神を知るに至り、神の言葉の中を歩み、自らの役割と本分をわきまえ、教会のために自分を費やすべく、あらゆることを行なってきた。あなたの旨がわたしたちの中で妨げられることのないように、わたしたちはあなたの前で静まるたび、聖霊の働きに留意しなければ

脚注

a. 原文に「の産物」という語句はない。

ばならない。聖徒たちのあいだには互いへの愛があり、力ある聖徒が他の聖徒の弱みを補う。聖霊による啓きと照らしを受け、聖徒たちは常に霊の中を歩くことができる。真理を理解するとすぐに実践し、新たな光に歩調を合わせ、神の足跡に従う。

積極的に神に協力しなさい。神に支配をゆだねることは、神とともに歩むことである。わたしたちの考え、観念、意見、世俗の束縛はすべて煙のように空中に消える。わたしたちは霊において神に至高の統治を委ね、神と歩み、それにより超越を得、世に打ち勝ち、わたしたちの霊は自由になって羽ばたく。それが、全能神が王になったときの結果である。どうして踊りと歌で褒め讃え、讃美と新しい賛歌を捧げずにいられようか。

神を讃美する方法は確かにいくつもある。神の名を呼ぶ、神に近づく、神のことを考える、祈りを唱える、交わる、黙想する、熟考する、祈る、讃美歌を歌う。このような讃美の行為には喜びがあり、また聖別がある。讃美には力があり、また重荷もある。讃美には信仰があり、新たな識見がある。

積極的に神に協力し、協調して奉仕を行ない一つになり、全能神の旨を満たし、急いで聖い霊の体となり、サタンを蹂躪し、サタンの運命を終わらせなさい。フィラデルフィアの教会は神の前に携挙され、神の栄光の中に現われる。

キリストの初めの言葉：第三章

勝利を収めた王は、栄光の玉座に着く。王は贖いを成し遂げ、自らの民をすべて導いて、栄光の中に出現させた。王は万物をその手中にしており、その神聖な知恵と力によってシオンを堅く打ち立てた。王はその威厳をもって、罪深い世界を裁く。すべての国々と民とを裁き、地と海とそこに住むあらゆる生き物を裁き、淫乱の葡萄酒に酔いしれた者たちにも裁きを下したのだ。神は必ずや彼らを裁き、必ずや彼らに怒りを示すだろう。そこに神の威厳があらわされる。神の裁きは一瞬のうちに、遅れることなく下される。神の怒りの炎は必ずや彼らの凶悪な犯罪を焼き尽くし、災いはいつでも彼らに降り注ぐだろう。そのとき彼らは、逃げ道も隠れる場所もないことを知り、涙を流して歯ぎしりし、自らに破滅をもたらすだろう。

神に愛された勝利の子らは、確かにシオンに留まり、決してそこを離れることはない。群衆は神の声にじっと耳を傾け、神の行いを注意深く見守り、讃美の声は絶えることがない。唯一の真の神が現れたのだ！ わたしたちは霊の中で神を確信し、しっかりと付き従う。全力で突き進み、もうためらうことはない。世界の終わりがわたしたちの目前で明らかになりつつあるのだ。正しい教会生活と、わたしたちを取り囲む人々、出来事、物事は今も、わたしたちの訓練を強化している。深く

この世を愛してしまった心を急いで取り戻そう。ひどく曇ってしまった視力を急いで取り戻そう。境界を越えないように、ここで歩みを止めよう。口を閉ざして神の言葉の中を歩み、自分の損得のために争うことをやめるのだ。ああ、俗世間と富への欲深い愛を手放せ。ああ、夫や息子、娘たちへの愛着から自らを解放せよ。ああ、独自の見解や偏見に背を向けよ。ああ、目を覚ませ、時間がないのだ。霊の中から見上げ、神に支配を委ねなさい。何があっても、ロトの妻のようになってはいけない。見捨てられるのはなんと惨めなことか。ああ、なんと惨めなことか！ ああ、目を覚ましなさい！

キリストの初めの言葉：第五章

山や河は移り変わり、水は進路に沿って流れ、人間の命は天地のように永続しない。唯一全能神だけが、復活の永遠のいのちであり、世代を超えてとこしえに生き続ける。すべての物とすべての出来事は神の手中にあり、サタンは神の足の下にあるのだ。

今日神がわたしたちをサタンの魔の手から救ったのは、神が予め定めた選択による。神はまことにわたしたちの贖い主である。復活したキリストの永遠のいのちが、まさにわたしたちの内に形造られているので、わたしたちは神のいのちに繋がるよう運命づけられており、まさに神と向き合うことができ、神を食い、飲み、享受することができるのだ。これは神が心血を注いで行なった、無私無欲の施しなのだ。

季節が移り変わる中、風と霜とを経て、幾多の人生の苦痛や迫害や患難、この世の拒絶と中傷、また政府による数々の偽りの告発に直面しても、神の信念と決意はほんの少しも衰えることがない。神はその旨のため、そしてその経営と計画を成し遂げるため、全身全霊を捧げ、自らの命も顧みない。自らのすべての民のため、彼はどんな苦労も惜しまず、心を配って彼らに糧と水を与える。わたしたちがどんなに無知であろうと、どんなに強情だろうと、必要なのはただ彼に従うことであり、そうすればキリストの復活のいのちが、わたしたちの古い本性を変えてくれるだろう。……彼はすべての長子たちのため、たゆむことなく労し、食事も休息もとらない。幾日も幾夜も、焼け付くような暑さや凍える寒さともわず、彼は一心にシオンで見守っているのだ。

彼はこの世も、家庭も、仕事も、何もかもを自ら喜んで捨て去り、この世のどんな享樂とも関わりを持たない。……彼の口から発せられる言葉はわたしたちを突き刺し、心の奥底に隠していたことを露わにする。どうして確信せずにいられるだろ

うか。彼の口から発せられる一句一句は、いつでもわたしたちの中で実現される。わたしたちが何をしようと、それが神の前でであれあるいは神に隠れてであれ、彼が知らないこと、理解していないことは何一つない。わたしたち自身の計画や采配に関わらず、すべてはまさに彼の前に露わにされるのだ。

彼の前に座し、自らの霊の中で喜びを感じ、穏やかにくつろいでいながら、絶えず空しさと神への負い目を感じている。これは想像もできない奇跡であり、成し遂げるのは不可能である。聖霊は全能神が唯一の真の神であることの証明として十分であり、それは議論の余地のない証明だ。わたしたちの一団は言い尽くせないほど祝福されている。神の恵みと憐みがなければ、わたしたちは地獄に行ってサタンに従うしかない。唯一全能神だけが、わたしたちを救うことができるのだ。

おお、全能神、実践の神よ！わたしたちの霊の目を開かれたのはあなたであり、その結果、わたしたちは霊的世界の奥義をこの目で見た。神の国の展望は果てしない。わたしたちは油断なく待てよう。その日はもう遠くはない。

戦火は巻き起こり、銃口からの煙が辺りに充満し、天候は温暖化し、気候は変動し、疫病が広がる。そして人々はただ死なねばならず、わずかな生存の希望もない。

おお、全能神、実践の神よ！あなたはわたしたちの堅固な要塞であり、わたしたちの避け所です。あなたの翼の下で身を寄せ合えば、わたしには災いが及びません。これがあなたの神聖な加護と配慮なのです。

わたしたちはみな声を張り上げて賛美を歌い、賛美の歌がシオン中に響きわたる。全能神、実践の神はわたしたちに、あの栄光に満ちた終着点を用意してくださった。注意して、油断なく見張っていなさい。今ならまだ遅くない。

キリストの初めの言葉：第十五章

神の出現は、すでに諸教会で起こっている。語っているのは霊であり、神は燃え盛る火で、威厳を持ち、裁きを行っている。神は人の子であり、足まで垂れた上着を身に着け、胸に金の帯を締めている。その頭と髪の毛は羊毛のように白く、目は燃える炎のようだ。その足は炉で精錬された真鍮にも似て、声は大水のとどろきのようである。右手には七つの星を持ち、口からは鋭い諸刃のつるぎが突き出ており、顔は燃え盛る太陽のように照り輝いている。

人の子は証しされ、神自身が公に露わにされた。神の栄光が放たれて、燃え盛る太陽のように照り輝いている。神の壮麗な顔貌はまばゆい光とともに輝く。あえて反抗の目を向ける者がいるだろうか。反抗は死を意味する。心に何を思おうと、どんな言葉を言おうと、どんなことをしようと、わずかな憐れみも示されはしない。

あなたがたは皆、自分が得たものが何であることを理解し、目にするようになるだろう——それはわたしの裁き以外の何物でもない。あなたがたがわたしの言葉を飲み食いすることに努めず、気ままに妨害してわたしが建て上げたものを破壊するなら、そんなことに我慢ができませんか。そのような人間に手加減はしない。あなたの態度がそれ以上深刻に悪化すれば、あなたは炎の中で焼き尽くされるだろう。全能なる神は霊の体で現れ、頭から足の先までを繋ぐ肉や血は少しも持っていない。神は宇宙世界を超越し、第三の天にある栄光の玉座に着き、万物を治めている。全宇宙と万物はわたしの手中にある。わたしが語ることは実現し、わたしが定めることはその通りになる。サタンはわたしの足下にあり、底なしの穴に沈んでいる。わたしの声が発せられると、天地は滅んで無に帰り、すべてのものは新たにされる。これは何の間違いもない不変の真理である。わたしはこの世に打ち勝ち、すべての邪悪な者に打ち勝った。わたしはここに座り、あなたがたに語っている。耳のある者はみな耳を傾け、生ける者はみな受け入れなさい。

この日は終わりを迎え、世のすべてのものは無に帰る。そして、すべてのものが新たに生まれ変わる。このことを覚えておきなさい。忘れてはならない。何一つ曖昧であってはならない。天地は滅びるが、わたしの言葉は滅びることがないのだ。再びあなたがたに忠告する。無駄に走り回ってはならない。目を覚ましなさい。悔い改めなさい、救いはもうすぐそこまで来ている。わたしはすでにあなたがたの間に現れ、声を上げた。わたしの声はあなたがたの前で上げられ、日々あなたがたと直接対峙しており、いつも新鮮で新しい。あなたはわたしを見、わたしはあなたを見る。わたしは絶えずあなたに語りかけ、直接向き合っている。それにもかかわらず、あなたはわたしを拒んでおり、わたしを知らない。わたしの羊はわたしの声に聞き従うが、あなたがたはまだ躊躇している。そう、躊躇しているのだ。あなたの心は鈍くなっており、あなたの目はサタンによって盲目にされ、わたしの栄光ある顔貌を見ることができない。あなたは何と、何と惨めなことか。

わたしの玉座の前の七つの霊は、地の隅々にまで遣わされている。わたしはわたしの使者を遣わして、諸教会に語らせる。わたしは義であり、誠実であり、人の心の奥底を調べる神である。聖霊は諸教会に語りかける。わたしの子の内側から発せられるのは、わたしの言葉である。耳のある者はみな聞きなさい。生ける者はみな受け入れなさい。ただそれを飲み食いしなさい。そして疑ってはならない。わたしの言葉に従い、耳を傾ける者はみな、大いなる祝福を受ける。わたしの顔を真剣に求める者はみな、必ずや新たな光と新しい啓示、そして新たな識見を得るだろう。すべてが新鮮に、新しくなるのだ。わたしの言葉はいつでもあなたに示され、あなたの霊の目を開く。それによってあなたは霊的領域のあらゆる奥義を知り、神の国

が人間の中にあることを目にするようになるのだ。避け所に入りなさい、そうすればすべての恵みと祝福が与えられ、飢饉や疫病はあなたに触れることができず、狼や蛇、虎や豹もあなたを害することはできなくなる。あなたはわたしと共に行き、わたしと共に歩き、わたしと共に栄光へと入ることになるのだ。

全能神よ！ 栄光ある体が公に出現し、聖なる霊体が現れ出る。彼こそが完全なる神自身なのだ。この世も肉も変えられる。山上における彼の変容は神の本体である。彼は頭に金の冠を戴き、その衣は真っ白で、胸に金の帯を締めている。世界のすべては彼の足台である。目は燃える炎のようで、口からは鋭い諸刃のつるぎが突き出ており、右手には七つの星を持っている。神の国への道は限りなく明るく、神の栄光が現れて輝きわたる。山々は喜び、水は笑う。太陽と月と星々はすべて整然と巡り、唯一の真の神を歓迎する。神の勝利の凱旋は、六千年の経営（救いの）計画の完成を告げているのだ。あらゆるものが喜びに湧き立ち、踊り上がる。歓喜せよ、全能なる神が栄光の玉座に座っている。歌え、全能者の勝利の旗は威厳ある壮大なシオンの山上に高く掲げられている。すべての国々が歓喜の声を上げ、すべての人々が歌い、シオンの山は喜び笑っている。神の栄光が現れたのだ。わたしは夢でさえ、神の顔を見られるなどとは思わなかったが、今日それを見たのだ。日々神と顔を合わせて、神に自分の心を露わにする。神は食べ物や飲み物を豊かに与えてくださる。生活、言葉、行動、思い、考え——神の壮麗な光がそれらすべてを照らしている。道の一步一步が神によって導かれ、反抗的な心にはただちに神の裁きが下されることになる。

神と共に食べ、共に過ごし、共に暮らし、神と共にいて、共に歩み、共に楽しみ、共に栄光と祝福を得、神と王権を共有し、共に神の国にいる——おお、何という喜びだろうか。おお、何と甘美なことか。日々神と顔を合わせ、日々話をして常に語り合い、日々新しい啓示と新たな識見を授かる。わたしたちの霊の目は開かれて、すべてが見えるようになり、霊のすべての奥義がわたしたちに露わにされる。聖なる生活は実に気楽なものだ。速く走り、止まることなく、ひたすら前へと突き進みなさい。先にはもっと素晴らしい生活が待っている。ただの甘美な味わいに満足することなく、常に神の中に入ることを求めなさい。神はすべてを包み込んで豊かに満ちており、わたしたちに欠けたあらゆるものを持っている。積極的に協力し、神の中に入りなさい。そうすればすべてが変わることだろう。わたしたちの生活は超越したものになり、どんな人間も物事も、それを邪魔することはできないのだ。

超越。超越。真の超越。神の超越したいのちは内にあり、すべてのものは本当に楽になった。わたしたちはこの世と世俗的なものを超越し、夫や子供たちへの愛着もまったく感じない。病気や状況による支配も超越する。サタンもわたしたちを邪魔しようとはしない。わたしたちはすべての災いを完全に超越する。それによって神は王

位を得ることになるのだ。わたしたちは足元にサタンを踏みにじり、教会のために証しを立て、サタンの醜い顔を徹底的に暴露する。教会を建て上げることはキリストの中にあり、栄光の体が現れた。これこそが、携挙の中に生きるということなのだ。

キリストの初めの言葉：第八十八章

わたしの働きの速度がどの程度速まっているか、人々には想像できない。これは起こった奇跡であり、人には理解しがたいのだ。この世界を創造して以来、わたしの働きの速度は維持されており、働きが止まったことは一度もない。全宇宙は日ごとに変化しており、人々も着実に変化を続けている。これはすべてわたしの働きの一部であり、すべてわたしの計画の一部であり、さらにわたしの経営（救い）に属しているが、人は誰もこうしたことを知らず理解もしない。わたし自身があなたがたに語るとき、わたしがあなたがたと面と向かって交わるとき、あなたがたはそのときだけわずかにばかり知ることがあるが、そうでなければわたしの経営（救いの）計画の青写真を少しでも理解できる者は誰一人としていない。それがわたしの偉大な力であり、さらにわたしの驚異的な行為であり、誰もそれを変えることはできない。したがって今日わたしが言うことはその通りに実現し、それを変えることはできない。人間の観念の中には、わたしに関する認識は微塵もなく、そこにあるのは無意味な雑談だけだ。もう十分だとか、満足だなどと考えるはいけない。言うておくが、まだ先は長いのだ。わたしの経営（救いの）計画全体の中で、あなたがたが知っていることはわずかなのだから、わたしが言うことに耳を傾け、わたしが命じることが何でもしなければならぬ。すべてにおいてわたしの望む通りに行動しなさい。そうすれば必ずわたしの祝福を得るだろう。信じる者は誰でも受け取ることができるが、信じない者は誰でも、想像していた「無」が自らの中に実現されるだろう。これがわたしの義であり、さらにわたしの威厳、怒り、そして刑罰である。わたしは誰の思いも行為も、一つとして見逃すことはない。

わたしの言葉を聞いて、ほとんどの人は当惑して顔をしかめ、恐れに震える。わたしは実際、あなたを誤解しているのだろうか。もしかしてあなたは、赤い大きな竜の子供ではないのだろうか。あなたは善良なふりさえしている。そして、わたしの長子のふりさえしている。わたしが盲目だとでも思っているのか。人々を見分けることができないとでも思っているのか。わたしは人々の心の奥底を探る神なのだ。これはわたしがわたしの子らに言うことであり、あなたがた、赤い大きな竜の子らにも言うことだ。わたしはすべてをはっきりと見ており、少しの間違いも犯さない。わたしが自らの行動を知らないことなどあろうか。自分の行動はこれ以上も

なくはっきりと知っている。なぜわたしは自分が神自身であり、宇宙と万物の創造主であると言うのか。なぜ自分が人々の心の奥底を探る神だと言うのか。わたしは一人一人の状況を十分に理解している。わたしが何をすべきか、何を言うべきか知らないと思っているのか。それはあなたがたが気にすべきことではない。わたしの手によって殺されないように気をつけなさい、さもないと損失を被るだろう。わたしの行政命令は寛大ではない。わかるだろうか。上述のすべては、わたしの行政命令の一部である。これをあなたがたに語った日以降は、もしさらなる違反があれば、当然の報いがあるだろう。以前あなたがたは理解していなかったからだ。

今、わたしはあなたがたに行政命令を公布する（これは公布したその日から有効であり、人々に応じてそれぞれの刑罰を割り当てる）。

わたしは約束を守り、すべてはわたしの手の中にある。疑う者は誰でも必ず殺される。考慮の余地はない。彼らはただちに根絶やしにされ、わたしの心からは嫌悪が取り除かれる。（これ以降、殺されるものは決してわたしの国に属する者ではなく、サタンの子孫に違いないことが確定する。）

あなたがたは長子として自分の立場を守り、自分の本分をしっかりと尽くし、他人のことに首を突っ込んでではない。あなたがたはわたしの経営（救いの）計画のために身を捧げ、行く先々でわたしをよく証しし、わたしの名を賛美しなければならない。恥ずべき行いはせず、わたしの子らやわたしの民すべての模範となりなさい。一瞬たりとも慎みをなくしてはならない。誰の前にも常に長子という身分で現れ、卑屈な態度をせず、胸を張って堂々と歩かなければならない。あなたがたにはわたしの名前を賛美し、それを汚さないよう求める。長子たちはそれぞれ自分の役割を持っており、何でもしてよいわけではない。これはわたしがあなたがたに与えた責任であり、それを逃れてはならない。あなたがたはわたしが委ねたことを全身全霊で、全力を用いて果たすことに専念しなければならない。

この日から長子たちには、世界中の至る所でわたしの子らとわたしの民をすべて牧養するという本分が委ねられる。それを全身全霊で遂行できない者は、誰であろうとわたしが罰するだろう。これはわたしの義である。わたしは長子たちでさえ、大目に見ることも容赦することもない。

わたしの子らかわたしの民の中に、わたしの長子の誰かを馬鹿にしたり侮辱したりする者がいれば、わたしはその者を厳しく罰するだろう。わたしの長子たちはわたし自身を表しており、誰かが彼らに対してすることは、わたしに対してすることでもあるからだ。これはわたしの行政命令の中でもっとも厳しいものである。わたしの子らや民の中にこの命令に背く者がいれば、わたしは長子たちに、わたしの義を思うさま実践させる。

わたしを軽薄に扱い、わたしの食べ物や衣服や睡眠にだけ注目する者、わたしの外面的事柄だけに関心を向けてわたしの重荷を考慮しない者、自分自身の役目をきちんと果たすことに注意を払わない者を、わたしはみな着々と見捨てていく。これは聞く耳を持つ者すべてに向けられている。

わたしへの奉仕を終えた者はみな、素直に粛々と引き下がらねばならない。注意しなさい、さもないとわたしはあなたを懲らしめることになるだろう。（これは補足的な命令である。）

わたしの長子たちは今から鉄の棒を手に取り、わたしの権威を示す行動を始め、すべての国家や民族を統治し、すべての国家や民族の間を歩き、わたしの裁きと義と威厳をすべての国家や民族の中で遂行することになる。わたしの子らとわたしの民は止むことなくわたしを畏れ、褒め称え、わたしに喝采を送り、わたしを賛美する。わたしの経営（救いの）計画は完遂され、長子たちはわたしと共に支配することができるからである。

これはわたしの行政命令の一部である。これ以降、わたしは働きの進み具合に応じて、あなたがたに行政命令を告げる。この行政命令から、あなたがたはわたしが行う働きの速度と、その働きがどの段階に達したかがわかるだろう。これは確認である。

わたしはすでにサタンを裁いた。わたしの旨が妨げられることはなく、わたしの長子たちがわたしと共に賛美されているため、わたしはこの世とサタンに属するすべてのものに対し、わたしの義と威厳をすでに行使した。わたしはサタンには何の労力も払わず、目を留めもしない（サタンはわたしと話をするにも値しないからだ）。わたしは自分のしたいことをし続けるだけだ。わたしの働きは一步步順調に進展し、わたしの旨は地上のどこでも妨げられない。このことはサタンをある程度恥じ入らせ、サタンは完全に滅ぼされたが、それ自体でわたしの旨が成就されたわけではない。わたしは長子たちにも、わたしの行政命令を彼らに対して実行させる。わたしがサタンに見せるものは、一方では奴に対する怒りだが、他方ではわたしの栄光も目にさせる（つまり、わたしの長子たちをサタンの屈辱のもっとも顕著な証人として見せつける）。わたしはサタンを直接罰することではなく、長子たちにわたしの義と威厳を遂行させる。サタンは以前わたしの子らを虐待し、迫害し、抑圧したので、今日サタンの奉仕が終わった後、わたしは成熟した長子たちにサタンを懲らしめることを許す。サタンは崩壊に対して無力であった。世界中のあらゆる国家が麻痺していることがそのもっともよい証拠であり、戦っている人々や交戦中の国々は、サタンの王国が崩壊したことを明らかに示している。わたしが過去にいかなるしるしも不思議も示さなかったのは、徐々にサタンを辱め、わたしの名前を

賛美させるためだった。サタンに完全にとどめを刺したとき、わたしは自分の力を示し始める。わたしの言うことは実現し、人間の観念と一致しない超自然的なことが成就するだろう（これはまもなくやって来る祝福のことだ）。わたしは実際の神自身であり何の規則もなく、経営（救いの）計画の変化に応じて語っているため、わたしが過去に言ったことは必ずしも現在に当てはまるとは限らない。自分の観念に固執するのはやめなさい。わたしは規則に従う神ではなく、わたしにとってはすべてが自由で、超越的で、完全に解放されている。昨日語られたことは今日はもう古臭いかもしれず、あるいは今日は捨て去られるかもしれない（しかしわたしの行政命令は公布されて以来決して変わることはない）。これらがわたしの経営（救いの）計画の段階である。規則に固執してはいけない。毎日新しい光と新しい啓示があり、それがわたしの計画なのだ。毎日、わたしの光があなたの中にあらわされ、そしてわたしの声が全宇宙に発せられるだろう。わかるだろうか。これがあなたの本分であり、わたしがあなたに委ねた責任である。あなたはそれを一瞬たりとも怠ってはならない。わたしは最後まで、わたしが認める人々を使う。このことは決して変わらない。わたしは全能の神なので、どの種類の人がどんなことをすべきか、どの種類の人にどんなことができるかを知っている。これがわたしの全能性である。

キリストの初めの言葉：第百三章

雷鳴のような声が発せられて、全宇宙を揺るがす。その声は人々の耳をつんざき、身をかわそうとしても間に合わない。ある者は殺され、ある者は滅ぼされ、またある者は裁かれる。それはまさに誰も見たことのない光景である。耳を澄ましてみなさい、雷鳴の轟きとともに泣き叫ぶ声が聞こえる。その声は冥府から、地獄から響いてくるのだ。それはわたしに裁かれた反逆の子らの悲痛な声である。わたしの言うことを聞かずその言葉を実践しなかった者は、厳しく裁かれ、わたしの怒りの呪いを受けた。わたしの声は裁きであり、怒りである。わたしは誰一人優しく扱わず、誰にも憐れみを示さない。わたしは義なる神自身であり、憤怒を備え、燃え盛る炎を備え、清めを備え、破滅を備えているからだ。わたしの中に隠されたものや感情的なものは一つもなく、逆にすべてが開かれており、義であり、公平である。わたしの長子たちはすでにわたしと共に玉座に就き、すべての国とすべての民族を支配しているので、不正な不義の物や人々は裁かれ始めている。わたしは彼らをつつ精査し、何一つ見逃すことなく完全に暴く。わたしの裁きは完全に露わにされ、完全に開かれており、何一つ隠されてはいないからだ。わたしの旨に適わ

ないものはすべて投げ棄て、永遠に底なしの穴で滅ぼし、そこで永遠に焼き尽くさせる。これがわたしの義であり公正さである。誰もそれを変えることはできず、すべてはわたしの命令に従わなければならない。

ほとんどの人がわたしの言葉を見做しており、言葉は単なる言葉で事実は事実だと思っている。彼らは盲目なのだ。わたしが誠実な神自身であることを知らないのか。わたしの言葉と事実とは同時に起こる。それはまさに真実ではないか。人々はわたしの言葉を一切把握できず、啓示を受けた者だけが真に理解することができる。これは事実である。人々はわたしの言葉を目にするやいなや、気が動転してしまい、隠れ場所を探して走り回る。わたしの裁きが下るときはなおさらだ。わたしが万物を創造したとき、わたしが世界を滅ぼすとき、そしてわたしが長子たちを完全にするとき——こうしたすべてのことは、わたしの口から出るただ一つの言葉で成し遂げられる。それはわたしの言葉そのものが権威であり、裁きであるからだ。わたしという人間が裁きであり、威厳であると言うことができ、それは不変の事実なのだ。これはわたしの行政命令の一面であり、わたしが人々を裁く一つの方法にすぎない。わたしの目には、すべての人、すべての出来事、すべての物を含む万物がわたしの手中にあり、わたしの裁きの下にある。誰も何物も、あえて無闇に自分勝手に行動しようとはしない。すべてはわたしが発する言葉に従って成し遂げられなければならない。人間はみなその観念の中から、わたしという人間の言葉を信じている。わたしの霊が声を発すると、皆が疑いを抱く。人々はわたしの全能性をかけらも認識しておらず、わたしを不当に非難さえする。今あなたに告げるが、誰であれわたしの言葉に疑問を抱く者、わたしの言葉を軽視する者は、まさに滅ぼされる者であり、永遠に地獄の子なのだ。このことから、長子である者は極めて少ないことがわかる。これがわたしの働き方だからだ。以前言ったように、わたしは指一本動かすことなく、言葉だけを用いてすべてを成し遂げる。つまり、そこにわたしの全能性があるのだ。わたしの言葉の中に、その根源と目的とを見出せる者は誰もいない。人がこれを達成することはできず、彼らはただわたしの導きに従って行動し、わたしの旨に沿うすべてのことをわたしの義に従って行うことができるだけであり、その結果、わたしの家族は義と平和を得て永遠に生き、永久にしっかりと揺るぎなく立つことができるのだ。

わたしの裁きはすべての者に下り、わたしの行政命令はすべての者に及び、わたしの言葉と本体はすべての者に露わにされる。今はわたしの霊による大いなる働きの時である（ここで祝福される者と災いを受ける者が区別される）。わたしの言葉が発せられるやいなや、祝福される者と災いを受ける者が区別されたことになる。すべてはこの上なく明瞭であり、わたしにはすべて一目で見分けられる。（これは

わたしの人間性について言っているのであり、わたしが行なった予定と選択に矛盾するものではない)。わたしは全宇宙の山と川と万物の間を歩き巡り、あらゆる場所を観察し清める。そして汚れた場所やみだらな地はすべて、わたしの言葉によって消え去り、燃やし尽くされて無に帰すのだ。わたしにはすべてが容易だ。もしも今が世界を滅ぼすようわたしが予定した時であるなら、わたしはただ一つの言葉を発して世界を呑み込むこともできるが、今はその時ではない。わたしがこの働きをする前にすべてが準備され、計画への妨害や経営の中断が起こらないようにしなければならない。わたしはそれを合理的に行う方法を知っている。わたしには知恵があり、わたし自身の采配がある。人々は指一本動かしてはならない——わたしの手によって殺されないように気をつけなさい。これはすでにわたしの行政命令に触れている。このことから人はわたしの行政命令の厳しさだけでなく、その背後にある原則も見ることができる。その原則には二つの側面があり、一つはわたしの旨に適わず行政命令に違反するすべての者が殺されるということで、他方はわたしの行政命令に違反するすべての者がわたしの怒りの中で呪われるということだ。この二つの側面は不可欠であり、わたしの行政命令の背後にある大原則である。すべての人は、どれほど忠実かによらず、この二つの原則に従って感情なしに扱われる。これはわたしの義、威厳、そして怒りを示すのに十分であり、それらが地上のすべてのもの、世のすべてのもの、そしてわたしの旨と一致しないすべてのものを焼き尽くすのだ。わたしの言葉の中には隠されたままの奥義があり、また同時に、露わにされた奥義もある。そのため人間の観念に従えば、人間の心の中ではわたしの言葉は永遠に理解不能であり、わたしの心は永遠に計り知れないのだ。つまり、わたしは人間に観念と思考を捨て去らせなければならない。これはわたしの経営（救いの）計画の最も重要な事項である。わたしは長子たちを獲得し、成し遂げたいことを成し遂げるため、それをそのように行わねばならないのだ。

全世界の災害は日増しに悪化しており、わたしの家では壊滅的な災害がいっそう激しさを増している。人々にはまったく隠れるところがなく、顔を隠す場所もない。今はまさに過渡期であるため、誰も次にどこへ足を踏み出せばよいのかわからない。それはわたしの裁きの後になって初めて明らかになる。覚えておきなさい、これらはわたしの働きの段階であり、わたしの働き方なのだ。長子たちはわたしが一人ずつ慰め、一步一步引き上げる。効力者については、一人ずつ全員を排除し捨て去ることになる。これはわたしの経営計画の一部である。すべての効力者が暴かれた後、わたしの長子たちも暴かれることになる。(わたしにとってこれは極めて容易なことだ。わたしの言葉を聞くと、効力者たちは皆わたしの言葉による裁きと脅威を前にして徐々に退き、長子たちだけが残されることになる。これは自発的に

起こることではなく、また人間の意志で変えられることでもなく、わたしの霊が直接働いているということなのだ。) これは遠くの出来事ではなく、あなたがたはこの段階のわたしの働きと言葉からある程度それに気づけなければならない。わたしがなぜこれほど多くを語るのかも、わたしの言葉の予測不能な性質も、人々には測り知れない。わたしは長子たちに対しては、慰めと憐れみと愛の口調で語りかける(わたしはいつも彼らに啓示を与え、彼らを離れることがないからだ。わたしが彼らを予め定めたからである)。一方で長子以外の者は、厳しい裁きと脅威と脅しをもって扱い、絶えず怯えさせて常に神経を緊張させておく。状況がある程度まで進展すると、彼らはその状態から脱するだろうが(わたしが世界を滅ぼすとき、この人々は底なしの穴に落ちるのだ)、わたしの裁きの手から逃れることも、この状況から抜け出すことも決してない。つまり、これが彼らへの裁きであり、彼らへの刑罰なのだ。異邦人たちが到来する日、わたしはこうした人々を一人ずつ暴くことになる。それらがわたしの働きの段階なのだ。わたしが以前こうした言葉を語った意図を、今あなたがたは理解しただろうか。わたしの見解では、成就されていないことはすでに成就されたことでもあるが、すでに成就されたことは、必ずしもすでに達成されたことではない。なぜならわたしには知恵と独自の働き方があり、それは人間には見当もつかないものだからだ。この段階の成果が得られたら(わたしに抵抗する邪悪な者たちをすべて暴いたら)、次の段階を開始する。わたしの旨は妨げられることがなく、誰もわたしの経営計画を邪魔しようとはせず、何ものも障壁を作ろうとはしないからだ――みな道を空けなければならないのだ。赤い大きな竜の子らよ、聞きなさい。わたしはシオンから来て、この世で肉となった。それはわたしの長子たちを獲得し、あなたがたの父を辱め(これは赤い大きな竜の子孫たちに言っている)、わたしの長子たちを支え、わたしの長子たちに対して行われた悪を正すためだ。だから、もう野蛮になってはならない。わたしは長子たちにあなたがたを取り扱わせる。かつてわたしの子らは苛められ、虐げられた。父は子のために権力を行使するものなので、わたしの子らはわたしの愛の抱擁の中に戻り、もう苛められたり虐げられたりすることはない。わたしは不義ではない。このことはわたしの義を示しており、まさに「わたしが愛する者を愛し、わたしが憎む者を憎む」ということだ。わたしのことを不義であると言うなら、急いで出て行きなさい。恥もなくわたしの家で居候してはならない。わたしがもうあなたを見なくて済むように、すぐに自分の家へ帰りなさい。底なしの穴があなたがたの終着点であり、あなたがたの休み場である。わたしの家にいるとあなたがたには居場所がなくなる。あなたがたは荷役用の家畜であり、わたしが用いる道具なのだから。あなたがたの用途がなくなれば、わたしはあなたがたを火の中に投げ入れて焼き尽くす。こ

れはわたしの行政命令であり、わたしはこのようにしなければならないのだ。このことだけがわたしの働き方を示し、わたしの義と威厳を露わにするのだ。そしてさらに重要なのは、こうすることでのみ、長子たちがわたしと共に権力をもって統治できるということなのだ。

全宇宙に向かって語った神の言葉：第四章

わたしの前で仕えるわが民はみな、過去を思い返すべきである。あなたがたのわたしへの愛は、不純なもので穢されていなかったか。あなたがたのわたしへの忠実な純粋で心からのものだったか。あなたがたのわたしについての認識は真実であったか。あなたがたの心のどれほどの場所をわたしは占めていたか。わたしはすべてのことを満たしていたか。わたしの言葉はあなたがたの中でどれほどのことを成し遂げたか。わたしを侮ってはいけない。これらのことはわたしには完全に明確である。今日、わたしの救いの声が発されるにつれて、あなたがたのわたしに対する愛はいくらか増しただろうか。あなたがたの忠実の一部が純粋になっただろうか。あなたがたのわたしについての認識は深まっただろうか。過去の讃美は、今日の認識の堅固な土台を形成しただろうか。あなたがたの内面のどれほどをわたしの霊が占めているだろうか。わたしの姿はあなたがたの内においてどれほどの場所を占めているだろうか。わたしの語ったことは、あなたがたのアキレス腱を打っただろうか。あなたがたは自分の恥を隠す場所がどこにもないとほんとうに感じるだろうか。あなたがたはわが民となる資格がないと、ほんとうに信じるだろうか。もしあなたがたがこれらの問いにまったく気づかずにいるのなら、それは、濁った水の中で釣りをしているのであり、数を合わせるためにだけそこにいるのであり、わたしが予め定めた時には、必ずや除かれ再び底なしの淵に投げ込まれるということを示している。これらはわたしの警告の言葉であり、これらを軽んじる者は誰であれ裁かれ、定められた時に災いに見舞われる。そうではないか。わたしはまだ例を示してこれを説明しなければならないのか。あなたがたのために代表例を提示するべく、もっと平明に話さなければならないのか。天地創造の時から今日まで、多くの人々がわたしの言葉にそむき、そのためにわたしの回復の流れからうち捨てられ、除かれた。最終的に彼らの体は滅び、その霊はハデスに投げ込まれる。今日でも彼らはいまだに重い罰を受けている。多くの人々がわたしの言葉に従ったが、彼らはわたしの啓きと照らしにそむき、そのためにわたしに退けられ、サタンの支配下に落ち、わたしに敵対する者になった。(今日、わたしに真っ向から敵対する者は、わたしの言葉の表面にだけ従い、わたしの言葉の本質には逆らう。) また、わたしが

昨日語った言葉だけを聞いて、過去のくずにしがみつки、今日の産物を重んじない者が大勢いる。そうした人々はサタンにとらわれているだけではなく、永遠の罪人になり、わたしの敵になり、真っ向からわたしに反対している。そのような人々は、わたしの怒りの極致におけるわたしの裁きの対象であり、今日、まだ目が見えず、いまだに暗い牢獄にいる（つまり、そのような人々は腐ったサタンに操られるしなびた死体なのであり、彼らの目はわたしが覆っているので、彼らは目が見えないと言うのである）。あなたがたがそこから学べるように、参考として例を示すのがよいだろう。

パウロと聞くと、あなたがたは彼の生涯とともに、彼に関する逸話のいくつかを思い起こすだろうが、それらの逸話は不正確で、現実とは異なっている。彼は幼いころから両親の指導を受け、またわたしのいのちを受けた。わたしが前もって定めた結果、パウロはわたしが要求する素質を備えたのである。十九歳のとき、パウロはいのちについて、さまざまな書物を読んだ。どのようにしてかは詳細は述べないが、彼の素質と、わたしの啓きと照らしとにより、パウロは靈的物事についてある程度の識見をもって語れただけでなく、わたしの意図を把握することもできた。もちろん、これは内的・外的要因を排除するものではない。とにかく、パウロの不完全性の一つは、その才能ゆえに彼は口達者で自慢好きであったことである。その結果、その一部が直接大天使を表したパウロの不服従のために、わたしがはじめて受肉したとき、パウロはあらゆる努力をしてわたしに逆った。彼はわたしの言葉を知らない者の一人で、彼の心の中のわたしの場所はすでになくなっていた。このような人々はわたしの神性に真っ向から敵対し、わたしに打ち倒され、最後の最後によりやく頭を垂れて自身の罪を告白する。したがって、わたしがパウロの長所を利用した後、つまり彼が一定期間わたしのために働いた後、彼は再び以前のやり方に戻り、わたしの言葉に直接逆らったわけではないが、わたしの内なる導きと啓きにそむいたので、それまでにパウロが行なった働きがすべて無益になった。つまり、彼の語った栄光の冠はむなしい言葉、彼自身の想像の産物となった。今日でも、彼はまだわたしの縛めの只中においてわたしの裁きを受けているからである。

上記の例から、誰でもわたしに敵対する者は（敵対するとは、肉にあるわたし自身だけではなく、さらに重要なことに、わたしの言葉と霊、つまりわたしの神性に逆らうことである）その肉の身にわたしの裁きを受けることが見て取れる。わたしの霊があなたを離れると、あなたは墜落し、まっすぐハデスに下る。そして、あなたの肉体は地上にあっても、精神を病んでいる者のようになる。つまり、あなたは理知を失い、自分が死体になったようにただちに感じ、すぐさま自分の肉を終わら

せてくれるようにとわたしに乞うほどになる。あなたがた霊をもつ者のほとんどは、このような状況について深く理解しているから、これ以上詳しく述べる必要はない。過去にわたしが普通の人間性をもって働いたときには、たいていの人々は、すでにわたしの怒りと威厳に比べて自分を測っていて、すでにわたしの知恵と性質とについて少しは知っていた。今日、わたしは神性において直接話し、行動する。そして、わたしの怒りと裁きとをその目で見ることになる人々がまだ何人かいる。さらに、裁きの時代の第二部の主なる働きは、わが民のすべてにわたしの肉における業を直接知らせ、わたしの性質を直接あなたがたが見るようにすることである。しかし、わたしは受肉しているので、あなたがたの弱さを考慮している。わたしの希望は、あなたがたが自分の霊、魂、体をおもちゃのように扱い、サタンに無頓着に捧げないことである。持てるものすべてを大切にし、もて遊ばない方がよい。これらはあなたがたの運命に関わっているからである。あなたがたは、わたしの言葉の真の意味をほんとうに理解できるだろうか。わたしの真の思いをほんとうに考えることができるのだろうか。

あなたがたは、天における祝福のようなわたしの祝福を地上で受けたいと思っているのだろうか。あなたがたは、わたしについての理解、わたしの言葉の享受、わたしについての認識をあなたがたの人生で最も貴重で意味深いものとして扱うつもりがあるだろうか。あなたがたは自分の前途を考えることなく、わたしに従うことがほんとうにできるのか。あなたがたは羊のようにわたしに殺されたり、わたしに導かれたりすることがほんとうにできるのか。あなたがたの中にこのようなことをなし遂げ得る人はいるだろうか。わたしが受け入れ、わたしの約束を受ける人はみな、わたしの祝福を受ける人だということがあり得ようか。あなたがたはこうした言葉から何かを理解しているのだろうか。もしわたしがあなたがたを試したら、あなたがたはほんとうにわたしにすべてを委ね、そうした試練の中でわたしの意図を探り、わたしの心を理解することができるだろうか。あなたが多くの感動的な言葉を述べたり、興奮するような物語を語ったりすることができることを、わたしは望まない。むしろ、わたしに立派な証しをすること、現実完全に深く入ることができることを求める。もしわたしが直接話さなければ、あなたは周囲のすべてを捨て、わたしに用いられることができたのだろうか。これがわたしが求める現実性なのではないか。誰がわたしの言葉の意味を把握できるだろうか。しかしわたしは、あなたがたがこれ以上不安に押しつぶされず、入りにおいて積極的になり、わたしの言葉の本質を把握するよう求める。これが、わたしの言葉を誤解したり、わたしの意味するところについて不明瞭であったり、わたしの行政命令に触れたりすることを防ぐだろう。わたしがあなたがたについて意図していることをわたしの言葉の中

に把握してくれることを願う。もはや自分の前途については考えず、すべての物事における神の采配に委ねるとわたしの前で決心したそのとおりに行動しなさい。わたしの家の内に立つ者はみな、できる限りの努力をしなければならない。わたしの地上での働きの最終部分に自己の最善を差し出さなければならない。あなたは、このように実践する気持ちがほんとうにあるだろうか。

1992年2月23日

全宇宙に向かって語った神の言葉：第五章

わたしの霊が声を発するとき、それはわたしの性質すべてを表現する。このことをあなたがたは、わかっているのか。この点について不明瞭なのは、わたしに直接反対しているに等しい。あなたがたは、ほんとうにこのことの重要性がわかっているのか。あなたがたは、わたしがどれほどの努力、どれほどの力をあなたがたのために用いているか、ほんとうにわかっているのか。あなたがたは自分のしたことをわたしの前にさらけ出す勇気がほんとうにあるか。そして、あなたがたは、大胆にもわたしに面と向かって、自分はわたしの民であると言う。あなたがたは恥知らずで、さらには理知に欠けている。遅かれ早かれ、そうした人々はわたしの家から追い出される。わたしを証しするために立ったからといって、ベテラン気取りするのはやめなさい。これが人間に行なえることなのか。あなたの意図したことや目指したものが何一つ残らなければ、あなたは、とうに別の道を進んでいただろう。人間の心がどれほどを収容できるか、わたしが知らないと思っているのか。たった今から、あなたは、あらゆることで実践の現実に入らなければならない。これまでしていたように、しゃべっているだけでは、もう十分ではない。昔はあなたがたの大半が、わたしの屋根の下でただで飲み食いできた。あなたが今日堅固に立っているのは、すべて、わたしの言葉の厳しさのゆえである。わたしの言葉には目的もなく、いい加減に語られるものと思っているのか。そんなことはない。わたしは高みからすべてを見渡し、高みからすべてを支配している。同様に、わたしは地上に救いを施した。わたしの隠れ場から、人間のあらゆる動き、人々が話し、行なっていることのすべてを、わたしが見守っていない瞬間はない。人間は、わたしにとって一目瞭然である。わたしにはすべてが一つひとつ見え、それらをすべて知っている。隠れ場はわたしの住まいであり、大空がわたしの横たわる寝床である。サタンの勢力はわたしに届かない。わたしは威厳と義、裁きに満ち溢れているからである。言い表すことのできない奥義がわたしの言葉の内に宿っている。わたしが話すとき、あなたがたは水に投げ入れられたばかりの鶏のように混乱して圧倒されるか、何か

におびえた赤子のように何もわからない。あなたがたの霊が麻痺状態に陥ったからである。なぜわたしは、隠れ場がわたしの住まいだと言うのか。わたしの言うことの深い意味がわかっているのか。全人類の中で誰がわたしを知ることができるのか。人がその父と母を知るように、誰がわたしを知ることができるのか。わたしの住まいに憩い、わたしはしっかりと見る。地上のすべての人が忙しく動き回り、「世界中を巡り」大急ぎで行き来する。すべて自身の運命、未来のためである。しかし、わたしの国を築くために力を、息を吸い込むだけの力さえも割ける者は、ただの一人もいない。わたしは人類を創り、彼らを何度も患難から救った。しかし、その人間たちはみな忘恩の徒である。わたしの救いの実例をすべて挙げることでできる者は、ただの一人もいない。世界の創造から今日まで、何年も、何世紀もが過ぎた。また、わたしは数多くの奇跡を起こし、何度も知恵を示した。しかし、人間は認知症と麻痺状態にある精神病患者のようで、あるいは、もっと悪い場合、時には野獣が森で暴れているようなもので、わたしのことにまるで関心をもとうとしない。何度もわたしは人間に死刑を宣告し、死すべきものと定めたが、わたしの経営（救いの）計画は、誰にも変更できない。そこで、人間はいまだわたしの手の中にいて、自分の固執する古いものを見せびらかしている。わたしの働きの歩みのため、わたしは再びあなたがたを、墮落し、退廃的で、汚れ、浅ましい大家族に生まれたあなたがたを救った。

わたしの計画した働きは、一瞬もやむことなく進行している。神の国の時代に入って、あなたがたをわたしの国にわが民として移したので、新たにあなたがたに要求することがある。つまり、あなたがたの前に、この時代を統治する憲法の公布を始めるのである。

わが民と呼ばれているのだから、わたしの名に栄光をもたらさなければならない、つまり、試練の只中において証しするのである。もし誰かがわたしを騙して真実をわたしから隠そうとしたり、わたしの陰で不名誉な行為を働こうとしたりするなら、そのような者は例外なくわたしの家から追い出されて排除され、わたしに取り扱われるのを待つことになる。過去にわたしに対して不誠実かつ親不孝であって、今日再び立ち上がり、公然とわたしを裁こうとする人たちもまた、わたしの家から追い出される。わが民である人々は、常にわたしの負担を気づかい、また、わたしの言葉を知るように努めなければいけない。そうした人々だけをわたしは啓き、彼らは必ずわたしの導きと示しの下で生き、けっして刑罰を受けない。わたしの負担を思いやらず、自分の未来を計画することに集中する者、つまり、行いによってわたしの心を満足させることを目指さず、それよりは施しをねだる者、そうした乞食のような人々を使うことをわたしは絶対に拒む。そうした人々は、生まれ

たときから、わたしの負担を思いやるということの意味を何も知らないからである。彼らは正常な理知に欠ける人である。そうした人々は、脳の「栄養不足」に陥っていて、何か「栄養」をとるために家に帰らなければならない。わたしは、そうした人々に何の用もない。わが民の中で、すべての人はわたしを知ること、食べる、着る、眠るといった、一瞬も忘れないことのように、最後まで行うべき必須の務めとみなし、しまいには、わたしを知ることが食べることのように慣れ親しんだ技術、何の努力もなしにする手馴れた動作になるようにしなければならない。わたしの話す言葉については、どの一言も絶対に確かなものとし、完全に吸収されなければならない。おざなりの、その場しのぎであってはならない。誰でも、わたしの言葉に注意を払わない者は、真っ向からわたしに敵対しているとみなされる。誰でも、わたしの言葉を食べない者、あるいは、知ろうとしない者は、わたしに注意を払っていない者とみなされ、すぐさま、わたしの家の戸口から掃き出される。なぜなら、わたしが以前に述べたように、わたしが望むのは大勢の人々ではなく、優秀な者だからである。百人の中から、たった一人がわたしの言葉を介してわたしを知るようになるなら、わたしは喜んでその他の者たちを捨て去り、そのたった一人を集中的に啓き照らそう。このことから、多数だけでは必ずしもわたしを表現し、生きることができないことがわかる。わたしが望むのは、（実が詰まっていなくとも）麦であり、（たとえ実がいっぱいに詰まった立派なものでも）毒麦ではない。追い求めることには関心がなく、怠惰な行動をする者たちは、自分から立ち去るべきである。わたしはもう彼らを見たくない。彼らがわたしの名を汚すことのないように。わが民に求めることは、ここまでに述べた戒めで今はやめておき、状況の変化に応じて、さらに制裁を与える。

過去には、大多数の人々は、わたしが知恵の神そのもの、人間の心の奥底まで見通す神であると考えた。しかし、それはみな、表面的な話であった。もし人間がほんとうにわたしを知っていたなら、厚かましくも結論に飛びつくことをせず、わたしの言葉からわたしを知ろうとする努力を続けたことだろう。ほんとうにわたしの業を見る段階に達してはじめて、わたしが知恵であり、奇妙であると言う資格を得たはずである。あなたがたのわたしについての認識はあまりに浅い。世々を経て、多くの人々が何年もわたしに仕え、わたしの業を見て、真にわたしについて何かを知るようになり、それゆえわたしに対して従順な心をいつももち、ごくわずかもわたしに敵対しようなどという意図を心にいだくこともなかったというのか。というのも、わたしの足跡を探し求めることは、極めて困難なのだから。そうした人々の中に、わたしの導きがなければ、彼らは気短に行動しようなどとは到底思わず、長い年月の経験を生きた後で、やがてわたしについての部分的認識を総括し、わたし

が知恵であり、奇妙であり、助言者であると言い、わたしの言葉は両刃の剣のようで、わたしの業は偉大で、驚くべきものであり、妙なものであり、わたしは威厳をまとい、わたしの知恵は大空より高いなどの見識を述べる。しかし、今日、あなたがたは彼らの置いた基礎の上でわたしを知っているだけである。だから、あなたがたの大多数は、オウムのように、ただ彼らの語った言葉を繰り返しているだけである。あなたがたのわたしについての認識がどれほど浅いものか、また、あなたがたの「教育」がどれほど貧弱なものをわたしが考慮に入れているからこそ、あなたがたはそれほど罰せられずにいるのである。しかし、それでも、あなたがたの大多数は、まだ自分を知らず、あるいは、自分がすでに行いにおいてわたしの心に達しているから、そのために裁きを免れたと考えている。それとも、肉となってから、わたしが人間の行いをすっかり見失ったので、自分も刑罰を免れたと考えている。あるいは、自分の信じている神は広大な宇宙に存在していないと思って、神を認識することは、尽くすべき本分として常に心に抱くよりは、暇なときにする雑用として後回しにし、神への信仰を怠惰に過ごすはずの時間をつぶす手段としている。わたしがあなたがたの年功、理知、見識の不足を憐れまなければ、あなたがたはみな、わたしの刑罰の只中において消滅し、存在を抹消されるだろう。しかし、地上でのわたしの働きが終わるまでは、わたしは人間に寛容でいよう。これはあなたがた全員が知るべきことであり、良いことと悪いことを取り違えるのはやめなさい。

1992年2月25日

全宇宙に向かって語った神の言葉：第六章

霊の内のことについては、細心の注意を払わなければならない。わたしの言葉を注意深く、慎重に聞きなさい。わたしの霊と肉の体、わたしの言葉と肉の体とを切り離すことのできない単一のものと見ることができる状態に至るように努め、わたしの前で全人類がわたしを満足させることができるようにしなければならない。わたしはこの足で全宇宙を踏み、宇宙の全体に目をやり、全人類の只中を歩き、人間であることの甘酸と苦辛を味わった。しかし、人間はけっして真にわたしを認識することがなく、歩き回っていてもわたしに気づかなかった。なぜなら、わたしは何も言わず、超自然のわざを何も行わなかったので、誰一人として真にわたしを見なかったからである。物事はかつてとは違っている。天地創造の初め以来、この世が見たことのないことをわたしは行なう。人間があらゆる時代をとおして、かつて聞いたことのない言葉をわたしは語る。なぜなら、全人類に肉におけるわたしを知るようになってほしいからである。それがわたしの経営（救い）の手順である。人類

にはそれがどういうものか、まるで考えもつかない。わたしがそれについて公然と語っても、人はまだ頭が混乱しているため、すべてを詳らかに言い表してやることは不可能である。ここに人間の絶望的な低劣さがある。そうではないか。これこそ、わたしが人間の中で修復したいことである。そうではないか。長い年月、わたしは人間に何も働きかけてこなかった。長い年月、受肉したわたしの体と直接接触した者でさえ、わたしの神性から直接発せられる声を聞いた者はいなかった。だから、人間にわたしについての認識が欠けているのは、やむを得ないことである。しかし、この事はそれだけで、あらゆる時代をとおして、人間のわたしへの愛に影響しなかった。しかし、今では、わたしはあなたがたに無数の奇跡的で人には推し量ることのできない働きを示し、多くの言葉で語ってきた。それなのに、そうした状況にあっても、実に多くの人々がいまだに面と向かってわたしに敵対している。いくつか例を示そう。

毎日、人は漠然とした神に祈りを捧げ、わたしの意向を理解しよう、いのちを感じようとする。しかし、わたしの言葉に向き合うと、違った捉え方をする。わたしの言葉と霊とを一つの全体と見なしながらも、人間であるわたしには、根本的にこのような言葉を発することができず、わたしの霊に指示されているのだと信じ、わたしの存在を蹴り飛ばす。このような状況をあなたはどう認識するのか。人はわたしの言葉のある程度までは信じるが、わたしのまとう肉の身については大なり小なり自分なりの観念を抱き、毎日自分の頭で考えては、こう言っている。「なぜあの人はあのように物事を行なうのか。これは神から来ているものなのだろうか。ありえない。思うに、あの人は、わたしとほとんど同じで、普通のただの人間だ」。もう一度尋ねるが、こういう状況をどう説明するのか。

今わたしの述べたことについて、あなたがたの中に、そういう考えをもっていない人はいるだろうか。そんなふうには考えていない人がいるだろうか。それはまるで私有財産のようにしがみついていて、ずっと手放すのを渋っているもののようだ。ましてや、積極的に努力しようという気持ちもない。それどころか、わたしが自分で働きをするのを待っている。実のところ、わたしを求めることなく、容易にわたしを知るようになる人間はただの一人もいない。まことに、わたしがあなたがたに教えを説くこれらの言葉は浅いものではない。なぜなら、参考として、異なった点から例を挙げることができるのだから。

ペテロの名を聞くと、誰もがみな称賛でいっぱいになり、ペテロについての物語のあれこれを思い出す。彼が三度神を否定したこと、さらに、サタンの手助けをしたこと、そして神を試みたこと、しかし、最後には神のために十字架に逆さに釘で打ち付けられたこと、等々。今、わたしはペテロがどのようにしてわたしを知る

ようになり、最後にはどうなったかをあなたがたに語ることをとても重視している。ペテロという人は、すばらしい素質の持ち主だったが、彼の境遇はパウロのそれとは異なっていた。彼の両親はわたしを迫害した。彼らはサタンにとりつかれた悪魔の側にいた。だから、二人がペテロに道を教えたとは言えない。ペテロは頭脳明晰で、生まれながらに豊かな知性をもち、子供のころから両親に可愛がられて育った。しかしながら、成長してからは両親の敵になった。というのも、ペテロはいつもわたしを知ることを願い、その結果、両親に背を向けることになったからである。それはつまり、第一に、彼は天と地と万物は全能者の手の内にあり、すべてのよいものは神に発し、サタンの手を経ることなく、神から直接来ていると信じたからである。両親の悪い手本が引き立て役を務め、ペテロはかえってわたしの愛と憐れみとを直ちにみてとることができ、そうして、わたしを求める欲求がより強く燃え上がることになった。彼はわたしの言葉を飲み食いするだけでなく、わたしの意図するところを把握しようと注意を払った。そして、常に思慮深く慎重に考えた。だから、彼はいつでも霊が敏感で、その行いのすべてにおいて、わたしの心に適うことができた。ふだんの生活では、失敗の網にかかるようなことを深く恐れ、過去に失敗した人々の教訓を元に、自ら奮起してさらに努力した。ペテロはまた、遠い昔から神を愛した人々すべての信仰と愛から学んだ。このようにして、ペテロは、否定的な側面においてだけでなく、より重要なことに肯定的な側面においても急速に成長し、わたしの前で最もよくわたしを知る者となった。このため、想像に難くないことだが、彼は所有するもののすべてをわたしの手に託し、もはや食べること、着ること、眠ること、どこに宿るかにおいてさえ、自分の主人であることをやめ、あらゆることにおいてわたしを満足させることを自らの基盤とし、それによってわたしの豊かさを享受したのである。わたしは何度もペテロに試練を与え、そのため、もちろん彼は死にかけたのだが、そうした何百もの試練の中にあっても、彼は一度たりともわたしへの信仰を失ったり、わたしに失望したりしなかった。わたしがもう彼を捨て去ったと告げた時でさえ、ペテロの心が弱ってしまったり、絶望してしまったりすることはなく、それまでと同じように、わたしを実際的なやり方で愛するために自分の信念を貫き続けた。わたしは彼に、たとえおまえがわたしを愛しても、おまえをほめず、最後にはサタンの手中に投げ込む、と言った。そうした試練の只中、それは肉への試練ではなく、言葉による試練であったのだが、ペテロはそれでもわたしに祈った。「おお、神よ。天と地ともろもろのものの中にあって、人間や生き物、あるいはその他のもので、全能者の手の中にないものが何かあるでしょうか。あなたがわたしに憐れみをお示しになりたいとき、その憐れみのためにわたしの心は大いに喜びます。あなたがわたしに裁きを下されると

き、わたしはそれに相応しい者ではありませんが、その御業に計り知れない奥義をますます深く感じるのです。なぜなら、神は権威と知恵とに満ちておられるからです。わたしの肉は困難に苦しんでも、わたしの霊は慰められます。どうして神の知恵と御業とをたたえずにおられましょう。たとえ神を知った後に死ぬとしても、常に備えと心構えができています。おお、全能者よ。まことに、わたしに神のお姿を見させることを真に望んでおられないということではないでしょう。まことに、わたしは神の裁きを受けるのにふさわしくないということではないでしょう。わたしの中に、ご覧になりたくないものがあるということなのではないでしょうか」。このような試練の中であって、ペテロはわたしの意図を正確に把握することはできなかったが、わたしに用いられることを（たとえそれが、人類にわたしの威厳と怒りとを示すため、裁きを受けるだけだったとしても）誇りと栄光であると考え、試練にさらされても心碎けることがなかった。わたしの前で忠実であったため、また、わたしの与えた恵みのゆえに、ペテロは数千年もの間、人類のための手本、見習うべき者となった。これこそは、あなたがたが見習うべき例ではないのか。今このとき、わたしがなぜペテロのことをこれほど詳しく語っているのか、あなたがたはよくよく考えて、理解しなければならない。これをあなたがたの行動原則としなければならない。

たとえわたしを知る者がごく少なくとも、そのために人類のうえに怒りをぶちまけたりはしない。なぜなら、人間にはあまりに多くの欠点があるため、わたしの望む高みに至ることができないからである。だから、数千年の長きにわたり、今日に至るまで、わたしは人間に寛容であった。しかし、わたしが寛容であるからといって、あなたがたは自分に対して寛容過ぎてはならない。そうではなくて、ペテロを通してわたしを知り、わたしを求めるように努め、ペテロの物語すべてから、これまでになかったやり方で啓示を受け、そうして、人類がかつて到達したことのない域に達することを目指すべきである。宇宙と天空の至るところで、また天地のあらゆるもののあいだで、天地の万物がわたしの働きの最終段階に全力をささげている。まことに、あなたがたは傍観者でいて、サタンの勢力によってあちらこちらへ動かされていくことはないだろう。サタンはいつでも人間がわたしについて心にもつ認識をむさぼっている。そして、つねに牙と爪をむき出して、死闘の最期の苦しみの中にある。あなたがたは、今このときに、サタンの欺きに満ちた策略によって捕らえられたいのか。あなたがたは、わたしの働きの最後の段階が完成する瞬間に、いのちを断たれたいのか。まことに、あなたがたは再びわたしが寛容さを示すことを待っているのではあるまい。わたしを知ろうとすることが肝要だが、実践に注意を注ぐことを怠ってはならない。わたしは、あなたがたがわたしの導きに従い、自

分の願望や意図をこれ以上抱かないことを願って、自分の言葉の中であなたがたに直接識見を明かしているのである。

1992年2月27日

全宇宙に向かって語った神の言葉：第八章

わたしの啓示が最高頂に達し、わたしの裁きが終わりに近づくとき、わが民はみな明らかにされ、完全にされる。わたしは宇宙世界の隅々まで旅し、わたしの意図にかない、わたしが用いるにふさわしい者たちを永久に探し続ける。誰が立ち上がり、わたしに協力することができるだろうか。人間のわたしへの愛はあまりにささやかで、わたしへの信仰はあわれなほどに小さい。わたしの言葉の矛先が人間の弱さに向けられていなかったならば、人間はまるで地上のことに関して全知全能であるかのように、自慢し、誇張し、尊大に高尚な理論を唱えるだろう。かつてわたしに「忠実」だった者、および今日わたしの前に「堅く立っている」者のうち、今なおあえて自慢げに話そうとする者がいるだろうか。誰が自分の前途についてひそかに喜んでいないだろうか。わたしが直接暴露しなかったとき、人は隠れる場所もなく、恥にさいなまれた。わたしが他の手段で語ったなら、どれほどひどいことになるだろう。人々はより大きな負い目を感じるだろう。自分たちを治せるものは何もないと思い込み、自分たちの消極性のためにまったく動きがとれなくなってしまうだろう。人間が希望を失うと、神の国の礼砲が正式に鳴り響く。それは、人間が語るところの「七倍に強められた霊が働きをはじめるとき」である。つまり、神の国の生活が公式に地上で始まる時であり、わたしの神性が（頭脳による処理なしに）直接行動するために現れる時である。すべての人は蜂のように忙しくなる。人々はまるでよみがえったようであり、夢から醒めたようであり、目覚めるとすぐに自らの置かれた状況を知って驚愕する。わたしは過去において教会を建てることについて多くを語り、多くの奥義を明らかにした。教会の建設は最盛期に至ると、突如として終わった。しかしながら、神の国の建設は異なる。霊的領域における戦いが最終段階に達したときにはじめて、わたしは地上で新たに開始する。つまり、人間が退こうとするときにはじめて、わたしは正式に新たな働きを始め、起こすのである。神の国の建設と教会の建設との違いは、教会建設では、わたしは神性に支配される人間性の下で働いたということである。わたしは人間の古い性質を直接取り扱い、人間の醜い自我を直接明らかにし、人間の本質をあらわにした。その結果、人間はそれに基づいて自己を知るようになり、自分の心と言葉の中で確信を得た。神の国の建設では、わた

しは直接神性のもとに行動し、すべての人々がわたしの言葉についての認識に基づいてわたしのもつものおよびわたしであるものを知るようにし、最終的には、肉の体の中にあるわたしについての認識を得られるようにする。そうして、全人類による漠然とした神の追求は終わり、天にいる神の居場所を心の中でもつのをやめる。つまり、わたしが受肉しながら行う業を、わたしは人類に知らせ、それでわたしの地上での時代は終わる。

神の国の建設は、靈的領域を直接目指している。つまり、わが民すべての間に靈的領域における闘いが明らかにされ、そこからわかるのは、すべての人々は常に戦っており、それは教会の中だけではなく、神の国の時代にはさらにそうであり、そして人間は肉の体をもっているが、靈的領域が直接明かされ、人間は靈における生活に携わるということである。だから、あなたがたが忠実であるようになると、わたしの働きの次の部分に正しく備えなければならない。あなたがたは心のすべてをささげなければならない。そうしてはじめて、わたしの心を満足させることができる。人間が以前に教会で何をしていたかは問わない。今日では、それはわたしの国の中にある。わたしの計画において、サタンはずっと、一步ごとにすぐその後をつけてきたのであり、わたしの知恵の引き立て役として、わたしの本来の計画を邪魔する方法と手段を絶えず探ってきた。しかし、わたしがサタンの欺きに満ちた策略に屈するものだろうか。天と地のすべてのものはわたしに仕えている。サタンの欺きに満ちた策略も同様ではないのか。これはまことにわたしの知恵の交わるころ、これはまことにわたしの業の驚くべきところであり、これはまことにわたしの経営計画全体が実行される原則である。神の国を建設する時代においても、わたしはサタンの欺きに満ちた策略を避けて、なすべき働きを続ける。宇宙と万物の中で、わたしはサタンの行いをわたしの引き立て役に選んだ。これはわたしの知恵の現れではないのか。これはまさに、わたしの働きの驚くべきところではないのか。神の国の時代に入る際には、天と地のあらゆる物事が大きな変化を遂げ、祝い、喜ぶ。あなたがたも同じなのではないのか。誰が蜂蜜のように甘い思いを心に抱かないだろうか。誰が心に喜びがあふれないだろうか。誰が喜び踊らないだろうか。誰が賛美の言葉を語らないだろうか。

わたしがここまで話してきたことから、わたしの言葉の目的と源を把握しただろうか。どうだろうか。わたしがこう尋ねなければ、たいていの人はわたしがただしゃべり続けているだけだと信じて、わたしの言葉がどこから来たかを知ることができないだろう。もしあなたがたが注意深く考えれば、わたしの言葉の重要性がわかる。じっくりと読んでみるとよいだろう。そのうちの何があなたのためにならないだろうか。どれが、あなたのいのちの成長のためにならないだろうか。どれが靈

的領域の現実について語っていないだろうか。たいていの人は、わたしの言葉には何の根拠もない、何の説明も解釈もないと考える。わたしの言葉はほんとうにそれほど抽象的で、不可解なものだろうか。あなたがたはほんとうにわたしの言葉に従うだろうか。ほんとうにわたしの言葉を受け入れるだろうか。わたしの言葉を玩具扱いしないだろうか。わたしの言葉を自分の醜い外見を覆う衣として使わないだろうか。この広大な世界で、誰がわたしから直接調べられただろうか。誰がわたしの霊の言葉を直接聞いただろうか。まことに多くの人々が闇の中で手探りし、まことに多くの人々が逆境のさなかで祈り、まことに多くが飢え、凍えながら、希望をもって見守り、まことに多くの人々がサタンに縛られている。しかし、まことに多くの人々がどこに頼るべきか知らず、まことに多くの人々が幸福の中でわたしを裏切り、まことに多くの人々が恩を知らず、まことに多くの人々がサタンの欺きに満ちた策略に忠実である。あなたがたの中の誰がヨブなのか。誰がペテロなのか。なぜわたしは繰り返しヨブの名をあげてきたのか。そして、なぜわたしはペテロに何度も言及してきたのか。あなたがたはわたしがあなたがたに望んでいることを感知したことがあるだろうか。あなたがたはこのようなことについてもっと時間をかけて考えなければならない。

ペテロは長年わたしに忠実であったが、けっして不平を言わず、恨みがましい心をもたず、ヨブでさえペテロには及ばなかった。長い年月にわたって、聖徒たちもみなペテロには遠く及ばなかった。ペテロはわたしについての認識を求めただけではなく、サタンが欺きに満ちた策略を実行していた時にも、わたしを知るようになった。それが、長年のわたしの心にかなう奉仕をすることにつながり、その結果、サタンに利用されることがついになかった。ペテロはヨブの信仰から学んだが、明らかに彼の短所をも知っていた。ヨブは深い信仰の持ち主だったが、霊的領域のものごとに関する認識を欠いていた。そのため、現実に沿わないことを数多く言っていた。このことから、彼の認識がまだ浅く、完全には至ることができなかったことがわかる。そこで、ペテロは常に霊を理解しようとし、いつでも心して霊的領域の動態を観察していた。その結果、わたしの望みの何かを確信することができただけでなく、サタンの欺きに満ちた策略についても多少理解していた。そのため、ペテロの認識はいつの時代の誰よりも豊かだった。

ペテロの経験から、人間がわたしを知りたければ、霊において注意深く考察することに集中しなければならないということは、容易にわかるだろう。わたしはあなたに、外面的に多くのものをわたしにささげることを要求しない。それは二義的な懸念である。わたしを知らないなら、あなたの語る信仰や愛、忠実はすべて幻想にすぎない。それは中身のないものであり、あなたはわたしの前で大いに自慢する

が、自分を知らず、そのため再びサタンの罠にかかり、自由になることができないという破目になるのは確実である。あなたは地獄の子になり、破滅の対象となる。しかし、わたしの言葉に冷淡で無関心であるなら、その人は必ずわたしに敵対している。これは事実であり、あなたは霊的領域の門の向こう側に大勢の多様な霊がわたしの刑罰を受けているのを見るとよい。彼らの中に、わたしの言葉に受動的でなく、冷淡でなく、わたしの言葉を拒まなかった者がいるだろうか。彼らの誰がわたしの言葉に冷笑的でなかっただろうか。彼らの誰がわたしの言葉に対抗するものを見つけようとしなかっただろうか。彼らの誰が自分を守るためにわたしの言葉を防御武器として用いなかっただろうか。彼らはわたしの言葉を通じて、わたしについての認識を求めず、単に玩具としてもてあそんだに過ぎない。そうすることで、彼らはわたしにじかに敵対したのではないのか。わたしの言葉とは誰のことなのか。わたしの霊とは誰のことなのか。わたしは何度も、こうした言葉をあなたがたに繰り返してきた。しかし、あなたがたの理解がさらに高度で明瞭であったことがあるか。経験が真実であったことがあるか。もう一度言う。わたしの言葉を知らず、受け入れず、実践しないのなら、必ずわたしの刑罰の対象となる。必ずサタンの餌食になる。

1992年2月29日

全宇宙に向かって語った神の言葉：第十章

結局のところ、神の国の時代は過去の時代と異なっている。それは人間の行いとは関係ない。むしろ、わたしが地上に降りて自ら働きを行ったのであり、それは人には理解できず、成し遂げるのも不可能なことである。世界の創造以来長年にわたり、その働きはひとえに教会の建設に関するものだったが、神の国を建てることは誰も聞いていない。わたしが自分の口でこのことを語ったところで、その本質がわかる者はいるだろうか。わたしはかつて人間の世界に降り、人々の苦しみを目の当たりにして経験もしたが、受肉の目的を果たすことはなかった。神の国の建設が始まると、わたしは受肉して正式に職分を始める。つまり、神の国の王が正式に王権を握るのである。このことから、神の国が人間界に降りて来るのは、単に文字上のことなどではなく、実際の現実の一つなのは明らかである。これは、「実践の現実」という言葉がもつ意味の一側面である。人間はわたしの業を一つたりとも見たことがないし、わたしの発する言葉を一つも聞いたことがない。たとえわたしの業を見たとしても、何を見出しただろう。わたしが語るのを聞いたとしても、何を理解しただろう。世界中で、すべての人間はわたしの慈悲と愛情の中にいるが、同時

にすべての人間はわたしの裁きの中におり、同じく試練に晒されている。すべての人間がある程度墮落していたときでさえ、わたしは人間に対して慈悲深く、愛情深くあった。すべての人間がわたしの玉座の前でひれ伏したときでさえ、わたしは人間に刑罰を下した。しかし、わたしが下した苦しみと精錬の中にいない人間が、誰かいるのか。ゆえに、数多くの人が闇の中で光を求めて手探しし、試練の中でもがき苦しんでいる。ヨブには信仰があった。しかし、彼は自分の助かる道を求めていたのではないか。わが民は試練の中で堅く立つことができるものの、声に出すことなく、心の奥底に信仰をもつ者はいるだろうか。むしろ、心の中でいまだに疑いを抱きつつ、自分の信仰を口にしているのではないか。試練の中で堅く立ってきた者、試練の際に心から従う者は誰一人いない。わたしが顔を背けずこの世界をじっと見たなら、全人類はわたしの燃えるようなまなざしを受けて倒れるはずだ。わたしは人間に何も求めないからである。

神の国を迎える祝砲が鳴り響くとき、これはまた七つの雷が轟くときでもあるのだが、この音は天地を激しく揺さぶり、天空を震わせ、すべての人間の心の琴線を震わせる。神の国の讃歌が赤い大きな竜の地で厳かに鳴り渡り、わたしがその国を破壊し、わたしの国を建てたことを証しする。さらに重要なのは、わたしの国が地上に建てられることである。このとき、わたしは我が天使たちを世界のすべての国々に遣わし、わたしの子ら、わが民を牧養できるようにする。これはまた、わたしの働きの次なる段階にとって必要なことを満たすためである。しかしわたしは、赤い大きな竜がとぐろを巻いて横たわる場所に自ら赴き、それと対決する。すべての人間が受肉したわたしを知るようになり、肉におけるわたしの業を目の当たりにできるとき、赤い大きな竜のねぐらは灰となり、跡形もなく消え去る。わたしの国の民として、あなたがたは赤い大きな竜を心の底から嫌っているのだから、自分の行いによってわたしの心を満足させ、それによって竜を辱めなくてはならない。あなたがたは本当に、赤い大きな竜を憎むべきものと感じているのか。本当に神の国の王の敵だと感じているのか。わたしの素晴らしい証しをできる信仰が本当にあるのか。赤い大きな竜を打ち破る自信が本当にあるのか。以上があなたがたに求めることである。わたしが必要とするのは、ただあなたがたがこの段階に達せることである。あなたがたにそれができるだろうか。それを成し遂げるだけの信仰があるのか。いったい人間に何ができるのか。むしろ、わたしが自らするのではないか。自ら戦いの地に降りるとわたしが言うのはなぜか。わたしが望むのはあなたがたの信仰であって、行いではない。人間は、わたしの言葉をありのままに受け取ることができず、横目で見ることしかできない。それによって、あなたがたは目的を達したのか。そのようにして、わたしを知るに至ったのか。実を言うと、地上の人間のう

ち、わたしの顔を正面から見ることのできる者は一人もおらず、わたしの言葉の純粋な、ありのままの意味を受け取れる者も一人としていない。ゆえに、自らの目標を果たし、人々の心にわたしの真の姿を植えつけるべく、わたしは前例のない事業を地上で始めた。そうして、観念が人々を支配する時代に幕を下ろすのである。

今日、わたしは赤い大きな竜の国に降り立つだけでなく、全宇宙に向き合い、天空全体を揺り動かす。わたしの裁きが下されない場所が一つでもあるだろうか。わたしの降らせる災難が存在しない場所が一つでもあるだろうか。わたしは行く先々に、ありとあらゆる「災いの種」を蒔いた。これは、わたしが働く方法の一つであり、人間を救う業であるのは間違いなく、わたしが人間に差し伸べるものは依然として一種の愛なのである。わたしは、さらに多くの人々がわたしを知り、わたしを見られるようにするとともに、そうして長きにわたって見られなかった神、いまや現実である神を崇められるようにしたい。どのような理由で、わたしは世界を創ったのか。人間が墮落した後、わたしが彼らを完全に滅ぼさなかったのはなぜか。全人類が災いの中で生きているのはなぜか。わたしが肉をまとった目的は何か。わたしが働きを行なうとき、人間は苦さだけでなく、甘さをも味わう。世の人々のうち、わたしの恵みの中で生きていない者がいるだろうか。わたしが人に物質的な恵みを授けなかったら、この世の誰が富み足りるだろうか。あなたがたが我が民として今の立場にいられるようにしたことは、果たして祝福だろうか。あなたがたが我が民ではなく効力者だとしたら、わたしの恵みの中で生きていないのだろうか。わたしの言葉の起源を理解できる者は、あなたがたの中に一人もいない。人間は、わたしの与えた呼び名を大事にするどころか、じつに多くの人々が内心で「効力者」という呼び名を嫌い、「我が民」という呼び名に心の中でわたしへの愛を育む。わたしを騙そうと試みてはいけない。わたしの目はすべてを見通す。あなたがたのうち、誰が進んで受け取り、誰が完全に従順であるのか。神の国の祝砲が鳴り響かなくても、あなたがたは最後まで真に従うことができるだろうか。人間のできることを、考えることを、そして人間がどこまでできるかは、どれも遠い昔にわたしがあらかじめ定めたことである。

大多数の人々は、わたしの顔が発する光の中でわたしに焼き払われることを受け入れる。大多数の人々は、わたしの励ましに刺激を受けて力強く探求に突き進む。サタンの勢力が我が民を攻撃するとき、わたしは彼らを退ける。サタンの策略が我が民の生活を破壊しようとするとき、わたしはサタンを敗走させる。ひとたび去って、二度と戻らないように。地上では、ありとあらゆる悪霊が安息の地を求めて永遠にさまよい、人間の死体をむさぼり食うべく果てしなく探している。我が民よ。あなたがたは、わたしの保護と加護の中にとどまらなければならない。けっして自堕落なことをしてはいけない。けっして無謀に振る舞ってははいけない。あなたはわ

たしの家で忠誠を捧げなければならず、忠誠によってのみ、悪魔の狡猾さに反撃できる。いかなる状況においても、過去のように行動してはいけない。わたしの前であることをし、わたしの後ろで別のことをしてはいけない。そうするなら、あなたはすでに贖われなくなっている。このような言葉を、わたしは十分以上に述べてきたのではないか。わたしが人々に繰り返し注意しなければならないのは、ひとえに人間に根づいた本性が度し難いためである。飽きてはならない。わたしの言うことはみな、あなたがたの運命を確実なものにするためである。穢れた汚い場所こそ、サタンがまさに必要とするものである。どうしようもないほど救いがたく、放蕩に溺れれば溺れるほど、あなたがたは抑制に甘んじることを拒み、穢れた霊があらゆる機会を利用して、ますますあなたがたに取りつこうとする。そこまですると、あなたがたの忠誠は退屈なおしゃべり以外の何物でもなくなり、そこに現実は何一つなく、穢れた霊があなたがたの決意を呑み込み、それを不服従に変え、わたしの働きを妨げるサタンのたくらみに変えてしまう。そうすると、あなたがたはいつ何時わたしに打ちのめされるかわからない。誰一人、この状態の深刻さを知る者はいない。人はみな、耳に入ることを聞き流すばかりで、少しも用心しようとししない。過去に何が行われたか、わたしは覚えていない。あなたは、わたしがもう一度「忘れる」ことで、自分に対して寛容になるのを待っているのか。人間はわたしに敵対したが、わたしは恨みに思わない。人間の霊的背丈はあまりに低いことから、わたしは過度に大きなことを要求しない。わたしが求めるのは、放蕩せず、抑制に甘んじることだけである。この一つの条件を守ることは、あなたがたの能力を超えてはいないはずだ。違うだろうか。大半の人々は、わたしがさらに奥義を明かすのを見て楽しもうと待っている。しかし、天の奥義をすべて理解するようになったところで、その知識でいったい何ができるというのか。それでわたしへの愛が増すというのか。それでわたしへの愛が燃え上がるというのか。わたしは人間を過小評価しないし、人間について軽々しく判断することもしない。これらのことが人間の置かれた実情でないなら、わたしはけっしてこのような呼び名を軽々しく人に冠さない。過去を振り返りなさい。わたしがあなたがたをけなしたことが何度あったというのか。あなたがたを過小評価したことが何度あったというのか。あなたがたの実情を考慮せず、あなたがたを見ていたことが何度あったというのか。わたしの発する言葉が、あなたがたを心から勝ち取らなかったことが何度あるというのか。わたしの話した言葉が、あなたがたの心の糸に深く響かなかったことが何度あったというのか。あなたがたのうち誰が、わたしによって底なしの淵に突き落とされることを深く恐れて恐怖に震えることなく、わたしの言葉を読んだというのか。誰がわたしの言葉による試練に耐えないというのか。わたしの発する言葉の中には権威がある

が、これは安易に人間を裁くためのものではない。むしろ、わたしは人間の実情を考慮し、わたしの言葉がもつ意味を人間に絶えず示している。実際のところ、わたしの言葉の中に、わたしの全能を認められる者がいるだろうか。わたしの言葉を形作る純金を受け取れる者がいるだろうか。どれほどの言葉をわたしは語ったことか。誰がそれらを大事にしたことがあるのか。

1992年3月3日

神の国の賛歌

あまたの民がわたしに喝采を送り、わたしを賛美する。万民が唯一の真なる神の名を呼び、わたしの業を仰ぎ見る。神の国が人の世に降臨し、わたしの本体は豊かで充実している。誰がこれを喜ばないのか。誰が歓喜のあまり踊らないのか。ああ、シオンよ。勝利の旗を掲げてわたしを祝え。勝利の歌を歌いあげ、わたしの聖なる名を広めよ。地の果てまでも存在するすべての被造物よ。直ちに自らを清めてわたしへの捧げ物となれ。大空の星よ。直ちにもとの位置に戻り、わたしの全能なる力を天空に示せ。わたしは地上の民の声に耳を傾ける。わたしへの無限の愛と畏れを歌に注ぐ民の声に。すべての被造物が蘇るこの日、わたしは人の世に降臨する。この瞬間、まさにこの節目、すべての花が一斉に咲き乱れ、すべての鳥が声を揃えて歌い、すべてのものが喜びに打ち震える。神の国の礼砲が鳴り響くと、サタンの国はよろめき倒れ、神の国の賛歌がとどろく中で滅び、二度と立ち上がることはない。

地上の誰があえて立ち上がり抵抗するというのか。地に降り立つわたしは焼き尽くす火をもたらし、怒りをもたらし、ありとあらゆる災難をもたらす。地上の国々はいまやわたしの国である。空の雲は激しく動いて渦を巻き、地の湖と川はうねりをあげ、感動的な旋律を喜んで奏でる。休んでいた動物はねぐらから現われ、万民はわたしにより眠りから呼び覚まされる。万民の待ち望んでいた日がついに来た。彼らは最も美しい歌をわたしに捧げるのだ。

この美しい瞬間、この心躍るとき、

賛美が天地のあらゆるところで鳴り響く。誰が興奮しないだろうか。

誰の心が明るくならないだろうか。誰がこの光景に涙を流さないだろうか。

空はかつての空でなく、いまや神の国の空である。

地はかつての地でなく、いまや聖なる大地である。

激しい雨が降ったあと、汚れた古い世界は何もかも新しくされる。

山が変わりゆく……水が変わりゆく……

人も変わりゆく……万物が変わりゆく……
ああ、汝静かなる山々よ。立ち上がってわたしのために踊れ。
ああ、汝静かなる水よ。絶えず自由に流れよ。
汝、夢を見ている人間よ。起きあがり追え。
わたしは来た……わたしは王……
全人類がその目でわたしの顔を見、その耳でわたしの声を聞く。
そして自ら神の国の生活を送る……
何と甘美なことか……なんと美しいことか……
忘れられない……忘れることなどできない……

わたしの怒りが燃えさかる中、赤い大きな竜はのた打ち回る。
威厳に満ちたわたしの裁きにおいて、悪魔はその正体を現わす。
わたしの厳格な言葉に人はみな深く恥じ入るが、どこにも隠れる場所がない。
人は過去を振り返り、いかにわたしを嘲りあざ笑ったかを思い出す。
人が自己顕示しなかったときはなく、わたしに挑まなかったときもない。
今日、泣いていない者がいるのか。自責の念を感じない者がいるのか。
全宇宙、全世界が泣き声で満たされる……
歓喜の声で満たされる……笑い声で満たされる……
比類なき喜び……比べるものなき喜び……

小雨がしとしと降り……大雪がしんしん降る……
人は悲喜こもごも……笑う者……
泣きじゃくる者……歓喜する者……
誰もが忘れてしまったかのよう……いまが雨と雲に満ちた春なのか、
花が咲き誇る夏なのか、豊かな収穫の秋なのか、
凍えるような冬なのか、誰一人知る者はいない……
空には雲が流れ、地では海がうねりをあげる。
子らは腕を振り……民は足を動かして踊る……
天使は働きにいそしみ……牧養している……
地では人々はみな忙しく立ち回り、地の万物はその数を増す。

全宇宙に向かって語った神の言葉：第十二章

東から稲妻が走るときこれはまた、わたしがわたしの言葉を口に始める、まさにその瞬間である――稲妻が光るそのとき、天空全体が照らされ、すべての星々に変化が起こる。全人類はあたかも選り分けられ、整理されたかのようである。東からの光芒の下、人間はみな本来の形を現し、目がくらみ、混乱し、動きがとれずにいる。まして、自らの醜い顔を隠すことができない。また、彼らはわたしの光から逃げて山の洞窟に隠れようと逃げる動物のようだ。しかし、わたしの光の中では、彼らの一人も姿を消せない。人間はみな仰天し、みなじっと待ち、みな見守っている。わたしの光の出現により、みな自分の生まれた日を喜び、同様に、みな自分の生まれた日を呪う。対立する感情は表現し難い。自己懲罰の涙が川と流れ、勢いの早い流れに運ばれ、瞬く間に跡形もなくなる。再び、わたしの日が人類の上に迫り、再び、人類を目覚めさせ、人類は新たな始まりを迎える。わたしの心臓が拍動し、その鼓動にしたがって、山々が喜びに飛び上がり、水が喜びに踊り、波が律動し、岩礁を叩く。わたしの心にあるものを言い表すのは困難だ。わたしは、わたしの視線ですべての穢れたものが燃えて灰となり、不従順の子らがみな、わたしの目の前から一掃され、もはや存在しなくなることを望む。わたしは赤い大きな竜のすみかに新たな始まりをもたらしたばかりではなく、全宇宙で新たな働きを始めた。間もなく、地上の国々がわたしの国となる。間もなく地上の国々はわたしの国故に永遠に存在しなくなる。わたしがすでに勝利を得たのだから。わたしが勝利のうちに戻ったのだから。赤い大きな竜は、地上でのわたしの働きを打ち消そうと、わたしの計画を妨げるために考え得るあらゆる手段を用いたが、わたしが竜の欺きに満ちた策略のせいでくじけるだろうか。わたしが竜の脅しに怯え、自信を失うだろうか。天にも地にも、わたしのたなごころの内には一つもない。赤い大きな竜、わたしの引き立て役となっているものは、なおさらではないか。これもまた、わたしの手で操れるものではないのか。

わたしが人間の世界で受肉したとき、人間はわたしの導きの手に従って、知らず知らずのうちにこの日に至り、それと知らぬうちに、わたしを知るようになった。しかし、前に続く道をどう歩むかということは、誰にもわからない、誰も知らない。まして、その道がどこに続いているかは、誰も見当がつかないのだ。全能者の見守りがあってはじめて、人はその道を最後まで歩むことができる。東の稲妻に導かれてはじめて、人はわたしの国の敷居を跨ぐことができる。人間たちの間に、わたしの顔を見た者、東に稲妻を見た者は誰もいない。わたしの玉座から出る声を聞いた者は、どれほど少ないだろう。実際、遠い昔から、わたしの本体に直接触れた

人間は一人もいない。今日初めて、わたしがこの世界に来て、人間はわたしを見る機会を得る。しかし、今でも、人間はまだわたしを知らず、わたしの顔を見、声を聞くだけで、わたしの意志を理解していない。人間はみな、そういうふうなのだ。わが民として、あなたがたは、わたしの顔を見て、大いに誇りを感じるのではないか。また、わたしを知らないことに惨めな恥ずかしさを覚えないだろうか。わたしは人間の間を歩き、人間の間で暮らす。わたしは受肉し、人間の世界に来たからだ。わたしの目的は、ただ人間がわたしの肉の体を見られるようにするだけではない。より重要なことは、人間がわたしを知ることができるようにすることだ。さらに、わたしは肉の体を通して、人間に対して有罪判決を下す。受肉した体によって、赤い大きな竜を打ち破り、そのすみかを一掃する。

地上に生きる人間は星の数ほど多いが、わたしは全員を自分の手のひらのように、よく知っている。また、わたしを「愛する」人間もまた海の砂のように多いが、わたしに選ばれたものはごく少数だ。わたしを「愛する」人々とは違い、まばゆい光を追い求める者だけだ。わたしは人間を過大評価も過小評価もしない。そうではなく、生まれながらに備わった特質に基づいて要求する。そこで、わたしの求めるのは、心からわたしを求める者だ――これは、わたしが人間を選ぶ目的を達するためだ。山々には無数の獣がいる。しかし、彼らはみな、わたしの前では羊のように穏やかだ。海の底には計り知れない神秘が潜んでいる。しかし、それらは、わたしには地上のすべての物事同様、明瞭に見える。天には、人間がけっして到達できない領域がある。しかし、わたしはそうした、到達不能の場所を自由に歩き回る。人間はけっして光の中でわたしを認識しておらず、闇の世界でだけ、わたしを見ている。あなたがたは、今も同じ状況にあるのではないか。赤い大きな竜が最大の猛威を振るっているときに、わたしは働きを始めるために正式に受肉した。赤い大きな竜がその真の姿をはじめて現したとき、わたしは、わたしの名を証しした。わたしが人間の道を歩き回ったとき、ただ一つの生き物、ただ一人の人間も、驚いて覚醒することはなかった。だから、わたしが人間世界で受肉していたとき、誰もそれを知らなかった。しかし、わたしの受肉した体で働きを始めると、人間が目覚める。わたしの雷鳴のような声に驚いて夢から醒め、その瞬間から、わたしの導きのもとでの生活を始める。わが民の中で、わたしは再び新たな働きを始めた。地上での働きが終わっていないと言った。これは、わたしが話した民は、わたしが心の中で必要と認めた者たちではないにも関わらず、それでもまだ、そうした人々の中から何人かを選んでいてることを十分に示す。このことから、わたしは、わが民が受肉した神を知ることができるようにしているだけではなく、わが民を清めていることが明らかになる。わたしの行政の厳しさにより、大多数の人々はまだ、わたしに

除かれる危険がある。あなたがたが精一杯自分を取り扱い、自分の体を抑制する努力をしない限り、そうしない限り、必ずわたしの嫌い捨てる存在になり、地獄に投げこまれる。パウロがわたしの手から直接刑罰を受けたのと同様、それは逃れようがない。あなたがたは、わたしの言葉に何かを見出しているのだろうか。以前と同様、わたしはまだ教会を清めるつもりであり、わたしの必要とする人々を清め続ける。なぜなら、わたしは全く聖く汚れない神自身だからである。わたしの神殿は虹色に輝くだけではなく、清浄無垢で、内部も外部と調和するものにするつもりだ。わたしの前で、あなたがたは一人残らず、過去に何をしたかを思い起こし、今日、わたしの心に完全な満足を与えようと決心できるかを判断しなければならない。

人間は単に肉におけるわたしを知らないだけではなく、さらに悪いことに、肉の体をもつ自分というものを理解することができずにいる。何年もの間、人間はわたしを欺き、わたしをよそから来た客人として扱ってきた。何度も、人々はわたしを「彼らの家の戸口」で締め出した。何度も、わたしの前に立って、わたしを無視した。何度も、他の人々の間でわたしを拒んだ。何度も、悪魔の前でわたしを否定した。そして、何度も、口論する口でわたしを攻撃した。しかし、わたしは人間の弱点を記録していないし、また、わたしに逆らったからといって、「歯には歯で」という対応はしない。わたしがしたのは、人間がついにわたしを知るように、不治の病を癒すために人間の病に薬を用い、そうして健康にすることだ。わたしがしてきたことはすべて、人間の生存のためだったのではないか、人間に生活する機会を与えるためだったのではないか。わたしは何度も人間の世界に来たが、わたしが自身の姿で訪れたとしても、人間は、わたしに気づかなかった。その代わり、人間たちは自分にとってふさわしいと思える振る舞いをし、自分で道を見出そうとした。天の下のどの道も全てわたしに発していることを、彼らはほとんど知らない。天の下のものはすべてわたしの采配によることを、彼らはほとんど知らない。あなたがたの誰が心に恨みをもつだろう。あなたがたのうち誰が、安易に決断を下そうとするだろう。わたしは、ただ静かに人間たちの間でわたしの働きをしている。それだけのことだ。わたしが受肉していた間、人間の弱さに同情していなければ、すべての人間は、わたしが受肉したというだけで怯えきり、その結果、ハデスに落ちていただろう。わたしが身を卑しくして自分を隠したから、人間は破滅を免れ、わたしの刑罰から救われ、そうして今日に至っているのだ。今日に至ることがどれほど困難なことであつたかを念頭に置いて、これから来る明日を大切に思うべきではないか。

1992年3月8日

汝ら民よ、みな喜びなさい！

わたしの光の中に、人々は再び光を見る。わたしの言葉の中に、人々は自分が享受するものを見つける。わたしは東方から来た。わたしは東方より出ず。わたしの栄光が輝く時、あらゆる国が光で照らされ、すべてに光がもたらされ、何ひとつ暗闇に留まることはない。神の国では、神とともに生きる神の民の生活は、計り知れないほどの幸せに満ちている。水は幸福に満ちた民の生活を喜びながら踊り、山々は民とともにわたしの豊かさを享受する。すべての人が努力し、懸命に働き、わたしの国への忠誠を示す。神の国にはもはや反乱も抵抗もない。天地は互いを拠り所とし、人とわたしは生活の甘美な喜びを通して、互いにもたれかかるように深い感情の中で距離を縮めている……。今この時、わたしは正式に天国での生活をはじめ。もはやサタンによる妨害はなく、民は安息を得る。全宇宙において、わたしの選民はわたしの栄光の中で生きる。人々の間で生きるのではなく、神とともに生きる者として、比類なき幸福を受けながら。すべての人間はサタンによる墮落を経験し、人生の甘さと苦さを味わい尽くしてきた。いま、わたしの光の中で生きながら、どうして喜ばずにいられようか。どうしてこの美しい瞬間を軽くあしらい、手放すことができようか。汝ら民よ、わたしのために心からの歌を歌い、喜びに踊りなさい。その誠実な心を持ち上げ、わたしに捧げなさい。わたしのために太鼓を打ち鳴らし、喜びの音楽を奏でなさい。わたしの喜びで全宇宙を照らそう。栄光に満ちたわたしの素顔を民にあらわそう。わたしは声高に叫ぶ。わたしは宇宙を超越する。すでにわたしは民の上に君臨している。民はわたしを称揚している。わたしは蒼天をさまよい、民はわたしとともに歩く。わたしは民とともに、我が民に取り囲まれながら歩く。民の心は喜びにあふれ、その歌声は宇宙を揺るがし、天空を割る。もはや宇宙が霧で覆われることはなく、泥や汚水も存在しない。宇宙の聖なる民よ！わたしがつぶさに調べれば、あなたがたは真の表情をあらわす。あなたがたは汚れに覆われた者ではなく、翡翠のように純粋な聖人なのだ。あなたがたはみなわたしの愛する者であり、わたしの喜びである。万物はいのちに立ち返る。すべての聖人がわたしに仕えるために天へと戻り、わたしのあたたかな抱擁の中、泣くこともなく、不安を覚えることもなく、自分自身をわたしに捧げ、わたしの家へと戻ってくる。そして自分の故郷において、絶えることなくわたしを愛し続ける。永遠に変わることはない。悲しみはどこか。涙はどこか。肉体はどこか。地が終わりを迎えても、天は永遠である。わたしは万民の前に姿を現わし、万民がわたしを称える。悠久の過去から終わりの時に至るまで、この生活、この美しさが変わることはない。これが神の国の生活である。

全宇宙に向かって語った神の言葉：第二十六章

誰がわたしの家に住んだのか。誰がわたしのために立ち上がったのか。誰がわたしのために苦しんだのか。誰がわたしの前で誓ったのか。誰が今までわたしに従い、それでいて無関心にならなかったのか。なぜ人間はみな冷たく無情なのか。なぜ人間はわたしを捨てたのか。なぜ人間はわたしに飽いたのか。なぜ人間の世界には何の温かみもないのか。シオンで、わたしは天の暖かさを感じていた。また、シオンでわたしは天の恵みを享受していた。さらに、わたしは人間の只中に生き、人間世界の苦さを味わった。わたしはこの目で、人間たちの中に存在するあらゆる状態を見た。人間は無意識にわたしの変更に沿って変わり、そうしてはじめて現在に至った。わたしは、人間がわたしのために何かできることを要求しない。また、人間がわたしのために何かを増すことを求めない。わたしはただ、人間がわたしの計画に調和できることを望む。わたしに反抗することも、わたしの恥のしるしとなることもなく、わたしについて力強い証しをすることを。人間の中には、わたしについてよき証しをし、わたしの名に栄光をささげた者がいる。しかし、人間の行い、人間の行為がどうしてわたしの心に適うだろう。どうして人間がわたしの望みをかなえ、わたしの心を果たすだろう。地上の山々や水、地上の花、草、木の中で、わたしの手の業を示さないものは、一つもない。わたしの名のゆえに存在しないものは、一つもない。しかし、なぜ人間は、わたしの要求する基準に達することができないのか。これは、人間の卑しさのせいだろうか。これは、わたしが人間を高めたためだろうか。これは、わたしが人間に残酷すぎたということだろうか。なぜ人間はいつも、わたしの要求を恐れているのか。今日、わたしの国の無数の民の中で、なぜあなたがたは、わたしの声を聞くだけで、わたしの顔を見ようとしないのだろうか。なぜあなたがたは、わたしの言葉を見るだけで、それをわたしの霊と合わせようとしないのか。なぜあなたがたは、わたしを上为天と下の地に分け続けるのか。地上にいるわたしは、天にいるわたしとは異なっているということか。天にいるわたしは、地上に降りて来ることができないということか。地上にいるわたしは、天に連れられて行くに値しないということか。まるで、地上にいるわたしは卑しいもので、天にいるわたしは崇めるべき存在であり、天と地の間には越えることのできない裂け目があるようではないか。しかし、人間の世界では、そうしたことがどこから来ているかは何も知られておらず、ずっとわたしに背き続けている。まるで、わたしの言葉は音だけで意味がないようだ。人間はみな、わたしの言葉を調べ、わたしの外見がどういうふうなのかを自分なりに調査するが、みな失敗して、なんらの成果も上げられず、わたしの言葉に打ち倒され、二度と立ち上がろうとしない。

わたしが人間の信仰を試すと、ただの一人も真の証しをする能力がなく、ただの一人もすべてを捧げることができない。人間は隠れ、まるでわたしが人間の心を奪おうとしているかのように、心を開くことを拒んでいる。ヨブでさえ、けっしてほんとうに試練に立ち向かおうとせず、また苦しみの中で香りを放たなかった。人間は皆、春の暖かさに緑をほの見せる。だが彼らはけっして冬の冷氣の中で緑を保たない。人は霊的背丈が痩せ細っており、わたしの目的を達成できない。すべての人間の中で、他の手本となれる者は、誰一人いない。人間は基本的に同じで、他人と異なるところがなく、区別すべき特徴も、ほとんどない。このため、今日でも、人間はまだわたしの業を完全に知ることができない。わたしの刑罰がすべての人間の上に下ってはじめて、知らずにわたしの業に気づき、わたしが何もしなくても、強いなくても、人間はわたしを知るようになり、そこでわたしの業を見ることになる。これがわたしの計画であり、これはわたしの業の現れであり、これが人間の知るべきことだ。わたしの国では、無数の被造物がよみがえりを始め、生氣を取り戻す。地上の状態が変化したため、地と地の境界にもまた、変化が起こる。以前、わたしは預言した――地が地から離れ、地が地とつながると、そのとき、わたしは国々を打ち砕くと。このとき、わたしはすべての被造物を新たにし、全宇宙を区切りなおす。それにより、全宇宙を秩序立て、古い状態を新しいものに変える。これがわたしの計画だ。これらがわたしの業だ。国々と世界の人々がみな、わたしの玉座の前に戻ると、わたしは天の富をすべて人間の世界に与え、わたしによって、比類ない富にあふれるようにする。しかし、古い世界が存続する限り、わたしは国々の上に怒りを投げつけ、わたしの行政命令を全宇宙に公布し、違反する者には刑罰を下す。

わたしが全宇宙に面と向かって話すと、人間はみなわたしの声を聞き、そこで、わたしが全宇宙で行なってきたすべての働きを見る。わたしの旨に逆らう者、つまり、人間の行ないでわたしに敵対する者は、わたしの刑罰を受けて倒れる。わたしは天の無数の星々を取ってそれらを新しくし、またわたしのおかげで、太陽と月は新たになる――空はもはや以前の空ではなく、地上の無数の物事が新たになる。すべては、わたしの言葉により完全になる。全宇宙の多くの国々は新たに区切られ、わたしの国に置き換わる。それにより、地上の国々は永遠に消え去り、すべてがわたしを崇める一つの国になる。地上のすべての国々は滅ぼされ、存在しなくなる。全宇宙の人間のうち、悪魔に属する者はみな、滅ぼし尽くされる。サタンを崇める者はみな、わたしの燃える炎に倒れる――つまり、今、流れの中にいる者以外は、みな灰になるのだ。わたしが多くの民を罰するとき、宗教界にいる者は、わたしの働きによって征服され、程度の差はあ

れ、わたしの国に戻る。彼らは聖なる方が白い雲に乗って降臨するのを見たからである。すべての人がその種類に応じて選り分けられ、それぞれの行いにふさわしい刑罰を受ける。わたしに敵対した者たちは、みな滅びる。地上での行ないがわたしと関わりのなかった人たちは、自分たちの振る舞いのために、わたしの子らとわが民による支配の下、地上で存在し続ける。わたしは無数の人々と無数の国々にわたしを現わし、自ら地上に声を発してわたしの大いなる働きの完了を告げ、全人類が自分の目でそれを見られるようにする。

わたしの話が深くなる中で、わたしはまた宇宙のありさまも見ている。わたしの言葉によって、無数の被造物がみな新たになる。天は変わり、地も変わる。人間は本来の形を現し、ゆっくりと、それぞれ同じ種類のものたちと共に、それと知らぬ間に家族のもとに戻っていく。そこで、わたしは大いに喜ぶだろう。わたしは妨げられることなく、わたしの大いなる働きは知らぬ間に成し遂げられ、無数の被造物は変化する。わたしが世界を創ったとき、わたしはすべてのものをそれぞれに創った。すべての形あるものをそれぞれの種類に集まるようにした。わたしの経営（救いの）計画が終わりに近づくと、天地創造当初の状態を回復させ、すべてを本来の姿に戻す。すべては大きく変わり、すべてはわたしの計画の内に戻る。時は来た。わたしの計画の最後の段階が終わろうとしている。ああ、不浄な古き世界。必ずや、わたしの言葉に倒れる。必ずや、わたしの計画で無になる。ああ、無数の被造物たち。あなたがたは、みな、わたしの言葉の内で新たないのちを得る。あなたがたには主を持つのだ。ああ、純粹でしみ一つない新たな世界。必ずやわたしの栄光の中でよみがえる。ああ、シオンの山よ。もはや沈黙するな。わたしは勝利の内に帰ってきた。被造物の中から、わたしは全地を調べる。地上で、人間たちは新たな生活を始め、新たな希望を得た。ああ、わが民よ。どうして、あなたがたがわたしの光の中で復活しないでいられようか。どうして、あなたがたがわたしの導きの下、喜びに跳ね上がらないことがあろうか。地は歓喜の声を上げ、水は楽しい笑い声を響かせる。ああ、よみがえったイスラエルよ。わたしの定めをどうして誇りに感じないことがあろう。誰が泣いたのか。誰がうめき声を上げたのか。かつてのイスラエルは、もうない。そして、今日のイスラエルは立ち上がった、塔のようにまっすぐに、この世に、すべての人間の心の中に立ち上がった。今日のイスラエルは必ずや、わが民を通じて存在の源を得る。ああ、忌まわしいエジプトよ。まことに、もうわたしに敵対はしないだろう。どうしてわたしの憐れみを利用してわたしの刑罰を免れようとするのか。どうしてわたしの刑罰の内に存在できないのか。わたしの愛する者はみな、必ず永遠に生き、わたしに敵対する者はみな、必ず永遠に刑罰を受ける。わたしはねたみ深い神だから、わたしは人間の行いを軽々しく赦さ

ない。わたしは地上すべてを観察し、世界の東に義と威厳、怒り、刑罰をもって現れ、すべての人間たちにわたしを現す。

1992年3月29日

全宇宙に向かって語った神の言葉：第二十九章

万物が蘇った日、わたしは人間のあいだに来て、人間とともにすばらしい日夜を過ごしてきた。そのとき初めて、人間はわたしの親しみやすさを少しばかり感じる。そして交流がより頻繁になる中、わたしが所有するものとわたしそのものをいくらか知ようになり、その結果、わたしについて多少の認識を得る。すべての人のあいだで、わたしは頭を上げて見守り、彼らはみなわたしを見る。しかし、世界に災いが降りかかると、彼らはたちまち不安になり、彼らの心からわたしの姿が消える。災いの到来のせいで恐怖に駆られた彼らは、わたしの言いつけを聞こうとしない。わたしは何年も人間のあいだで過ごしたが、人間はいつもわたしに気づかず、決してわたしを認識しなかった。今日、わたしは自分の口で人間にこのことを話し、すべての人がわたしの前に来て、わたしから何かを受け取るようにさせるが、それでも彼らはわたしから距離を置くので、わたしを認識せずにいる。わたしの歩みが宇宙をまたぎ、地の果てへと至るとき、人間は自身を省みるようになり、すべての人がわたしのもとに来て、ひれ伏してわたしを崇める。これこそ、わたしが栄光を得る日、わたしが再臨する日、そしてまた、わたしが立ち去る日でもある。今、わたしは全人類のあいだで自身の働きにとりかかり、全宇宙でわたしの経営計画の仕上げを正式に開始している。この瞬間から後、注意深くない者は無慈悲な刑罰の中に落ちるのを免れず、これはいつでも起こり得る。わたしが無情だからではなく、むしろそれはわたしの経営計画の一段階であり、すべてはわたしの計画の各段階に沿って進められなければならない。そして誰一人、これを変えることができない。わたしが正式に働きを始めると、すべての人はわたしの動きに合わせて動く。そのようにして、全宇宙の人々はわたしと歩むことに没頭し、全宇宙に「歓声」が響き渡り、人間はわたしと共に勢いよく前進する。その結果、赤い大きな竜はうろたえ、狂乱し、わたしの働きに仕え、望まずとも、自分のしたいことができず、わたしの支配に従うしかなくなる。わたしの計画のすべてにおいて、赤い大きな竜はわたしの引き立て役、わたしの敵、そしてまた、わたしのしもべである。このように、わたしは竜への「要求」を緩めたことが一度もない。したがって、肉におけるわたしの働きの最終段階は、竜の家の中で完了するのである。このようにすれば、赤い大きな竜はよりよくわたしに仕えることができ、それによって、わたし

は竜に打ち勝ち、計画を完了するのである。わたしが働く中、すべての天使がわたしとともに決戦に臨み、最終段階においてわたしの望みを成就させようと決意する。それにより、地上の人々は天使たちと同じくわたしの前で服従し、わたしに逆らおうという気持ちを一切持たず、わたしに逆らうことを何もしないようになる。それが全宇宙におけるわたしの働きの動態なのだ。

わたしが人間のもとに来る目的と意味は、全人類を救い、全人類をわたしの家に連れ帰り、天と地を再び一つにし、天地のあいだで人間に「合図」を伝えさせることである。それが人間本来の役目だからである。人類を創ったとき、わたしは人類のためにすべてを準備しており、後に、人類がわたしの要求に応じて、わたしの与える豊かさを受け取れるようにした。だからこそ、わたしの導きのもと、全人類が今日に至ったのだとわたしは言う。そして、これはすべてわたしの計画である。全人類のうち、無数の人がわたしの愛の加護の下で存在し、無数の人がわたしの憎しみの刑罰の下で生きている。人はみなわたしに祈るが、それでも現状を変えられずにいる。ひとたび希望を失うと、自然のなすがままとなり、わたしに逆らうのをやめる。人間にはそれしかできないからである。人間の生活状況について言えば、人間はいまだ真の人生を見出しておらず、世の不公平、荒廃、惨めな状態を見通していない。そのため、災いの到来がなければ、大半の人は依然として母なる自然を信奉し、「人生」の味わいにひたっていることだろう。これが世の現実ではないのか。これが、わたしが人間に向けて語る救いの声ではないのか。人類の誰一人として、真にわたしを愛したことがないのはなぜか。人間が、刑罰と試練のさなかにあるときだけわたしを愛し、わたしの加護の下にあるときは、誰もわたしを愛さないのはなぜか。わたしは何度も人類に刑罰を与えた。人間はそれを見ても無視し、その時にそれを調べることも、深く考えることもしない。そのため、人間には無慈悲な裁きだけが下る。これはわたしの働きの方法の一つに過ぎないが、それでも人間を変え、わたしを愛するようにさせるためのものなのだ。

わたしは神の国を支配し、さらに全宇宙を支配している。わたしは神の国の王であり、全宇宙の頭でもある。今から後、わたしは選民でない者をすべて集め、異邦人のあいだで働きを始める。そして、わたしの行政命令を全宇宙に告げ、わたしの働きの次なる段階を無事開始できるようにする。わたしは刑罰を用いて異邦人のあいだにわたしの働きを広める。つまり、異邦人である者たちには力を用いるということだ。当然、この働きは、選民たちのあいだでの働きと同時に進められる。わたしの民が地上で支配し、力を振るう時はまた、地上のすべての人が征服される日であり、そしてさらに、わたしが憩うときでもある。そのとき初めて、わたしは征服された全員の前に姿を現わす。わたしは聖なる国で姿を現わし、汚れの地では姿を

隠す。征服され、わたしの前で従順になった者はみな、その目でわたしの顔を見ることができ、その耳でわたしの声を聞くことができる。これが終わりの日に生まれた者の恵み、わたしが予め定めた恵みであり、いかなる人間にも変えることができない。今日、わたしは将来の働きのために、このように働きを行なっている。わたしの働きはすべて相互に関連していて、そのすべてに呼びかけと反応がある。どの段階も突然止まったことはなく、またどの段階も他のものと独立して実行されたことはない。そうではないか。過去の働きは、今日の働きの基礎ではないのか。過去の言葉は、今日の言葉の先触れではないのか。過去の歩みは、今日の歩みの起源ではないのか。わたしが正式に巻物を開くとき、全宇宙の人々は罰せられ、世界中の人々が試練を受ける。それがわたしの働きのクライマックスである。すべての人が光のない場所で暮らし、またすべての人が環境の脅威にさらされながら生きる。つまりこれは、創世から現在に至るまで、人間が経験したことのない生活であり、すべての時代を通じて、こうした生活を「享受」した者は誰一人いない。だからわたしは、かつて行なわれたことのない働きをしたと言う。これが物事の実際の状況であり、その内なる意味である。わたしの日が全人類に近づいており、それは遠くに見えるものでなく、人間の眼前にあるのだから、誰が結果として恐れずにいられよう。そして、誰がこれを喜ばずにいられよう。汚れたバビロンの都市はついに終わりを迎える。人間は真新しい世界に再び出会い、天と地は変わり、新たになった。

わたしが万国万民の前に現われるとき、白い雲が空で激しく渦を巻き、わたしを護る。また、地の鳥たちもわたしのために喜んで歌い踊り、地上の空気を生き生きとさせる。そうして、地上の万物に活気を与え、もはや「徐々に沈み込む」ことなく、代わりに活力のある雰囲気の中で生きられるようにする。わたしが雲の中になると、人間はわたしの顔と目をうっすら認め、そのとき少しの恐怖を感じる。その昔、人間は伝説の中でわたしに関する歴史的記録を聞いたことがあり、その結果、わたしについて半信半疑である。わたしがどこにいるか、わたしの顔がどれほど大きいのか、人間にはわからない。それは海ほど広いのか、それとも、緑の草原のように果てしないのか。誰一人、そうしたことを知らない。今日、人間が雲の中にあるわたしの顔を見て初めて、伝説のわたしは実在すると感じ、そこでわたしにもう少し好意を抱くようになる。わたしの業があればこそ、わたしに対する人間の崇敬は少しだけ増す。しかし、人間はいまだわたしを知らず、雲の中にわたしの一部を見ているだけである。その後、わたしは両腕を伸ばし、人間に見せる。人間は驚き、わたしの手で打ち倒されるのではないかと深く恐れ、口を手で塞ぐ。そこで、わたしへの崇敬の念に少しばかりの畏れが加わる。よそ見をしている隙にわたしに打ち

倒されるのではないかと深く恐れ、人間はわたしの一挙一動から目を離さずにいる。しかし、人間に見られているからといって、わたしはそれに縛られず、手を動かして働きを続ける。わたしが行なうすべての業の中でのみ、人間はわたしをいくぶん好意的に見、そうして徐々にわたしの前に来て、わたしと交流するようになる。わたしのすべてが人間に明かされると、人間はわたしの顔を見、それ以後、わたしはもはや人間から自分を隠したり、ぼかしたりすることはない。全宇宙で、わたしは公然と万民の前に現われ、血と肉でできた者はみな、わたしの業を残らず見る。霊に属する者は、必ずやわたしの家で安らかに暮らし、必ずやわたしとともにすばらしい祝福を享受する。わたしが思いやる者たちは、必ずや刑罰を免れ、間違いなく霊の痛みと肉の苦しみを免れる。わたしは万民の前に公然と現われ、支配し、力を振るう。そうして、死臭が全宇宙を満たすことはなくなり、代わってわたしのさわやかな香気が全世界に広まる。わたしの日が近づいているので、人間は目覚めつつあり、地上のすべてが整然とし、地の生存の日々が終わった。わたしが到着したのだから。

1992年4月6日

信者はどのような観点をもつべきか

初めて神を信じたあと、人が得てきたものは何か。あなたは神について何を知ようになったのか。神への信仰により、あなたはどれほど変わったのか。今日、あなたがたはみな、人による神への信仰は単に魂の救いと肉の幸福のためではなく、神の愛を通して自分の人生を豊かにさせるためなどでもないことを知っている。そのように、もしあなたが肉の幸福や一時的な快樂のために神を愛するなら、たとえ最後に神に対するあなたの愛が頂点に達し、あなたがそれ以上何も求めないとしても、あなたが求めるこの愛は依然として不純な愛であり、神には喜ばれない。自分のつまらない存在を豊かにし、心の空虚さを埋めるために神を愛する人は、楽な生き方に貪欲な人であって、神を真に愛することを求める人ではない。このような愛は強いられたものであり、精神的満足を追求するものであって、神はそれを必要としない。では、あなたの愛はどのようなものか。あなたは何のために神を愛するのか。まさにいま、あなたの中には神に対する真の愛がどれほどあるのか。あなたがたの圧倒的多数が抱いている愛は先に述べた通りのものである。このような愛は現状を維持することしかできず、不変性を得ることも、人に根づくこともできない。この種の愛は、花が咲いても実をつけず、そのまましおれてしまう花のようでしかない。言い換えると、そのような形で神を愛しても、誰かがその道を導いてくれな

ければ、あなたは崩れ落ちてしまう。神を愛する時代に神を愛せるだけで、その後もいのちの性質が変わらないままなら、あなたは引き続き暗闇の力に覆われ、そこから逃れることができず、サタンの束縛とたくらみから自由になることもできないままである。そのような人が完全に神のものとなることはできない。最終的に、その人の霊、魂、体は依然としてサタンに属している。このことに疑いの余地はない。完全に神のものとされることができない人は、残らず自分の本来の場所に戻る。つまり、サタンの所に戻り、神による次の段階の懲罰を受けるため、火と硫黄の池に落ちるのである。神のものとされる人は、サタンを捨て去ってその支配下から逃れる人のことである。そのような人は正式に神の国の民として数えられる。神の国の民はこのようになるのである。あなたはこの種の人になりたいのか。進んで神のものになりたいのか。進んでサタンの支配下から逃れ、神の元に戻りたいのか。あなたはいまサタンに属しているのか、それとも神の国の民として数えられているのか。これらのことはすでに明白であるべきで、これ以上説明する必要はない。

かつて、多くの人が並外れた野心と観念を胸に、自分の希望のために追い求めた。こうした問題はしばらく脇にのけよう。いま極めて重要なのは、あなたがた一人ひとりが神の前で正常な状態を維持することができ、サタンによる支配の足かせから次第に自由になることができる実践の道を見つけることである。そうすれば、あなたがたは神のものとされ、神があなたがたに求める地上での生き方ができる。そのような形でのみ、あなたは神の旨を満たせるのである。多くの人が神を信じているが、神が望むものは何か、サタンが望むものは何かを知らない。彼らは混乱した信じ方をし、ただ流れに乗るだけなので、クリスチャンとしての正常な生活を送ったことがない。さらに、彼らは正常な人間関係をもったことがなく、ましてや神との正常な関係をもったこともない。このことから、人間の問題と欠点、および神の旨を邪魔し得るその他の要因が数多くあることがわかる。そのことは、人がいまだ神への信仰の正しい軌道に乗っておらず、真の人生経験に入っていないことを証明するのに十分である。では、神への信仰の正しい軌道に乗るとはどういうことか。正しい軌道に乗るとは、あなたが神の前で常に心を静め、神との正常な交わりを享受することができ、人間には何が欠けているかを次第に知るようになり、神に関するさらに深い認識を徐々に得ることである。これにより、あなたの霊は日々新たな洞察と啓きを得るのである。そしてあなたの切望も膨らみ、真理に入ることを求めるとともに、新しい光と認識が日々存在するようになる。この道を通じ、あなたは次第にサタンの支配から自由になり、いのちにおいて成長を遂げる。このような人は正しい軌道に入ったのである。自分の実体験を評価し、信仰において自分が追求した道を検証しなさい。これまでに述べたこととそれらを照らし合わせると

き、あなたは正しい軌道に乗っているか。どのような事柄において、サタンの足かせと支配から自由になったのか。いまだ正しい軌道に乗っていないなら、あなたとサタンのつながりは切れていない。そうであれば、神を愛そうと求めたところで、本物で、純真で、純粋な愛へと導かれるだろうか。神に対する自分の愛はゆるぎなく、心からのものだと言いが、あなたはまだサタンの足かせから自由になっていない。あなたは神をからかおうとしているのではないか。神に対する自分の愛が不純でない状態へと至り、完全に神のものとされ、神の国の民として数えられたいなら、あなたはまず自分自身を神への信仰の正しい軌道に乗せなければならない。

墮落した人間は神を体現できない

人は常に闇のとばりに覆われて、サタンの影響にとらわれたまま、逃れることができずに生きてきた。その性質はサタンに操られて、ますます墮落している。人は常に墮落したサタンの性質の中に生きており、真に神を愛することができないのだと言える。そのため神を愛したいと願うなら、独善、自尊心、高慢、うぬぼれといった、サタンの性質であるものを捨て去らなければならない。そうでなければその人の愛は不純な、サタンの愛であり、神に認められることは断じてできない。聖霊によって直接完全にされ、取り扱われ、砕かれ、刈り込まれ、訓練され、懲らしめられ、練られることがなければ、誰も真に神を愛することはできない。もし自分の性質の一部は神を現しているため、自分は神を真に愛せると言うなら、あなたは傲慢な言葉を語る人であり、非常識な人である。そのような人は大天使だ！ 人の生まれつきの性質は神を体現することができない。人は神に完全にされることを通して生来の性質を捨て去らねばならず、その後神の旨に配慮し、神の目的を果たし、さらに聖霊の働きを受けることで、初めてその生き方が神に認められるようになる。聖霊によって用いられている人を除けば、肉に生きる者で神を直接体現できる者はいない。聖霊に用いられている人でさえ、その性質と生き方が神を完全に体現しているとは言えない。ただその人の生き方が聖霊によって導かれていると言えるだけであり、その人の性質が神を体現することはできない。

人の性質は神によって定められており、そのことに議論の余地はなく、それは肯定的なことと考えられるが、その性質はサタンによって操られているため、人の性質は全体としてサタンの性質なのである。中には、神の性質とは行いがまっすぐで率直なことであり、それは自分にも表れていて、自分もそのような性格をしているから、自分の性質は神を体現していると言う人がいる。それは一体どんな人だろう

か。墮落したサタンの性質が、神を体現できるというのか。自分の性質は神を現しているなどと宣言する人は、神を冒瀆し、聖霊を侮辱している！ 聖霊の働き方を見ると、神の地上での働きはあくまで征服の働きであることがわかる。そのため人間のサタンの性質の大半は清められておらず、人の生き方は依然としてサタンの似姿であり、それを人は良いものと信じている。そしてそれは人の肉の行いを表しており、具体的に言えばサタンを体現していて、間違いなく神を体現するものではない。たとえ誰かが非常に神を愛していて、地上ですでに天の生活を楽しめるほどであり、「ああ神よ、どれほどあなたを愛しても足りません」などとさえ言うことができ、最高の領域に達しているとしても、それですらまだ神を生き、神を体現しているとは言えない。人の本質は神の本質とは異なるからだ。人は決して神を生きることとはできないし、ましてや神になることなどできない。聖霊が人に指示しているのは、ただ神の求めに従った生き方をすることだけだ。

サタンの行いはすべて人に体現されている。人の行いは今やすべてサタンの表現であり、神を現すことはできない。人はサタンの化身であり、人の性質が神の性質を表すことはできない。中には良い性格の人たちもいて、神がそのような人たちの性格を通して何らかの働きを行うことはあるかもしれない、彼らの働きは聖霊によって導かれる。それでも、彼らの性質が神を体現することはできない。神が彼らに対して行う働きは、ただ彼らがすでに持っているものを用い、それを発展させるものにすぎない。昔の預言者や、神によって用いられた人たちも、誰一人神を直接体現することはできない。人々は状況のためやむを得ず神を愛するようになるだけで、誰一人自ら進んで神と協調しようと努める者はいない。肯定的なものとは何だろうか。神から直接もたらされるものはすべて肯定的である。しかし人の性質はサタンに操られており、神を体現することはできない。肉となった神の愛、苦難を受ける覚悟、義、従順、そして謙虚さと秘密性のみが、直接神を体現している。なぜなら彼が到来したとき、罪深い性質を持たず、神から直接やって来たからであり、サタンに操られていなかったからだ。イエスは罪深い肉のような姿を取っているだけで、罪を体現してはいない。そのため十字架を通した（十字架の苦難も含む）働きが達成されるまでのイエスの行動、行なった業、そして言葉は、すべて直接神を体現している。イエスの例は、罪深い本性を持つ者は誰も神を体現できず、人の罪がサタンを体現していることを証明するに十分である。すなわち罪は神を体現しておらず、神には罪がない。聖霊により人の中で行われた働きでさえ、聖霊によって導かれたものと言えるだけで、人が神に代わって行ったと言うことはできない。人に関して言えば、その罪もその性質も神を体現してはいない。聖霊が過去から現在に至るまで人に行ってきた働きに目を向ければ、真理を生きる人がその真理を持って

いるのは、ひとえに聖霊がその人に働きを行ったからだということがわかる。聖霊による取り扱いと懲らしめを受けた後に、真理を生きられる人はほとんどいない。それはすなわち、聖霊の働きだけが存在しており、人間の側の協力が無いということだ。このことははっきり理解できただろうか。それでは、聖霊が働くときに最善を尽くして協力し、本分を尽くすにはどうすればいいだろうか。

宗教的な奉仕は一掃されなければならない

宇宙全体にわたる神の働きが始まって以来、神は多くの人々を神に仕えるように運命づけてきたが、そこにはあらゆる社会的地位の人々が含まれている。神の目的は、自身の旨を満たすことと、地上における自身の働きを滞りなく完了させることである。これが神に仕える人々を神が選ぶ目的である。神に仕える者はみな、神の旨を理解しなければならない。神のこの働きによって、神の知恵と全能、そして地上における神の働きの原則が人々にとっていっそう明らかになる。神は働きを行うべく実際に地上へと到来し、人々と関わるが、それによって人々は、神の業をより明確に知ることができる。今日、あなたがたというこの人々の集団は、幸運にも実際の神に仕えている。これはあなたがたにとって計り知れない祝福であり、あなたがたはまことに、神によって引き上げられているのだ。神に仕える人の選択において、神には必ず自身の原則がある。神に仕えることは、人々が想像するように、単なる熱心さの問題などでは決してない。今日あなたがたは、神の前で仕える人がそうするのは、その人たちに神の導きと聖霊の働きがあるから、また、彼らが真理を追い求める人だからだということを知っている。これらは、神に仕えるすべての人に課せられた、最低限の条件なのである。

神に仕えるのは簡単なことではない。墮落した性質が変わらないままの人は、神に仕えることが決してできない。あなたの性質が神の言葉により裁かれ、罰されていないなら、その性質はいまだにサタンを表しており、あなたが神に仕えているのは善意を見せつけているのだということ、そしてあなたの奉仕がサタンの本性に基づいていることを証明している。あなたは自分の元来の性格のまま、個人的な好みに沿って神に仕えている。さらに、自分が行おうとすることは神を喜ばせるものであり、自分が行いたくないことは神に憎まれるものだとして常に考え、働くときも自分の好みにだけ沿っている。これを神への奉仕と呼べるだろうか。最終的に、あなたのいのちの性質はほんの少しも変わらず、それどころか、自分の奉仕のせいでますます頑固になり、そのため、墮落した性質がさらに深く染みこんでしまう。このようにして、おもに自分の性格に基づいた神への奉仕に関する規則と、自分自身の

性質に沿った奉仕から派生する経験が、あなたの中で形をなす。それらは人間の経験と教訓であり、俗世における人間の人生哲学である。このような人々はパリサイ人や宗教官僚に分類することができる。目を覚まして悔い改めなければ、必ずや終わりの日に人々を騙す偽キリストや反キリストになるのだ。話に出てくる偽キリストと反キリストは、このような人々の中から現れる。神に仕える者たちが自分の性格に従い、自分の意志に沿って振る舞うなら、彼らはいつでも追放される危険を犯している。他人の心を勝ち取り、彼らに説教して操り、高い地位に昇るために、自分の長年の経験を神への奉仕に応用する人、そして決して悔い改めず、自分の罪を告白せず、地位の恩恵にしがみついた人は、神の前に倒れる。このような人はパウロと同類であり、自分の経歴の長さを誇ったり、自分の資格を見せびらかしたりする。神がこのような人々を完全にすることはしない。このような奉仕は神の働きを妨害する。人はいつも古いものに固執し、過去の観念や、過ぎ去った時代からのあらゆる物事にしがみついた。これは奉仕への大きな障害である。それらを捨て去ることができなければ、あなたの一生の重しとなる。たとえ脚を折るほど走り回ったり、大変な労苦のために背中を悪くしたりしても、また神への奉仕において殉教したとしても、神はあなたを一切褒めず、逆に、あなたは悪を行う者だと言う。

宗教的な観念を持たず、古い自己を進んで脇へのけ、純朴に神に従う人々を、神は今日から正式に完全にする。また、神の言葉を待ち望む人々を、神は完全にする。このような人々は立ち上がり、神に仕えるべきである。神には無限の豊かさと尽きせぬ知恵がある。神の驚くべき働きと貴い言葉は、さらに多くの人々によって享受されるのを待っている。目下のところ、宗教的な観念を持つ人、経歴の長さゆえに尊大に振る舞う人、自分自身を脇にのけることができない人は、これらの新しい物事を受け入れるのが難しい。聖霊にはこうした人たちを完全にする機会がない。服従しようと決意しておらず、神の言葉を渴望していなければ、その人にはそうした新たな物事を受け入れる術がない。そのような人たちはますます反抗的に、ますます狡猾になるばかりで、最終的には悪い軌道に乗ってしまう。神は現在の働きを行う中で、神を真に愛し、新たな光を受け入れられるさらに多くの人々を引き上げ、自分の経歴の長さを誇る宗教官僚たちを完全に切り捨てる。あくまで変化に抵抗する人々を、神は一人として欲しないのだ。あなたはこのような人になりたいのか。自分の好みに沿って奉仕するのか、それとも神の要求に沿って奉仕するのか。これは、あなた自身が認識すべきことである。あなたは宗教官僚なのか。それとも神に完全にされる生まれたての赤子なのか。あなたの奉仕のうち、聖霊に褒められるものがどれほどあるのか。神がわざわざ記憶しないものはどれほどなのか。長年にわたる奉仕の結果、あなたのいのちはどれほど変化したのか。あなたはその

すべてをよくわかっているのか。あなたが真の信者であれば、以前からの古い宗教的観念を捨て去り、新しいやり方で神によりよく仕えるはずだ。今から立ち上がっても手遅れではない。古い宗教的観念は、人の一生を駄目にする。人は自身が得る経験によって、神から離れ、自分のやり方で物事を行うようになってしまう。そうしたものを脇へのけなければ、いのちの成長を妨げる躓きの石となる。神に仕える人々を、神は常に完全にする。神がそのような人たちを軽々しく追放することはない。神の言葉による裁きと刑罰を真に受け入れるなら、また宗教的な古い実践や規則を脇へのけ、古い宗教的観念を用いて今日の神の言葉を判断するのをやめるなら、そのとき初めてあなたに未来がある。しかし、古い物事に執着し、依然としてそれらを大切にしているなら、あなたが救われることはない。神はこのような人々を一切気にかけない。完全にされたいと心から望んでいるのなら、以前からのあらゆるものを完全に捨て去る決意をしなければならない。たとえ以前になされたことが正しかったとしても、たとえそれが神の働きだったとしても、やはりそれを脇へのけ、執着することをやめられるようにならなければならない。たとえそれが明らかに聖霊の働きであり、聖霊によって直接なされたとしても、今はそれを脇へのけなければならない。それにしがみついてはいけないのだ。これが、神が要求することである。すべては一新されなければならない。自身の働きと言葉において、神が以前にあった古い事柄に言及することはなく、昔の年鑑を掘り下げることもない。神は常に新しく、決して古くない神であり、自身の過去の言葉にさえ執着しない。このことは、神がいかなる規則にも従わないことを示している。そこで、人間であるあなたがいつも過去の物事にしがみつki、捨て去ろうとせず、形式的なやり方でそれらを厳密に適用する一方、神がもはや以前の手段を用いて働いていないのであれば、あなたの言動は破壊的ではないか。あなたは神の敵になってしまったのではないか。それらの古い物事のために自分の一生を破滅させるつもりなのか。それらの古い物事のために、あなたは神の働きを妨害する者となる。あなたがなりたいのは、このような人なのか。こうなることを本当に望まないのであれば、今していることをただちにやめ、引き返して初めからやり直しなさい。神はあなたの過去の奉仕を記憶しない。

神への信仰において、あなたは神に従うべきだ

どうして神を信じるのか。ほとんどの人はこの質問に戸惑う。そのような人は実際の神と天の神について、常に二つのまったく異なる観点をもっている。そのことは、彼らが神を信じるのは神に従うためではなく、何らかの恩恵を被るため、ある

いは災難がもたらす苦しみから逃れるためであることを示している。そのときだけ、彼らは多少従順になる。その従順さは条件付きであり、彼ら個人の将来的な見込みのためであって、彼らに押し付けられたものである。では、あなたはなぜ神を信じるのか。ただ自分の将来の見込みや運命のために神を信じるなら、はなから信じないほうがよい。そのような信仰は自己欺瞞、自己安心、自己讃美である。あなたの信仰が神への従順という基礎の上に築かれたものでないならば、あなたは神に反抗した咎で最終的に懲罰される。自分の信仰において神への従順を求めない者はみな神に反抗する。神は、人々が真理を求め、神の言葉を渴望し、神の言葉を飲み食いし、それを実行に移し、それによって神への従順に達することを求めている。これがあなたの真意ならば、神は必ずやあなたを引き上げ、必ずやあなたに対して恵み深くなる。このことに疑問の余地はないし、変わることもない。あなたの意図が神に従うことではなく、何か他の目的があるならば、あなたのあらゆる言動、すなわち神の前での祈り、さらにはあなたの行動の一つひとつでさえ、それらは神に反抗するものである。あなたは穏やかな話し方と温厚な振る舞いをし、あらゆる行動や表現が正しいものに思われ、神に従う者のように見えるかもしれないが、あなたの意図と神への信仰に関する見解について言えば、あなたが行なうことはどれも神に反しており、悪である。表面上は羊のように従順に見えるものの、心に邪悪な意図を抱いている人々は、羊の皮を被った狼である。このような人は直接神を犯し、神は彼らを一人として容赦しない。聖霊は彼らを一人残らず暴露し、あらゆる偽善者は必ずや聖霊に忌み嫌われ、拒絶されることを万人に示す。心配しなくてもよい。神はそのような人間を一人残らず処理し、一人ひとり処分する。

もしあなたが神の新しい光を受け入れられず、今日神が行なうすべてのことを理解できず、それを求めず、さもなければそれを疑ったり、批判したり、あるいはそれを吟味したり分析したりするなら、あなたには神に従うところがない。いまここに光が現れるとき、依然として昨日の光を大事にし、神の新しい働きに反抗するなら、あなたはただの馬鹿者にすぎず、わざと神に反抗する者の一人である。神に従う秘訣は、新しい光を正しく認識し、それを受け入れて実践できることである。それだけが本当の従順である。神を切望する意志のない者は、進んで神に服従することができず、現状に満足する結果、神に反抗するだけである。人が神に従えないのは、以前来たものにとりつかれているからである。以前来たものは、神についてのありとあらゆる観念と想像を人々に与え、それらが人々の心における神のイメージになってしまったのである。ゆえに、人々が信じているものは彼ら自身の観念であり、彼ら自身の想像の中の標準である。あなたがもし、今日実際の働きを行なっている神を、あなた自身の想像上の神と比較して推し測るなら、あなたの信仰はサタ

ンに由来するものであり、自分の好みに汚されている。神はこのような信仰を望まない。実績がどれだけ立派でも、どれだけ献身的でも、たとえ神の働きのために一生努力を捧げて殉教しようとも、神はこのような信仰をもつ者を誰も認めない。神は彼らにささやかな恵みを授けるだけで、ほんの束の間、彼らにそれを享受させるだけである。このような人は真理を実践することができない。聖霊は彼らの内では働かず、神は彼ら一人ひとりを順に排除する。老若を問わず、自身の信仰において神に従わず、間違った意図をもっている者は、神の働きに反抗してそれを邪魔する者であり、このような人は間違いなく神によって排除される。神への従順の片鱗さえ見られない者、ただ神の名を認め、神の優しさや愛らしさについて多少認識しているだけで、聖霊の歩みに歩調を合わせず、聖霊の現在の働きや言葉に従わない者は、神の恩恵のただ中で生きているにもかかわらず、神のものとはされないし、神によって完全にされることもない。神は人々を、その従順さを通して、神の言葉を飲み食いし、享受することを通して、そして生活における苦しみと精錬を通して完全にする。このような信仰を通してのみ、人々の性質は変化し、そうして初めて人々は神を本当に知ることができる。神の恩恵のただ中で生きること満足せず、積極的に真理を切望して探求し、神のものにされるよう求めることが、意識して神に従うことの意味である。これがまさに神が望んでいる信仰である。神の恩恵を享受するだけの人は、完全にされることも変わることもなく、彼らの従順、敬虔、愛、そして忍耐はすべて表面的である。神の恩恵を享受するだけの人は本当に神を知ることができず、神を知ったとしてもその認識は表面的であり、「神は人を愛する」とか、「神は人に対して憐れみ深い」などと言う。これは人のいのちを表してなどいないし、人が本当に神を知っているとは言えない。神の言葉が人を精錬するとき、あるいは神の試練が人に降りかかるとき、神に従うことができず、それどころか疑い深くなってつまずくなら、その人はほんの少しも従順ではない。彼らには神への信仰に関するたくさんの規則や制限があり、長年にわたる信仰の結果である古い経験があり、聖書に基づくさまざまな教義がある。このような人が神に従うことなどできるだろうか。これらの人たちは人間的なもので一杯なのだから、どうして神に従えるだろうか。彼らの「服従」は個人の好みに従っている。神はこのような従順を望むだろうか。これは神への従順などではなく、教義の遵守であり、自分を満足させて慰めているのである。これが神への従順だとあなたが言うなら、それは神を冒涇しているのではないか。あなたはエジプトのファラオであり、悪を行ない、あからさまに神に反抗する働きに関わっている。あなたがそのように奉仕することを神は望んでいるのか。あなたは急いで悔い改め、自己認識しようと努めたほうがよい。そうできなければ、ただ立ち去るほうがましである。そのほうが、あな

たの言う神への奉仕よりも自分のためになる。妨げたり混乱させたりすることもなく、自分の場所を知って快適に暮らせる。そのほうがよくはないだろうか。それに、神に反抗した咎で懲罰されることもないはずだ。

完全にされた人々への約束

神はどのような道をたどって人を完全にするのだろうか。そこにはどのような側面が含まれているのだろうか。あなたには神によって完全にされる覚悟があるのか。神の裁きと刑罰を受け入れる覚悟があるのか。このような問いについてあなたは何を知っているのか。あなたに語るべき認識がないのなら、このことは、あなたが依然として神の働きを認識せず、聖霊によってまったく啓かれていないことを証明している。そのような人が完全にされるのは不可能である。わずかな恵みを与えられてほんのひととき享受するだけであり、それが長続きすることはない。神の恵みを享受するだけなら、人は神に完全にしてもらうことができない。一部の人たちは、自身の肉が平穏と喜びの中にあり、人生が安楽で逆境や不運がなく、家族全体が調和して暮らし、争いやいさかいがなければ満足し、それは神の祝福だと信じさえする。実を言えば、それは神の恵みにすぎない。あなたがたは、神の恵みを享受するだけで満足してはいけない。このような考え方は非常に低俗である。たとえ神の言葉を毎日読み、日々祈りを捧げ、あなたの霊が大きな喜びを感じ、ひととき穏やかであるとしても、結局のところ、神や神の働きについて語るべき認識はなく、何一つ経験していない。そして神の言葉をどれほど飲み食いしたとしても、あなたの感じるのが霊の平安や喜びだけで、神の言葉は比類なく甘美であり、享受してもし尽くせないとしか感じず、神の言葉について実際の経験が一切なく、神の言葉の現実をまったく欠いているなら、あなたはそのような神への信仰から何を得られるだろうか。神の言葉の本質を生きられないなら、あなたがそれらの言葉を飲み食いして祈ったとしても、それは宗教的な信仰にすぎない。そのような人が神によって完全にされることはできず、神のものとされることもできない。神のものとされる人とは、真理を追い求める人である。神のものとされるのは、人の肉でもなければ、その人に属するものでもなく、人の内にある、神に属する部分である。ゆえに、神は人を完全にするとき、その人の肉ではなく心を完全にするであり、そうすることで、人の心が神のものとなるようにする。つまり、神が人を完全にするのは本質的に、人の心を完全にすることで、その心が神のほうを向き、神を愛するようにさせることである。

人の肉体はみな肉のものである。人の肉を得ることは、神のいかなる目的にも役

立ちはしない。人の肉は必ずや衰え、神からの嗣業や祝福を受け取ることができないものだからである。仮に人の肉が得られ、人の肉だけがこの流れの中にあるとしたら、名目上、人はその流れの中にいることになるが、その心はサタンに属するだろう。そうであれば、人は神を表わせないばかりか、神の重荷になってしまい、ゆえに人を選ぶ神の行為は無意味になるはずだ。神が完全にしようと意図している人たちはみな、神の祝福と嗣業を受け取る。すなわち、そのような人たちは、神が所有するものと神そのものを取り入れるので、それが、彼らが内部に持つものとなる。つまり、神の言葉が彼らに組み入れたすべてのものを所有しているのだ。神という存在が何であれ、あなたがたは、その存在のすべてをまさにそのまま受け入れることができ、そうすることで、真理を生きられる。これが、神によって完全にされ、神のものとされた人である。そのような人だけが、次に挙げる、神が授ける祝福を受け取る資格がある。

1. 神の愛の全部を得ること。
2. 万事において神の旨に沿って行動すること。
3. 神の導きを得て、神の光の中で生き、神の啓示を得ること。
4. 神が愛する姿を地上で生きること。すなわち、ペテロと同じように真に神を愛すること、神のために十字架にかけられ、死んで神の愛に報いるのにふさわしい存在となること、そしてペテロと同じ栄光を受けること。
5. 地上の誰からも愛され、敬われ、称賛されること。
6. 死やハデスの束縛のあらゆる側面を克服すること、サタンに働く機会を与えず、神のものとされていること、新鮮でいきいきとした霊的状态であること、そして疲労を感じないこと。
7. 一生を通じ、あたかも神の栄光の日の到来を目の当たりにした人のように、言語を絶する高揚感や気持ちの高まりを抱くこと。
8. 神とともに栄光を勝ち取ること、神の愛する聖人たちに似た容貌を持つこと。
9. 神が地上で愛するもの、すなわち神の愛する子になること。
10. 姿を変え、神と共に第三の天に昇り、肉を超越すること。

神の祝福を受け継げる人だけが、神によって完全にされ、神のものとされる。あなたは今、何かを獲得してきたのか。神はどの程度まであなたを完全にしてきたのか。神は手当たり次第に人を完全にしない。神が人を完全にするにあたっては条件があり、そこには目に見える明確な結果がある。人が想像するように、神への信仰がある限り、神によって完全にされ、神のものとされ、神の祝福と嗣業を地上で受け取れる、ということではないのだ。そのようなことは極めて難しく、人が姿を変えることについては言うまでもない。現在、あなたがたが主として追求すべきこと

は、万事において神によって完全にされること、あなたがたが向かい合っているすべての人、事柄、物事を通して、神によって完全にされることである。そうすることで、神という存在がさらにあなたがたの中へ取り込まれる。あなたがたはまず、神の嗣業を受け取らなければならない。そうして初めて、神からのより大きな祝福をさらに受け継ぐ資格が得られる。これらはすべて、あなたがたが追求すべきことであり、何よりも先に理解すべきことである。万事において神によって完全にされることを求めれば求めるほど、何事においても神の手を見られるようになり、その結果、様々な観点を通じて、また様々な事柄において、神の言葉の存在に入ること、そして神の言葉の現実に入ることが積極的に求めるようになる。単に罪を犯さない、あるいは観念を抱かない、処世哲学を一切持たない、人間としての意思を持たないといった、消極的な状態に甘んじてはいけぬ。神は多数の方法で人を完全にする。あらゆる事柄に完全にされる可能性が潜んでいるのであって、神は肯定的な面だけでなく、否定的な面においてもあなたを完全にすることができ、結果的にあなたが得るものをより豊富にする。神によって完全にされる好機、神のものとされる機会は毎日ある。そのような経験をしばらくすると、あなたは大きく変わり、それまで知らなかった多くの事柄を自然と理解するようになる。誰かから教えられる必要はなく、神があなたを知らぬ間に啓き、それによってあなたは万事において啓示を受け取り、自分のあらゆる経験に詳しく入るようになる。神はあなたを、左右どちらにもふらつかないように導くはずだ。こうしてあなたは、神によって完全にされる道へと足を踏み入れるのである。

神によって完全にされることは、神の言葉の飲み食いによって完全にされることに限定されない。そのような経験の仕方はあまりにも偏っていて、含まれるものが少なすぎ、人を非常に狭い範囲に閉じ込めるだけだろう。そうであれば、必要な霊の養分が大いに欠けていることになる。あなたがたが神によって完全にされることを望むなら、万事においてどう経験すべきかを学び、どのようなことが我が身に降りかかっても、そこから啓示を得られるようにならなければならない。良いことであれ悪いことであれ、それはあなたに益をもたらさなければならず、あなたを消極的にさせることがあってはならない。いずれにせよ、あなたは神の側に立ちつつ物事を考えられるようになる必要があり、人の観点から分析あるいは検討してはならない（これは、あなたの経験における逸脱と言えよう）。あなたがそのように経験するのであれば、あなたの心はいのちの重荷で一杯になるだろう。あなたは常に神の顔の光の中で生き、実践において容易に逸脱することはない。そのような人の前途には、明るい未来がある。人が神によって完全にされる機会は数多く存在する。そのすべては、あなたがたが神を真に愛する人かどうか、そして神によって完全に

され、神のものとされ、神の祝福と嗣業を受け取る決意があるかどうかにかかっている。決意だけでは十分でなく、多くの認識を持たなければならない。さもなければ、実践においていつも逸脱してしまうだろう。神は、あなたがた一人ひとりを完全にしたいと思っている。現在、大半の人が長きにわたって、神の働きをすでに受け入れてきたものの、彼らは単に神の恵みに浴することだけにとどまり、神が自分にささやかな肉の慰めを与えることしか望まず、より高度な啓示をさらに受け取ることには熱心でない。それは、人の心が依然として、いつも外側の世界に属していることを示している。人の働き、奉仕、そして神を愛する心は、以前ほど不純でないにしても、人の内なる本質と後ろ向きな考え方に関する限り、人は依然として、肉の平安と喜びを絶えず求めるだけで、神が人を完全にする条件と目的が何であるかには関心を持たない。このように、大半の人の生活はいまだ俗悪かつ退廃的であり、ほんの少しも変わっていない。神への信仰を重要な問題とはまったく見なさず、他人のために信仰を持っているかのように、目的もなくふらつきながら、動作を繰り返し、いい加減に乗り切るだけである。万事において神の言葉へ入ることを求め、より豊かな物事をさらに獲得し、そして今日、神の家のより大きな富となり、神の祝福をさらに多く受け取れる人はほとんどいない。万事において神によって完全にされることを求め、地上で神が約束したものを受け取れるなら、また、万事において神に啓かれることを求め、年月が怠惰に過ぎ去るままにしないなら、それこそが、積極的に入るべき理想の道である。そうして初めて、あなたは神によって完全にされる価値と資格のある人間になる。あなたは真に、神によって完全にされることを求める者か。あなたは真に、万事において勤勉な者か。ペテロと同じく、神を愛する心を持っているか。イエスと同じく、神を愛する意志を持っているか。あなたは長年にわたり、イエスへの信仰を持ち続けてきた。では、イエスがどのように神を愛したかを理解しているのか。あなたが信仰しているのは、本当にイエスなのか。あなたは、今日の実践の神を信じている。では、肉にある実践の神が天なる神をどのように愛するかを理解しているのか。あなたは、主イエス・キリストへの信仰を持っている。それは、人類の罪を贖うためにイエスが十字架にかけられたことと、彼の行った奇跡が、広く受け入れられた事実だからである。しかしながら、人の信仰は、イエス・キリストについての認識や真の理解から生じるものではない。あなたはイエスの名前だけを信じ、彼の霊は信じていない。イエスがどのように神を愛したかなど気にも留めないからである。あなたの神への信仰は、あまりにも純朴である。長年にわたるイエスへの信仰にもかかわらず、あなたは神をどう愛すべきかを知らない。このことは、あなたを世界一の愚か者にしてしまわないだろうか。このことは、あなたが長年にわたり、主イエス・キリストという食べ物

を無駄に食べてきたことを証明している。わたしはそのような人を嫌うだけでなく、あなたが崇拝する主イエス・キリストもまたそのような人を嫌うと確信する。一体どのようにして、そのような人が神によって完全にされ得るだろうか。あなたは恥ずかしさのあまり赤面しないのか。恥ずかしく思わないのか。あなたには依然として、あなたの主イエス・キリストに顔を向ける厚かましきがあるのか。あなたがたはみな、わたしが述べたことの意味を理解しているのか。

悪人は必ず罰を受ける

自分自身を見つめ、すべての行いにおいて義を実践しているかどうか、そしてすべての行動が神の監視を受けているかどうかを確かめなさい。これは神を信じる者が物事を行う際の原則である。神を満足させられること、神の世話と保護を受け入れることによって、あなたがたは義であるとされる。神の目から見れば、神の世話と保護、そして神に完全にされることを受け入れ、神のものとされるすべての人が義であり、神はそれらの人を皆かけがえのないものとみなす。神の現在の言葉を受け入れれば受け入れるほど、神の心意を受け取り理解することができるようになり、それによりさらに神の言葉を生き、神の求めを満たすことができるようになる。これがあなたがたに神が委ねる任務であり、あなたがたの誰もがこれを成し遂げることができなければならない。まるで神が変化しない粘土の像でもあるかのように、自分の観念によって神を押し測り限定したり、神を聖書に由来する特性にすっかり限定し、限られた働きの範囲に閉じ込めたりするなら、それは神を断罪したことを証明している。旧約聖書時代のユダヤ人は、神はメシアという名称以外では呼ばれることなどありえず、そしてメシアと呼ばれるものだけが神であるかのように、神を自分たちの心に描いた形の固定した偶像とみなしたために、そしてまた人は神を（命のない）粘土の像であるかのように仕え崇拝したために、彼らは当時のイエスを十字架に張り付け、死刑を宣告した。こうして罪のないイエスは死刑に処されたのである。神はなんの罪もなかったのに、人は神を許そうとせず、神を死刑にすることを強く要求したため、イエスは磔刑に処された。人は神は不変であるといつも信じており、聖書という一冊の書物に基づいて神を定義する。まるで人が神の経営を完全に理解しており、人が神のなす事すべてをその手中に収めているかのようなのである。人々は極度に愚かであり、極度に傲慢で、誰にも誇張の才能がある。神についてのあなたの認識がいかに優れていようとも、わたしは言う。あなたは神を知らず、神に最も敵対する者であり、神を断罪した。神の働きに従い、神に完全にされるための道を歩くことがあなたにはまったくできないからである。神は

なぜ人の行いに決して満足しないのか。それは人が神を知らず、観念を持ちすぎており、人の神についての認識が現実とまったく一致しておらず、それどころか、同じ主題を代わり映えもなく単調に繰り返し、どのような状況でも取り組み方が同じだからである。そのために、今日地上にやってきた神は、再び人間によって十字架に張り付けられる。人類のなんと残酷なことか。共謀と陰謀、お互いからのひったくり合い、名声や富の奪い合い、殺し合い……一体いつ終わるのか。神が語った何十万語もの言葉にもかかわらず、誰一人として目覚めてはいない。人々は自分の家族、息子や娘、職業、将来の見通し、地位、虚飾、金のために、また食べるもの、着るもの、肉体のために行動する。しかし一体、真に神のために行動している者はいのか。神のために行動している者でさえ、神を知っている者は非常に少ない。自身の利害のために行動しない人はどれほどいるのか。自身の地位を守るために他人を抑圧したり排斥したりしない人はどれほどいるのか。だから神は幾度となく無理やり死刑に処され、無数の野蛮な裁判官が神を断罪し、再び十字架に張り付けたのである。真に神のために行動ゆえに義人と呼ばれうる者はどれほどいるのか。

神の前で聖者や義なる者として完全にされるのはそれほど容易なことであろうか。「地上に義なる者はなく、義なる者はこの世にない」という言葉は真実である。あなたがたが神の前に出るとき、自分の着ているもの、自分の言葉と行動のひとつひとつ、考えと意思のひとつひとつ、さらには毎日見る夢について考えなさい。これらはすべて、あなた自身のためのものである。それが真実の状態ではないか。「義」とは、他者に施しを行うことではなく、隣人を自分自身のように愛することでもなく、口論や喧嘩、強奪や盗みをしないということでもない。義とは、神に託された任務を自分の本分とし、神による采配と取り決めとを自分の天与の使命として、時と場所を選ばず、ちょうど主イエスがすべてを行ったように、それらに従うことである。これが神の言う義である。ロトが義と呼ばれることができたのは、神から送られた二人の天使を損得を顧みずに救ったからである。ただし、彼がこの時に行ったことが義と呼ばれうるだけであり、彼を義なる者と呼ぶことはできない。それはあくまで、ロトが神を見ており、二人の娘を天使と引き換えに差し出したからであり、彼の過去の行いすべてが義を表していたわけではない。そのためわたしは、「地上に義なる者はいない」と言う。現在回復の流れにある者の中にも、義と呼ばれうる者はいない。あなたの行為がいかに良いものであっても、いかに神の名を讃えているように見えても、人を殴ることも呪うこともなく、人から盗むことも奪うこともなくとも、それで義なる者と呼ばれることはできない。それは普通の人でも行えることだからである。今ここで重要なのは、あなたが神を知らないということである。今言えるのは、あなたは現在幾ばくかの正常な人間性を有し

ているということだけであり、神が言う義の要素は一切有していない。それゆえ、あなたがすることは何一つ、あなたが神を知っているということを証明できないのである。

以前、神が天国にいたとき、人は神を欺くようなふるまいをした。現在、神は人のもとにおり、すでに何年が経過しているか誰も知らないが、物事を行うのに人はいまだに形ばかりの行いをして神をごまかそうとしている。人間の考えはあまりにも退歩していないか。これはユダも同じであった。イエスが現れる前、ユダは嘘について兄弟姉妹を騙しており、イエスが現れた後も変わることはなかった。ユダはイエスを少しも知ることなく、最後にはイエスを裏切った。これはユダが神を知らなかったからではないのか。もしも今日、いまだに神を知らないなら、あなたがたもユダになる可能性があり、その結果として、二千年前の恵みの時代に起こったイエスの磔の悲劇は再び繰り返されるであろう。信じないのか。これは事実である。現在、大半の人は同じ状況にあり、こう言うのは少し早すぎるかもしれないが、そのような人はみなユダの役割を演じている。わたしは戯言を言っているのではなく、事実に基づいて語っているのであり、人は納得せざるを得ない。多くの人が謙遜なふりをするが、心の中には腐った水たまり、悪臭を放つどぶがあるだけである。現在、教会にはこのような人が多すぎるが、あなたがたはわたしがそれにまったく気づいていないと思っている。今日、わたしの霊がわたしのために決断し、証言する。わたしが何も知らないと思っているのか。あなたがたの心の中の不正な思い、心に秘めている物事をわたしが何も理解していないと思っているのか。神を出し抜くことはそんなに容易か。神を自分の思い通りのやり方で扱ってよいと思っているのか。昔、あなたがたが束縛されるのではないかと心配し、わたしはあなたがたに自由を与え続けたが、人間はわたしが好くしてやっていることがわからず、寸を与えれば尺を取っていった。お互いに尋ねてみなさい。わたしはほとんど一度も誰かを取り扱ったことはなく、誰かを軽く叱責したこともない。しかし人間の動機や観念についてはこの上なく明確に知り抜いている。神が、神自身が立証するその神が愚かだとでも思っているのか。そうであれば、人はあまりに盲目であるとわたしは言う。わたしはあなたを暴くことはしないが、あなたがどこまで墮落し得るか見てみようではないか。あなたの抜け目ない小さな計略があなたを救ってくれるのか、それとも神を愛そうとする最大限の努力があなたを救えるのかを見てみようではないか。今日、わたしはあなたを非難しない。神の時が到来するのを待ち、神があなたにどのような報いを与えるか見ようではないか。今あなたと無駄なお喋りをしている時間はなく、わたしのもっと大事な仕事をあなただけのために遅らせる気もない。あなたのようなうじ虫には、神が取り扱うのに必要な時間がかかるだけの

値打ちはない。だからただ、あなたがどれだけ自堕落になれるかを見てみようではないか。このような人は神を認識することを少しも求めず、神への愛も少しも持ち合わせていないのに、神に義と呼ばれることを望む。これは笑い話ではないのか。少数の人が実際に正直なので、わたしは人間にいのちを与え続けることにだけ集中していく。今日、わたしは今すべきことをするだけだが、将来は、それぞれがしてきたことに応じて各人に報いをもたらす。これで言うべきことはすべて言った。これがまさにわたしの行う働きだからである。わたしは行うべきことだけを行い、行うべきでないことは行わない。しかし、あなたがたがさらに時間をかけて熟考することを望む。あなたの神の認識のうち、実際にどれほどが正しいのか。あなたは神を再び十字架に張り付けた者なのか。わたしの最後の言葉はこれである。「神を十字架に付ける者に災いあれ」。

神の心になうように仕えるには

神を信じる時、いったいどのようにして神に仕えるべきか。神に仕える人はどのような条件を満たし、どのような真理を理解しなければならないのか。また、あなたがたは奉仕をする中でどこへ逸脱するだろうか。これらすべてについて、あなたがたは答えを知らなければならない。これらの事柄は、あなたがたがどのように神を信じるか、聖霊が導く道をどのように歩むか、また、あらゆる事においてどのように神の采配に服従し、それにより、あなたがたの内になされる神の働きの一つひとつの歩みを認識できるようになることに関係している。そこに到達すると、あなたがたは神への信仰とは何であるのか、いかにして神を正しく信じるべきか、そして、神の心になって行動するためには何をすべきかということを充分に理解できるようになる。それによって、あなたがたはすっかり完全に神の働きに従うようになり、ひとつの不満もなく、神の働きを裁くことも、分析することもせず、ましてや研究することなど全くなくなる。そういうわけで、あなたがたは皆死に至るまで神に従うことができるようになり、神があなたがたを羊のように引き連れ、屠ることに身をまかせるようになる。そうすれば、皆1990年代のペテロになることができ、たとえ十字架上においても、一言の不満もこぼさず、神を愛し尽くすることができるようになる。その時初めて、あなたがたは1990年代のペテロとして生きることができるようになる。

決心すれば誰でも神に仕えることはできるが、神の心にあらん限りの注意を払い、神の心を理解する人々でなければ神に仕える資格や権利はない。わたしは、あなたがたの間で発見したことがある。多くの人は、神のために熱心に福音を広め、

神のために各地を巡回し、自らを神のために費やし、神のために物事を諦めるなどしていれば、それが神に仕えることだと信じている。より多くの宗教的な人々は、神に仕えることは、聖書を抱えて走り回り、天の国の福音を広め、罪を悔い改め告白させることによって人々を救うことを意味すると信じている。また、神に仕えることは、高度な学問を修め神学校で訓練を受けた後に礼拝堂で説教し、聖書を読んで人々に教えることだと考えている宗教官僚が大勢いる。さらに、貧しい地域には、神に仕えるということは兄弟姉妹のもとで病人を癒したり、悪霊を追い払ったり、あるいは兄弟姉妹のために祈り仕えることだと信じている人々もいる。あなたがたの中には、神に仕えることは、神の言葉を飲み食いし、毎日神に祈り、また各地の教会を訪れ働きを為すことだと信じている人がたくさんいる。また、神に仕えるということは結婚することも家族をもつこともなく、自分の存在すべてをひたすら神に捧げることだと信じている兄弟姉妹もいる。しかし、神に仕えることが実際何を意味するのかを知っている人はほとんどいない。神に仕える人は空にある星の数ほど多いが、神に直接仕えることができる人の数、神の旨に沿って仕えることができる人の数は微々たるもので、極めて少ない。なぜわたしはこう言うのか。わたしがこんなことを言うのは、あなたがたが「神への奉仕」という言葉の本質を理解していないからであり、神の心になうように仕えるにはどうすればよいのか、ほとんどわかっていないからである。人々は一刻も早く、神に対するどのような奉仕が神の旨になうのかを理解しなければならない。

あなたがたが神の心になうように仕えたいと望むならば、どのような人が神を喜ばせ、どのような人が神に忌み嫌われるのか、どのような人が神によって完全にされ、どのような人に神に仕える資格があるのかをまず理解しなければならない。これはあなたがたが身に着けておかなければならない最小限の認識である。その上、あなたがたは神の働きの目的と、神が今ここで行う働きを知るべきである。これを理解した後、神の言葉の導きを通して、あなたがたはまず入り、まず神の任務を受けるべきである。あなたがたが神の言葉を実際に経験し、本当に神の働きを知れば、あなたがたには神に仕える資格がある。そして、あなたがたが神に仕える時、神はあなたがたの霊の目を開き、あなたがたが神の働きをより深く理解し、いっそう明確に見ることができるようにする。この現実に入ると、あなたの経験はより深く、現実的になる。そのような経験をした人は皆、諸教会を巡り歩き、兄弟姉妹に必要なものを提供することができるようになり、その結果、あなたがたは、お互いの長所を利用し合い自分の欠点を補い、霊においてより豊かな認識を獲得する。この結果を達成して初めてあなたがたは神の心になうように仕えることができ、奉仕する過程で神によって完全にされる。

神に仕える人は、神の知己でなければならず、神を喜ばせ、神に最大限忠実でなければならない。内密に行動しようと、公然と行動しようと、神の前で神を喜ばすことができ、神の前ではしっかり立つことができる。また、他の人々があなたをどのように扱おうとも、いつも歩むべき道を歩み、神の重荷に一心に注意を払う。こういう人だけが神の知己である。神の知己が直接神に仕えることができるのは、彼らが神から重大な任務や重荷を与えられているからである。彼らは神の心を自分の心とし、神の重荷を自分の重荷とすることができ、自分自身の将来の展望など一切考慮しない。将来の展望が何もなく、何も得られそうにない時でさえ、彼らは常に愛に溢れる心で神を信じる。だから、このような人は神の知己なのである。神の知己は、神の心を知る人でもある。神の心を知る人だけが、神の絶え間ない憂慮や神の考えを共有することができる。肉体は痛み弱くとも、彼らは痛みに耐え、神を満足させるために、自分の愛するものを断念することができる。神はそのような人にさらなる重荷を与え、神がしたいと望むことはこのような人の証しの中に示される。従って、このような人は神を喜ばせ、神自身の心に適った神の僕である。そして、このような人だけが神と共に統治することができる。あなたが本当に神の知己になった時が、まさに神と共に統治する時なのである。

イエスが神の任務、すなわち全人類を贖う働きを完了することができたのは、イエスが神の心に全ての注意を払い、自分自身のためには一切計画を立てたり準備をしたりしなかったからである。だからイエスも神の知己であり、また神自身であった。それはあなたがたが皆とてもよく理解しているとおりである。（実際、イエスは神によって証しされた神自身であった。わたしがこのことをここで述べるのは、イエスに関する事実によりこの問題を解説するためである。）イエスは神の経営（救いの）計画を全ての中心に置くことができ、いつも天の父に祈り、天の父の心を求めた。イエスは祈り、次のように語った。「父なる神よ。あなたの心にかなうとおりに成し遂げてください。わたしの望みどおりにではなく、あなたの計画どおりに行なってください。人は弱いかもしれませんが、あなたが人のことを気遣うべきでしょうか。あなたの手の中では蟻のような人間が、どうしてあなたの配慮に価することがありえるでしょうか。わたしが心の中で願うのは、あなたの心を成就することだけです。わたしの望みは、あなたがわたしの内で行う業を、あなたが望むとおりに行えることです」。エルサレムへ向かう途上、イエスは苦悶して、あたかもナイフが心に捻じ込まれているかのように感じたが、その言葉を取り消す思いは微塵もなかった。いつも強い力がイエスが十字架にかけられる場所までイエスに付き添っていた。最終的に、イエスは十字架に釘付けにされ、罪深い肉と同様になり、人類を贖う働きを完了した。イエスは死と黄泉の束縛から自由になった。イエ

スの前に、死も、地獄もハデスも力を失い、イエスに打ち負かされた。イエスは三十三年生きたが、生涯を通して彼はいつも全力を尽くし、その時の神の働きに従って神の心を満たし、決して自分の個人的損得は考慮せず、いつも父なる神の心のことを思った。そのため、イエスが洗礼を受けた後、神は「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言ったのである。神の前におけるイエスの神への奉仕は神の心にかなうものだったので、神はイエスの肩に全人類を贖うという大きな重荷を負わせ、それをイエスに成し遂げさせた。そして、イエスにはこの重要な任務を完成する資格と権限があった。生涯を通じて、イエスは神のために計り知れないほどの苦しみに耐え、幾度となくサタンの試みにあったが、決して落胆することはなかった。神がイエスにこれほど重大な任務を課したのはイエスを信頼し、愛していたからである。従って、神は自ら「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言ったのである。当時、イエスしかこの任務を果たすことができず、これは恵みの時代における全人類を贖うという神の働きの完成の実際的な一側面であった。

もしあなたがたが、イエスのように神の重荷に一心に注意を払い、自分の肉に背を向けることができるなら、神は重要な任務をあなたがたに委ね、あなたがたは神に仕えるための必要条件を満たすこととなる。そのような状況の下でのみ、あなたがたは自分が神の旨を行い、神の任務を果たしていると思い切って言うことができ、その時初めてあなたがたは本当に神に仕えていると言い切れる。イエスの例と比較して、あなたは自分が神の知己だと思い切って言えるだろうか。神の旨を行なっていると言い切れるだろうか。神に本当に仕えていると言い切って言えるだろうか。今日、あなたは神にいかに仕えるかを理解していないのに、それでも自分が神の知己だとあえて言うつもりか。もし神に仕えていると言うなら、神を冒瀆していることにならないであろうか。よく考えなさい。あなたは神に仕えているのか、それとも自分自身に仕えているのか。あなたはサタンに仕えているのに、頑固に神に仕えていると言い張る。そうすることで、神を冒瀆していないであろうか。多くの人がわたしに隠れて地位の恩恵をむやみに欲しがり、食べ物をもさぼり食い、眠り呆け、思うことは肉の思いばかりで、肉の出口がないことをいつも恐れている。彼らは教会で正しい役割を果たさず、教会に居候しているか、あるいはわたしの言葉で兄弟姉妹を訓戒し、権威ある立場から他人に対して威張っている。これらの人々は神の旨を行なっていると言い張って、自分は神の知己だといつも言う。これはばかばかしくないであろうか。あなたに正しい意図があっても、神の旨に沿って仕えることができなければ、あなたは愚かなのだ。しかし意図が正しくないのに、それでもまだ神に仕えていると言うなら、あなたは神に背く人であり、神から罰を

受けるべきである。わたしはそのような人にはまったく同情しない。彼らは神の家に居候し、いつも肉の安逸をやたらに求め、神の益となることは全く考慮しない。彼らはいつも自分たちに益になるものを求め、神の心には何の注意も払わない。何をする際にも神の霊による吟味を受け入れない。彼らはいつも兄弟姉妹を操り欺いている。彼らは二心の者で、ブドウ畑の狐のように、いつもブドウを盗み、ブドウ畑を踏み荒らしている。そのような人々が神の知己でありえるであろうか。神の祝福を受けるにふさわしいであろうか。あなたは自分のいのちのためにも教会のためにも負担を負わないのに、神の任務を受けるのにふさわしいであろうか。あなたのような人を誰があえて信頼するというのか。あなたがこのように仕えるなら、神はあえて大きな任務をあなたに託すだろうか。そうすれば、働きに遅れが生じるのではないか。

わたしがこう言うのは、神の心になんて仕えるためには、どのような条件を満たさなければならないかをあなたがたがわかるようにである。あなたがたが心を神に捧げなければ、あなたがたがイエスのように神の心に一心に注意を払わなければ、あなたがたは神に信頼されることはできないし、最終的には神の裁きを受けることになる。おそらく今日、あなたは神に仕える際、神を欺く意図を常に抱え、おざなりなやり方で神と接している。要するに、他の一切のことはさておき、あなたが神をだますと、情け容赦ない裁きがあなたに下される。あなたがたは神に仕えるための正しい道筋にちょうど入ったことを活かして、二心の忠誠ではなく、まず神に心を委ねるべきである。神の前であれ、他の人々の前であれ、あなたの心はいつも神の方に向いているべきであり、あなたはイエスが愛したように神を愛する決心をすべきである。そうすれば、あなたが神の心になんた神の僕となれるように、神はあなたを完全にする。あなたが本当に神に完全にされることを望むなら、また、神の心になんうように仕えることを望むなら、神への信仰に関するこれまでの考え方を変え、これまでの仕え方を変えるべきである。そうすれば神に完全にされるあなたの部分は次第に大きくなる。このように、神はあなたを見捨てず、ペテロのように、あなたは神を愛する人々の先頭に立つ。あなたが悔い改めないままでいるなら、ユダと同じ最後を迎えることになる。これは神を信じるすべての人が理解すべきことである。

神が人間を用いることについて

聖霊から特別な指示と導きを与えられている人を除けば、自立して生きられる人間は一人もいない。なぜなら人間には、神に用いられている人々の働きと牧養が必要だからである。そのため神は各時代に様々な人を起こし、神の働きのために教会

を牧養するという仕事に没頭させる。つまり神の働きは、神が好ましく思い、神が認める人々を通じてなされなければならないのである。聖霊が働きを行なうには、そうした人々の中にある、用いるのに相応しい部分を使う必要があり、彼らは聖霊によって完全にされることで、神に用いられるのに適した者となる。人間はあまりにも理解力に欠けているため、神が用いる人々によって牧養されなければならない。それは神がモーセを用いたのと同じことである。当時、神は用いるのに適した多くのものをモーセの中に見出し、それを用いてその段階の働きを行なった。この段階において、神は人を用いるとともに、その人のうち、聖霊が働きに利用できる部分を活用する。また、聖霊はその人を指導すると同時に、用いることのできない残りの部分を完全にする。

神によって用いられる人が行なう働きは、キリストや聖霊の働きに協力するためのものである。その人は人間の中で神によって起こされた者であり、神の選民を残らず率いるために存在しており、また人間による協力の働きを行なうよう神に起こされた者でもある。このような、人間による協力の働きを行なえる人を用いることで、人間に対する神の要求と、聖霊が人間の中で行なわねばならない働きが、その人を通じてさらに多く実現される。別の言い方をすれば、神がその人を用いる目的は、神に従う者全員が神の旨をよりよく理解し、神の要求をより多く達成できるようにすることなのだ。人々は神の言葉や神の旨を直接理解することができないので、神はそうした働きを行なわせるために用いる人を起こしたのである。神に用いられるこの人は、神が人々を導く際の媒体とも、神と人との意思疎通を図る「翻訳者」とも言える。そのためこうした人は、神の家で働く者たちや神の使徒である者たちとは異なる。こうした人も彼らと同様、神に奉仕する人だと言えるものの、その働きの本質と神に用いられる背景において、他の働き手や使徒とは大きく異なる。その働きの本質と神に用いられる背景について言えば、神に用いられる人は神によって起こされ、神の働きのために神によって用意され、神自身の働きに協力する。その人に代わってその仕事を行なえる者は決していないだろう。それが、神性の働きとともに欠くことのできない人間の協力である。一方、他の働き手や使徒が行なう働きは、教会に関するその時々を取り決めについて、その多くの側面を伝えて実行するもの、さもなければ教会生活を維持するためのちょっとした単純ないのちの施しの働きである。そうした働き手や使徒は神に任命されるのではなく、ましてや聖霊に用いられる者と呼ぶことはできない。彼らは教会の中から選ばれ、一定期間の訓練を受けて養成された後、適した者が残され、適していない者は元いた場所に帰される。こうした人々は教会の中から選ばれるため、中にはリーダーになるとその本性を現わす者もあり、様々な悪事を働いて最終的に淘汰される者すらい

る。一方、神に用いられる人は神によって用意された人であり、ある種の素質を備え、人間性を持ち合わせている。その人はあらかじめ聖霊によって用意され、完全にされており、ひとえに聖霊によって導かれ、特にその働きについては聖霊から指示と命令を受ける。その結果、神の選民を導く道から逸れることは一切ない。なぜなら神は自らの働きに必ずや責任をもち、常に自らの働きを行なっているからである。

新時代の戒め

神の働きを経験する中で、あなたがたは神の言葉をじっくり読み、真理を備えなければならない。しかし、あなたがたが何をしたいのか、どのようにそれをしたいのかについて言えば、あなたがたの熱心な祈りや嘆願は不要であり、実のところそれらは役に立たない。しかし現在、あなたがたがまさに今直面している問題は、神の働きをどう経験すべきかわからず、かなりの消極性を自分の中に抱えているということである。あなたがたは数多くの教義を知っているが、現実はさほどない。それは間違っているしるしではないのか。あなたがた、つまりこの集団には、多くの間違いが見て取れる。今日、あなたがたは「効力者」といった試練に達することはできないし、神の言葉に関連するその他の試練や精錬を想像することも、達成することもできない。あなたがたは実践すべき多くのことを忠実に守らなければならない。つまり、人は自分の尽くすべき多くの本分を遵守しなければならないということである。これが、人が遵守すべきこと、人が実行すべきことである。聖霊によってなされるべきことは、聖霊にまかせなさい。そこに人間の介入する余地はない。人間は、人間によってなされるべきことを遵守すべきであり、そこに聖霊との関係はない。これがまさに人のなすべきことであり、それは旧約の律法を守るのと同じように、戒めとして遵守すべきなのである。今は律法の時代ではないが、律法の時代に語られた言葉と同じ種類の遵守すべき言葉が、依然として数多く存在する。それらの言葉は、ただ聖霊による感動に頼ることで実行されるのではなく、むしろそれらは、人間が忠実に守るべきことである。例えば、実際の神の働きを批判してはならない。神によって証しされる者に反抗してはならない。神の前では、自分の立場をわきまえ、自堕落であってはならない。あなたは口を慎まなければならない。あなたの言動は神によって証しされている者の采配に従うものでなければならない。あなたは神の証しを敬い畏れなければならない。神の働きと神の口から出る言葉を見無視してはならない。神の発する言葉の口調と目的を真似てはならない。外から見て、神が証しする者に明らかに逆らうことは一切してはならない。そしてその他のことも。これらは各人が遵守すべきことである。各時代において、神は律法に似

た、人間が遵守しなければならない多くの規則を定める。これを通して、神は人の性質を拘束し、人の誠実さを見極める。例えば、「あなたの父と母を敬え」という旧約聖書の時代の言葉を考えなさい。この言葉は今日では当てはまらない。当時、この言葉は、単に人間の外面的な性質の一部を拘束していただけであり、神に対する人間の信仰の誠実さを示すために使われ、神を信じる者の印だった。今は神の国の時代であるが、人が遵守しなければならない規則はいまだ多くある。過去の規則は適用できず、現在は人が実行するのに適切な実践がさらにたくさんあり、それらは不可欠である。それらに聖霊の働きは含まれず、人間によってなされなければならない。

恵みの時代、律法の時代の実践の多くは、当時の働きにおいて特に効果がなかったために廃止された。それらが廃止された後、その時代に適した数多くの実践が定められ、今日の多数の規則になっている。今日の神が到来したとき、これらの規則は取り除かれ、それらを遵守することはもはや求められず、今日の働きに適した多くの実践が定められた。今日、これらの実践は規則ではなく、成果を挙げることを目的としており、今日に適したものである——明日、それらはおそらく規則になるだろう。要するに、あなたは今日の働きにとって有益なものを忠実に守るべきなのである。明日のことは気にしなくてもよい。今日のことは今日のためになされるのだから。明日が来るとき、あなたが実行を求められるであろう、もっとよい実践があるのかもしれない——しかし、あまりそれに注意を払ってはならない。むしろ、神に背かないよう今日遵守すべきことを遵守しなさい。今日、人が遵守すべきことについて、次のことよりも重要なことはない。目の前にいる神を騙したり、神から何かを隠したりしようとして試みてはならない。あなたの前にいる神の前で、みだらなことや傲慢なことを言うてはならない。神の信頼を得ようとして、あなたの目の前の神を甘言やたくみな話で欺いてはならない。神の前で不遜な振る舞いをしてはならない。あなたは神の口から出るすべての言葉に従うべきであり、それに対して抵抗したり、逆らったり、反論したりしてはならない。神の口から出る言葉を自分勝手に解釈してはならない。悪い者の偽りの計略に陥らないよう、口を慎まなければならない。神があなたのために定めた境界を超えないよう、自分の歩みに注意しなければならない。その境界を超えるなら、あなたは神の立場に立ち、自惚れた大げさな言葉を話すことになり、その結果神に忌み嫌われる。神の口から語られた言葉を軽率に広めてはならない。さもないと、他人があなたをあざけり、悪魔が嘲笑するだろう。今日の神の働きのすべてに従わなければならない。たとえ理解できなくても、それを批判してはならない。あなたにできるのは探求と交わりだけである。誰も神の本来の地位を超えてはならない。あなたにできるのは、人間としての立場

から、今日の神に奉仕することだけである。人間としての立場から今日の神を教えるのではない——そうすることは見当違いである。誰も、神によって証しされている者の地位に立ってはならない。自身の言葉、行動、奥底の思いにおいて、人間としての立場に立ちなさい。これは忠実に守るべきことであり、人間の責任であり、誰もそれを変更してはならない。そうしようと試みるのは神の行政命令に背くことである。これはすべての人が覚えておくべきことである。

神が長きにわたって語り、声を発してきたため、人は神の言葉を読んで暗記することを第一の勤めと見なすようになった。誰も実践することに注意を向けず、守るべきことさえ守らない。そのせいで、あなたがたの奉仕に多くの困難と問題が生じている。神の言葉を実践するのに先立ち、忠実に守るべきことを守らなければ、あなたは神に忌み嫌われ、捨てられる者のひとりである。これらの実践を遵守する際、あなたは真剣かつ誠実であらねばならない。それらを足かせと思わず、戒めとして守るべきである。どのような成果を挙げるべきかということは、今は気にしてはならない。要するに、聖霊はそうように働きを行なうのであり、それに背く者は誰であれ必ずや罰せられる。聖霊に感情はなく、あなたの現在の理解など気に留めない。あなたが今日神に背くなら、神はあなたを罰する。神の「管轄内」で背けば、神はあなたを容赦しない。神は、あなたがどれほど真剣にイエスの言葉を守っているかなど気にしない。あなたが神による今日の戒めを破るなら、神はあなたを罰し、死罪に処す。あなたがそれらを守らないことなど許されるだろうか。あなたは守らなければならない——たとえそれが多少の痛みを受けることを意味しても。いかなる宗教、各界、国家、あるいは教派であろうと、将来は誰もがこれらの実践を遵守しなければならない。誰もそれを免れることはなく、一人として容赦されない。と言うのも、聖霊が今日行なうのはそうしたことであり、誰もそれらに背いてはならないからである。それらは大したことではないが、復活して天に昇ったイエスによって人のために定められた戒めであって、各人がそれを行なわなければならない。イエスの定義によれば、あなたを義とするか罪とするかは、あなたの今日の神に対する態度によると、「道…… (7)」に記されていないだろうか。誰もこの点を見逃してはならない。律法の時代、パリサイ人たちは先祖代々神を信じていたが、恵みの時代が到来しても、イエスを知らず、イエスに反抗した。したがって、彼らが行なったことはすべて無駄になり、神は彼らの行ないを受け入れなかった。このことを見抜けるなら、あなたは容易に罪を犯さないだろう。おそらく多くの人たちが、自分を神と比較してきただろうが、神に逆らうとき、どんな味がするだろうか。それは苦いのか、あるいは甘いのか。あなたは、知らないふりをしてはならないということを心得るべきである。おそらく、心の中でいまだ納得していない人

もいるだろうが、試してみるようあなたに勧める——どんな味がするのか確かめてみなさい。そうすることで、多くの人がいつも疑わないで済むのである。多くの人が神の言葉を読みながらも、心の中では密かに神に逆らっている。そのように神に逆らったあと、あなたはナイフで胸がえぐられるように感じないだろうか。それが家庭の不和でないとしても、身体の不調、または息子や娘たちに関する悩みではないだろうか。たとえあなたの肉体が死を免れたとしても、神はあなたを決して手放さない。あなたはそれを、そこまで単純なことだと思っているのか。特にこれは、神に近い多くの者たちが注意すべきことである。時が経つにつれ、あなたはこのことを忘れ、いつの間にか誘惑に陥り、すべてのことに無頓着になるだろう。そしてそれは、あなたが罪を犯すきっかけになるだろう。これは些細なことだと、あなたには思えるだろうか。そうしたことを立派に行なえば、あなたには完全にされる機会がある——神の前に出て、神自身の口から導きを受ける機会があるのだ。もしもあなたが不注意なら、あなたは問題にぶつかるだろう——あなたは神に対して不遜になり、言動がだらしなくなり、遅かれ早かれ強風と巨大な波にさらわれるだろう。あなたがたの一人ひとりが、これらの戒めを心に留めるべきである。それらに違反するならば、神によって証しされている者があなたを断罪することはないにせよ、神の霊はあなたとの関わりを終わらせ、あなたを容赦しない。あなたは、自分が神に背いた結果を背負えるのか。そういうわけで、神が何を言おうと、あなたは神の言葉を実践し、あらゆる手段でそれらを遵守しなければならない。これは決して容易なことではない。

千年神の国は訪れた

神がこの一団において成し遂げようとしている働きは何か、あなたがたは目の当たりにしただろうか。千年神の国にあってもなお、人々は神の発する言葉に従い続けなければならない、また将来においても、神の発する言葉はカナンの良き地で人の生活を直接導くだろうと、かつて神は言った。モーセが荒野にいたとき、神は直接彼に指示を与え、語りかけた。神は天から人々に食べ物と水とマナを送り、それらを享受させた。そして今日も、神はやはり人々に食べ物や飲み物を送って享受させ、人々を罰するため自ら呪いをかけてきた。このように、神の働きの各段階は、神が自ら実行する。今日、人々は事が発生するのを求め、しるしや奇跡を求めているが、そのような人々はすべて捨て去られる可能性がある。神の働きがますます実践的になっているからである。神が天から降りてきたことを知る人は誰もおらず、神が天から食べ物や栄養物を与えてきたことにも人々はまだ気づいていない。しか

し、神は実際に存在するのであり、人々が想像する千年神の国の熱を帯びた場面もまた、神が自ら発する言葉である。これは事実であり、これだけが神とともに地上において支配することと呼ばれる。地上における神との支配は肉を指す。肉でないものは地上に存在しないので、第三の天に至ろうとするすべての人の努力は無駄になる。いつか全宇宙が神に立ち返るとき、全宇宙における神の働きの中心は神の発する言葉に従うだろう。他の場所では、ある人は電話で、ある人は飛行機に乗って、ある人は船で海を渡って、またある人はレーザーを使って、神の発する言葉を受け取るだろう。誰もがあこがれ、渴望し、みな神に近づき、神の前に集い、そして神を礼拝する。そのすべてが神の業なのである。覚えておきなさい。神がどこか別の場所で新しく始めることは決してない。神はこの事実を成し遂げる。彼は全宇宙のすべての人を自身の前に出させ、地上の神を礼拝させる。他の場所での神の仕事は終わり、人々は真の道を求めなければならなくなる。それはヨセフのようだ。誰もが食べ物を求めて彼のもとを訪れ、頭を垂れた。彼が食べ物を持っていたからである。飢饉を避けるために、人々は真の道を求めることを余儀なくされる。宗教界全体が深刻な飢餓に苦しみ、今日の神のみが、人が享受するために提供される、枯れることのない生ける水の泉であり、人々は彼のもとに来て彼を頼る。その時、神の業が明らかにされ、神は栄光を得る。宇宙の至るところにいるすべての人が、この目立つ訳でもない「人間」を礼拝する。これは神の栄光の日ではないだろうか。いつか、老いた牧師たちは生ける水の泉から、水を求めて電報を送ることだろう。彼らは年老いているが、軽蔑しているこの人を崇めに来る。彼らは自身の口で彼を認め、心で彼を信頼する。これはしるしと奇跡ではないのか。神の国全体が喜ぶ時は、神の栄光の日であり、あなたがたのもとに来て神のよき知らせを受け取る者はみな、神によって祝福され、そうした国々と民は神によって祝福され、神の気遣いを受ける。将来の方向性は次のようになる。神の口から発せられた言葉を得る者には、地上において歩むべき道があり、ビジネスマンや科学者であれ、あるいは教育者や実業家であれ、神の言葉のない人は、一步進むことさえ難しく、彼らは真の道を求めることを余儀なくされる。「真理とともに世界中を歩む。真理がなければ、どこへも至ることができない」とはこのことを言うのである。事実是这样である。神は道（つまり神の言葉のすべて）で全宇宙を指揮し、人類を治めて征服する。人は常に、神による働きの方法が大きく転換することを望んでいる。率直に言えば、神が人を支配するのは言葉を通してであり、あなたは望むと望まざるとにかかわらず、神の言うことをしなければならない。これは客観的な事実であり、すべてのものはこれに従わなければならず、避けることのできない、万人に知られた事実である。

聖霊は人々に感覚を与える。神の言葉を読んだ後、人々は心の中で安定と安らぎを感じ、一方で神の言葉を得ない人は虚しさを感じる。これが神の言葉の力である。人々はそれらを読まねばならず、読み終わると糧を施され、それなしにはいられなくなる。それはアヘンを摂取するようなものである。人に力を与え、なくなると人はそれに強く引きつけられ、力を失う。これが今日の人々の傾向である。神の言葉を読むことは人々に力を与える。それらを読まなければ物憂げになるが、読後は直ちに「病床」から立ち上がる。これが、神の言葉が地上で力をふるい、神が地上で支配するということである。一部の人は立ち去ることを望んでいるか、あるいは神の働きにうんざりしている。それでも彼らが神の言葉から自分を切り離すことはできない。人々はいかに弱っても、神の言葉によって生きなくてはならず、どんなに反抗的であっても、あえて神の言葉から離れようとはしない。神の言葉がその力を真に示すときは、神が支配し、権力を行使するときであり、このようにして神は働きを行う。結局のところこれが、神が働きを行う手段であり、誰もそれを離れることはできない。神の言葉は無数の家庭に広まり、万人に知られるようになり、そのとき初めて、神の働きが全宇宙に広まる。つまり、神の働きを全宇宙に広めるには、神の言葉が広められなければならない。神の栄光の日、神の言葉はその力と権威を示す。太古の昔から今日に至る神の言葉の一つひとつが成就し、実現する。このようにして、栄光は地上で神のものとなる。つまり、神の言葉が地上で君臨するのである。悪しき者はみな、神の口から語られる言葉によって罰せられ、義なる者はみな、神の口から語られる言葉によって祝福され、すべては神の口から語られる言葉によって確立され、成し遂げられる。また、神はいかなるしるしや不思議も示さない。すべては言葉によって成し遂げられ、言葉が事実を生み出す。老若男女問わず、地上にいるすべての人が神の言葉を称え、あらゆる人が神の言葉の下に服従する。神の言葉は肉において現れ、鮮明で生き生きとしたそれらの言葉を、人々が地上で見られるようにする。これが、言葉が肉になるということである。神は主に、「言葉が肉になる」という事実を成し遂げるために地上に来た。つまり神は、自身の言葉が肉から発せられるよう来たのである（神の声が直接天から発せられた旧約のモーセの時代とは異なる）。その後、神のすべての言葉が千年神の国の時代に成就し、人の目に見える事実になり、少しの違いもなく、おのの目の目で見ることになる。これが、神の受肉が持つ至高の意義である。つまり霊の働きは、肉を通し、言葉を通して成し遂げられる。これが「言葉が肉になる」および「言葉の肉における出現」の真の意味である。神だけが霊の意志を語ることができ、肉における神のみが霊に代わって語ることができる。神の言葉は受肉した神において明らかにされ、他のすべての人はそれらによって導かれる。例外は誰一人おらず、みなこの

範囲内にいる。これらの言葉からのみ、人々は次のことを認識できる。このようにして獲得しない者たちが、自分は天から発せられた言葉を得られると思っているのであれば、それは白昼夢を見ているのである。これが、神の受肉した肉体において権威であり、すべての人を信じさせ、完全に納得させる。最も優れた専門家や宗教界の牧師でさえ、これらの言葉を話すことはできない。彼らはみな、それらに従わねばならず、誰も新しく始めることはできない。神は言葉を用いて宇宙を征服する。受肉した肉体によってではなく、受肉した神の口から発せられた言葉を用いることで、全宇宙にいるすべての人を征服する。これこそが、言葉が肉となるということであり、これこそが、肉における言葉の出現である。おそらく人間には、神がさほど多くの働きを為していないように見えるかもしれないが、神が言葉を発するだけで、人々は完全に納得し、驚嘆する。事実がなければ、人々はわめき散らし、神の言葉があれば、彼らは沈黙する。神は必ずやこの事実を成し遂げる。これこそが、つまり言葉の地上への到来を成し遂げることが、神の長年にわたる計画だからである。実際、わたしが説明する必要はない。地上に千年神の国が到来したということは、地上に神の言葉が到来したということである。天から新しいエルサレムが降るのは、神の言葉の到来であり、神の言葉が人の中で生き、人間のあらゆる行動や内奥の考えに伴うことである。これはまた、神が成し遂げる事実であり、千年神の国の美しさである。これが神によって定められた計画である。言葉は千年にわたって地上に現れ、神のすべての業を明らかにし、地上における神のすべての働きを完了させ、その後人類のこの段階は終わりを迎える。

実際の神は神自身であることを知るべきである

実際の神についてあなたが知るべきことは何だろうか。実際の神自身は、霊、人、そして言葉から成り立っており、これが実際の神自身の本当の意味である。あなたがこの人だけを知っていて——つまり、彼の習慣と性格だけを知っていて——霊の働き、あるいは、霊が肉において何をするのかを知らなければ、また霊と言葉にしか注意を払わず、霊の前で祈るだけで、実際の神における神の霊の働きを知らなければ、それは、あなたがまだ実際の神を知らない証拠である。実際の神を知ることには、その言葉を知り、経験すること、聖霊の働きの規則と原則を理解すること、そして、神の霊が肉においてどのように働きを行うかを把握することが含まれる。そこにはさらに、肉における神のあらゆる行いは聖霊によって支配されており、彼が語る言葉は霊の直接的な表現であると知ることにも含まれている。したがって、実際の神を知ることが、神が人間性において、また神性において、いかに働き

を行うかを知る上で何より重要である。そのことは、すべての人が関係している霊の表現というものにつながってゆく。

霊の表現の各側面はどういったものか。神は人間性において働くこともあれば、神性において働くこともある。しかし、どちらの場合も霊が支配している。したがって、いかなる霊が人の内にあるろうとも、外面の表現は次のごとしである。霊は普通に働くが、霊による指揮には二つの部分がある。その一つは人間性における働きであり、もう一つは神性を通しての働きである。あなたはこのことをはっきり知らねばならない。霊の働きは状況に応じて変化する。人間性による働きが必要な場合、霊はこの人間性による働きを指揮し、神性の働きが必要な場合は、神性が直接現れて実行する。神は肉において働き、肉において現れるので、人間性と神性の両方において働きを行う。人間性における神の働きは霊によって指揮され、人々の肉体的な必要を満たし、神との関わりを容易にするため、そして人々が神の現実性と正常性を目の当たりにできるようにし、また神の霊が肉において到来して人間のあいだに存在し、人間と共に暮らし、人間と交わることを人々に理解させるために行われる。神性における働きは、人々のいのちを施し、あらゆることにおいて人々を肯定的な側面から導き、人々の性質を変え、霊が肉において現れることを真に目の当たりにさせるためである。主に、人のいのちにおける成長は、神の神性における働きと言葉を通して直接達成される。神の神性における働きを受け入れることでのみ、人々は自身の性質を変化させることができ、その時初めて霊が満たされる。これに人間性における働き、すなわち人間性における神の牧養、支え、そして施しが伴う場合に限り、神の働きの成果が完全に達成される。今日言及する実際の神自身は、人間性と神性の両方において働きを行う。実際の神の出現によって、その正常な人間の働きと生活、および完全なる神性の働きが達成される。人間性と神性が一つのものとして結合され、いずれの働きも言葉を通して達成される。人間性においてであろうと神性においてであろうと、神は言葉を発する。人間性において働く際、人々が交わって理解できるよう、神は人間の言葉を話す。神の言葉は平易で理解しやすいので、すべての人々に施され得る。知識があらうと、教育が不十分であらうと、人はみな神の言葉を受け取れる。神性における神の働きも言葉を通して行われるが、それは施しに満ち、いのちに満ちており、人の思考に汚されておらず、人の好みを含まず、人間の限界に縛られず、普通の人間性の範疇の外にある。神性における働きも肉において実行されるが、それは霊の直接的な表現である。人々が人間性における神の働きを受け入れるだけであれば、彼らは一定の範囲に閉じ込められてしまうので、ごくわずかな変化を人々にもたらすだけであっても、絶え間ない取り扱い、刈り込み、懲らしめが必要になる。しかし、聖霊の働き、あるいは臨

在がなければ、人々はいつも古いやり方を繰り返すだけだろう。神性の働きを通してのみ、これらの弊害や欠陥が正され、その時初めて、人々は完全にされる。絶え間ない取り扱いと刈り込みに代わって必要なのは肯定的な施しであり、言葉を用いてあらゆる欠点を補い、言葉を用いて人々のあらゆる状態を露わにし、言葉を用いて人々の生活、あらゆる発言、あらゆる行動を支配するとともに、その意図と動機を暴くことである。これこそが、実際の神の本当の働きである。したがって、実際の神に対する態度において、あなたがたは今すぐ神の人間性の前に服従し、神を認識して認め、さらに神性における働きと言葉も受け入れ、それらに従うべきである。神の肉における出現は、神の霊の働きと言葉のすべてが、神の普通の人間性、および神の受肉した肉体を通して行われることを意味する。言い換えれば、神の霊は人間性の働きをただちに指揮し、肉において神性の働きを実行する。そして受肉した神の中に、あなたは人間性における神の働きと同時に、その完全なる神性の働きも見ることができる。これが、実際の神が肉において現れることの真の意義である。それをはっきり理解できれば、あなたは神の様々な部分を残らずつなぐことができ、神性の働きをやたらと重視することも、人間性における働きをやたらと軽視することもなくなる。また、極端に走ることも、回り道することもなくなる。総括すると、実際の神の意義とは、人間性の働きと神性の働きは、霊によって指揮されつつ、肉を通して表されるということである。それによって人々は、神が鮮やかで生き生きとしており、現実かつ真実であることを目の当たりにできる。

人間性における神の霊の働きには移行期がある。神は人間性を完全にすることで、自身の人間性が聖霊の指揮を受けられるようにし、その後、神の人間性が教会に施し、教会を牧養できるようになる。これが神の普通の働きの一つの現れである。したがって、神の人間性における働きの原理を明確に理解できるなら、あなたが神の人間性における働きに対して観念を抱く可能性は低い。いずれにせよ、神の霊に間違いはあり得ない。それは正しく、誤りはない。それは間違ったことを決してしない。神性の働きは神の旨の直接的な現れであり、人間性による干渉はない。それは完全にされる過程を経ることなく、霊に直接由来する。とは言え、神が神性において働きを行えるという事実は、神の持つ普通の人間性の故である。それはまったく超自然的なものではなく、普通の人によって実行されているように見える。神が天から地上に来たのは主に、肉を通して神の言葉を表し、肉という手段で神の霊の働きを完成させるためだったのである。

今日、実際の神に関する人々の認識は相変わらず偏り過ぎており、受肉の意義への理解もいまだ乏しい。神の肉と共に、人々は神の働きと言葉を通して、神の霊にはとても多くのものが含まれており、非常に豊かであることを知る。しかし、いず

れにしても、神の証しは最終的に神の霊からもたらされる。つまり、神は肉において何を為すか、どの原則によって働くのか、人間性において何をするのか、また神性において何を為すのかについての証しである。人々はこのことを認識していなければならない。今日、あなたはこの人を礼拝することができるものの、本質的には神の霊を礼拝しているのであり、人々が受肉した神についての認識を得るには、少なくとも次のことを達成しなければならない。つまり、肉を通して霊の実質を知ること、肉における霊の神性による働きと、人間性による働きの双方を知ること、肉における霊の言葉と発言をすべて受け入れ、神の霊がどのように肉を指揮し、肉における神の力を示すのかを理解することである。すなわち、その人は肉を通して天にいる霊を知るようになるのであって、実際の神自身が人間のあいだに出現することで、人々の観念における漠然とした神は一掃されたのである。実際の神自身を礼拝することで、神に対する人々の従順さは増加し、また肉における神の霊の神性の働きと人間性の働きを通して、人は啓示を受け、牧養され、人のいのちの性質に変化がもたらされる。これが、肉における霊の到来が持つ実際の意義であり、その主要な目的は、人々が神と関わり、神に頼り、神についての認識に達せるようにするためである。

概して、実際の神に対してどのような態度を取るべきだろうか。受肉について、言葉が肉において現れることについて、肉における神の出現について、実際の神の業について、あなたはどのような認識を持っているのか。今日の話し合いの主な話題は何か。受肉、肉による言葉の到来、そして肉における神の出現はみな、理解しなければならない事柄である。あなたがたは自身のいのちの経験の中で、自分自身の背丈と時代を基に、これらの問題を徐々に理解し、それらについて明確な認識を持つようにならないといけない。人々が神の言葉を経験する過程は、肉における神の言葉の出現を知る過程と同じである。神の言葉を経験すればするほど、人々はますます神の霊を知るようになる。神の言葉を経験することで、人々は霊の働きの原則を把握し、実際の神自身を知るようになる。実際、神は人々を完全にして自分のものにするとき、実際の神の業を彼らに知らせているのである。神は実際の神の働きを用いることで、人々に受肉の実際の意義を示し、神の霊が人の前に実際に現れたことを示す。人々が神のものとされ、神によって完全にされるとき、実際の神の表現は人々を征服しており、実際の神の言葉が人々を変え、自身のいのちを彼らに対して働かせ、彼らを神そのもの（人間性における神そのものにせよ、神性における神そのものにせよ）で満たし、神の言葉の実質で満たし、人々が神の言葉を生きるようにさせる。神は人々を獲得するとき、人々の欠点を取り扱い、彼らの反抗的な性質を裁いて暴き、彼らに必要なものを得させ、神が人間のあいだに来たこと

を彼らに示す手段として、主に実際の神の言葉と発言を用いる。何より重要なことだが、実際の神が行う働きは、あらゆる人をサタンの影響から救い、彼らを汚れた地から切り離し、彼らの堕落した性質を一掃する働きである。実際の神に獲得されることの最も深遠な意義は、実際の神を模範および手本としつつ、正常な人間性を生きられるようにすること、ほんのわずかなずれや逸脱もなく、実際の神の言葉と要求に沿って、神が何と言おうとその通りに実践できるようにすること、そして神が求めることを成し遂げられるようにすることである。このようにして、あなたは神のものとされる。神のものとされるとき、あなたは聖霊の働きを所有するだけではなく、何よりもまず、実際の神の要求を生きることができる。単に聖霊の働きがあるだけでは、あなたにいのちがあることにはならない。ここで鍵を握るのは、あなたが実際の神の要求に応じて行動できるかどうかであり、それはあなたが神のものとされるかどうかに関連している。これらが肉における実際の神の働きの最も偉大な意義である。すなわち、神は現実、かつ実際に肉において現れ、鮮やかかつ生き生きとした存在になり、人々に見られ、肉において実際に霊の働きを行い、また肉において人々の模範となる行動をすることで、人々の集団を獲得する。肉における神の到来は主に、人々が神の実際の業を見られるようにし、形のない霊に肉の姿を与え、人々が神を見て触れられるようにするためである。このようにして、神によって完全にされる人々は神を生き、神のものとされ、神の心に適うことになる。神が天において語るだけで、実際に地上へ降臨しなかったとすれば、人々はいまだ神を知ることができず、空虚な理論を使って神の業を説くばかりで、神の言葉を現実として持っていないなかっただろう。神が地上に来たのは何よりも、神が獲得しようとする人々の模範、手本として行動するためである。このようにしてのみ、人々は実際に神を知り、神に触れ、神を見ることができ、そうして初めて神によって真に獲得され得るのである。

今日の神の働きを知ること

今日神の働きを知るとは、おもに、終わりの日における受肉した神の主要な職分が何であるか、何をするために地上に来たかを知ることである。わたしは以前、神は（終わりの日に）地上に来たのは去る前に模範を示すためであるという言葉述べた。神はどのように模範を示すのか。言葉を発し、地上のいたるところで働き、語ることによって模範を示すのである。これが終わりの日の神の働きである。神がただ話すだけなのは、地上を言葉の世界にするため、またすべての人が言葉により施しを受け、言葉により啓かれ、それにより人間の霊が目覚めてビジョンが明

らかになるようにするためである。終わりの日に受肉した神が地上に来たのは、おもに言葉を述べるためである。イエスが来た時、天国の福音を広め、十字架の贖いの働きを成就した。イエスは律法の時代を終わらせ、古いものをすべて取り除いた。イエスの来たことで律法の時代が終わり、恵みの時代を招き入れたのである。終わりの日の受肉した神が来て、恵みの時代は終わった。神は、おもに言葉を述べるために来た。言葉を用いて人間を完全にし、人間を照らし、啓き、人間の心にある漠然とした神のいる場所を取り除くために来た。これはイエスが来たときに行った段階の働きではない。イエスが来た時には、多くの奇跡を行い、病人を癒やし、悪霊を追い払い、十字架で贖いの働きを行なった。その結果、人間の観念では、神はこのようでなければならないと考える。イエスが来た時、漠然とした神の姿を人間の心から取り除く働きはしなかったからである。イエスが来た時、十字架につけられ、病人を癒やし、悪霊を追い払い、天国の福音を広めた。ある意味で、終わりの日の神の受肉は、人間の観念において漠然とした神が占めている場所を除き、それにより人間の心に漠然とした神がもはや存在しなくなるようにするのである。神はその実際の言葉と働き、地上のあらゆる場所を移動すること、そして人々の間で行う極めて現実的かつ普通の働きを通じて、人々に神が実在することを知らせ、人間の心にある漠然とした神の場所を取り除くのである。別の意味では、神は肉の体が語る言葉を使って人間を完全にし、すべてを成就する。これが神が終わりの日に達成する働きである。

あなたがたが知るべきことは次の通りである。

1. 神の働きは超自然的ではない。そういう観念を抱いてはいけない。
2. 受肉した神が今回行うために来たおもな働きを理解しなければいけない。

神は病人を癒やしに来たのではない。また、悪霊を追い払うためでも、奇跡を行うためでもない。悔い改めの福音を広めるためでも、人間を贖うために来たのではない。イエスがすでにこの働きを終えているので、神は同じ働きを繰り返さないからである。今日、神は恵みの時代を終わらせ、恵みの時代の実践をすべて捨て去るために来た。実際の神が来たのは、おもに自分が現実存在することを示すためである。イエスが来たときは、そう多くを語らなかった。イエスはおもに奇跡を示し、しるしや不思議を行い、病人を癒やし、悪霊を追い払った。他には自分がほんとうに神であり、公平な神であることを人々に信じさせ知らせるために預言をした。最後に、磔刑の働きを完成した。今日の神は、しるしも不思議も行わず、病人を癒やすことも悪霊を追い払うこともしない。イエスが来たときに行った働きは、神の一部を示すものであったが、今回の神はこの段階ですべき働きをするために来たのである。神は同じ働きを繰り返さない。神は常に新たな神であり、決して古く

ない。だから、あなたが今日見るものはすべて、実際の神の言葉と働きである。

終わりの日の受肉した神は、おもに言葉を発するために来た。また、人間のいのちに必要なことをすべて説明し、人が入るべきものは何かを示し、人に神の業、神の知恵、全能性、驚くべきさまを見せるために来た。神はさまざまな方法で語るが、人間はそこに神の至高、神の偉大さ、さらに、神の謙虚と隠秘性を見る。人間は神が至上の存在であることを見るが、神は謙虚で隠されており、最も小さい者になれる。神の言葉は霊の観点から直接語られることもあれば、人間の観点から直接語られることもあり、またある言葉は第三者の観点から語られる。ここから神の働きの方式が変化に富んでいることがわかるが、神は言葉を通して人間にそれがわかるようにする。終わりの日における神の働きは正常かつ实际的である。そして、終わりの日における一群の人たちは最大の試練にさらされる。神の正常性と現実性のため、すべての人がそうした試練の中に入って行った。人間が神の試練に陥ったのは、神の正常性と現実性のためである。イエスの時代、試練や観念はなかった。イエスの働きのほとんどは人間の観念に合致していたため、人々はイエスに従い、イエスについての観念も抱かなかった。今日の試練は人間がこれまでに直面してきたもののうちでも最大である。その人たちは大きな患難を経てきたと言うとき、指しているのはまさにそのような患難である。今日、神は信仰、愛、忍耐、受苦、従順をこの人たちの中に生じさせるために話す。終わりの日の受肉した神の語る言葉は、人間の本性と実質、人間の行動、および人間が今日入るべきことに沿って語られる。神の言葉は現実的かつ普通のものである。神は明日のことは話さない。また、昨日を振り返ることもない。今日入って行き、実践し、理解すべきことについてだけ話す。この時代に、しるしや不思議を起こし、悪霊を追い払い、病人を癒やし、多くの奇跡を行える人が現れて、またその人が自分は再来したイエスであると主張したなら、それはイエスのまねをしている邪霊による偽物である。これを覚えておきなさい。神は同じ働きを繰り返さない。イエスの段階の働きはすでに完了し、神は二度と再びその段階の働きをしない。神の働きは人間の観念とは相容れない。たとえば、旧約聖書はメシアの到来を預言し、この預言の結果はイエスの出現であった。これはすでに起きたことであり、別のメシアがまた来るというのは間違っている。イエスはすでに一度来た。だから、イエスがこの時代に再び来るというのは間違いである。すべての時代には一つの名前があり、名前はそれぞれ各時代の特徴を含んでいる。人間の観念では、神は常にしるしや不思議を見せ、病人を癒やし、悪霊を追い払い、いつでもイエスのようでなければならない。しかし今回神はまったくそのようではない。もし終わりの日に神がいまだにしるしや奇跡を示し、まだ悪霊を追い払ったり病人を癒やしたりしていたら、神がイエスとまったく

同じようにしたならば、神はイエスと同じ働きを繰り返していることになり、イエスの働きは無意味で無価値ということになる。だから、神は時代ごとにひとつの段階の働きをするのである。ひとたびその段階の働きが完了すれば、すぐさまそれを邪霊がまねをし、サタンが神のすぐ後ろをついてくるようになれば、神は方法を変更する。ひとたび神が一つの段階の働きを完了すると、邪霊がまねをする。このことをよく理解しなければならない。なぜ今日、神の働きはイエスの働きと異なっているのか。なぜ今日の神はしるしや奇跡を示さず、悪霊を追い払わず、病人を癒やしもしないのか。もしイエスの働きが律法の時代に行われた働きと同じであれば、イエスは恵みの時代の神を表すことができたであろうか。磔刑の働きを完了できたろうか。もし律法の時代のようにイエスが神殿に入り、安息日を守ったなら、誰からも迫害を受けず、みなに受け入れられたであろう。それならば、磔刑に処せられたであろうか。贖いの働きを完了できたであろうか。終わりの日の受肉した神がイエスのようにしるしや不思議を見せたなら、何の意味があるのか。終わりの日に神が働きの別の部分、つまり経営（救いの）計画の部分を表す働きをしてはじめて、人間は神についてより深い認識を得ることができるのであり、そうしてはじめて神の経営計画は完了するのである。

終わりの日において、神はおもに言葉を発するために来た。神は聖霊の観点から、人間の観点から、第三者の観点から話す。神は異なった話し方をする。ある期間の一つの話し方をし、人間の観念を変え、漠然とした神の姿を人間の心から取り除くための話し方をする。これが神が行う主要な働きである。人間は神が病人を癒やし、悪霊を追い払い、奇跡を行い、人間に物質的な祝福をもたらすために来たと考えているため、神はこの段階の働き、つまり刑罰と裁きの働きをそうした観念を人間の思考から取り除くために行う。人間が神の現実性、神の正常を知るように、そしてイエスの姿が人間の心から消え、新たな姿に置き換えられるようにである。人間の心の中にある神の姿が古くなると、ただちにそれは偶像になる。イエスが来てその段階での働きをしたとき、神の全体を表さなかった。イエスはいくつかのしるしや不思議を示し、言葉を語り、最後に磔刑に処せられた。イエスは神の一部分を表した。イエスは神の全体像を表すことはできず、神の働きの一部を行うことで神を表した。これは、神があまりに偉大で、驚くべきであり、また計り知れないからであり、神はそれぞれの時代にその働きの一部だけをするからである。神がこの時代に実行する働きは、おもに人間のいのちのための言葉を与えること、人間の本性と実質、堕落した性質を暴くこと、そして宗教的観念、封建的思考、時代遅れの考えを一掃することであり、人間の知識と文化は神の言葉による暴きを通して清められなければならない。終わりの日において、神はしるしや不思議ではなく、言葉を用

いて人間を完全にする。神は言葉によって人間を露わにし、裁き、罰し、人間を完全にし、それにより人間が言葉の中に神の知恵と愛らしさを見、神の性質を知り、神の業を目にするようにする。律法の時代、ヤーウェは言葉によりモーセを導いてエジプトを脱出させ、イスラエル人に言葉を語った。当時、神の業の一部はわかりやすいものであったが、人間の素質が限られていて、認識を完全にする事ができなかったため、神は話し、働き続けた。恵みの時代、人間は再び神の業の一部を見た。イエスはしるしや不思議を見せ、病人を癒やし、悪霊を追い払い、十字架につけられ、三日後によみがえり、人間の前に肉の身で現れることができた。神について、人間はこれ以上のことを知らなかった。人間は神の示されたことだけを知っているが、神がそれ以上人間に見せなければ、それで神について人間が把握できることはそこまでに限られる。だから、神は自分に関する人間の認識が深まるように、人間が徐々に神の実質を知るようにと働き続ける。終わりの日に神は言葉を用いて人間を完全にする。あなたの堕落した性質は神の言葉により明らかになり、宗教的観念は神の現実性に置き換えられる。終わりの日の受肉した神が来たのはおもに「言葉は肉となり、言葉は肉に現れ、そして言葉は肉となって現れる」という言葉を成就するためであるが、このことを完全に認識していなければ、堅く立つことはできない。終わりの日に、神はおもに言葉が肉において現れるという働きをするつもりだが、これは、神の経営計画の一部である。だから、あなたがたの認識は明確でなければならない。神がどのように働こうと、人間が神を限定することを神は許さない。もし神が終わりの日にこの働きをしなければ、人間の神についての認識はそれ以上進まない。神が十字架につけられることができ、ソドムを滅ぼすことができ、イエスが死からよみがえってペテロの前に現れることができることだけを知っているだろう……。しかし、神の言葉はすべてを成し遂げることができ、人間を征服できるとはあなたは絶対に言わないであろう。神の言葉を経験してはじめて、そうした認識について話せるのである。また、神の働きを経験すればするほど、神についての認識が充実していく。そうしてはじめて、自分の観念の枠内に神を限定しなくなる。人間は神の働きを経験して神を知るようになる。これ以外に神を知る正しい方法はない。今日、何もせずにしるしや不思議を目にすること、大災害の時が来るのを待っている人が大勢いる。あなたは神を信じているのか。それとも、大災害を信じているのか。大災害が起こるときにはもう手遅れであり、もし神が大災害を起こさなければ、神ではないということになるのか。あなたはしるしや不思議を信じるのか。それとも神自身を信じているのか。イエスは人々にあざけられた時、しるしや不思議を示さなかった。ではイエスは神ではなかったのか。あなたはしるしや不思議を信じているのか。それとも、神の実質を信じているのか。人間の神への信仰に

ついでに、この考え方は誤っている。ヤーウェは律法の時代に多くの言葉を語ったが、今日でも、そのいくつかはまだ実現していない。ヤーウェは神ではないと言えるだろうか。

現在、この終わりの日にあって、おもに「言葉は肉となり」という事実が神に成し遂げられるということをあなたがたはみな明確に知っていなければいけない。神はその地上での実際の働きにおいて人間が神を知り、神と関わり、神の実際の業を見るようにする。神はしるしや不思議を示せるが、そうすることのできない場合があり、それは時代による、ということが人間にはっきりわかるようにする。このことから、神はしるしや不思議を示すことができないのではなく、なすべき働きと時代によって働き方を変えるのだということがわかる。現在の働きの段階では、神はしるしや不思議は示さない。イエスの時代にしるしや不思議を示したのは、その時代の働きは異なっていたからである。神はその働きを現在はいしめない。そこで、神はしるしや不思議を示すことができないと思ったり、しるしや不思議を示さなければ、それは神ではないと考えたりする人がいる。それは誤りではないのか。神はしるしや不思議を示せるのだが、異なった時代に働いているから、そうした働きをしないのである。今は別の時代であって、神の働きは別の段階にあるから、神が明らかにする業もまた異なっている。人間の神への信仰は、しるしや不思議を信じることではないし、奇跡を信じることでもなく、新たな時代における現実の働きを信じることである。人間は神の働き方によって神を知り、この認識が神への信仰を人間の内に生み出す。つまり、神の働きと業への信仰である。今の段階の働きで、神はおもに話す。しるしや不思議を目にするのを待っていてはならない。そんなものは見えない。あなたは恵みの時代に生まれたのではないからである。もし恵みの時代に生まれたのだとしたら、しるしや不思議を見られただろうが、終わりの日に生まれたのだから、あなたに見えるのは神の現実性と正常だけである。終わりの日に超自然のイエスを見ることを期待してはいけない。あなたが見ることができるのは、正常な人間と変わるところのない受肉した実際の神だけなのである。それぞれの時代に、神は異なった業を明らかに示す。それぞれの時代に、神はその業の一部だけを明らかにする。各時代の働きは神の性質の一部、神の業の一部だけを表す。神が明確に示す業はその働く時代によって異なる。しかし、どれもみな人間に神についてさらに深い認識、さらに真実に近くさらに地に足のついた信仰を与える。人間が神を信じるのは、神の業すべてのためであり、神がまことに不思議で偉大だから、神が全能で測り知れないからである。もし神がしるしや不思議を示し、病人を癒やし、悪霊を追い払えるから信じるというのなら、その見方は誤っている。「邪霊もまたそういうことができるのではないのか」とあなたに言う人がいるであろう。そ

れは神の姿をサタンの姿と取り違えていることになるのではないか。今日、人間が神を信じるのは、神が行う多くの業と働き、そして神による数多くの話し方のためである。神はその言葉によって人間を征服し、完全にする。人間が神を信じるのは、神の数多くの業のためであり、神がしるしや不思議を見せられるからではない。人間は神の業を目の当たりにすることで、神を知るようになるだけである。神の実際の業、神がどのように働くか、神がどのような知恵のある方法を用いるか、どのように話すか、どのように人間を完全にするか、こういう面を知ることによってのみ、神の現実性と性質を人は理解することができ、神は何が好きで、何が嫌い、神はどのように人間に働きかけるかを知るようになる。神の好き嫌いを理解することで、物事の是非を区別できるようになり、また、神についての認識により、いのちの成長がある。つまり、神の働きについて認識しなければ、神への信仰についての考え方を正さなければいけないのである。

人が想像するほど神の働きは簡単なものか

終わりの日における神の働きと、神が今日あなたの中で行なっている、神の計画の働きとを受けすることで、自分がいかに究極の称揚と救いを得てきたかを、神を信じる一人ひとりが正しく認識すべきである。神は人々のこの集団を、宇宙全体におよぶ神の働きの唯一の焦点に据えた。神はあなたがたのために、心血を残らず注いだのである。神は宇宙全体の霊の働きをことごとく取り戻し、あなたがたに与えてきた。だからわたしは、あなたがたは幸運な人たちだと言うのである。そのうえ、神はイスラエルから、すなわち自身の選民からあなたがたへと自らの栄光を移し、この集団を通じて自身の計画の目的が完全に現れるようにする。ゆえに、あなたがたが神の遺産を受け取る者である。それ以上に、あなたがたは神の栄光の相続人である。あなたがたはみな、この言葉を覚えているだろう。「なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである」。あなたがたはみな、この言葉を以前耳にはしたが、その本当の意味は誰も理解していなかった。今日、あなたがたはこの言葉の真の意義を深く認識している。この言葉は、神によって終わりの日に実現され、また、赤い大きな竜がとぐろを巻く地で、その竜から熾烈な迫害を受けている人たちにおいて成就する。赤い大きな竜は神を迫害し、神の敵であるから、この地において、神を信じる者は辱めと迫害を受け、またその結果として、これらの言葉があなたがた、つまりこの人々の集団において成就する。神の働きは、神に敵対する地で始まるので、その働きはことごとく熾烈な妨害にあい、神の言葉の多くが成就するまで時間がかかる。

したがって、人々は神の言葉の結果として精錬されるのだが、それはまた苦難の一部でもある。赤い大きな竜の地で、神が自身の働きを成し遂げるのは非常に困難である。しかし、神はこの困難を通じて働きの一段階を行い、自身の知恵と不思議な業を明らかにし、これを機にこの人々の集団を完全にする。また、人々の苦しみ、人々の素質、そしてこの不浄の地にいる人々のあらゆるサタンの性質を通じて、神は清めと征服の働きを行うが、それは、このことを通じて栄光を勝ち取るため、自身の業を証しする人々を得るためである。これが、この集団のために神が払ったあらゆる犠牲の全体的な意義である。つまり、神は自身に盾突く者を通じて征服の働きを行い、またそれを通じてのみ、神の偉大な力が明らかになるということである。言い換えれば、不浄な地に住む者だけが神の栄光を受け継ぐに値するということであり、そうしてこそ神の偉大な力が浮き彫りになる。ゆえにわたしは、神の栄光は不浄の地から、また不浄の地に住む人々から獲得される、と言うのである。それが神の旨である。イエスによる働きの段階も同じだった。イエスは自分を迫害するパリサイ人の中でこそ栄光を受けることができた。パリサイ人による迫害とユダの裏切りがなければ、イエスは嘲笑されることも、中傷されることもなく、ましてや十字架にかけられることもなかっただろう。それゆえ栄光を得ることもなかったはずだ。神が各時代に働くところ、神が肉において働くところは、神が栄光を得るところ、神が得ようとする人たちを得るところである。これが神の働きの計画であり、神の経営である。

数千年にわたる神の計画のうち、二つの働きが肉において行われた。一つは磔刑の働きであり、これゆえに神は栄光を受ける。もう一つは終わりの日における征服と完成の働きであり、これゆえに神は栄光を受ける。これが神の経営である。従って、神の働きや、あなたがたに託された神の任務が簡単なものだと思ってはならない。あなたがたはみな、神が溢れんばかりにもたらす永遠の栄光の重みを受け継ぐ人なのであり、このことは神によって特別に定められたのである。二つの部分から成る神の栄光のうち、一つはあなたがたにおいて現れる。神の栄光の一部分がごとく、あなたがたに授けられるのだが、それがあなたがたへの遺産となろう。そのことは、神があなたがたを称揚しているのであり、はるか昔に神が予定した計画でもある。赤い大きな竜が住む地で神がなした働きの偉大さからすれば、この働きがもしも別の場所に移されていたら、とうの昔に大きな実を結び、人にたやすく受け入れられたことだろう。さらには、神を信じる西欧の聖職者にも実に易々と受け入れられたはずだ。イエスによる働きの段階が前例としてあるからである。これが、神が現段階の栄光の働きを別の場所では成し遂げられない理由である。人々に支持され、国家に認められる立場では、それを確立させることができない。これが

まさに、この地で現段階の働きを確立させることの重要な意義である。あなたがたのうち、法律で守られている人は一人もいない。むしろ法律の制裁を受けている。さらに問題なのは、人々があなたがたのことを理解しないことである。親戚であれ、親であれ、友人であれ、同僚であれ、誰一人あなたがたのことを理解しない。神に「捨てられ」たら、あなたがたは地上で生き続けることができない。たとえそうでも、人々は神から離れていることに耐えられない。それが、神が人々を征服することの意義であり、神の栄光なのである。今日あなたがたが受け継いだものは、各時代の使徒や預言者が受け継いだものを超えており、モーセやペテロが受け継いだものよりも大きい。一日二日で祝福を得ることはできない。祝福は、多大な犠牲を通じて獲得されなければならない。つまりあなたがたは、精錬を経た愛、大きな信仰、そして神があなたがたに獲得することを求めている、数多くの真理を自分のものにしなければならない。さらには、怯えることも逃げることもなく、正義に真正面から向き合い、神に対して死ぬまで不変の愛をもたなければならない。あなたがたは不屈の意志をもたなければならない、自分のいのちの性質に変化が生じなければならない、堕落は癒されなければならない、神の指揮をことごとく、不平を言わずに受け入れなければならない。また、死に際しても従順でなければならない。これが、あなたがたが達成すべき神の働きの最終目標であり、神がこの人々の集団に求めることである。神は、あなたがたに与えるからには、必ずや見返りを求め、適切な要求をあなたがたにする。ゆえに、神の働きにはすべて理由があるのであって、そのことは、高い基準と過酷な要求を定める働きを神が繰り返し行う理由を示している。それゆえ、あなたがたは神への信仰で満ちていなければならない。つまり、あなたがたが神の遺産を受け継ぐにふさわしくなれるよう、神の働きはことごとくあなたがたのために行われるのである。それは神自身の栄光のためではなく、あなたがたの救いのため、そして不浄の地でひどく苦しんできたこの人々の集団を完全にするためである。あなたがたは神の旨を理解しなければならない。そこでわたしは、洞察力も理知もないあまたの無知な人に忠告する。神を試すな。神に二度と抵抗するな。神は、人には耐えられない苦しみをすでに耐え忍んできた。人に代わって、はるか以前にもっとひどい屈辱を耐え忍んだ。あなたがたに手放せないものなど他にあらうか。神の旨以上に大事なものがあらうか。神の愛以上に高いものがあらうか。この不浄の地で神が働きを成し遂げることも、十分困難である。その上、もし人が分かっているが意図的に過ちを犯したら、神の働きは延長せざるを得ない。要するに、延長など誰のためにもならず、誰の利益にもならないのである。神は時間に縛られない。神の働きと栄光が最優先である。ゆえに神は、どんなに時間がかかろうとも、自身の働きのためにあらゆる代価を支払う。これが神の性

質である。神は自身の働きを全うするまで休まない。神が二つ目の栄光を獲得して初めて、神の働きは終わる。全宇宙において神の二つ目の栄光が完成しなければ、神の日は決して到来せず、神の手は自身の選民から決して離れず、神の栄光はイスラエルの上に降りず、神の計画は完結しない。あなたがたは、神の旨を見ることができなければならない、また神の働きが天地と万物の創造ほど簡単なものではないことを知らなければならない。それというのも、今日における働きとは、感覚が麻痺しきっている墮落した人間を変えることであり、創造されながらサタンによって加工されてしまった人々を清めることだからである。それはアダムとエバの創造でもなければ、まして光やあらゆる動植物の創造でもない。神は、サタンに墮落させられたものを清めたあと、それらを新たに自分のものとする。それらは神に属するものとなり、神の栄光となる。これは人が想像するようなことではなく、天地とそこにある万物の創造、あるいはサタンを奈落の底に突き落とす呪いの働きほど簡単なことでもない。むしろ、それは人を変える働きであり、否定的で神に属さないものを、肯定的で神に属するものへと変えるのである。これが、現段階における神の働きの背後にある真実である。あなたがたはこのことを理解し、物事を過度に単純化することを避けなければならない。神の働きは普通の働きとは違う。その素晴らしさと知恵は人の知性を超えている。現段階の働きにおいて、神が万物を創造することはないものの、万物を破壊することもない。代わりに、自身が創造した万物を変え、サタンに汚された万物を清める。神はこのようにして偉大な事業へと乗り出すのであり、それが神の働きの全体的な意義である。これらの言葉の中に見る神の働きは、本当にかくも簡単なものだろうか。

神を信じるなら真理のために生きるべきである

すべての人に共通する問題は、真理を理解していても実践しないことである。これは、一方では代償を払う意志がないためであり、他方では、識別が足りなすぎるためである。そうした人は日常生活の困難の多くをあるがままに見ることができず、正しく実践する方法を知らない。人の経験は浅すぎ、素質が不足しすぎ、真理の理解度が限られているため、日常生活で遭遇する困難を解決するすべがない。口先だけで神を信じており、日常生活に神を入れることができない。つまり、神は神であり、生活は生活であり、人は生活の中で神とは関係ないかのようである。誰もがそう考えている。このように神を信じているので、現実には人が神に得られ、完全にされることはない。実のところ、神の言葉が完全に現れなかったということではなく、むしろ人が神の言葉を受け取る人の力が単に足りなすぎるのである。神の

本来の意図に従って行動する人はほとんどいないと言える。むしろ、自分自身の意図、過去に持っていた宗教的観念、物事のやり方にしがたって神を信じている。神の言葉を受け入れた後に変容を遂げ、神の心意に従って行動し始める人はほとんどいない。その代わり、誤った信念に固執する。人が神を信じるようになるとき、宗教の慣例に基づいて信じ、自分の処世哲学だけに基づいて生き、他者と関わる。これは十人のうち九人に当てはまると言える。神を信じるようになってから別の計画を立て、改心する人はほとんどいない。人類は神の言葉を真理と見なさず、または真理として受け取り実践しなかった。

たとえば、イエスを信じることを考えてみよう。信じ始めたばかりの人でも、非常に長い間信じてきた人でも、みな自分が持つ何らかの才能を使い、自分が有する何らかの技能を見せただけである。人は単純に「神を信じる」という五文字を自分の通常の生活に加えただけで、自分の性質は変えず、また、神への信仰は少しも増大しなかった。そうした人の追求は熱くも冷たくもない。自分の信仰をあきらめるとは言わなかったが、すべてを神に捧げることもなかった。神を本当に愛したことも、従ったこともなかった。彼らの神への信仰は本物と偽物の混合であり、片目を開き、もう片方を閉じたまま対処し、信仰を実践することに熱心ではなかった。このような困惑した状態を続け、最終的には混乱したまま死んだ。こんなことをして何の意味があるのか。今日、実際的な神を信じるには、正しい道を歩まなければならない。神を信じるなら、祝福を求めるだけでなく、神を愛し、神を知るべきである。神の啓きを通して、自己による追求を通して、神の言葉を飲み食いし、神についての真の認識を育て、心の底から真に神を愛することができる。言い換えれば、神への愛がまことに真実なもので、神への愛を誰も破壊したり邪魔したりすることができないとき、あなたは神を信じる正しい道を進んでいる。これは、あなたが神に属していることを証明する。なぜならあなたの心はすでに神が所有し、それ以外にはあなたを所有できないからである。経験を通して、払った代償を通して、神の働きを通して、あなたは神への不断の愛を育てることができる。そうすれば、あなたはサタンの影響から解放され、神の言葉の光の中に生きようになる。闇の影響から自由になって初めて、あなたは神を得たと言うことができる。あなたは、神の信仰において、この目標を追求しなければならない。これは、あなたがた一人一人の本分である。あなたがたは一人として現状に満足するべきではない。あなたは神の働きに対して迷うことはできないし、それを軽視することもできない。あらゆる点において、常に神を思い、何をするにも神のために行わなければならない。そして、話したり行動したりするときはいつでも、神の家の利益を優先すべきである。そうしてはじめて、神の心に叶うことができる。

神の信仰において、人の最大の欠点は、言葉でしか信じないことであり、日常生活に神が完全に不在であることである。実際、人はみな神の存在を信じるが、神は日常生活の一部になっていない。人は口で神に多くの祈りを捧げるが、心に神の居場所はほとんどないので、神は何度も人を試す。人は不純であるため、人がこうした試練の中で恥ずかしく思い、自己を知ることができるように、神は人を試すしかない。そうでなければ、人類は大天使の子孫に姿を変え、ますます墮落するであろう。神の信仰の過程では、神の絶え間ない浄化の下で、人はそれぞれの個人的な意図や目的の多くを捨て去る。そうでなければ、神は誰かを使うことも、神が為すべき働きを人において為すこともない。神はまず人を清め、この過程を通して、人は自身を知ることになり、神が人を変えることがある。そうしてはじめて、神はそのいのちを人に注ぎ入れ、そうすることでのみ、人の心は完全に神に向けられる。だから、神を信じることは人が言うほど単純ではないとわたしは言うのである。神の視点からは、あなたに認識はあっても神の言葉をいのちとしていなければ、そして自分の認識だけに制限され、真理を実践することも神の言葉を生きることもできないなら、それはやはりあなたに神を愛する心がないことの証明であり、あなたの心が神のものではないことを示している。人は神を信じることで神を知ることができる。これが最終的な目標であり、人が追求すべき目標である。あなたの実践において神の言葉が実を結ぶように、神の言葉を生きる努力をしなければならない。教義的な認識しかなければ、あなたの神の信仰は無駄になる。あなたが神の言葉を実践し、神の言葉を生きる場合にのみ、信仰は完全で、神の心意に一致するとみなされる。この道では、多くの認識を語ることができる人は多いが、彼らが死ぬ時、その目は涙で溢れ、人生を無駄にし、高齢まで無用に生きたことを恨む。彼らは単に教義を理解しているだけで、真理を実践することも、神に証しをすることもできない。代わりに、あちこちをハチのように忙しく駆け回るだけで、死の寸前でようやく真の証しがないこと、神を全く知らないことを悟る。これでは手遅れではないか。なぜ今を生き、愛する真理を追い求めないのか。なぜ明日まで待つのか。人生において真理を求めて苦しむことも、真理を手に入れようとするものもないなら、今際の際に後悔したいということではないのか。もしそうなら、なぜ神を信じるのか。実際、ほんのわずかな努力をすれば、真理を実践し、それによって神を満足させることができる事柄は多くある。人の心が悪魔に取りつかれているからこそ、神のために行動することはできず、肉のために絶えず駆け回り、最終的に達成するのは何もない。このため、人は常に苦しみや困難に悩まされる。これはサタンによる責め苦ではないのか。これは肉の墮落ではないのか。あなたは調子のよいことを言って神をだまそうとすべきではない。むしろ、具体的な行動を取らなければな

らない。自分を欺くな。それに何の意味があるのか。自分の肉のために生き、利益と名声を得るために奮闘することで何を得ることができるのか。

七つの雷が轟く―― 神の国の福音が宇宙の隅々まで広まることを預言

わたしは異邦人の国々に働きを広めている。わたしの栄光は全宇宙に閃く。星のように点々と散らばる人々はみな、自分の中にわたしの旨を抱き、わたしの手によって導かれ、わたしが与えた仕事に取りかかる。この時点からわたしは新しい時代へと入り、すべての人々を別の世界へ連れて行く。わたしは自分の「故郷」へ戻ったとき、当初の計画に含まれる働きの、また別の部分に着手した。人々がわたしをより深く知れるようにするためだ。わたしは宇宙全体を眺めて、今が働きに絶好の機会だとわかったため^[a]、あちこち駆けずり回り、人々に新しい働きを行なっている。いずれにせよこれは新たな時代であり、わたしはより多くの新しい人々を新たな時代へと引き入れ、淘汰すべき者達をより多く投げ捨てるため、新しい働きをもたらした。赤い大きな竜の国家で、わたしは人々に理解し難い働きの段階を実行し、彼らを風の中で揺らす。その後、多くの者が風に吹かれて静かに漂い去る。これこそまさに、わたしが一掃しようとしている「脱穀場」だ。それはわたしが切に願っていることであり、またわたしの計画でもある。というのも、わたしが働いている間に多くの悪い者たちが忍び込んだからだ。しかしわたしは彼らを追い払うことを急いではない。適切な時が来たら、彼らを追い散らすつもりだ。そうして初めてわたしはいのちの泉となり、真にわたしを愛する人々がわたしからいちじくの実やゆりの香りを受け取れるようになる。サタンがとどまる塵の地には、砂があるだけで純金が残っていない。こうした状況なので、わたしは働きのこのような段階を実行するのだ。わたしが自分のものとするのは砂ではなく、精錬された純金であることを知らなければならない。悪い者がどうしてわたしの家に残れるだろうか。わたしの楽園に狐が寄生することなど許せるだろうか。わたしは考えられるすべての方法で、こうしたものを追い払う。わたしの旨が露わになるまでは、誰一人わたしがしようとしていることに気づかない。わたしはこの機会を利用して悪い者たちを追い払い、彼らはわたしから去らざるを得なくなる。わたしは悪い者たちをこのように扱うが、彼らがわたしに仕える日はまだあるだろう。人々は神の恵みを

脚注

a. 原文に「だとわかった」の語句は含まれていない。

望む心が強すぎるので、わたしは向きを変えて、栄光に満ちた顔を異邦人たちに示し、人々がみな自分の世界に住んで自らを裁けるようにする。そして同時に、わたしは言うべき言葉を言い続け、人々が必要とするものを与え続ける。人々が我に戻るころには、とうの昔にわたしの働きが広まっていることだろう。それからわたしは人間にわたしの旨を表し、人間に対する働きの第二の部分に着手する。すべての人間をわたしにしっかりと付き従わせて働きに協力させ、能力の限りを尽くしてこの必要な働きをわたしとともに遂行させるのだ。

わたしの栄光を見るという信念を持つものは誰もいない。わたしは彼らに強要することはせず、ただ人々の間からわたしの栄光を奪い去り、別の世界へと移す。人々が再び後悔するなら、わたしは信仰を持つより多くの人々へわたしの栄光を示すだろう。これがわたしの働きの原則である。わたしの栄光はカナンの地から去る時もあり、選ばれた者たちから去る時もあるからだ。さらに、わたしの栄光が地上全体から去る時もある。そのとき地上は光を失って暗闇へと陥り、カナンの地さえ太陽には照らされなくなる。すべての人々は信仰を失うが、誰もカナンの地の香りを失うことには耐えられない。わたしは新たな天地へと進むときに初めて、わたしの栄光のもう一つの部分を、まずカナンの地で現す。すると夜の真っ暗闇の底に沈んだ全地にかすかな光が輝く。それにより、全地がその光のもとに集まるとともに、地上のすべての人々がその光から力を得て、わたしの栄光は増大し、すべての国々に新たに現れ、わたしがはるか昔から人間の世に現れており、はるか昔にわたしの栄光をイスラエルから東方へともたらしたことを、すべての人が気づけるだろう。わたしの栄光は東方から輝きを放つのであり、恵みの時代から今日へともたらされたからだ。しかしわたしが出発した地はイスラエルであり、そこから東方に到着した。東方の光が徐々に白く変わって初めて、地上の暗闇は光に変わり始める。その時初めて、人はわたしがはるか昔にイスラエルを去っており、東方で新たに現れようとしていることを知るだろう。わたしは一度イスラエルへと下り、その後そこから立ち去ったため、再びイスラエルに生まれることはできない。なぜならわたしの働きは全宇宙を導くからであり、さらに稲妻は東から西へとひらめき渡るからだ。だからわたしは東方へと下り、カナンの地を東方の人々にもたらしたのである。わたしは全地の人々をカナンの地へと連れて行く。それゆえ全宇宙を支配するため、カナンの地で声を発し続ける。現在、カナンの地以外のどこにも光はなく、すべての人々は飢えと寒さにさらされている。わたしはまずイスラエルにわたしの栄光を与え、その後それを奪い去り、それによってイスラエルの人々を東方へと導き、すべての人々を東方へと導いた。わたしは彼らをみな光へと導き、彼らが光と再会して光と交われるようにし、もう探し求めなくていいようにした。わたしは探

し求めるすべての者が再び光を見られるようにし、わたしがイスラエルに示した栄光を目にできるようにするつもりだ。わたしがはるか昔に白い雲に乗って人々の間に降り立ったことを彼らに理解させ、無数の白い雲と豊かな果実を見せ、さらにイスラエルのヤーウェ神を目撃させよう。そして彼らに、ユダヤ人の先生であり、待望のメシアであり、歴代の王たちによって迫害されてきたわたしの完全な姿を見せよう。わたしは全宇宙に対して働き、偉大な働きを行い、わたしのすべての栄光と業を、終わりの日の人々に対して露わにする。そしてわたしの栄光に満ちた顔を、長年わたしを待っていた人々、わたしが白い雲に乗ってくるのを熱望してきた人々、わたしの再来を熱望してきたイスラエル、そしてわたしを迫害するすべての人間に対して、余すところなく示そう。それによって、わたしがはるか昔にわたしの栄光を運び去って東方へともたらししており、それがもはやユダヤにはないことを、すべての者が知るだろう。なぜなら、終わりの日はすでに到来しているからである。

わたしは宇宙の隅々まで自らの働きを行なっており、東方では雷のような轟音が終わりにく発生し、すべての国々と教派を震わせている。すべての人々を現在へと導いてきたのはわたしの声である。わたしはすべての人がわたしの声によって征服され、この流れの中に入り、わたしの前に帰服するようにする。わたしははるか昔に全地からわたしの栄光を取り戻し、それを東方で新たに発したからだ。わたしの栄光を見ることを願わない者がいるだろうか。わたしの再臨を心待ちにしない者がいるだろうか。わたしが再び現れることを渴望しない者がいるだろうか。わたしの愛らしさを思慕しない者がいるだろうか。光のもとへ来ようとしなかった者がいるだろうか。カナンの地の豊かさを目にとめない者がいるだろうか。贖い主の再来を待ち望まない者がいるだろうか。偉大な力を持つ全能者を敬慕しない者がいるだろうか。わたしの声は地上の隅々まで行き渡るだろう。わたしは我が選民と向き合っており、さらに多くの言葉を彼らに語りかける。山々や川を震わせる強大な雷のように、わたしは全宇宙と人類にむかってわたしの言葉を語りかける。こうしてわたしの口から出る言葉は人の宝となっており、すべての人々はわたしの言葉を大切にしている。稲妻は東から西へとひらめき渡る。わたしの言葉は、人が手放したがらないと同時に人には理解し難いものだが、それ以上に彼らに大きな喜びをもたらすものである。あたかも赤児が生まれたばかりであるかのように、すべての人々が喜びに満ち、わたしの到来を祝っている。わたしはすべての人々を、わたしの声によってわたしの前へ連れてくる。その時からわたしは正式に人類の中へ入り、彼らはわたしを崇拝するようになる。わたしが放つ栄光とわたしの口から出る言葉によって、人々はみなわたしの前へ来るようになり、稲妻が東方から閃くこと、そしてわ

たしが東方の「オリーブ山」にも降臨したことを知るようになる。彼らはわたしがすでにずっと前から地上にいたことを知り、すでにユダヤ人の息子ではなく、東方の稲妻であることを知るだろう。なぜならわたしはずっと前に復活し、人々の間から去って、その後再び栄光とともに人々の中に現れたからである。わたしは幾時代も前に崇拜された神であり、幾時代も前にイスラエル人によって見捨てられた赤児である。そしてそれ以上に、今この時代の栄光に満ちた全能神なのだ。すべての者をわたしの玉座の前に来させ、わたしの栄光に満ちた顔を見せ、わたしの声を聞かせ、わたしの業を目撃させなさい。これがわたしの旨のすべてであり、わたしの計画の結末かつ頂点であると同時に、わたしの経営の目的でもある。つまり、すべての国がわたしにひれ伏し、すべての人がその言葉でわたしを認め、すべての人がわたしを信頼し、またすべての人がわたしに服従するようにすることである。

受肉した神と神に使われる人との本質的な違い

長年にわたり、神の霊は地上で働きつつ、止まることなく探してきた。またこれまでの時代を通して、神は働きを行うために多くの人を使ってきた。しかし、その間ずっと、神の霊には相応しい安息の場所がなかった。そのため、神は様々な人のあいだを絶えず動き回りながら働きを行う。全体的に見れば、神の働きは人を通じてなされるのである。つまり、これまでの長年において、神の働きは止まったことがなく、きょうまでずっと人において実行され続けてきた。神は多くの言葉を語り、かなりの働きを行ってきたものの、人間はいまだに神を知らない。それはひとえに、神が人間の前に現れたことがなく、また神には目に見える形がないからである。それで神はこの働き、すなわちあらゆる人に実際の神の実際的な意義を知らしめる働きを完遂しなければならない。この目的を達成するために、神は自身の霊を人類の目に見える形で顕し、人々のあいだで働きを行わなければならない。つまり、神の霊が物理的な姿をとり、肉と骨をもち、人々のあいだを目に見える形で歩き、ときには姿を見せ、ときには隠れながら、人と生活を共にして初めて、人々は神についてのより深い認識に到達できる。神がひたすら肉に留まっていれば、自身の働きを残らず完成させることはできないであろう。肉において一定期間働きを行い、肉において行われなければならない職分を全うした後、神は肉を離れ、肉の姿で霊界において働くことになる。それはちょうど、イエスが一定期間、普通の人間性において働き、完成させるべき働きをすべて完成させた後にそうしたのと同じである。あなたがたは、「道…… (5)」にある「父がわたしに『地上においては、ただあなたの父の旨を行い、父から託された任務を完成させることだけを求めなさい

い。他のことは一切あなたに関係ない』と語ったことを覚えている」という節を覚えていることだろう。この一節に何を見ることができただろうか。神は地上に来るとき、神性の働きのみを行う。これが、天の霊が受肉した神に委ねたものである。神は来るとき、あらゆるところで語り、その発言をさまざまな方法で、さまざまな視点から声にするだけである。おもに人間に施すことと教えることを自らの目標、および働きの原則とし、人間関係や人々の生活の詳細といった事柄には関与しない。彼のおもな職分は、霊の代わりに語ることである。つまり、神の霊が目に見える形で肉において現れるとき、彼は人間のいのちを施し、真理を解き放つだけである。彼は人間の働きに関わらない。つまり、人間性の働きには加わらないのである。人間には神性の働きを行うことはできず、神は人間の働きに加わらない。働きを行うべくこの地上に来て以来ずっと、神は常に人々を通して働きを行ってきた。しかし、これらの人々は受肉した神とは考えられず、神によって使われる人々に過ぎない。一方、今日の神は神性の視点から直接語ることができ、霊の声を送り出し、霊の代わりに働きを行う。これまでの時代を通して神が用いてきたすべての人もまた、神の霊が肉体において働いた実例であるが、それではなぜ彼らは神と呼ばれることができないのだろうか。しかし、今日の神もまた肉において直接働きを行う神の霊であり、イエスもまた肉において働きを行う神の霊だったのであって、両者とも神と呼ばれる。それでは、違いは何なのか。これまでの時代を通して、神が用いた人々はみな、普通の思考と理知を駆使することができた。人間としての行動の原則を理解していたのである。彼らは正常な人間の思考をもち、正常な人がもつべきあらゆるものを備えている。彼らのほとんどが並外れた才能や生来の知性をもっている。神の霊はこれらの人々に働きかけるにあたり、神からの授かりものである彼らの才能を役立てる。神の霊は彼らの才能を活用し、彼らの強みを用いて神のために役立てる。しかし、神の実質に思考や発想はなく、人間の意図も混ざり込んでおらず、普通の人間が備えているものを欠いてさえいる。つまり、神は人間の行動の原則に精通すらしていないのである。これが、今日の神が地上に来るときの様子である。その働きと言葉には、人間の意図や思考が混ざり込んでおらず、それらは霊の意図を直接体現しており、今日の神は直接神を代表して働く。これは霊が直接語ることであり、つまり、人間の意図をほんの少しも混じり込ませることなく、神性が直接働きを為すことを意味している。言い換えると、受肉した神は神性を直接体現し、人間の思考や発想をもたず、人間の行動の原則に関する理解を有していないということである。もし神性だけが働いていたならば（つまり、神自身だけが働いていたならば）、神の働きが地上で実行されることは決してなかったであろう。だから神は地上に来るとき、自身が神性において行う働きと関連して、

人間性において働きを行うために用いる少数の人々を必要とする。言い換えるならば、神は神性の働きを支えるために人間性の働きを使うのである。そうでなければ、人が神性の働きに直接携わる術はないだろう。イエスとその弟子たちもそうだった。この世での生涯において、イエスは古い律法を廃して新しい戒めを定めた。イエスはまた多くの言葉を語った。これらの働きはすべて神性において行われた。ペテロやパウロ、ヨハネといった他の者はみな、イエスの言葉を基礎としてその後の働きを築いた。言い換えると、神はその時代における働きに着手し、恵みの時代の始まりを導いた。つまり、神は新しい時代をもたらし、古い時代を廃し、さらに「神は初めであり、終わりである」という言葉を成就させたのである。言い換えるならば、人間は神性の働きを基礎として人間の働きを行わなければならないのである。イエスは語るべき言葉をすべて語り、地上での働きを終えた後、人間のもとから去った。その後、すべての人はイエスの言葉に表された原則に基づいて働き、イエスが語った真理に従って実践した。これらはみなイエスのために働く人々だった。働きを行なったのがイエス一人だけだったなら、いかに多くの言葉を語ったとしても、人々がイエスの言葉と触れ合うことはなかっただろう。なぜなら、イエスは神性において働き、神性の言葉しか語れず、普通の人がその言葉を理解できるところまで物事を説明できたはずがないからである。だからイエスは、自分の後に続いた使徒や預言者に、自身の働きを補足させなければならなかったのである。これが受肉した神の働き方の原則である。すなわち、神性の働きを完成させるべく、受肉した体を用いて語り、働き、さらに、神の心にかなう少数の人、あるいはもっと多くの人を用いて神の働きを補うのである。つまり、神は人間性において牧し、潤すという働きを行うために、自身の心にかなう人々を使い、それにより神の選民が真理の現実に入れるようにするのである。

肉とった神が神性の働きだけを行い、神の心に従いつつ神と協力して働く人々がいなければ、人間は神の旨を理解することも、神に関わることもできないだろう。神は自身の心に従う普通の人々を用いてこの働きを完成させ、諸教会を見守り牧し、人間の認知機能と頭脳が思い描ける水準に達しなければならない。言い換えれば、神は神性において行う働きを「翻訳」するために、自身の心に従う少数の人々を使うのであり、それにより神性における働きを開くことができる、つまり神性の言語が人間の言語に変換され、人々がそれを理解し、把握できるようになるのである。もし神がそうしなかったなら、誰も神の神性の言語を理解しないだろう。なぜなら、神の心に従う人々は結局のところ少数派であり、人間の理解力は弱いからである。そのため、神は受肉した体において働くときにのみ、この方法を選ぶのである。神性の働きしか存在しなければ、人間は神の言語を理解しないので、人間が神

を知り、神と関わることはできないだろう。人間がこの言語を理解できるのは、神の心に従う人々の仲介を通してのみであり、その者たちが神の言葉を明確にするのである。しかし、人間性において働くそのような人々しかいなければ、それは人間の普通の生活を維持することしかできず、人間の性質を変化することはできないだろう。神の働きが新しい出発点を得ることはできず、以前と同じ古い歌、陳腐な言葉があるだけである。神は受肉している間に語られるべきことをすべて語り、行われるべきことをすべて行い、その後人々は神の言葉に従って働き、経験するのであるが、その受肉した神の仲介を通してのみ、人々のいのちの性質は変わることができ、人々は時代とともに進むことができる。神性において働くものは神を表し、人間性において働くものは神に用いられる人々である。つまり、受肉した神は、神によって用いられる人々とは本質的に異なる。受肉した神は神性の働きを行えるが、神によって用いられる人々にはできない。それぞれの時代の始まりにおいて、神の霊は自ら語り、新しい時代を始め、人間を新しい始まりへと導く。神が語り終えたとき、それは神性における神の働きが完了したことを意味する。その後、人々はみな神によって用いられる人々の導きに従い、いのちの経験に入る。同様に、これもまた神が人間を新しい時代へ導き、人々に新しい出発点を与える段階である。そのとき、肉における神の働きは完結するのである。

神が地上に来るのは、自身の普通の人間性を完成させるためでも、普通の人間性の働きを行うためでもない。神が来るのはひとえに、普通の人間性において神性の働きを行うためである。神が普通の人間性について語ることは、人間が想像するものとは違う。人間は「普通の人間性」を、妻あるいは夫、そして息子や娘をもつことだと定義する。これが普通の人であることの証明である。しかし、神はそのような見方をしない。神は普通の人間性を、普通の人間の思考をもち、普通の人間の生活をし、普通の人々から生まれることだと見なしている。しかし、神の普通性には、人間が普通性について語るように、妻あるいは夫、および子どもをもつことは含まれない。つまり、神が語る普通の人間性は、人間からすると、ほとんど感情がなく、見るからに肉体的要求がないかのような、人間性の欠如と考えられるものであり、ちょうどイエスのように、普通の人間の外見をし、普通の人間のごとく見えるものの、本質的に言えば、普通の人々が有しているべきものを完全に有しているわけではないのである。このことから、受肉した神の本質は普通の人間性全体を含んでいるのではなく、普通の人間生活の決まり事を支え、普通の人間の理知を維持するために人々がもつべきものの一部だけを含んでいることがわかる。しかし、それらのものは、人間が普通の人間性で見なすものとは一切関係ない。それらは受肉した神がもつべきものである。しかし、受肉した神は、妻や息子や娘、つまり家族を

もって初めて普通の人間性をもっていると言うことができると主張する人々がいる。これらの人々が言うには、それらがなければ普通の人間ではないのである。それでは尋ねるが、「神に妻がいるのか。神が夫をもつことは可能なのか。神は子をもてるのか」。これらは間違った考えではないのか。しかし、受肉した神が岩の割れ目から飛び出したり、空から落ちてきたりすることはありえない。普通の人間の家族に生まれることしかできないのである。これが、受肉した神に親や姉妹がいる理由である。それらは受肉した神の普通の人間性をもたなければならないものである。イエスの場合がそうだった。イエスには父と母、兄弟姉妹がおり、これはすべて正常なことだった。しかし、イエスに妻や息子、娘がいたならば、イエスの人間性は、受肉した神がもつようと神が意図した人間性ではなかっただろう。そうだったなら、イエスは神性を代表して働くことができなかつたはずだ。イエスが神性の働きを行えたのは、イエスに妻や子どもはいなかつたものの、普通の人から普通の家族に生まれたからこそである。このことをさらに明確にするならば、神が普通の人と見なすものは、普通の家族に生まれた人である。そのような人にのみ神性の働きを行う資格がある。一方、その人に妻や子ども、あるいは夫がいたならば、その人は神性の働きを行うことができないだろう。なぜならその人は、人が求める普通の人間性だけをもち、神が求める普通の人間性をもつはずがないからである。神の考えることと人々が理解していることはしばしば大きく異なり、かけ離れている。神の働きのこの段階において、人々の観念に真っ向から反し、大きく異なることが多くある。神の働きのこの段階は、ひとえに神性が直接行う働きから成っており、人間性が補助的な役割を果たしていると言えるだろう。神は人間に神の働きをさせるのではなく、自ら行うために地上に来るのだから、自ら受肉して（完全ではない普通の人として）働きを行うのである。神はこの受肉を用いることで、人類に新しい時代をもたらし、神の働きにおける次の段階を伝え、神の言葉に表される道に従って実践するよう人々に求める。これにより、肉における神の働きは完結する。神は人類のもとを去ろうとしており、もはや普通の人間性の肉の中に留まっておらず、むしろ働きの別の部分に着手すべく人間から離れつつある。そして、神の心に従う人々を用い、この人々の集まりの中、神は地上での働きを続けるが、それはこの人々の人間性においてである。

受肉した神が永遠に人とともに留まることはできない。なぜなら、神には他にすべき働きが多くあるからである。神は肉に縛られていることができない。たとえ肉の姿でその働きを行うにしても、神は肉を脱ぎ捨ててなすべき働きを行わなければならないのである。神は地上に来るとき、普通の人々が死んで人類のもとから離れる前に達すべき形になるまで待つことはない。その肉体の年齢に関わらず、自身の

働きが完了したとき、神は人間のもとを離れて行く。神に年齢というものはなく、人の寿命にそって自身の余命を数えることはない。その代わりに、神は自身の働きの歩みに沿って、その肉体における生涯を終える。肉となった神は、ある段階まで歳をとり、成人し、老年に達し、肉体が衰えて初めて去るはずだと思っている人がいるかもしれない。それは人間の想像である。神はそのように働かない。神は行すべき働きを行うためだけに肉となるのであり、両親のもとに生まれ、成長し、家族を築き、仕事を開始し、子どもをもち、人生の浮き沈みを経験するといった、普通の人のあらゆる活動から成る、普通の生涯を生きるためではない。神が地上に来るときは、神の霊が肉をまとい、肉になるのだが、神は普通の人間の生涯を送るのではない。神は自身の経営（救いの）計画の一部を達成するためだけに来る。その後、神は人類のもとを去る。神が肉になるとき、神の霊はその肉体の普通の人間性を完全にしない。むしろ、神があらかじめ決めた時に、神性が直接働き出すのである。そして、神が行うべきあらゆることを行い、自身の職分を完了させた後、その段階における神の霊の働きは完了し、この時点で神の肉体がその寿命を全うしたか否かに関わらず、受肉した神の生涯も終わる。つまり、その肉体が生涯のどの段階に到達しようと、またその肉体が地上でどれほど長く生きようと、すべては霊の働きにより決められるのである。それは、人間が普通の人間性で見なすものとは一切関係がない。例としてイエスを考えてみよう。イエスは肉体において33年半のあいだ生きた。人間の肉体の寿命としては、その年齢で死に、去るべきではなかった。しかしそれは、神の霊にとってまったく重要なことではなかった。自身の働きが終わったので、その時点で肉体は取り去られ、霊とともに消え去った。これが、神が肉において働く原則である。だから、厳密に言えば、受肉した神の人間性には特に重要なところがない。繰り返すと、受肉した神が地上に来るのは、普通の人間の生涯を送るためではない。まず初めに普通の人間生活確立し、次に働きを開始するのではない。むしろ、普通の人間の家族に生まれる限り、受肉した神は神性の働きを行うことができる。その働きは人間の意図によって汚されておらず、肉的なものではなく、社会のやり方を取り入れることも人間の思考や観念を含むことも絶対になく、ましてや人の処世哲学に関わることもない。これが受肉した神の行おうとする働きであり、それはまた神の受肉の実際的な意義でもある。神が肉になるのはおもに、他の取るに足りない過程を経ることなく、肉において行われるべき段階の働きを行うためである。そして、普通の人の経験について言えば、神はそれらをもたない。受肉した神の肉が行うべき働きに、普通の人の経験は含まれていない。だから、神が肉となるのは、肉において成し遂げなければならない働きを成し遂げるためである。残りのことは受肉した神とは無関係であり、それほど多くの取るに

足りない過程を経ることはない。ひとたび受肉した神の働きが終わると、その受肉の意義もまた終わる。この段階を終えることは、神が肉において行うべき働きが終わり、神の肉における職分が完成したことを意味する。しかし、神はいつまでも肉において働き続けることはできない。働くために別の場所、つまりその肉の外にある場所へ移動しなければならない。そのようにしてのみ、神の働きは完璧に行われ、発展してさらに大きな効果を生み出せる。神は自身の本来の計画に従って働く。自分が何の働きを行うべきか、何の働きを完了させたかについて、神は掌を指すかのごとく明確に知っている。神は一人ひとりの人間を導き、自身があらかじめ定めた道に沿って歩かせる。誰もこれを逃れられない。神の霊の導きに従う人だけが安息に入れる。その後の働きにおいては、人間を導くために神が肉において語るというのではなく、目に見える形をもつ霊が人間の生活を導くことになるかもしれない。そのとき初めて、人間は実際に神に触れ、神を見、神が求める現実によりよく入り、実際の神により完全なものとされる。これが、神が達成するつもり働きであり、また長きにわたり計画してきたことである。このことから、あなたがたはみな自分が進むべき道を見ることだろう。

信仰においては現実に集中せよ—— 宗教的儀式を行うことは信仰ではない

あなたは宗教的慣習をいくつ守っているだろうか。神の言葉に逆らって、自分の道に行ってしまったことが何回あるだろうか。神の重荷を真に考慮し、神の旨が成就されることを求めて、神の言葉を実行したことが何度あるだろうか。神の言葉を理解して、それを実行に移しなさい。すべての行動と行いに原則を持ちなさい。それは規則に従うということではなく、体裁のために何かを渋々することでもなく、真理を実践し、神の言葉によって生きるということである。そのような実践こそ、神を満足させることができるのだ。神を喜ばせる行為とは、規律を遵守することではなく、真理を実践することである。一部の人々には周りの注意を引こうとする傾向がある。そのような人たちは、兄弟姉妹の前では神に恩義があると言うかもしれないが、陰では真理を実践することもなく、まったく違うことを行っている。彼らは宗教熱心なパリサイ人ではないか。神を心から愛し、真理を持っている人というのは、神に忠実でありながらそれを誇示しない人のことだ。そうした人は必要であれば喜んで真理を実践するし、良心に逆らって話したり行動したりするようなことはしない。そして問題が起きると賢明さを示し、どんな状況下でも原則に基づいて行動する。このような人こそ、真に神に仕えることができる。中にはただ

口先だけで神に恩義があると言う人もいる。彼らはしかめっ面をし、わざとらしくみじめな表情を装って日々を過ごしている。なんと卑劣な態度だろう。もし彼らに、「どんな風に神様に恩義があるのか教えてください」と尋ねたら、彼らはきっと言葉を失うだろう。あなたが神に忠実ならば、そのことを大っぴらに話してはいけない。その代わり、神に対するあなたの愛を実践で示し、そして心から神に祈りなさい。神にただ言葉でおざなりに対応している人たちは、すべて偽善者である。一部の人たちは祈りのたびに神に対する恩義を語り、聖霊に動かされていないにも関わらず、祈るたびに涙を流す。このような人たちは宗教的儀式と観念に捕われており、そうした儀式や観念に従って生きながら、いつもそのような行為を神が喜び、表面上の信心深さや悲しみの涙を神が好むと信じている。そのような馬鹿げた考えを持つ者から、どんな良いことが生まれようか。また一部の人々は、謙虚さを示そうと、他の人の前で話すときは上品に振る舞ったりする。また人前で故意に卑屈になり、無力な子羊のように振る舞う人たちもいる。これが神の国の民にふさわしい態度だろうか。神の国の民とは、生き生きとして自由で、純真で率直で、正直で愛らしく、束縛されない生き方をするものだ。彼らには品性と尊厳があり、どこに行っても神に証しを立てることができる。そのような人は神と人の両者から愛されている。信仰において未熟な人たちは、外的な実践にこだわりすぎる。彼らはまず神に取り扱われ、打ち碎かれる時期を経なければならない。心の奥に信仰を持つ人々は、外見は他者と同じであっても、その行動や行いは称賛に値する。そのような人たちこそ、神の言葉を生きていると言えるのだ。もしあなたが毎日さまざまな人々に福音を宣べ伝え、彼らを救いに導こうと努めているとしても、結局のところ規則や教義に従って生きているなら、神に栄光をもたらすことはできない。そのような人たちは単なる宗教家であり、同時に偽善者なのである。宗教熱心な人々の集まりではいつも、「姉妹よ、最近はどうされていきましたか？」、「わたしは神様に恩義があるのに、神様の旨を満たせないような気がするんです」などというやり取りがあったりする。また別の人も、「わたしも神様に恩義があるのに、神様を満足はさせられない気がするんです」などと言ったりする。こうしたわずかな言葉だけでも、彼らの心の奥深くにある卑劣さが見て取れる。そのような言葉は実に忌まわしく、極めて不快なものだ。こうした人たちの本性は神に敵対している。現実に関心を合わせている人は、心にあることをそのまま言葉にし、交わりの中で自分の心をさらけ出す。偽りの行いはひとつもせず、形式的な礼儀にもこだわらず、空虚な社交辞令も言わない。いつも単刀直入で、現世の規則に縛られることもない。また一部の人々は、見せびらかすことにこだわる傾向があり、挙句の果てにまったく分別を失っているほどだ。他の人が歌うと踊り始め、鍋の米が焦げていることにも気が

付かない。そのような人たちは敬虔ではなく、尊敬にも値せず、あまりにも軽率だ。こうしたことはすべて現実の欠如の顕れである。一部の人々は霊的いのちについて交わりを持つとき、神に恩義があるなどと言いはしなくても、心の奥に神への真の愛を秘めている。神に恩義があるというあなたの感情は、他の人々とは無関係だ。なぜならあなたは人ではなく神に恩義があるのだから。それを絶えず人に話したところでどうなるのか。外見上の熱心さや見せかけではなく、現実に入ることに重点を置きなさい。人のうわべだけの良い行いは何を表すだろうか。それは肉を表しており、外面上最善の実践をしたところで、それはいのちではなくただあなた個人の性質を表すだけだ。人の外面的な実践では、神の願いを成就することはできない。あなたは絶えず神に恩義があると言っているが、誰かにいのちを与えたり、神を愛するよう誰かを導いたりすることもできない。それで神を満足させられると信じているのか。あなたは自分のしていることが神の旨にかなっており、霊的なことだと感じているが、実際にはすべてが実にばかっている。あなたは自分が嬉しいと思うことや自分がしたいと思うことが、まさに神も喜ぶことだと信じている。あなたの好みは神の好みを表すだろうか。人の性格が神を表すことができるだろうか。あなたが喜ぶものはまさしく神が嫌悪するものであり、あなたの習慣は神が忌み嫌い拒絶するものだ。もし神に恩義を感じるなら、神の前に出て祈りなさい。それを誰かに話す必要などない。神の前で祈ることもせず、人の注目を引いてばかりいるなら、神の旨を成就することなどできるだろうか。あなたの行動が常に見せかけだけなら、それはあなたが極度にうぬぼれの強い人間だということだ。表面上良い行いをするだけで現実性に欠ける人間とは、どんな種類の人間か。それは偽善者のパリサイ人であり、単なる宗教家でしかない。あなたがたが見せかけの実践をやめず、変わることができないなら、あなたがたの中にある偽善的要素はさらに増大するだろう。偽善的要素が大きければ大きいほど、神への抵抗が強くなる。そして最終的に、そのような人々は必ず排除されることになるのだ。

今日の神の働きを知る者だけが、神に仕えてもよい

神の証しをして赤い大きな竜を辱めるには、一つの原則を持ち、一つの条件を満たさなければならない。それは、心の中で神を愛し、神の言葉に入ることである。神の言葉に入らない限り、サタンを辱めることはできない。いのちの成長を通して、あなたは赤い大きな竜と関係を絶ち、それを完全に辱める。それこそが、赤い大きな竜を真に辱めるということである。神の言葉を進んで実践すればするほど、あなたが神を愛し、赤い大きな竜を嫌悪しているという証拠は大きくなる。神の言

葉に従えば従うほど、あなたが真理を切望しているという証拠は大きくなる。神の言葉を切望しない人々は、いのちのない人々である。そのような人は神の言葉の外にあり、宗教に属している。真に神を信じる人々は、神の言葉を飲み食いすることを通して、神の言葉に関するさらに深い認識を持つ。神の言葉を切望しないのであれば、あなたは神の言葉を真に飲み食いきず、神の言葉に関する認識がなければ、神を証しする術も神を満足させる術もあなたにはない。

神を信じることに於いて、どのように神を知るべきだろうか。逸脱や誤謬を避けつつ、今日の神の言葉と働きに基づいて神を知るようにならなければならない、何よりもまず神の働きを知るべきである。これが神を知る基礎である。神の言葉の純粋な理解に欠ける様々な誤謬はみな宗教的な観念であり、逸脱して誤った理解である。宗教家は、過去に理解された神の言葉を取り上げ、今日の神の言葉と照らし合わせる技能に最も長けている。今日の神に仕える際、聖霊による過去の啓示で明かされた物事に固執するなら、あなたの奉仕は妨害を引き起こし、あなたの実践は時代遅れのものであり、ただの宗教的儀式に過ぎない。様々な性質の中でも、神に仕える者は外から見て謙虚で辛抱強くなければならないと信じているとしたら、また、そのような認識を今日実践しているとしたら、そのような認識は宗教的な観念であり、そのような実践は偽善的である。「宗教的な観念」という言葉は古く廃れたもの（神が以前に語った言葉の理解や、聖霊によって直接明かされた光も含む）を指しており、それらを今日実践するなら、神の働きを妨害し、人に益をもたらさない。宗教的な観念に属するそれらの物事を自分から一掃することができなければ、神に対するその人の奉仕の大きな妨げとなってしまう。宗教的な観念を持つ人々は、聖霊の働きの歩みに歩調を合わせる術を持たず、一步そしてまた一步と遅れをとる。その理由は、これらの宗教的な観念が人を非常に独善的かつ傲慢にになってしまうからである。神は自身の過去の言動に懐古の念を抱くことがなく、廃れたものは淘汰する。あなたは自身の観念を手放すことが本当にできないのか。過去に神が語った言葉に固執するのであれば、あなたが神の働きを知っているという証拠になるのか。今日の聖霊の光を受け入れることができず、過去の光にしがみついているとしたら、あなたが神の足跡に従っている証拠になるだろうか。あなたはいまだ宗教的な観念を手放せないのか。そうであれば、あなたは神に逆らう人になるだろう。

宗教的な観念を手放すことができれば、その人は自分の頭脳を使って今日の神の言葉や働きを測ったりせず、むしろ直接従うはずだ。今日の神の働きは過去のものとは明らかに違っているが、あなたは過去の見方を手放し、今日の神の働きに直接従うことができる。神が過去にどう働きを行ったかに関係なく、今日の神の働きを尊ぶべきだと理解できれば、あなたは自分の観念を捨て、神に服従し、神の働きと言

葉に従い、神の足跡に付き従うことができる人である。ここにおいて、あなたは真に神に従う人になる。神の働きを分析することも吟味することもないが、それはあたかも、神が自身による過去の働きを忘れ、あなたもまた忘れたかのようである。現在は現在であり、過去は過去であり、そして今日、神は自身が過去に行ったことを脇にのけたのだから、あなたはそれに浸っていてはならない。このような人だけが神に完全に従い、自身の完全に宗教的な観念を手放した者である。

神の働きにはいつも新しい進展があるので、新たな働きが生じた際には、廃れて古くなる働きも出てくる。これら新旧異なる種類の働きは矛盾するものではなく、補い合うものであり、一步また一步と続いている。新しい働きがある以上、古い働きは当然淘汰されなければならない。たとえば、長年実践されてきた慣習や、習慣的に用いられてきた言い習わしは、長年にわたる人の経験や教えと相まって、人の心にありとあらゆる観念を形成した。長年にわたる古代からの伝統的な理論の広まりと共に、神が自分の真の顔と本来の性質をいまだ完全には人に現していないという事実は、人間のそうした観念の形成にとってさらに好都合だった。人が神を信じる過程において、様々な観念の影響により、神についてのありとあらゆる観念的な認識が人々の中で継続的に形成され、進化し、それによって神に仕える数多くの宗教人が神の敵になったと言えるだろう。したがって、人々の宗教的な観念が強ければ強いほど、彼らは神に逆らい、神の敵となってしまう。神の働きはいつも新しく、決して古くない。教義を形作することは一切なく、むしろ程度の差はあれ継続的に変化し、新たにされる。このような形で働きを行うことは、神自身に固有の性質の表れである。それはまた神の働きに固有の原則でもあり、神が自身の経営を成し遂げる手段の一つである。仮に神がこのような形で働かないとしたら、人は変わらず、神を知ることでもできず、サタンが打ち負かされることもないだろう。よって、神の働きにおいては、一貫性のないように見える変化が継続して生じるものの、それは実際のところ、周期的なものである。しかしながら、人が神を信じる方法はまったく異なり、親しみのある古い教義や制度にしがみつき、それが古ければ古いほど心地よく感じる。石のように頑固で愚かな人の頭脳が、神による計り知れない多数の新しい働きと言葉を、どうして受け入れることができようか。いつも新しく決して古くない神を人は嫌悪する。人が好むのは、歳をとり、髪が白く、同じ場所から動かない古い神だけだ。つまり、神と人はそれぞれ好みが異なるので、人は神の敵となったのである。神が新しい働きを行って六千年近く経った今日でも、このような矛盾の多くが依然として存在する。ゆえに、手の施しようはない。それは人の頑固さが原因かもしれないし、神の行政命令が人間には不可侵であるがゆえかもしれない。しかし、聖職者がかびの生えた古い本や書物に固執する一方、神はいま

だ完成していない経営の働きを、あたかも味方が誰一人いないかのように遂行している。これらの矛盾により、神と人とが敵対し、解決不可能にさえなっているが、神は、そのような矛盾など浮かんでは消えるともいうように、気にも留めない。しかし、人は自分の信念と観念にしがみつき、それらを決して手放さない。それでも、はっきりしていることが一つある。つまり、人が自分自身の姿勢を変えなくても、神の足は常に動いており、神は状況に応じて絶えず自分の姿勢を変える、ということである。最終的に、戦わずして打ち負かされるのは人間である。一方、神は敗北したすべての敵にとって最大の敵であり、打ち負かされたかいまだ打ち負かされていないかを問わず、人類の擁護者である。誰が神と競って勝利できるのか。人の観念の多くは神の働きが発端となるため、神に由来するように思える。しかし、神はそのために人を赦すことなどしないし、神の働きから外れている「神のため」の製品を、その働きに続いて次々製造する人を褒めそやすことももちろんしない。それどころか、神は人の観念や古くて敬虔な信仰にこの上なく嫌気がさしていて、これらの観念が生まれた日を認めるつもりすらない。人の観念は人によって広められ、それらの源は人の思考と頭脳であり、神ではなくサタンに由来するものなので、これらの観念は自身の働きによって生じたものだ、神は決して認めない。神の意図は常に、自身の働きを、古く死んだものではなく、新しく生き生きとしたものにするのであり、神によって人の扱いどころとされたものは時代や期間に合わせて変化し、永遠不朽のものでも不変のものでもない。これは、神が人を生かして新たにさせる神であり、人を死に至らせ古くする悪魔ではないからである。あなたがたはまだこれが理解できないのか。あなたは心を閉ざしているので、神について観念を抱き、手放すことができない。それは、神の働きが理不尽だからでも、人間の願望とかけ離れているからでもなく、ましてや神がいつも自身の本分に怠慢だからではない。あなたが自分自身の観念を手放せないのは、従順さに欠けすぎているから、また被造物らしさが少しもないからであって、神があなたを困らせているからではない。すべての原因はあなたであり、神とは一切関係ない。すべての苦しみと不幸は人が引き起こしている。神の思考はいつも良いものであって、あなたに観念を生み出させようとは願っていない。あなたが時代とともに変わり、新しくなることを願っている。それでもあなたは、自分にとって良いことは何かを知らず、いつも吟味や分析をしている。神があなたを困らせているのではなく、あなたが神への畏れを持っておらず、あまりに不従順なだけなのだ。小さな被造物が、かつて神から与えられたもののほんの一部を取り、それから身を翻し、それを用いて神を攻撃しようとする。これこそ人の不従順ではないのか。人には神の前で自分の見方を表明する資格などまったくなく、ましてや悪臭を放つ無意味で腐った美辞麗句を、

自分の好きなようにひけらかす資格などないと言っていいし、かびの生えた観念については言うまでもない。それらはさらに無価値ではないのか。

真に神に仕える人は、神の心にかない、神に用いられるのにふさわしく、宗教的な観念を手放すことのできる人である。神の言葉を飲み食いすることで効果を上げたいと望むなら、自分の宗教的な観念を手放さなければならない。神に仕えたいと望むなら、まずは宗教的な観念を手放し、万事において神の言葉に従うことがなおさら必要である。これが、神に仕える人が持つべきものである。あなたがこの認識に欠けているなら、仕え始めたとともに妨害や障害を引き起こしてしまう。そして自分の観念にしがみつくなれば、神に打ち倒されることは避けられず、二度と起き上がれないだろう。現在を例にとって説明しよう。今日の発言や働きの多くは、聖書あるいは神による以前の働きと一致しておらず、従うことを望まないなら、あなたはいつでも躓いてしまう。神の旨に沿って仕えたいと願うなら、まず宗教的な観念を手放し、自分自身の見方を正さなければならない。これから語られることの多くは過去に語られたことと相容れず、従う意志が現在欠けているなら、あなたはこの先歩み続けることができない。神による働きの方法の一つがあなたの中に根付いていて、それを手放すことができなければ、その方法があなたの宗教的な観念になってしまう。神そのものがあなたの中に根付いていれば、あなたはすでに真理を得ており、神の言葉と真理があなたのいのちになれるのであれば、あなたはもはや神についての観念を抱いていない。神に関して真の認識を持つ人は観念を持たず、教義に固執することもないのである。

以下の問いかけをして常に警戒を怠らないように。

- 1.あなたの中にある認識が神への奉仕の妨げになっているか。
- 2.あなたの日常生活にどれだけ多くの宗教的な行為があるか。敬虔さを装うだけであれば、あなたはいのちにおいて成長し、成熟したといえるか。
- 3.あなたは神の言葉を飲み食いするとき、宗教的な観念を手放すことができるか。
- 4.あなたは祈るとき、宗教的な儀式を一掃できるか。
- 5.あなたは神に用いられるのにふさわしい人か。
- 6.神に関するあなたの認識には、宗教的な観念がどれくらい含まれているか。

神の最新の働きを知り、神の歩みに従え

現在、あなたがたは神の民になることを追い求め、正しい道への全面的な入りを始めるべきである。神の民になることは、神の国の時代へ入ることを意味する。今日、あなたがたは神の国の訓練へと正式に入り始め、あなたがたの未来の生活は以

前のように怠慢でいい加減なものではなくなる。以前のように生きるならば、神が求める基準に達することはできない。緊迫感がないのであれば、それはあなたに自分を改善する願望がなく、あなたの追求はまごつき混乱しており、あなたは神の旨を満足させられないことを示している。神の国の訓練に入ることは、神の民の生活を始めることを意味する。あなたはそうした訓練を受け入れる覚悟があるか。緊迫感をもつ覚悟があるか。神の鍛錬の下で生きる覚悟があるか。神の刑罰の下で生きる覚悟があるか。神の言葉があなたに臨み、あなたを試すとき、あなたはどう行動するのか。あらゆる事実直面したとき、あなたは何をするのか。過去において、あなたはいのちに重点を置いていなかった。そして今日、あなたはいのちの現実に入り、いのちの性質の変化を追い求めなければならない。それが神の国の民によって達成されなければならないことである。神の民である者はみないのちをもち、神の国の訓練を受け入れ、いのちの性質の変化を追い求めなければならない。それが神の国の民に対して神が求めることである。

神の国の民に対する神の要求は次のとおりである。

1.神が託す任務を受け入れなければならない。つまり、神による終わりの日の働きで語られた言葉をすべて受け入れなければならない。

2.神の国の訓練に入らなければならない。

3.自分の心が神によって感動することを追い求めなければならない。あなたの心が完全に神へと立ち返り、正常な霊的生活があれば、あなたは自由の領域で生きることになり、それは神の愛の配慮と加護のもとで生きることの意味する。神の配慮と加護のもとで生きて初めて、あなたは神のものになる。

4.神によって得られなければならない。

5.地上における神の栄光の顕示とならなければならない。

以上の五点があなたがたに託すわたしの任務である。わたしの言葉は神の民に向けて語られており、もしもあなたにこれらの任務を受け入れる気がないのであれば、わたしは強制しない。しかし、もしも誠実に受け入れるなら、あなたは神の旨を行なうことができる。今日、あなたがたは神が託す任務を受け入れ始め、神の国の民になること、そして神の国の民であるために求められる基準に達することを追い求める。これが入りの第一歩である。神の旨を完全に行なうことを望むなら、これら五つの任務を受け入れなければならず、これらを達成することができれば、あなたは神の心にかない、神は必ずやあなたを大いに用いるだろう。今日重要なことは、神の国の訓練に入ることである。神の国の訓練への入りには、霊的生活が関わっている。これまで、霊的生活について語られたことはなかったが、今日、神の国の訓練に入り始める中、あなたは霊的生活へと正式に入ることになる。

靈的生活とはどのような生活なのか。靈的生活とは、あなたの心が神へと完全に立ち返り、神の愛に思いを馳せることができる生活である。それは神の言葉の中で生きる生活であり、心を占めるものは他になく、今日の神の旨を把握することができ、そして自分の本分を尽くすべく、今日の聖霊の光によって導かれる生活である。人と神とのそのような生活こそが靈的生活である。もしも今日の光に従うことができなければ、神との関係において距離が開いたのであり、関係が絶たれたことさえあり得る。そして、あなたには正常な靈的生活がないのである。神との正常な関係は、今日の神の言葉を受け入れるという基盤の上に築かれる。あなたには正常な靈的生活があるのか。神との正常な関係があるのか。あなたは聖霊の働きに従う人なのか。今日の聖霊の光に従うことができ、神の言葉の中にある神の旨を把握し、これらの言葉に入ることができるなら、あなたは聖霊の流れに従う人である。聖霊の流れに従わなければ、あなたは間違いなく真理を追求しない人である。自分を改善する願望がない人の中で聖霊が働く機会はなく、その結果、そうした人たちは決して力を奮い起こせず、常に消極的である。今日、あなたは聖霊の流れに従っているか。聖霊の流れの中にいるか。消極的な状態から脱したか。神の言葉を信じる人、神の働きを基盤とする人、今日の聖霊の光に従う人はみな聖霊の流れの中にいる。神の言葉は疑問の余地なく真実で正しいと信じるなら、そして神が何を言おうとその言葉を信じるなら、あなたは神の働きへの入りを追い求める人であり、このようにして神の旨を成就させる。

聖霊の流れに入るには、神との正常な関係をもたなければならず、まずは消極的な状態から抜け出さなければならない。常に群衆に従い、心が神からあまりに遠く離れた人がある。そのような人には自分を改善したいという願望がなく、追い求める基準はあまりに低い。神を愛し、神に得られるのを追い求めることだけが神の旨である。自分の良心だけを使って神の愛に報いようとする人もいるが、それでは神の旨を満たせない。追い求める基準が高ければ高いほど、よりいっそう神の旨にかなう。正常な人、神への愛を追い求める人として、神の国に入って神の民の一人になることは、あなたがたの真の未来であり、それはこの上ない価値と意義をもつ人生であって、あなたがた以上に祝福されている人はいない。なぜわたしはそう言うのか。それは、神を信じない人は肉のために生き、サタンのために生きているが、今日あなたがたは神のために生き、神の旨を行なうために生きているからである。あなたがたの人生にはこの上ない意義があるとわたしが言うのはそのためである。神によって選ばれたこの人々の集団だけが、この上なく有意義な人生を生きることができる。地上の誰もそのような価値と意義のある人生を生きることはいない。神に選ばれ、神に引き上げられているために、またそれ以上に、あなたがたに対す

る神の愛ゆえに、あなたがたは真の人生を把握しており、この上なく有意義な人生をどう生きるかを知っている。これはあなたがたの追求が優れているからではなく、神の恵みのためである。あなたがたの霊の目を開いたのは神であり、あなたがたの心を感動させ、神の前に出るという幸運を与えたのは神の霊だった。神の霊があなたがたを啓いていなければ、あなたがたは神のどこが美しいかがわからず、神を愛することもできないだろう。人々の心が神へと立ち返ったのは、ひとえに神の霊が彼らの心を感動させたからである。神の言葉を享受しているとき、あなたの霊が感動し、自分は神を愛さないわけにはいかない、あるいは自分の中に大きな力があり、自分に捨てられないものは何もないと覚えることがある。このように感じるならば、あなたは神の霊によって感動し、心が神へと完全に立ち返ったのである。そしてあなたは神に祈り、このように言うだろう。「神よ。わたしたちは本当にあなたによって予定され、選ばれました。あなたの栄光はわたしに誇りを与え、自分が神の民の一人であることを光栄に感じさせます。わたしはあらゆるものを費やし、あらゆるものを捧げてあなたの御旨を行ない、わたしのすべての年月と一生の努力をあなたに献上します」。このように祈るとき、あなたの心には神への果てしない愛と真の服従がある。あなたはこのような経験をしたことがあるか。神の霊によって頻繁に感動すると、人は祈りの中で特に進んで自分を神に捧げようとする。「神よ、わたしはあなたの栄光の日を見ること、あなたのために生きることを望みます。あなたのために生きることに価値や意義のあることはなく、サタンや肉のために生きたいという願望は少しもありません。今日あなたのために生きられるようにして下さることで、あなたはわたしを引き上げてくださいます」。このように祈るとき、自分は神に心を捧げずにはいられず、神を得なければならず、生きている間に神を得ないまま死ぬのは耐えられないと覚えるだろう。そのような祈りを唱えると、あなたの中には尽きせぬ力があり、あなたはその力がどこから来るのかわからない。あなたの心の中には無限の力があり、神はとても美しく、愛する価値があるという感覚をもつ。神によって感動するとこのようになる。こうした経験をした人はみな神によって感動したのである。神によって頻繁に感動する人には、いのちに変化が起こる。彼らは決意することができ、自ら進んで完全に神を得ようとする。心の中で神への愛がさらに強くなり、心は完全に神へと立ち返り、家族、世間、複雑な人間関係、そして自分の未来を顧みることがなくなり、一生の努力を神に捧げようとする。神の霊によって感動した人はみな真理を追い求める人であり、神によって完全にされる希望をもつ人である。

あなたは自分の心を神に立ち返らせたのか。あなたの心は神の霊によって感動したのか。そのような経験をしたことがないのであれば、そして、そのように祈った

ことがないのであれば、それはあなたの心に神の居場所がないことを示している。神の霊によって導かれ、神の霊によって感動した人はみな神の働きを有しており、そのことは、神の言葉と神の愛がその人の中に根付いたことを示す。中には、「祈るとき、わたしはあなたほど真剣ではなく、神によってそれほど感動することもあります。瞑想して祈るとき、時々神は美しいと感じ、心が神によって感動するくらいです」と言う人がいる。人の心より重要なものはない。あなたの心が神へと立ち返ったなら、あなたの全存在が神へと立ち返ったことになり、その際あなたの心は神の霊によってすでに感動しているだろう。あなたがたの大半はそのような経験をしたことがあり、ただ各自の経験の深さが同じではないというだけである。中にはこのように言う人がいる。「わたしは祈りの言葉をさほど口にせず、ただ他の人々の交わりに耳を傾けますが、そうするとわたしの中に力が湧いてきます」。これは、あなたが内面において神によって感動したことを示している。内面において神によって感動した人は、他の人の交わりを聞くと鼓舞される。鼓舞するような言葉を聞いても心がまったく感動しないのであれば、聖霊の働きがその人の中にないことを証明している。そうした人の中に渴望はなく、それは決意がない証拠であり、ゆえにそのような人には聖霊の働きがない。神によって感動した人は、神の言葉を聞くと反応を起こす。神によって感動していなければ、その人は神の言葉に関わっておらず、それらと無関係であり、啓かれることができない。神の言葉を聞いても反応しなかった人は、神によって感動しなかった人である。そのような人は聖霊の働きがない人である。新しい光を受け入れられる人はみな感動し、聖霊の働きを有している。

あなた自身を評価しなさい。

- 1.あなたは聖霊の現在の働きのただ中にいるか。
- 2.あなたの心は神に立ち返ったか。神によって感動したか。
- 3.神の言葉があなたの中に根付いたか。
- 4.あなたの実践は神の要求の基盤の上に築かれているか。
- 5.あなたは聖霊の現在の光による導きの下で生きているか。
- 6.あなたの心は古い観念によって支配されているか、それとも神の現在の言葉によって支配されているか。

これらの言葉を聞いて、あなたがたの中にどのような反応が生じただろうか。長年にわたって信仰してきて、あなたは神の言葉を自分のいのちとしているのか。以前の墮落した性質に変化があったのか。いのちをもつとはどういうことか、いのちをもたないとはどういうことかを、今日の神の言葉にしたがって認識しているか。それはあなたがたにとって明らかなのか。神に従う中で最も重要なのは、すべては

神の現在の言葉に拠らねばならないということである。いのちへの入りを追い求めているのであれ、神の旨を成就させることを追い求めているのであれ、すべては神の現在の言葉を中心にしなければならない。あなたが交わり、そして追い求めるものが神の現在の言葉を中心にしていなければ、あなたは神の言葉知らない人であり、聖霊の働きを完全に失っている。神が望むのは神の歩みに従う人である。あなたが以前に理解したことがどれほど素晴らしく、また純粋なものであっても、神はそれを望んでおらず、あなたがそうしたことを脇へのけられないなら、それは将来におけるあなたの入りにとって大きな障害になるだろう。聖霊の現在の光に従える人はみな祝福されている。過去の人々も神の歩みに従ったが、今日まで従うことはできなかった。これは終わりの日の人々の祝福である。神が自分をどこへ導こうともそれに付き従うほど、聖霊の現在の働きと神の歩みに従える人たちは、神に祝福される人である。聖霊の現在の働きに従わない人たちは神の言葉の働きに入っておらず、どれほど働こうとも、苦しみがどれほど大きくとも、どれほど駆け回ろうとも、そのどれも神には意味がなく、神はそうした人を賞賛しない。今日、神の現在の言葉に従う人はみな聖霊の流れの中にある。神の現在の言葉知らない人は聖霊の流れの外にあり、そのような人は神に賞賛されない。聖霊が現在発する言葉から離れた奉仕は肉の奉仕であり、観念の奉仕であり、それが神の旨にかなうのは不可能である。宗教的観念の中で生きるなら、その人は神の旨にかなうことを何一つ行なえず、たとえ神に奉仕しても、それは想像や観念の中での奉仕であり、神の旨に従う形で奉仕することはまったくできない。聖霊の働きに従えない人は神の旨を理解せず、神の旨を理解しない人は神に奉仕できない。神は自身の旨にかなう奉仕を望んでおり、観念や肉の奉仕を望まない。聖霊の働きの歩みに従うことができないのであれば、その人は観念の中で生きている。そのような人の奉仕は妨害と混乱を引き起こし、そのような奉仕は神に真っ向から反している。そのため、神の歩みに従えない人は神に奉仕することができない。神の歩みに従えない人は間違いなく神に逆らっており、神と相容れることができない。「聖霊の働きに従う」とは、今日の神の旨を理解し、神の現在の要求に従う形で行動すること、今日の神に服従して付き従うことができ、神が発する最新の言葉に従う形でいのちに入ることを意味する。聖霊の働きに従い、聖霊の流れの中にいるのはそうした人だけである。そのような人は神の賞賛を受け、神を目の当たりにできるばかりでなく、神の最新の働きから神の性質を知ることができ、そして人の観念や不従順、人の本性と本質を神の最新の働きから知ることができる。さらに、奉仕する中で自分の性質を徐々に変えることができる。このような人だけが神を得ることができ、真の道を本当に見つけた人である。聖霊の働きによって淘汰される人は、神の最新の働きに従うことがで

きず、神の最新の働きに反逆する人である。そのような人が公然と神に反対するのは、神がすでに新しい働きを行ない、神の姿が彼らの観念の中にあるものと同じではないからである。その結果、公然と神に反対し、神について判断を下し、そのため神は彼らを嫌悪し、拒絶する。神の最新の働きについて認識をもつのは簡単なことではないが、神の働きに従い、神の働きを求める心構えがあれば、その人は神を見、聖霊の最新の導きを得る機会に恵まれるだろう。神の働きにわざと反対する人は、聖霊の啓きや神の導きを受けられない。そのため、神の最新の働きを受けられるか否かは、神の恵みと、その人の追求と、その人の意図にかかっている。

聖霊が現在発する言葉に従える人はみな祝福されている。そのような人が過去どうであったか、聖霊が人々の中でどのように働いていたかは問題ではない。神の最新の働きを得た人は最も祝福され、今日の最新の働きに従えない人は淘汰される。神は新しい光を受け入れられる人を望んでおり、神の最新の働きを受け入れ、それを知る人を求めている。貞節な乙女でなければならないと言われるのはなぜか。貞節な乙女は聖霊の働きを求め、新たな物事を理解することができ、さらには、古い観念を脇へのけて今日の神の働きに従うことができる。今日の最新の働きを受け入れるこの人々の集団は、神によってはるか昔に予定された人たちであり、人々のなかで最も祝福されている。あなたがたは神の声を直接聞き、神の出現を目の当たりにするので、天地を通じて、時代を通じて、あなたがた、つまりこの集団以上に祝福された人はいない。これはすべて神の働きの故であり、神の予定と選択の故であり、また神の恵みの故である。もしも神が語らず、言葉を発しなかったなら、あなたがたの状況は今日のようにあり得ただろうか。それゆえ、神にすべての栄光と賛美あれ。これはひとえに神があなたがたを引き上げるからである。これらのことを念頭に置くな、依然として消極的でいられるだろうか。力を奮い起こすことがいまだにできないだろうか。

神の言葉の裁き、刑罰、打撃、そして精錬を受け入れることができ、またそれ以上に、神が託す任務を受け入れられることは、はるか昔に神が予め定めたことなので、刑罰を受けるときはあまり悲嘆してはならない。あなたがたの中でなされた働き、あなたがたに授けられた祝福、そしてあなたがたに与えられたすべてのものを取り去ることは誰にもできない。宗教の人々はあなたがたとの比較に耐えられない。あなたがたには聖書に関する偉大な専門知識がなく、宗教理論もないが、神があなたがたの中で働いたので、過去の時代の誰よりも多くのものを得た。つまり、これがあなたがたの最大の祝福である。そのため、あなたがたは神に対してさらに献身的でなければならない、よりいっそう神に忠実でなければならない。神があなたを引き上げるので、あなたはますます努力せねばならず、霊的背丈を整えて神が託

す任務を受け入れなければならない。神から与えられた場所にしっかり立ち、神の民の一人になることを追い求め、神の国の訓練を受け入れ、神によって得られ、最終的には神への栄光の証しとならねばならない。あなたにその決意があるのか。このような決意があれば、あなたは最後に間違いなく神によって得られ、神への栄光の証しとなるだろう。託されたおもな任務は神によって得られること、そして神への栄光の証しになることだと、あなたは理解しなければならない。それが神の旨である。

聖霊の現在の言葉は聖霊の働きの動きであり、この期間に聖霊が絶えず人を啓くことこそ、聖霊の働きの動向である。では、今日における聖霊の働きの動向はどういったものか。それは民を神の現在の働きへと導くこと、正常な霊的生活へと導くことである。正常な霊的生活に入るにはいくつかの段階がある。

1.まず、神の言葉に自分の心を注がねばならない。過去の神の言葉を追い求めてはならず、それを研究したり今日の言葉と比較したりしてはならない。その代わり、神の現在の言葉に心を完全に注がねばならない。過去の神の言葉、霊的書物、あるいは説教の記録を読むことを依然として望み、聖霊の現在の言葉に従わない人がいれば、それは最も愚かな人である。神はそのような人を忌み嫌う。今日の聖霊の光を進んで受け入れようとするなら、神が現在発する言葉に心を完全に注ぐこと。これが最初に成し遂げなければならないことである。

2.神が現在語る言葉を基礎として祈り、神の言葉に入り、神と親しく交わり、神の前で決意し、自分がどのような基準を達成したいのかを定めなければならない。

3.聖霊の現在の働きを基礎として、真理に深く入ることを追求しなければならない。過去の時代遅れの発言や理論に執着してはいけない。

4.聖霊によって感動することを求め、神の言葉に入らなければならない。

5.今日聖霊が歩む道へ入ることを追求しなければならない。

聖霊によって感動することをどのように求めるのか。重要なことは神の現在の言葉の中で生き、神の要求を基に祈ることである。このように祈れば、聖霊は必ずやあなたを感動させる。神が現在語る言葉を基礎として求めないなら、それは無益である。あなたはこう言って祈るべきである。「神よ。わたしはあなたに逆らい、あなたに多くの借りがあります。わたしは大変不従順であり、あなたに満足していただくことがどうしてもできません。神よ。どうかわたしをお救いください。わたしは最後まであなたに奉仕することを願い、あなたのために死ぬことを望みます。あなたはわたしを裁き、罰しますが、わたしに不満はありません。わたしはあなたに逆らっているので、死に値します。そうなれば、すべての人がわたしの死の中にあなたの義なる性質を見ることができるでしょう」。このように心から祈るとき、神

はあなたの言葉を聞き、あなたを導く。聖霊の現在の言葉を基に祈らないなら、聖霊があなたを感動させる可能性はない。神の旨に従って祈り、神が今日行おうと望むことに従って祈るなら、あなたはこのように言うだろう。「神よ。わたしはあなたが託される任務を受け入れ、あなたが託される任務に忠実であることを望みます。そして、自分の一生を喜んであなたの栄光に捧げるつもりですが、そうすることで、わたしの行なう一切のことが神の民の基準に到達できます。わたしの心があなたによって感動しますように。あなたの霊がいつまでもわたしを照らし、わたしの行なうすべてのことがサタンに恥をもたらし、わたしが最後にあなたのものとされることを望みます」。あなたがこのように祈れば、つまり神の旨を中心とする形で祈れば、聖霊は必ずやあなたの中で働く。祈りの言葉がどれほど長いかは問題ではない。重要なのは、あなたが神の旨を把握するかどうかである。あなたがたはみな次のような経験をしたことがあるかもしれない。集会で祈っているさなかに聖霊の働きの動きが頂点に達し、すべての人の力を湧き上がらせることがある。祈りながら悲痛な泣き声とともに涙を流し、神の前で良心の呵責に圧倒される人もいれば、自分の決意を示し、誓いを立てる人もいる。これが聖霊の働きによって達成される効果である。今日、すべての人が自分の心を完全に神の言葉に注ぐことが重要である。過去に語られた言葉に集中してはならない。以前来たものに依然としてしがみついたら、聖霊があなたの中で働くことはないだろう。これがいかに重要か、あなたはわかっているのか。

聖霊が今日歩く道をあなたがたは知っているのか。上に挙げたいいくつかの点は、現在と将来において、聖霊によって達成されることである。それらは聖霊が歩く道であり、人が追求すべき入りである。いのちに入るとき、少なくとも神の言葉に心を注ぎ、神の言葉の裁きと刑罰を受け入れることができなければならない。心は神を切望せねばならず、真理への深い入りと神が要求する目標を追い求めなければならない。あなたにその力があるならば、それはあなたが神によって感動し、あなたの心が神に立ち返り始めたことを示している。

いのちへの入りの第一歩は、神の言葉に自分の心を完全に注ぐことである。その次の一歩は、聖霊によって感動することを受け入れることである。聖霊によって感動することを受け入れると、どのような効果が生まれるのか。それは、より深遠な真理を渴望し、求め、探求できるようになること、そして積極的なやり方で神と協力できるようになることである。今日、あなたは神と協力する。それはつまり、あなたの追求と祈り、そして神の言葉の交わりには目的があり、あなたは神の要求に従う形で本分を尽くすということである。神との協力はそれ以外にない。神に行動させることについて語るだけで、何の行動も起こさず、祈りも求めもしないのであ

れば、これは協力と呼べるだろうか。あなたの中に協力というものが少しもなく、目的をもって入りの訓練をしないなら、あなたは協力していない。「すべては神の予定次第です。すべては神自身によってなされます。神がなさらないのであれば、どうして人にできますか」という人がいる。神の働きは正常であり、まったく超自然的なものではなく、あなたが積極的に求めて初めて、聖霊は働きを行なう。なぜなら、神が人に強制することはないからである。あなたは神に働きを行なう機会を与えなければならない。あなたが追い求めることも入ることもせず、心にほんのわずかな渴望もなければ、神に働きを行なう機会はない。あなたはどの道を通じて、神によって感動することを求められるのか。祈りを通じて、そして神に近づくことを通じてである。しかし憶えておきなさい。最も重要なのは、神の語る言葉を基にしなければならないということである。神によって頻繁に感動するなら、あなたが肉の奴隷になることはない。夫、妻、子供、そして金といったものは、どれもあなたを縛ることができず、あなたはただ真理を追求し、神の前で生きることを望む。その時、あなたは自由の領域で生きる人になるだろう。

神は自身の心にかなう者を完全にする

今、神は一種の人々の集団、つまり神と協力することに努め、神の働きに従うことができ、神が語る言葉は真実だと信じ、神の要求を実践できる人から成る集団を獲得することを望んでいる。このような人は、心の中に真の認識を有している者たちであり、完全にされることができ、必ずや完全への道を歩める者たちである。完全にされることができない者とは、神の働きをはっきり認識しない人、神の言葉を飲み食いしない人、神の言葉に注意を払わない人、心の中に神への愛がまったくない人である。受肉した神を疑い、受肉した神についていつも確信がなく、その言葉を決して真剣に扱わず、受肉した神を絶えず騙す者は、神に抵抗し、サタンに属する人であり、このような人を完全にする術はない。

完全にされることが望むのであれば、まずは神の好意を得なければならない。なぜなら、神は自分が好意をもつ者、自身の心にかなう者を完全にするからである。神の心にかなうことを望むのであれば、神の働きに従う心もち、真理の追求に努め、万事において神の吟味を受け入れなければならない。あなたが行なうすべてのことは、神の吟味を経ただろうか。あなたの意図は正しいだろうか。あなたの意図が正しければ、神はあなたを褒めるだろう。あなたの意図が正しくなければ、あなたの心が愛しているのは神でなく、肉とサタンであることを示している。したがって、あなたは万事において神の吟味を受け入れる手段として、祈りを用いなければ

ならない。あなたが祈るとき、わたしは自らあなたの前に立っているわけではないが、聖霊があなたとともにあり、あなたが祈っているのはわたし自身と神の霊の両方である。あなたはなぜこの肉を信じているのか。あなたが信じているのは、この肉に神の霊があるからである。神の霊がないなら、あなたはこの人を信じるだろうか。この人を信じるとき、あなたは神の霊を信じている。この人を畏れるとき、あなたは神の霊を畏れている。神の霊への信仰はこの人への信仰であり、この人への信仰は神の霊への信仰でもある。祈るとき、あなたは神の霊が自分とともにあり、神が目の中にいると感じ、それゆえあなたは神の霊に祈る。今日、大半の人は恐ろしさのあまり、自分の行ないを神の前に示すことができない。また、神の肉を欺くことはできても、神の霊を欺くことはできない。神の吟味に耐えられない物事は、どれも真理と一致しないので、捨て去られなければならない。そうしないのは、神に対して罪を犯すことである。だから、祈るときであれ、兄弟姉妹と話して交わるときであれ、自分の本分を尽くして仕事を進めるときであれ、あなたは自分の心を絶えず神の前に晒さなければならない。あなたが自分の役割を果たすとき、神はあなたと共にあり、あなたの意図が正しく、神の家の働きのためである限り、神はあなたが行なうすべてのことを受け入れる。ゆえにあなたは、自分の役割を果たすよう真摯に献身すべきである。あなたが祈るとき、心の中に神への愛があり、神の気遣い、加護、そして吟味を求め、そうしたことがあなたの意図であれば、あなたの祈りには効果がある。たとえば、集会で祈るとき、心を開いて神に祈り、偽りを述べることなく心の思いを神に話すなら、あなたの祈りは必ずや効果的である。心の中で熱心に神を愛しているなら、次のように誓いなさい。「天地と万物の間におられる神よ、わたしはあなたに誓います。わたしが行なうすべてのことをあなたの霊が吟味なさり、どんな時にもわたしを守り、お気遣いくださり、わたしの行なうすべてのことがあなたの前で持ちこたえられますように。万が一にも、わたしの心があなたを愛さなくなったり、あなたを裏切ったりしたならば、わたしを厳しく罰し、呪ってください。この世でも、次の世でも、わたしを赦さないでください」。このように誓う勇気があなたにあるだろうか。そう誓えないのであれば、あなたが臆病者であり、依然として自分自身を愛していることを示している。あなたがたにそうした決意があるのか。それが本当にあなたの決意ならば、そのように誓うべきである。あなたにそのような誓いをする決意があるなら、神はあなたの決意を成就させる。あなたが神に誓うとき、神は耳を傾ける。神はあなたの祈りと実践を尺度として、あなたが罪深いか義であるかを判断する。それがあなたがたを完全にする今の過程であり、もしもあなたが、自分が完全にされることを本当に信じているのであれば、自分が行なうすべてのことを神の前に示し、神の吟味を受け入れるだろ

う。一方、あなたがひどく反抗的なことをしたり、神を裏切ったりしたならば、神はあなたの誓いを成就させる。ゆえに、永遠の滅びであれ、刑罰であれ、あなたに何が起きたとしても、それはあなた自身の問題である。あなたは誓いを立てたのだから、それを守るべきである。誓いを立てても守らないのであれば、あなたは永遠の滅びに陥るだろう。それがあなたの誓いなのだから、神はその誓いを成就させる。祈った後で不安になり、「すべて終わりだ。放蕩や悪事を行ない、世俗の欲にふける機会がなくなった」と嘆く者たちもいる。このような人は依然として世俗の物事と罪を愛しており、間違いなく永遠の滅びに陥る。

神を信仰する者になるというのは、自分が行なうすべてのことを神の前に示し、神の吟味に晒さなければならないということである。自分が行なうすべてのことを神の霊の前に示せても、神の肉の前に示せないのであれば、あなたが神の霊による吟味に晒されていないことを示す。神の霊とは誰のことか。神が証しする人とは誰のことか。両者は同一の者ではないのか。大半の人は両者を別々の存在と見なし、神の霊は神の霊で、神が証しする人物は人間に過ぎないと信じている。しかし、あなたは間違っているのではないか。その人物は誰のために働きを行なうのか。受肉した神を知らない者たちには、霊的な認識がない。神の霊と、受肉した神の肉は一つである。なぜなら、神の霊がその肉の中に具現化されているからである。もしもこの人物があなたに対して不親切ならば、神の霊は親切だろうか。あなたは混乱しているのではないか。現在、神による吟味を受け入れられない者は、誰も神の承認を受けることができず、受肉した神を知らない者は完全にされることができない。自分が行なうすべてのことに目を向け、それを神の前に示せるかどうかを確かめなさい。自分が行なうすべてのことを神の前に示せなければ、それはあなたが悪を行なう者であることを示している。悪を行なう者が完全にされ得るだろうか。あなたが行なうすべてのこと、一つひとつの行ない、一つひとつの意図、一つひとつの反応を神の前に示さなければならない。あなたの日々の霊的生活、つまり、あなたの祈り、神との親密さ、神の言葉を飲み食いする仕方、兄弟姉妹との交わり、教会における生活、そしてあなたが共同で行なう奉仕さえも、神の前に示して吟味され得る。あなたがいのちの成長を遂げるにあたり、それを助けるのはこのような実践である。神の吟味を受け入れる過程は、清めの過程である。あなたが神の吟味を受け入れられればられるほど、あなたはあっという間に清められ、神の旨と一致するので、放蕩に引き込まれることがなくなり、あなたの心は神の前で生きる。あなたが神の吟味を受け入れれば受け入れるほど、サタンの屈辱はますます大きくなり、あなたはさらに肉を捨てることができる。したがって、神の吟味を受け入れることは、人が従うべき実践の道である。あなたが何をしようとも、たとえ兄弟姉妹と交わってい

るときでさえも、あなたは自分の行ないを神の前に示し、神による吟味を求め、神自身に従うことを目標にすることができる。それにより、あなたが実践することははるかに正しいものとなる。自分が行なうすべてのことを神の前に示し、神の吟味を受け入れなければ、あなたは神の前で生きる人とはなれない。

神に関する認識がない者は、決して神に完全に従うことができない。そのような人は不服従の子である。彼らは野心が強過ぎ、過剰な反抗心が中にあるので、神と自分との間に距離を置き、自ら進んで神の吟味を受け入れようとしない。このような人は、容易に完全にされることができない。神の言葉をどう飲み食いして受け入れるかについて、選り好みする人もいる。そのような人は神の言葉のうち、自分の観念と一致する部分は受け入れるが、一致しない部分は拒絶する。それは神に対する最も露骨な反逆と反抗ではないか。長年にわたって神を信じているにもかかわらず、神に関する認識を少しも得ていないのであれば、その人は不信者である。進んで神の吟味を受け入れる者は、神についての認識を追求する者であり、進んで神の言葉を受け入れる者である。彼らは神の遺産と恵みを授かる者たちであり、最も祝福されている。神は心の中に神の居場所がない者を呪い、そうした人たちを罰して捨てる。あなたが神を愛さないなら、神はあなたを捨て、あなたがわたしの言葉に耳を傾けないなら、神の霊があなたを捨てるだろうと約束する。それが信じられないなら、試してみるがよい。今日、わたしはあなたに実践の道を明らかにするが、それを実践するか否かはあなた次第である。あなたがそれを信じず、実践に移さないなら、聖霊があなたの中で働くかどうか、身をもって知るだろう。あなたが神について認識することを追求しないのであれば、聖霊はあなたの中で働かない。神は、神の言葉を追い求め、それを貴ぶ者たちの中で働きを行なう。あなたが神の言葉を貴べば貴ぶほど、神の霊はますますあなたの中で働く。人が神の言葉を貴べば貴ぶほど、その人が神によって完全にされる確率も高くなる。神は、真に神を愛する者たち、心が神の前で安らいでいる者たちを完全にする。神のすべての働きを貴び、神の啓示を貴び、神の臨在を貴び、神の気遣いと加護を貴び、神の言葉が自分の現実となり、自分のいのちに糧を施すことを貴ぶのは、いずれも神の心に最もかなうことである。あなたが神の働きを貴ぶなら、つまり、神があなたに対して行なったすべての働きを貴ぶなら、神はあなたを祝福し、あなたが所有するすべてのものを何倍にも増やすだろう。あなたが神の言葉を貴ばないなら、神はあなたの中で働きを行なわず、あなたの信仰に応じてわずかな恵みを与えるか、もしくは、わずかな富であなたを、わずかな安全であなたの家族を祝福するだけだろう。あなたは、神の言葉を自分の現実とし、神を満足させ、神の心にかなうことができるよう努めるべきである。ただ神の恵みを享受するためだけに努力してはならない。信者

にとって、神の働きを受けること、完全になること、そして神の旨を行なう者となること以上に重要なことはない。これがあなたの追求すべき目標である。

恵みの時代に人間が追求したものは今や役に立たない。なぜなら、現在ではより高水準の追求が存在するからである。追求されるものはより高尚かつ実践的であり、人間の内面的必要をよりよく満たすことができる。過去の時代において、神は人々に対して今日のように働きを行なわなかった。人々に対して今日ほど多く語ることもなく、彼らへの要求も今日の要求ほど高くはなかった。神が現在あなたがたにこれらのことを語るのは、神の最終的な意図があなたがた、すなわちこの人々の集団に重点を置いていることを示している。あなたが神によって完全にされることを心から望むのであれば、それをあなたの目標の中心として追い求めなさい。あなたが奔走していようが、自分を費やしていようが、何らかの役割を果たしていようが、神が託す任務を受け取っていようが、目標は常に、完全にされて神の旨を満たすこと、そしてそれらの目標を達成することである。もしも誰かが、自分は神によって完全にされることも、いのちに入ることも追い求めず、肉の安泰と快樂だけを追い求めると言うのであれば、その人は最も盲目な者である。いのちの現実を追求せず、次の世における永遠のいのちと、この世における安全だけを追求する人は、最も盲目な者である。したがって、あなたが行なうすべてのことは、神によって完全にされ、神に得られることを目的としてなされるべきである。

神が人々の中で行なう働きは、彼らの様々な必要に応じて彼らに施すためのものである。人のいのちが大きければ大きいほど、その人はいっそう多くのものを必要とし、さらに多くのものを追求する。もしこの段階であなたに何も追求するものがないなら、それは聖霊があなたを捨てた証拠である。いのちを追求する者はみな、決して聖霊に捨てられることがない。このような人たちは常に追い求め、常に心の中で渴望している。このような人たちは決して現状の物事に満足しない。聖霊による働きの各段階は、あなたの中で効果を発揮することを目的としているが、あなたが自己満足して何も必要としなくなり、聖霊の働きを受け入れなくなったなら、聖霊はあなたを捨てるだろう。人々は神による日々の吟味を必要としている。彼らは神から施される日々の豊かな糧を必要としている。神の言葉を日々飲み食いすることがなければ、人は対処できるだろうか。神の言葉をどれだけ飲み食いしても満足できず、常に神の言葉を求め、それに飢え渴いているなら、聖霊はその人の中で絶えず働きを行なう。人が渴望すればするほど、その人の交わりからより実践的な物事が生じる。真理を強く求めれば求めるほど、その人は自分のいのちをより早く成長させ、経験豊富になり、神の家の豊かな住人となるだろう。

真心で神に従う者は、必ずや神のものとされる

聖霊の働きは日々変化する。それは段階ごとに高まり、明日の啓示は今日のものよりも高く、段階が進むにつれてさらに高まる。これが、神が人間を完全にする働きである。それと歩調を合わせることができなければ、その人はいつでも捨て去られ得る。従順な心でいなければ、最後まで従うことはできない。これまでの時代は過ぎ去り、今は新しい時代である。新しい時代には新しい働きがなされなければならない。とりわけ、人々が完全にされる最後の時代になると、神はより新しい働きをさらに素早く行うので、心に従順さがなければ、その人にとって神の足跡を辿るのは難しくなる。神はいかなる規則にも従わず、自身の働きのどの段階も不変のものとして扱わない。それどころか、神が行う働きはますます新しく、ますます高くなる。段階を追うごとに、神の働きはますます実践的になり、人間の実際の必要によりいっそう則したものとなる。人々はこのような働きを経験して初めて、最終的な性質の変化を遂げることができる。いのちに関する人の認識はますます高次元なものになり、また同様に、神の働きもさらに高い次元へと達する。そうして初めて、人は完全にされ、神に用いられるのにふさわしくなれる。神はこのように働きを行い、人間の観念に反論し、覆す一方で、人をより高く現実的な状態へと、そして神への信仰の最高の領域へと導き、その結果、最終的に神の旨が成就する。故意に反抗する不従順な本性の持ち主はみな、神による迅速かつ猛烈なこの段階の働きによって捨て去られる。進んで従い、喜んで謙虚になる者だけが、この道を最後まで前進できる。このような働きにおいて、あなたがたはみな、どのように従うべきか、自分の観念をどう脇に置くべきかを学ばねばならず、一步進むごとに注意深くしなければならない。不注意であるならば、聖霊に拒絶される者、神の働きを妨害する者となるのは間違いない。この働きの段階を経験する前は、人間の古い規則や法律があまりに多かったため、人間はそれに夢中になってしまい、その結果うぬぼれ、我を忘れた。これらはみな、人間が神の新しい働きを受け入れる上での障害物であり、人間が神を知る上での敵である。心の中に従順さを持つことも、真理を切望することもなければ、それはその人にとって危険なことである。単純な働きと言葉に従うだけで、より深遠なものを受け入れることができなければ、あなたは古いやり方に固執し、聖霊の働きと歩調を合わせられない人である。神の働きは時代によって異なる。ある局面では神の働きにしっかり従うが、次の局面になると神の働きへの従順さが乏しくなる、あるいは従順でいられなくなるなら、神はあなたを見捨てるだろう。神がこの段階を辿る中、あなたがそれに歩調を合わせているなら、神が次の段階へと上る際も、引き続き歩調を合わせなければならない。そうして初

めて、あなたは聖霊に従順な者となる。あなたは神を信じているのだから、絶えず従順でなければならない。従いたいときにだけ従い、従いたくないときは従わないということではいけない。そのような従順さは神に称えられない。わたしが交わる新たな働きと歩調を合わせることができず、以前の言い回しに固執するのであれば、どうしてあなたのいのちが進歩できようか。神の働きは、言葉を通してあなたに施すことである。あなたが神の言葉に従い、それを受け入れるのであれば、聖霊は必ずやあなたの中で働きを行う。聖霊はわたしが語る通りに働く。わたしの言う通りに行いなさい。そうすれば、聖霊がすぐにあなたの中で働く。わたしは新たな光を放ってあなたがたに見させ、あなたがたを現在の光へと導く。そしてあなたがその光へと入るとき、聖霊はあなたの中でただちに働く。「わたしはあなたの言う通りにはしない」などと言う、扱い難い人もいるかもしれない。その場合、わたしはあなたに、あなたの道には先がないと言う。あなたはもうこれまでで、もはやいのちはない。ゆえに、自分の性質の変化を経験するときに最も重要なのは、現在の光と歩調を合わせることなのである。聖霊が働くのは神に用いられる特定の人々だけではなく、それ以上に、教会において働く。聖霊は誰においても働き得る。今はあなたの中で働いているかもしれず、やがてあなたはその働きを経験する。次の期間、聖霊は別の人の中で働くかもしれない。その場合、あなたは急いで歩調を合わせなければならない。現在の光にしっかり付き従えば付き従うほど、あなたのいのちはさらに成長できる。どのような人間であれ、聖霊がその人の中で働いているなら、必ず付き従いなさい。その人と同じように経験すれば、あなたはさらに高尚なものを受け取る。そうすることで、あなたの進歩はさらに速くなる。これが、人間が完全にされる道であり、いのちが成長する手段である。完全にされる道には、聖霊の働きに従うことで到達する。あなたは、神がどのような人を通して働くことで、あなたを完全にするのかを知らず、またどのような人や出来事や物事を通して、あなたが物事を得られるように、または見られるようにするかを知らない。あなたがこの正しい道に足を踏み出せるのであれば、神によって完全にされる望みが大いにあるということを示している。そうすることができなければ、あなたの将来は暗く、光がないということである。ひとたび正しい道に足を踏み出せば、万事において啓示が与えられる。聖霊が他の人たちに何を明かそうとも、その人たちの認識を基に前進し、自分自身も経験するのであれば、その経験はあなたのいのちの一部となり、その経験を通して他の人たちに施すことができる。ただ言葉を繰り返して他の人たちに施す者は、何の経験もない者である。まずは他の人の啓示や照らしを通して実践の道を見つけ出し、それから自分の実際の経験や認識を語るようにしなさい。そのほうがあなた自身のいのちにとって益となる。このように経験し、神

に由来するすべての物事に従いなさい。万事において神の旨を求め、あらゆることを教訓とし、自分のいのちが成長するようにしなさい。このように実践することが、最も速い進歩をもたらす。

聖霊はあなたの実際の経験を通してあなたを啓き、あなたの信仰を通してあなたを完全にする。あなたは完全にされることを本当に願っているか。神によって完全にされたいと本当に願っているのであれば、自分の肉を捨てる勇気を持ち、消極的になることも弱ることもなく神の言葉を実行できる。神に由来するすべてのものに従うことができ、公の場であれ私的な場であれ、自身のあらゆる行いが神に示せるものとなる。あなたが誠実な人間であり、万事において真理を実践するのであれば、あなたは完全にされる。人前での行いと陰ですることが違うような偽りに満ちた者は、進んで完全にされようとしなさい。彼らはみな地獄と破滅の子であり、神ではなくサタンに属する者であって、神に選ばれる類の人間などではない。あなたの行動や振る舞いが神に示せるものでなく、神の霊に見てもらえるものでもなければ、あなたの何かが間違っていることの証拠である。神の裁きと刑罰を受け入れ、性質の変化に注意して初めて、完全にされる道へと踏み出せるようになる。神によって完全にされること、神の旨を行うことを心から願っているのであれば、一切不平を言わず、あつかましくも神の働きを評価したり判定したりせず、神のあらゆる働きに従うべきである。これらが神によって完全にされる最低限の要件である。神によって完全にされることを求める者に必要なことはこれである。すなわち、万事において神を愛する心で行動すること。「神を愛する心で行動する」とはどういう意味か。それは、あなたの行いや振る舞いがすべて、神に示せるものだということである。また、あなたの意図は正しいので、あなたの行いが正しいかどうかに関係なく、それらが神の前で、あるいは兄弟姉妹の前で示されることをあなたは恐れず、神の前で誓いを立てることを厭わない。あなたは自分のあらゆる意図、考え、思いを神の前に示し、神の吟味を受けなければならない。あなたがこのように実践して入っていくならば、あなたのいのちの進歩は速いだろう。

神を信じるからには、神の言葉と働きのすべてを信じなければならない。つまり、神を信じるからには、神に従わなければならないということである。それができなければ、あなたが神を信じていようとしまいと問題ではない。長年神を信じているのに、それでも神に従ったことがなく、神の言葉全体を受け入れないどころか、神が自分に従い、自分の観念に沿って行動するよう求めるのであれば、あなたは最も反抗的な人間であり、不信者である。そのような人間が、人の観念に沿わない神の言葉や働きにどうして従えようか。最も反抗的な者とは、意図的に神に逆らい拒絶する者である。そのような者は神の敵であり、反キリストである。神の新し

い働きに対して敵対する態度を常にとり、従う意志など微塵もなく、喜んで服従したり謙虚になったりすることなど一度たりともないのである。他の人たちの前で自分を称揚し、決して誰にも従わない。神の前では、自分が説教に最も長けており、他の人に働きかけることにおいても自分が一番熟練していると考え。自分が所有する「宝」を決して手放さず、家宝として拝み、説教の題材にし、自分を崇拜するような愚か者への訓戒に用いる。教会にはこのような人が、確かに一定数存在する。このような人々は、「不屈の英雄」と呼ぶことができ、世代を超えて神の家に留まる。彼らは言葉（教義）を説くことを自分の最高の本分と捉えている。何年も、何世代も、彼らは精力的に自らの「神聖で犯すべからざる」本分を続ける。彼らにあえて触れようとする者は誰ひとりおらず、公然と非難する者もひとりとしていない。神の家で「王」となり、何代にもわたってはびこり、他の者たちに圧政を加える。このような悪魔の群れは、互いに手を組んでわたしの働きを潰そうとする。このような生きた悪魔がわたしの目の前にいるのを、どうしてわたしが許せようか。半分だけ従順な者でさえ最後まで進むことはできないのに、従う気持ちが微塵もないこのような暴君はなおさら最後まで進めない。神の働きは人間によって簡単に獲得されるものではない。たとえ全力を尽くしても、その一部だけを獲得し、最後に完全にされるだけである。そうであれば、神の働きを潰そうとしている大天使の子らはどうだろうか。彼らが神のものとなる望みはさらに薄くはないか。わたしが征服の働きをする目的は、単に征服することそのものにあるのではなく、征服することによって義と不義を明らかにし、人に対する懲罰のための証拠を入手し、邪悪な者を断罪すること、またそれ以上に、進んで従う者たちを完全にすることにある。最後には、すべての人がそれぞれの種類に応じて分けられる。完全にされた者たちは、思いと考えが従順さに満ちた者たちである。これが最終的に成し遂げられる働きである。一方、あらゆる行いが反抗的である者は罰せられ、燃える炎の中に送られ、永遠の呪いの対象となる。時が来れば、歴代の「偉大な不屈の英雄」が最も卑しく、最も敬遠される「弱く無能な臆病者」となる。このようにしてのみ、神の義のあらゆる側面と、人による背きを許さない神の性質を描き出せる。そしてこれだけが、わたしの心にある憎しみを鎮める。あなたがたも、これがまったく理にかなっていると思わないか。

聖霊の働きを経験する者の全員がいのちを得るわけではなく、この流れの中にいる者たちがいのちを得られるわけではない。いのちはすべての人間の共有財産ではなく、性質の変化は誰でも簡単に達成できるものではない。神の働きへの服従は現実かつ実際のものでなければならず、それを生きる必要がある。表面的な服従だけでは神に称えられず、自身の性質の変化を求めずに神の言葉の表面的な側面だけに

従うのであれば、神の心になっていない。神に対する従順と、神の働きに対する服従は、一つの同じものである。神に服従するだけで神の働きに服従しない者は従順であるとは見なされず、心から従わないで表面的に媚びへつらう者はなおさらである。心から神に従う者はみな、神の働きから得るものがあり、神の性質と働きを理解できるようになる。そのような人たちだけが、本当に神に従順なのである。そのような人たちは新しい働きから新しい認識を得て、新たな変化を経ることができる。それらの人たちだけが神に称えられ、完全にされ、性質が変化した者たちである。神に称えられる者は、喜んで神に従い、神の言葉と働きに従う者である。そうした人たちだけが正しく、そうした人たちだけが心から神を望み、心から神を求めている。口先だけで神への信仰を語り、実質的に神を呪っている者は、仮面を被り、蛇の毒を持つ、最も信用できない者である。遅かれ早かれ、そのような悪党はその酷く不快な仮面を剥がされる。それが今日行われている働きではないのか。邪悪な人間は常に邪悪であり、懲罰の日から逃れることは決してない。善なる人間は常に善であり、神の働きが終わるときに明らかにされる。邪悪な者が義と見なされることはなく、義なる者が邪悪な者と見なされることもない。わたしが誰かを不当な非難に曝すことなどあるだろうか。

いのちが進歩するに従って、常に新たな入りを持ち、段階ごとに深まる新たな、より高い識見を有していなければならない。これが、すべての人が入るべきことである。交わり、説教を聞き、神の言葉を読み、あるいは何かに対処することで、あなたは新たな識見と啓示を得て、古い規則、古い時代の中で生きることがなくなる。常に新たな光の中で生き、神の言葉から迷い出ることはない。これが、正しい道に足を踏み入れるということである。表面的に代価を払っても意味はない。神の言葉は日々さらに高い領域へと入り、新しい物事が毎日現れ、人もまた、新たな入りを日々行う必要がある。神は語ることで、語ったことをすべて成就させる。歩調を合わせることができなければ遅れてしまう。あなたは自身の祈りにおいてより深く入らなければならず、神の言葉の飲み食いを途切れさせてはならない。あなたが受ける啓きと照らしを深め、観念と想像を徐々に減らさなければならない。また、判断力を強化し、どんなことに直面しようとも、それについて自分の考えを持ち、自分の観点を持たなければならない。霊における多少の事柄を理解することで、外部の物事への洞察力を得て、どんな問題の実質も把握しなければならない。このような物事を備えていないのであれば、どうして教会を率いることができようか。字句や教義ばかりを語り、現実も実践の方法も伴わないのであれば、短期間しか続けられない。信者になったばかりの人に語るのであれば、かろうじて受け入れられるかもしれないが、しばらくするとその新信者も実際の経験を多少するので、あなた

はもうその信者に施すことができなくなる。そうなれば、どうして神に用いられるのにふさわしくなれようか。新たな啓示がなければ、あなたは働くことができない。新たな啓示がない者は、どのように経験すべきかを知らない者であり、そのような者は新しい認識や経験を決して得られない。そして、いのちを施すことに関しても、自身の役割を果たすことがまったくできず、神に用いられるのにふさわしくなれない。このような者は役に立たず、浪費家でしかない。事実、このような人たちは働きにおいて自身の役割を果たすことがまったくできず、何の役にも立たない。役割を果たさないばかりか、教会に無用な負担を多くかける。わたしはこのような「立派な老人たち」に対し、他の人たちがこれ以上あなたを見なくてよいよう、急いで教会を離れよと忠告する。このような人たちは、新しい働きを理解せず、終わりのない観念に満ちている。教会で何の役割も果たしておらず、それどころか損害を与えて否定的な物事をいたるところに蔓延させ、ありとあらゆる過ちや妨害を教会にもたらすまでになり、物事を識別できない人々を混乱と無秩序に巻き込んでしまう。これら生きた悪魔たち、これら邪悪な霊どもは、ただちに教会を去り、教会を駄目にしないようにすべきである。あなたは今日の働きを恐れていないかもしれないが、明日の義なる懲罰が恐くはないのか。教会には居候が多数おり、神の正常な働きを妨げる狼も数多くいる。このような者はみな魔王が送った悪魔であり、何も知らない子羊たちを貪り食おうとする凶暴な狼である。これらのいわゆる「人」は、追放されなければ教会の寄生虫となり、捧げ物を貪り食うこけとなる。遅かれ早かれ、卑劣で無知で、さもなく、酷く、不快なこれらの蛆虫が懲罰される日が来る。

神の国の時代は言葉の時代である

神の国の時代、神は言葉を用いて新たな時代の到来を知らせ、その働きの方法を変え、その時代全体の働きを行う。これが言葉の時代における神の働きの原則である。神はさまざまな視点から語るために肉となって、肉に現れた言葉である神を人間が真に目のあたりにし、神の知恵と驚くべき素晴らしさを目にできるようにした。このような働きは人間を征服し、完全にし、淘汰するという目的をより効果的に達成するために行われており、それが言葉の時代に言葉を用いて働きを行うことの真の意味なのである。こうした言葉を通して、人々は神の働き、神の性質、人間の本質、そして人間が何に入るべきかを知るようになる。言葉を通して、神が言葉の時代に行おうとしている働きの全体が実を結ぶのだ。こうした言葉を通して、人間は明らかにされ、淘汰され、試される。人々は神の言葉を目にし、その言葉を聞

き、その言葉の存在を認識した。その結果、人間は神の存在、神の全能性と知恵、そして神の人間への愛と、人間を救いたいという願望とを信じるようになった。「言葉」という語は単純でごく普通かもしれないが、受肉した神の口から出る言葉は宇宙全体を揺るがし、人々の心を変革し、人々の観念と古い性質を変革し、世界全体の古い現れ方を変革する。多くの時代の中で、今日の神だけがこのように働いてきており、そして今日の神だけがこのように語り、このように人間を救いに来る。これ以降、人間は言葉の導きの下に生き、神の言葉により牧され、施しを受けることになる。人々は神の言葉の世界で、神の言葉の呪いと祝福の内に生きている。そしてさらに多くの人々が、神の言葉の裁きと刑罰との下に生きるようになっていく。これらの言葉とこの働きはすべて人間の救いのため、神の旨を成就するため、そして過去の創造による世界の元来の状況を変えるためである。神は言葉をもって世界を創造し、言葉をもって全宇宙の人々を導き、言葉をもって彼らを征服し救う。そして最終的に、神は言葉をもって古い世界全体を終わらせ、その経営（救いの）計画全体を完了させる。神の国の時代全体を通じて、神は言葉を用いて働きを行い、その働きの成果を得る。神は不思議や奇跡を行うことなく、ただ言葉をとおして働きを行う。これらの言葉によって、人間は養われ、施しを受け認識と真の経験とを得る。言葉の時代の人間は格別の祝福を受けている。肉体的な痛みに苦しむことなく、ただ神の言葉の豊かな施しを享受し、無闇に探し求めたり旅をしたりする必要もなく、安穩の只中から神の出現を目にし、神がその口で話すのを聞き、神が施すものを受け取り、神が自らその働きを行うのを見守っている。これらは過去の時代の人々には享受できなかったことであり、彼らが決して受けることのできなかった祝福なのである。

神は人間を完全にすると決意しており、どの視点から語るにせよ、すべては人々を完全にするためである。霊の視点から語られる言葉は人間には理解し難く、人間は理解能力が限られているため、実践のための道を見つける方法がない。神の働きはさまざまな成果を達成するものであり、神は常に目的を持って働きのそれぞれの段階を行っている。さらに神はさまざまな視点から語ることが不可欠であり、そうすることによってのみ、人間を完全にすることができる。もし神が霊の視点からのみ声を発するなら、働きのこの段階を完了することはできないであろう。神が語る口調から、神がこの人々を完全にすると決めていることがわかる。では、神に完全にされることを望む一人一人にとって、とるべき最初の一步は何だろうか。まず何よりも、神の働きを知らなければならない。今日では新しい方法が神の働きに導入され、時代は推移し、神の働き方も変わり、神の話し方も異なっている。現在は神の働きの方法が変わっただけでなく、時代も変わっている。今は神の国の時代であ

り、そして神を愛する時代でもある。これは千年神の国の時代の先駆けであり、千年神の国の時代は言葉の時代でもある。言葉の時代、神は多くの方法で語って人間を完全にし、さまざまな視点から語って人間に施す。時代が千年神の国の時代に移行すると、神は言葉を用いて人間を完全にし始め、人間がいのちの現実に入れるようにするとともに、人間を正しい軌道へと導く。人間は神の働きの多くの段階を経験した結果、神の働きが不変ではなく、絶えず発展し深化することを目にしてきた。人々がこれほど長い間経験してきた働きは、繰り返し展開され、何度も変化してきた。しかしどれほど変化しようとも、人間に救いをもたらすという神の目的からその働きが逸れることは一切なく、一万回の変化を経ようとも、元来の目的から外れることは決してない。神の働きの方法がどのように変化しようとも、その働きが真理やいのちから離れることは一切ない。働きが行われる方法の変化は、ただ働きの形式や神が語る視点の変化でしかなく、神の働きの中心的目的に変化があるわけではない。神の口調や働きの方法の変化は、特定の効果を得るために行われる。口調の変化は、働きの背後にある目的や原則の変化を意味するものではない。人間が神を信じるおもな目的はいのちを追い求めることであり、もし神を信じていながらいのちを求めもせず、真理や神の認識を追求もしないのなら、それは神への信仰ではない。それでも神の国に入り王になることを望むのは、現実的なことだろうか。いのちの追求を通して神への真の愛を達成する、このことのみが現実である。真理の追求と実践は、すべて現実である。神の言葉を読み、その言葉を経験することで、あなたは現実の経験の中で神の認識を得るようになる。それこそが、真に追求するということの意味なのである。

今は神の国の時代である。あなたがこの新たな時代に入っているかどうかは、あなたが神の言葉の現実に入っているかどうか、そして神の言葉があなたのいのちの現実となっているかどうかによる。神の言葉がすべての人に知らされているのは、最終的にすべての人が神の言葉の世界に生きるようになり、神の言葉が一人一人を内から啓き、照らすようになるためである。もしこの期間にあなたが不注意に神の言葉を読み、神の言葉にまったく関心を持たなければ、それはあなたの状態が間違っていることを示している。あなたが言葉の時代に入れないなら、聖霊はあなたの中で働きを行わない。もしあなたがこの時代に入っているのなら、聖霊はその働きを行う。言葉の時代が始まる今、聖霊の働きを得るためには何ができるだろうか。この時代、神はあなたがたのもとで次のような事実を実現する。つまり、一人一人が神の言葉を生き、真理を実践できるようになり、誠実に神を愛するようになる。そしてすべての人々が、神の言葉を基盤かつ自身の現実として用い、神を敬い畏れる心を持つようになる。さらに神の言葉の実践をとおして、人間が神とともに

王のような力を振るうようになるのである。これが、神によって達成される働きである。あなたは神の言葉を読まずに生きることができるだろうか。現在、神の言葉を読まずには一日や二日も生きられないと感じる人々が大勢いる。彼らは神の言葉を毎日読まずにはいられず、時間がないときには代わりにそれを聴く。これは聖霊が人々に与える感情であり、人々を動かし始めるときのやり方である。つまり神は言葉をとおして人間を統治し、人間が神の言葉の現実に入れるようにするのである。もし、一日だけ神の言葉を飲み食いしなかった後、闇と渇きを感じ、それに耐えられないと感じたなら、それはあなたが聖霊によって動かされており、聖霊があなたから離れていないことを意味する。そうであれば、あなたはこの流れの中にいる。しかし神の言葉を飲み食いせずに一日か二日経った後、何も感じず、渇きもなく、まったく動かされていないなら、それは聖霊があなたから離れてしまったことを意味する。そうであれば、それはあなたの内面状態の何かが間違っているということであり、あなたは言葉の時代に入っておらず、遅れをとったのである。神は言葉を用いて人間を統治する。あなたは神の言葉を飲み食いすれば気分が良くなり、それをしなければ、たどるべき道がなくなる。神の言葉は人間の食物となり、人間を動かす力となる。聖書には「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」とある。今日、神はこの働きを完成させ、あなたがたの中でこの事実を成就させる。なぜ、過去の人々は神の言葉を何日間も読まなくても普通に食べて働くことができたが、今はそうではないのだろうか。この時代、神はおもに言葉を用いてすべてを統治する。神の言葉を通して人間は裁かれ、完全にされ、そして最終的には神の国へと導かれる。神の言葉だけが人間にいのちをもたらし、神の言葉だけが人間に光と実践の道を与えることができる。これはとりわけ神の国の時代における事実である。あなたが神の言葉の現実から離れず、毎日神の言葉を飲み食いしている限り、神はあなたを完全にすることができるだろう。

いのちの探求は焦って成し遂げられることではない。いのちの成長は、一日や二日で起こるものではないのである。神の働きは普通で实际的であり、たどらねばならない過程がある。受肉したイエスが十字架の働きを完了するには、三十三年半を要した。では人間を清め、人間のいのちを変化させるという、最も困難な働きはどうだろうか。これは極めて困難な働きである。神を体現する普通の人間を作るのは、容易な業ではない。これは赤い大きな竜の国で生まれた人々についてはなおさらで、彼らは素質に乏しく、長期間の神の言葉と働きを必要とする。だから、結果を見るのを急いではない。あなたはただ積極的に神の言葉を飲み食いし、神の言葉にもっと努力を注がなければならない。神の言葉を読み終えたら、それを実践

に移し、神の言葉における認識、識見、識別、知恵を増やすことができないなら
ない。それを通して、あなたは知らぬ間に変わっていく。神の言葉を飲み食
いし、それを読み、知り、経験し、実践することを自分の原則として取り入れるこ
とができれば、あなたは知らないうちに成熟していく。中には、神の言葉を読んでも
それを実践できないと言う者もいる。何を急いでいるのか。ある程度の霊的背丈に
達すれば、神の言葉を実践できるようになる。四、五歳の子供が、両親を養ったり
敬ったりできないなどと言うだろうか。あなたは自分の現在の霊的背丈を知るべき
だ。実践できることを実践し、神の経営を妨げる者とならないようにしなさい。た
だ神の言葉を飲み食いし、それを今後の自分の原則としなさい。当面は、神があな
たを完全にしてくれるかどうかと心配してはならない。まだそのことは深く考え
ず、ただ自分のもとに來た神の言葉を飲み食いしていれば、必ずや神はあなたを完
全にしてくれるだろう。ただし神の言葉を飲み食いするときには、従うべき原則が
ある。それをむやみに行ってはならない。神の言葉を飲み食いするにあたっては、
一方で自分が知るべき言葉、つまりビジョンに関連する言葉を探し求め、他方では
実際の実践に移すべきこと、つまり自分が入っていくべきことを探し求めなさい。
一方の側面は認識に関連しており、もう一つの側面は入りに関連している。ひとた
びこの両面を把握すれば、つまり自分が知るべきことと実践すべきことを把握でき
れば、神の言葉をどのように飲み食いすべきかがわかるようになるだろう。

いずれは神の言葉について語ることが、あなたが話すときの原則になる。あなた
がたが集まるときは通常、神の言葉についての交わりを持ち、神の言葉を交流の内
容とし、それらの言葉について知っていること、それをどのように実践するか、そ
して聖霊がどのように働くかについて話し合いなさい。神の言葉について交わりを
持っている限り、聖霊はあなたを照らすだろう。神の言葉の世界を実現するには、
人間の協力が必要になる。あなたがこれに入っていかなければ、神は働くことがで
きない。あなたが口を閉ざしたまま、神の言葉について語らなければ、神はあなた
を照らすことができない。他のことに従事していないときはいつでも、神の言葉に
ついて話し、無駄なおしゃべりをしないようにしなさい。日々の生活を神の言葉で
満たしたとき、初めてあなたは敬虔な信者となる。あなたの交わりが表面的なもの
であっても、それは問題ではない。表面なしに深みもありえないからだ。過程とい
うものが必要なのだ。あなたは訓練を通して、自分に対する聖霊の照らしを把握
し、神の言葉を効果的に飲み食いするにはどうすべきかを知るのである。しばらく
の手探りの後、あなたは神の言葉の現実に入ることになる。協力する決意をして
初めて、聖霊の働きを受けることができるのだ。

神の言葉を飲み食いする原則の一つは認識に関連し、もう一つは入りに関連して

いる。まず、どのような言葉を知るべきか。それはビジョンに関連する言葉である（神の働きが今どの時代に入ったか、神が今何を成し遂げようとしているか、受肉とは何か、その他のことに関連する言葉は、みなビジョンに関連している）。人間が入るべき道とは何を意味しているのか。それは人間が実践し、入るべき神の言葉を意味している。これが、神の言葉を飲み食いすることの二つの側面である。これからは、このように神の言葉を飲み食いしなさい。ビジョンに関する神の言葉を明確に理解しているなら、絶えずそれを読み返す必要はない。最も重要なのは、どのように心を神に向けるべきか、どのように神の前で心を静めるべきか、どのように肉に背くべきかといった、入りに関する言葉をさらに飲み食いすることである。これらはあなたが実践すべき事柄である。どのように神の言葉を飲み食いすべきかを知らなければ、真の交わりは不可能である。ひとたび神の言葉をいかに飲み食いすべきかを知り、何が鍵なのかを把握できれば、交わりは自由なものとなり、どのような問題が提起されても、それについて話し合い、現実を把握することができるようになる。神の言葉について交わりを持つとき、現実を持っていないのなら、それは何が鍵かを把握していないからであり、あなたが神の言葉をどのように飲み食いすべきかを知らないことを意味している。中には神の言葉を読んでうんざりする人もいるかもしれないが、それは正常な状態ではない。正常な状態とは、神の言葉を決して読み飽きることなく、常に神の言葉を渴望し、常にそれを良いものと感じることである。これが、真に入りを成し遂げた人が神の言葉を飲み食いするやり方である。神の言葉を非常に实际的でまさに人間が入るべきものだと感じ、その言葉を極めて役に立つ人間に有益ないのちの糧であると感じるとき、その感情を与えているのは聖霊であり、聖霊があなたを動かしているのである。これは聖霊があなたの中で働いており、神があなたから離れていないことを証明している。中には神がいつも語っているのを見て、神の言葉に飽き、それを読んでも読まなくても大したことではないと考える人もいるが、それは正常な状態ではない。彼らには現実に入ることを渴望する心がなく、このような人々は完全にされることを渴望も重要視もしていない。自分が神の言葉に渴いていないと気づいたときはいつでも、あなたが正常な状態でないことを示している。昔は神が自分から離れたかどうかは、自分の内面が穏やかであるか、喜びを感じているかどうかで判断することができた。今では、鍵となるのは神の言葉に渴きを覚えるか、神の言葉が自分の現実となっているか、自分が忠実か、そして神のためにできることをすべて行えるかということである。言い換えれば、人間は神の言葉の現実によって判断されるのだ。神はその言葉を全人類に向けている。それを読む気があるなら、神はあなたを啓いてくれるが、そうでないなら神に啓かれることはない。神は義に飢え渴く人々と、自らを探し求

める人々に啓きを与える。中には、神の言葉を読んでも神からの啓きが与えられなかったという人々もいる。しかし、その言葉をどのように読んだのか。もし乗馬しながら花に目をやる人のように神の言葉を読み、現実を一切重視しなかったなら、どうやって神があなたを啓けるだろうか。神の言葉を大切にしない者が、どうして神に完全にされることができるだろうか。神の言葉を大切にしないなら、あなたは真理も現実も得ることはない。神の言葉を大切にすれば、真理を実践することができ、そうして初めて現実を得ることになる。そのため、忙しいかどうか、逆境にあるかどうか、試練の最中にあるかどうかにかかわらず、いつも神の言葉を飲み食いしなければならないのである。結局のところ、神の言葉は人間の生存の基盤である。誰一人として神の言葉から離れることはできず、三度の食事のように神の言葉を食べなければならない。神に完全にされ、神のものとされることが、そんなに簡単でありうるだろうか。現在あなたが理解しているかどうか、神の働きを見抜いているかどうかにかかわらず、できるだけ多くの神の言葉を飲み食いしなければならない。それが積極的な入りというものである。神の言葉を読んだら、自分が入っていけることを急いで実践し、入っていけないことはとりあえず脇へ置いておきなさい。当初は神の言葉の多くが理解できないかもしれないが、二、三ヶ月後、あるいは一年後には理解できるようになる。なぜそのようになるのか。それは、神が人間を一日や二日で完全にすることはできないからである。神の言葉を読んでも、多くの場合すぐには理解できないかもしれない。その時点ではただの文章にしか見えないかもしれず、理解できるようになるには、ある程度の期間それを経験する必要がある。神は非常に多くを語っているので、あなたは神の言葉の飲み食いに最大限努めるべきであり、そうすることでいつの間にか理解できるようになり、いつの間にか聖霊があなたを啓くのである。聖霊が人を啓くとき、多くの場合人はそれに気づかない。聖霊があなたを啓き導くのは、あなたが渴き探し求めているときである。聖霊の働きの原則は、あなたが飲み食いする神の言葉を中心としている。神の言葉を一切重視せず、神の言葉に対して常に態度を変え、混乱した考えをもって、神の言葉を読むか読まないかなどどうでもいいと考えている人々は皆、現実を得ていないのである。そのような人の中には、聖霊の働きも聖霊による啓きも見ることができない。そのような人々はただ惰性で生きているのであり、ちょうど寓話の南郭氏^[a]のように、真の資格を持たない偽善者なのである。

神の言葉を自分の現実としていなければ、あなたに本当の霊的背丈はない。試練

脚注

a. 原文に「寓話の」の語句は含まれていない。

の時が来ても、あなたは必ず倒れ、そのときに真の靈的背丈が明らかにされるだろう。しかし常に現実に入ろうと努めている人々は、試練の時に神の働きの目的を理解するようになる。良心を持ち神を渴望する人は、実際的な行動をもって神の愛に報いなければならない。現実を持たない人々は、些細な事柄に直面しただけでも、しっかりと立っていられなくなる。それが、本当の靈的背丈を持つ人々と持たない人々の違いである。彼らはいずれも神の言葉を飲み食いしているのに、なぜ一方は試練に揺るぎなく立ち向かうことができ、他方は試練から逃げ出すのだろうか。明らかな違いとして、一部の人々には本当の靈的背丈がなく、彼らは自身の現実となる神の言葉を持っておらず、神の言葉は彼らの中に根づいていない。そして彼らは試練に遭うと、すぐに音を上げてしまう。では、試練の中でもしっかり立てる人がいるのはなぜなのか。それは真理を理解してビジョンをもち、神の旨と要求を認識しているからであり、ゆえに試練のさなかでもしっかり立てるのである。それが本当の靈的背丈であり、それもまたいのちなのだ。また神の言葉を読みはしても、実践に移すことはなく、真剣にとらえない人々もいるかもしれない。神の言葉を真剣にとらえない人々は、実践をまったく重視しない。自身の現実となる神の言葉を持たない人々には、本当の靈的背丈がなく、彼らは試練を揺るぎなくやり遂げることができない。

神の言葉が発せられたら、ただちにそれを受け取って飲み食いしなければならない。どれほど理解しているかにかかわらず、固守すべき一つの観点は、神の言葉を飲み食いし、知り、実践するということである。それが、あなたができなければならないことだ。自分の靈的背丈がどれほど立派になれるかについては気にせず、ただ神の言葉を飲み食いすることに集中しなさい。それが、人間が協力しなければならないことである。靈的生活とはおもに、神の言葉を飲み食いしそれを実践するという現実に入るよう努めることである。それ以外のことに集中する必要はない。教会の指導者はすべての兄弟姉妹を指導して、どのように神の言葉を飲み食いすべきかを伝えることができないといけない。これが一人一人の教会指導者の責任である。老若を問わず全員が神の言葉を飲み食いすることを重視し、神の言葉を心に留めなければならない。この現実に入ることは、神の国の時代に入ることを意味する。最近ではほとんどの人が、神の言葉を飲み食いせずには生きていけないと感じ、神の言葉はいつでも新鮮だと感じている。これは彼らが正しい軌道を歩み始めていることを意味する。神は言葉を使って働きを行い、人間を養う。すべての人が神の言葉を求め渴望するようになったとき、人類は神の言葉の世界に入ることになる。

神はこれまで非常に多くのことを語った。あなたはそれをどれくらい知り、どれくらい入ったのだろうか。教会指導者がその兄弟姉妹たちを神の言葉の現実へと導

いていなければ、彼らはその本分をないがしろにし、責任を果たすことができなくなるのだ。あなたの理解が深かろうが浅かろうが、あるいはあなたの理解がどの程度かにかかわらず、神の言葉をどのように飲み食いすべきかは必ず知らなければならず、神の言葉に細心の注意を払い、それを飲み食いすることの重要性と必要性を理解しなければならない。神はすでに非常に多くのことを語っているので、神の言葉を飲み食いしなかったり、それを求めようとしなかったり、実践に移さなかったりするのなら、それは神の信仰とは言えない。あなたは神を信じているのだから、神の言葉を飲み食いし、神の言葉を体験し、神の言葉を生きなければならない。それだけが神への信仰と呼べるのだ。口では神を信じると言いながら、神の言葉を一つも実践できていなかったり、何の現実も生み出せていなかったりするのなら、それは神への信仰とは言えない。それは単に、「飢えを満たすためにパンを求めている」だけだ。あなたが取るに足らない証しや役に立たない事柄、表面的な物事について話すだけで、現実を少しも得ていないなら、それは神への信仰ではなく、神を信じる正しい道をまったく把握していないことになる。なぜ神の言葉をできるだけ多く飲み食いしなければならないのか。神の言葉を飲み食いせずに、ただ天に昇ることだけを求めているのなら、それは神への信仰であろうか。神を信じる人が進むべき最初の一步は何だろうか。神はどのような道によって人間を完全にするのだろうか。神の言葉を飲み食いせずに、人が完全にされることはできるだろうか。神の言葉を現実として持つことなく、神の国の民とみなされることができのだろうか。神への信仰とは、正確には何を意味するのか。神を信じる人々は、最低限として外見上よい振る舞いをしなければならず、何よりも重要なことは、神の言葉を持っていることである。何があろうとも、神の言葉から離れることはできない。神を知ること、神の心を満たすことは、すべて神の言葉を通して達成される。将来的にはすべての国、教派、宗教、領域が神の言葉を通して征服される。神は直接語りかけ、すべての人々は神の言葉をその手に抱き、それによって人類が完全にされる。内にも外にも、神の言葉はあらゆるところに行き渡る。人類は自らの口で神の言葉を語り、神の言葉にそって実践し、神の言葉を心の中に留め、内も外も神の言葉に満たされ続ける。このようにして人は完全にされる。神の心を満たし、神の証しをすることができる人々は、神の言葉を自身の現実としている人々なのである。

言葉の時代、つまり千年神の国の時代に入ることは、今日完了されつつある働きである。これからは、神の言葉についての交わりを持つ訓練をなささい。神の言葉を飲み食いし、神の言葉を経験することによってのみ、あなたは神の言葉を生きることができる。他の人々を説得するには、いくらかの実践的経験を生み出さねばならない。神の言葉の現実を生きることができなければ、誰も説得することなどでき

ない。神に用いられる者たちは皆、神の言葉の現実を生きることができる。この現実を生み出して神の証しをすることができないのなら、それは聖霊があなたの中で働いておらず、あなたが完全にされていないことを意味する。これが神の言葉の重要性である。あなたには神の言葉を渴望する心があるか。神の言葉を渴望する人々は、真理を渴望しており、そのような人々だけが神に祝福されている。将来的に、神はあらゆる宗教と教派に向けてさらに多くの言葉を語る。神はまずあなたがたの間で語り、声を出し、あなたがたを完全にしてから、次に異邦人の間で語り、声を出し、彼らを征服する。神の言葉を通して、すべての人が心から完全な確信を得る。神の言葉と暴露をとおして、人間の墮落した性質は弱まり、人は人間の姿を呈するようになって、反抗的な性質も弱くなる。言葉は権威をもって人間に働き、神の光の中で人間を征服する。神が現在の時代に行う働きも、またその働きの分岐点も、すべては神の言葉の中にある。神の言葉を読まなければ、何も理解することはできない。あなた自身が神の言葉を飲み食いし、兄弟姉妹との交わりに参加し、そして実際の体験を持つことで、神の言葉についての包括的な認識を得られるようになる。そのとき初めて、あなたは神の言葉の現実を真に生きられるようになるのである。

すべては神の言葉が達成する

神はそれぞれの時代において言葉を語り、働きをする。そして神は異なる時代において異なる言葉を話す。神は規則に従わず、同じ働きを繰り返さず、過去の事柄への懐旧の念を抱かない。神は常に新しく、古さとは無縁であり、毎日、新しい言葉を話す。あなたは今日従うべきことに従うべきである。それが人の責任であり本分である。現在における神の光と言葉を軸として実践することが不可欠である。神は規則に従わず、神の知恵や全能性を明らかにするために多くの異なる視点から話すことができる。神が霊の視点から話すか、人の視点から話すか、あるいは第三者の視点から話すかは問題ではない。神は常に神であり、人の視点から話すので神は神ではないと言うことはできない。神が様々な側面から話す結果、一部の人に観念が生まれた。そのような人は神について何の認識ももっておらず、神の働きについても何の認識もない。神が常に一つの視点から話せば、人は神に関して規則を定めないのであろうか。人がそのように振舞うことを神が許すことができるであろうか。神がどの視点から話すにせよ、神にはそうする目的がある。もし、神が常に霊の視点から話したなら、あなたは神と関わりをもつことができるであろうか。それゆえ、神は時おり第三者の立場で語り、あなたに言葉を与え、あなたを現実性へと導く。神が行なう万事が適切である。要するに、すべては神になされているのであ

り、あなたはこのことを疑うべきではない。神は神であり、それゆえ、どの視点から話しても、神は常に神である。これは不変の真理である。どのように働きをしても、神は依然として神であり、神の本質は変わることがない。ペテロは深く神を愛し、神の心に叶う人であったが、神はペテロを主あるいはキリストとして証ししなかった。なぜなら、存在するものの本質は、それ自体であり、決して変わることはできないからである。働きにおいて、神は規則に従うのではなく、働きを効果的にし、人の神についての認識を深めるために種々の方法を用いる。神が働きをする方法のすべてが、人が神を知るのを助け、そしてそれは人を完全にするためである。神がどのような働きの方法を用いても、それぞれが人を作り上げ完全にするためである。神が働きをする方法のうちの一つが非常に長い時間続いたかもしれないが、それは人の神への信仰を強化するためである。したがって、あなたがたの心には疑いがあるとはならない。これらはすべて神の働きの過程であり、あなたがたはそれらに従わなければならない。

今日の話は、現実に入っていくことである。天に昇ることや、王として支配するといったことではない。現実に入ることを追い求めることのみについて話している。これよりも実践的な追求はない。王としての支配についての話は実践的ではない。人は好奇心が強く、宗教的観念を用いて神の現在の働きをいまだに評価する。神が働きをする方法を数多く経験してきたにもかかわらず、人はいまだに神の働きを知らず、相変わらずしるしや不思議を求め、そして依然として神の言葉が成就したかどうかを知ろうとする。これは驚くべき無知ではないであろうか。神の言葉が成就しなかったとしても、あなたはなお神が神であることを信じるであろうか。今日、教会で数多くのこのような人がしるしや不思議を見ようと待っている。彼らは、「もし神の言葉が成就するなら、その人は神である。もし神の言葉が成就しないなら、神ではない」と言う。それでは、あなたは神の言葉が成就したという理由で神を信ずるのであるか、あるいは神が神自身であるから信ずるのであるか。神への信仰についての人の考え方は、正されなければならない。神の言葉が成就しなかったとわかると、人は走り去っていく。これが神への信仰であろうか。神を信じているなら、すべてにおいて神の采配に委ね、神のすべての働きに従うべきである。神は実に多くの言葉を旧約聖書で語った。そのうちのどれかが成就したのをあなたは自分自身の目を見たのであろうか。それを見なかったために、ヤーウェは真の神でないと言っていることができるであろうか。たとえ多くの言葉が成就しても、人間はそれをはっきり見ることはできない。なぜなら、人間には真理がなく、何も理解していないからである。神の言葉が成就していないと感じると、逃げ去りたがる人がいる。そうするがいい。逃げ去ることができるかどうかを試してみなさい。走り

去った後で、やはりあなたは帰ってくる。神はあなたを言葉で支配するのであり、もし教会や神の言葉から離れて行くなれば、あなたには生きるすべがなくなる。もしこのことを信じないのなら、試してみるがよい。本当にただ去って行けると思っているのでしょうか。神の霊があなたを支配している。あなたは離れていくことはできない。これが神の行政命令である。もし試したいと思う人がいるなら、試してみればよい。この人は神ではない、とあなたは言う。ならば、神に対して罪を犯せばよい。そして神が何を行うかを見てみればよい。あなたの肉は死なず、今までどおり食べ、衣服を着ることは可能である。しかし、精神的には耐え難いものとなる。あなたは圧迫と苦しみを感じ、それ以上の苦しみはない。人は精神的な苦しみと荒廃に耐えることはできない。おそらく肉の苦しみに耐えることはできるが、持続する精神的な圧迫や長く続く苦しみにはまったく耐えることができない。今日、しるしや不思議が一切見えないせいで否定的になる人がいる。しかし、どれほど否定的になっても、あえて逃げ去ろうとする人はいない。なぜなら、神は言葉で人を支配するからである。事実がいまだ到来していないにもかかわらず、誰も逃げられないのである。これは神の行為ではないであろうか。今日、神は人にいのちを与えるために地上に来た。神は、人が想像するように、神と人の平和な関係を確かなものにするためにしるしや不思議を示して人をなだめるようなことはしない。いのちに集中せず、神にしるしや不思議を示してもらおうとすることにばかり気持ちが向いているような人は皆パリサイ人である。イエスを十字架に釘付けしたのは、パリサイ人であった。神の言葉が成就したら神を信じ、成就しなかったら神を疑い、神を冒瀆さえして、神への信仰に関する独自の考えに従って神を評価するならば、あなたは神を十字架に釘付けしているのではないであろうか。このような人は、本分において怠慢であり、貪欲に快楽に浸っている。

ある面において、人の最大の問題は神の働きを知らないことである。人は否定の態度はとらないにしても、疑いの態度を示している。否定することはしないが、完全に認めてもいない。もし人に神の働きについての完全な認識があるなら、逃げ去ったりはしない。別の面の問題は、人が現実を知らないということである。今日、各々が関わってきたのは神の言葉である。本当に、未来において、しるしや不思議を見ることを考えるべきでない。わかりやすくあなたに説明するならば、今の段階であなたが知ることができるのは神の言葉だけである。そして、事実がなくとも、神のいのちはそれでもなお、人の中に作り込まれることが可能である。千年神の国のおもな働きとはこの働きであり、この働きを感じ取ることができないなら、あなたは衰えて倒れ、試練に陥り、また一層悲痛なことに、サタンの囚われの身となる。神はおもに言葉を話すために地上に来た。あなたが関りをもつのは神の言葉

である。あなたが知るのは神の言葉である。あなたが聞くのは神の言葉である。あなたが従うのは神の言葉である。あなたが経験するのは神の言葉である。そしてこの肉となった神は、人を完全にするのにおもに言葉を用いる。しるしや奇跡を示さず、イエスが過去に行った働きは特に行わない。どちらも神であるが、肉でもある。両者の職分は同一ではない。イエスが現れたとき、イエスは神の働きの部分も行い、言葉も話した。しかし、イエスが成し遂げたおもな働きは何であろうか。イエスがおもに成し遂げたのは磔の働きであった。イエスは磔の働きを完成し全人類を贖うために罪深い肉の似姿になった。そしてイエスが罪の贖いの供え物となったのは、全人類の罪のためであった。これが、イエスが成し遂げたおもな働きであった。最終的に、イエスは後から来る人たちを導くために、十字架の道を与えた。イエスが現れたとき、それはおもに贖いの働きを完了するためであった。イエスは全人類を贖い、天の国の福音を人にもたらし、そして天の国へ至る道をもたらしした。その結果、その後に来た人は皆、「我々は十字架の道を歩き、十字架のために我々自身を犠牲にすべきだ」と言った。もちろん、最初イエスは、人に悔い改めさせ罪を告白させるための他の働きも行い、そのための言葉も語った。しかし、イエスの職分はやはり磔であり、イエスが道を説きながら費やした三年半は、その後に起こるべき磔への準備であった。イエスが何度か祈ったのも磔のためであった。イエスの普通の人としての生涯と地上での三十三年半は、おもに磔という働きを完成するためであった。それはこの働きに取り組む力をイエスに与えるためであり、その結果として神はイエスに磔という働きを託した。今日、肉となった神は、どのような働きを成し遂げるのであろうか。今日、神はおもに「言葉が肉において現れる」という働きを完成するために、言葉を用いて人を完全にするために、そして人が言葉による取り扱いと精錬を受け入れるように、肉になった。神の言葉において、あなたは神に施され、いのちを与えられる。神の言葉において、あなたは神の働きと業を見る。神はあなたを罰し精錬するために言葉を用いる。したがって、もしあなたが苦難に会うなら、それはまた神の言葉によるものである。今日、神は事実でなく言葉を用いて働く。神の言葉があなたに届いてはじめて、聖霊はあなたの中で働きをすることができ、あなたに苦痛を感じさせたり甘美さを感じさせたりすることができる。神の言葉だけが、あなたを現実に至らせることができ、神の言葉だけが、あなたを完全にすることができる。したがって、終わりの日に神が行う働きはおもに言葉を用い、すべての人を完全にし、人を導くことであることを、せめてあなたは理解しなければならない。神はその働きのすべてを言葉を通じて行なう。神はあなたを罰するために事実を用いない。時には神に抵抗する人もいる。神はあなたに大きな不快感をもたらし、あなたの肉は罰せられず、あなたは苦痛を味わうこと

はない。しかし、神の言葉があなたに届き、あなたを鍛錬するようになるとただちに、それはあなたにとって耐えられないものになる。そうではないであろうか。効力者の期間に、人を底なしの穴に投げ入れると神は言った。人は実際に底なしの穴に落ちたであろうか。人を鍛錬するための言葉だけで、人は底なしの穴に入ってしまった。このように、神が肉となる終わりの日には、神はすべてを成し遂げ、すべてを明らかにするためにおもに言葉を用いる。神の言葉の中においてのみ、神であるものを知ることができる。神の言葉の中においてのみ、神が神自身であることを知ることができる。肉となった神が地上に来るとき、神は言葉を話すこと以外のどのような他の働きもしない。したがって、事実が必要でない。言葉で十分である。おもにこの働きをするために、神の力と至高を人が神の言葉の中に見ることができるように、神が身を低くして自身を隠していることを人が神の言葉の中に見ることができるように、そして神の完全性を人が神の言葉の中に知ることができるように、神は来たからである。神が所有するものおよび神の存在のすべてが、神の言葉の中にある。神の知恵や素晴らしさも神の言葉の中にある。この中に、神が言葉を話す多くの方法を人は見ることができる。これまでずっと、神の働きのほとんどは、人間への施しであり、明かしであり、取り扱いであった。神は軽々しく人を呪いはしないし、そうするときでさえ言葉を通して行う。したがって、この肉となった神の時代において、神が再び病人を癒やし、悪魔を追い出すのを見ようとしてはならず、また常にしるしを探し続けてはならない。それは無意味である。そのようなしるしは、人を完全にしはしない。わかりやすく言うならば、つまり、今日、肉となった現実の神自身は行動せず、話すだけなのである。これが真理である。神は言葉を用いてあなたを完全にし、あなたに食べ物を与え、水をやる。神はまた言葉を用いて働き、さらに神の現実性をあなたに知らせるために、事実の代わりに言葉を用いる。このような神の働き方を感知することができるなら、否定的でいることは難しい。否定的なことに集中する代わりに、肯定的な事柄にのみ集中すべきである。つまり、神の言葉が成就しようとしまいと、あるいは事実の到来があらうとなかろうと、神はその言葉から人がいのちを得ることを可能にする。これはあらゆるしるしの中の最大のしるしである。そしてさらに、それは議論の余地のない事実である。これこそ、神を知るための最良の証拠であり、しるしよりも偉大なしるしである。このような言葉だけが、人を完全にできるのである。

神の国の時代が始まるや否や、神は言葉を放ち始めた。未来において、これらの言葉が徐々に成就していく。そしてそのときには、人はいのちへと成長する。人の墮落した性質を明らかにするために神が言葉を用いることは、より現実的であり、そしてより必要である。そして神は、人の信仰を完全にするために働きを行うのに

言葉以外の何ものも用いない。なぜなら、今は言葉の時代であり、そしてそれは、人の信仰、決意、協調性を必要とするからである。終わりの日の、肉となった神の働きとは、人間に奉仕し与えるために言葉を用いることである。肉となった神がその言葉を話し終えてはじめて、言葉は成就し始める。神が話している間は、神の言葉は成就しない。なぜなら、神が肉の段階にあるとき神の言葉が成就することはできないからである。これは、神が肉であり霊ではないのを人が見ることができるようにするためだからである。この結果、人は自身の目で神の現実性を見ることができる。神の働きが完了する日、すなわち地上で神によって話されるべきすべての言葉が話されたその日、神の言葉は成就し始める。今は、神の言葉の成就の時代ではない。なぜなら神は言葉をまだ話し終えていないからである。従って、神が地上でその言葉をまだ話しているのを見ると、あなたは神の言葉が成就するのを待ち構えてはいけない。神が言葉を話すのを止め、地上での神の働きが完了する時、それが神の言葉が成就し始める時である。地上で神が話す言葉の中には、ある観点では、いのちの提供が存在し、もう一つの観点では、預言が存在する。来るべき諸事についての預言、行われるであろう諸事についての預言、さらに未だ成し遂げられていない諸事についての預言である。イエスの言葉の中にも預言はあった。ある観点からは、イエスはいのちを供給し、別の観点からは、イエスは預言を話した。今日、言葉と事実を同時に遂行することについて語られることはない。なぜなら、人が自身の目で見るができることと、神が行うこととの間の差異は大きすぎるからである。ひとたび神の働きが完了したなら、神の言葉は成就し、言葉の後に事実が到来する、とだけ言うことができる。終わりの日において、肉となった神は地上において言葉の職分を果たす。そしてこれを実行するとき、神は言葉だけを話し、その他の問題には注意を払わない。ひとたび神の働きに変化が現れたら、神の言葉は、成就され始める。今日、言葉はまず、あなたを完全にするために用いられる。神が全宇宙で栄光を獲得する時、それは神の働きが完了する時、話されるべきあらゆる言葉が話され、全ての言葉が事実になった時である。神は、人類が神を知ることができるように言葉における働きをするため、終わりの日に地上にやって来た。その結果、人類は神であるものを知り、神の知恵と、神の言葉がもたらす神の驚くべき業を全て知ることが可能になる。神の国の時代を通じて、神は全人類を征服するために言葉を用いる。未来においては、神の言葉は、あらゆる宗教、分野、国家、教派にも届くであろう。神はすべての人を征服し、神の言葉が権威や力を帯びるのをすべての人に知らしめるために、言葉を用いる。したがって今日、あなたがたは、神の言葉にのみ面するのである。

今の時代に神によって話される言葉は、律法の時代に話された言葉とは異なり、

また恵みの時代に話された言葉とも異なる。恵みの時代には、神は言葉の働きをせず、全人類を贖うためにキリストは十字架に磔にされると語っただけである。聖書は、イエスがなぜ磔にされる運命にあったのか、さらに、イエスが十字架上で受けた苦しみ、そして人がどのように神のために磔にされるべきかだけを記述する。その時代を通じて、神によってなされる働きはすべて、キリストの十字架上の死を中心に展開していた。神の国の時代には、肉となった神は、神を信ずるすべての人たちを征服するために、言葉を用いる。これが、「言葉が肉において現れる」ということである。神は、この働きをするために終わりの日にやって来た。つまり、神は、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げるためにやって来た。神は言葉を話すだけであり、事実の到来は稀である。これがまさに、言葉が肉において現れることの実質である。そして肉となった神が自身の言葉を話すとき、これが肉における言葉の出現であり、肉へ入り来る言葉である。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。そして言は肉となった」。このこと（言葉が肉において現れるという働き）が、終わりの日に神が成し遂げるだろう働きであり、自身の全経営計画の最終章である。したがって、神は地上に来て、肉の中で自身の言葉を表さなければならない。今日行われること、未来において行われるであろうこと、神によって成し遂げられるであろうこと、人の終着点、救われるであろう人々、滅ぼされるであろう人々、等々、最後に成し遂げられるべきこのような働きはすべて、明確に述べられてきた。そしてこれらはすべて、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げることを目的にしている。かつて発行された行政命令や憲法、滅ぼされるであろう人々、安息へ入るであろう人々、これらの言葉はすべて成就されなければならない。これが、終わりの日を通じて、肉となった神によっておもに成し遂げられた働きである。神は、神によって運命づけられた人々はどこに属し、運命づけられない人々はどこに属するか、神の民や息子たちはどのように分類されるか、イスラエルに何が起こるか、エジプトに何が起こるかを人々に理解させる。未来には、これらの言葉のすべてが成し遂げられる。神の働きの歩調は加速している。神は、あらゆる時代に何かなされるべきか、肉となった神によって終わりの日に何が行われるよう予定されているか、そして行われるべき神の職分が何であるかを、人に明らかにするための手段として言葉を用いる。これらの言葉はすべて、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げるためのものである。

わたしは以前「しるしや不思議を見ることを重視する者は、見捨てられるだろう。彼らは、完全にされる人たちではない」と言った。わたしは非常に多くの言葉を話してきたが、人はこの働きについての認識を微塵も持ち合わせない。そして、ここにいたっても、人は依然として、しるしや奇跡を求めている。あなたの神への

信仰はしるしと不思議を見ることの追求でしかないのでしょうか。それともいのちを獲得するためなのか。イエスも多くの言葉を話したが、その一部は今日まだ達成されていない。イエスは神ではないとすることができるでしょうか。神は、彼がキリストであり、神の愛する子であることを示した。あなたにこれを否定することができるのか。今日、神は言葉を話すだけである。そしてもし、あなたがこのことを完全に知らないなら、あなたはしっかりと立つことはできない。あなたは神であるという理由で神を信じるのか。あるいは神の言葉が成就されたかどうかにもとづいて、神を信じるのか。あなたは、しるしや奇跡を信じるのか。それとも神を信じるのか。今日、神はしるしや奇跡を示さない。それでもそれは本当に神なのか。もし、神が話す言葉が成就されないなら、それは本当に神なのか。神の実質は、神が話す言葉が成就したかどうかによって決められるのか。神を信じる前に神の言葉の成就をいつも待望している人がいるのは何故なのか。このことは、彼らが神を知らないということを意味しないのでしょうか。このような観念をもつ人たちは、神を否定する人たちである。彼らは、神を評価するのに、自らが持つ観念を用いる。もし、神の言葉が成就するなら、彼らは神を信じ、もし言葉が成就しないなら、彼らは神を信じない。さらに、彼らは常にしるしや不思議を見ることを追求する。このような人は現代のパリサイ人ではないでしょうか。あなたが堅く立つことができるかどうかは、あなたが真の神を知っているかどうかにかかっている。これは決定的に重要である。あなたの中で神の言葉の実在性が偉大であればあるほど、神の実在性に関するあなたの認識も偉大になり、あなたは試練の中でますます堅く立つことができるようになる。しるしや不思議を見ることを重視すればするほど、堅く立つことができなくなり、試練の中で躓く。しるしや不思議は、基礎ではない。神の実在のみがいのちである。一部の人たちは、神の働きによって達成されるべき効果を知らない。彼らは、神の働きについての認識を追求せず、当惑の中で日々を送っている。彼らが求めるのは、神に彼らの欲望を満たしてもらうことだけである。そうやってはじめて、彼らは自らの信仰において真摯になる。彼らは、もし神の言葉が成就するならいのちを追求するが、神の言葉が成就しないなら、いのちを追求する可能性はないと言う。人は、神への信仰は、しるしや不思議を見ることを追求することであり天国や第三の天まで引き上げられることを追求することであると考えている。神への信仰は、神の実在性に入って行こうとすること、いのちの追求、さらに神のものとされることの追求であると言う者は一人もいない。そのような追求における意味は何であろうか。神についての認識や神の満足を追求しない者は神を信じない者である。彼らは神を冒瀆する者である。

今やあなたがたは、神への信仰とは何かを理解したであろうか。神への信仰は、

しるしや不思議を見ることを意味するであろうか。それは天国に昇ることを意味するであろうか。神を信じることは簡単なことでは絶対でない。あのような宗教的慣行は、一掃されるべきである。病人の癒しや悪魔の追放を求めること、しるしや不思議を重視すること、神の恵みや平和や喜びをさらに欲しがること、明るい未来や肉の快楽を求めること、これらは宗教的慣行であり、そのような宗教的慣行は、漠然とした信仰の種類である。今日の実際の神への信仰とは何なのか。それは、神の真の愛を達成するために、神の言葉をあなたのいのちの現実として受け入れることであり、神の言葉から神を知ることである。明確に言うならば、すなわち神への信仰は、あなたが神に従うこと、神を愛すること、さらに、神の被造物によって為されるべき本分を遂行することに資するものである。これが、神を信じることの目的である。あなたは、神の美しさ、神がいかに尊敬に値するか、造ったものの中で、神がいかに救いの働きを行いそして彼らを完全にしているかについての認識を達成しなければならない。これが、神への信仰における最低必要事項である。神への信仰はおもに、肉の生活から神を愛する生活への転換、墮落の中の生活から神の言葉のいのちにおける生活への転換である。そしてそれは、サタンの領域下から出て神の配慮と保護の下で生きることであり、肉への従順ではなく神への従順を達成することであり、神があなたの心のすべてを獲得しあなたを完全にすることを可能にすることであり、さらにあなた自身を墮落したサタンのような性質から自由にするものである。神への信仰はおもに、神の力と栄光があなたの中で明らかに示されるためのものである。その結果、あなたは、神の旨を行い、神の計画を成し遂げることができ、さらに、サタンの前で神への証しとなることができるようになる。神への信仰は、しるしや不思議を見たいという願望を中心とせず、個人的な肉のためであってもいけない。それは、神を知ること、神に従うことができること、そしてペテロのように、死ぬまで神に従うことを追求することでなければならない。これが、神への信仰の主要な目的である。神の言葉を飲み食いするのは、神を知るためであり、神を満足させるためである。神の言葉を飲み食いすることは、神についてのより大きな認識をもたらす。そうなのはじめて、あなたは神に従うことができる。神についての認識があってはじめて、あなたは神を愛することができ、そしてそれが、人が神への信仰において持つべき目標である。もし、神への信仰において、いつも、しるしや不思議を見ようとするなら、そのような神への信仰の考え方は間違っている。神への信仰とは、おもに、いのちの現実として神の言葉を受け入れることである。神自身の口から出た言葉を実践し、あなた自身の内部でそれらの言葉を実行することのみ、神の目的は達成される。神を信じることにあって、人は神によって完全にされるように、神に服従することができるように、神に完全に

従順でいられるように努力すべきである。もし不平もなく神に従うことができ、神の希望を心に留め、ペテロの霊的背丈に達し、そして神が言うところのペテロの流儀を所有するなら、それはあなたが神への信仰に成功したときであり、そしてそれは、あなたが神のものとされたことを意味するのである。

神は自身の働きを全宇宙において行う。神を信じる者はすべて、神の言葉を受け入れ、神の言葉を飲み食いしなければならない。何人といえども、神によって示されるしるしや不思議を見ることで神のものとされることはあり得ない。時代を超えて、神は常に、人を完全にするのに言葉を用いてきた。したがって、あなたがたの注意のすべてをしるしや不思議に向けるべきではなく、神によって完全にされるよう努めるべきである。旧約聖書の律法の時代において、神はいくつかの言葉を語った。そして恵みの時代において、イエスもまた多くの言葉を話した。イエスが数多くの言葉を話した後、後の使徒や弟子たちが人々を導き、イエスが発した戒めに従って実践し、イエスの語った言葉と原則に従って経験するようにさせた。終わりの日において、神は人を完全にするのに、おもに言葉を用いる。神は、人に圧力をかけたり人を確信させたりするのに、しるしや不思議を用いない。それは、神の力を明らかにしない。もし神がしるしや不思議を示すだけならば、神の实在性を明らかにすることは不可能である。したがって、人を完全にすることも不可能である。神は、しるしや不思議によって人を完全にせず、人を潤し牧養するのに言葉を用いる。そしてその後、人は完全な従順と神についての認識を達成することができる。これが、神が行う働きと神が話す言葉の目的である。神は、人を完全にするのにしるしや不思議を示すという方法を用いない。神は言葉を用い、多くの異なる働きの方法を用いて人を完全にする。それが精錬であろうと、取り扱い、刈り込み、あるいは言葉の施しであろうと、神は、人を完全にするために、人に神の働き、神の知恵や驚くべき力についてのより大きな認識を与えるために、多くの異なる観点から話す。終わりの日に神が時代を終え、人が完全にされたならば、そのとき、人はしるしや不思議を見るにふさわしくなる。神を認識するようになり、神が何をしようと神に従うことができるとき、あなたはしるしと不思議を見ても、神についての観念をこれ以上もたなくなる。今、あなたは墮落し完全に従順であることはできない。あなたはそんな状態にいる自分のことを、しるしや不思議を見るにふさわしいと思っているであろうか。神がしるしや不思議を示す時は、神が人を罰するときであり、時代が変わるときでもある。さらに、時代が完結するときでもある。神の働きが順当に遂行されているとき、神はしるしや不思議を示さない。しるしや不思議を示すことは神にとって極めて容易であるが、それは神の働きの原則ではないし、神による人の経営（救い）の目的でもない。もし、人がしるしや不思議を見た

ら、そしてもし、神の霊の体が人の前に現れるようなことがあったら、神を信じない人がいるであろうか。わたしは以前、東方から勝利者たちを獲得する、彼らは大きな苦難のただ中からやって来ると言ったことがある。この言葉は何を意味しているのか。それは、このような神のものとされた人たちは、裁きと刑罰、取り扱いと刈り込み、そしてあらゆる種類の精錬を経た後に、ただ真に従順であったということの意味する。そのような人の信仰は漠然としておらず、抽象的でもなく、本物である。彼らはしるしや不思議、そして奇跡も見ることがない。彼らは難解な文字や教義あるいは深遠な洞察について話さない。その代わり、彼らには実在性さらに神の言葉、そして神の実在についての本物の認識がある。そのような集団は、神の力を一層明らかにすることができないであろうか。終わりの日の神の働きは、実際の働きである。イエスの時代に、イエスは人を完全にするためではなく、人を贖うためにやって来た。したがって、イエスは人々を自身に従わせるためにいくつかの奇跡を見せた。なぜなら、イエスはおもに磔という働きを完了するためにやってきたのであり、しるしを示すことは彼の使命の働きの一部ではなかった。そのようなしるしや不思議は、イエスの働きを効果的にするために行われた働きであった。それらは追加的な働きであり、その時代全体の働きを表すものではなかった。旧約聖書の律法の時代においては、神はいくつかのしるしや不思議を示した。しかし、神が今日行う働きは、実際の働きであり、神は今や、決してしるしや不思議を示さない。神がしるしや不思議を示したとすれば、神の実際の働きは掻き乱され、神はそれ以上の働きを行うことができなくなるであろう。もし神が言葉を用いて人を完全にすると言いながら、しるしや不思議も示したとしたら、人が神を真に信じるかどうかを明らかにすることができるであろうか。したがって、神はそのようなことは行わない。人の内面には宗教的なものがあふれている。人の内面にある宗教的な観念や超自然的な事柄のすべてを追い出し、人に神の実在性を知らしめるために、終わりの日に神はやって来た。抽象的で空想的な神のイメージを、言い換えれば、全く存在しない神のイメージを取り去るために、神はやって来た。したがって、今や、唯一の貴重な事とは、あなたが実在性について認識を持つことである。真理は、あらゆるものより優先する。あなたは今日、どれだけ多くの真理を持っているだろうか。しるしや不思議を示すものはすべて神なのか。悪霊もしるしや不思議を示すことができる。彼らはすべて神なのか。神への信仰において、人が求めるのは真理であり、追求するのはいのちである。しるしや不思議ではない。これが神を信じる人すべての目標でなければならない。

完全にされる者は精錬を経なければならない

あなたが神を信じているのであれば、神に従い、真理を実践し、自分の本分をすべて尽くさなければならない。それに加えて、自分が経験すべき物事を理解しなければならない。単に取り扱い、懲らしめ、そして裁きを経験するだけで、神を享受することはできても、神があなたを鍛えたり取り扱ったりしている際、それを感じられないままにいるなら、それは受け入れ難いことである。あなたはおそらく、こうした精錬に臨むとき、しっかり立つことができるだろうが、それだけではまだ十分ではない。あなたは前進し続けなければならない。神を愛することを学ぶにあたり、それが止まることはなく、そこに終わりはない。人々は神を信じることを、極めて単純なものとしているが、ひとたび実際の経験を得ると、神への信仰は人々が想像するほど簡単ではないことに気づく。神が働きを行なって人間を精錬するとき、人間は苦しむ。人間に対する精錬が大きいほど、神に対するその人の愛は大きくなり、その人の中で神の力がさらに示される。逆に、人の受ける精錬が少なければ少ないほど、神に対するその人の愛も少なくなり、その人の中で示される神の力も少なくなる。人に対するこうした精錬と苦痛が大きいほど、またその人の経験する苦悶が多いほど、神に対するその人の愛が深まり、神への信仰もさらに純粋なものとなり、神に関する認識もより深いものになる。あなたは自分の経験の中で、精錬を受けながら大いに苦しむ人、多くの取り扱いと懲らしめを受ける人を目の当たりにし、神への深い愛を抱き、神に関するさらに深遠で鋭い認識をもつのはこのような人だと理解する。取り扱いを経験していない人には表面的な認識しかなく、ただ「神は本当に良いお方だ。人々が神を享受できるよう、彼らに恵みを授けられる」と言うことしかできない。取り扱いと懲らしめを経験していれば、神に関する真の認識について話すことができる。したがって、神が人間の中で行なう働きが驚異的であればあるほど、それはいっそう貴重であり、有意義なものになる。それがあなたにとって測り知れないものであればあるほど、またそれがあなたの観念と相容れないものであればあるほど、神の働きはますますあなたを征服することができ、またあなたを獲得して完全にすることができる。神の働きの意義はなんと大きいことか。神がこのようにして人間を精錬しなければ、またこのような方法によって働きを行なっていなければ、神の働きは効果に乏しく、その意義を失ってしまうだろう。神がこの集団を選んで獲得し、終わりの日に完全にするのであることは、過去に語られていた。その中に、並外れて大きな意義がある。神があなたがたの中で行なう働きが偉大であればあるほど、神に対するあなたがたの愛はいっそう深く純粋なものとなる。神の働きが偉大であればあるほど、人は神の知恵に関する何か

をいっそう把握し、神に関する認識もより深くなる。終わりの日には、六千年にわたる神の経営計画が終焉を迎える。それがたやすく終わるなど、本当にあり得るのか。神がひとたび人類を征服すれば、神の働きは終わるのだろうか。これほど単純なことなのか。人はまさに、それはこんなに単純なのだと思っているが、神が行なうことはそれほど単純なものではない。あなたが神の働きのどの部分に触れようと、神の働きはどれも人間にとって測り知れないものである。仮にあなたがそれを推し量れたとしたら、神の働きの意義や価値は失われてしまうだろう。神によってなされる働きは測り知れないものであり、あなたの観念とまったく正反対のものである。そして、それがあなたの観念と一致しなければいけないほど、神の働きは有意義であることがよりいっそう示されるのである。もしもあなたの観念と一致するならば、それは無意味なものとなるはずだ。現在あなたは、神の働きはとても不思議だと感じているが、不思議だと感じれば感じるほど、神は測り知れないとますます感じるようになり、神の業がいかに偉大かを理解するのである。仮に、神が表面的かついい加減な働きだけを行なって人を征服し、その後は何もしなかったとすれば、人は神の働きの意義をその目で見ることはできないだろう。あなたは今少しばかりの精錬を受けているが、それはあなたのいのちの成長に極めて有益なものである。ゆえに、あなたがたがそうした困難を経るのは不可欠なことなのである。今日、あなたは少しばかりの精錬を受けているが、後になれば神の業を真に目の当たりにすることができ、最終的に「神の業は実に不思議だ」と言うだろう。それがあなたの心の声なのだ。神の精錬（効力者の試練と刑罰の時）をしばらく経験して、最後に「神を信じることは実に難しい」と言った人がいる。その人たちが「実に難しい」という言葉を使った事実は、神の業が測り知れないものであること、神の働きに大きな意義と価値があること、そして神の働きには人間によって大切にされる価値があることを示している。わたしがこれほど多くの働きを行なった後、もしもあなたに認識が一切なかったとしたら、わたしの働きにはそれでも価値があるだろうか。あなたはそれを受けてこう言うだろう。「神への奉仕は実に困難だ。それに、神の業はほんとうに不思議で、神には真に知恵がある。神は実に美しい」。一定期間の経験を経た後、もしもあなたにこのような言葉が言えたなら、それは自分の中で神の働きを得たことを証明している。いつの日か、あなたが海外に福音を広めている際、誰かから「あなたの神への信仰はどうなっているのか」と訊かれたら、あなたは「神が行なうことは実に素晴らしい」と言えるようになるはずだ。すると相手は、あなたの言葉は実際の経験から語られたものだと感じる。これこそが、ほんとうに証しをするということである。あなたは、神の働きは知恵に満ち、自分の中での神の働きが真に自分を確信させ、自分の心を征服した、と言うだろ

う。神は人類の愛にふさわしい以上の存在なのだから、あなたは常に神を愛する。こうしたことを話せるならば、あなたは人々の心を感動させることができる。そのすべてが証しをするということである。鳴り響くような証しをして涙を流すほど人々を感動させることができるならば、それは、あなたが真に神を愛する者であることを示している。と言うのも、あなたは神への愛を証しすることができ、あなたを通じて神の業が証しされるからである。そしてあなたの証しを通じ、他の人は神の働きを探し求め、神の働きを経験するようになり、どのような環境においても揺るぎなく立てるようになる。これが証しをする唯一の真の方法であり、まさに今あなたに求められていることである。神の働きは極めて貴重で人によって大切にされる価値があり、神はかくも貴重で豊富さに溢れていることを、あなたは理解すべきである。神は語るだけでなく、人々を裁き、彼らの心を精錬し、彼らに喜びをもたらし、彼らを自分のものとし、征服し、完全にすることができる。神が非常に素晴らしいであることを、あなたは自分の経験から知るだろう。では、あなたは今、どれほど神を愛しているのか。これらのことを本当に心から言えるのか。これらの言葉を心の底から表現できるとき、あなたは証しすることができるだろう。ひとたびあなたの経験がこの段階に達すれば、あなたは神の証人になることができ、その資格を得るだろう。自分の経験においてこの段階に達していなければ、あなたは依然として遠くかけ離れている。精錬される過程において、人が弱点を見せるのは普通のことだが、精錬された後には、「神はとても賢く働きを行なう」と言えなければならない。それらの言葉に関する実践的な認識を本当に得られれば、それはあなたにとって大切なものになり、あなたの経験に価値が生まれる。

今、あなたは何を追い求めるべきか。あなたが神の働きを証しできるかどうか、神の証しと顕示になれるかどうか、神によって用いられるのにふさわしいかどうか、あなたの求めるべきことである。神はあなたの中で、実際にどれほどの働きを行なってきたのか。あなたはどれほど見て、どれほど触れたのか。どれほど経験して味わったのか。神があなたを試したかどうか、取り扱ったかどうか、あるいは懲らしめたかどうかにかかわらず、神の業と働きがあなたに対してなされてきたのである。しかし、神を信じる者として、そして神によって完全にされることを進んで追い求める者として、あなたは自分の実際の経験を基に、神の働きを証しできるのか。自分の実際の経験を通じ、神の言葉を生きることができるのか。自分の実際の経験を通じ、他の人々に糧を施し、自分の生涯を捧げて神の働きを証しすることができるのか。神の働きを証しするには、自分の経験、認識、そして支払った代価に頼らなければならない。そうすることでのみ、あなたは神の旨を満たすことができる。あなたは神の働きを証しする者なのか。あなたにそうした志があるのか。神の

名、さらには神の働きを証しすることができ、神が自身の民に求める姿を生きることができたら、あなたは神の証しをする人である。あなたは実際に神をどう証しするのか。それには、神の言葉を求め、それを生きることが切望し、また自分の言葉で証しを行ない、人々が神の働きを知り、神の業を見られるようにしなさい。そのすべてを心から求めるなら、神はあなたを完全にする。神によって完全にされ、最後に祝福されることしか求めないのであれば、あなたの神への信仰に対する見方は純粹ではない。あなたは実生活において神の業をどう見るべきか、神の旨が示されたときに神をどう満足させるべきかを追い求め、神の不思議と知恵をどう証しすべきか、神が自分を懲らしめ取り扱うことをどう証しすべきかを探し求めるべきである。これらはすべて、今あなたが熟考しているべきことである。神に対するあなたの愛の目的が、神によって完全にされた後、神の栄光に預かれるようになることだけであれば、それはまだ不十分であり、神の要求を満たせない。実践的な形で神の働きを証しし、神の要求を満たし、神が人々に行なう働きを経験できなければならないのである。苦痛であれ、涙であれ、あるいは悲しみであれ、あなたはそのすべてを実践の中で経験しなければならない。それらの目的は、神の証しをする一人としてあなたを完全にすることである。今、あなたはいったい何のために苦しみ、完全にされることを求めるよう強いられているのか。あなたの現在の苦しみは本当に神を愛して神の証しをするためなのか。あるいは肉の祝福のため、自分の将来的な見込みと運命のためなのか。あなたの意図、動機、そして追い求める目標はすべて正される必要があり、それらを自分の意志で導くことはできない。祝福を受けて権力を握るために完全にされることを求める人がいる一方、神を満足させ、神の働きを実際に証しするために、完全にされることを追い求める人もいれば、この二つの追求の仕方のうち、あなたはどちらを選ぶだろうか。前者を選ぶのであれば、あなたはまだ神の基準から遠くかけ離れている。わたしは以前、自分の業を全宇宙に公然と知らしめ、この宇宙で王として君臨するだろうと語った。その一方、あなたがたに託されているのは神の働きを証ししに行くことであり、王となって全宇宙に君臨することではない。宇宙と天空は神の業で満たされよ。あらゆる者にその業を見せ、それを認めさせよ。これらの言葉は神自身に関連して語られるのであり、人間が行なうべきは神の証しをすることである。あなたは今、神をどれほど知っているのか。神についてどれほど証しできるのか。神が人間を完全にする目的は何か。ひとたび神の旨を理解した後、あなたはいかにして神の旨への配慮を示すべきか。自分が完全にされる意欲、自分が生きるものを通じて神の働きを証しする意欲があなたにあり、それがあなたの原動力になるのであれば、難しすぎることは何もない。人々が今必要としているのは信仰である。あなたにこの原動力があれ

ば、否定的態度、消極性、怠惰、肉の観念、処世哲学、反抗的性質、そして感情といったものをすべて容易に捨て去れる。

人が試練を受けている際に弱くなったり、自分の中で消極性が生じたり、神の旨や自分の実践の道が明らかでなくなったりするのは普通のことである。だがいずれにせよ、あなたはヨブのように神の働きを信じなければならず、神を否定してはならない。ヨブは弱く、自分が生まれた日を呪ったにもかかわらず、人生におけるすべての物事がヤーウェによって授けられること、そしてそのすべてを奪うのもまたヤーウェであることを否定しなかった。いかにして試されようとも、ヨブはこの信念を堅持した。あなたが自分の経験の中で、神の言葉を通じてどのような精錬を受けようとも、神が人類に求めるのは、要するに神への信仰と愛である。神がこうにして働きを行なうことで完全にするのは、人々の信仰と愛、そして志である。神は人々を完全にする働きを行なうが、人はそれを見ることも、それに触れることもできない。こうした状況において、あなたの信仰が必要とされるのである。肉眼で見えない何かがあるときに、人々の信仰が必要とされる。また、あなたが自分の観念を捨てられないとき、あなたの信仰が必要とされる。神の働きについてよく理解できないとき、あなたに求められるのは信仰をもつこと、そして揺るぎなく立って証しをすることである。ヨブがこのような状態に達したとき、神がヨブの前に現われ、ヨブに対して語った。つまり、あなたが神を見られるのは自分の信仰の中からだけであり、あなたに信仰があるとき、神はあなたを完全にするのである。信仰がなければ、神はそれを行なうことができない。あなたが何を得たいと望もうと、神はそれを授ける。あなたに信仰がなければ、あなたは完全にされることができず、神の業を見ることもできないし、ましてや神の全能を見ることなどできない。自分の実際の経験の中で神の業を見るという信仰があれば、神はあなたの前に現われ、あなたを中から啓いて導く。この信仰がなければ、神がそれを行なうのは不可能である。あなたが神への望みを失ったとしたら、どうして神の働きを経験できるだろうか。したがって、あなたに信仰があり、神に対して疑いを抱かず、神が何をしようと神に対する真の信仰をもっているときにだけ、神はあなたの経験を通じてあなたを啓いて照らし、そのとき初めてあなたは神の業を見ることができる。これらはすべて信仰を通じて成し遂げられる。信仰は精錬を通じてのみ生じるのであって、精錬なくして信仰が育まれることはあり得ない。「信仰」というこの言葉は何を指すのか。信仰とは、見ることも触れることもできないものがあるとき、神の働きが人間の観念にそぐわないとき、また、それが人間の手に届かないときに、人間がもつべき真の信念であり、誠実な心である。これこそが、わたしの言う信仰である。苦難や精錬のとき、人は信仰を必要とする。そして信仰の後には精錬が続く。

精錬と信仰は切り離せないのである。神がどのように働きを行なおうと、また自分の環境がどのようなものであろうと、あなたはいのちと真理を追い求め、神の働きに関する認識を求め、神の業を理解し、真理にしたがって行動することができる。そうすることが真の信仰をもつということであり、あなたが神への信仰を失っていないことを示している。あなたが精錬を通じて真理を追求することにしがみつき、神を真に愛し、神への疑念を募らせない場合にのみ、そして神が何をしようとも真理を実践して神を満足させ、神の旨を深く求め、神の旨に気を配ることができる場合にのみ、あなたは神に対する真の信仰をもつことができる。以前、あなたが王として治めるだろうと神が語ったとき、あなたは神を愛した。また、神があなたに自身を公然と示した際、あなたは神を追い求めた。だが現在、神は隠され、あなたは神を見ることができない。そして、あなたは多くの問題にぶつかっている。ならば今、あなたは神への望みを失うのか。ゆえに、あなたはいかなる時もいのちを追い求め、神の旨を満たすことを求めなければならない。これが真の信仰というものであり、最も美しい真実の愛である。

かつて、人々はみな神の前に出て決意を固め、「たとえ他の誰も神を愛さなくても、わたしは神を愛さなければならない」と言ったものだ。しかし今、精錬があなたに降りかかり、それが自分の観念にそぐわないせいで、あなたは神への信仰を失っている。これが真の愛なのか。あなたはヨブの行ないについて何度も読んでいるが、それらを忘れてしまったのか。真の愛は、信仰の中からのみ形を成すことができる。あなたは自分が受ける精錬を通じて神への真の愛を育む。また、あなたが実際の経験の中で神の旨に気を配れるのは信仰を通じてであり、自分の肉を捨てていのちを追い求められるのも信仰を通じてである。これこそが人の為すべきことである。あなたがそれを行なえば、神の業を見られるだろう。しかし、あなたに信仰が欠けているなら、神の業を見ることも、神の働きを経験することもできない。もしも神によって用いられ、完全にされたいと望むのであれば、次に挙げるものをすべて備えていなければならない。すなわち、苦しむ意志、信仰、忍耐、服従、そして神の働きを経験し、神の旨を把握し、神の悲しみを思いやれる能力などである。一人の人間を完全にするのは容易なことではなく、あなたが経験する一つひとつの精錬において、あなたの信仰と愛が必要とされる。神によって完全にされたいのであれば、ただ道へと駆け出したり、神のために自分を費やしたりするだけでは十分ではない。神によって完全にされる者となり得るには、多くのものを備えていなければならない。苦難に直面したときは肉への不安を脇にのけ、神に不満をぶつけずにいられる必要がある。神があなたから隠れているときは、神に付き従う信仰をもち、以前の愛が揺らいだり、消え去ったりすることがないように維持できなければならない。

い。神が何を行なおうと、あなたは神の意図に従わなければならない、また神に不満をぶつけるのではなく、自らの肉を呪う覚悟をしなければならない。試練に直面した際は、たとえ苦い涙を流したり、愛するものとの訣別が嫌だったりしても、神を満足させなければならない。それだけが真の愛、真の信仰なのである。あなたの実際の霊的背丈がどの程度であろうと、まずは苦難を受ける意志と真の信仰をともに備え、肉を捨てる意志も備えていなければならない。神の旨を満足させるべく、自ら進んで自分の苦難に耐え、個人の利益を失うことを惜しんではならない。また、自分に後悔することもできなければならない。過去、あなたは神を満足させることができなかったが、今では悔いることができる。これらのどの点においても欠けがあってはならない。神はこれらのことを通じてあなたを完全にするのである。これらの基準を満たせなければ、あなたが完全にされることはない。

神に仕える者は、神のためにどう苦しむべきかを知るだけでなく、それ以上に、神を信じる目的は神への愛を追い求めることだと理解しなければならない。神があなたを用いるのは、単にあなたを精錬したり、苦しませたりするためでなく、むしろあなたが神の業を知り、人生の真の意義、とりわけ、神に仕えることが容易な業ではないことを知るようにするためである。神の働きを体験することは、恵みを享受することではなく、むしろ神に対する自分の愛のために苦しむことに関係している。あなたは神の恵みを享受しているのだから、神の刑罰も享受しなければならない。そのすべてを経験しなければならないのである。あなたは自分の中における神の啓きを経験できるが、自分に対する神の取り扱いと裁きも経験できる。このように、あなたの経験は包括的なのである。神はあなたに裁きと刑罰の働きを行なった。神の言葉はあなたを取り扱ったが、それだけでなく、あなたを啓いて照らしもした。あなたが否定的かつ弱くなったとき、神はあなたのことを心配している。この働きはどれも、人間に関するすべてのことが神の指揮下にあることをあなたが知るようにするためである。あなたは、神を信じるとは苦難を受けること、または神のためにありとあらゆることを行なうことだと考えているかもしれないし、神を信じる目的は自分の肉が平和であるため、人生において万事が順調に進むため、あるいは自分があらゆることにおいて快適かつ気楽でいられるためだと思っているだろう。しかし、これらの目的はどれも、神への信仰に付随させるべきではないものである。あなたがそうした目的のために信じているのであれば、あなたの見方は誤りであり、あなたが完全にされることは不可能である。神の業、神の義なる性質、神の知恵、神の言葉、そして神の不思議と計り知れない性質は、どれも人々が認識すべきことである。そうした認識をもち、またそれを使うことで、自分の個人的な要求、希望、および観念を心の中から残らず取り除きなさい。これらのことを排除し

て初めて、あなたは神から求められる条件を満たすことができる。そうすることでのみ、あなたはいのちを得、神を満足させられるのである。神を信じる目的は、神を満足させ、神が求める性質を生きること、神の業と栄光がこの無価値な人々の集団を通じて示されるようにすることである。これが神を信じる正しい観点であり、あなたが追求すべき目標でもある。あなたは神を信じることについて正しい観点を持ち、神の言葉を得ることを求めなければならない。神の言葉を飲み食いし、真理を生きられるようにならなければならない、とりわけ神の実際の業、全宇宙を通じて為される神の素晴らしい業、そして、神が肉において行なう実践的な働きを見られるようになる必要がある。人は実際の経験を通じ、神が自分にどう働きを行なうのか、自分に対する神の旨が何かを理解することができる。それはどれも、人々の墮落したサタンの性質を排除するのが目的である。自分の中にある汚れと不義を一掃し、誤った意図を取り除き、神に対する真の信仰を育んだ後、真の信仰をもつことでのみ、あなたは神を真に愛することができる。神への信仰を基礎としなければ、あなたは本当に神を愛することができない。神を信じることなく、神への愛を実現できるだろうか。あなたは神を信じているのだから、それについて混乱してはならない。中には、神への信仰が自分に祝福をもたらすことを知るやいなや、活力に満ち溢れるものの、精錬を受けなければならないことを知ったとたん、すべての精力を失う人がいる。それが神を信じることなのか。最終的に、あなたは自分の信仰において、神の前で完全無欠の服従を成し遂げなければならない。あなたは神を信じているが、依然として神に要求を行ない、捨てきれない宗教的観念、諦めきれない個人的な利益が数多くあり、いまだに肉の祝福を求め、神が自分の肉を助け出し、自分の魂を救うことを望んでいる。これらはみな誤った観点をもつ人々の振る舞いである。宗教的な信念をもつ人々は、神を信仰してはいるものの、自分の性質を変えることや、神に関する認識を追い求めず、自分の肉の利益しか求めない。あなたがたの多くは、宗教的信念の範疇に属する信仰をもっている。それは神に対する真の信仰ではない。神を信じるには、神のために苦しむ覚悟がある心と、自分を捧げる意志をもっていなければならない。この二つの条件を満たさない限り、神に対するその人の信仰は無効であり、性質の変化を成し遂げることはできない。心から真理を追い求め、神に関する認識を求め、いのちを追い求める人だけが、真に神を信じる者である。

試練が自分に臨むとき、あなたは神の働きをどう当てはめてその試練に対処するだろうか。否定的になるだろうか、それとも神による人間への試練と精錬を肯定的な側面から理解するだろうか。あなたは神による試練と精錬から何を得るだろうか。神に対するあなたの愛は成長するだろうか。精錬を受けるとき、あなたはヨブ

の試練を当てはめ、神があなたの中で行なう働きに真剣に取り組むことができるだろうか。神がどのように人間を試すのか、あなたはヨブの試練を通じて理解できるだろうか。ヨブの試練はあなたにどのような靈感をもたらすだろうか。自分の精錬のただ中で、神のために証しする意欲があなたにあるだろうか。それとも快適な環境で肉を満足させることを欲するだろうか。神への信仰に関するあなたの観点は、いったいどのようなものなのか。それは本当に肉のためでなく、神のためであるのか。探し求める中で、あなたの追求には実際のところ目標があるのか。神によって完全にされるために、自ら進んで精錬を受ける気があるのか。それとも、むしろ神によって刑罰を受け、呪われたほうがよいと思っているのか。神のために証しをするという問題について、あなたの見方はいったいどのようなものなのか。真に神の証しをするには、人間は置かれた環境の中で何をすべきなのか。実際の神はあなたの中で実際の働きを行なうにあたり、数多くのことを明かしたというのに、あなたはなぜ立ち去ろうという考えを常に抱いているのか。神に対するあなたの信仰は、神のためなのか。あなたがたの大半にとって、信仰とは自分のために行なう計算の一部であり、自分の個人的な利益が目的である。神のために神を信じる人はほとんどいない。それは反逆ではないのか。

精錬の働きの目的は、おもに人々の信仰を完全にすることである。最終的に、あなたは立ち去りたいのに立ち去れないという状態に至る。中には希望のひとかけらを奪われてもなお信仰をもてる人もいる。そして人々は自分の将来の見込みについて、もはや何の希望も抱かない。そのとき初めて神の精錬は完了する。人間はいまだ生死のあいだを彷徨う段階に達しておらず、死を味わったことがないので、精錬の過程はまだ終わっていない。効力者の段階にある者たちでさえ、極限までには精錬されてはいなかった。ヨブは極限の精錬を経ており、頼れるものが何もなかった。すべての希望を失い、頼るものが何もなくなるところまで、人は精錬を受けなければならない。それだけが真の精錬である。効力者の時期において、あなたの心が神の前で常に静まり、神が何を行なおうと、あるいは自分に対する神の旨が何であろうと、常に神の采配に従ったなら、あなたはその道の果てに、神がなしたすべてのことを理解するだろう。あなたはヨブの試練を受けると同時に、ペテロの試練も受ける。ヨブは試された際に証しを行ない、最後にヤーウェがヨブに示された。証しを行なった後、ヨブは初めて神の顔を見るのにふさわしい者となったのである。「わたしは汚れた地から隠れ、聖なる国に自分を現わしている」と言われたのはなぜか。それは、聖くなって証しを行なわなければ、神の顔を見る品位は得られない、という意味である。神の証しを行なえなければ、あなたには神の顔を見る品位がない。精錬に直面した際、退いたり、神に不満をぶついたりして神の証しを行

なわず、サタンの笑い者になったとしたら、神の出現を得ることはできない。あなたがヨブのように、試練のただ中で自らの肉を呪い、神に不満をぶつせず、文句を言うことも、自分の言葉で罪を犯すこともなく、自分の肉を忌み嫌うことができれば、あなたは証しを行なっている。ある程度の精錬を受けてなお、ヨブのように神の前で完全に服従し、神にその他の要求をしたり、自身の観念を抱いたりしないのであれば、神はあなたの前に現われる。今、神はあなたの前に現われない。なぜなら、あなたが観念、個人的な先入観、勝手な考え、個人的な要求、そして肉の利益をあまりに多く抱いており、神の顔を見るに値しないからである。もしも神を見たのであれば、あなたは自分の観念を通じて神を押し測り、またそうすることで、神を十字架にかけることになる。自分の観念にそぐわないことが数多く起きても、あなたがそうした観念を脇にのけ、それらのことから神の業に関する認識を得て、精錬のただ中で神を愛する心を示せるなら、それが証しを行なうということである。自分の家庭が平穏で、肉の快適さを享受し、あなたを迫害する者が一人もおらず、教会の兄弟姉妹が自分に従っている場合、あなたは神を愛する心を示せるだろうか。そうした状況があなたを精錬し得るだろうか。神に対するあなたの愛は精錬を通じてのみ示されることができ、またあなたは、自分の観念にそぐわない出来事を通じてのみ完全にされ得る。神は数多くの逆境や否定的な物事を役立たせ、ありとあらゆるサタンの表われ、つまりサタンの行動、非難、妨害、そして欺瞞を用いることで、あなたにサタンの忌まわしい顔をはっきり見せ、それによってサタンを識別するあなたの能力を完全にする。そうすることで、あなたはサタンを憎んで捨てることができるのである。

あなたは数多くの失敗や弱さを経験し、消極的な状態に何度も陥ったが、それはすべて神の試練だと言える。なぜなら、あらゆることは神に由来し、すべての物事や出来事も神の掌中にあるからである。あなたが失敗しようが、弱かろうが、躓こうが、そのすべては神次第であり、神の手の内に握られている。神の視点から見れば、それはあなたの試練であり、あなたがそのことを認識できなければ、それは試みになるだろう。人々が認識すべき二種類の状態がある。その一つは聖霊に由来するものであり、もう一つの根源はサタンの可能性がある。前者は、聖霊があなたを照らし、あなたが自分を知り、自分を忌み嫌い、自分について悔いるようにし、神に対する真の愛をもち、神を満足させることを決心できるようにする状態である。後者は、自分のことを知っているものの、消極的かつ弱いという状態である。この状態は神の精錬だと言えるし、サタンの試みだとも言えるだろう。それは神による自分の救いであると認識し、自分はいま神に大きな借りがあると感じ、その時から神にその借りを返そうとして、そのような墮落に二度と陥らず、神の言葉を飲み食

いすることに努力し、自分のことを常に至らない存在であると見なし、切望する心をもつならば、それがまさに神の試練である。苦難が終わり、あなたが前進を再開した後も、神は引き続きあなたを導き、あなたに照らしと啓きを与え、糧を施すだろう。しかし、あなたがそれを認識せず、否定的になり、ただ自暴自棄になって失望し、そのように考えるのであれば、サタンの試みがあなたに臨むだろう。ヨブが試練を受けたとき、神とサタンは互いに賭けをし、神はサタンにヨブを苦しめることを許した。ヨブを試していたのは神だったが、実際にヨブのもとへ来たのはサタンだった。サタンとしてはヨブを試みたのだが、ヨブは神の側についていた。そうでなければ、ヨブは試みに負けていたはずである。人間は試みに負けるとすぐ危険に陥る。精錬を受けることは神からの試練だと言えるが、あなたが良い状態になれば、それはサタンによる試みだとも言える。あなたがビジョンを理解していなければ、サタンはあなたを責め、あなたのビジョンを曖昧にさせるだろう。あなたは知らぬ間に試みに負けるのだ。

神の働きを経験しなければ、あなたが完全にされることは決してない。あなたはまた、自分自身の経験の中で、その細部にも入らなければならない。例えば、自分が観念や有り余る動機を膨らませるのは何が原因か、それらの問題を解決するにあたり、どのような実践がふさわしいのか、といったことである。神の働きを経験できるなら、それはあなたに霊的背丈があることを意味する。ただ活力があるように見えるだけなら、それは真の霊的背丈でなく、あなたは絶対に揺るぎなく立つことができない。神の働きを経験することができ、いかなる時でも、どの場所においてもそれを経験して熟考でき、また羊飼いを離れ、神に頼って独立して生きることができ、神の実際の業を見ることができれば、その時初めて神の旨が成就する。現在、ほとんどの人がそれをどう経験すべきかわかっておらず、問題に直面した際、それに対処する方法を知らない。そのような人は神の働きを経験できず、霊的生活を送ることができないのである。あなたは神の言葉と働きを、自分の実際の生活に取り入れなければならない。

時として、神はあなたにある種の感覚を与える。それは、あなたが内なる喜びを失ったり、神の臨在を失ったりして、闇へと陥る原因になる感情である。それは一種の精錬である。何をしてもうまく行かなかったり、壁にぶち当たったりすることがある。これは神の鍛錬である。時として、神に従順でなく反抗的なことをしても、誰にも知られないことがある。しかし、神はそれを知っている。神はあなたを立ち去らせず、あなたを懲らしめる。聖霊の働きは極めてきめ細やかである。聖霊は人々の一つひとつの言動、一つひとつの行動と動き、人々のあらゆる思いと考えを注意深く観察し、それによって人々がこれらのことについて内面的な認識を得ら

れるようにする。一度何かをしてうまく行かず、再びやってもまだうまく行かなければ、あなたは少しずつ聖霊の働きを理解するようになる。訓練の時を何度も経て、神の旨に適うためには何をすべきか、また、神の旨に適わないものは何であるかを知る。最終的に、自分の中から聖霊に導かれたとき、あなたは正確に反応するようになる。あなたは時として反抗的になり、内面から神によって叱責されることもあるだろう。それはどれも神の鍛錬から来るのである。神の言葉を大事にせず、神の働きを軽視するなら、神はあなたのことを一切気にかけない。あなたが神の言葉を真剣に捉えれば捉えるほど、神はあなたをますます啓く。現在、教会には、曖昧かつ混乱した信仰をもつ人がおり、鍛錬を受けずに不適切なことを数多く行なっている。そのような人の中には聖霊の働きが明瞭に見受けられない。鍛えられることのないまま、金を稼ぐために自分の本分を置き去りにし、事業に打って出る人もいるが、そうした人はいっそう大きな危険に晒されている。そのような人は、現在において聖霊の働きがないだけでなく、将来完全にされるのも難しい。内面において聖霊の働きも神の鍛錬も見受けられない人が多数いる。そのような人は神の旨を明瞭に理解しておらず、神の働きを知らない者たちである。精錬のさなかに揺るぎなく立つことができ、神が何を行なうかに関わらず、神に付き従い、また、少なくとも立ち去らずにいることができる人、あるいは、ペテロが達成したことの0.1%を達成できる人は、よくやってはいるのだが、神に用いられるという観点から言えば、彼らに価値はない。多くの人は物事を迅速に理解し、神に対する真の愛を抱き、ペテロのレベルを超えることができる。神はこのような人を完全にする働きを行なう。そして鍛錬と啓きがそうした人たちに臨み、自分の中に神の旨と一致しないものがあれば、彼らはそれをすぐに捨て去れる。このような人々は金であり、銀であり、宝石であって、彼らの価値は極めて高い。神が様々な働きを行なったのに、依然として砂や石のようであったなら、あなたは無価値である。

赤い大きな竜の国における神の働きは驚くべきものであり、測り知ることができない。神によって完全にされる人々の集団もあれば、淘汰される集団もある。と言うのも、教会にはあらゆる種類の人がいるからである。真理を愛する人と愛さない人、神の働きを経験する人としらない人、本分を尽くす人と尽くさない人、神のために証しをする人としらない人。その一部は不信者であり悪人だが、彼らは必ずや淘汰される。神の働きを明瞭に知っていなければ、あなたは消極的になるだろう。なぜなら、神の働きが見受けられるのは少数の人々の中だけだからである。その時、神を真に愛する者とそうでない者が明らかになる。神を真に愛する者には聖霊の働きがあり、神を真に愛していない者は神の働きの各段階を通じて暴かれる。彼らは淘汰の対象になるのである。これらの人たちは征服の働きの過程で暴かれ、完全にさ

れる価値のない人々である。そして、完全にされた者はすべて神のものとされ、ペテロのように神を愛することができる。征服された者たちには自発的な愛がなく、受動的な愛だけがあり、神を愛することを強いられている。自発的な愛は実際の経験を通じて得た認識によって育まれる。この愛は人間の心を占め、彼らを自発的に神に献身させる。また、神の言葉が彼らの基礎となり、彼らは神のために苦しむことができる。もちろんこれらは、神によって完全にされた人が所有するものである。あなたが征服されることだけ求めるのであれば、神の証しをすることはできない。神が人々の征服を通じて救いの目的を達成するだけなら、効力者の段階で仕事は終わる。しかし、人々を征服することが神の最終目標ではない。それは人間を完全にすることである。したがって、この段階は征服の働きというより、むしろ完全と淘汰の働きだと言うべきである。いまだ完全に征服されていない人がおり、彼らを征服する過程において、人々の集団が完全にされる。これら二つの働きは調和して実行される。これほど長きにわたる働きの中でさえ、人々は立ち去らずにいる。そのことは、征服することの目標が達成されたことを示す。これが征服されるということの事実である。精錬は征服されるためのものではなく、完全にされるためのものである。精錬がなければ、人々が完全にされることはないだろう。ゆえに、精錬はまさに貴重である。今日、人々の一集団が完全にされ、得られている。以前に言及された十の祝福は、どれも完全にされた者たちを対象とするものだった。地上で姿を変えることに関する一切の物事は、完全にされた者たちを対象としている。完全にされていない者たちには、これを達成することができないのである。

辛い試練を経験することのみ、 神の素晴らしさを知ることができる

今日、あなたはどれほど神を愛しているのか。また、神があなたに行なったすべてのことのうち、あなたはどのくらいを知っているのか。これらがあなたの学ばなければならないことである。神が地上に来るとき、人に行なったすべてのこと、そして人に理解させたすべてのことは、人が神を愛し、真に神を知るようにするためのものである。人が神のために苦しむことができ、ここに至ることができたのは、ある意味では神の愛のおかげであり、別の意味では神の救いのおかげ、さらには神が人に行なった裁き、そして刑罰の働きのおかげである。神の裁き、刑罰、試練がなく、神があなたがたを苦しめていなければ、率直に言って、あなたがたが真に神を愛することはない。人に為された神の働きが偉大であればあるほど、そして人の苦しみが大きければ大きいほど、神の働きがどれほど意義深いかが明らかになり、

その人の心は真に神を愛することができる。あなたはどうすれば神の愛し方を学べるのか。苦痛や精錬、つらい試練がなければ、さらに、神が人に与えたものが恵みと愛と慈悲だけだったなら、神を真に愛するところまで達せるだろうか。神による試練の中、人は自分の欠点を知り、自分を取るに足らない、軽蔑すべき卑しい存在であり、自分には何もなく、自分は何物でもないことを知る一方、同じく神による試練の中、神は人間のために様々な環境を創り、人が神の素晴らしさをより良く経験できるようにする。苦痛は大きく、時として乗り越えられないこともあり、打ち砕くような悲しみに達することさえある。しかし、人はそれを経験することで、自分における神の働きがいかにより素晴らしいかを知り、またそれを基礎とすることでのみ、自分の中に神への真の愛が生まれるのである。今日、神の恵みと愛と慈悲だけでは真に自己認識することができず、ましてや人の本質を知るなど不可能であることを、人は理解している。神の精錬と裁きによってのみ、また、精錬それ自体の過程においてのみ、人は自分の欠点を知り、自分に何もないことを知る。このように、神に対する人の愛は神の精錬そして裁きという礎の上に築かれる。もしもあなたが神の恵みだけを享受し、平和な家庭生活や物質的な祝福があるのであれば、あなたは神を得ておらず、神への信仰が成功したとは考えられない。神はすでに肉における恵みの働きの一段階を行っており、人に物質的な恵みを授けてきたが、人は恵みと愛と慈悲だけでは完全になれない。人は自分の経験の中で神の愛の一部と出会い、神の愛と慈悲を知っているが、一定期間経験すると、神の恵みと愛と慈悲が人を完全にすることはできず、人の中にある堕落を明らかにすることも、その人の堕落した性質を取り除くことも、その人の愛と信仰を完全にすることもできないのだと理解する。神による恵みの働きは一時の働きであり、人は神を知るにあたり、神の恵みを享受することには頼れないのである。

神はどのような手段で人を完全にするのか。それは神の義なる性質によって成し遂げられる。神の性質はおもに義、怒り、威厳、裁き、呪いから成り立っており、神はおもに裁きという手段で人を完全にする。中にはそれが理解できず、なぜ神は裁きと呪いによってしか人を完全にできないのかと問う人がある。そのような人は「神が人を呪ったら、人は死ぬのではないか。神が人を裁いたら、人は断罪されるのではないか。それにもかかわらず、人はどうして完全になれるのか」と言う。神の働きを理解しない人はこのように言うのである。神が呪うのは人間の不従順であり、神が裁くのは人間の罪である。神の言葉は厳しく容赦がないものの、人の中にあるあらゆるものを明らかにし、そうした厳しい言葉を通じて人の中にある本質的な物事を露わにするが、神はそのような裁きを通じて肉の本質に関する深遠な認識を人に授け、そうして人は神の前で服従する。人の肉は罪から成り、サタンに属す

るものであり、不従順であり、神の刑罰の対象である。ゆえに、人に自分を認識させるには、神の裁きの言葉がその人に降りかかり、ありとあらゆる精錬が用いられなければならない。そのとき初めて神の働きは成果を生む。

神の語る言葉から、神はすでに人の肉を断罪したことがわかる。では、その言葉は呪いの言葉ではないのか。神によって語られる言葉は人の本性を暴き、その人はそうした暴きを通じて裁かれる。そして神の旨を満たせないと知ったとき、心の中で悲しみと悔恨を感じ、自分が神に大きな借りがあり、神の旨に到達できないことを感じるのである。時として、聖霊が内側からあなたを懲らしめることがあるが、この懲らしめは神の裁きに由来する。時として、神があなたを責め、あなたから顔を隠し、あなたに注意を払わず、あなたの中で働きを行わず、あなたを精錬すべく無言で罰することがある。人における神の働きは、おもに神の義なる性質を明らかにするためのものである。最終的に、人は神に対してどのような証しを行なうのか。神が義なる神であること、そして神の性質が義、怒り、刑罰、裁きであることを、人は証しする。つまり、人は神の義なる性質を証しするのである。神は自身の裁きを用いて人を完全にしており、人を愛し、救ってきた。しかし、神の愛にはどれだけのものが含まれているのか。そこには裁き、威厳、怒り、呪いがある。神は過去に人を呪ったが、底なしの淵に完全に放り投げたわけではなく、そうした手段を用いて人の信仰を精錬した。人を死に追いやったわけではなく、人を完全にすべく業を行なったのである。肉の本質はサタンに属するものである。それは神が言った通りなのだが、神が為した事実はその言葉通りに成就したのではなかった。神があなたを呪うのは、あなたが神を愛するようになるため、肉の本質を知るようになるためである。神があなたを罰するのは、あなたが目覚めるようにするため、そして内なる欠点を認識し、人が完全に無価値であることを知るようになるためである。このように、神の呪い、裁き、威厳、怒りはどれも、人を完全にするためのものである。神が今日行なうすべてのこと、神があなたがたの中で明らかにする自身の義なる性質は、いずれも人を完全にするためのものである。それが神の愛である。

人は自身の伝統的な観念の中で、神の愛は恵み、慈悲、そして人の弱さに対する憐れみだと信じている。それらも神の愛ではあるが、あまりに一方的であり、神が人を完全にする主たる手段ではない。病気のために神を信じ始める人もいるが、その病気はあなたに対する神の恵みである。それがなければ、あなたは神を信じることはなかったはずだ。そして神を信じていなければ、ここまで到達することはなかっただろう。ゆえに、そうした恵みでさえも神の愛なのである。イエスを信じていたとき、人々は真理を理解していなかったので、神に愛されないようなことを多数行なった。しかし、神には愛と慈悲があり、人をここに至らせた。そして、人が

何も理解していないにもかかわらず、神は人が自分に従うのを許し、さらには人を今日へと導いてきたのである。これは神の愛ではないのか。神の性質において表わされるのは、神の愛である。これはまったく正しい。教会の建設が頂点に達したとき、神は効力者という段階の働きを行ない、人を底なしの淵に放り投げた。効力者の時代における言葉はすべて呪いだっただけ。つまり、あなたの肉への呪い、墮落したサタンの性質への呪い、そしてあなたに関することのうち、神の旨を満たさないものへの呪いである。その段階で神が行なった働きは威厳として表わされた。その直後、神は刑罰という段階の働きを実行し、死の試練がもたらされた。そのような働きの中、人は神の怒り、威厳、裁き、刑罰を目の当たりにしたが、同時に神の恵み、愛、そして慈悲も見たのである。神が行なったすべてのこと、そして神の性質として表わされたすべてのことは人に対する愛であり、神が行なったすべてのことは、人の必要を満たすことができた。神がそれを行なったのは人を完全にするためであり、人の霊的背丈に応じて糧を施したのである。神がそれを行なっていなければ、人は神の前に出られず、神の真の顔を知る術は一切なかったはずだ。人が最初に神を信じ始めた時から今日に至るまで、神は人の霊的背丈に応じて徐々に糧を施し、人が内面において少しずつ神を知るようにしたのである。今日に至って初めて、人は神の裁きの素晴らしさに気づく。効力者という段階の働きは、創世から今日に至るまでの中で、最初になされた呪いの働きの実例だった。人は呪われて底なしの淵に放り込まれたが、仮に神がそれを行なわなければ、人は今日、神に対する真の認識を得ていなかっただろう。神の呪いを通じてでなければ、人が正式に神の性質と出会うことはなかったのである。人は効力者の試練を通じて暴かれる。自分の忠誠が受け入れ難いものであり、霊的背丈があまりに小さく、神の旨を満たせず、いつでも神を満足させるという自分の主張が言葉に過ぎないことを理解したのである。効力者という段階の働きにおいて、神は人を呪ったものの、今振り返ると、神の働きのその段階は素晴らしいものだった。人にとって素晴らしい転機となり、いのちの性質を大きく変えたからである。効力者の時代の前、人はいのちを追い求めること、神を信じる意味、あるいは神の働きの知恵を何ら理解しておらず、神の働きが人を試せることも理解していなかった。効力者の時代から今日に至るまで、人は人知を超える神の働きがいかに素晴らしいかを目の当たりにしている。人の頭脳では、神がいかに働きを行なうかなど理解できないし、自分の霊的背丈がいかに小さいかや、自分に不従順な物事があまりに多いことを悟ってもいる。神が人を呪ったとき、それはある効果を生じさせるためであり、人を死に追いやることはなかった。神は人を呪ったものの、それは言葉によって行なわれたのであり、神の呪いが実際に人に降りかかることはなかった。なぜなら、神が呪ったのは人の不従

順であり、ゆえに神が呪いの言葉を発したのは人を完全にするためでもあったからである。神が人を裁くにしても、あるいは呪うにしても、それは人間を完全にする。どちらも人の中にある不純なものを完全にすべくなされるのである。この手段を通じて人は精錬され、人の中に欠けているものが神の言葉と働きを通じて完全にされる。厳しい言葉であれ、裁きであれ、あるいは刑罰であれ、神の働きの各段階は人を完全にするものであり、絶対的に適切なものである。どの時代においても、神がこのような働きを行なったことはない。今日、あなたがたが神の知恵を理解するよう、神はあなたがたの中で働きを行なっている。あなたがたは内面においていくばくかの苦痛を味わってきたが、心は安定していて平安である。神の働きのこの段階を享受できるのは、あなたがたの祝福である。将来得られるものが何であるかにかかわらず、あなたがたが今日、自分における神の働きの中で見られるものは愛である。神の裁きと精錬を経験しなければ、その人の行ないや情熱は表面的なものにとどまり、性質はいつまでも変わらない。それで神に得られたと言えるのか。今日、人の中には傲慢やうぬぼれがいまだ数多くあるものの、その性質は以前に比べてずっと安定している。神があなたを取り扱うのはあなたを救うためであり、取り扱われる際に苦痛を感じることもあっても、あなたの性質に変化が起こる日はいずれやって来る。その時、あなたは振り返って神の働きがいかに賢明かを知る。またその時、あなたは神の旨を真に理解できる。今日、自分は神の旨を理解していると言う人がいる。しかし、それはまったく現実的でない。実際のところ、彼らは嘘をついている。と言うのも、目下のところ、神の旨が人を救うことなのか、それとも呪うことなのか、彼らはまだわかっていないからである。おそらくあなたは、今ははっきりとわからないだろう。しかし、神の栄光の日がすでに訪れたことを知るときがいつか来る。また、神を愛することがいかに意義深いかを知ること、あなたは人生を知るようになり、あなたの肉は神を愛する世界に生きる。あなたの霊は解放され、あなたの生活は歓びに溢れ、あなたは常に神のそばにいて神を仰ぎ見る。その時あなたは、今日の神の働きがいかに価値あるものかを真に理解する。

今日、大半の人はそのような認識をもっていない。そうした人たちは、苦しみには価値がなく、自分は世の中から見捨てられており、家庭生活には問題があり、自分は神に愛されておらず、将来の見込みは暗いと信じている。中には苦しみが極限に達し、死を考えるようになる人がいる。それは神に対する真の愛ではない。そうした人は臆病者であり、忍耐力がなく、弱くて無力なのである。神は人に愛されることを強く願っているが、人は神を愛すれば愛するほど苦しみが大きくなり、愛すれば愛するほど人の試練も大きくなる。もしもあなたが神を愛するなら、あらゆる苦しみがあなたに降りかかる。もしも神を愛さなければ、おそらく何もかもが順調

にゆき、あなたの周囲では何もかもが平和だろう。あなたが神を愛するとき、周囲の多くのことが克服し難いと感じ、またあなたの霊的背丈があまりに小さいために精錬される。さらに、あなたは神を満足させることができず、神の旨はあまりにも崇高で、人の及ばぬところにあるといつも感じる。そのすべてのために、あなたは精錬されるのである。自分の中に多くの弱さがあり、神の旨を満たせないものが数多くあるため、あなたは内面から精錬されるのである。とは言え、精錬を通じてでなければ清められることはない、あなたがたははっきり理解しなければならない。したがって、あなたがたは終わりの日に神への証しをしなければならない。あなたの苦しみがいかに大きくても、最後まで歩まなければならない、最後の一息になってもなお神に対して忠実であり続け、神に身を委ねなければならない。これだけが真に神を愛するということであり、またこれだけが鳴り響くような強い証しなのである。サタンの試みを受けたら、あなたはこう言うべきである。「わたしの心は神のものであり、神はすでにわたしを得た。あなたを満足させることはできない。わたしのすべてを捧げて神を満足させなければならない」。神を満足させればさせるほど、神はあなたを祝福し、神に対するあなたの愛は強くなる。そして、あなたは信仰と決意をもち、神を愛することに生涯を捧げるほど価値や意義のあるものはないと思うだろう。神を愛しさえすれば悲しみがなくなるとも言える。自分の肉が弱り、多くの実際の問題に悩むことがあっても、その間あなたは心から神にすがり、霊の内側で慰められ、確信を抱き、頼るものがあると感じるだろう。このようにして、あなたは多くの状況を克服することができ、降りかかる苦しみのせいで神に不満を抱くこともないはずだ。その代わりにあなたは歌い、踊り、祈り、集って交わり、神のことを考えたいと思うだろう。そして自分の周囲にある、神によって整えられたすべての人や出来事や物事はふさわしいものだと感じるだろう。もしもあなたが神を愛さないなら、何を見ても退屈で、目を楽しませるものは一切ない。霊においては自由がなく虐げられており、心の中で絶えず神に不満を抱き、自分の苦しみはあまりに大きく、まったく不公平だと常に感じる。幸福のために追求するのではなく、神を満足させるため、サタンにそしられないために追求するのであれば、そうした追求は神を愛する多大な力を与えてくれる。人は神によって語られたすべてのことを実行でき、その人が行なうすべてのことは神を満足させられる。これが現実を自分のものにすることである。神を満足させることを追求するのは、神への愛を用いて神の言葉を実践することである。いかなる時も——たとえ他の人たちに力がない時であっても——あなたの中には神を愛し、深く求め、その存在を懐かしむ心が依然として存在する。これが真の霊的背丈である。あなたの霊的背丈がどれほど大きいかは、神への愛がいかに強いのか、試練を受けたときに

揺るぎなく立ち続けられるかどうか、ある環境に置かれた際に弱いかどうか、兄弟姉妹に拒まれたときに自分の立場を守れるかどうかによって決まる。訪れる事實は、神に対するあなたの愛がいったいどのようなものかを示す。神の働きの多くから、神が本当に人を愛していることがわかるのだが、人の霊の目はいまだ完全には開いておらず、神の働きの多くと神の旨をはっきり見ることができず、神にまつわる数多くの素晴らしいことも見えない。人は神に対して真の愛をごくわずかししか抱いていない。あなたはずっと神を信じてきたが、神は今日、逃れる手段をすべて断ち切った。現実的に言うと、あなたには正しい道を進むしか選択肢がない。その正しい道とは、神の厳しい裁きと至高の救いによってあなたが導かれてきた道である。苦難と精錬を経験して初めて、人は神の素晴らしさを知る。今日までの経験により、人は神の素晴らしさの一部を知ることになったと言える。しかし、それだけでは十分でない。人には欠けているものがあまりに多いからである。神の素晴らしい働きと、神が用意するあらゆる苦しみの精錬を、人はさらに経験しなければならない。そうして初めて、人のいのちの性質は変わり得るのである。

神を愛することだけが本当に神を信じることである

今日、神を愛し、知ろうとする時、ある一面においてあなたがたは困難と精錬に耐えなければならず、別の面においては、代償を払わなければならない。神を愛することから学ぶ教訓ほど深い教訓はなく、人が生涯にわたる信仰から学ぶ教訓は、いかに神を愛するかであると言える。つまり、神を信じるなら、神を愛さなければならない。神を信じるだけで、神を愛さず、神についての認識を獲得しておらず、心の底から湧き上がる本当の愛で神を愛したことがなければ、神への信仰はむなし。神を信じていても神を愛さなければ、あなたは無駄に生きていることになり、あなたの全生涯はあらゆる生涯の中で最も低いものになる。生涯を通じて神を愛することも、神に満足させることもなかったら、あなたが生きていることの意味は何なのだろう。あなたが神を信じることの意味は何なのだろう。それは無駄な努力ではないだろうか。つまり、人が神を信じ、愛するのならば、代償を払わなければならない。何らかのやり方で外へ向かって行動しようとするよりはむしろ、自分の心の奥底にある真の識見を求めるべきである。歌や踊りに熱心であっても、真理を実践することができなければ、神を愛していると言えるだろうか。神を愛するには、あらゆる事において神の旨を求めることが必要で、しかもあなたに何かが起きた時には内面を深く探り、神の旨を把握しようと努め、その問題における神の旨は何か、神は何を達成するように求めているのか、どのように神の旨を覚えるべきか

を知ろうと努めなければならない。例えば、あなたが困難に耐えなければならない何かが生じたら、その時、あなたは神の旨が何であるか、どのように神の旨を大切にするかを理解するべきである。自分自身を満足させてはならない。まず自分自身のことは脇へどけておきなさい。肉体ほど卑しむべきものはない。あなたは神を満足させようとしなければならないし、本分を果たさなければならない。そのように考えていれば、神はこの問題に関してあなたに特別な啓発を与え、あなたの心も安らぎを見つけることができる。大きくても小さくても、あなたに何か起きた時、まず自分自身は脇にどけて、肉体はすべての物事の中で最も卑しいものとみなさなければならない。あなたが肉体を満足させればさせるほど、肉体はますます勝手な行動をとる。今回肉体を満足させると、次回はさらに多くのものを求める。このまま続くと、人は肉体をさらに愛するようになる。肉体はいつも途方もない欲望を持っており、いつもあなたに肉体を満足させることを要求する。それが食べ物や着る物に関することであろうと、落ち着きを失い、自身の弱さや怠惰に付け込むことであろうと、あなたが心の中でそれを満足させることを要求する。肉体を満足させればさせるほど、その欲望は大きくなり、肉体はますます墮落して、ついには人の肉体は一層深い観念を抱き、神に背き、得意になり、神の働きに疑いを持つようになる。肉体を満足させればさせるほど、肉体の弱点は大きくなる。あなたはいつも、だれも自分の弱点に同情してくれないと感じ、神は行き過ぎたと決めつけ、「どうして神はこんなに厳しいのだろう。なぜ神は人に休息を与えてくれないのか」と言う。人が肉体を満足させ、あまりにも大切に扱うと、自分自身を滅ぼす。あなたが本当に神を愛し、肉体を満足させなければ、神の行いのすべては正しく、優れており、あなたの反抗に対する神の呪いやあなたの不義に対する神の裁きは正当であることがあなたにはわかる。神があなたを懲らしめたり罰したりする時や、あなたを鍛える環境を作りあげて、あなたを神の前に立たせる時がある。そしてあなたは神が行っていることは素晴らしいといつも感じるだろう。このように、あなたはあまり苦痛はないかのように、神はとても愛しいと感じる。あなたが肉体の弱点に迎合し、神は行き過ぎたと言うなら、あなたはいつも苦痛を感じ、いつも意気消沈していて、神の働きのすべてについて曖昧になり、あたかも神は人の弱点にはまったく同情せず、人の困難には気付かないかのように感じられる。そのように、あなたはひどい不正に苦しんでいるかのように、みじめで孤独な気分になり、この時不平を言い始めるだろう。このようにあなたが肉体の弱点に迎合すればするほど、ますます神は行き過ぎたと感じるようになり、ついに事態は悪化し、神の働きを拒絶し、神に反対し始め、まったく不従順になる。したがって、あなたは肉体に反抗しなければならず、迎合してはならない。「夫（妻）、子供たち、将来の見通

し、結婚、家族など、これらはどれも重要ではない。わたしの心の中には神しかない。わたしは神に満足していただくために最善を尽くさなければならず、肉体を満足させてはならない」。あなたはこのように決意しなければならない。このような決意をいつも持っていれば、真理を実践し、自分自身は脇にどけようとする時、あなたはほんの少しの努力でそれが実践できる。昔、路上で凍って硬直している蛇を見た農夫の話がある。農夫は蛇を拾い上げ、抱きしめたが、蛇は息を吹き返すと農夫をかみ殺してしまった。人の肉体はこの蛇に似ている。その本質は人のいのちに害を与えることであり、肉体が好き放題にすれば、あなたのいのちは取り上げられてしまう。肉体はサタンに属している。肉体の中には途方もない願望があり、肉体は己のことだけを考え、快適さと娯楽を享受することを望み、怠慢と無為にふけるので、ある程度まで肉体を満足させると、あなたは最後には肉体に食べ尽くされてしまう。つまり、今回肉体を満足させるなら、次回はもっと要求してくるのである。肉体はいつも途方もない欲望と新しい要求を持っており、あなたが肉体に迎合するのを利用し、あなたが肉体を一層大事にし、肉体の快適さの中で生きるように仕向ける。そして、肉体に打ち勝たなければ、あなたは最後には自分自身を滅ぼす。神の前でいのちを得られるかどうか、最終的結末はどうなるか、それはあなたが肉体にどのように反抗するかにかかっている。神はあなたを救い、選び、運命づけたが、その一方で、あなたが神を満足させたいとも、真理を実践したいとも、神を本当に愛する心を持ってあなた自身の肉体に反抗したいとも思わないならば、最後にはあなたは身を滅ぼし、それゆえ極度の痛みに耐えることになる。いつも肉体に迎合していると、サタンが次第にあなたを呑み込み、あなたを完全にいのちのない、あるいは神の霊との接触のない状態のままにしまい、ついには心の中が完全に暗黒になる日が来る。暗黒の中で生きてみると、サタンのとりこになり、もはや心の中に神を持たなくなり、その時あなたは神の存在を否定し、神を離れる。従って、神を愛したいなら、痛みの代償を払い、困難に耐えなければならない。熱心さや困難を表立って示すことも、読書量を増やしたり、さらに走り回ったりする必要はない。そうではなく、心の中にあるもの、つまり、途方もない思い、個人的利益、自己判断、観念、意図などを脇にどけるべきである。これが神の旨である。

人の外面的性質を取り扱うことも神の働きの一部である。例えば、人の外面的で異常な人間性、あるいは生活様式や習慣、流儀や慣習、ならびに外面的実践や熱心さなどを神は取り扱う。しかし、神が人に真理を実践し、性質を変えるよう要求する時、おもに取り扱われるのは心の中の意図と観念である。外面的性質を取り扱うだけなら難しくはない。それはあなたに好きなものを食べるなど要求するようなもので簡単である。しかし、心の中の観念に関連するものを取り除くのは簡単ではな

い。そのためには、肉体に反抗し、代償を払い、神の前で苦しまなければならない。これは人の意図に関し特に当てはまる。神を信じるようになって以来、人は多くの間違った意図を心に抱いてきた。真理を実践していない時、あなたは自分の意図はすべて正しいと感じているが、自分に何かが起こると、あなたは自分の中には間違った意図がたくさんあることがわかる。従って、神が人を完全にする時、神は神に関する人の認識を妨害する観念が人の中にはたくさんあることに気付かせる。自分の意図が間違っていることを認めた時、自分の観念や意図に従って実践するのをやめることができ、自分に起こるすべてのことにおいて神へ証しをすることができ、自己の立場を守ることができるなら、これはあなたが肉体に反抗したことの証明となる。肉体に反抗する時、あなたの中では必然的に戦いが生じる。サタンは人を肉体に従わせようとし、肉体の観念に従い、肉体の利益を維持させようとする。しかし、神の言葉は人を啓き、心の中に光を当てる。この時、神に従うか、サタンに従うかはあなた次第である。神は人に真理を実践に移すよう要求するが、それは心の中の物事をおもに取り扱い、神の心に従っていない思いや観念を取り扱うためである。聖霊は人の心を感動させ、人を啓き、そして光を当てる。ゆえに、起こることすべての背後には戦いがある。人が真理を実践するたびに、あるいは神への愛を実践するたびに、激しい戦いがあり、すべては肉体にとってうまく行っているように見えるかもしれないが、実のところ、人の心の奥底では生と死の戦いが起こりつつあり、この激し戦いの後で初めて、膨大な熟考をした後ようやく、勝利か敗北かが決められる。人は笑うべきか、泣くべきかわからない。人の中の意図の多くが間違っているので、あるいは神の働きの多くは人の観念と食い違っているので、人が真理を実践に移す時、激しい戦いが舞台裏では行われる。この真理を実践に移した後、舞台裏で人は悲しみの涙を数えきれないほど流し、ついに神を満足させる決心をする。人が苦しみや精錬に耐えるのはこの戦いのためである。これは本当の苦しみである。戦いになった時、本当に神の側に立つことができれば、あなたは神を満足させることができる。真理を実践する際、内なる苦しみを被ることは避けられない。真理を実践する時、人の心の中のすべてが正しかったら、人は神に完全にされる必要はなく、戦いもなく、人は苦しまない。人の心の中には神が使用するのに適さないものがたくさんあり、肉体の反抗的性質も多いので、人は肉体に反抗する教訓をもっと深く学ぶ必要がある。これが神が人に神と共に経験することを要求した苦しみである。あなたが困難に出会ったら、急いで神に次のように祈りなさい。

「おお、神様。わたしはあなたに満足して頂きたいのです。わたしはあなたの心に満足していただくために最後の困難に耐えたいです。そしてわたしが出会う挫折がどんなに大きくても、わたしはあなたに満足していただくかなければなりません。た

とえわたしの全生涯を諦めなければならないとしても、わたしはあなたに満足していただかなければなりません」。この決意を持って、このように祈る時、あなたは固く証しに立つことができる。真理を実践するたびに、精錬を受けるたびに、試されるたびに、そして神の働きが人に及ぶたびに、人は激しい痛みには耐えなければならない。このすべては人への試練であり、そのためすべての人の心の中では戦いがある。これは人が支払う実際の代償である。神の言葉をさらに読み、さらに走り回することはその代償の一部である。それは人がしなければならないこと、本分、果たすべき責任であり、心の中であって脇にどけておくべきものは、脇にどけなければならない。さもないとあなたの外面的苦しみがいかに大きくても、走り回ろうとも、すべては無駄になる。つまり、心の中を変えることだけがあなたの外面的困難に価値があるかどうかを決定することができる。あなたの内面的性質が変わり、あなたが真理を実践した時、あなたの外面的苦しみはすべて神の承認を得られる。内面的性質に変化がまったくなければ、いかに苦しみに耐えようとも、外面から見ていかに走り回ろうとも、神からの承認はない。そして神に認められない困難は無駄である。従って、払った代償が神に認められるかどうかは、あなたに変化があったかどうか、あなたが真理を実践して、神の旨の満足、神に関する認識、神への忠誠心を得るために自分の意図や観念に反抗するかどうかによって決定される。どんなに走り回ろうとも、自分自身の意図に反抗することをいまだ知らず、外面的行動や熱心さを追い求めるだけで、いのちに全く注意を払わなければ、あなたの困難は無駄なことになるであろう。ある環境下で何か言いたいことがあっても、心の中では、それを言うのは正しくなく、兄弟姉妹のためにならないし、彼らを傷つけるかもしれないと感じているならば、あなたはそれを言わず、むしろ内面で苦しむほうを好む。これらの言葉が神の旨にかなうことはできないからである。この時、あなたの中では戦いがあるが、あなたは進んで痛みの中に苦しみ、あなたが愛するものを断念する。神を満足させるためにこの困難に進んで耐え、心の中で痛みの中に苦しむが、肉体に迎合することはなく、神の心は満たされるので、あなたも心の中で慰められる。これが本当に代償を払っていることであり、神が希望する代償である。あなたがこのように実践すれば、神は必ずあなたを祝福する。これを達成できなければ、あなたがどんなに理解しても、いかにうまく話すことができようと、すべては無益である。神を愛する道を歩んでいる途上で、神がサタンと戦う時に、神の側に立つことができ、サタンの方へ後戻りしないならば、あなたは神への愛を獲得し、固く立って証しをしたことになる。

神が人において行う働きのあらゆる段階において、それはあたかも人の手配により、あるいは人の干渉から生まれたかのように、外面的には人々の間の相互作用の

ように見える。しかし舞台裏では、働きのあらゆる段階、起こるすべてのことは、神の面前でサタンが作った賭けの対象であり、人は神への証しにおいてしっかりと立つことが要求される。ヨブが試練に会った時のことを例にとってみよう。秘かにサタンは神と賭けをしており、ヨブに起こったことは人間の行為であり、人間による干渉であった。神があなたがたにおいて行う働きの各段階の背後にはサタンと神との賭けがある。その背後にはすべて戦いがある。例えば、あなたが兄弟姉妹に対して偏見を持っているなら、あなたには言いたい言葉、神にとって不愉快かもしれないとあなたが感じる言葉があるだろうが、それを言わなければ心の中に不快を感じる。そしてこの時、あなたの心の中には戦いが始まる。「わたしは話すべきか否か」。これは戦いである。従って、あなたが遭遇するすべての中に戦いがある。あなたの心の中に戦いがある時、あなたの実際の協力と実際の苦しみのおかげで、神はあなたの中で働く。結局、心の中であなたは問題を脇にどけておくことができ、怒りは自然に消滅する。これが、あなたが神に協力した結果である。人が行うすべては、その人が一定の代償を努力で支払うことを要求する。実際の苦難がなければ、人が神に満足してもらうことはできないし、神に満足してもらうことに近づくことさえなく、空虚なスローガンを吐き出しているに過ぎなくなる。そのような空虚なスローガンが神を満足させることができるだろうか。神とサタンが霊的領域で戦う時、あなたはどのように神を満足させるべきか、どのように固く証しに立つべきであろうか。あなたは自分に起こることのすべては大いなる試練であり、その試練の時に神があなたの証しを必要とすることを知るべきである。外面的には重要ではないように見えるかもしれないが、これらのことが起こると、それはあなたが神を愛しているかどうかを示す。愛していれば、あなたは神への証しに固く立つことができるが、神への愛を実践に移していなければ、これはあなたが真理を実践しない人であること、あなたには真理もなくいのちもないこと、あなたは無用の物であることを示す。人に起こるすべてのことは、人が神への証しに固く立つことを神が必要とする時に起こる。現在あなたには重要なことは何も起こっていないし、あなたは重大な証しはしていないが、あなたの毎日の生活の詳細はすべて神への証しに関連している。あなたが兄弟姉妹、家族、周囲のすべての人から称賛を得られたら、また、いつか未信者が来て、あなたの行うことのすべてを称賛し、神の行うことはすべて素晴らしいことがわかったら、その時、あなたは証しをしたことになるのである。あなたには識見がないし、素質は乏しいが、神があなたを完全にすることによって、あなたは神を満足させて神の旨に留意することができ、神が最も素質の乏しい人に行ってきた働きの偉大さを他者に示せるようになる。その人々が神を知るようになり、サタンの前で勝利者になり、極めて神に忠実になると、この一群

の人々ほど気骨を持っている人はいない。これが最大の証しである。あなたは偉大な仕事をするにはできないが、神を満足させることはできる。他の人々は自分の観念を脇にどけておくことができないが、あなたにはできる。他の人々は自分が実際に経験している間、神に証しをすることはできないが、あなたは実際の背丈と行動を使って神の愛に報い、神への響き渡るような証しをすることができる。これだけが実際に神を愛することとみなされる。これができなければ、あなたは家族の前で、兄弟姉妹のあいだで、あるいは世間の人々の前で証しをすることはできない。あなたがサタンの前で証しができなければ、サタンはあなたを笑い、あなたを冗談、おもちゃとして扱い、しばしばあなたをばかにし、頭をおかしくさせる。将来、大きな試練があなたに起こるかもしれない。しかし、今日、真実の心で神を愛すなら、これから先の試練がどんなに大きくても、何が起ころうとも、固く証しに立つことができ、神を満足させることができるのなら、あなたの心は慰められ、将来遭遇する試練がどんなに大きくても恐れることはない。あなたがたは将来何が起ころるか知ることはできない。今日の状況下で神を満足させることができるだけである。あなたがたは大きな働きをすることはできないが、現実の生活で神の言葉を経験することにより神を満足させることに集中するべきであり、また、サタンを辱める強力で響き渡るような証しをするべきである。あなたの肉体は満たされないままで、苦しむことになるが、あなたは神を満足させ、サタンを辱めているであろう。あなたがいつもこのように実践していれば、神はあなたの前に道を開く。いつか、大きな試練が来たら、他の人々は倒れるだろうが、あなたはしっかり立っているであろう。あなたが払った代償のために、神はあなたを守るので、あなたはしっかり立っていることができ、倒れない。通常、あなたが真理を実践することができ、神を本当に愛する心で神を満足させることができれば、神は将来の試練の間、必ずあなたを守るであろう。あなたは愚かで霊的背丈は低く、素質に乏しいが、神はあなたを差別しない。あなたの意図が正しいかどうかにかかっている。今日、あなたは神を満足させることができる。その際、細部にまで気を配り、すべてにおいて神を満足させ、本当に神を愛する心を持ち、真実の心を神に捧げ、理解できないことがいくつかあっても神の前に来て、あなたの意図を修正し、神の旨を求めることができ、神を満足させるために必要なすべてのことを行う。おそらく、兄弟姉妹はあなたを見捨てるだろうが、あなたの心は神を満足させるだろうし、あなたは肉体の喜びを切望しない。あなたがいつもこのように実践していれば、大きな試練が訪れたとき、あなたは守られる。

人の心の中のどのような状態に試練は狙いを定めているのか。試練は、神を満足させることのできない人間の反抗的性質を対象としている。人の心の中には汚れた

ものや偽善的なものがたくさんある。だから神はそれらを清めるために人を試練に遭わせるのである。だが今日、もしもあなたが神を満足させられれば、将来の試練はあなたを完全にする過程となる。今日、もしもあなたが神を満足させられなければ、将来の試練はあなたを誘惑し、あなたは無意識のうちに倒れてしまう。その時、あなたは自分自身を助けることはできない。それはあなたが神の働きについていくことができず、実際の背丈がないからである。そこで、将来しっかり立っていることができ、神をさらに満足させ、最後の最後まで神に従うことを望むなら、今日、あなたは強い基礎を構築しなければならない。すべてのことにおいて真理を実践することによって神を満足させ、神の旨を心に留めておかなければならない。いつもこのように実践していれば、あなたの中に基礎ができ、神はあなたに神を愛する心を生じさせ、あなたに信仰を与える。いつか、試練が本当にあなたに降りかかった時、あなたは多少の痛み、苦しみに、ある程度は取り乱し、自分が死んでしまったような痛烈な悲しみに苦しむ。しかし、あなたの神への愛は変わらず、一層深くなる。それが神の祝福である。神が今日語り、行うすべてのことを従順な心で受け入れることができるならば、あなたは必ず神に祝福され、それであなたは神の祝福と約束を受ける人になる。今日、あなたが実践しなければ、いつか試練が降りかかる時、あなたには信仰も、愛する心もなく、その時、試練は誘惑になる。あなたはサタンの誘惑の真ただ中に投げ込まれ、脱出する手段はない。今日、小さな試練が降りかかる時、あなたはしっかり立っているかもしれないが、いつか大きな試練が降りかかる時、必ずしもしっかり立っていることはできないであろう。うぬぼれていて、自分達はすでに完成に近づいていると考える人もいる。そのような時、深刻にならず、現状に満足したまましていると、あなたは危険に陥る。今日、神は大きな試練の働きは行っておらず、外見上、すべてはうまくいっているように見えるが、神があなたに試練を課す時、あなたは自分に欠けているものがあまりにも多いことに気付く。というのも、あなたの背丈はあまりにも取るに足らないので、大きな試練に耐えることができないからである。あなたが今と同じ場所にとどまり、緩慢な状態のままでいるなら、試練が来た時、あなたは倒れる。あなたがたは自分の背丈が取るに足らないものであることを常に確認すべきである。そうして初めてあなたは進歩するのである。あなたが自分の背丈が取るに足らないものであること、自分の意志の力がとても弱いこと、あなたの中に実際的なものはほとんどないこと、あなたは神の旨には適さないことを知るのが試練の間だけであるなら、そしてこれらのことにその時になって初めて気付くのであれば、それは遅すぎるのである。

神の性質を知らなければ、あなたは試練の最中に必ず倒れる。なぜならあなたは

神がどのように人々を完全にするか、どのような手段で神が人々を完全にするのかに気付いていないからである。それゆえ、神の試練があなたに降りかかり、それがあなたの観念に合わないとき、しっかり立っていることができない。神の本当の愛は神の全性質であり、神の全性質が人に示される時、これはあなたの肉体に何をもたらすのであろうか。神の義である性質が人に示される時、その人の肉体は必然的にひどい痛みを苦しむ。あなたがこの痛みを苦しまなければ、あなたは神に完全にされることができず、本当の愛を神に捧げることもできない。神があなたを完全にすれば、神は必ずその全性質をあなたに示す。天地創造の時から今日まで、神が人間にその全ての性質を見せたことはなかった。しかし、終わりの日のさなか、神は自ら運命づけて選んだこの人々の一群に神の性質を明らかにし、人を完全にすることによって神の性質をさらけ出し、それによって人々の一群を完全にする。それが人への神の本当の愛である。人への神の本当の愛を経験するには、激しい痛みを耐え、高い代償を払うことが要求される。そうして初めて人は神のものとされ、その本当の愛を神に返すことができ、そうして初めて神の心は満ち足りる。人が神により完全にされることを望むなら、また、神の意志を行い、真実の愛をあますところなく神に捧げることを望むなら、人は多くの苦しみとたくさんの苦痛を周囲の状況から経験しなければならず、死よりもひどい痛みを苦しむことになる。最終的には人は真実の心を神に返すことを強いられる。人が本当に神を愛しているかどうかは、困難と精錬の間に明らかにされる。神は人の愛を清めるが、これも困難と精錬の真ただ中でなければ達成されない。

「千年神の国が到来した」についての短い話

あなたがたは千年神の国のビジョンをどのように捉えているだろうか。そのことについて大いに考え、「千年神の国は地上で千年続くだろう。それなら、教会の年長の信者で未婚の者は、結婚しなければならないのか。わたしの家族にはお金がないから、わたしはお金を稼ぎ始めるべきだろうか……」と言う人たちがいる。千年神の国とは何か。あなたがたは知っているか。人々は盲目であり、大きな試練に苦しんでいる。実のところ、千年神の国はまだ正式には到来していない。人々を完全にする段階において、千年神の国は序奏でしかない。神が語る千年神の国の時代において、人は完全にされているのである。かつて、人々は聖者のようになり、秦の地にしっかり立つと言われていた。人々が完全にされて初めて、つまり神が語るころの聖者となって初めて、千年神の国は到来したことになる。人々を完全にするとき、神は彼らを清める。そして人々が清くなればなるほど、神によってより完全

にされる。汚れ、反抗、敵対心、およびあなたの中にある肉に属するものが取り除かれ、あなたが清められたとき、あなたは神に愛される（言い換えれば、あなたは聖者になる）。神によって完全にされ、聖者になったとき、あなたは千年神の国に
いるだろう。今は神の国の時代である。千年神の国の時代において、人々は神の言葉に頼って生き、あらゆる国が神の名のもとに集い、神の言葉を読むようになる。そのとき、電話を使う者もいれば、ファックスを使う者もいるだろう……彼らは神の言葉に触れるためにあらゆる手段を用い、あなたがたもまた、神の言葉のもとに集う。これらのことはすべて、人々が完全にされた後で起きることである。今日、人々は言葉を通して完全にされ、精錬され、啓かれ、導かれている。それは神の国の時代であり、人々が完全にされる段階であり、千年神の国の時代とはまったく関係ない。千年神の国の時代において、人々はすでに完全にされており、彼らの中の堕落した性質は清められている。そのとき、神が語る言葉は人々を一步一步導き、天地創造の時から今日に至るまでの、神の働きの奥義をすべて明らかにする。そして神の言葉は、それぞれの時代と日々における神の業、神が人々を内面から導く方法、神が霊界で行う働き、および霊界の動的状態について人々に語る。そのとき初めて、言葉の時代が真に訪れる。今はまだその序奏部分にすぎない。人々が完全にされず、清められなければ、地上で千年も生きる術はなく、肉体が朽ちることは避けられない。内面が清められ、もはやサタンと肉に属さないなら、その人たちは地上で生き残れる。今の段階において、あなたははまだ目が見えず、あなたがたが経験するのは、地上で暮らす毎日において神を愛することと、神の証しをすることだけである。

「千年神の国が到来した」というのは一つの預言であり、預言者の預言に類似しており、その中で神は将来起こることを預言する。神が将来語る言葉と、神が今日語る言葉は同じではない。将来の言葉が時代を導くものである一方、今日神が語る言葉は人々を完全にし、精錬し、取り扱う。将来の言葉の時代は、今日の言葉の時代と異なる。今日、神によって語られるすべての言葉は、神が語るのに用いる手段に関係なく、人々を完全にし、人々の中にある汚れを清め、彼らを聖くして、神の前で義とするためのものである。今日語られる言葉と将来語られる言葉は、二つの別個の事柄である。神の国の時代に語られる言葉は、人々をあらゆる訓練に入らせ、人々をすべてのことにおいて正しい道に至らせ、彼らの中にある不純なものを一掃するためのものである。それが、この時代に神が行うことである。神は一人ひとりの中に言葉の基礎を築き、神の言葉をすべての人のいのちとし、言葉によって絶えず彼らを内面から照らし、そして導く。また、人々が神の旨を大切にしていな
いとき、神の言葉は内側から彼らを叱責し、懲らしめる。今日の言葉は人のいのち

となり、人が必要とするすべてのものを直接施す。あなたの内面で欠けているものは、すべて神の言葉によって施され、神の言葉を受け入れる人はみな、神の言葉を飲み食いすることで啓かれる。神が将来語る言葉は、全宇宙の人々を導く。今日、これらの言葉は中国でしか語られていないので、全宇宙で語られる言葉を表してはいない。千年神の国が到来して初めて、神は全宇宙に向けて語るのである。今日神によって語られる言葉はすべて、人々を完全にするためであることを理解しなさい。神がこの段階で語る言葉は、人々が必要とするものを施すためであって、あなたが神の奥義を知ったり、神の奇跡を見たりできるようにするためではない。神が多くの手段を通して語るのは、人々が必要とするものを施すためである。千年神の国の時代はまだ到来していない。ここで言う千年神の国の時代は神の栄光の日である。ユダヤにおけるイエスの働きが完了した後、神は働きを中国本土に移し、もう一つ別の計画を立てた。神はあなたがたにおいて自身の働きの別の部分を行う。つまり、言葉で人々を完全にする働きを行い、言葉を使って人々に多くの苦痛を経験させ、また神の恵みを多数得させる。働きのこの段階は、勝利者の集団を生み出す。そして、神がその勝利者の集団を創った後、彼らは神の業を証しできるようになり、現実を生きられるようになり、実際に神を満足させ、死に至るまで神に忠実でいる。このようにして、神は栄光を得るのである。神が栄光を得るとき、つまり、神が人々のこの集団を完全にしたときこそ、千年神の国の時代なのである。

イエスが地上にいたのは三十三年半であり、十字架の働きを成し遂げるために地上に来た。そしてイエスの磔刑を通して、神は栄光の一部を得た。肉において来たとき、神はへりくだって身を潜め、途方もない苦しみに耐えることができた。それは神自身だったが、なおもあらゆる辱めと罵詈雑言を耐え忍び、また贖いの働きを成し遂げるべく十字架にかけられる中で激痛に耐えた。この段階の働きが完結した後、神が大いなる栄光を得たのを人々は見たが、それが神の栄光のすべてではなかった。それは神の栄光のほんの一部に過ぎず、神はそれをイエスから得たのである。イエスは、あらゆる困難に耐え、へりくだって身を潜め、神のために磔刑に処されることができたものの、神は栄光の一部を得ただけで、その栄光はイスラエルで得た。神にはさらに別の栄光がある。それは、地上に来て実際に働き、人々の一集団を完全にするることである。イエスは自身の働きの段階において、超自然的なことをいくつか行ったが、その段階の働きは、しるしと奇跡を行うためだけでは決してなかった。それはおもに、イエスが苦しみ、神のために磔刑に処されることができたこと、神を愛するがゆえに極度の苦痛に耐えられたこと、そして神が彼を見捨てたにもかかわらず、神の旨のために喜んで生命を犠牲にしたことを示すためだった。神がイスラエルでの働きを終え、イエスが十字架にかけられた後、神は栄光を

得て、サタンの前で証しした。あなたがたは、神が中国でどのように肉となったかを知らず、見てもいない。そうであれば、神が栄光を得たのを、どうしてあなたがたが見られようか。神があなたがたにおいて多くの征服の働きを行い、あなたがたがしっかりと立つとき、神のこの段階の働きは成功を収め、神の栄光の一部となる。あなたがたはこれだけを見るのであり、いまだ神によって完全にされていないし、心を完全に神に捧げてもない。あなたがたはいまだこの栄光の全容を見ておらず、神がすでに自分たちの心を征服したこと、自分たちは決して神から離れられず、最後の最後まで神に従い、決して心変わりしないこと、そしてこれが神の栄光であることを知るだけである。あなたがたは何において神の栄光を見るのか。それは、人々における神の働きの成果においてである。人々は、神がとても愛しいことを見て、心の中に神を抱き、神から離れようとしなない。これが神の栄光である。教会の兄弟姉妹の力が生じて、心から神を愛し、神による働きの絶大な力、神の言葉の比類なき力を見ることができるとき、神の言葉には権威があり、神が中国本土のゴーストタウンで働きに乗り出すことができるのを目の当たりにするとき、また、人々がその弱さにもかかわらず、神の前で心からひれ伏し、進んで神の言葉を受け入れるとき、そして、自分は弱くて価値がないにもかかわらず、神の言葉は極めて愛しく、大切にするだけの価値があるものだとして理解できるとき、それが神の栄光である。人々が神によって完全にされ、神の前に身を委ね、完全に神に従い、自分の前途と運命を神の手に委ねることができる日が来るとき、神の栄光の第二部が完全に獲得されたことになる。つまり、実際の神による働きが残らず完結したとき、中国本土における神の働きは終了する。言い換えれば、神によって予め定められ、選ばれた人々が完全にされたとき、神は栄光を得たことになる。神は、栄光の第二部を東方にもたらすと語ったが、これは肉眼で見ることができない。神は自身の働きを東方にもたらした。つまり、神はすでに東方へと来たのだが、これは神の栄光である。今日、神の働きはまだ完成していないが、神が働くことを決めたので、それは必ずや成し遂げられる。神はこの働きを中国で完了させると決め、あなたがたを完全にすると決意した。従って、神はあなたがたに逃げ道を与えない。神はすでにあなたがたの心を征服したのだから、あなたは望もうが望むまいが、進み続けなければならない。そして、あなたがたが神のものとされるとき、神は栄光を得る。今日、神はいまだ完全なる栄光を得ていない。なぜなら、あなたがたがいまだ完全にされてないからである。あなたがたの心は神のもとに立ち返ったかもしれないが、あなたがたの肉にはいまだ多くの弱点があり、あなたがたは神を満足させることができず、神の旨を大切にすることもできず、自分から取り除かなければならない消極的な事柄がたくさんあり、数多くの試練と精錬を経なければならないからであ

る。そうすることでのみ、あなたがたのいのちの性質は変わり、あなたがたは神のものとなる。それが可能になる。

神を知る者が神に証しをすることができる

神を信じ、神を知ることは、天の法則であり地上の原則である。そして今日、受肉した神がその働きを自ら行なっているこの時代は、神を知るのに特に良い時である。神を満足させることは神の旨の理解を基盤として達成されるものであり、神の旨を理解するためには、神について多少の認識をもつことが必要になる。この神に関する認識とは、神を信じる者が持つべきビジョンであり、人の神に対する信仰の基礎である。この認識がなければ、人間の神への信仰は曖昧な状態で、空論のただ中に存在することになるだろう。このような人々が神に従う決意を持っていたとしても、何も得るものはない。この流れの中で何も得るものがない人々は皆、排除される者であり、たかり屋である。神の働きのどの歩みを経験するにせよ、強力なビジョンを備えていなくてはならない。そうでなければ、新しい働きのそれぞれの歩みを受け入れることは困難になるだろう。なぜなら神の新しい働きは人間の想像力の範疇を超えており、人間の観念の範囲外にあるからだ。そのため人間の世話をし、ビジョンについての交わりに携わる羊飼いがいなければ、人はこの新しい働きを受け入れることができない。ビジョンを受け取ることができなければ、神の新しい働きを受けることはできず、神の新しい働きに従うことができなければ、神の旨を理解することはできず、神についての認識も結果的に無に帰すであろう。神の言葉を実行する前に、まず神の言葉を知らねばならず、つまり神の旨を理解しなければならない。そうやって初めて、神の言葉は正確に、神の旨にかなう形で実行されることになる。これは真理を求めるすべての者が所有しなければならないものであり、神を知ろうとするすべての者が経なければならない過程でもある。神の言葉を知る過程は、神と神の働きを知る過程でもある。そのためビジョンを知るということは、受肉した神の人間性を知ることの意味するだけでなく、神の言葉と働きを知ることでもある。人々は神の言葉によって神の旨を理解するようになり、神の働きによって神の性質と、神であるものを知るようになる。神への信仰は神を知ることの第一歩である。この初期の信仰から最も深い信仰へと進んでいく過程は、神を知るようになる過程であり、神の働きを経験する過程である。もしあなたの信仰が、あくまで信仰のためだけの信仰であり、神を知るためのものでないなら、そこに現実はなく、その信仰が純粹になることはできず、そのことに疑いの余地はない。人が神の働きを経験する過程で徐々に神を知るようになると、その人の性質は徐々に変化し、その信仰はますます真実なものにな

る。このように神への信仰において成功を収めると、その人は完全に神を得たことになる。神が自らその働きを行なうため、これほどの苦勞をして再び肉となった理由は、人間が神を知り、神を見ることができるようにするためだった。神を知ること^[a]は、神の働きの最後に達成される最終的な成果であり、神が人類につきつける最後の要求である。神がこれを行なう理由は、神の最終的な証しのためである。神は人が最終的に完全に神に向き合えるよう、この働きを行なっているのである。人は神を知ることによってのみ神を愛せるようになり、神を愛するには神を知らなければならない。人はどのように求めようと、何を得ることを求めようと、神についての認識に到達できなければならない。そうして初めて、神の心を満足させることができる。人は神を知ることによってのみ神への真の信仰を持つことができ、そして神を知ることによってのみ、神を真に畏れ従うことができる。神を知らない人々は、神への真の服従と畏敬に決して到達しない。神を知るということには、神の性質を知り、その旨を理解し、神の存在そのものを知ることが含まれる。しかしどの側面を知るにせよ、人は必ず代価を払い、従う意志を持つことを要求される。その意志がなければ、誰も最後まで従い続けることはできないだろう。神の働きは人の観念とまったく相容れないものであり、神の性質と神であるものは難解すぎて人が知れるものではなく、神が言い行なうすべてのことも人には不可解すぎる。神に従いたいと思いつつ、神に服従しようとしなければ、何も得ることはない。天地創造から今日に至るまで、神は人には理解不能で受け入れ難く感じられる多くの働きを行い、人の観念が修復され難くなるような多くのことを語ってきた。しかし人が大いに困難を感じているからといって、神がその働きを中断したことはない。むしろ神は働き語り続けており、多数の「戦士たち」が途中で挫折したものの、引き続き働きを行なって、新しい働きに従う覚悟のある人々の集団を次から次へと間断なく選び続けている。神は倒れた「英雄たち」への憐れみは持っておらず、代わりに神の新しい働きと言葉を受け入れる人々を大切にしている。しかし神は何の目的で、このように段階的に働いているのだろうか。なぜ、常に一部の人々を排除し、別の人々を選んでいるのだろうか。なぜ常にこのような方法を用いるのだろうか。神の働きの目的は、人が神を知り、それによって神のものとされるようにすることである。神の働きの原則は、神が現在行なっている働きに従える人々に対して働くことであり、過去の働きには従ったが現在の働きには反抗している人々に対して働くことではない。ここに、神がこれほど多くの人々を排除してきた理由があるのだ。

脚注

a. 原文では「神を知る働き」。

神を知るための学びの成果は、一日や二日で達成できるものではない。人は経験を重ね、苦しみを経て、真の従順を成し遂げなければならない。まず神の働きと神の言葉から始めなさい。必ず理解しなければならないのは、神についての認識に何が含まれるのか、その認識にいかに関与すべきか、そして自分の経験の中でいかに神を見るべきかということである。これはまだ神を知らない人々が皆しなければならないことである。神の働きと言葉を一挙に把握することは誰にもできないし、神の全体像を短期間で認識することもできない。経験という必要な過程があり、それなしには誰も神を知ること、神に真摯に従うこともできない。神が働きをすればするほど、人は神を知るようになる。神の働きが人の観念と異なっていればいるほど、神についての認識は改められ深みを増す。もし神の働きが永遠に固定された不変のものであれば、人の神についての認識はあまり多くなならないことだろう。天地創造から現在に至るまで、神が律法の時代に行ったこと、恵みの時代に行ったこと、そして神の国の時代に行なうことについて、あなたがたはこの上なく明確なビジョンを持たなければならない。あなたがたは神の働きを知らなければならない。ペテロはイエスに従って初めて、霊がイエスの中で行った働きの多くについて徐々に知るようになった。ペテロは次のように言った。「完全な認識に到達するには、人間の経験に頼るだけでは不十分である。神を知るのに役立つ新しいものを、神の働きから多く得なければならない」。当初、ペテロはイエスのことを使徒のように神から遣わされた人だと思い、キリストとは見なししていなかった。ペテロがイエスに従い始めたとき、イエスはペテロに「バルヨナ・シモンよ、わたしについて来るか」と尋ねた。ペテロはそれに答えて言った、「わたしは天の父から遣わされたお方に従わなくてはなりません。わたしは聖霊によって選ばれたお方を認めなければなりません。わたしはあなたに従います」と。ペテロの言葉から、ペテロがイエスについては何も知らなかったことがわかる。ペテロは神の言葉を経験し、自らを取り扱い、神のための苦難にも耐えていたが、それでも神の働きについては何も知らなかった。ある程度の経験を経るうち、ペテロはイエスの中に多くの神の業を見、神の素晴らしさを見、多くの神であるものを見た。そしてさらに、イエスの話した言葉が人には話せるはずのないものであることを目にし、イエスが行った働きが人には行えるはずのないものであることを目にした。そしてイエスの言葉と行いの中に、さらにさまざまな神の知恵と、多くの神性の働きを目にした。ペテロはこうした経験の中で、自らを知るようになっただけでなく、イエスの行動のすべてに注目し、そこから多くの新しいことを発見した。すなわち神がイエスを通して行った働きには実践の神の表現が多く見てとれること、そしてイエスがその言葉や行いのほか諸教会を養うやり方や行なう働きにおいても、普通の人とは異なるということに

気づいたのである。そしてペテロは学ぶべき多くのことをイエスから学び、イエスが十字架にかけられそうになった時には、イエスについてある程度の認識を得ていた。この認識はペテロのイエスに対する生涯を通じた忠誠の基盤となり、それによって彼は主のために逆さ十字架にかけられた。当初ペテロはいくつかの観念を持っており、イエスについての明確な認識はなかったものの、それは墮落した人間の一部として避けられないことである。イエスは出立の際、十字架にかけられることは自分に定められた働きであり、自分はそれを行なうために来たのだとペテロに告げた。自分が時代に見捨てられること、この不純で古い時代がイエスを十字架にかけるとは、必要なことなのだと。そして自分は贖いの働きを完成させるために来たのであり、その働きが終わったため、自分の職分は終わろうとしている、と。ペテロはこれを聞いて悲しみに襲われ、一層強くイエスを慕った。イエスが十字架にかけられると、ペテロはひそかに号泣した。その前に、ペテロはイエスにこう尋ねていた。「主よ、あなたはご自分が十字架にかけられるとおっしゃいます。あなたが去られた後、いつ再びお目にかかれますか」と。ペテロが語った言葉には、混ぜ物の要素はなかっただろうか。何の観念も混じり込んでいなかっただろうか。ペテロは心の中で、イエスが神の働きの一部を完成させるために来たのであり、イエスが去った後は霊が自分と共にあること、そしてたとえイエスが十字架にかけられ天に昇ったとしても、神の霊が自分と共にあることを知っていた。当時ペテロはイエスについてある程度の認識を持っており、イエスが神の霊により遣わされたこと、神の霊がイエスの中にあること、そしてイエスが神そのものでありキリストであることを知っていた。しかしペテロはイエスへの愛ゆえに、人間としての弱さゆえに、そのような言葉を語ったのだ。もし人が神の働きの一つ一つの歩みにおいて、観察し労を惜しまず経験することができるなら、徐々に神の素晴らしさを発見できるようになるだろう。ではパウロは、何を自分のビジョンとしたのだろうか。イエスがパウロに現れたとき、パウロは「主よ、あなたはどなたですか」と言った。それに対しイエスは、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と答えた。これがパウロのビジョンであった。ペテロはイエスの復活と、その後四十日間にわたる出現、そしてイエスの生涯にわたる教えを、その旅路の終わりまで自らのビジョンとした。

人は神の働きを経験し、自らを知るようになり、自身の墮落した性質を一掃し、そしていのちにおける成長を求める。それらはすべて、神を知るためである。もし自らを知りその墮落した性質を取り扱うことだけを求めて、神が人にどんな働きを行なうか、神の救いがいかに偉大か、人がどのように神の働きを経験し神の業を目指するかといったことを一切知らないなら、その経験は浅はかなものである。真理を実践し忍耐することができれば、いのちが成熟していると考えられるのなら、それは

あなたがいのちの真の意味、あるいは神が人を完全にすることの目的を、まだ把握していないということだ。いずれ宗教的な教会で、悔い改めの教会やいのちの教会のメンバーたちといるとき、あなたは多くの敬虔な人々に出会うだろう。彼らの祈りは「ビジョン」を含んでおり、彼らはいのちの探求の中で感動し言葉によって導かれている。さらに彼らは多くの物事において、忍耐し、自分を捨て、肉に操られずにいることができる。そのときあなたには違いがわからず、彼らがすることはすべて正しく、すべてがいのちの自然な表現だと感じ、彼らが信じるものの名前が間違っているのはなんと残念なことかと思うだろう。そのような見方は愚かではないだろうか。なぜ、多くの人にはいのちがないと言われるのか。それは彼らが神を知らないからであり、そのため彼らの心には神がなく彼らにはいのちがないと言われるのだ。あなたの神への信仰がある段階に達しており、神の業、神の現実性、そして神の働きの各段階を完全に知ることができるなら、あなたは真理を備えている。もし神の働きと性質を知らないなら、あなたの経験にはまだ何かが欠けている。イエスが働きのあの段階をどのように行ったか、この段階はどのように行われているのか、神が恵みの時代に働きをどのように行い何の働きが行われたのか、この段階ではどんな働きが行われているのか——そうしたことを完全に認識していないなら、あなたは決して確信を持つことがなく、いつも不安に感じるだろう。一定の経験を経た後、神による働きとその働きの歩みすべてを知ることができるようになったら、そして神がその言葉を語る目的と、これまでに語られた言葉のうち成就していないものがなぜこれほど多いかについて完全な認識を得たなら、あなたは心配や精錬から自由になり、大胆にためらうことなく目の前の道を進むことができるようになる。あなたがたは神がどんな方法で多くの働きを成し遂げるのかを目にする必要がある。神は自身が語る言葉を用い、さまざまな類の言葉をもって、人を精錬し人の観念を変化する。あなたがたが耐えてきたすべての苦難、経験してきたすべての精錬、心の中で受け入れてきた取り扱い、経験してきた啓き——それらはすべて、神が語った言葉によって成し遂げられた。人は何の理由で神に従うのか。それは神の言葉のためだ。神の言葉は非常に神秘的であり、そのうえ人の心を動かし、人の心の奥深くに潜む物事を明らかにし、過去に起きたことを人に知らしめ、未来を見抜させることができる。そのため人は、神の言葉ゆえに苦難に耐え、また神の言葉ゆえに完全にされる。そのとき初めて、人は神に従うのだ。この段階で人がすべきことは、神の言葉を受け入れることであり、完全にされるか精錬の対象となるかを問わず、鍵となるのは神の言葉である。これが神の働きであり、そして人が今日知るべきビジョンでもあるのだ。

神はどのように人を完全にするのか。神の性質とはどのようなものか。その性質には何が含まれているのか。これらをすべて明らかにすることは、神の名を広める

ことだとも、神を証しすることだとも、神を高めることだとも言われる。人は神を知ることを基盤として、最終的にそのいのちの性質が変化される。人は取り扱いと精錬を受ければ受けるほど活気づき、神の働きの歩みが多ければ多いほど完全にされる。現在、人の経験の中では、神の働きの歩みの一つ一つが人の観念に反撃しており、すべてが人の知性を超越しその予想を超えたところにある。神は人に必要なすべてのものを与えるが、それはあらゆる点で人の観念と食い違う。神はあなたが弱っているときに言葉を発する。そうすることによってのみ、神はあなたにいのちを与えることができるのだ。神はあなたの観念に反撃することで、あなたに神の取り扱いを受け入れさせる。そうすることによってのみ、あなたは自己の墮落から抜け出すことができるのだ。受肉した神は今日、ある面においては神性の状態に留まって働くが、別の面では普通の人間性の状態で働く。あなたが神のいかなる働きをも否定できなくなり、神が普通の人間性の状態で何を言おうと何をしようとそれに服従できるようになり、神がどのような普通性を表そうとそれに服従しそれを理解できるようになり、そして実際の経験を得たとき、初めてあなたはの方が神だと確信できるようになり、観念を作り出すことを止め、最後まで神に従えるようになるのである。神の働きには知恵があり、神は人間がいかに揺るぎなく神に証しを立てられるか知っている。また神は人の致命的な弱点がどこにあるかを知っており、神の語る言葉はあなたの致命的な弱点を攻撃することができるが、同時に神はその威厳と知恵に満ちた言葉を用いて、あなたに揺るぎない神の証しを立てさせる。こうしたことが、神の奇跡的な業である。神が行なう働きは、人の知性によって想像できるものではない。肉である人間がどのような墮落にとりつかれているか、そして何が人間の本質を成しているか、そうしたことはすべて神の裁きを通して明らかにされ、それによって人間は自分の恥から隠れる場所がなくなるのだ。

神は裁きと刑罰の働きを行なうが、それは人が神についての認識を得られるようにするためであり、また神の証しのためでもある。神が人の墮落した性質を裁かなければ、人は犯すべからざる神の義なる性質を知ることができず、神についての古い認識を新たにすることもできない。神はその証しのため、そして神の経営（救い）のため、その存在すべてを公にし、それによって人は、その神の公的な出現を通して、神の認識に到達し、性質を変化させ、明確な神の証しを立てられるようになる。人の性質の変化は、神のさまざまな働きを通して成し遂げられる。そのような性質の変化なくして、人は神の証しを立てることができず、神の心にかなうこともできない。人の性質の変化は、人がサタンの束縛と闇の影響から解放され、真に神の働きの見本かつ標本、神の証人、そして神の心にかなう者となったことを意味する。今日、受肉した神はその働きを行なうため地上に到来した。そして神は、人

が神を認識し、神に服従し、神の証しとなって、神の実際的な普通の働きを知り、人の観念と合致しない神の言葉と働きのすべてに従い、神が人間を救うために行なうあらゆる働きと人間を征服するために成し遂げるあらゆる業の証しをすることを求めている。神の証しをする人々は、神についての認識を持たなければならない。この種の証しだけが正確かつ現実的であり、この種の証しだけがサタンを恥じ入らせることができる。神はその裁きと刑罰、取り扱いと刈り込みを経験することで神を知るようになった人々を用いて、自らを証しさせる。神はサタンにより墮落させられた人々を用いて自らを証しさせると同時に、性質が変わったことで神の祝福を得た人々を用いて自らを証しさせる。神は人による口先だけの称賛を必要とせず、神に救われていないサタンの同類による称賛や証しも必要としない。神を知る人々だけが神の証しをする資格があり、その性質が変化させられた人々だけが神の証しをする資格がある。神は人が意図的に神の名を汚すことを許さない。

ペテロはいかにしてイエスを知るに至ったか

ペテロはイエスと共に過ごしていたあいだ、イエスの中に愛すべき多くの性質、模倣するに値する多くの側面、そして彼に糧を施した多くの側面を見た。ペテロは様々な形でイエスの中に神の存在を見、多くの愛すべき資質を見たものの、最初はイエスを知らなかった。ペテロは二十歳のときからイエスに付き従い、六年にわたって付き従い続けた。その間、ペテロは決してイエスを知ることがなかったが、純粹にイエスへの敬慕から喜んで従った。最初にガリラヤ湖の岸辺でペテロに呼びかけたとき、イエスは、「シモン・バルヨナ。あなたはわたしについて来るか」と尋ねた。それにペテロはこう言った。「わたしは天なる父が遣わされたお方に従わなければなりません。わたしは聖霊に選ばれたお方を認めなければなりません。わたしはあなたについて行きます」。当時、ペテロはすでに、イエスという名前の人——預言者の中の大預言者、神の愛するひとり子——のことを話に聞いていたので、イエスを見つけないと絶えず願い、イエスに会う機会を待ち望んでいた（そのようにして聖霊に導かれていたからである）。ペテロはそれまで一度もイエスに会ったことがなく、ただイエスについての噂を聞いていただけだが、心の中でイエスに対する憧憬と敬慕が次第に大きくなり、いつかイエスに会いたいとしばしば切望するようになった。それでは、イエスはどのようにしてペテロに呼びかけたのだろうか。イエスもまたペテロという男のことを話に聞いていたが、「ガリラヤ湖に行きなさい。そこにはシモン・バルヨナと呼ばれる者がいる」とイエスを導いたのは、聖霊ではなかった。イエスは、シモン・バルヨナと呼ばれる人がいて、人々が彼の説教を聞き、彼もまた天国の福音を

宣べ伝えており、彼の話を聞いた人はみな感動して涙を流していたと誰かが言うのを聞いた。これを聞いて、イエスはその人に付き従ってガリラヤ湖へと向かった。そのとき、ペテロはイエスの呼びかけを受け入れ、イエスに付き従ったのである。

イエスに付き従っている間、ペテロはイエスについて多くの意見を持ち、常に自身の観点からイエスのことを判断していた。ある程度は霊について理解していたものの、その理解はいささか曖昧であり、それゆえこのように言った。「わたしは天なる父によって遣わされたお方に付き従わなければならない。聖霊によって選ばれたお方を認めなければならない」。ペテロはイエスが行ったことを理解していなかったし、それについて明瞭さを欠いていた。しばらくイエスに付き従った後、ペテロはイエスの言動、またイエス自身に次第に興味を抱き始めた。イエスが愛と尊敬の念を呼び起こすのを感じるようになり、イエスと交わり、イエスのそばにいたいと思うようになった。そして、イエスの言葉に耳を傾けることで、糧と助けを施された。イエスに付き従っていた期間、ペテロはイエスの生活のすべて、つまりイエスの行動、言葉、動作、表情を観察し、心に留めた。また、イエスが普通の人と違うことを深く理解した。イエスの人間としての外見は極めて普通だったが、イエスは人間に対する愛、憐れみ、寛容で満ちていた。イエスの言動はどれも他の人々の大きな助けとなり、ペテロはイエスから、それまで見たことも所有したこともない物事を目の当たりにし、自分のものとした。イエスには大きな背丈や並外れた人間性は一切ないが、実に驚くべき非凡な雰囲気があることを、ペテロは見たのである。それを完全に説明することはできなかったものの、イエスの行動が他の誰とも違っていることは理解できた。と言うのも、イエスが行ったことは、普通の人が行うこととまったく異なっていたからである。ペテロはイエスと接するようになってから、イエスの性格が普通の人とは違っていることも目の当たりにした。常に落ち着いて行動し、決して焦ることも、誇張することもなく、また物事を控えめに表現することもなく、ごく普通でありながら称賛に値する性格を表わすような生活を送っていたのである。率直かつ上品に話し、朗らかながら穏やかな物腰で常に交わり、それでいて働きを実行するときは、決して威厳を失わなかった。ペテロは、イエスが無口になることもあれば、絶え間なく話すこともあるのを見た。嬉しさのあまり、あちこち飛び回ってはしゃいでいる鳩のように見えることもあれば、悲しみのあまり、まるでくたびれ疲れ果てた母親のように、悲嘆に暮れてまったく口をきかないこともあった。また時として、敵を殺そうと突進する勇敢な兵士のように憤りで一杯になることもあれば、吠え猛るライオンのように見えることさえあった。時には笑い、時には祈りながら泣くこともあった。イエスがどのように振る舞うかにかかわらず、ペテロは限りない愛と敬意をイエスに対して抱くようになった。イ

イエスの笑い声はペテロを幸せで満たし、イエスの悲しみはペテロを悲嘆に落とし入れ、イエスの怒りはペテロを恐れさせたが、その一方で、イエスの憐れみ、赦し、そして人々に対する厳しい要求によって、ペテロはイエスを真に愛し、イエスに対して真の畏敬と憧憬を抱くようになった。もちろん、ペテロがそのすべてを次第に認識するようになったのは、イエスのそばで長年暮らした後のことである。

ペテロは生まれつき聡明で、ひととき思慮深い人だったが、イエスに付き従っていたときは愚かなことを多数しており、最初のころはイエスについて多少の観念を持っていた。彼は尋ねた。「人々はあなたのことを預言者だと言っていますが、物事を理解し始めた八歳のころ、あなたはご自身のことを神であると知っておられましたか。ご自身が聖霊によって身ごもられたことを知っておられましたか」。イエスは答えた。「いや、わたしは知らなかった。あなたには、わたしがごく普通の人には見えないのか。わたしは他の人と同じだ。父が遣わすのは普通の人であり、特別な人ではない。それにわたしが行う働きは、わたしの天なる父を表しているが、わたしの姿、わたしという人、そしてこの肉の身体は父を完全に表すことができず、その一部分しか表せない。わたしは霊から生まれたが、やはり普通の人であり、わたしの父はわたしを特別な人としてではなく、普通の人としてこの地上に送った」。これを聞いて初めて、ペテロはイエスについて少し理解できたのである。そして、イエスの働き、教え、牧養、および施しを、極めて長時間にわたって経験して初めて、彼はさらに深い理解を得たのである。イエスは三十歳のとき、自分がこれから十字架にかけられること、自分が来たのはある段階の働き、すなわち十字架の働きを行って全人類を贖うためだということをペテロに話した。イエスはまた、磔刑に処された三日後、人の子は復活し、また復活してから四十日間、人々の前に現れるともペテロに語った。このような言葉を聞いたとたん、ペテロは悲しみ、これらの言葉を心に留め、それ以来イエスにさらに近づいていった。しばらく経験した後、イエスがなしたすべてのことは、神の存在に属するものだと認識するようになり、イエスは並外れて愛しい方だと思うようになった。このように理解できるようになって初めて、聖霊がペテロを内から啓いたのである。そしてそのとき、イエスは弟子たちやその他の付き従う人たちに向かって言った。「ヨハネ、あなたはわたしを誰だと言うのか」。ヨハネは、「あなたはモーセです」と答えた。それからイエスはルカに向かって、「そしてルカ、あなたはわたしを誰だと言うのか」と尋ねた。ルカは、「あなたは最も偉大な預言者です」と答えた。次にイエスがひとりの姉妹に尋ねると、その姉妹は、「あなたはとこしえからとこしえまで、多くの言葉を語る最も偉大な預言者です。誰の預言もあなたのものほど偉大ではなく、誰の知識もあなたの知識を超えません。あなたは預言者です」と答えた。それ

からイエスはペテロに向かって、「ペテロ、あなたはわたしを誰だと言うのか」と尋ねた。ペテロは「あなたは、生ける神の御子キリストです。あなたは天から来られ、地のものではありません。あなたは神の創造物と同じではありません。わたしたちは地上にいて、あなたはわたしたちとここにいますが、あなたは天のものであり、この世のものでも、地のものでもありません」と答えた。ペテロは自身の経験を通して聖霊によって啓かれたのであり、それにより、このことを理解できるようになったのである。この啓示の後、ペテロはイエスのあらゆる業をさらに褒めたたえ、イエスのことをさらに愛しい方だと思うようになり、イエスから離れたくないという思いを絶えず心に抱くようになった。ゆえに、磔刑に処されて復活したイエスが初めてペテロの前に現れたとき、ペテロはこの上ない幸せに大声で叫んだ。「主よ！ あなたはよみがえられました！」それから、泣きながらひととき大きな魚を捕まえ、それを料理し、イエスに差し出した。イエスは微笑んだが、語ることはなかった。ペテロはイエスが復活したことを知っていたものの、その奥義は理解していなかった。ペテロがイエスに魚を差し出したとき、イエスは拒絶しなかったが、話すことも座って食べることもなく、突然消えてしまった。これはペテロに大きな衝撃を与えたが、そのとき初めて、復活したイエスが以前のイエスと違うことを理解した。これを理解したペテロは悲しんだが、同時に、主が自身の働きを成し遂げたことを知って慰めを得た。ペテロは、イエスが自身の働きを成し遂げたこと、イエスが人と共にいる時が終わったこと、今後人は自分の道を歩まなければならないことを知った。イエスはかつてペテロに、「あなたもわたしが飲んだ苦い杯を飲まなければならない（これは、イエスが復活の後に言ったことである）。あなたもわたしが歩いた道を歩み、わたしのためにいのちを捧げなければならない」と言った。今とは違い、当時の働きでは、面と向かって会話しなかったのである。恵みの時代、聖霊の働きはひととき隠されており、ペテロは大きな困難に苦しみ、時には次のように叫ぶことさえあった。「神よ！ わたしにはこのいのちしかありません。あなたにとってはあまり価値がないでしょうが、わたしはこのいのちをあなたに捧げたいのです。人間はあなたを愛するに値せず、人間の愛にも心にも価値はありませんが、あなたは人の心の望みをご存じだと、わたしは信じています。人の肉体はあなたに受け入れていただけるものではありませんが、わたしはあなたにわたしの心を受け入れていただきたいのです」。ペテロはこのような祈りを口にすることで励まされた。特に、次の祈りがそうだった。「わたしは進んで自分の心を残らず神に捧げます。たとえ神のために何もできなくても、進んで忠実に神を満足させ、心を込めて自分自身を神に捧げます。わたしは、神がわたしの心を見てくださるに違いないと信じています」。ペテロは言った。「わたしは人生において何も求め

ませんが、神に対するわたしの愛の思いとわたしの心の願いが、神に受け入れられるよう願っています。わたしは長きにわたり、主イエスと共にいましたが、イエスを愛したことはありませんでした。これこそわたしの最も大きな負い目です。わたしはイエスと共にいましたが、イエスを知りませんでした。また、イエスの陰で不適切なことさえ言いました。これらのことを考えると、わたしは主イエスにますます負い目を感じます」。ペテロはいつもこのように祈り、こう言った。「わたしは塵にも劣る存在です。この忠実なる心を神に捧げる他、何もできません」。

身体をほぼ完全に砕かれたときがペテロの経験の頂点だったが、イエスはそれでも彼の中で励ましを与えた。そして一度、イエスはペテロに姿を見せた。ペテロがとてつもない苦しみに遭い、心が打ち碎かれるように感じたとき、イエスはペテロにこう教えた。「あなたは地上でわたしと共にいたが、わたしもあなたと共にいた。わたしたちが天国で一緒になるのはこれからだが、結局のところ、それは霊の世界のことである。今、わたしは霊の世界に戻っているが、あなたは地上にいる。なぜなら、わたしは地のものではなく、あなたもまた地のものではないけれど、地上における自分の役割を果たさなければならないからだ。あなたはしもべなのだから、自身の本分を尽くさなければならない」。神のもとへ戻れるようになると聞いて、ペテロは慰められた。当時、ペテロは寝たきりになるほど苦しんでおり、「わたしはあまりに墮落しており、神に満足していただくことができない」と言うほど自責の念にかられていた。イエスは彼の前に現れ、言った。「ペテロよ、あなたはわたしの前で決心したことを忘れてしまったのか。わたしが言ったことを本当にすべて忘れてしまったのか。わたしに対して決意したことを忘れてしまったのか」。それがイエスだとわかったペテロは床から起き上がった。そしてイエスはこのように言って彼を慰めた。「すでに述べた通り、わたしは地のものではない――あなたはそれを理解しなければならないが、わたしがあなたに言ったもうひとつのことも忘れてしまったのか。『あなたも地のものではなく、世の者でもない』と。今、あなたには行わなければならない働きがある。このように嘆き、このように苦しんでいてはいけない。人間と神が同じ世界で共に暮らすことはできないが、わたしにはわたしの働きが、あなたにはあなたの働きがあり、いつかあなたの仕事が終わるとき、わたしたちは同じ領域で一緒になる。そしてわたしは、永遠にわたしと共にいるよう、あなたを導く」。ペテロはこの言葉を聞いて慰められ、安心した。この苦しみは、自分が耐えて経験しなければならないものであることを知り、それ以降、靈感を与えられたのである。イエスは特に要所要所でペテロの前に姿を見せ、特別な啓きと導きを与え、彼に対して多くの働きをした。では、ペテロは何を一番後悔したのか。ペテロが「あなたは生ける神の子です」と言ってから間もなく、イエス

は別の質問をペテロにした（ただし、聖書にはそのように記されていない）。イエスは彼に「ペテロよ、あなたはかつてわたしを愛したことがあるのか」と訊いた。ペテロはイエスの言わんとすることを理解し、こう言った。「主よ！ わたしはかつて天なる父を愛しましたが、あなたを愛したことはないと認めます」。するとイエスは、「人が天なる父を愛さないなら、地上の子をどうして愛することができようか。人が神によって遣わされた子を愛さないなら、天なる父をどうして愛することができようか。人が地上の子を本当に愛するなら、天なる父も本当に愛しているのだ」と言った。ペテロはこれらの言葉を聞いて、自分に欠けているものに気づいた。「わたしはかつて天なる父を愛しましたが、あなたを愛したことは一度もありません」と言って涙を流すほど、常に後悔を感じたのである。イエスが復活し、昇天した後、ペテロはさらに自責の念にかられ、それらの言葉に悲しんだ。自分の昔の働きや現在の背丈を思い出し、神の旨を満たしていないことや、神の基準に達していないことを常に後悔し、負い目を感じて、しばしば祈りの中でイエスの前に出た。これらのことは彼の最大の重荷となった。ペテロは、「いつかわたしは、自分が持つすべてのものと、自分のすべてをあなたに捧げます。わたしはもっとも価値あるものをなんでもあなたに捧げます」と言った。また彼は、「神よ、わたしには一つの信仰と一つの愛しかありません。わたしのいのちにはなんの価値もありませんし、わたしの体も無価値です。わたしには一つの信仰と一つの愛しかないのです。わたしは思いの中であなたを信じ、心の中であなたを愛しています。あなたに捧げるものはこの二つしかなく、他には何もありません」と言った。ペテロはイエスの言葉で大いに励まされた。十字架にかけられる前、イエスがペテロに「わたしはこの世の者ではなく、あなたもこの世のものではない」と告げたからである。後に、ペテロが苦悩の絶頂に達したとき、イエスは彼にこう注意した。「ペテロよ、あなたは忘れてしまったのか。わたしはこの世のものではない。わたしが早くに去って行ったのは、ただわたしの働きのゆえなのだ。あなたもこの世のものではない。忘れてしまったのか。あなたに二度言ったが、覚えていないのか」。これを聞いたペテロは「わたしは忘れていません！」と叫んだ。するとイエスはこう続けた。「かつて、あなたは天でわたしと幸せな時を過ごし、わたしのそばでしばらく過ごしていた。あなたはわたしがいなくて寂しく思っているが、わたしもあなたがいなくて寂しい。わたしから見て、被造物は言及する価値もない存在だが、純朴で愛しい者をどうして愛さずにいられようか。あなたはわたしの約束を忘れてしまったのか。地上でわたしが託したことを、あなたは受け入れなければならない。わたしが託した任務を果たさなければならない。わたしはいつか、必ずやあなたをわたしのそばに導く」。ペテロはこれを聞いてますます励まされ、さらに大きな靈感を

受け、その結果、彼自身が十字架にかけられたとき、このように言うことができた。「神よ！ わたしはあなたをいくら愛しても愛しきれません。たとえあなたが、わたしに対して死ねと言われても、やはりわたしはあなたを愛しても愛しきれません。あなたがわたしの魂をどこに送られても、あなたが過去の約束を果たされても果たされなくても、またあなたがその後何をなされても、わたしはあなたを愛し、信じます」。彼がしっかり持っていたのは、自身の信仰と真の愛だったのである。

ある夜、ペテロを含めた数人の弟子たちが漁をするため、イエスと共に舟に乗っていた。そしてペテロがイエスに対し、「主よ！ 長い間お尋ねしたいと思っていた質問があります」と非常に未熟な質問をした。イエスは、「それなら尋ねなさい！」と答えた。するとペテロは、「律法の時代になされた働きはあなたがなされたことですか」と尋ねた。それにイエスは、「この子はなんと未熟なのだろう！」と言っているかのように微笑み、わざとこのように続けた。「それはわたしの働きではない。ヤーウェとモーセがしたことだ」。ペテロはこれを聞いて、「ええっ！ あなたがなさったのではないのですか」と叫んだ。ペテロがそう言うと、イエスはそれ以上何も言わなかった。ペテロは内心こう思った。「それをされたのはあなたではなかったのですね。道理であなたは律法を滅ぼしに来られたわけです。それはあなたがなされたことではないのですから」。同時に、彼の心は軽くなった。その後イエスは、ペテロがずいぶん未熟であることに気づいたが、その時はまだわからなかったので、イエスは他に何も言わなかったし、直接反論しようとしなかった。イエスは一度、ペテロも含めて多くの人たちがいる会堂で説教をした。その説教でイエスは言った。「とこしえからとこしえまで来る者は、恵みの時代に贖いの働きを行い、すべての人類を罪から贖うが、その者は人を罪から導き出すにあたって、何の規律にも縛られない。その者は律法から歩み去り、恵みの時代に入る。その者はすべての人類を贖い、律法の時代から恵みの時代へと躍進するが、誰もヤーウェから来たその者を知らない。モーセが行った働きはヤーウェから授けられたものである。ヤーウェが行った働きのゆえに、モーセは律法を書き記したのだ」。イエスはこう言ってから、さらに続けた。「恵みの時代において恵みの時代の戒めを廃止する者は、大きな災いに見舞われるだろう。彼らは神殿に立ち、神による破壊を受けなければならない、火が彼らの上にふりかかるだろう」。ペテロはこれらの言葉を聞いて多少の影響を受けたが、自身の経験の期間、イエスがペテロを養い、支え、心を通わせてペテロと話したので、ペテロはイエスのことをもう少しよく理解できるようになった。イエスがその日説教したこと、自分が釣り船の上でイエスにした質問、それに対するイエスの答え、そしてイエスが微笑んだことを振り返りながら、ペテロはようやくそのすべてを理解できた。その後、聖霊がペテロを啓き、

そのとき初めて、イエスが生ける神の子であることをペテロは理解した。ペテロの理解は聖霊の啓きによるものだが、それに至る過程があった。質問し、イエスが説教するのを聞き、イエスによる特別な交わりと特別な牧養を受けることで、イエスが生ける神の子であることを認識するようになったのである。それは一夜で成し遂げられたことではなく、一つの過程であって、後の経験において役立った。イエスは完全にする働きを他の人たちにおいて行わず、ペテロにだけ行ったのだが、それはなぜか。イエスが生ける神の子であることを理解したのはペテロだけで、他の誰もそれを知らなかったからである。イエスに付き従う間、多くの弟子たちがたくさんの認識を得たが、彼らの認識はうわべだけのものだった。これこそが、完全にされる見本としてペテロがイエスに選ばれた理由である。イエスが当時ペテロに語ったことは、今日人々に語っていることであり、その人たちの認識やいのちの入りもペテロの域に到達しなければならない。それは、神があらゆる人を完全にする要件と道に一致している。現代の人たちはなぜ本当の信仰と真の愛を持つよう求められるのか。ペテロが経験したことをあなたがたも経験しなければならないし、ペテロが自分の経験から得た果実もまた、あなたがたにおいて現れなければならない。そして、ペテロが経験した苦しみを、あなたがたも経験しなければならない。あなたがたが歩く道はペテロが歩いたのと同じ道である。あなたがたが受ける苦しみはペテロが受けた苦しみである。栄光を受けるとき、また真の人生を生きるとき、あなたがたはペテロの姿を生きているのである。道は同じであり、それに従うことで人は完全にされる。しかし、あなたがたの素質はペテロのそれに比べて少々欠けている。と言うのも、時代が変わり、人間の墮落の度合いも変わったからである。またユダヤは古代文化を伴った長い歴史のある国家だったからである。したがって、あなたがたは自分自身の素質を向上させるべく全力を尽くさなければならない。

ペテロは非常に思慮深く、何をするにも鋭敏で、またたいへん正直だった。彼は多くの挫折を体験した。社会と最初に接触したのは十四歳のときで、学校に通いながら会堂にも通っていた。彼は非常に熱心で、いつも集会に喜んで参加した。そのとき、イエスはまだ働きを正式に始めておらず、恵みの時代の始まりに過ぎなかった。ペテロは十四歳のとき、宗教関係者と接し始めた。十八歳になるころには、宗教界のエリートと接するようになるが、その後宗教の舞台裏で無秩序を目の当たりにした彼は、そこから離れていった。この人たちがいかに悪賢く、狡猾で、企みに満ちているかを知り、この上ない嫌悪感を抱いたのである（このとき、聖霊はペテロを完全にすべく、そのように働いた。聖霊は特にペテロの心を動かし、彼に特別な働きをしたのである）。そこでペテロは十八歳のときに会堂から退いた。ペテロの両親は彼を迫害し、彼の信仰を許そうとしなかった（彼らは悪魔であり、不信者

だった)。ペテロはしまいに家を出て、あらゆるところを旅し、二年にわたって魚を捕ったり、説教したりして、その間、かなりの人たちを導いた。今、ペテロがいったいどんな道を歩んだのか、あなたは明確に見て取れるはずだ。ペテロの道をはっきり見て取れるなら、今日なされている働きを確信するようになり、不満を言ったり、消極的になったり、何かを切望したりすることはない。あなたは当時のペテロの気持ちを経験すべきである。彼は悲しみに打ちひしがれ、もはや未来もどんな祝福も求めなかった。現世の利益、幸福、名声、富を求めることはせず、最も意義のある人生を生きることだけを求めた。つまり、神の愛に報い、自身にとって貴重この上ないものを神に捧げることである。そうすることで、彼の心は満たされた。ペテロはしばしば次のような言葉で祈った。「主イエス・キリストよ、わたしはかつてあなたを愛していましたが、心から愛したことはありません。わたしはあなたを信じていると言いましたが、決して真の心であなたを愛してはいませんでした。わたしはあなたを尊敬し、お慕いし、お会いしたいと思いましたが、あなたを愛していたのでも、心からあなたを信じていたのでもありません」。彼は絶えず祈って決意をし、イエスの言葉によっていつも励まされ、それらの言葉から動機を引き出していたのである。しばらくの経験の後、イエスはペテロを試し、自分をもっと慕うように促した。ペテロは言った。「主イエス・キリストよ、わたしはどんなにかあなたと一緒にいたいと願い、あなたを見上げる時を待ち焦がれていることでしょう。わたしにはあまりに多くの欠点があり、あなたの愛にお応えすることができません。わたしをすぐに取り去ってくださるよう、切にお願いします。あなたはいつわたしを必要とされるのでしょうか。あなたはわたしをいつ取り去ってくださるのでしょうか。わたしはいつあなたの御顔をもう一度拝することができるのでしょうか。わたしはもうこの体で生きたいとは思わず、このまま墮落し続けることも、これ以上反抗することも望んではいません。わたしが持っているすべてのものを一刻も早くあなたに捧げる用意ができています。そして、あなたをこれ以上悲しませたくありません」。ペテロはこのように祈ったが、イエスが彼の中で何を完全にするのか、そのときの彼にはわからなかった。ペテロが試みの中で苦しんでいる間、イエスは彼の前に再び現れ、こう言った。「ペテロよ、わたしはあなたを完全にしたいと思っている。わたしがあなたを完全にする中で、あなたがその果実、その結晶となり、わたしがそれを享受できるように。あなたはまことにわたしを証しすることができるのか。わたしがあなたに求めたことをあなたはしたのか。わたしが語った言葉をあなたは生きてきたのか。あなたはかつてわたしを愛した。しかし、あなたは確かにわたしを愛したけれども、果たしてわたしを生きたのか。わたしのために何をしたのか。あなたは、自分はわたしの愛にふさわしくないと認めた

が、わたしのために何をしたのか」。ペテロはイエスのために何もしてこなかったことを悟り、神に自身のいのちを捧げるという以前の誓いを思い出した。それゆえ、彼はもはや不平不満を言わなくなり、その後の祈りはさらに素晴らしくなった。ペテロはこう言って祈った。「主イエス・キリストよ、わたしはかつてあなたから去りましたが、あなたもわたしから去られました。わたしたちは離れて時を過ごすこともあれば、一緒に過ごすこともありました。でもあなたは、他の誰よりもわたしを愛してくださいました。わたしはあなたに何度となく反抗し、あなたを悲しませました。そのようなことをどうして忘れることができますでしょう。あなたがわたしに行われた働き、またわたしに託してくださったことを、わたしはいつも覚えておりますし、決して忘れることはありません。あなたがわたしにしてくださった働きのために、わたしは自分にできることを何でもしました。あなたはわたしができることをご存知で、わたしが果たせる役割はもっとご存知です。わたしはあなたの指揮に服従することを望み、自分が持つすべてのものをあなたに捧げます。わたしがあなたのために何をできるかは、あなただけがご存知です。サタンはわたしをずいぶん欺き、わたしはあなたに反抗しましたが、あなたはこのような過ちを覚えておられず、それを基にわたしを取り扱われたいと信じています。わたしはあなたに一生を捧げたいのです。わたしは何も求めませんし、他の望みも計画も持っていません。ただあなたの意図に沿って行動し、あなたの御旨を行うことを望むだけです。わたしはあなたの苦い杯から飲み、あなたの命じられるとおりにします」。

あなたがたは自分が歩む道について明確でなければならない。また、自分が将来歩む道、神が何を完全にするのか、そして、自分に任されたことについても明確でなければならない。おそらくいつの日か、あなたがたは試されるだろう。そしてその時が来た際、あなたがたがペテロの経験から靈感を得られるのであれば、あなたがたがまことにペテロの道を歩いていることを示している。ペテロは真の信仰、愛、そして神への忠誠のために、神から称えられた、そして神が彼を完全にしたのは、彼の正直さと、彼が心に抱く神への切望のためだった。あなたが本当にペテロと同じ愛と信仰を持っているなら、イエスは必ずやあなたを完全にするだろう。

神を愛する人は永遠に神の光の中に生きる

大半の人の神に対する信仰の実質は、宗教的な信仰である。彼らは神を愛することができず、ロボットのように神に付き従うことしかできない。心から神を切望することも、慕い求めることもできないのである。このような人は黙って神に付き従っているに過ぎない。神を信じる人は多いものの、神を愛する人はほとんどいな

い。人々は災難を恐れて神を「畏れる」だけか、さもなければ神が高く偉大な存在なので「崇めて」いるかに過ぎない。しかし、彼らの畏れや敬慕には、愛も、心からの切望もない。人々は自身の経験の中で、真理の些細な部分、あるいは取るに足らない奥義を求めている。大半の人は単に従うだけで、漁夫の利を得ようとしている。そのような人は真理を求めず、また神の祝福を受けるべく、心から神に従うこともない。すべての人が送る、神への信仰の生涯は無意味である。そこに価値はなく、自分の個人的な考慮と追求しかない。彼らは神を愛するために神を信じているのではなく、祝福を受けるために信じている。多くの人は思うがままに振る舞い、好きなことをするばかりで、神の益を考慮せず、自分の行ないが神の旨に適っているかどうかを考えることもない。そのような人は神を愛するどころか、真の信仰をもつことさえできない。神の本質は、単に人間が信じるべきものではない。それ以上に、人間が愛すべきものである。しかし、神を信じる人の多くは、この「秘密」を見いだすことができない。人々はあえて神を愛そうとせず、愛そうと試みることもない。神には愛すべき点が数多くあるのを見出したことがなく、神が人を愛する神であること、人が愛すべき神であるのも見出したことがない。神の愛すべき素晴らしさはその働きに示されている。人は神の働きを経験してはじめて、神の愛すべき素晴らしさを見出す。人は実際の経験の中でしか、神の愛すべき素晴らしさを理解できない。そして実生活においてそれを目の当たりにしなければ、誰一人神の愛すべき素晴らしさを見出せない。神には愛すべき点が数多くあるものの、実際に神と関わらなければ、人はそれを見出せない。つまり、もし神が受肉しなければ、人々は実際に神と関わることができず、実際に神と関わるができなければ、その働きを経験することもできない。そのため、神に対する人々の愛は、数多くの偽りや想像によって汚されることになる。天なる神への愛は、地上にいる神への愛ほど現実的なものではない。と言うのも、天なる神に関する人の認識は、その目で見たり自ら経験したりしたことではなく、自分の想像に基づいているからである。神が地上に来ると、人々は神の実際の業と、神の愛すべき素晴らしさを目の当たりにできる。神の実際的かつ普通の性質をすべて見られるのであり、それらはみな、天なる神についての認識より数千倍も現実的なものである。人々が天なる神をどれほど愛そうと、その愛に現実的なところは何ひとつなく、人間の考えで満たされている。地上にいる神への愛がどれほどささやかなものであっても、その愛は現実のものである。たとえごくわずかであっても、やはり現実のものなのである。神は実際の働きを通して人々に自分を知らしめ、それによって人々の愛を得る。ペテロもこれに似ている。イエスと共に暮らしていなければ、ペテロがイエスを愛することは不可能だったろう。イエスに対するペテロの忠誠心もまた、イエスとの交わりを通して築かれたものである。

人間が自分を愛するようにすべく、神は人の間に來て人と共に生きてきた。そして神が人に見させ、経験させるものはみな、神の現実なのである。

神は現実と事実を用いて人々を完全にする。人々を完全にするにあたり、神の言葉はその一部分を担っているが、それは導きの働き、道を開く働きである。つまり、あなたは神の言葉の中に実践の道を見出し、ビジョンに関する認識を見出さなければならない。これらを理解することで、実践において道とビジョンを得、神の言葉によって啓きを得ることができる。それらが神から出たものであることを理解し、多くのものを見分けられる。理解した後はただちにこの現実に入り、神の言葉によって、現実の生活において神を満足させなければならない。神は万事においてあなたを導き、実践の道を示し、神がひとときわ愛すべき存在であることを感じさせるとともに、自分における神の働きの各段階は、自分を完全にするのが目的なのだと理解できるようにする。神の愛を目の当たりにし、それを真に経験したいのであれば、現実と実際の生活に深く入らなければならない。そして、神のすることはみな愛と救いであり、また神が行なうすべてのことによって、人は汚れたものを捨て去ることができ、人の内にある物事のうち、神の旨を満たせないものを精錬できるのだと理解しなければならない。神は言葉を用いて人に施す。神は現実の生活における状況を采配して、人にそれを経験させる。そして人は、神の言葉を数多く飲み食いし、それらを実践に移したとき、神の数多くの言葉を用いて生活の困難を残らず解決できる。つまり、現実には深く入るには、自分に神の言葉がなければならない。神の言葉を飲み食いせず、神の働きがなければ、現実の生活で道をもつことはない。神の言葉を飲み食いしなければ、何かが起きた際に当惑する。神を愛すべきだと知るだけで、何ひとつ見分けることができず、実践の道をもたなければ、あなたはまごついて混乱し、肉の欲求を満たすことが神を満足することだと思い込むことさえある。これはどれも、神の言葉を飲み食いしない結果である。つまり、神の言葉に支えられることなく、現実の中で手探りしているだけでは、実践の道を見出すことが根本的にできないのである。このような人は、神を信じるということがどういう意味かをまったく理解しておらず、ましてや神を愛することがどういう意味かなど理解していない。神の言葉による啓きと導きを用いてしばしば祈り、探り、求め、それによって実践すべき事柄を見出し、聖霊の働きの機会を見つけ、真に神と協力し、まごついて混乱することがないなら、あなたは現実の生活において道を持ち、真に神を満足させる。神を満足させれば、あなたの中には神の導きがあり、神から格別の祝福を受ける。あなたはそれによって喜びを覚える。神を満足させたことをひとときわ光栄に感じ、内なる光を特に感じ、心は明瞭で安らかになる。良心は穏やかで、責められることがない。また兄弟姉妹を見るとよい心地になる。これが神の

愛を享受するということであり、これだけが真に神を喜ぶということである。神の愛は経験を通して享受できる。苦難を経験して真理を実践することで、人は神の祝福を得る。神は自分を本当に愛し、人のために重い代価を本当に払い、忍耐強く、そしてやさしく多くの言葉を話し、いつでも人々を救ってくれると口にするだけなら、あなたがこれらの言葉を発することは、神を喜ぶことの一面に過ぎない。しかし、さらに大きな喜び、すなわち真の喜びは、現実の生活において真理を実践することであって、その後、心は安らかで明晰になる。自分の中で大きな感動を覚え、神は最も愛すべき存在であり、自分の払った代価は十分過ぎるほど妥当だと感じるようになる。そして大きな代価を払って努力したことで、あなたはとりわけ明るい気持ちになる。自分が真に神の愛を享受していると感じ、神が人々に救いの働きをしてきたこと、神による人々の精錬は人々の清めであること、そして神が人々を試すのは、本当に神自身を愛しているかどうかを調べるためだということがわかる。このようにして絶えず真理を実践するなら、神の働きの多くに関する明確な認識が徐々に育まれ、そのときには自分の前にある神の言葉が水晶のごとく明瞭に感じられる。多くの真理を明確に理解できるなら、すべてのことは容易に実践でき、どんな問題や誘惑であっても打ち勝てると感じ、問題など何もないと思う。そのことは、あなたを大いに解放して自由にする。そのとき、あなたは神の愛を享受しているのであり、神の真の愛が自分にもたらされたのである。神はビジョンをもつ人、真理をもつ人、認識をもつ人、心から神を愛する人を祝福する。神の愛を目の当たりにしたければ、現実の生活において真理を実践し、進んで苦痛に耐え、愛するものを捨てて神を満足させ、たとえ涙することがあっても、神の旨を満足させられなければならない。そうすれば、神は必ずあなたを祝福する。そして、そうした困難を耐え忍ぶなら、聖霊の働きがそれに続く。現実の生活を通して、そして神の言葉を経験することで、人々は神の愛すべき素晴らしさを目の当たりにでき、神の愛を味わってはじめて、人は真に神を愛せるのである。

真理を実践すればするほど、より多くの真理が自分のものになる。真理を実践すればするほど、神の愛がますます自分のものになる。そして真理を実践すればするほど、神の祝福をさらに受ける。いつでもこのように実践するなら、ペテロが神を知るに至ったのと同じく、あなたに対する神の愛のおかげで、あなたは徐々に見えるようになる。ペテロは、神には天地と万物を創造する知恵があるだけでなく、それ以上に、人々の中で実際的な働きを行う知恵があると言った。神が人々の愛にふさわしいのは、天地と万物を創造したからだけではなく、それにもまして、人間を創り、人間を救い、人間を完全にし、人間に愛を授ける力があるからだと言ったのである。ゆえにペテロは、神には人間の愛にふさわしい点が数多くあるとも言った。

である。ペテロはイエスにこう言った。「あなたが人々の愛を受けるにふさわしいのは、天地と万物をお創りになったのが唯一の理由ですか。あなたには愛されるにふさわしい点がもっとあります。あなたは現実の生活の中で働き、動いておられます。あなたの御霊はわたしの内に触れ、わたしを懲らしめ、わたしを咎められます。こうしたことはずっと、人々の愛によりふさわしいではありませんか」。神の愛を見て経験したいと望むのであれば、それを現実の生活の中で探し求め、進んで自分の肉を捨てなければならない。あなたはこの決意をしなければならないのである。決意をもち、万事において神を満足させることができ、怠ることなく、肉の喜びに貪欲にならず、肉のためではなく神のために生きられる人にならなければならない。神の旨を満たせないときもあるだろう。それは神の旨を理解していないからである。次はもっと努力する必要があるとしても、あなたは神を満足させなければならないのであって、肉を満足させてはならない。このようにして経験していくと、あなたは神を知るようになる。神が天地と万物を創造できることを知り、また人々が実際に神を目の当たりにし、神と関われるよう、神が肉となったことを知るのである。そして、神が人々の間を歩けること、神の霊が現実の生活の中で人々を完全にし、人々が神のすばらしさを目の当たりにし、その鍛え、懲らしめ、祝福を経験できるようにすることがわかるのである。絶えずこのような経験をしていれば、現実の生活において神と離れ難くなり、いつの日か、神との関係が正常のものでなくなっても、叱責を受けて後悔を覚えられるようになる。神と正常な関係にあるときは、決して神と離れようと思わず、ある日、神が去ると言うことがあれば、あなたは恐れ、神と離れるくらいなら死んだほうがましだと言うだろう。そうした感情を抱くとすぐ、あなたは神から離れられないと感じ、そうして基礎ができ、真に神の愛を享受できる。

人々はよく、神を自分のいのちにさせることを口にするが、彼らの経験はまだそこまで至っていない。あなたは単に、神は自分のいのちで毎日自分を導いてくれる、自分は毎日神の言葉を飲み食いしている、そして自分は毎日神に祈っているのだから、神が自分のいのちになったと言う。こうしたことを言う人の認識は極めて表面的である。多くの人には基礎がない。神の言葉は植えつけられたが、まだ芽を出しておらず、まして実を結んでなどいない。今日、あなたはどの程度まで経験したのか。ここまで神が強引に連れてきてやっと、あなたは神と離れることはできないと感じる。いつか、あなたの経験が一定のところに達した際には、神があなたを去らせようとしても、あなたはそうすることができないはずだ。あなたはいつでも、自分の中に神がなくてはいられないと感じるだろう。夫や妻、子供、家族、父母、肉の喜びはなくてもいられる。しかし、神なしではいられない。神なしでいる

のはいのちを失うようなもので、神なしでは生きていられないはずだ。あなたの経験がここまになると、神に対するあなたの信仰は一定の基準に達したことになる。そして、このようにして、神はあなたのいのちとなり、あなたの生存の基礎となっている。あなたは二度と神から離れられない。この程度まで経験を積むと、あなたは真に神の愛を享受したことになり、また神との関係が十分親密になると、神があなたのいのちと愛になり、あなたは神にこう祈る。「おお、神よ。あなたから離れることができません。あなたはわたしのいのちです。他のすべてがなくともやっていけますが、あなたがいなければ生きていけません」。これが人の真の霊的背丈、そしてまことのいのちである。中には、今日いるところまで無理に連れてこられた人もいる。望むと望まざるとにかかわらず、その人たちは進まなければいけない。彼らはいつも、自分が苦難の板挟みとなったかのように感じている。あなたは、神が自分のいのちになり、自分の心から神を奪われたなら、それはいのちを失うようなものである、というところまで経験しなければいけない。神は自分のいのちであって、神から離れることはできないという状態にならなければならない。そうすれば、あなたは本当に神を経験したことになり、そのとき神を愛するなら、真に神を愛するのであって、それは唯一の純粋な愛である。いつの日か、自分のいのちがある程度に達するほど経験を積み、神に祈り、神の言葉を飲み食いしたとき、あなたは自分の中で神から離れることができず、たとえそうしたいと思っても、神を忘れることができない。神があなたのいのちになったのである。世界を忘れることはできる。妻や夫や子供を忘れることもできる。しかし、神を忘れるのは難しい。そうすることは不可能であって、それがあなたの真のいのちであり、神への真の愛である。神への愛がある程度に達すると、神への愛に匹敵する愛はなくなり、神への愛が最優先となる。そのようにして、他のすべてを捨て去ることができるようになり、神によるすべての取り扱いと刈り込みを進んで受け入れるようになる。神への愛が他のすべてを超えるまでになると、あなたは現実の中で、神の愛の内に生きようになる。

自分の中で神がいのちになるやいなや、人々は神から離れることができなくなる。これこそが神の業ではないのか。これ以上の証しはない。神はある段階まで働いた。神は人々に、奉仕せよ、刑罰を受けよ、あるいは死ねと言ったが、人々はひるんでおらず、彼らが神に征服されたことは明らかである。真理を持つ人々は、実体験において証しに堅く立つことができ、自分の立場をしっかりと守り、神の側に立ち、決して退くことがなく、神を愛する人々と正常な関係を持つことができ、自分たちに物事が起こった時は完全に神に従うことができ、そして死に至るまで神に従うことができる。実生活におけるあなたの実践と表現は神への証しである。それ

らは人の生きる道であるとともに神への証しなのであり、これこそが真に神の愛を享受しているということなのだ。この段階まで経験を重ねてくると、しかるべき成果が生み出されている。あなたは実際に生きることができ、そのあらゆる行いに対して他の人々から称賛の目が向けられる。服装や外見が平凡であっても、この上なく敬虔に生きており、神の言葉を伝えるときは神によって導かれ、啓かれる。自分の言葉で神の旨を語ることができ、現実を伝えることができ、霊において奉仕することを深く理解している。話し方は率直で、礼儀正しく高潔で、対立的になることがなく気品があり、物事が降りかかったときは神の采配に従うとともに証しに堅く立つことができ、また、どのような事を取り扱う場合にも穏やかで落ち着いていられる。このような人は真に神の愛を見てきている。その中にはまだ若い人々もいるが、彼らは壮年者のように振る舞う。彼らは成熟しており、真理を自分のものにしていて、他の人々から感心される。彼らは証しをもち、神を明示する人々である。つまり、ある程度の経験を積むと、心の中に神に対する理解力が養われ、外に現れる性質もやはり安定するのだ。多くの人は真理を実践せず、証しに立つことがない。そのような人々には、神の愛、あるいは神への証しが存在しない。そして、こうした人々が神から最も嫌われる人なのだ。彼らは集会で神の言葉を読みはするが、生きているのはサタンであり、それは神の名誉を汚し、神を貶め、神を冒瀆することである。そのような人々の内には神の愛のかけらもなく、聖霊の働きがまったくない。ゆえに、人々の言動はサタンを表わしている。もしあなたの心がいつでも神の前で安らかであるなら、また、周囲の人々や物事、自分の周りで起こっていることに常に注意を払い、神の負っているものについて心を留めているなら、また、常に神を敬い畏れる心をもっているなら、神はあなたを内から啓く。教会には「監督者」なるものがいて、他の人々の過ちにことさら注意を払い、それを真似て見せる。彼らは見分けることができず、罪を憎まず、サタンの物事を嫌うことも不快に思うこともない。そのような人々はサタンの物事に満たされており、ついには神から完全に見放される。あなたはいつも神の前で敬い畏れる心をもち、言動は穏やかであらねばならず、神に敵対したり、神を悲しませたりすることを望んではならない。あなたの内にある神の働きを無にしたり、これまで耐えてきた苦難や実践してきたことをすべて無にしたりすることを決して望んではならない。あなたは前途においてもっと一生懸命働き、さらに神を愛さなければならない。こうした人々は自身の基盤としてビジョンをもつ人である。こうした人々は前進を求める人なのである。

神を敬い畏れる心で神を信じ、神の言葉を体験するなら、そのような人々には神の救いと神の愛が見られる。そうした人々は神を証しすることができる。彼らは真理に生き、自らが証しするものもやはり真理、神の存在そのもの、そして神の性質

である。彼らは神の愛に包まれて生き、神の愛を知っている。もし人々が神を愛したいと願うなら、神の愛すべき素晴らしさを経験し、神の愛すべき素晴らしさを知らなければならない。そうしてはじめて、神を愛する心、神のために忠実に我が身を捧げようという思いが生じる。神は言葉や表現、あるいは人々の想像力に訴えて人々が神を愛するように仕向けることはなく、自身を愛することを人に強いることもない。むしろ、人々に自ら進んで神を愛するようにさせ、自分の働きと言葉の内にその愛すべき素晴らしさを見るようにさせる。その後、人々の内には神への愛が生まれるのだ。この方法によってのみ、人々は真に神を証しできるのである。人々は、他人から駆り立てられて神を愛するのではなく、一時の感情的衝動に駆られて愛するのでもない。人々が神を愛するのは、神の愛すべき素晴らしさを見たためである。彼らは、神には人々の愛に値するものが非常に多くあるを見た。神の救いと知恵、驚くべき業を見たからである。そしてその結果、彼らは心から神を讃え、心から神を慕い、神無くしては生き抜けないほどの情熱が自分の中に呼び起こされるのだ。真に神を証しする人々は、神に対する真の認識と、心から神を慕う気持ちという基盤の上に自らの証しがあるからこそ、鳴り響くような証しをできるのである。そのような証しは、感情に突き動かされて行われるのではなく、神とその性質に関する自らの認識によって行われる。そのような人は神を知るようになったため、自分は必ずや神を証しし、神を切望するすべての人々に神のことを知らせるとともに、神の愛すべき素晴らしさと神の現実性を気付かせなければならないと感じるのである。人々の神への愛と同様に、彼らの証しは自発的である。それは真実であり、本物の意義と価値がある。これは受動的なものでも、虚しく無意味なものでもない。真に神を愛する者だけが最も価値ある意義深い人生を送ることができる理由、彼らだけが真に神を信じている理由は、彼らが神の光の中に生きることができ、神の働きと経営のために生きることができるということにある。闇の中に生きるのではなく、光の中に生き、無意味な生を生きるのではなく、神の祝福を受けた生を生きているためである。神を愛する者だけが神を証しでき、彼らだけが神の証人であり、彼らだけが神に祝福され、彼らだけが神の約束を受ける。神を愛する者は神の知己であり、神に愛され、神と共に幸福を享受できる。このような人々だけが永遠に生き続け、このような人々だけが永遠に神の配慮と加護の下に生きるのである。神は人々が愛するべき存在であり、万人に愛されるにふさわしい存在だが、すべての人々が神を愛せるわけではなく、すべての人々が神を証しして神と共に力をもつわけでもない。真に神を愛する者は、神を証しできるため、そしてすべての努力を神の働きに捧げることができるため、彼らに敢えて敵対しようとする者はおらず、彼らは天の下のあらゆる場所を歩くことができ、地において力を振るい、神

の民を一人残らず支配することができる。こうした人々は世界中から集まってくる。話す言葉は違い、肌の色も異なっているが、その存在は同じ意味をもっている。彼らには神を愛する心があり、みな同じ証しをし、同じ決意をもち、同じことを願っている。神を愛する者は世界中を自由に歩くことができ、神を証しする者は全宇宙を旅することができる。こうした人々が神に愛され、神の祝福を受け、永遠に神の光の中に生きるのである。

聖霊の働きとサタンの働き

人は霊に関する細かなことをどう理解するようになるのか。聖霊はどのように人間の中で働くのか。サタンはどのように人間の中で働くのか。悪霊はどのように人間の中で働くのか。その表われはどういったものか。何かがあなたに起こるとき、それは聖霊に由来するものなのか。あなたはそれに従うべきか、あるいは拒否すべきか。人々の実際の行ないにおいては、多くのことが人間の意志から生じるが、人々は決まってそれが聖霊に由来すると信じている。悪霊に由来する物事があっても、人々はやはりそれが聖霊から来たものだと考える。時に聖霊は人々を内側から導くが、人々はそういった導きがサタンに由来するものだと恐れ、実はその導きが聖霊の啓きであるにもかかわらず、あえて従おうとしない。よって、識別をしない限り、実際の経験においてそれを経験することはできない。そして識別しなければ、いのちを得ることはできない。聖霊はどのようにして働きを行なうのか。悪霊はどのようにして働きを行なうのか。人の意志に由来するものは何か。聖霊の導きと啓きから生まれるものは何か。聖霊が人の中で行なう働きのパターンを把握すれば、あなたは日々の生活の中で、そして実際の経験のさなかに知識を育み、識別することができるようになる。あなたは神を知るようになり、サタンを理解して識別できるようになり、服従したり追求したりする際に混乱せず、思考がはっきりとした、聖霊の働きに従う者となるだろう。

聖霊の働きは積極的な導きと肯定的な啓きの一種である。それは人々が受け身でいることを許さず、彼らに慰めをもたらし、信仰と決意を与え、彼らが神によって完全にされることを追求できるようにする。聖霊が働きを行なえば、人々は積極的に入ることができる。受け身でもなく、強制されることもなく、自分が主導権を握って行動するのである。聖霊が働きを行なうとき、人々は進んで従い、喜んで謙虚になる。内なる痛みや脆さがあっても、協力しようと決意し、喜んで苦しみ、従うことができる。そして人間の意志や人の考えによって汚されておらず、人間的な欲望や動機に汚されていないのは間違いない。人々が聖霊の働きを経験するとき、

彼らの内面は特に聖い。聖霊の働きを有する人たちは神への愛、兄弟姉妹への愛を生きており、神を喜ばせることを喜びとし、神の嫌うことを嫌う。聖霊の働きに触れた人は正常な人間性をもち、常に真理を追い求め、人間性を自分のものにしている。聖霊が人々の中で働くとき、彼らの状態はますますよくなり、その人間性はより正常になる。そしてこうした人たちによる協力の中には愚かなものもあるかもしれないが、彼らの動機は正しいものであり、彼らの入りは肯定的で、邪魔しようと試みたりせず、彼らの中に悪意は一切存在しない。聖霊の働きは正常かつ現実的であり、聖霊は人の通常生活の規則にしたがってその人の中で働きを行ない、正常な人々の実際の追求に応じて彼らを啓き、そして導く。聖霊は人の中で働きを行なうとき、正常な人々の必要に応じて彼らを導き、そして啓く。聖霊は人々の必要に応じて彼らに糧を施し、彼らに欠けているものに応じて、また彼らの欠点に応じて肯定的に導いて啓く。聖霊の働きは人々を現実の生活において啓き、導くことである。実生活の中で神の言葉を経験して初めて、人は聖霊の働きを見ることができる。日常生活において前向きな状態であり、正常な霊的生活を送っていれば、その人には聖霊の働きがある。そうした状態の中では、神の言葉を飲み食いすると信仰を得、祈ると鼓舞され、何かに突き当たっても受け身にならず、何かが起きるとその中から、神が彼らに学ぶよう求めている教訓を理解できる。彼らは受け身でもなければ弱ってもおらず、たとえ現実の困難を抱えていても、神のすべての采配に自ら従おうとする。

聖霊の働きによって成し遂げられる効果とは何か。あなたは愚かかもしれないし、識別力がないかもしれないが、聖霊が働きを行なえば、あなたの中に信仰が生まれ、どれほど神を愛しても愛しきれないといつも感じるようになる。前途にどれほど大きな困難があろうと、あなたは進んで協力するようになる。自分に何かが起こり、それが神に由来することなのか、それともサタンに由来することなのかはつきりわからないことがあっても、あなたは待つことができ、受け身にも怠惰にもならない。これが聖霊の正常な働きである。聖霊があなたの中で働きを行なう際、あなたはそれでも現実の困難にぶつかり、時には涙し、時には乗り越えられない問題が生じることもあるが、これらはすべて聖霊による普通の働きの一段階に過ぎない。たとえあなたがそうした困難を乗り越えられなくても、またその際に弱くなって不満で一杯だったとしても、後になれば絶対的な信仰をもって神を愛することができた。あなたが受け身だとしても、そのせいで正常に経験できないということはあり得ず、他の人が何と言おうと、あるいはどう攻撃しようとも、あなたは神を愛することができる。祈りの中では常に、自分はかつて神に借りがあったと感じ、そうしたことに再び出会うたび、神を満足させて肉を捨てようと決意する。この力は、聖霊

の働きがあなたの中にあることを示している。それが聖霊の働きの正常な状態なのである。

サタンに由来する働きとは何か。サタンに由来する働きの中で、人々の内なるビジョンは漠然としており、彼らは正常な人間性をもたず、彼らの行動の背後にある動機は間違っている。そして神を愛したいと願いはしても、心の中で絶えず咎められ、そうした咎めや思いが自分の中で常に干渉し、いのちの成長を制約するとともに、正常な状態で神の前に出られないようにする。つまり、人々の中にサタンの働きが存在するやいなや、その人の心は神の前で安らげないのである。そのような人は自分でもどうしたら良いかわからず、人々が集まっているのを見ると逃げたくなり、他の人が祈るときに目を閉じることができない。悪霊の働きは人と神との正常な関係を壊し、人々がそれまでもっていたビジョンや、以前のいのちの入りへの道を混乱させる。心の中で神に近づくことが決してできず、妨害を引き起こし、足かせとなるようなことがいつも起こる。心は安らぎを見つけられず、神を愛する力が残らずなくなり、霊が沈んでいく。これらがサタンの働きの表われである。サタンの働きの表われは次のようなことである。堅く立って証しをすることができず、それがあなたを神の前で落ち度がある者、神への忠実さをまったくもたない者とさせる。サタンが干渉するとき、あなたは自分の中にある神への愛と忠実さを失い、神との正常な関係を奪われ、真理や自分を改善することを追い求めず、後戻りして受け身になり、自分を甘やかし、罪が広がるままにし、罪を憎まなくなる。さらに、サタンからの干渉はあなたをふしだらにし、神があなたの中で触れたものは消えてしまう。そしてあなたは、神への不満を漏らして神に反抗し、神を疑うようになる。さらに、あなたが神を捨てる危険すらある。そのすべてがサタンに由来するのである。

日常生活で自分に何かが起きる際、それが聖霊の働きに由来するものなのか、サタンの働きに由来するものなのか、どのように識別すべきだろうか。状態が正常であれば、その人の霊的生活と肉における生活は正常であり、理知も正常で秩序がある。このような状態にあるとき、彼らが経験し、自分の中で知るようになる物事は、一般的には、聖霊に触れられたことに由来するものだと言える（神の言葉を飲み食いする際に洞察力があったり、多少の単純な認識を有していたりすること、あるいは何らかの物事において忠実であること、そして神を愛する力があることは、いずれも聖霊に由来するものである）。聖霊が人の中で行なう働きは特に正常である。人はそれを感じられないし、実際には聖霊の働きであるにもかかわらず、人自身から生じたもののように思われる。日常生活において、聖霊はすべての人の中で大小いずれの働きも行なうが、異なっているのはその働きの程度だけである。中には優れた素質をもつ人がおり、そのような人は物事を素早く理解し、聖霊による啓

きは彼らの中で特に大きい。その一方で素質に乏しい人もおり、物事を理解するのにより時間がかかるものの、聖霊は彼らの内側にも触れ、彼らもまた神への忠実を遂げることができる。聖霊は神を追い求めるすべての人の中で働きを行なうのである。日常生活において人々が神に反対したり、反抗したりすることがなく、神の経営に反することを行なわず、神の働きに干渉しなければ、神の霊が一人ひとりの中で大なり小なり働きを行なう。神の霊は彼らに触れ、彼らを啓き、信仰と力を与え、彼らを感じ動させて積極的に入るようにし、怠惰になったり肉の楽しみをむさぼったりしないようにする。そして彼らが進んで真理を実践し、神の言葉を切望するようにさせる。そのすべてが聖霊に由来する働きである。

状態が正常でないとき、その人は聖霊に見捨てられ、心の中に不満を抱きがちで、動機は間違っており、怠惰で、肉の欲にふけり、心は真理に敵対する。そのすべてがサタンに由来している。状態が正常でなく、内面が闇で覆われ、正常な理知を失い、聖霊に見捨てられ、自分の中に神を感じられないとき、それはその人の中でサタンが働きを行なっているときである。一般的に言えば、内面に絶えず力があり、常に神を愛するなら、何かが起きたとき、その出来事は聖霊に由来しており、またその人が誰に会おうと、その出会いは神の采配の結果である。つまり、あなたが正常な状態にあるとき、また聖霊の偉大な働きの中にいるとき、サタンがあなたを揺るがすことは不可能なのである。それを基に、すべてのものは聖霊に由来しており、たとえ誤った考えをもっている、あなたはそれを捨てることができ、それに従うことはないと言える。これはすべて聖霊の働きに由来している。どのような状況においてサタンは干渉するのか。あなたの状態が正常でなく、神に触れられておらず、自分に神の働きがなく、内面が乾いて荒れ果て、神に祈っても何も掴めず、神の言葉を飲み食いしても啓きや照らしを得られないとき、サタンがあなたの中で働きを行なうのは簡単である。言い換えれば、あなたが聖霊に見捨てられて神を感じられないとき、サタンの試みに由来する物事が数多く起きるのである。聖霊が働きを行なう間、サタンもずっと働いている。聖霊が人の内側に触れると同時に、サタンは人に干渉する。しかし、聖霊の働きが主導権を握り、正常な状態の人々は勝利することができる。これはサタンの働きに対する聖霊の働きの勝利である。聖霊が働きを行なう間、人々の中には依然として墮落した性質が存在する。しかし聖霊による働きのさなか、人々が自分の反抗心、動機、不純を見つけて認識するのは簡単である。そのとき初めて、人々は後悔を感じてますます悔い改めようと思う。このようにして、彼らの反抗的で墮落した性質は、神の働きの中で徐々に一掃される。聖霊の働きは特に普通のものであり、聖霊が人々の中で働きを行なっているときも、彼らは依然として問題を抱え、涙を流し、苦しみ、弱り、はっきり理

解できないことが数多くあるのだが、それでもこの状態にあるとき、彼らは自分が後退するのを押しとどめ、神を愛することができる。そして涙を流したり、苦悩に苛まれたりしてもなお、神を賛美することができる。聖霊の働きは特に普通であり、超自然的なことは一切ない。大半の人は、聖霊が働きを始めるやいなや、人の状態に変化が生じ、その人の本質的なものが取り除かれると信じている。そうした考え方は誤りである。聖霊が人の中で働きを行なうとき、人に関する受動的な物事が依然として存在し、その人の霊的背丈は変わっていないのだが、聖霊の照らしと啓きを得るので、その人はより前向きになり、内なる状態は正常で、その人は急速に変化する。人は現実の経験の中で、おもに聖霊かサタンいずれかの働きを経験する。そしてこの二つの状態を把握できず、その違いを識別できないなら、現実の経験へと入ることなど問題外であり、性質の変化が不可能なのは言うまでもない。よって、神の働きを経験する上で鍵となるのは、そうした物事を見抜けるようになることであり、そのようにして、それを実際に経験することが容易になる。

聖霊の働きは積極的な進歩だが、一方でサタンの働きは後退、消極、反逆、神への反抗、神に対する信仰の喪失、そして賛美歌を歌うことさえ望まず、本分を尽くせなくなるほど弱ることである。聖霊の啓きから生じるものはどれも極めて自然であり、あなたに強制されるものではない。それに従えば安息を得るし、従わなければ後に非難される。聖霊の啓きがあれば、あなたが行なう一切のことは干渉や拘束を受けず、あなたは自由にされ、行動における実践の道があり、何の制約も受けることなく、神の旨にそって行動できるようになる。サタンの働きは多くの事柄においてあなたに干渉し、あなたが祈りたくないようにさせ、神の言葉を飲み食いきないほど怠惰にさせるとともに、教会生活を送る気をなくさせ、あなたを霊的生活から引き離す。聖霊の働きはあなたの日常生活に干渉せず、正常な霊的生活にも干渉しない。多くの事柄について、あなたはそれが生じたまさにその瞬間には識別することができないものの、数日後には心がより明るく、頭脳がより鮮明になる。霊的な物事に関する感覚を多少もつようになり、ある考えが神に由来するものか、あるいはサタンに由来するものかを徐々に識別する。物事の中には、あなたを明らかに神に反抗させ、背かせ、神の言葉を実践させないようにするものもあるが、そうしたことはどれもサタンに由来する。明白でなく、その瞬間にはそれが何であるかわからない物事もあるが、後になれば、それらの表われを見て識別力を働かせることができる。どれがサタンに由来するもので、どれが聖霊によって導かれているものかをはっきり識別できるようになったなら、あなたは自分の経験の中で簡単に惑わされないようになる。自分の状態が良くないときに、自分を受け身の状態から引き出すような思いをもつことがある。そのことは、あなたの状態が好ましくないと

きでさえ、あなたの思いの一部はやはり聖霊に由来することを示している。あなたが受け身になっているとき、すべての思いはサタンから来ているというのは当てはまらない。もしもそれが真実なら、いつあなたは積極的な状態に移れるのか。一定期間ずっと消極的でいると、聖霊は完全にされる機会をあなたに与え、あなたに触れ、消極的な状態からあなたを連れ出すのである。

聖霊の働きとは何か、サタンの働きとは何かを知ること、あなたはこれらを、何かを経験している際の自分自身の状態と、また自分の経験と比べることができる。そのようにして、あなたの経験の中で、原則に関する真理がより多く生じる。原則に関するこれらの真理を理解したなら、あなたは自分の実際の状態を支配し、人々や出来事を識別することができ、聖霊の働きを獲得するためにそれほど大きな努力をしなくてもよくなる。もちろんそれは、あなたの動機が正しいかどうか、あなたに求めて実践する気があるかどうか次第である。このような言葉、すなわち原則に関わる言葉が、あなたの経験の中になければならない。それがなければ、あなたの経験はサタンの干渉と愚かな認識で満ちている。聖霊がどのように働きを行なうのか理解していなければ、どのように入るべきかも理解できないし、サタンがどのように働きを行なうのか理解していなければ、自分の一步一步にどう注意すれば良いのかも理解できない。聖霊はどのように働きを行なうのか、サタンはどのように働きを行なうのかについて、人々はその両方を理解すべきである。いずれも人々の経験において不可欠な部分なのだから。

真理を実践しない人への警告

兄弟姉妹のうち消極性をいつも発散している人は、サタンの僕であり、教会を乱す。そのような人は、いつか追放され、淘汰されなければならない。神への信仰において、人間に神を敬い畏れる心と神に従順な心がなければ、神のために働くことができないだけでなく、反対に神の働きを阻害し、神に反抗する者となる。神を信じながら、神に従うことも神を敬い畏れることもせず、代わりに神に反抗することは、信者にとって最大の恥辱である。信者の言動が常に未信者と同じく粗略で節操がなければ、そのような信者は未信者にも増して邪悪であり、典型的な悪魔である。教会内で毒々しい邪悪な言葉を放ち、兄弟姉妹の間で噂を広め、不和を助長し、派閥を組む者たちは、教会から追放されるべきであった。しかし、現在は神の働きの別の時代であるため、そのような人は制限を受ける。なぜなら、彼らは確実に淘汰されるからである。サタンにより墮落させられた者はみな性質が墮落している。性質が墮落しているだけの人がいる一方で、そうではない人もいる。そのよう

な人は墮落した性質をもっているだけでなく、本性もまた悪意を極めているのである。彼らの言動が墮落したサタンの性質を示すのみならず、彼ら自身が真の悪魔サタンである。彼らのふるまいは神の働きを妨害し、混乱させ、兄弟姉妹のいのちへの入りを阻害し、正常な教会生活を破壊する。彼らのような羊の皮を被った狼は、遅かれ早かれ一掃されなければならない。こうしたサタンの僕に対しては、手厳しい態度、拒絶の態度で臨む必要がある。そのようにすることだけが神に味方することであり、そのようにできない人は、サタンとともに泥の中で転げ回っているのである。神を真に信じる人の心には常に神がいて、内には神を敬い畏れる心、神を愛する心が常にある。神を信じる人は注意深く慎重に物事を行い、すべての行動が神の要求に従い、神の心を満たせるものでなくてはならない。強情であってはならず、自分が望むままに行動してはならない。そのようなことは聖徒としての作法に不適である。人間は神の旗印を誇示してあちらこちらを暴れ回ったり、いたるところで虚勢を張ったり、詐欺を働いたりしてはならない。これは最も反逆的な行為である。家族には決まりがあり、国家には法律があるのだから、神の家ではなおさらのことではないか。その基準はさらに厳格ではないのか。さらなる行政命令があるのではないか。人間には好きなことを行う自由があるものの、神の行政命令を思いのままに変えることはできない。神は人間による背きを許さず、人間を死に至らしめる神である。人はこのことをまだ知らないのか。

どの教会にも、教会に迷惑をかけ、神の働きの邪魔をする人がいる。こうした人はみな変装して神の家に潜入したサタンである。彼らは演技に優れている。目的を果たすために、畏敬の念をもってわたしの前に来て、うやうやしく頭を下げ、みすばらしい犬のように振る舞い、自分の「すべて」を捧げる。しかし、兄弟姉妹の前では醜悪な素性を露わにする。真理を実践している人を見ると攻撃して排除し、自分たちよりも手ごわい人にはお世辞を言って機嫌を取り、教会では大胆に振る舞う。この種の「土地の顔役」や「愛玩犬」は、殆どの教会にいると言える。彼ら是一緒にこそこそと歩き回り、目配せや秘密の合図を送り合う。彼らの中に真理を実践する者はいない。毒が一番多く持つ者が「悪魔の頭」であり、最も威信のある者が他を従え、一味の旗を高く掲げる。彼らは教会内を荒らし回り、消極性を広め、死をもたらし、好き放題行ない、好き勝手にものを言う。誰にも彼らを止める勇氣はない。彼らはサタンの性質に満ちあふれている。彼らが妨害し始めるとすぐに、教会に死の空気が入る。教会内で真理を実践する人は見捨てられ、すべてを捧げられなくなるが、教会を妨害し死を広める者は教会内で放縦に行動する。さらに、殆どの人が彼らに従う。こうした教会は明らかにサタンの支配下にあり、そこでは悪魔が王である。教会の会衆が立ち上がって悪魔の頭を追放しなければ、会衆もまた

遅かれ早かれ破滅する。今後は、こうした教会への対策を実施する必要がある。多少の真理を実践できる者がそうしようとしていないならば、その教会は追放される。ある教会に真理を実践することをいとわない人や神に証しを立てられる人がいないなら、その教会は完全に切り離されるべきで、他の教会との関係は断絶されなければならない。これは死を葬ると呼ばれ、これがサタンを追い払うということである。ある教会に土地の顔役が数名いて、彼らが識見にまったく欠けた「小ばえ」に従えており、その教会の会衆が真理を理解してなお、それら顔役の呪縛と操作を拒否できないならば、そうした愚か者はみな最終的に淘汰される。小ばえは何ら劣悪な事をしていないかもしれないが、ことさら狡猾でずる賢く捉え難いので、みな淘汰されるのである。ひとり残らず消し去られる。サタンに属す者はサタンへと戻されるが、神に属す人は確実に真理を探し求める。これは人の本性によって決められることである。サタンに従う人はみな滅べ。彼らに憐れみがかけられることはない。真理を探し求める人には施しを得させ、心ゆくまで神の言葉を堪能させよ。神は義であり、誰もひいきすることなどない。あなたが悪魔であれば、真理を実践できない。真理を探し求める人であれば、サタンの虜にならないことは確実である。それについて疑いの余地はない。

進歩のために努力しない人は、他の人も自分同様に消極的で怠惰であることを常に望む。真理を実践しない人は、真理を実践する人に嫉妬しており、頭が混乱している人や分別がない人をいつも惑わそうとする。彼らが放つものはあなたを墮落させ、引きずり落とし、異常な状態を引き起こし、闇で満たすことができる。彼らはあなたを神から遠ざけ、あなたに肉を愛させ、自らの欲望を満たさせる。真理を愛さず、常にうわべだけで神に接する人は己を知らず、彼らの性質に他の人は誘惑されて、罪を犯し神に反抗する。彼らは真理を実践せず、また他人にも真理を実践させない。彼らは罪を愛し、自分自身を忌み嫌うことはない。己を知らず、また他人が己を知ることや真理を求めることを阻む。彼らが惑わす人は光が見えない。闇に落ちて己を知らず、真理を明瞭に理解しておらず、神から遠ざかってゆく。彼らは真理を実践せず、また他人が真理を実践することを阻み、愚かな人を自らの前に来させる。神を信じるというよりも、彼らは自らの祖先を信じているか、信じているのは自らの心の中の偶像であると言った方が良い。神に付き従っていると言う彼らにとっては、目を開き、自分が誰を信じているのかをじっくり見るのが最善であろう。あなたが信じているのは本当に神なのか、それともサタンなのか。自分が信じているのが神ではなく、自分の偶像であることを知っているならば、自分は信者であると言わない方が良い。自分が誰を信じているのか本当に知らないならば、やはり自分は信者であると言わないのが最善であろう。信者であると言うのは冒涇であ

る。誰もあなたに神を信じることを無理強いしていない。わたしを信じていると言うな。そのような言葉は聞き飽きており、二度と聞きたくない。なぜなら、あなたがたが信じているのは心の中の偶像であり、あなたがたのそばにいる土地の顔役だからである。真理を聞いたら首を横に振り、死の言葉を聞いたら笑みを浮かべる者はみなサタンの子孫であり、みな排除される。教会には識見のない者が多数いる。何か惑わすようなことがあると、彼らは不意にサタンに味方をする。彼らは自分がサタンの僕と呼ばれると、憤慨すらする。彼らには識見がないと言う人もいるが、彼らは真理のない側にいつも味方し、重要な時期に真理の側に立ったことや、真理のために立ち上がって議論をしたことは一度もない。彼らには本当に識見がないのか。なぜ彼らは不意にサタンの味方をするのか。なぜ彼らは真理のために公平で合理的な言葉を一言たりとも述べないのか。この状況は本当に彼らの一時的な混乱から生じたのか。人の識見が少なければ少ないほど、真理の側に立つ能力も低くなる。このことは何を示しているのか。それは識見のない人は邪悪を愛することを示しているのではないのか。彼らはサタンの忠実な子孫であることを示しているのではないのか。なぜ彼らは常にサタンの味方をするのができ、サタンの言語を話すことができるのか。彼らのあらゆる言動と表情はすべて、彼らが決して真理を愛する者ではなく、むしろ真理を忌み嫌う者であることを十分に証明している。彼らがサタンに味方できることは、サタンのために戦って生涯を過ごすこれらの小悪魔をサタンが真に愛していることを十分に示している。こうした事実はずべて十分に明白ではないであろうか。あなたが本当に真理を愛する人ならば、なぜ真理を実践する人を軽視し、真理を実践しない人に少し見られただけで、なぜ彼らにすぐさまついて行くのか。これはどのような問題なのか。わたしは、あなたに識見があるかどうかは気にしない。あなたがどれほど甚大な代償を払ったかも気にしない。あなたの勢力がどれほど強いのか、あなたが土地の顔役なのか、あるいは旗を掲げる主導者なのかも気にしない。あなたの勢力が強いのであれば、それはサタンの支援があつてのことであり、あなたの威信が高ければ、それは単にあなたの周囲に真理を実践しない人が多すぎるということである。あなたがまだ追放されていないのであれば、それは今が追放の働きの時ではなく、むしろ排除の働きの時だからである。今あなたを急いで追放する必要はない。あなたが排除された後にあなたを懲罰する日を、わたしはただ待っているのである。真理を実践しない人は誰であれ排除されるのである。

神を真に信じる人は、進んで神の言葉を実践し、進んで真理を実践する人である。本当に神への証しを立てられる人はまた、進んで神の言葉を実践し、本当に真理の味方となれる人でもある。はかりごとや不正を行う人はみな真理を欠いており、神に恥辱をもたらす。教会内で紛争を起こす人はサタンの僕であり、サタンの

化身である。このような人はあまりにも悪意に満ちている。識見がなく、真理に味方できない人はみな邪惡な意図を抱き、真理を汚す。さらに、彼らは典型的なサタンの代表者である。彼らに贖いは及ばず、当然ながら淘汰される。神の家は、真理を實踐しない人や、意図的に教会を崩壊させる人が残ることを許さない。しかし、今は追放の働きを行う時ではない。こうした人たちは最終的には暴かれ、淘汰されるのみである。彼らにこれ以上無意味な働きが行われることはない。サタンに属する者は真理に味方できないが、真理を探し求める人にはそれができる。真理を實踐しない人は、真理の道を聞く価値も、真理の証しに立つ価値もない。真理は彼らが聞くものでは決してなく、むしろ真理を實踐する者に向けられている。各人の結末が明かされるのに先立ち、教会を混乱させ、神の働きを妨害する者がまず脇によけられ、後に取り扱われる。ひとたび働きが完了すると、彼らはそれぞれ暴かれてから淘汰される。真理が施されている間、彼らはしばらく無視される。人間にすべての真理が明かされる時、彼らは必ずや淘汰される。それはあらゆる人が種類により分別される時である。識見のない者は自身の卑劣なたくらみのせいで、邪惡な者の手により滅ぼされ、惑わされて二度と戻ることがない。彼らにそのような扱いが相応しいのは、彼らが真理を愛さず、真理の味方になることができず、邪惡な者に付き従い、邪惡な者の味方となり、結託して神に反抗するからである。彼らは、邪惡な者が放つのは邪惡さであると完全に熟知しているが、心を頑なにして真理に背を向け、邪惡な者に付き従う。真理を實踐せずに破壊的で忌まわしいことをするこのような人はみな邪惡な行為を行っているのではないか。彼らの中には自らを「王」のように装う者と、それに追隨する者がいるが、両者の神に反逆する性質は同じではないのか。神は自分たちを救わないという彼らの主張をどのように弁明できるというのか。神は義でないという彼らの主張をどのように弁明できるというのか。彼らを滅ぼすのは彼ら自身の邪惡さではないのか。彼らを地獄へ引きずり落とすのは、彼ら自身の反逆ではないのか。真理を實踐する人は、最後に真理のために救われ完全にされる。真理を實踐しない人は、最後に真理のために滅びを自分自身にもたらす。これらが、真理を實踐する人としらない人を待ち受ける最後である。真理を實踐するつもりがない人は、それ以上罪を重ねないようにできるだけ早く教会を去るよう勧告する。時が来れば、後悔しても手遅れである。特に徒党を組む者や分裂を招く者、教会内にいる地元の顔役は、直ちに教会を去らなければならない。邪惡な狼のような本性をもつこれらの者は変わることができない。兄弟姉妹の正常な生活を二度と妨害せず、そうすることで神の懲罰を避けるため、できるだけ早く教会を去った方がよい。こうした者と親しくしてきた人は、この機会を活用して自省するのがよいであろう。あなたがたは、邪惡な者とともに教会から去るであろうか。そ

れとも教会に残り、従順に従うであろうか。このことを十分検討する必要がある。あなたがたにもう一度選択の機会を与えよう。あなたがたの答えを待っている。

あなたは生命を吹き込まれた人か

自分の墮落した性質を捨て去り、正常な人間性を生きることが成し遂げて初めて、あなたは完全にされる。たとえ預言を語ったり奥義について話したりすることができなくても、人間の姿を生き、表しているのである。神は人を創ったが、その後、人はサタンによって墮落させられ、「死人」になってしまった。ゆえに、あなたは変わった後、もはやそうした「死人」のようではなくなる。人々の霊を蘇らせ、人々を再生させるのは神の言葉であり、霊が再生したとき、人には生命が吹き込まれる。「死人」について語るとき、わたしは霊を持たない死体のこと、内なる霊が死んでしまった人々のことを指している。人の霊が蘇ると、その人には生命が吹き込まれる。以前語られた聖者とは、生命を吹き込まれた者、またサタンの支配下にありながらサタンを打ち負かした者を指す。中国の選民は、赤い大きな竜による悲惨かつ非人道的な迫害や策略に耐えてきたため、精神はひどく荒廃させられ、生きる勇気を少しも持たなくなった。したがって、彼らの霊の目覚めは、自身の実質から始まらなければならない。つまり自分自身の実質の中で、少しずつ霊を目覚めさせなければならないのである。ある日、生命を吹き込まれたとき、もはや障害物は何もなくなり、すべては順調に進む。今のところ、これは達成不可能なままである。ほとんどの人は死の空気を数多くもたらすような生き方をしており、死の気配に包まれていて、欠けているものがかなり多くある。中には、言葉が死を運び、行動も死を運び、死しかもたらさないような生き方をしている人もいる。もし今日、人々が神の証しを公に行っても、この任務は失敗する。なぜなら、いまだ完全には生命を吹き込まれておらず、あなたがたのあいだにあまりにも多くの死人がいるからである。今日、なぜ神はしるしや不思議を示さないのか、そうすれば異邦人たちのあいだに神の働きをすばやく広めることができるのに、と言う人々がいる。死人は神の証しをすることができない。それは生きている者だけが行えることだが、今日ほとんどの人は「死人」であり、あまりにも多くの人が死の衣をまといながら、サタンの影響下で生きており、勝利を得ることができずにいる。そうであれば、そのような人が神の証しをどうしてできるだろうか。福音の働きを広めることなどできるだろうか。

暗黒の影響下で生きる人はみな、死の中で生きる者、サタンにとりつかれた者である。神に救われなければ、そして神の裁きと刑罰を受けなければ、人々は死の権

勢から逃れられず、生きている人になれない。こうした「死人」は神の証しをすることも、神に用いられることもできず、まして神の国に入ることなどできない。神は死人ではなく、生きている人の証しを望んでおり、死人ではなく生きている人が神のために働くことを求める。「死人」とは神に逆らい、神に反抗する者、霊が麻痺し、神の言葉を理解しない者である。また、真理を実践せず、神への忠誠心など微塵もない者、サタンの支配下で生き、サタンに利用されている者でもある。死人は真理に逆らい、神に反抗し、卑しく、卑劣で、悪意があり、野卑で、悪賢く、陰険であることで自分自身を表す。そのような人々はたとえ神の言葉を飲み食いしても、神の言葉を生きることにはできない。生きてはいるが、歩いて呼吸する屍に過ぎないのである。死人は神を満足させることがまったくできないし、ましてや神に対して完全に従順でいることなどできない。神をだまし、冒瀆し、裏切ることしかできず、彼らの生き方がもたらすものはどれもサタンの本性を明らかにする。生きている存在になり、神の証しをし、神に認められることを望むならば、神の救いを受け入れ、神の裁きと刑罰に喜んで服従し、神の刈り込みと、神によって取り扱われることを喜んで受け入れなければならない。そうして初めて神が要求する真理のすべてを実践することができ、そうして初めて神の救いを得て、本当に生きた存在になることができる。生きている人は神によって救われ、神による裁きと刑罰を受けしており、進んで神に身を捧げ、神のために喜んで生命を投げ出し、一生を神に捧げる。生きている人が神の証しをして初めて、サタンを辱めることができる。生きている人だけが神の福音の働きを広めることができ、生きている人だけが神の心にかない、生きている人だけが本当の人である。神によって創られた人は本来生きていたが、サタンに墮落させられたために死のただ中で生き、サタンの影響下で生きるようになった。ゆえに、人々はこのようにして霊のない死人、神に逆らう敵、サタンの道具、サタンの捕囚になってしまった。神が創った生きている人はすべて死人となり、そのため神は証しを失うとともに、自身が創り、自身の息を吹き込んだ唯一の存在、すなわち人類を失ったのである。神が自身の証しを取り戻し、神の手で創られたもののサタンに囚われた人々を奪い返そうとするならば、彼らを蘇らせて生きている者とし、また彼らを奪い返して神の光の中で生きるようにしなければならない。死人とは霊を持たず、極端に無感覚で、神に逆らう人々のことである。彼らは何より、神を知らない人々である。このような人は神に従う意思など微塵も持たず、神に反抗して逆らうだけであり、忠誠心はまったくない。生きている人は霊が再生しており、神に従うことを知っており、神に忠実な人々である。彼らは真理と証しを備えているが、このような人だけが神の家で神に喜ばれる。生命を吹き込まれることのできる人々、神の救いを見ることのできる人々、神に忠実でいられる

人々、および進んで神を探し求める人々を神は救う。また、神の受肉と出現を信じる人々を神は救う。生命を吹き込まれることのできる人もいれば、そうでない人もいるが、それはその人の本性が救われ得るか否かによる。神の言葉を数多く聞いているにもかかわらず、神の旨を理解せず、いまだ真理を実践できない人が大勢いる。このような人はいかなる真理も生きられず、神の働きを故意に妨げる。彼らは神のためにいかなる働きも行えず、神に何も捧げられず、そのうえ教会の資金を密かに使い込んだり、ただで神の家で食べたりする。これらの人は死人であり、救われない。神は自身の働きのただ中にいるすべての人を救うが、一部の人は神の救いを得られない。神の救いを得られるのはほんの少数だけである。なぜなら、ほとんどの人はあまりに深く墮落して死人となり、救いようがないからである。そのような人はサタンによってすっかり利用され、本性があまりに悪意で満ちているからである。また、先の少数の人たちも完全に神に従うことができない。彼らは最初から完全に神に忠実だった人、あるいは最初から神に最大限の愛を抱いていた人ではない。むしろ、神の征服の働きゆえに神に従うようになったのであり、神の究極の愛ゆえに神を見ているのであり、神の義なる性質ゆえに性質が変化したのであって、実際的で正常な神の働きゆえに神を知るようになるのである。神のこの働きがなければ、どれほど善良であろうと、これらの人たちはいまだサタンに属しており、いまだ死に属しており、いまだ死んでいることだろう。今日、これらの人たちが神の救いを得られるのは、進んで神に協力しようとしているからに他ならない。

生きている人は、神に忠実であるために神のものとされ、神の約束のただ中で生きる。死人は、神に逆らうがゆえに神から嫌われ、拒絶され、神の懲罰と呪いのただ中で暮らす。これが神の義なる性質であり、いかなる人もそれを変えることはできない。人は自ら探し求めるがゆえに、神の承認を得て光の中で生きる。人は狡猾な企みのゆえに、神に呪われ、懲罰へと落ちてゆく。人は自身の悪行のゆえに、神に懲罰される。そして神に対する切望と忠実のゆえに、神の祝福を受ける。神は義である。つまり、神は生きている人を祝福し、死人を呪うので、死人は永遠に死の中にとどまり、神の光の中で生きることは決してない。神は生きている人を神の国へと、そして神の祝福へと導き、永遠に神とられるようにする。しかし死人について言えば、神は彼らを撃ち、永遠の死へと陥れる。死人は神による滅ぼしの対象であり、永遠にサタンに属する。神は誰も不当に扱わない。真に神を探し求める人はみな、必ずや神の家に留まり、そして神に逆らい、神と相容れない人は必ずや神の懲罰を受けながら生きる。おそらくあなたは肉における神の働きについて確信がないだろうが、いつの日か、神の肉が人の終末を直接的に定めるのではなく、その代わりに神の霊が人の終着点を定め、そのとき人々は、神の肉と霊が一つであるこ

と、神の肉が間違いを犯すことはあり得ず、神の霊が間違いを犯すことなどさらにあり得ないことを知る。最終的に、神は一人の余分も一人の欠けもなく、生命を吹き込まれた者たちを必ずや神の国へと導く。そして生命を吹き込まれていない死人について言えば、サタンの巢窟へと放り込まれる。

性質が変わらないままなのは、 神に敵対していることである

数千年にわたる墮落の後、人は麻痺し、物分かりが悪い。神に反対する悪魔になり、人による神への反抗は歴史書に記録されるほどになり、本人でさえその反抗的な振る舞いを完全に説明することができなくなっている。人はサタンにより深く墮落させられ、惑わされてしまったので、どちらに向いたらよいかわからなくなっているからである。今日でさえ、人はいまだ神を裏切っている。神を見ると裏切り、神が見えないときもやはり神を裏切る。神の呪いや怒りを目の当たりにしても、それでも神を裏切る者さえいる。そこでわたしは、人の理知はその本来の機能を失い、人の良心も本来の機能を失ったと言う。わたしが目にする人は、人間の装いをした獣、毒蛇であり、わたしの目の前でどんなに哀れっぽく見せようとしても、わたしはそのような人を決して憐れまない。人は白と黒の違い、真理と真理でないものの違いを把握していないからである。人の理知は大いに麻痺しているにもかかわらず、依然として祝福を得ようと思い、人間性はひどく下劣であるにもかかわらず、それでも王として統治したいと願う。そのような理知の持ち主がいったい誰の王になれるというのか。そのような人間性の者がどうして玉座に座ることができようか。人は実に恥を知らない。身の程知らずな卑劣漢である。祝福を得たいと願うあなたがたに対し、わたしはまず鏡を見つけて、そこに映る自分自身の醜い姿を見るよう勧める。あなたは王になるために必要なものを持っているのか。あなたは祝福を得られる者の顔をしているのか。性質にわずかな変化もなく、真理を一切実践していないのに、あなたはそれでも素晴らしい明日を願っている。自分自身を欺いているのだ。ひどく汚れた地に生まれたことで、人は社会によってひどく汚染され、封建的倫理の影響を受け、「高等教育機関」で教えを受けてきた。時代遅れの考え方、墮落した倫理観、さもない人生観、卑劣な人生哲学、まったく価値のない生存、下劣な生活様式と風俗――これらはすべて人の心をひどく侵害し、その良心を深刻にむしばみ、攻撃してきた。その結果、人はますます神から離れ、ますます神に逆らうようになった。人の性質は日ごとに悪質になり、神のためなら何でも進んで投げ出す者、進んで神に従う者、さらには神の出現を進んで探し求める者は

一人としていない。それどころか、サタンの支配下で快楽を追求するばかりで、泥の地で肉体の墮落にふけっている。真理を耳にしたときでさえ、暗闇の中で生きる人々はそれを実行に移そうとは考えず、たとえ神の出現を見たとしても、神を探し求める気持ちにはならない。かくも墮落した人類に、どうして救いの可能性があり得ようか。かくも退廃した人類が、どうして光の中で生きられようか。

人の性質を変えることは、その人の実質を知ることから始まり、考え方、本性、精神状態の変化を通して、つまり根本的な変化を通して行われる。このような形でのみ、人の性質における本当の変化が成し遂げられる。人の墮落した性質は、サタンによって毒され、踏みにじられていることと、サタンが人の考え方、倫理観、見識、理知に与えたひどい被害を根源としている。まさに人の根本的な事柄がサタンによって墮落させられ、神がもともと創ったものとは完全に違ってしまったため、人は神に逆らい、真理を理解しないのである。したがって、人の性質を変えるには、まず人の考え方、見識、理知を変え、それによって神に関する認識と真理に関する認識を変えることから始めるべきである。あらゆる土地の中でもっともひどく墮落した場所に生まれた人々は、神とは何か、あるいは神を信じることは何かについてさらに無知である。墮落していればいるほど、人々は神の存在を知らず、理知や見識が乏しくなる。人が神に逆らい、反抗する根源はサタンによる墮落である。サタンによる墮落のため、人の良心は麻痺してしまい、不道徳になり、考え方が劣化し、反動的な精神状態を持ってしまった。サタンによって墮落させられる以前、人は当然ながら神に従い、神の言葉を聞いてそれらに従っていた。人は生来、健全な理知と良心を持っており、人間性も正常だった。サタンによって墮落させられた後、人が本来持っていた理知、良心、人間性は鈍くなり、サタンによって損なわれ、したがって人は神に対する従順さと愛を失った。人の理知は異常になり、性質は動物のそれと同じになり、神に対する反抗はますます頻繁になり、深刻になっている。しかし、人はいまだそれに気づかず、それを認識せず、無闇に逆らい、反抗するばかりである。人の性質は、その人の理知、見識、良心の表出において明らかになり、人の理知と見識は不健全で、良心は極めて鈍くなっている。人の性質は神に対して反抗的である。人の理知と見識に変化がなければ、その性質を変えることも、神の旨にかなうことも不可能である。理知が不健全だと、その人は神に仕えることができず、神に用いられるのにふさわしくない。「正常な理知」とは、神に従い、忠実であること、神を切望し、神に対して絶対で、神に対して良心を持っていることを意味する。また、神への心と意思においてゆるぎなく、わざと神に逆らうようなことはしないという意味である。異常な理知を持つというのはこれと違う。サタンによって墮落させられて以来、人は神についての観念を生み出し、

神への忠誠心や渴望を抱いておらず、言うまでもなく神に対する良心も持っていない。わざと神に逆らい、神を批判し、さらには陰で神に罵詈雑言を投げつける。その方が神であることをはっきり知りつつ、陰で神を批判し、神に従うつもりはなく、神に要求や依頼をやたらとするだけである。そのような人々、つまり理知が異常な人々は、自分自身の卑劣な振る舞いを知ること、自身の反抗心を後悔することもできない。自分自身を知ることができれば、自己の理知を少し取り戻す。神にますます逆らいながら、それでも自分を知ることができなければ、その人の理知はいっそう不健全になる。

人の墮落した性質が明らかになる根源は、その人の鈍くなった良心、悪意のある本性、そして不健全な理知に他ならない。良心と理知が再び正常になれるのであれば、その人は神の前で用いられるのにふさわしい人になる。人がますます神に対して反抗的になるのは、ひとえに良心が常に麻痺しているから、健全だったことが一度もない理知がますます鈍くなっているからに他ならず、そのためイエスを十字架にかけ、終わりの日における神の受肉を門前で拒絶し、神の肉を断罪し、神の肉を卑しいものとして見るまでになっている。少しでも人間性があれば、受肉した神の肉体をかくも冷酷に扱うことはないはずだ。少しでも理知があれば、受肉した神をかくも悪意に満ちた形で扱うことはないはずだ。少しでも良心があれば、受肉した神にこのような形で「感謝する」ことはないはずだ。人は神が受肉した時代に生きているにもかかわらず、そのような素晴らしい機会を与えてくれた神に感謝できず、それどころか、神の到来を呪うか、あるいは神が肉となった事実を完全に無視し、一見したところそれに反対し、うんざりしている。人が神の到来をどのように扱うかにかかわらず、要するに、神は辛抱強く自らの働きを絶えず行ってきた。たとえ人が神をまったく歓迎していなくても、神にやたらと要求を突き付けてもである。人の性質はこの上なくひどくなり、理知はこの上なく鈍くなり、良心は悪しき者によって完全に踏みにじられ、もともとの良心はずっと以前に途絶えてしまった。人は人類に多くのいのちと恵みを授けてくれた、受肉した神に感謝しないばかりか、真理を与えたことで神をひどく嫌悪すらしている。人が神をますます嫌悪しているのは、真理への関心がまったくないからである。人は受肉した神のために生命を捨てることができないだけでなく、神から利益を引き出そうとし、自分が神に与えたものの何十倍もの利息を神に要求する。そのような良心と理知を持つ人々はこれを大したことはないと思い、自分は神のために自身をずいぶん費やしたとか、神はあまりにも少ししか与えてくれないなどと依然信じている。わたしに一杯の水を与えたあと、両手を伸ばしてミルク二杯分の代金を要求したり、わたしに一夜の宿を提供したあと、数日分の宿泊費を要求したりする人がいる。そのような人

間性や良心で、どうしていのちを得ることを望めようか。あなたがたはなんと卑劣な悪党なのだろう。人が持つこのような人間性と良心のために、受肉した神は地上をさまよい、身を寄せる場所もない。本当に良心と人間性を有している人々は、神が行った働きの多さのゆえではなく、たとえ神が働きを一切しなくても、神を崇め、心から神に仕えなければならない。これが健全な理知を持つ人のなすべきことであり、人の本分である。ほとんどの人は神に対する奉仕の条件さえ口にする。つまり、相手が神なのか、それとも人なのかを気にせず、自分の条件だけを話し、自分の欲望を満たすことだけを求めるのである。わたしのために料理するとき、あなたがたはサービス料を要求し、わたしのために走るときは走る料金を要求し、わたしのために働くときは労賃を要求し、わたしの服を洗うときは洗濯代を要求し、教会に施すときは休養のための費用を要求し、話をするときは講演料を要求し、本を配布するときは配布料金を要求し、何か書いたときは執筆料を要求する。わたしが取り扱った人々はわたしから補償金さえ要求し、そのうえ、帰宅させられた人々は名誉毀損の賠償金を要求する。結婚していない人々は持参金、または失われた青春時代の補償を要求し、鶏を殺す人々は肉屋の料金を要求し、揚げものをする人々は揚げ賃を要求し、スープを作る人々もそれに対する支払いを要求する……これがあなたがたの高尚で偉大な人間性であり、あなたがたの温かい良心に指図された振る舞いである。あなたがたの理知はどこにあるのか。人間性はどこにあるのか。一言言わせてもらおう。あなたがたがこうにし続けるのであれば、わたしはあなたがたのあいだで働くのをやめる。わたしは人間の皮を被った獣の集団の中では働かない。わたしはあなたがたのような、真面目な顔つきで野獣の心を隠す人々の集団のために苦しんだりしない。救いの可能性が一切ないこのような獣の群れのために、わたしは耐えたりはしない。わたしがあなたがたに背を向ける日は、あなたがたが死ぬ日、暗闇があなたがたを襲う日、そしてあなたがたが光に見捨てられる日である。一言言わせてもらおう。あなたがたのような獣にも劣る集団に対して、わたしは決して慈悲深くしない。わたしの言葉や行動には限度があり、あなたがたの現在の人間性や良心に対して、わたしはこれ以上なんの働きもしない。なぜなら、あなたがたはあまりにも良心に欠けており、あまりにも多くの苦しみをわたしに与え、あなたがたの卑劣な振る舞いはあまりにもわたしを嫌悪させるからである。かくも人間性や良心に欠けている人々に救いの機会は決して訪れない。冷酷で感謝の念を持たないそうした人々を、わたしは決して救わない。わたしの日が訪れるとき、わたしは燃えさかる炎を、かつてわたしを強烈に激怒させた不従順の子らの上に、永遠に雨あられと降り注ぐ。かつてわたしに罵詈雑言を投げつけ、わたしを見捨てたあの獣たちに、わたしは永遠の懲罰を課す。かつてわたしと共に食べ、わたしと共に

暮らしたものの、わたしを信じず、わたしを侮辱し、裏切った不従順の子らを、わたしは怒りの火でいつまでも焼く。わたしの怒りを引き起こしたすべての者に懲罰を与え、その怒りのすべてを、かつてわたしと対等の地位に立とうと望んだにもかかわらず、わたしを崇めず、従わなかった獣どもに雨あられと降り注ぐ。わたしが人を打つ鞭は、かつてわたしの配慮と、わたしが語った奥義を享受し、わたしから物質的な享樂を引き出そうとしたあの獣たちを攻撃する。わたしの地位を取ろうとする者を、わたしは誰も許さない。わたしから食べものや衣服を奪おうとする者は誰も容赦しない。今のところ、あなたがたは損害を免れており、相変わらずわたしに無理な要求をしようとしている。怒りの日が訪れるとき、あなたがたはわたしにこれ以上の要求をしないだろう。そのとき、わたしはあなたがたを心ゆくまで「楽しませ」、あなたがたの顔を地中に押し込む。そうすれば二度と起き上がることができない。遅かれ早かれ、わたしはこの借りをあなたがたに「返す」――そしてあなたがたがこの日の来るのを辛抱強く待つよう望む。

これらの卑劣な人々が途方もない欲望を捨て去り、神のもとに戻ることができるならば、救いの機会は依然ある。人が本当に神を渴望する心を持つならば、神に見捨てられることはない。人が神を得られないのは、神が感情を持っているからでも、人に得られたくないからでもなく、人が神を得たくないからであり、人が神を切実に求めているからである。真に神を求める人が神に呪われるなど、どうしてあり得ようか。健全な理知と繊細な良心を持つ人が神に呪われるなど、どうしてあり得ようか。心から神を崇め、神に仕える人が神の怒りの火に飲み尽くさるなど、どうしてあり得ようか。喜んで神に従う人が神の家から追放されるなど、どうしてあり得ようか。神を愛しても愛しきれない人が神の懲罰の中で生きるなど、どうしてあり得ようか。神のために喜んですべてを捨てる人が無一文になるなど、どうしてあり得ようか。人は進んで神を追求しようとせず、自分が持つものを神のために費やす気もなく、一生の努力を神に捧げようとも思っていない。それどころか、神はやり過ぎたとか、神には人の観念と対立する部分がありすぎるなどと言う。人間性がこのようでは、たとえ努力を惜しまないとしても、あなたがたが神に認められることはやはりできないだろうし、あなたがたが神を求めているという事実は言うまでもない。自分が人類の中の不良品だということを、あなたがたは知らないのか。あなたがたの人間性ほど卑しい人間性はないということを知らないのか。あなたがたは、他人からどのような敬称で呼ばれているか知らないのか。真に神を愛する人々はあなたがたをオオカミの父、オオカミの母、オオカミの息子、オオカミの孫と呼ぶ。あなたがたはオオカミの子孫、オオカミの民である。あなたがたは自己の身分を知るべきであり、それを決して忘れてはならない。自分が優れた人物だと

考えてはならない。あなたがたは人類の中で最も悪意がある非人間の集団である。あなたがたはこのことをいくらでも知らないのか。あなたがたの中で働くことにより、わたしがどれほどの危険を冒しているか知っているのか。あなたがたの理知が正常に戻れず、あなたがたの良心が正常に機能できないのであれば、あなたがたは決して「オオカミ」という名前を捨て去ることができず、呪いの日を免れることも決してなく、懲罰を受ける日を免れることも決してない。あなたがたは生まれつき劣っており、何の価値もない。本質的に飢えたオオカミの群れ、がらくたとごみの山である。あなたがたと違って、わたしは甘い汁を吸うためにあなたがたに働きかけるのではなく、働きの必要があるからそうするのである。あなたがたがこのように反抗的な態度を続けるなら、わたしは働くのをやめ、二度とあなたがたに働きかけない。むしろ、わたしを喜ばせてくれる別の集団に働きを移し、このようにして永遠にあなたがたから離れる。なぜなら、わたしに敵対する人々を見たくないからである。では、あなたがたはわたしと相容れることを望むのか、それとも反目していたいのか。

神を知らない人はすべて神に反対する人である

神の働きの目的、神の働きの人がもたらす効果、そして神の人への心意とは厳密に何であるのかを把握することは、神に従うすべての人が到達すべきことである。今日、すべての人に欠けているのは、神の働きを知ることには他ならない。天地創造から現在にいたるまで神が人に行なった業、神の働きの全体、そして神の心意とは人にとって厳密に何であるのかを人は知りも理解もしていない。この不十分さは宗教界全体だけでなく、神を信じるすべての人にも見られる。あなたが本当に神を見る日が来るとき、神の知恵を真に認識するとき、神が行なったすべての業を見るとき、神の存在そのものと神が所有するものを認識するとき、つまりあなたが神の豊かさ、知恵、不思議、そして神が人に為したすべてのことを見たとき、あなたは神の信仰において成功を収めたことになる。神はすべてを包み込み、極めて豊かであると言われるとき、厳密にどのようにすべてを包み込み、どのように極めて豊かなのだろうか。これがわからなければ、あなたは神を信じているとみなされることはできない。わたしが宗教界の人々は神を信じるのではなく、悪魔と同類の悪行者であると言うのはなぜか。わたしが彼らが悪行者であると言うとき、それは彼らには神の心意がわからず、神の知恵が見えないからである。神は決して彼らに働きを明かさない。彼らは盲目である。彼らには神の業が見えず、彼らは神に見捨てられている。そして、彼らには聖霊の働きは言うまでもなく、神の気遣いや守りは一切な

い。神の働きのない人はすべて悪行者であり、神への反対者である。わたしが言う神の敵とは、神を知らない人、口先では神を認めながらも神を知らない人、神の後ろをついては来るが神に従わない人、そして神の恵みを享樂するが神への証しを立てることができない人を指す。そのような人は、神の働きの目的や神が人において為す働きを理解せず、神の心意と一致することも、神への証しを立てることもできない。人が神に反対する理由は、一方ではその墮落した性質から、他方では神を知らないことと神が働く原理と人への神の心意を理解していないことに由来する。これら二つの側面を一つにすると、人が神に抵抗してきた歴史を構成する。信仰の初心者は神に反対する。なぜなら、そのような反対は彼らの本性の中にあるからである。一方、長年信仰してきた人々が神に反対するのは、彼らの墮落した性質に加え、神を知らないことが原因である。神が肉となる前は、ある人が神に反対しているか否かは、その人が天国にいる神が定めた命令を守っているか否かに基づいていた。たとえば、律法の時代では、ヤーウェの律法を守らない人は誰であれ、神に反対している人とみなされた。ヤーウェへの捧げ物を盗んだ人やヤーウェに好まれている人に敵対した人は誰であれ、神に反対している人とみなされ、石打刑で殺されることになっていた。父母を敬わない人や他人を殴ったり罵ったりした人は誰であれ、律法を守らない人とみなされた。そして、ヤーウェの律法を守らない人はみな、神に敵対しているとみなされた。恵みの時代においては、こうしたことはもはやなく、イエスに敵対する人は誰であれ神に敵対する人とみなされ、イエスの言葉に従わない人は誰であれ神に敵対する人と見なされた。このとき、神への反対の定義の仕方が、これまでより正確で実際的になった。神がまだ肉になっていなかったころ、人が神に反対しているか否かの尺度は、人が天国にいる目に見えない神を崇拝し、尊敬しているか否かに基づいていた。そのころ、神への反対の定義の仕方はそれほど現実的ではなかった。なぜなら、人には神が見えず、神の姿がどのようなものか、神がどのように働き、語るのかを知らなかったからである。人には神についての観念が一切なく、神はまだ人のところに現れていなかったもので、神を漠然と信じていた。したがって、人がいかに想像で神を信じていたとしても、人には神が全く見えなかったもので、神は人を断罪したり、過大な要求を突きつけたりすることはなかった。神が肉になり、人の間で働くようになると、すべての人が神を見、神の言葉を聞き、神がその肉体の内側から為す業を見る。そのとき、人の観念はすべて泡となる。神が肉に現われるのを見た人は、喜んで神に従うならば断罪されることはないが、意図的に神に敵対する人は神の反対者とみなされる。そのような人は反キリストであり、故意に神に対抗する敵である。神についての観念を抱いていながらも神に従うことをいとわない人は断罪されない。神は人の意図や行動に基づい

て人を断罪するのであり、決して人の思いや考えのためではない。もし神が人の思いや考えに基づいて断罪するなら、一人として神の怒りの手から逃れることはできない。受肉した神に故意に対抗する人は、その不従順ゆえに罰せられる。神に故意に対抗するそのような人が神に反対するのは、神についての観念を抱いていることに由来し、それが神の働きを妨害する行動をその人にとらせるのである。この人は意図的に神の働きに抵抗し、破壊する。単に神についての観念があるだけでなく、神の働きを妨害する活動にも携わり、この理由ゆえにこのような人は断罪されるのである。神の働きを故意に妨害しない人々は、罪人として断罪されることはない。喜んで従うことができ、妨害や混乱を引き起こす活動に従事することができないからである。このような人は断罪されない。神の働きを長年にわたって経験してきたのに、神についての観念を抱き続け、受肉した神の働きを知ることができないままであるならば、そして何年ものあいだ神の働きを経験しながらも、神についての観念に満たされたままで神を知ることができないならば、たとえ混乱を引き起こすような活動に従事していなくても、そのような人の心は神についての多くの観念で満たされているのであり、たとえこれらの観念が明らかにならないとしても、このような人は神の働きには何ら一切の役に立たない。そのような人は神のために福音を広めることも、神への証しを立てることもできない。それは何の役にも立たない愚か者である。神を知らず、さらに神についての観念を捨てることがどうしてもできないため、そのような人は断罪される。つまり、次のように言うことができる。信仰の初心者が神についての観念を抱いたり、神を全く知らないのは普通のことであるが、長年にわたって神を信じ、神の働きをかなり経験した人が観念をもち続けることは普通ではなく、このような人が神を知らないのはさらに普通ではない。この普通ではない状態ゆえに、その人は断罪されるのである。こうした異常な人はみなごみである。そのような人は神へ最大の反対を見せ、神の恵みも最大に享受しながら、それに対して何も報いない。そのような人はみな最後には排除される。

神の働きの目的を理解していない人は誰であれ、神に反対しているのであり、神の働きの目的を理解するようになって神を満足させようとはしない人は、なおさら神の反対者とみなされる。荘厳な教会で聖書を読み、一日中聖句を唱える人がいるが、そうした人は誰一人として神の働きの目的を理解していない。そうした人は誰一人として神を知ることができず、ましてや神の心意と一致することなど到底できない。そのような人はみな、価値のない下劣な人であり、高い位置から神を説く。神を旗印に使いながらも、故意に神に反対する。神を信じていると断言しながらも、人の肉を食べ、人の血を飲む。そのような人はみな、人の魂を食い尽くす悪魔であり、正しい道を歩もうとする人をわざと邪魔する悪霊の頭であり、神を求め

る人を妨害するつまずきの石である。彼らは「健全な体質」をしているように見えるかもしれないが、神に対抗するように人々を導く反キリストに他ならないことを彼らの追従者がどうして知り得るというのだろうか。彼らが人間の魂をむさぼり食うことを専門とする生きた悪魔であることを彼らの追従者がどうして知り得るというのだろうか。神の臨在において自分を高く評価する人は人間の中でも最も卑しいが、自分を低く考える人は最高の栄誉に浴する。そして、自分は神の働きを知っていると思っており、さらに、神を目の前に見ながらも神の働きを人々に大げさに宣言することができる人は、人間の中でも最も無知な人である。そのような人には神の証しがなく、傲慢でうぬぼれに満ちている。神について実際の経験と実際の認識があるにもかかわらず、自分は神についてほとんど知らないと信じている人が、神に最も愛されるのである。そのような人だけに真の証しがあり、真に神によって完全にされることができる。神の心意を理解していない人は、神の反対者である。神の心意を理解しているが、真理を実践していない人は神の反対者である。神の言葉を飲み食いしても神の言葉の本質に反する人は神の反対者である。肉となった神についての観念を持ち、さらに反乱に関与する心を持つ人は神の反対者である。神を批判する人は神の反対者である。そして、神を知ることができない人、神に証しをすることができない人は誰であろうと神の反対者である。だからわたしはあなたがたに求める。もしあなたがたが本当にこの道を歩けると信じているなら、道に従い続けなさい。しかし、もしあなたがたが神への対抗をやめられないのなら、手遅れになる前に立ち去るがよい。そうでなければ、物事の展開があなたがたにとってひどくなる可能性が非常に高い。それは、あなたがたの本性があまりに墮落しきっているからである。あなたがたには忠誠心や従順、義と真理を渴望する心、神への愛などみじんもない。神の前のあなたがたの状況は完全な修羅場であると言える。従うべきことに従うことができず、言うべきことを言うこともできない。実践すべきことを実践することに失敗し、果たすべき役割を果たすことができていない。持つべき忠誠心、良心、従順、決意を持たない。耐えるにふさわしい苦しみに耐えておらず、もつべき信仰もない。簡単に言うと、あなたがたには真価がまったくない。このまま生きていて恥ずかしくないのか。神があなたがたのせいで心配したり、あなたがたのために苦しんだりしないでいいように、あなたがたは永遠の眠りについてたほうがいいと説得させてほしい。あなたがたは神を信じていても神の心意を知らない。神の言葉を飲み食いしても、神が人に要求することを守ることができない。神を信じてても神を知らず、努力する目標もなく、一切の価値も意味もないまま生きている。人間として生きていても、良心、品位、信頼性は少しもない。それでもあなたがたはまだ自分を人間と呼ぶことができるのか。神を信じていても神を欺く。

さらに、神の金を取り、神への捧げ物を食い尽くす。それでも、結局のところ、神の気持ちを少しでも考えたり、神にわずかな良心を見せることもない。神のごく些細な要求さえも満たすことはできない。それでもまだ、あなたがたは自分を人間と呼ぶことができるのか。神が提供する食物を食べ、神が与える酸素を吸い、神の恵みを受けても、結局のところ、あなたがたは神を少しも知らない。それどころか、あなたがたは神に反対する無益者になった。それではあなたがたは犬よりも劣る獣になるのではないのか。あなたがたよりも悪意のある動物が他にあるだろうか。

高い説教壇に立って人々に教えを説く牧師や長老は、神の反対者でありサタンの仲間である。高い説教壇に立って人に教えていないあなたがたは、さらに大きな反対者ではないのか。牧師や長老以上にサタンと共謀していないのか。神の働きの目的を理解していない人は、神の心意と一致する方法を知らない。確かに、神の働きの目的を理解している人が、神の心意と一致する方法を知らないことはありえない。神の働きは決して誤ることがなく、むしろ、欠陥があるのは人の追求である。神に故意に反対する墮落者は、牧師や長老よりも腹黒く邪悪ではないのか。神に反対する人は多いが、神に反対する方法はさまざまである。ありとあらゆる種類の信者がいるように、神に反対する人たちもさまざまで、互いに異なる。神の働きの目的を明確に認識できない人は一人も救われぬ。過去に人がどのように神に反対したかに関わらず、人が神の働きの目的を理解し、神を満足させることに努力を捧げると、神は以前の罪をすべて水に流す。人が真理を求め、真理を実践するのなら、神は人がしたことを心に留めない。さらに、神が人を正しいとするのは、人による真理の実践に基づく。これが神の義である。神を見たり神の働きを体験したりする前は、人が神に対してどのように行動するかに関係なく、神はそれを心に留めない。しかし、ひとたび人が神を見、その働きを体験すると、人のあらゆる業や行動は、神によって「年譜」に記録される。人が神を見、神の働きのもとに生きたからである。

神が所有するものと神が何であるかを人が本当に見たとき、神の優越性を目にしたとき、そして神の働きを本当に知るようになり、さらに人の古い性質が変わったとき、人は神に反対する反抗的な性質を完全に捨て去ったことになる。誰もが一度は神に反対し、一度は神に反抗したことがあると言える。しかし、肉となった神に喜んで従い、この時点から忠誠心で神の心を満たし、実践すべき真理を実践し、尽くすべき本分を尽くし、守るべき規則を守れば、あなたは反抗心を捨てて神を満足させるのをいとわない人であり、神が完全にするのできる人である。頑なに自分の誤りを見ようとせず、自身を悔い改めるつもりがないならば、また、神と協力し、神を満足させる意図が少しもなく反抗的な行動に固執するなら、あなたのような頑固で矯正のしようがない人は必ず罰せられ、神に完全にされることは決してな

い。このように、今日あなたは神の敵であり、明日も神の敵であり、その次の日も神の敵のままである。永遠に神の反対者であり、神の敵である。その場合、神がどうしてあなたを放免することができるだろうか。神に反対するのは人の本性であるが、人の本性を変えることは克服できない課題であるという理由だけで、意図的に神に反対する「秘訣」を求め探ってはならない。もしそうなら、将来の刑罰がさらに厳しくならないように、最後には神があなたの肉体を終わらせるところまで、あなたの凶暴な本性が爆発して制御できなくなならないように、手遅れになる前に立ち去ったほうがいい。あなたは、祝福を受けるために神を信じているが、最終的に不幸しか降りかからないのであれば、それは残念なことではないのか。あなたがたに強く勧める。別の計画を立てたほうがよいだろう。できることであれば何でも、神を信じるよりもましだろう。確かに、この道だけしかないはずがない。真理を求めなくても、生き残れるのではないのか。なぜこのように神と対立する必要があるのだろうか。

神の働きのビジョン（1）

洗礼者ヨハネはイエスのために七年間働き、イエスが来たときにはすでに道を整えていた。それまでにヨハネが説いた天の国の福音は全土で聞かれたので、ユダヤの全地方に広まり、誰もがヨハネのことを預言者と呼んだ。当時、ヘロデ王はヨハネを殺したがっていたが、あえてそうしなかった。民衆はヨハネを大いに尊敬していたので、ヨハネを殺せば民衆の反発を招くであろうとヘロデは恐れたからである。ヨハネが行なった働きは普通の人々のあいだに根を下ろし、ユダヤ人に信じさせた。ヨハネは七年間、イエスが自身の職分を開始するまさにそのときまでイエスのために道を整えた。それゆえ、ヨハネはあらゆる預言者の中で最も偉大であった。ヨハネが投獄されて初めてイエスは自身の公の働きを開始したのである。ヨハネの前に、神のために道を整えた預言者はひとりとして存在しなかった。なぜならば、イエスより以前に神が肉となったことはなかったからである。だからヨハネに至るすべての預言者の中で、彼だけが受肉した神のために道を整える唯一の預言者だったのであり、このためヨハネは旧約聖書と新約聖書に記された預言者の中で最も偉大な者となったのである。ヨハネはイエスがバプテスマを受ける七年前に天の国の福音を広め始めた。彼の働きは、それに続くイエスの働き以上のように人々には思われたが、それでもヨハネは一人の預言者でしかなかった。ヨハネは神殿の中でなく、町や村で働き、語った。当然ながら、ヨハネはユダヤの人々、特に貧しい人々のあいだでそのようにした。ヨハネが社会の上層部の人々と接触することはめったになく、ユダヤの庶民のあいだでだけ福音を広めた。主イエスのために適し

た人々を用意し、イエスが働くのにふさわしい場所を準備するためである。ヨハネのような預言者がその道を整えたので、主イエスは到着するや否やそのまま十字架の道を歩み始めることができた。神がその働きをするために肉となったとき、神は人々を選ぶ働きをしたり、自分で人々を探したり、働く場を探したりする必要はなかった。来たときにそのような働きをせずとも、それにふさわしい人物がイエスの到来に先立ち、そうしたものをすでに用意していたのである。イエスが自身の働きを始める前にヨハネがこの作業をすでに完了していたので、受肉した神は働きを行なうために現れると、長らく神を待ち望んでいた人々への働きにすぐさま取りかかった。イエスが来たのは、人間による修正の働きをするためではなかった。イエスが来たのはひとえに自身が果たすべき職分を果たすためであり、それ以外の何事もイエスには無関係であった。ヨハネが来て行なったのは、天の国の福音を受け入れる人々の集団を神殿から、またユダヤ人のあいだから導き出し、主イエスの働きの対象となるようにすることだけであった。ヨハネは七年間働いた。つまり、彼は七年にわたって福音を宣べ伝えたのである。その間、ヨハネは多くの奇跡を行なわなかった。彼の仕事は道を整え、準備することだったからである。そのほかのすべての働き、イエスが行なおうとしていた働きは、ヨハネとは関係がなかった。ヨハネはただ人々が救われるように、自分の罪を告白して悔い改めるよう促し、人々にバプテスマを授けただけであった。ヨハネは新しい働きを行ない、人がそれまでに歩いたことのなかった道を開いたが、やはりヨハネはイエスのために道を整えただけであった。ヨハネは準備の働きをした預言者に過ぎず、イエスの働きをすることはできなかった。イエスは天の国の福音を説いた最初の人ではなく、ヨハネが進んだ道に沿って続いたが、それでもイエスの働きを行なえる人はほかに誰もいなかった。そしてそれはヨハネの働きを超えていた。イエスは自分の道を整えることはできなかった。イエスの働きは神に代わって直接行なわれたものなのである。そのため、ヨハネは何年働いたとしても、やはり預言者で、道を整える人でしかなかった。イエスによってなされた三年間の働きはヨハネによる七年間の働きに優っていた。イエスの働きの本質は同じではなかったからである。イエスがその職分を開始したのは、ヨハネの働きが終了したときでもあるが、その際ヨハネは、主イエスが用いるのに十分なだけの人々と場所をすでに準備していた。これらは、主イエスが三年間の働きを開始するのに十分であった。それゆえヨハネの働きが終了すると、主イエスはすぐさま公に働きを始め、ヨハネが語った言葉は退けられた。これは、ヨハネが行なった働きは移行のためだけであり、その言葉は人間を新たな成長へと導くいのちの言葉ではなかったからである。最終的に、ヨハネの言葉は一時的に役立っただけであった。

イエスの行なった働きは超自然的なものではなかった。そこにはひとつの過程があり、すべては物事の正常な法則に従って進行した。生涯の最後の六ヵ月に入る頃には、イエスは自分がこの働きを行なうために来たことを確信しており、また自分が十字架にくぎづけにされるために来たことを知っていた。十字架にかけられるのに先立ち、イエスはちょうどゲツセマネの園で三度にわたり祈ったように、父なる神に祈り続けた。イエスは洗礼を受けたあと、三年半のあいだその職分を果たし、公の働きは二年半のあいだ続いた。最初の年、イエスは悪魔に責められ、人間に当惑させられ、人間としての誘惑にさらされた。イエスは働きを行ないながら、同時に多くの誘惑を乗り越えた。最後の六ヵ月、イエスが近いうちに十字架にかけられるというときに、ペテロの口からイエスは生ける神の子である、キリストであるという言葉が発せられた。このとき初めてイエスの働きがすべての人に知られ、その身分が民衆に明かされることとなった。その後、イエスは弟子たちに対し、自分が人間のために十字架にかけられようとしていること、三日後に復活すること、贖いの働きを行なうために来たこと、そして自分が救い主であることを告げた。最後の六ヵ月間になって初めて、イエスは自分の身分と自分が行なおうとしている働きを明らかにしたのである。このときは神の時間でもあったので、働きはこのようにして行なわれなければならなかった。その際、イエスの働きの一部は旧約聖書と一致しており、律法の時代におけるモーセの律法とヤーウェの言葉とも一致していた。これらのすべてを、イエスは自身の働きの一部を行なうために使ったのである。イエスは会堂で人々に説教し、教えを伝えた。そして自身に敵対していたパリサイ人を叱責するために旧約聖書の預言者たちの預言を用い、また彼らの不従順さをあばいて非難するために聖書の言葉を用いた。というのも、彼らはイエスがしたことを軽蔑し、特に、イエスの働きの多くが聖書の律法に沿っていなかったこと、そしてさらに、イエスの教えが自分たちの言葉より高尚であり、聖書の預言者たちが預言したことよりもさらに高尚だったことを忌み嫌ったからである。イエスの働きは人類の贖いと十字架のためだけにあった。そのため、イエスは人を征服するために、それ以上の言葉を語る必要はなかった。イエスが人に教えたことの多くは聖書の言葉から来ており、たとえイエスの働きが聖書を越えなかったとしても、イエスはやはり十字架の働きを達成することができた。イエスの働きは言葉の働きでも、人類を征服するためになされた働きでもなく、人類を贖う働きであった。イエスは人類のために罪のいけにえとして行動しただけで、人類のための言葉の源泉として行動したのではなかった。イエスは異邦人の働き、つまり人間を征服する働きはしなかったが、十字架の働き、つまり神の存在を信じた人々のあいだでなされた働きをした。たとえイエスの働きが聖書に基づいて実行され、またパリサイ人たちを非難

するために、昔の預言者によって言われたことを用いたとしても、これは十字架の働きを完成するのに十分であった。もし今日の働きが依然として聖書にある昔の預言者たちの預言に基づいて実行されるなら、あなたがたを征服するのは不可能であろう。というのも、旧約聖書にあなたがた中国人の不従順さと罪の記録はなく、またあなたがたの罪の履歴もないからである。ゆえに、この働きがまだ聖書に残っているなら、あなたがたは決して屈しないであろう。聖書に記録されているのはイスラエル人の歴史の一部だけであり、あなたがたが善か悪かを判断したり、あなたがたを裁いたりすることができるものではない。わたしがイスラエル人の歴史に従ってあなたがたを裁くと想像してみなさい。今日のように、あなたがたはわたしに従っているだろうか。あなたがたは自分たちがどれほど難しい人間かわかっているのか。この段階で言葉がまったく話されなかったら、征服の働きを完成することは不可能であろう。わたしは十字架にかけられるために来たのではないので、あなたがたが征服されるよう、聖書とは別の言葉と話さなければならない。イエスが行なった働きは、旧約聖書より高位にある一段階に過ぎなかった。それはひとつの時代を始めるため、その時代を先導するために使われたのである。なぜイエスは「わたしは律法を廃するためではなく、成就するために来たのである」と言ったのであろうか。しかしイエスの働きには、旧約聖書のイスラエル人が実践した律法、および彼らに従った戒めと一致しないことがかなりあった。それは、イエスが来たのは律法を守るためではなく、成就するためだったからである。律法を成就する過程には、多くの現実的な事柄が含まれていた。イエスの働きはもっと実際的かつ現実的であり、さらにそれはより一層生きたものであり、規則への盲従ではなかった。イスラエル人は安息日を守っていたのではないか。イエスは来たときに安息日を守らなかった。なぜなら、人の子は安息日の主であるとイエスが言ったように、安息日の主が来たときには、自由に振舞うものだからである。イエスが来たのは旧約聖書の律法を成就し、それを変えるためだった。今日なされるすべてのことは現在を基にしているが、やはり律法の時代におけるヤーウェの働きが基盤になっており、この範囲を超えることはない。たとえば、言葉に気をつけること、姦淫を犯さないことなどは、旧約聖書の律法ではないだろうか。今日、あなたがたに要求されていることは十戒だけに限らず、以前にもたらされたものより高次の戒めや律法から成り立っているが、これは以前のものが廃止されたという意味ではない。というのも、神の働きの各段階は以前の段階を基盤にして実行されるからである。ヤーウェがイスラエルに伝えたこと、たとえば犠牲を捧げ、父と母を敬い、偶像崇拜をせず、他人に暴行を加えたり呪ったりせず、姦淫を犯さず、喫煙や飲酒をせず、死肉を食べず、血を飲まないよう人々に求めたことなどについて言えば、それは現在でもあな

たがたの実践の基盤を形作っているのではないか。過去の基盤の上に、働きは今日に至るまで行なわれてきたのである。もはや過去の律法が語られることはなく、新しい要求が課せられるようになったからといって、過去の律法は廃止されたところか、より高い状態に引き上げられたのである。過去の律法が廃止されたということは、前の時代が期限切れになったことを意味する一方、戒めには未来永劫守らなければならないものがある。過去の戒めはすでに実践されてきており、すでに人間の在り方となっているので、喫煙をしてはならないとか、飲酒をしてはならないといった戒めをことさら強調する必要はないのである。この基盤の上に、あなたがたの今日の必要性にしたがって、あなたがたの霊的背丈にそって、現在の働きに合わせて、新しい戒めが定められるのである。新時代の戒めを制定することは、旧時代の戒めを廃止することではなく、この基盤の上でさらに高く持ち上げ、人間の行動をさらに完全なもの、現実とより調和したものとするものである。今日、あなたがたがイスラエル人と同じように、戒めに従い、旧約聖書の律法を守ることしか要求されず、ヤーウェによって制定された律法を暗記することさえ求められていたら、あなたがたが変われる可能性はないだろう。これらの限られた戒めを守ったり、数えきれないほどの律法を暗記したりするだけならば、あなたがたの古い本性は深く根ざしたままで、それを引き抜く方法はないであろう。そのため、あなたがたはますます堕落し、あなたがたのうち誰ひとりとして従順にならないであろう。つまり、少数の簡単な戒めや数知れない律法は、あなたがたがヤーウェの業を知る上で助けにはならないということである。あなたがたはイスラエル人と同じではない。律法に従い、戒めを暗記することによって、彼らはヤーウェの業を目の当たりにし、ヤーウェだけに献身を捧げることができた。しかし、あなたがたがそれを成し遂げることはできない。そして、旧約聖書時代の僅かな戒めは、あなたがたに心を捧げさせることも、あなたがたを守ることもできないだけでなく、それどころかあなたがたをだらしなくさせ、ハデスに落とすだろう。わたしの働きは征服の働きで、あなたがたの不従順さや古い本性に向けられているからである。ヤーウェとイエスの優しい言葉は、今日の厳しい裁きの言葉に比べてはるかに劣っている。そのような厳しい言葉がなければ、何千年ものあいだ服従してこなかった、不従順の「専門家」であるあなたがたを征服するのは不可能であろう。旧約聖書の律法はいぶん前にあなたがたへの力を失い、今日の裁きは古い律法よりはるかに手ごわい。あなたがたに最もふさわしいのは裁きであって、律法という取るに足らない制限ではない。なぜなら、あなたがたはごく最初の人間ではなく、何千年ものあいだ堕落してきた人間だからである。人間が今成し遂げなければならないことは、今日の人間の現状に即しており、現代人の素質と実際の霊的背丈にそったものであり、

規則に従うことは要求されない。それはあなたの古い本性に変化を生じさせ、あなたが自分の観念を捨てるようにするためである。あなたは戒めのことを規則だと思っているのか。戒めとは、人間に課せられる正常な要求事項だということができる。戒めは従うべき規則ではない。たとえば、喫煙の禁止を考えてみたまえ。これは規則であろうか。規則ではない。これは正常な人間性が要求することである。これは規則ではなく、人類全体に求められていることである。これまでに定められた十数ヵ条の戒めもまた、今日では規則ではなく、正常な人間性を獲得するための必要事項である。過去、人々はこのようなことを身につけておらず、知ってもいなかったのだが、今日これらを達成するよう求められているのであり、これは規則には入らない。律法は規則と同じではない。わたしが言う規則とは、儀式、形式的な行為、人間の逸脱した、あるいは間違った実践のことである。これらは人間にとって助けにも恩恵にもならない規則と規制であり、何の意義もない手順である。これこそが規則の典型であり、このような規則は排除しなければならない。人間に恩恵をもたらさないからである。実践しなければならないのは、人間にとって恩恵となるものである。

神の働きのビジョン (2)

悔い改めの福音は恵みの時代に宣べ伝えられ、人は信じる限り救われると説いた。現在では、救いの代わりに征服と完全にすることだけが語られる。誰かが信じればその人の家族全体が祝福されるとか、いったん救われればいつまでも救われるなどといったことは決して言われぬ。今日では誰もこのような言葉を語らず、そうしたことは時代遅れになっている。当時、イエスの働きは全人類を贖う働きだった。イエスを信じるすべての人の罪は赦され、あなたがイエスを信じる限り、イエスはあなたを贖っただろう。イエスを信じるなら、もはや罪ある人ではなく、罪から解放されたのである。これが救われるということ、信仰によって義とされるということである。しかし、信じている人たちの中には反抗的で、神に逆らうものが残っており、それはやはり徐々に取り除く必要があった。救いとは、人が完全にイエスのものとなったことを意味したのではなく、その人がもう罪の中におらず、罪を赦されたことを意味した。信じるならば、もう罪の中にはいないのである。当時、イエスは弟子たちにとって不可解な働きを多数行ない、人々には理解できないことを数多く言った。これは当時イエスが何一つ説明しなかったからである。そのため、イエスが去ってから数年後、マタイがイエスの系図を作り、他の者も人間の意志による働きを数多く行なった。イエスは人を完全にして自分のものとするため

に来たのではなく、働きの一段階を行なうために来たのである。それは天の国の福音をもたらし、磔刑の働きを完成させることであり、イエスが十字架にかけられた時点でその働きは完了している。しかし、現在の段階、つまり征服の働きにおいては、より多くの言葉が語られ、より多くの働きがなされ、そして多くの過程を踏まなければならない。イエスとヤーウェの働きの奥義も明らかにされ、それによってすべての人が信仰において理解と明瞭さを得られるようにしなければならない。なぜなら、それは終わりの日の働きで、終わりの日は神の働きの終わりであり、働きが完了するときだからである。働きのこの段階はあなたに対し、ヤーウェの律法とイエスの贖いを明確にするだろう。この働きはおもに、あなたが神の六千年にわたる経営（救いの）計画の全体像を理解し、六千年の経営計画の意義と本質をすべて理解し、イエスによってなされたすべての働きとイエスが語った言葉の目的、そして聖書に対するあなたの盲目的な信頼と崇拜さえも理解するためである。それにより、あなたはそのすべてを完全に理解できるだろう。イエスによってなされた働きと今日の神の働きの両方を理解するようになるだろう。すべての真理、いのち、そして道を理解し、目の当たりにするだろう。イエスによってなされた働きの段階で、イエスはなぜ締めくくりの働きを行わずに去ったのだろうか。それは、イエスによる働きの段階が完了の働きではなかったからである。イエスが十字架に釘付けにされたとき、イエスの言葉もまた終わりを迎えた。磔刑の後、イエスの働きは完全に終わったのである。現段階は違う。言葉が最後まで語られ、神の働きの全体が完了したあと、そこでようやく神の働きは終わる。イエスによる働きの段階の期間、多くの言葉が語られないままだったか、あるいは明確に述べられなかった。しかしイエスの職分は言葉による職分ではなかったため、イエスは自分が何を語って何を語らなかったかは気にかけず、そのため、十字架にかけられた後に去って行った。その段階の働きはおもに磔刑のためであり、現段階とは異なる。この現段階の働きは、基本的には完了すること、片づけること、そしてすべての働きを終結させるためのものである。もし言葉が最後の最後まで語られないなら、この働きを終える術はないだろう。この段階の働きにおいて、すべての働きは言葉を用いて終わり、達成されるからである。当時、イエスは人に理解できない数多くの働きを行なった。イエスは静かに去り、今日依然としてイエスの言葉を理解できない人が多数いる。彼らの理解は間違っているが、それでも彼らは正しいと信じており、間違っていることを知らない。最後の段階は神の働きを完全に終わらせ、その終結をもたらすだろう。すべての人が神の経営計画を理解し、知るようになるだろう。人の中にある観念、意図、間違っている馬鹿げた理解、ヤーウェとイエスの働きに関する観念、異邦人についての見方、そしてその他の逸脱と間違いは正されるだろ

う。そして人は人生の正しい道、神によってなされた働き、および真理をすべて理解するだろう。そうなったとき、この段階の働きは終わりを迎える。ヤーウェの働きは世界の創造であり、始まりだった。この段階の働きは働きの終わりであり、終結である。最初に、神の働きはイスラエルの選民のあいだで実行され、最も聖なる地における新しい時代の夜明けだった。最後の段階の働きは、世界を裁き、時代を終わらせるために最も汚れた国で実行される。最初の段階において、神の働きは最も明るい地で行なわれたが、最後の段階は最も暗い地で実行され、この暗闇は一掃され、光がもたらされ、すべての人が征服される。この最も汚れた、最も暗い場所にいる人々が征服され、すべての人が神の存在と誰が真の神であることを認め、あらゆる人がすっかり確信したとき、この事実は征服の働きを全宇宙で行なうのに用いられるだろう。この段階の働きは象徴的である。ひとたびこの時代の働きが終わると、六千年にわたる経営の働きは完全に終わりを迎える。ひとたび最も暗いこの場所にいる人々が征服されると、他のあらゆる場所でもそうなることは言うまでもない。そのように、中国における征服の働きだけが、象徴としての意味をもつ。中国は闇のすべての勢力を具現化しており、中国の人々は肉なる者、サタンの者、そして血肉による者を表わしている。赤い大きな竜によって最も墮落させられ、神に最も反抗し、人間性が最も卑しく汚れているのは中国人である。だから彼らは墮落した全人類の典型なのである。これは、他の国々にはまったく問題がないということではない。人間の観念はどれも同じである。他国の人々は優れた素質をもっているかもしれないが、神を知らなければ、彼らは神に逆らっているはずである。なぜユダヤ人も神に逆らい、神を拒んだのか。なぜパリサイ人も神に逆らったのか。なぜユダはイエスを裏切ったのか。当時、弟子の多くはイエスのことを知らなかった。なぜ人々は、イエスが十字架にかけられ、そして復活した後でさえもイエスを信じなかったのか。人間の不服従はどれも同じではないのか。中国の人々は単にひとつの例にされたというだけである。征服されたとき、彼らは模範、見本となり、他の人々の参考として役立つだろう。あなたがたはわたしの経営計画の付属物であると、わたしが常に言ってきたのはなぜか。墮落、汚れ、不義、敵対、そして反抗が最も完全に現われ、あらゆる形で示されているのは、中国の人々においてである。中国人は素質に乏しい一方、中国人の生活と考え方は遅れており、習慣、社会環境、そして生まれ育った家族など、すべてが劣っており、最も遅れている。地位もまた低い。この場所での働きは象徴的で、この試験的な働きがすべて実行された後、神の次の働きはずっと簡単になるだろう。もしこの段階の働きが完了し得るなら、次の働きもそうなるのは言うまでもない。この段階の働きが達成されたなら、大いなる成功がおさめられ、全宇宙におよぶ征服の働きは完全に終わりを迎えるだ

ろう。実際、あなたがたのあいだで働きが成功したなら、これは全宇宙で成功したのと同じことである。これが、わたしがあなたがたを模範、および見本として行動させる意義である。反抗、敵対、汚れ、不義など、そのすべてがこの人たちに見られ、彼らの中には人類の反抗心がすべて表わされている。まったく大した人たちである。このように、彼らは征服の縮図として掲げられ、ひとたび征服されると、自然と他の人たちの見本および模範になるだろう。イスラエルで実行された最初の段階ほど象徴的なものはない。イスラエルの人々は諸国民の中で最も聖く、最も堕落していない人たちであり、この地の新しい時代の夜明けは最大の意義をもっていた。人類の祖先はイスラエルから来て、イスラエルは神の働きの発祥の地だったとすることができる。はじめのころ、この人たちは最も聖く、みなヤーウェを礼拝し、彼らにおける神の働きは偉大な成果をもたらすことができた。聖書の全体は二つの時代の働きを記録している。ひとつは律法の時代の働きであり、もうひとつは恵みの時代の働きである。旧約聖書はイスラエルの人々に対するヤーウェの言葉と、イスラエルにおけるヤーウェの働きを記録している。新約聖書はユダヤの地におけるイエスの働きを記録している。では、なぜ聖書には中国人の名前が記されていないのか。それは、神の働きにおける最初の二つの部分がイスラエルで行なわれたからであり、イスラエルの人々は選民だったからである。つまり、彼らはヤーウェの働きを最初に受け入れた民族だったのである。彼らは全人類の中で最も堕落しておらず、はじめのころ、神を見上げて崇敬する心構えをもっていた。彼らはヤーウェの言葉に従い、常に神殿で奉仕をし、祭司の衣や冠をつけた。彼らは神を礼拝した最初の民族で、神の働きの最初の対象だった。人類すべての見本であり模範だった。聖さ、そして義なる人の見本であり模範だった。ヨブ、アブラハム、ロト、ペテロ、テモテのような人たちはみなイスラエル人で、最も聖なる見本であり、模範だった。イスラエルは人類の中で神を礼拝した最初の国であって、他のどこよりも義なる人々が出た。神は将来地の至るところで人類をより良く経営できるよう、イスラエル人の中で働いた。彼らが成就したことと、ヤーウェを崇拝する中での義なる行ないは記録され、その結果、彼らは恵みの時代にイスラエルを越えて人々の見本、模範となることができた。そして彼らの行動は今日に至るまで、数千年の働きを支えたのである。

創世後、神の働きの最初の段階はイスラエルで行なわれた。したがって、イスラエルは地上における神の働きの発祥地であり、また拠点だった。イエスの働きの範囲はユダヤの地全体に及んだ。イエスの働きのあいだ、ユダヤの地の外側にいた人々でそれを知っていた人はほとんどいなかった。イエスはユダヤの地を越えて働きを行なわなかったからである。今日、神の働きは中国にもたらされ、純粹にこの

範囲内で行なわれている。この段階において、中国の外側で働きが着手されることはない。中国の外に広まるのは、もっとあとに来る働きである。この働きの段階はイエスによる働きの段階に続くものである。イエスは贖いの働きを行なったが、この段階ではそれに続く働きが行なわれる。贖いの働きは完了したので、この段階で聖霊による受胎の必要はない。なぜなら、この働きの段階は前の段階と違うものであり、さらに中国はイスラエルと違うからである。イエスは贖いの働きの一段階を行なった。人間はイエスを目の当たりにし、それから程なくしてイエスの働きは異邦人へと広まりだした。現在、神を信じる人々がアメリカ、英国、そしてロシアに大勢いる。では、なぜ中国には信じる人が少ないのだろうか。それは中国が最も閉ざされた国だからである。そのため中国は神の道を受け入れた最後の国であり、そのときから現在まで、まだ百年も経っていない。アメリカや英国よりずっと遅れているのだ。神の働きの最終段階が中国の地で行なわれるのは、その働きを完結させるため、そのすべてが達成されるようにするためである。イスラエルの人々はみなヤーウェを主と呼んだ。当時、イスラエルの人々はヤーウェを家長とみなし、イスラエル全体がひとつの大きな家族となり、家族全員が自分たちの主であるヤーウェを崇拝した。ヤーウェの霊はしばしば彼らの前に現われ、声を発して語りかけ、雲の柱と音をもって彼らの生活を導いた。当時、霊はイスラエルで直接導きを与え、声を発して人々に語りかけた。そして人々は雲を見、雷が鳴り響くのを聞いた。何千年ものあいだ、神はこのようにしてイスラエルの人々の生活を導いた。そのため、イスラエルの人々だけが常にヤーウェを崇拝してきた。彼らは、ヤーウェは自分たちの神であり、異邦人の神ではないと信じている。これは驚くべきことではない。何と言っても、ヤーウェはほぼ四千年にわたってイスラエルの人々の中で働いたのだから。中国の地においては、墮落した者たちが何千年間も惰眠を貪った後、天地と万物が自然に形成されたのではなく、創造主によって創られたことを知るようになった。この福音が国外から来たために、封建的かつ反動的な思考をもつ人は、その福音を受け入れる者はみな裏切り者で、先祖である仏陀を裏切ったろくでなしだと信じている。さらに、そうした封建的思考の持ち主の多くは、「どうして中国人が外国人の神を信じられるのか。先祖を裏切っているのではないか。悪事を犯しているのではないか」と問い質す。今日、ヤーウェが自分たちの神であることを、人々はずいぶん前から忘れてしまっている。ずっと以前に創造主のことを頭の奥に押し込み、その代わりに進化論を信じ、人類はサルから進化し、自然界は当然のように生じたとしている。人類が享受する良き食べ物はどれも自然が与えるもので、人間の生死には秩序があり、そのすべてをつかさどる神など存在しないというのである。そのうえ、神が万物を支配しているというのは迷信で、科学的でない

信じる無神論者が多くいる。しかし、科学が神の働きに取って代われるだろうか。科学が人類を支配できるだろうか。無神論に支配されている国で福音を説くのは容易な仕事ではなく、そこには大変な障害が伴う。今日、そのような形で神に逆らう人が大勢いるのではないか。

イエスが来て働きを行なったとき、多くの人がイエスの働きとヤーウェの働きを比べて矛盾点を見つけ、イエスを十字架にかけた。なぜ両者の働きに一致している点が見つからなかったのか。それは、一つにはイエスが新しい働きを行なったからであり、もう一つはイエスが働きを開始する前に誰もイエスの系図を書かなかったからである。誰かがそうしていればよかったはずだ――だとすれば、誰がイエスを十字架にかけただろうか。もしもマタイが数十年早くイエスの系図を書いていたならば、イエスはあのような激しい迫害を受けていなかっただろう。そうではないか。人々がイエスの系図を読み、イエスがアブラハムの子でありダビデの子孫であることを知ったならば、イエスへの迫害を直ちに止めていただろう。イエスの系図があまりに遅く書かれたのは、何とも残念なことではないか。また、聖書が神の働きの二段階、すなわち律法の時代の働きの段階と恵みの時代の働きの段階、そしてヤーウェの働きの段階とイエスの働きの段階しか記録していないとは、何とも残念なことだろうか。偉大な預言者が今日の働きを預言していたら、どれほど良かったことか。聖書に「終わりの日の働き」という題名の追加箇所があったならば、ずっと良かったのではないだろうか。なぜ人間は今日これほどの苦勞に耐えなければならないのか。あなたがたは極めて困難な時期を経験してきた。もしも憎まれるに足る人がいるとすれば、それは終わりの日の働きを預言しなかったイザヤとダニエルである。そして責められるべき人がいるとすれば、それは神の二度目の受肉までの系図を書いておかなかった新約聖書の頃の使徒たちである。何とも困ったことだ。あなたがたは証拠を求めて至るところを探し回らなければならない。たとえ小さな言葉の断片をいくつか見つけたとしても、それが本当に証拠なのかは依然としてわからない。なんと恥ずかしいことか。神は自身の働きにおいてなぜそれほど秘密を貫くのか。今日、多くの人々がいまだに決定的な証拠を見つけておらず、それでいながら否定することもできずにいる。彼らはどうすべきか。断固として神に従うことができないし、そのような疑いを抱えたままで前進することもできない。そのため多くの「才能に恵まれた賢い学者たち」は、神に従うにしても「様子を見ながら試す」という態度をとる。これはあまりにも面倒である。もしもマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネが未来を預言できていたなら、物事はもっと容易だったのではなからうか。ヨハネが神の国における生活の内なる真実を見ていれば良かったのだが、幻を見ただけで地上における現実的かつ物理的な働きを見なかったのは、何とも残念な

ことだろうか。実に困ったことである。神は一体どうなっているのか。イスラエルでの働きがあればほど順調に運んだ後、神はなぜ今、中国に来たのだろうか。そしてなぜ神は肉となり、人々のあいだで自ら働きを行ない、そこで暮らさなければならぬのか。神は人間に対して配慮がなさすぎる。神は人々に前もって告げなかっただけでなく、刑罰と裁きを突然もたらした。本当に訳がわからない。初めて神が肉となったとき、内なる真実のすべてを前もって人間に告げなかったために、イエスは大変な苦勞をした。まさか神がそのことを忘れたはずはないだろうに。それなのになぜ、神は今回も人間に告げないのか。現在、聖書に六十六の書しかないのはなんと不運なことか。終わりの日の働きを預言する、あともう一つの書さえあればいいのだが。そう思わないか。ヤーウェ、イザヤ、ダビデでさえ今日の働きに言及しなかった。彼らは現在からさらに大きく引き離されており、四千年以上の隔たりがある。イエスも今日の働きを十分には預言せず、それについて少し話しただけだった。そして人間は依然として不十分な証拠しか見つけられない。現在の働きと以前の働きを比較して、どうして両者が互いに一致することがあり得るのか。ヤーウェによる働きの段階はイスラエルに向けられていたので、これと現在の働きを比べても不一致はさらに大きくなるだろう。この二つを比べることは決してできない。あなたはイスラエルの人間でも、ユダヤ人でもない。素質もなければ、あらゆることが欠けている。どうして彼らと自分を比べられるのか。そんなことが可能なのか。現在は神の国の時代であることを知りなさい。律法の時代とも恵みの時代とも異なるのである。とにかく、型通りのことを試したり、当てはめたりするのをやめなさい。そのようなものに神を見つけることはできないのである。

イエスは生まれてからの二十九年間をどのように過ごしたのか。聖書はイエスの子供時代と青年時代について何も記録していない。それらがどのようなものだったか、あなたは知っているか。イエスには子供時代も青年時代もなく、生まれたときにはすでに三十歳だったということなのか。あなたはあまりに知らないのだから、そう不注意に自分の意見を広めてはいけない。そんなことはあなたのためにならない。聖書に記録されているのは、イエスが三十歳の誕生日の前に洗礼を受け、聖霊に導かれて荒野に行き、悪魔の試みを受けたことだけである。また四福音書は三年半にわたるイエスの働きを記録している。子供時代と青年時代の記録は存在しないが、だからと言ってイエスには子供時代も青年時代もなかったという証拠にはならない。これはただ、イエスは当初働きを行なわず、普通の人だったということである。では、イエスは青年時代も子供時代もなしに三十三年間生きたと言えるだろうか。突然三十三歳半になれただろうか。人間がイエスについて考えることは、どれも超自然的かつ非現実的である。受肉した神が普通の正常な人間性を備えているこ

とに疑いの余地はない。しかし神が自身の働きを行なうとき、それはまさに神の不完全な人間性と完全な神性をもって行なわれる。そのため、人々は今日の働きについて、そしてイエスの働きについてさえも疑っているのである。神は二度肉となり、それぞれにおける働きは異なっているが、神の本質は変わらない。もちろん、四福音書の記録を読めば、違いは大きい。どうすれば、あなたはイエスの子供時代と青年時代の生活に戻ることができるのか。いかにしてイエスの正常な人間性を理解することができるのか。あなたは、今日の神の人間性については確固とした理解を得ているかもしれないが、イエスの人間性については何も把握していないし、ましてや理解してもいない。マタイが記録していなければ、イエスの人間性についてかすかに知ることもしなかっただろう。わたしがイエスの生涯における逸話を語り、イエスの子供時代と青年時代の内なる真実を告げてしまえば、おそらくあなたは首を横に振ってこう言うだろう。「違う。イエスがそんなだったはずはない。弱さなどあり得ないし、ましてや人間性など一切もちあわせているはずがない」。あなたは叫んで悲鳴をあげさえるだろう。あなたはイエスを理解していないからこそ、わたしについて観念を抱いている。あなたはイエスのことをあまりに神聖だと考え、肉体的なものは一切もっていないと信じている。しかし、事実はやはり事実である。事実の中にある真実を大胆に無視して話そうとする人はいない。なぜなら、わたしが話すとき、それは真実に関することだからである。憶測でも予測でもない。神は大いなる高みに達することができ、またそれ以上に、最も低いところに隠れられることを知りなさい。神はあなたの頭脳で描き出せる存在ではない――神はすべての被造物の神であり、ある特定の人が思い描く個人的な神ではない。

神の働きのビジョン (3)

神が初めて肉となったのは聖霊による受胎を通じてであり、それは神が行なおうとする働きに関係していた。恵みの時代はイエスの名と共に始まった。イエスが自身の職分を始めたとき、聖霊はイエスの名に対する証しを始め、ヤーウェの名はもはや語られなかった。その代わり、聖霊はおもにイエスの名のもとに新しい働きに着手した。神を信じる人たちの証しはイエス・キリストのためになされ、彼らが行なった働きもまたイエス・キリストのためだった。旧約聖書における律法の時代の終わりは、おもにヤーウェの名のもとで行なわれた働きが完結したことを意味していた。その後、神の名はもはやヤーウェではなくなった。神は代わりにイエスと呼ばれ、それ以降、聖霊はおもにイエスの名のもとで働きを始めることになった。人々は今日もなおヤーウェの言葉を飲み食いし、いまだに律法の時代の働きにした

がってあらゆることを行なっているが、あなたは盲目的に規則に従っているのではないか。過去から抜け出せずにいるのではないか。現在、あなたがたは終わりの日が来たことを知っている。イエスが来るとき、彼はやはりイエスと呼ばれるということなのか。ヤーウェはイスラエルの人々にメシアが来つつあると言ったが、メシアが本当に来たとき、それはメシアでなくイエスと呼ばれた。イエスは、自分は再び来る、去ったときと同じように現われると言った。これらはイエスの言葉だが、あなたはイエスの去り方を見たのか。イエスは白い雲に乗って去ったが、白い雲に乗って自ら人々のもとに戻ってくるということなのか。そうであれば、やはりイエスとは呼ばれないのだろうか。イエスが再び来るとき、時代はすでに変わっているが、それでもやはりイエスと呼ばれることがあり得るのか。神はイエスという名でしか知られないということなのか。神が新しい時代に新しい名で呼ばれることはないのか。ひとりの人の姿とある特定の名前が神の全体を表わすことができるのか。それぞれの時代、神は新しい働きを行ない、新しい名で呼ばれる。どうして神が異なる時代に同じ働きを行なえるのか。どうして神が古いものにしがみつけるというのか。イエスの名は贖いの働きのために使われたが、それならば終わりの日にイエスが再臨するとき、依然として同じ名前で呼ばれるのだろうか。イエスはまだ贖いの働きを行なっているのだろうか。ヤーウェとイエスは一つでありながら、異なる時代に異なる名前で呼ばれるのはなぜか。それは働きの時代が違うからではないのか。一つの名前で神の全体を表わすことができるのだろうか。そのようなわけで、神は異なる時代に異なる名前で呼ばれなければならない、名前を使って時代を変え、時代を表わさなければならない。なぜなら、一つの名前だけで神を完全に表わすことはできず、それぞれの名前はある時代における神の性質の一時的な側面しか表わせないからである。必要なのは、神の働きを表わすことだけである。よって、神は時代全体を表わすために、どんな名前であれ自身の性質に合う名前を選ぶことができる。ヤーウェの時代であれ、イエスの時代であれ、それぞれの時代は名前によって表わされている。恵みの時代の終わりに最後の時代が来て、イエスはすでに到来した。それなのに、神はどうしていまだにイエスと呼ばれ得るのか。どうして人々のあいだでイエスの姿をとれるのだろうか。イエスはナザレ人の姿に過ぎなかったことを忘れたのか。イエスは人類の贖い主でしかなかったことを忘れたのか。どうしてイエスが終わりの日に人を征服し、完全にする働きに取り組めるというのか。イエスは白い雲に乗って去って行った。それは事実である。しかし、イエスが白い雲に乗って人間のもとに帰ってきて、依然イエスと呼ばれることなどどうしてあり得ようか。イエスが本当に雲に乗って来たなら、人間が認識できないのはどういうことだろうか。世界中の人々がイエスを認識するのではないだろうか。その場合、

イエスだけが神だということになるのではないか。その場合、神の姿はユダヤ人の外見であり、またそれ以上に、永遠に同じということになるはずだ。イエスは、自分は去ったときと同じように来ると言ったが、その言葉の本当の意味をあなたは知っているのか。あなたがたの集団に告げたということがあり得るのか。あなたが知っているのは、イエスは去ったときと同じく、雲に乗って来るということだけである。しかし、神自身がいかに自分の働きを行なうのか、あなたは正確に知っているのか。あなたが本当にわかっているのなら、イエスが語った言葉はいかに説明されるのか。イエスは、「人の子が終わりの日に来るとき、人の子自身それを知らず、天使たちも知らず、天の御使たちも知らず、すべての人も知らない。ただ父だけが知っている。つまり、霊だけが知っている」と言った。人の子自身でさえ知らないというのに、あなたは知り、見ることができるのか。あなたが自分の目で見て知ることができるのであれば、これらの言葉は無駄に語られたことにならないだろうか。そしてその際、イエスは何と言ったのか。「その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう。……だから、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。」その日がいつ来るのかは、人の子自身も知らない。人の子とは神の受肉した肉体のことであり、普通で平凡な人である。人の子自身でさえ知らないのに、どうしてあなたが知り得るのか。イエスは、去った時と同じように来ると言った。いつ来るのかは、イエス自身も知らないのである。ならば、イエスがあなたに前もって知らせることができるだろうか。あなたは彼の到来を見ることができるのか。それは冗談ではないのか。神は地上に来るたび、自身の名前、性別、姿、働きを変えるものの、自身の働きを繰り返すことはない。神は常に新しく、決して古くない神である。以前に来たとき、神はイエスと呼ばれた。再び到来した今回、神はやはりイエスと呼ばれ得るのか。以前に来たとき、神は男性だった。今回も男性であり得るのか。神が恵みの時代に来たとき、その働きは十字架にかけられることだった。神が再び来るとき、依然として人類を罪から贖い得るのか。再び十字架にかけられ得るのか。それは自身の働きを繰り返すことではなかろうか。神は常に新しく、決して古くないことを知らないのか。神は不変だという人たちがいる。それは正しいが、そのことは神の性質と本質が変わらないことを指している。神の名前と働きの変化は、神の本質が変わったことを証明しているのではない。言い換えるなら、神は常に神であり、これは決して変わらない。神の働きは決して変わらないと言うのなら、神が六千年にわたる自身の経営（救いの）計画を終えることはできるだろうか。あなたは神が永遠に不変であることしか知らないが、神は常に新しく決して古くないことを知っているの

か。神の働きが決して変わらないなら、神は人類を現代までずっと導くことができたのだろうか。神が不変なら、すでに二つの時代の働きを行なったのはなぜか。神の働きは止まることなく前進している。つまり、神の性質が徐々に人間に明かされており、そして明かされているのは神の本来の性質である。最初のこと、神の性質は人から隠されていて、神は決して自身の性質を人に公然と明かさず、人は神についての認識がまったくなかった。そのため、神は働きを用いて自身の性質を徐々に人に明かした。しかし、そのように働くことは、神の性質が時代ごとに変化するという意味ではない。神の旨が常に変わるために、神の性質が絶えず変化しているということではない。むしろ、神の働きの時代が異なるため、神は自身の本来の性質全体を一つひとつ人に明かし、それによって人は神を知ることができるのである。しかしそれは、神がもともと特有の性質をもたないことの証明でも、神の性質が時代と共に徐々に変わっていったことの証明でもない。そのような理解は間違いだと言えよう。時代の移り変わりに応じて、神は人に対し、自身だけがもつ固有の性質、すなわち神そのものを明らかにする。一つの時代の働きで神の性質全体を表現することはできない。だから「神は常に新しく、決して古くない」という言葉は神の働きを指しているのであり、また「神は不変である」という言葉は、神が本来所有するものと神そのものを指しているのである。いずれにせよ、六千年の働きを一点に絞ることはできないし、死んだ言葉で限定することもできない。そのようなことは人間の愚かさである。神は人が想像するほど単純ではないし、神の働きが一つの時代に留まることもあり得ない。たとえば、ヤーウェは常に神の名前を表わすわけではない。神はイエスの名のもとでも働くことができる。そのことは、神の働きが常に前へと進んでいることのしるしである。

神は常に神であり、決してサタンになることはない。サタンは常にサタンであり、決して神になることはない。神の知恵、神の素晴らしさ、神の義、そして神の威厳は決して変わることはない。神の本質、神が所有するものと神そのものは決して変わることはない。しかし、神の働きについて言えば、それは常に前へと進んでおり、絶えず深化している。神は常に新しく、決して古くないからである。神は時代ごとに新しい名前を名乗り、時代ごとに新しい働きを行ない、また時代ごとに、被造物に対して自身の新しい旨と新しい性質を見せる。新しい時代において、もし人々が神の新しい性質の表われを見られなければ、彼らは永遠に神を十字架にかけるとは思っていないだろうか。またそうすることで、神を定義するのではないだろうか。もしも神が男性としてのみ受肉したならば、人々は神を男性として、男たちの神として定義し、女たちの神だとは決して信じないはずだ。すると男たちは、神は自分たちと同じ性別であり、男たちの長であるとするだろう。しかし、女たちにとって

は何になるのか。これは不公平であるし、えこひいきではないか。そうであれば、神が救ったすべての人は神と同じ男ということになり、女は一人も救われないということになる。神は人類を創造したとき、アダムを創り、そしてエバを創った。神はアダムだけを創造したのではなく、自分にかたどって男と女の両方を創ったのである。神は男たちだけの神ではなく、女たちの神でもある。神は終わりの日における新たな働きの段階に入っている。神は自身の性質をより一層明らかにするが、それはイエスの時代の憐れみと愛ではない。神の手には新たな働きがあるので、それは新たな性質を伴う。ゆえに、もしもこの働きが霊により行なわれたならば、つまり神が受肉せず、代わりに霊が雷鳴を通じて直接語り、人間には神と直接接触する術がないようにしたならば、人間は神の性質を知ることができるだろうか。もしもこの働きを行なうのが霊だけであれば、人間に神の性質を知る術はないだろう。人々が神の性質を自らの目で見ることができるのは、神が肉となると、言葉が肉において現われるとき、そして神が自身の性質全体を肉によって表現するときだけである。神は本当に、真に人間のあいだで暮らしている。神は触れることができ、人間は神の性質、および神が所有するものと神そのものと実際に関わりをもつことができる。そうすることでのみ、人間は真に神を知るようになるのである。また同時に、神は「男たちの神であり、女たちの神である」という状態での働きを完了させ、肉における自身の働きを残らず成し遂げた。どの時代においても、神は自身の働きを繰り返さない。終わりの日が到来したので、神は終わりの日に行なう働きを行ない、終わりの日における自身の性質を余すところなく現わす。終わりの日と言うとき、それは別の時代を指しており、その際イエスは、あなたがたは必ずや災害に見舞われ、地震、飢饉、疫病に遭遇すると言ったが、そのことは、それが新しい時代であり、もはや古くなった恵みの時代ではないことを示す。人々が言うように、神が永久に不変で、その性質は常に憐れみ深く慈愛に満ち、人間を自身のように愛し、すべての人に救いを提供し、決して人を憎むことがないのなら、神の働きが終わりを迎えることは果たしてあるだろうか。到来して十字架にかけられ、すべての罪人のために自分を犠牲にし、自身を祭壇に捧げたとき、イエスはすでに贖いの働きを完了させ、恵みの時代に終止符を打っていた。ならば、終わりの日にその時代の働きを繰り返す意味は何だろうか。同じことをするのは、イエスの働きを否定することではないだろうか。もしも神がこの段階に来た際に磔刑の働きを行なわず、慈愛に満ちて憐れみ深いままならば、時代を終わらせることができるだろうか。慈愛に満ちて憐れみ深い神は、その時代に終止符を打つことができるだろうか。時代を終わらせる神の最後の働きにおいて、神の性質は刑罰と裁きであり、神はその中で不義なるすべてのものを暴き、それによってすべての人を公然と裁き、

真摯な心で神を愛する人たちを完全にする。このような性質だけが時代を終わらせることができる。終わりの日はすでに来ている。すべての被造物は種類ごとに選り分けられ、その本性を基にして異なる種類に分けられる。その瞬間、神は人の結末と終着点を明らかにする。もし人が刑罰と裁きを受けなければ、その人の不従順と不義を暴く術はない。刑罰と裁きを通じてでなければ、すべての被造物の結末を明らかにすることはできない。罰せられ、裁かれて初めて、人は本当の姿を示す。悪は悪と共に、善は善と共に置かれ、すべての人は種類ごとに選り分けられる。刑罰と裁きを通じ、すべての被造物の結末が明らかにされ、それによって悪人は罰せられ、善人は報いられる。そして、すべての人が神の支配に従属することになる。この働きのすべては義なる刑罰と裁きを通じて達成されなければならない。人の墮落は頂点に達し、人の不従順は極度に深刻になってしまったので、おもに刑罰と裁きから成り、終わりの日に明らかにされる神の義なる性質だけが、人をすっかり変えて完全な者としてすることができる。この性質だけが悪を暴き、よってすべての不義なる者を厳しく懲罰することができる。したがって、このような性質には時代の意義が吹き込まれており、神の性質はそれぞれの新しい時代における働きのために顕示され、表出される。そのことは、神が自身の性質を気まぐれに意味もなく明らかにするということではない。終わりの日に人の結末を明らかにする中で、神が依然として人に無限の憐れみと愛を授け、相変わらず人に愛情深く、人を義なる裁きにさらさず、むしろ寛容、忍耐、赦しを示し、人がどんなに深刻な罪を犯してもそれを赦し、義なる裁きが少しもないのであれば、神の経営のすべてはいったいいつ終わりを迎えるだろうか。このような性質がいつ人々を導き、人類の正しい終着点へと連れ出せるだろうか。いつも愛情に満ちている裁判官、優しい表情と柔和な心をもつ裁判官を例に取ってみよう。この裁判官は犯した罪に関係なく人々を愛し、また相手が誰であっても、愛情深く寛容である。そうであれば、いったいいつ正しい判決にたどり着けるのか。終わりの日には、義なる裁きだけが人を種類ごとに選り分け、新しい領域に連れて行くことができる。このように、裁きと刑罰から成る神の義なる性質を通じ、時代全体に終わりがもたらされるのである。

神の経営のすべてにおよぶ神の働きは完全に明白である。恵みの時代は恵みの時代であり、終わりの日は終わりの日である。それぞれの時代には明確な違いがある。と言うのも、神はそれぞれの時代にその時代を表わす働きを行なうからである。終わりの日の働きがなされるには、その時代を終わらせる燃焼、裁き、刑罰、怒り、破壊がなければならない。終わりの日は最後の時代を指している。最後の時代において、神は時代を終わらせないのか。時代を終わらせるため、神は自ら刑罰と裁きをもたらさなければならない。このようにしてのみ、神は時代を終わらせる

ことができる。イエスの目的は、人が生存して生き続けられるようにすること、そしてより良い方法で存在できるようにすることだった。人が墮落に陥るのをやめ、それ以上ハデスと地獄の中で生きることがないよう、イエスは人間を罪から救い、また人間をハデスと地獄から救い出すことで、その人が生き続けられるようにした。今や終わりの日は来ている。神は人を絶滅させ、人類を完全に滅ぼすだろう。つまり、神は人類の反逆心を変えるのである。そのため、神が憐れみ深く愛に満ちたかつての性質をもって時代を終わらせるのは不可能であり、六千年にわたる経営計画を結実させることもできないだろう。すべての時代は神の性質の特別な表われを特徴とし、すべての時代は神によってなされるべき働きを含んでいる。したがって、それぞれの時代で神自身によってなされる働きは神の真の性質の表現を含んでおり、神の名前と神の行なう働きはいずれも時代とともに変わり、それらはすべて新しい。律法の時代、人類を導く働きはヤーウェの名のもとになされた。そして第一段階の働きは地上で始められた。この段階において、働きは神殿と祭壇を建てること、および律法を用いてイスラエルの人々を導き、彼らのさなかで働くことから成っていた。イスラエルの人々を導くことで、神は地上における働きの拠点を築いた。この拠点から、神は自身の働きをイスラエルの外に拡張させた。すなわち、イスラエルを皮切りに、自身の働きを外に向けて拡張したのである。それにより、後の世代は徐々に、ヤーウェが神であること、天地と万物を造ったのがヤーウェであること、そしてすべての被造物を造ったのもヤーウェであることを知るようになった。神はイスラエルの人々を通じ、自身の働きを外に向けて広めた。イスラエルの地は地上におけるヤーウェの働きの最初の聖なる地であり、神が地上で働きを行なうべく最初に來たのもイスラエルの地だった。それが律法の時代の働きだった。恵みの時代、イエスは人を救う神だった。イエスが所有するものとイエスそのものは恵み、愛、憐れみ、慎み、忍耐、謙遜、思いやり、寛容であり、イエスが行なった働きの多くは人の贖いのためだった。イエスの性質は憐れみと愛であり、イエスは憐れみと慈愛に満ちていたので、人間のために十字架にかけられる必要があった。そうすることで、神は自身のすべてを捧げるほど、人類を自分のように愛していることを示したのである。恵みの時代、神の名はイエスであり、それはつまり、神は人類を救う神であり、憐れみと慈愛に満ちていたということである。神は人と共にいた。神の愛、神の憐れみ、そして神の救いは一人ひとりに伴っていた。イエスの名前と存在を受け入れることでのみ、人は平安と喜びを得ることができ、神の祝福、無数の大いなる恵み、そして救いを受け取ることができたのである。イエスの磔刑を通じ、イエスに従うすべての人が救いを受け、その罪が赦された。恵みの時代、イエスは神の名だった。つまり、恵みの時代の働きはおもにイエスの名のもと

でなされたのである。恵みの時代において、神はイエスと呼ばれた。イエスは旧約聖書を越えて新しい働きの段階に着手し、その働きは磔刑で終わった。それがイエスの働きのすべてだった。したがって、律法の時代においてはヤーウェが神の名であり、恵みの時代においてはイエスの名が神を表わした。終わりの日、神の名は全能神、すなわち全能者であり、自身の力で人を導き、人を征服し、人を自分のものとし、最終的にはその時代を終わらせる。どの時代でも、また神の働きのどの段階でも、神の性質は明らかである。

最初、旧約聖書の律法の時代に人間を導くのは、子どもの生活を導くようなものだった。原初の人類はヤーウェから生まれたばかりで、彼らこそイスラエル人だった。彼らはいかに神を崇めるべきかも、いかに地上で生きるべきかも分からなかった。言うなれば、ヤーウェは人類を創造したが、つまりアダムとエバを造ったが、ヤーウェをいかに崇めるべきかや、地上におけるヤーウェの掟をいかに守るべきかを理解する能力を人類に与えなかったのである。ヤーウェによる直接の導きがなければ、誰もそれらを直接知ることはできなかった。最初のうち、人間はそのような能力をもっていなかったからである。人間はヤーウェが神であるということだけを知っており、いかに神を崇めるべきか、どのような行為が神を崇めることだと言えるのか、どのような心で神を崇めるべきか、あるいは神への畏敬のしるしとして何を捧げるべきかについて、何一つまったく知らなかった。人間は、ヤーウェが創造した万物のなかで享受できるものをいかに享受するかしか知らなかった。地上におけるこういった生活が神の被造物にふさわしいかということについて、人間は少しも知らなかった。彼らに指導する者、彼らを直接導く者がいなければ、このような人間たちは人類にふさわしい生活を送ることなく、密かにサタンの虜にされていただけだろう。ヤーウェは人類を創造したが、つまり人類の祖先であるエバとアダムを造ったが、それ以上に知性や知恵を与えなかった。彼らはすでに地上で暮らしていたが、ほとんど何も理解していなかった。そのため、人類の創造におけるヤーウェの働きは半分しか完了しておらず、完成にはほど遠かった。ヤーウェは土で人間の雛形を造り、それに息を吹き入れただけで、人間に神を崇めようという十分な意欲を授けることはなかった。最初のこと、人間は神を崇めたり恐れたりする心をもたなかった。神の言葉に耳を傾けることを知っていただけで、地上の生活についての基本的知識や人間生活の正しい規則に関しては無知だった。このようなわけで、ヤーウェは男と女を造り、七日間の計画を終えたものの、人間の創造を完成させることは決してなかった。人間は殻でしかなく、人であることの現実を欠いていたからである。人は、人類を創造したのがヤーウェであることしか知らず、ヤーウェの言葉や律法にどう従うべきかについては何も知らなかった。だから人類が存

在するようになった後も、ヤーウェの働きは完成からほど遠かった。それでもヤーウェは、人々が地上で共に暮らし、ヤーウェを崇めることができるよう、またヤーウェの導きのもと、人々が地上における正常な人間生活の正しい軌道に入れるよう、人間をしっかりと導き、自身の面前に来させる必要があった。そうすることでのみ、おもにヤーウェの名のもとで行なわれた働きはすっかり完成された。つまり、そのようにして初めて、ヤーウェの創世の働きが完全に完了したのである。このように、人類を創造したヤーウェは、人類がヤーウェの命令と律法に従い、地上における正常な人間生活のあらゆる活動に携われるよう、地上における人類の生活を何千年間も導かねばならなかった。そのとき初めてヤーウェの働きは完全に完成したのである。ヤーウェは人類を創造した後でこの働きに着手し、ヤコブの時代まで、つまりヤコブの十二人の息子たちをイスラエルの十二部族にするまで続けた。それ以降、イスラエルのすべての人が地上で正式にヤーウェによって導かれる人種となり、イスラエルはヤーウェが自身の働きを行なう、地上における特別な場所となった。ヤーウェはこれらの人々を、自身が地上において正式に働きかける最初の集団とし、イスラエルの全土を自身の働きの発祥の地としたうえで、彼らをさらに偉大な働きの先駆けとして用いた。そうすることで、ヤーウェから生まれた地上のすべての人が、いかにヤーウェを崇めるべきか、いかに地上で生きるべきかを知るようにしたのである。このように、イスラエル人の行ないは、異邦の民族の人々が後につくべき模範となり、またイスラエルの人々のあいだで語られたことは、異邦の民族の人々が耳を傾けるべき言葉となった。なぜなら、イスラエルの人々はヤーウェの律法と掟を受け取った最初の民であり、ヤーウェのさまざまな道をいかに崇めるべきかを最初に知った民だったからである。イスラエルの人々はヤーウェの道を知る人種の祖先であり、ヤーウェに選ばれた人種の代表でもあった。恵みの時代が到来したとき、ヤーウェはもはや人間をこのようには導かなかった。人間は罪を犯し、自らを罪にゆだねてしまっていたので、神は人間を罪から救い始めた。このように、人間が罪から徹底的に救い出されるまで、神は人間をとがめた。終わりの日、人間はそこまで墮落してしまったので、この段階の働きは裁きと刑罰を通じてでなければ行なうことができない。この方法によってのみ、働きは達成され得る。これは複数の時代の働きだった。つまり、神は自らの名前、働き、そして異なる神の姿を使って各時代を区切るとともに、それらに移り変わらせるのである。神の名前と働きは、神の時代と各時代における神の働きを表わすのである。どの段階においても神の働きが常に同じで、神がいつも同じ名前と呼ばれるなら、人はどのように神を知るのだろうか。神はヤーウェと呼ばれなければならない、ヤーウェと呼ばれる神以外に、他の名前と呼ばれるものは神ではない。あるいは、神はイエスとだけ

呼ばれ、イエスという名前を除き、他の名で呼ばれることはない。イエスを別にすれば、ヤーウェは神でなく、全能神も神ではない。神は全能だと人は信じているが、神は人とともにいる神である。そして神は人とともにいるのだから、イエスと呼ばれなければならない。そうすることは教義に従い、神を一定の範囲に束縛することである。ゆえに、それぞれの時代で神が行なう働き、神が呼ばれる名前、神がとる姿、すなわち今日に至るまでの各段階で神が行なう働きは、一つの規律に従うものではないし、いかなる制限を受けることもない。神はヤーウェであり、しかしイエスでもあり、メシヤ、全能神でもある。神の働きは徐々に変わることができ、それにあわせて神の名も変化する。どの一つの名も神を完全に表わすことはできないが、神が呼ばれるすべての名は神を表わすことができ、神が各時代に行なう働きは神の性質を表わしている。終わりの日が訪れるとき、あなたの目にする神が依然としてイエスであり、またそれ以上に、神が白い雲に乗って来て、依然としてイエスの姿をしており、その話す言葉はイエスの言葉のままで、次のように言ったとしよう。「あなたがたは自分のように隣人を愛し、断食して祈り、自分のいのちを大事にするように敵を愛し、他の人に寛容であり、忍耐強く、謙虚であるべきだ。わたしの弟子になる前に、これらのことをすべて実行しなければならない。そうすることで、あなたがたはわたしの国に入ることができる」。これは恵みの時代の働きに属するものではないだろうか。神が述べているのは恵みの時代の道ではないだろうか。これらの言葉を聞くことになれば、あなたがたはどう感じるだろうか。これはやはりイエスの働きだと思わないだろうか。それはイエスの働きを繰り返しているのではないだろうか。人はそこに喜びを見出せるだろうか。あなたがたは、神の働きは今のままで留まり、これ以上進歩しないと感じているかもしれない。神にはそれほど力しかなく、行なうべき新しい働きはこれ以上ないのであって、神は力を使い果たした、と。今から二千年前は恵みの時代であり、それから二千年後、神は依然として恵みの時代の道を説き、依然として人々に悔い改めさせている。人々は「神よ、あなたにはそれほど力しかありません。あなたはとても知恵のあるお方だと、わたしは信じていました。でもあなたは寛容しかご存知でなく、忍耐ばかり気にしておられます。また敵を愛す方法しかご存知でなく、他には何もありません」と言うかもしれない。人の心の中で、神は永遠に恵みの時代の神のままであり、神は慈愛に満ちて憐れみ深いと、人はいつまでも信じている。あなたは、神の働きは常に同じ古い場所で足踏みしていると思っているのか。ゆえに神の働きのこの段階において、神が十字架にかけられることはなく、あなたがたが見て触れるすべてのものは、想像したり聞かされたりしてきたこととまったく異なるだろう。今日、神はパリサイ人とは関わらず、世界が知ることを許してもいい。そして神を

知るのは、神に従うあなたがただけである。なぜなら、神が再び十字架にかけられることはないからである。恵みの時代、イエスは自身の福音の働きのために全土で公に教えを説いた。イエスは磔刑の働きのためにパリサイ人と関わった。もしもイエスがパリサイ人と関わり合いにならず、権力者たちがイエスのことを知らなかったならば、どうしてイエスが断罪され、そして裏切られて十字架にかけられるということがあり得ただろうか。したがって、イエスは十字架にかけられるためにパリサイ人と関わったのである。今日、神は試みを避けるべく秘密裏に働きを行なう。二度にわたる神の受肉において、その働きと意義は異なっており、設定も異なっているのだから、どうして神の行なう働きがまったく同じであり得るだろうか。

「神はわたしたちと共におられる」というイエスの名は、神の性質の全体を表わせるだろうか。神を完全に表現できるだろうか。もしも、神は自身の性質を変えることができないので、イエスと呼ばれることしかできず、他の名をもつことはないと言われれば、それらの言葉はまさに冒涇である。あなたは、「神は共におられる」というイエスの名前だけで神の全体を表せると信じているのか。神は多くの名で呼ばれ得るが、それらの多くの名前の中に、神のすべてを要約できるものは一つとしてなく、神を完全に表わせるものもない。それゆえ、神は多くの名前をもっているが、これらの多くの名が神の性質を余すところなく明確に表現することはできない。なぜなら、神の性質はあまりにも豊かで、神に関する人の認識能力を完全に越えているからである。人が人間の言語を使うことで、神を完全な形で要約することはできない。神の性質について自分たちが知っているすべてのことを要約するにあたり、人間には限られた語彙しかない。偉大な、りっぱな、驚くべき、計り知れない、至高の、聖なる、義なる、知恵に満ちたなど、何と多くの言葉があることか。この限られた語彙では、人間が神の性質に関して目の当たりにしたことを、ほんの少しでも記述することは不可能である。やがて、自分の心の中の熱情をもっと上手に記述できるはずだと、他の多くの人がさらに言葉を追加した。神はとても偉大だ。神はとても神聖だ。神はとても美しい。今日、人間がこのように言うことはその頂点に達しているが、それでも自分自身を明確に表現できずにいる。だから、人間にとって神には多くの名前があるものの、神がもつのは一つの名前ではない。なぜなら、神の存在はあまりに豊富で、人間の言語はあまりに乏しいからである。ある一つの特定の言葉や名前では、神の全体を表わすことができない。そうであれば、神の名は固定され得るとあなたは考えているのか。神は極めて偉大で聖いのに、神がそれぞれの新しい時代に名前を変えるのを許さないつもりなのか。したがって、神は自ら働きを行なうそれぞれの時代に、自身が行なおうとしている働きを要約するため、その時代に合った名前を用いるのである。神はその時代における

自身の性質を表わすために、一時的な意義を有する特定の名前を用いる。これは、神が自身の性質を表現するために人間の言語を用いるということである。たとえそうでも、霊的な体験をして神をじかに見たことがある多くの人は、この特定の名前が神の全体を表わすことはできないと感じている。ああ、何と救いがたいことか。そのせいで、人間はもはや神を名前で呼ぶことはなく、ただ「神」と呼ぶのである。それはあたかも、人間の心が愛であふれていながら、同時に矛盾に悩まされているかのようである。人間は神をいかに説明すればよいか分からないからである。神そのものは極めて豊かなので、それを表現する術はまったくない。神の性質を要約できる一つの名前はなく、神が所有するものと神そのものを余すところなく表現できる一つの名前もないのである。もしも誰かがわたしに「あなたはいったい何という名前を使うのですか」と尋ねるならば、こう答えるだろう。「神は神である」と。これこそが神にとって最良の名前ではないのか。神の性質の最高の要約ではないのか。そうであれば、神の名を求めてなぜそんなに苦労するのか。どうして名前のことで寝食を忘れ、頭脳を振り絞るのか。神がヤーウェ、イエス、あるいはメシアと呼ばれない日がやって来るだろう。神はただ創造主と呼ばれるのである。その時、神が地上で名乗ったすべての名前は終わりを迎える。なぜなら、地上における神の働きが終わり、その後神の名はなくなるからである。万物が創造主の支配下に入るとき、神がどうして適切ではあるが不完全な名前をもつ必要があるのか。あなたは今なお神の名を求めているのか。神はヤーウェとしか呼ばれないとあえていまだに言うつもりか。神はイエスとしか呼ばれないとあえていまだに言うつもりか。神を冒瀆する罪を背負えるのか。神は本来どんな名前ももたなかったということを知るべきである。神には行なうべき働きがあり、人類を経営しなければならなかったのだから、一つや二つの、あるいは多くの名前を名乗っただけのことである。どのような名で呼ばれるにしても、神はそれを自ら自由に選んだのではないか。神がそれを決めるのに、被造物の一つであるあなたを必要とするだろうか。神が呼ばれる名前は、人が理解できること、および人の言語に沿うものだが、その名前は人が考え出せるものではない。天には神がいて、それは神と呼ばれ、偉大な力をもつ神自身であり、大いに知恵があり、大いに高められ、大いに素晴らしく、大いに神秘的で、大いに全能であるとしかあなたは言えず、それ以上は言うことができない。あなたが知り得るのはこのわずかなことだけである。そうであれば、たかだかイエスの名だけで神自身を表わすことができるだろうか。終わりの日が来るとき、神の働きは依然として神が行なうものの、時代が異なるので神の名は変わらなければならないのである。

全宇宙、そしてその上の世界において最も偉大である神は、肉体の姿を用いて自

分自身を完全に説明することができるだろうか。神がその肉体をまとうのは、自身の働きの一段階を行なうためである。その肉体の姿には特に何の重要性もなければ、時代の推移とも無関係であり、神の性質とも関係がない。なぜイエスは自分の姿が残るようにしなかったのか。なぜ自分の姿を人に描かせ、それが後の世代に伝えられるようにしなかったのか。イエスの姿は神の姿であると、なぜ人々に認めさせなかったのか。人の姿は神のかたちに創造されたが、人間の外見が神の崇高なる姿を表現するということは果たして可能なのか。神は肉となる時、天からある特定の肉体へと降臨するだけである。肉体に降臨するのは神の霊であり、神はそれを通じて霊の働きを行なう。肉において表わされるのは神の霊であり、肉において働きを行なうのも神の霊である。肉において行なわれる働きは霊を余すところなく表わしており、その肉体は働きのためにある。しかしそれは、その肉の姿が神自身の真の姿の代わりになれるという意味ではない。それは、神が肉となる目的でも意義でもないのである。神が肉となるのは、ただ霊が自分の働きに適した住みかを見つけ、肉における働きをよりよく成し遂げるためである。そうすることで、人々は神の業を見、神の性質を理解し、神の言葉を聞き、神の働きの不思議を知るのである。神の名前は神の性質を表わし、神の働きは神の身分を表わすが、受肉した神の外見が神の姿を表わすと神が言ったことはない。それは単に人間の観念である。だから、神の受肉にまつわる重要な側面は神の名前、働き、性質、そして性別である。これらは、この時代における神の経営を表わすために用いられる。受肉した神の外見は神の経営とは無関係であり、そのときの神の働きのために過ぎない。しかし、受肉した神が特定の外見をもたないということは不可能なので、神は適切な家族を選んで自身の外見を決める。もしも神の外見に何か表現的な意義があるのなら、神と同じような顔立ちをしている人も全員神を表わしていることになる。これはあまりにひどい間違いではないだろうか。人が礼拝するようにと、イエスの肖像画は人間によって描かれた。そのとき、聖霊は特別な指示を与えなかったので、人は想像によるその肖像画を今日まで伝えた。実を言うと、神の本来の意図によれば、人間はこうすべきではなかった。イエスの肖像画が今日まで残るようになったのは、ひとえに人間の熱意のせいである。神は霊であり、神の姿がどのようなものであるかを、人間が最終的に要約することは決してできない。神の姿は神の性質によってしか表現できないのである。神の鼻、口、目、頭髮の外見について、それらを要約するのはあなたの能力を超えることである。ヨハネは啓示を受けたとき、人の子の姿を見た。その口からは鋭いもろ刃のつるぎが突き出ており、その目は燃える炎のようであり、その頭と髪の毛は羊毛のように白く、その足は光り輝く銅のようで、その胸には金の帯をしめていた。ヨハネの言葉は極めて鮮明だが、彼が描

写した神の姿は、何らかの被造物の姿ではなかった。ヨハネが見たのは幻に過ぎず、物質世界の人の姿ではなかった。ヨハネは幻を見たが、神の本当の外見を目にすることはなかった。受肉した神の肉体の姿は、一つの被造物の姿であり、神の性質全体を表わすことはできない。ヤーウェは人類を創造したとき、自分自身のかたちにかたどって人を創り、男と女を創ったと言った。そのとき、ヤーウェは神のかたちに男と女を創造したと言った。人間の姿は神の姿に似ているが、人間の外見が神の姿であるという意味に解釈することはできない。また、人類の言語を使って神の姿を完全に要約することもできない。なぜなら、神はかくも崇高で、かくも偉大で、かくも不思議に満ち、かくも計り知れないからである。

イエスが自身の働きを行なうために来たとき、それは聖霊の指示によるものだった。イエスは聖霊の望み通りに行ない、それは旧約聖書の律法の時代にしたがうものでも、ヤーウェの働きにしたがうものでもなかった。イエスが来て行なった働きは、ヤーウェの律法やヤーウェの戒めを遵守することではなかったが、それらの源泉は同じ一つのものだった。イエスが行なった働きはイエスの名を表わし、恵みの時代を代表した。ヤーウェによってなされた働きについて言えば、それはヤーウェを表わし、律法の時代を代表した。それらの働きは二つの異なる時代における一つの霊の働きだった。イエスが行なった働きは恵みの時代しか代表できず、ヤーウェが行なった働きは旧約聖書の律法の時代しか代表できなかった。ヤーウェはイスラエルの民とエジプトの民を導き、そしてイスラエル以外のあらゆる国の民を導いただけだった。新約聖書の恵みの時代におけるイエスの働きは、神がその時代を導く中で、イエスの名のもとで行なう働きだった。イエスの働きはヤーウェの働きに基づいていて、新しい働きに一切着手せず、イエスが行なったのはヤーウェの言葉にしたがい、ヤーウェの働きとイザヤの預言にしたがうことだけだったと言うのなら、イエスは肉となった神ではなかったはずだ。仮にイエスがそのような形で自身の働きを行なっていたなら、イエスは律法の時代の使徒もしくは働き手だったはずである。もしもあなたの言う通りなら、イエスは一つの時代を始めることも、他の働きを行なうこともできなかっただろう。同じように、聖霊はおもにヤーウェを通じてその働きを行なわなければならず、またヤーウェを通じてでなければ、いかなる新しい働きもできなかっただろう。人がイエスの働きをこのように理解するのは間違っている。イエスによる働きがヤーウェの言葉とイザヤの預言にしたがってなされたと信じるなら、イエスは受肉した神だったのか、それとも預言者の一人だったのか。この見方によれば、恵みの時代などというものはなく、イエスは神の受肉ではなかったということになる。と言うのも、イエスが行なった働きは恵みの時代を表わすことができず、旧約聖書の律法の時代しか表わせなかったからである。あ

り得るのは新しい時代だけであり、そのときイエスが来て新しい働きを行ない、新しい時代を始め、イスラエルで以前に行なわれた働きを打ち破り、イスラエルでヤーウェが行なった働き、ヤーウェの古い規則、あるいは何らかの規制にしたがって自身の働きを行なうのではなく、むしろなすべき新しい働きを行なったのである。神自身が時代を始めるために来て、神自身が時代を終えるために来るのである。人は時代を始めたり、時代を終えたりする働きをすることができない。到来したイエスがヤーウェの働きを終わらせなかったら、そのことは、イエスはただの人であり、神を表わすことができなかったという証明になるだろう。イエスが来てヤーウェの働きを終わらせ、ヤーウェの働きを引き継ぎ、またそれ以上に自分自身の働き、つまり新しい働きを行なったからこそ、それは新しい時代で、イエスは神自身だったことが証明される。両者ははっきり異なる二つの段階の働きを行なったのである。一つの段階は神殿の中でなされ、もう一つは神殿の外でなされた。一つの段階は律法にしたがって人の生活を導くことであり、もう一つは罪の捧げ物を供えることだった。これら二つの段階の働きは明確に異なっていた。それは新しい時代と古い時代を分け、それらは二つの異なる時代だと言うのは絶対に正しい。両者の働きの場所は異なり、働きの内容も異なり、働きの目的も異なっていた。そのため、それらは二つの時代に区分することができる。つまり新約聖書と旧約聖書であり、すなわち新しい時代と古い時代である。到来したイエスは神殿に入らなかった。そのことは、ヤーウェの時代がすでに終わっていたことを証明する。イエスが神殿に入らなかったのは、神殿におけるヤーウェの働きが終わっており、再度行なわれる必要がなく、再度行なうことは繰り返しになるからである。神殿を離れ、新しい働きを開始し、神殿の外で新しい道を切り開くことでのみ、イエスは神の働きを絶頂に至らせることができたのである。イエスが神殿の外に出て自身の働きを行なっていなければ、神の働きは神殿の基礎に停滞し、なんら新しい変化は起きなかっただろう。だから到来したイエスは神殿に入らず、神殿の中で働きを行なうこともなかったのである。イエスは神殿の外で自身の働きを行ない、弟子を率いて自由に働きに取り組んだ。神が神殿を離れて働きを行なったことは、神に新しい計画があることを意味していた。神の働きは神殿の外で行なわれることになっており、それは実行する方法に拘束されない新しい働きのはずだった。イエスは到来するやいなや、旧約聖書の時代におけるヤーウェの働きを終了させたのである。両者は二つの異なる名前と呼ばれたが、二つの段階の働きを成し遂げたのは同じ霊であり、なされた働きは継続的なものだった。名前が違い、働きの内容も違っていったように、時代も違っていったのである。ヤーウェが来たとき、それはヤーウェの時代で、イエスが来たとき、それはイエスの時代だった。したがって、神は来るたびに一つ

の名で呼ばれ、一つの時代を表わし、新しい道を切り開く。それぞれの新しい道において神は新しい名を名乗り、またそのことは、神が常に新しく決して古くないことと、神の働きが絶えず前方に進んでいることを示すのである。歴史は常に前進しており、神の働きは常に前進している。六千年にわたる神の経営計画が終わりを迎えるには、前方へと進み続けなければならない。毎日、神は新しい働きを行なわなければならない、毎年、神は新しい働きを行なわなければならない。神は新しい道を切り開き、新しい時代を始め、新しくさらに偉大な働きを開始し、それらとともに新しい名前と新しい働きをもたらさなければならない。神の霊は刻一刻と新しい働きを行なっており、古いやり方や規則に固執することは決してない。また、神の霊の働きが止まったことは一度もなく、どの瞬間にも生じている。聖霊の働きは不変であると言うなら、ヤーウェが祭司に対し、神殿の中で自分に仕えるよう求めたのに、イエスが来たときには、彼は大祭司だとか、ダビデの家系で大祭司でもあり、偉大な王であると人々が言ったにもかかわらず、どうしてイエスは神殿に入らなかったのか。そしてなぜイエスはいけにえを捧げなかったのか。神殿に入ろうが入るまいが、これはすべて神自身の働きではないのか。もしも人が想像するように、イエスが再び到来し、終わりの日にいまだイエスと呼ばれ、依然として白い雲に乗り、イエスの姿のままで人のもとに降臨するなら、それはイエスの働きの反復ではないだろうか。聖霊が古いものにしがみつくなどあり得るのか。人が信じているものはすべて観念であって、人が理解しているものはすべて文字通りの意味、または人の想像力に沿ったものである。それらは聖霊の働きの原則と一致しておらず、神の意図に沿っていない。神はそのような形で働きを行なわないはずだ。神はそれほどばかでも愚かでもなく、神の働きはあなたが想像するほど簡単ではない。人が想像するあらゆることを基にすると、イエスは雲に乗って現われ、あなたがたの中に降りることになっている。あなたがたは、雲に乗りながら「自分はイエスだ」と告げる彼を見る。また、イエスの手にある釘の跡を見て、その人がイエスであることを知る。いのか。すべての人間はサタンによって墮落させられたのではないか。もしも神が人の観念に沿って自身の働きを行なったのなら、神はサタンということになるのではないか。神は自身の被造物と同じようなものだということにはならないか。神の被造物がサタンによって墮落させられるあまり、人はサタンの化身になったので、もしも神がサタンの物事に沿って働いたなら、神はサタンの仲間だということになるのではないか。どうして人が神の働きを理解できるのか。したがって、神が人の観念に沿って働きを行なうことは決してなく、あなたが想像するように働きを行なうこともない。自分は雲に乗って来ると神自身が述べたと言う人たちがいる。神自身がそう言ったのは確かだが、神の奥義を推し測れる人は誰もいないこと

を、あなたは知らないのか。神の言葉を説明できる人間は一人もいないことを、あなたは知らないのか。自分は聖霊に啓かれ、照らされていると、あなたはみじんの疑いもなく確信しているのか。当然それは、聖霊がそうした直接的な形であなたに示したわけではない。聖霊があなたに指示したのか、それともあなた自身の観念によってそう考えるようになったのか。あなたは「これは神自身によって述べられた」と言った。しかしわたしたちは、神の言葉を測るにあたって自分たちの観念や思考を用いることはできない。イザヤが語った言葉について言えば、あなたは絶対の確信をもって彼の言葉を説明することができるのか。あえてイザヤの言葉を説明するつもりなのか。イザヤの言葉をあえて説明するつもりがないのに、どうしてイエスの言葉をあえて説明しようとするのか。イエスとイザヤのどちらがより崇められているのか。答えはイエスであるのに、なぜイエスの語った言葉を説明するのか。神は自身の働きを前もってあなたに告げるだろうか。被造物の誰も、天の御使たちさえも、人の子でさえも知らないのに、どうしてあなたにわかるのか。人はあまりに多くのものを欠いている。あなたがたにとって今最も重要なのは、三段階の働きを知ることである。ヤーウェの働きからイエスの働きに至るまで、イエスの働きからこの現段階の働きに至るまで、これら三段階は神の経営全体を隙間なく覆うものであり、またそのすべてが一つの霊による働きである。創世以来、神は常に人類の経営にいそしんできた。神は初めにして終わりであり、最初にして最後であり、時代を始める存在にして時代を終わらせる存在である。異なる時代、異なる場所における三段階の働きは、間違いなく一つの霊の働きである。これら三段階を切り離す者はみな神に敵対している。今、第一段階から今日に至るまでの働きが、すべて一つの神の働きであり、一つの霊の働きであることを、あなたは理解しなければならない。そのことに疑いの余地はあり得ない。

受肉の奥義（１）

恵みの時代、ヨハネはイエスのために道を整えた。ヨハネに神自身の働きをすることはできず、ただ人の本分を尽くしただけである。ヨハネは主の先駆者だったが、神を表わすことはできなかった。聖霊に用いられる人に過ぎなかったのである。イエスがバプテスマを受けたあと聖霊が鳩の如くイエスの上に降り立った。それからイエスは自分の働きを始めた。つまり、キリストの職分を始めたのである。それが、イエスが神の身分をとった理由である。イエスは神から来たからである。これ以前のイエスの信仰がどのようなものであったとしても——時には弱く、時には強かっただろうが——それはすべてイエスが職分を始める前に過ごした、普通の

人の生活に属するものだった。イエスがバプテスマを受けた（油を注がれた）後、神の力と栄光がただちに備わり、それにより職分を始めた。イエスはしるしと不思議、奇跡を行なうことができ、力と権威を備えていた。神自身の代わりに自ら働きを行なったからである。イエスは霊に代わって霊の働きを行ない、霊の声を表現した。よって、イエスは神自身だった。そのことに反論の余地はない。ヨハネは聖霊に用いられた人間である。彼に神を表わすことはできず、また神を表わすことは彼にとって不可能だった。たとえそうしたいと望んでも、聖霊はそれを許さなかっただろう。と言うのも、神自身が成し遂げようとした働きを、ヨハネが行なうことはできなかったからである。おそらく、彼には人間としての意思、あるいは逸脱したものが数多くあったのだろう。どのような状況下においても、ヨハネは神を直接表わすことができなかった。彼の過ちや荒唐無稽は自分自身だけを表わしていたが、彼の働きは聖霊を象徴するものだった。それでもなお、彼のすべてが神を表わしていたと言うことはできない。彼の逸脱や間違いも神を表わしていただろうか。人を表わす中で間違いを犯すのは普通のことだが、神を表わしながら逸脱しているなら、それは神の名誉を汚すことではないだろうか。聖霊に対する冒涇ではないだろうか。たとえ他人に称揚されても、人が神に取って代わることを聖霊は軽々しく許さない。神でない人が最後に固く立つことはできないだろう。人が気の向くままに神を表わすことを、聖霊は許さない。たとえば、聖霊はヨハネに証しをし、彼がイエスのために道を整える者であることを明らかにしたが、聖霊によって彼になされた働きは実に均衡のとれたものだった。ヨハネに求められたのはイエスのために道を整える者になること、イエスのために道を備えることだけだった。つまり、聖霊は道を整える彼の働きだけを支え、そのような働きをすることだけを彼に許した。他の働きをすることは許されなかったのである。ヨハネは道を整えた預言者エリヤを表わしていた。そのことにおいて聖霊はヨハネを支えた。彼の働きが道を整えることである限り、聖霊はヨハネを支えたのである。しかし、もしヨハネが、自分は神だと主張し、贖いの働きを完成させるために来たのだと言ったなら、聖霊は彼を懲らしめる必要があっただろう。ヨハネの働きがどれほど偉大でも、またそれが聖霊に支えられていたとしても、その働きに境界がなかったわけではない。確かに、聖霊はヨハネの働きを支えていたが、当時彼に与えられていた力は道を整えることに限られていた。その他の働きを行なうことはまったくできなかったのである。と言うのも、彼はイエスではなく、道を整えるヨハネに過ぎなかったからである。よって、聖霊の証しが鍵になるのだが、聖霊が人に許す働きはそれにも増して重要である。当時、ヨハネは鳴り響くような証しを受け取っていたのではないか。ヨハネの働きも偉大ではなかったのか。しかし、ヨハネの働きがイエスの働きを超える

ことはできなかった。なぜなら、ヨハネは聖霊によって用いられた人間に過ぎず、直接神を表わすことはできなかったからである。そのため、ヨハネが行なった働きは限られていた。ヨハネが道を整える働きを終えた後、聖霊はもはや彼の証しを支えず、新たな働きが続くこともなく、神自身の働きが始まったときに、ヨハネは去った。

悪霊に取りつかれ、「わたしが神だ！」と声高に叫ぶ人がいる。しかし最後に、彼らは暴かれる。と言うのも、自分が表わすものについて、彼らは間違っているからである。彼らはサタンを表わし、聖霊は彼らに何の注意も払わない。どれほど高く自分を称揚しても、どれほど力強く叫んでも、あなたは依然として被造物であり、サタンに属する者である。わたしは決して、「わたしは神である、神の愛するひとり子である」と叫ばない。しかし、わたしが行なう働きは神の働きである。わたしに叫ぶ必要があるだろうか。称揚の必要はない。神は自身の働きを自ら行なうのであり、人に地位や敬称を与えてもらう必要はない。神の働きは神の身分と地位を表わすのである。バプテスマに先立ち、イエスは神自身ではなかったのか。受肉した神の肉体ではなかったのか。イエスは証しをされて初めて神のひとり子になった、などと言うことは到底できない。その働きを始めるずっと以前、イエスという名の人間がすでにいたのではないか。あなたは新しい道を生み出すことも、霊を表わすこともできない。霊の働きや、霊が語る言葉を表現することもできない。神自身の働きや霊の働きを行なうこともできない。神の知恵、不思議、計り難さ、そして人間を罰する神の性質全体を表現することは、どれもあなたの能力を超えている。ゆえに、自分は神だと主張しようとしても無駄である。あなたには名前があるだけで、実質がまったくないのである。神自身はすでに来た。しかし、誰も神を認識せず、それでいて神は働きを続け、霊を代表して働く。あなたが彼を人と呼ぼうと神と呼ぼうと、主と呼ぼうとキリストと呼ぼうと、あるいは姉妹と呼ぼうと、それは構わない。しかし、彼が行なう働きは霊の働きで、神自身の働きを表わしている。人にどのような名前と呼ばれるか、彼には関心がない。その名前が彼の働きを決定できるのか。あなたが彼を何と呼ぼうと、神に関する限り、彼は神の霊の受肉した肉体である。彼は霊を表わし、霊によって承認されている。あなたが新しい時代への道を切り開けないなら、あるいは古い時代を終わらせたり、新しい時代の到来を告げたり、新しい働きをしたりすることができないのであれば、あなたが神と呼ばれることはできない。

聖霊に用いられる人でさえ、神自身を表わすことはできない。そのような人は神を表わすことができないというだけでなく、その人が行なう働きも直接神を表わせないのである。言い換えると、人の経験が神の経営（救い）の内部に直接置かれる

ことはできないし、神の経営を表わすこともできない。神自身が行なう働きはひとえに、神の経営計画の中で神が行なおうとする働きであり、それは偉大な経営に関係している。人によってなされる働きは、その人の個人的経験を提供することから成っている。以前の人たちが歩いた道を超える新しい経験の道を見つけ、聖霊の指導の下、兄弟姉妹を導くことから成っているのである。この人たちが提供するの、自分個人の経験や、霊的な人たちの霊的書物である。このような人たちは聖霊によって用いられているが、彼らが行なう働きは、六千年にわたる計画の中の偉大な経営の働きとは無関係である。彼らはただ自分たちが果たしている役目が終わるか、自分たちの生涯が終わるまでの間、聖霊の流れの中で人々を導くために、様々な時代に聖霊によって生み出されてきた人たちに過ぎない。彼らが行なう働きは、神のために適切な道を整えるか、あるいは地上における神自身の経営の、ある特定の側面を続けていくことだけである。そのような人たちは基本的に、神の経営のより偉大な働きをすることができず、新しい道を切り開くこともできず、ましてや前の時代から続く神の働きをすべて終わらせることなどできない。よって、彼らが行なう働きは、被造物が己の役目を果たすことを表わしているだけで、神自身が己の職分を果たすことは表わせない。これは、彼らの行なう働きが神自身の行なう働きと違うからである。新しい時代を導入する働きは、人が神の代わりに行なえるものではない。他ならぬ神自身にしかできないことなのである。人によって行なわれるすべての働きは、被造物としての本分を尽くすことから成っており、その人が聖霊によって動かされたり、啓かれたりしたときに行なわれる。そのような人たちがもたらす指導はひとえに、日常生活における実践の道を人に示すこと、神の旨と一致する形で行動するにはどうすればよいかを示すことから成っている。人の働きは神の経営に関わることも、霊の働きを表わすこともない。たとえば、ウィットネス・リー（李常受）やウオッチマン・ニー（倪柝聲）の働きは道を先導することだった。その道が新しかろうと古かろうと、その働き的前提は、聖書の中に留まるという原則の上に築かれていた。地方教会の再建であれ設立であれ、彼らの働きは教会を築くことに関係していた。彼らが行なった働きは、イエスと弟子たちが恵みの時代にやり残した働き、あるいはそれ以上に展開しなかった働きを引き継ぐものだった。彼らがその働きにおいて行なったのは、頭を覆うこと、バプテスマを受けること、パンをさくこと、ぶどう酒を飲むことなど、イエスが当時の働きにおいて、自分の後に来る世代の人々に求めたことを復活させることだった。彼らの働きは聖書を固く守り、聖書の中に道を求めることだったとすることができるだろう。彼らは新しい進歩を一切遂げなかった。したがって、人は彼らの働きの中に、聖書内における新しい道の発見と、以前よりはましで現実的な実践しか見ることができない。

しかし彼らの働きの中に、神の現在の旨を見出すことはできず、ましてや神が終わりの日に行なおうと計画している新しい働きを見つけることなどできない。これは、彼らの歩んだ道が依然古い道であり、刷新や進歩がなかったからである。彼らはイエスの磔刑の事実にとだわり、人々に悔い改めて罪を告白させるという実践や、最後まで耐える者が救われるとか、男は女の頭であるとか、妻は夫に従えなどといった言い回し、そしてさらに、女性信者は説教できず、従うことしかできないという伝統的な観念を遵守し続けた。もしもこのような形の指導が遵守され続けていたら、聖霊が新しい働きを行ない、人々を規則から解放し、自由と美の領域へと導くことはできなかつただろう。そういうわけで、時代を変えるこの段階の働きは、神自身が行ない、語ることを必要とする。そうしなければ、神の代わりにそれを行なえる人はいないからである。これまでのところ、この流れの外側における聖霊の働きはすべて行き詰まり、聖霊に用いられる人々は方向を失った。よって、聖霊に用いられる人々の働きは神自身による働きと同じではないので、彼らの身分、および彼らが誰に代わって行動しているかもまた異なっている。これは、聖霊の行なおうとする働きが異なるからであり、そのため同じように働きを行なうすべての人に異なる身分や地位が与えられる。聖霊に用いられる人たちもまた新しい働きをするかもしれないし、以前の時代になされた働きを消去するかもしれないが、彼らが行なうことは新しい時代における神の性質や旨を表現できない。彼らが行なうのは、以前の時代の働きを取り除くためだけであり、神自身の性質を直接表わす目的で新しい働きを行なうためではない。このように、彼らが時代遅れの実践をいかに多く廃止しようとも、あるいはどれほど多くの新しい実践を導入しようとも、彼らは依然として人と被造物を代表しているのである。しかし、神自身は働きを行なうとき、古い時代の実践の撤廃を公然と宣言したり、新しい時代の始まりを直接宣言したりすることはない。神はその働きにおいて直接的かつ率直である。神は行なおうと意図する働きを実行する上で率直である。つまり、神は自身がもたらしてきた働きを直接表現し、自身の働きを本来意図したように直接行ない、神そのものと神の性質を表現する。人の見るところ、神の性質、そして神の働きもまた、かつての時代と異なっている。しかし、神自身の見地からすれば、これは神の働きの継続であり、さらなる展開に過ぎない。神は働きを行なうとき、自身の言葉を表現し、新しい働きを直接もたらす。それとは対照的に、人が働きを行なうとき、それは熟慮と研究によってなされるか、または他人の働きの上に築かれた認識の発展、および実践の体系化なのである。すなわち、人によってなされる働きの本質は、確立された秩序に従い「新しい靴で古い道を歩く」ことである。このことは、聖霊に用いられる人が歩く道でさえ、神自身によって始められたものに基づいてい

るということを意味している。ゆえに、つまるところ、人は依然として人であり、神はやはり神なのである。

イサクがアブラハムのもとに生まれたように、ヨハネは約束によって生まれた。ヨハネはイエスのために道を整え、多くの働きを行なったが、神ではなかった。むしろ、ヨハネは預言者の一人だった。イエスのために道を整えたからである。ヨハネの働きも偉大であり、ヨハネが道を整えて初めて、イエスは正式に自分の働きを始めた。実質的に、ヨハネは単にイエスのために骨を折っただけであり、ヨハネが行なった働きはイエスの働きに奉仕するものだった。ヨハネが道を整え終わった後、イエスは自分の働きを始めた。それはより新しく、より具体的で、より詳細にわたる働きだった。ヨハネが行なったのはその働きの最初の一部だけであり、新たな働きのより大部分は、イエスによって行なわれたのである。ヨハネも新たな働きを行なったが、新たな時代を始める人ではなかった。ヨハネは約束によって生まれ、その名前は天使から与えられた。当時、彼の父ザカリヤの名をつけたかった人々もいたが、ヨハネの母が口を開いてこう言った。「この子をその名前で呼ぶことはできません。ヨハネという名にしなければなりません」。これはすべて聖霊によって命じられたことである。イエスもまた聖霊の命令で名付けられ、聖霊から生まれ、聖霊からの約束を受けた。イエスは神であり、キリストであり、人の子だった。しかし、ヨハネの働きも偉大だったのに、なぜ彼は神と呼ばれなかったのか。イエスによってなされた働きと、ヨハネによってなされた働きの違いはいったい何だったのか。ヨハネはイエスのために道を整える人だったというのが唯一の理由なのか。あるいは、神によってあらかじめ定められたからなのか。ヨハネは「悔い改めよ、天国は近づいた」と言って、天国の福音も宣べ伝えたが、彼の働きがさらに展開されることはなく、始まりを構成したに過ぎなかった。それとは対照的に、イエスは新しい時代を始めて古い時代を終わらせたが、旧約聖書の律法を成就させることもした。イエスが行なった働きはヨハネの働きより偉大であり、さらにイエスは全人類を贖うために来たのであって、その段階の働きを達成したのである。ヨハネのほうはただ道を整えたに過ぎない。彼の働きは偉大で、数多くの言葉を語り、彼に従う弟子たちも数多かったが、ヨハネの働きは人に新たな始まりをもたらしたに過ぎないのである。人は彼からいのちも、道も、より深い真理も受け取っておらず、彼を通して神の旨を理解することもなかった。ヨハネはイエスの働きのために新たな土台を切り開き、選ばれた人を準備した偉大な預言者（エリヤ）だった。つまり、恵みの時代の先駆者だったのである。そのような事柄は、彼らがもつ普通の人間の外見だけでは見分けられない。特にヨハネは、極めて多くの働きを行ない、その上聖霊に約束され、聖霊によって支えられた働きをしていたので、それがます

ます当てはまる。そうであれば、人のそれぞれの身分は、その人が行なう働きを通じてのみ区別することができる。と言うのも、人の外見からその人の本質を知る術はなく、聖霊の証しとは何かを人が確認することはできないからである。ヨハネによってなされた働きとイエスの働きは異なっており、違う性質を有している。そのことから、ヨハネが神かどうかを決めることができる。イエスの働きとは、始めること、続けること、終わらせること、そして結実させることだった。これらの各段階をイエスは実行したが、一方ヨハネの働きは、始まりをもたらす以上のものではなかった。イエスは最初に福音を広め、悔い改めの道を説き、それから人々にバプテスマを授け、病を癒し、悪霊を追い出した。最後に人類を罪から贖い、その時代全体の働きを完成させた。イエスはあらゆる場所に赴いて人々に説教し、天国の福音を宣べ伝えた。この点においてイエスとヨハネは似通っていたが、イエスは新しい時代を始め、人間に恵みの時代をもたらしたという違いがあった。人が恵みの時代に実践すべきこと、および従うべき道に関する言葉がイエスの口から発せられた。そして最後に、イエスは贖いの働きを終えた。ヨハネがその働きを実行できたはずはない。ゆえに、神自身の働きを行なったのはイエスであり、イエスが神自身であり、神を直接表わすのもイエスなのである。人の観念では、約束によって生まれた者、霊から生まれた者、聖霊によって支えられている者、新たな道を開く者はみな神である。このような論法によれば、ヨハネも神であり、モーセもアブラハムもダビデも全員神である、ということになる……。これはよくできた冗談ではないか。

イエスも自身の職分を果たす前は、聖霊が行なうことに従って行動する普通の人間に過ぎなかった。当時、自身の身分を意識していたかどうかはともかく、イエスは神から生じるすべてのことに従っていた。イエスが自身の職分を始める前、聖霊は彼の身分を決して明かさなかった。イエスがあれらの律法や掟を廃止したのは自身の職分を始めた後であり、イエスが正式に自身の職分を果たし始めた後、ようやく彼の言葉に権威や力が吹き込まれた。また新たな時代をもたらす働きが始まったのも、彼が自身の職分を開始した後である。それ以前の二十九年間、聖霊はイエスの中に隠れたままであり、その間イエスは人を表わしていただけで、神の身分はなかった。神の働きは、イエスの働きそして職分とともに始まったのであり、イエスは、自分がどれほど人に知られているかにかかわらず、自身の内なる計画通りに働きを行なったが、彼が行なった働きは、神自身を直接表わすものだった。そのとき、イエスは周囲の人たちに「あなたがたはわたしをだれと言うか」と尋ねた。すると彼らは答えた。「あなたは最も偉大な預言者であり、わたしたちのよき医者です」。また「あなたは大祭司です」と答える者もいた。ありとあらゆる答えが出て、イエスはヨハネであるとか、エリヤであるなどと言う者もいた。イエスはそれ

からシモン・ペテロの方を向いて「あなたはわたしをだれと言うか」と尋ねると、ペテロは「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と答えた。その時から、それらの人々はイエスが神であると認識するようになった。イエスの身分が知られたとき、最初にそれを認識したのがペテロであり、それを口に出したのもペテロだった。そしてイエスは言った。「あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である」。イエスがバプテスマを受けた後、他の人たちが認識していたかどうかはさておき、イエスの働きは神に代わって行なう働きだった。イエスが来たのは自身の働きを行なうためであって、自身の身分を明らかにするためではない。ペテロがそれについて語って初めて、イエスの身分は公に知られるようになったのである。イエスが神自身であることを人が認識していたかどうかにかかわらず、イエスは時が来ると自分の働きを始めた。そして、人が知っていたかどうかにかかわらず、イエスは以前のように自分の働きを続けた。たとえ人が否定したとしても、イエスはやはり自分の働きを行ない、そうすべき時にそれを遂行する。イエスが来たのは働きを行ない、職分を果たすためであり、人間が神の肉を知るようにするためではなく、人間が神の働きを受けるようにするためである。現段階の働きが神自身の働きであることを認識できないのであれば、それはあなたにビジョンが欠けているからである。それでも、この段階の働きを否定することはできない。あなたがそれを認識できないからと言って、聖霊が働きを行っていないとか、聖霊の働きが間違っているなどといったことの証明にはならない。中には、聖書におけるイエスの働きに照らし合わせて現在の働きを調べ、矛盾している点を用いてこの段階の働きを否定しようとする者さえいる。これは盲人の行ないではないのか。聖書に記録されていることは限られており、神の働き全体を表わすことはできない。四福音書をすべて合わせても百章以下であり、その中に書かれている出来事は限られている。たとえば、イエスがイチジクの木を呪ったこと、ペテロが主を三回否定したこと、イエスが磔刑と復活の後、弟子たちの前に現われたこと、断食についての教え、祈りについての教え、離婚についての教え、イエスの誕生と系図、イエスの弟子たちの任命などである。しかし、人々はそれらと現在の働きとを比べることさえして、それらを宝として大切にする。そのような人は、神にはこの程度のことしかできないとでも言うように、イエスが生涯に行なった働きはその程度にしかないとさえ信じている。それは馬鹿げたことではないか。

イエスが地上にいた期間は三十三年半だった。つまり、イエスは地上で三十三年半暮らしたのである。そのうち、イエスが職分を果たすのに費やされた期間は三年半だけだった。そして残りの年月は、単に普通の人間生活を送っていた。はじめのうち、イエスは会堂の礼拝に出席し、そこで祭司による聖書の解説や他の人たちの

説教を聞き、聖書について多くの知識を得た。イエスはそのような知識をもって生まれたわけではなく、読んだり聞いたりすることでそれを得たのである。イエスが十二歳のときに会堂で教師に質問したことは、聖書にはっきり記録されている。昔の預言者の預言はどのようなものだったか。モーセの律法はどのようなものか。旧約聖書とは。そして、神殿で祭司の服を着て神に仕えるとはどういうことかなど、イエスはたくさんの質問をした。そのような知識も理解もなかったからである。イエスは聖霊により母胎に宿ったが、まったく普通の人として生まれた。ある種の特別な性格はあったものの、やはり普通の人だった。背丈や年齢とともに知恵が増え続け、イエスは普通の人と同じ人生の過程を通過した。イエスは幼児期や青春期を経験していないと人々は想像する。イエスは生まれるなり三十歳の人として生涯を始め、働きを終えてすぐ十字架にかけられたというのである。おそらく普通の人と同じ人生を送ることはなく、食べもせず、他の人と交際もせず、人が簡単にその姿を見ることもなかっただろうと、人々は信じている。イエスは神なのだから、見る者を恐れさせる奇人だろうと信じている。肉となった神は絶対に普通の人と同じように生活しないと人々は信じている。彼らは、その人は聖なる人なので、歯を磨いたり顔を洗ったりしなくてもきれいであると信じている。これらは純粹に人の観念ではないだろうか。聖書にはイエスの人間生活に関する記録がなく、イエスの働きについての記録しかないが、このことでイエスが普通の人間性をもっていなかったとか、三十歳になるまで普通の人間の生活をしなかったという証明にはならない。イエスは二十九歳で正式に働きを始めたが、それ以前に彼が送った人としての生活全体を打ち消すことはできない。聖書はただその時期のことを記録から省略しているだけである。それは普通の人としての生活であり、神性の働きの時期ではなかったので、書き記す必要がなかったのである。イエスのバプテスマに先立ち、聖霊が直接働きを行なうことはなく、職分を始めるべき日までイエスを普通の人としての生活に留めただけのことである。イエスは受肉した神だったが、普通の人として成長する過程を経た。この成長過程は聖書から省かれている。と言うのも、人のいのちの成長にとって大きな助けにならないからである。イエスのバプテスマ以前は隠された時期で、イエスはしるしも不思議も行なわなかった。イエスはバプテスマを受けて初めて、恵み、真理、愛、そして憐みに満ち溢れた人類の贖いの働きのすべてを始めたのである。この働きの始まりはまさに恵みの時代の始まりでもあった。それが理由で書き留められ、現在に至るまで受け継がれてきたのである。それは、恵みの時代の人々がその時代の道を歩み、十字架の道を歩むために、道を開き、すべてを結実させるためだった。それは人が書いた記録に由来するものだが、すべて事実であり、ところどころに小さな誤りがあるだけである。たとえそうでも、これ

らの記録を誤りとする事はできない。記録された出来事はすべて事実であり、人が書き留める中で間違いを犯しただけである。中には、イエスが普通で平凡な人間性をもつ者だったなら、しるしや不思議を行なえたのはどういうことか、と言う人もいるだろう。イエスが経験した四十日間の試みは奇跡のしるしであり、普通の人には達成できないものである。試みを受けたイエスの四十日間は、聖霊の働きの本質だった。そうであれば、イエスの中に超自然的なものがまったくなかったとどうして言えるのか。イエスがしるしや不思議を行なえたことは、彼が普通の人ではなく超越的な人であることの証明にはならない。それは単に、聖霊が彼のような普通の人の中で働き、それにより、イエスは奇跡を起こしてよりいっそう偉大な働きを行なえた、というだけのことである。イエスはその職分を果たす前、あるいは聖書に記されているように聖霊がイエスに降りる前、イエスは普通の人に過ぎず、超自然的なところは少しもなかった。聖霊がイエスに降臨したとき、つまりイエスが自身の職分を果たし始めたとき、イエスは超自然的なもので満たされた。人はそのようにして、神の受肉した肉体には普通の人間性がないと信じるようになる。そのうえ、受肉した神には神性だけがあり、人間性はないと誤解する。確かに、神が地上に来て働きを行なうとき、人が見るのはどれも超自然的な出来事である。人が自分の目で見えるもの、耳で聞くことはすべて超自然的である。なぜなら、神の働きと言葉は人にとって理解できず、達成不可能なことだからである。天の何かが地上にもたらされるなら、超自然的以外のものであり得ようか。天国の奥義が地上にもたらされるとき、それは人が理解したり推測したりすることのできない奥義であり、あまりに不思議で知恵に満ちているが、それらはすべて超自然的ではないのか。しかし、たとえどんなに超自然的でも、すべては神の普通の人間性において行なわれるということを知らなければならない。神の受肉した肉体には人間性が吹き込まれている。そうでなければ、それは神の受肉した肉体ではないだろう。イエスは生きている間に非常に多くの奇跡を行なった。当時のイスラエル人が見たものは、超自然的なものに満ちていた。彼らは天使や使いを見、ヤーウェの声を聞いた。これらはすべて超自然的なことではなかったか。確かに、現在では超自然的なもので人を騙す悪霊がいる。これは、聖霊が現在行なっていない働きを通して人間を騙そうとする、悪霊による模倣に過ぎない。多くの人が奇跡を行ない、病人を癒やして悪魔を祓う。これらは悪霊の働き以外の何物でもない。現在、聖霊はもはやこのような働きをしないからであり、それ以降、聖霊の働きを模倣してきたのはすべて悪霊である。当時イスラエルで行なわれた働きはすべて超自然的な本質を有していたが、聖霊はいまやそのようなやり方では働かず、現在のそうした働きはどれもサタンによる模倣と扮装、そして妨害である。しかし、超自然的なものがすべて悪霊に由来す

るとは言えない。それは、神が働きを行なう時代に左右される。現在の受肉した神による働きを考えてみよ。そのうちどの側面が超自然的でないというのか。彼の言葉は、あなたにとって理解することも成し遂げることもできないものである。そして、彼の働きを行なえる者は誰一人いない。彼が理解することを人が理解することはできず、彼の知識についても、それがどこから来るのかを人は知らない。中には「わたしもあなたと同じように普通なのに、あなたの知っていることをわたしが知らないのはどういうことか。わたしのほうが年上で経験も豊富なのに、どうしてわたしの知らないことをあなたが知っているのだろうか」と言う人がいる。人間に関する限り、これはすべて人間にはできないことなのだ。また、「イスラエルで行なわれた働きを知る人はおらず、聖書解説者ですら説明できないのに、あなたはどのように知っているのか」と言う人もいる。これらはすべて超自然なものの問題ではないのか。今日の受肉した神はいかなる不思議も経験していないが、あらゆることを知っており、いともたやすく真理を語って表わす。これは超自然的なことではないか。彼の働きは、肉体が到達可能な範囲を超えている。そのような働きは、肉体をもつ人の考えが及ぶものではなく、人の知力や理屈にとってまったく不可解なものである。今日の受肉した神は聖書を読んだことがないものの、イスラエルにおける神の働きを理解している。そして、地に立ちながら語っているにもかかわらず、第三の天の奥義について話す。人がそれらの言葉を読むと、「これは第三の天の言語ではないか」という思いに圧倒される。これらはすべて、普通の人になし得ることを超えた事柄ではないのか。また、当時イエスが四十日間断食したのは、超自然的なことではなかったか。どんな場合でも四十日間の断食は超自然的で、悪霊の行為だと言うなら、あなたはイエスを断罪したことになるのか。自身の職分を始める前、イエスはまったく普通の人ようだった。イエスも学校で勉強した。そうでなければどうして読み書きを習得できたというのか。神が肉となったとき、霊は肉の中に隠れていた。しかし、普通の人間である彼は、成長と成熟の過程を経る必要があった。認知能力が成熟し、物事を識別できるようになって初めて、彼は普通の人と見なされた。そして彼の人間性が成熟して初めて、自身の職分を果たすことができた。彼の普通の人間性がまだ成熟しておらず、分別もついてないときに、どうして職分を果たすことができたのだろうか。彼が六歳か七歳で職分を果たすなど考えられないはずである。神はなぜ、初めて受肉したときに自身を明らかにしなかったのか。それは、神の肉の人間性がまだ成熟していなかったからである。神の肉の認知過程、またその肉の普通の人間性が、いまだ完全に神のものになっていなかったのである。そのため、彼が働きを始められるようになるには、普通の人間性と普通の人間の常識を、肉における働きを手がけるのに十分なほど身につけることがどうし

ても必要だったのである。彼がその務めに適していなければ、成長と成熟を続けることが必要だったはずである。イエスが七歳か八歳で自分の働きを始めたとしたら、人は彼を天才児として扱わなかっただろうか。誰もがイエスを子供だと考えたのではないだろうか。イエスに説得力があると誰が思っただろうか。演壇ほどの身長もない七、八歳の子供に説教などできただろうか。普通の人間性が成熟するまで、イエスはその働きに適していなかった。人間性がまだ未熟である限り、その働きの大部分は到底成し遂げられなかったのである。肉体における神の霊の働きもまたそれ自体の原理に支配されている。普通の人間性を備えて初めて、イエスは父なる神の働きを手がけ、その義務を引き受けることができたのであり、そうして初めて自身の働きを始めることができたのである。幼年時代、イエスは古代に起こった大半のことをまったく理解できず、会堂の教師に訊いて初めて理解することができた。もしも言葉を話すようになってすぐ働きを始めていたら、どうして誤りを犯さないでいられただろうか。神が間違えることなどどうしてあり得ようか。ゆえに、イエスは働きを行なえるようになって初めて働きを始めたのであり、働きを手がけることが完全に可能になるまでいかなる働きも行なわなかったのである。イエスは二十九歳ですでにかなり成熟しており、その人間性はこれから行なう働きを手がけるのに十分だった。神の霊がイエスにおいて正式に働きを始めたのはその時が最初である。当時ヨハネはイエスのために道を切り開くべく七年間準備していた。そして自身の仕事を終わると、ヨハネは投獄された。こうして重荷はすべてイエスにのしかかった。人間性がいまだ足りず、青年になったばかりの二十一、二歳でイエスがこの働きを手がけ、依然として多くのことを理解していなければ、イエスは掌握することができなかつたろう。当時、イエスが中年になって働きを始めたとき、ヨハネが働きを実行してからすでにかなりの時が経っていた。その年齢であれば、イエスの普通の人間性はなすべき働きを手がけるのに十分だった。現在、受肉した神も正常な人間性を有しており、あなたがたの中の年長者と比べて成熟してはいないが、その人間性は自身の働きを手がけるのにもう十分である。今日の働きを取り巻く状況は、イエスの時代とまったく同じというわけではない。イエスはなぜ十二人の使徒を選んだのか。それはひとえに、イエスの働きを支え、それと協調するためだった。ひとつには、当時におけるイエスの働きの基礎作りをするためであり、他方では、その後におけるイエスの働きの基礎作りをするためだった。当時の働きに合わせて十二人の使徒を選ぶことは、イエスの旨であり、また同時に神自身の旨でもあった。自分は十二人の使徒を選び、彼らを率いてあらゆる場所で説教する必要があると、イエスは信じていた。だが今日、あなたがたの間でそうする必要はない。受肉した神が肉において働きを行なう際、そこには多くの原則があり、人間に

はどうしても理解できない多数の事柄がある。人間は絶えず自分の観念を用いて神を押し量ったり、神に過度の要求をしたりする。それでいながら今日に至るまで、自分の認識が自分の観念だけで成り立っていることにまったく気づいていない人たちが多数いる。神がどの時代にどこで受肉しようと、肉における神の働きの原則は変わらない。神は肉となりながら、働きにおいて肉体を超越することができず、ましてや肉となりながら、肉体の普通の人間性の中で働かないことは不可能である。そうでなければ、神の受肉の意義は消えてなくなり、肉となったことばもまったく無意味になってしまう。さらに、天の父（霊）だけが神の受肉を知っており、他の誰も、肉となった神自身さえも、あるいは天の使いさえもそれを知らない。このように、神の肉における働きはますます普通のことであり、ことばがまさに肉となったことを申し分なく証明することができる。そして肉とは、平凡で普通の人を意味する。

「なぜ時代の到来は神自身によって告げられなければならないのか。被造物が神の代わりになることはできないのか」と不思議に思う人がいるかもしれない。新しい時代の到来を告げるという明白な目的のために神が肉となることを、あなたがたはみな知っている。そしてもちろん、神が新しい時代の到来を告げるとき、同時に前の時代を終わらせることもあなたがたは知っている。神は初めであり終わりである。神の働きを始動させるのは神自身なのだから、前の時代を終わらせるのも神自身でなければならない。それは、神がサタンを打ち負かし、世界を征服する証拠である。神自身が人々のもとで働くたび、それは新しい戦いの始まりとなる。新しい働きの始まりがなければ、当然古い働きの終わりもない。そして古い働きの終わりがなければ、サタンとの戦いがまだ終結していないことを証明している。神自身が来て人のあいだで新しい働きを実行して初めて、人は完全にサタンの支配から自由になり、新しい生活、新しい始まりを得ることができる。そうでなければ、人は永遠に古い時代に生き、永遠にサタンの古い影響下で生きることになる。それぞれの時代が神によって導かれることで、人間の一部は自由になり、それによって人間は新しい時代に向けて神の働きとともに前進する。神の勝利とは、神に従うすべての人の勝利である。もし被造物である人類が時代を終えることを任されたなら、人間の視点からだろうと、サタンの視点からだろうと、それは神に反抗する行ない、あるいは神を裏切る行ないに過ぎず、神に対する従順さの行ないではないのであって、そのような人間の働きはサタンの道具にされてしまうだろう。神自身によって始められた時代の中、人が神に服従し、付き従うのでなければ、サタンを完全に納得させることはできない。それが被造物の本分だからである。ゆえに言うておくが、あなたがたに必要なのは付き従って服従することだけで、それ以上のことは求められていない。これが、各自が自分の本分を守り、それぞれの役目を果たすこと

の意味である。神は自身の働きを行ない、人が神に代わってそうすることを必要としておらず、被造物の働きに神が参加することもない。人は自分自身の本分を尽くするのであり、神の働きに参加することはない。これだけが本当の服従であり、サタンが敗北した証拠である。新しい時代の到来を告げたあと、神自身が自ら人類のあいだで働くために到来することはない。そうして初めて、人は自分の本分を尽くし、被造物としての使命を果たすべく、新しい時代へと正式に足を踏み入れるのである。これが、神が働きを行なう原則であって、誰も背くことはできない。このように働くことだけが賢明で道理にかなっている。神の働きは神自身によってなされる。神の働きを始動させるのは神であり、それを終わらせるのも神である。働きを計画し、経営するのも神であり、それ以上に、働きを結実させるのも神である。聖書に、「わたしは初めであり、終わりである。蒔く者であり、刈る者である」と書かれている通りである。神の経営の働きに関連することはすべて神自身によって行なわれる。神は六千年にわたる経営計画の支配者で、誰も神の代わりにその働きを行なうことはできず、神の働きを終わらせられる者もない。なぜなら、すべてをその手に掌握しているのは神だからである。世界を創造した神は、全世界が神の光の中に生きるよう導き、全時代を終わらせ、それにより自身の計画をすべて成就させるだろう。

受肉の奥義（２）

ユダヤで働きを行なっていた当時、イエスは公然とそうしたが、今、わたしはあなたがたのあいだで秘かに働きを行ない、そして語る。未信者はまったくこれに気づいていない。あなたがたのあいだにおけるわたしの働きは、部外者には閉ざされている。これらの言葉、刑罰、そして裁きはあなたがただけに知らされており、他は誰も知らない。この働きはすべてあなたがたのあいだで実行され、あなたがたにしか明かされていない。未信者の誰もこれを知らない。まだ時が来ていないからである。ここにいるこの人たちは刑罰に耐えた後、完全にされつつあるが、部外者はこのことを何一つ知らない。この働きはあまりにも隠されている。彼らに対し、受肉した神は隠されているが、この流れにある人たちには、神は明らかにされたと言うことができる。神においてはすべてが明らかで、何もかもが明かされており、すべてが解放されているが、これは神を信じる人にだけ当てはまり、その他の者、未信者に関する限り、何も知らされていない。現在、あなたがたのあいだで、中国において行なわれている働きは、彼らが知ることのないよう厳しく封じられている。その働きに気づくようなことがあっても、彼らはそれを断罪し、迫害の対象とするだけで、信じることはないだろう。最も進歩の遅れたこの場所、すなわち赤い大き

な竜の国で働くのは決して簡単なことではない。もしこの働きが知られたら、続けるのは不可能だろう。この段階の働きをこの場所で実行するなどとうていできない。もしこの働きが公然と実行されたなら、どうして前進することが許されるだろうか。それはこの働きをもっと大きな危険に晒すことにならないだろうか。この働きが隠されておらず、イエスが見事に病人を癒やし、悪霊を追い出したときのように行なわれたなら、とうの昔に悪魔の「虜にされて」いたのではないだろうか。悪魔は神の存在を我慢できるだろうか。今、わたしが人に説教をし、教えるために会堂へ入って行こうとしたら、とっくの昔に粉々に砕かれていたのではないだろうか。だとしたら、わたしの働きをどうして続けられようか。しるしや不思議が公然と明かされない理由は、隠すためである。だから、わたしの働きは未信者に見られることも、知られることも、発見されることもない。この段階の働きが恵みの時代におけるイエスの働きと同じように行なわれたなら、それは今ほど安定したものではなかっただろう。だから、このようにして密かに働きを行なうのは、あなたがたにとっても、働き全体にとっても有益なのである。地上における神の働きが終わるとき、つまりこの密かな働きが終わるとき、この段階の働きは一気に公にされる。中国に勝利者の集団がいることを、すべての人が知るだろう。肉となった神が中国にいて、その働きが終わったことを知るだろう。その時初めて、人は理解し始める。なぜ中国はいまだ衰退や崩壊の兆しを見せていないのか。実のところ、神が中国でその働きを自ら実行し、人々の集団を完全にして勝利者にしたのである。

肉となった神は、その働きを自ら実行する間、自分に付き従う人にだけ自身を示すのであり、すべての被造物に示すのではない。神は働きの一段階を完成させるためにだけ肉となったのであり、人に自身の姿を見せるためではない。しかし、神の働きは神自身によって実行されなければならない、よって神が肉においてそうすることが必要なのである。この働きが終わると、神は人間の世界から去る。来たるべき働きの妨げにならないよう、人類のあいだに長期間留まることはできないのである。神が大衆に示すのは、神の義なる性質と神のすべての業だけで、二度肉となったときの姿ではない。なぜなら、神の姿は神の性質を通じてのみ示すことができ、受肉した肉体の姿がそれにとって代わることはできないからである。神の肉体の姿は限られた数の人たちにだけ、つまり神が肉において働く際、神に付き従う人たちにだけ示される。これこそ今、働きが秘かに行われている理由である。また同じように、イエスは働きを行っていたとき、ユダヤ人にだけ自分自身を示し、他の民族に公然と自身を示すことは決してなかったのである。したがって、ひとたび働きを完成させると、イエスはすぐさま人間の世界から離れ、そこに留まらなかった。それ以降、人間に自らを見せたのは、この人の姿をしたイエスではなく、働きを直

接行なう聖霊だった。肉となった神の働きが完全に終わると、彼は人間の世界を離れ、肉となったときと同じような働きは二度としない。その後、働きはすべて聖霊によって直接なされる。この期間中、人は彼の肉の姿をほとんど見ることはできない。彼は自身を人にまったく見せず、永遠に隠れたままである。肉となった神の働きの時間は限られており、それは特定の時代、期間、国、そして特定の人々のあいだで行なわれる。その働きは、神が受肉した期間中に行なわれる働きだけを表わしており、その時代に特有のものであり、ある特定の時代における神の霊の働きを表わすものであって、神の働き全体を表わすわけではない。よって、肉となった神の姿がすべての人に示されることはない。大衆に示されるのは、神が二度肉になった際の姿ではなく、むしろ神の義と神の性質全体である。人に示されるのはただ一つの姿でも、二つの姿を合わせたものでもない。よって、神の行なうべき働きが完成されたあと、神の受肉した肉体がすぐに地上から離れることが必須なのである。と言うのも、肉となった神はすべき働きをするためだけに来るのであり、自身の姿を人々に見せるために来るのではないからである。受肉の意義は神が二度肉となったことですでに果たされているが、それでもなお、かつて神を一度も見たことのない民族に対して公然と自身を示すことはない。イエスが義の太陽としてユダヤ人に再び自分の姿を見せることは決してなく、オリーブ山に登って万民の前に現われることも決してない。ユダヤ人が見たのは、ユダヤの地にいた時代のイエスの肖像だけである。肉となったイエスの働きは二千年前に終わったからである。イエスがユダヤ人の姿でユダヤの地に戻ることはないし、ましてやユダヤ人の姿で異邦の民族に姿を見せることもない。なぜならば、肉となったイエスの姿はひとりのユダヤ人の姿でしかなく、ヨハネが見た人の子の姿ではないからである。イエスは自身に付き従う人たちに再来を約束したが、異邦の民の全員に対し、ひとりのユダヤ人の姿で自身を示すことは決してない。肉となった神の働きは時代を開くことであると、あなたがたは知らなければならない。この働きは数年に限られており、神の霊の働きをすべて完了させることはできない。同じように、ユダヤ人としてのイエスの姿が表わせるのは、ユダヤで働く神の姿だけであり、そのときの神は磔刑の働きしかできなかった。肉にあった間、イエスは時代を終わらせる働きも、人類を滅ぼす働きもできなかった。よって、十字架にかけられ働きを終えたイエスは高く昇り、人間の前から永遠に隠れた。それ以降、異邦の民族の忠実な信者たちが目にできたのは、主イエスの顕現ではなく、壁に貼られたイエスの肖像だけだった。この肖像は人が描いたものに過ぎず、神自身が人に見せた姿ではない。二度肉となった際の姿を、神が公然と大衆に示すことはないのである。人類のあいだで神が行なう働きは、神の性質を人々に理解させることである。そのすべてが様々な時代の働きを通

して人に示されるのである。それはイエスの顕現を通してというより、むしろ神が知らしめた性質や、神が行なった働きを通して達成される。すなわち、神の姿は受肉した姿を通して人に知らされるのではなく、むしろ、姿と形をもつ受肉した神によって行なわれる働きを通して知らされ、彼の働きを通して神の姿が示され、神の性質が知らされる。これが、神が肉において行なおうと望む働きの意義である。

二度にわたる神の受肉の働きがひとたび終わると、神は異邦の民族のあいだに義なる性質を示し始め、大衆が神の姿を見えるようにする。神は自身の性質を示し、これを通して、様々な種類の人たちの最後を明らかにし、それによって古い時代を完全に終わらせる。肉における神の働きが広範囲に及ぶものでない（ちょうどイエスがユダヤだけで働いたように、そして今日わたしがあなたがたのあいだだけで働いているように）のは、肉における神の働きには範囲と限界があるからである。神は普通の平凡な肉の姿で短期間の働きを行なうだけで、受肉した肉体を用いて永遠の働きをしたり、異邦の民の前に現われる働きをしたりするわけではない。肉における働きは範囲が限られている（ユダヤでしか働かないとか、あなたがたのあいだでしか働かないというように）だけであり、その後、それらの境界内でなされた働きを通して範囲を拡大することができる。もちろん、拡大の働きは霊によって直接行なわれ、もはや神の受肉した肉体の働きではなくなる。肉における働きには境界があり、宇宙の隅々にまで拡張されないからであって、それを達成することはできない。肉における働きを通して、神の霊はそれに続く働きを行なう。したがって、肉においてなされた働きは、ある特定の境界の中で行なわれる始まりの働きなのである。その後、神の霊はこの働きを、さらに拡張された範囲で続ける。

神がこの地上に来て行なう働きは、時代を導き、新たな時代を切り開き、古い時代を終わらせるためだけのものである。神は地上における人間の人生を生き、人の世の喜びと悲しみを自ら体験するため、もしくは自身の手である特定の人を完全にしたり、ある特定の人が成熟するのを自ら見守ったりするために来たのではない。それは神の働きではない。神の働きとはただ新たな時代を始め、古い時代を終わらせることである。つまり、神が一つの時代を自ら始め、別の時代を自ら終わらせ、自身の働きを自ら行なうことでサタンを打ち負かすのである。神が自ら働きを行なうたび、それは戦場に足を踏み入れるようなものである。まず、神は肉において世界を征服し、そしてサタンに勝利する。地上のあらゆる人々が自分たちの歩むべき正しい道を持ち、平和と喜びに満ちた人生を送れるよう、神はすべての栄光を獲得し、二千年の働き全体の幕を開ける。しかし、神は長きにわたって地上で人間と暮らすことはできない。なぜなら、神は神であり、結局人間とは違うからである。神は普通の人の生涯を送ることができない。つまり、平凡そのものの人として地上に

住むことはできないのである。と言うのも、自身の人間生活を維持するにあたり、神は普通の人の普通の人間性を最小限しかもっていないからである。言い換えれば、神がどのようにして地上で家族をもち、職業を得て、子どもを育てられるというのか。これは神にとって不名誉なことではないだろうか。神が普通の人間性を授けられているのは、普通の方法で働きを行なうという目的のためだけであって、普通の人のように家族や職業をもてるようにするためではない。神の普通の理知、普通の知性、普通の食事や肉体の衣服は、神が普通の人間性をもっていることを証明するのに十分である。神が普通の人間性を備えていることを証明するために家族や職業をもつ必要はない。まったく不必要である。神が地上に来るというのは、言葉が肉となるということである。神はただ、人が神の言葉を理解し、それを見ることが、つまり、肉によってなされる働きを人が見ることを可能にしているだけである。神の意図は、人々が神の肉体をある特定の方法で取り扱うことではなく、人が最後まで忠実であること、すなわち、神の口から発せられるすべての言葉に従い、神が行なうすべての働きに服従することだけである。神は肉において働きを行なっているに過ぎず、神の肉の偉大さと聖さを人が称揚するよう意図的に求めているのではない。むしろ、神の働きの知恵と、神が行使するすべての権威を示しているのである。よって、神は並外れた人間性を有しながら、一切の宣言を行なわず、自分がなすべき働きだけに集中しているのである。神が肉となりながら、自身の普通の人間性を公表することも証しすることもせず、その代わりに行なおうと望む働きをただ実行するのはなぜなのか、あなたがたは知らなければならない。したがって、受肉した神からあなたがたが目に見えるのは、神の神性とは何かということだけである。それは、人が真似るべき神の人間性とは何かを、神が宣言することはないからである。人間が人々を導く場合にのみ、その人は自分の人間性を語る。そうすることで、他の人たちをよりよく感銘させたり服従させたりして、指導力を発揮することができる。これとは対照的に、神はその働きだけで（つまり、人には達成不可能な働きで）人を征服する。神は人の尊敬を集めたり、人に自身を崇拜させたりはしない。神が行なうことはすべて、神に対する畏敬の念や、神の深遠さの感覚を人に植え付けることである。神は人を感銘させる必要がない。神に必要なのは、ひとたび神の性質を目の当たりにしたあなたが、神を畏れるようになることだけである。神が行なう働きは神のものである。人間が神に代わって行なえるものではなく、人間が達成できるものでもない。神自身だけがその働きを行ない、新しい時代を始めて、人間を新しい生活へと導けるのである。神が行なう働きは、人間が新しい生活を自分のものにし、新しい時代に入れるようにすることである。それ以外の働きは、正常な人間性をもち、他者から尊敬される人々に委ねられる。ゆえに、恵

みの時代、神は受肉していた三十三年間のうち、わずか三年半で二千年分の働きを完了させたのである。自身の働きを行なうために地上へ来るとき、神は常に二千年分の働き、あるいは一つの時代全体の働きをわずか数年間で完了させる。神は遅れることも立ち止まることもない。長年にわたる働きをひたすら凝縮し、わずか数年で完了できるようにする。神が自ら行なう働きは、ひとえに新しい道を開き、新しい時代を導くことだからである。

受肉の奥義（3）

神は自身の働きを行なうとき、何らかの構築や運動にとりかかるためでなく、自身の職分を全うするためにやって来る。毎回神が肉となるのは、働きの一段階を遂行し、新しい時代を始めるためだけである。今や神の国の時代が到来し、同じく神の国への訓練が始まった。この段階の働きは人間の働きでも、人間にある程度まで働きかけるものでもなく、神の働きの一部分を完了させるためだけのものである。神が行なうのは人間の働きではなく、また地上を去る前に、人間への働きの中である程度の成果を挙げるためでもない。それは自身の職分を全うし、なすべき働きを終えるため、つまり地上における自身の働きを適切に采配し、それによって栄光を得るためである。受肉した神の働きは、聖霊によって用いられる人々の働きとは異なる。地上に来て働きを行なうとき、神は自身の職分を全うすることにしか関心がない。自身の職分に関連していない他のあらゆることに関しては、見て見ぬふりをするほど何の関与もしないのである。神はただ行なうべき働きを実行し、人がすべき働きにはまったく関心をもたない。神の行なう働きは自身が存在する時代と、全うしなければならない職分に関するものだけであり、他のあらゆることは自分の視野にないかのようである。神は人類の一人として生きる上での、より基本的な知識を自身に備えることはせず、社交術を学んだり、人が理解できる他の物事を習得したりすることもない。人が自分のものにすべき物事にはまったく関心を示さず、ただ自身の本分である働きを行なうだけである。だからこそ、人が見るところ、受肉した神にはあまりに多くの点で不足があり、人がもつべき多くのものを無視するほどで、そうした事柄を一切理解していないように思われる。生活に関する一般的知識といった事柄、および自身の行動や他人との付き合いを律する原則などは、神と関係ないように見えるのである。しかし、受肉した神からほんの少しでも異常さを感じ取ることはとうていできない。つまり神の人間性は、正常な人としての生活と、自身の頭脳による正常な論理的思考を維持しつつ、善悪の識別力を与えているだけなのである。しかし、神には他の何も備わっておらず、それらはすべて人（被

造物) だけがもつべきものである。神が肉となるのは自身の職分を全うするためだけである。神の働きは時代全体に向けられており、特定の人や場所に向けられているのではなく、全宇宙に向けられている。これが神の働きの方向性であり、神が働きを行なう原則である。誰もこれを変えることはできず、人がそれに関わる術もない。神は肉となるたび、その時代の働きを伴うのであって、人間がよりよく神を理解するために、あるいは神についての洞察を得られるようにするために、20年、30年、40年、さらには70年、80年にわたり、人間のそばで暮らそうという意図を持っているのではない。そのような必要はないのである。そのようなことをしても、神の本来の性質について人間がもつ認識を深めることにはまったくならない。かえって人間の観念が増えるだけで、その観念や思想を旧弊なものにしてしまう。したがって、あなたがた全員が理解しなければならないのは、受肉した神の働きとはいったい何かである。「わたしが来たのは、正常な人間の生活を経験するためではない」というわたしの言葉を、あなたがたは理解しているはずではないか。「神が地上に来るのは、正常な人間の生活を送るためではない」という言葉を忘れてしまったのか。あなたがたは神が肉となることの目的を理解せず、「被造物の生活を経験する目的で神が地上に来るなど、どうしてあり得ようか」という言葉の意味を知らないのではないか。神は自身の働きを完成させるためだけに地上へ来るのであり、ゆえに地上での働きは束の間のものである。神が地上に来る目的は、自身の霊がその肉体を養育し、教会を導く優秀な人間にすることではない。神が地上に来るとき、それはことばが肉になるということである。とは言え、人は神の働きを知らないで、さまざまなことを神に押しつける。しかし、あなたがたはみな、神は「肉となったことば」であって、一時的に神の役割を果たすよう、自身の霊に養育された肉体ではないことを認識しなければならない。神自身は養育された産物ではなく、肉となったことばであり、今日、神はあなたがた全員のあいだで正式に自身の働きを行なっている。あなたがたはみな、神の受肉が本当の事実であることを知っており、また認めているが、それを理解しているかのように振る舞っている。受肉した神の働きから、神の受肉の意義と本質に至るまで、あなたがたはそれらをほんの少しも理解することができず、ただ他人に従って、記憶した言葉をいい加減に暗唱しているだけである。受肉した神は自分の想像通りだと、あなたは信じているのか。

神が肉となるのは、ひとえに時代を導き、新しい働きを始動させるためである。あなたがたはこの点を理解しなければならない。これは人の役割と大きく異なり、この二つを同じように語ることはできない。人は長期にわたって養育され、完全にされる必要があり、それからようやく働きを行なうために用いられることができる。そして必要とされる人間性は、ひときわ高次のものである。人間は普通の人間

性の理知を維持できなければならないだけでなく、他人との関係における行動を司る数多くの原則や規則をさらに理解し、その上、人の知恵や道徳についてさらに多くを学ばなければならない。これが、人が備えるべきものである。しかし、受肉した神にそれは当てはまらない。と言うのも、神の働きは人を表わさず、人の働きでもないからである。むしろ、それは神自身の直接的表現であり、神がなすべき働きを直接的に遂行することである（当然、神の働きはしかるべき時に行なわれ、気軽に、あるいは無作為に行なわれるのではなく、神の職分を全うするべき時に始められる）。神は人の生活や人の働きに関与しない。つまり、神の人間性はこれらのどれも備えていない（しかし、それが神の働きに影響することはない）。神はそうすべき時に自身の職分を全うするだけである。自身の地位が何であっても、神はすべき働きをただ進めるだけである。人が神について何を知っていようと、あるいは神についての意見が何であろうと、神の働きはまったく影響されない。例えば、イエスが働きを行なったとき、彼が何者かを知る人はおらず、イエスはただ自身の働きを進めるだけだった。それはどれも、イエスがなすべき働きを行なう際に彼を妨げなかった。よって、当初イエスは自身の身分を告白することも、宣言することもなく、ただ人を従わせた。当然、これは神の謙虚さだけではなく、神が肉において働く方法でもあった。神はこの方法でしか働きを行なうことができなかった。と言うのも、人には裸眼で神を認識する術がなかったからである。また、たとえ神を認識していたとしても、人には神の働きを助けることなどできなかっただろう。さらに、神が肉になったのは、人が神の肉体を知るようになるためではなかった。それは働きを行ない、職分を全うするためである。この理由で、神は自身の身分を公にすることに重点を置かなかったのである。神がなすべき働きをすべて完成させたとき、神の身分と地位はどれも自然と人に対して明らかになった。受肉した神は沈黙を守り、決して何も宣言しない。神は人のことや、人が神に従う中でどのように対処しているかなどは気にも留めず、ひたすら前進して自分の職分を果たし、なすべき働きを実行するだけである。誰も神の働きに立ちはいだかることはできない。神が働きを終える時になると、それは必ずや終結し、終わりになる。それに反する指示を出せる者はいない。神の働きが完成されてすぐ、神が人のもとを去ってはじめて、まだ完全に明確ではないにしても、神が行なう働きを人は理解するのである。そして、神が最初に働きを行なった際の意図を人が完全に理解するには、長い時間がかかる。言い換えると、受肉した神の時代の働きは二つの部分に分けられる。一つは受肉した神自身の肉体が行なう働きと、受肉した神自身の肉体が語る言葉から成っている。ひとたび神の肉体の職分が完全に成就されると、働きの別の部分は、聖霊に用いられる人によって実行されるのを待つ。それが、人が自分の役目を果た

すべき時である。なぜなら、神はすでに道を開いており、人間自身がそれを歩まなければならないからである。つまり、肉となった神は働きの一部を行ない、次いで聖霊と、聖霊によって用いられる人たちがその働きを引き継ぐのである。ゆえに人は、肉となった神がこの段階でおもに行なう働きについて、それに必要なことを知らねばならない。また、肉となった神の意義とは何か、神がなすべき働きは何かを理解しなければならず、人への要求に合わせて神に要求してはならない。ここに人の過ち、観念、またそれ以上に不従順があるのである。

神は人に神の肉体を知らしめたり、受肉した神の肉体と人の肉体の違いを区別させたりする目的で受肉するのではない。また、人の識別力を鍛えるために受肉するのでもなければ、ましてや人が受肉した神の肉体を礼拝し、そこから神が偉大な栄光を受けるようにする目的で受肉するのでもない。それらはどれも、神が肉となる本来の意図ではない。また、神は人を断罪するため、意図的に人を暴くため、あるいは人に困難をもたらすために肉となるのでもない。それらはどれも神の本来の意図ではない。神が肉となるたび、それは避けることのできない働きの形なのである。神がそのように振る舞うのは、さらに偉大な神の働きと経営（救い）のためであり、人が想像するような理由のためではない。神は自身の働きが求める時だけ、必要な時だけ地上に来る。神はただ見回す目的で地上に来るのではなく、自身がすべき働きを実行するために来る。そうでなければ、どうしてこの働きを行なうほどの重荷を背負い、それほど大きな危険を冒すだろうか。神はそうしなければならない時にだけ、また常に独自の意義をもって肉となる。もしそれが人々に神を見させ、彼らの視野を広げるためだけだったなら、神は絶対にそれほど軽々しく人々の間には来ないだろう。神が地上に来るのは、自身の経営とより偉大な働きのためであり、さらに多くの人類を得るためである。神は時代を表わし、サタンを打ち負かすために来るのであり、サタンを敗北させるために肉をまとう。さらに、神は全人類の生活を導くために来る。これらはすべて神の経営に関係しており、全宇宙の働きにも関係している。もし神が、人に神の肉体を知らしめ、人々の目を開かせるためだけに受肉したのなら、なぜ神は各国を旅しないのだろうか。それは極めてたやすいことではないだろうか。しかし、神はそのようなことをせず代わりに自分が暮らし、すべき働きを始めるのに適した場所を選んだ。この肉体だけでも大いに意義がある。それは一時代の全体を表わし、同時に一時代全体の働きを行なう。それは前の時代を終わらせ、新しい時代を始める。これらはすべて神の経営に関する重要な事柄であり、神が地上に来て実行する働きの一段階の意義である。イエスは地上に来たときにいくつかの言葉を語り、いくらかの働きを行なったただけだった。イエスは人のいのちを案じることなく、自身の働きを完了させてすぐに去って行った。

今日、わたしが語り、わたしの言葉をあなたがたに伝え終わり、そしてあなたがたがすべて理解した後、あなたがたのいのちがどのようなになるうとも、わたしの働きのこの段階は終了したことになる。そして将来的には、わたしの働きのこの段階を続け、これらの言葉にしたがって地上で働き続ける者がいなければならない。そのとき、人間の働きと構築が始まるのである。しかし現在、神は自身の職分を果たし、自身の働きの一段階を完成させるためだけに働きを行なう。神の働き方は人間のそれと異なる。人間は集会や討論会を好み、儀式を重んじる。一方、神がもっとも嫌うのは、まさに人間の集会や会合である。神は形式ばらずに人間と話し、語る。これが神の働きであり、並外れて解放されたものであって、あなたがたをも自由にする。しかし、わたしが何より嫌うのはあなたがたと集まることであり、あなたがたのように厳しく管理された生活に慣れることはできない。わたしは規則を最も嫌う。規則が人間をがんじがらめにするあまり、人間は動いたり、話したり、歌ったりすることを恐れ、その目でじっとあなたを睨みつけるまでになる。わたしはあなたがたの集まり方や大きな集会を非常に嫌悪する。このような方法であなたがたと集うのはとにかく拒否する。なぜなら、このような生き方をすると人は拘束されたように感じ、あなたがたは儀式や規則を過剰に守っているからである。あなたがたに主導権をもたせると、すべての人を規則の領域へと導いてしまい、彼らはあなたがたの指導のもとで規則を捨て去る術をもたないだろう。その代わり、宗教的な雰囲気ますます濃くなり、人間が行なう実践の数はさらに増えていくだろう。集まるたびに疲れることなくひたすら説教や話を続ける者もいれば、十日以上も休まずに説教し続けることができる者もいる。これらはみな、大きな集会であり人間の会合だと考えられる。これらは飲み食いや楽しみ、霊が自由にされた生活とは無関係である。これらはどれも会合である。あなたがたの同僚者の会合や大小の集会はどれも、わたしにとって忌まわしいものであり、一切関心をもったことがない。わたしが働きを行なう原則は次のようなものである。つまり、集会で説教するつもりはないし、大規模な大衆集会で何かを宣言したくもないし、ましてやあなたがた全員を数日間にわたる特別会議に呼び集めたいとも思わない。あなたがた全員が集まりの際に行儀良く座っているのを、わたしは好ましいと思わない。あなたがたがある特定の儀式の枠組みの中で生きているのを、わたしは見るのが嫌である。さらに、わたしはあなたがたのそのような儀式に参加するのを拒否する。あなたがたがそのようにすればするほど、わたしはそれを忌み嫌う。あなたがたの儀式や規則にわたしはほんの少しも関心がない。あなたがたがどれほど立派にそれらを行なおうとも、わたしにとってはどれもおぞましいだけである。これは、あなたがたの采配が不適切であるとか、あなたがたが下劣過ぎるというのではない。わたしはあ

なたがたの生き方を嫌うのであって、そしてそれ以上に、慣れることができないのである。あなたがたはわたしが行なおうと望む働きをまったく理解していない。当時、自身の働きを行なったとき、イエスはある場所で説教を終えると、弟子たちを率いてその町を去り、彼らが理解すべき道について語った。イエスはしばしばこのように働きを行なったのである。イエスが大衆のあいだで行なった働きは、数も少なく稀だった。あなたがたが神に求めることによると、肉となった神は正常な人間の生活を送るべきではないのである。座っていようと、立っていようと、歩いていようと、神は自身の働きを行なわなければならない、語らなければならない。常に働かなければならず、決して「作動」をやめることはできない。さもなければ、神は自身の本分を尽くしていないことになる。このような人間の要求は、人間の理知にふさわしいものだろうか。あなたがたの人格はどこにあるのか。あなたがたは要求しすぎではないのか。わたしが働きを行なうところをあなたに調べられるべきだろうか。職分を全うするところをあなたに監督される必要があるだろうか。自分がどのような働きを行なうべきか、またいつ行なうべきかをわたしは熟知しており、他人に干渉される必要はない。おそらくあなたには、わたしが大したことをしてこなかったように見えるかもしれないが、その時までにはわたしの働きは終わるのである。四福音書におけるイエスの言葉を例に取ろう。これらの言葉も限られていたのではないか。当時、イエスが会堂に入って説教をしたとき、長くても数分以内には終えていた。話し終えると、イエスは弟子たちを連れて舟に乗り、何の説明もせずに出発した。せいぜい、会堂にいた人々が互いに議論するだけで、イエスには関係のないことだった。神はなすべき働きだけを行ない、それ以上のことは何もしない。現代では、多くの人がわたしにもっと話したり語ったりすることを要求し、少なくとも一日に数時間はそうするよう求める。あなたがたの見たところ、神は語らない限り神でなくなり、語るものだけが神である。あなたがたは誰も目が見えていない。あなたがたはみな野蛮人であり、理知など持ち合わせない無知どもだ。あなたがたは観念をもちすぎている。あなたがたの要求は行き過ぎである。あなたがたは冷酷である。あなたがたは神が何であるかまったく理解していない。あなたがたは、語る者、演説する者はすべて神だと信じており、また言葉を与えてくれる者を自分の父だと信じている。教えてほしい。「整った」顔立ちと「非凡な」外見をしたあなたがたはみな、ほんの少しでも理知というものをもっているのか。天日を知っているのか。あなたがたは、一人ひとりが墮落した強欲な役人のようである。そうであれば、どうして分別がつくのか。どうして正誤の区別ができるのか。わたしはあなたがたに多くのものを授けてきたが、あなたがたのうち何名がそれに価値を置いたのか。誰がそれを完全に自分のものになっているのか。あなたがたは、自分

たちが今日歩んでいる道を誰が切り開いたのかを知らない。そのため、わたしに対して要求を、このような馬鹿げた不合理な要求を続けている。あなたがたは恥ずかしさのあまり赤面していないのか。わたしはまだ十分話していないのか。十分行っていないのか。あなたがたのうち、誰がわたしの言葉を宝として真に大切にできるのか。あなたがたは、わたしの前ではわたしをほめそやすが、背後では嘘をついて騙す。あなたがたの行ないはあまりに卑しく、わたしを不快にさせる。わたしが語り、働きを行なうことをあなたがたは要求するが、その理由は自分の目を楽しませ、視野を広げるために他ならず、あなたがたの生活を変えるためではない。わたしはあなたがたに極めて多くのことを語ってきた。あなたがたの生活はとうの昔に変わっているはずだ。それなのに、今なお以前の状況に逆戻りし続けているのはなぜなのか。もしや、わたしの言葉が奪われて、あなたがたが受け取っていないということなのか。実のところ、わたしはあなたがたのような墮落した人間に対してこれ以上何も言いたくない。そのようなことは無駄だろう。これほど空しい働きなどしたくない。あなたがたはいのちを得ることではなく、自分の目を楽しませたり視野を広げたりすることだけを望んでいる。あなたがたはみな、自分を欺いている。わたしがあなたがたに面と向かって話したことのうち、どれほど実践したのか教えてもらいたい。あなたがたは計略を巡らせて他人を騙しているだけである。あなたがたのうち、傍観者として喜んで見学している者を、わたしは忌み嫌う。あなたがたの好奇心は非常におぞましい。ここにいるのが真の道を求めるためでも、真理を渴望しているためでもないなら、あなたがたはわたしの憎悪の対象である。わたしは知っているが、あなたがたがわたしの言葉に耳を傾けるのは、ひとえに好奇心を満たすため、あるいはあれやこれやの貪欲な欲望を満たすためである。真理の存在を求める考えや、いのちに入る正しい軌道を探ろうという考えなど、あなたがたは一切持ち合わせていない。このような要求はあなたがたのあいだに全然存在していない。あなたがたは神のことを、研究して賞賛するための玩具とみなしているに過ぎない。いのちを求めるあなたがたの情熱はあまりに少なく、それでいて好奇心に満ちた欲望は多い。このような人々にいのちの道を説明するのは、空気に話しかけるのと同じである。話さないほうがましである。ここで言わせてもらおう。あなたがたが自分の心の隙間を満たすことしか望んでいないなら、わたしのもとへ来ないほうがよい。それよりは、いのちを得ることに重点を置くべきである。自分自身をもてあそぶのはやめなさい。自分の好奇心をいのちの追求の基盤にしたり、自分に語りかけてほしいとわたしに頼む言い訳にしたりするべきではない。これらはすべて計略であり、あなたがたはそれに長けている。もう一度、あなたに尋ねる。わたしがあなたに入っていくよう求めることのうち、どの程度実際に入ったのか。わた

しがあなたに話したことをすべて理解したのか。わたしが話したすべてのことを、あなたはなんとか実践してきたのか。

あらゆる時代の働きは神自身によって開始されるが、神の働き方が何であれ、神は運動を始めたり、あなたがたのために特別な会議を催したり、何らかの組織を設立するために来るのではないことを、あなたは知るべきである。神はなすべき働きを行なうためだけに来るのである。神の働きが誰かの制限を受けることはない。神は望み通りに自身の働きを行ない、人が何を思っても、どんなことを知っていても、その働きを実行することにしか関心がない。世界の創造から現在に至るまで、すでに三段階の働きが存在した。ヤーウェからイエスに至るまで、律法の時代から恵みの時代に至るまで、神は人のために特別会議を召集したり、全人類を一堂に集めて世界規模の特別な作業会議を開催したりして、それにより自身の働きの領域を広げようとしたことはない。神は適切な時に適切な場所で、一つの時代全体の最初の働きを行なうだけで、それを通して時代を始め、人間の生活の送り方を導く。特別会議は人の集会である。休日を祝うために人々を集めるのは人の働きである。神が休日を祝うことはなく、それ以上に、休日を強く嫌う。神は特別会議を召集せず、またそれ以上に、特別会議を忌み嫌う。受肉した神が行なう働きとはいったい何であるか、あなたはいま理解すべきである。

受肉の奥義（４）

あなたがたは聖書の内情と形成について知らなければならない。神の新しい働きをまだ受け入れていない人は、この知識をもっていない。彼らは知らないのである。これらの本質的な事柄についてわかりやすく話せば、彼らは聖書についてあなたにあれこれ言うことがなくなるだろう。彼らは、この記述は成就したか、あの記述は成就したかなどと、預言されたことを絶えず念入りに掘り下げている。彼らは聖書に従って福音を受け入れ、聖書に従って福音を説く。神に対する彼らの信仰は聖書の言葉をよりどころにしているので、聖書がなければ神を信じようとししない。このように、聖書を細かく吟味するのが彼らの生き方である。彼らが再び聖書を掘り下げ、あなたに説明を要求してきたら、次のように言いなさい。「まず、聖句を一つひとつ検証するのはやめよう。代わりに、聖霊がいかに関心のかを見よう。わたしたちが歩む道を取り上げ、それを真理と比較し、この道が本当に聖霊の働きと一致しているかどうかを見極め、聖霊の働きをもって、そのような道が正しいかどうかを確かめよう。あれこれの記述が成就したかどうかについて、わたしたち人間は首を突っ込むべきではない。それよりは、聖霊の働きや、神が行なってきた最新

の働きについて話すほうがよい」。聖書の預言は、預言者が当時伝えた神の言葉と、神に用いられて靈感を得た人々が書いた言葉であり、これらの言葉を説明できるのは神自身だけ、これらの言葉の意味を知らしめることができるのは聖霊だけであって、神自身だけが七つの封印を解き、巻物を開くことができる。あなたはこう言いなさい。「あなたは神ではないし、わたしも違う。では、誰があえて神の言葉を軽々しく説明しようというのか。あなたはあえてこれらの言葉を説明しようというのか。エレミア、ヨハネ、エリヤといった預言者たちが来たとしても、彼らは小羊ではないのだから、あえて聖書の言葉を説明しようなどとはしないだろう。小羊だけが七つの封印を解き、巻物を開けることができるのであり、他の誰も神の言葉を説明することはできない。わたしは神の御名を奪おうとは思わないし、ましてや神の言葉を説明しようなどとは思わない。わたしにできるのは、神に従う者でいることだけだ。あなたは神なのか。神の被造物の中に、あえて巻物を開けたり、それらの言葉を説明したりする者などいない。だからわたしもあえて説明しない。あなたも説明しようなどと試みないほうがよい。誰もそれらを説明しようとするべきではない。聖霊の働きについて話し合おう。これは人間にもできることだ。わたしはヤーウェとイエスの働きについて少々知っているが、そのような働きを直接経験したわけではないので、限られた範囲でしか語れない。イザヤやイエスが当時語った言葉の意味について、わたしは一切説明しない。わたしは聖書を研究しておらず、むしろ神の現在の働きに従っている。実際、あなたは聖書を小さな巻物とみなしているが、それは小羊だけが開けられるものではないのか。小羊以外に、他の誰がそれを開けられるのか。あなたは小羊ではないし、ましてやわたしも、自分は神だなどと主張はしない。だから、聖書を分析したり細かく調べたりするのはやめよう。それよりは聖霊によってなされる働き、つまり神自身によってなされる現在の働きについて話し合うほうがはるかによい。神が働きを行なう原則は何か、神の働きの本質は何かを確かめ、それらを使って、わたしたちが今日歩んでいる道が正しいかどうかを確認し、このようにしてそれを確信しよう」。福音を説きたいのであれば、特に宗教界の人々に対して説きたいのであれば、聖書を理解し、その内情を熟知しなければならない。そうしなければ、あなたに福音を説く術はない。ひとたび全体像を熟知し、聖書の死んだ言葉を細かく詮索するのを止め、神の働きといのちの真理だけを語るようになれば、真の心で探求している人々を得ることができるだろう。

ヤーウェの働き、ヤーウェが定めた律法、ヤーウェが人間の生活を導く原則、律法の時代にヤーウェが行なった働きの内容、ヤーウェが律法を定めた意義、ヤーウェの働きがもつ恵みの時代にとっての意義、そしてこの最終段階において神が行なうこと。これらが、あなたがたが理解しなければならない事柄である。第一段階

は律法の時代の働き、第二段階は恵みの時代の働き、第三段階は終わりの日の働きである。あなたがたは、神による働きのこれらの段階を理解しなければならない。初めから終わりまで、あわせて三段階ある。働きの各段階の本質は何か。六千年にわたる経営（救いの）計画において何段階が実行されるのか。各段階はいかにして実行されるのか、そして各段階が特定の方法で実行されるのはなぜか。これらはどれも極めて重要な問題である。各時代の働きには象徴的な価値がある。ヤーウェはどのような働きを行なったのか。なぜその特定の方法で行なったのか。なぜヤーウェと呼ばれたのか。また、イエスは恵みの時代にどのような働きを行なったのか。いかに行なったのか。働きの各段階とそれぞれの時代によって、神の性質のどの側面が表わされているのか。神の性質のどの側面が律法の時代に表わされたのか。恵みの時代においてはどうか。さらに最後の時代ではどうか。これらの本質的な問題を、あなたがたは理解しなければならない。神の性質のすべては六千年にわたる経営計画を通じて表わされてきた。それは恵みの時代、もしくは律法の時代においてのみ表わされたのではなく、ましてや終わりの日のこの時期にだけ表わされるのでもない。終わりの日になされる働きは、裁き、怒り、刑罰を表わす。終わりの日になされる働きが、律法の時代の働きや、恵みの時代の働きに取って代わることはできない。しかし、これら三段階は互いに繋がって一つの実体を成し、いずれも一つの神の働きである。当然、この働きの遂行は別々の時代に分割されている。終わりの日になされる働きはすべてに終わりをもち、律法の時代になされた働きは始まりの働きであり、恵みの時代になされた働きは贖いの働きだった。この六千年にわたる経営計画全体の働きのビジョンについては、誰も識見や理解を得ることはできない。それらのビジョンは神秘的なままである。終わりの日においては、神の国の時代を始めるべく言葉の働きだけがなされるものの、それはすべての時代を表わすものではない。終わりの日は終わりの日以上のものである、神の国の時代以上のものでもない。また恵みの時代や律法の時代を表わすものでもない。終わりの日には六千年にわたる経営計画のすべての働きがあなたがたに表わされる、というだけのことである。それは奥義のヴェールを取り除くことである。このような奥義について、人がそのヴェールを取り除くことはできない。人が聖書についていかに深く理解していても、その理解が言葉以上のものになることはない。人は聖書の本質を理解していないからである。人は聖書を読むとき、何らかの真理を理解したり、いくつかの言葉を説明したり、有名な聖句や章を細かく調べ上げたりするかもしれないが、それらの言葉に含まれている意味を取り出すことはできないだろう。なぜなら、人が見ているのはどれも死んだ言葉であり、ヤーウェやイエスの働きの場面ではなく、人にはそのような働きの奥義を解明する術がないからである。

よって、六千年にわたる経営計画の奥義は最も偉大な奥義であり、最も深く隠されていて、人にはまったく理解できないものである。神自身が人に説明して明かさない限り、誰も神の旨を直接把握することはできない。さもないとすれば、それらは永遠に人間にとって謎のままで、封印された奥義であり続けるだろう。宗教界の人たちはさておき、あなたがたも今日まだ伝えられていなかったなら、把握することはできなかっただろう。この六千年の働きは、預言者たちによるすべての預言よりも神秘に満ちている。これは天地創造から現在に至る中で最大の奥義であり、歴代の預言者の誰も理解できたことがない。なぜなら、この奥義は最後の時代においてのみ解明され、それまでに明らかにされたことがないからである。あなたがたがこの奥義を把握し、完全に受け取ることができるならば、宗教の人々も残らずこの奥義によって征服されるだろう。この奥義だけが最も偉大なビジョンであり、人間はそれを理解したいと強く渴望するが、それはまた人間にとって極めて不明瞭なものである。恵みの時代、イエスの行なった働きは何か、ヤーウェの行なった働きは何かをあなたがたは知らなかった。人々は、ヤーウェが律法を定めたのはなぜか、律法を守るよう大衆に命じたのはなぜか、神殿を建てなければならないのはなぜかを理解せず、ましてやイスラエル人がエジプトから荒れ野に連れ出され、その後カナンへと導かれたのはなぜかも理解しなかった。この日に至るまで、これらのことが明らかにされることはなかったのである。

終わりの日における働きは三段階のうち最後の段階である。それはもう一つの新しい時代の働きであり、経営の働き全体を表わすものではない。六千年にわたる経営計画は三段階の働きに分けられる。どの一段階も、それだけで三つの時代の働きを表わすことはできず、全体の一部しか表わせない。ヤーウェの名が神の性質全体を表わすことはできないのである。ヤーウェが律法の時代に働きを行なったという事実は、神が律法の下でしか神でいられないことを証明しているのではない。ヤーウェは人間のために律法を定め、戒めを言い渡し、神殿と祭壇を築くように求めた。ヤーウェが行なった働きは律法の時代だけを表わす。ヤーウェが行なったこの働きは、神は人間に律法を守るよう求める神でしかないとか、神殿にいる神だとか、祭壇の前にいる神だなどと証明するものではない。そのように言うのは誤りだろう。律法の下でなされた働きは一つの時代しか表わせない。よって、もしも神が律法の時代の働きだけを行なったのであれば、人は神を次の定義の中に閉じ込めるだろう。つまり、「神は神殿の中の神である。神に仕えるには、祭司の衣をまとうて神殿に入らなければならない」という定義である。恵みの時代の働きが実行されず、律法の時代が現在まで続いていたら、神が慈悲と愛にも溢れていたことを人間は知らなかっただろう。律法の時代の働きが行なわれず、恵みの時代の働きしかな

されなかったなら、神は人を贖い、人の罪を赦すことしかできないのだと、すべての人が認識しただろう。神は聖く汚れのない存在であり、人間のために自分を犠牲にし、十字架にかけられることができるとしたか、人間は認識しなかったはずである。人はそれらのことしか知らず、他の何も理解しなかっただろう。したがって、それぞれの時代は神の性質の一部だけを表わすのである。律法の時代、恵みの時代、そして今の時代のそれぞれにおいて、神の性質のどの側面が表わされているかに関して言えば、これら三つの時代を一つの全体として統合して初めて、神の性質の全体を表わすことができる。これら三段階をすべて知って初めて、人はそれを完全に理解することができるのである。この三段階のどれも省略することはできない。これら三段階の働きを知るようになると、神の性質全体を見ることができる。神が律法の時代における働きを完成させた事実は、神が律法の下で神でしかないことを証明するものではなく、また神が贖いの働きを完成させた事実は、神が永遠に人類を贖うことを意味するものではない。これらはすべて人間によって引き出された結論である。恵みの時代はすでに終わりを迎えたが、神は十字架のものでしかなく、十字架だけが神の救いを表わすと言うことはできない。そのように言うのであれば、神を定義していることになる。現在の段階において、神はおもに言葉の働きを行なっているが、神は人に対して憐れみ深かったことなどなく、神がもたらしたのは刑罰と裁きだけだなどと言うことはできない。終わりの日の働きはヤーウェの働きとイエスの働き、そして人には理解されていないすべての奥義を明らかにする。これは人類の終着点と終わりを示し、人類のあいだにおける救いの働きを残らず終わらせるためである。終わりの日におけるこの段階の働きはすべてを終わらせる。人に理解されていなかったすべての奥義が解明され、人がその奥義を徹底的に解き明かし、心の中で完全にはっきり理解できるようにしなければならない。その時初めて、人類を種類に応じて分類することができるのである。六千年にわたる経営計画が完成されて初めて、人は神の性質全体を理解できるようになる。なぜなら、神の経営はその時すでに終わっているからである。いま、最後の時代における神の働きをあなたがたはすでに経験したわけだが、神の性質とは何か。神は言葉を語る神に過ぎないと、あなたはあえて言うつもりか。こんな結論を出そうなどとは思わないはずだ。中には、神は奥義を解明する神であるとか、神は小羊であり、七つの封印を解くものであると言う人々がいる。とは言え、あえてこのような結論を出す者など一人もいない。また、神は受肉した肉体だと言う人がいるかもしれないが、これもまだ正しくないだろう。さらに、受肉した神は言葉を語るだけで、しるしや不思議は行なわないという人がいる。まさか、あなたはあえてこのようには言わないだろう。なぜなら、イエスは肉となってしるしや不思議を行なったからであ

り、ゆえにあなたは軽々しく神を定義することなどしないはずだ。六千年にわたる経営計画を通じて行なわれたすべての働きは、今やっと終わりに近づいてきた。その働きのすべてが人に明かされ、人類のあいだで実行されて初めて、人は神の性質、そして神が所有するものと神そのものを残らず知る。この段階の働きが完全に終わったとき、人に理解されていなかったすべての奥義が明らかにされ、これまで理解されなかったすべての真理が明確になり、人類は未来の道と終着点を告げられているだろう。これこそが、現段階でなされるべき働きの全体である。人間が今日歩く道は十字架の道であり、苦難の道でもあるが、人間が実践すること、および今日飲み食いして享受することは、律法の下にいる人間、また恵みの時代の人間に降りかかったこととは大きく異なる。今日人に求められることは、過去に求められたこととは異なり、律法の時代に求められたこととはさらに異なる。さて、神がイスラエルで働きを行なっていたとき、律法の下で人に求められたことは何だったか。それは、人は安息日とヤーウェの律法を守らなければならない、ということだけだった。安息日には誰も働くことが許されず、ヤーウェの律法を犯すことも許されなかった。しかし、今はそうではない。安息日でも、人はいつものように働き、集まり、祈り、何の制限も課せられていない。恵みの時代の人たちはバプテスマを受けなければならない、それに加えて断食をし、パンを裂き、ぶどう酒を飲み、頭を覆い、他人の足を洗うことを求められていた。そのような規律は今や廃止されたが、人はもっと大きなことを要求されている。と言うのも、神の働きがますます深まり、人の入りがさらに高いところに到達するからである。かつてイエスは按手して祈ったが、すべてのことが述べられた現在、按手に何の意味があるのか。言葉だけで成果を挙げることができるのだ。かつてイエスが人の上に手を置いたとき、それは人を祝福し、病を癒すためだった。当時、聖霊はそうのようにして働きを行なったが、今は違う。現在、聖霊は働きを行なって成果を上げるために言葉を用いる。その言葉はあなたがたに明らかにされたのであり、あなたがたは言われたとおりにそれを実践しなければならない。神の言葉は神の旨であり、神が行なおうと望む働きである。あなたは神の言葉を通じて、神の旨と、神があなたに達成するように求めていることを理解できる。そして、あなたは按手を必要とせず、ただ神の言葉を直接実践できる。中には「わたしの上に手を置いてください。あなたの祝福を受け取り、あなたにあずかることができるように、わたしの上に手を置いてください」と言う人もいるだろう。これらはどれも、現在は廃れて時代遅れになった過去の慣習である。聖霊は時代に応じて働きを行なうのであり、無作為に、あるいは一定の規則に応じて働くのではない。時代が変わり、新しい時代はそれとともに必ずや新しい働きをもたらす。これはどの段階の働きにも言えることであり、ゆえに神の働き

は決して繰り返されない。恵みの時代、イエスは病を癒したり、悪霊を追い出したり、人の上に手を置いて祈ったり、祝福したりするといった働きを数多く行なった。しかし、現在再びそのようなことをするのは無意味だろう。聖霊は当時そのように働きを行なった。それは恵みの時代だったからであり、人が享受する恵みは十分にあった。人はいかなる支払いも求められず、信仰がある限り恵みを受け取ることができた。誰もが非常に寛大に扱われた。今、時代は変わり、神の働きはさらに前進した。そして刑罰と裁きを通じ、人の反抗的態度や、人の中の汚れたものは取り除かれる。当時は贖いの段階だったので、神はそのように働きを行ない、人が享受するのに十分な恵みを示して、人が罪から贖われ、また恵みによって罪が赦されるようにすることを求められたのである。現在の段階は、刑罰、裁き、言葉の打撃、そして言葉による懲らしめと暴露を通じて人の中の不義を暴き、それによって人が後に救われるためのものである。これは贖いよりもさらに深い働きである。恵みの時代の恵みは、人が享受するのに十分だった。この恵みをすでに経験した今、人がそれを享受することはもはやない。そのような働きは時代遅れであり、もはやなされることはない。今、人は言葉の裁きを通じて救われる。裁かれ、罰せられ、精錬されたあと、人の性質は変わる。これはすべて、わたしが語った言葉のゆえではないのか。各段階の働きは、人類全体の進歩と時代に合わせて行なわれる。すべての働きに意義があり、どれも最後の救いのためになされる。それは、人類が将来良い終着点を得られるようにするためであり、人類が最終的に種類に応じて分類されるようにするためである。

終わりの日の働きは言葉を語ることである。言葉により、大きな変化が人の中で生じ得る。現在、それらの言葉を受け入れた人たちに生じる変化は、恵みの時代にしるしや不思議を受け入れた人たちに生じた変化よりもはるかに大きい。と言うのも、恵みの時代において、悪霊は按手と祈りによって人から追い出されたが、人の中の堕落した性質が依然残っていたからである。人は病を癒され、罪を赦されたが、人の中にある堕落したサタンの性質がいかに清められるかについて言えば、その働きはまだなされていなかったのである。人は信仰のゆえに救われ、罪を赦されただけで、人の罪深い本性は根絶されず、依然としてその内面に残っていた。人の罪は神の受肉を通じて赦されたが、それはその人の中にもはや罪がないという意味ではない。人の罪は、罪の捧げ物を通じて赦されることができたものの、どうすれば人がこれ以上罪を犯さないようになり、その罪深い本性が完全に根絶され、変化するかということについて言えば、人にはその問題を解決する術がないのである。人の罪は神による磔刑の働きゆえに赦されたが、人は以前の堕落したサタンの性質の中で生き続けた。そのため、人は堕落したサタンの性質から完全に救われなけれ

ばならない。そうすることで、その人の罪深い本性が完全に根絶され、二度と芽生えなくなり、かくして人の性質が変わるのである。そのためにも、人はいのちの成長の筋道、いのちの道、そして性質を変える道を把握しなければならない。さらに、人はこの道に沿って行動することが求められる。その結果、人の性質は次第に変わり、その人は光の輝きの下で生き、何事も神の旨に沿って行ない、墮落したサタンの性質を捨て去り、サタンの闇の影響から自由になることができ、それにより罪から完全に抜け出せるのである。このとき初めて人は完全なる救いを受けることになる。イエスが働きを行っていたとき、イエスに関する人の認識はいまだ漠然として不明瞭だった。人はずっとイエスをダビデの子と信じ、イエスは偉大な預言者で、人の罪を贖う慈悲深い主であると宣言した。信仰のおかげで、イエスの衣の端を触っただけで癒された人もいたし、盲人たちは見えるようになり、死人さえ生き返った。しかし、人は墮落したサタンの性質が自分自身に深く根づいているのを見出すことができず、それを捨て去る方法も知らなかった。人は肉の平安や幸福、一人の信仰による家族全体の祝福、そして病人の癒しなど、多くの恵みを受けた。残りは人の善行や外見上の信心深さだった。そのようなものを基に生きることができるなら、その人はまずまずの信者だと思われた。そのような信者だけが死後、天国に入ることができるとされたのだが、それは彼らが救われたという意味だった。しかし、このような人たちはその生涯において、いのちの道をまったく理解していなかった。ひたすら罪を犯しては告白することを繰り返すばかりで、自身の性質を変える道はもたなかったのである。これが恵みの時代における人間の状態だった。人は完全な救いを得たのか。いや、得てはいない。したがって、その段階の働きが終わったあとも、依然として裁きと刑罰の働きが残っているのである。この段階は言葉によって人を清めるものであり、それによって人に従う道を与える。悪霊を追い出すことを続けるなら、この段階は有益でも意義深くもないだろう。と言うのも、人の罪深い本性が根絶されることはないだろうし、人は罪の赦しで行き詰まるはずだからである。罪の捧げ物を通じ、人は罪を赦されてきた。なぜなら、十字架の働きがすでに終わり、神はサタンに勝利したからである。しかし、人の墮落した性質は依然として人の中に残っており、人は依然として罪を犯し、神に抵抗することができ、よって神はまだ人類を得ていない。そのため、神はこの段階の働きにおいて、言葉を用いて人の墮落した性質を暴き、人に正しい道に沿って実践させるのである。この段階は前の段階よりもさらに有意義であり、いっそう有益である。と言うのも、今、人に直接いのちを施し、人の性質を完全に一新させられるのは言葉だからである。それははるかに徹底的な働きの段階である。ゆえに、終わりの日における受肉は神の受肉の意義を完成させ、人を救う神の経営計画を完全に終わらせたのである。

神による人の救いは、霊の手段や身分を直接用いて行なわれるのではない。と言うのも、神の霊は人が触れることも見ることもできないものであり、人が近づくこともできないからである。もしも神が霊のやり方で直接人を救おうとするなら、人は神の救いを受け取ることができないだろう。そして、もしも神が被造物である人の容姿をまとわないなら、人はこの救いを受け取ることができないだろう。なぜなら、ヤーウェの雲に近づける者が誰もいなかったように、人には神に近づく術がないからである。被造物たる人間になることでのみ、つまり自身がなろうとしている肉の身体にその言葉を入れることでのみ、神は自身に付き従うすべての人に直接言葉を働かせることができる。その時初めて、人は神の言葉を自ら見聞きし、そしてさらに、神の言葉を自分のものにすることができ、それによって完全に救われるようになるのである。もしも神が肉とならなければ、血と肉からできた人は誰もそうした偉大な救いを受けることができないし、誰一人救われることもないだろう。神の霊が人類のあいだで直接働いたなら、人類は残らず打ち倒されてしまうか、神と接する術がないまま、完全にサタンの虜とされるだろう。最初の受肉は人を罪から贖うもの、つまりイエスの肉体によって人を罪から贖うものだった。言い換えると、イエスは十字架から人を救ったが、墮落したサタンの性質が依然として人の中に残っていたのである。二度目の受肉はもはや罪の捧げ物として仕えるためのものでなく、罪から贖われた人たちを完全に救うものである。そうすることで、赦された人は罪から解放され、完全に清められる。そして変化した性質を獲得することでサタンの闇の影響から自由になり、神の玉座の前に戻るのである。この方法でしか、人は完全に清められない。律法の時代が終わりを迎えて恵みの時代に入った際、神は救いの働きを始めた。それは、神が人間の不従順を裁いて罰し、人類を完全に清める終わりの日まで続く。その時初めて、神は救いの働きを完結させ、安息に入る。よって、三段階の働きのうち、神が受肉して自ら人のあいだで働きを行なったのは二回だけである。それは、働きの三段階のうち一段階だけが人の生活を導く働きであり、他の二段階は救いの働きだからである。神は肉となることでのみ、人と共に生き、世の苦しみを経験し、普通の肉体で生きることができるのである。神はそうすることでのみ、人が被造物として必要とする実践の道を施すことができる。人が神から完全な救いを受けるのは、神の受肉を通じてであり、祈りへの回答として天から直接受けるのではない。なぜなら、人は肉と血の存在であり、神の霊を見ることができず、ましてや神の霊に近づく術などないからである。人が接触できるのは神の受肉した肉体だけであり、この手段を通じてでなければ、人はすべての道と真理を理解し、完全なる救いを受けることができない。第二の受肉は人の罪を一掃し、人を完全に清めるのに十分である。よって、第二の受肉とともに、

肉における神の働き全体が終わりを迎え、神の受肉の意義が完成される。その後、肉における神の働きは完全に終了する。第二の受肉の後、神は自身の働きのために三度肉となることはない。神の経営全体がすでに終わっているからである。終わりの日の受肉は、神の選ばれた人を完全に自身のものとし、終わりの日の人類は残らず種類に応じて分類されている。神はもはや救いの働きを行わず、またいかなる働きであっても、それを実行すべく肉に戻ることもない。終わりの日の働きにおいて、言葉はしるしや不思議の顕示よりも力強く、言葉の権威はしるしや不思議の権威を超越する。言葉は人の心に深く埋もれた堕落した性質を残らず暴く。あなたには自分でそれらを認識する術がない。それらが言葉を通じて暴かれるとき、あなたは当然それを見つけるが、否定することはできず、完全に納得するだろう。これが言葉の権威ではないのか。これが現在の言葉の働きによって得られる成果である。したがって、病を癒したり悪霊を追い出したりすることで、人が罪から完全に救われることはなく、またしるしや不思議を示すことで人がすっかり完全にされることもないのである。病を癒したり悪霊を追い出したりする権威は人に恵みを与えるだけで、人の肉は依然としてサタンに属し、堕落したサタンの性質は依然として人の中に残っている。言い換えると、まだ清められていないものは依然として罪と汚れに属しているのである。人は言葉によって清められて初めて、神のものとされ、聖いものとなる。悪霊が人から追い出されたとき、あるいは人が贖われたとき、それはサタンの手から人をもぎ取り、神のもとに戻したという意味でしかなかった。神によって清められておらず、変えられてもいないなら、人は堕落したままである。人の中には汚れ、敵対心、そして反抗心が依然として存在する。人は神による贖いを通じて神のもとに立ち返っただけで、神についての認識が一切なく、依然として神に抵抗し、神を裏切ることができる。人が贖われる前、サタンの害毒の多くがすでに人の中に植え付けられていた。そしてサタンによって何千年も堕落させられてきた人間には、神に抵抗する本性がすでに定着していた。だからこそ、人が贖われたとき、それは人が高い代価で買い取られるという贖い以上のものではなく、人の中の害毒に満ちた本性は取り除かれていなかった。ここまで汚れた人は、神に仕えるのにふさわしくなる前に変化を経なければならない。この裁きと刑罰の働きによって、人は自分の中の汚れて堕落した本質を完全に知るようになる。そして完全に変わり、清くなることができる。この方法でしか、人は神の玉座の前へと戻るのにふさわしくなることができない。今日なされるすべての働きは、人が清められて変わるためのものである。言葉による裁きと刑罰、そして精錬を通じ、人は自分の堕落を一掃して清められることが可能になる。この段階の働きを救いの働きと考えるよりは、むしろ清めの働きと言ったほうが適切だろう。事実、この段階は救いの

働きの第二段階であるとともに征服の段階でもある。人は言葉による裁きと刑罰を通じて神のものとされる。また言葉を用いて精錬し、裁き、露わにすることで、人の心にある汚れ、観念、動機、そして個人的な願望がすべて完全に暴かれる。人は贖われ、罪を赦されたが、それによって見なし得るのは、神は人の過ちを記憶せず、その過ちに応じて人を取り扱わないということだけである。しかし、肉体において生きる人間が罪から解放されていないと、人は罪を犯し続けることしかできず、墮落したサタンの性質をどこまでも示し続ける。これが人の送る生活であり、罪を犯しては赦されるという終わりのないサイクルなのである。人類の大多数は昼間に罪を犯し、夜になると告白するだけである。このように、たとえ罪の捧げ物が人のために永久に有効だとしても、それで人を罪から救うことはできない。救いの働きは半分しか完成していない。人にはいまだ墮落した性質があるからである。たとえば、自分たちがモアブの子孫であることに気づいた人々は、不満の言葉を述べ、いのちを追い求めることをやめ、すっかり否定的になってしまった。これは、人々がいまだ神の支配に完全に服従できないでいることを示しているのではないか。これがまさに、人々の墮落したサタンの性質ではないのか。あなたが刑罰を受けていなかったとき、あなたの手は他の誰よりも高く、イエスの手よりも高く上げられていた。そしてあなたは大声で叫んだ。「神の愛する子になりたまえ。神と心を通わす者になりたまえ。サタンにひれ伏すくらいなら死ぬほうがましだ。あのいまましい悪魔に対抗したまえ。赤い大きな竜に対抗したまえ。どうか赤い大きな竜が惨めにも完全に権力の座から落ちるように。どうか神がわたしたちを完全にするように」。あなたの叫び声は他の誰よりも大きかった。しかし、刑罰の時が訪れ、人間の墮落した性質が再び明らかになった。やがて人々の叫びは途絶え、彼らの決意は失われた。これが人間の墮落である。それは罪より根深く、サタンによって植えつけられ、人の奥深くに根ざしたものである。人が自分の罪に気づくのは容易なことではない。人には自分に深く根ざした本性を認識する術がなく、そうするには言葉による裁きに頼らなければならない。そうして初めて、人はその時点から次第に変わってゆくのである。人が過去にそう叫んだのは、自分に本来備わる墮落した性質を認識していなかったからである。これが人間の中に存在する不純なものである。これほど長期間にわたる裁きと刑罰の中、人間はずっと緊張状態の中で生きた。これはすべて言葉によって成し遂げられたのではなかったか。効力者の試練に先立ち、あなたも大声で叫んだのではないか。「神の国に入れ。この名を受け入れる者はみな、神の国に入るだろう。誰もが神にあずかるだろう」と。効力者の試練が訪れたとき、あなたはもはや叫ばなかった。初めは誰もが、「ああ、神よ。あなたがわたしをいかなる場所に置かれようと、わたしはあなたの導かれるままに従

います」と叫んだ。「誰がわたしのパウロになるのか」という神の言葉を読んだ人々は、「わたしがなります」と言った。次いで「ヨブの信仰についてはどうか」という言葉を目にして、「ヨブの信仰を身につけようと思います。神よ、どうかわたしを試してください」と言った。効力者の試練が訪れたとき、人々はすぐさま崩れ落ち、再び立ち上がることもままならなかった。その後、彼らの心の中の不純なものは少しずつ減っていった。これは言葉を通じて成し遂げられたのではないか。したがって、あなたがたが今日経験してきたことは、言葉によって達成された成果であり、イエスによるしるしや不思議の働きを通じて達成された成果よりもさらに大きなものである。あなたが目にする神の栄光と神自身の権威は、磔刑を通じて、あるいは病を癒して悪霊を追い払うことによって見えるだけでなく、神の言葉の裁きを通じてさらにはっきり見えるのである。そのことは、神の権威と力がしるしの働きだけ、あるいは病を癒して悪霊を追い払うことだけから成っているのではなく、神の言葉の裁きが神の権威をよりよく表わし、神の全能をよりよく明らかにできることを示している。

人が今まで成し遂げてきたこと、つまり現在の人の霊的身丈、認識、愛、忠誠、従順、そして識見は、言葉の裁きによって得られた成果である。あなたが忠誠心を持ち、今日まで立ち続けていられるのは、言葉によって成し遂げられたことである。受肉した神の働きが途方もなく素晴らしいことを、人は今や理解しており、そしてそこには、人には達成できず、奥義や不思議であることがたくさんある。ゆえに、多くの人が服従してきたのである。生まれてこのかた誰にも従ったことがない人たちも、今日、神の言葉を目にすると、そうと気づかないまま完全に従い、あえて吟味しようとも、他に何か言おうともしない。人類は言葉の下で倒れ、言葉の裁きの下にひれ伏している。もしも神の霊が直接人に話しかけたら、ダマスコへ向かうパウロが光の中で地にひれ伏したように、人類はみなその声に従い、暴きの言葉がなくても倒れるだろう。神がこのように働きを続けたなら、人は言葉の裁きを通じて自分の墮落を知ることができず、ゆえに救いも得られないはずだ。神は肉となることでのみ、自身の言葉を自らすべての人の耳元に届けることができ、それによって聞く耳のある人がすべて言葉を聞き、言葉による裁きの働きを受けられるようにする。これだけが神の言葉による成果であり、霊が出現して人を脅かし、服従させるのではない。この実践的でありながら並はずれた働きを通じてのみ、長きにわたって奥深くに潜んでいた人の古い性質が完全に暴かれ、人はそれを認識して変えられるようになる。これらはすべて受肉した神の実践的働きである。この働きにおいて、彼は実践的に語り、裁きを下すことで、言葉による人への裁きという成果を挙げる。これが受肉した神の権威であり、神の受肉の意義である。それは受肉し

た神の権威と、言葉の働きが挙げた成果を知らしめるため、また霊が肉において降臨し、言葉による人間の裁きを通じてその権威を実証することを知らしめるためになされる。受肉した神の肉体は平凡かつ普通の人間性の外形だが、受肉した神が権威に満ちており、神自身であり、その言葉が神自身の表現であることを人に示すのは、彼の言葉が挙げる成果である。この手段により、受肉した神が神自身であること、肉となった神自身であること、誰にも犯されないこと、そして誰も言葉による彼の裁きを超えることはできず、いかなる闇の勢力も彼の権威に打ち勝てないことが、全人類に示される。人間が受肉した神に完全に服従するのは、ひとえに彼が肉となったことばであるため、彼の権威のため、そして言葉による彼の裁きのためである。受肉した神の肉体がもたらす働きは、彼のもつ権威である。神が肉になるのは、肉もまた権威をもつことができ、また受肉した神が現実的な方法で、つまり人が見たり触れたりできるような方法で、人類の間で働きを行なうことができるからである。その働きは、すべての権威を所有する神の霊によって直接なされる働きよりもはるかに現実的で、その成果も明らかである。これは、受肉した神の肉体が実践的な方法で語り、働きを行なえるからである。受肉した神の肉の外形は権威をもたず、人が近づけるものである。一方、受肉した神の本質は権威を伴うが、その権威は誰にも見えない。受肉した神が語り、働きを行なうとき、人は彼の権威の存在を感じ取れない。それにより、受肉した神は実際的な性質をもつ働きを容易に行なえる。その実際的な働きはすべて成果を挙げることができる。受肉した神が権威をもつことに誰も気づかなかったとしても、あるいは彼が誰にも犯されないことや、彼の怒りを誰一人知らなかったとしても、ヴェールに包まれた自身の権威、隠された怒り、そして自身が公然と語る言葉を通じ、彼は意図していた自身の言葉の成果を挙げる。言い換えると、受肉した神の口調、言葉の厳しさ、そして彼の言葉のあらゆる知恵を通じて、人は完全に納得するのである。このようにして、人は一見何の権威もないかのような受肉した神の言葉に服従し、それによって人の救いという神の目的を成就させるのである。これが受肉の意義のもう一つの側面である。つまり、より現実的に語り、自身の言葉の現実が人に効果を発揮するようにして、その結果、人は神の言葉の力を目の当たりにできる。したがって、この働きが受肉によってなされなければ、それはほんの少しも成果を挙げることができず、罪深い人々を完全に救うことができない。もしも肉にならなければ、神は人には見ることも触れることもできない霊のままだろう。人は肉の被造物であり、人と神は二つの異なる世界に属し、違う性質を有している。神の霊は肉でできた人と相容れることができず、両者の間に関係を築く術はなく、また言うまでもなく、人が霊になることはできない。そうであれば、自身本来の働きを行なうべく、神の霊は被造物の一

つにならなければならない。神は最も高い場所に昇ることもできれば、へりくだって人間という被造物になり、人類のあいだで働きを行ない、その中で暮らすこともできる。しかし、人は高みに昇って霊になることができず、ましてや最も低い場所に降りることなどできない。神が肉となって自身の働きを実行しなければならないのは、それが理由である。同じように、最初の受肉の際、受肉した神の肉体だけが磔刑を通じて人類を贖えたのであり、その一方、神の霊が人のための捧げ物として十字架にかけられることは不可能だったに違いない。神は直接肉になり、人のための捧げ物となることができたが、人が直接天に昇り、神が人のために用意した罪の捧げ物を受け取ることはできなかった。そういうわけで、可能なのは天地を何度か行き来するよう神に求めることだけで、人間を天に昇らせ、その救いを受け取らせるのは不可能だろう。と言うのも、人はすでに転落しており、またそれ以上に、人が天に昇ることは到底できず、まして罪の捧げ物を得るなど不可能だからである。よって、イエスが人類のあいだに来て、人には到底成し遂げられない働きを自ら行なうことが必要だった。神が肉となるたび、絶対にそうする必要がある。もしもいずれかの段階が神の霊によって直接行なわれることができたなら、神が受肉という屈辱に耐えることはなかっただろう。

この最後の段階の働きにおいて、成果は言葉によって達成される。人は言葉を通じて、多くの奥義や、過去の世代を通じて神が行なってきた働きを理解するようになる。人は言葉を通じて聖霊に啓かれ、過去の世代が解明し得なかった奥義、昔の預言者たちや使徒たちの働き、そして彼らの働きの原則を理解するようになる。人は言葉を通じて神自身の性質を理解するようになると同時に、人の不従順や反抗心を理解し、自分の本質を認識するようになる。これらの働きの段階と、語られたすべての言葉を通じ、人は霊の働き、神の受肉した肉体の働きを知り、さらにはその性質全体を知るようになる。六千年以上にわたる神の経営の働きについても、あなたはそれに関する認識を言葉によって得た。自分の以前の観念を知ったのも、それを脇にのけることができたのも、言葉を通じてではなかったのか。前の段階で、イエスはしるしや不思議の働きを行なったが、この段階にしるしや不思議はない。なぜ神がしるしや不思議を示さないのかという理解も、言葉を通じて得られたのではないのか。よって、この段階で語られる言葉はかつての世代の使徒たちや預言者たちによってなされた働きを越えている。預言者たちによる預言でさえも、このような成果を挙げることはできなかった。預言者たちは預言だけ、つまり将来何が起こるかを語っただけで、当時神が行なおうと望んでいた働きについては語っていない。彼らは人類の生活を導くため、人類に真理を授けるため、あるいは彼らに奥義を明かすために語ったのではなく、ましてやいのちを授けるために語ったのでもない。

この段階で語られる言葉には預言と真理があるものの、それらはおもに人にいのちを授けるためのものである。現在の言葉は預言者たちの預言と異なる。これは預言を語るためでなく、人のいのちのため、人のいのちの性質を変えるための働きの段階である。最初の段階はヤーウェの働きであり、人が地上で神を礼拝するよう、その道を整える働きだった。それは地上において働きの源となる場所を見つけるという、始まりの働きだったのである。当時、ヤーウェはイスラエルの民に対し、安息日を守り、両親を敬い、互いに平和に暮らすよう教えた。なぜなら当時の人々は、人間とは何であるかも、地上でどのように生きるべきかも理解していなかったからである。神はその最初の働きの段階において、人類の生活を導く必要があった。ヤーウェが彼らに語ったことは、人類がそれまで認識しておらず、所有もしていないものばかりだった。当時、神は多くの預言者を立ち上がらせて預言を語らせたが、彼らはみなヤーウェの導きの下でそうしたのである。これは単に神の働きの一つだった。最初の段階で神が肉となることはなく、よって神は預言者たちを通じてあらゆる部族や国々に指示を与えた。イエスは自身の生涯において働きを行なったとき、今日のように多くは語らなかった。終わりの日におけるこの言葉の働きの段階が、かつての時代や世代において行なわれたことはない。イザヤ、ダニエル、そしてヨハネは多くの預言を語ったが、彼らの預言は今語られている言葉とまったく異なっていた。彼らが語ったことは預言でしかなかったが、今語られている言葉は違う。わたしが今話していることをすべて預言にしたなら、あなたがたは理解できるだろうか。わたしが語ったのが、わたしが去ったあとのことについてだったとしたら、あなたはどのようにしてそれを理解できただろうか。言葉の働きはイエスの時代にも律法の時代にも決してなされなかった。中には「ヤーウェも自身の働きを行なった際に言葉を語りませんでしたか。イエスも病を癒したり、悪霊を追い出したり、しるしや不思議の働きを行なったりするのに加えて、その時言葉を語りませんでしたか」と言う人がおそらくいるかもしれない。語られる物事の間には違いがある。ヤーウェが発した言葉の本質は何だったか。ヤーウェは地上における人類の生活を導いただけで、それはいのちにおける霊的な事柄とは無関係だった。ヤーウェが語ったとき、それはすべての地で人々に指示を与えるためだったと言われているのはなぜか。「指示を与える」という言葉は、明白に語り、直接命じることを意味する。ヤーウェは人にいのちを施したのではなく、むしろただ人の手を取って、どのようにヤーウェを崇めるべきかを教えたのであり、たとえ話で教えることはあまりなかった。イスラエルにおいてヤーウェが行なった働きは、人を取り扱ったり鍛練したりするものでも、裁きや刑罰を与えるものでもなく、人を導くものだった。ヤーウェはモーセに対し、神の民に荒野でマナを集めさせるよう命じた。毎朝日の

出前に、彼らはその日に食べる分だけマナを集めなければならなかった。マナは翌日まで保存することができなかった。次の日になるとカビが生えたからである。ヤーウェは人々に説教したり、人間の本性を暴いたりすることはせず、人の発想や思考を暴露することもしなかった。ヤーウェは人々を変えなかったが、彼らの生活を導いた。当時、人は子どもと同じで何も理解せず、いくつかの基本的な機械的動作しかできなかった。よって、ヤーウェは大衆を導くために律法を制定しただけなのである。

福音を広め、それによって真の心で探求するすべての人たちが、今日なされている働きを認識し、完全に確信できるようにするためには、それぞれの段階でなされた働きの内情、本質、意義をはっきりと理解しなければならない。あなたの交わりを聞くことで、人々がヤーウェの働きとイエスの働きを理解し、またそれ以上に、今日の神によるすべての働き、そして三段階の働きの関係と違いも理解できるようにしなさい。三段階のどれも他の段階を妨害しないが、それらはすべて同じ霊による働きであることを、話を聞き終えた人々が理解できるようにしなさい。それらは異なる時代に働きを行ない、その内容も異なり、それらが語る言葉も異なるが、働きを行なう原則は一つのもの、同じものである。これらのことは神に従うすべての人が理解すべき最も偉大なビジョンである。

二度の受肉が、受肉の意義を完成させる

神による各段階の働きには実質的な意義がある。当時、イエスは男性の形で来たが、今回来る際、神は女性の形である。このことから、神が男女両方を創造したことは自身の働きに役立ち、また神には性の区別がないことがわかる。神の霊が来るとき、それはいかなる肉体でも意のままにまとうことができ、その肉体は神を表すことができる。男性であろうと女性であろうと、それが神の受肉した肉体である限り、どちらも神を表せるのである。イエスが来たときに女性として現れたとしても、つまり、男の子ではなく女性の赤子が聖霊によって受胎されたとしても、その段階の働きはまったく同じように完成されたことであろう。そうだったならば、現段階の働きは女性ではなく男性によって完成されなければならないはずだが、それでも結局、働きはまったく同じように完成されることになる。各段階でなされる働きにはそれぞれの意義があり、どちらの段階の働きも繰り返されることはなく、互いに矛盾することもない。当時、イエスは働きを行う中で神のひとり息子と呼ばれたが、それは男性であることを示している。それでは、なぜ今の段階でひとり息子のことは言及されていないのか。それは、働きの必要性から、イエスの性とは異な

る性へと変更せざるを得なかったためである。神に性の区別はない。神は思い通りに自身の働きを行い、また働きを行う中でいかなる制限も受けず、非常に自由であるが、働きの各段階にはそれぞれの実際的な意義がある。神は二度肉となったが、終わりの日における受肉が最後であることは言うまでもない。神は自身のすべての業を知らしめるために来た。人が目撃できるように自ら働きを行うべく、今の段階で神が受肉していなければ、人は永遠に、神は男性でしかなく、女性ではないという観念に固執するだろう。これまで、神は男性にしかなり得ず、女性が神と呼ばれることはあり得ないと、すべての人が信じていた。男は女に対して権威をもつと、誰もがみなしていたからである。そのような人は、権威をもてるのは男だけで、女は誰ももつことができないと信じており、そのうえ、男は女のかしらであり、女は男に従わねばならず、男を超えることはできないとさえ言った。男は女のかしらであると過去に言われた時、それは蛇にだまされたアダムとエバを指していたのであって、初めにヤーウェによって造られた男と女を指していたのではない。もちろん、女は夫に従い、夫を愛さなければならず、また男は家族を養って支えられるようにならなければならない。これらはヤーウェが定めた律法と命令であり、人類は地上の生活においてこれらを順守しなければならない。ヤーウェは女に「あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう」と言った。ヤーウェがこう言ったのはひとえに、人類が（すなわち男も女も）ヤーウェの支配下で正常に暮らし、人類の生活が構造をもち、秩序を失わないようにするためである。従って、男と女がどう行動すべきかについて、ヤーウェは適切な規則を作ったが、この規則は地上で暮らすすべての被造物にのみ関係するもので、受肉した神に関するものではなかった。どうして神が自分の被造物と同じであり得ようか。神の言葉は自身の被造物である人類にのみ向けられた。ヤーウェが男女の規則を定めたのは、人類が正常に暮らすようにするためだった。最初に人類を創造したとき、ヤーウェは二種類の人間、すなわち男性と女性の両方を造った。従って、受肉した神の肉体にも男女の区別があった。神はアダムとエバに語った言葉に基づいて働きを決めたのではなかった。神が二度にわたり受肉したのはひとえに、神が最初に人類を造った時の考えに沿って決定された。つまり、神は墮落する以前の男性と女性に基づき、二度にわたる受肉の働きを完成させたのである。蛇にだまされたアダムとエバにヤーウェが語った言葉を人が取り上げ、神の受肉の働きに適用したら、イエスもなすべきこととして妻を愛する必要があるのではないだろうか。それでもやはり神は神なのだろうか。もしそうなら、神は依然として働きを完成させることができるだろうか。受肉した神が女性であることが間違いならば、神が女を造ったのも最大級の間違いだったのではないだろうか。神が女性として受肉するのは間違いだと人がいまだに信じてい

るなら、結婚をせず、それゆえ妻を愛することができなかったイエスもまた、現在の受肉と同じくらい間違っているのではないだろうか。ヤーウェがエバに語った言葉を使って今日における神の受肉の事実を判定するのなら、恵みの時代に受肉した主イエスを評価するには、ヤーウェがアダムに語った言葉を使わなければならない。これらは同じ一つのものではないのか。蛇にだまされなかった男に基づいて主イエスを評価するのなら、今日の受肉の事実を蛇にだまされた女に基づいて判断することはできない。それは公正さに欠ける。このようにして神を評価するのは、あなたに理知がないことを証明している。ヤーウェが二度受肉した時、その肉体の性は蛇にだまされなかった男性と女性に関連していた。つまり神が二度受肉したことは、蛇にだまされなかったその男性と女性に従っていたのである。イエスが男性であるのは、蛇にだまされたアダムが男性であるのと同じだと考えてはいけない。両者はまったく関係がなく、性質の異なる二人の男性である。確かに、イエスが男性であるからといって、イエスはすべての女のかしらであり、すべての男のかしらではないと証明することにはならないのではないか。イエスは全ユダヤ人（男も女も含む）の王ではないのか。イエスは神自身であり、女のかしらだけでなく、男のかしらでもある。イエスはすべての被造物の主であり、すべての被造物のかしらである。どうしてイエスが男であることをもって、それが女のかしらであることの象徴だと決めつけられるのか。これは冒涇ではないだろうか。イエスは墮落したことの無い男性である。イエスは神であり、キリストであり、主である。どうして墮落したアダムのような男性でありえようか。イエスはもっとも聖なる神の霊が身に着けた肉体である。どうしてイエスはアダムの男性らしさを有する神であるなどと言えようか。そうであれば、神の働きはすべて間違っていたことになるのではないか。ヤーウェは蛇にだまされたアダムの男性らしさをイエスの中に組みこむことができたのだろうか。現在の受肉は、性別こそイエスと異なっているとしても、本質的にはイエスと同じ受肉した神によるもう一つの働きではないか。それでもあなたは、受肉した神は女性ではありえない、なぜなら蛇に最初にだまされたのは女だからだとあえて言うのか。女は最も不浄で、人類の墮落の根源なのだから、神が女性として受肉するなど到底ありえないなどとまだあえて言うのか。「女はいつも男に従うべきで、神を明らかにしたり、直接象徴したりすることは決してできない」などと、まだあえてしつこく言うのか。あなたは過去に理解しなかったが、今も神の働きを、とりわけ受肉した神を冒涇し続けられるのか。このことをはっきり理解できないならば、自分の愚かさや無知が明らかにされ、醜さが暴露されないよう、発言にはせいぜい気をつけなさい。自分がすべてを理解していると考えてはいけない。言うておくが、あなたがこれまで目にし、経験してきたことはすべて、わたしの経営計画

の千分の一を理解するのにさえ十分ではない。ならば、あなたはなぜそんなに傲慢なのか。あなたがもつほんのわずかな才能と最小限の認識では、イエスの働きの一秒に使用するのにさえ不十分である。あなたは実際どれほどの経験を有しているのか。あなたが生涯で見てきたもの、耳にしてきたすべてのもの、そして想像してきたことは、わたしが一瞬で行う働きより少ない。あら探しをしたり、欠点をみつけたりしないほうがよい。どんなに傲慢でも、あなたはアリ以下の被造物なのだ。あなたが腹の中に抱えているすべてのものは、アリの腹の中にあるものよりも少ない。自分がいくらか経験を積み、歳を重ねたからといって、乱暴に振る舞ったり、自慢げに話したりする資格を得たと考えてはならない。あなたの経験と年功は、わたしが発した言葉の産物ではないのか。自分の労働や苦勞と引き換えにそれらを獲得したと信じているのか。今日、あなたはわたしの受肉を見ており、ただそのために、あなたの中には有り余るほどの考えがあり、そこから果てしない観念が生じる。わたしの受肉がなかったら、たとえ並外れた才能があっても、あなたがこれほどの考えをもつことはないだろう。あなたの観念が生まれるのはそこからではないのか。その最初の時にイエスが受肉していなければ、あなたは受肉について何を知っているだろうか。二度目の受肉を批判しようとする厚かましさがあるのは、一度目の受肉があなたに認識を与えたからではないのか。従順な追随者にならず、それを研究対象にしているのはなぜなのか。この流れに入って受肉した神の前に来たあなたに対し、どうして神が自身の研究を許すだろうか。あなたが自分の家族史を研究するのは結構なことだが、神の「家族史」を研究しようと試みるなら、今日の神はあなたに対し、そのような研究を許すだろうか。あなたは盲目ではないのか。あなたは自ら屈辱を受けようとしているのではないのか。

イエスの働きだけが行われ、終わりの日のこの段階における働きがそれを補完していなければ、人は永久に、イエスだけが神の独り子である、すなわち、神は一人の息子しかもたず、その後別の名前で出て来る者は誰も神の独り子ではなく、ましてや神自身でもないという観念に固執するだろう。罪の捧げものとして仕える者、あるいは神に代わって権力を担い、全人類を贖う者は神の独り子であるという観念を人はもっている。現れる者が男性である限り、その人は神の独り子、神の代理と見なせると信じている人もいる。イエスはヤーウェの息子、独り子であるという人さえいる。このような観念は誇張ではないか。今の段階の働きが最後の時代になされていなければ、全人類は神について暗い陰に包まれてしまうだろう。もしそうなら、男は自分を女より高い地位にあるものと考え、女は堂々としていることが決してできないだろう。そうなれば、女は誰一人として救われないだろう。人々はいつも、神は男であり、そのうえ女を常に嫌悪し、救いを与えないと信じている。もし

そうなら、ヤーウェによって造られ、また墮落したすべての女には救われる機会がないというのは、本当のことなのではないか。それなら、ヤーウェが女を造ったこと、つまりエバを造ったことは無意味だったのではないだろうか。そして女は永久に消滅するのではないだろうか。ゆえに、終わりの日におけるこの段階の働きは、女だけでなく全人類を救うためになされるのである。神が女性として受肉したなら、それはひとえに女性を救うためだろうと考える者は、まさに愚か者である。

今日の働きは恵みの時代の働きを推し進めてきた。すなわち、六千年にわたる経営（救いの）計画全体における働きが前進したのである。恵みの時代は終わったが、神の働きはさらに前進している。今の段階の働きは恵みの時代と律法の時代を基礎にしていると、わたしが繰り返し言うのはなぜか。これは、今日の働きが恵みの時代に行われた働きの延長であり、律法の時代に行われた働きを向上させたものだからである。これら三つの段階は密接に結びついており、それぞれがその次の段階に繋がっている。また、今の段階の働きはイエスによってなされた働きの上に築かれていると、わたしが言うのはなぜか。この段階がイエスによってなされた働きの上に築かれたのでなければ、この段階でもう一つの磔刑が起きていなければならず、過去の段階における贖いの働きも一からやり直す必要があるはずだ。これは無意味なことだろう。従って、働きは完全に終わったのではなく、時代が前進し、働きの水準が以前に比べていっそう高まったということである。今の段階の働きは律法の時代を基礎とし、イエスの働きという岩盤の上に築かれるとすることができるだろう。神の働きは段階ごとに築かれ、今の段階は新しい始まりではない。三段階の働きが結合して初めて六千年にわたる経営（救いの）計画とみなすことができる。今の段階は恵みの時代の働きを基礎として行われる。これら二段階の働きに関連がなければ、なぜ今の段階で磔刑が繰り返されないのか。なぜわたしは人の罪を背負わず、人を直接裁いて罰しに来るのか。人を裁いて罰するわたしの働きが磔刑に続くものでなく、わたしの現在の到来が聖霊の受胎によるものでなかったら、わたしには人を裁いて罰する資格がないだろう。わたしが直接来て人を罰し、裁くのはまさに、わたしがイエスと一つだからである。今の段階の働きはすべて過去の段階の働きの上に築かれている。だからこそ、そのような働きだけが人を一步一步救いに導くことができるのである。イエスとわたしは一つの霊から来ている。わたしたちの肉体には何のつながりもないが、わたしたちの霊は一つである。わたしたちが行う内容、わたしたちが担う働きは同じではないが、わたしたちは本質的に同じである。わたしたちの肉体の形は異なるが、これは時代の変化のため、およびわたしたちの働きが異なることを求めているためである。わたしたちの職分は同じではないので、わたしたちが生み出す働きや、わたしたちが人に明かす性質も異なって

いる。そのようなわけで、人が今日見るものや理解するものは、過去のものと同じではない。それは時代の変化のためである。彼らの肉体の性や形は異なっており、彼らは同じ家族から生まれたのではなく、ましてや同じ時期に生まれたのでもないが、彼らの霊はやはり一つである。彼らの肉体に血縁関係はなく、いかなる物理的関係もないが、彼らが二つの異なる時期に受肉した神であることは否定できない。彼らは同じ血統ではなく、共通する人間の言語をもっていないが（一方はユダヤ人の言語を話す男性であったし、他方は中国語しか話さない女性である）、彼らが受肉した神の肉体であることは否定できない真実である。これらの理由から、彼らは異なる国に暮らし、また異なる期間に、それぞれがなすべき働きを行う。彼らが同じ霊で、同じ本質を有しているという事実にも関わらず、彼らの肉体の外見には絶対的な類似性がまったくない。彼らは同じ人間性を共有しているだけで、肉体的な外見と誕生の状況に関する限り、両者は似ていない。これらのことはそれぞれの働きや、人が彼らに関してもつ認識に何の影響も与えない。なぜなら、最終的に分析すれば、彼らは同じ霊であり、誰も彼らを分けることができないからである。彼らに血縁関係はないが、その霊が彼らの存在全体を担い、異なる時期に異なる働きを割り当て、また彼らの肉体を異なる血統に割り当てる。ヤーウェの霊はイエスの霊の父ではなく、イエスの霊もヤーウェの霊の子ではない。彼らは一つの同じ霊である。同様に、今日の受肉した神とイエスとの間に血縁関係はないが、彼らは一つである。なぜなら、彼らの霊が一つだからである。神は慈悲と慈愛の働きを行うことができ、同様に義なる裁きの働きや人を罰する働き、人にのろいをもたらす働きも行うことができる。そして最終的に、神は世界を滅ぼし、悪しき人々を懲罰する働きを行うことができる。神はこのすべてを自ら行うのではないか。これが神の全能性ではないのか。神は人に律法を布告することも、戒めを発することもでき、また初期のイスラエル人の地上における生活を導くとともに、彼らが神殿や祭壇を建造して、すべてのイスラエル人を統治するよう指導することができた。その権威のため、神は二千年にわたり地上でイスラエル人とともに生きた。イスラエル人はあえて神に反抗しなかった。すべての人がヤーウェを崇拝し、戒めを守ったのである。これが神の権威と全能性によって行われた働きである。恵みの時代、イエスは墮落した全人類（イスラエル人だけではない）を贖うために来た。イエスは人に慈悲と慈愛を示した。恵みの時代に人が見たイエスは慈愛に満ちており、いつも人への愛情にあふれていた。と言うのも、イエスは人を罪から救うために来たからである。イエスは磔刑によって人類を完全に罪から救うまで、人の罪を赦すことができた。その間、神は慈悲と慈愛をもって人の前に現れた。つまり、人が永遠に赦されるよう、イエスは人のために罪の捧げものとなり、人の罪を背負って磔刑に処されたの

である。イエスは慈悲深く、憐れみ深く、我慢強く、愛情があった。恵みの時代にイエスに従ったすべての人も、あらゆることにおいて我慢強く、愛情深くあらうとした。彼らは長らく苦しみ、たとえ叩かれても、罵られても、石を投げつけられても、決して反撃しなかった。しかし、この最終段階において、そうなることはもはやあり得ない。イエスとヤーウェの霊は一つだったにもかかわらず、両者の働きはまったく同じというわけではなかった。ヤーウェの働きは時代を終わらせたのではなく、時代を導き、地上における人類の生活を先導したのであり、また今日の働きは、深く墮落させられてきた異邦の民を征服し、中国に暮らす神の選民だけでなく全宇宙と全人類を導くことである。今あなたには、この働きが中国だけで行われているように見えるかもしれないが、実はすでに海外へと広まり始めている。中国の外で暮らす人々が幾度も真の道を探し求めるのはなぜか。それは、霊がすでに働きを開始しており、今日語られる言葉が全宇宙の人々に向けられているからである。これにより、働きの半分がすでに行われている。創世から現在に至るまで、神の霊はこの偉大な働きを推進してきたのであり、またそれ以上に、異なる時代、異なる国々において、異なる働きを行なってきたのである。各時代の人々は、それぞれ異なる神の性質を見ているが、それは神が行う異なる働きを通して自然と明らかにされる。それは神であり、慈悲と慈愛に満ちている。神は人の罪の捧げものであり、人の羊飼いであるが、同時に人の裁き、刑罰、そしてのろいでもある。神は二千年にわたって地上における人間の生活を導くことができ、墮落した人類を罪から贖うこともできた。そして今日、すべての人が神に完全に服従するよう、神は自分のことを知らない人類を征服し、彼らを自身の支配下に置くこともできる。最後に、神は全宇宙の人々の中にある不浄なもの、不義なものをすべて焼き払い、自分が慈悲と慈愛に満ちた神、英知と不思議の神、および聖い神というだけでなく、さらには人を裁く神でもあることを示す。人類の中の悪人にとって、神は燃えさかる炎、裁き、懲罰である。また完全にされるべき人々にとって、神は苦難、精錬、試練であり、同時に慰め、支え、言葉の施し、取り扱い、そして刈り込みである。また淘汰される人々にとって、神は懲罰であり、報いである。教えてほしい。神は全能ではないのか。あなたの想像とは違い、神は磔刑に限らずすべての働きができる。あなたは神のことをあまりに見くびっている。神にできるのは磔刑を通じて人類を贖うことだけで、それで終わりだと信じているのか。そしてその後、あなたは神に従って天に行き、いのちの木から果実を食べ、いのちの川から水を飲むというのか……。果たしてそんなに単純なことだろうか。教えてほしい。あなたは何を成し遂げたのか。あなたにイエスのいのちがあるのか。あなたは確かにイエスによって贖われたが、磔刑はイエス自身の働きだった。あなたは人として何の本分を尽くしたのか。あな

たは表面的に敬虔なだけで、神の道を理解していない。それが神を明らかにするあなたの方法なのか。神のいのちを得ていなければ、あるいは神の義なる性質のすべてを見ていなければ、自分はいのちをもつ者だと主張することはできず、天国の門をくぐる価値もない。

神は霊であるだけでなく、肉になることもできる。そのうえ、神は栄光のからだである。あなたがたは見えていないが、イエスはイスラエル人によって、つまり当時のユダヤ人によって目撃された。最初、彼は肉体だったが、磔刑に処された後、栄光のからだになった。神はすべてを包みこむ霊であり、あらゆる場所で働きを行うことができる。神はヤーウェ、イエス、メシアになることができ、最後は全能の神になることもできる。神は義、裁き、刑罰であり、またのろい、怒りであるが、慈悲と慈愛でもある。神がなした働きはどれも神を表すことができる。神とはどのようなものかと言うのか。あなたは説明することができない。本当に説明できないのであれば、神に関して結論を下すべきではない。ある段階で神が贖いの働きをしたというだけで、神は永遠に慈悲と慈愛の神であると結論づけてはいけない。神は慈悲と慈愛に満ちた神でしかないと、あなたは確信できるのか。神が慈悲と慈愛に満ちた神でしかないならば、なぜ終わりの日に時代を終わらせるのか。なぜこれほど多くの災難をもたらすのか。人々の観念と考えによれば、人類が最後の一人まで残らず救われるよう、神は最後まで慈悲と慈愛に満ちていなければならない。しかし終わりの日、神が地震や疫病や飢饉といった大災害をもたらし、神を敵と見なすこの悪しき人類を滅ぼすのはなぜなのか。人がこれらの災害に苦しむのを、神はなぜ許すのか。神がどのようなものであるかについて、あなたがたは誰も言おうとしないし、説明もできない。神は本当に霊だとあえて言うのか。イエスの肉体に他ならないとあえて言うのか。人のためにいつまでも磔刑に処される神だとあえて言うのか。

三位一体は存在するのか

イエスの受肉という事実の後、人は、天には父だけでなく、子と、さらには霊がいると信じた。これが、天にはこのような神、すなわち父であり、子であり、聖霊であるところの三位一体の神がいるという、人が抱いている従来の観念である。神は一つの神だが、三つの部分からなっているという観念を、すべての人が持っている。そして、従来の観念に深くはまり込んだ人はみな、それが父、子、聖霊だと考える。それら三つの部分を一つにしたものだけが神のすべてなのである。聖なる父がいなければ、神は完全ではない。同様に、子、または聖霊がいなければ、やはり神は完全ではない。人々は自身の観念の中で、父だけで、あるいは子だけで、神と

見なすことはできないと信じている。父と子と聖霊が合わさって初めて神そのものと見なすことができるのだ。今、すべての宗教信者のみならず、あなたがたの中のあらゆる追従者でさえも、この信念を抱いている。だが、この信念が正しいかどうかに関しては、誰も説明できない。と言うのも、神自身に関する事柄について、あなたがたはいつも意識が曖昧だからである。これらは観念であるが、あなたがたはそれが正しいか、間違っているかがわからない。あなたがたが宗教的観念にあまりにも強く影響を受けてしまったからである。あなたがたは、こうした従来の宗教的観念をあまりにも深く受け入れており、その毒があなたがたの内部にあまりにも深く浸透している。したがって、あなたがたはこの件に関しても、そうした有害な影響に屈している。なぜなら、三位一体の神は絶対に存在しないからである。つまり、父と子と聖霊の三位一体など絶対に存在しないのだ。これらはすべて人の従来の観念、人の誤った信念である。人は何世紀にもわたり、人間の心の中の観念が生み出し、人間によってねつ造され、人間がこれまで見たことのない、この三位一体の存在を信じてきた。長年にわたり、多数の聖書解説者が三位一体の「真の意味」を説明してきたが、三位一体の神ははっきり区別できる三つの同質の位格であるという説明は曖昧模糊としており、人々はみな神の「構成」のせいで混乱している。これまで完全な説明ができた偉人は一人もいない。論法という点で、また理論という点で、ほとんどの説明は合格点に達しているが、その意味を十分明確に理解している人は一人としていない。これは、人が心の中で抱いている偉大な三位一体など存在しないからである。誰も神の本当の顔を見たことがないし、幸運にも天に昇って神の住まいを訪れ、神がいる場所にどのようなものがあるのかを調べたり、「神の家」には何万世代、何億世代がいるのかを正確に判断したり、あるいは神の本来の構成はいくつの部分から成り立つのかを調査したりした人はいないからである。主に調べる必要があるのは、父と子、ならびに聖霊の年齢、それぞれの位格の外見、それらがいったいどういうわけで分かれたのか、どういうわけで一つになるのか、である。残念ながら、長きにわたるこれまでの年月の中で、これらの事柄の真相を突き止められた者は一人としておらず、みな推測しているに過ぎない。と言うのも、三位一体に関心を抱く熱心かつ敬虔なすべての宗教信者に対し、この件の真相について報告するため、天に昇って見学し、全人類のために「調査報告書」を携えて戻ってきた者は一人としていないからである。もちろん、そのような観念を形成したからといって、人を責めることはできない。それではなぜ、父なるヤーウェは人類を創造したとき、子のイエスを同行させなかったのか。最初にすべてがヤーウェの名に沿って進んでいたなら、そのほうがよかったはずだ。責めを負わせなければならないとしたら、天地創造のときに子と聖霊を呼び寄せず、単独で働きを実

行したヤーウェ神の一時的な過失である。仮にその三つがすべて同時に働いていたなら、一つになっていたはずではないのか。最初から最後までヤーウェの名だけしかなく、恵みの時代からイエスの名がなかったら、または、イエスがその時もまだヤーウェと呼ばれていたら、神は人類によってこのように分割される苦しみを免れたはずではないのか。確かに、このすべてについてヤーウェを責めることはできない。責めを負わせなければならないとしたら、それは聖霊である。聖霊は何千年にもわたり、ヤーウェ、イエス、さらには聖霊の名で自身の働きを続け、いったい誰が神なのかわからなくなってしまうほどに人を当惑させ、混乱させてしまったからである。聖霊そのものが形や姿を持たないまま、さらにはイエスといった名前を持たないまま働いていたら、そして人が聖霊に触れることも見ることもできず、ただ雷鳴の音だけを聞いていたら、この種の働きは人類により多くの恩恵をもたらしたはずではないのか。では、今となっては何かできるだろう。人の観念は山のように高く、海のように広く蓄積したので、今日の神はもはやそれらに耐えることができず、まったく途方に暮れている。ヤーウェとイエス、そしてそれらのあいだにいる聖霊だけだった昔においても、人はすでに、どう対処すべきか途方に暮れていたが、今はそこに全能者が加わり、神の一部だと言われるほどである。それが誰であるのか、どのくらいの年月にわたって、三位一体のどの位格と混じり合っていたのか、あるいはどの位格の中に隠れていたのかなど、誰が知っていようか。どうして人がこのようなことに耐えられようか。三位一体の神だけで、人が一生かけて説明するのに十分だったが、今では「四つの位格における一つの神」がいる。これをどう説明できるというのか。あなたは説明できるのか。兄弟姉妹よ。どうしてあなたがたは今日までこのような神の存在を信じてきたのか。わたしはあなたがたに脱帽する。三位一体の神ですら、あなたがたが担うのにもう十分だったのに、どうすれば四つの位格から成るこの一つの神に揺るぎない信仰を抱き続けられるのか。あなたがたは立ち去るよう促されたのに拒絶している。とてもあり得ないことだ。あなたがたは本当に素晴らしい。四つの神の存在を実際に信じることさえできて、それをなんとも思わない。あなたがたはこれを奇跡だと思わないのか。あなたがたを見て、このような偉大な奇跡を引き起こせるとは誰一人知り得なかっただろう。実のところ、三位一体の神などこの宇宙のどこにも存在しないと言っておこう。神には父も子もおらず、ましてや父と子が聖霊を道具として共同で使うという概念など存在しない。これはどれもこの世における最大の誤謬であり、断じてあり得ない。とは言え、そのような誤謬であっても発端があり、根拠がまったくないわけではない。なぜなら、あなたがたの頭脳はそれほど単純ではないし、あなたがたの考えには理知がないわけではないからである。むしろ、それらの考えはかなり適切で、し

かも独創的なので、いかなるサタンを相手にしても動じない。残念なのは、そうした考えがどれも誤謬であり、断じて存在しないことである。あなたがたは本当の真実を一切見たことがない。推測と想像を巡らせてから、他者を騙して信用を得るために、また機知や理性のない極めて愚かな人々を支配するために、そのすべてを物語にまとめ上げ、あなたがたの偉大で名高い「専門家の教え」を人々に信じさせようとしているに過ぎない。それは真理なのか。人が受けるべきいのちの道なのか。どれも馬鹿げているし、一語たりとも適切ではない。この長い年月を通してずっと、神はこのような形であなたがたによって分けられてきて、世代を追うごとにますます細かく分けられ、一つの神が公然と三つの神に分けられるまでに至った。そして今、神をあまりに細かく分けたため、人が神を一つに再結合するのはまったく不可能である。手遅れにならないうちにわたしが迅速に働きを行っていないければ、あなたがたがどのくらい長く、厚かましくもこのようなことを続けるかはわからない。このように神を分け続けるなら、どうして神はあなたがたの神でいられようか。あなたがたは依然として神を認識できるだろうか。あなたがたはいまだに、自分の起源を探し求めているのか。仮にわたしが少しでも遅く到着していたら、あなたがたは「父と子」、すなわちヤーウェとイエスをイスラエルに送り返し、自分たちこそ神の一部だと主張していただろう。幸いにも、今は終わりの日である。わたしが長いこと待っていたこの日がついに来て、この段階の働きを自分の手で実行して初めて、あなたがたは神自身を分割することをやめた。これがなければ、あなたがたはさらにエスカレートして、あなたがたのあいだにいるサタンをすべて祭壇に載せて崇拜さえしていただろう。これがあなたがたの企み、あなたがたが神を分ける手段である。あなたがたは今なおそのようにし続けるつもりなのか。あなたがたに尋ねたい。神はいくつあるのか。どの神があなたがたに救いをもたらすのか。あなたがたがいつも祈りを捧げるのは最初の神か、二番目の神か、それとも三番目の神か。どの神を常に信じているのか。父か。それとも子か。あるいは霊か。あなたが信じるのはどれなのか、わたしに教えてほしい。あなたがたはあらゆる言葉をもって神を信じていると言うが、実際に信じているのは自分自身の知力である。あなたがたは断じて心の中に神を持っていない。しかし頭の中には、そのような三位一体が多数あるのだ。あなたがたもそう思わないか。

三段階の働きがこの三位一体の概念に従って評価されるならば、それぞれが行う働きは同じではないので、三つの神がいなければならない。あなたがたの中の誰かが三位一体は実際に存在すると言うならば、三つの位格にあるこの一つの神とは一体何か説明してみたまえ。聖なる父とは何か。子とは何か。聖霊とは何か。ヤーウェは聖なる父なのか。イエスは子なのか。それでは聖霊についてはどうか。父は

霊ではないのか。子の実質も霊ではないのか。イエスの働きは聖霊の働きではなかったのか。当時のヤーウェの働きは、イエスの働きと同じ霊によって行われたのではなかったのか。神はいくつの霊を持つことができるのか。あなたの説明によると、父、子、聖霊という三つの位格は一つである。もしそうなら、三つの霊がいることになるが、霊が三ついるということは神が三ついることを意味する。となると唯一の真の神はいないことになる。このような神がどうして、神が本来備え持つ実質を持つことができるのか。神が一つしかいないことを受け入れるならば、神はどうして子を持ち、父であることができるのか。これらはすべて観念にすぎないのではないか。神は唯一であり、この神の中には一つの位格しかなく、神の霊は一つしかいない。聖書に「唯一の聖霊、唯一の神のみがいる」と書かれている通りである。あなたの言う父と子が存在するかどうかにかかわらず、結局は唯一の神のみがあり、あなたがたが信じる父、子、聖霊の実質は聖霊の実質である。言い換えれば、神は一つの霊であるが、万物の上に立つことができるのはもちろん、肉体になり、人々の中で暮らすこともできる。神の霊はすべてを含んでおり、どこにでも存在する。神は同時に肉体の形になり、全宇宙に、そしてその上に存在することができる。神は唯一の真の神であるとすべての人が言うからには、神は一つだけで、誰も意のままに分けることはできない。神は唯一の霊で、唯一の位格である。そしてそれが神の霊である。あなたが言うように、それが父、子、聖霊であるならば、三つの神ではないのか。聖霊は一つの事柄であり、子は別の事柄、さらに父も別の事柄である。彼らの位格が異なり、彼らの実質が異なるのだから、どうしてそれぞれが唯一の神の一部分でありえようか。聖霊は霊である。これは人にとって理解しやすい。もしそうなら、父はさらにいっそう霊である。父は地上に降臨したことも、肉体になったこともない。父は人の心の中でヤーウェ神であり、確かに霊でもある。では父と聖霊の関係は何か。それは父と子との関係なのか。それとも聖霊と父の霊の関係なのか。それぞれの霊の実質は同じなのか。それとも聖霊は父の道具なのか。これはどうすれば説明できるのか。それならば、子と聖霊の関係は何なのか。それは二つの霊の関係なのか。それとも人と霊の関係なのか。これらはすべて説明できない事柄である。彼らがみな一つの霊ならば、三つの位格という話はいり得ない。彼らはただ一つの霊を有しているからである。彼らがはっきり異なる位格であるならば、霊の力も異なるものになり、断じてただ一つの霊ではあり得ないはずだ。父、子、聖霊というこの概念は非常に不合理である。これは神を分割し、それぞれが地位と霊を持つ三つの位格に分けてしまう。それでどうして神は一つの霊、一つの神でいられようか。教えて欲しい。天地と万物は父、子、あるいは聖霊によって造られたのか。中には、彼らが一緒になって天地を創造したのだと言う人が

いる。それでは誰が人類を贖ったのか。聖霊か、子か、それとも父なる神か。人類を贖ったのは子であると言う人もいる。それでは実質上、子とは誰か。彼は神の霊の受肉ではないのか。受肉した神は天の神を、被造物たる人間という観点から、父の名で呼ぶ。イエスが聖霊による受胎から生まれたことを、あなたは知らないのか。彼の中には聖霊がいる。あなたが何と言おうと、彼は神の霊の受肉なので、やはり天の神と一つである。子というこの考えは断じて真実ではない。働きのすべてを実行するのは一つの霊である。働きを実行するのは神自身、すなわち神の霊だけである。神の霊とは誰か。聖霊ではないのか。イエスにおいて働くのは聖霊ではないのか。働きが聖霊（すなわち神の霊）によって実行されなかったのなら、彼の働きが神自身を表すことができただろうか。イエスが祈る間、父の名で天の神を呼んだ時、これは被造物たる人の観点だけから行われたのであり、それはただ神の霊が普通の正常な肉をまとい、被造物たる人の外見をしていたためであった。彼の中に神の霊があったとしても、外見は普通の人だった。言い換えれば、彼は、イエス自身を含めたすべての人が言うところの「人の子」になった。彼が人の子と呼ばれるならば、彼は普通の人の通常の家風に生まれた人（男でも女でも、とにかく、人間の外見を持つ者）である。従って、イエスが父の名で天の神を呼ぶことは、あなたがたが最初天の神を父と呼んだ時と同じだった。彼は被造物たる人の観点からそうしたのだ。イエスが覚えるようにとあなたがたに教えた主の祈りをまだ覚えているか。「天にいますわれらの父よ……」イエスはすべての人に天の神を父の名で呼ぶよう求めた。そして彼も天の神を父と呼んだのだが、あなたがた全員と対等の立場に立つ者の観点からそうしていた。あなたがたが天の神を父の名で呼んだので、イエスは自分のことを、あなたがたと対等の立場にあり、神によって選ばれた地上の人（すなわち神の子）と見なしていた。もしあなたがたが神を「父」と呼ぶならば、これはあなたがたが被造物だからではないのか。地上におけるイエスの権威がどんなに偉大でも、磔刑に先立ち、イエスは単に人の子であり、聖霊（すなわち神）に支配され、地上にいる被造物の一人にすぎなかった。まだ自分の働きを完成させていなかったからである。従って、彼が天の神を父と呼ぶのは、もっぱら彼の謙虚さと従順さによるものだった。しかし、彼がそのように神（すなわち天の霊）に呼びかけたからといって、彼が天の神の霊の子であることの証明にはならない。むしろ、それは単に彼の視点が異なっているということであり、彼が別の位格であるということではない。別個の位格の存在というのは間違った考えである。磔刑以前、イエスは肉体の限界に縛られた人の子であり、霊の権威を十分には所有していなかった。そのため、彼は被造物の視点からのみ父なる神の意志を求めることができた。ゲッセマネで「わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって

下さい」と三度祈ったときのように。十字架にかけられる前、彼はユダヤ人の王にすぎなかった。彼はキリスト、人の子であり、栄光の体ではなかった。そのため、彼は被造物の観点から神を父と呼んだのである。さて、神を父と呼ぶ者はすべて子であると言うことはできない。仮にそうなら、ひとたびイエスがあなたがたに主の祈りを教えたら、あなたがたはみな「子」になっていたのではないだろうか。まだ納得しないなら、教えてほしい。あなたがたが父と呼ぶのは誰なのか。イエスのことだと言うのなら、あなたがたにとってイエスの父は誰なのか。イエスが去ったあと、父と子というこの考えもなくなった。この考えはイエスが肉体になった年月にのみ適切だったのであり、それ以外のすべての状況下では、その関係は、あなたがたが神を父と呼ぶときの、創造主と被造物との関係である。父、子、そして聖霊という三位一体のこの考えが成り立つ時はない。それは諸時代を通じてめったに見られない誤った考えであり、存在しないのだ。

これでほとんどの人は、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り……」という創世記の神の言葉を思い起こすかもしれない。神が「われわれのかたちに……人を造り」と言ったことから考えると、「われわれ」は二人以上を示す。神が「われわれ」と述べたのだから、神は一つだけではない。このようにして、人はそれぞれ異なる抽象的な位格について考え始め、これらの言葉から父、子、聖霊という考えが生じた。では、父とはどういうものか。子とはどういうものか。そして聖霊とはどういうものか。ひょっとして今日人類は、三つを合わせて一つの姿に造られたのか。それで、人の姿は父、子、あるいは聖霊の姿に似ているのか。人は神のどの位格の姿をしているのか。人が抱くこの考えはまったく間違っており、馬鹿げている。これは一つの神をいくつかの神に分けることしかできない。モーセが創世記を記述したのは、創世に続いて人類が造られた後のことだった。そもそも最初、世界が始まったとき、モーセは存在していなかった。モーセが聖書を記述したのはそれからずいぶん後のことなので、天なる神がいったい何を語ったのかを、モーセがどうして知り得ただろうか。神がどのように世界を創造したかについて、彼は少しも知らなかった。旧約聖書の中に、父、子、聖霊についての言及は一切なく、唯一の真の神、すなわちヤーウェがイスラエルで働きを行ったことにしか触れていない。神は時代が変わるにつれて異なる名前と呼ばれているが、そのことは、それらの名前がそれぞれ異なる位格を指しているという証明にはならない。仮にそうなら、神には無数の位格があることにならないだろうか。旧約聖書に書かれていることは、ヤーウェの働き、つまり、律法の時代に開始する神自身の働きの段階である。それは、神が語るとそのようになり、神が命じるとその通りになるという神の働きだった。ヤーウェは、自分は働きを実行するために来た父であるとは決して

言わなかったし、子が人類を贖うために来ると預言することもなかった。イエスの時代になったとき、神は人類を残らず贖うために受肉したと言われただけで、来たのは子であるとは言われなかった。各時代は同様ではないし、神自身が行う働きも異なるので、神は異なる領域の中で働きを実行する必要がある。このようにして、神が表す身分も異なるのである。ヤーウェはイエスの父だと人は信じているが、このことは実のところ、イエスによって認められておらず、イエスは次のように語った。「わたしたちは決して父と子として区別されなかった。わたしと天なる父は一つである。父はわたしの中にあり、わたしは父の中にある。人は子を見るとき、天なる父を見ているのである」。すべてが語られたとき、父であろうと子であろうと、彼らは一つの霊であり、別々の位格に分けられることはない。ひとたび人が説明を試みると、それぞれ異なる位格や、父、子、霊の関係で、問題は複雑になる。人が個別の位格について話すとき、これは神を物質化しているのではないか。人は位格を第一、第二、第三とランク付けさえしている。これはどれも人の想像に過ぎず、言及する価値はなく、まったく非現実的である。あなたが誰かに「神はいくつあるのか」と尋ねたら、神は父、子、聖霊の三位一体で、唯一の真の神だという答えが返ってくるだろう。さらに「父とは誰か」と尋ねると、「父は天なる神の霊である。父はすべてを司り、天の主である」という答えが返ってくるだろう。「では、ヤーウェは霊なのか」と尋ねれば、答えは「そうだ」だろう。次に「子とは誰なのか」と尋ねたら、もちろんイエスが子である、という答えが返ってくる。「では、イエスの経歴はどうなっているのか。どこからイエスは来たのか」と尋ねれば、答えは「イエスは聖霊による受胎を通してマリアの子として生まれた」となるだろう。では、イエスの実質も霊ではないのか。イエスの働きも聖霊を表しているのではないか。ヤーウェは霊であり、イエスの実質も霊である。終わりの日の今、それがやはり霊であることは言うまでもない。どうしてそれらが異なる位格であり得ようか。それは単に、神の霊が異なる観点から霊の働きを実行しているだけではないのか。このように、位格の間に区別はない。イエスは聖霊によって宿り、彼の働きがまさしく聖霊の働きだったことに疑いの余地はない。ヤーウェによって行われた第一段階の働きにおいて、神は肉になることも、人の前に現れることもなかった。そのため、人は神の姿を目の当たりにしなかったのである。いかに大きくとも、いかに背が高くとも、それはやはり霊であり、最初の時に人を造った神自身である。つまり、それは神の霊だったのだ。それは雲の合間から人に語りかけ、単なる霊に過ぎず、誰もその姿を目撃しなかった。神の霊が肉となり、ユダヤの地で受肉した恵みの時代になって初めて、人はユダヤ人として受肉した姿を見た。ヤーウェに見るべきところは何もなかったが、神は聖霊によって、すなわちヤーウェ自

身の霊によって受胎されたので、イエスはやはり神の霊の化身として生まれた。人が最初に見たものは、イエスの上に鳩のように降りてくる聖霊だった。それはイエスだけに限定された霊ではなく、むしろ聖霊だった。では、イエスの霊を聖霊から切り離すことはできるのか。イエスが神の子イエスであり、聖霊は聖霊であるなら、どうしてこの二つが一つになり得ようか。もしそうなら、働きを行うことはできなかったはずだ。イエスの中の霊、天にある霊、ヤーウェの霊はすべて一つである。それは聖霊、神の霊、7倍に強化された霊、すべてを包みこむ霊と呼ばれる。神の霊は多くの働きを実行することができる。それは世界を創造することができ、地球に洪水を起こして世界を滅ぼすこともできる。それは全人類を贖うことができ、そのうえ、全人類を征服し、破滅させることもできる。この働きはすべて神自身によって実行され、神の位格のいずれかが神の代わりに行なったということはない。神の霊はヤーウェ、イエス、ならびに全能者という名で呼ぶことができる。それは主であり、キリストである。また人の子になることもできる。天にも地にもいる。天上の高みにも、群衆の中にもいる。天と地の唯一の主人である。天地創造から今に至るまで、この働きは神自身の霊によって実行されてきた。天における働きであろうと、肉体での働きであろうと、すべては神の霊によって実行される。すべての被造物は、天であろうと、地上であろうと、神の全能の手のひらの中にある。このすべては神自身の働きであり、神に代わって行うことは誰にもできない。天において、神は霊であるが、神自身でもある。人々のもとでは、神は肉体であるが神自身のままである。神は何十万もの名前と呼ばれるかもしれないが、それでも神は神であり、神の霊の直接的な表現である。神の磔刑による全人類の贖いは神の霊の直接的な働きだったし、終わりの日にすべての国、すべての地に向けた宣言もそうである。いかなる時も、神は全能で唯一の真の神、すべてを包みこむ神自身としか呼ぶことができない。はっきりと異なる位格は存在しないし、ましてや父、子、聖霊というこの考えも存在しない。天にも地にも神はただひとつである。

神の経営計画は六千年に及び、働きの違いに応じて三つの時代に分けられる。第一の時代は旧約の律法の時代である。第二は恵みの時代で、第三は終わりの日の時代、すなわち神の国の時代である。時代ごとに異なる身分が表されているが、これは単に働きの違い、つまり働きの要件によるものである。律法の時代における第一段階の働きはイスラエルで行われ、贖いの働きを完結させる第二段階はユダヤの地で行われた。贖いの働きのため、イエスは聖霊の受胎を通して、ひとり子として生まれた。それはすべて働きの要件のためである。終わりの日、神は自身の働きを異邦人の国々まで広げてそこの人々を征服し、神の名が彼らの間でも偉大になることを望んでいる。神は人を導き、すべての真理を理解してそれに入れるようにするこ

とを望んでいる。この働きはすべて一つの霊によって行われる。神はさまざまな立場から働きを行うかもしれないが、働きの本質と原則は変わらない。行われた働きの原則と本質をよく見れば、どれも一つの霊によってなされたことがわかるだろう。それでもまだ、「父は父であり、子は子であり、聖霊は聖霊であり、そして最後にそれらは一つにされるだろう」と言う人もいるかもしれない。では、それらを一つにするにはどうすればよいのか。どうして父と聖霊を一つにすることができるのか。それらがもともと二つなら、どのように結合しても、二つのままではないだろうか。それらを一つにすることについて話すとき、それは単に二つの別々の部分を結合し、全体で一つにすることではないのか。しかし、それらは一つにされる前、二つの部分ではなかったのか。それぞれの霊には別個の実質があり、二つの霊を一つにすることはできない。霊は物質ではなく、物質界の他の何物とも異なっている。人々が理解するところによると、父は一つの霊であり、子は別の霊で、聖霊もさらに別の霊である。ゆえに、三つの霊は三つのコップに入っている水のようなもので、混ざり合って一つの全体になる。そうすれば三つが一つになるのではないか。これはまったく間違いの、実にばかげた説明である。これは神を分割しているのではないか。どうして父、子、聖霊をすべて一つにできるのか。これらはそれぞれ異なる性質を持つ三つの部分ではないのか。「イエスは自分の愛する子であると、神ははっきり述べなかったか」と言う人たちもいる。イエスは神の愛する子、神が喜びを覚える者である――これは確かに神自身によって語られた。神は自身の証しをしていたのだが、それは異なる観点から、すなわち天の霊の観点から自身の受肉の証しをしていたに過ぎない。イエスは神の受肉であって、天にいる神の子ではない。あなたにわかるだろうか。「わたしが父におり、父がわたしにおられる」というイエスの言葉は、両者が一つの霊であることを指し示しているのではないのか。そして、彼らが天と地に分けられたのは受肉のためではないのか。実際には、彼らはやはり一つであり、いずれにせよ、神が自身の証しをしているに過ぎないのである。時代の変化、働きの要件、神の経営計画における段階ごとの違いのために、人が神を呼ぶ名前も違って来る。第一段階の働きを行うために来たとき、神はイスラエル人の羊飼いであるヤーウェとしか呼ばれなかった。第二段階において、受肉した神は主およびキリストとしか呼ばれなかった。しかし当時、天の霊は、イエスは神の愛する子であるとだけ述べ、彼が神のひとり子であるとは一切言わなかった。そのようなことは断じて起こらなかった。神がひとり子を持つなどどうしてあり得ようか。それでは神が人になってしまったはずではないか。神は受肉したので愛する神の子と呼ばれ、このことから父と子の関係が生じたが、それは単に天と地に別れていたためである。イエスは肉体の観点から祈った。イエスは普通の人

間性を持つ肉体をまとっていたので、肉体の観点から「わたしの外観は被造物のそれである。わたしは肉をまとってこの世に来たので、今や天からは遠く、遠く離れている」と言ったのである。そのため、イエスは肉体の観点からしか父なる神に祈ることができなかった。これがイエスの本分であり、受肉した神の霊が備えていなければならないものだった。イエスが肉体の観点から父に祈ったというだけで、彼が神でなかったと言うことはできない。イエスは神の愛する子と呼ばれたが、それでも神自身だった。彼は霊の受肉に他ならず、実質はやはり霊だからである。イエスが神自身ならばなぜ祈ったのかと、人は疑問に思う。これは、イエスが受肉した神であり、肉体の中に生きる神であり、天なる霊ではなかったからである。人が理解するところ、父、子、聖霊はすべて神である。その三つをすべて合わせて一つにしたものだけが唯一の真の神と見なすことができ、このようにして神の力は並外れて大きくなる。そうでなければ神は七倍に強化された霊ではない、と言う人々がいる。子が到来してから祈ったとき、祈りはその霊に向かってなされた。実際のところ、彼は被造物の観点から祈っていた。肉体は完全なものではないからであり、彼もまた肉体になったとき、完全ではなく数多くの弱点があり、肉体において働きを行った際、大いに難儀した。そのため、彼は磔刑に先立って父なる神に三度祈り、それ以前にも何回も祈ったのである。彼は弟子たちのあいだで祈り、山上で一人で祈り、釣り船の上で祈り、大勢の群衆の中で祈り、パンを割きながら祈り、人々を祝福するときに祈った。彼はなぜそうしたのか。彼が祈ったのは霊に向かってである。肉体の観点から霊に向かって、天なる神に向かって祈っていたのだ。したがって、人の立場から見れば、イエスはその働きの段階で神の子になった。しかし現在の段階で、神は祈らない。それはなぜか。神がもたらすものは言葉の働きであり、言葉による裁きと刑罰だからである。祈りの必要はなく、神の職分は話すことだ。十字架にかけられてなどいないし、人によって権力者たちに引き渡されることもない。神はただ自身の働きを行うだけである。イエスが祈ったとき、彼は天国が来るように、父なる神の旨が行われるように、そして働きが訪れるようにと、父なる神に祈っていた。現在の段階で、天国はすでに降臨したのだが、神はそれでも祈る必要があるのか。神の働きは時代を終らせることであり、新しい時代はこれ以上ない。それなのに、次の段階のために祈る必要があるというのか。そんな必要などないはずだ。

人の説明には数多くの矛盾がある。実際、これらはすべて人の観念であり、さらなる精査がなければ、あなたがたはみな、それらは正しいと信じるだろう。あなたがたは、三位一体の神という考えが人の観念にすぎないことを知らないのか。人の認識に十分で完全なものはない。いつも不純物があり、人はあまりに多くの考えを抱いている。これは、被造物が神の働きを説明するのは到底不可能であることを立

証している。人の心の中にはあまりにも多くのものがあり、どれも論理と思考から来ており、真理と矛盾している。あなたの論理は神の働きを完全に分析できるだろうか。ヤーウェのすべての働きについて識見を得ることができるだろうか。そのすべてを見通すことができるのは人であるあなたなのか、それともとこしえからとこしえまで見ることができる神自身なのか。とこしえの昔からとこしえの未来まで見ることができるのはあなたなのか、それともそれができるのは神なのだろうか。あなたは思うか。どうしてあなたが神を説明するのに値するのか。あなたの説明の基礎は何か。あなたは神なのか。天地と万物は神自身によって造られた。これをしたのはあなたではないのだから、なぜあなたは正しくない説明をしているのか。さて、あなたは三位一体の神の存在を信じ続けるのか。それはあまりにも厄介だとは思わないのか。三つではなく一つの神を信じるのが最善のはずだ。軽いのがもっともよい。主の荷は軽いからである。

征服の働きの内幕（1）

サタンに深く墮落させられた人類は、神なるものが存在することを知らず、神を礼拝することをやめてしまった。初めに、アダムとエバが創造された時、ヤーウェの栄光と証しは常に存在していた。しかし、人間は墮落させられた後、その栄光と証しを失った。なぜなら、誰もが神に反抗し、神を畏れ敬うことをすっかりやめてしまったからである。今日の征服の働きは、その証しと栄光のすべてを取り戻し、あらゆる人間に神を崇めさせ、被造物の間に証しを生み出すためである。これが、この段階の働きにおいて達成されなければならないことである。厳密に言って人類はどのように征服されるのか。それは、この段階の言葉の働きを用いて、人間を十分に確信させることによって行われる。また、暴露、裁き、刑罰、情け容赦ない呪いを用いて人間を完全に服従させることによっても行われる。人間の反抗的性質を明らかにし、その抵抗を裁くことで人間に人類の不義と汚れを知らしめ、それらを神の義なる性質の引き立て役として使うことによっても行われる。このように言葉をおもに用いて人間を征服し、完全に確信させる。言葉は人類を征服するための究極的手段であり、神の征服を受け入れる者はみな、神の言葉による鞭と裁きを受け入れなければならない。現在の言葉を語る過程は、征服そのものの過程である。では具体的に、人はどのように協力すべきなのか。これらの言葉をどのように飲食するかを知り、言葉を理解することで協力するのである。人がどのように征服されるかについては、それは人が自分でできることではない。あなたにできるのは、これらの言葉を飲み食いすることによって自分の墮落と汚れ、反抗心と不義とを知

り、神の前にひれ伏すことだけである。神の心意を把握した後に、それを実行に移すことができ、そしてビジョンを持ち、これらの言葉に完全に従うことができ、自分勝手な選択をしないならば、あなたは征服されている。そして、それは言葉による成果である。なぜ人類は証しを失ったのか。それは誰も神を信じず、もはや人の心には神の居場所がなくなったからである。人類の征服とは、人類にこの信仰を回復させることである。人は常にこの世に向こう見ずに突き進み、あまりにも多くの望みを胸に抱き、将来にあまりにも多くの期待をかけ、あまりにも多くの途方もない要求をする。人はいつも自分の肉のことを考え、肉のために計画しているが、神を信じる道を求めることにはまったく興味がない。人の心はサタンの虜となり、神を恐れ敬う心を失い、サタンに執着している。しかし、人間は神に創られた。こうして、人間は証しを失ってしまった。つまり、神の栄光を失ったということである。人類を征服する目的は、人間の神への畏敬による栄光を取り戻すことである。それは次のようにも言える。いのちを追い求めない人が大勢いて、たとえいのちを求める人がいたとしても、それは極少数である。人はもっぱら自分の将来のことに気をとられており、いのちのことにはまったく注意を払わない。神に逆らい、抵抗し、背後で神を裁き、真理を実践しない人もいる。今は、このような人は無視され、当分はこのような反逆の子たちについて何も行われぬ。しかし将来は、あなたは闇の中に住み、泣き叫んで歯ぎしりすることになる。光の中に生きているうちは、その貴重さを感じないだろうが、いったん暗夜の中に住めばそれに気づき、そのとき後悔する。今はいいかもしれないが、後悔する日が訪れる。その日が到来し、暗闇が地を覆い、もはや光がなくなった時、後悔しても遅すぎる。今の時を大切にしないのは、現代における働きを理解していないからである。いちど全宇宙の働きが始まれば、すなわち、わたしが今日言っていることのすべてが現実となる時、多くの人が頭を抱えて悔し涙を流すことになる。これこそ、暗闇の中に落ち、泣き叫び、歯ぎしりすることではないのか。心からいのちを追い求め、完全にされる人は役に立つことができる。一方、役に立たない反逆の子らは暗闇の中に落ちる。聖霊の働きを失い、何もかも意味がわからなくなる。彼らはこのように懲罰の中に陥り、呻いては泣き叫ぶのである。もしあなたがこの段階の働きにおいて十分に用意が整い、いのちにおいて成長しているなら、あなたは用いられるに相応しい。少しも用意が整っていないなら、たとえ次の段階の働きのために呼ばれたとしても、役に立つには不適格である。この時点でいくら自分を整えたくとも、次の機会はもうない。神はもう去ってしまっている。そうなれば、今あなたの目の前にあるような機会をいったいどこに行きつけて見つけるのか。今、神自身が提供している訓練をいったいどこに行きつけて受けようというのか。その時には、神が自ら語り声を発

することはない。あなたにできるのは、今日語られていることを読むことだけである。どうして容易に理解できるであろうか。どうして後の生活が今より良いことがありえようか。その時点で、泣き叫び、歯ぎしりし、生き地獄そのものを苦しむことにならないのか。祝福は今あなたに授けられているというのに、それをどのように享受すべきなのかがわかっていない。祝福の中で生きているのに、気付いていない。あなたが破滅し苦しむように運命付けられている証拠である。現代は抵抗する人もいれば、反逆する人もいるし、あれをしたりこれをしたりという人もいる。わたしはあなたをただ無視するが、わたしがあなたがたが何をしているか気付いていないと思っではならない。わたしはあなたがたの本質を理解していないのか。なぜわたしに逆らい続けるのか。あなたは自分のために、いのちと祝福を追い求めるために、神を信じているのではないのか。あなたに信仰があるのは、自分のためではないのか。現在、わたしは言葉を語ることでのみ征服の働きを行っている。この征服の働きが完了すれば、あなたの最後は明らかになる。はっきりと説明しなければならぬであろうか。

現在の征服の働きは、人間の結末がどのようなことになるかを明らかにすることを意図する。なぜわたしは今日の刑罰と裁きは、終わりの日における大いなる白い玉座の前での裁きだと言うのか。あなたにはこれがわからないのか。なぜ征服の働きは最終段階なのか。これはまさしく、それぞれの種類の人間が最後にどうなるかを明らかにすることではないのか。それは、刑罰と裁きとによる征服の働きの過程において、あらゆる人が自分のありのままの姿をあらわし、その後それぞれの種類に分類されるようにするためではないのか。人類の征服というよりも、これはむしろ各種の人間がどのような最後を迎えるのかを示すことだと言った方が良くらいである。つまり、これは人の罪を裁き、それから人の様々な種類を明らかにし、それにより、人が悪であるか義であるかを判定することである。征服の働きの後に、善に報い悪を罰する働きが続く。完全に従う人々、つまり、完全に征服された人々は、神の働きを全宇宙に広める次の段階に配置される。征服されなかった者は闇の中に置かれ、災厄に遭う。このように人間はその種類によって分類され、悪を行う者は悪として分類され、二度と陽の光を浴びることがない。義人は善として分類され、光を受け、永遠に光の中で生きる。あらゆるものの終わりは近く、人間の終わりは目の前にはっきりと示され、あらゆるものはその種類によって分けられる。それなら、どうして人間が種類別に分類されるという苦悩から逃れられようか。それぞれの種類の人間の異なる結末は、あらゆるものの終わりが近づいた時に明らかにされる。それは全宇宙の征服の働き（現在の働きに始まるすべての征服の働きを含む）の間に行われる。この全人類の終わりの明示は、裁きの座の前で、刑罰と終わりの

日の征服の働きの過程で行われる。種類に従って人々を分類することは、人々を元の部類に戻すことではない。なぜなら、天地創造の際、人間が創られた時には一種類の人間しかなく、唯一の区別は男と女しか存在しなかったからである。人間には多数の種類など存在しなかった。さまざまな種類の人間が現れたのは、何千年にも及ぶ墮落の後になってからである。ある者は汚らしい悪魔の領域に、またある者は邪悪な悪霊の領域に、また、いのちの道を追い求める者は、全能者の統治に属する。ただこのようにしてのみ、人々の間に種類が徐々に形成され、それによってのみ人々は人間という大家族の中でさまざまな部類に分かれるのである。人々はみな異なる「父」を持つようになる。人間は極めて反抗的なので、すべての者が完全に全能者の統治のもとにあるわけではない。義なる裁きは、各種類の人間の本来の姿を表に曝け出し、隠れたままになるものは何もない。あらゆる者が光の中でほんとうの顔を現す。この時点では、人はもはや本来のあり方ではなくなっており、先祖の元の面影はとうの昔に消え去っている。なぜなら、アダムとエバの無数の子孫たちが、長らくサタンの虜となり、もう二度と天日を知ることはないからである。また、人々があらゆる種類のサタンの毒に満たされてきたからである。こうして人々にはそれぞれに相応しい終着点がある。さらに、人はその様々な毒を基準にして、種類ごとに分類される。すなわち、今日征服されている度合いに応じて人は分類されるのである。人間の終わりは天地創造以来、予め定められてきたものではない。なぜなら、初めにはまとめて「人類」と呼ばれる一種類の人間しか存在せず、また人間は最初はサタンに墮落させられてはおらず、神の光の中に生き、闇は降りていなかったからである。しかし、人間がサタンに墮落させられた後、あらゆる類型と種類の人々が地の至るところに広がった。まとめて「人類」と呼ばれ、男と女から成る家族から出たあらゆる類型と種類の人々である。彼らはみな祖先に導かれ、最も古い祖先である男と女から成る人類（つまり、始祖であるアダムとエバ、最古の祖先）のもとから迷い出てしまった。その当時、地上での生活をヤーウェに導かれていたのは唯一イスラエル人であった。全イスラエル（つまり、最初の部族）から出た様々な種類の人々は、その後ヤーウェの導きを失った。これらの初期の人々は、人間世界のことにまったく無知で、祖先とともに自分たちのものとした土地で暮らし、それが今日まで続いた。彼らはまだ自分たちがどのようにヤーウェのもとから離れ、今日に至るまで、どのようにあらゆる種類の汚れた悪魔や悪霊に墮落させられたかについては無知なままである。これまで深く墮落させられ、毒されてきた者たち、つまり、最終的に救いようのない者たちは、その祖先、彼らを墮落させた汚れた悪魔である祖先と共に行くしかない。最終的に救われることのできる者たちは、人類の相応しい終着点に行く。つまり、救われ、征服された者たちのため

に用意された最後にたどり着くのである。救うことのできる人をみな救うために、あらゆることが為される。しかし、鈍感で救いようのない人は、先祖の後を追って刑罰の底なしの穴へ落ちるしかない。あなたの終わりは最初から予め定められていて、それが今になってやっと明らかにされたと考えてはいけない。そのように考えているのなら、最初に人類が創造された時にはそれとは別にサタンという種類は創られなかったことを忘れたのか。アダムとエバから成る一種類の人間だけが（つまり、男と女だけが）創造されたことを忘れてしまったのか。あなたが始めからサタンの子孫であったなら、人間を創造した時ヤーウェはサタンの集団もいっしょに創造したことにならないか。神がそのようなことをしたであろうか。神は自分の証しのために人間を創造した。神は自分の栄光のために人間を創った。なぜ神は意図的にサタンの子孫という種族を自分に抵抗させるためにわざわざ創造したりするであろうか。どうしてヤーウェがそんなことをすることがありえようか。もしそんなことをしていたなら、誰が神を義なる神だと言えるであろうか。わたしが今、あなたがたのうちには終いにはサタンと共に行く者がいると言っても、それはあなたが初めからサタンと共にあったという意味ではない。そうではなく、あまりにも低い所まで墮落したので、たとえ神が救おうとしたとしても、あなたは救いをのがしてしまったという意味である。あなたをサタンといっしょに分類する他ない。それはただ、あなたは救いようがないからであり、神があなたに対して不義で、意図的にあなたの運命をサタンの具現化と定め、サタンと共に分類し、わざとあなたを苦しませようとしているからではない。それは征服の働きの内なる真実ではない。あなたがそのように信じているのなら、あなたの認識はひどく偏っている。征服の最終段階は、人を救い、また、人の結末を明らかにするためである。裁きを通して人の墮落を暴露し、それにより人を悔い改めさせ、立ち上がらせ、いのちと人として生きる正しい道を追い求めさせるためである。鈍く頑な人の心を目覚めさせ、裁きによって人の内にある反抗的性質を示すためである。しかしながら、人がまだ悔い改めることができず、なおも人として生きる正しい道を追い求めることができず、これらの墮落を捨て去ることができなければ、人は救われることはなく、サタンにのみ込まれる。これが征服の意味である。つまり、人を救い、また人の結末を見せることである。良い結末と悪い結末があり、すべては征服の働きにより明らかにされる。人が救われるか呪われるかは、みな征服の働きの間に明らかにされる。

終わりの日とは、すべてのものが征服を通して、その種類に分類される時のことである。征服は終わりの日の働きである。つまり、一人ひとりの罪を裁くことが終わりの日の働きである。そうでなければ、どうして人を分類できるというのか。あなたがたの間で行われる分類の働きは、全宇宙におけるそうした働きの始まりであ

る。この後、すべての地のあらゆる民も征服の働きの対象となる。つまり、被造物であるすべての人が種類別に分類され、裁きの座の前に進み出て裁かれるということである。誰一人、何ものもこの刑罰と裁きの苦しみから逃れることはできない。また、誰も何ものも種類別に分類されることを避けることはできない。あらゆる人が種類ごとに分けられる。それは、万物の終わりが近く、天と地にあるすべてが終結に至ったからである。どうして人間が己の存在の終結の日を逃れられようか。したがって、あとどれほどあなたがたは不服従の行いを続けられるのか。あなたがたの終わりの日がそこまで迫っているのが見えないのか。どうして神を畏れ敬い、神の現れを待ち焦がれている者たちが、神の義が出現する日を見られないのか。彼らとその善ゆえの最後の報酬を受けられないということが、どうしてあるのか。あなたは善を行う人なのか。それとも悪を行う人なのか。あなたは義なる裁きを受け入れて従う人なのか。それとも義なる裁きを受け入れて呪われる人なのか。光の中にある裁きの座の前で生きているのか。それとも闇に覆われたハデスで生きているのか。自分の終りが報酬を受けることになるのか、それとも罰を受けることになるのかを一番はっきり知っているのは、あなた自身ではないのか。神が義であることを一番はっきり知り、最も深く理解しているのは、あなたではないのか。それでは、あなたの行いと心は一体、どのようなものであるのか。今日、わたしがあなたを征服するに及んで、あなたのふるまいが悪であるか、それとも善であるかをわたしがいちいち説明する必要があるのか。あなたは、わたしのためにどれほどの犠牲を払ったのか。どれほど深くわたしを礼拝するのか。わたしに対して自分がどのようにふるまっているかをあなた自身が一番よく知っているのではないのか。自分が最終的にどのような結末を迎えるのかを、あなたは他の誰よりも良く知っているはずである。わたしは、まことにあなたに告げる。わたしは人類を創造し、あなたを創造しただけである。わたしはあなたがたをサタンに手渡さなかった。あなたがたを意図的にわたしに逆らわせ反抗させて、そのためにわたしに罰されるように仕向けもしなかった。これらの災難や苦しみを招いたのは、あなたがたの心があまりにも頑なで、あなたがたの行いが極めて下劣であるからではないのか。だから、あなたがたを迎える結末は、自分自身が決定するものではないのか。自分がどのような最後を迎えるのかを、あなたがたは内心、他の誰よりもよく知っているのではないのか。わたしが人を征服する理由は、人を暴露するためである。またそれは、あなたの救いを確かなものにするためでもある。それは、あなたに悪を行わせるためでもなく、あなたを意図的に破滅の地獄に向かって歩ませるためでもない。その時が来れば、あなたの大いなる苦しみ、泣き叫び、歯ぎしりはすべて、あなたの罪ゆえではないのか。したがって、あなた自身の善あるいは悪が、あなたを最も正しく裁いて

くれるのではないのか。それがあなたの終りがどうなるのかを示す最良の証拠ではないのか。

現在、わたしは中国における神の選民の中で働きを行ない、彼らの反抗的性質をすべて明らかにし、彼らの醜さのすべてを暴く。これが、わたしが言うべきことすべての背景となる。後にわたしが全宇宙を征服する次の段階の働きを行うとき、あなたがたへの裁きを用いて全宇宙のあらゆる人の不義を裁く。なぜなら、あなたがたは人類の中の反抗的な者たちの代表だからである。向上できなければ、単なる引き立て役、仕える者となるが、一方、向上できるならば用いられる。なぜわたしは向上できなければ引き立て役にしかねれないと言うのか。それは、わたしの現在の言葉と働きはみな、あなたがたの背景を標的にしており、また、あなたがたが全人類の反抗的な者たちの代表、典型となったからである。後にわたしは、あなたがたを征服するこれらの言葉を外国に伝え、その人を征服するために用いる。しかしその時、あなたはそれらを獲得していないであろう。それではあなたは引き立て役になるのではないか。全人類の墮落した性質、人間の反抗的行為、人間の醜い姿と顔はみな、あなたがたを征服するために用いられる言葉の中に記録されている。わたしは、これらの言葉を用いて、あらゆる国と教派の人々を征服する。なぜならあなたがたは原型であり先例だからである。しかし、わたしは意図的にあなたがたを最初から捨てようとして始めたのではない。もしあなたがたの追求がうまく行かず、したがって、あなたがたが救いようのない者であることを証明するならば、あなたがたはただの道具、引き立て役になるのではないのか。かつてわたしは、わたしの知恵はサタンの計略に基づいて実行されると言った。なぜそう言ったのか。それは、わたしが今言っていること、行っていることの背後にある真実ではないのか。もしあなたが向上することができず、完全にされるのではなく、むしろ罰されるのなら、引き立て役になるのではないのか。あなたは時に応じて十分に苦しんだかもしれない。しかし今なお、あなたは何も解かっていない。あなたはいのちに関連するあらゆることについて無知である。罰せられ裁かれたにもかかわらず、まったく変わらず、あなたの奥底ではまだいのちを獲得していない。あなたの働きを試す時が来ると、あなたは火のように激しい試練と、さらに大きな患難を体験する。この火はあなたの全存在を灰にする。いのちを持たない者として、内に一かけらの純金も持たない者として、いまだに古い墮落した性質から抜け出せない者として、引き立て役としてでさえ良い仕事ができない者として、どうしてあなたが取り除かれないことなどありえようか。一文の価値もなく、いのちを持たない者が、征服の働きに役立てようか。その時が来ると、あなたがたの日々はノアやソドムよりも困難になる。その時あなたの祈りは何の役にもたたない。救いの働きがすでに終わっ

ているのに、どうして後で戻ってきて最初から悔い改めることができるというのか。一度すべての救いの働きが完了すれば、それで終わりである。その時には、邪悪な者たちを罰する働きが開始される。あなたは抵抗し、逆らい、自分で悪だと分かっていることをする。あなたは厳しい罰の対象ではないのか。わたしは、あなたのためにこのことを今日、一字一句説明している。あなたが耳を傾けないのなら、後に患難があなたに臨む時にやっと後悔し、信じ始めたところで、それはもう遅過ぎるのではないのか。わたしは今日、あなたに悔い改める機会を与えているが、あなたはそのつもりはない。あとどれほど待つつもりなのか。刑罰の日までか。わたしは今日、あなたの過去の背きを憶えてはいない。わたしはあなたを幾度も幾度も赦し、あなたの消極的な面から目をそらし、あなたの積極的な面だけに目を留める。なぜなら、わたしの現在の言葉と働きはすべて、あなたを救うためであり、わたしはあなたに対して何の悪意もないからである。それでもあなたは入ることを拒む。あなたは善悪を区別することができず、優しさの価値を認識できない。このような人は懲罰と義なる報復をただ待っているのではないのか。

モーセが岩を打ったとき、ヤーウェが授けた水がほとばしり出たのは、モーセの信仰のためだった。ダビデがわたしヤーウェを賛美して琴を奏でたとき、ダビデの心は喜びに満ちており、それは彼の信仰のためだった。ヨブが山々を埋め尽くすほど多くの家畜や膨大な量の財産を失い、その体が腫物で覆われたのは、彼の信仰のためだった。彼がわたしヤーウェの声を聞き、わたしヤーウェの栄光を見ることができたのは、彼の信仰のためだった。ペテロがイエス・キリストに付き従うことができたのは、ペテロの信仰によるものだった。彼がわたしのために十字架に釘づけにされ、栄光ある証しとなることができたのも、彼の信仰によるものだった。ヨハネが人の子の輝かしい姿を見たのは、彼の信仰によるものだった。そして彼が終わりの日の幻を見たのも、なおさら彼の信仰のためであった。数多くのいわゆる異邦の民がわたしの啓示を受け、わたしが人々のもとで働くために肉となって再来したことを知るようになったのも、また彼らの信仰のためだ。わたしの厳しい言葉に打ちのめされつつも、それによって慰められ、そして救われたすべての者たちは、みな信仰のゆえにそうなったのではないか。人は信仰ゆえに多くのものを受けた。受けるのはいつも祝福だとは限らない。ダビデが感じたような幸せと喜びを受け取らないかもしれず、モーセのようにヤーウェから水を授からないかもしれない。例えば、ヨブは信仰ゆえにヤーウェによって祝福されただけでなく、災いも受けた。祝福されようが、災いを受けようが、どちらも祝福された出来事である。信仰なくして、この征服の働きを受けることはできず、ましてやヤーウェの業が今日、目の前で展開するのを見ることなどできない。見えないであろうし、ましてや受けるこ

となどできはしない。これらの懲罰、災難、すべての裁き、もしこれらがあなたに起こらなければ、あなたは今日ヤーウェの業を見ることができであろうか。今日、あなたが征服されることができるのは信仰のゆえであり、征服されるからこそ、ヤーウェのあらゆる業を信じることができ。ただ信仰のゆえに、あなたはこのような刑罰と裁きを受ける。この刑罰と裁きを通して、あなたは征服され、完全にされる。今日受けているような刑罰と裁きなしには、あなたの信仰は虚しい。なぜなら、それなしにはあなたは神を知ることがないからである。どれほど神を信じていても、あなたの信仰は現実に基づかない、むなしい表現の一つである。あなたを完全に従順にする、この征服の働きを受けてはじめて、あなたの信仰は真実で確固としたものになり、あなたの心は神の方へ向く。たとえこの「信仰」という言葉のために大いに裁かれ呪われるとしても、あなたは真の信仰をもち、最も真実で、最も現実的で、最も貴重なものを得る。なぜなら、裁きの過程においてでなければ、あなたには神の創造物の終着点が見えないからである。この裁きの中で、あなたは創造主が愛すべき方であることを知る。こうした征服の働きの中に、あなたは神の腕を見る。この征服の中であなたは人として生きることを完全に理解するようになる。この征服の中で、あなたは人として生きる正しい道を獲得し、「人間」の真の意味を知るようになる。この征服の中でのみ、あなたは全能者の義の性質と美しい栄光に満ちた顔を見る。この征服の働きの中で、あなたは人間の起源と全人類の「不滅の歴史」を理解する。この征服の中で、あなたは人類の祖先と人類の墮落の起源を理解するようになる。この征服の中で、あなたは喜びと慰め、また、絶え間ない懲らしめと訓練、創造主が自ら創造した人類に送る叱責の言葉を受ける。この征服の働きの中で、あなたは祝福と、人間の受けるべき災難を受ける……。これはすべて、あなたのわずかばかりの信仰ゆえではないのか。これらのものを得た後、あなたの信仰は成長しなかったのか。あなたは膨大なものを得たのではないのか。あなたは神の言葉を聞き神の知恵を見ただけではなく、神の働きの各過程を自ら体験した。信仰がなければ、このような刑罰や裁きを受けて苦しまなかったのではないか、と言うかもしれない。しかし、信仰がなければ、こうした刑罰も、全能者からのこのような配慮も受けることができないだけでなく、創造主に会う機会も永遠に失うであろう。人間の起源を知ることは決してないだろうし、人生の意義を知ることも決してないであろう。たとえ体が死んで魂が離れても、あなたはまだ創造主の業のすべてを理解していないであろう。ましてや、創造主が人類を創造した後、このような偉大な働きを地上で行なったことを知りはしないであろう。神が創造したこの人類の一員として、あなたは不可解にも自ら進んでこのように闇の中に落ちて永遠の罰を受けようというのか。もし今日の刑罰と裁きから離れたなら、あ

なたにはいったい何が起こるであろうか。ひとたび今の裁きから離れてしまえば、この困難な生活から逃れられるとでも思っているのか。もし「この場所」を去ったなら、悲痛な苦悶と悪魔が加える残酷な傷害に遭遇するのではないのか。耐え難い苦しみを日夜受けることになるのではないのか。今日この裁きを逃れたからといって、将来の責め苦を永久に避けられるとでも思っているのか。あなたには何が起こるであろうか。それはほんとうに望みどおりの理想郷であろうか。今しているようにただ現実から逃げることで、その後の永遠の刑罰を逃れられるとでも思っているのか。今日より後、このような機会や祝福を再び見出せるであろうか。災厄が襲ってきた時、それを見出せるであろうか。全人類が安息に入るとき、それを見出すことができるであろうか。あなたの現在の幸福な生活と調和あるささやかな家庭が、永遠の終着点にとって代われるであろうか。もしあなたに真の信仰があるならば、そして信仰ゆえに多くのものを得るのなら、それはすべて、あなたというひとつの被造物が獲得すべきものであり、元来もっていたはずのものである。あなたの信仰といのちにとって、このような征服よりも有益なものは他にない。

今日、あなたは征服された者たちに神が何を求めているのか、完全にされた者たちへの神の態度はどのようなものか、現在あなたが何に入らなければならないかを理解しなければならない。いくつかのことについては、少し理解するだけでよい。神の奥義についての説を詳細に吟味する必要はない。それらは余りいのちの助けにはならず、目を留めるだけでよい。アダムとエバについての奥義などは読んでもよい。当時、アダムとエバはいったいどのようなようであり、神は今日どのような働きを行いたいのか、といったことについてである。人を征服し完全にする中で、神は人間をアダムとエバのような状態に戻すことを願っていることを理解する必要がある。神の基準を満たすために、人が完全にされるべき程度について心ではっきりと理解し、それを目指して尽力すべきである。これはあなたの実践に関連しており、あなたが理解すべきことである。ただ、これらのことに関する神の言葉に従って、入っていこうと追い求めるだけで十分である。「人類発展の歴史は数万年に及ぶ」ということを読むと、あなたは好奇心を抱き、兄弟姉妹といっしょになって、「神は人類の発展は六千年までさかのぼると言った。では、この数万年というのは何のことなのだ」と、答えを見つけようとする。このようなことを解き明かして何の役に立つというのか。神自身が働いてきたのが数万年間であろうが、数億年間であろうが、あなたがそれを知ることが本当に神にとって必要であろうか。これは、被造物としてあなたが知るべきことではない。このような発言は少しの間なら考慮してもよいが、それがビジョンでもあるかのように理解しようとしてはならない。あなたが今日何に入っていく、何を理解するべきか気付いていなければならない。このこ

とをはっきりと把握しなければならない。その時初めてあなたは征服される。以上を読めば、あなたの中に普通の反応が起こるはずである。つまり、「神は燃えるように切望している。神はわたしたちを征服し、栄光と証しを獲得したがっている。では、わたしたちはどのように神に協力すべきなのか。神に完全に征服され、神の証となるために、わたしたちは何をしなければならないのか。神が栄光を得られるためには、わたしたちは何をしなければならないのか。サタンではなく神の統治のもとで生きられるようになるためには、何をしなければならないのか」のように人は考えるべきである。あなたがた一人ひとりが、征服の意義について明確に理解すべきであり、それはあなたがたの責任である。このことを明瞭に認識して初めて入ることができ、この段階の働きを知り、完全に従順になる。そうでなければ、あなたがたは真の服従に達することはない。

征服の働きの内幕（3）

征服の働きで達成される成果は、まず何よりも人間の肉がもはや反抗しないことである。つまり、人間の知性が神についての新たな認識を得、人間の心が完全に神に従うようになり、人間が神のために存在することを望むようになることである。人の性格や肉体が変わっても、その人が征服されたとは言えない。人の考え、意識、理知が変化すれば、つまり、精神的な態度全体が変われば、神に征服されたのである。従うことを決意し、新たな心的態度を自分のものとし、もはや神の言葉や働きに独自の観念や意図を持ち込まず、頭脳が普通に考えることができるならば、つまり、神のために心を尽くして努力できるなら、このような人は完全に征服された人である。宗教において、多くの人は肉体を抑制し、十字架を負い、生涯にわたって大いに苦しむ。最期の息を引き取るまで苦しみ忍耐し続けることさえある。死ぬ日の朝まで断食を続けている人もいる。このような人はよい食物やよい衣服を生涯自ら拒否し、苦しみだけを重視する。肉体を抑制し、自らの肉を捨てられる。苦しみに耐える精神は賞賛に値する。しかし、このような人の考え方、観念、精神的態度、そしてまさに古い本性はほんの少しも取り扱いを受けたことがない。彼らには真の自己認識が欠けている。彼らが心に抱いている神の姿は、伝統的な抽象的で漠然としたものである。神のために苦しもうという彼らの決意は熱意、そして彼らの人間性の善良な性格から来ている。神を信じてはいるが、神を理解していないし、神の心意も知らないのである。彼らは神のためにただ盲目的に働き、苦しむだけである。識別というものを一切重視せず、自分の奉仕が実際に神の心意を満たすようにするにはどうすべきかなどは、ほとんど考慮しない。また、神を知るに至

るためにはどうするかということもほとんど気づいていない。彼らの仕える神は本来の姿のものではなく、自分たちが想像してきた神、人から聞いたか、あるいは書物の伝説で読んだ神に過ぎない。彼らは豊かな想像力と敬虔な心をもって神のために苦しみ、神が行なおうとする働きに取り組む。彼らの奉仕は不正確なあまり、実際には神の旨に沿ってほんとうに奉仕を行なえる人は誰もいない。彼らが嬉々としてどれほど苦しもうと、彼らが持つ奉仕についての元来の考え方と神の姿は変わらないままである。なぜなら、彼らは神の裁きと刑罰、精錬と完成を経験していないからであり、真理に導かれたことがないからである。たとえ救い主イエスを信じていても、彼らの誰一人として救い主を見たことがない。ただ伝説と噂から救い主のことを知っているだけである。その結果、彼らの奉仕は盲人が父親に仕えるように、目を閉じて行き当たりばったりに仕えるにすぎない。このような奉仕で最終的に何を達成できるであろうか。そして、誰がそれを認めるのでであろうか。最初から終わりまで、彼らの奉仕はまったく変わらないままである。彼らは人間の作り出した教えしか受けず、自分たちの本性と好みだけに基づいた奉仕をする。それがどんな褒美をもたらすというのか。イエスを見たペテロでさえ神の心意にあわせて仕えるにはどうするべきかを知らなかった。ペテロにこれがわかったのは最後、老年になってからである。このことから、取り扱いも刈り込みもまったく経験したことがなく、導いてくれる人もいなかった盲人について何が言えるであろうか。現在あなたがたのうちの多くの人の奉仕は、そうした盲人の奉仕のようではないのか。裁きを受けていない人、刈り込みと取り扱いを受けず変わらずにいる人、こうした人はみな、不完全にしか征服されていないのではないのか。そうした人が何の役に立つのか。考え方、人生の理解、神についての理解が何の変化もなく、本当には何も得たものがないのなら、けっして奉仕によって顕著な成果を得られない。ビジョンと神の働きについての新しい認識なしでは、征服されることはない。そうであるなら、あなたの神に従う方法は、苦しみ断食する人たちと同じである。つまり、ほとんど無価値なのである。彼らのすることには証しがないからこそ、その奉仕が無駄だとわたしは言うのである。こうした人は生涯をとおして苦しみ、監獄で過ごし、いつまでも忍耐を示し、愛にあふれ、永遠に十字架を背負い、世の中からけなされ、拒まれ、あらゆる苦難を経験する。彼らは最後まで従うが、それでも征服されておらず、征服されたことについて何の証しもできない。彼らは少なからぬ苦しみを経ているが、心の中ではまったく神を知らずにいる。彼らの古い考え方、古い観念、宗教的实践、人間がつくった知識、人間の考えは取り扱いを受けていない。そこには新しい認識がまるでない。彼らが神について理解していることは、少しも真実でも正確でもない。彼らは神の心意を誤解している。それが神に仕えるということであ

ろうか。過去にどのように神を理解していたとしても、今日もそれが同じままで、神が何をしようと、自分なりの観念や考えに基づいて神を理解し続けているならば、つまり、神について新しい真実の認識が一切なく、神の真の姿や性質を知ることができないならば、そして神をまだ封建的な迷信的な考え方に基づいて、人間の想像や観念に導かれて理解しているならば、あなたはまだ征服されていないのである。わたしは今、あなたに多くの言葉を語っているが、そのすべてはあなたに理解させ、それがあなたをより正しく新たな理解へと導くようにするためである。それはまた、あなたの古い観念や理解を一掃して、新たな認識を得られるようにするためでもある。もしほんとうにわたしの言葉を飲み食いするなら、理解は大きく変わる。従順な心で神の言葉を飲み食いするなら、視点は逆転する。繰り返し刑罰を受け入れられる限り、古い考え方は徐々に変化する。新たな考え方が古いものに完全にとって代わるなら、実践もまたそれに伴って変わっていく。このようにして、奉仕はますます適切なもの、ますます神の心意にかなうものになっていく。もし自分の生活、人生についての認識、神についての多くの観念を変えられるなら、持って生まれた性質は徐々に減じる。これが、そしてこれこそが、神が人間を征服したときの成果であり、これが人間に見られる変化である。神への信仰において、自分の体を抑制し、耐え、苦しむことしか知らず、それが正しいことなのか悪いことなのか、まして、それが誰のために行われるのかわからないなら、どうしてそのような実践が変化につながるであろうか。

わたしがあなたがたに要求しているのは、あなたがたが自分の体を縛り付けることや、あなたがたの脳が勝手気ままに考えることを止めることではないということを理解しなさい。これは働きの目標でもなければ、現在行わなければいけない働きでもない。現在、あなたがたは自分自身を変えられるように肯定的な角度から理解しなければならない。一番必要な行動は、神の言葉を身につけることである。つまり、今、現在の真理とビジョンを完全に身に付け、前進し実践することである。これはあなたがたの責任である。わたしはさらに大きな照らしを求め獲得することをあなたがたに求めているのではない。現在、あなたがたにはそれだけの霊的背丈がまったくない。あなたがたに求められているのは、できるだけのことを行い、神の言葉を飲み食いすることである。あなたがたは神の働きを理解し、自分の本性、本質、古い生活を理解しなければいけない。とりわけ、誤っていて馬鹿げた過去の実践と以前かかわっていた人間の行いを理解しなければいけない。変わるためには、自分の考え方を変えることから始めなければいけない。まず、古い考えを新しいものに変え、新しい考えにあなたがたの言葉と行動、生活を支配させなさい。これが、今あなたがた一人ひとりに求められていることである。盲目的に実践し、盲目

的に従うのはやめなさい。根拠と目標をもたなければならない。自分を騙してはならない。神への信仰が何のためなのか、それから何が得られるべきなのか、今何に入っていかなければならないのかがわかっていなければならない。これらすべてを知っていなければならない。

あなたがたが現在入るべきことは、生活と力量の向上である。さらに、過去の古い見方を変え、思考を変え、観念を変えなければならない。あなたがたの生活全般に再生が必要である。神の業についての理解が変わり、神の語ることすべての真理について新たに認識し、内面の認識が向上すれば、生活はより良い方向に変化する。今、人のすること、言うことはすべて实际的である。これらは教義ではなく、人間のいのちに必要なことであり、人が自分のものとすべきことである。これは征服の働きの間に人間に起こる変化、人間が経験すべき変化であり、これが人間が征服されたときの成果である。あなたが考え方を変え、新しい精神的態度を身につけ、自分の観念や意図、過去の論法を捨て、あなたの内に深く根ざした諸々のことを捨て、神への信仰を新たに認識したとき、あなたの立てる証しは向上し、あなたの人となり全体が真に変わっている。こうしたことはみな、最も実践的で、最も現実的で、最も基本的な事柄、つまり、過去には人が把握できず、かかわることができなかった事柄である。これらが霊の真の働きである。あなたは過去に聖書をどれくらい正確に理解していたか。今日、比べてみるとわかる。過去にあなたはモーセ、ペテロ、パウロ、あるいはあらゆる聖句と聖書的見解を頭の中で持ち上げて、仰ぎ見ていた。聖書を最高のものとみなすよう今求められたら、あなたはそうするであろうか。聖書には人が書いた記録があまりに多く収められており、聖書はただ神の働きの二段階について人が説明しているものであることが分かるであろう。聖書は歴史の本である。これは聖書についてのあなたの理解が変わったという意味ではないのか。マタイの福音書に記されているイエスの系譜を見れば、あなたは「イエスの系譜だと。無意味だ。これはヨセフの系譜であり、イエスのものではない。イエスとヨセフは無関係だ」と言うであろう。今聖書を見るあなたの理解は違っているのである。つまり、あなたの視点は変わり、聖書に関して年配の宗教学者よりも高度の認識をもたらす。誰かがこの系譜に何かがあると言えば、「それは何ですか。説明してください。イエスとヨセフは無関係です。知らないのですか。イエスに家系図がありえますか。どうしてイエスに祖先がありえるのですか。どうしてイエスが人の子孫になれるか。イエスの肉はマリアから生まれました。イエスの霊は神の霊であり、人間の霊ではありません。イエスは神の愛する子です。ではどうしてイエスに家系図がありえるのですか。地上でイエスは人類の一員ではありませんでした。では、どうしてイエスに系譜がありえますか」のように答えるであろ

う。家系図を分析し、その内幕を明確に説明し、あなたが理解したことを分かち合うと、その人は言葉を失う。聖書を参照し、あなたに「イエスには家系図がありました。あなたの今日の神には家系図がありますか」と尋ねる人もいることであろう。そこであなたは知っていることを話す。それは最も現実的なことである。このように、あなたの認識は成果を生むことになる。実際、イエスはヨセフとまったく関係がなく、アブラハムとの関係はさらに少ない。イエスはイスラエルで生まれたというだけである。しかし、神はイスラエル人でもイスラエル人の子孫でもない。イスラエルで生まれたからといって、神はイスラエル人だけの神であるという意味では必ずしもない。神が受肉の働きを行なったのは、神の働きのためでしかなかった。神は宇宙全体の創造の神である。神はイスラエルでまず働きの一段階を行なっただけで、その後、異邦人の諸国で働き始めた。しかし、人々はイエスをイスラエル人の神であると考え、さらにイスラエル人とダビデの子孫の一人として位置づけた。世界の終わりにはヤーウェの名前は異邦人の諸国で大いなるものとなると聖書にはある。これは終わりの日には、神は異邦人の諸国で働くということである。神がユダヤで受肉したのは、神がユダヤ人だけを愛していることを示しているのではない。ただ、働きが必要としたので、そうなったまでである。（イスラエル人が神の選民であったために）神はイスラエルでなければ受肉できなかったということではない。神の選民は異邦人の諸国にもいるのではないのか。イエスの働きが異邦人の諸国に広まったのは、イエスがユダヤでの働きを終えた後である。（イスラエル人はイスラエル以外のあらゆる民族を「異邦人」と呼んだ。）実のところ、それらの異邦人の諸国にも神の選民が存在しており、当時はそこではまだ働きが行われていなかったというだけである。働きの最初の二段階がイスラエルで起き、異邦人の諸国では何も行われなかったため、人々はイスラエルをととても重視している。異邦人の諸国での働きは今日始まったばかりであり、そのため人々がなかなか受け入れられないのである。このようなことをすべてはっきりと理解でき、正確に捉えて正しく見ることができれば、今日および過去の神を正確に認識したことになり、その認識は歴代の聖徒が有していた神についての理解よりも崇高である。あなたが今日の働きを経験し、神自らの発言を今日聞いても、神の全体を認識してはいない。また、あなたが過去と同様に追い求め続け、新しいものが取って代わらず、そして特にあなたがこの征服の働きをすべて経験しながらも、最終的にあなたに何の変化も見られなければ、あなたの信仰は飢えを満たすためだけにパンを求める人のような信仰ではないのか。その場合、征服の働きはあなたにどんな成果ももたらさなかったことになる。そうであれば、あなたは排除される人にならないだろうか。

征服の働きがすべて終わるとき、あなたがたの誰もが神はイスラエル人だけの神

ではなく、むしろあらゆる被造物の神であることを理解していなければならない。神はイスラエル人だけではなく人類すべてを創造した。神はイスラエル人だけの神だとか、イスラエル以外の国で神が受肉することなどありえないと言うのなら、征服の働きの過程において、あなたはいまだに何も認識しておらず、神は自分の神であるということを少しも認めていないことになる。あなたはただ神がイスラエルから中国に移り、無理やりあなたの神にさせられていると認めるだけである。まだこのような見方をしているのなら、わたしの働きはあなたにおいて無益で、あなたはわたしの言ったことを何一つ理解していないことになる。もし、マタイがしたように最終的にあなたもわたしの系図を書き、わたしに適切な祖先をみつけ、わたしの正しい系統をみつけ、そのゆえに二度の受肉に二つの系図があるということになれば、これは世界最大の冗談にならないであろうか。わたしの系図をみつけた「善意の人」であるあなたは、神を分割した人になってしまったのではないのか。そんな罪の重荷をあなたは負えるのか。これだけの征服の働きの後でも、神はあらゆる被造物の神であるとあなたがいまだに信じず、神はイスラエル人だけの神だといまだに信じているのなら、あなたは公然と神に抵抗していることになるのではないのか。あなたを今日征服する目的は、神があなたの神であり、また他の人々の神でもあり、最も重要なことに、神を愛するすべての人の神であり、すべての被造物の神であることをあなたに認めさせることである。神はイスラエル人の神であり、エジプト人の神である。神は英国人の神であり、アメリカ人の神である。神はアダムとエバだけの神ではなく、アダムとエバの子孫すべての神でもある。神は天のすべてのものと地上のすべてのものの神である。あらゆる種族は、イスラエル人であろうと異邦人であろうとみな、唯一神の手の中にいる。神はイスラエルで数千年働き、かつてユダヤに生まれただけでなく、今日は中国に、赤い大きな竜の国がとぐろを巻いているこの場所に降り立った。もしユダヤに生まれることで神がユダヤ人の王になるのなら、あなたがたみなのもとに降り立つことで、神はあなたがたの神となるのではないのか。神はイスラエルの民を導きユダヤに生まれたが、また、異邦人の国にも生まれた。神の働きはみな、神が創造した人類全体のためではないのか。神はイスラエルの民を百倍愛し、異邦人を千倍憎んでいるのか。それはあなたがたの観念ではないのか。神があなたがたの神ではなかったということではなく、どちらかというと、あなたがたが神を認めないのである。神があなたがたの神でありたくないということではなく、どちらかというと、神を拒んでいるのはあなたがたである。被造物のうち誰が全能者の手の中にいないのか。今日あなたがたを征服することにおける目的は、神はあなたがたの神にほかならないとあなたがたに認めさせることではないのか。もしあなたがたが神はイスラエル人だけの神であるといまだに言い

張り、イスラエルのダビデ家が神の誕生の起源であり、イスラエル以外の民族にはどれも神を「生む」資格がないどころか、異邦人の種族はヤーウェの働きを直接受けることはできないと主張するのなら、もしまだこのように考えているのなら、頑固に抵抗していることにならないであろうか。いつまでもイスラエルにこだわるのではない。神は現在ここに、あなたがたとともにいる。また、天を仰ぎ見てばかりいるのではない。天の神を慕い求めるのはやめなさい。神はあなたがたのもとに来たのだから、どうして天にいたることになるのか。神を信じるようになって長くはないのに、あなたには神についての観念が多くあり、そのせいでイスラエル人の神がもったいなくも自分たちに現れてくださるなどとはほんの一瞬も考えようとしなほい。まして自分たちが耐え難いほど汚れていることを思い、どうして神自身の出現を自分たちが見ることができるのかを考えようとしなほい。あなたがたはまた、神がどうして異邦人の国に直接出現しえるということを考えてみたこともない。神はシナイ山かオリーブ山に下り、イスラエル人に現れるはずである。異邦人（つまり、イスラエル以外の人）はみな、神の嫌悪の対象ではないのか。どうして神が自らそのような人たちのもとで働くことなどあるのか。こうしたことはみな、あなたがたが長年にわたって築き上げた根深い観念である。今日あなたがたを征服する目的は、あなたがたのそうした観念を打ち砕くことである。だから、シナイ山やオリーブ山ではなく、あなたがた、過去に神が導いたことのない民族のもとに神が自ら現れるのをあなたがたは見ているのである。神がイスラエルで二段階の働きを行なった後、イスラエル人とすべての異邦人は等しくある観念を抱くようになった。神は確かに万物を創造したが、神はイスラエルの民だけの神であり、異邦人の神になるつもりはない、という観念である。イスラエル人は次のように信じている。神は自分たちだけの神であり、あなたがた異邦人の神ではなく、また、あなたがたはヤーウェを崇めないで、わたしたちの神であるヤーウェはあなたがたを憎んでいる。こうしたユダヤ人はさらにこうも信じている。主イエスはわたしたちユダヤ人の姿をとり、ユダヤ民族のしるしをつけた神である。神はわたしたちのもとで働く。神の姿とわたしたちの姿は同じである。わたしたちの姿は神に近い。主イエスはわたしたちユダヤ人の王である。異邦人には、このような偉大な救いを受ける資格がない。主イエスはわたしたちユダヤ人の罪のための捧げ物である。イスラエル人とユダヤ民族がこのような観念をもつようになったのは、あの二段階の働きに基づいているにすぎない。彼らは神を自分たちだけのものであると傲慢に主張して、神が異邦人の神でもあることを認めない。このようにして、異邦人の心の中で神は欠落することになった。神は異邦人の神になることを望まず、イスラエル人、つまり神の選民、そしてユダヤ民族、とりわけ神に従った弟子たちだけを好むのだ

と誰もが信じるようになったためである。ヤーウェとイエスの働きは全人類の存続のためであると知らないのか。あなたは今、神はイスラエルの外に生まれたあなたがたみな神であると認めるのか。神は今日ここに、あなたがたのもとにいるのではないのか。これは夢ではありえない。そうではないのか。この現実を受け入れないのか。あなたがたはこれを信じようともこれについて考えようともしない。あなたがたがどのように見ようと、神はここ、あなたがたとともにいるのではないのか。あなたがたはこれらの言葉を信じることをまだ恐れているのか。今日のこの日からは、征服された人と神に従いたいと願う人はみな神の選民ではないのか。あなたがたは今日従っているが、みなイスラエルの外にいる選ばれた民ではないのか。あなたがたの身分はイスラエル人と同じではないのか。これはみなあなたがたが認めなければいけないことではないのか。これはあなたがたを征服する働き目標ではないのか。あなたがたには神が見えるのだから、神は永遠に、始まりから未来まで、あなたがたの神である。あなたがたみな神に従い、忠実で従順な被造物でいたいと願う限り、神はあなたがたを見捨てない。

神を愛したいとどれほど願うかに関わらず、神に今日まで従ってきた人間は概して従順であった。この働きの段階が終わる最後にならなければ、人は十分に悔い改めない。そのとき人は本当に征服される。現在、人は征服される過程にあるに過ぎない。働きが終わる瞬間、人は完全に征服されるが、今はそうではない。誰もが確信をもっていても、それは人が完全に征服されたことを意味しない。これは、現在のところ、人は言葉だけで実際の出来事は見ておらず、どれほど深く信じていようとも、まだ不確かなままだからである。このため、最後の実際の出来事が起こり、言葉が現実になって初めて人は完全に征服されるのである。現在、こうした人たちが征服されているのは、これまで聞いたことのない奥義を多く聞いているからである。しかし、この人たち一人ひとは内面では、神の言葉の一つひとつが現実化するのを確認できる実際の出来事を依然見つめ続け、待ち続けている。その時になって初めて彼らはすっかり確信する。結局のところ、こうした現実化した実際の出来事を人がみな見て、その現実が人を確信させるに至って初めて、人は心と言葉と目に信念を示し、心の底から完全に確信するのである。人間の本性とはこのようなものである。言葉がすべて実現するのを、実際の出来事が起きているのを、災難が誰かにふりかかっているのを見なければならぬのである。そうすれば、あなたがたは心の底で完全に信じる。ユダヤ人のように、あなたがたはしるしや奇跡を見ることにこだわっている。それなのに、しるしや奇跡があり、あなたがたの目を大きく開かせるはずの現実の出来事が起こっていることがいつまでも見えないままである。空から降りてく

る誰かであるにせよ、あなたがたに話しかける雲の柱にせよ、わたしがあなたがたのひとりに行く悪魔払いにせよ、あなたがたのあいだで雷鳴のように響くわたしの声にせよ、あなたがたはこうした出来事を見たいとこれまでいつも思っていたし、これからもそう思い続ける。神を信じることにおけるあなたがたの最大の願いは、神が来てあなたがたに直接しるしを示すのを見ることであると言える。そうなれば、あなたがたは満足するのである。あなたがたを征服するために、わたしは天地創造に似た働きを行い、それに加えて、何らかのしるしを見せなければならない。そうして、あなたがたの心は完全に征服されるのである。

征服の働きの内幕（４）

完全にされるとは何を意味するのか。征服されるとは何を意味するのか。人が征服されるには、どういう条件を満たさなければならないのか。また、完全にされるには、どういう条件を満たさなければならないのか。征服することと完全にすることは、いずれも人間が本来の姿を取り戻し、墮落したサタンの性質とサタンの影響から解放されるように人間を完全にするのが目的である。この征服は人間への働きの過程の初期に行われる。確かにそれは、その働きの第一段階である。完全にするのは第二段階であり、それは終結の働きである。人間はみな征服される過程を経なければならない。そうでなければ、神を知るすべはなく、神がいることに気づくことはない。つまり、人が神を認めることは不可能になる。そして、もし神を認めることができないのなら、人が神に完全にされることも不可能となる。なぜなら、完全にされるための条件を人が満たさないからである。神を認めさえもしないのなら、どうして神を知ることができようか。また、どうして神を追い求めることができようか。神への証しを立てることができないし、まして、神を満足させるような信仰をもつことなどできない。だから、誰でも完全にされたい人にとって、第一段階は征服の働きを経ることではなければならない。これがまず第一条件である。しかし、征服することも完全にすることも人間に働きかけ人間を変えるためであり、それぞれが人間を経営する（救う）働きの一部である。この二つの段階は、人を完全にするために必要であり、どちらもおろそかにすることはできない。確かに「征服される」というのはあまりよい響きではないが、実際のところ、人を征服する過程とは人を変える過程である。ひとたび征服されても、あなたの墮落した性質は完全には取り除かれないかもしれないが、あなたはそれを知ったことになる。征服の働きを通して、あなたは自分の低劣な人間性と、さらには自らの不服従もかなり知る

ようになっている。これらを捨てることも変えることも征服の働きの短期間にはできないが、あなたはそれを知るようになり、このことがあなたを完全にするための基礎を築く。このように、征服することと完全にすることとはどちらも人間を変え、人間の墮落したサタンの性質を取り除くために行われ、その結果、人間は自身を神に完全に捧げられるようにする。征服されるということは、人間の性質を変えることにおける第一段階でしかなく、また、人間が完全に神に身を捧げることにおける第一段階でもあり、そのため完全にされる段階より低い。征服された人のいのちの性質は、完全にされた人のものよりもずっと変化が少ない。征服されることと完全にされることとは、概念的に互いに異なっている。なぜならふたつは違う段階の働きであって、人に異なった水準を要求するからである。征服において人は低い水準を要求され、完全にする段階では水準は高くなる。完全にされた人は義なる人、聖められ純粋にされた人であり、人間を経営する働きの結晶化、あるいは完成品である。この人は完全な人間ではないが、意味のある人生を生きことを求める。一方、征服された人は神が存在することを言葉で認めるだけである。彼らは神が受肉し、言葉が肉において現れ、神が裁きと刑罰の働きを行うために地上に來たことを認める。また、神の裁きと刑罰、神の鞭と鍛錬はすべて人間にとって有益であることも認める。彼らは最近になって人間のような姿を持ち始めたばかりである。人生について何らかの識見はあるが、それはまだ彼らには漠然としている。言い換えると、彼らは人間性をもち始めたばかりなのである。これらが征服されることの成果である。人が完全への道に踏み出すと、その古い性質が変わることが可能になる。さらに、いのちは成長を続け、人は徐々に真理の中へ深く入っていく。彼らはこの世と真理を追い求めないすべての人を嫌悪をすることができる。彼らはとりわけ自分自身を嫌悪するが、ただそれだけではなく、明らかに自分自身を知っている。彼らには真理によって生きる意欲があり、真理を追い求めることを目標とする。自分の脳が生み出した考えの中で生きるつもりはなく、人間の独善性、傲慢、うぬぼれに深い嫌悪感を持つ。彼らは品格を強く意識して話し、識別力と知恵でもってものごとに対処し、神に忠実で従順である。もし刑罰と裁きとを経験することがあっても、受動的になったり弱くなったりしないどころか、神による刑罰と裁きに感謝する。彼らは神の刑罰と裁きなしではやっていけず、それらは彼らを守ると信じている。彼らは平和と喜びからなる飢えを満たすためにパンを求めるような信仰を追い求めない。一時的な肉の快樂を追いかけることもない。これが完全にされた人に起こることである。人は征服された後、神がいることを認めるが、神の存在を認識するとき人に現れるものは限られている。言葉が肉において現れるということは、実際には何を意味するのか。受肉とは何を意味するのか。受肉した神は

何をしたのか。神の働きの目標と意義とは何か。神の働きと肉における神の業をこれほど多く体験した後、あなたは何を獲得したのか。これらのことをすべて理解して初めて、あなたは征服される。神がいることを認めると言うだけで捨て去るべきものを捨てず、捨てるべき肉の快楽を捨てず、その代わりにこれまでと同様に肉の快楽を切望し続け、兄弟姉妹に対する偏見を捨て去ることができず、多くの簡単な実践を行うにおいて一切の代償を払わないならば、それはあなたがまだ征服されていないことの証拠である。この場合、たとえあなたが多くのことを理解していても、それはすべて何の役にも立たない。征服された人とは、ある程度最初の変化を達成し、入り始めた人である。神の裁きと刑罰を体験することによって、人は神についてと真理について認識し始める。さらに深く具体的な真理の現実性に完全に入ることはできないかもしれないが、実際の生活において多くの初歩的な真理を実行することは可能である。例えば、肉の快楽や個人的な地位に関与することなどである。このすべてのことが、征服の過程において人の内で達成される成果である。性質の変化は征服された人にも見られる。例えば、人の服装、身だしなみ、生き方などもすべて変わることがありえる。神への信仰についての見方が変わり、追求する目標を明瞭に理解し、願望はさらに高まる。征服の働きのあいだ、いのちの性質にも対応する変化が起こる。変化はあるが、浅く、初歩的で、完全にされた人に見られるような性質の変化と追求の目的に比べると、はるかに劣っている。もし征服される過程において、ある人の性質がまったく変わらず、真理もまったく自分のものとすることがないなら、この人はゴミであり全然役に立たない。征服されていない人を完全にすることはできない。征服されることのみを求める人は、たとえ征服の働きのあいだに性質にある程度それ相応の変化が見られたとしても、十分に完全にされることはできない。その人は最初に獲得した真理も失うことになる。征服された人と完全にされた人に起こる性質変化の度合いには非常に大きな差がある。しかし、征服されることは変化の第一歩であり、それは基盤である。この最初の変化が欠けているということは、その人が実際には神をまったく知らない証拠である。なぜなら、その認識は裁きから来るからで、そのような裁きは征服の働きの主要な部分だからである。したがって、完全にされた人はみな最初に征服されなければならない。そうでなければ、その人が完全にされることはない。

あなたは受肉の神を認め、言葉の肉における出現を認めると言うが、神の背後でなんらかの事柄、神の要求に反することを行い、心の中では神を恐れていない。これが神を認めるということか。あなたは神が言うことは認めるが、自分ができることを実行せず、神の道にも従わない。これが神を認めるということか。あなたは神を認めはするが、あなたの考え方は神に対して慎重であるだけでしかなく、畏敬で

は決してない。あなたが神の働きを見て認め、それが神であることを知っていても、あなたが生ぬるいままで、まったく変化しないのなら、あなたはまだ征服されていない人である。すでに征服された人は、自分ができることをすべてしなければいけない。また、たとえさらに高い真理に入ることができず、そのような真理が自分の手には届かないものであっても、心の中でそこに到達したいと願うのである。人が受け入れられるものに限度があるから、実践できることに束縛や制限があるのである。しかし、少なくともできることはすべてしなければならず、これが達成できるなら、それは征服の働きゆえに成し遂げられた成果である。仮にあなたが、「あの人は人間には語れないほどの多くの言葉を発することができることからして、あの人が神でないのなら、いったい誰が神なのか」と言ったなら、このような考えはあなたが神を認めていることにはならない。もし神を認めるなら、実際の行いでそれを示さなければいけない。たとえば教会の指導者であっても、義を実践せず、金や資産をむやみにほしがり、いつも密かに教会の資金を着服しているなら、これは神が存在することを認めていることになるだろうか。神は全能であり、畏敬の対象であるべき存在である。神が存在することをほんとうに認めているのなら、どうして恐れずにいられようか。そのような卑劣な行為ができるなら、あなたはほんとうに神を認めているのか。あなたが信じているのは神か。あなたが信じているのは漠然とした神である。だから、あなたは恐れないのである。ほんとうに神を認め、知っている人はみな神を恐れ、神に逆らうことや自分の良心に反する行為は何であれ恐れて行うことはできない。彼らは特に神の心意に反すると自分で知っていることを行うことを恐れる。これだけが神の存在を認めていることであるとみなされる。あなたの両親が、あなたが神を信じるのをやめさせようとしたら、あなたはどうすべきか。信仰をもたない夫があなたによくしてくれるとき、あなたはどのように神を愛すべきか。また、兄弟姉妹があなたを嫌悪するとき、どのように神を愛すべきか。もし神を認めるのなら、そのような場合にもあなたは適切に行動し、現実を生きる。もし具体的に行動することができず、神の存在を認めると言うだけなら、口先だけの人間である。神を信じていると言い、神を認めはするが、いったいどのように神を認めるのか。どのように神を信じているのか。神を恐れているのか。神を敬い畏れているのか。心の奥底で神を愛しているのか。苦悩し、頼る者が誰もいないとき、あなたは神を愛すべきだと感じるが、事が過ぎればすっかり忘れてしまう。それは神を愛していることでも、信じていることでもない。究極的に、神は人間が何を成し遂げることを望んでいるのか。自分自身の重要さに感心したり、自分は新しい物事を素早く覚え理解できると感じたり、他人を支配したり、他人を見下したり、人を外見で判断したり、正直な人をいじめたり、教会の金をむや

みに欲しがったりするといった状態をわたしは述べてきたが、これらの墮落した性質のすべてがあなたから一部でも取り除かれて初めて、あなたが征服されたことが明らかにされる。

あなたがたに行われる征服の働きはもっとも意義深い。ある見方では、この働きの目的は一つの集団を完全にすることである。つまり、この人たちを完全にすることであり、彼らは完全にされた最初の一群、言わば初穂として勝利者の集団となる。別の見方では、それは被造物に神の愛を享受させ、神の完全で最も偉大な救いを受けさせ、人間が憐れみと慈愛を享受するだけではなく、さらに重要なことに、刑罰と裁きをも享受させることなのである。創世の時から今日に至るまで、神がその働きで行ったことはすべて愛であり、人間への憎しみは欠片ほどもない。あなたの見た刑罰と裁きでさえ愛であり、それはさらに真実で現実的な愛であり、人を人生の正しい道へと導く愛である。また別の見方では、これはサタンの前で証しすることである。そしてもうひとつの見方では、それは将来の福音の働きを広めるための基礎を築くことである。神が行ったすべての働きは、人を人生の正しい道へと導くことがその目的であり、それにより人間として正常な生き方ができるようにする。なぜなら人間はどのように人生を歩むべきか知らないからである。この導きがなければ、虚しい人生しか送れない。あなたの人生は価値のない無意味なものになり、正常な人間でいることなどまったくできない。これが人間を征服することの最も深い意義である。あなたがたはみなモアブの子孫である。あなたがたに征服の働きが行われることは、大きな救いである。あなたがたはみな罪と放蕩の場所で生きており、あなたがたはみな淫らで罪深い。今日、あなたがたは神を見ることができるだけではなく、もっと重要なことに、刑罰と裁きを受け、真に深い救い、つまり、神の最大の愛を受けた。することすべてにおいて、神はあなたがたに真に愛情深く接している。神に悪意はまったくない。神があなたがたを裁くのは、あなたがたの罪ゆえであり、それはあなたがたが自省し、このすばらしい救いを受けられるようにするためである。これはみな人間を完全にすることを目的として行われる。始めから終わりまで、神は人間を救うために全力を尽くしており、神が自らの手で創造した人間を完全に破壊したいという願望はない。今、神は働くためにあなたがたのもとに来ており、このような救いはもっと偉大ではないのか。もし神があなたがたを憎んでいるのなら、あなたがたを直接導くためにそれ程大きな働きをするだろうか。なぜ神がそのように苦しむ必要があるのか。神はあなたがたを憎んでいないし、あなたがたに何の悪意ももっていない。あなたがたは神の愛が最も真実な愛であることを知らなければいけない。神が裁きを通して人を救わなければならないのは、唯一人が不服従だからである。そうでなければ、人を救うのは不可能である

う。あなたがたはいかに生きるべきかを知らず、いかに生きるべきかに気づいてもないため、また、あなたがたはこの淫らで罪深い地に住み、あなたがた自身が淫らで汚れた悪魔であるため、神はあなたがたがいつそう墮落してゆくままにしておくことに耐えられず、また、あなたがたが現在のようにこのような汚れた地で生活し、サタンの思うままに踏みつけられるのは見るにしのびず、あなたがたがハデスに落ちてゆくままにしておくことには耐えられないのである。神はただこの集団の人たちを獲得し、あなたがたを完全に救いたいと願っている。これがあなたがたに征服の働きを行う主要目的である。ただ救いのためである。もしあなたに為されていることはすべて愛と救いであるということがわからないのなら、これが単なる方式の一つ、人間を苦しめる方法の一つであり、信用できないものであると考えるのなら、あなたは自分の世界に戻り苦痛と苦難を受けた方がいいであろう。もし自らこの流れの中に身を置き、この裁きとこの大なる救いを楽しみ、人間世界のどこにも見いだせないこの祝福のすべてとこの愛を享受したいなら、善であれ。この流れの中に留まり、完全にされるように征服の働きを受け入れなさい。今、あなたは神の裁きのために苦痛と鍛錬を少々体験しているかもしれないが、この苦痛には価値と意味がある。人間は神の刑罰と裁きにより精錬され、容赦のない暴露を受け、その目的は罪ゆえに人を罰し人の肉体を罰することであるが、このどれも肉を罪に定めて滅ぼすことを意図してはいない。言葉による厳しい暴露はすべてあなたを正しい道に導くためである。あなたがたはこの働きの多くを直接に体験しており、明らかにそれはあなたがたを悪の道へと導かなかった。それはすべてあなたに正常な人間性を実際に生きさせるためであり、これはみなあなたがたの正常な人間性をもって達成できる。神の働きの一つひとつの段階はあなたの必要にもとづいて、あなたの弱点と実際の背丈に沿っており、荷えないような重荷は一つとしてあなたがたの上には置かれていない。今日あなたにはこのことが明らかではなく、まるでわたしがあなたに厳し過ぎるように感じている。わたしが毎日あなたを罰し、裁き、責めるのは、わたしがあなたを憎んでいるからだと確かにあなたはいつも思っている。しかし、あなたが受けて苦しむのは刑罰と裁きだが、これは実際はすべてあなたへの愛であり、最も偉大な保護である。もしこの働きの深い意味が把握できないのなら、あなたが経験が続けることは不可能である。この救いはあなたに慰めをもたらすべきである。我に戻るのを拒んではならない。ここまで来たのだから、この征服の働きの意義はあなたにはっきりわかるはずである。このことについて、もはやあれこれと考えを抱いてはならない。

将来の使命にどう取り組むべきか

神が各時代に表わす性質を、あなたは具体的に、その時代の意義を適切に伝える言葉で示せるだろうか。神による終わりの日の働きを経験しているあなたは、神の義なる性質を詳しく述べられるのか。あなたは神の性質について、明瞭かつ正確に証しできるのか。あなたの見たこと、経験したことを、義に飢え渴き、あなたが牧してくれるのを待っている哀れで貧しい、敬虔な信者たちにどう伝えるのか。どのような人があなたに牧してもらおうと待っているのか。想像できるだろうか。あなたは自分の肩にある荷の重さ、託されたこと、そして自分の責任を認識しているのか。歴史的な使命に対するあなたの感覚はどこにあるのか。あなたは次の時代の良き主人として、どう十分に奉仕するのか。あなたには主人としての強い意識があるのか。万物の主人についてどう説明するのか。それはまことに世界のすべての生き物とすべての物体の主人なのか。次なる段階の働きを進展させるために、あなたはどのような計画を持っているのか。何名の人たちがあなたに羊飼いになってもらいたいと待っているのか。あなたの任務は重い任務か。彼らは貧しく、哀れで、盲目で、途方に暮れており、暗闇の中で泣き叫んでいる。道はどこにあるのか。彼らは、光が流星のように突然降りて来て、人を長年圧迫してきた暗闇の勢力を一掃することを、どれほど待ちこがれていることか。彼らがどれほど切に望み、日夜どれほど思いこがれているかを、誰が知ることができるだろうか。光がきらめきを放つ日でさえ、深く苦しんでいるそれらの人たちは解放される望みのないまま、引き続き暗闇の地下牢に閉じ込められる。彼らが泣きやむ日はいつ来るだろうか。まったく安息を与えられたことのない、これらのもろい霊たちの不幸は恐るべきものであり、容赦ない束縛と凍り付いた歴史によってこの状態の中で拘束されている。誰が彼らの泣き叫ぶ声を聞いたことがあるだろうか。誰がそのみじめな状態を見たことがあるだろうか。神の心がどれほど深く悲しみ、心配しているか、あなたの頭に浮かんだことはあるのか。自身の手で造った罪のない人類がこのような苦しみにあっているのを、神は見ているだろうか。結局、人間は毒された犠牲者たちである。人間は今日まで生きながらえたけれども、悪しき者によって人類が長い間毒されてきたことを、いったい誰が知っていただろうか。あなたは自分もその犠牲者の一人であることを忘れてしまったのか。神に対するあなたの愛のゆえに、これら生き残った人たちを救うために喜んで尽力しようと思わないのか。自分の血肉のように人類を愛する神に報いるべく、自分の力を残らず捧げようと思わないのか。つまり、神に用いられて並外れた人生を送ることを、あなたはどのように解釈するだろうか。神に仕える敬虔な人という意義深い人生を送る決意と自信を、あなたは本当に持っているのか。

祝福をあなたがたはいかに理解しているか

この時代に生まれた人はサタンや汚らしい悪霊に墮落させられているが、その墮落はまた人に最高の救済をもたらした。その救済はヨブの家畜の山々や平野や莫大な富よりも大きく、ヨブが試練の後に受けたヤーウェを仰ぎ見るという祝福よりも大きい。ヨブは死の試練を受けて初めてつむじ風の中でヤーウェが話すのを聞き、ヤーウェの声を聞いた。しかし、ヨブはヤーウェの顔を見ず、ヤーウェの性質を知らなかった。ヨブが得たものは、肉体的な喜びをもたらす物質的な富と周辺のすべての町にいる誰よりも美しい子供たちであり、また天上の天使の庇護であった。ヨブはついにヤーウェを見ることはなかった。義なる者と呼ばれたものの、ヤーウェの性質を知ることもなかった。現代人の物質的な喜びは、言うならば一時的に乏しく、或いは外界の環境は敵対的であるが、わたしはわたしの性質を示す。それはわたしが太古から人間に明らかにしたことがなく、つねに秘密であったものである。わたしはまた、すべての人々の中でももっとも卑しいが、わたしが最大の救済を与えた人々に何代にもわたる奥義を示す。しかも、わたしがこれらを明らかにするのは、これが初めてである。わたしはこのような働きをこれまでにしたことがない。あなたがたはヨブよりはるかに劣っているが、あなたがたが得たものや見たものはヨブをはるかにしのぐ。あなたがたはありとあらゆる苦しみを受け、ありとあらゆる苦痛を経験したが、その苦しみはヨブの試練とは似ても似つかない。それは人がその反抗、抵抗のせいで、そしてわたしの義なる性質ゆえに受ける審判であり懲罰である。それは義なる裁きであり刑罰であり呪いである。ヨブは、ヤーウェの大いなる愛とやさしさを受けたイスラエル人の中の義なる人であった。彼は何ら邪悪な行為をせず、ヤーウェに抵抗しなかった。むしろ彼は誠実にヤーウェに献身した。ヨブはその義ゆえに試練を受けたのであり、燃えさかる試練にかけられたのは、彼がヤーウェの誠実なしもべであったからである。現代人はその汚れと不義ゆえにわたしの裁きと呪いに委ねられる。ヨブが家畜や財産や召使いや子どもたちや彼にとって大切なものすべてを失ったときに味わったことに比べれば、現代人の苦しみなど何でもないとは言え、彼らが苦しんでいるのは激烈な精錬であり、灼熱である。そして、それがヨブが経験したことよりも深刻なのは、そのような試練は人が弱いからといって軽減されたり取り除かれたりしないことである。その代わりに試練は長く続き、人の生涯最期の日まで続く。これが罰であり、裁きであり、呪いである。それは、情け容赦のない灼熱であり、さらには人類の当然の「遺産」である。それは人々が受けるに足るものであり、そこでわたしの義なる性質が表現される場所である。これは知られた事実である。にもかかわらず、人々が獲得した

ものは彼らが今日堪えている苦しみを大きく凌駕する。あなたがたが堪えている苦しみは、あなたがたの愚かさゆえに生じた挫折に過ぎず、あなたがたが獲得したものは苦しみよりも百倍も大きい。旧約聖書のイスラエルの律法によれば、わたしに抵抗した者、公けにわたしを裁いた者、わたしの道に従わずに堂々とわたしに冒瀆的な犠牲を捧げた者はすべて必ずや神殿の火によって破壊されたり、選ばれた者に石打の刑にされ、その一族の子孫や直属の血縁者でさえもわたしの呪いに苦しむ。来世においても彼らは自由になることはなく、わたしの奴隷の奴隷になる。わたしは彼らを異邦人の間に追放し、彼らは母国に帰ることはできない。行動や振る舞いにもとづいて現代人が堪える苦しみは、イスラエル人が苦しんだ罰ほど深刻ではない。あなたがたが現在苦しんでいるものが報いであると言うことは、正当な理由がないわけではない。なぜならあなたがたは実際一線を越えたからである。もしいにしえのイスラエルにいたとしたら、あなたがたは永遠の罪人になっていただろうし、はるか昔にイスラエル人により切り刻まれ、ヤーウェの神殿にて天からの火に焼かれていたであろう。あなたがたが今獲得したものは何か。あなたがたは何を受け取り、何を享受したのか。わたしはあなたがたの中にわたしの義なる性質を明らかにしたが、さらに重要なことは、わたしが人類をあがなうためのわたしの忍耐力を明らかにしたということである。わたしがあなたがたのうちで行なった働きは、忍耐力のわざであると言えるかもしれない。それはわたしの経営（救い）のためになされたのであり、さらに人類が享受するようになされたのである。

ヤーウェの試練を経験したものの、ヨブはヤーウェを崇拜した義なる人にすぎなかった。あのような試練を受けたにもかかわらず、ヨブはヤーウェについて不満を言わず、神との出会いをいつくしんだ。現代人はヤーウェの臨在を大切にしないだけでなく、ヤーウェの出現を拒否し、嫌悪し、不平を言い、あざける。あなたがたは多少は何かを得たのではなかったのか。あなたがたの苦しみは本当にそれほど大きかったのか。あなたがたはマリアやヤコブよりも幸運ではなかったのか。そして、あなたがたの抵抗は本当にそれほど些末であったのか。わたしがあなたがたに要求したことや依頼したことが、あまりに偉大で過多であったとでもいうのか。わたしの怒りはわたしに抵抗したイスラエル人に対して放たれただけであり、あなたがたに直接向けられてはいなかった。あなたがたが獲得したのは単にわたしの情け容赦のない試練と暴露であるとともに、執拗で熱烈な精錬でしかなかった。それにもかかわらず、人はわたしに抵抗し、わたしを否定し続け、そこには僅かの服従もない。わたしから離れ、わたしを否定する人までいる。そのような人はモーセに対立したコラとダタンの群れに劣る。人々の心はあまりに頑なで、彼らの性質はあまりに強情である。彼らは決してこれまでのやり方を変えない。言うておくが、彼ら

は白昼の中、娼婦のようにさらけだされ、わたしの言葉は「彼らにとって耳障り」になるほど厳しいものであり、人々の本性を日の光にさらす。それでいながら、彼らはうなだれて涙を少し流し、悲しい気持ちを無理にしぼり出すだけである。いったんこれが過ぎれば、彼らは山中の野獣の王のように獰猛で、ほんのわずかな自覚もない。このような性質の人が自分たちがヨブよりも百倍も幸運であったとどうして知ることができようか。自分たちが享受しているのは祝福であり、それは時代を通じてかつて見られなかったようなものであり、誰もかつて享受したことがないものであることにどうして気づくことができようか。人の良心がどうしてこのような祝福を、罰を含む祝福を感じ取ることができようか。率直に言うならば、わたしがあなたがたに要求していることは、あなたがたがわたしの働きの模範、わたしの全性質とわたしの行為のすべての証人になれるようにするため、あなたがたがサタンの苦悩から解放されるようにするためでしかない。しかし人はいつもわたしの働きを不快に感じ、意図的にわたしの働きに敵対する。そのような人がどうしてわたしにイスラエルの律法を復活させ、わたしがイスラエルにもたらした怒りを彼らにもたらすようにあおらずにいられようか。あなたがたの中にはわたしに「従順で服従的」な人が多くいるが、コラの群れの同類はさらに多い。ひとたび栄光を完全に獲得すれば、わたしは天の火を用いて彼らを燃やして灰にする。心得ておきなさい。わたしはもはや言葉で人を懲らしめず、むしろ、イスラエルの働きを行う前に、わたしに抵抗しわたしがはるか昔に抹殺した「コラの群れ」を完全に焼却する。人類にはもはやわたしを享受する機会はない。それどころか、人類にはわたしの激怒と天からの炎しか見えなくなる。わたしはあらゆる人のさまざまな結末を明らかにし、人をみな範疇に分ける。わたしは人、彼らのあらゆる反抗的な行為を書き留めてからわたしの働きを終える。人の結末が地上におけるわたしの評決とともに、人のわたしへの態度により決定されるようにである。そのときが来ると結末を変えることのできるものは何もない。人に自分の結末を自ら明らかにさせよう。そしてわたしは人々の結末を父なる神に手渡すのである。

神に対するあなたの認識はどのようなものか

人々は長きにわたって神を信じてきたが、ほとんどの人は「神」という言葉が何を意味するのかを理解せず、当惑しながら付き従うだけである。神を信じなければならぬのはいったいなぜなのか、あるいは神とは何かについてまったくわかっていない。神を信じ、付き従うことだけは知っていても、神が何かを知らなければ、そしてまた神を理解していなければ、これは実に大きな笑い話ではないだろうか。

ここまで至った人々は天の奥義を数多く目撃しており、人がこれまで理解していなかった多数の深遠な知識を耳にしているが、人が熟考したことのない最も初歩的な数多くの真理に関して何も知らずにいる。中には、「わたしたちは長年にわたって神を信じてきた。神が何かわからないわけがない。この質問は、わたしたちを見くびっているのではないか」と言う人もいるだろう。しかし実のところを言えば、人々は今日わたしに付き従っているものの、現在の働きを何一つ理解していない。最も明白で簡単な問題ですら理解できず、まして神に関する問題のような極めて複雑な問題は言うまでもない。あなたが関心を持たず、いまだ突き止めていない問題こそ、理解すべき最も重要な問題なのだと知りなさい。なぜなら、あなたは群衆に付き従うことしか知らず、自分が備えておくべきものに注意を払わず、配慮しないからである。なぜ神を信じるべきなのか、本当にわかっているのか。神とは何か、本当にわかっているのか。人とは何か、本当にわかっているのか。神を信じる者としてこれらのことを理解できなければ、神の信者としての尊厳を失うのではないか。今日のわたしの働きは以下の通りである。人々に自分自身の本質を理解させる、わたしが行うすべてのことを理解させる、そして神の本当の顔を知らしめる。これがわたしの経営計画の最後的一幕、わたしの働きの最後の段階である。だからこそ、わたしは前もって人生の奥義のすべてをあなたがたに語り、あなたがたがそれらをわたしから受け入れられるようにしているのだ。これは最後の時代の働きなので、あなたがたがこれまで受け入れることのなかったいのちの真理を、わたしは残らずあなたがたに語らなければならない。あなたがたはあまりにも不完全で、あまりにも準備不足なので、それらを理解することも、それらに耐えることもできないが、わたしは語らなければならない。わたしは自分の働きを完結させ、わたしが行うべき働きを終わらせるとともに、わたしがあなたがたに託してきたことを残らず伝え、暗闇が降りてきたとき、あなたがたが再び迷い、悪しき者の策略に陥らないようにする。あなたがたが理解していない道、あなたがたが知らない事柄は数多くある。あなたがたはそれほど無知なのだ。わたしはあなたがたの霊的背丈と欠点を十分よく知っている。したがって、あなたがたが理解できない言葉がたくさんあっても、わたしはあなたがたに対し、以前に受け入れたことのないこれらの真理を残らず伝えたい。あなたがたの現在の霊的背丈で、わたしへの証しに揺るぎなく立てるかどうかが、心配し続けているからである。あなたがたをみくびっているわけではない。あなたがたはみな、わたしの正式な訓練を経ていない獣であり、あなたがたの中にどのくらい栄光があるか、わたしには絶対にわからない。わたしは多くの精力を注ぎ込んであなたがたに働きかけてきたが、あなたがたに積極的な要素は事実上存在せず、消極的な要素は指折り数えることができ、サタンを辱める証しと

してしか役に立たない。あなたがたの中にあるそれ以外のものはどれもサタンの毒である。わたしから見て、あなたがたは救いようもない。目下のところ、わたしはあなたがたのさまざまな表現や態度を見て、ようやくあなたがたの本当の霊的背丈を知った。だからこそ、わたしはあなたがたのことをいつも心配している。思うままに暮らすよう放置されたとしたら、人は本当に今日よりも良い状態、あるいは今日と同じくらいの状態でいられるだろうか。あなたがたは自分の子供じみた霊的背丈が不安ではないのか。あなたがたは本当にイスラエルの選民のようになり、いかなる時でもわたしに、わたしだけに忠実でいられるのか。あなたがたが今見せているのは、親の目の届かないところにいる子供のいたずらっぽさではなく、主人の鞭の届かないところにいる動物から沸き起こる獣性である。あなたがたは自分の本性を知らねばならないが、それはあなたがた全員が共有している弱点、あなたがた全員に共通する病気でもある。したがって、わたしが今日あなたがたにする唯一の忠告は、わたしへの証しに揺るぎなく立ちなさい、ということである。いかなる状況の下でも、古い病気を再発させてはならない。証しをすることが何より重要であり、それがわたしの働きの核心である。あなたがたは、マリアが夢の中でヤーウェの啓示を受け入れたように、信じ、それから従うことで、わたしの言葉を受け入れなければならない。これだけが精神的に純潔であるとみなされる。と言うのも、あなたがたはわたしの言葉を一番数多く聞く人々であり、わたしによって最も祝福される人々だからである。わたしはあなたがたに、わたしの貴重な所有物を残らず与え、何もかもあなたがたに授けてきた。しかしながら、あなたがたの地位とイスラエルの民の地位は非常に異なり、天と地ほどもかけ離れている。しかし彼らに比べると、あなたがたはずっと多くのものを受け取ってきた。彼らが必死にわたしの出現を待つ一方で、あなたがたはわたしと共に愉快的日々を過ごし、わたしの豊富な恵みを共有している。この違いを考えれば、あなたがたは何の権利があって不平を言い、わたしと口論し、わたしの所有物の分け前を要求するのか。あなたがたは多くのものを得たではないか。わたしは多くのものを与えているが、その見返りとしてあなたがたがわたしにくれるのは、胸が張り裂けるような悲しみと不安、そして抑えきれない恨みと不満である。あなたがたはあまりにも不快だが、同時に哀れでもある。よってわたしは憤りをすっかり呑み込み、あなたがたに繰り返し反対の声を上げるしかない。数千年にわたる働きにおいて、わたしが人類にまったく異議を唱えなかったのは、人類の発展において、あなたがたのあいだの「偽り」だけが、古代の有名な先祖によってあなたがたに残された貴重な継承物のような、最も有名なものになったことに、わたしが気づいたからである。人間以下のそれら豚と犬を、わたしはどれだけ憎むことか。あなたがたはあまりにも良心に欠けている。あ

なたがたの性格はあまりにも卑劣である。あなたがたの心はあまりにも無情である。仮にわたしがこうした言葉と働きをイスラエル人にもたらししていたら、わたしはずっと以前に栄光を獲得していただろう。しかし、あなたがたのあいだでそれを獲得するのは不可能である。あなたがたのあいだには、残酷な無視、冷たい態度、そして言い訳しかない。あなたがたはあまりにも感情がなく、まったく価値がない。

あなたがたは自分のすべてをわたしの働きに捧げるべきである。あなたがたはわたしに益をもたらす働きをすべきである。わたしはあなたがたに対し、あなたがたが理解していない一切のことを喜んで説明し、あなたがたに欠けているすべての物事をわたしから獲得できるようにしたい。たとえあなたがたの欠点が数えきれないほど多かったとしても、わたしはあなたがたに対してなすべき働きをひたすら行い、あなたがたにわたしの最後の慈悲を与え、それによってあなたがたがわたしから利益を得られるようにしたい。そして、あなたがたに欠けていて、世界がこれまでに見たことのない栄光を獲得できるようにしたい。わたしは長年にわたり働いてきたが、わたしを知るに至った人は誰もいない。わたしは他の誰にも話したことの秘密をあなたがたに話したい。

人間のあいだで、わたしは見ることのできない霊、接触することのできない霊だった。地上におけるわたしの三段階の働き（創世、贖い、破壊）のために、わたしはそれぞれの時代に人々のただ中に現れ（決して公然とではない）、彼らのあいだでわたしの働きを行う。わたしが初めて人間のあいだに出現したのは贖いの時代である。もちろんわたしはユダヤの一家族へと到来した。このように、神が地上に来るのを最初に見たのはユダヤ人だった。わたしが自らこの働きを行なった理由は、わたしの受肉した肉体を贖いの働きの中で罪の捧げ物として使おうとしたからである。したがって、わたしを最初に見たのは恵みの時代のユダヤ人だった。わたしが肉において働きを行ったのもそれが初めてである。神の国の時代において、わたしの働きは征服して完全にすることなので、わたしは再び肉において、羊飼いととしての働きを行う。これが、わたしが肉において行う二度目の働きである。働きの最後の二段階で人々が接触するのは、もはや目に見えない、触れることのできない霊ではなく、霊が肉体として具現化された人物である。ゆえに人の目から見て、わたしはまたしても人になり、神の容貌も雰囲気も持つことはない。そのうえ、人々が見る神は男性だけでなく女性でもあるので、彼らはすっかり驚き、首をひねる。再三再四、わたしの途方もない働きは、長年にわたり抱かれていた古い信念を粉碎し、人々は動転している。神は単に、聖霊、霊、7倍に強化された霊、すべてを包み込む霊であるだけでなく、人間、普通の人間、ことのほか平凡な人間でもある。神は男性だけでなく、女性でもある。彼らはどちらも人間に生まれたという点で同

じであるが、一人は聖霊によって受胎され、もう一人は生まれながらに人間であるが、霊から直接派生したという点で異なっている。彼らはどちらも神の受肉した肉体で、父なる神の働きを実行するという点で同じであるが、一人は贖いの働きを行い、もう一人は征服の働きを行うという点で異なっている。どちらも父なる神を表すが、一人は親愛の情と慈悲に満たされた贖い主であり、もう一人は怒りと裁きに満ちた義の神である。一人は贖いの働きを開始した最高司令官であり、もう一人は征服の働きを成し遂げる義の神である。一人は始まりであり、もう一人は終わりである。一人は罪のない肉体であり、もう一人は贖いを完成させ、働きを続行し、決して罪深くない肉体である。彼らはどちらも同じ霊であるが、異なる肉体に宿り、異なる場所で生まれ、数千年も隔てられている。しかし、彼らの働きはすべて相互に補完し合うものであり、決して対立せず、同じ次元で語られる。どちらも人であるが、一人は男の赤子であり、もう一人は女の幼児だった。長い年月のあいだ、人々が目にしてきたのは霊だけでなく、また人間、男性だけでなく、人間の観念と合致しない多くの物事も目にしてきた。このように、人間は決してわたしを十分理解することができないのである。あたかも、わたしは確かに存在するが、同時に幻想的な夢でもあるかのように、人間はわたしを半ば信じ、半ば疑い続けている。そのため今日に至るまで、人々は神が何であるかをいまだ知らずにいる。あなたは単純な一文でわたしを要約することが本当にできるのか。本当に「イエスは他ならぬ神であり、神は他ならぬイエスである」とあえて言うのか。大胆にも「神は他ならぬ霊であり、霊は他ならぬ神である」と言うのか。「神は肉をまとった人間に過ぎない」と抵抗なく言えるのか。「イエスの姿は神の偉大な姿である」と断言する勇気が本当にあるのか。自分の雄弁さを用いて神の性質と姿を完全に説明することができるのか。本当に「神は自分の姿に合わせて男性だけを造り、女性は造らなかった」とあえて言うのか。そう言うのであれば、女性は誰一人、わたしが選んだ者の中に入らず、まして女性は人類の一種ではなくなるだろう。さて、神とは何か、あなたは本当に知っているのか。神は人間なのか。神は霊なのか。神は本当に男性なのか。わたしのなすべき働きを完了させられるのは、イエスだけなのか。わたしの本質を要約するために、上記のうち一つしか選ばないとしたら、あなたは極めて無知な、忠実な信者である。わたしが一度だけ、ただ一度だけしか、受肉した肉体として働かなかったとしたら、あなたがたはわたしのことを規定するだろうか。あなたは本当に一目見て、わたしを完全に理解することができるのか。生きているあいだに経験したものだけに基づいて、わたしを完全に要約することが本当にできるのか。わたしが両方の受肉で同様の働きをしたとすれば、あなたがたはわたしをどのように認識するだろうか。永遠にわたしを十字架に釘で打ち付けたままにしておく

のだろうか。神はあなたが言うほど単純なのだろうか。

あなたがたの信仰はとても誠実だが、あなたがたの中の誰もわたしを完全に説明することはできないし、あなたがたが見る事実のすべてを十分に証しできる者もない。考えてもみなさい。今日、あなたがたのほとんどは自分の本分を怠っており、その代わりに肉を追い求め、肉を満足させ、肉の享樂をむさぼっている。あなたがたは真理をほとんど自分のものにしていない。ならば、これまで見てきたすべての物事をどう証しできるのか。あなたがたは本当にわたしの証人になれる自信があるのか。今日見てきたすべてのことを証しできない日が来るのであれば、あなたは被造物の機能を失っているだろう。そして、あなたの存在には何の意味もなくなってしまうだろう。人間である価値さえなくなり、人間ではないとさえ言えるだろう。わたしはあなたがたに計り知れない量の働きを行ってきたが、現在あなたは何も学んでおらず、何も気づいておらず、無駄に苦勞している。ゆえに、わたしが働きを拡大する時が来たら、あなたはぽかんと見つめるだけで、口もきけず、まったく役に立たない。それでは稀代の罪人になってしまわないか。その時が来たら、あなたはとてつもなく深い後悔を感じないだろうか。意気消沈してしまわないだろうか。わたしが今日働きを行っているのはどれも暇つぶしや退屈しのぎからではなく、わたしの将来の働きの基礎を築くためである。わたしは行き詰っていないし、何か新しいことを考え出す必要があるわけでもない。わたしが行う働きを、あなたは理解すべきである。それは路上で遊ぶ子供が行うものではなく、わたしの父を代表してなされる働きなのである。あなたがたは、わたしがこのすべてを自ら行っているわけではないことを知るべきである。そうではなく、わたしは父を代表しているのだ。その一方で、あなたがたの役割はひたすら付き従い、服従し、変化を遂げ、証しをすることである。あなたがたが理解すべきことは、なぜわたしを信じなければならないのか、である。これが、あなたがた一人ひとりが理解すべき最も重要な問題なのだ。わたしの父は、自身の栄光のために、世界を創造した瞬間からわたしのためにあなたがた全員の運命をあらかじめ定めた。わたしの父があなたがたの運命をあらかじめ定めたのは、わたしの働きのため、そしてわたしの父の栄光のためだった。あなたがたがわたしを信じるのは、わたしの父のゆえである。あなたがたがわたしに付き従うのは、わたしの父があらかじめ運命づけたからである。このどれも、あなたがたが自分で選んだものではない。さらに重要なのは、自分たちはわたしの証しをするために、わたしの父からわたしに授けられた者なのだと、あなたがたが理解しなければならないということである。わたしの父があなたがたをわたしに授けたのだから、あなたがたは、わたしがあなたがたに授ける道、そしてわたしがあなたがたに教える道と言葉に従うべきである。わたしの道に従うことが

あなたがたの本分だからである。これが、あなたがたがわたしを信じる当初の目的である。したがって、わたしはあなたがたに言う。あなたがたは、わたしの道に従うために、わたしの父がわたしに授けた人々にすぎない。しかし、あなたがたはわたしを信じるだけである。あなたがたはわたしに属していない。それは、あなたがたがイスラエルの一族に属しておらず、古代の蛇の同族だからである。わたしはあなたがたに対し、わたしの証しをすることしか求めていないが、今日あなたがたはわたしの道を歩かなければならない。これはすべて将来の証しのためである。あなたがたがわたしの道に耳を傾ける人々としてしか機能しないなら、あなたがたには何の価値もなく、わたしの父がわたしにあなたがたを授けたことの意義は失われる。わたしはあなたがたに、あくまで次のように言う。あなたがたは、わたしの道を歩かなければならない。

本物の人とは何を意味するのか

人を経営する（救う）ことは常にわたしの本分であった。さらに、人の征服はわたしが世界を創造したときに定めたことだった。終わりの日にわたしが人々を完全に征服することや、反抗的な人間を征服することがサタン打倒の証拠だということを、人々は知らないかもしれない。しかし敵がわたしとの戦いを始めたとき、わたしはすでに、サタンに捕われてその子となり、サタンの家を見守る忠僕となった者たちを征服すると告げた。征服という言葉の本来の意味は、打ち負かし、辱しめることである。イスラエル人の言葉では、それは完全に打ち負かし、破壊し、それ以上わたしに抵抗できないようにすることを意味する。しかし今日、あなたがたの間で用いられるこの言葉の意味は、単に征服するということだ。わたしの意図は常に、人類のうち邪悪なものを完全に根絶し完敗させ、それによってもうわたしに反逆することも、ましてやわたしの働きを妨害したりかき乱したりする生命力を持つこともないようにすることだった。したがって人間に関して言えば、この言葉は単に征服を意味するものとなった。この言葉の含意が何であれ、わたしの働きは人類を打ち負かすことである。なぜなら人類はわたしの経営に付属していることは確かだが、より正確に言えば、わたしの敵以外の何ものでもない。人類はわたしに対抗し、反逆する邪悪な者である。人類はわたしに呪われた邪悪な者の子孫以外の何ものでもなく、わたしを裏切った大天使の末裔以外の何ものでもない。人類ははるか昔にわたしに拒絶され、以来和解し難い敵となった悪魔の遺産以外の何ものでもない。全人類の上にかかる空は暗くよどみ、清澄さは微塵もなく、人間の世界は漆黒の闇に包まれたため、そこで生きる者は顔の前で伸ばした自分の手も見えないし、

頭を上げて太陽を見ることはできない。足の下の道はぬかるみ、窪みだらけで曲がりくねり、全土に死骸が散乱している。暗がりの隅々に遺骸が溢れ、冷え冷えとした暗がりには大勢の悪霊たちが居を定めている。人の世の至る所に悪霊の群れが行き交い、汚れにまみれた無数のけだものの子孫が膠着状態で闘いを繰り広げており、その音が人々を恐怖に震え上がらせる。このような時代、このような世界、このような「地上の樂園」で、人はどこに人生の至福を探しに行くのか。どこに行けば人生の終着点が見出せるのか。遠い昔からサタンに踏みつけられてきた人類は、当初からサタンの似姿を演じ続けてきた。それどころか、人類はサタンの化身でさえあり、大声で高らかにサタンに証しをする証人の役割を果たしている。このような人類が、このような屑が、この墮落した人間家族の子孫が、どうして神の証しをすることができようか。わたしの栄光はどこから現れるのか。わたしの証しをどこから語り始められるのか。人類を墮落させた敵はわたしに敵対し、すでに人類を奪ってしまい、わたしがはるか昔に創造しわたしの栄光とわたしの生で満ちていた人類を汚してしまった。敵はわたしの栄光を奪い去り、ただサタンの醜悪さを強く帯びた毒と、善悪の知識の木の果実による汁だけを人間に染み込ませた。初めにわたしは人類を創造し、すなわち人類の祖先であるアダムを造った。彼は形態と姿を与えられ、活力に溢れ、生命力に満ちて、その上わたしの栄光とともにあった。それはわたしが人を創造した輝かしい日であった。続いてエバがアダムの体から生み出され、彼女も人の祖先となった。こうしてわたしが生み出した人々は、わたしの息吹で満たされ、わたしの栄光に溢れていた。アダムはもともとわたしの手から生まれ、わたしの姿を表現したものであった。したがって「アダム」の元来の意味は、わたしによって造られ、わたしの生命力を吹き込まれ、わたしの栄光を吹き込まれた、形態と姿を持ち、霊と息とを持つ者ということである。アダムは被造物の中で唯一霊を持つものであり、わたしを表し、わたしの姿を持ち、わたしの息吹を受け取れることができた。当初エバは、息を吹き込まれた二番目の人であり、わたしがその創造を定めていたため、「エバ」の元来の意味は、わたしの栄光を持続する被造物であり、わたしの生命力で満たされ、さらにわたしの栄光が賦与された者、というものだった。エバはアダムから生まれたため、彼女もまたわたしの似姿をとっていた。彼女はわたしをかたどった二番目の人だったからである。「エバ」の元来の意味は、霊と肉と骨を持つ生きた人であり、わたしの二番目の証しであると同時に、人類におけるわたしの二番目の似姿、というものである。彼らは人類の祖先であり、人の純粋で貴重な宝であり、そして当初から霊を授けられている生き物であった。しかし、邪悪なる存在が人類の祖先の子孫を踏みつけ、捕らえ、人間の世界を完全な暗闇にしたため、子孫たちはもはやわたしの存在を信じていない。

さらに忌々しいのは、この邪悪なるものは人々を墮落させ踏みにじりながら、わたしの栄光、わたしの証しとなるもの、わたしが人々に授けた生命力、わたしが彼らに吹き込んだ息吹といのち、人間世界におけるわたしのすべての栄光、さらにわたしが人類に注ぎ込んだ心血のすべてを、残酷にも力づくで奪い去ろうとしていることである。人類はもはや光の中にはおらず、わたしが授けたすべてのものを失い、わたしが与えた栄光を捨ててしまった。どうやって彼らが、わたしをすべての被造物の主として認めることができようか。どうやって天上のわたしの存在を信じ続けることができようか。どうやって地上にわたしの栄光が現れるのを見出せようか。どうやってこの孫息子や孫娘たちは、彼らの先祖たちが崇めた神を、自身の創造主として受け入れることができようか。この哀れな孫息子や孫娘たちは、わたしがアダムとエバに授けた栄光も姿も証しも、さらにわたしが人類に授け彼らが存在の頼みとしているいのちをも、邪悪なるものに気前よく「差し出して」しまい、そしてその邪悪なものの存在にほんの少しも気づくことなく、わたしの栄光をすべてその邪悪な者に与えてしまった。これこそがまさに「屑」という言葉の理由ではないだろうか。このような人類、このような邪悪な悪魔、このような生きる屍、このようなサタンの似姿、このようなわたしの敵が、どうやってわたしの栄光を得ることができようか。わたしはわたしの栄光を取り戻し、人々の間にあるわたしの証しを取り戻し、かつてわたしに属しておりわたしが昔人類に与えたすべてのものを取り戻し、人類を完全に征服する。しかしあなたは、わたしが造った人間がわたしの姿と栄光を備えた聖なる人であったことを知らねばならない。彼らはもともとサタンのものではなく、サタンに踏みつけられるものでもなく、純粋なわたしの現れであり、サタンの毒の痕跡すらなかった。そのためわたしは人類に告げる、わたしはただわたしの手によって造られた、わたしの愛する聖い者、他の何者にも属さないものだけを欲していると。さらに、わたしは彼らに喜びを感じ、彼らをわたしの栄光とみなすだろう。しかしわたしが欲しているのは、サタンによって墮落させられた、現在サタンに属している、もはやわたしの元来の創造物ではなくなった人類ではない。わたしは人の世界にあるわたしの栄光を取り戻すつもりなので、サタンを打倒したわたしの栄光の証拠として、人類の生き残りを完全に征服する。わたしは自らの証しだけをわたしの結晶として、わたしの喜びの対象として受け止める。これがわたしの旨である。

人類は今日まで、何万年もの歴史を通して発展してきた。しかしわたしが当初創造した人類は、はるか昔に墮落へと落ち込んでしまった。人間はすでにわたしが望んだ人間ではなく、そのためわたしの目にはすでに、人類という名前に相応しいものではなくなっている。むしろ彼らはサタンによって捕われた屑であり、サタンに

取り憑かれサタンを内に宿した生きる屍である。人々はわたしの存在を信じておらず、わたしの到来を歓迎もしない。ただ渋々わたしの要求に応え、一時的にそれに応じるだけで、人生の喜びや悲しみを心からわたしと共有したりもしない。人々はわたしを不可解な存在とみなしているため、渋々笑顔を見せ、権力者に擦り寄るような態度をしている。それはわたしの働きについて何も知らず、ましてや現在のわたしの旨も一切知らないからだ。正直に言うが、その日が来たとき、わたしを崇める人の苦しみは、あなたがたの苦しみよりも軽くなる。あなたがたの信仰の程度は実際、ヨブのそれを超えておらず、ユダヤのパリサイ人の信仰ですらあなたがたの信仰を上回る。したがって、火で焼かれる日が訪れると、あなたがたの苦しみはイエスに非難されたときのパリサイ人よりも大きく、モーセに反抗した250人の指導者たちよりも、滅びの炎に焼かれたソドムよりも重くなるだろう。モーセが岩を打ったとき、ヤーウェが授けた水がほとばしり出たのは、モーセの信仰のためだった。ダビデがわたしヤーウェを賛美して琴を奏でたとき、ダビデの心は喜びに満ちており、それは彼の信仰のためだった。ヨブが山々を埋め尽くすほど多くの家畜や膨大な量の財産を失い、その体が腫物で覆われたのは、彼の信仰のためだった。彼がわたしヤーウェの声を聞き、わたしヤーウェの栄光を見ることができたのは、彼の信仰のためだった。ペテロがイエス・キリストに付き従うことができたのは、ペテロの信仰によるものだった。彼がわたしのために十字架に釘づけにされ、栄光ある証しとなることができたのも、彼の信仰によるものだった。ヨハネが人の子の輝かしい姿を見たのは、彼の信仰によるものだった。そして彼が終わりの日の幻を見たのも、なおさら彼の信仰のためであった。数多くのいわゆる異邦の民がわたしの啓示を受け、わたしが人々のもとで働くために肉となって再来したことを知るようになったのも、また彼らの信仰のためだ。わたしの厳しい言葉に打ちのめされつつも、それによって慰められ、そして救われたすべての者たちは、みな信仰のゆえにそうなのではないか。わたしを信じつつ苦難に耐えている人々も、世界から拒絶されたのではないか。わたしの言葉の外で生き、試練の辛さから逃げている人々は、みな世界を漂っているのではないか。彼らはあちらこちらへひらひらと揺れる秋の葉のようで、休む場所もなく、ましてやわたしの慰めの言葉など得ていない。わたしの刑罰や精錬が彼らを追うことはないにせよ、彼らは天国の外の街路をあてもなくさまよう乞食ではないか。世界は本当にあなたの安息の場所だろうか。あなたはわたしの刑罰を避けることで、本当にこの世から満足の微笑みをわずかでも得ることができるのだろうか。つかの間の楽しみで、心の隠し切れない空しさを真に覆うことができるのだろうか。自分の家族なら騙せるかもしれないが、わたしを騙すことは到底できない。あなたは信仰が貧弱すぎるので、いのちが与える喜びを今

日まで見出すことができずにいるのだ。わたしはあなたに呼びかける、人生の半分を真心からわたしのために生きるほうが、人生のすべてを肉のため平凡に忙しく過ごし、耐え難い苦しみに耐えていくよりもましなのだと。自分自身をそれほど大事にして、わたしの刑罰から逃げて何になるのか。わたしの一時的な刑罰から隠れて、かわりに永遠の恥と永遠の刑罰を受けて何になるのか。わたしは実際、誰も強制的にわたしの旨に従わせはしない。誰かが真にわたしのすべての計画に従おうとするなら、その人を粗末には扱わない。しかしわたしはすべての人が、ヨブがわたしヤーウェを信じたように、わたしを信じることを要求する。あなたがたの信仰がトマスのそれを超えているなら、その信仰はわたしの称賛を得ることになり、あなたがたはその忠誠の中にわたしの至福を見出し、必ずや日々にはわたしの栄光を見出すだろう。しかしこの世を信じ、悪魔を信じる人々は、ソドムの町の人々のように心が頑なになっており、その目には砂粒が吹き込み、口には悪魔からの施し物を含んでいる。彼らの曇った心ははるか昔に、世界を強奪した邪悪なものに取り憑かれ、その考えはほぼすべてが古代の悪魔に捕われている。そのため人類の信仰は風に吹き飛ばされてしまい、人々はわたしの働きに気づくこともできずにいる。彼らははるか昔からサタンの毒に取り憑かれているため、ただわたしの働きにおざなりに対応したり、それを適当に分析したりすることを、わずかばかり試みるだけなのだ。

わたしは人類を征服する。彼らはわたしに創造され、さらにわたしの豊かな被造物を享受してきたからだ。しかし同時に彼らはわたしを拒絶しており、彼らの心にわたしはいない。彼らはわたしを人生への重荷とみなし、はっきりとわたしを見たにもかかわらずわたしを拒絶しており、頭を絞ってわたしを打ち負かすためのあらゆる方法を考えている。人々はわたしが彼らを真剣に扱ったり、厳格な要求を課したりすることを許さず、彼らの不義に対する裁きや刑罰を行うことも許さない。彼らはそのようなことに一切興味を持たず、むしろ苛立ちを抱く。そのためわたしの仕事は、わたしを食べ、飲み、満喫はするものの、わたしを知りはしない人類を打ち倒すことである。わたしは彼らの武器を取り上げてから、わたしの天使たちとわたしの栄光を伴って、わたしの住む場所へと帰る。人々の行動ははるか昔にわたしの心を打ち砕き、わたしの働きを粉々にしてしまったからだ。わたしは邪悪なものに奪い去られた栄光を取り戻してから、喜んで歩き去るつもりだ。そして人類にはそのまま生活を続けさせ、「平和で満足な生活と仕事」を続けさせ、「自分たちの畑を耕し」続けさせ、もう彼らの生活には干渉しない。だが今やわたしは、わたしの栄光を邪悪なものの手から完全に取り戻し、世界の創造のときに人間に付与した栄光をすべて取り返すつもりだ。そして二度と、それを地上の人間には授けない。人々はわたしの栄光を保ち損ねただけでなく、それをサタンの姿と引き換えにした

からだ。人々はわたしの到来を喜ばず、わたしの栄光の日々を尊びもしない。わたしの刑罰を喜んで受け入れることもなく、ましてやわたしの栄光をわたしに返す気などなく、邪悪なものの毒を捨て去る気もない。人間は常に昔ながらのやり方でわたしを騙し、昔ながらのやり方でいつも明るい微笑と幸せそうな表情を装っている。彼らはわたしの栄光が去った後に直面することになる暗闇の深さに気づいていないのだ。そしてとりわけ、わたしの日が全人類に訪れたとき、彼らの日々がノアの時代の人々のそれよりも一層厳しくなることに気づいていない。なぜなら彼らはわたしの栄光がイスラエルを去ったときの暗さがどれほどだったかを知らず、人は夜明けが訪れると、夜の暗闇をくぐり抜けることがいかに厳しかったかを忘れるからだ。そして太陽が再び隠れ、人の上に夜の帳が降りると、再び暗闇の中で悲嘆にくれ歯ぎしりする。あなたがたはわたしの栄光がイスラエルから去ったとき、イスラエル人たちがどれほどの苦難に耐えることになったかを忘れたのか。今はあなたがたがわたしの栄光を見るときであり、わたしとともに栄光の日を過ごすときでもある。わたしの栄光が汚れた地を去るとき、人は暗闇の中で嘆き悲しむだろう。今はわたしがわたしの働きを行う栄光の日であり、わたしが人類の苦しみを免除する日でもある。わたしが苦痛と辛苦のときを人類とともにすることはないからだ。わたしはただ人類を完全に征服し、人類の中の邪悪なものを根こそぎにすることを望んでいるのだ。

あなたは信仰について何を知っているか

人には信仰という不確かな言葉しかないが、人は信仰を構成しているものを知らないし、ましてやなぜ信仰を持っているのかもわからない。人はあまりに理解しておらず、欠けているものが多すぎる。わたしへの信仰も思慮がなく無知である。信仰とは何か、なぜわたしを信仰しているのか、人はわかっていないが、それでも執拗にわたしを信じ続けている。わたしが人に求めるのは、ただこのような形で執拗にわたしを呼び求めたり、気まぐれにわたしを信じたりすることではない。なぜなら、わたしが行う働きは、人がわたしを見て認識できるようにするためでも、人が新しい光の中で刮目し、わたしを見るようにするためでもないからである。わたしはかつて多くのしるしと不思議を顕し、多くの奇跡を行った。そして、当時のイスラエル人はわたしに大いなる賞賛を示し、病人を癒し悪魔を追い出すことのできるわたしの並外れた能力を大いに畏れた。当時、ユダヤ人は、わたしの癒しの力は見事で並外れていると思い、わたしの数多くの業のゆえに、誰もがわたしを崇め、わたしの力のすべてに大きな称賛の念を抱いた。よって、わたしが奇跡を行うのを見

た人はみな、わたしにしっかり付き従い、その結果、わたしが病人を癒すのを見るために何千人もの人たちがわたしを取り巻いた。わたしは非常に多くのしるしと不思議を示したが、人はただわたしを熟練した医師と見なすだけだった。そこで、わたしは当時の人たちに多くの教えも語ったが、彼らはわたしを弟子より優る教師としてしか見なさなかった。今日でさえ、人々はわたしの働きの歴史的な記録を見てきたのに、わたしは病人を癒す偉大な医師、無知な人たちの教師であると引き続き解釈しており、わたしのことを憐れみ深い主イエス・キリストだと定義している。聖書を解釈する人たちは、わたしの医術に優っていたかもしれないし、今や彼らの教師に優る弟子でさえあるかもしれないが、世界中に名が知られているそのような有名な人たちは、わたしのことをただの医師だと、あまりに低く考えている。わたしの行いは海岸の砂粒より数が多く、わたしの知恵はソロモンの全ての子孫を超えているのに、人はわたしのことをただの医師、あるいは人に教える無名の教師としてしか思っていない。何人もの人たちが、わたしが彼らを癒やすということだけを信じている。何人もの人たちが、わたしが自身の力で彼らの体から汚れた霊を追い出すということだけを信じている。そして何人もの人たちが、わたしから平安と喜びを受け取るということだけを単に信じている。何人もの人たちが、より多くの物質的富をわたしから要求するために、わたしを信じている。何人もの人たちが、平和にこの人生を生き、またこれから来る世で安全で穏やかに過ごすために、わたしを信じている。何人もの人たちが地獄の苦しみを避け、天国の祝福を受け取るためにわたしを信じている。何人もの人たちが一時的慰めのためだけにわたしを信じ、来世で何かを得ることなど求めずにいる。わたしが激しい怒りを人にもたらし、人がかつて持っていたすべての喜びと平安を押収したとき、人は疑い深くなった。わたしが人に地獄の苦しみを与え、天国の祝福を取り戻したとき、人の恥辱は怒りに変わった。人がわたしに癒してくれるように頼んだとき、わたしは彼を気にかけることもせず嫌悪を感じた。人は代わりに邪悪な医術や魔術という方法を求めてわたしから離れた。人がわたしに要求したもののすべてを取り除いたとき、誰もが跡形もなく消えた。ゆえに、わたしがあまりにも多くの恵みを与え、わたしから得るものがあまりにも多くあるので、人はわたしに信仰を持っていると言おう。ユダヤ人はわたしの恵みのゆえにわたしを信じ、わたしがどこへ行ってもついて来た。限られた知識と経験しかないこれらの無知な人たちは、わたしが顕したしるしと不思議を見ることばかり求めた。わたしのことを、最も偉大な奇跡を行うことができるユダヤ人の家長と見なしたのである。そのため、わたしが人から悪魔を追い出したとき、彼らのあいだで多数の議論が巻き起こった。わたしはエリヤであるとか、モーセであるとか、すべての預言者たちの中で最も老齢な預言者であるとか、すべての医師

の中で最も偉大な医師であるとか、彼らは口にした。わたしがいのちであり、道であり、真理であるというわたし自身の言葉は別として、わたしという存在そのもの、あるいはわたしの身分を知り得た者は誰一人いなかった。わたしの父が住む場所は天であるというわたし自身の言葉は別として、わたしが神のひとり子であり、神自身でもあると知る者は誰一人いなかった。人類全員に贖いをもたらし、人類を贖い戻すというわたし自身の言葉は別として、わたしが人類の贖い主であることを知る者は誰一人おらず、人はわたしのことを、情け深く哀れみ深い人として知るだけだった。わたしがわたし自身のすべてを説明できることは別として、わたしを知り、わたしが生ける神のひとり子であると信じる者は誰一人いなかった。これがわたしに対する人々の信仰であり、このようにしてわたしを欺こうとしている。人はわたしのことをそのように見ているのに、どうしてわたしの証しをすることができようか。

人はわたしを信じているが、わたしのために証しをすることができず、わたしが自分のことを知らしめなければ、わたしの証しをすることができない。人々は、わたしが被造物やすべての聖人よりも優れていることしか見ず、わたしが人にはできない働きをするということしかわからない。そのため、ユダヤ人から現代の人々に至るまで、わたしの栄えある働きを見た人たちは、わたしに対して好奇心以上のものを抱かず、わたしを証しできる被造物は誰一人存在しない。わたしの父だけがわたしのために証しをし、すべての被造物のあいだにわたしのための道を作った。そうしていなければ、わたしがいかに働いたところで、人はわたしが創造主であることを決して知らなかったはずだ。と言うのも、人はわたしから取ることしか知らず、わたしの働きの結果としてわたしを信じているのではないからである。人がわたしのことを知っているのは、わたしに汚れがなく、罪が一つもないから、わたしが数多くの奥義を説明できるから、わたしが群衆に優っているから、あるいはわたしから多くの利益を受けたからに過ぎない。しかし、わたしが創造主であると信じる者はほとんどいない。だからこそ、人はわたしを信じる理由を知らない、わたしは言う。人はわたしを信じる目的や意義を知らないのである。人は現実に欠けており、わたしの証しをするのにほとんどふさわしくないほどである。あなたがたは真の信仰をごくわずかししか持っておらず、得たものも少なすぎ、そのため証しがほとんどない。そのうえ、あなたがたはあまりに理解しておらず、欠けているものも多すぎるので、わたしの業を証しする資格がほとんどない。あなたがたの決意は確かにすばらしいが、神の本質を見事に証しできると確信しているのか。あなたがたが経験したり見たりしたことは、あらゆる時代の聖者や預言者たちのそれに優っているが、あなたがたは過去の時代の聖者や預言者たちの言葉に優る証しができるの

か。わたしが今あなたがたに授けるものはモーセを超え、ダビデをしのぐ。だから同じように、あなたがたの証しがモーセに優り、あなたがたの言葉がダビデより偉大であるよう、わたしは求める。わたしはあなたがたに100倍与えるから、同じように、あなたがたが同じ分だけ返してくれるよう求める。わたしこそが人類にいのちを授ける者であり、わたしからいのちを受け取るのはあなたがたであって、わたしのために証しをしなければならないのだと、あなたがたはわからなければならない。それが、わたしがあなたがたに送り、わたしのためにしなければならないあなたがたの本分である。わたしはあなたがたにわたしの栄光をすべて授けてきたし、選民たるイスラエル人が決して受け取らなかったいのちをあなたがたに授けた。だから当然、あなたがたはわたしの証しを行い、自分の若さをわたしに捧げ、自分のいのちを差し出さなければならない。わたしが栄光を授ける者は、誰であってもわたしの証しを行い、わたしにいのちを捧げるのだ。これはわたしによって長らく予定されてきたことである。わたしがあなたがたに栄光を授けるのは、あなたがたにとって幸せなことであり、あなたがたの本分はわたしの栄光を証しすることである。祝福を得るためにだけわたしを信じているとしたら、わたしの働きはほとんど意味を持たないだろうし、あなたがたも自分の本分を果たしてはいないだろう。イスラエル人はわたしの憐れみ、愛、偉大さだけを見、ユダヤ人はわたしの忍耐と贖いしか証ししなかった。彼らはわたしの霊の働きのごくわずかしか見ておらず、そのため彼らの理解は、あなたがたが見聞きしたことのわずか10,000分の1に過ぎない。あなたがたが見たことは、彼らの中の祭司長さえ上回る。あなたがたが今日理解している真理は彼らの理解した真理を超えており、あなたがたが今日見てきたことは、律法の時代と恵みの時代に見られたことを超えている。そしてあなたがたが経験したことは、モーセやエリヤさえも上回っている。と言うのも、イスラエル人が理解したのはヤーウェの律法だけで、彼らが見たのはヤーウェの背中だけだったからである。ユダヤ人が理解したのはイエスの贖いだけであり、彼らが受け取ったのはイエスから授けられた恵みだけであり、彼らが見たのはユダヤ人の家の中のイエスの姿だけだったからである。あなたがたが今日見るものはヤーウェの栄光、イエスの贖い、そしてわたしによる今日の業のすべてである。そのためあなたがたは、わたしの霊の言葉も聞き、わたしの知恵に感謝し、わたしの不思議を知るようになり、そしてわたしの性質について学んだ。わたしはまた、あなたがたにわたしの経営計画のすべても話した。あなたがたが見たものは単に愛すべき慈悲深い神だけではなく、義に満ちた神でもある。あなたがたはわたしの不思議な働きを見てきたし、わたしが威厳と怒りで満ちていることも知った。さらに、わたしがかつて荒れ狂う激しい怒りをイスラエルの家にもたらし、そして今日、その怒りが自分たち

に降りかかったことも知っている。あなたがたは天なるわたしの奥義について、イザヤやヨハネよりも理解している。あなたがたはわたしの愛おしさと神聖さについて、過去の時代のすべての聖者よりも知っている。あなたがたが受け取ったのはわたしの真理、道、いのちだけではなく、ヨハネのそれに優るビジョンと啓示である。あなたがたはさらに多くの奥義を理解し、わたしの真の顔も拝した。あなたがたはわたしの裁きをさらに受け入れ、わたしの義なる性質もさらに知った。だから、あなたがたは終わりの日に生まれたけれども、あなたがたの理解は以前のものの、過去のものであり、また今日の物事も経験してきたが、それはすべてわたしが自らなしたことである。わたしはあなたがたに過度のものを求めているのではない。と言うのも、わたしはあなたがたに極めて多くのものを与え、あなたがたはわたしに多くのものを見たからである。だから、わたしはあなたがたに対し、過去の時代の聖者に向けて、わたしのために証しをするよう求める。そしてこれだけがわたしの心の願いである。

わたしのために初めて証しをしたのはわたしの父だったが、わたしはより大きな栄光と、被造物の口から出る証しの言葉を受け取ることを望む。だから、あなたがたが自分の本分を尽くし、人間のあいだにおけるわたしの働きを終わらせるために、わたしのすべてをあなたがたに与える。あなたがたはなぜわたしを信じているのか理解すべきである。もしあなたがたが、わたしの徒弟か患者になりたい、あるいはわたしの天なる聖者の一人になりたいとしか思っていないなら、わたしに付き従っても無意味である。そのような形でわたしに付き従っても単に精力の無駄だろう。そのような信仰をわたしに持つのは、単に自分の日々を無駄に過ごし、自分の青春を浪費しているだけである。そして最後に、あなたがたは何も受け取らないだろう。これは無駄な労力ではないだろうか。わたしははるか昔にユダヤ人のあいだから離れ、もはや人の医師でも、人の薬でもない。わたしはもはや、人が意のままに動かしたり、殺したりできる牛馬ではない。むしろ、人がわたしのことを認識できるよう、人を裁き、罰するために来たのである。あなたは知るべきである。わたしはかつて贖いの働きを行い、かつてはイエスだったが、永遠にイエスのままでいることはできない。かつてはヤーウェだったが、後にイエスとなったように。わたしは人類の神にして創造主だが、いつまでもイエスのまま、あるいはヤーウェのままでいることはできない。わたしは、人が医師と考える者だったが、神は人類の医師に過ぎないと言うことはできない。だから、わたしへの信仰において古い見方を抱くなら、あなたは何も達成しない。あなたが今日「神はなんと愛おしいお方か。神はわたしを癒し、祝福、平安、喜びを与えてくださる。神はなんと人に対して良きお方か。神を信じていれば、お金や富のことを心配する必要はない……」と言っ

て、どんなにわたしを賛美しても、わたしはやはり本来の働きを中断することはできない。今日わたしを信じているなら、あなたはわたしの栄光だけを受け取り、わたしの証しをする価値があり、他のことはすべて二の次となる。これこそ、あなたがはっきり知らなければならないことである。

さて、自分がわたしを信じているのはなぜか、あなたは本当に知っているだろうか。わたしの働きの目的と意義を本当に知っているだろうか。自分の本分を本当に知っているだろうか。わたしの証しを本当に知っているだろうか。単にわたしを信じるだけで、わたしの栄光も証しもあなたの中に見られないなら、わたしはとうの昔にあなたを淘汰していた。そのすべてを知っている者たちに関して言えば、彼らはわたしの目の中の棘でさえあり、わたしの家では躓きの石でしかない。彼らはわたしの働きにおいて完全に選り分けなければならない毒麦であり、役に立たず価値もないので、わたしは長らく彼らを忌み嫌ってきた。証しを失ったすべての者に、わたしの怒りはしばしば降り注ぎ、わたしの鞭が彼らから逸れることは決してない。わたしはずっと以前に彼らを悪しき者の手に渡し、彼らはわたしの祝福を失った。その日になれば、彼らの刑罰は愚かな女たちのそれをも上回るほど痛ましいものになる。今日、わたしは自分のなすべき本分である働きしかしていない。わたしはすべての麦を毒麦と共に縛り、束にする。これが今日におけるわたしの働きである。それらの毒麦はわたしが選り分けているあいだにすべて選別され、麦粒は倉庫に集められ、選り分けられた毒麦は火の中で燃やされ灰となる。わたしの今の働きはすべての人を縛って束にすることに過ぎず、つまり彼らを完全に征服する働きである。それからわたしは選別を始め、すべての人の結末を明らかにする。だから、今わたしをいかに満足させ、わたしへの信仰の正しい道をどう整えるべきかを、あなたは知る必要がある。わたしが望むのは、あなたの今の忠誠と服従、あなたの今の愛と証しである。たとえ証しとは何か、愛とは何かをこの瞬間知らなくても、あなたは自分のすべてをわたしに差し出し、あなたが持っている唯一の宝物、つまりあなたの忠誠と服従をわたしに引き渡すべきである。わたしがサタンを打ち負かした証しは、人の忠誠と従順に見ることができ、わたしが人を完全に征服した証しもそうであることを、あなたは知るべきである。あなたの信仰における本分は、わたしにのみ忠実であること、最後まで従順であることである。わたしが働きの次なる段階を始める前に、あなたはわたしのためにどう証しをするのか。いかにしてわたしに忠誠を捧げ、服従するのか。あなたは自分の役割のためにすべての忠誠心を捧げるのか、それとも単にあきらめるのか。または、わたしのすべての采配（たとえそれが死であっても、あるいは滅びであっても）に服従するのか、それともわたしの刑罰を避けるために途中で逃げ出すのか。わたしがあなたを罰するのは、あなた

がわたしのために証しを行い、忠誠を尽くしてわたしに服従するためである。さらに、現在の刑罰は、わたしの働きの次なる段階を明らかにし、働きを何の妨害もなく進展させるためのものである。よって、あなたが賢くなり、自分のいのちや存在意義を価値のない砂のように扱わないよう、わたしはあなたに勧告する。今後のわたしの働きがいったいどのようなものになるか、あなたは知っているのか。わたしが今後どのように働き、わたしの働きがどのように展開していくのか、あなたは知っているのか。わたしの働きに関する自分の経験の意義、さらにわたしに対する信仰の意義を、あなたは知らなければならない。わたしは多くのことを行ってきた。あなたが想像するように、どうして途中で諦めることができようか。わたしはかくも幅広い働きをなしてきた。どうしてそれを台無しにすることができようか。確かに、わたしはこの時代を終わらせるために来た。それは事実だが、それ以上に、わたしは新しい時代を始め、新たな働きに取りかかり、そして何より、神の国の福音を広めようとしていることを、あなたは知らなければならない。ゆえに、現在の働きは時代を始め、来たるべき時に福音を広め、将来のどこかで時代を終わらせるための基盤を築くことだけであると、あなたは知らなければならない。わたしの働きはあなたが思うほど単純ではないし、あなたが信じているほど価値がなく意味のないものでもない。だから、わたしは依然としてあなたに言わなければならない。あなたはわたしの働きのためにいのちを捧げ、それ以上に、わたしの栄光のために自分自身を捧げるべきである。あなたがわたしのために証しをすることを、わたしは長いこと待ち望み、またそれ以上に長く、あなたがわたしの福音を宣べ伝えるのを待ち望んできた。あなたはわたしの心にあるものを理解すべきである。

落ち葉が土に還る時、 あなたは自分の行なったあらゆる悪事を後悔する

あなたがたはみな、わたしがあなたがたの間で行なった働きを自らの目で見、わたしが語った言葉に自ら耳を傾け、あなたがたに対するわたしの態度も知っている。ならば、わたしがこの働きをあなたがたにおいて行なっている理由も知っているはずである。あなたがたに正直に話す。あなたがたは、終わりの日におけるわたしの征服の働きの道具、異邦の諸国にわたしの働きを広げるための手段に過ぎない。わたしの働きをさらに発展させ、わたしの名が異邦の諸国、つまりイスラエル以外のすべての諸国へさらに広まるように、わたしはあなたがたの不義、汚れ、抵抗、反抗を通じて語るのである。それは、わたしの名、わたしの行ない、わたしの声が異邦の諸国にくまなく広まり、それによりイスラエルではないそれらの諸国が

すべてわたしに征服され、わたしを崇拜し、イスラエルとエジプトの地の外にあるわたしの聖地となるためである。わたしの働きを広げるのは、実際にはわたしの征服の働きを広げ、わたしの聖地を広げることである。わたしの地上における足場を広げることである。あなたがたは、自分たちがわたしによって征服される異邦の諸国の被造物に過ぎないことを明確に知っておくべきである。本来、あなたがたには何の身分も利用価値もなく、まったく無用の存在だった。あなたがたが幸運にもわたしと接し、今わたしと集っているのは、わたしが糞の山から蛆虫を引き上げ、わたしの全地征服の見本、わたしの全地征服に関する唯一の「参考資料」としたからに他ならない。あなたがたの身分の低さゆえに、わたしはあなたがたを選び、わたしの征服の働きの見本、およびそのひな形とした。わたしがあなたがたの間にあって働きを行ない、語り、あなたがたと暮らして留まっているのは、ひとえにそのためである。わたしがあなたがたの間にあって語っているのは、ただわたしの経営のため、また糞の山の蛆虫に対するわたしの嫌悪のためであることを、あなたがたは知るべきである。この嫌悪は憤りを感じるころまで達している。わたしがあなたがたの間にあって働いているのは、ヤーウェがイスラエルで働いたのとはまったく違い、また特に、イエスがユダヤで行なった働きとは違っている。わたしは非常な忍耐をもって語り、働き、怒りとともに裁きをもってこれらの墮落した者たちを征服する。それはヤーウェが自身の民をイスラエルで導いたのとはまったく違う。イスラエルにおけるヤーウェの働きは、食べ物と生ける水を授けることであり、民に施している間、ヤーウェは民への憐れみと愛に満ちていた。今日の働きは、選民ではない呪われた民族のもとで行なわれる。食べ物は豊富になく、渴きを鎮める生ける水の糧もなく、十分な物質の供給はなおさらない。裁き、呪い、刑罰の供給が十分にあるだけである。糞の山に生きるこれらの蛆虫には、わたしがイスラエルに与えたような、山を埋め尽くす牛や羊、巨大な富、そして地上で最も美しい子供らを得られるだけの価値は絶対がない。当時のイスラエルは、わたしがその民を養う牛や羊、金銀の品を祭壇に捧げており、その数は律法の下でヤーウェによって定められた十分の一よりも多い。そこでわたしは彼らにさらに多く、律法の下でイスラエルが得るはずの百倍以上を与えた。わたしがイスラエルを養うものは、アブラハムが得たものすべてと、イサクが得たものすべてを超える。わたしはイスラエルの家族を多産にして増やし、わたしのイスラエルの民を地のあらゆるところに広める。わたしが祝福し労るのは、やはりイスラエルの選民、つまり、わたしにすべてを捧げ、わたしからすべてを得た民である。彼らはわたしを心に留めているので、わたしの聖なる祭壇に生まれたての子牛と子羊を生贄として捧げ、わたしの前に持てるすべてを捧げた上に、わたしの再臨を心待ちにして生まれたての長男をも捧げるの

である。さて、あなたがたはどうか。あなたがたはわたしの怒りを呼び起こし、わたしに要求し、わたしに捧げものをする人の生贄を盗むが、わたしに背いていることを知らない。ゆえに、あなたがたが得るのは暗黒の中での嘆きと懲罰だけである。あなたがたは何度もわたしの怒りを呼び起こし、わたしは燃え盛る火を降らせ、それは多くの者が悲劇的な結末を迎え、幸福な家庭が荒れ果てた墓となるほどだった。そうした蛆虫に対し、わたしには終わりのない怒りしかなく、彼らを祝福する気はまったくない。わたしが例外としてあなたがたを引き上げ、大いなる屈辱に耐えてあなたがたの間で働いてきたのは、ひとえにわたしの働きのためである。わたしの父の旨のためでなければ、どうして糞の山の中で転げまわる蛆虫と同じ家で暮らせようか。わたしはあなたがたのあらゆる行ないや言葉に極めて嫌悪を感じるが、いずれにせよあなたがたの汚れと反抗に多少の「関心」があるため、それはわたしの言葉の偉大な集大成となった。さもないと、わたしは決してあなたがたの間にかくも長い間留まらなかっただろう。したがって、あなたがたに対するわたしの態度は同情と憐れみでしかないことをあなたがたは知るべきである。つまり、わたしはあなたがたに対してわずかな愛も抱いていない。あなたがたに対して抱くのは忍耐だけである。なぜなら、わたしはただ自分の働きのためにそうするからである。そして、あなたがたにわたしの業が見えたのは、わたしが汚れと反抗を「原材料」として選んだからに過ぎない。さもないと、こうした蛆虫どもにわたしの業を見せることは決してない。わたしは嫌々ながらあなたがたにおいて働いているだけであり、進んでイスラエルで働きを行なったのとはまったく違う。わたしは怒りを抱きつつ、あなたがたの間で語ることを自分に強いているのである。さらに偉大なわたしの働きのためでなければ、そうした蛆虫を見続けることにどうして耐えられようか。わたしの名のためでなければ、とうの昔に最高の高みに昇り、それらの蛆虫を糞の山とともに完全に焼き尽くしていただろう。わたしの栄光のためでなければ、邪悪な悪魔がわたしの目前で頭を揺らしながらわたしに公然と反抗するのを、どうして許せるだろうか。わたしの働きが一切妨害されることなく円滑に実行されるためでなかったら、蛆虫のようなこれらの者たちが気の向くままにわたしを虐待するのを、どうして許せるだろうか。もしイスラエルの村で百人の民がそのように立ち上がり、わたしに反抗したなら、たとえ彼らがわたしに生贄を捧げたとしても、彼らを跡形もなく地の割れ目へ投げ捨て、他の町の住民が二度と抵抗しないようにするだろう。わたしはすべてを焼き尽くす火であり、背きを許さない。人間はすべてわたしが造ったのだから、わたしが何を言い何を行なおうと、人間は従わなければならない、抵抗してはならない。人はわたしの働きに干渉する権利をもたず、ましてやわたしの働きや言葉の何が正しく何が間違っているかを分析する資格

などない。わたしは創造主であり、被造物はわたしへの畏敬の念をもって、わたしが求めるすべてのことを成し遂げるべきである。また、わたしに理を説こうとしてはならず、抵抗などなおさらするべきではない。わたしは権威をもって我が民を統べるのであり、わたしの創造の一部を成す者はすべてわたしの権威に従うべきである。今日、あなたがたはわたしの前にあって大胆で厚かましく、わたしがあなたがたを教えるのに用いる言葉に従わず、恐れを知らない。それなのに、わたしはあなたがたの反抗にただ耐えているだけである。取るに足らない小さな蛆虫が糞の山で汚物を掘り返しているからといって、わたしは腹を立てて働きに影響を及ぼすようなことはしない。わたしは父の旨のために、忌み嫌うすべてのものが存在し続けるのに耐える。わたしの発言が完了するまで、わたしの最後の瞬間までそうするのである。心配することはない。わたしは名もない蛆虫と同じ程度に成り下がることはできず、わたしの技量をあなたと比べることはない。わたしはあなたを心から嫌うが、耐えることができる。あなたはわたしに従わないが、わたしがあなたに刑罰を与える日から逃れることはできない。それはわたしの父がわたしに約束した日なのである。創造された蛆虫が、創造主に匹敵することなどあり得るのか。秋になれば、落ち葉は土に還る。あなたは「父」の家に帰り、わたしは父の傍らに戻る。わたしは父の優しい愛に伴われ、あなたは自分の父に踏みにじられる。わたしは父の栄光を手にし、あなたは自分の父の辱めを受ける。わたしは長らく控えてきた刑罰を用いてあなたに伴い、あなたは何万年間も腐敗したままの悪臭を放つ肉体をもってわたしの刑罰を受ける。わたしは忍耐を伴った言葉の働きをあなたにおいて終え、あなたはわたしの言葉による災いに苦しむ役割を果たし始める。わたしはイスラエルで大いに喜び、働くが、あなたは悲嘆にくれて歯噛みをし、泥の中に生きて死ぬ。わたしは元の姿に戻り、もはやあなたと共に汚れの中に留まることはない。しかし、あなたは元の醜い姿に戻り、糞の山の中でうごめき続ける。わたしの働きと言葉が完了する時は、わたしにとっての喜びの日となる。あなたの抵抗と反抗が終わる時は、あなたにとっての悲嘆の日となる。わたしはあなたに同情せず、あなたは二度とわたしを見ない。わたしはそれ以上あなたと対話せず、あなたは二度とわたしに出会わない。わたしはあなたの反抗を憎み、あなたはわたしの愛らしさを恋しく思う。わたしはあなたを打ち、あなたはわたしのことを思い焦がれる。わたしは喜んであなたから離れ、あなたはわたしへの負い目に気づく。わたしはあなたに二度と会わないが、あなたは常にわたしを待ち望む。あなたが今わたしに抵抗するので、わたしはあなたを憎むが、わたしが今あなたに刑罰を与えるので、あなたはわたしを恋しく思う。わたしは進んであなたと共に生きようとは思わないが、あなたは自分がわたしにしたすべてのことを悔やむがゆえに、わたしと共に生きるこ

とを激しく切望し、永遠に悲嘆にくれる。あなたは自分の抵抗と反抗を後悔し、悔悟のあまり顔を地に伏せ、わたしの前に倒れ、二度とわたしに逆らわないと誓う。しかし、あなたは心の中でわたしを愛するだけで、わたしの声を聞くことは二度とできない。わたしはあなたを恥じ入らせる。

わたしは今、わたしを騙そうとするあなたの放縦な肉体を見つめており、刑罰をもってあなたに「奉仕する」ことはないが、小さな警告だけしておく。あなたはわたしの働きにおける自分の役割が何であるかを知るべきである。そうすれば、わたしは満足する。これ以外の事柄に関しては、あなたがわたしに抵抗したり、わたしの金銭を費やしたり、わたしヤーウェへの捧げものを食べたりしても、あるいはあなたがた蛆虫が互いに噛みつき合ったり、犬のような被造物であるあなたがたの間に対立や暴行が起こったりしても、わたしには一切無関係である。あなたがたはただ自分がどのようなものであるかを知ればよく、それでわたしは満足する。こうしたことを除けば、あなたがたが互いに武器を向け合ったり、言葉で争い合ったりしても、それは構わない。わたしはそうしたことに一切干渉したくないし、人間の問題に一切関わらない。あなたがたの間の紛争を気に掛けないわけではないが、わたしはあなたがたのうちの一人ではなく、そのためあなたがたの間の問題には加わらないのである。わたし自身は被造物ではなく、この世に属さない。だからわたしは人の騒々しい生活や、乱雑で不適切な人間関係を心から嫌うのである。わたしは騒々しい群衆を特に忌み嫌う。しかし、わたしはそれぞれの被造物の心にある不純を深く知っており、あなたがたを創造する前から、人間の心の奥深くに存在する不義をすでに知っており、人間の心にある偽りと不正もすべて知っていた。そのため、人が不義を行なう時にその痕跡が一切なくとも、あなたがたの心に潜んでいる不義が、わたしが創造したすべてのものの豊かさを超えることもやはり知っているのである。あなたがた一人ひとは、群衆の頂点に昇りつめた。あなたがたは昇りつめて群衆の祖先となった。あなたがたは極めて身勝手であり、蛆虫の間で暴れまわりながら、安らぎの場所を求め、自分よりも小さい蛆虫を貪ろうとしている。あなたがたの心は悪意に満ちて邪悪で、それは海底に沈んだ幽霊さえも超えるほどである。あなたがたは糞の底に住み、蛆虫を上から下まで邪魔して落ち着かせておかないほどで、争い合っているかと思えば静かになっている。あなたがたは自分の地位を知らないが、それでも糞の中で争い合う。そのような争いから何が得られるのか。あなたがたにわたしを真に畏敬する心があるならば、わたしの陰でどうして争い合うことができようか。身分がどれほど高くても、あなたはやはり糞の中にいる小さな臭い虫ではないのか。羽を生やして空を翔ける鳩になることができようか。小さな臭い虫であるあなたがたは、わたし、ヤーウェの祭壇から捧げものを盗む。

そうすることで、ぼろぼろになって衰えた自分の評判を回復させ、イスラエルの選民になることができるのか。あなたがたは恥知らずの哀れな存在である。祭壇の捧げものは人々がわたしに献上したのであり、わたしを畏敬する人々のやさしい感情を表わしている。それはわたしが支配するため、わたしが用いるためであるのに、人々がわたしに捧げた小さなキジバトをどうしてわたしから奪うことができるのか。あなたはユダになることを恐れないのか。あなたの地が血に染まった荒野となることを恐れないのか。恥知らずな者よ。人々が捧げたキジバトが蛆虫であるあなたの腹を養うためのものだと思っているのか。わたしがあなたに与えたものは、わたしが喜んで、かつ進んで与えたものである。わたしがあなたに与えなかったものは、わたしが好きにできる。あなたはわたしへの捧げものを決して盗んではならない。働く者はわたし、ヤーウェ、すなわち創造主であり、人々が生贄を捧げるのはわたしのためである。それをあなたは、あくせく動き回る自分への報酬だと思っているのか。本当に恥知らずである。あなたが動き回るのは、誰のためなのか。自分のためではないか。なぜわたしへの捧げものを盗むのか。なぜわたしの金袋から金を盗むのか。あなたはイスカリオテのユダの息子ではないのか。わたし、ヤーウェへの捧げものは、祭司が享受するべきものである。あなたは祭司なのか。あなたは厚かましくもわたしへの捧げものを食べ、卓上に並べさえする。あなたには何の価値もない。何の価値もない、哀れな存在である。わたしの火、ヤーウェの火はあなたを燃え尽くして灰にする。

血肉に属する者は誰も怒りの日から逃れられない

今日、わたしは、あなたがた自身の生存のために、あなたがたに警告する。それは、わたしの働きが順調に進み、全宇宙でわたしの幕開けの働きがより適切に、より完全に遂行されるようにし、そうしてすべての国と民族の人々に、わたしの言葉、権威、威厳、裁きを明かすためである。あなたがたのあいだでわたしが行う働きは、全宇宙に及ぶわたしの働きの始まりである。今はすでに終わりの日の時だが、「終わりの日」とは一つの時代の名称に過ぎないことを知りなさい。それは律法の時代や恵みの時代とまったく同じように、一つの時代を指しており、最後の数年間や数カ月ではなく、むしろその時代全体を示している。ただし、終わりの日は、恵みの時代や律法の時代とまったく異なる。終わりの日の働きは、イスラエルで実行されるのではなく、異邦人のあいだで実行される。それは、わたしの玉座の前での、イスラエル以外のすべての国と民族の征服であり、これにより全宇宙に及ぶわたしの栄光が、宇宙と天空に満ちるのである。またそれは、わたしがさらに大

きな栄光を得て、地のすべての被造物が、とこしえに世代を超えて、すべての国にわたしの栄光を伝え、天と地のすべての被造物が、わたしが地上で得たすべての栄光を見られるようにするためである。終わりの日に実行される働きは、征服の働きである。これは地上のすべての人の生活を導くことではなく、途絶えることなく数千年続いた、地上における人類の苦難の生活を終わらせることである。そのため、終わりの日の働きは、イスラエルでの数千年にわたる働きとは異なるものであり、またユダヤの地でのわずか数年間の働きでありながら、神の第二の受肉まで二千年続いた働きとも違う。終わりの日の人々が出会うのは、肉となった贖い主の再臨だけであり、彼らは神自身による働きと言葉を受け取る。終わりの日が終結するまでに二千年はかからない。イエスがユダヤの地で恵みの時代の働きを行ったときと同様、終わりの日は短い。これは、終わりの日が時代全体の締めくくりだからである。それは六千年にわたる神の経営計画の完了と終結であって、これによって苦しみで満ちた人類の人生の旅路が終わる。終わりの日は、人類全体を新たな時代へ連れて行くものでも、人類の生活を継続させるものでもない。それは、わたしの経営計画や人間の生存にとって何の意味もない。人類がこのようなあり続けるなら、遅かれ早かれ悪魔によって完全に食い尽くされ、わたしに属する魂は最終的に悪魔の手で滅ぼされるだろう。わたしの働きは六千年しか続かない。そしてわたしは、悪しき者による全人類の支配も六千年より長くは続かないと約束した。それゆえ、その時はもう来ている。わたしはこれ以上続けたり遅らせたりはしない。終わりの日、わたしはサタンを打ち負かし、わたしの栄光をすべて取り戻し、わたしに属する地上のすべての魂を取り戻して、これらの苦悩する魂が苦しみの海から逃れられるようにする。これにより、地上におけるわたしの働きがすべて完了するのである。これより後、わたしが地上で再び受肉することは決してなく、すべてを支配するわたしの霊が地上で働くことも二度とない。わたしが地上で行うのはただひとつ、つまり人類を創り直すことであり、それは聖なる人類、そして地上におけるわたしの忠実な都である。しかし、わたしが世界全体を滅ぼしたり、人類全体を滅ぼしたりすることはないと知りなさい。わたしは人類のうち、残りの三分の一、すなわちわたしを愛し、わたしによって完全に征服された三分の一を保ち、イスラエル人が律法の下でそうであったように、この三分の一を、数多くの羊と家畜、そして地のあらゆる豊かさでもって育み、そうして繁栄させる。この人類はわたしのもとに永遠に留まるが、それは現在のどうしようもなく汚れた人類ではなく、わたしに得られたすべての人の集まりとしての人類である。このような人類はサタンによって傷つけられることも、混乱させられることも、また包囲されることもなく、わたしがサタンに勝利した後も地上に存在する唯一の人類となる。それは今日わたしに

征服され、わたしの約束を得た人類である。それゆえ、終わりの日に征服された人類は、滅びを免れ、わたしのとこしえなる恵みを受ける人類でもある。これはサタンに対するわたしの勝利の唯一の証拠であり、サタンとの戦いの唯一の戦利品である。これらの戦利品は、サタンの支配下からわたしによって救われたのであり、六千年にわたるわたしの経営計画の唯一の結晶であり、またその果実である。彼らはあらゆる民族や教派の出身であり、また全宇宙のあらゆる場所と国から来る。彼らはさまざまな人種に属し、言語、風習、肌の色もそれぞれ異なっており、地球のあらゆる民族と教派、そして世界の隅々にまで広がっている。最終的に、彼らは完全な人類、サタンの勢力が及ばない人間の集団を形成するために集まって来る。人類のうち、わたしによって救われず、征服されなかった者たちは、深海の底へと音もなく沈み、わたしの焼き尽くす火によって永遠に焼かれる。わたしは、エジプトの長子たちと牛を滅ぼした際、子羊の肉を食べ、子羊の血を飲み、鴨居に子羊の血を塗ったイスラエル人だけを残したが、その時と同じように、極めて汚れたこの古い人類を滅ぼす。わたしに征服され、わたしの家族である人々もまた、わたしという子羊の肉を食べ、わたしという子羊の血を飲み、わたしによって贖われ、わたしを崇めてきた人々ではないのか。このような人々には、わたしの栄光が常に伴っているのではないのか。わたしという子羊の肉を持たない者はすでに、深海の底へと音もなく沈んだのではないのか。今日、あなたがたはわたしに逆らっている。そして今日、わたしの言葉は、ちょうどヤーウェがイスラエルの子や孫たちに語った言葉のようである。しかしながら、あなたがたの心の奥底には頑固さがあり、そのせいでわたしの怒りが溜まり、あなたがたの肉体にさらなる苦しみをもたらし、あなたがたの罪にさらなる裁きをもたらし、あなたがたの不義にさらなる怒りをもたらししている。今日あなたがたが、わたしをこのように扱うなら、誰がわたしの怒りの日に滅びを免れようか。わたしの刑罰の目を、誰の不義が逃れられようか。全能者であるわたしの手を、誰の罪が避けられようか。全能者であるわたしの裁きを、誰の反逆が逃れられようか。わたしヤーウェは、異邦人の家族の子孫であるあなたがたにこう語り、わたしがあなたがたに語る言葉は、律法の時代と恵みの時代のすべての言葉を超越する。しかしあなたがたは、エジプトのあらゆる民よりもさらに頑なである。わたしが穏やかに働いているあいだに、あなたがたはわたしの怒りを蓄えているのではないのか。全能者であるわたしの日から、どうしてあなたがたが無事に逃れられようか。

わたしはこのようにあなたがたのあいだで働き、語ってきた。わたしは多くの精力と努力を費やしてきたが、あなたがたは、わたしがはっきりと語った言葉にいつ耳を傾けたのか。全能者であるわたしにどこでひれ伏したのか。なぜわたしをこの

ように扱うのか。あなたがたのあらゆる言動がわたしの怒りを呼び起こすのはなぜか。あなたがたの心がかくも頑固なのはなぜか。わたしがあなたがたを打ち倒したことはあるか。なぜあなたがたはわたしを悲しませ、心配させることしかしないのか。あなたがたは、わたしヤーウェの怒りの日が自分たちに臨むのを待っているのか。自分たちの不服従によって呼び起こされた怒りを、わたしが降り注ぐのを待っているのか。わたしが行うすべてのことは、あなたがたのためではないのか。それなのに、あなたがたはいつもわたしヤーウェをこのように扱ってきた。つまり、わたしのいけにえを盗み、わたしの祭壇の捧げ物をオオカミのねぐらに持ち帰り、それでオオカミの子や孫を養っている。人々は互いに戦い、怒りに満ちたまなざしで、剣と槍を持って向かい合い、全能者であるわたしの言葉を便所に投げ込み、排泄物のように汚れたものになっている。あなたがたの人格はどこにあるのか。あなたがたの人間性は獣の性質になったのだ。あなたがたの心はずっと前から石になってしまっている。あなたがたは、わたしの怒りの日が来るときこそ、今日あなたがたが全能者であるわたしに対して行う悪を、わたしが裁く時であることを知らないのか。このようにわたしを騙し、わたしの言葉を沼に投げ込んで耳を傾けず、わたしの背後でこのように振る舞うことで、わたしの怒りの目を逃れられると思うのか。あなたがたがわたしのいけにえを盗み、わたしの持つものをむやみに欲しがったとき、わたしヤーウェの目によってすでに見られていたことを知らないのか。あなたがたがわたしのいけにえを盗んだとき、いけにえが捧げられる祭壇の前でそうしてしまったことを知らないのか。このようにわたしを騙せるほど、自分たちが賢いなどどうして思えるのか。あなたがたの凶悪な罪から、どうしてわたしの怒りが去るだろうか。わたしの燃える怒りが、どうしてあなたがたの悪行を行き過ぎようか。あなたがたが今日行う悪が、あなたがたに逃げ道を開くことはなく、あなたがたの明日に向けて刑罰を積み上げる。それは、あなたがたに対して、全能者であるわたしの刑罰を引き起こす。あなたがたの悪行と悪しき言葉が、どうしてわたしの刑罰から逃れられようか。あなたがたの祈りが、どうしてわたしの耳に届こうか。あなたがたの不義に対し、どうしてわたしが逃げ道を用意しようか。わたしに逆らって行われるあなたがたの悪行を、どうしてそのままにしておけようか。へびの舌と同じくらい毒に満ちたあなたがたの舌を、どうして切らずにいられようか。あなたがたは自分の義のためにわたしを呼び求めるのではなく、自分の不義の結果として、わたしの怒りを積み上げている。どうしてわたしがあなたがたを赦せようか。全能者であるわたしの目に、あなたがたの言動は汚れたものとして映っている。全能者であるわたしの目は、あなたがたの不義を容赦ない刑罰と見なしている。わたしの義なる刑罰と裁きが、どうしてあなたがたから離れようか。あなたがたがわた

しにこのようなことをして、わたしを悲しませ、怒らせているのに、どうしてあなたがたをわたしの手から逃れさせ、わたしヤーウェがあなたがたを罰して呪う日から離れさせようか。あなたがたの悪しき言葉や発言のすべてが、すでにわたしの耳に届いていることを知らないのか。あなたがたの不義が、すでにわたしの聖なる義の衣を汚したことを知らないのか。あなたがたの不従順が、すでにわたしの激しい怒りを呼び起こしたことを知らないのか。あなたがたがわたしを長きにわたり、怒りに煮えくり返るがままに放置し、わたしの忍耐をずっと試してきたことを知らないのか。あなたがたがわたしの肉をすでに傷つけ、ぼろきれのようにしてしまったことを知らないのか。わたしはこれまで我慢してきたが、今後は怒りを解き放ち、あなたがたをこれ以上容赦しない。あなたがたの悪行がすでにわたしの目に届き、わたしの叫びがすでにわたしの父の耳に届いていることを知らないのか。あなたがたがわたしをこのように扱うことを、わたしの父がどうして許すだろうか。わたしがあなたがたにおいて行う働きは、どれもあなたがたのためではないのか。それなのに、あなたがたの中の誰が、わたしヤーウェの働きをさらに愛するようになったのか。わたしが弱いからといって、またわたしが苦しみを被ったからといって、わたしが父の旨に忠実でないことなどあり得ようか。あなたがたにはわたしの心が理解できないのか。わたしはヤーウェと同じようにあなたがたに語る。わたしはあなたがたのために多くを捧げてきたではないか。わたしは父の働きのためにこの苦しみのすべてに喜んで耐えるけれども、わたしの苦しみの結果としてあなたがたの上にもたらず刑罰を、あなたがたがどうして免れようか。あなたがたはわたしの多くを享受してきたではないか。今日、わたしは、わたしの父によってあなたがたに授けられた。あなたがたは、わたしの豊富な言葉よりもはるかに多くのものを、自分が享受していることを知らないのか。わたしのいのちが、あなたがたのいのち、それにあなたがたが享受するものと引き換えられたことを知らないのか。わたしの父がサタンと戦うためにわたしのいのちを使ったこと、またわたしのいのちをあなたがたに授け、あなたがたが百倍のものを受け取り、多くの誘惑を避けられるようにしたことを知らないのか。あなたがたが多くの誘惑と、多くの火の刑罰を免れたのは、ひとえにわたしの働きによるものだということを知らないのか。わたしの父が今まであなたがたに享受させてきたのは、ひとえにわたしの故だということを知らないのか。あなたがたは今日、まるで心を鈍らせてしまったかのように、どうしてかくも頑なで、強情なままなのか。あなたがたの今日犯す罪が、わたしが地上から去った後に来る怒りの日から、どうして逃れられようか。かくも頑なで強情な者たちを、どうしてわたしがヤーウェの怒りから逃れさせようか。

過去を振り返ってみなさい。あなたがたに対して、いつわたしの目が怒りに満ち

ており、いつわたしの声が厳しかったか。いつわたしがあなたがたに些細なことを言い立てたか。いつわたしがあなたがたを理不尽に叱責したか。いつわたしがあなたがたを面と向かって叱責したか。わたしが父を呼び、あなたがたをあらゆる誘惑から守るよう求めたのは、わたしの働きのためではないのか。なぜあなたがたは、わたしをこのように扱うのか。あなたがたの肉体を打ち倒すために、わたしが自分の権威を使ったことがあるというのか。なぜあなたがたはそのような形でわたしに報いるのか。わたしに対する態度をころころ変えた後、あなたがたはどっちつかずで、やがてわたしを騙し、わたしから物事を隠そうとする。そして、あなたがたの口は不義の唾液で満ちている。あなたがたは自分の舌でわたしの霊を欺けると思うのか。自分の舌がわたしの怒りを逃れられると思うのか。あなたがたは、自分の舌が思いのままに、わたしヤーウェの業を批判してもよいと思うのか。わたしは人から批判される神なのか。小さな蛆虫がこのようにわたしを冒瀆するのを、わたしがどうして許せようか。このような不従順の子らを、どうしてわたしの永遠の祝福の中に置けようか。あなたがたは、自分の言動によってずっと以前から暴かれ、断罪されてきた。天を拡げて万物を創造したとき、わたしはどの被造物に対しても、思いのままに介入することを許さず、ましてや、いかに望もうと、何ものにもわたしの働きと経営を妨げさせたりなどしなかった。わたしはいかなる人や物も容赦しなかったのだ。わたしに対して残虐で非人道的な者を、どうして見逃せようか。わたしの言葉に逆らう者をどうして赦せようか。わたしに対して不従順な者をどうして見逃せようか。人間の運命は全能者であるわたしの手の中にあるのではないか。あなたの不義と不服従は聖なるものだと、どうしてわたしが考えようか。あなたの罪がどうしてわたしの聖さを汚せようか。わたしは不義の不純物によって汚されることはなく、不義なる者の捧げ物を享受することもない。あなたがわたしヤーウェに忠実であるのなら、わたしの祭壇のいけにえを我が物にすることなどできるだろうか。あなたは毒のある舌を使って、わたしの聖なる名を冒瀆できるというのか。このような形でわたしの言葉に反逆できるというのか。わたしの栄光と聖なる名を、悪しき者であるサタンに仕える道具として扱えるというのか。わたしのいのちは聖なる者たちに享受させるべく施された。あなたが自分の思いのままにわたしのいのちをもてあそび、それを自分たち同士の争いの道具として使うのを、どうしてわたしが許せようか。善への道において、そしてわたしに対する態度において、どうしてあなたがたはかくも無慈悲で欠点が多いのか。わたしがこれらのいのちの言葉に、あなたがたの悪行をすでに書きつけたことを知らないのか。わたしがエジプトを罰する怒りの日から、あなたがたがどうして逃れられようか。あなたがたがこのように何度もわたしに敵対して反逆することを、どうしてわたしが許せようか。

はっきり言うが、その日が来ると、あなたがたへの刑罰は、エジプトのそれよりも耐えがたいものになる。わたしの怒りの日をどうして逃れられようか。まことにわたしは言う。わたしの忍耐はあなたがたの悪行のために用意されたのであり、その日のあなたがたの刑罰のために存在する。ひとたびわたしが忍耐の限界に達したら、怒りの裁きに苦しむのはあなたがたではないのか。すべてのことは全能者であるわたしの手の中にあるのではないか。天の下であなたがたがわたしに対してこのように逆らうのを、どうして許すことができようか。あなたがたの人生は極めて困難なものになる。なぜなら、来ると言われていながら来なかったメシアに出会ったからだ。あなたがたは彼の敵ではないのか。イエスはあなたがたの友だったが、あなたがたはメシアの敵である。自分たちがイエスの友であるにもかかわらず、自分たちの悪行が忌まわしき者たちの器を満たしたことを、あなたがたは知らないのか。あなたがたがヤーウェと非常に親しくても、自分たちの悪しき言葉がヤーウェの耳に届き、ヤーウェの怒りを招いたことを、あなたがたは知らないのか。どうしてヤーウェがあなたと親しくなれようか。悪行で満たされたあなたの器を、どうしてヤーウェが焼かずにいられようか。どうしてヤーウェがあなたの敵とならずにいられようか。

救い主はすでに「白い雲」に乗って戻ってきた

数千年ものあいだ、人は救い主の到来を目の当たりにできることを熱望してきた。何千年にもわたって救い主イエスを切望し、渴望してきた人々のもとに、救い主イエスが白い雲に乗って自ら降臨するのを見たいと望んできたのだ。人はまた、救い主が戻ってきて自分たちと再会すること、すなわち、数千年にわたって人々から離れていた救い主イエスが戻ってきて、ユダヤ人のあいだで行った贖いの働きをもう一度実行し、人に対して憐れみ深く愛情に溢れ、人の罪を赦し、人の罪を負い、人のすべての過ちさえも引き受け、人を罪から救うことを望んでいる。人が切望しているのは、救い主イエスが以前と変わらないことである。つまり、愛おしく、心優しく、尊敬すべき存在で、人に対して激怒したり、人を非難したりすることが決してなく、人の罪をすべて赦して引き受け、昔のように人のために十字架の上で死にさえする救い主であることを望んでいる。イエスが去って以来、彼に付き従った弟子たちや、イエスの名において救われたすべての聖者がイエスを必死に切望し、待ち続けてきた。恵みの時代にイエス・キリストの恵みによって救われたすべての人は、終わりの日の喜びに満ちたある日、救い主イエスが白い雲に乗って降臨し、万民の前に現れるのをずっと待ち焦がれている。これはもちろん、今日救い

主イエスの名を受け入れるすべての人が共有する望みでもある。救い主イエスによる救いを知る宇宙の全員が、イエス・キリストが突然到来し、「わたしは去ったときとまったく同じようにやって来る」と地上で言った言葉を実現させることを心底切望している。磔刑と復活の後、イエスは白い雲に乗って天に戻り、いと高き者の右側に座したと人は信じている。それと同様に、イエスは再び白い雲（この雲は、イエスが天に戻るときに乗った雲を指す）に乗って、何千年ものあいだイエスを待ち焦がれてきた人々のもとに降り立ち、ユダヤ人の姿をし、ユダヤ人の衣服をまとっているのである。人の前に現れた後、イエスは食物を彼らに授け、彼らのために生ける水を湧き出させ、恵みと愛に満ち、人々のあいだで生き生きと現実に暮らす。こうした観念はどれも、人々が信じていることである。しかし、救い主イエスはそのようにせず、人が心に抱いているのと正反対のことをした。イエスは再来を切望していた人々のもとには到来せず、白い雲に乗ってすべての人の前に現れもしなかった。彼はすでに来ていたが、人は知らず、気づかないままである。人は虚しく彼を待つだけで、彼がすでに「白い雲」（彼の霊、言葉、全性質、そして彼のすべてであるところの雲）に乗って降臨し、今や終わりの日に彼が作る勝利者の一団のもとにいることに気づいていない。人は次のことを知らない。すなわち、聖なる救い主イエスは人に対して慈しみと愛を抱いているにもかかわらず、どうして腐敗と不純な霊が宿るそれらの「神殿」で働くことができようか。人はイエスの到来をずっと待っているが、不義の者の肉を食べ、不義の者の血を飲み、不義の者の衣服を着る者、イエスを信じているが彼を知らない者、絶えず彼からゆすり取る者の前に、どうしてイエスが現れようか。人は、救い主イエスが愛に満ち、憐れみに溢れ、贖いに満ちた罪の捧げものであることしか知らない。しかし、イエスは同時に神自身であり、義、威厳、怒り、および裁きに満ち溢れていて、権威があり、尊厳に満ちていることはまったくわかっていない。したがって、たとえ人が贖い主の再来をしきりに切望し、彼らの祈りが「天」を動かしたとしても、救い主イエスは、彼を信じてはいるが彼のことを知らない者たちの前には現れない。

「ヤーウェ」はわたしがイスラエルで働きを行なっている間に用いた名前であり、人を憐れみ、人を呪い、人の生活を導くことのできる、イスラエル人（神の選民）の神という意味である。それは偉大な力を有し、英知に満ちた神である。「イエス」はインマヌエルであり、愛に満ち、慈悲に満ち、人を贖う罪の捧げものを意味する。イエスは恵みの時代の働きを行ない、恵みの時代を表すので、経営計画の働きの一部分しか表せない。すなわち、ヤーウェだけがイスラエルの選民の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、モーセの神、イスラエルのすべての民の神なのである。そのため現代では、ユダヤの民を除いたすべてのイスラエル人が

ヤーウェを崇拝している。彼らは祭壇にヤーウェへのいけにえを捧げ、神殿で祭司の祭服を着てヤーウェに仕える。彼らが望むのは、ヤーウェが再び現れることである。イエスだけが人類の贖い主であり、罪から人類を救った捧げものである。つまり、イエスの名前は恵みの時代に由来し、恵みの時代における贖いの働きゆえに生じたものである。イエスの名前は、恵みの時代の人々が生き返り、救われるために生じたのであり、全人類の贖いのための特別な名前である。ゆえに、イエスという名前は贖いの働きを表し、恵みの時代を意味する。ヤーウェの名前は律法の下で生きたイスラエルの人々のための特別な名前である。各時代、および働きの各段階において、わたしの名前は根拠のないものではなく、代表的な意義がある。それぞれの名前は一つの時代を表す。「ヤーウェ」は律法の時代を表し、イスラエルの人々が崇拝した神の敬称である。「イエス」は恵みの時代を表し、恵みの時代に贖われたすべての人々の神の名前である。人がいまだ、終わりの日に救い主イエスが到来することを待ち望み、ユダヤの地にいたときの姿で到来することを依然として期待するなら、六千年の経営計画全体は贖いの時代で止まり、それ以上進展することはできなかったはずだ。そのうえ、終わりの日は決して到来せず、時代に終止符が打たれることもないだろう。救い主イエスは人類の贖いと救いのためだけにあるからである。わたしがイエスと名乗ったのは、ただ恵みの時代におけるすべての罪人のためだが、わたしが人類全体を終らせるのはこの名によってではない。ヤーウェ、イエス、メシアはすべてわたしの霊を表すが、これらの名前は単にわたしの経営計画の異なる時代を示すものであり、わたしの全体を表すものではない。地上の人々がわたしを呼ぶ名前のどれも、わたしの性質全体、わたしそのもののすべてを明確に示すことはできない。それらは単に、それぞれの時代にわたしが呼ばれる異なる名前にすぎない。だから最後の時代――終わりの日の時代――が来た時、わたしの名前はまた変わるのである。わたしはヤーウェやイエスとは呼ばれないし、ましてやメシアとは呼ばれない。力ある全能神自身と呼ばれ、この名前の下で時代全体を終らせる。わたしはかつてヤーウェとして知られていた。わたしはメシアとも呼ばれ、また、人々はかつて愛と尊敬をもって、わたしを救い主イエスとも呼んだ。しかし今日、わたしはもはや、人々が過去に知っていたヤーウェでもイエスでもない。わたしは終わりの日に戻ってきた神、時代を終らせる神である。わたしは、自身の全性質を余すところなく表し、権威、名誉、栄光に満ちつつ、地の果てから立ち上がる神自身である。人々は一度もわたしと関わったことがなく、わたしを知ったことがなく、ずっとわたしの性質に無知であった。創世から今日に至るまで、わたしを見たことがある者は一人としていない。これは終わりの日に人の前に現れるが、人々のあいだに隠れている神なのである。神は真実かつ現実、照りつける太

陽や燃えさかる炎のように、力に満ち、権威にあふれて人々のあいだに住まう。わたしの言葉によって裁きを受けない人や物は一人としておらず、一つとしてない。燃える火によって清められない人や物は一人としておらず、一つとしてない。最終的に、あらゆる諸国はわたしの言葉のために祝福され、わたしの言葉のために粉々に砕かれもする。このようにして、終わりの日のすべての人は、わたしが戻ってきた救い主であること、わたしが全人類を征服する全能神であることを理解する。また、かつては人のための罪の捧げものであったが、終わりの日にはすべてを灰にする太陽の炎、そしてすべてのものを露わにする義の太陽になることを理解する。それが終わりの日におけるわたしの働きである。わたしはこの名前を名乗り、この性質を持つことで、わたしが義の神、照りつける太陽、そして燃えさかる炎であることをすべての人が理解し、誰もが唯一の真の神であるわたしを崇め、わたしの本当の顔を見られるようにする。わたしはイスラエル人の神であるだけでなく、贖い主であるだけでもない。わたしは天、地、海の至る所にあるすべての被造物の神なのである。

終わりの日に救い主が到来し、依然としてイエスと呼ばれていたら、そして再びユダヤの地に生まれ、そこで働きを行ったとしたら、これはわたしがイスラエルの民だけを造り、イスラエルの民だけを贖い、異邦人とは関係がないことの証明になるだろう。それは「わたしは天地と万物を造った主である」というわたしの言葉と矛盾しないだろうか。わたしはユダヤの地を離れ、異邦人のもとで働きを行う。なぜなら、わたしはイスラエルの民の神というだけでなく、すべての被造物の神だからである。終わりの日、わたしは異邦人のもとに現れる。なぜなら、わたしはヤーウェ、つまりイスラエルの民の神であるだけでなく、それ以上に、異邦人の中にいるわたしの選民全員の創造主だからである。わたしはイスラエル、エジプト、レバノンを造っただけでなく、イスラエルの外にあるすべての異邦人の国々も造った。そのため、わたしはあらゆる被造物の主なのである。わたしは働きの出発点としてイスラエルを使い、ユダヤとガリラヤを贖いの働きの拠点として用いたに過ぎず、そして現在、異邦人の国々を、時代全体を終らせる起点として使うだけである。わたしはイスラエルで二段階の働き（律法の時代の働きと、恵みの時代の働きの二段階）を行い、イスラエルの外のあらゆる地でさらに二段階の働き（恵みの時代と神の国の時代）を行ってきた。わたしは異邦人の国々で征服の働きを行ない、時代を終らせる。人がいつまでもわたしをイエス・キリストと呼び、わたしが終わりの日に新しい時代を始め、新しい働きに着手していることを知らず、取りつかれたように救い主イエスの到来を待ち続けるなら、わたしはこのような人々を、わたしを信じない者と呼ぶ。彼らはわたしを知らない人々で、わたしへの信仰は偽りである。

救い主イエスが天から到来するのを、このような人々が目の当たりにできようか。彼らが待っているのはわたしの到来ではなくユダヤ人の王の到来である。彼らは、わたしがこの不純な古い世界を滅ぼすことを切望しているのではなく、むしろイエスの第二の到来を望み、それによって罪から贖われることを願っている。この汚れた不義の地から、イエスが全人類をもう一度贖うことを彼らは切望している。このような人々が、どうして終わりの日にわたしの働きを完成させる者になれるか。人の願望はわたしの望みを満たすことも、わたしの働きを完成させることもできない。人は、わたしが以前になした働きを賞賛し、大切にすることで、わたしがいつも新しく、決して古くない神自身であることにまったく気づいていないからである。人は、わたしがヤーウェでイエスであることを知っているだけで、わたしが最後に人類を終わらせる、終わりの日の者であることに少しも気づいていない。人が熱望し、知っていることはどれも自身の観念から生じており、自分の目で見ることができないものに過ぎない。それはわたしの働きと一致しておらず、調和していない。わたしの働きが人の考えに沿ってなされるとしたら、いつ終わるだろう。いつ人類は安息に入るだろう。そしてわたしはどうしたら7日目の安息日に入ることができるだろう。わたしは、わたしの計画に沿って、そしてわたしの目的に沿って働くのであり、人の意図に沿って働くことはしない。

福音を広める働きはまた人間を救う働きでもある

すべての人々は地上におけるわたしの働きの目的、つまり、わたしが最終的に何を得ようと望んでいるかと、この働きが完成するまでに、その中でどの程度達成しなければならないかを理解する必要がある。今日までわたしとともに歩みながら、わたしの働きが一体何であるのかを理解していないならば、人々はむだにわたしと歩んできたのではないのか。わたしに従う人々は、わたしの旨を知るべきである。わたしは地上において何千年も働いてきたのであり、今日に至るまでこのように働き続けている。わたしの働きには多くの項目が含まれているものの、その目的は変わらないままである。例えば、わたしが人間に対する裁きと刑罰で満ちていても、わたしの行なうことはやはり人間を救うためであり、また人が完全にされたあと、わたしの福音をよりよく広め、あらゆる異邦人の国においてわたしの働きをさらに展開するためである。ゆえに、多くの人がずっと以前から失望に沈んでいる今日でも、わたしはいまだに働きを続けており、人を裁いて罰するために行なうべき働きを続けているのである。人はわたしの言うことにうんざりしており、わたしの働きに関わりたくないと思っているが、それにもかかわらず、わたしはいまだに自分の

務めを果たしている。なぜなら、わたしの働きの目的は変わらないままであり、わたしの本来の計画は打ち破られることがないからである。わたしの裁きが果たす役割は、人間がわたしによりよく従えるようにすることであり、わたしの刑罰が果たす役割は、人間がより効果的に変化できるようにすることである。わたしが行なうことはわたしの経営（救い）のためであるものの、わたしはこれまでに人間に有益でないことを行なったことはない。それは、イスラエルの外にわたしが足場をもてるよう、イスラエルの外のあらゆる民族をイスラエル人と同じくらい従順にし、彼らを真の人間にしたいからである。これがわたしの経営であり、わたしが異邦人の諸国のあいだで成し遂げている働きである。今でさえ、多くの人が依然わたしの経営を理解していない。そのようなことに関心がなく、自分自身の将来と終着点だけを気にかけているからである。わたしは何を言おうと、人々はわたしの行なう働きに無関心なままで、その代わりに将来における自分の終着点だけに集中している。このままであれば、どうしてわたしの働きが拡大できるだろうか。どうしてわたしの福音が世界中に広まるだろうか。わたしの働きが広まる時、わたしはあなたがたを散り散りにし、ちょうどヤーウェがイスラエルの諸部族の一つひとつを撃ったようにあなたがたを撃つことを、あなたがたは知るべきである。これはすべて、地球のいたるところにわたしの福音が広まり、異邦人の諸国のもとに届き、わたしの名が大人にも子供にも賛美され、わたしの聖なる名があらゆる国々、あらゆる民族の人々の口から褒め称えられるようにするためである。それは、この最後の時代において、わたしの名が異邦人の民族のあいだで賛美され、わたしの業が異邦人たちに見られ、わたしの業ゆえに彼らがわたしを全能者と呼び、わたしの言葉がまもなく実現されるようにするためである。わたしはイスラエル人の神であるだけでなく、わたしが呪った民族をも含むあらゆる異邦人の民族の神であることを、わたしはすべての人々に知らしめる。わたしがすべての被造物の神であることを、わたしはあらゆる人々に知らしめる。これがわたしの最も大きな働き、終わりの日に向けた働きの計画の目的、そして終わりの日に成就される唯一の働きである。

わたしは何千年にもわたり経営してきた働きは、終わりの日においてのみ人間に完全に明らかにされる。今初めて、わたしは自分の経営の奥義の全貌を人間に明かし、人間はわたしの働きの目的を知り、そのうえわたしの奥義のすべてを理解したのである。わたしはすでに、人間が関心をもつ終着点についてすべてのことを人間に告げた。五千九百年以上隠されていたわたしの奥義のすべてを、すでに人間のために明らかにしたのである。ヤーウェとは誰か。メシアとは誰か。イエスとは誰か。あなたがたはこれらのことをすべて知っているはずである。わたしの働きはこれらの名によって定まる。そのことを理解したのか。わたしの聖なる名はいかに宣

言されるべきか。わたしのことをわたしの名のいずれかで呼んできた諸民族のいずれかに、わたしの名はいかに広められるべきか。わたしの働きはすでに拡大しており、わたしはその拡充をあらゆる民族に広める。わたしの働きはあなたがたにおいて行なわれてきたのだから、ちょうどヤーウェがイスラエルのダビデの家の羊飼いたちを撃ったように、わたしはあなたがたを撃って、あらゆる民族のあいだに分散させる。終わりの日、わたしはすべての国々を粉々に打ち砕き、その民を新たに分配するからである。わたしが再来するとき、国々はわたしの燃えさかる炎がつくった境界線に沿ってすでに分断されているであろう。そのときわたしは焼けつく太陽として、人類の前に新たに現われ、人間がかつて見たことのない聖なるものの姿で公然と彼らに自分自身を示し、ちょうどわたし、ヤーウェがかつてユダヤの諸部族のあいだを歩いたように、無数の諸民族のあいだを歩く。それ以降、わたしは地上における人類の生活を導く。そこで人々は必ずやわたしの栄光を見、また空中に雲の柱が一本、彼らを生活において導くためにあるのを見る。わたしは聖なる場所に出現するからである。人間はわたしの義なる日を、またわたしの栄えある出現を見る。わたしが地球全体を統治し、わたしの多くの息子たちを栄光に至らせるとき、それは起こる。地上のいたるところで人々はひれ伏し、わたしの幕屋は人類のただ中に、わたしが今日行なう働きの岩の上に堅固に打ち立てられる。人は神殿においてもわたしに仕える。祭壇は汚らしくおぞましいもので覆われており、わたしはそれを粉々に打ち砕き、新たに建てる。生まれたばかりの子羊と子牛が聖なる祭壇の上に積み上げられる。わたしは今日の神殿を打ち倒し、新しい神殿を建てる。今日ある神殿は嫌悪すべき人々で溢れており、それは崩れ落ちる。わたしが建てる新しい神殿は、わたしに忠実なしもべで溢れる。彼らはわたしの神殿の栄光のために再び立ち上がり、わたしに仕える。あなたがたは、わたしが大いなる栄光を受ける日を、またわたしが神殿を倒して新しい神殿を建てる日を必ずや見るであろう。さらに、わたしの幕屋が人間の世界に到来する日を必ずや見るであろう。わたしは神殿を壊すと同時に、あたかも人間がわたしの降臨を見るかのように、わたしの幕屋を人間の世界にもたらず。あらゆる国々を打ち砕いた後、わたしはそれらを新たに集め、その時からわたしの神殿を建て、わたしの祭壇を築くことで、あらゆる者がわたしに生贄を捧げ、神殿でわたしに仕え、異邦人の諸国におけるわたしの働きに忠実に献身できるようにする。彼らは現代におけるイスラエルの民のようになり、祭司の式服と冠をまとう。わたし、ヤーウェの栄光が彼らのただ中にあり、わたしの威厳が彼らの頭上において彼らとともに留まっている。異邦人の諸国におけるわたしの働きもまた、同じ方法で実行される。異邦人の諸国におけるわたしの働きは、イスラエルにおけるわたしの働きと同様である。なぜなら、わたしはイスラエルで

の働きを拡大させ、それを異邦人の諸国に広めるからである。

現在是我の霊が大なる働きを行い、わたくしが異邦人の諸国で働きを開始するときである。それ以上に、わたくしがあらゆる被造物を分類し、一つひとつを種類ごとに仕分けし、わたくしの働きがさらに早く効果的に進行するようにするときである。だから、わたくしがあなたがたに求めるのはやはり、自己の存在の一切をわたくしのすべての働きに捧げ、そしてさらに、わたくしがあなたにおいて行なったすべての働きを明確に認識、確信し、わたくしの働きがより効果的になるよう、自分の全力をそれに注ぎ込むことである。これが理解しなければならないことである。自分たちのあいだで争ったり、後戻りする道を探したり、肉体の快適さを求めたりするのをやめなさい。これらはわたくしの働きと、あなたのすばらしい将来を遅らせる。そのようにするのはあなたを守るどころか、破壊をもたらす。それは愚かなことではないだろうか。今日あなたが貪欲に享受しているものが、まさにあなたの将来を台無しにするものであり、一方、今日あなたが苦しんでいる痛みが、まさにあなたを守っているものである。抜け出すのに大変苦勞する誘惑に陥るのを避け、濃霧にはまり込み、太陽を見つけられなくなることから逃れるために、これらのことをはっきり認識しなければならない。濃霧が晴れると、あなたは大きな日の裁きのさなかにいる自分を見つける。その時点で、わたくしの日は人類に近づきつつある。どうしてわたくしの裁きから逃れるのか。どうして焼けつくような太陽の熱に耐えられるのか。わたくしが自らの豊かさを人間に与えるとき、人間はそれを懷で大切にせず、代わりに誰も気づかない場所に投げ捨てる。わたくしの日が人間の上に降りるとき、人間はもはやわたくしの豊かさを見つけることも、はるか前にわたくしが人間に語った苦い真実の言葉を見つけることもできない。光の明るさを失い、暗闇に陥ったので、人間は泣き叫ぶ。あなたがたが今日見ているのは、わたくしの口の鋭利な剣に過ぎず、わたくしの手にある鞭も、わたくしが人間を燃やす炎も見ておらず、そのため、あなたがたはいまだにわたくしの面前でも不遜で不節制なのである。そのため、あなたがたはいまだにわたくしの家でわたくしと争い、わたくしが自らの口で語ったことに人間の言葉で反論するのである。人間はわたくしを恐れず、今日までわたくしと敵対し続けながら、それでもまったく恐れていない。あなたがたの口には不義なる者の舌と歯がある。あなたがたの言動はエバを罪へと誘惑した蛇のもののようで、互いに目には目を、歯には歯を要求しあい、わたくしの前で地位、名声、利益を自分のものにしようと奮闘するものの、わたくしが密かにあなたがたの言動を見張っていることを知らない。あなたがたがわたくしの前に来る以前でさえ、わたくしはあなたがたの心の奥底を調べていた。人間はいつもわたくしの手の中から逃れ、わたくしの目の観察を避けようと望んでいるが、わたくしは人間の言動から離れたことがない。代わりに、それ

らの言動をわざとわたしの目に触れさせ、わたしが人間の不義さを罰し、人間の反抗に裁きを下せるようにする。このように、人間の密かな言動は絶えずわたしの裁きの座の前にあり、わたしの裁きは人間から離れたことがない。なぜなら人間の反抗は過度だからである。わたしの働きは、わたしの霊の面前で発せられ行なわれる人間のあらゆる言動を燃やして清めることである。こうすることで^[a]、わたしが地上を去るとき、人々は依然としてわたしへの忠誠を保ち、わたしの聖なるしもべがわたしの働きにおいてするようにわたしに仕え、それによりわたしの地上での働きはその完成の日まで続くのである。

律法の時代における働き

ヤーウェがイスラエル人に行なった働きは、地上における神の起源の場所を人類の間で確立させたが、それは神が臨在した聖なる場所でもあった。神はその働きをイスラエルの人々に限定した。当初、神はイスラエルの外では働かず、むしろ働きの範囲を限定するため、神が適切とみなした民を選んだ。イスラエルは神がアダムとエバを創った場所であり、ヤーウェはその場所の塵から人間を創造した。この場所は地上におけるヤーウェの働きの拠点となった。イスラエル人はノアの子孫であり、またアダムの子孫でもあるが、地上におけるヤーウェの働きの基盤となる人間だった。

その当時、イスラエルにおけるヤーウェの働きの意義、目的、段階は、全地球上で働きを始めることであり、それはイスラエルを中心としながら徐々に異邦人の国々に広まった。これが全宇宙にわたる神の働きの原則である。つまり、ある模範を確立したあと、宇宙のすべての人が神の福音を受け取るまでそれを広げるのである。最初のイスラエル人はノアの子孫だった。これらの人々はヤーウェの息だけを授けられ、生活する上で必要となる基本的なことに対処できるだけのことを理解したが、ヤーウェがどのような神であるかや、人間に対するヤーウェの旨は知らず、ましてや万物創造の主をどのように崇めるべきかなど知らなかった。従うべき^[a]規則や掟があったかどうか、また被造物が創造主のために尽くすべき本分があったかどうかについても、アダムの子孫たちは一切知らなかった。彼らが知っていたのは、夫は家族を養うために汗を流して労働しなければならず、妻は夫に従い、ヤー

脚注

- a. 原文に「こうすることで」の語句は含まれていない。
- a. 原文に「従うべき」の語句は含まれていない。

ウェが創造した人類を永続させなければならないことだけだった。言い換えるなら、このような人々は、ヤーウェの息といのちだけをもっており、どのように神の律法に従うべきか、どのように万物創造の主を満足させるべきかについては何も知らなかった。あまりに何も理解していなかったのである。そのため、心の中によこしまなものや不実なものが一切なく、自分たちの間で嫉妬や争いが生じることも滅多になかったが、ヤーウェ、すなわち万物創造の主についてはなんら認識も理解もしていなかった。これら人間の祖先はヤーウェのものを食べ、ヤーウェのものを享受することは知っていたが、ヤーウェを畏れることは知らなかった。ヤーウェはひざまずいて礼拝すべき唯一の方であることを知らなかったのである。ならば、どうして彼らを神の被造物と呼べようか。そうであれば、「ヤーウェは万物創造の主である」そして「人間が神を明らかにし、神の栄光を表し、神を体現するようにすべく、神は人間を創造した」という言葉は、無駄に語られたのではないだろうか。ヤーウェに畏敬の念をもたない人が、どうしてヤーウェの栄光を証しできようか。どうしてヤーウェの栄光を明らかにすることができようか。ならば、「わたしはわたしに似せて人を創った」というヤーウェの言葉は、サタンという邪悪な存在が掌中に収める武器にならないだろうか。そしてこれらの言葉は、ヤーウェによる人の創造にとって不名誉の印とならないだろうか。ヤーウェは働きのその段階を完了すべく、人類創造の後、アダムからノアに至るまで、人類を教えたり導いたりすることはなかった。むしろ、洪水が世界を滅ぼして初めて、ノアの子孫であり、またアダムの子孫でもあるイスラエル人を、ヤーウェは正式に導き始めたのである。イスラエルにおけるヤーウェの働きと発した言葉は、イスラエルのすべての人々がイスラエルの全土で生活するにあたって導きを与えた。そのことは、ヤーウェは人間に息を吹き込み、それによって人間がヤーウェからいのちを与えられ、塵から起き上がって被造物となるようにすることができるだけでなく、人類を焼き尽くしたり、呪ったり、またその杖を使って人類を支配できることをも人に示した。それで人間もまた、ヤーウェが地上における人の生活を導き、昼と夜の時刻に従って人類の間で言葉を語り、働きを行なえることを知った。ヤーウェが行なった働きはひとえに、人がヤーウェによってつまみ上げられた塵に由来すること、そしてさらに、人がヤーウェによって創造されたことを被造物が知るようにするためである。これだけではなく、ヤーウェが最初にイスラエルで働きを行なったのは、他の民族と国々（実際のところ、それらはイスラエルと無関係ではなく、イスラエル人から枝分かれしたものの、依然としてアダムとエバの子孫である）が、イスラエルからヤーウェの福音を受け取るようにするため、そして宇宙のすべての被造物がヤーウェを恐れ、ヤーウェを偉大なものとして掲げられるようにするためである。ヤーウェが

イスラエルで働きを開始せず、その代わりに人類を創造した後、彼らを地上でのんきに生活させていたら、その場合、人間は自分の肉体の本性（本性とは、人間は自分に見えないものを決して認識できないことを意味する。つまり人間は、人類を創造したのがヤーウェであることを決して知り得ず、ましてヤーウェがなぜそうしたかなどまったく知ることがないのである）のせいで、人類を創造したのがヤーウェであることも、ヤーウェが万物の主であることも知るはずがなかった。ヤーウェが人間を創造して地上に置いた後、人類の間に一定期間留まって彼らを導かず、ただ手の塵を払って立ち去っていたら、全人類は無に帰していただろう。ヤーウェが創造した天地と無数の万物、そして全人類さえも無に帰し、それ以上に、サタンによって踏みつけられていただろう。そうなれば、「地上において、つまり天地創造の中心において、ヤーウェは立つべき場所、聖なる場所をもたなければならない」というヤーウェの望みは打ち砕かれていただろう。だから、人類創造の後、ヤーウェが人間のもとにとどまって人の生活を導き、彼らの間で話しかけることができたのは、すべてヤーウェの望みをかなえ、その計画を達成するためだった。イスラエルにおいてヤーウェが行なった働きは、万物の創造に先だって定めた計画を実行することだけが目的であり、それゆえイスラエル人の間におけるヤーウェの最初の働きと、ヤーウェによる万物の創造は、互いに相容れないものではなく、いずれもヤーウェの経営（救い）、働き、栄光のためになされたのであり、また人類創造の意義を深めるためになされたものでもあった。ノアの後、ヤーウェは二千年にわたって地上における人類の生活を導いた。その間、ヤーウェは人類に対し、どのようにヤーウェ、すなわち万物の主を畏れるべきか、どのように生活を送るべきか、どのように生き続けるべきか、そして何より、どのようにヤーウェの証人として行動し、ヤーウェに従い、ヤーウェを崇めるべきかを教え、そのため人類は、ダビデとその祭司が行なったように、音楽でヤーウェを讃美することさえした。

ヤーウェが働きを行なった二千年間の前、人間は何も知らず、ほぼすべての人が墮落し、洪水によって世界が滅ぼされるころには乱交と墮落の深みに陥り、その心にヤーウェは姿も形もなく、ヤーウェの道もさらになかった。人々はヤーウェが行なおうとしていた働きを理解しなかった。彼らには理知がなく、見識などさらになく、まるで息をする機械のように、人間、神、世界、いのちなどについてまったく無知だった。地上において、人々はヘビのように多くの誘惑をなし、ヤーウェを侮辱することを数多く言った。しかし、人々は無知だったので、ヤーウェは彼らを罰することも、懲らしめることもなかった。洪水の後、ノアが六百一歳のときに初めて、ヤーウェは正式にノアのもとに姿を見せ、ノアとその家族を導く一方、ノアとその子孫とともに洪水を生き延びた鳥や野獣を、律法の時代が終わるまで合計二千

五百年間にわたって導いた。ヤーウェは二千年のあいだ、イスラエルにおいて、つまり正式な形で働きを行ない、そしてイスラエルの中と外で同時に五百年間働き、合計で二千五百年間働いた。この期間、ヤーウェはイスラエル人に対し、ヤーウェに仕えるためには神殿を建て、祭司の衣服をまとい、履物が神殿を汚してその頂上から火が降り、自分たちが焼き殺されることのないよう、夜明けに裸足で神殿に入ることを命じた。イスラエル人は自分たちの本分を尽くし、ヤーウェの計画に従った。彼らは神殿でヤーウェに祈り、ヤーウェの啓示を受けた後、つまり、ヤーウェが語った後は、多くの人々を導き、彼らの神であるヤーウェを崇めなくてはならないと教えた。そしてヤーウェは彼らに対し、神殿と祭壇を作り、ヤーウェが定めた時間、つまり過越の祭の日には、ヤーウェへの生贄として生まれたばかりの子牛と子羊を用意して、祭壇に供えなければならないと教えた。それは彼らを抑制させるため、ヤーウェへの畏敬の念を心に抱かせるためである。この律法に従ったか否かが彼らのヤーウェへの忠誠を測る尺度となった。またヤーウェはイスラエル人の安息日、つまり天地創造の七日目を定めた。安息日の翌日にヤーウェは最初の日、つまりイスラエル人がヤーウェを讃え、ヤーウェに生け贄を捧げ、ヤーウェのために音楽を奏でる日を定めた。この日、ヤーウェはすべての祭司を呼び集め、祭壇の上の生け贄を分け、人々が食べるように命じた。これは、人々がヤーウェの祭壇の生け贄を享受できるようにするためである。さらにヤーウェは、イスラエル人は祝福されており、ヤーウェと分かち合っており、ヤーウェの選民であると言った（それはヤーウェによるイスラエル人との契約だった）。これが、ヤーウェは自分たちだけの神であって異邦人の神ではないと、イスラエルの人々が今日に至るまで言う理由である。

律法の時代、ヤーウェは多くの戒めを定め、モーセがそれを、自分に従ってエジプトを脱出したイスラエル人に伝えるようにした。それらの戒めはヤーウェによってイスラエル人に与えられたものであり、エジプト人にはなんら関係のないものだった。それらはイスラエル人を抑制するためのものであり、ヤーウェは戒めによってイスラエル人に要求した。安息日を守っているか、両親を敬っているか、偶像を崇拝しているかなどが、彼らが罪深いか義であるかを判断する原則だった。イスラエル人の中には、ヤーウェの火で打ち倒された者、石打ちの刑に処された者、ヤーウェの祝福を受けた者がおり、これはそうした戒めを守ったか否かによって決められた。安息日を守らなかった者は石打ちの刑に処された。安息日を守らなかった祭司はヤーウェの火で打ち倒された。両親を敬わなかった者もまた石打ちの刑に処された。これはすべてヤーウェに称賛されることだった。ヤーウェは戒めと律法を定め、そうすることで人々の生活を導きながら、彼らがヤーウェの言葉を聞いてそれに従い、ヤーウェに反抗することのないようにした。ヤーウェはこれらの律法

を用いて生まれたばかりの人類を支配したが、それはヤーウェによる将来の働きの基礎を築く上で有益だった。そのため、ヤーウェが行なった働きにもとづき、最初の時代は律法の時代と呼ばれた。ヤーウェは多くの発言をし、かなりの働きをしたものの、人々を前向きに導き、それら無知な人々に対して、どのように人間になるべきか、どのように生きるべきか、どのようにヤーウェの道を理解するべきかを教えるだけだった。ヤーウェが行なった働きの大半は、人々がヤーウェの道を守り、ヤーウェの律法に従うようにするためだった。その働きは軽く墮落した人々になされたのであって、人々の性質を変化させることや、いのちの進歩までには至らなかった。ヤーウェは律法を用いて人々を抑制、支配することにしか関心がなかったのである。当時のイスラエル人にとって、ヤーウェは神殿にいる神、天にいる神でしかなかった。ヤーウェは雲の柱、火の柱だったのである。ヤーウェが人々に求めたのは、今日の人々にヤーウェの律法、およびヤーウェの戒めとして知られているもの、つまり規則と呼んでも差し支えないものに従うことだけだった。なぜなら、ヤーウェがしたこと人々を変えようとする意図はなく、人々がもつべきものをさらに与え、自らの口で教え導くことが目的だったからである。と言うのも、人間は創造された後、もつべきものを何ももっていなかったからである。それゆえヤーウェは、人々が地上で生活するにあたってもつべきものを与え、自ら導いてきた人々がその先祖であるアダムとエバを超えるようにした。なぜなら、ヤーウェが彼らに与えたものは、最初にアダムとエバに与えたものを超えていたからである。それにもかかわらず、ヤーウェがイスラエルで行なった働きは、人類を導き、人類にその創造主を認識させることだけだった。ヤーウェは人々を征服することも変えることもせず、ただ導いたにすぎない。これが、律法の時代におけるヤーウェの働きの概要である。これがイスラエルの全土におけるヤーウェの働きの背景、内幕、そして本質であり、人類をヤーウェの手中で支配するという、神の六千年にわたる働きの始まりだった。ここから神の六千年にわたる経営計画におけるさらなる働きが生まれたのである。

贖いの時代における働きの内幕

わたしの全経営（救いの）計画、六千年にわたる経営計画は三段階、あるいは三時代から成る。それは始まりの律法の時代、次に恵みの時代（贖いの時代でもある）、そして終わりの日の神の国の時代である。これら三時代におけるわたしの働きは、各時代の性質によって異なるが、それぞれの段階においてこの働きは人間の必要性に対応している。正確には、わたしがサタンに対して行なう戦いでサタンが

用いる策略に応じて働きは行われる。わたしの働きの目的は、サタンを打ち負かし、わたしの知恵と全能を明らかにし、サタンの策略をすべてあばくことであり、それによりサタンの支配下に生きる人類全体を救うことである。それはわたしの知恵と全能を示し、サタンの耐え難いおぞましさを明らかにするものである。それに加えて、被造物が善悪を区別し、わたしこそが万物を治める者であることを認識し、サタンが人類の敵であり、下の下、悪い者であることをはっきりと見極められるようにし、善と悪、真理と偽り、聖さと汚れ、偉大さと卑劣の違いを絶対的な明白さをもって区別できるようにすることである。それにより無知な人類は、人類を墮落させるのはわたしではなく、創造主であるわたしだけが人類を救うことができ、人々が享受できるものを彼らに授けることができることをわたしに証しし、わたしこそがすべてを治める者であり、サタンは後にわたしに背いたわたしの被造物の一つにすぎないと人類は知ることができる。わたしの六千年の経営計画は三段階に分けられており、わたしがそのように働くのは被造物がわたしの証人となり、わたしの心を知り、わたしこそが真理であることを知らしめるという成果を達成するためである。したがって、わたしの六千年にわたる経営計画における最初の働きのあいだ、わたしは人々を導いたヤーウェの働きである律法の働きを行なった。第二段階では、ユダヤの村々において恵みの時代の働きが始まった。イエスは恵みの時代におけるすべての働きを表した。イエスは受肉し、十字架につけられ、恵みの時代を開始した。イエスは贖いの働きを完成させ、律法の時代を終了させ、恵みの時代を開始するために十字架にかけられ、そのため「最高司令官」「罪のいけにえ」「贖い主」と呼ばれた。したがって、イエスの働きはヤーウェの働きと中身は異なっていたけれども、原則においては同じである。ヤーウェは律法の時代を開始し、地上における神の働きの拠点、発祥地を定め、律法と戒めを発した。これらがヤーウェが行なった二つの働きであり、それは律法の時代を代表する。イエスが恵みの時代に行なった働きは律法を発することではなく、それらを成就し、それによって恵みの時代が到来したことを告げ、二千年続いた律法の時代を終結させることであった。イエスは恵みの時代をもたらすために来た先駆者であったが、その働きの中心は贖いであった。よってイエスの働きもまた二つの部分から成る。それらは新しい時代を切り開くこと、そして十字架刑を通して贖いの働きを完成させることである。その後、イエスは去った。これで律法の時代は終わり、恵みの時代が始まった。

イエスの働きは、その時代における人の必要性に応じて行われた。その務めは人間を贖い、その罪を赦すことであるがゆえに、イエスの性質は全体が謙遜、忍耐、愛、敬虔、寛容、憐れみ、慈しみであった。イエスは人間に豊かな祝福と恵みをも

たらし、平和、喜び、イエスの寛容と愛、その憐れみと慈しみといった人々が享受することのできるあらゆるものをもたらした。その当時、人が受け取ったあふれんばかりの楽しむことがら、すなわち心の平安と安心、霊の慰め、救い主イエスによる支え、これらのものは、人の生きた時代ゆえにもたらされたのである。恵みの時代、人はすでにサタンにより墮落させられていたので、すべての人を贖う働きを完遂するためには、満ちあふれる恵み、限りない寛容と忍耐、そしてさらに、効果を及ぼすためには、人間の罪を贖うのに十分な捧げ物が必要であった。恵みの時代に人々が見たのは、人間の罪のためのわたしの捧げ物であるイエスに過ぎなかった。人々は神は憐れみ深く寛容であり得ることだけしか知らず、イエスの慈しみと憐れみしか見なかった。それは彼らが恵みの時代に生きていたからである。そのようなわけで、贖われる前に人々はイエスが彼らに授けるさまざまな恵みを楽しみ、その恩恵を受けなければならなかった。それにより、彼らは恵みを享受することでその罪を赦されることができ、イエスの寛容と忍耐を享受することで贖われる機会を得ることができた。イエスの寛容と忍耐を通してのみ、人々は赦しを受け、イエスが授けるあふれる恵みを楽しむ権利を手にすることができた。それはイエスが、「わたしは義人ではなく罪人を贖い、罪人がその罪を赦されるようにするためにきたのである」と言ったとおりであった。もしイエスが裁きと呪い、人間の過ちに対する不寛容の性質を持って受肉していたなら、人には決して贖われる機会はなく、永遠に罪深いままでいたことであろう。もしそうになっていたなら、六千年の経営計画は律法の時代で止まり、律法の時代は六千年間続いていたであろう。人の罪は数が増し、よりひどいものとなり、人間の創造は無価値なものとなっていたであろう。人は律法のもとでのみヤーウェに仕えることができたではあろうが、彼らの罪は最初に創造された人間の罪をも上回るものとなっていたであろう。イエスが人類を愛し、その罪を赦し、十分な慈しみと憐れみを与えれば与えるほど、人類はイエスにより救われ、イエスが大きな代価で買い戻した迷える子羊と呼ばれる資格があった。イエスは自分の追随者をあたかも母親が我が子を腕のなかであやすように取り扱ったので、サタンはこの働きに干渉することができなかった。イエスは人々に対して腹を立てたり嫌ったりせず、慰めに満ちていた。人々とともにいても激怒するようなことは決してなく、「七の七十倍までも相手を赦しなさい」と言うほどまでに罪に寛容で、人々の愚かさと無知を見逃した。そのようにしてイエスの心は他者の心を変容させ、それゆえに人々はイエスの寛容を通して赦しを受けた。

受肉したイエスには全く感情がなかったが、常にその弟子たちを慰め、施し、助け、支えた。どれほどの働きをしても、どれほどの苦しみを耐えても、決して人々に過大な要求を課すことなく、常に忍耐強く、彼らの罪を耐え忍んだ。そのため恵

みの時代の人々はイエスを「愛すべき救い主イエス」と愛情を込めて呼んだ。当時の人々、すべての人々にとって、イエスが持っているものとイエスであるものは、慈しみと憐れみであった。イエスは決して人々の過ちを心に留めず、人々への接し方がその過ちをもとにするようなことは決してなかった。それは異なる時代だったため、イエスはよく食べ物をたっぷり人々に与え、彼らが十分食べられるようにした。イエスは追従者すべてに優しく接し、病人をいやし、悪霊を追い出し、死人をよみがえらせた。人々がイエスを信じ、その行いすべてが真剣かつ真心からのものであることが分かるように、腐った死体をよみがえらせることさえして、その手の中では死人さえも生き返ることを彼らに示した。このようにしてイエスは人々のあいだで静かに耐え忍び、その贖いの働きを行なった。十字架につけられる前でさえ、イエスはすでに人間の罪を負い、人類のための罪の捧げ物となっていた。十字架につけられる前から、イエスは人類を贖うために十字架への道をすでに開いていた。ついに十字架で釘づけにされ、十字架のために自分自身を犠牲として捧げ、そのすべての慈しみ、憐れみ、そして聖さを人類に授けた。人々にはイエスは常に寛容であり、決して復讐を求めず、人々の罪を赦し、人々に悔い改めるよう勧め、忍耐、寛容、愛を持ち、自らの足跡に従い、十字架のゆえに自分自身を捧げるよう教えた。イエスの兄弟姉妹への愛は、マリアへの愛に勝るものだった。イエスの働きの原則は、病人をいやし、悪霊を追い出すことであり、それらはすべてその贖いのためであった。どこへ行っても、イエスは従ってくる人すべてに思いやりを持って接した。貧しい者を豊かにし、足の不自由な人を歩けるようにし、目の見えない人を見えるようにし、耳の聞こえない人を聞こえるようにした。身分が一番低かった人々や乏しい人々、罪人さえ招いて共に食卓につき、彼らを遠ざけることなく常に忍耐強く、「羊飼いが羊を百匹持っていて、その一匹が迷ったとすれば、九十九匹を残しておいて、迷った一匹を捜しに行く。そしてそれを見つけたら、大いに喜ぶだろう」とさえ言った。イエスは雌羊がその子羊を愛するように、その追従者を愛した。彼らは愚かしく無知で、イエスの目には罪人であり、さらには社会において最も身分の低い者であったにもかかわらず、イエスは他の人々からさげすまれていたこれらの罪人を自分のひとみのように大切なものとして見た。彼らへの好意ゆえに、イエスは祭壇に捧げられる子羊のように、彼らのためにその命を捨てた。彼らのもとではしもべのようにふるまい、利用され、なぶり殺されるままにし、無条件に彼らに服従した。追従者にとってはイエスは愛すべき救い主であったが、上座から人々に説教したパリサイ人に対しては、イエスは慈しみや憐れみではなく、嫌悪と怒りを示した。イエスはパリサイ人のあいだではあまり働くことはなく、ごくまれに彼らに教えを説き叱責したが、彼らのもとで贖いの働きを行なうことはなく、

しるしや奇跡を行うこともなかった。イエスはその慈しみと憐れみを追隨者に与え、これら罪人たちのために十字架に釘づけられた最後の最後まで耐え忍び、ありとあらゆる屈辱に耐え、ついにすべての人間を完全に贖った。これがイエスの働きの全体である。

イエスの贖いがなければ、人類は永遠に罪の中に生き、罪の子、悪魔の子孫となっていたはずである。この状態が続けば、地上全体がサタンの住む地、その住まいとなっていたであろう。しかしこの贖いの働きは人類への慈しみと憐れみを示すことを必要とした。そのような手段によってのみ、人類は赦しを受け、ついに全き者とされ、神に完全に得られる資格を得ることができた。この働きの段階がなければ、六千年の経営計画は前に進むことはできなかつただろう。もしイエスが十字架にかけられることなく、ただ病人をいやし、悪霊を追い出しただけだったなら、人々はその罪を完全に赦されることはなかつたであろう。イエスが地上で働きをなした三年半のあいだ、イエスはその贖いの働きを半分完成させただけであり、十字架に釘づけにされ、罪深い肉の姿となり、悪しき者に引き渡されることによってのみ、イエスは十字架での働きを完成させ、人間の運命を掌握した。サタンの手に引き渡されて初めて、イエスは人類を贖った。三十三年半のあいだイエスは地上で苦しみ、あざけられ、中傷され、見捨てられ、まくらする場所や休む場所さえないほどにまで放置され、その後十字架につけられ、聖なる罪のない体であるイエスの存在全体が十字架で釘づけにされた。イエスはあらゆる苦しみに耐えた。権力者たちはイエスをあざ笑い、むち打ち、兵士たちはその顔に唾を吐きさえした。それでもイエスは黙ったまま最後まで耐え忍び、死にいたるまで無条件に従い、そこですべての人間を贖った。そのとき初めてイエスは安息することができた。イエスが行なった働きは、恵みの時代のみを表すものであり、律法の時代を表すものではなく、また終わりの日々の働きに代わるものでもない。これが人類にとっての第二の時代である贖いの時代という、恵みの時代におけるイエスの働きの本質である。

あなたは全人類がこれまでどのように 発展してきたかを知らねばならない

六千年にわたって行われてきた働きは、その全体が時代とともに徐々に変化してきた。この働きに見られる変化は、世界全体の情勢と、人類の全体的な発展の傾向に基づいて起こったものであり、経営の働きはただそれらに従って徐々に移り変わってきたのである。創世の当初からすべてが計画されていたわけではなかった。

世界の創造の前やその直後、ヤーウェはまだ働きの最初の段階である律法の時代、第2の段階である恵みの時代、第3の段階である征服の時代を計画していなかった。第3の段階である征服の時代には、神が最初にモアブの子孫の一部に対して働きを行い、それを通して宇宙全体を征服することになる。神は世界の創造の後、そうした言葉を一切語らず、モアブの後にもそれを語ることはなかった。実際、ロトの前にはそれらを一切語らなかったのだ。神の働きはすべて自然発生的に行われる。六千年にわたる神の経営の働きは、まさにこのようにして進められてきたのであり、世界の創造の前に神が「人類の発展の概略図」のような形で計画を書き出すことは一切なかった。神はその働きにおいて、神の存在そのものを直接的に表現するのであり、知恵を絞って計画を練り上げるのではない。もちろん数多くの預言者たちが無数の預言を語ってきたが、それでも神の働きが常に綿密な計画に基づいているとは言えない。そうした預言は、当時の神の働きに従って行われたのだ。神の働きはすべて、最も現実的な働きである。神はそれぞれの時代の進展に従って自身の働きを遂行し、物事の変化をその働きの基盤とする。神にとって働きを行うことは、病状に合わせて薬を処方することに似ている。神は自身の働きを行う際、観察をし、その観察に従って働きを続行する。神は自らの働きのどの段階においても、その豊かな英知と能力を表現できる。神はどの時代においても、その時代の働きに合わせて自らの豊富な知恵と権威を露わにし、その時代に神によって連れ戻された者すべてが、神の性質の全体を目にできるようにする。神はそれぞれの時代に実行されるべき働きに基づいて人々の必要を満たし、自身のなすべき働きを実行する。神は人々がサタンに堕落させられた程度に応じて、人々の必要を満たす。それはちょうど、ヤーウェが最初にアダムとエバを創造したとき、彼らに地上で神を体現させ、被造物の中で神の証しをさせることを目的としていたのに似ている。しかしエバは蛇に誘惑されて罪を犯し、アダムも罪を犯した。彼らは園とともに善悪の知識の木の果実を食べた。そのためヤーウェは、彼らに対してさらなる働きを行なった。神は彼らが裸なのを見て、動物の皮から作った衣服で彼らの体を覆った。その後神はアダムに言った。「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ……。ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る」。そして女にはこう言った。「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。それでもなお、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう」。それ以降、神は彼らをエデンの園から追放し、彼らを現代人が地上で生きているのと同じように、園の外に住ませた。神は人を創造した当初、創造の後に人を蛇に誘惑させて、それから人と蛇を呪うということは計画していなかった。神は

実際そのようなことを計画してはならず、ただ状況の推移によって、万物の間で新たな働きが必要になったのだ。ヤーウェが地上でアダムとエバにその働きを行なった後、人間は数千年にわたって発達し続け、そしてついに、次のような状況に至った。「ヤーウェは人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。ヤーウェは地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛み、……しかし、ノアはヤーウェの前に恵みを得た」。このときヤーウェはさらに新しい働きを行うことになったが、それは神が創造した人間が、蛇による誘惑の後、あまりに罪深くなってしまっていたからだった。そのような状況で、ヤーウェは人類の中からノアの家族を選んで生き残らせ、洪水で世界を滅ぼすという神の働きを実行した。人間は今日までこのように墮落を増しながら発達し続けており、そして人類の発達がその頂点に達すると、それは人間の終わりを意味することになる。神の働きの内なる真実は、当初からまさに世界の終わりに至るまで常にこのようなものであり、今後もそうあり続ける。そして人々がその性質に従って分類されることになるのも同じで、一人一人が初めから特定の分類に属するよう定められているわけではなく、みな発達の過程を辿った後に初めて、徐々に分類される。最終的に完全な救いにたどり着けない人々はみな、その人の「祖先」に戻されることとなる。人間の間での神の働きは一つとして、世界の創造時には準備されていなかった。むしろ神は状況の推移によって、人間に対する働きを一つ一つ、より現実的かつ実際的に行えるようになったのだ。たとえばヤーウェ神は、女を誘惑するために蛇を創造したわけではなかった。それは神の特別な計画でも、意図的に定めたことでもなく、思いがけない出来事だったと言える。ヤーウェがアダムとエバをエデンの園から追放し、二度と人を創造しないと誓ったのは、まさにそのためである。しかしこの根拠によってこそ、人は神の知恵を見出すことができる。それはわたしが以前、「わたしはサタンの策略に基づいてわたしの知恵を発揮する」と言った通りだ。人間の墮落がどれだけ進んでも、蛇がいかに人間を誘惑しても、ヤーウェは依然として神の知恵を備えている。それゆえ、神は世界の創造以来ずっと新しい働きに携わっており、その働きの各段階はこれまで一度も繰り返されたことはない。サタンは継続的に策略を実行しており、人間はサタンに墮落させられ続けていて、ヤーウェ神は休むことなくその賢明な働きを遂行している。神は一度も失敗したことがなく、世界の創造以来一度も働きをやめたこともない。人間がサタンによって墮落させられた後、神は人間の墮落の根源であるその敵を打ち負かすため、人々の間で働き続けてきた。その激しい戦いは創世のときから行われており、世界の終わりまで続くだろう。こうしたすべての働きを行う中で、ヤーウェ神はサタンに墮落させられた人間が自らの素晴らしい救いを得られるようにしてくれただ

けでなく、自らの知恵、全能性、そして権威も目のあたりにさせてくれた。そして最終的には、自らの義なる性質も明らかにし、邪悪な者を罰して正しい者に報いることになる。神は今日までサタンと戦ってきて、一度も負かされたことはない。それは神が知恵に満ちており、サタンの策略に基づいてその知恵を発揮しているからだ。それゆえ神は天のあらゆるものを自らの権威に従わせるだけでなく、地上のすべてのものを自身の足台の下に置き、そしてなによりも人間を侵害し悩ませる邪悪な者に神の刑罰を受けさせる。こうしたすべての働きの結果は、神の知恵によってもたらされる。神は人間が存在する前に自らの知恵を露わにしたことは一度もない。それは天にも地にも全宇宙のどこにも神に敵がおらず、自然界の何物をも侵害する闇の力は存在しなかったからである。大天使が神を裏切った後、神は地上に人間を創造し、そして人間のために、何千年にも及ぶ大天使サタンとの戦いを正式に開始したのだ。その戦いは段階が進むごとにますます過熱しており、神の全能性と知恵はそうした段階の一つ一つに示される。そのとき初めて、天地のすべてのものが神の知恵、全能性、そして特に神の實在を目撃したことになる。神は今日に至るまでこの同じ現実的な方法で自らの働きを実行し続けており、さらに自らの働きを実行する中で、自身の知恵と全能性を露わにしている。神はあなたがたに働きの各段階の背後にある真実を見せ、神の全能性を具体的にどう説明すればよいかを理解させ、さらに神の實在の決定的な説明を目のあたりにさせてくれるのだ。

ユダによるイエスの裏切りについては、創世に先だって運命づけられていたのではないかと疑問に思う人がいる。実際、聖霊は当時の実情に基づいてそれを計画したのだ。たまたまいつも資金を横領しているユダという名の人物がいたため、彼がその役割を演じ、その形で役立つように選ばれた。これはまさに現地の人材活用の例である。イエスは当初それに気づいておらず、後にユダのことが明らかにされて初めて知ることになった。もし他の誰かがその役割を演じることができたなら、その人物がユダの代わりにその役割を演じていただろう。運命づけられたことというものは、実際には聖霊がその瞬間に行なったことなのだ。聖霊の働きは常に自然発生的になされるものであり、聖霊はその働きをいつでも計画しいつでも実行できる。わたしがいつも、聖霊の働きは現実的で常に新しく、決して古くならず、常に最高度に新鮮だと言うのはなぜか。聖霊の働きは世界が創造されたときにすでに計画されていたわけではない――決してそうではないのだ。働きのすべての段階は、それぞれの時期に相応の結果を得ることになり、各段階が互いに干渉し合うことはない。多くの場合、あなたが自分で考えている計画は、聖霊の最新の働きにまったく匹敵しない。神の働きは、人間が論理で考えるほど単純なものではなく、人間が想像するほど複雑でもない。それはいつでもどこでも、人々のその時の必要に応じ

て施すことから成っている。神は人の実質について誰よりもよく知っており、だからこそ神の働きは何よりも人々の現実的な必要性に沿っているのだ。そのため人間の視点から言えば、神の働きは何千年も前に計画されていたように見える。神は今あなたがたの間に働きを行なっているが、いつもあなたがたの状態を見ながら働き語っており、一つ一つの状態に合わせて正しい言葉を発し、人々がまさに必要とする言葉を語っている。まず神の働きの最初の段階である、刑罰の時期を考えてみるとよい。この時期の後、人々が露わにすることと反抗心、そこから生じる肯定的な状態と否定的な状態、およびそうした否定的な状態がある点に達した際、人々が陥り得る最低の限界を基に、神は働きを行った。そしてこうした事柄を利用してはるかによい成果を上げたのである。つまり神はあらゆる時点で、人々の現状に基づいて維持のための働きを行い、働きの各段階を人々の実際の状態に従って実行するのだ。すべての被造物は神の手の中にあるのだから、神がそれらを把握していないはずがあるのか。神はなされるべき働きの次の段階を、いつでもどこでも人々の状態に応じて実行する。この働きが何千年も前に、前もって計画されていたものであるはずがなく、それは人間の観念にすぎない。神は自らの働きの効果を観察しながら働きを行なっており、その働きは継続的に深まり発展している。そして働きの結果を観察した後、神は次の段階の働きを実行し、多くのものを用いて徐々に推移を行い、時間とともに人々がその新しい働きを目にできるようにする。そのような働き方によって、人々の必要に合わせた施しが可能になるのだ。神はすべての人々を非常によく知っているからだ。このようにして、神は天国から自らの働きを実行する。そして肉となった神も同様に自らの働きを行なっており、実際の状況に応じて采配を行ない、人々の間で働いている。神の働きはいずれも世界の創造前に計画されたものではなく、前もって慎重に計画されたものでもなかった。世界が創造されてから二千年後、人間がとても堕落してしまったのを見たヤーウェは、預言者イザヤの口を用いて、律法の時代が終わった後の恵みの時代に、神が人類を罪から贖う働きをすることを預言させた。それはもちろんヤーウェの計画であったが、この計画もまた、神が当時観察した状況に応じて作られたものだった。決して神がアダムの創造後すぐにそれを考えていたわけではなかった。イザヤは単に預言を声に出しただけだが、ヤーウェは律法の時代にその働きの準備を前もって行なっていたわけではなかった。そうではなく、恵みの時代の初めにそれを実行に移し、そのときヨセフの夢の中に使者が現れて啓示を行い、神が受肉することを告げた。そのとき初めて、神の受肉の働きが始まったのだ。神は人々が想像するように、世界の創造の直後に自身の受肉の働きを準備していたのではない。それはただ人類の発達程度と、サタンに対する神の戦いの状況に基づいて決められたのだ。

神が受肉するときは、神の霊が人に降る。言い換えれば、神の霊が物理的な肉体をまとうのだ。神は地上で自らの働きを行うために到来するが、それは特定の限られた段階の働きをもたらすためではなく、神の働きはまったく無制限である。聖霊が肉で行う働きも、神の働きの結果によって決まり、神はそうした結果を用いて自らが肉で働きを行う期間を決定する。聖霊は神の働きのそれぞれの段階を直接露わにし、自らの働きを検証しながら進めていく。その働きは人間の想像力の限界を超えるほど超自然的なものではまったくない。それは天地と万物の創造時におけるヤーウェの働きと同様で、神はその計画と働きとを同時に行なった。神は光を闇から隔て、そして昼と夜が生まれた。それには1日を要した。2日目に空を造ったが、それにも1日を要し、それから陸と海、そしてそこに生きるすべてのものを造り、それにも1日を要した。神はこれを6日間続け、そして6日目に人間を創造し、人間にこの世のすべてのものを管理させた。そして7日目に万物の創造を完了し、休息をとった。神はこの7日目を祝福し、その日を聖なる日とした。神はこの聖なる日を定めることを、万物を創造する前ではなく、創造した後に決めたのである。この働きもまた、自然発生的に行われた。万物を創造する前、神は6日間で世界を創造し、7日目に休息するなど決めてはいなかった。事実は決してそうではなく、神はそんなことを口にもせず、計画もしなかった。万物の創造が6日間で完了し、7日目に休息するなどとは一切言っていない。神はただそのときによいと思われた通りに創造を行なったのだ。万物の創造が完了すると、すでに6日の時が経っていた。神が万物の創造を完了したのが5日目だったなら、神は6日目を聖なる日としただろう。しかし実際に神は6日目に万物の創造が完了したため、7日目が聖日となり、それが今日に至るまで続いている。そのため神の現在の働きも、それと同じ方法で実行されている。神はあなたがたの状況に応じて必要なことを語り、与えるのだ。つまり、霊は人々の状況に応じて働き語っており、常にすべてを見守り、いつでもどこでも働きを行う。わたしが行うこと、語ること、あなたがたにもたらすもの、そしてあなたがたに授けるものは、例外なくあなたがたが必要としているものである。ゆえに、わたしの働きは一つとして現実から離れてはおらず、すべてが現実である。あなたがたは皆、「神の霊はいつもすべてを見ている」ことを知っているはずだ。すべてが前もって決められていたなら、あまりにも新鮮味がないではないか。神が六千年分すべての計画を立て、人間を反抗的で不従順で、陰険かつ狡猾な、肉の墮落とサタンの性質、目の欲望、個々の耽溺といった性質を持つものとして運命づけたと、あなたは考えている。それらはいずれも神によって運命づけられたものではなく、すべてサタンの墮落の結果として起こったのである。中には次のように言う者もいるかもしれない。「神はサタンのことも把握していたの

ではないのか。サタンがこのように人を墮落させることは神が運命づけたことであり、その後神は人の間でその働きを行われたのだろう」と。実際に神が、サタンに人間を墮落させるよう運命づけるだろうか。神はただひたすら人類が普通に暮らせるようにと望んでいるのに、その生活を妨げたりするだろうか。そうであれば、サタンを倒して人間を救うなど無駄な努力ではないか。人間の反逆が運命づけられていたことなどありえようか。それはサタンの介入によって起こったことなのに、神によって運命づけられていたはずなどあろうか。あなたがたが理解している神の手中にあるサタンと、わたしが語っている神の手中にあるサタンとはまったく別物である。「神は全能で、サタンは神の手の中にある」というあなたがたの言葉に従えば、サタンが神を裏切ることはいえぬ。あなたは神は全能だと言ったではないか。あなたがたの認識はあまりに抽象的で現実味がない。人間は決して神の考えを見抜くことはできず、神の知恵を理解することもできないのだ。神は全能であり、そのことには何の偽りもない。大天使は当初、神から一部の権威を与えられたため、神を裏切った。もちろんそれは、蛇の誘惑に負けたエバのように、予期されない出来事だった。しかしどれほどサタンがその裏切りを行おうとも、それは神のように全能ではない。あなたがたが言ったように、サタンは強大なだけで、何を行なっても常に神の権威によって打ち負かされる。それが、「神は全能であり、サタンは神の手の中にある」という言葉の真意である。そのためサタンとの戦いは、一段階ずつ実行されなければならない。さらに神は、サタンの策略に対応して自身の働きを計画する。つまり神は時代に合わせて、人類に救いをもたらし、自らの全能性と知恵をあらわすのだ。また同様に、終わりの日における神の働きも、恵みの時代以前の早期には運命づけられておらず、次のような秩序立った運命付けはなかった。つまり第一に、人の外的性質を変える。第二に、人に神の刑罰と試練を受けさせる。第三に、人に死の試練を経験させる。第四に、人に神を愛する時代を経験させるとともに、被造物としての決意を表明させる。第五に、人に神の旨を見せて完全に神を知らしめ、そして最後に、人を完全にする、というものである。このようなことすべてを、神が恵みの時代に計画していたわけではなく、これらは現在の時代に計画され始めたのだ。サタンは神と同じように働きを行なっている。サタンはその墮落した性質を表しており、一方神は率直に語っていくらかの実質的なものを露わにしている。これが今日行われている働きであり、それと同じ働きの原理がはるか昔、世界が創造された後にも用いられていたのだ。

はじめに神はアダムとエバを創造し、また蛇も創造した。すべての被造物の中で、この蛇は最も有毒なものであった。その体は毒を含んでおり、サタンはその毒を利用した。エバを誘惑し罪に落とし入れたのは蛇だった。アダムはエバの後に罪

を犯し、二人はそれから善と悪の区別ができるようになった。もしヤーウェが、蛇がエバを誘惑し、エバがアダムを誘惑することを知っていたなら、なぜ彼ら全員を園の中に置いたのだろうか。それらの事柄を予測できたなら、ヤーウェはなぜ蛇を創造し、それをエデンの園の中に置いたのだろうか。なぜエデンの園には善悪の知識の木の果実があったのだろうか。ヤーウェは彼らに果実を食べさせようとしていたのだろうか。ヤーウェがやって来たとき、アダムもエバもヤーウェに会おうとしなかった。ヤーウェはそのときに初めて、彼らが善悪の知識の木の果実を食べ、蛇の策略に陥ったことを知った。最終的にヤーウェは蛇を呪い、アダムとエバも呪った。この二人が木の果実を食べたとき、ヤーウェはそれにまったく気づいていなかった。人間は墮落し、邪悪で性的に乱れたものとなり、しまいにはその心に抱くものはすべて邪悪で不正な汚れたものとなった。そのためヤーウェは、人間を創造したことを悔いた。その後、世界を洪水で破壊するという自らの働きを実行し、ノアとその息子たちが生き残った。一部の物事は実際、人々が想像するほど高度でも超自然的でもない。中には次のように尋ねる人もいる、「神は大天使が裏切ると知っていたいながら、なぜ大天使を創造したのか」と。事実は次のとおりである。地がまだ存在していなかったとき、大天使は天国の天使たちの中で最も偉大な存在であり、天国のすべての天使に対する権限を握っていた。それは神から大天使に与えられた権威だった。神を除いて、大天使は天国の天使たちの中で最も偉大な存在だった。後に神が人間を創造したとき、大天使は地上において、神へのさらなる背信を行なった。わたしに言わせれば、大天使が神を裏切ったのは、人間を支配し、神の権威を超越したかったからだ。エバを誘惑して罪に陥れたのは大天使であり、それは地上に自分の王国を建設し、人間を神に背かせて、代わりに自分に従わせたかったからだ。大天使は非常に多くのものを自分に服従させられることに気づいた。天使たちも、そして地上の人々も大天使に従っていた。鳥と獣、木々、森、山、川、そして地上のあらゆるものは、人であるアダムとエバの管理下にあり、アダムとエバは大天使に従っていた。そのため大天使は神の権威を超越し、神を裏切ろうと考えたのだ。後に大天使は多くの天使たちを率いて神に反逆させ、それらがさまざまな類の悪霊となった。今日までの人間の発達、大天使の墮落によるものではないか。人間が今日のような状態なのは、大天使が神を裏切り、人間を墮落させたからである。その段階的な働きは、人々が想像するような抽象的で単純なものではまったくない。サタンが神を裏切ったのには理由があるが、人々はそのような単純な事実を理解できない。天と地と万物を創造した神が、なぜサタンも創造したのか。神はサタンをととても嫌悪しており、サタンは神の敵であるのに、神はなぜサタンを創造したのか。サタンを創造することで、神は敵を創造したのではないのか。神は実

際には、敵を創造したのではなかった。神は天使を創造し、そしてその天使が後に神を裏切ったのだ。天使はその地位が非常に偉大になったため、神を裏切ろうと望んだ。それは偶然だったとも言えるが、同時に避けられないことでもあった。それは人がある程度まで成熟した後に、死を避けられないのと似ている。単に状況がその段階まで進展したのだ。中には次のように言う不屈きな愚か者もいる。「サタンはあなたの敵なのに、なぜあなたはそれを創造したのですか。大天使があなたを裏切るようになることを知らなかったのですか。あなたは永遠から永遠まで見通せるのではないのですか。その大天使の本性を知らなかったのですか。自分を裏切るとはっきり知っていたのに、なぜ大天使にしたのですか。その天使はあなたを裏切ただけでなく、数多くの天使を率いて人間の世界へ降り、人間を墮落させたというのに、あなたは今日に至るまで、六千年にわたる自らの経営（救いの）計画を完成させることができずにいる」と。このような言葉は正しいだろうか。そのように考えるとき、あなたは必要以上の問題を抱えているのではないか。また、次のように言う者もいる。「サタンが現在に至るまで人間を墮落させていなかったら、神がこのように人間に救いをもたらすことはなかった。そうであれば、神の知恵と全能性は目に見えなかった。どこに神の知恵があらわされることがあっただろうか。そのため神は、サタンのために人類を創造したのだ、その後に神自らの全能性を示すために。そうでなければ、人はどのようにして神の知恵を見出せるだろうか。人が神に抵抗したり反逆したりしていなければ、神の業をあらわすことも不要になる。すべての被造物が神を崇拝し、神に従っていたら、神は行うべき働きが何もなかっただろう」。これはさらに現実からかけ離れている。なぜなら神には汚れた部分はなく、すなわち神は汚れたものを創造しえないからである。神が今その業をあらわしているのは、ただ自らの敵を倒し、自らが創造した人間を救い、当初は神の支配下にあり神に属していたにもかかわらず神を憎み、裏切り、拒絶した悪魔たちとサタンを打ち倒すためなのだ。神はそれらの悪魔を倒し、そうすることで万物に自らの全能性を示したいと思っている。この世の人間と万物は今やサタンの支配下であり、邪悪な者に支配されている。神は自らの行為を万物にあらわし、そうすることで人々がみな神を知るようになることを望んでおり、それによってサタンを打ち倒し、神の敵を徹底的に滅ぼしたいと考えている。この働きのすべては、神の行為をあらわすことで成し遂げられる。神の被造物はすべてサタンの支配下にあるため、神は彼らに対して自身の全能性をあらわし、それによってサタンを倒すことを望んでいる。もしサタンがいなかったなら、神は自らの業をあらわす必要がなかっただろう。もしサタンの妨害がなかったなら、神は人間を創造してエデンの園で生活するよう導いていただろう。神はサタンの裏切りの前に、なぜ天使や大天使に自らの

業を一切あらわさなかったのか。もしも当初からすべての天使や大天使が神を知っており、神に従っていたなら、神はこうした無意味な働きを行なってはいなかっただろう。サタンと悪魔の存在のために、人々も神を拒絶し、反抗的な性質に満ちあふれている。そのため神は自らの行為をあらわすことを望んでいるのだ。神はサタンと戦うことを望んでいるため、自らの権威とそのあらゆる業を用いてサタンを倒さなければならない。そうやって神が人間の間で遂行する救いの働きにより、人々は神の知恵と全能性を知るようになる。神が今日行なっている働きは意義深く、一部の人々が次のように語るものとはまったく異なっている。「あなたのなさる働きは矛盾していませんか。この一連の働きは、あなたご自身を困らせているだけではないですか。あなたはサタンを創られ、そのサタンに自らを裏切らせ、反抗させた。あなたは人間を創造し、その人間をサタンに引き渡し、アダムとエバを誘惑することを許された。こうしたことすべてを意図的に行われたのに、あなたはなぜ人間を嫌悪するのですか。なぜサタンを嫌うのですか。すべてあなたがご自身で創られたのではないのですか。何を憎むことがあるのですか」。非常に多くの馬鹿げた人々がこのようなことを言う。彼らは神を愛することを望みながら、心の奥では神に不満を述べている。何という矛盾だろうか。あなたは真実を理解せず、あまりに多くの超自然的な思考を持ち、そして神が間違いを犯すとさえ主張している。何と愚かなことか。真実をもてあそんでいるのはあなただ。神が間違いを犯したのではない。中には何度も何度も次のような不満を言う者さえいる。「サタンを創造したのはあなたで、サタンを人間の世界に放り込み、人間を引き渡したのもあなたです。そして人間がサタンの性質を備えると、あなたはその人間を赦さず、逆に相応に憎んだ。当初あなたは人間をある程度愛されたが、今は人間を嫌悪している。人間を憎んだのはあなたですが、同時に人間を愛したのもあなたです。一体どうなっているんですか。これは矛盾していませんか」。あなたがたがどう解釈するかに関わらず、これが天で起こったことであり、大天使がこのように神を裏切り、人間がこのように墮落し、そして今日までこのようであり続けているのだ。あなたがたがそれをどう表現しようと、これが事のでんまつである。しかしあなたがたは、神が今日行なっている働きはすべて、あなたがたを救うためであり、サタンを倒すためであることを理解しなければいけない。

天使は特に脆弱でこれといった能力を持っていなかったため、権威を与えられるとすぐ傲慢になった。他の天使たちより地位が高い大天使は特にそうだった。大天使はすべての天使の王であり、何百万もの天使を率い、ヤーウェの下でその権威は他のすべての天使に勝っていた。大天使はさまざまなことに手を出したが、天使たちを率いて人の世界に降り、世界を統治することを望んだ。神は自らが全宇宙の

統治者だと言ったが、大天使は自分が全宇宙を統治すると主張し、それ以来神を裏切ることになった。神は天にもう一つの世界を創造していたが、大天使はその世界を統治したうえで人類の領域にも降りることを望んだ。神がそのような行いを認めることができただろうか。そのため神は大天使を打ちのめし、空中に投げ落とした。大天使が人間を墮落させてからずっと、神は人間を救うため戦いを続けており、大天使を倒すためにこれまで六千年を費やしている。全能の神に関するあなたがたの概念は、神が現在行なっている働きと相容れるものではなく、まったく非現実的で、非常に誤っている。実際に神は、神は大天使が裏切った後に初めて、大天使を自らの敵だと宣言したのだ。大天使が人の世界にたどり着いてから人間を踏みにじったのは、ただ裏切りによるものでしかなく、そしてそれこそが、人間がこの段階まで進んでしまった理由なのだ。その後、神はサタンに誓約した。「わたしはお前を倒し、わたしが創造したすべての人間を救う」。サタンはすぐには納得せずこう言った。「あなたが一体わたしをどうできるというのか。本当にわたしを空中へと打ち倒せるのか。本当にわたしを倒せるのか」。神は大天使を空中に投げ落とすと、それ以上大天使に注意を払うことはなく、その後に人間の救いと自らの働きを始めたが、サタンの妨害はまだ続いていた。サタンにはさまざまな能力があったが、すべては当初神がサタンに与えた力のおかげだった。サタンはそれを携えて空中へと落ち、今日までそれらを保ち続けている。大天使を空中へと打ち倒したとき、神は大天使の権威を取り上げなかったため、大天使は人間を墮落させ続けた。他方神は、創造されてまもなくサタンに墮落させられた人間を救い始めた。神は天にいる間、自らの行為をあらわさなかったが、地の創造に先立って、自らが天に創造した世界の人々に自らの行為を見せ、それによって天上でその人々を導いていた。神は人々に知恵と知性を与え、その世界で生きるように導いた。もちろんこのことはあなたがたの誰も聞いたことがないだろう。後に神が人間を創造すると、大天使は人間を墮落させ始め、地上ではすべての人間が大混乱に陥った。神はこのとき初めてサタンに対して戦いを開始し、人々はそのとき初めて神の業を目にするようになったのだ。当初、神の行為は人間から隠されていた。サタンは空中に投げ落とされた後、自分の好きなことをし続け、そして神は自らの働きを続行し、サタンに対する戦いを世の終わりまで続けている。今こそサタンが粉碎されるべき時である。神は最初サタンに権威を与え、後にサタンを空中に投げ落としたが、サタンは挑戦的なままだった。その後サタンは地上で人間を墮落させたが、神はそこで人間の経営を行っていた。神は人々の経営を用いてサタンを打ち倒す。サタンは人々を墮落させることで、人々の運命を終わらせ、神の働きを阻害する。一方、神の働きは人間の救いである。神が行う働きの段階の中で、人間を救うためでないものが

あるだろうか。人々を清め、義を行わせ、愛すべきものの姿を生きるようにさせるためのものでない段階があるだろうか。けれどもサタンのすることはそうではない。サタンは人間を堕落させるのであり、全宇宙で人間を堕落させるという働きを続けている。もちろん神も自らの働きを行っており、サタンになど構ってはいない。サタンがどれほどの権威を持っていようと、その権威は神によって与えられたものだ。神は実際には、サタンに自らの権威のすべてを与えてはいないため、サタンが何をしようとも神を超えることはなく、サタンは常に神の手の中にある。神は天にいる間、自らの行為を少しもあらわさなかった。ただサタンに権威のほんの一部を与え、他の天使たちを支配できるようにしただけだった。そのためサタンが何をしようとも、神の権威を超えることはできない。神がサタンに与えた権威がもともと限られたものだったからである。神が働きを行うと、サタンはそれを妨害する。終わりの日には、サタンの妨害は終わり、同様に神の働きも終わりを迎え、そして神が完全にしようと望む人間は完全にされることになる。神は人々を前向きに導く。神のいのちは生ける水であり、計り知れず、無限である。サタンはある程度まで人間を堕落させた。最終的に、いのちの生ける水が人を完全にし、サタンは邪魔したりその働きを実行したりすることができなくなる。それによって神はそれらの人々を完全に自らのものとできるようになるのだ。サタンは今もそれを受け入れることを拒んでおり、神に対抗し続けているが、神はサタンを気に留めない。神は言った、「わたしはサタンのあらゆる闇の力と、あらゆる闇の影響に勝利するであろう」と。それは肉においてなされるべき働きであり、受肉の意義でもある。つまり、終わりの日にサタンを倒すという働きの段階を完成させ、サタンに属するすべてのものを滅ぼすということだ。神のサタンに対する勝利は避けられない流れなのだ。実際、サタンははるか昔に敗北している。福音が赤い大きな竜の国全体に広がり始めたとき、つまり受肉した神が働きを始め、その働きが動き出したとき、サタンは完全に倒されたのだ。なぜならその受肉の目的こそ、サタンを倒すことだったからである。サタンは神が再び肉となって神の働きを遂行し始め、どんな力もその働きを止められないことを目にとると、愕然とし、あえてそれ以上の悪事を行わなかった。当初サタンは自らも多くの知恵を授かっていると思い、神の働きを妨害し邪魔をした。けれどもサタンは、神が再び肉となることや、その働きの中でサタンの反逆を人間への暴露と裁きのために利用し、それによって人間を征服しサタンを打ち負かすということは予想していなかった。神はサタンより賢明であり、神の働きはサタンをはるかに凌ぐ。だからわたしは以前こう述べたのだ、「わたしの働きはサタンの策略に応じて行われ、最終的にわたしは自らの全能性とサタンの無力さを示す」と。神は最前線で自らの働きを行い、サタンはその後ろをついてゆき、最

最終的に粉砕されることになる。サタンは何が自分を討ったのかすら知ることはないだろう。ただ粉々に打ち破られた後になって初めて真実に気づき、そのときにはすでに火の池で焼かれてしまっているのだ。サタンはそのとき完全に理解するのではないだろうか。そのときにはもう打つ手がなくなっているからだ。

この段階的かつ現実的な働きの中で、神の心はしばしば人間のための悲しみで重くなるため、サタンに対する神の戦いは六千年間続いており、神はこう語っている。「わたしは二度と再び人間を創造しないし、天使に権威を授けることもない」。それ以来、天使が働きを行うために地上に来るときは、ただ神に従って一定の働きを行うだけになり、神が天使に権威を与えることは二度となかった。イスラエルの人々が見た天使は、その働きをどのように遂行していたか。彼らは夢の中に現れ、ヤーウェの言葉を伝えた。イエスが十字架に張り付けにされてから3日後に復活したとき、大きな石を傍らに押したのは天使であり、神の霊が自らその働きを行なったのではなかった。天使はそのような働きを行うだけで、ただ補助的な役割を果たしていたのであり、権威は持っていなかった。神は二度と彼らに権威を授けるつもりがないからだ。神が地上で用いた人々は、一定期間働きを行なった後、神の地位に立つようになり、そして言った。「わたしは全世界を超越したい。第三の天に立ちたい。我々が主権を握って統治したい」。彼らは数日間の働きの後に傲慢となり、地上での主権を握ることを求め、新しい国の建国を求め、自分の足元にすべてをひれ伏させることを求め、第三の天に立つことを求めた。あなたは自分が神に使われている人に過ぎないことを知らないのか。あなたがどうやって第三の天に昇れるというのか。神は働きを行うため、声を上げることもなく静かにこの世にやって来て、ひそかに自らの働きを完遂してから去ってゆく。神は人間のように声を上げることはなく、むしろ現実的に自らの働きを遂行する。また神が教会へ入って行き、大声で「わたしはあなたがた全員を消し去る。あなたがたを呪い、罰する」と叫んだりすることも決してない。ただ自らの働きを続行し、それが終われば去ってゆくだけだ。病を癒し、悪霊を追い払い、講壇から他人に説教し、長く大げさな演説を行い、非現実的な事柄を討議している宗教の牧師たちは、みな芯まで傲慢だ。彼らは大天使の子孫でしかないのだ。

現在までの六千年にわたる働きを遂行したことで、神はすでに自らの行為の多くを示してきたが、そのおもな目的は、サタンを倒し、すべての人間に救いをもたらすことだった。神はこの機会を利用して、天のすべてのもの、地上のすべてのもの、海中のすべてのもの、そして神が創造した地上のあらゆるものに、神の全能性を知らしめ、神のすべての行為を目撃させる。神はサタンを倒した機会を捕らえて、人間に自らのすべての業を示し、神を褒めたたえさせ、サタンを倒した神の知

恵を賛美させる。地に、天に、そして海中にあるすべてのものが神に栄光をもたらし、神の全能性を褒めたたえ、神のすべての業を褒めたたえ、神の聖なる名前を叫ぶ。それは神がサタンを倒した証であり、サタンを征服した証であり、さらに重要なこととして、神が人間を救った証でもある。神の被造物すべてが、神に栄光をもたらし、敵の打倒と勝利の凱旋を褒めたたえ、偉大な勝利の王として神を褒めたたえる。神の目的はサタンの打倒だけではないため、神の働きは六千年間も続いている。神はサタンの打倒を通して人間を救い、サタンの打倒を通して自らのすべての業とすべての栄光を露わにする。神は栄光を得て、すべての天使たちは神のあらゆる栄光を見るだろう。天の使者たち、地上の人間たち、そして地上のすべての被造物は、創造主の栄光を見るだろう。これが神の行う働きである。天と地における被造物はすべて神の栄光を目の当たりにし、神はサタンを完全に打ち倒した後、意気揚々と凱旋し、人間に自らを褒めたたえさせることで、自らの働きにおける二重の勝利を成し遂げる。最終的にすべての人間は神によって征服され、抵抗したり反抗したりする者は神に一掃される。つまり、サタンに属する者すべてが一掃されるのだ。あなたは今神の多くの業を目撃しているが、依然として抵抗し、反抗的で、服従していない。心の中に多くの考えを抱き、自分のしたいことをして、自分の欲望と好みに従っている。それはすべて反抗であり、抵抗である。肉のため、自分の欲望のため、さらに自分自身の好みのため、世間のため、そしてサタンのために神を信仰することは、不浄である。それは本質的に抵抗であり、反抗である。現在、さまざまな種類の信仰があり、ある者は災害からの避難所を求め、ある者は祝福を得ることを求め、ある者は奥義を理解することを望み、またある者はお金を得ようとしている。これらはみなさまざまな形での抵抗であり、すべて神への冒とくである。人が抵抗したり反抗したりするというのは、こうした態度を言うのではないか。現在、多くの人々が不平を言い、不満を並べ、裁く。そうしたことはすべて、邪悪な者がすることであり、人間の抵抗と反抗の一例である。そのような者たちはサタンに取り憑かれ支配されている。神のものとされる人々は、完全に神に従う人々であり、一度はサタンに墮落させられたものの、神の現在の働きによって救われ征服され、試練に耐えた人々であり、そして最終的に完全に神のものとされて、もはやサタンの領域で生きることなく、不義から解き放たれた結果、聖く生きることを望んでいる人々である。彼らは最も高潔な人々であり、実際に聖なる者たちなのだ。もしあなたの現在の行為が神の要求の一部にでも沿っていない場合、あなたは排除されるだろう。そのことに議論の余地はない。すべては今起きていることにかかっており、あなたがあらかじめ運命づけられ選ばれていたとしても、あなたの結末は今日のあなたの行為によって決まるのだ。もし今あなたが遅れずについて

来れないなら、あなたは排除されるだろう。今ついて来れないのなら、どうして今後ついて来られるようになるだろうか。このようなすばらしい奇跡が眼前に現れているのに、あなたはまだ信じようとしない。それならば、将来神が自らの働きを終え、もうそのような働きをしなくなったときに、どうして神を信じられるだろうか。その時になれば、あなたが神に従うのはさらに不可能になるだけだ。後に神は、受肉した神の働きに関するあなたの態度と認識、そしてあなたの経験に基づいて、あなたが罪深いのか正しいのか、または完全にされるか排除されるかを判断することになるだろう。あなたは今明確に理解しなければならない。聖霊の働き方とは、今日のあなたの振る舞いに従って、あなたの結末を判断するというものなのだ。誰が今日の言葉を語るのか。誰が今日の働きを行うのか。誰が今日あなたが排除される存在だと決めるのか。誰があなたを完全にすると決めるのか。それはわたしが自ら行うことではないか。わたしがそれらの言葉を語るのであり、わたしがその働きを実行するのだ。人々を呪い、罰し、裁くことは、すべてわたしの働きの一部である。最終的には、あなたを排除することもわたしの決断となる。すべてはわたしが行うことなのだ。あなたを完全にすることはわたしが行うことであり、あなたが祝福を享受できるようにするのもわたしが行うことである。それらはすべてわたしが行う働きなのだ。あなたの結末はヤーウェによって運命づけられているのではない。それは今日の神によって決定されるのだ。それはまさに今決められているのであり、はるか昔の創世以前に決められたことではない。不届きな者たちはこのように言う、「あなたの目は何かおかしくなっていて、わたしを正しく見ていないのでしょう。最終的には霊が暴くことをご覧になるはずですよ」と。イエスは当初、ユダを自分の弟子として選んだ。人々はこう尋ねる、「イエスはなぜ自分を裏切ることになる弟子を選んだりしたのか」と。当初、ユダにはイエスを裏切る意図はなく、裏切りはただ後になって起こったことだった。当時イエスはユダをかなり好意的に見ており、ユダを自身に従わせ、彼に金銭面の事柄を任せた。ユダがお金を使い込むと知っていれば、そのようなことをユダに任せはしなかっただろう。イエスは当初、ユダが不正直で嘘つきなことや、兄弟姉妹を騙すことを知らなかったと言えるだろう。後にユダがイエスに一定期間付き従った後、イエスはユダが兄弟姉妹を甘言で騙し、神を騙すのを見た。人々もユダが金袋のお金を取るくせがあることに気づき、それをイエスに告げた。イエスはそのとき初めて、そうしたことをすべてに気づいたのだ。イエスは十字架による張り付けの働きを行うことになっており、自分を裏切る者が必要だったため、そしてユダがその役割にちょうどぴったりだったため、このように言った。「この中にわたしを裏切る者がいる。人の子はこの裏切りを用いて張り付けにされ、3日後に甦ることになる」と。当時、イエスは実際には

自らを裏切らせるためにユダを選んだわけではなかった。逆に、イエスはユダが忠実な弟子となることを望んでいた。ユダは意外にも主を裏切る強欲な堕落した人物だったため、イエスはその状況を利用して、ユダをその役割に選んだのだ。もしイエスの12人の弟子すべてが忠実であり、ユダのような者が一人もいなかったら、イエスを裏切る者は結局弟子以外の者となっていただろう。けれどもちょうどそのとき弟子たちの中に賄賂を喜んで受け取る者、すなわちユダがいた。そのためイエスはユダを用いて、自らの働きを完成させたのだ。何と単純なことか。イエスは働きを始めたときに、あらかじめそれを決めてはおらず、物事がある段階に差し掛かったときにそれを決断しただけだった。それはイエスの決断であり、すなわち神の霊自身の判断であった。当初、ユダを選んだのはイエスだった。ユダは後にイエスを裏切ったが、それはイエス自身の最後をもたらすために聖霊が行なったことだった。それはその時点で行われた聖霊の働きだったのだ。イエスはユダを選んだとき、ユダが自らを裏切るとはまったく考えていなかった。イエスが知っていたのは、彼がイスカリオテのユダであるということだけだ。あなたがたの結末もまた、今日のあなたがたの従順の程度に従って、そしてあなたがたのいのちの成長の度合いに従って判断されるのであり、世界の創造時に運命づけられていたというような人間の観念に従って判断されるのではない。こうしたことは明確に理解しておかなければならない。この働きはいずれも、あなたが想像するように実行されるものではないのだ。

呼び名と身分について

神に用いられるのにふさわしい者になりたいのであれば、神の働きを理解し、神が過去に行った働き（新約聖書と旧約聖書に記されている）を知り、さらに神の今日の働きを知らなければならない。つまり、六千年にわたって行われた神の三段階の働きを知らなければならないのである。福音を広めるよう求められたとしても、神の働きを知らずに広めることは不可能である。あなたがたの神は聖書、旧約聖書、そして当時のイエスの働きと言葉について何を語ったのかと、あなたに質問する人がいるかもしれない。あなたが聖書の内幕について話せなければ、相手は納得しないだろう。当時イエスは、弟子たちに旧約聖書のことを数多く語った。彼らが読んだのは、すべて旧約聖書の記述である。新約聖書は、イエスが十字架にかけられてから数十年後に書かれたに過ぎない。あなたがたは福音を広めるにあたり、おもに聖書の内情と、イスラエルにおける神の働き、つまりヤーウェが行った働きを把握しなければならず、イエスが行った働きも理解しなければならない。すべての

人が最も関心を持っているのはこのような問題であるが、働きのこれら二段階にまつわる内幕を、彼らはまだ聞いていない。福音を広める際には、今日の聖霊の働きに関する話はひとまず脇に置いておくことだ。この段階の働きは彼らの理解を超えている。なぜなら、あなたがたが追い求めているのは最も高尚なもの――神についての認識、聖霊の働きに関する認識――であり、この二つの事柄以上に高尚なものはないからである。最初に高尚なことを話してしまえば、彼らの手には負えないだろう。と言うのも、聖霊によるそのような働きを経験した者などいないからである。それは前例がなく、人には受け入れ難いものなのだ。彼らの経験は古びた過去のものに過ぎず、たまに聖霊の働きがいくらか含まれているだけである。彼らが経験するのは、今日の聖霊の働きでも、今日の神の旨でもない。いまだ古い慣習に従って行動しており、彼らには新たな光も、新しいものもない。

イエスの時代、聖霊は主にイエスを通して働きを行い、一方ヤーウェに仕えた者たちは祭司の服をまとい、揺るぎない忠誠心でもって神殿で仕えた。彼らには聖霊の働きもあったが、神の現在の旨を把握できず、古い慣習に沿ってヤーウェに忠誠を尽くしてただけであり、新たな導きはなかった。イエスが来て新しい働きをもたらしても、神殿で仕えるそれらの者たちには、新しい導きも新しい働きもなかった。彼らは神殿で仕えながら、単に古い慣習を維持するだけで、神殿を去らなければ新たな入りを得ることは一切できなかった。新しい働きはイエスによってもたらされたが、イエスは神殿に入って働きを行うことはしなかった。神の働きの範囲がかなり前から変化していたので、神殿の外だけで働きを行ったのである。彼は神殿の中で働かず、人が神殿で神に仕えても、それは古いやり方を維持することにしか役立たず、新しい働きをもたらすことはできなかった。それと同様に、現在の宗教的な人々はいまだ聖書を崇拜している。あなたが福音を宣べ伝えようとする、彼らは聖書の言葉に関する些細なことをあなたに投げつけ、多くの証拠を見つけてあなたを黙らせ、啞然とさせるだろう。そしてあなたにレッテルを貼り、あなたがたの信仰は愚かしいと思うはずだ。彼らは、「あなたは神の言葉である聖書も知らずに、どうして神を信じているなどと言えるのか」と言うだろう。そうしてあなたを見下し、こうも言うだろう。「あなたがたが信じているのが神なら、なぜその神はあなたがたに旧約聖書と新約聖書に関するすべてのことを話さないのか。あなたがたの神は、その栄光をイスラエルから東方にもたらしたのに、なぜイスラエルで行われた働きを知らないのか。なぜイエスの働きを知らないのか。あなたがたが知らないのであれば、それは教えられていない証拠だ。二度目に受肉したイエスというなら、どうしてこれらのことを知らないのか。イエスはヤーウェの行った働きを知っていたのに、どうしてあなたがたの神は知らないのか」。その時が来れば、宗

教的な人はみなあなたにこのような質問をするだろう。彼らの頭はそのような考えで一杯なのだから、どうして尋ねずにいられようか。この流れの中にいるあなたがたは、聖書に執着していない。なぜなら、神が現在一歩ずつ行いう働きに歩調を合わせ、段階ごとに行われてきたその働きを自ら目の当たりにし、三段階の働きをはっきり見てきたので、聖書は脇へ置いて、それを研究するのはもう止めないわけにはいかなかったからである。しかし彼らは、この段階ごとの働きを知らないのだから、聖書を研究せずにはいられない。中にはこう尋ねる人もいるだろう。「受肉した神によってなされる働きと、昔の預言者や使徒たちの働きとのあいだには、どういった違いがあるのか。ダビデも主と呼ばれていたし、イエスもそう呼ばれていた。二人が行った働きは違うが、呼ばれ方は同じだった。なぜ二人の身分が同じではなかったのか、教えてほしい。ヨハネが目撃したのは一つのビジョンであり、それは聖霊から出たものでもあり、ヨハネは聖霊が伝えようとする言葉を話すことができた。それなのに、なぜヨハネの身分はイエスの身分と違うのか」。イエスによって語られた言葉は、神を完全に表すことができ、神の働きを完全に表すことができた。ヨハネが見たものは一つのビジョンであって、神の働きを完全に表すことはできなかった。ヨハネ、ペテロ、そしてパウロは、イエスと同じく多数の言葉を語ったが、彼らがイエスと同じ身分を持っていなかったのはなぜか。それはおもに、彼らの働きが違ったからである。イエスは神の霊を表しており、自ら働く神の霊だった。新しい時代の働き、それまで誰も行ったことのない働きをしたのである。イエスは新たな道を切り開き、ヤーウェを表し、神自身を表した。一方、ペテロ、パウロ、そしてダビデは、何と呼ばれていたかに関係なく、神の被造物としての身分だけを表し、イエスカヤーウェによって遣わされただけであった。ゆえに、いかに多くの働きをしようとも、どれほど大きな奇跡を行おうとも、彼らはやはり神の被造物に過ぎず、神の霊を表すことはできなかったのである。彼らは神の名において、もしくは神に遣わされて働いた。さらに、彼らはイエスあるいはヤーウェによって始められた時代の中で働いたのであり、その他の働きは一切しなかった。結局のところ、彼らは神の被造物に過ぎなかったのだ。旧約では、多くの預言者が預言を語ったり、預言書を書いたりした。誰一人として彼らが神だとは言わなかったが、イエスが働き始めるやいなや、神の霊がイエスを神であると証しした。それはなぜか。この時点で、あなたはすでに知っているはずだ。以前、使徒や預言者たちは様々な書簡を記し、また多くの預言をした。後に人々は、その一部を選んで聖書に収めたが、失われたものもあった。彼らによって語られた言葉はすべて聖霊から出たものだと言う人もいるが、それらのうち、良いとみなされているものと悪いとみなされているものがあるのはなぜか。また、選ばれたものとそうでないものがある

のはなぜか。それらが本当に聖霊によって語られた言葉ならば、人が選ぶ必要はあったのか。イエスによって語られた言葉の記述と、イエスの行った働きの記述が、四つの福音書でそれぞれ異なるのはなぜか。これは、それらを記録した人間によるミスではないのか。中にはこう尋ねる人もいるだろう。「パウロや新約聖書の他の著者によって記された書簡と、彼らが行った働きは、部分的には人間から生じたものであり、人間の観念が混ざっている。だから、あなた（神）が今日語る言葉の中には、人間による不純がないのだろうか。それらは本当に人間の観念をまったく含んでいないのか」。神によってなされるこの段階の働きは、パウロや多くの使徒と預言者たちが行った働きとまったく異なる。身分に違いがあるだけでなく、基本的に、実行される働きに違いがあるのだ。パウロは打たれて主の前に倒れた後、聖霊に導かれて働き、遣わされた者となった。そのため諸教会に書簡を書き送ったが、それらの書簡はすべてイエスの教えに従うものだった。遣わされたパウロは、主イエスの名において働いたが、到来した神自身は誰の名においても働かず、自身の働きにおいて神の霊だけを表した。到来した神は、自身の働きを直接行ったのである。神が人によって完全にされることはなく、神の働きが人間の教えを基に行なわれることもなかった。この段階の働きにおいて、神は自らの経験を語ることで導くのではなく、自身が持つものに依じて直接働きを実行する。例えば効力者の試練、刑罰の時、死の試練、神を愛する時などである……。これらはどれも以前になされたことがない働きであり、人間の経験というよりもむしろ、現在の時代の働きである。わたしが語った言葉の中で、どれが人間の経験なのか。それはすべて霊から直接出るものであり、霊によって発せられるものではないのか。それは単に、あなたの素質が乏しいために真理を見極めることができないだけだ。わたしが語るところの実践的ないのちの道とは、進むべき道を示すものであり、今まで誰もそれを語ったことがなく、誰もこの道を経験したことがなく、この現実を知った者もない。わたしがこれらの言葉を発するのに先立ち、それを語った者は一人もいないのだ。このような経験を語った者は一人もおらず、そのような詳細を語った者もなく、さらには、そうした状態を指摘してこれらの事柄を明らかにする者もいなかったのである。わたしが今日導く道は、いまだかつて誰も導いたことがない道であり、仮に人によって導かれるならば、それは新たな道ではないだろう。パウロとペテロを例にとろう。イエスが道を導く前、彼らには自分自身の経験がなかった。イエスが道を導いて初めて、イエスによって語られる言葉と、イエスによって導かれる道を経験したのであり、そこから多くの経験を得て、それらの書簡を記したのである。よって、人間の経験は神の働きと同じではなく、神の働きは人間の観念や経験によって記述された認識と同じものではない。何度も繰り返し言ってきたが、現

在わたしは新たな道を導き、また新しい働きを行っているが、わたしの働きと発する言葉は、ヨハネや他のすべての預言者たちのものとは異なる。わたしはまず経験を得てから、それについてあなたがたに話すようなことは決してしない——そのようなことは絶対にない。そうだとしたら、それはずっと以前にあなたがたを遅らせたのではないだろうか。過去には、多くの者たちが語る認識も高尚なものとしていたが、彼らの言葉はみな、いわゆる霊的人物と呼ばれる者たちの言葉を基に語られたに過ぎない。そのような言葉は道を導いたわけではなく、彼らの経験や彼らが見たもの、そして彼らの認識に由来するものだった。その一部は彼らの観念に由来し、別の一部は彼らがまとめた経験から成っていた。今日、わたしの働きは、そうした人たちの働きとは性質をまったく異にする。わたしは他者によって導かれた経験もなければ、他者によって完全にされるのを受け入れたこともない。さらに、わたしが語って説いたすべてのことは、他の人のものとは異なっており、他の誰かによって語られたことのないものである。今日、あなたがたが誰であるかにかかわらず、あなたがたの働きは、わたしが語る言葉に基づいて行われる。これらの言葉と働きなくして、誰がこのようなこと（効力者の試練、刑罰の時……）を経験し、そのような認識について語ることができようか。あなたは本当にそれを見極められないのか。働きの段階に関係なく、わたしが言葉を発するやいなや、あなたがたはわたしの言葉に沿って交わり始め、わたしの言葉に沿って働くが、それはあなたがたの誰一人として考えたことのない道である。あなたはここまで至りながら、これほど単純明快な問題も理解できないのか。それは誰かが考え出した道でも、霊的人物の道に基づくものでもない。それは新たな道であり、かつてイエスが語った言葉の多くでさえ、もはや廃れている。わたしが語るのは、新しい時代を切り開く働きのことであり、その働きは他から完全に独立したものであって、わたしが行う働きとわたしが語る言葉はすべて新しいものである。これこそ今日の新しい働きではなかろうか。イエスの働きもそれと同じようなものだった。それもまた、神殿の人々の働きとは違い、パリサイ人の働きとも異なり、イスラエルのすべての民の働きともまったく似ていなかった。人々はイエスの働きを見た後、「それは本当に神が行った働きなのか」を判断できなかった。イエスはヤーウェの律法に固執しなかった。人を教えに来たとき、彼が語ったことはすべて新しく、昔の聖者や旧約の預言者たちが語ったこととは違っていたので、人々は確信を持てずにいた。人間にとって最も対処が難しいのはこの点である。この新しい段階の働きを受け入れる前、あなたがたのほとんどが歩んできた道は、霊的人物の道を基に実践し、入るためのものだった。しかし今日、わたしが行う働きはそれと大きく異なっているので、あなたがたは、それが正しいかどうかを判断することができない。わたしは、あなたが

前にどのような道を歩んできたかなど気にかけないし、誰の「食べもの」を食べたか、誰を「父」とみなしてきたかにも興味がない。わたしはすでに来ており、人を導く新しい働きをもたらしたのだから、わたしに付き従う者はみな、わたしが言うことに従って行動しなければならない。あなたの「一族」にどれほど権力があるろうと、あなたはわたしに付き従わなければならない。これまでの習慣通りに行動してはならず、あなたの「育ての父」はその役目を終えるべきで、あなたは自分の神の前に出て、自身の正当な分け前を求めるべきである。あなたのすべてはわたしの手中にあり、あなたは育ての父に盲目的過ぎる信仰を捧げるべきではない。育ての父はあなたを完全に支配することができないのだから。今日の働きは独立したものである。わたしが今日語るすべてのことは、明らかに過去の礎を基にしてはいない。これは新しい始まりであり、もしあなたが、それは人の手によって作られたものだと言うなら、救いがたいほど盲目な人である。

イザヤ、エゼキエル、モーセ、ダビデ、アブラハム、そしてダニエルは、イスラエルの選民の指導者ないし預言者だった。なぜ彼らは神と呼ばれなかったのか。なぜ聖霊は彼らを証ししなかったのか。イエスが働きを始め、語り始めるやいなや、なぜ聖霊はイエスを証ししたのか。なぜ聖霊は他の者たちを証ししなかったのか。肉なる人間であった彼らはみな「主」と呼ばれた。その呼び名に関係なく、彼らの働きがその存在と実質を表し、彼らの存在と実質は彼らの身分を表していた。彼らの実質は、彼らの呼び名と無関係である。それは、彼らが表現したこと、そして彼らが生きた物事によって表される。旧約聖書においては、誰かが「主」と呼ばれることは別に不思議なことではなく、どのような呼び方をしてもよかったのだが、その人の実質と本来の身分は不変だった。偽キリストや偽預言者、あるいは人を惑わす者の中にも「神」と呼ばれる人がいるではないか。それではなぜ、彼らは神ではないのか。それは、彼らには神の働きが行えないからである。彼らは根本的に人間であり、人々を惑わす者であり、神ではないので、神の身分は持っていない。ダビデも十二部族のあいだで主と呼ばれていたではないか。イエスも主と呼ばれていたが、なぜイエスだけが受肉した神と呼ばれたのか。エレミヤもまた「人の子」として知られていたではないか。それにイエスも「人の子」として知られていたではないか。なぜイエスは神の身代わりとして十字架にかけられたのか。それは、イエスの実質が違っていただけではないのか。イエスの行った働きが違っていただけではないのか。呼び名が大事なのか。イエスも人の子と呼ばれたが、彼は神による最初の受肉であり、権力を担うために、そして贖いの働きを成し遂げるために来たのである。これは、イエスの身分と実質が、「人の子」と呼ばれた他の人たちと異なっていたことを証明している。聖霊に用いられた者たちの言葉はすべて聖霊から出た

ものである、とあえて言う人が今日あなたがたの中にいるだろうか。そのようなことをあえて言う人がいるだろうか。そのようなことを言うなら、エズラの預言書が除外され、昔の聖者や預言者たちが書いた書物も同じように扱われたのはいったいなぜか。それらがすべて聖霊から出たものならば、そうした気まぐれな選択をあえてするのはなぜか。あなたに聖霊の働きを選ぶ資格があるのか。また、イスラエルの物語も多数除外された。このような過去の記述がすべて聖霊から出たものだと思えるなら、一部の書が排除されたのはなぜか。それらがみな聖霊から出たものであれば、すべて保管しておいて、諸教会の兄弟姉妹に送って読ませるべきである。それを人間の意図によって選択したり処分したりすべきではない。そのようなことは間違っている。パウロとヨハネの経験には個人的な洞察が混じり込んでいると言っても、それは彼らの経験と認識がサタンから出たものだという意味ではなく、彼らの個人的な経験や洞察があったというだけのことである。彼らの認識は当時の実際の経験を背景にして生まれたものであり、そのすべてが聖霊から出たものだとは誰が自信を持って言えるだろうか。四つの福音書がすべて聖霊から出たものなら、マタイ、マルコ、ルカ、そしてヨハネが、イエスの働きについてそれぞれ違うことを言っているのはなぜか。それを信じないというなら、聖書の中の、ペテロが主を三度否定する話を読んでみなさい。四つの書はすべて違い、それぞれに特徴がある。多くの無知な人たちは言う。「受肉した神もまた人間であるのなら、その方の語る言葉は完全に聖霊から出るものだと言えるのか。もしパウロとヨハネの言葉に人の意志が混じっているのなら、神が語る言葉には本当に人の意図が混ざっていないのか」。そんなことを言う人たちは盲目にして無知である。四つの福音書を注意して読みなさい。イエスが行ったこと、イエスが語ったことに関する記録を読んでみなさい。それぞれの記述がまったく異なっており、いずれも違う視点を有している。これらの福音書の著者によって書かれたものがすべて聖霊から出たものならば、どれも同じで一貫しているはずだ。それでは、相違があるのはなぜなのか。そんなことも見抜けないのなら、人間は極めて愚かではないか。神を証しするよう求められたならば、あなたはどのような証しをすることができるのか。そのような認識で神を証しできるのか。「ヨハネとルカによる記録に人間の意図が混ざっているなら、あなたがたの神が語った言葉にも人間の意図が混ざってはいないのか」と他の人に訊かれたら、あなたは明確に答えられるだろうか。ルカとマタイは、イエスの言葉を聞き、イエスの働きを見た後、自らの認識を、イエスによる働きの事実の一部を詳しく述べていくという回想の形で語った。彼らの認識はひとえに聖霊によって明かされたものだ、あなたは言えるのか。聖書以外にも、彼らより優れた認識を持つ霊的人物が大勢存在したのに、なぜそういう人たちの言葉は後世の人によって取

り上げられなかったのか。彼らも聖霊に用いられた者ではなかったのか。今日の働きにおいて、わたしはイエスの働きを土台としてわたし自身の識見を語っているのではなく、イエスの働きを背景としてわたし自身の認識を述べているのでもないことを知rinaさい。イエスは当時どのような働きをしたのか。そして今日、わたしはどのような働きをしているのか。わたしの言動は前例がないものである。わたしが今日歩んでいる道は、以前に誰も歩んだことのない道であり、過去の時代と世代の人々が一度も歩んだことのない道である。今日、この道が開かれたわけだが、それは霊の働きではないのか。過去の指導者はみな、たとえそれが聖霊の働きであっても、他の人たちを基礎として自らの働きを行ってきた。しかし、神自身の働きは違う。イエスによる働きの段階も同じであり、イエスは新たな道を切り開いた。到来したイエスは天国の福音を宣べ伝え、人は悔い改めて罪を告白すべきだと説いた。イエスがその働きを終えた後、ペテロやパウロ、そして他の人々がイエスの働きを実行し始めた。イエスが十字架にかけられ天に昇った後、彼らは十字架の道を宣べ伝えるために霊によって遣わされたのである。パウロの語った言葉は高尚なものだったが、それもまたイエスが語ったことによって築かれた土台、すなわち忍耐、愛、苦難、かぶり物を着けること、バプテスマを受けることなど、その他の守るべき教義に基づいていた。それらはどれもイエスの言葉を土台として語られたのである。彼らは新たな道を切り開くことができなかった。それは彼らが神に用いられた人間に過ぎなかったからである。

当時、イエスの言葉と働きは教義に固執したものではなく、彼が旧約聖書の律法に従って働きを実行することもなかった。それは、恵みの時代に行われるべき働きに従って行われたのである。イエスは自ら生み出す働き、自らの計画、そして自らの職分に沿って尽力したが、旧約聖書の律法に従って働くことはしなかった。イエスが行ったことのうち、旧約の律法に基づくものは一つもなかった。また、イエスは預言者たちの言葉を実現させるために、到来して働いたのでもなかった。神によるどの段階の働きも、とりわけ昔の預言者たちの預言を成就させるためになされたのではなく、教義に従うため、あるいは意図的に預言者たちの預言を実現させるために来たのでもなかった。それでも、彼の行為が昔の預言者たちの言葉を混乱させることはなく、彼が過去に行った働きの妨げとなることもなかった。イエスの働きの顕著な点は、いかなる教義にも縛られず、その代わりに彼自身がなすべき働きを行うことだった。彼は預言者でも先見者でもなく、実際に到来して自身がなすべき働きを行う行動の人であり、自身の新たな時代を始め、新たな働きを実行するために来た。もちろん、到来して自身の働きをなしたイエスは、旧約聖書の昔の預言者たちが語った多くの言葉を成就させてもいる。そして今日の働きもまた、旧約聖書

の昔の預言者たちの預言を成就させている。それは単に、わたしはその「黄ばんだ古い暦」を掲げないというだけのことだ。と言うのも、わたしにはなすべき働き、あなたがたに語るべきことがさらにあるからであり、その働きとそれらの言葉は聖書の聖句を説明するよりはるかに重要である。なぜなら、そのような働きは、あなたがたにとってさほど意義も価値もなく、あなたがたの助けになることも、あなたがたを変えることもないからだ。わたしは聖書の文章を成就するために新しい働きをするわけではない。神が聖書の昔の預言者の言葉を成就するためだけに来たのであれば、受肉した神と昔の預言者たちのどちらが偉大なのだろう。結局のところ、預言者たちが神を支配しているのか、それとも神が預言者たちを支配しているのか。あなたはこれらの言葉をどう説明するのか。

当初、自身の職分を正式に始めていなかったころ、イエスは自身に付き従っていた弟子たちのように、神殿で集会に参加し、讃美歌を歌い、神を称え、旧約聖書を読んだ。イエスがバプテスマを受けて立ち上がったとき、霊が正式にイエスへと降臨して働きを始め、イエスの身分と果たすべき職分を明らかにした。それまでは誰も彼の身分を知らず、知っていたのはマリアだけで、ヨハネでさえ知らなかった。イエスがバプテスマを受けたのは二十九歳のときだった。バプテスマを受けると天が開け、次のような声が聞こえた。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。イエスがバプテスマを受けた後、聖霊がそのようにイエスを証しし始めた。二十九歳でバプテスマを受ける前のイエスは、普通の人としての生活を送り、食べるべきときに食べ、ごく普通に寝起きし、服をまとい、他の人たちと違う点は何もなかった。しかし、それはもちろん、人間の肉眼にはそのように見えたということである。イエスも時に弱くなることもあれば、物事を見極められないこともあった。成長するにつれてその知恵も増したと、聖書に書かれている通りである。それらの言葉は、彼が平凡かつ普通の人間性を持っていて、他の普通の人々と特に違うところが何もなかったことを示しているに過ぎない。イエスも普通の人として成長し、特別なところは一切なかったが、神の配慮と守りのもとにあった。バプテスマを受けた後、イエスは試みを受けるようになり、それに続いて自身の職分を果たし、働きを行い始め、力、知恵、そして権威を持つようになった。これは、バプテスマの前には聖霊がイエスの中で働かなかった、もしくは、イエスの中に聖霊がなかったという意味ではない。バプテスマの前にも、聖霊はイエスの中に宿っていたが、その働きを正式に始めてはいなかった。と言うのも、神が働く「時」には制限があり、さらに、普通の人には普通の成長過程があるからである。聖霊は常にイエスの中に宿っていた。誕生したとき、イエスは他の人間とは違っており、明けの明星が現れた。またイエス誕生の前には、ヨセフの夢の中に天使が現れ、マリ

アが男の子を産むこと、そしてその子を聖霊によって身ごもることを告げた。イエスがバプテスマを受けた後、聖霊は働きを始めた。しかしそのことは、聖霊がイエスの上に降臨したばかりだったという意味ではない。聖霊がイエスの上に鳩のように降りたという言葉は、イエスの職分が正式に始まったことを指している。神の霊は以前からイエスの中に宿っていたが、まだその時が来ていなかったもので、イエスは働きを始めておらず、また霊も軽率に働きを始めることはなかった。霊はバプテスマを通してイエスを証ししたのである。イエスが水から上がったとき、霊がイエスの中で正式に働きを始めた。それは、神の受肉した肉体がその職分を果たし始めたこと、そして贖いの働きを始めたことを意味する。つまり、恵みの時代が正式に始まったのである。このように、神がどのような働きを行おうとも、神の働きには時があるのだ。バプテスマの後、イエスには特に変化は見られず、元の肉体のままだった。それは単に、彼が自身の働きを開始し、自身の身分を明らかにし、権威と力に満ちていたということである。その意味で、イエスは以前と違っていた。イエスの身分は異なるものになり、つまり地位が大きく変わったのである。それは聖霊の証しであり、人間によってなされた働きではなかった。最初、人々にはそのことが分からず、聖霊がイエスを証しするようになってから多少分かるようになった。仮にイエスが聖霊によって証しされる前に偉大な働きを行ったとしても、神自身による証しを伴っていなければ、イエスの働きがいかに偉大でも、人々がイエスの身分を知ることは決してなかっただろう。なぜなら、それを人間の目で見ることはいできないからである。聖霊による証しという段階がなければ、イエスを見て受肉した神だと気づく者は一人としていなかっただろう。聖霊の証しを受けた後、イエスが何の変化もないまま以前と同じように働いていたなら、何の効果もなかったはずであり、このことの中に、聖霊の働きがおもに示されている。聖霊は証しした後、自身を表さなければならなかった。そうすることで、イエスが神であり、彼の中に神の霊が宿っていたことを、あなたがはっきり見られるようにするためである。神の証しは間違っておらず、それはその証しが正しいことを証明できた。聖霊の証しを受ける前後で働きが同じだったなら、神の肉における職分も、聖霊の働きも際立つことはなく、特に違いが認められないので、人間が聖霊の働きを認識するのは不可能だっただろう。聖霊は証しを行った後、その証しを守らなければならなかったもので、過去のものとは異なる知恵と権威をイエスにおいて示す必要があった。もちろん、これはバプテスマによる効果ではなかった。バプテスマは単なる儀式であって、イエスが自身の職分を果たす時を示す手段に過ぎなかった。そうした働きは、神の偉大なる力を明らかにし、聖霊の証しをはっきりさせるためのものであって、聖霊はこの証しに対して最後まで責任を負う。イエスも自身の職分を果たす前は、

様々な場所で説教を聞き、福音を説いて宣べ伝えた。自身の職分を果たす時がいまだ来ておらず、また神自身が謙虚にも肉体の中に隠れ、機が熟すまでは何の働きもしなかったのも、イエスは偉大な働きを何ら行わなかったのだ。イエスがバプテスマの前に働きを行わなかった理由は二つある。一つは、聖霊がいまだ正式にイエスへと降臨して働いていなかった（つまり、聖霊がそのような働きをする力と権威をイエスに授けていなかった）からであり、たとえイエスが自身の身分を知っていたとしても、後に行おうと意図していた働きを行うことができず、バプテスマの日まで待たなければならなかったはずだ。これが神の時であり、何人たりとも、たとえイエス自身であっても、それに反することはできず、イエスが自身の働きを妨げることなどあり得なかった。もちろんこれは、神の謙虚さを示しており、また神の働きの法則でもあった。神の霊が働かなければ、神の働きを行える者は誰一人いない。二つ目は、バプテスマを受ける前、イエスはいたって平凡な普通の人間であり、他の正常で普通の人と何ら変わるところがなかったということである。これは、受肉した神が超自然的ではなかったことの一面である。受肉した神は、神の霊の采配に背くことなく、秩序正しくごく普通に働いた。イエスの働きに権威と力が備わったのは、バプテスマを受けた後のことである。つまり、イエスは受肉した神でありながら、超自然的なことは一切せず、他の普通の人々と同じように成長したのである。仮にイエスが自身の身分をすでに知っていて、バプテスマを受ける前に各地で偉大な働きを行い、普通の人たちとは異なり、自身が非凡であることを示していたなら、ヨハネが働きを行えなかっただけでなく、神が次なる段階の働きを始めることも不可能だったはずである。そうなれば、神が間違っただけをしたという証明になってしまい、神の霊と神の受肉した肉体は同じ源から出ていないのだと、人の目には映ただろう。そのため、聖書に記されているイエスの働きはすべて、彼がバプテスマを受けた後の、三年間にわたる働きである。イエスはバプテスマに先だってその働きをしなかったのも、バプテスマ以前にイエスが行ったことは聖書に記録されていない。彼は単なる普通の人で、一人の普通の人間を表していた。自身の職分を果たし始める前、イエスは普通の人々と何ら変わらず、人々もイエスに違いを見ることができなかった。イエスは二十九歳になって初めて、自分が神の働きの一段階を完了させるために来たということを知った。それまでは、神の行う働きが超自然的でなかったため、イエス自身もそのことを知らなかったのである。十二歳のとき、イエスが会堂での集会に参加していると、マリアが彼を探しに来た。そのときイエスは、他の子どもとまったく同じ口調で、ただ一言「母よ、わたしが父の御旨を何より最優先にしなければならないことを知らないのですか」と言った。もちろんイエスは聖霊による受胎で生まれたのだから、何らかの形で特別でな

かったことがあり得ようか。特別だったと言っても、それはイエスが超自然的だということではなく、他の幼い子どもたちに比べて神を愛したというだけのことである。イエスの外見は人間だったが、彼の実質はやはり特別であり、他の人々とは違っていた。とは言え、聖霊が自身の中で働いていること、自分が神自身であることをイエスが実感したのは、バプテスマを受けた後のことである。三十三歳のときに初めて、聖霊がイエスを通して磔刑の働きを行おうしていることを、イエスは真に悟った。イエスは三十二歳のときに多少の内情を知るようになっていた。それはマタイによる福音書に、「シモン・ペテロが答えて言った、『あなたこそ、生ける神の子キリストです』。……この時から、イエス・キリストは、自分が必ずエルサレムに行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえるべきことを、弟子たちに示しはじめられた」と記されている通りである。イエスは自分がなすべき働きをあらかじめ知っていたわけではなく、それを知ったのは特定の時だった。イエスは生まれて間もなくそれを完全に知っていたわけではない。聖霊がイエスの中で徐々に働いたのであり、そこには働きの過程があった。自分が神であり、キリストであり、受肉した人の子であること、また磔刑の働きを成し遂げなければならないことを、イエスが最初から知っていたとすれば、どうして前もって働かなかったのか。なぜイエスは、弟子たちに自身の職分のことを語るまで悲しまず、そのために熱心に祈らなかったのか。なぜヨハネは、それまで知らなかった多くのことをイエスが理解するようになる前に、イエスのために道を整え、イエスにバプテスマを授けたのか。そのことが証明しているのは、それは受肉した神の肉における働きであり、イエスがそれを理解して成し遂げるには、一つの過程が必要だったということである。なぜなら、イエスは神の受肉した肉体であり、彼の働きは聖霊によって直接行われる働きとは違っていただけである。

神の働きの各段階は一つの同じ流れに沿っているので、六千年にわたる神の経営計画においては、創世から現在に至るまで、各段階が次の段階と密接に繋がっている。道を整える者が誰もいなければ、後に続く者もないだろう。後に続く者がいるからこそ、その道を整える者がいるのである。このようにして、働きは一步一步引き継がれてきた。一つの段階が次の段階へと繋がっており、道を切り開く者がいなければ、働きを始めることは不可能であって、神が自身の働きを進展させる術もないだろう。どの段階も他の段階と矛盾せず、すべての段階が順に続いて、一つの流れを形作っている。そのすべてが同じ霊によってなされるのである。しかし、道を切り開く者であれ、他の者の働きを引き継ぐ者であれ、それによって身分が決まることはない。そうではないのか。ヨハネが道を開き、イエスがその働きを引き継

いだが、そのことは、イエスの身分がヨハネの身分より低いという証拠になるだろうか。イエスの前はヤーウェが働きを行ったが、だからといって、ヤーウェのほうがイエスよりも偉大だと言えるだろうか。道を整える者だったか、あるいは働きを引き継ぐ者だったかは重要ではない。何より重要なのは彼らの働きの実質であり、その働きが表す身分である。そうではないのか。人々のあいだで働きを行おうとした神は、道を整える働きができる者たちを立ち上がらせる必要があったのだ。教えを説き始めたばかりのとき、ヨハネはこう言った。「主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ」。「悔い改めよ、天国は近づいた」。ヨハネは最初からこのように語っているが、なぜこれらの言葉を言うことができたのか。これらの言葉が語られた順序を見ると、最初に天国の福音を述べたのはヨハネであり、後になってイエスが語っている。人間の観念からすると、新たな道を切り開いたのはヨハネなのだから、当然ヨハネがイエスよりも偉大だったことになる。だがヨハネは、自分がキリストだとは言っていない。そして神も、ヨハネを愛する神の子として証しせず、ただ道を開いて主のために道を整えるべく彼を用いただけである。ヨハネはイエスのために道を整えたが、イエスの代わりに働くことはできなかった。人間による働きもまた、すべて聖霊によって維持されていたのである。

旧約の時代には、ヤーウェが道を導いた。そしてヤーウェの働きは、旧約の時代全体と、イスラエルでなされた働きのすべてを表していた。モーセは地上におけるこの働きを維持していたに過ぎず、彼の苦労は人間による協力と考えられる。当時はヤーウェが語り、モーセに呼びかけ、彼をイスラエルの民のあいだで立たせ、イスラエルの民を荒野へと、そしてカナンの地へと導かせた。これはモーセ自身の働きではなく、ヤーウェ自身によって導かれたものなので、モーセを神と呼ぶことはできない。またモーセは律法を定めたが、この律法はヤーウェ自身によって布告された。ヤーウェはモーセにそれを語らせたに過ぎない。イエスも戒めを定め、旧約の律法を廃止して新しい時代の戒めを定めた。イエスはなぜ神自身なのか。それは違いがあるからである。当時、モーセが行った働きは時代を表すものではなく、新たな道を切り開くこともなかった。モーセは、ヤーウェから前もって指示されており、神に用いられた者に過ぎなかったのだ。イエスが来たとき、ヨハネはすでに道を整える段階の働きを始めており、天国の福音を広め始めていた（聖霊がそれを開始した）。到来したイエスは自身の働きを直接行ったが、彼の働きとモーセの働きとのあいだには大きな違いがあった。イザヤも多くの預言を語ったが、それならなぜイザヤも神自身ではなかったのか。イエスはそれほど多くの預言を語らなかったが、なぜイエスは神自身だったのか。当時のイエスの働きはすべて聖霊から出たものとか、人の意志から出たものとか、すべては神自身の働きであるなどとあえ

て言う者はいなかった。人間にはそのようなことを分析する手段がなかったのだ。イザヤがこのような働きを行い、このような預言を語り、そのすべては聖霊から出たものだと言うことはできる。それらはイザヤ自身から直接出たものではなく、ヤーウェによる啓示だったのだ。イエスはさほど多くの働きをせず、多くの言葉を発することも、多くの預言を語ることもなかった。人にとってイエスの説教は特に高尚なものとは思えなかったが、それでもイエスは神自身であり、人間がそれを説明するのは不可能である。いまだかつて、ヨハネやイザヤやダビデを信仰し、彼らを神と呼んだり、ダビデ神、ヨハネ神などと呼んだりする者はいなかった。そのように話す者は誰一人おらず、イエスだけがキリストと呼ばれたのである。この区分は、神の証し、イエスが担った働き、そしてイエスが果たした職分によるものである。聖書の偉大な人たち――アブラハム、ダビデ、ヨシュア、ダニエル、イザヤ、ヨハネ、そしてイエス――を、彼らが行った働きを通して見るとき、誰が神自身なのか、またどのような人たちが預言者で、誰が使徒であるかを見分けることができる。誰が神に用いられた者で、誰が神自身であるかは、その人の働きの実質と種類で区別され、判断される。違いを見分けられないのであれば、それはあなたが神を信じるとはどういうことかを知らないという証拠である。イエスが神であるのは、多くの言葉を語り、多くの働きをなし、とりわけ多くの奇跡を示したからである。同じくヨハネも多くの働きをなし、多くの言葉を語ったが、モーセも同様だった。それではなぜ彼らは神と呼ばれなかったのか。アダムは神自身によって造られたが、なぜ神と呼ばれず、被造物と呼ばれるだけだったのか。もしも誰かが、「今日、神は多くの働きをされ、多くの言葉を語られた。このお方は神ご自身である。それなら、モーセも同じように多くの言葉を語ったのだから、モーセも神ご自身だったに違いない」と言うならば、あなたは次のように問い返すべきだ。「当時、神はなぜヨハネではなく、イエスを神ご自身であると証しされたのか。ヨハネはイエスよりも前に現れたではないか。ヨハネとイエスと、どちらの働きのほうが偉大だったのか。人の目には、イエスの働きよりもヨハネの働きのほうが偉大に映るのに、なぜ聖霊はイエスのことを証しし、ヨハネのことは証ししなかったのか」。これと同じことが現在でも起きている。当時、モーセがイスラエルの民を導いたとき、ヤーウェは雲のあいだからモーセに語りかけた。モーセは直接話すことはなかったが、ヤーウェに直接導かれていた。これが旧約聖書に記されたイスラエルでの働きである。モーセの中には、霊も神の存在もなかった。モーセはそのような働きをすることができなかったので、モーセによってなされた働きとイエスによってなされた働きには大きな違いがある。それは、両者の働きが異なるものだったからである。神に用いられる者か、預言者か、使徒か、あるいは神自身かは、その者の

働きの性質によって区別でき、それが分かればあなたの疑問は解消されるはずだ。聖書には、小羊だけが七つの封印を解くことができると記されている。各時代を通じ、それらの偉大な人物たちのあいだには、聖句を説き明かす者がたくさんいたが、彼らがみな小羊だとあなたは言えるのか。彼らの説明がすべて神から出たものだと言えるのか。彼らは説き明かす者に過ぎず、小羊の身分を持っているわけではない。彼らが七つの封印を解くに値するなど、どうしてあり得ようか。「小羊だけが七つの封印を解くことができる」というのは真実だが、小羊は七つの封印を解くためだけに来るのではない。この働きは必要なものではなく、ついでになされるのだ。小羊の働きに関しては、小羊自身が知り尽くしている。多くの時間を費やして聖書の解釈をする必要があるだろうか。六千年の働きに、「聖書を解釈する小羊の時代」を加えなければならないのか。彼は新しい働きを行うために来るが、過去の働きをも明らかにし、六千年にわたる働きの真実を人々に理解させる。それほど多くの聖句を説明する必要はない。鍵となるのは今日の働きである。神は特に七つの封印を解くために来るのではなく、救いの働きをするために来るということを、あなたは知らねばならない。

あなたは終わりの日にイエスが降臨することだけは知っているが、いったいどのように降臨するのだろうか。贖われたばかりで、まだ変えられておらず、神に完全にされてもないあなたがたのような罪人が、神の心に適うだろうか。古い自我を持ったままのあなたが、イエスによって救われ、神の救いのおかげで罪人と見なされなくなったことは事実だが、これは、あなたに罪や汚れがないという証拠ではない。いまだ変わっていなければ、あなたはどのようにして聖いものとなれるのか。あなたの内側は汚れに満ち、自分勝手に卑劣である。にもかかわらず、イエスと共に降臨することを望む――あなたはそこまで幸運ではあり得ない。あなたは神を信じる上で一つの段階を見落としている――あなたは単に罪から贖われただけで、変えられてはいないのである。あなたが神の心に適うためには、神が自らあなたを変えて清める働きをしなければならない。さもないと、罪から贖われただけのあなたは、聖さを得ることができない。このように、神のよき祝福を共にする資格はあなたにない。と言うのも、神が人を経営する働きの一段階、つまり変化させ、完全にするという重要な段階を逸したためである。よって、贖われたばかりの罪人であるあなたが、神の嗣業を直接受け継ぐことはできない。

この新たな段階の働きが始まらなければ、あなたがたのような伝道者、説教者、聖書解説者、あるいは、いわゆる偉大な霊的人物はどこまで行ってしまっただろうか。この新たな段階の働きが始まらなければ、あなたがたが語ることは古くて役に立たないはずだ。それは、玉座に登ること、王になるために霊的背丈を備えるこ

と、自己を否定すること、自分の肉体を制すること、忍耐すること、あらゆる物事から教訓を学ぶこと、謙虚になること、あるいは愛することについてである。これはお決まりの古い曲を歌っているだけではないのか。同じことを名前を変えて呼んでいるだけではないか。つまり、かぶり物をすることやパンを裂くこと、あるいは手を置いて祈ることや病気の者を癒して悪霊を追い出すことではないのか。何か新しい働きがあるだろうか。発展する見込みはあるだろうか。あなたがこのように進み続けるのであれば、無闇矢鱈と教義に従うか、慣習に縛られることになるだろう。あなたがたは、自分の働きはとても高尚だと思っているが、それはどれも大昔の「老人たち」が後世に伝え、教えたものであることを知らないのか。あなたがたの言動は、その老人たちの遺言ではないのか。それは生前の老人たちから託されたことではないのか。あなたは、自分たちの行為が歴代の使徒や預言者の行為を凌ぎ、さらには万物を超越するとでも思っているのか。この段階の働きが始まったことによって、王になって玉座に登ることを追求したウィットネス・リーの働きに対するあなたがたのあこがれに終止符が打たれ、あなたがたがこの段階の働きに口出しできないように、あなたがたの傲慢さと大言壮語を阻止したのである。この段階の働きがなければ、あなたがたはさらに深く沈んでゆき、贖うことが不可能になるだろう。あなたがたの中には古いものがあり過ぎる。幸いなことに、今日の働きがあなたがたを立ち返らせた。さもなければ、あなたがたの進む方向は知れたものではない。神は常に新しく、決して古くない神なのに、あなたはなぜ新しいものを求めないのか。なぜ古いものにいつまでも執着するのか。要するに、現在の聖霊の働きを知ることが最も重要なのである。

地位の祝福は脇に置き、 人に救いをもたらす神の心意を理解すべきである

人の視点からは、モアブの子孫たちが完全にされるのは不可能であり、彼らには完全にされる資格はない。一方、ダビデの子孫たちには確かに希望があり、完全にされるのは確かに可能である。誰かがモアブの末裔であるならば、完全にされることはできない。今日になってもまだあなたがたは、自分たちのもとで行われている働きの意義を知らない。この段階に及んでも、まだ自分の将来の展望を心に抱いており、それを断念することをひどく嫌悪している。今日、一体なぜ神があなたがたのように最も無価値な集団を選んで働きかけるのか、誰も気にも留めない。それでは、この働きにおいて神は間違ったということなのか。この働きはうっかりした見落としなのか。神はなぜ、あなたがたがモアブの子孫だということをずっと知って

いたのに、他でもないあなたがたのただ中で働くために地上に降りて来たのだろうか。あなたがたはこのことをまったく考えないのか。神は働きを行う時、このことをまったく考慮しないのか。神は軽率に振る舞うだろうか。そもそも最初から神はあなたがたがモアブの子孫であることを知らなかったのか。あなたがたはこのようなことを考慮することを知らないのか。あなたがたの観念はどこへ行ってしまったのか。あなたがたのあの健全な思考力は適応がうまくできていないのか。あなたがたの賢さと英知はどこへ行ってしまったのか。あなたがたの度量はとても寛大なので、そのような些細なことには留意しないということなのだろうか。あなたがたの知性は、自分の将来の展望や運命などには非常に敏感だが、そのほかのことについては無感覚で、鈍感で、まったく無知である。信じているのは一体何なのか。自分の将来の展望か。それとも神か。信じているのは自分の美しい終着点だけではないのか。自分の将来の展望ではないのか。あなたは今いのちの道についてどのくらい理解しているのか。どれほどのことを達成したのか。今モアブの子孫になされている働きはあなたがたに恥をかかせるためだと思っているのか。それはあなたがたの醜さをさらけ出すために意図的に行われているのか。あなたがたに刑罰を受け入れさせ、次に火の池に投げ込むために意図的になされているのか。あなたがたに将来の展望はないなどとわたしは決して言わなかったし、ましてやあなたがたは滅ぼされなければならない、あるいは永劫の罰を受けなければならないなどとは言わなかった。わたしはそのようなことを公表したのか。自分には希望がないとあなたは言うが、それは自分で引き出した結論ではないのか。自分の考え方の影響ではないのか。あなたの結論が重要なのか。あなたは祝福されていないとわたしが言ったら、あなたは確かに破滅の対象になる。またわたしがあなたは祝福されていると言ったら、あなたは確かに滅ぼされない。わたしはいまあなたがモアブの子孫だと言っているだけである。あなたは滅ぼされるとは言わなかった。ただモアブの子孫は呪われてきて、墮落した人類の一種なだけである。罪については以前に言及されている。あなたがたはみな罪深いのではないか。罪人はみなサタンに墮落させられたのではないのか。罪人はみな神に逆らい、反抗するのではないのか。神に逆らう者は呪われないのか。罪人はみな滅ぼされなければならないのではないのか。その場合、肉と血を持つ人間のうちで誰が救われることができるのか。どうしてあなたがたは今日まで生き延びることができたのか。あなたがたはモアブの子孫なので消極的になってしまったが、同時に人間、すなわち罪人ではないのか。どうしてあなたがたは今日まで存続してきたのか。完全になることの話になると、あなたがたは嬉しそうにする。大きな患難を経験しなければならないことを聞くと、あなたがたは、これによりいっそう祝福されることになると感じる。あなたがたは患難から抜

け出した後は勝利者になることができ、さらにこれは、あなたがたに対する神の偉大なる祝福であり、あなたがたへの称賛であると考え。モアブが言及されると、あなたがたのあいだに動揺が生じる。大人も子供も同様に言葉では表せない悲しみを感じ、あなたがたの心には全く喜びがなく、あなたがたはみな生まれてきたことを後悔する。あなたがたはこの段階の働きがモアブの子孫になされることの意義を理解しない。あなたがたは高い地位を求めることしか知らず、何の希望もないと思うたびに、後戻りする。完成と将来の終着点の話になると、あなたがたは幸せを感じる。あなたがたが神を信じるのは祝福を得るためであり、良い終着点を得るためである。自分の地位のせいで今不安を感じている人もいる。彼らの価値や地位は低いので、彼らは完全にされることを求めようとは思わない。まず初めに完全にされることが語られ、その後モアブの子孫が言及されたので、人は前に言及された完全への道を否定した。これは初めから最後まで、あなたがたがこの働きの意義を知らず、その意義について関心がないからである。あなたがたの霊的背丈は小さすぎて、ごく些細な動揺にさえ耐えることができない。自分の地位があまりにも低いとわかると、あなたがたは消極的になり、求め続ける自信を失くす。人はただ恵みの獲得と平安の享受を信仰の象徴と見なし、祝福を求めることが自分の神への信仰の基礎であると考えている。神を知ることを求め、自分の性質の変化を求める人はごく僅かである。信仰において人が求めるのは、自分に適切な終着点と、自分に必要なあらゆる恵みを神が与えるようにさせ、神を召使にし、神に自分との平和で友好的な関係を維持させ、いかなるときも両者の間に決して対立がないようにさせることである。すなわち、聖書で読んだ「わたしはあなたがたのすべての祈りに耳をかたむける」という言葉通りに、人の神への信仰は、神が人のすべての要求を満たすことを約束し、祈り求めるものは何でも人に与えることを要求するのである。人は神が誰も裁かず、誰も取り扱わないことを期待する。神とはいつも憐れみ深い救い主イエスであり、いつでもどこでも人と良い関係を保つ方だからである。人は次のように神を信じている。いつも臆面もなく神に要求するばかりで、自分が反抗的であろうと従順であろうと、神はなんでも見境なく自分に授けてくれると信じている。絶えず神から「負債を回収」し、神はまったく抵抗せずに「返済」しなければならない。そのうえ二倍の額を払わなければならない。人から何かを得ていようといまいと、神はただ人に操られるだけで、思いのままに人を指揮することはできず、ましてや人の許可なく神が望む時に、長年隠されてきた神の英知や義なる性質を人に現すことはできない。人はただ自分の罪を神に告白し、神はただそれを赦すだけで、そうすることにうんざりもせず、これが永久に続くと思っている。人は神に命令するばかりで、神は自分にただ従うと思っている。なぜなら、神は人間に仕えら

れるためではなく、仕えるために来たとか、神がここにいるのは人間の召使になるためだなどと聖書に記されているからである。あなたがたはいつもこのように信じてきたのではないのか。神から何か得られないと、あなたがたは必ず逃げたがる。何か理解できないことがあると、ひどく憤慨し、あらゆる種類の悪態を神に浴びせかけさえする。あなたがたは神自身が知恵と不思議を十分に表現することをどうしても許そうとせず、その代わりにただ一時的な気楽さと心地よさを楽しむことを望む。今まで、自分の神への信仰におけるあなたがたの態度は相変わらずの古い見解からなるだけである。神があなたがたにほんの少しでも威厳を見せれば、あなたがたは不機嫌になる。あなたがたにはいま自分の霊的背丈がどれほど低いのか正確にわかっているのか。あなたがたの古い見解は実のところ変化していないのに、自分たちは皆神に忠実だなどと思い込んではいけない。何も自分に降りかからなければ、あなたはすべてが順調に進んでいると考え、神への愛は高まる。しかし、些細なことが起こると黄泉の国にまで落ちる。これは神に忠実であることだろうか。

もし征服の働きの最終段階がイスラエルで始まることになっていたら、そのような働きには何の意味もないだろう。中国で行われる時、またあなたがたに行われる時、その働きは最も意義深いのである。あなたがたは最も卑しい人、地位も最低である。あなたがたはこの社会の底辺にあり、最初は神を誰よりも否定していた。あなたがたは神から最も遠く離れてしまった人で、最もひどい害をこうむった。この段階の働きは征服のためだけなので、将来の証しをするのにあなたがたが選ばれるのは最適ではないだろうか。征服の働きの第一段階があなたがたに行われなければ、来るべき征服の働きを進めることは困難になるだろう。後に続く征服の働きは、今日行われるこの働きの事実に基づいて成果を達成するからである。現在の征服の働きは、征服の働き全体の始まりにすぎない。あなたがたは征服される最初の集団である。あなたがたは征服される全人類の代表である。本当の認識力がある人には、神が今日為す働きは全て偉大であり、神は人にその反抗的な態度をわからせるだけでなく、人の身分も明らかにするということがわかる。神の言葉の目的と意味は人を消極的にすることでも、倒すことでもない。それは人が神の言葉を通じて啓示と救いを得られるようにすることである。神の言葉で人の霊を覚醒させることである。世界の創造の時以来、人はいつもサタンの支配下に生き、神がいることを知らず、信じていなかった。このような人が神の偉大な救いの中に含まれることができ、神に大いに引き上げられることは正に神の愛を示している。真の認識をもつ人は、みなこれを信じる。そのような認識のない人はどうなるのか。彼らは言う。「ああ、神はわたしたちがモアブの子孫だと言う。神が自らの言葉でそう語った。わたしたちはそれでも良い結末を得られるだろうか。誰がわたしたちをモアブの子

孫にしたのだろう。誰が過去わたしたちにそれほど神に抵抗させたのだろう。神はわたしたちを罪に定めるために来た。神がいつも、始めからどのようにわたしたちを裁いてきたか知らないのか。わたしたちは神に抵抗してきたので、わたしたちはこのように罰せられるべきである」。この言葉は正しいだろうか。今日、神はあなたがたを裁き、あなたがたを罰し、あなたがたを罪に定めるが、罪に定めることの要点はあなたが自分を知るためであることを知らなければならない。神は罪に定め、のろい、裁き、刑罰を与えるが、これはあなたが自分を知るため、あなたの性質が変わるためである。そしてさらに、あなたが自分の価値を知り、神の行動はすべて義であり、それは神の性質と神の働きが要求することに適っていること、神は人を救う計画に従って働くこと、神は人を愛し、救い、裁き、罰する義なる神であることを理解するためである。もしあなたが、自分は地位が低く、墮落して、不従順であることだけを知り、神が今日あなたに行う裁きや刑罰を通して救いを明らかにしようと望んでいることを知らないならば、あなたは経験を得るすべがなく、ましてや前に進み続けることはできない。神は人を殺したり、滅ぼしたりするためにではなく、裁き、のろい、罰し、救うために来た。神の六千年の経営（救いの）計画が終了するまで、つまり神が範疇ごとの人間の結末を明らかにするまでは、地上における神の働きは人の救いのためであり、その目的は神を愛する人を純粹にすっかり完全にし、神の統治の下に服従させることである。神がどのように人を救おうとも、そのすべては人を古いサタン的な性質から脱却させることによってなされる。すなわち、神は人にいのちを求めさせることで救うのである。人がそうしなければ、神の救いを受け入れることはできない。救いは神自身の働きであり、いのちを求めることは救いを受け入れるために人が負わなければならないものである。人の目から見れば、救いは神の愛であり、神の愛は刑罰、裁き、呪いであるはずがない。救いは愛、憐れみ、さらには、慰めの言葉を含んでいなければならない。神から授けられる無限の祝福も含んでいなければならない。神が人を救う時は、神は人を祝福と恵みで動かし、人が心を神に捧げることによって救うのだと人は信じている。すなわち、神が人を動かすのは神が人を救うことなのである。このような救いは取引によって行われる救いである。神が人に百倍のものを授けて初めて、人は神の名の前に服従し、神のために尽くして栄光をもたらそうと努力する。これは人類のための神が意図することではない。神は墮落した人類を救うために地上で働きに来た。このことに嘘はない。もしあれば、神が働きを行うために自ら来ることは絶対になかっただろう。過去において、神の救いは最大限の慈愛と憐れみを見せることで、神は全人類と交換するために自らのすべてをサタンに与えたほどであった。現在は過去とはまったく違っている。今日、あなたがたに与えられる救いは終わり

の日に、各人を種類ごとに分類するときに起こる。あなたがたの救いの手段は愛や憐れみではなく、人が徹底的に救われるための刑罰と裁きである。従って、あなたがたが受けるのは刑罰、裁き、容赦のない鞭だけである。知りなさい。この無情な鞭打ちの中に罰はほんの少しもない。わたしの言葉がどんなに辛辣であったとしても、あなたがたに降りかかるのは、あなたがたにはまったく無情だと思われるかもしれないほんの数語だけであり、わたしがどれほど怒っていようと、あなたがたに注がれるのは教える言葉であり、わたしはあなたがたに危害を加えるつもりはないし、あなたがたを殺すつもりもない。これはすべて事実ではないのか。今日、義の裁きであろうと、無情な精錬や刑罰であろうと、すべては救いのためであることを知りなさい。今日各人が種類に応じて分類されようと、人の範疇が露わにされようと、神の発する言葉と働きのすべての目的は本当に神を愛する人を救うことである。義の裁きは人を清めるためにもたらされ、無情な精錬は人を浄化するために行われる。厳しい言葉、あるいは懲らしめはどちらも純化のためであり、救いのためである。従って、今日の救いの方法は過去のものとは違う。今日、義の裁きを通してあなたがたに救いはもたらされ、これは種類に応じてあなたがたを分類するためのよい道具である。さらに、無情な刑罰はあなたがたに最高の救いとして機能する。このような刑罰と裁きに直面して、あなたがたは何と言うのか。あなたがたはいつも、初めから終わりまで救いを享受してきたのではなかったのか。あなたがたは受肉の神を見出し、神の全能と知恵も悟った。そのうえ、あなたがたは繰り返し鞭打たれ、訓練も経験した。しかし、あなたがたは最高の恵みも受けたのではないのか。あなたがたの祝福は他の誰のものより大きくないのか。あなたがたの恵みはソロモンが享受した栄光や富よりも遥かに豊富である。考えてもみなさい。もしわたしが来た意図があなたがたを救うことではなく、罪に定め、罰することであったなら、あなたがたはこのように長く生き続けていただろうか。肉と血から成る罪深い存在であるあなたがたは今日まで生き残れていただろうか。もしわたしの目的がただあなたがたを罰するためであったなら、なぜわたしは肉となり、そのような大きな事業に着手していたのか。ただの人間にすぎないあなたがたを罰するには、わずか一言発するだけで済んだのではないのか。わたしはあなたがたをわざわざ罪に定めた後でもなお滅ぼす必要があるのだろうか。あなたがたはわたしのこの言葉をまだ信じないのか。わたしには愛と憐れみだけで人を救うことができるだろうか。それともわたしは人を救うために十字架しか使えないのだろうか。わたしの義なる性質は人を完全に従順にさせるのをさらに促進しないだろうか。それは人を完全に救うことがさらにできるのではないのか。

わたしの言葉は厳しいかもしれないが、それはすべて人を救うために語られる。

わたしは言葉を語っているだけで、人の肉を罰しているのではない。この言葉により、人は光の中で生きようになり、光が存在すること、その光は貴重であること、またこの言葉が人にとっていかに有益であるか、そして神は救いであることを知る。わたしは刑罰と裁きの言葉を数多く語ったが、それが表現することは実際にあなたがたに行われてはいない。わたしは働きを行うために、言葉を話すために来たのであり、わたしの言葉は厳しいかもしれないが、あなたがたの墮落と反抗を裁くために語られる。わたしがこれを行う目的は依然として人をサタンの支配下から救うことである。人を救うためにわたしは言葉を使う。わたしの目的は言葉で人を傷つけることではない。わたしの言葉が厳しいのは、働きから成果を達成するためである。このような働きを通してのみ、人は自分自身を知ることができ、反抗的性質を断つことができる。言葉の働きで一番大きな意義は、真理を理解した人に真理を实践させ、人の性質において変化を達成させ、自分自身および神の働きについての認識を獲得させることである。言葉を話すことで働くことのみが神と人の意思疎通を可能にし、言葉のみが真理を説明できる。このような方法で働くことは、人を征服する最善の手段である。言葉を発すること以外では、真理や神の働きを明確に人に理解させることのできる手段は他にない。そこで神の働きの最終段階において、神は人に話しかけ、人がまだ理解していないすべての真理や奥義を明らかにして、それにより人が神から真理の道といのちを得て、神の心を満足させることができるようにする。神が人に働きかける目的は、人が神の心を満足させることができるようにするためであり、それは人に救いをもたらすために行われる。従って、神による人の救いの期間においては、神は人を罰する働きはしない。人に救いをもたらしつつ、神は悪を罰したり、善人に報いたりせず、さまざまな種類の人の終着点を明らかにすることもない。その代わり、神の働きの最終段階が完了して初めて、神は悪を罰し、善に報いる業を行い、そこで初めてさまざまな種類の人々の最後を明らかにする。罰せられるのは実際に救いようのない人である。一方、救われる人は神が人を救う間に神の救いを獲得した人である。神による救いの働きが行われている間、救われることが出来る人はすべて、最大限まで救われ、誰ひとりとして見捨てられることはない。神の働きの目的は人を救うことだからである。神による人の救いの期間に、自分たちの性質の変化を達成できない者、また、完全に神に従うことのできない者はみな懲罰の対象となる。この段階の働き、すなわち言葉の働きは、人が理解していないあらゆる道と奥義を人に明らかにし、人が神の心意と神が人に要求することを理解できるようにし、神の言葉を実行に移すための前提条件を人が備えられるようにし、性質の変化を達成できるようにする。神は働きを行うためにだけ言葉を使い、人が少し反抗的だからといって罰したりすることはない。今

は救いの働きの時だからである。もし反抗的に振舞えば誰でも罰せられるとしたら、誰にも救われる機会がないだろう。誰もが罰せられ黄泉の国に落ちるだろう。人を裁く言葉の目的は、人が自分自身を知り、神に従うようになることである。それはそのような裁きによって人を罰することではない。言葉の働きの期間、多くの人がその反抗性と反逆性を、また受肉の神への不服従を露わにする。しかし、神はこのためにこれらの人をすべて罰したりはしない。そうではなく神は心の芯まで墮落して、救いようのない人を取り除くだけである。神はそのような人の肉をサタンに与え、数は少なくとも場合によっては肉を始末する。残っている者は従い続け、取り扱いと刈り込みを経験する。従っている間もなお取り扱いと刈り込みを受け入れることができず、ますます墮落していくならば、そのような人は救いの機会を失っている。神の言葉による征服を受け入れた一人ひとりには救いの機会が豊富にある。これら一人ひとりの神による救いは、彼らへの神の最大限の情け深さを示している。つまり、彼らには最大限の寛容さが示されるのである。人が間違った道から引き返し、悔い改めることができる限り、神は人に神の救いを受ける機会を与える。人が初めて神に反抗した時、神には人を殺そうなどという願望はない。それよりは、神は人を救うためにできる限りのことをする。本当に救う余地がない人であれば、神は取り除く。神がある種の人をすぐには罰しないのは、救われることができる人をすべてを救いたいからである。神はただ言葉によって人を裁き、啓き、導くのであって、杖で人を殺さない。人に救いをもたらすために言葉を使うことは、神の働きの最終段階の目的と意義である。

自己の観念で神を規定 する人がどうして神の啓示を受け取れるのか

神の働きは常に前進し続けており、その目的が変わることはないが、神が働きを行う手段は絶えず変化しており、それはつまり、神に付き従う人々も絶えず変化していることを意味する。神が働きを行えば行うほど、人はより徹底的に神を知るようになる。また、神の働きに続き、それに応じて人の性質も変化する。しかし、神の働きが絶えず変化しているので、聖霊の働きを知らない者や真理を知らない愚かな者は神に逆らう人になる。神の働きは人間の観念と決して一致しない。神の働きはいつも新しく、決して古くないからであり、神は古い働きを決して繰り返さず、むしろこれまでなされたことのない働きをたゆみなく行う。神は自身の働きを繰り返さず、また人は例外なく、神が以前になした働きを基に神の現在の働きを判断するので、神が新しい時代の働きの各段階を実行するのは極めて困難になってしまっ

た。人にはあまりにも多くの困難があり、人の考えは保守的過ぎる。誰も神の働きを知らないのに、誰もがそれを規定する。神から離れると、人はいのちも真理も神の祝福も失ってしまうのに、いのちも真理も受け入れず、ましてや神が人類に授けるさらに大きな祝福も受け入れない。神を得たいとすべての人が願っているのに、神の働きのいかなる変化も許せずにいる。神の新しい働きを受け入れない者たちは、神の働きは不変であり、永久に停滞したままだと信じている。彼らの信じるところによれば、神から永遠の救いを得るには律法を守りさえすればよく、悔い改めて罪を告白しさえすれば、神の旨は必ず満たされる。彼らは、律法の下での神、人間のために十字架にかけられた神だけが神のはずだと考えている。また、神は聖書を超えるべきではないし、超えることはできないとも考えている。まさにこうした考えが彼らを古い律法に堅く縛りつけ、死んだ規則に釘付けにしてきたのである。また、次のように信じる者がさらに多数いる。つまり、神の新しい働きがどのようなものであっても、預言による裏付けがなければならず、その働きの各段階で、「本心」から神に付き従うすべての者に啓示が示されなければならない、そうでなければ、それは神の働きではあり得ない、というのだ。人が神を知るようになるのは、ただでさえ容易なことではない。さらに、人の愚かな心、そして尊大さと自惚れという反抗的な本性を考慮すると、人が神の新しい働きを受け入れるのはなおさら難しくなる。人は神の新しい働きを入念に調べることも、謙虚に受け入れることもない。それどころか、神による啓示と導きを待ちながら、軽蔑的な態度をとる。これは神に逆らって反抗する人の行動ではないのか。そのような者がどうして神の承認を得られようか。

今日、イエスの働きも後れをとったとわたしが言うように、イエスは、ヤーウェの働きは恵みの時代において後れをとったと述べた。律法の時代だけがあり、恵みの時代がなかったら、イエスが十字架にかけられることはなく、全人類が贖われることもなかったはずだ。律法の時代しかなければ、人類は果たして今日に至ることができただろうか。歴史は前進する。歴史は神の働きによる自然の法則ではないのか。それは宇宙全体における、神による人の経営の一表現ではないのか。歴史は前進し、神の働きも前進し、神の旨は絶えず変化している。神は六千年にわたる働きの、どれか一つの段階に留まるはずがない。誰もが知るように、神は常に新しく、決して古くないからであり、磔刑のような働きを行い続け、十字架にそして一度、二度、三度……と釘付けにされることは到底あり得ない。このように考えるのは馬鹿げたことである。神がひたすら同じ働きをすることはなく、神の働きは絶えず変化し、いつも新しい。わたしがあなたがたに日々新しい言葉を語り、新しい働きを行うのと同じである。これがわたしの行う働きだが、「新しい」そして「驚くべ

き」という言葉こそが重要である。「神は不変であり、神は常に神である」という言葉はまったくその通りである。神の本質は変化せず、神は常に神であり、決してサタンにはなり得ないが、だからといって、神の働きが神の本質と同様に一定不変であることの証明にはならない。あなたは、神は不変だと断言するが、では、神は常に新しく、決して古くないことをどのように説明できるのか。神の働きは絶えず広がり、常に変化し、神の旨は絶えず明らかにされ、人に知らされる。神の働きを経験するにつれて、人の性質は絶え間なく変化し、認識も絶え間なく変化する。では、この変化はどこから生じるのか。変わり続ける神の働きからではないのか。人の性質が変われるのなら、なぜわたしの働きや言葉が変化し続けるのを人は許すことができないのか。わたしは人の制約に従わなければならないのか。それについて、あなたはこじつけの理屈や詭弁に訴えているのではないか。

復活した後、イエスは弟子たちの前に現れ、「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」と語った。これらの言葉をどう解釈できるか、あなたに分かるだろうか。あなたには今、神の力が授けられているか。「力」とは何を指すのか、あなたは理解しているのか。終わりの日、真理の御霊が人に授けられるとイエスは宣言した。終わりの日は今である。真理の御霊がどのようにして言葉を発するのか、あなたは理解しているか。真理の御霊はどこに現われ、どこで働くのか。預言者イザヤの預言書には、イエスという名の子供が新約聖書の時代に生まれるという記述はまったくなく、インマヌエルという名の男の子が生まれるとしか書かれていない。なぜ「イエス」の名は言及されなかったのか。旧約聖書のどこにもこの名前が出てこないにもかかわらず、なぜあなたはいまだにイエスを信じるのか。まさかあなたは、イエスをその目で見てからイエスを信じ始めたのか。それとも啓示を受けて信じ始めたのか。神は本当にそのような恵みをあなたに示すだろうか。そしてあなたにかくも偉大な祝福を授けるだろうか。あなたは何を根拠にイエスを信じているのか。神が今日肉となったことをあなたはなぜ信じないのか。神が受肉していない証拠に、自分にはまだ神からの啓示がないと、あなたはなぜ言うのか。神は働きを始めるのに先立ち、まず人に伝えなければならないのか。最初に人の承認を受けなければならないのか。イザヤは飼葉桶の中で男の子が生まれると宣言しただけで、マリアがイエスを産むとは預言しなかった。あなたはいったい何を根拠に、マリアが産んだイエスを信じているのか。あなたの信仰は間違いなく混乱していないか。神の名は変わらないという人たちがいる。それではなぜ、ヤーウェという名前がイエスになったのか。メシアが到来するという預言はあるが、それではなぜ、イエスという名の人 came のか。なぜ神の名は変わったのか。そのような働きは

ずっと以前に実行されたのではないか。今日、神はより新しい働きを行なわないのだろうか。昨日の働きは変えることができ、イエスの働きはヤーウェの働きから進展することができる。では、別の働きがイエスの働きに続くことはできないのか。ヤーウェという名前がイエスに変わり得るなら、イエスという名前も変わり得るのではないか。これはどれも特異なことではなく、ただ人の思考があまりに単純なのである。神は常に神である。神の働きがどう変化しようと、神の名前がいかに関わり、その性質と知恵は決して変わらない。神はイエスという名前では呼ばれるはずはないと信じているなら、あなたの見識はあまりに限られている。イエスこそ永遠に神の名前であり、神は永遠に、そして常にイエスという名前では知られ、これは決して変わらないと、あなたはあえて断言するのか。律法の時代を終わらせたのはイエスという名前、最後の時代を終わらせるのもそうであると、確信をもって断言するのか。イエスの恵みがその時代を終わらせられると誰が言えるのか。これらの真理をはっきり理解していなければ、あなたは福音を説くことができないだけでなく、揺るぎなく立つこともできない。あなたが宗教的な人々の困難をすべて解決し、彼らの誤った考えを残らず論破する日が来たら、それは、あなたがこの段階の働きを完全に確信し、いささかも疑っていないことの証明となる。彼らの誤った考えを論破できなければ、彼らはあなたを陥れ、中傷する。それは恥ずべきことではないだろうか。

当時のユダヤ人はみな旧約聖書を読んでいて、男の子が飼葉桶の中で生まれるというイザヤの預言を知っていた。それではなぜ、彼らはその預言を十分知っていたにもかかわらず、イエスを迫害したのか。それは彼らの反抗的な本性と、聖霊の働きに対する無知のためではなかったか。当時、パリサイ人は、イエスの働きは預言された男の子について自分たちが知っていることと違っていると信じており、今日の人々が神を受け入れないのも、受肉した神の働きが聖書と一致しないからである。神に対する彼らの反抗の本質は同じものではないだろうか。あなたは聖霊のすべての働きを、疑うことなく受け入れられるか。聖霊の働きなら、それは正しい流れであり、あなたは疑念を一切抱かずに受け入れるべきである。何を受け入れるか、選り好みをしてはならない。神からさらなる洞察を得て、神に対してさらに用心するのであれば、それは無用の行為ではないか。聖書からさらなる実証を求める必要はない。聖霊の働きならば、あなたはそれを受け入れなければならない。あなたが神を信じるのは神に付き従うためであり、神を調べてはならないからである。わたしがあなたの神であることを証明するために、わたしについてのさらなる証拠を求めるべきではなく、わたしがあなたのためになるかどうかを見定められるようにならないといけない。それが何より重要である。たとえ聖書の中に反論不可能

な証拠を見つけたとしても、それによってあなたが完全にわたしの前へと導かれることにはならない。あなたはわたしの前ではなく、聖書の制約の中で生きているに過ぎない。聖書はわたしを知る助けにはならないし、わたしに対するあなたの愛を深めることもできない。聖書は男の子が生まれると預言したが、人は神の働きを知らなかったため、その預言が誰において実現するかは誰にも分からなかった。そのため、パリサイ人はイエスと対立することになった。わたしの働きが人にとって有益であることを知っている者もいるが、それでも彼らは、イエスとわたしが互いに相容れない二つのまったく別の存在だと信じ続けている。当時、イエスは恵みの時代において、弟子たちに一連の説教しか与えず、実践の方法、集い方、祈る際の求め方、他の人々の扱い方といったことが主題だった。イエスが実行した働きは恵みの時代の働きであり、彼が説明したのは、弟子たちやイエスに付き従う人々はどのように実践すべきかだけだった。イエスは恵みの時代の働きをただで、終わりの日の働きは何一つしなかった。ヤーウェが律法の時代に旧約の律法を定めたとき、恵みの時代の働きをその際に行わなかったのはなぜなのか。なぜ恵みの時代の働きを前もって明らかにしなかったのか。そうすれば人が受け入れる助けになったのではなかろうか。ヤーウェは、男の子が生まれて指導者になると預言しただけで、恵みの時代の働きを前もって実行することはなかった。各時代における神の働きには明確な境界線がある。神は現在の時代の働きだけを行い、次の段階の働きを前もって行うことは決してない。このようにしてのみ、各時代を代表する神の働きが前面に引き出される。イエスは終わりの日のしるしについて、そしていかに忍耐するか、いかにして救われるか、いかに悔い改め、告白するか、また、いかに十字架を背負い、苦しみに耐えるかについてしか語らず、終わりの日に人はどう入りを成し遂げるべきか、神の旨を満たすべくどのように追求すべきかについては語らなかった。したがって、終わりの日の神の働きを聖書の中に探し求めるのは馬鹿げてはいないか。聖書を手に携えているだけで何が分かるのか。聖書の解説者であれ説教者であれ、今日の働きを予見し得る者などいだろうか。

「耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい」。あなたがたは今、聖霊の言葉をすでに聞いたか。神の言葉はもうあなたがたに届いている。それが聞こえるか。神は終わりの日に言葉の働きを行うが、そのような言葉は聖霊の言葉である。神は聖霊であり、また肉になることもできるからである。したがって、過去に語られた聖霊の言葉は、受肉した神の今日の言葉である。語るのは聖霊なのだから、その声は天から語られ、人の耳に届くはずだと信じている愚かな人が大勢いる。このように考える人は誰も神の働きを知らない。実際、聖霊が語る言葉は、肉となった神が語る言葉なのである。聖霊は人に直接語りかけることができないし、

また律法の時代においてさえ、ヤーウェが人々に直接語りかけることはなかった。まして今日のこの時代に、神が直接語りかけるなどまず考えられないのではないか。神が言葉を発して働きを実行するには、肉とならなければならない。そうでなければ、神の働きがその目標を達成することはできない。受肉した神を否定する者たちは、霊、あるいは神が働きを行う原則を知らない人である。今は聖霊の時代だと信じているのに、聖霊の新しい働きを受け入れない者たちは、漠然とした抽象的な信仰の中で生きている人である。こうした人たちは聖霊の働きを決して受け取らない。聖霊が直接語りかけて働きを行うことばかり求め、受肉した神の言葉や働きを受け入れない者たちは、新しい時代に足を踏み入れることも、神によって完全に救われることも決してできない。

神とその働きを知る者だけが神の心にかなう

受肉した神の働きは二つの部分から成る。神が最初に肉となった際、人々はそれを信じず、また認識もせず、イエスを十字架にかけた。その後、神が二度目に受肉したとき、人々はやはり神を信じず、ましてや認識せず、またしてもキリストを十字架にかけた。人間は神の敵ではないか。神を知らなければ、人がどうして神の知己となれようか。神の証しをする資格がどうしてあるだろうか。神を愛し、神に仕え、神に栄光を捧げているという人間の主張は、どれも人を欺く嘘ではないのか。そのような非現実的で実際的ではないことに自分の人生を捧げるなら、それは虚しい努力ではないか。神が何者かすら知らずに、どうして神の知己となれようか。そのような追求は漠然とした抽象的なものではないか。それは人を欺くものではないのか。人はどうすれば神の知己になれるのか。神の知己になることの実際の意義は何か。あなたは、神の霊の知己となれるのか。霊がどれほど偉大で崇高であるか、あなたにわかるのか。目に見えず、触れることもできない神の知己になるというのは、漠然とした抽象的なことではないか。そのような追求に実際的な意義があろうか。それはみな人を欺く嘘ではないのか。あなたは神の知己となることを追い求めながら、実際はサタンの言いなりになる子犬である。なぜなら、あなたは神を知らず、見ることも触れることもできない、自分の観念の産物である、実在しない「万物の神」を追い求めているのだから。漠然とした言い方をするならば、そのような「神」はサタンであり、実際のところを言えば、それはあなた自身なのだ。あなたは自分自身の知己となることを求めているに過ぎないが、それでも神の知己になることを追い求めていると言う――それは冒瀆ではないのか。そのような追求にどんな価値があるのか。神の霊が肉にならなければ、神の実質は目に見えず、触れるこ

ともできないいのちの霊に過ぎない。それは形がなく曖昧模糊としており、非物質的な存在であり、人間には近づくことも理解することもできない。このような、実体を持たず、不可思議で、はかり知れない霊の知己になどどうしてなれようか。それは冗談ではないのか。こうした馬鹿げた理屈には根拠がなく、非現実的だ。創造された人間は本質的に神の霊と異なっている。そうであれば、どうして両者が知己になれようか。仮に神の霊が肉において具現化されていなければ、また神が受肉せず、被造物になることで自らを卑しめていなければ、被造物である人間には神の知己となる資格も能力もない。また、魂が天に入った後、神の知己となる機会を持つかもしれない敬虔な信者を除き、大方の人は、神の霊の知己にはなれないだろう。それに、受肉した神による導きのもと、天なる神の知己になりたいと願うのであれば、その人は驚くほど愚かな非人間ではないか。人々は目に見えない神に「誠実」であろうとするだけで、目に見える神にはほんの少しも注意を払わない。目に見えない神を追い求めるのは実に簡単なのだから。人々は自分の好きなようにするだろうが、目に見える神を追い求めるのは、それほど容易なことではない。漠然とした神を求める人は、神を得ることが絶対にできない。漠然とした抽象的な物事はどれも人間による想像の産物であって、人間には得ることができないからである。あなたがたのあいだに来た神が、自分たちの手の届かない崇高な神であったなら、あなたがたはどうしてその神の旨を把握できようか。また、どうしてその神を知り、理解できようか。神が自分の働きをするだけで、人間と通常の接触を持たなかったら、あるいは、普通の人間性を持たず、ただの人間には近づき難い存在だったとしたら、また、たとえあなたがたのために多くの働きをしたとしても、まったく接触がなく、見ることもできないのなら、どうしてその神を知り得ようか。普通の人間性を持ったこの肉が存在しなければ、人間には神を知る術が一切ない。肉なる神の知己となる資格が人にあるのは、ひとえに神の受肉のおかげである。人々が神の知己になれるのは、神と接しているからであり、また神と共に暮らし、共に交わり、そうして徐々に神を知るようになるからだ。そうでなければ、人間の追求など無駄ではないか。つまり、人間が神の知己になれるのは、神の働きだけによるのではなく、受肉した神の現実性と正常性のためである。自身の本分を尽くす機会、真の神を礼拝する機会を人々が得られるのは、ひとえに神が肉となるからである。これこそが、最も現実的かつ実際的な真理ではないか。さて、あなたはまだ天なる神の知己になりたいと思っているのか。神がある程度まで自分を卑しめて初めて、つまり、神が肉となって初めて、人間は神の知己、そして神の心を知る者となれるのだ。神は霊の存在である。かくも崇高で測り知れない霊の知己になる資格が、どうして人々にあるだろうか。神の霊が肉へと降臨し、人間と同じ外見をした被造物に

なって初めて、人々は神の旨を理解でき、本当に神のものとなれる。神は肉において語り、働きを行う。人類の喜び、悲しみ、患難を共にし、人類と同じ世界に生き、人類を守り、そして導き、それによって人々を清め、救いと祝福を得られるようにする。これらのものを得て、人々は神の旨を真に理解し、そうやって初めて神の知己となれる。これだけが実際的なことである。神が人の目に見えず、触れることもできないのなら、どうして人が神の知己になれようか。これは空虚な教義ではないか。

今まで神を信じてきた多くの人は、漠然とした抽象的なものをいまだに追い求めている。そうした人々は、神による今日の働きの現実を知らず、依然字句と教義の世界で生きている。そのうえ、大半の人は、「神を愛する新世代の人々」、「神の知己」、「神を愛することの模範と型」、そして「ペテロの例」といった新たな語句の表す現実はまだ入っていない。それどころか、いまだに漠然とした抽象的なものを追い求め、教義をやみくもに探り回し、これらの言葉の現実をまったく理解していない。神の霊が肉になるとき、あなたは肉におけるその働きを見て触れることができる。しかし、それでも神の知己になることができず、神の心を知る者になることができないのなら、どうして神の霊の心を知る者になれようか。現在の神を知らないのなら、どうして神を愛する新世代の一員になれようか。そのような語句など空虚な字句と教義ではないか。あなたは霊を見、その旨を把握できるのか。そのような語句など虚しくはないか。ただこうした語句や用語を口にするだけでは不十分だし、決意だけでは神を満足させられない。あなたは、こうした言葉を口にするだけで満足しており、それによって自分の願望を満たし、自分の非現実的な理想を満たし、自分の観念と思考を満足させようとしているだけだ。今日の神を知らないのなら、あなたが何をしようと、神が心に抱く願望を満たすことはできない。神の心を知る者であるというのは、どういう意味か。まだこのことが理解できないのか。神の知己が人間である以上、神もまた人間である。つまり、神は肉となり、人となったのだ。同類の者だけが互いのことを、自分の心を知る者と呼ぶことができ、そのとき初めて両者は知己だと見なされる。神が霊の存在なら、どうして被造物である人間が神の知己になれようか。

あなたの神への信仰、そして真理の追求はおろか、あなたの振る舞い方さえも、みな現実に基づいたものでなければならない。あなたのすることはすべて実践的でなければならない。幻想や空想的な物事を追い求めてはいけない。そうした振る舞いには何の価値もないし、さらに、そのような生き方には何の意味もない。あなたの追求と人生は、まさに偽りと欺きの中で費やされ、また価値や意義のあることを追い求めないので、あなたが得るものは馬鹿げた理屈や、真理ではない教理だけであ

る。そうした物事は、あなたの存在の意義や価値に対して何の関わりもなく、あなたを空しい状態に陥れるだけだ。このようにして、あなたの生涯は何の価値も意義もないものになる――そして、有意義な人生を追い求めないのであれば、たとえ百年生きたとしても、すべてが虚しく終わるだろう。どうしてそれを人生と言えようか。それは実際のところ、動物の一生ではないのか。同様に、あなたがたが神への信仰の道を辿ろうとしても、目に見える神を求めようとせず、見ることも触れることもできない神を崇めているのであれば、そうした追求はいっそう虚しくはないか。結局、あなたの追求は瓦礫の山となるだろう。そうした追求に何の益があるのか。人間の最大の問題は、見ることも触れることもできないもの、途方もなく神秘的で不思議なもの、人間の想像を超えた、ただの人間には手の届かないものだけを愛する点だ。そうした物事が非現実的であればあるほど、人々はそれを分析し、他のものには目もくれず、それを追い求めて手に入れようとする。それが非現実的であればあるほど、ますます綿密に調べ、分析し、それらについて、自分なりの細かな考えを紡ぎだす。それに対して、物事が現実的であればあるほど、人々はそれらを素っ気なく扱う。ただそれらを見下し、蔑みさえする。これはまさに、わたしが今日行う現実的な働きに対する、あなたがたの態度ではないのか。そうした物事が現実的であればあるほど、あなたがたは偏見を持つ。そうしたものを調べる手間もかけず、ただ無視する。そうした現実的かつ低い基準の要求を見下して、この上なく現実的な神について無数の観念を抱き、神の現実性と正常さを受け入れることができない。このように、あなたがたは漠然とした信仰に固執しているのではないか。あなたがたは、過去の漠然とした神については揺るぎない信念を持っているが、今日の実際の神には何の興味も示さない。それは、昨日の神と今日の神とが二つの別の時代に属するからではないのか。それはまた、昨日の神が天の崇高なる神なのに対して、現在の神は地上のちっぽけな人間だからではないのか。そのうえ、人間が崇める神は、人間の観念によって生み出された神であるのに対して、今日の神は地上で生まれた現実の肉を持つからではないか。結局のところ、人間が神を追い求めないのは、今日の神があまりに現実的だからではないのか。と言うのも、今日の神が人々に求めているのはまさに、彼らが最もしたくないこと、最も恥ずかしいと思うことだからである。これは、人々にとって困難なことではないか。人々の古傷をさらすことではないのか。このように、多くの人が現実の神、実際の神を追い求めず、ゆえに受肉した神の敵、つまり反キリストとなる。これは明白な事実ではないか。過去、神がまだ肉となっていないころ、あなたは宗教家、あるいは敬虔な信者だったかもしれない。神が肉となった後、そうした敬虔な信者の多くは、いつの間にか反キリストになった。それがどういうことか、あなたにわかるだろう

か。神への信仰において、あなたは現実集中せず、真理を追い求めることもなく、偽りの虜になっている――それが、受肉した神に敵意をもつ最も明白な原因なのではないか。受肉した神はキリストと呼ばれる。ならば、受肉した神を信じていない者たちはみな反キリストではないか。では、あなたが信じ、心から愛しているのは、本当にこの肉なる神なのか。それはこの上なく現実的で、極めて正常で、呼吸している生きた神なのか。あなたが追い求める対象はいったい何なのか。それは天か、それとも地か。それは観念か、それとも真理か。それは神か、それとも超自然的な物事か。実際のところ真理とは、人生の格言の中で最も現実に則しており、人類のあらゆる格言の最高峰である。それは神による人間への要求であり、また神が自ら行った働きなので、「人生の格言」と呼ばれる。これは何かから要約された格言ではなく、偉人の有名な引用でもない。そのようなものではなく、天地と万物の主から人類に発せられた言葉であり、人間によって要約された言葉ではなく、神本来のいのちなのである。だからそれは、「人生格言の最高峰」と呼ばれるのだ。人々が真理を実践しようと追求するのは、自身の本分を尽くしているのである――つまり、神の要求を満たすことを追い求めているのだ。この要求の本質は、最も現実的な真理であり、誰にも達成できない空虚な教義などではない。あなたの追求するものが教義に過ぎず、そこに何の現実性もないのであれば、あなたは真理に反抗しているのではないか。あなたは真理を攻撃する者ではないのか。そのような人間がどうして神を愛することを求める人になれようか。現実がない人は真理に背く者であり、みな生まれながらに反抗的だ。

どのように追求しようと、何よりもまず、神が今日行っている働きを理解し、この働きの意味を知らなければならない。終わりの日に神が来るとき、どのような働きをもたらすのか、どういった性質を伴っているのか、そして、人間の中で何が完全にされるのかを理解し、知らなければならない。神が到来し、肉において行う働きを知らず、理解もしていなければ、どうして神の旨を把握し、神の知己になることができようか。実際、神の知己になるのは複雑なことではないが、単純なことでもない。人々が徹底的に理解して実践できれば、それは単純なものになる。人々が徹底的に理解できなければ、それははるかに難しいものとなり、さらに言えば、自身の追求によって漠然としたものへと至りがちになる。神を追い求めるにあたり、自分のよって立つところがなく、自分が固持すべき真理を知らなければ、それは土台がないということであり、そのため、揺るぎなく立つのが難しくなる。今日、真理を理解しない者、善悪の区別ができない者、何を愛し何を憎めばよいのかわからない者が大勢いる。そうした人々が揺るぎなく立つことはほぼできない。神を信じる上で鍵となるのは、真理を実践し、神の旨を思いやり、また神が肉において到来

するとき、神が人間に行なう働きと、神が語る際の原則を認識できるようになることである。大衆に従ってはならない。自分が何に入るべきかについて原則を持ち、それを堅持することが必要である。神の啓示によってもたらされた、自分の内にあるものを堅持することが、あなたにとって助けとなる。そうしなければ、あなたは今日道を逸れ、明日は別の方向に逸脱し、本当のものは何も得られない。これでは、あなたのいのちに何の益もない。真理を理解しない者はいつも他人に従う。もし人が、これは聖霊の働きだと言え、あなたもまた、これは聖霊の働きだと言う。もし人が、これは悪霊の仕業だと言え、あなたもまた疑惑を持つか、あるいは、これは悪霊の仕業だと言う。あなたはいつも他人の言葉をそのまま繰り返すだけで、自分では何も識別できないし、自分の頭で考えることもできない。それは、自分で物事を区別できない、立脚点を持たない者である。このような人は価値のない惨めな人間だ。あなたはいつも他人の言葉を繰り返す。今日、これは聖霊の働きだと言われていても、いつの日か、これは聖霊の働きでないと誰かが言い、実際人間の仕業に過ぎないという可能性がある。しかし、あなたはそれを判別できず、他人がそう言っているのを目にすると、同じことを口にする。実際は聖霊の働きなのに、それは人間の働きだと言う。あなたは、聖霊の働きを冒瀆する者の一人になったのではないか。これは、物事を識別できずに神に敵対してしまったのではないか。いつの日か、どこかの愚か者がやって来て、「これは悪霊の仕業だ」と言うかもしれない。それを聞いたあなたは途方に暮れ、またもや他人の言うことに縛られてしまう。誰かが混乱を引き起こすたびに、あなたは自分の立脚点に固く立つことができなくなる。それはひとえに、真理を把握していないからだ。神を信じ、神を知ろうと求めるのは、容易なことではない。そうしたことは、ただ寄り集まって説教を聞くだけでは成し遂げられず、熱情だけでは完全になれない。経験し、知り、原則に基づいて行動し、聖霊の働きを獲得しなければならない。経験を積み、多くのことを識別できるようになる――善悪、正邪、何が血肉に属し、何が真理に属するかを区別できるようになるだろう。あなたは、こうした物事をすべて判別できなければならない。そうすれば、どのような状況にあっても迷うことはない。ただこれだけが、あなたの真の霊的背丈なのである。

神の働きを知ることは単純なことではない。追い求める中で、基準と目標がなければならない。どのようにして真の道を求めるか、何を基準にしてそれが真の道かどうかを推し量るか、そして、それが神の働きであるかどうかということを知る必要がある。真の道を求める上で最も基本的な原則は何か。この道に聖霊の働きがあるかどうか、それらの言葉が真理を表しているかどうか、誰の証しがなされているのか、それが何をもたらすかに目を向けなければならない。真の道と偽りの道とを

判別するには、いくつかの基本的な知識が必要であり、最も基本的なことは、そこに聖霊の働きが表わされているかどうかである。人々の神への信仰の実質は、神の霊を信じることであり、受肉した神への信仰でさえ、その肉が神の霊の体現であることに基づいているからだ。つまり、そうした信仰はやはり聖霊への信仰なのである。霊と肉のあいだには違いがあるものの、この肉は霊から来たものであり、肉となった言葉なのだから、人間が信じるのはやはり、神に内在する実質なのだ。そこで、それが真の道かどうかを判断するには、何よりもまず、そこに聖霊の働きがあるかどうかを見て、その後、その道に真理があるかどうかを見なければならない。この真理は正常な人間性のいのちの性質である。つまり、初めに人間を創造した際、神が人間に要求したこと、すなわち、(人間の理知、見識、知恵、そして人間であることの基本的な知識を含む) 正常な人間性の全体である。要するに、この道が人々を正常な人間性の生活に導けるかどうか、語られている真理が正常な人間性の現実において必要なものかどうか、この真理が実用的かつ現実的であるかどうか、それが最も時宜にかなったものかどうか、といったことを見極めなければならない。そこに真理があれば、人々を正常で現実的な経験へと導くことができる。さらに、人々はいっそう正常になり、人間としての理知もより完全になる。肉における生活と霊的生活がさらに秩序あるものとなり、喜怒哀楽もますます正常なものとなる。これが第二の原則だが、もうひとつの原則がある。それは、人々が神についてより多くの認識を持っているかどうか、そのような働きと真理を経験することで神への愛を呼び起こせるかどうか、その人をさらに神へと近づけられるかどうかである。このことによって、その道が真の道であるかどうか見定めることができる。最も基本的なことは、この道が超自然的なものではなく、現実的なものであるかどうか、また、それが人間のいのちを施せるかどうかということだ。そうした原則にかなうものであれば、この道が真の道であると結論づけられる。わたしがこれらのことを述べるのは、あなたがたの将来の経験において別の道を受け入れさせるためではなく、また、別の新時代の働きが将来存在すると预言するためでもない。わたしがこれらのことを述べるのは、今日の道こそ真の道だとあなたがたに確信させ、今日の働きをただ半信半疑で信じ、その働きについて洞察できないということがないようにするためである。確信しているものの、いまだ混乱しながら付き従っている者さえ数多くいる。そのような確信には原則がなく、そのような人は遅かれ早かれ必ずや淘汰される。とりわけ熱心に付き従っている者たちでさえ、三割は確信しているが、五割は確信していない。このことは、その人たちに基礎がないことを示している。あなたがたは素質があまりに貧弱で、基礎が浅すぎるので、区別することがわかっていない。神は同じ働きを繰り返さず、現実的でない働きを行わず、人

間に過分な要求をせず、人間の理知の外にある働きは行わない。神が行う働きはみな、人間の正常な理知の範囲内で行われ、人間の正常な理知を超えることはない。また、神の働きは人間の正常な必要に沿って行われる。それが聖霊による働きなら、人々はずっと正常になり、その人間性はさらに正常になる。人々は自分の墮落したサタンの性質、および人間の実質についての認識を増し、また真理への渴望もさらに強くなる。これはつまり、人間のいのちがどんどん成長し、人間の墮落した性質がますます変化できるということであり、そのすべてが、神が人間のいのちになるということの意味である。ある道が、人間の実質であるこれらの事柄を明らかにできず、人間の性質を変えることができないのなら、さらにまた、人々を神の前へと導き、神についての真の理解を与えることができないのなら、あるいは、人間性をさらに卑しめ、その理知をますます異常なものにするのなら、その道は真の道ではあり得ず、悪霊の働き、あるいは古い道ということになる。要するに、それが聖霊による現在の働きということとはあり得ない。あなたがたは長年神を信じてきたが、それでも真の道と偽りの道を区別し、真の道を求める原則を一切知らない。ほとんどの人は、こうした事柄に興味さえ持たず、ただ大多数が行く方へ行き、大多数の言うことを繰り返すだけである。どうしてこれが真の道を求める者だと言えようか。そうした人々がどうして真の道を見いだせようか。これらいくつかの重要な原則を把握したなら、何が起ころうとも、あなたがたが欺かれることはない。今日、人々が識別できるようになるということが肝要である。これは正常な人間が備えているべきもの、人々が自身の経験の中で備えているべきものである。今日になっても、付き従う過程で何一つ識別できず、人間としての理知がいまだ成長していないのであれば、人々はあまりに愚かで、その追求は誤りであり、道を外れたものである。今日、あなたの追求にはわずかばかりの判別力もない。あなたの言う通り、あなたは確かに真の道を見つけたが、それを本当に自分のものとしたのか。あなたは何かを識別できているのか。真の道の実質は何か。実のところ、あなたは真の道を獲得してはいない。あなたは、何の真理も得ていない。つまり、神があなたに要求することを何も成し遂げておらず、ゆえにあなたの墮落には何の変化もない。そのような方法で追求し続けるなら、最終的には淘汰されるだろう。今日まで付き従ってきたのだから、自分の辿ってきた道は正しい道だと確信しているべきで、これ以上疑問を抱いてはならない。多くの人は些細なことが原因で、いつも確信できず、真理の追求をやめてしまう。このような人々は、神の働きについて何の認識も持っておらず、困惑しながら神に付き従っている者たちである。神の働きを知らない人々は、神の知己であることができず、神の証しをすることもできない。祝福だけを求め、漠然とした抽象的なものだけを追い求めている者たちにわたしは

忠告する。あなたの人生が意義あるものとなるように、できるだけ早く真理を追い求めなさい。もう自分を欺くのはやめなさい。

受肉した神の職分と人間の本分の違い

あなたがたは神の働きのビジョンを知り、神の働きの全体的な方向性を把握しなければならない。これが前向きな入りである。ひとたびビジョンの真理を正確に把握したなら、あなたの入りは確かである。神の働きがどのように変化しようと、あなたの心は堅固で、ビジョンについて明確であり、入りと追求の目標を持つことになる。そのようにして、あなたの中の経験と認識がすべてより深くなり、さらに細かなものになる。ひとたびこの全体像を完全に把握すれば、いのちにおいて何も失わず、途方に暮れることもない。こうした働きの歩みを知らないままなら、あなたは一步ごとに損失を被り、方向転換するだけで数日かかってしまい、数週間かけても正しい軌道に乗ることができない。それは遅れを生じさせないか。あなたがたが把握すべき肯定的な入りや実践の道は多数ある。神の働きのビジョンについては、次に挙げる点を把握していなければならない。すなわち、神による征服の働きの意義、完全にされるための将来の道、試練や患難を経験して成し遂げるべきこと、裁きと刑罰の意義、聖霊の働きの裏にある原則、そして完全にすること、征服することの裏にある原則である。これらはどれもビジョンの真理に属するものである。その他のことは、律法の時代、恵みの時代、および神の国の時代における三段階の働きであり、また将来の証しである。これらもビジョンの真理であり、最も基本的なことであるとともに、最も大事なことである。現在、あなたがたが入って実践すべきことは非常に多い。そしてそれらは、今さらに重層的かつ詳細になっている。これらの真理について何の認識も有していなければ、あなたがまだ入りを成し遂げていない証拠である。たいていの場合、真理に関する人の認識はあまりに浅く、ある種の基本的な真理を実践することができず、ほんの些細なことでさえどう対処すればよいのか分からない。人が真理を実践できないのは、その性質が反抗的だからであり、また今日の働きについての認識があまりに表面的で一面的だからである。それゆえ、人が完全にされるのは容易なことではない。あなたはあまりに反抗的で、古い自己をあまりにも多く持ち続けている。真理の側に立つことができず、最も自明な真理でさえ実践できない。このような人を救うことはできず、彼らはいまだ征服されていない人々である。あなたの入りに詳細も目標も欠けているなら、成長があなたに訪れるのは遅々としたものとなるだろう。あなたの入りにほんのわずかの現実もなければ、あなたの追求は虚しく終わるだろう。真理の本質を分かっている

ければ、あなたは何も変わらないままだろう。人のいのちの成長と性質の変化は、現実に入ること、そしてさらに、詳細な経験に入ることを通して達成される。入りの過程で詳細な経験を数多くし、実際の認識と入りが豊富にあるなら、あなたの性質は速やかに変化する。目下のところ、実践について完全には理解していなくても、少なくとも、働きのビジョンについては分かっているなければならない。そうでなければ、あなたは入ることができない。真理を認識しなければ、入りは不可能なのである。聖霊が経験の中であなたを啓いて初めて、あなたは真理についてより深い認識を得て、より深く入ることができる。あなたがたは神の働きを知らなければならない。

最初、人類が創られた後、神の働きの土台となったのはイスラエル人だった。イスラエル全体が地上におけるヤーウェの働きの基盤だったのだ。ヤーウェの働きは、人間が地上で正しい生活を送り、ヤーウェを正しく礼拝できるように、律法を定めることで人間を直接導き、牧養することだった。律法の時代の神は、人間が見ることも触れることもできなかった。神はサタンによって墮落させられた最初期の人々を導き、教え、牧養するだけだったので、神の言葉には律法、規則、および人間の行動の規範しか含まれておらず、いのちの真理を人々に施すことはなかった。ヤーウェに導かれたイスラエル人は、サタンによって深く墮落させられてはいなかった。神の律法の働きは、救いの働きの最初の段階、救いの働きの出発点に過ぎず、人間のいのちの性質を変えることとは事実上何の関係もなかった。ゆえに、救いの働きの初めにおいて、イスラエルでの働きのために神が肉をまとう必要はなかった。神が仲介者、つまり人間と関わるための道具を必要としたのはそのためである。そこで、ヤーウェに代わって語り、働く者たちが、被造物の中から現れた。こうして人の子らや預言者たちが人間のあいだで働くようになった。人の子らはヤーウェに代わって人間のあいだで働いたのである。ヤーウェに「人の子ら」と呼ばれたのは、このような人々がヤーウェに代わって律法を定めたことを意味する。彼らはイスラエルの民の中の祭司でもあった。つまり、ヤーウェに見守られ、ヤーウェの加護を受けた祭司であり、ヤーウェの霊は彼らにおいて働きを行った。彼らは民の指導者であり、直接ヤーウェに仕えていた。一方、預言者たちはヤーウェに代わり、あらゆる地域や部族の民に対して語ることに専念した。彼らはまた、ヤーウェの働きを預言した。人の子らであれ預言者たちであれ、彼らはみなヤーウェ自身の霊によって起こされ、彼らにはヤーウェの働きがあった。彼らは人々のあいだにおいて、ヤーウェを直接代表する者たちだった。彼らが働きを行ったのはヤーウェに起こされたからであって、彼らが聖霊自身の受肉した肉体だったからではない。それゆえ、彼らは神に代わって語り、働いたという点では同様だったが、律法

の時代におけるこれら人の子らと預言者たちは、受肉した神の肉体ではなかった。恵みの時代や最後の段階における神の働きは、これと正反対だった。人間の救いと裁きの働きはいずれも受肉した神自身が行ったので、神の代わりに働く預言者たちや人の子らを再び起こす必要は一切なかった。人間の目には、彼らによる働きの本質と手段のあいだに根本的な違いがあるようには見えない。また、人々が受肉した神の働きを、預言者たちや人の子らの働きと常に混同しているのもそのためである。受肉した神の外見は、預言者たちや人の子らの外見と基本的に同じだった。さらに、受肉した神は預言者たちよりずっと普通で現実的だった。それゆえ、人間は両者を区別することができない。人間は外見ばかり注目するので、両者は同じように働き、語るものの、そこに根本的な違いがあることにはまったく気づいていない。人間の識別力はあまりに低いので、人間には基本的な問題も見分けることができず、これほど複雑なこととなとなおさらである。預言者や、聖霊に用いられる者たちが語り、働きを行った際、彼らは人間の本分を尽くし、被造物の役割を果たしていたが、それは人間がすべきことだった。しかしながら、受肉した神の言葉と働きは、神の職分を遂行することだった。受肉した神の外形は被造物と同じだが、その働きは、自身の役割を果たすことではなく、神の職分を遂行することだった。

「本分」が被造物に関して用いられる一方、「職分」は受肉した神の肉体に関して用いられる。両者のあいだには本質的な違いがあり、この二つを相互に置き換えることはできない。人間の働きはその本分を尽くすことだけであるが、神の働きは経営すること、そして神の職分を遂行することである。それゆえ、多くの使徒が聖霊に用いられ、多くの預言者たちが聖霊に満たされたが、その働きと言葉は単に被造物の本分を尽くすことに過ぎなかった。彼らの預言は受肉した神が語るいのちの道よりも偉大だったかもしれないし、彼らの人間性は受肉した神のそれをも超越していたかもしれないが、彼らは本分を尽くしていたのであって、職分を果たしていたのではない。人間の本分とは、人間の役割のことをいい、人間が達成できるものである。しかし、受肉した神が遂行する職分は、神の経営に関連しており、人間には成し遂げることをできないものである。語ることであれ、働きを行うことであれ、あるいは不思議を示すことであれ、受肉した神は自身の経営のさなかに偉大な働きを行っているのであり、このような働きは、人間が受肉した神に代わって行うことはできない。人間の働きは、神の経営の働きのある段階において被造物の本分を尽くすことだけである。神の経営がなければ、つまり、受肉した神の職分が失われるなら、被造物の本分もまた失われるだろう。自身の職分を遂行する神の働きは人間を経営することであり、他方、本分を尽くしている人間は、創造主の要求に応えるために自分の義務を果たしているのであって、職分を遂行していると見なされるこ

とは決してない。神の元来の本質、つまり神の霊にとって、神の働きとはその経営のことだが、被造物と同じ外形をまとう受肉した神にとって、その働きとは自身の職分を遂行することである。受肉した神がどのような働きを行おうと、それは自身の職分を遂行することであり、人間にできるのは、神の導きのもと、神の経営の範囲内で最善を尽くすことだけである。

人間が本分を尽くすということは、実際のところ、人間に本来備わっているもの、つまり、人間に可能なことをすべて成し遂げることである。そうすると、その人の本分は尽くされる。奉仕する最中の人間の欠点は、徐々に経験を積むことと、裁きを受ける過程を通して少しずつ減少する。それらは人間の本分を妨げることも、それに影響を与えることもない。自分の奉仕に欠点があるかもしれないと恐れて、奉仕をやめたり、妥協して退いたりする者たちは、すべての人の中で最も臆病である。奉仕する中で表すべきことを表せず、本来可能なことを成し遂げられず、その代わりにのらくらし、形だけ奉仕しているふりをするならば、その人は被造物が本来備えているはずの機能を失ったのである。こうした者たちはいわゆる「凡庸な」人で、無用の長物である。どうしてこのような者たちが被造物と呼ばれ得るのか。外見は立派でも中身は腐った墮落した存在ではないのか。人間が自分を神と称しながら、神性を示すことも、神自身の働きを行うことも、あるいは神を表すこともできなければ、それは間違いなく神ではない。なぜなら、その人には神の本質がなく、神が本来成し遂げ得ることが、その人の内にないからである。自分が本来達成できることを失ってしまえば、その人はもはや人間とは見なされず、被造物として存在する資格も、神の前に出て神に仕える資格もない。さらに、そのような者は神の恵みを受ける資格も、神に見守られ、保護され、神によって完全にされる資格もない。神の信頼を失った多くの者は、いずれ神の恵みを失う。そうした者たちは、自分の悪行を恥じないどころか、図々しくも神の道が間違っているという考えを言い広める。そして、そのような反抗的な者たちは、神の存在を否定しさえする。そうした反抗心を抱く人々に、神の恵みを享受する権利がどうしてあろうか。自身の本分を尽くさない者たちは、神に対して極めて反抗的で、神に多くの借りがある。それにもかかわらず、彼らは反対に、神は間違っていると激しく非難する。そのような人間がどうして完全にされるに値するのか。これは、淘汰され、懲罰される前触れではないのか。神の前で自身の本分を尽くさない者は、すでに最も憎むべき罪を犯している。その罪に対しては、死さえも十分な罰ではない。しかし、人間は図々しくも神に反論し、自分を神に比している。そうした人間を完全にする価値がどこにあるのか。自分の本分を尽くさないなら、その人は罪悪感と負い目を感じるべきである。自らの弱さ、無用さ、反抗心、墮落を恥じ、自分のいのちを神に

捧げるべきである。そして初めて、人間は真に神を愛する被造物となり、そうした人だけが神の祝福と約束を享受し、神によって完全にされる資格がある。では、あなたがたの大多数はどうだろうか。あなたがたは、自分たちのあいだで生きている神をどう扱っているのか。神の前でどのように本分を尽くしてきたのか。行うように命じられたすべてのことを、生命をかけても成し遂げたことがあるのか。あなたがたは何を犠牲にしたのか。わたしから多くを受け取ったのではないか。あなたがたは見分けることができるのか。どれほどわたしに忠実なのか。どのようにわたしに仕えてきたのか。また、わたしがあなたがたに授け、あなたがたのために行ったあらゆることはどうなのか。あなたがたは、その大きさを測ったことがあるのか。あなたがたはみな、自分の内にあるささやかな良心とそれを比較し、判断したのか。あなたがたの言動はいったい誰に相応しいのか。そんなにもちっぽけなあなたがたの犠牲が、わたしがあなたがたに授けたものすべてに相応しいとでもいうのか。わたしはそうするしかないので、心からあなたがたに献身してきたが、あなたがたは邪悪な意図をもち、わたしに対していい加減な気持ちでいる。あなたがたの本分はこの程度で、それがあなたがたの唯一の役割である。そうではないのか。自分が被造物としての本分を全く尽くさなかったことを、あなたがたはわかっていないのか。どうしてあなたがたが被造物とみなされることができるのか。あなたがたは、自分たちがいったい何を表し、何を生きているのか、はっきりわかっていないのか。あなたがたは自分の本分を尽くすことを怠ったにもかかわらず、神の憐れみと豊かな恵みを得ることを求めている。このような恵みはあなたがたのように無価値で卑劣な者たちのためではなく、何も求めず喜んで自らを犠牲にする人々のために用意されている。あなたがたのような人々、これほどまでに凡庸な人々は、天の恵みを享受するにまったく値しない。苦難と絶え間ない罰だけがあなたがたの生涯につきまとうだろう。わたしに忠実であることができないのなら、あなたがたの運命は苦しみに満ちたものになる。わたしの言葉とわたしの働きに対して責任を持っていないなら、あなたがたの結末は懲罰である。どんな恵みも祝福も、神の国のすばらしい生活も、あなたがたには無縁である。これがあなたがたに相応しい結末であり、それは自ら招いた結果である。そうした無知で傲慢な者たちは最善を尽くさず、自分の本分を尽くしもせず、恵みを求めて手を差し出すが、それはまるで、自分にはそれを求める資格があるかのようである。そして、求めるものが得られなければ、信仰心が薄くなる。このような者たちがどうして理性的だと見なされようか。あなたがたは素質に乏しく、理知に欠け、経営の働きの際に尽くすべき本分を尽くすことがまったくできない。あなたがたの価値はすでに急降下している。わたしが示したあれだけの好意に対して、あなたがたがそれに報いていないことは、す

でに極度の反抗の行為であり、あなたがたを断罪し、その臆病さ、無能さ、卑しさ、無価値さを実証するに十分である。どうしてあなたがたに、手を差し出し続ける資格があるのか。あなたがたがわたしの働きをほんの少しも支えられず、忠実であることも、わたしの証しに立つこともできないというのが、あなたがたの悪行と欠点だが、あなたがたはかえってわたしを攻撃し、わたしについて偽りを語り、わたしが不義だと不平を言う。これが、あなたがたの忠実さというものか。これが、あなたがたの愛というものか。これ以外に、あなたがたはどのような働きができるのか。すでに行われたすべての働きに、あなたがたはいかに貢献したのか。どれほどの労力を費やしたのか。わたしはあなたがたを非難しないことで、すでに大きな寛容を示した。それなのに、あなたがたは恥知らずにもわたしに言い訳をして、人のいないところでわたしについて不満を言う。あなたがたにはほんのわずかな人間性もないのか。人間の本分は人間の頭脳と観念に汚染されているが、あなたは本分を尽くして忠誠を示さなければならない。人間の働きの中にある不純物は、その人の素質の問題だが、人間が本分を尽くさなければ、それはその人の反抗心を示す。人の本分と、その人が祝福を受けるか厄災に見舞われるかのあいだには、何の相互関係もない。本分とは人間が全うすべきことであり、それはその人の天命であって、報酬や条件、理由に左右されるべきではない。そうしてはじめて、その人は本分を尽くしていることになる。祝福されるとは、裁きを経験した後、その人が完全にされ、神の祝福を享受するということである。厄災に見舞われるとは、刑罰と裁きの後もその人の性質が変わらないこと、完全にされることを経験せずに罰せられることである。しかし、祝福されるか厄災に見舞われるかに関わらず、被造物は自身の本分を尽くし、自分が行なうべきことを行ない、できることをしなければならない。これが、人がすべきこと、つまり神を追い求める人がすべき最低限のことである。あなたは祝福されるためだけに本分を尽くそうとしてはならない。また、厄災に見舞われることへの恐れから、行動することを拒んではならない。一つだけ言っておこう。自分の本分を尽くすことこそ、その人のなすべきことであり、本分を尽くすことができないとすれば、それはその人の反抗心である。人間が徐々に変えられるのは、自身の本分を尽くす過程を通してである。また、その過程で、その人は自身の忠実さを実証する。ゆえに、本分を尽くすことができればできるほど、あなたはより多くの真理を受け取り、あなたの表現もますます現実のものになる。本分を尽くす際に動作を繰り返すだけで、真理を求めない者は、最後に淘汰される。そのような者たちは真理の実践において自身の本分を尽くしておらず、また本分を尽くす中で真理を実践しないからである。彼らは変わらない人で、厄災に見舞われる。彼らが表すものは不純であるだけでなく、彼らが表す一切のものは邪悪である。

恵みの時代、イエスもまた多くの言葉を語り、多くの働きをなした。イエスはイザヤとはどう違っていたのか。イエスはダニエルとどう違っていたのか。イエスは預言者だったのか。イエスはキリストだと言われるのはなぜか。彼らのあいだの違いは何か。彼らはみな言葉を語ったが、彼らの言葉は、人間にはだいたい同じもののようには思われた。彼らはみな言葉を語り、働きを行った。旧約聖書の預言者は預言を語り、同様にイエスもそれができた。なぜそうなのか。ここでの違いは、働きの性質による。このことを識別するにあたり、肉の性質を考慮してはならない。また、語られた言葉の深さや浅さを考察すべきではない。彼らの働きと、その働きが人にもたらす効果をいつも第一に考えなければならない。預言者たちによって語られた当時の預言は、人のいのちを施さなかった。また、イザヤやダニエルのような人々が受けた黙示は単なる預言であって、いのちの道ではなかった。ヤーウェによる直接の啓示がなければ、その働きを行える者は誰一人いなかっただろう。それはただの人間には不可能なことである。イエスも多くの言葉を語ったが、そうした言葉はいのちの道で、そこから人間は実践の道を見出すことができた。つまり、第一に、イエスは人間にいのちを与えることができた。なぜなら、イエスはいのちだからである。第二に、イエスは人間の逸脱を正常に戻すことができた。第三に、イエスの働きはヤーウェの働きを引き継ぎ、その時代を進めることができた。第四に、イエスは人間の内なる必要を把握し、何が人間に欠けているのかを理解できた。第五に、イエスは古い時代を終わらせ、新しい時代の到来を告げることができた。そのため、イエスは神、そしてキリストと呼ばれたのである。イエスはイザヤだけではなく、他のすべての預言者とも違っていた。比較のため、イザヤを例に預言者たちの働きを見てみよう。第一に、イザヤは人間にいのちを施すことができなかった。第二に、新たな時代の到来を告げることができなかった。イザヤはヤーウェに導かれて働いたのであって、新たな時代の到来を告げるためではなかった。第三に、イザヤが語った言葉は、彼自身にも理解できないことだった。彼は神の霊から直接啓示を受けていたのだが、他の人々はそれを聞いた後ですら理解できなかった。これらの点だけでも、イザヤの言葉が預言に過ぎなかったこと、ヤーウェの代わりに行った働きの一面でしかなかったことが十分に証明される。しかし、イザヤは完全にヤーウェを代表することができなかった。彼はヤーウェのしもべで、ヤーウェの働きの道具だった。イザヤはただ律法の時代にヤーウェの働きの範囲内で働いていただけである。イザヤは律法の時代を超えては働かなかったのだ。それに対して、イエスの働きは異なっていた。イエスはヤーウェの働きの範囲を超えており、受肉した神として働き、全人類を贖うために十字架にかけられた。つまり、イエスはヤーウェによる働きの範囲外で新たな働きを行った。それが新たな時代の到

来を告げたということである。それに加え、人間には成し遂げられないことについて、イエスは語ることができた。イエスの働きは神の経営の内側にあり、全人類に関わるものだった。イエスはほんの数人に働きかけたのではないし、その働きは限られた数の人間を導くものでもなかった。神がどのように人間として受肉したか、聖霊が当時どのように啓示を与えたか、また聖霊が働きを行うために人間へとどう降臨したかについて言えば、それらは人間には見ることも触れることもできない事柄である。これらの真実が、イエスが受肉した神であるという証拠になることは、まったくあり得ない。このように、人間に感知できる神の言葉と働きにおいてのみ、区別は可能なのである。現実的なことはこれしかない。と言うのも、霊の事柄はあなたの目に見えず、神自身だけが明確に知っており、受肉した神でさえすべてを知っているわけではないからである。それが神かどうかは、その働きによってのみ確かめられる。その働きを見ると、まず、イエスは新たな時代を開くことができたのだとわかる。第二に、イエスは人のいのちを施し、辿るべき道を示すことができた。イエスが神自身であることを証拠立てるにはこれで十分である。少なくとも、イエスの行う働きは神の霊を完全に表すことができ、そうした働きから、神の霊がイエスの内にあることがわかる。受肉した神の行った働きは、おもに新たな時代の到来を告げ、新たな働きを先導し、新たな領域を切り開くことだったが、これらだけでも、イエスが神自身であることを実証するのに十分である。つまりこれが、イザヤやダニエル、および他の偉大な預言者たちとイエスとを区別するものである。イザヤ、ダニエル、そして他の預言者はみな、高度な教育を受けた教養ある部類の人間で、ヤーウェの導きの下にある非凡な人たちだった。受肉した神の肉体もまた、豊かな見識を持ち、理知に欠けることもなかったが、その人間性はひときわ普通だった。彼は普通の人間で、人の目から見て特殊な人間性は見当たらず、その人間性に他人と異なる点は何もなかった。まったく超越的でも特異でもなく、高度な教養、知識、理論などは備えていなかった。イエスの語ったいのちと、イエスの導いた道は、理論や知識、人生経験、あるいは家庭内の教育を通して獲得されたものではなかった。そうではなく、それらは霊による直接の働きであり、つまりは受肉した肉体の働きである。人の目から見て、人間の弱さがあり、しるしや不思議を行うことのできない普通の神がとうてい神と思えないのは、人間が神に関する強い観念を持ち、とりわけそうした観念が、漠然とした超自然的な要素をあまりに多く含んでいるからである。これらは人間の誤った観念ではないのか。受肉した神の肉体が普通の人間のものでなければ、どうして肉になったと言えるだろうか。肉体を持つということは、普通の正常な人間だということである。それが超越的な存在であったなら、肉による存在ではなかったはずだ。自分が肉による存在であること

を証明するために、受肉した神は普通の肉体を持つ必要があった。これは単に受肉の意義を完全なものにするためだった。しかし、預言者や人の子らは違う。彼らは賜物を与えられ、聖霊に用いられる人たちだった。人の目から見て、彼らの人間性はとりわけ偉大で、彼らは普通の人間性を超えることを数多く行った。そのため、人は彼らを神と見なした。さて、あなたがたはみな、この点をはっきり理解しなければならない。と言うのも、過去の時代のあらゆる人々が、この問題をいともたやすく誤解してきたからである。さらに言えば、受肉は最も神秘的な奥義であり、受肉した神は人間にとって最も受け入れ難いものである。わたしが述べていることは、あなたがたが自分の役割を果たし、受肉の奥義を理解する助けとなる。これはみな、神の経営とビジョンに関連している。あなたがたがこれを理解することは、ビジョン、つまり神による経営の働きを認識する上でいっそう役に立つだろう。このようにして、あなたがたはまた、各種の人々が尽くすべき本分について大いなる理解を得る。これらの言葉は、あなたがたに道を直接示さないが、それでもあなたがたの入りの大きな助けとなる。と言うのも、あなたがたの現在の生活にはビジョンがひどく欠けており、これがあなたがたの入りを大いに妨げているからである。あなたがたがこれらの事柄を理解できないままであれば、入りを促す動機は何もない。また、そうした追求によって、あなたがたが立派に本分を尽くせるようになるなど、どうしてあり得ようか。

神はすべての被造物の主である

前の二つの時代の働きのうち、一つの段階はイスラエルで、もう一つの段階はユダヤで行われた。一般的に言って、この働きのどちらの段階もイスラエルを出ることはなく、これらはいずれも最初の選民に対して行われた。この結果、イスラエル人はヤーウェ神をイスラエル人だけの神だと考えている。イエスはユダヤで活動し、磔の働きを行ったため、ユダヤ人はイエスをユダヤの民の贖い主とみなしている。ユダヤ人は彼をユダヤ人だけの王であり、他のどの民の王でもないと考えている。イギリス人の罪を贖う主ではなく、アメリカ人の罪を贖う主でもなく、イスラエル人を贖う主であり、イエスがイスラエルで贖ったのはユダヤ人だと考えている。実際には、神は万物の主であり、すべての被造物の神である。イスラエル人だけの神ではなく、ユダヤ人だけの神でもなく、すべての被造物の神である。神の働きのうち前の二つの段階はイスラエルで起き、人々の間にある種の観念を生み出した。人々は、ヤーウェがイスラエルで働きを行い、イエス自らもユダヤで働きを行い、さらに彼は肉となって働きを行ったが、いずれにせよこの働きはイスラエルの

外には広がらなかったと考えている。彼はエジプト人の中で働くことはなく、インド人の中で働くこともなく、イスラエル人の中でのみ働きを行った。そのため人々は様々な観念を形成し、神の働きを一定の範囲内で思い描いている。神が働きを行う時は、選民の間で、イスラエルにおいて行われ、イスラエル人以外に神の働きの対象者はなく、神の働きにそれ以上の範囲もないというのである。彼らは特に受肉した神を抑えつけることに厳格で、神がイスラエルの外に出ることを認めない。これらはすべて、単なる人間の観念ではないのか。神は天と地のすべてを、そして万物を造り出し、被造物のすべてを造り出したのに、なぜその働きをイスラエルのみに限定することができるのか。そうであるなら、神がすべての被造物を生み出したことに何の意味があるのか。神は世界全体を生み出し、神の六千年の経営（救いの）計画を、イスラエルだけではなく、全宇宙の一人ひとりを対象に行った。人々は中国、米国、英国あるいはロシアに住んでいても、みなアダムの子孫であり、みな神により創られたのである。誰一人として神の創造の範囲から離脱することはできず、誰一人として「アダムの子孫」という呼称から逃れることはできない。人々はみな神の被造物であり、アダムの子孫である。そして、アダムとエバの堕落した子孫でもある。神の被造物はイスラエル人だけではなくすべての人々であり、ただ呪われた者もいれば祝福された者もいるだけである。イスラエル人には望ましい点がたくさんあり、神は当初、イスラエル人が最も堕落していない民だったため、イスラエル人に対して働きを行った。中国人はイスラエル人に匹敵するものではなく、はるかに劣っている。そのため神はまずイスラエルの人々の間で働きを行い、神の働きの第二段階はユダヤでのみ行われた。その結果、人間に多くの観念や規則が生じた。実際、神が人の観念に従って行動するのだとしたら、神はイスラエル人の神でしかなく、神の働きを異邦人の諸国に拡大することはできないだろう。被造物すべての神ではなく、イスラエル人だけの神だからである。預言書によれば、ヤーウェの名は異邦人の諸国で讃えられ、異邦人の諸国に広まるとされている。このように預言されているのはなぜか。神がイスラエル人だけの神ならば、イスラエルでしか働きを行わないだろうし、その働きを拡大することもなく、こうした預言も行わないだろう。神がこの預言を行ったからには、神の働きは必ず異邦人の諸国、あらゆる国や土地に拡大されるのである。彼がこのように述べたからには、必ずその通りにされなければならない。これが神の計画である。神は天と地および万物を造り出した主であり、被造物すべての神だからである。神がイスラエル人の間で働きを行おうと、ユダヤ全体で行おうと、神が行う働きは全宇宙の働きであり、全人類の働きである。神が今日、赤い大きな竜の国――異邦人の国――で行う働きも、やはり全人類の働きである。イスラエルは地上における神の働きの基点だったかもし

れず、同様に中国も、異邦人の諸国における神の働きの基点であるかもしれない。これで神は、「ヤーウェの名は異邦人の諸国で讃えられるであろう」という預言を成就させているのではないか。異邦人の諸国における神の働きの最初の段階は、神が赤い大きな竜の国で行うこの働きである。受肉した神がこの土地で、これら呪われた人々のあいだで働きを行うことは、人の観念とひとときわ相反する。これらの人々は最も卑しく何の価値もなく、当初ヤーウェに見捨てられた人々である。人が他の人々に見捨てられることはあるにせよ、神に見捨てられたならば、それ以上地位のない人はなく、それ以上価値の低い人もない。神の被造物として、サタンに取り憑かれることや人々に見捨てられることはどちらも悲惨なことであるが、被造物が創造主に見捨てられたなら、それはもっと低い地位になりようがないことを意味する。モアブの子孫は呪われて、この遅れた国に生を受けた。モアブの子孫は間違いなく、闇の影響を受けた人々の中でも最低の地位にある。この人々はこれまで最低の地位にあったからこそ、彼らに対して行われる働きは人間の観念を最も効果的に打ち砕くことができるのであり、また同時に神の六千年の経営計画全体にとって最も有益な働きとなる。この人々の間でこうした働きを行なうことは、人の観念を打ち砕くための最良の方法であり、神はこの働きによってひとつの時代を開始する。これにより神は人の観念をすべて打ち砕き、恵みの時代全体の働きを終える。神の最初の働きはユダヤで、イスラエルの境界の中で行われた。異邦人の諸国においては、神は新しい時代を始める働きを全く行わなかった。神の働きの最終段階は、異邦人の間で行われるだけでなく、呪われた人々の間で行われることがさらに重要である。この点はサタンに最も屈辱を与え得る証拠であり、それによって神は、全宇宙の被造物すべての神、万物の主、命あるすべてのものにとっての崇拜の対象になるのである。

現在、神がどのような新しい働きを始めたのか、まだ理解していない人々がいる。異邦人の諸国では、神が新たな始まりの到来を告げ、新しい時代を開始し、新しい働きを始め、この働きをモアブの子孫に対して行なっている。これは神の最新の働きではないか。歴史上の誰も何者もこの働きを過去に経験したことはなく、聞いたこともなく、ましてや正しく認識したことはなかった。神の知恵、驚異、深遠さ、偉大さ、そして聖さはすべて、世の終わりの働きのこの段階を通して明らかになる。これは人間の観念を打ち砕く新しい働きではないか。そのため人々の中には、次のように考える者がいる。「神はモアブを呪い、モアブの子孫を見捨てると語ったのに、今になってモアブの子孫を救えるのか」と。こうした人々は神に呪われてイスラエルから追放された異邦人であり、イスラエル人は彼らを「異邦の犬」と呼んだ。誰の目から見ても、彼らは異邦の犬であるだけでなく、さらにそれ以下

の滅びの子であり、すなわち彼らは神の選民ではない。彼らは元々イスラエルの地で生まれたが、イスラエルの民に属しておらず、異邦人の諸国に追放された。彼らはあらゆる人々の中で最も卑しい者たちである。そして彼らが人類の中で最も卑しい者であるからこそ、神は新しい時代を始める働きを彼らの間で実行する。彼らは墮落した人類の代表だからである。神の働きは選択を伴う的を絞ったものであり、神が今日これらの人々の中で行う働きは、被造物に対して行われる働きでもある。ノアは神の被造物であったし、彼の子孫もそうである。血と肉を持つ世界中の誰もが神の被造物である。神の働きはすべての被造物に向けられており、創造された後に呪われたか否かによって変わることはない。神の経営（救い）の働きはすべての被造物に向けられており、呪われていない選民にのみ向けられるものではない。神は自分の被造物の間でその働きを行うことを望んでいるため、この働きは間違いなく、見事に完了するまで行われるであろう。そして神は、自身の働きにとって有益な人々のあいだで働きを行う。このため、神が人々の間で働くときには、すべての因習が打ち碎かれる。神にとっては、「呪われた」「罰せられた」「祝福された」という言葉には意味がないのだ。イスラエルの選民同様、ユダヤ人は善良であり、優れた素質と人間性をもった人々である。当初、ヤーウェは彼らの間で働きを開始し、最も初期の働きを行ったが、今日神が彼らに対して征服の働きを行うことに意味はないだろう。彼らも被造物の一部であり、多くの肯定的側面を持っているかもしれないが、この段階の働きを彼らの間で行うことに意味はないだろう。その場合、神は人々を征服できず、すべての被造物に確信を与えることもできないだろう。それこそが、赤い大きな竜の国のこうした人々に、神の働きを移すことの意味なのである。ここでの深い意味は、神がひとつの時代を始めること、すべての規則とすべての人間の観念を打ち碎くこと、そして恵みの時代全体における働きを終えることである。もし神の現在の働きがイスラエル人の間で行われたならば、神の六千年の経営計画が終わる時にはすべての人が、神はイスラエル人だけの神であり、イスラエル人だけが神の選民であり、イスラエル人だけが神の祝福と約束を受け継ぐに値するのだと信じることになるだろう。神は赤い大きな竜の国の異邦人の中で終わりの日に受肉することで、神はすべての被造物の神であるという働きを成し遂げる。神は経営（救い）の働き全体を完成させ、赤い大きな竜の国で、神の働きを中心となる部分を完了する。三つの段階の働きを中心は人間の救いであり、すなわちすべての被造物に創造主を崇めさせることである。そのため、働きのどの段階にも大きな意味がある。神は意味や価値のないことは行わない。働きのこの段階は、一方では新しい時代の到来を告げ、前の二つの時代を終わらせる。他方では、人間のすべての観念と、人間の古い信仰や認識方法すべて打ち碎く。前の二つの時代の

働きは、異なる人間の観念に従って行われた。しかし今回の段階は、人間の観念を完全に排除し、それによって完全に人々を征服する。モアブの子孫を征服すること、モアブの子孫の間で行う働きを通して、神は全宇宙の人々をすべて征服することになる。これが神の働きのこの段階の最も深い意味であり、神の働きのこの段階の最も尊い側面である。あなたが今、自らの地位が低く、自分にあまり価値がないことを知っているにしても、あなたは最も大きな喜びに出会ったと感じるようになるだろう。あなたは大きな祝福を受け継ぎ、大きな約束を手に入れたのであり、そして神のこの偉大な働きの完成を助けることができるのである。神の本当の顔を見ることができ、神の本来の性質を知っており、神の旨を行なっている。神の働きのうち前の二つの段階は、イスラエルで行われた。もし、終わりの日における神の働きのこの段階がやはりイスラエル人の間で行なわれるなら、イスラエル人だけが神の選民なのだと全ての被造物が信じてしまうだけでなく、神の経営計画全体も望ましい効果を上げることはできないだろう。神の働きの二つの段階がイスラエルで行われていた時期、異邦人の諸国では新しい働きは全く行われず、新しい時代を始める働きも行われなかった。現在の、新しい時代を開始する働きの段階は、まず異邦人の諸国で行われるだけでなく、まずモアブの子孫の間で行われ、それによってその時代全体が開始される。神は人の観念にこめられていた認識をすっかり打ち砕き、ひとかけらも残ることを許さなかった。神はその征服の働きにおいて、人間の観念、その古い従来の認識方法を打ち砕いた。神は人々に、神に規則はなく、神について古いものは何もなく、神が行う働きは完全に解放されていて自由であり、そして神はその行う事すべてにおいて正しい、ということを理解させる。あなたは神が被造物の間で行うすべての働きに完全に従わなければならない。神が行うすべての働きには意味があり、それらは人間の選択や観念ではなく、彼自身の意志と知恵に従って行われる。彼は自身の働きにとって有益なことがあればそれを行い、自身の働きにとって有益でないことは、どんなに良いことであっても行わない。彼は働きを行い、その働きの対象者と場所とを、その働きの意味と目的に従って選択する。働きにおいて彼は、過去の規則には固着せず、古い常套手段にも従わない。そうではなく、働きの意義に従ってその働きを計画する。最終的には、働きの真の効果と予期された目的とを達成する。もしあなたが今日これらのことを理解しないなら、この働きはあなたに対していかなる効果ももたらさないだろう。

成功するかどうかはその人が歩む道にかかっている

多くの人は、自分がいずれ辿りつく終着点のため、あるいは一時的な享楽のために神を信じている。取り扱いを経験したことのない者は、天に入るため、見返りを得るために神を信じており、完全にされるため、あるいは神の被造物の本分を尽くすために神を信じているのではない。つまり、ほとんどの人は、自身の責任を果たしたり、本分を完了させたりするために神を信じているのではないのである。有意義な人生を送るために神を信じている人はほんのわずかで、「人は生きている以上、神を愛すべきである。なぜなら、そうするのは天が定め、地が認めたことであって、人の天職だからだ」と信じる人もめったにいない。このように、人はそれぞれ追い求める目標が違うが、その追求の目的と裏にある動機はどれも似通っており、しかも、それらの人々が崇拝する対象は大体同じである。過去数千年にわたり、多くの信徒が死に、そして多くの信徒が死んで生まれ変わった。神を追い求めているのは一人二人というものではなく、千人二千人でさえないが、そのような人のほとんどは、自分の前途や未来の輝かしい希望のために神を追い求めているのであり、キリストに身を捧げている者はごく少数である。熱心な信徒でさえ、そのほとんどが自らの罠に陥って死に至っており、そのうえ、勝利を収めた者の数はほんのわずかである。そして、今日に至るまで、人が失敗する理由、あるいは勝利の秘訣を、彼らは依然知らない。キリストを熱心に追い求める人たちでさえ、識見を突然得るという瞬間を経験したことはいまだなく、これらの奥義の真相を突き止めたわけでもない。彼らはただ本当に知らないのである。涙ぐましい努力をして追い求めるが、その歩む道は、成功へのそれではなく、すでに先駆者が歩いた失敗への道なのである。そう考えると、どのように求めるにせよ、それは闇へ通じる道を歩いているということではないか。彼らが得るのは苦い果実ではないのか。過去に成功した者を真似る人が、最終的に幸運を得るのか、それとも不運に見舞われるのかを予測するのは難しい。そうであれば、過去に失敗した人の跡を辿る人の勝算はいかばかりか。失敗する可能性がさらに大きいのではないか。彼らの歩む道に何の価値があるというのか。時間の無駄ではないのか。人が追求において成功するか失敗するかに関係なく、要するにいずれの結果にも原因があり、成功するか失敗するかは、自分の好きなように追い求めることで決まるものではない。

人が神を信じるにあたって最も基本的なことは、その人が誠実な心を持ち、完全に自分を捧げ、本当に従うことである。人にとって最も困難なことは、真の信仰を得ることと引き換えに、自らの一生を捧げることだが、それができれば、人は全部の真理を得て、神の被造物として本分を尽くすことができる。これは、失敗した人

たちには達成できないことであり、キリストを見つけられない人にとってはさらに達成不可能なことである。人は自分のすべてを神に捧げることが得意でなく、創造主に対する本分を進んで尽くそうとせず、真理を知ってもそれを避けて我が道を進み、すでに失敗した人の道を辿りながら追い求めるばかりで、いつも天に背いているので、絶えず失敗し、サタンの誘惑に負け、自らしかけた罠に落ちてしまう。人はキリストを知らず、真理を理解して経験することに長けておらず、パウロを過剰に崇拜し、天に入る欲求があまりに強く、キリストが人に従うことを常に要求し、神に対してもあれこれ命令している。そのため、偉人と言われる人たちやこの世の苦難を経験した人たちでさえも死を免れず、神の刑罰のさなかに死ぬのである。このような人たちについては、非業の死を遂げると言うしかないが、彼らの結末、つまりその死にはそれなりの根拠があるのだ。それらの人たちの失敗は、天の法則にとってさらに耐えがたいことではないだろうか。真理は人の世から生じるが、人間のあいだの真理はキリストによって伝えられる。真理はキリスト、すなわち神自身から生じるものであって、それは人間に不可能なことである。しかし、キリストは真理を提供するだけであり、人が真理を追い求めるのに成功するかどうかを決めるために来るのではない。よって、真理について成功するか失敗するかは、すべて人の追求にかかっている。人が真理について成功するか失敗するかは、キリストとは一切関係がないことであり、人の追求によって決まることである。人の終着点、そして人が成功するか失敗するかの責任を神に押し付け、その責任を負わせてはならない。なぜなら、それは神自身に関係のないことであり、神の被造物が尽くすべき本分に直結しているからである。多くの人は、パウロやペテロが追い求めたこと、そして二人の終着点くらいは知っていても、二人の結末以上のことは何も知らず、ペテロの成功の裏にある秘訣、あるいはパウロの失敗を招いた欠点については何も知らない。だから、彼らの追求の実質を見極めることがまったくできないのであれば、あなたがたの大半の追求は失敗に終わるだろうし、少数の者が成功したとしても、ペテロに並び立つことはない。あなたの追求の道が正しいものであれば、成功の望みがある。真理を追い求める中で辿る道が間違っただけであれば、成功することは永遠にできず、パウロと同じ結末を迎えることになる。

ペテロは完全にされた人だが、神の刑罰と裁きを経験し、神への純粹なる愛を得て初めて完全にされた。彼が歩んだ道は、完全にされる道だったのである。要するに、ペテロの歩んだ道は最初から正しく、神を信じる動機もまた正しいものだったので、彼は完全にされる人となり、人がそれまで歩んだことのない新しい道を歩んだのだ。しかし、パウロが最初から歩んだ道はキリストに逆らうものであり、ただ聖霊がパウロを用い、彼の賜物、彼のあらゆる長所を利用して働きを行おうとし、

彼はキリストのために何十年も働いたということに過ぎない。パウロは聖霊に用いられた人に過ぎず、キリストがパウロの人間性を好意的に見たからではなく、彼の賜物の故に用いられた。パウロがキリストのために働くことができたのも、喜んでそうしたかったからではなく、打ち倒されてそうしたのである。彼がそのような働きができたのも、聖霊による導きと啓きによるもので、その働きが彼の追求や人間性を表しているのでは決してない。パウロの働きは、しもべのそれ、つまり一人の使徒の働きを表している。しかしペテロは違った。彼も多少の働きをしたが、パウロの働きほど立派なものではなく、自分の入りを追い求めながら働き、そして彼の働きはパウロのそれと異なるものだった。ペテロの働きは、神の被造物の本分を尽くすことだった。使徒としての立場で働いたのではなく、神への愛を追い求めながら働いたのである。パウロの働きの過程にも個人的な追求が含まれていたが、彼の追求は、将来への希望と良き終着点への願望以外のためではなかった。パウロは、働きを行う間、精錬を受け入れなかったし、刈り込みや取り扱いも受け入れなかった。自分の働きが神の望みを満たしてさえいれば、そして自分の行うすべてのことが神に喜ばれさえすれば、最終的に見返りが与えられると信じていた。パウロの働きに個人的な経験は一切なく、ひとえに働きそれ自体のためであり、変わることを追い求めながら働いたのではなかった。彼の働きはどれも取引であって、神の被造物としての本分や神への服従は含まれていなかった。その働きの過程において、パウロの古い性質は何ら変わらなかった。彼の働きは他者への奉仕に過ぎず、自身の性質に変化を起こすことはできなかった。パウロは完全にされることも取り扱われることもなく、自分の働きを直接行い、見返りを動機としていた。その点ペテロは違った。彼は刈り込みと取り扱いを受け、精錬された。ペテロの働きの目的と動機は、パウロのそれと根本的に違っていた。ペテロはそれほど多くの働きをなしたわけではないが、彼の性質は多くの変化を経験し、彼が求めたものは真理であり、真の変化だった。彼の働きは単に働きそれ自体のために行われたのではなかった。一方でパウロは多くの働きをしたが、それらはすべて聖霊の働きであって、パウロはその働きに協力していたものの、彼自身がそれを経験することはなかったのである。ペテロの働きがずっと少ないのは、聖霊が彼を通してそれほど働きを行わなかったからに過ぎない。働きの量で完全にされるかどうかが決まったわけではないのだ。一人は見返りを得るために追い求めたのに対し、もう一人は、神への究極の愛を成し遂げ、被造物としての本分を尽くすために追求し、神に満足してもらうべく愛に満ちた姿を生きられるまでになった。彼らは、外見も違えば実質も違った。二人のどちらが完全にされたのかを、それぞれの働きの量で判断することはできない。ペテロは、神を愛する人の姿を生きること、神に従い、刈り込みと取り扱いを

受け入れ、被造物として本分を尽くす者になることを追求した。彼は自分自身を神に捧げ、自分のすべてを神の手に委ね、死ぬまで神に従った。ペテロはこのような決意し、実際それを成し遂げた。これが、ペテロの結末がパウロのそれと最終的に異なるものとなった根本的な理由である。聖霊がペテロに対して行った働きは、彼を完全にするものであり、一方で聖霊がパウロに対して行った働きは、彼を用いるためだった。それは、二人の本性、そして追求に対する考え方が同じではなかったからである。両者とも聖霊の働きを受けたが、ペテロはそれを自分自身に当てはめ、他者にも与えた一方で、パウロは聖霊の働き全体を他者に与え、自分はそこから何も得なかった。このように、聖霊の働きを長年経験しても、パウロ自身の変化はほとんど無きに等しかった。自身の生来の状態に留まり、以前のパウロのままだったのだ。それは単に、長年の働きにおける困難を乗り越えた後、「働く」方法と忍耐を学んだに過ぎず、彼の以前の本性、つまり非常に負けず嫌いで貪欲な本性は、相変わらずそのままだった。そうして長年働いた後、パウロは自分の堕落した性質を自覚しておらず、以前の古い性質を捨ててもいなかったもので、それらの古い性質が彼の働きにおいて明らかに見て取れた。彼はより多くの働きを経験したに過ぎず、それでもその経験量は少なすぎ、彼自身を変えることも、自身の追求の存在価値や意義に対する考え方を変えることもできなかった。彼は長年キリストのために働き、二度と主イエスを迫害することはなかったが、心の中で神に対する認識が変わることはなかった。このことは、彼が神に献身するために働いていたというより、自身の将来の終着点のためにやむなく働いていたことを意味する。パウロは最初キリストを迫害し、キリストに従わなかった。つまり、もともとは意図的にキリストに逆らった人間であり、聖霊の働きについての認識を何も持っていなかった。パウロは自身の働きを終えようとしていたときでさえ、いまだ聖霊の働きを知らなかったし、聖霊の旨にほんの少しも注意を払うことなく、自分本来の性格に沿って自分の意思で行動していただけである。従って、彼の本性はキリストに敵対するものであり、真理に従うものではなかった。聖霊の働きに見捨てられ、聖霊の働きを知らず、キリストに敵対するこのような者が、どうして救われようか。人が救われるか否かは、働きの量や献身の度合いによるのではなく、聖霊の働きを知っているかどうか、真理を実践できるかどうか、そして追求に対する考え方が真理と一致しているかどうかで決まるのである。

ペテロがキリストに付き従い始めてから、確かに自然の啓示があったものの、本性から言えば、彼は最初から喜んで聖霊に従い、キリストを追い求める人だった。聖霊に対する彼の服従は純粋なものであり、富や名声を追い求めず、真理への服従によって突き動かされていた。ペテロは三度にわたってキリストを知っていること

を否定し、主イエスを試したが、そのようなかすかな人間の弱さは、彼の本性と何の関係もなく、彼の将来の追求に影響を及ぼすこともなかった。さらに、彼の試みが反キリストの行いだったことを十分に証明するものでもない。人間の普通の弱さというものは、この世の万人に共通するものだが、ペテロは違うとあなたは思っているのか。人々がペテロに対して偏見を持っているのは、愚かな間違いをいくつか犯したからではないのか。また人々がパウロをかくも敬愛しているのは、パウロが行った数多くの働きや、彼が書いた数多くの書簡のためではないのか。人が人の本質を見極めることなど、どうしてできるというのか。まことに、本当に理知を持つ人であれば、こんな取るに足らないことは見極められるのではないか。長年にわたるペテロの苦難は聖書に記されていないが、それをもって、ペテロには現実の経験がない、あるいは完全にされなかったとは証明できない。人が神の働きを完全に推し量ることなど、どうしてできようか。聖書の記録は、キリストが自ら選択したわけではなく、後世の人々によって編集されたものである。そうであれば、聖書の記録はすべて人の発想に沿って選ばれたのではないか。さらに、ペテロとパウロの結末は、使徒書簡で明確に述べられていないので、人はペテロとパウロを自分の見方や好みで判断する。そして、パウロがかくも多くの働きを行い、その「貢献」があまりに偉大だったために、彼は万人の信頼を得たのである。人は表面的な事柄だけを重んじているのではないか。人が人の本質を見極めることなど、どうしてできようか。言うまでもなく、パウロが数千年にわたって崇拝の対象だったことを考えれば、誰があえて彼の働きを安易に否定するだろうか。漁師に過ぎないペテロの貢献が、パウロのそれと同じくらい偉大だということがどうしてあり得ようか。二人の貢献を鑑みれば、ペテロに先んじてパウロに見返りが与えられるべきであり、パウロこそ神の承認を得るのにふさわしい者のはずである。それなのに、神がパウロに対しては、彼の賜物によって働きを行わせただけなのに、ペテロのほうは完全にされるということを、誰が想像できただろう。これは決して、主イエスが最初からペテロとパウロのために計画を立てていたということではない。むしろ、二人は自分本来の本性に応じて完全にされるか、あるいは働きを行うようにさせられたのだ。よって、人々の目に見えるものは、人の表面上の貢献に過ぎないが、一方で神が見るのは人の本質であり、人が最初から追い求める道であり、そして人の追求の動機なのである。人は他人のことを、自分の観念と知覚で推し量るが、一人の人間の結末は、その人のうわべで決まるわけではない。そこでわたしは、あなたが最初から辿る道が成功の道であり、追求に対するあなたの見方が最初から正しいものであれば、あなたはペテロのようだという。そして、あなたの辿る道が失敗の道であるならば、いかなる代価を払おうとも、あなたの結末はパウロのそれと同じである。い

ずれにせよ、あなたの終着点、そしてあなたが成功するか失敗するかは、あなたの求める道が正しいかどうかで決まるのであって、あなたの献身や支払った代価で決まるのではない。ペテロとパウロの本質、そして彼らが追い求めた目標はそれぞれ異なるものだった。人がこれらの事柄を発見するのは不可能であり、そのすべてを知り得るのは神だけである。というのは、神は人の実質を見ているが、人は自分の本質について何一つ知らないからである。人は、人間の内なる本質や実際の霊的背丈を見ることができないので、パウロの失敗とペテロの成功の理由を見つけられない。多くの人がペテロではなくパウロを崇拝する理由は、パウロが公の働きのために使われ、人がその働きを認識でき、ゆえにパウロの「功績」を認めることが可能だからである。一方でペテロの経験は、人には見えないものであり、また彼が追い求めたものは人には達成できないことなので、人はペテロに興味を持たないのだ。

ペテロは取り扱いと精錬を経験することで完全にされた。彼はこう言った。「わたしはいつ何時でも、神の願いを満たさなければならない。何を行うにせよ、神の願いを満たすことだけを求める。たとえ罰せられても、あるいは裁かれても、わたしは喜んでそうする」。ペテロは自分のすべてを神に捧げ、彼の働き、言葉、そして一生はどれも神を愛するためだった。ペテロは聖さを追求した人であり、経験を重ねるごとに、心の奥深くにある神への愛が大きくなったのである。一方のパウロは表面的な働きをただけで、彼も懸命に働いたのは事実だが、その苦労は、自分の働きを正しく行い、それで見返りを得るためのものだった。最終的に見返りを得られないことを知っていたなら、働きを放り出していたに違いない。ペテロが大切にしていたのは心の中の本当の愛と、現実的で達成できる物事だった。見返りを受けられるかどうかなどは気にもせず、自分の性質が変わるかどうかに関心を置いた。一方のパウロは、より懸命に働くこと、外面的な働きや献身、そして普通の人たちが経験することのない教義を大事にした。自分自身の心の奥深くの変化にも、神への真の愛にも一切興味がなかったのだ。ペテロの経験は、神を真に愛し、神を真に認識するため、神とより近い関係を築くため、そして実践的な人生を得るためだった。パウロが働いたのは、イエスによって託されたからであり、また自分が切望しているものを得るためだったが、これらのことは、自分自身や神についての認識とは無関係だった。彼の働きは、ひとえに刑罰と裁きを避けるためだった。ペテロが求めたのは純粋な愛だったが、パウロが求めたのは義の冠だった。ペテロは聖霊の働きを長年にわたって経験し、キリストについて実際の認識を持ち、同時に自分自身についての認識も深かったから、ペテロの神への愛は純粋なものだった。ペテロは長年の精錬を経て、イエスといのちについての認識を深めた。彼の愛は無条件で自発的なものであり、見返りを求めず何の利益も望まなかった。一方のパウロ

は、長年にわたって働きを行ったにもかかわらず、キリストについての深い認識がなく、自分自身についての認識もごくわずかだった。パウロは単に、キリストへの愛がなかったのであり、彼が働き、その道を走り続けたのは、最後に冠を得るためだった。彼が追い求めたのは最も美しい冠であって、最も純粋な愛ではなかった。またパウロの追求は、能動的ではなく受動的なものであり、自分の本分を尽くしていたのではなく、聖霊の働きに捕えられた後、やむを得ず追求したのである。だからパウロの追求は、彼が神の被造物としてふさわしいという証明にはならない。神の被造物としてふさわしく、自身の本分を尽くしたのはペテロである。人は、神に貢献する人はみな見返りを受けるべきだと考え、また貢献が大きければ大きいほど、神の好意を得るはずだと思っている。人の観点の本質は打算的なものであり、神の被造物として本分を尽くすことを積極的に求めようとはしない。神にとっては、人が神への真の愛と完全なる服従を追い求めれば追い求めるほど、つまり神の被造物として本分を尽くすことを求めれば求めるほど、神に認められるということになる。人が本来の本分と地位に立ち返ることを要求するというのが、神の観点である。人は神の被造物なのだから、自分の立場を越えて神に要求をしてはならず、ただ神の被造物として本分を尽くすべきなのである。パウロとペテロの終着点は、彼らの貢献度ではなく、被造物として本分を尽くせたかどうかに基づいて判断された。つまり、彼らの終着点は、どれほどの働きを行ったか、あるいは世の人が彼らに対してどのような評価を下したかによってではなく、彼らが最初から何を追い求めていたかに基づいて決められたのである。よって、被造物として本分を尽くそうと積極的に追い求めることが成功の道であり、神に対する真の愛を求めることが最も正しい道であって、自分の古い性質の変化と神への純粋な愛を求めることが成功への道である。そのような成功への道こそ、神の被造物としての本来の姿と、本来の本分を回復する道なのである。それは回復の道であると同時に、初めから終わりに至る神のすべての働きの目的でもある。人の追求が個人的な行き過ぎた要求と不合理な願望で汚れているのなら、人の性質を変化させるという成果は達成できない。これは回復の働きにそぐわないことであり、聖霊による働きでは決してない。ゆえにこのことは、この種の追求が神に認められないという証拠である。神に認められない追求に何の意味があるだろうか。

パウロによる働きは人間に公然と示されたが、神への愛の純粋さと、心の奥底でどれほど神を愛していたかについて言えば、人にはこれらのことがわからない。人は、パウロが行った働きしか見ることができず、その働きから彼が確かに聖霊に使われたことを知る。そのため人は、パウロのほうがペテロよりも優れており、またパウロは諸教会に施すことができたので、彼の働きのほうが優れていたと考える。

一方ペテロは、個人の経験にのみ目を向け、時おり働きを行う中でわずかな人を獲得しただけだった。さほど知られていない書簡をいくつか記したに過ぎないが、心の奥底に抱く神への愛がいかに素晴らしいものだったか、誰が知っているだろうか。パウロは、明けても暮れても神のために働いた。なさねばならない働きがある限り、パウロはそれを行った。そのようにすれば冠を得て、神に満足してもらえると考えたのだが、働きを通して自分を変える道を求めることはしなかった。一方のペテロは、生活の中で神の望みを満たせないときは、それが何であろうと不安になった。神の望みを満たせなければそれを悔やみ、努力して神の心を満たす適切な方法を探そうとした。ペテロは、生活のどんなに些細なことにおいても、神の望みを満たすよう自分に要求した。自分の古い性質のことにも同じくらい厳しく、また真理により深く潜り込むために、さらに厳格な要求を自分に課した。パウロは表面上の名声や地位しか求めず、人前で自分を誇示することを追い求め、いのちの入りにより深く潜り込もうとすることはしなかった。彼が重視したのは教義であり、現実ではなかった。人によっては、「パウロは神のために多くの働きを行ったのに、なぜ神に記憶されなかったのか。ペテロは神のためにわずかな働きしかせず、諸教会への貢献も大きくなかったのに、どうして完全にされたのか」と言うかもしれない。ペテロはある程度まで神を愛したが、それこそ神が求めることだった。証しはこのような人にしかないのである。では、パウロはどうか。パウロはどの程度まで神を愛したか。あなたは知っているだろうか。パウロの働きは何のためになされたのか。そして、ペテロの働きは何のためになされたのか。ペテロはさほど多くの働きを行わなかったが、彼の心の奥底に何があったか、あなたは知っているのか。パウロの働きは、諸教会への施しと支えに関連するものだった。ペテロが経験したのは自身のいのちの性質の変化であって、彼は神への愛を経験したのである。これであなたは、彼らの本質がどう異なるかを理解したのだから、最終的にどちらが真に神を信じていたのか、そしてどちらが神を真に信じていなかったかがわかるはずだ。一人は神を真に愛し、もう一人は神を真に愛していなかった。一人は自身の性質の変化を経験し、もう一人は経験しなかった。一人は謙虚に仕え、人から容易に気づかれず、もう一人は人々から崇拜され、素晴らしい印象を残した。一人は聖さを求め、もう一人はそれを求めず、不純ではなかったが純粋な愛を持ち合わせてはいなかった。一人は本当の人間性を持ち合わせていたが、もう一人はそうではなかった。一人は神の被造物の理知を持ち合わせていたが、もう一人はそうではなかった。これらがパウロとペテロの本質の違いである。ペテロが歩んだ道は成功の道であり、それは同時に正常な人間性を回復させる道、神の被造物の本分を回復させる道でもある。よってペテロは成功するすべての人の代表である。一方でパウロ

が歩んだ道は失敗の道であり、表面上は服従し、自分自身を捧げているが、本当に神を愛してはいない人の代表である。彼は真理を持たないすべての人を代表しているのだ。ペテロは、神を信じる中で、何事においても神を満足させること、そして神から来るすべてのものに従うことを追い求めた。不平一つ言わず、刑罰や裁きと共に、精錬、患難、そして生活上の欠乏も受け入れ、そのいずれも神に対する彼の愛を変えることはなかった。これこそ神への究極の愛ではないだろうか。これこそ神の被造物の本分を尽くすということではないだろうか。刑罰、裁き、または患難のいずれかの中にあっても、あなたは死に至るまで従順であることができ、そしてこれこそが、神の被造物が成し遂げるべきことであり、神への愛の純粹さである。仮に人がこれほど多くのことを成し遂げられるなら、その人は神の被造物としてふさわしく、創造主の願いをこれ以上によく満足させるものはない。神のために働くことができるのに、神に従わず、また神を真に愛せないということを想像してみてほしい。このような場合、あなたは神の被造物の本分を尽くしていないばかりか、神に断罪される。真理を持たず、神に従うことができず、神に反抗しているからである。あなたは、神のために働くことしか考えず、真理を実践すること、あるいは自分自身を知ることに無関心である。創造主を理解せず、知ろうともせず、創造主に従うことも創造主を愛することもしない。あなたは生まれつき神に背いている人間なのだから、そのような者は、創造主に愛されないのだ。

このように言う人がいる。「パウロは本当に多くの働きを行い、諸教会のために大きな重荷を背負い、多大な貢献をした。パウロの十三の書簡は、二千年にわたる恵みの時代を支え、それは四福音書に次ぐ功績だ。そのパウロを誰と比較できると言うのか。ヨハネの黙示録は誰も読み解けないが、パウロの書いた手紙はいのちを施し、彼の働きは教会のためになった。他の誰が、このようなことを成し遂げられただろう。それに比べて、ペテロが何の働きをしたのか」。人は、他人を評価するとき、その人のなした貢献によって判断する。神が人を評価するときは、その者の本性を見る。いのちを追い求める人の中で、パウロは自分の本質を知らない人だった。彼は謙虚でも従順でもなかったし、神に反している自分の実質も知らなかった。それゆえ、パウロは、細部にわたる経験を経ておらず、真理を実践する人ではなかった。だがペテロは違った。彼は自分の不完全さ、弱さ、そして神の被造物としての墮落した性質を知っていたから、自分の性質を変化させる実践の道があった。彼は教義だけで現実を伴わないという人間ではなかった。変化した人は救われて新たにされた人であり、真理を追求するにふさわしい人である。それに比べて、変化しない人は必然的に古びた人である。彼らは救われなかった人、つまり神に嫌われ拒否された人なのである。いかにその働きが素晴らしくても、神に覚えてもら

えることはない。あなたがこのことを自らの追求と比べるとき、究極のところペテロとパウロのどちらと同じなのかは自明のはずだ。あなたが追い求めるものの中にやはり真理がなく、今日においてもなおパウロのように傲慢で尊大なら、あなたは間違いなく失敗するくずである。あなたがペテロと同じもの、つまり実践と真の変化を求め、同時に傲慢でも強情でもなく、本分を尽くすことを求めるなら、あなたは勝利を成し遂げる神の被造物である。パウロは自分自身の実質も墮落も知らず、ましてや自分の反抗心については何一つ知らなかった。パウロはキリストに対する自身の卑劣な反抗に触れたことが一度もなく、十分に悔やむこともなかった。パウロはそれに関して簡単な説明をただけで、心の奥底では神に対して完全には服従していなかった。パウロはダマスコへ行く道で倒れたが、自分自身を深く内省することはなく、ひたすら働くことに満足するだけで、自分を知って古い性質を変えることが最も肝心なことだとは考えなかった。彼は真理を語ること、自分自身の良心を慰めるために他者に施すこと、そして二度とイエスの弟子を迫害しないことで満足し、それによって自らを慰め、自分自身の過去の罪を赦した。パウロが目指したのは、未来の冠と儚い働きでしかなく、また彼の求めた目標は、豊かで溢れんばかりの恵みだった。十分に真理を追求せず、また過去に理解できていなかった真理をより深く探求しようとしなかった。したがって、自分自身に対する認識が間違っていたと言えるし、刑罰も裁きも受け入れなかった。働きを行うことができたからといって、自分の本性や実質について認識があったことを意味するわけではない。パウロは表面上の実践にしか集中せず、何より認識を求めて努力したのであり、変化を求めていたわけではなかった。パウロの働きは、ひとえにダマスコへの道でキリストと出会った結果であり、それは彼が最初から持っていた志ではなく、自分の古い性質に対する刈り込みを受け入れた後の働きでもなかった。いくら働きを行っても、パウロの古い性質が変わることはなく、よって彼の働きが彼の過去の罪を償うこともなく、ただ当時の諸教会のあいだで一定の役割を果たしたに過ぎなかった。このように古い性質が変わらない人、つまり、救いを得ることがなく、ましてや真理を持たない人は、主イエスに認められる人には絶対になれない。パウロは、イエス・キリストに対する愛と畏敬に溢れていたわけではなく、真理を探求することに長けていたわけでもなく、ましてや受肉の奥義を求める人ではなかった。彼は詭弁に長けた者、そして自分より優れている人や真理を備えた人に対して従わない者に過ぎず、自分と著しく違う人、あるいは自分に敵対する人や真理を妬み、賜物があって印象深く、深遠な知識を備える人を好んだ。真の道を求めて真理だけを重んじる貧しい人々と交流するのを好まず、代わりに、教義についてばかり語り、知識が豊富な宗教組織の長老格とばかり交流した。パウロは聖霊の新しい働きに対す

る愛がなく、聖霊の新しい働きの動きにも興味がなかった。代わりに彼は、一般的な真理よりも高尚な規則や教義を好んだ。パウロの生来の実質と、彼が追い求めたことの全体を見ても、真理を追求したクリスチャンと呼ばれる資格は彼になく、ましてや神の家の忠実なしもべと呼ばれる資格などない。あまりに偽善的で、あまりに反抗的だったからだ。パウロは主イエスのしもべとして知られているが、彼の行いは最初から最後まで義と呼ぶことができないもので、天国の門に入るのにまったくふさわしくなかった。パウロは不義を行う偽善者だが、キリストのために働いた者としてしか見なせない。パウロを悪とすることはできないが、不義を行う人と呼ぶのが適切なのだ。パウロは多くの働きを行ったが、その働きの量ではなく、質と実質に基づいて判断されるべきである。そうしてこそ、この問題の真相を究明できる。パウロは常にこう信じていた。「わたしには働きを行う能力があって、普通の人より優れている。他の人以上に神の重荷を思いやることができるし、わたしほど深く悔い改める人もいない。わたしには大いなる光が注ぎ、自分の目でその大いなる光を見たのだから、わたしの悔い改めは誰よりも深いはずだ」。これが、当時におけるパウロの心の中の思いだった。働きを終えるとき、パウロは言った。「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくした。今や、義の冠がわたしを待っている」。パウロの戦い、働き、そして行程はすべて、義の冠を受けるためのものであって、積極的に向上しようとしていたわけではなかった。彼はいい加減に働きを行ったわけではないが、その働きは単に自らの過ちを償うため、そして良心の呵責に悩まされないためになされたのだと言える。パウロが望んだのは、自身の働きを成し遂げ、走るべき道を走り抜き、そして戦いをなるべく早く終えて、自分が待ち望む義の冠を一日でも早く得ることだけだった。彼が切望したのは、自分の経験と真の認識でもって主イエスと会うことではなく、自身の働きを一刻も早く終わらせることであり、主イエスに会ったときに、その働きに見合った見返りを受け取るためだった。つまりパウロは、自身の働きによって自らを慰め、それと引き換えに未来の冠を得るという取引をしたのだ。パウロが追い求めたのは真理でも神でもなく、ただ冠だけだった。このような追求がどうして基準を満たせるだろうか。パウロの動機、働き、支払った代価、そして費やしたすべての労力に、彼の素晴らしい空想が浸透していて、彼は完全に自分の願望に従って働きを行ったのである。自身の働き全体において、進んで代価を支払おうという気持ちが一切なく、取引をしていたに過ぎない。パウロは本分を尽くそうと進んで努力することはしなかったが、取引の目的を達成させるためであれば喜んで努力した。そんな努力に何の価値があるのか。いったい誰が彼の不純な努力を良しとするだろうか。誰がそのような努力に興味を持つだろうか。彼の働きは将来の夢と素晴らしい計画に満ち溢れてい

たが、人の性質を変える道は含まれていなかった。彼の慈愛の大半は見せかけであり、彼の働きはいのちを施すどころか、偽りの礼儀正しさに過ぎなかった。つまり、単に取引をしていただけなのだ。このような働きが、どうして人を本来の本分を回復する道へと導くことができるのか。

ペテロが追い求めた唯一のもの、それは神の心だった。彼は神の願いを満たすことを追い求め、苦難や逆境に遭っても、喜んで神の願いを満たそうとした。神を信じる者として、これ以上に優れた追求はない。しかしパウロが追い求めたものは、彼自身の肉体、観念、そして計画と企みによって汚れていた。パウロは決して被造物としてふさわしいとは言えず、神の願いを満たそうとする人でもなかった。一方のペテロは神の指揮に従い、その働きは偉大なものではなかったが、彼の追求の裏にある動機、そして歩んだ道は正しいものだった。大勢の人を獲得することはできなかったが、真の道を追い求めることができたのだ。それゆえ、ペテロは神の被造物にふさわしいと言える。今日、たとえ働き手ではなくても、あなたは神の被造物の本分を尽くし、神によるすべての指揮に従うことを追い求められるようにならないといけない。神が何を言おうとそれに従い、ありとあらゆる患難と精錬を経験し、またたとえ弱っても、心の中で神を愛せるようにならないといけない。自分のいのちに責任を持つ人は、神の被造物の本分を進んで尽くす人であり、そのような人の追求への見方こそが正しいのである。これが、神が必要とする人である。仮にあなたが多くの働きを行い、人々がその教えから学んでも、あなた自身は変わらず、そのうえ何の証しも真の経験も持たず、死の直前になっても自分のしたことに何の証しもないままだとしたら、あなたは変化した人だと言えるだろうか。真理を追い求める人だと言えるだろうか。当時、聖霊があなたを用いたとき、それは単に働きに使える部分を用いたのであって、そうでない部分は用いなかった。あなたが変わることを追い求めるのであれば、用いられる過程で徐々に完全にされるはずである。それでも聖霊は、あなたが最終的に神のものとされるかどうかに関心はなく、それはあなたがどう追い求めるか次第である。自分個人の性質に変化がなければ、それは追求に対するあなたの観点が間違っているからである。また何の見返りも与えられないのであれば、それはあなたの問題であり、あなたが自ら真理を实践せず、神の願いを満たせないことが原因である。要するに、自分自身の経験以上に重要なことはなく、自分自身の入りこそが最も肝心なのだ。中には結局こう言う人もいるだろう。「わたしはあなたのために大いに働きました。立派な功績を残したわけではありませんが、真面目に努力してきました。だからどうか、わたしを天国に入れていのちの果実を食べさせてはいただけませんか」。わたしがどのような人間を望んでいるか、あなたは知らなければならない。不純な人間は神の国に入ることを許されない

し、また不純な人間が聖地を汚すことも許されない。あなたは多くの働きを長年にわたって行って来たかもしれないが、最後のときになっても甚だしく汚れていれば、わたしの国に入ることを望んだところで、天の法がそれを許さない。創世から今日まで、人がいかに取り入ろうとも、その人がわたしの国に入るにあたり、わたしが便宜を図ったことはない。これは天の掟であり、誰にも破ることは許されない。あなたはいのちを求めねばならない。今日、神に完全にされるであろう人間はペテロのような人であり、それは自分の性質の変化を求める人であり、喜んで神の証しをし、神の被造物として本分を尽くそうとする人である。そのような人だけが完全にされるのだ。見返りだけを求め、自分のいのちの性質を変えようとしないのであれば、あなたの努力はどれも徒労に終わる。これは不変の真理である。

あなたは、ペテロとパウロの実質の違いから、いのちを追い求めない人の努力はすべて徒労に終わるということを知るべきである。あなたは神を信じ、神に付き従っているのだから、心の中で神を愛さなければならない。自分自身の墮落した性質を捨て去り、神の願いを満たすことを求め、神の被造物の本分を尽くさなければならない。神を信じて付き従う以上、あらゆるものを神に捧げ、個人的な選択や要求はせず、神の願いを満たすことを成し遂げるべきである。あなたは被造物なのだから、自分を創った主に従うべきである。なぜなら、あなたは自分を支配することが本来できず、自分の運命を決める能力も持ち合わせていないからである。神を信じる者である以上、聖さと変化を追い求めるべきなのだ。また被造物である以上、本分を守り、自分の立場を守らねばならず、自身の本分を超えてはならない。これはあなたを束縛したり、教義によって押さえつけたりしているのではなく、むしろあなたが本分を尽くすための道であり、義を尽くす人であれば必ず到達できる、あるいは到達しなければならない道である。ペテロとパウロの実質を比べてみれば、どのように追い求めるべきかがわかる。ペテロとパウロが歩んだ道は、一つは完全にされる道であり、もう一つは淘汰に至る道である。つまり両者は二つの異なる道を代表しているのだ。いずれも聖霊の働きを受け、聖霊の啓きと照らしを得て、また両者とも主イエスから託された物事を引き受けたが、それぞれがもたらした果実は違っていた。一方は実際に果実を実らせ、もう一方は果実を実らせなかった。あなたは両者の実質、働き、表面上の表れ、そして結末から、どちらの道を選んで歩むべきかを知ることができなければならない。彼らは明らかに異なる道を歩いた。パウロとペテロは、それぞれの道の典型的な例であり、初めからその二通りの道の特徴を示していた。パウロの経験では何が重要だったのか。そして、パウロはなぜ成功しなかったのか。一方、ペテロの経験では何が重要だったのか。そして完全にされることをどのように経験したのか。二人がそれぞれ重視した点を比べてみれ

ば、神が望むのはどのような人物か、神の旨は何か、神の性質はどういったものか、どのような人が最終的に完全にされるのか、そしてどのような人が完全にされないのかがわかる。また、完全にされる人の性質、完全にされない人の性質はどのようなものかを知ることができる。実質に関わるこれらの問題点がペテロとパウロの経験の中に見て取れる。神は万物を創ったのだから、すべての被造物が神の支配下に入り、神の権威に従うようにする。また神は万物を采配し、あらゆる物事を手中に収める。動物、植物、人類、山や川、湖など、神の被造物はすべて神の支配下に入らねばならない。天地の万物が神の支配下に入らねばならないのだ。他に選択肢はなく、一切が神の指揮に従わなければならない。これは神によって定められたことであり、神の権威でもある。神はすべてを司り、万物を整えて秩序立て、神の旨に沿って、一つひとつ種類に応じて選り分け、それぞれの場所に配置する。いかに偉大であっても、神に勝るものは存在せず、万物は神の創った人類に仕え、あえて神に逆らったり、神に要求したりするものは一つもない。したがって、神の被造物である人間も、人の本分を尽くさなければならない。人が万物の主人であろうと管理者であろうと、また万物の中で人の地位がどれほど高くても、所詮は神の支配下にある取るに足らない一人の人間、神の被造物に過ぎず、神の上に立つことは決してない。神の被造物である人間は、被造物の本分を尽くすこと、そして他の選択をせずに神を愛することを追い求めねばならない。神こそが人の愛にふさわしいからである。神を愛することを追い求めるのであれば、それ以外の個人的な利益を求めたり、自分が切望する物事を追求したりしてはならない。これが追求の最も正しい形である。あなたの求めるものが真理であり、実践するものが真理であり、あなたの得るものが自分の性質の変化であるなら、あなたが歩む道は正しい。あなたの求めるものが肉の祝福であり、実践するものが自身の観念の中にある真理であり、自分の性質に変化がなく、受肉した神にまったく従わず、いまだ漠然とした状態の中で生きているのであれば、あなたが追い求めるものは必ずや、あなたを地獄へと導く。なぜなら、あなたが歩む道は失敗の道だからである。あなたが完全にされるか淘汰されるかは、あなた自身の追求にかかっている。つまり、成功するか失敗するかはその人が歩む道にかかっているのだ。

神の働きと人の働き

人の働きのうちどのくらいを聖霊の働きが、どのくらいを人の経験が占めているのか。今でさえ、人はこれらの問題を理解していないと言えるかもしれないが、その理由は人が聖霊の働きの原則を理解していないからである。わたしが「人の働

き」と言うとき、聖霊の働きを持つ人の働き、あるいは聖霊に用いられている人の働きのことをもちろん指している。人の意志から生じる働きのことではなく、聖霊の働きの範囲内にある使徒、働き手、あるいは普通の兄弟姉妹の働きのことを指しているのである。ここで言う「人の働き」とは、肉となった神の働きではなく、聖霊が人に行う働きの範囲と原則のことである。この原則は聖霊の働きの原則と範囲であるが、肉となった神の働きの原則と範囲とは異なる。人の働きには人の本質と原則があり、神の働きには神の本質と原則がある。

聖霊の流れにおける働きは、それが神自身の働きであろうと、用いられている人の働きであろうと、聖霊の働きである。神自身の本質は霊であり、聖霊あるいは七倍に強化された霊と呼ぶことができる。とにかく、それは神の霊であり、時代によって神の霊は異なる名前で呼ばれてきた。それでもその本質は一つである。したがって、神自身の働きが聖霊の働きである一方、肉となった神の働きは働いている聖霊に他ならない。用いられている人の働きも聖霊の働きである。しかし、神の働きは聖霊の完全な表現であり、絶対に真実である一方、用いられている人の働きには多くの人間的なものが混ざっており、聖霊の直接的表現ではなく、ましてや完全な表現ではない。聖霊の働きはさまざまで、いかなる条件にも制限されない。聖霊の働きは人によって変化し、異なる本質を示すとともに、時代により異なり、国によっても異なる。もちろん、聖霊は多くの異なった方法で多くの原則に従って働くにもかかわらず、働きがどのように、どのような人に行われようと、その本質は常に異なる。異なる人に行われる働きにはすべて原則があり、すべては働きの対象の本質を表すことができる。これは聖霊の働きの範囲がはっきり限定されており、かなり慎重だからである。受肉した肉において行われる働きは、人を対象とする働きと同じではなく、その働きも対象の人の素質に従って変化する。受肉した肉でなされる働きは人には行われず、人間の姿をした肉では、人への働きとは同じではない。簡潔に言えば、どのように行われようとも、異なる対象に対してなされる働きは決して同じではなく、働きの原則も働きの対象であるさまざまな人の状態や本性に応じて異なってくる。聖霊は人の本来からある本質に基づいてさまざまな人に働きかけ、その本質を越える要求はせず、その人に本来備わっている素質を越える働きかけもしない。そこで、聖霊の人への働きによって、人はその働きの対象の本質を知ることができる。人に本来備わっている本質は変化しないし、人に本来備わっている素質は限られている。聖霊は人の素質の限界に応じて人を用いるか、あるいは人に対して働き、人が働きから恩恵を受けられるようにする。用いられる人に聖霊が働きかけるとき、その人の才能も生まれながらの素質も解き放たれ、保留されることはない。その人の生まれながらの素質は働きに役立たせるために引き出され

る。聖霊は働きにおいて成果を達成するために人の利用できる部分を使って働くと
言ってもいいかもしれない。対照的に、受肉した肉において行われる働きは聖霊の
働きを直接表し、人間の心や考えが混じり込んでいることはない。また、人の賜物
や経験、あるいは生来の条件はそれに到達できない。聖霊の無数の働きはすべて、
人に恩恵を与え、啓発することを目指している。しかしながら、完全にされる人も
いれば、完全にされるための条件を持っていない人もいる。つまり、後者は完全に
されることはなく、救われることなど到底なく、聖霊の働きを持っていたかもしれ
ないが、最終的には取り除かれることになる。すなわち、聖霊の働きは人を啓発す
ることだが、聖霊の働きを持った人すべてが余すところなく完全にされると言うこ
とはできない。なぜなら、多くの人が追求する道は完全にされることを目指す道で
はないからである。彼らは聖霊からの一方的な働きを持っているだけで、主観的な
人間の協力も正しい人間の追求ももたない。そのため、このような人への聖霊の働
きは完全にされる人の役に立つことになる。聖霊の働きは人には直接見えず、直接
触れることもできない。それは働きの賜物を持つ人にだけ表現することができる。
つまり、聖霊の働きは人が行う表現を通して追隨者に与えられるのである。

聖霊の働きはさまざまな種類の人や多くの異なる条件によって達成され、完成さ
れる。肉となった神の働きは一つの時代全体の働きを表わすことができ、一つの時
代全体に人が入っていくことを表すことができるが、人の入りに関する詳細に作用
する働きはやはり、肉となった神ではなく、聖霊に用いられている人が行う必要が
ある。つまり、神の働き、あるいは神自身の職分は肉となった神の働きであって、
神の代わりに人が行うことはできない。聖霊の働きは多くの異なる種類の人を通し
て完成される。ただ一人の人が全体を達成したり、完全に表したりすることはでき
ない。教会を導く人たちも完全に聖霊の働きを表すことはできない。彼ら是指導的
働きがいくらかできるだけである。このように、聖霊の働きは三つの部分、すなわ
ち、神自身の働き、用いられている人たちの働き、聖霊の流れの中にいるすべての
人に作用する働きに分けることができる。神自身の働きは時代全体を導くことであ
る。用いられている人たちの働きは、神が働きを行った後に送り出されたり、任務
を受けたりすることによって神の追隨者全員を導くことであり、彼らは神の働きに
協力する人である。流れの中にいる人たちに作用する聖霊の働きは、その働きをす
べて維持すること、すなわち、経営全体と証しを維持し、それと同時に完全にされ
ることのできる人たちを完全にすることである。これら三部分が一緒になって聖霊
の完全な働きとなるが、神自身の働きがなければ、経営の働きはすべて停滞してし
まうであろう。神自身の働きは全人類の働きを含み、時代全体の働きも表す。すな
わち、神自身の働きは聖霊の働きにおけるあらゆる動態と傾向を表す一方で、使徒

の働きは神自身の働きの後に来てそれに続き、時代を導くことも一つの時代全体における聖霊の働きの傾向を表すこともない。彼らは人がなすべき働きをするだけで、それは経営の働きとは何の関係もない。神自身の働きは、経営の働き内の事業である。人の働きは用いられている人たちの本分でしかなく、経営の働きとは何の関係もない。正体と働きの表すものが異なるため、どちらも聖霊の働きであるという事実にもかかわらず、神自身の働きと人の働きの間には明確で実質的な違いがある。さらに、異なる正体をもつ対象への聖霊の働きの程度もさまざまである。これらが聖霊の働きの原則と範囲である。

人の働きは人の経験と人間性を意味する。人が提供するものと人が行う働きは人を表す。人の見識、論法、論理、豊かな想像力はすべて人の働きに含まれる。人の経験は特に人の働きを意味することがあり、ある人の経験はその働きの構成要素になる。人の働きはその人の経験を表すことがある。人が消極的な経験をする、その人の交わりにおける言語のほとんどは消極的要素で構成される。その人の経験がしばらくのあいだ積極的で、とりわけ積極的な側面に道を獲得していれば、その人の交わりは極めて励みになり、他の人たちはその人から積極的な施しを得られる。働き手がしばらくのあいだ消極的になれば、その人の分かち合いはいつも消極的要素を含む。このような交わりは重苦しいもので、他の人たちはその人の話の後は無意識のうちに気が滅入ってしまう。追随者の状態は導き手の状態によって変化する。働き手が内面はどのような人であれ、それがその人の表現するものであり、聖霊の働きは人の状態とともに変化するが多い。聖霊は人の経験に従って働き、人を強要せず、人の通常の経験過程に応じて要求を出す。すなわち、人の分かち合いは神の言葉とは違うのである。人の分かち合うものはその人の個人的見識や経験を伝え、神の働きに基づいたその人の見識や経験を表す。人の責任は、神の働きや談話の後で、そのうちの何を実践し何に入っていくべきかを見つけ、それを追随者に伝えることである。したがって、人の働きは人の入りと実践を表している。もちろん、そのような働きには人の教訓と経験、あるいは人間的考えもいくらか混入している。聖霊がどのように働こうとも、聖霊が人に働き掛けようとも、肉となった神において働こうとも、働き手は必ず自分が何であることを表わすことになる。働くのは聖霊であるが、働きは人の本質を基盤としている。なぜなら聖霊は基盤なしには働かないからである。言い換えれば、働きが無から生じることはなく、いつも実際の状況や現実の条件に応じて行われる。このようにしてのみ、人の性質は変化することができ、人の古い観念や思考も変えることができる。人が表すものは人が見、経験し、想像できるものであり、それが教義あるいは観念であっても、人の思考により到達可能である。人の働きは大きさに関係なく、人の経験、見るもの、想

像あるいは構想の範囲を越えることはできない。神が表すものはすべて神自身そのものであり、これは人には達成できない。つまり、人の考えの及ばないものである。神は全人類を導くという働きを表し、これは人の経験の詳細とは関係なく、むしろ神自身の経営に関係している。人が表現することは人の経験であり、神が表現することは神の存在そのものである。それは神に固有の性質であり、人には届かないものである。人の経験は、神が表した神の存在に基づいて獲得した人の見識や認識である。このような見識や認識は人の存在と呼ばれる。人の表現の基盤は人に本来備わっている性質や素質である。そのため、それも人の存在と呼ばれるのである。人は自分が経験するものや見るものを分かち合うことができる。経験したことも、見たこともないもの、あるいは思考が到達できないもの、自分の心の中にないものについて話せる人は誰もいない。人が表すものが経験に由来していなければ、それは想像あるいは教義である。簡単に言うと、その言葉には現実性がない。社会の物事と接触がなかったなら、社会の複雑な関係について明確に話すことはできないであろう。家族がないのに、他の人たちが家族問題について話していたら、その話の大半を理解できないであろう。だから、人が話すことや行う働きは、その人の内面存在を表すのである。誰かがその人が刑罰や裁きをどのように理解しているかを話しているのに、あなたにその経験がないならば、あなたはその人の認識を厚くましくも否定しないであろうし、ましてや100%それについて確信することもない。それは、その人が交わることはあなたが一度も経験したことのないもの、あなたが知らないもので、あなたの思考では想像できないものだからである。その人の認識からあなたが得られることは、将来において刑罰や裁きを経験するための道だけである。しかし、この道は教義的な理解になりえるだけで、あなた自身の認識に取って代わることはできないし、ましてや経験に取って代わることは到底できない。その人の言うことをまったく正しいとあなたは思うが、自分で経験すれば、多くの点でそれが実行不可能であるとわかるかもしれない。耳にすることの一部は完全に実行不可能だと感じるかもしれない。話を聞いた時点では、それについて観念を抱き、受け入れはするが、しぶしぶ受け入れるだけであるが、自分が経験してみると、観念の源となった認識があなたの実践方法になり、実践すればするほど、聞いた言葉の本当の価値と意味をあなたは理解するようになる。自分で経験をした後は、経験したことから得ているはずの認識について話すことができる。さらに、認識が現実的で実際的な人と、認識が教義に基づいていて価値がない人を区別できるようになる。そこで、表明する認識が真理と一致するかどうかは、その実際的経験があるかどうか大いに左右される。経験に真理があるならば、その認識は実際的で価値がある。経験を通して識別力や洞察をも得ることができ、認識を深め、い

かに行動するべきかということに関して知恵と常識を増すことができる。真理を所有していない人が表す認識は、どれほど高尚であろうと、教義である。この種の人には肉体の問題に関して言えば非常に賢明かもしれないが、霊的問題になると区別することができない。そのような人は霊的な事柄の経験がまったくないからである。その人は霊的問題においては啓かれておらず、霊的な事柄を理解していない。どのような認識を表していようと、それがあなたの存在そのものである限り、それはあなたの個人的経験であり、本当の認識である。教義しか話さない人、つまり真理も現実も所有していない人が話すことも、その人の存在そのものと呼ぶことができる。なぜならその人の教義は深い熟考を通してのみたどりついたもので、深い思考の結果だからである。とは言え、それはただの教義であり、想像以外のなにものでもない。様々な人の経験は、その人の内部にあるものを表している。霊的経験のない人は誰も真理の認識について話すことはできず、さまざまな種類の霊的な事柄についての正しい認識についても話すことはできない。人が表すものは、その人の内なるものであり、それは確かである。霊的な事柄や真理の認識を得たいと願うなら、本当の経験を持たなければならない。人間の生活における常識について明確に話すことができなければ、霊的な事柄について話すことなどどうしてできようか。教会を導くことができ、人々にいのちを与えることができ、人々の使徒になることができる人には実際の経験がなくてはならない。また、霊的な事柄を正しく理解し、真理の正しい認識と経験もなくてはならない。そのような人だけが教会を導く働き手、あるいは使徒となる資格を有する。さもなければ、最も小さき者として後に従うことができるだけで、導くことはできず、ましてや人々にいのちを与える使徒になることはできない。使徒の役割は走りまわったり、戦ったりすることではなく、いのちの世話をする働きをし、性質の変化において他の人たちを導くことだからである。この役割を果たす人は重い責任を負う任務を与えられていて、これは誰もが背負えるわけではない。この種の働きはいのちを持つ人、すなわち真理の経験を持つ人のみが請け負うことができる。ただ何かを諦めることのできる人、走りまわられる人、自分自身を喜んで費やすことができる人ならばできるということはない。真理の経験のない人、刈り込まれたり裁きを受けたりしたことのない人はこの種の働きを行うことはできない。経験のない人は現実性がないが、現実をはっきり見ることができないのは、彼ら自身にこのような本質がないからである。つまり、この種の人には指導的な働きができないだけでなく、長期間にわたり真理を得ないままであれば、排除の対象になる。あなたが表す見識は、あなたが人生で経験してきた困難、どのようなことで刑罰を受けたか、どのような問題で裁きを受けたかの証拠になりえる。これは試練にもあてはまる。人がどこを精錬されるか、どこが弱い

かが、人が経験をする場所、道を得る場所である。たとえば、結婚で挫折に苦しむ人は、「神に感謝。神を称えよ。わたしは神の心の願望を満足させ、わたしの人生の全てを捧げ、結婚をすっかり神の手に委ねなければならない。わたしは喜んで全人生を神に差し出します」のようによく言う。人の中にあるすべてのものは、交わりを通してその人そのものを表すことができる。話す速さ、大声で話すか、静かに話すかなど、このようなことは経験に関係なく、その人の持つものやその人そのものを表すことはできない。その人の性格の良し悪し、あるいは本性の良し悪しを表すだけで、その人に経験があるかどうかと同一視することはできない。話すとき自分自身を表現する能力、または話す技量や速度は練習の問題であって、経験と置き換えることはできない。個人的経験について話すとき、あなたは自分が重要と思うことや自分の内なるすべてについて話す。わたしの話はわたしの存在を表すが、わたしの言うことは人の力の及ぶものではない。わたしの言うことは人が経験することではなく、人に見えるものではない。それはまた、人が触れることができるものでもなく、わたしそのものである。わたしが話すことはわたしが経験したものであることだけは認めるが、それが聖霊の直接的表現であることを認識しない人がいる。もちろん、わたしの言うことはわたしが経験したことである。六千年にわたり経営の働きをしてきたのはわたしである。人類創造の初めから今に至るまで、わたしはあらゆることを経験してきた。わたしがそのことについて語れないわけがあるうか。人の本性といえ、わたしははっきり見たし、長いあいだ観察した。それについて明確に語れないわけがあるうか。人の本質を明確に見てきたので、わたしには人を罰したり裁いたりする資格がある。人はすべてわたしから来たのに、サタンに墮落させられたからである。もちろん、わたしはこれまでわたしが行ってきた働きを評価する資格もある。この働きはわたしの肉が行うことではないが、霊の直接的表現であり、これはわたしが持っているもの、わたしそのものである。したがって、それを表し行うべき働きを行う資格がわたしにはある。人が言うことは自分が経験してきたこと、見てきたもの、人の精神が到達できるもの、人の感覚で探知できるものである。これが人が語ることができるものである。神の受肉した肉が語る言葉は霊の直接的表現であり、それらは霊によってなされた働きを表す。肉はそれを経験しても見てもいないが、それでも神はその存在を表す。その肉の本質は霊であり、神は霊の働きを示すからである。肉では到達できなくても、それは霊によってすでに行われた働きである。受肉のあと、肉の表現を通して神は人に神の存在を知らしめ、人に神の性質、ならびに神がした働きが見えるようにする。人の働きによって、人は自分が何に入っている、何を理解すべきかをさらに明確にすることができる。それには、真理を理解し経験する方向に人々を導くことが含まれ

る。人の働きは人々を支えることである。神の働きは人類のために新しい道と新しい時代を開き、普通の人間には知られていないことを人々に明らかにし、神の性質をわからせることである。神の働きは全人類を導くことである。

聖霊の働きはすべて、人に恩恵を与えるためになされる。すべて人を啓発することである。人に恩恵をもたらさない働きはない。真理が深かろうと浅かろうと、また、真理を受け入れる人の素質がどうであろうと、聖霊が何をしようと、それは人に有益である。しかし、聖霊の働きは直接行うことはできず、聖霊と協力する人を通して表現されなければならない。このようにしてのみ、聖霊の働きの成果が得られる。もちろん、聖霊が直接働きを行うのであれば、そこに混ぜ物は一切入っていない。しかし、聖霊が人を通して働きを行なうと、非常に汚れてしまい、聖霊本来の働きではなくなる。そのため、真理はさまざまな程度に変化する。追隨者は聖霊の本来の意図ではなく、聖霊の働きと人の経験および認識の結合したものを受け取る。追隨者が受け取るもののうち、聖霊の働きである部分は正しい。一方、彼らが受け取る人の経験と認識は、働き手により異なる。聖霊に啓かれ導かれる働き手は、この啓きと導きに基づいて経験をする。この経験において、人の精神と経験、さらには人間性の本質が結合し、その後、人は持つべき認識と見識を獲得する。このように、人は真理を経験した後に実践する。人により経験は異なり、経験する事柄も同じではないので、この実践方法はいつも同じとは限らない。こうして、聖霊に同じように啓かれても、認識や実践が異なる結果になるのは、啓きを受ける人が異なるからである。実践中にあまり間違いを犯さない人もいれば、大きな間違いを犯す人もいるし、なかには間違いしか犯さない人もいる。これは人の理解力の差であり、またその人に本来備わっている素質も異なるからである。ある言葉を聞いて、ある意味に理解する人もいれば、真理を聞いて別の意味に理解する人もいる。少し逸れる人もいれば、真理の本当の意味をまったく理解しない人もいる。したがって、人が他の人たちをどのように導くかは、その人の理解によって決まる。これがまさしく本当であるのは、人の働きはその存在を表すからである。真理を正しく理解している人に導かれた人たちは、やはり真理を正しく理解する。理解に誤りがある人もいるが、それはごくわずかであり、すべての人が誤った理解をするわけではない。真理の理解に誤りがあれば、その人に従う人たちにも疑いなく誤りがあり、このような人たちはあらゆる意味において誤っている。追隨者がどの程度真理を理解するかは、おもに働き手によって決まる。もちろん、神からの真理は正しく、間違いはなく、それは絶対的に確かである。しかし、働き手は完全に正しいわけではなく、完全に信頼できるとは言えない。働き手が非常に実際的な真理の実践方法を持っていれば、追隨者も実践方法を持つ。働き手が真理の実践方法を持た

ず、教義しか持ち合わせていなければ、追随者には現実性がまったくないことになる。追随者の素質と本性は生まれながらに決まっていて、働き手との関連性はない。しかし、追随者がどの程度真理を理解し、神を知るかは働き手次第である（これは一部の人だけに当てはまる）。働き手がどのような人であるかによって、その人の導く追随者がどのような人であるかも決まる。働き手が表すことはその人自身の存在であり、余すところなく表す。働き手が追随者に出す要求は、その人自身が達成したいこと、達成できることである。追随者にはまったく達成できないことが多々あるにもかかわらず、そして達成できないことが入りへの障害になるにもかかわらず、働き手のほとんどが自分がすることに基づいて追随者に要求を出す。

刈り込み、取り扱い、裁き、そして刑罰を経験した人の働きには逸脱がずっと少なく、その働きの表現はずっと正確である。働きにおいて自分のありのままの特質に依存している人はかなり重大な間違いを犯す。まだ完全にされていない人の働きには、その人自身のありのままの特質が過剰に表され、それが聖霊の働きへの大きな障害となる。素質がいかに優れていようと、人が神に託された働きを行なえるようになるには、刈り込みと取り扱いと裁きを経験しなければならない。そのような裁きを受けていない人の働きは、どれほど立派に行われても、真理の原則と一致することはできず、常にその人自身がもつ本来の自然さの産物であり、また人間的な善良さである。刈り込み、取り扱い、そして裁きを受けた人の働きは、刈り込みや取り扱いや裁きを受けたことのない人の働きよりもはるかに正確である。裁きを受けなかった人は、人間の肉と考えしか表現せず、それには人間的知力と生まれながらの才能がかなり混ざっている。これは人が神の働きを正確に表現したものではない。このような人に従う人たちは、その人の生まれながらの素質ゆえにその人のところに来る。その人は人間の見識や経験を過剰に表し、しかもそれは神の本来の意図とはほとんど切り離され、あまりにも逸脱しているので、この種の人の働きでは人々を神の前に連れてくることはできず、むしろ人間の前に連れてきてしまう。そのため、裁きや刑罰を受けていない人には神に託された働きを実行する資格がないのである。資格のある働き手の働きは人々を正しい道に連れてくることができ、真理へのさらなる入りを与える。このような人の行う働きは人々を神の前に連れてくることができる。そのうえ、その働きは一人ずつ異なることがあり、規則にとらわれず、人に解放と自由、いのちにおいて徐々に成長する能力を与え、真理へさらに深く入って行くことを可能にする。資格のない働き手の働きははるかに不十分である。その働きはばかっている。そのような働き手は人を規則にはめ込むだけで、人に要求することは個別に変化しない。その働きは人の実際の必要性に沿わない。この種の働きには規則や教義があまりにも多く、人を現実性に連れて行くことも、い

のちにおける成長の正常な実践に至らせることもできない。人にわずかな価値のない規則を守らせることができるだけである。この種の指導は人を迷わせるだけである。このような働き手はあなたが自分に似たものになるように導く。その人が持っているものや彼そのもののの中にあなたを引き込むこともある。指導者に資格があるかどうかを追随者が見定める秘訣は、導く道と指導者の働きの結果に目を向けること、および追随者が真理に従った原則を受け取るかどうか、変化をとげるのにふさわしい実践方法を受け取るかどうかを見ることである。あなたはさまざまな人によるさまざまな働きを識別しなければならない。愚かな追随者になってはならない。これは人の入りに関係することである。どの人の指導には道があり、どの人の指導にはないかを見極めることができなければ、簡単に惑わされることになる。このことはすべてあなた自身のいのちに直接関連している。完全にされていない人の働きには本来の性格が多すぎる。あまりにも多くの人間の意志が混ざっている。彼らの存在は本来の性格、持って生まれたものである。取り扱いを経験した後のいのちでも、変えられたあとの現実でもない。どうしてこのような人がいのちを追求している人々を支えることができるであろうか。人の本来のいのちはその人の持って生まれた知性あるいは才能である。この種の知性あるいは才能は、神が人に的確に要求するものとはほど遠い。人がまだ完全にされておらず、その墮落した性質が刈り込まれても取り扱われていなければ、その人が表すものと真理の間には大きな隔たりがある。人が表すものは人の想像や一方的経験など、あいまいな事柄と混ざり合っている。そのうえ、その人がどのように働くかに関係なく、人々は全体的目的やすべての人が入っていくべき真理などはないと感じている。人への要求の大半は、その能力を超える。これは止まり木に追い立てられるアヒルを思わせる。これは人間の意志の働きである。人の墮落した性質、人の考えや観念は人体のあらゆる箇所に浸透している。人は真理を実践する本能を生まれながらに持っておらず、真理を直接理解する本能もない。それに人の墮落した性質を合わせれば、この種の自然のままの人が働くと、妨害を生じさせないであろうか。しかし、完全にされた人は、人が理解すべき真理を経験しており、人の墮落した性質を知っている。そのため、その人の働きにおける漠然として非現実的な事柄は次第に減少し、人間的なものによる汚れは少なくなり、その人の働きと奉仕は神が求める基準に近づいていく。こうして、その人の働きは真理の現実に入っており、また現実的になっている。特に人の思考にある考えは聖霊の働きを妨害する。人には豊かな想像力と合理的論理があり、また物事を取り扱ってきた長い経験がある。人間のこのような側面が刈り込みと修正を受けなければ、それはすべて働きの障害である。したがって、人の働き、特にまだ完全にされていない人の働きは、正確さについては最高規準に到達することはできないのである。

人の働きはある範囲にとどまり、限界がある。一人の人ではある一段階の働きしかできず、時代全体の働きをすることはできない。さもないと、その人は他の人たちを規則の中へと導くであろう。人の働きはある特定の時間または段階にしか適用できない。人の経験には範囲があるからである。人の働きを神の働きと比較することはできない。人の実践方法と真理の認識はすべて特定の範囲に当てはまる。人が歩む道は完全に聖霊の意志であると言えない。人は聖霊に啓かれることができるだけで、聖霊で完全に満たされることはできないからである。人が経験できることはすべて通常の人間性の範囲内にあり、通常の人間の心にある考えの範囲を越えることはできない。真理の現実を生きられる人はみなこの範囲内で経験する。人が真理を経験するとき、それはいつも聖霊に啓かれた通常の人間生活の経験であり、通常の人間生活から逸脱した方法による経験ではない。人は人間生活を生きている基盤の上で聖霊に啓かれた真理を経験する。そのうえ、この真理は人によって異なり、その深さは人の状態に関連している。人が歩む道は真理を追求する人の通常の人間生活であり、その道は聖霊に啓かれた通常の間が歩む道と呼んで差し支えないと言えるだけである。人が歩む道は聖霊が歩む道であるとは言えない。通常の人間の経験では、追求する人は一人ひとり異なるので、聖霊の働きも異なっている。さらに、人が経験する環境や経験の範囲は同じではなく、人の精神や考えが混ざり合うため、その経験もさまざまな程度に混ざり合っている。各人は個々の異なる条件に従って真理を理解する。真理の本当の意味を完全に理解することはなく、真理の側面のうち一つだけ、あるいはいくつかを理解するにすぎない。人が経験する真理の範囲は各人の条件に沿って一人ひとり異なる。こうして、同じ真理についての認識でも、異なる人が表せば同じにはならない。つまり、人の経験にはいつも限界があり、聖霊の意志を完全に表すことはできず、たとえ人の表すものが神の心意にかなり一致していても、たとえ人の経験が聖霊による人を完全にする働きに非常に近くても、人の働きを神の働きとみなすこともできない。人は神の僕にすぎず、神に任せられた働きしかできない。人は聖霊に啓かれた認識や自分の個人的経験から得た真理しか表すことはできない。人は無資格で、聖霊の窓口となる条件を満たさない。人の働きは神の働きであると人が言う資格はない。人には人の働く原則があり、すべての人には異なる経験があり、さまざまな条件がある。人の働きには聖霊に啓かれたその人の経験のすべてが含まれる。この経験は人の存在を表すだけで、神の存在あるいは聖霊の意志は表さない。したがって、人が歩む道は聖霊が歩む道と言えない。なぜなら人の働きは神の働きを表すことはできず、人の働きと人の経験は聖霊の完全な意志ではないからである。人の働きは規則に陥りがちであり、その方法は限られた範囲に限定されてしまいがちで、人を

自由な道に導くことはできない。ほとんどの追随者は限られた範囲内に住んでいて、彼らの経験する道も範囲が限られている。人の経験はいつも限られている。人の働く方法も何通りかに限られており、聖霊の働きや神自身の働きと比較することはできない。人の経験が結局は限られているからである。神がどのように働きを行おうと、それは規則に縛られない。どのようになされようと、神の働きは唯一の方法に限られない。神の働きに規則はまったくなく、働きはすべて解放されており自由である。どれほど長い時間をかけて神に従おうとも、人は神が働く方法を司りいかなる規律も抽出することはできない。神の働きは原則に基づいているが、いつも新しい方法で行われ、いつも新しい進展があり、人の手の届く範囲を越える。一期間に神はいくつかの異なる種類の働き、人の異なる導き方を示すことがあり、人が常に新しい入りや新たな変化を達成できるようにする。神の働きの規律を見つけ出すことはできないのは、神がいつも新しい方法で働いているからである。このようにしてのみ、神の追随者は規則に縛られないで済む。神自身の働きはいつも人の観念を避け、無効にする。真の心で神に従い、神を追い求める人だけが性質を変えることができ、いかなる規則にもさらされず、いかなる宗教的観念にも束縛されず、自由に生きることができる。人の働きはその人自身の経験およびその人自身が達成できることに基づいて他の人に要求する。この要求の基準は一定の範囲内に限られており、実践方法も非常に限られている。したがって追随者は無意識のうちにこの限られた範囲内で生きることになる。時が経つにつれてそれは規則と儀式になる。一期間の働きを、神に直接に完全にされることを経験しておらず、裁きを受けていない人が導くと、その追随者はみな宗教家、神に抵抗する専門家になる。したがって、資格のある導き手は裁きを経験しており、完全にされることを受け入れた人でなくてはならない。裁きを経験していない人は、聖霊の働きを持っているとしても、曖昧で非現実的なことしか表せない。時が経つにつれて、このような人は他の人たちを曖昧で超自然的規則に導く。神が行う働きは人の肉と一致しない。人の考えとも一致せず、人の観念に反する。それは曖昧な宗教色で汚されていない。神の働きの成果は、神に完全にされていない人には達成不可能であり、人の考えの及ばないものである。

人の頭脳内の働きは人にはあまりにも容易に達成できる。たとえば、宗教界の牧師や指導者は自分の才能や立場に依存して働く。長い間彼らに従う人は、その才能に感化され、その存在の一部に影響を受ける。彼らは人の才能、能力、知識に重点を置き、超自然的なものや多くの深遠で非現実的な教義に注目する（もちろん、これらの深遠な教義は達成不可能である）。彼らは人の性質の変化に注目せず、むしろ人が説教し働くようになるような訓練に注目し、人の知識を向上させ豊富な宗教

的教義を充実させようとする。人の性質がどのくらい変化するかや、人がどのくらい真理を理解しているかには注目しない。彼らは人の本質には関心を持たず、ましてや人の通常の状態、異常な状態を知ろうとはしない。彼らは人の観念に反論せず、観念を明らかにもしないし、ましてや人の欠点や墮落を刈り込んだりはしない。彼らに従う人のほとんどは自分の才能をもって奉仕し、彼らが放つのは宗教的な観念と神学的な理論だけであり、それは現実とは離れており、人にいのちを与えることはまったくできない。実際、彼らの働きの本質は才能を育むこと、何もない人を、後に働いて他者を導くことになる有能な神学校卒業生に育てることである。六千年に及ぶ神の働きにおいて、あなたは何か規律を見つけ出すことができるのか。人が行う働きの中にはたくさんの規則や制限があり、人間の脳はあまりに教条主義的である。ゆえに、人が表すことはその人の経験の範囲内にある理解と認識であり、これから離れては人は何も表すことができない。人の経験あるいは認識は、生まれながらの才能や本能から生じるものではなく、神の導きと神の直接的牧養により生じる。人はこの牧養を受け入れる能力を持っているだけで、神性とは何であるかを直接表すことのできる能力は持っていない。人は源になることはできず、源から水を受ける器になれるだけである。これが人間の本能、人間として持つべき能力である。神の言葉を受け入れる能力を失い、人間の本能を失った人はもっとも貴重なものも失い、被造物である人としての本分を失う。神の言葉または神の働きについての認識や経験がない人は、その本分、つまり、被造物として行うべき本分を失い、被造物としての尊厳を失う。肉において表されようと、霊に直接表されようと、神性が何であるかを表すのは神の本能であり、これが神の職分である。人は自分自身の経験や認識（つまり自分は何であるかということ）を神の働きの間かその後を表す。これは人の本能であり本分であり、人が達成すべきことである。人の表現は神が表すものに遠く及ばないし、人の表すものは多くの規則に縛られているが、人は果たすべき本分を果たすべきであり、しなければならないことをしなければならない。自己の本分を果たすために人間的に可能なすべてを人はしなければならない。このことをほんの少しでさえもためらってはならない。

何年も働いた後、人は働いた年月の経験、ならびに蓄積してきた知恵と規則を総括する。長期間働いてきた人は、聖霊の働きの動向を感じとることができ、聖霊がいつ働き、いつ働いていないかを知っている。重荷を背負いつつ交わる方法を知っており、聖霊の働きの通常の状態、および人がいのちにおいて成長する通常の状態がわかっている。これが何年も働いてきて、聖霊の働きを知っている人である。長い間働いてきた人は確信をもって、急がずに話す。何も言うことがない時でさえ、落ち着いている。彼らは聖霊の働きを求めるために心の中で祈り続けることができ

る。彼らは働くことに熟練している。長い間働き、多くの経験を積み、多くの教訓を学んできた人は、聖霊の働きを妨害するものを内面に多く持っている。これは長期間働いてきたことの欠点である。働き始めたばかりの人は人間的教訓や経験に汚染されておらず、とりわけ、聖霊がどのように働くかわからず当惑する。しかし、働いているうちに次第に聖霊の働き方を感じるようになり、聖霊の働きを得るためには何をするべきか、他の人たちの弱点を正確に指摘するには何をするべきか、また、働く人がもっているべき一般的知識にも気づくようになる。時間が経つと、働きに関するそのような知恵と一般的な知識を熟知するようになり、働くとき簡単に使うようである。しかし、聖霊が働き方を変えても、この人はまだ働きに関する古い知識と規則に固執し、働きの新しい動きについてはほとんど知らない。何年にもわたり働き、聖霊の臨在と導きが十分であれば、働きに関する教訓と経験がますます増え、この人はうぬぼれではなく自信に満たされる。言い換えれば、この人は自分の働きがすっかり気に入り、聖霊の働きについて得た一般的知識に非常に満足している。特に、他の人たちにはないことを自分は獲得していたり認識していたりするので、この人はさらに自信を増す。この人の中の聖霊の働きは決して消し去ることはできない一方、他の人たちはこの特別な取り扱いを受ける資格がないように思われる。何年も働き、かなりの使用価値があるこのような人だけがそれを享受できるというわけである。このようなことは聖霊の新しい働きを受け入れることへの大きな障害になる。新しい働きを受け入れることができて、それは一夜にしてできることではない。受け入れる前にはいくつかの紆余曲折を必ず経験する。古い観念が取り扱いを受け、古い性質が裁きを受けなければ、この状況が徐々に逆転することはない。これらの段階を経由しなければ、この人がこだわりを失くし、古い観念とは一致しない新しい教えや働きを容易に受け入れることはできない。これは人の取り扱いにおいてもっとも困難なことで、変えるのは容易ではない。働き手として聖霊の働きをただちに理解し、その動きを総括することができ、同時に自分の働きの経験にとらわれることなく、古い働きに照らして新しい働きを受け入れることができれば、その人は賢い人であり、働き手としての資格がある。人はしばしば、自分の働きの経験を要約できないまま数年間働くか、あるいは働きに関する自分の経験や知恵を総括した後、新しい働きを受け入れるのを妨げられ、新旧の働きを適切に理解することも、正しく取り扱うこともできないといった状態になる。人は実に扱いづらい。あなたがたのほとんどはこのようなものである。聖霊の働きを長年にわたり経験してきた人は新しい働きを受け入れるのが困難で、手放すことのできない観念に常に満ちている。一方、働き始めたばかりの人は働きに関する一般的知識に欠けており、もっとも単純な事柄をどのように処理すべきかさえわからない。あなた

がたは本当に扱いづらい。多少の年功がある人はとても誇り高く、うぬぼれが強いので自分の出自を忘れてしまう。そのような人はいつも若者を見下しているが、新しい働きを受け入れることができず、自分が何年にもわたり集め保持してきた観念を手放すことができない。若い無知な人は聖霊の新しい働きを少し受け入れることができ、非常に情熱的であるが、問題が起こると、うろたえてしまい、どうしたらいいかわからなくなる。熱心ではあるが無知なのである。聖霊の働きを少し知っているだけで、生活の中で使うことはできないので、それはまったく役に立たない教義でしかない。あなたがたのような人が多すぎる。何名くらいの人が用いられるのに適しているのか。聖霊の啓きと照らしに服従し、神の意志になんとか一致しようとするのできる人が何名いるのか。あなたがたのうち現在まで追従者だった人は非常に従順であったように思われるが、実際には自分たちの観念を諦めておらず、いまだに聖書の中を探し求め、曖昧なまま信じ、観念の中をさまよっている。今日の実際の働きを注意深く調べたり、奥深く探ろうとしたりする人は誰もいない。あなたがたは古い観念とともに今日の道を受け入れている。そのような信仰で何が得られるのか。あなたがたの中には明らかにされていない観念が数多く隠されていて、あなたがたはそれを隠そうとひたすらさまざまいい努力をしており、簡単にはそれを明らかにしないと言うことができるであろう。あなたがたは新しい働きを誠実に受け入れず、古い観念を諦めるつもりはない。あなたがたはあまりにも多くの処世哲学を持っていて、それはかなりの量である。古い観念を諦めず、いやいやながら新しい働きに取り組んでいる。あなたがたの心はあまりにも邪悪で、新しい働きの一步一步をまったく心に留めない。あなたがたのような放蕩者に福音を広める働きができるのか。あなたがたは全宇宙に福音を広める働きを引き受けることができるのか。あなたがたのこうした実践は、あなたがたが性質を変え、神を知るようになることを妨げている。このまま続ければ、あなたがたは必ず取り除かれることになる。

あなたがたは神の働きと人の働きを区別できなければならない。人の働きに何を見ることができるか。人の働きには人の経験による要素がたくさんある。人が表すものはその人の存在そのものである。神自身の働きも神の存在そのものを表すが、神の存在そのものは人の存在そのものとは異なる。人の存在そのものは人の経験や生涯を表し（生涯においてその人が経験し遭遇するもの、あるいはその人の処世哲学）、住む環境が異なれば、異なる存在そのものを表す。あなたに社会的経験があるか否か、家族の中で実際どのように生活し経験しているかは、あなたが表すものの中に見ることができるが、肉となった神の働きにおいて神に社会的経験があるか否かを見ることはできない。神は人の本質を十分承知しており、あらゆる種類の人

に関連するあらゆる種類の実践を明らかにすることができる。神は人間の墮落した性質や反抗的行動を明らかにするのはなおさら得意である。神は世俗的な人のそばには住まないが、人間の本性や世俗的な人の墮落のすべてを承知している。これこそが神という存在である。神は世間を取り扱わないが、世間を取り扱う規則は知っている。なぜなら人間の本性を十分に理解しているからである。神は人の目には見えず、人の耳には聞こえない聖霊の働きについて、現在のもも過去のもも知っている。これには処世哲学ではない知恵や、人には到底理解できないふしぎも含まれている。これが人に開かれており、また隠されてもいる神という存在である。神が表すものは特別な人の存在そのものではなく、霊に本来備わっている特質と存在そのものである。神は世界中を巡回しないが、世界のすべてを知っている。神は知識も識見もない「類人猿」と接触するが、知識よりも高く、偉人を超える言葉を語る。人間性がなく、人間の慣習や生活を理解しない鈍感で頭の鈍い人の集団の中で神は暮らす、人類に通常の人間性を生きよう要求し、同時に人類の卑劣で粗野な人間性を明らかにすることができる。このすべてが、いかなる生身の人間の存在よりも高い、神という存在である。行うべき働きを行い、墮落した人類の本質を余すところなく明らかにするために、複雑でめんどろで浅ましい社会生活を経験することは神にとって不必要である。浅ましい社会生活は、神の肉を啓発しない。神の働きと言葉は人の不従順を明らかにするだけで、人に世界と取り組むための経験や教訓を与えはしない。神が人にいのちを与えるとき、社会や人の家族を調べる必要はない。人を暴き裁くことは、神の肉の経験を表現することではない。それは神が人の不従順を長いこと知り、人類の墮落を忌み嫌った果てに、人の不義を明らかにすることである。神が行う働きはすべて、神の性質を人に明らかにし、神であることを表すことである。この働きができるのは神のみであり、生身の人ができることではない。神の働きから、人は神がどのような存在であるかはわからない。神の働きに基づいて被造物の人として神を分類することも不可能である。神という存在もまた、被造物の人として神を分類できないようにしている。人は神を人間でない存在と考えるしかなく、どの範疇に神を入れるべきかわからない。そのため人は神を神の範疇に入れざるをえない。こうすることは人にとって不合理なことではない。なぜなら、神は人には行うことのできない多くの働きをしてきたからである。

神が行う働きは、神の肉の経験を表すのではない。人が行う働きは人の経験を表す。誰もが自分の個人的経験について話す。神は直接真理を表すことができる一方、人は真理を経験したことに対応する経験を表せるだけである。神の働きに規則はなく、時間や地理的制約に支配されない。神はいつでも、どこでも自分の存在そ

のものを表すことができる。神は好きなように働く。人の働きには条件と状況がある。これなしには人は働くことはできず、神に関する認識や真理の経験を表すことができない。何かが神自身の働きであるか、人の働きであるかを見極めるためには、両方の違いを比較するしかない。神自身による働きがなく、あるのは人の働きのみであれば、人の教えは高度で、誰の能力も及ばないことがわかるだけである。人の話す調子、物事を扱う際の原則、経験豊かで落ち着いた働きの態度は、他の人々には及ばないことがわかる。あなたがたはみな優れた素質と高尚な知識を持つこのような人を称賛するが、神の働きと言葉から神の人間性がどれほど高いか知ることはできない。それどころか、神は平凡であり、働くときは普通で現実的だが、人間には計り知れず、そのため、人はある種の畏敬の念を神に抱く。ある人は働きの経験が特に高度で、想像力や論理的思考も特に高度で、人間性が特に良いかもしれない。このような属性は人の称賛は得られても、畏敬の念や畏れを喚起することはできない。よく働くことができ、特に深い経験があり、真理を実践できる人は誰もが称賛するが、そのような人は畏敬の念を呼び起こすことは決してできず、称賛と羨望がせいぜいである。しかし神の働きを経験した人は神を称賛せず、その代わりに神の働きは人間には及ばず、人間には計り知れず、新鮮で素晴らしいと感じる。人が神の働きを経験すると、神について最初に得る認識は、神は計り知れず、知恵に満ちて素晴らしいということであり、人は無意識のうちに神を敬い、神の働きの奥義を感じる。それは人の理解の及ばないものである。人は神の要求に応じられること、神の願望を満たせることだけを望み、神を超えたいとは思わない。なぜなら、神の働きは人の考えや想像のおよばないものであり、人が神に代わって行うことなどできないからである。人自身も自分の欠点を知らないのに、神は新しい道を開拓して、人をさらに新しくさらに美しい世界へと伴い、それにより人類は新たに進歩し、新たに出発した。神に向かって人が感じるのは称賛ではなく、と言うよりは、称賛だけではない。人がもつもっとも深い経験は畏敬の念と愛であり、人の抱く感情は、神は実に素晴らしいということである。神は人にはできない働きを行い、人には言えないことを言う。神の働きを経験した人はいつも言葉では言い表せない感情を抱く。十分に深い経験をした人は神の愛を認識できる。このような人は神の素晴らしさを感じ、神の働きは知恵に満ち、極めて素晴らしいと感じることができ、それによって彼らの間に限りない力が生み出される。それは恐れでも偶発的な愛や尊敬ではなく、神の人への憐れみと寛容を深く感じることである。しかし、神の刑罰と裁きを経験した人は神の威厳を感じ取り、神は一切の背きを許さないと感じる。神の働きを多く経験してきた人でさえ、神を完全に理解することはできない。本当に神をあがめる人はすべて、神の働きは人の観念とは一致せず、必ず人の

観念に反することを知っている。人が神を全面的に称賛したり、神に服従しているように見せたりすることを神は必要とせず、むしろ人は真の畏敬の念を抱き、本当に服従すべきである。神の働きの大部分において、本当の経験を持つ人は誰でも神への畏敬の念を感じるが、それは称賛よりも高い。人は神の刑罰と裁きの働きによって神の性質を見た。したがって心の中で神を畏れる。神があがめられ、従われるのは、神の存在そのものと性質が被造物のものとは同じでなく、それを上回っているからである。神は独立的に存在しており、永遠であり、創造されていない存在であり、神のみが畏敬の念と従順を受けるに値する。人にはその資格がない。そのため、神の働きを経験し、本当に神を知る人はすべて神への畏敬の念を感じる。しかし、神についての観念を捨てない人、つまり断じて神を神とみなさない人は、神への畏敬の念をまったく抱かず、神につき従っていても征服されていない。彼らは生まれつき不従順である。神がこのように働くことで達成しようとしているのは、すべての被造物が創造主への畏れの心を持ち、創造主を崇拜し、無条件に神の支配に服従するようになることである。これが神のすべての働きが達成すべき最終的結果である。もしそのような働きを経験した人が、たとえ少しでも神を畏れず、もしその人の過去の不服従がまったく変わらなければ、その人は必ず取り除かれる。人の神に対する態度が遠くから称賛したり、尊敬の念を示したりするだけで、少しも神を愛さないならば、これは神を愛する心のない人の達する結果であり、その人は完全にされるための条件に欠けている。それだけの働きがあっても、ある人の真の愛を得られないならば、それはその人が神を獲得しておらず、心から真理を追求していないのである。神を愛さない人は真理を愛さず、したがって神を獲得することはできず、ましてや神の承認を得ることはできない。そのような人は、どのように聖霊の働きを経験しようとも、どのように裁きを経験しようとも、神を畏れることはできない。これは本性を変えることができない人、極めて邪悪な性質の人である。神をあがめない人はすべて取り除かれ、懲罰の対象になり、悪事を働く者と同様に罰せられ、不正なことをした人よりもはるかに苦しまなければならない。

神の三階の働きを認識することは、神を認識する道である

人類を経営する働きは三つの段階に分けられるが、それは人類を救う働きが三つの段階に分けられることを意味する。これら三つの段階に創世の働きは含まれず、むしろ、律法の時代、恵みの時代、そして神の国の時代という三段階の働きである。創世の働きは、人類全体を造る働きだった。それは人類を救う働きではなく、人類を救う働きとは関係がなかった。なぜなら、創世の際、人類はまだサタンに

よって墮落させられておらず、人類を救う働きを実行する必要がなかったからである。人類を救う働きは、人類がサタンに墮落させられた後によりやく始まり、そのため人類を経営する働きも、人類が墮落させられた後によりやく始まった。言い換えれば、人を経営する神の働きは、人類を救う働きの結果として始まったもので、創世の働きから生じたものではないのである。人類が墮落した性質を持つようになって初めて、経営の働きが存在するようになった。ゆえに人類を経営する働きは、四つの段階もしくは四つの時代ではなく、三つの部分を含むものである。これこそが、人類を経営する神の働きへの正しい言及の仕方である。最後の時代が終わるとき、人類を経営する働きは完全に終焉を迎えている。経営の働きの終結は、人類全体を救う働きが完全に終了し、それ以降、人類にとってその段階が完結したことを意味する。人類全体を救う働きがなければ、人類を経営する働きも存在せず、三段階の働きもないだろう。ヤーウェが創世の働きを終わらせ、律法の時代の働きを始めたのはまさに、人類の墮落のため、また人類が救いをただちに必要としていたためである。そうして初めて、人類を経営する働きが始まったのだが、それはつまり、人類を救う働きもそのとき初めて開始されたことを意味する。「人類を経営する」とは、新たに造られた人類（つまり、まだ墮落させられていない人類）の地上における生活を導くという意味ではない。むしろそれは、サタンによって墮落させられた人類の救いであり、つまりは、この墮落した人類を変化させることである。これが「人類を経営する」ことの真意である。人類を救う働きに創世の働きは含まれないので、人類を経営する働きにも創世の働きは含まれず、創世とは別の三段階の働きだけが含まれる。人類を経営する働きを理解するには、三段階の働きの歴史を知ることが必要であり、それこそが救われるために、すべての人が知っていなければならないことである。神の被造物たる者、人は神によって造られたということを認識しなければならないし、人類の墮落の源、さらには人の救いの過程を認識しなければならない。神に気に入られようと教義に従って行動することだけは知っているが、神がいかに人類を救うか、あるいは人類の墮落の源を一切知らないのであれば、あなたがたには神の被造物としてその部分が欠けている。あなたは、神による経営の働きのより幅広い範囲を知らないままに、実践可能なそれらの真理を理解するだけで満足してはならない。そうであれば、あなたは教条的過ぎるということになる。三段階の働きは、神による人の経営の内幕であり、全世界の福音の到来であり、人類全体における最大の奥義であり、また福音伝道の基盤でもある。自分のいのちに関係する単純な真理を理解することだけに集中し、この最大の奥義とビジョンに関して一切知らないとするば、あなたのいのちは、ただ眺めること以外に役に立たない不良品と言えるのではないか。

人が実践することだけに集中し、神の働きと、人が認識すべき物事を二次的なものと見るならば、それは木を見て森を見ないことではないか。あなたは、認識すべきことを認識し、実践すべきことを実践しなければならない。そうして初めて、真理をどのように追い求めるべきかを知る人になる。あなたが福音を述べ伝える日が来たとき、「神は偉大な義の神、至高の神であり、いかなる偉人も比べものにならず、それ以上に高い者もない神である……」としか言えず、こうした見当違いで上辺だけの言葉しか発することができず、非常に重要で中身のある言葉を話すことが一切できず、神を認識すること、あるいは神の働きについて何も言うことができず、さらには真理を説明することも、人間に欠けているものを提供することもできないのであれば、あなたのような人は、自身の本分を立派に尽くすことができない。神を証しし、神の国の福音を述べ伝えるのは、決して簡単なことではない。まずは真理を身につけ、理解すべきビジョンを備えなければならない。神の働きの様々な側面に関するビジョンと真理を明確に知り、心の中で神の働きを認識するようになり、神が何をするかにかかわらず、例えばそれが義の裁きであれ人を精練することであれ、自身の基盤として最大のビジョンを備え、実践すべき正しい真理を備えていれば、あなたは最後まで神に付き従うことができるようになる。神の働きが何であれ、その働きの目的は変化せず、神の働きの核心も変化せず、そして人に対する神の旨も変わらないことを知らなければならない。神の言葉がどれほど厳しいものであっても、環境がどれほど過酷でも、神の働きの原則は変わらないし、人を救うという神の意図も変わらない。それが人の終わり、あるいは人の終着点を明らかにする働きではなく、最終段階の働き、あるいは神の経営計画全体を終わらせる働きでもないならば、また神が人に対して働きを行っているさなかのことであるならば、神の働きの核心は変わらない。つまり、それは常に人類の救いなのである。これこそが、あなたがたの神への信仰の基盤であるべきだ。三段階の働きの目的は全人類の救いであり、すなわちそれは人をサタンの領域から完全に救い出すことを意味する。三段階の働きには、それぞれ異なる目標と意義があり、一つひとつが人類を救う働きの一部であって、人類の必要に応じて実行される、異なる救いの働きなのだ。ひとたびこの三段階の働きの目的を知れば、働きの各段階の意義を正しく認識するにはどうすればよいか分かり、神の旨を満たすにはどのように行動すればよいか理解できる。この点に到達することができれば、この最大のビジョンが神に対するあなたの信仰の基盤になるだろう。あなたは楽な実践の方法や奥深い真理を追い求めるだけでなく、実践とビジョンを組み合わせなければならない。そうすれば、実践できる真理と、ビジョンに基づく知識の両方が存在することになる。そうして初めて、あなたは真理を徹底的に追求する者になれるのである。

三段階の働きは、神の経営全体の核心であり、その三段階の中に、神の性質と、神であるものが表されている。神の三段階の働きを知らない者は、神がどのようにして自身の性質を表現するかを理解できないだけでなく、神の働きの知恵も知らずにいる。また、神が人類を救う様々な方法や、人類全体に対する神の旨についても知らないままにいる。三段階の働きは、人類を救う働きの完全なる表現である。三段階の働きを知らない者たちは、聖霊の働きの様々な手段や原則を知らないままである。また、ある特定の段階の働きから残された教義にあくまでこだわる者たちは、神を教義に限定する人であり、神に対する彼らの信仰は漠然としていて不確かである。そのような人たちは、決して神の救いを得ることがないだろう。神の三段階の働きだけが神の性質全体を余すところなく表せるのであり、人類全体を救う神の意図、そして人類の救いの全過程を完全に示すことができる。これは、神がサタンを打ち負かし、人類を取り戻したことの証拠、神の勝利の証拠であり、神の性質全体の表れでもある。神の働きの三段階のうち、一つの段階しか理解しない者は、神の性質の一部しか知らない。人の観念においては、この一段階の働きがいともたやすく教義になり、人は神に関する規則を定め、神の性質のこの一部分を神の性質全体の表れとして使いがちになる。その上、人の想像が少なからずこの中に混入するので、神の働きの原則に加えて、神の性質、存在、そして知恵を、限られた範囲内に固く制限し、神がかつてこのようであったなら、永遠にそれと同じままであり、絶対に変わることはない信じ込む。三段階の働きを知り、正しく認識できる者だけが、完全に、そして正確に神を知ることができる。少なくとも、神をイスラエル人の神、あるいはユダヤ人の神とは定義しないし、人間のためにいつまでも十字架にかけられる神とは見ない。神の働きの一段階だけから神を認識するようになってしまえば、その人の認識はあまりに少なく、大海原の一滴に過ぎない。そうでなければ、なぜ多くの古い宗教家たちは神を生きたまま十字架にかけたのか。それは、人間が神を限られた範囲に制限するからではないのか。多くの人が神に反抗し、聖霊の働きを邪魔するのは、彼らが多岐にわたる様々な神の働きの認識せず、さらに、ごくわずかな知識と教義しか持ち合わせておらず、それで聖霊の働きを判断するためではないのか。そのような人たちの経験は表面的なものなのに、本性が傲慢かつ放縦であり、聖霊の働きを軽視し、聖霊の懲らしめを無視し、さらには自分の取るに足らない古い論拠を用いて聖霊の働きを「確認」しようとする。また彼らはもったいぶって、自分の知識と博識を全面的に確信し、世界中を駆け回ることができると思い込んでいる。そのような人たちは聖霊に軽蔑され、拒絶されるのではないか。そして、新しい時代に淘汰されるのではないか。神の前に来て公然と神に反抗する人たちは、無知で物事をよく知らない卑劣な人間で、自分がいかに聡明

かを見せびらかそうとしているだけではないのか。彼らは、聖書についてのわずかな知識だけで俗世の「学术界」にはびこり、人に教えを説く上辺だけの教義でもって、聖霊の働きを覆し、自分たちの思考過程を中心に回らせようと試みている。目先のことしか見えないのに、六千年にわたる神の働きを一目で見極めようとするのである。この人たちには、言及する価値のある理知など一切ない。実際、神についてよく知っている人ほど、神の働きを判断するのに時間をかける。さらに、そのような人たちは、今日の神の働きについて知っていることをわずかししか語らないが、あわてて判断することはしない。神に対して認識がない人ほど、傲慢かつ自信過剰で、気まぐれに神の存在そのものを言いふらすが、彼らは理論を語っているだけで、実際の証拠は提供しない。このような人たちには少しも価値がない。聖霊の働きを冗談事と捉える人たちは浅はかである。聖霊の新たな働きに出会っても慎重でなく、ベラベラ言いふらして早まった判断を下し、気分にかかせて聖霊の働きの正しさを否定し、さらには聖霊の働きを侮辱し冒瀆する人たち、つまりそうした無礼な人たちは、聖霊の働きに対して無知ではないのか。さらに、そのような人たちは、極めて傲慢で、生まれつき高慢で、手に負えない人間ではなからうか。このような人たちが聖霊の新しい働きを受け入れる日が来ても、神は彼らを寛容には扱わないだろう。彼らは、神のために働く人たちを見下すだけでなく、神自身をも冒瀆する。そのような無謀な人たちは、この世でも後の世でも赦されることがなく、永久に地獄で滅びるだろう。このように無礼で放縱な人たちは、神を信じているふりをしているだけで、そうすればするほど、神の行政命令に背きがちになる。生まれつき放逸で、一度も誰かに従ったことがない、傲慢な人間はすべて、このような道を歩いているのではないか。彼らは、常に新しく決して古くならない神に、来る日も来る日も反抗しているのではないか。今日あなたがたは、神の三段階の働きが持つ重要性をなぜ知らなければならないのかを理解すべきである。わたしが述べる言葉はあなたがたの益になるものであり、無意味な言葉ではない。あなたがたが、あたかも馬に乗って疾走しながら花を鑑賞するかのようになり、ただそれらを読むだけなら、わたしの大変な努力はすべて水の泡になるのではないか。あなたがたの一人ひとりが自身の本性を知るべきである。あなたがたのほとんどは、議論が得意であり、理論的な質問に対する答えはすらすらと出てくるが、実質を伴う問題になると何も言うことができない。今日でさえ、あなたがたはいまだ浅はかな会話にふけり、自分の古い性質を変えることができずにいる。またあなたがたのほとんどは、より高い真理へと至るべく、追求する方法を変えるつもりが一切なく、いかげんに人生を送るだけである。このような人がどうして最後まで神に付き従うことができようか。たとえ身が入らないまま、道の最後まで辿り着けたとしても、あなたが

たにとってそれが何の得になるだろう。手遅れになる前に考えを改め、真剣に追求するか、あるいは早く撤退したほうがいい。時間が経つにつれ、あなたがたは人にとかる寄生虫になる。それほどまでに低くて卑しい役を、あなたがたは演じるつもりなのか。

三段階の働きは、神の働き全体の記録であり、神による人類の救いの記録であって、架空のものではない。神の性質全体を認識しようと真剣に追い求めるのであれば、あなたがたは神によってなされた三段階の働きを知らなければならず、さらに、どの段階も省略してはならない。これは神を知ることが求める人たちが達成しなければならない最低限のことである。神を真に認識しているかのように装うことなど、人にはできない。それは人が自分で想像できるものでもなければ、聖霊が一人の人間に特別な恩恵を授けた結果でもない。むしろそれは、人が神の働きを経験した後に得る認識であり、神の働きの事実を経験して初めて訪れる、神についての認識なのである。そのような認識は容易に得られるものではないし、教えられるものでもない。それは完全に個人的な経験に関係することなのだ。これらの三段階の働きの核心には、神による人類の救いがあるものの、この救いの働きの中には働きを行ういくつかの方法と、神の性質を表すいくつかの手段が含まれている。人がそれを識別するのは極めて難しく、理解するのも困難である。時代の区分、神の働きの変化、働きの変化、この働きの受益者の変化など、これらすべてが三段階の働きに含まれている。特に、聖霊の働き方の違い、神の性質、姿、名前、身分、その他の変化などはどれも、三段階の働きの一部である。働きの一段階は一部しか表すことができず、特定の範囲に限られている。それは時代の区分や神の働きの変化と関連がなく、他の側面とはさらに関連していない。これは明白な事実である。三段階の働きが人類を救う神の働きのすべてなのだ。人は、人類を救う働きの中で、神の働きと神の性質を認識しなければならない。この事実がなければ、神に関するあなたの認識は空虚な言葉でしかなく、机上の空論に過ぎない。そのような認識では、人を納得させることも征服することもできず、現実にそぐわないし、また真理でもない。その認識がたとえ豊富で、聞こえのよいものであっても、神の元来の性質と合致しないのであれば、神はあなたを容赦しない。神はあなたの認識を称えないだけでなく、神を冒涇した罪人としてあなたに報復する。神を認識することに関する言葉は、軽々しく語られるものではない。たとえあなたが流暢で弁が立ち、言葉が優れているために、黒を白、白を黒と言いくるめることができるとしても、神についての認識を語ることに關しては素人同然である。神は、あなたが性急に判断を下したり、気軽に称えたり、無頓着に中傷したりできる対象ではない。あなたは誰でもどんな人でも称えるが、それでもなお、神の至高の恵みを描写する適

切な言葉を見つけるのに悪戦苦闘している。そしてこれが、あらゆる敗者が気づくようになることなのである。神を描写できる言語の達人は大勢いるが、その描写の正確さは、神に属する人々や、限られた語彙しかなくても豊かな経験を備えた人々によって語られる真理の百分の一に過ぎない。よって神への認識は、巧みな言葉遣いや豊富な語彙によるのではなく、正確さと現実性にかかっていること、また人の知識と神への認識はまったく無関係であることが見て取れる。神を認識するという学びは、人類のどの自然科学よりも高尚である。それは、神を認識することを探し求める極めて少数の人間にしか達成できない学びであって、才能があれば誰でも達成できるわけではない。よってあなたがたは、神を認識することと真理を追い求めることを、ほんの子供でも達成できるものだという見方をしてはならない。あなたはおそらく、家庭生活、職業、あるいは結婚生活において完全に成功を収めているかもしれないが、真理について、また神を認識する学びについて言えば、自分で見せられるものは何もないし、何一つ成し遂げていない。真理を実践するのはあなたがたにとって非常に難しいことであり、神を認識するのはさらに困難な問題であると言ってよい。これはあなたがたにとって困難なことであり、同時に人類全体が直面している難事である。神を認識するために何らかのことを成し遂げた人たちの中で、基準に達している人はほとんどいない。人間は、神を認識することが何を意味するのか、どうして神を認識する必要があるのか、あるいは、神を認識するにはどの程度まで達成しなければならないのかを知らずにいる。これは人類を大いに混乱させるものであり、ごく簡単に言うと人類が直面する最大の謎であって、誰もこの質問に答えることができないし、誰も進んで答えようとはしない。なぜなら、今まで人類のうち誰一人として、この働きの研究に成功したことがないからである。おそらく、三段階の働きの謎が人類に明らかにされるとき、神を認識する才能豊かな人々の集団が次々と現れるだろう。もちろん、そうなることをわたしは望むし、さらに言えば、わたしはこの働きを実行している最中であって、近い将来そうした才能豊かな人々がもっとたくさん現れることを願う。彼らは、三段階の働きの事実を証しする者となり、そしてもちろん、三段階の働きを証しする最初の者となるだろう。しかし、神の働きが終わる日になって、そのような才能ある人々が現れなかったならば、あるいは、受肉した神によって完全にされることを自ら受け入れた人々が一人か二人しかいなかったならば、これ以上悲しく、また残念なことはないだろう。しかし、これは最悪のシナリオに過ぎない。いずれにせよ、真剣に追い求める者たちがこの祝福を得られることを願う。世の始まりの時以来、このような働きはかつて一度も存在しなかったし、人類の発展の歴史の中で、かつてなかった取り組みである。神を認識する最初の者たちの一人になることが本当にできるなら

ば、あらゆる被造物の中で最も名誉なことではないだろうか。神によってこれ以上に称えられる人が、人類の中にいるだろうか。このような働きを成し遂げるのはたやすいことではないが、それでも最終的には成果を上げる。性別や国籍に関係なく、神の旨を認識できる人はみな、最後に神から最高の名誉を受け、神の権威を備える唯一の者たちとなる。これが今日の働きであり、また未来の働きでもある。つまり、六千年にわたる働きの中で最後に達成される最高の働きであり、人間の各区分を明らかにする働きの方法である。人に神を認識させるという働きを通して、人の様々な階層が明らかにされる。つまり、神を知る者は神の祝福を受け、神の約束を受け取る資格がある一方、神を知らない者は神の祝福を受ける資格も、神の約束を受け取る資格もないことになる。神を知る者は神の知己であり、神を知らない者は神の知己とは呼ばれない。神の知己は、神のあらゆる祝福を受けられるが、神の知己でない者は、神の働きのどれにも値しない。患難であれ、精錬であれ、あるいは裁きであれ、それらはどれも人が最終的に神についての認識を得られるようにするためであり、それによって人は神に服従する。これが最終的に達成される唯一の成果である。三段階の働きはどれも隠されていないが、このことは、人が神を認識するのに役立ち、人が神についてより完全かつ徹底的な認識を得る手助けとなる。この働きはすべて人に益をもたらすのだ。

神自身の働きは、人が知らなければならないビジョンである。と言うのも、神の働きは人には達成できないし、人に備わっていないものだからである。三段階の働きが神の経営のすべてであり、人が認識すべき最大のビジョンである。この最大のビジョンを知らないとすれば、人が神を認識するのは容易ではないし、神の旨を理解するのも難しく、さらには、人が歩む道もますます陰しいものになる。ビジョンがなければ、人がここまで来ることはできなかつただろう。人を今日まで守ってきたのはビジョンであり、人に最大の保護を提供してきたのもビジョンである。将来、あなたがたの認識は必ずや深まり、あなたがたは神の旨のすべてと、三段階の働きにおける神の賢明な働きの実質を認識する。これこそがあなたがたの真の霊的背丈である。働きの最終段階は独立したものではなく、それ以前の二段階と一緒に形成された全体の一部である。つまり、三段階の働きのうち一つだけを行っても、救いの働き全体を完成させることは不可能である。たとえ働きの最終段階が人を完全に救うことができたとしても、この一段階さえ実行すればそれでいいという意味にはならないし、人をサタンの影響から救うにあたり、その前の二段階の働きは必要ないということにはならない。救いの働き全体が三段階の働きであって、その中の一段階ではないので、三段階の働きのうちどれか一つを、全人類が認識すべき唯一のビジョンとして取り上げることはできない。救いの働きが成し遂げられていな

い限り、神の経営が完全に終わることはできない。神の存在、神の性質、そして神の知恵が救いの働き全体の中に表現されており、初めは人に対して明らかにされていなかったが、救いの働きの中で徐々に表されるようになった。救いの働きの各段階は神の性質と神の存在を部分的に表しているが、どの一段階も神の存在全体を直接かつ完全に表すことはできない。つまり、救いの働きは三段階の働きが完結して初めて完全に終わるのだから、神の全体に関する人の認識を神による三段階の働きから切り離すことはできない。人が一つの段階から得るものは、神の働きの一部分で表される神の性質に過ぎず、前後の段階で表される性質と存在を代表することはできない。なぜなら、人類を救う働きは一時期または一箇所ですぐに終わるものではなく、様々な時期や場所における人類の発展状況によって次第に深まるものだからである。それは複数の段階で行われる働きであって、一つの段階で終わるものではない。そのため、神の知恵の全体は、個別の一段階というよりむしろ、三つの段階において具体化される。神の存在全体、神の知恵全体が、これらの三段階の中に配置されていて、どの段階の働きの中にも神の存在があり、各段階に神の働きの知恵が記されている。人は、これら三段階の中に表現されている神の性質全体を認識しなければならない。この神の存在のすべてが全人類にとって極めて重要であり、神を礼拝するときに、人がこの認識を持たないのであれば、彼らは仏陀を崇拝する人々と何ら変わらない。人のあいだで行われる神の働きは人から隠されておらず、神を崇拝するすべての人が認識すべきである。神は救いの働きの三段階を人のあいだで行ったのだから、人は、これら三段階の働きの中で表現されている、神が持つものと神そのものを認識すべきである。これこそが、人がすべきことである。神が人から隠すのは、人には成し遂げられないこと、または人が知るべきでないことであり、一方、神が人に示すのは、人が知るべきこと、そして人が自分のものにすべきことである。三段階の働きのそれぞれは、前の段階を基に行われるのであって、救いの働きから切り離される形で、単独で行われることはない。それぞれの時代と、行われる働きには大きな違いがあるものの、その核心はやはり人類の救いであり、救いの働きの各段階は、その前の段階よりも深くなる。各段階の働きは、その一つ前の段階を基礎として続くものであり、無効になることはない。このようにして、常に新しく決して古くない神の働きにおいて、神は以前に表したことのない自身の性質の側面を人に対して絶えず表現し、自身の新しい働きと存在を常に明かし、たとえ古くからの宗教家たちが全力で反抗し、公然と反対しても、神は意図する新しい働きを常に実行する。神の働きは常に変化しており、そのためにいつも人の反対にあう。ゆえに、神の性質、そして神が働きを行う時代と対象も常に変化している。その上、神はこれまでしたことのない働きを常に行っており、人から見て以

前の働きと矛盾する、あるいは相反する働きさえも行う。人は、一種類の働き、あるいは一つの実践方法しか受け入れることができず、自分と相反する、あるいは自分よりも高尚な働きや実践方法を受け入れるのは難しい。しかし聖霊は新しい働きを常に行っていて、そのせいで神の新しい働きに反対する宗教専門家の集団が次から次へと出現する。そうした者たちが専門家になったのはまさに、神がどうして常に新しく決して古くないのかを人が知らず、神の働きの原則を認識せず、そしてさらに、神が人を救う様々な方法を認識していないからである。このように、それが聖霊に由来する働きなのか、神自身による働きなのかを、人は見分けることがまったくできない。多くの人は、以前に発せられた言葉と合致すれば受け入れるが、以前の働きと違う点があれば反対して拒絶するという態度に固執している。今日、あなたがたはみなそのような原則に従っているのではないか。救いの働きの三段階は、あなたがたに対してあまり効果を上げておらず、また中には、前の二段階の働きは知る必要のない負担だと信じる者もいる。彼らは、三段階の働きのうちの前の二段階によって人々が混乱しないよう、これらの段階を大衆に発表すべきでなく、早々に撤回されるべきだと考えている。大半の人は、前の二段階の働きを知らしめるのは余計なことであり、神を認識する上でまったく役に立たないと思っている。これがあなたがたの考えである。今日、あなたがたはみな、そのように行動するのは正しいことだと考えているが、いつかわたしの働きの重要性に気づく時が必ず来る。わたしは意義のない働きなど行わないのだと知りなさい。わたしがあなたがたに三段階の働きを示している以上、それらはきっとあなたがたのためになる。また、これら三段階の働きが神の経営全体の核心である以上、きっと全宇宙ですべての人の注目の的となる。いつの日か、あなたがたはみな、この働きの重要性に気づくだろう。自分は神の働きに逆らっている、あるいは自分の観念を基に今日の働きを判断しているのだと知りなさい。なぜなら、あなたがたは神の働きの原則を知らないからであり、また聖霊の働きを軽率に扱っているからである。あなたがたが神に反抗し、聖霊の働きを邪魔するのは、あなたがたの観念と生まれ持った傲慢さのせいである。それは神の働きが間違っているからではなく、あなたがたが元々あまりに反抗的だからである。人によっては、神への信仰を持った後、人がどこから来たのかさえ確信をもって言えないのに、あえて聖霊の働きの正誤について演説を行う者もいる。彼らは、聖霊の新しい働きを持つ使徒たちに説教したり、意見したり、立場をわきまえないで余計な口を挟んだりさえする。人間性が非常に低俗で、理知のかけらもない。このような人が聖霊の働きによって拒絶され、地獄の火に焼かれる日が来るのではないか。彼らは、神の働きを認識せず、それどころか神の働きを批判し、しかも神に対して働き方の指図もする。このように理不尽な人たちが

どうして神を認識できようか。人は、神を求めて経験する過程で、神についての認識を得るようになる。つまり、気まぐれに批判する中で聖霊の啓きを受け、それを通して神を認識するのではない。神についての認識が正しくなるほど、人は神に反抗しなくなる。逆に、神についての認識が少ないほど、人は神に逆らう。あなたの観念、古くからの本性、人間性、性格、そして道德観は、あなたが神に逆らう資本であり、あなたの良心が墮落し、あなたの性質が醜悪であり、あなたの人間性が下劣であればあるほど、あなたはますます神の敵になる。強力な観念の持ち主や独善的な性質の者は、受肉した神とさらに敵対するが、そのような者たちは反キリストである。あなたの観念が正されなければ、常に神と敵対することになり、神と相容れることが決してできず、いつも神から離れていることになる。

自分の古い観念を捨ててこそ、新しい認識を得ることが可能であるが、古い認識が古い観念と同じだとは限らない。「観念」とは、現実にはそぐわない、人が想像した物事を指す。古い認識が古い時代にもう時代遅れとなり、人が新しい働きに入るのを阻んだなら、そのような認識も観念である。人がそのような認識に正しく対処でき、神をいくつかの異なる側面から認識し、古いものと新しいものを組み合わせることができれば、古い認識も人の助けとなり、人が新しい時代に入る基盤となる。神を認識するという学びにおいては、例えば、どのようにして神を認識する道へと入るのか、神を認識するにはどの真理を理解すべきなのか、またいかにして自分の観念と古い性質を取り除き、神の新しい働きの采配にすべて従うようになるのかなど、多くの原則を習得する必要がある。神を知るという学びに入るため、これらの原則を基盤として用いれば、あなたの認識はますます深くなる。あなたが三段階の働き、つまり神の経営計画全体についてはっきりした認識を持ち、前の二段階の働きと現在の働きとを完全に関連づけ、それが一つの神によってなされた働きだと捉えることができれば、あなたは比類なき強固さの基盤を持つことになる。三段階の働きは一つの神によってなされた。これは最も偉大なビジョンであり、神を認識する唯一の道である。三段階の働きは、神自身によってしかなされ得なかったことであり、神に代わってそのような働きを行えた人はいない。要するに、初めから今日まで、神の働きは神自身にしかできなかったのである。神の三段階の働きは、異なる時代の異なる場所で実行され、内容もそれぞれ異なるが、それらはすべて一つの神によってなされたものである。すべてのビジョンの中でも、これが人の認識すべき最も偉大なビジョンであり、人がこれを完全に理解するなら、その人は揺るぎなく立つことができる。現在、様々な宗教や教派が直面している最大の問題は、彼らが聖霊の働きを認識しておらず、聖霊の働きと聖霊のものでない働きを区別できないことである。そのため彼らは、先の二段階の働きと同様に、この段階の働き

もヤーウェ神によるものかどうかわからずにいる。神に従ってはいても、ほとんどの人が、それが正しい道なのかどうかをいまだ区別できない。人は、神自身がこの道を自ら導いているのかどうか、神の受肉が事実なのかどうかと気に病んでいるが、大半の人が、このような事柄をどう識別すべきかについて、一切手掛かりがないままである。神に従う者たちは、道を決めることができずにいるので、このような人たちのあいだにおいて、発せられる言葉は部分的な効果しか持っておらず、また完全に効果を発揮できないために、そのような人たちのいのちの入りに影響を及ぼしている。三段階の働きにおいて、それらが違う時代に、違う場所で、違う人々に対して、神に自身によってなされたことだと見きわめることができ、またたとえ働きが違っていても、それらはすべて一つの神によってなされたことであり、一つの神によってなされる働きである以上、正しく、間違いがあるはずはなく、またそれが人の観念にそぐわなくても、一つの神の働きなのは否定できないということを理解できれば――もしも人が、それは一つの神の働きであると確信をもって言えるならば、人の観念はほんの些細なこととなり果て、言及する価値もなくなるだろう。人のビジョンが明確でないために、また、ヤーウェが神でありイエスが主であることしか人は知らず、現在の受肉した神について決めかねているために、多くの人はヤーウェとイエスの働きに専念したままで、今日の働きについての観念に悩まされており、ほとんどの人が常に疑いを抱き、今日の働きを真剣に受け止めていない。人は、見るができなかった先の二段階の働きに関して、何の観念も持っていない。それは、人が先の二段階の働きの現実を理解せず、それらを自ら目撃しなかったからである。これらの段階の働きが見えないからこそ、人は好きなように想像するが、何を思いついてもそうした想像の証拠となる事実はないし、それらを正す者もない。人は気分になんて警戒心を捨て、自由に想像を働かせているが、その想像を立証する事実がないので、証拠があるかどうかにかかわらず、人の想像したことが「事実」となっている。したがって、人は頭の中で想像した神を信じているのであって、実際の神を求めてはいない。一人の人間が一種類の信仰を持つとすると、100人の人がいれば100通りの信仰があることになる。人は、神の働きの現実を見たことがないため、また耳で聞いたことがあるだけで、自分で目にしたことがないために、そのような信仰に取り憑かれている。人は伝説や物語を聞いたことがあっても、神の働きという事実の認識についてはほとんど聞いたことがない。ゆえに、信者になってわずか一年の人も、自身の観念を通して神を信じるようになっていくし、生涯信者である人も同様である。事実を見ることができない者は、神についての観念がある信仰から抜け出すことができない。人は自身の古い観念の束縛から解放され、新しい境地に入ったと信じている。神の真の顔を

見ることができない者の認識は、観念や風聞以外の何物でもないことを、人は知らないのか。人はみな、自分の観念が正確で間違いないと思い込み、そうした観念は神から来るものだと思っている。今日、人は神の働きを目の当たりにすると、長年にわたって蓄積した観念を解き放つ。過去の想像と思考がこの段階の働きの障害になってしまい、人がそのような観念を手放し、そのような思考に反論するのが困難になっている。今日まで神に付き従ってきた多くの人たちの持つ、この段階的な働きに対する観念は、以前にも増して深刻になっており、これらの人たちは、受肉した神に対する頑固な敵意を徐々に形成している。この憎しみの根源こそ、人の観念と想像なのである。人間の観念と想像が今日の働き、すなわち人間の観念と一致しない働きの敵になってしまったのだ。そうなったのはまさに、事実のせいで人が自由に想像を働かせることができず、それ以上に、人が事実反論するのは容易なことではないから、また人の観念と想像は事実の存在を許さず、さらに人は事実の正確さと信憑性を考慮せず、ただひたすら自分の観念を解き放ち、自分自身の想像力をたくましくするからである。これは人の観念の誤りとしか言えず、神の働きの誤りとは言えない。人が何を想像しても、それはその人の自由だが、神の働きのどの段階も、あるいは働きのごく一部でも、それについて軽々しく異議を唱えてはならない。神の働きの事実、人には侵せないものなのだ。あなたは自由に想像してかまわないし、ヤーウェとイエスの働きについて、すばらしい話をまとめても結構だが、ヤーウェとイエスによる働きの各段階の事実について反論してはならない。これは原則であって、行政命令でもあるが、あなたがたはこれらの問題の重要性を理解しなければならない。人は、この段階の働きは人間の観念と合致しないが、以前の二段階の働きはその限りではないと信じている。人は自身の想像の中で、以前の二段階の働きは今日の働きと同じではないと確信している。だが、神の働きの原則はすべて同じであり、神の働きは常に実践的であること、そして時代に関係なく、神の働きの事実逆らい、反対する人がいつも大量に現れることを考えたことがあるのか。今、この働きの段階に逆らい、反対する人たちは、過去の時代においても間違いなく神に逆らっていただろう。そのような者は常に神の敵なのだ。神の働きの事実を理解している人たちは、三段階の働きを、唯一の神の働きとして捉え、自分の観念は捨てる。このような人が神を知る者、真に神に付き従う者である。神の経営の一切が終わりに近づくとき、神は万物を種類に応じて分類する。人は創造主の手で造られたのだから、神は最後に、人を自身の支配下に戻さなければならない。これが三段階の働きの終結である。終わりの日の働きの段階と、イスラエルとユダヤにおける以前の二つの段階は、全宇宙における神の経営計画である。これは誰にも否定できないし、神の働きの事実である。人々はまだ、この働きの大半を経

験も目撃もしていないが、事実は事実であり、人は誰もこれを否定できない。神を信じる宇宙の各地の人々はみな、必ずやこの三段階の働きを受け入れる。特定の段階の働きだけを認識して、他の二段階の働きを理解せず、過去の時代における神の働きも理解しないなら、あなたは神の経営計画全体の真相を残らず語ることができず、神に関するあなたの認識は一方的である。神への信仰において、あなたは神を知らず、理解していないので、あなたには神を証しする資格がないからである。これらの事柄について、あなたの現在の認識が深かろうと浅かろうと、最後には、認識を得て完全に納得するはずであり、あらゆる人が神の働きを余すところなく目にし、神の支配の下に服従するようになる。この働きの終わりには、すべての宗教が一つになり、すべての被造物が創造主の支配の下に戻る。彼らは唯一の真の神を礼拝するが、邪悪な宗教はすべて無に帰し、二度と現れることはない。

このように連続して三段階の働きに言及するのはなぜか。時代の移り変わり、社会の発展、自然の変貌はみな、この三段階の働きが移り変わるにつれて変化する。人類は神の働きに合わせて随時変化するのであって、単独で発展しているのではない。神による三段階の働きに触れるのは、すべての被造物、そしてあらゆる宗教、あらゆる教派のすべての人を、唯一の神の支配下に導くためである。あなたがどの宗教に属していようと、最終的には誰もが神の支配の下に服従するのである。神自身だけがこの働きを実行できるのであって、それはどの宗教の代表者にも不可能である。世界には主要な宗教がいくつか存在し、それぞれが代表者や指導者を擁しており、信徒も世界中の様々な国や地域に広がっている。大国であろうと小国であろうと、ほぼすべての国にいくつかの異なる宗教が存在する。しかし、世界中にどれほど多くの宗教が存在していようと、宇宙のあらゆる人々は、究極のところ唯一の神による導きの下で生存しているのであって、人々の存在は宗教の代表者や指導者に導かれているわけではない。要するに、人類は特定の宗教の代表者や指導者に導かれているのではなく、天地を造り、万物を造り、そして人類を造った創造主に導かれているのであって、これは事実である。世界にはいくつかの主要な宗教があるものの、その大きさに関係なく、すべて創造主の支配の下に存在しており、いかなる宗教もこの支配の範囲を超えることはできない。人類の発展、社会の盛衰、そして自然科学の発達は何れも、創造主の采配から切り離すことができないし、この働きは特定の宗教の代表者にできるものではない。宗教の代表者というのは、特定の宗教組織の指導者に過ぎず、神を代表することも、天地と万物の創造主を代表することもできない。宗教の代表者は、その宗教全体の内部にいる者たちを率いることはできても、天下のあらゆる被造物を統率することはできないし、これは世界中で認められている事実である。宗教の代表者は指導者に過ぎず、神（創造主）と対等

の立場に立つことはできない。万物は創造主の手中にあり、最後はみな創造主の手中に戻る。人類は神によって造られ、宗教に関係なく、すべての人が神の支配下に帰するのであって、これは必然である。神だけが万物のあいだにおける至高の存在であり、すべての被造物の中で最高の支配者であっても、神の支配下に戻らなければならない。人の地位がいくら高くても、人類を適切な終着点へと導くことはできないし、万物をその種類に応じて分類できる者も誰一人存在しない。ヤーウェ自身が人類を造り、種類に応じて一人ひとり分類したのだから、終わりの時が来ても、神はやはり自身でその働きを行い、万物を種類に応じて分類するが、その働きは神にしかできないことである。初めのときから今まで、三段階の働きはすべて神自身によって、唯一の神によって行われた。三段階の働きの事実、人類全体に対する神の統率力の事実であり、誰も否定できない事実である。三段階の働きの終わりには、万物が種類に応じて分類され、神の支配の下に帰る。と言うのも、宇宙全体にはこの唯一の神しか存在せず、他の宗教は存在しないからである。世界を造ることができない者は、世界を終わらせることもできないが、世界を創造した神は、必ずやそれを終わらせることができる。だから、一つの時代を終わらせることができず、単に人が心を養うのを手助けできるだけなら、その者は断じて神ではないし、断じて人類の主でもない。そのような者にそうした偉大な働きは無理であり、このような働きを行える者は一人しかいない。そして、この働きができない者はみな、必ずや敵であり、神ではない。すべての邪悪な宗教は神と相容れず、神と相容れない以上、それらは神の敵である。すべての働きはこの唯一の真なる神がなすものであり、全宇宙がこの真なる神の支配下にある。それがイスラエルにおける働きであろうと、あるいは中国における働きであろうと、またその働きが聖霊によるものであろうと、あるいは肉体によるものであろうと、すべては神自身によって行われ、他の誰かがそれを行うことはできない。神が全人類の神だからこそ、神はどんな条件にも制限されず自由に働きを行う——これがすべてのビジョンの中で最も偉大なものである。神の被造物の一人として被造物の本分を尽くし、神の旨を理解したのであれば、神の働きを理解し、被造物に対する神の旨を理解しなければならない。また、神の経営計画、そして神が行う働きの意義をすべて理解しなければならない。これらを理解できない者は、神の被造物の資格がない。神の被造物として、自分がどこから来たかを知らず、人類の歴史や神が行ったすべての働きを理解せず、そしてさらに、人類がいかにして今日まで発展してきたか、また全人類を指揮するのは誰なのかを理解していなければ、自身の本分を尽くすことはできない。神は今日まで人類を導いてきた。そしてこの地上で人類を造って以来、神は一度も人のもとから離れたことがない。聖霊は休むことなく働き続け、ひたすら人類を導

き、一度も人のもとから離れたことがない。それなのに、人は神の存在に気づかず、まして神を知らない。神のすべての被造物にとって、これほど屈辱的なことがあるだろうか。神は自ら人を導いているのに、人は神の働きを理解していない。あなたは神の被造物でいながら、自分たちの歴史も知らず、自分の旅路の中で誰が自分を導いてくれたのかも分からずにいて、神による働きに気づいていない。それゆえ、神を認識することができずにいる。今なお知らないのであれば、神を証しする資格は決してない。今日、創造主はあらゆる人をまたも自ら導き、あらゆる人に神の知恵、全能、救い、そして不思議さを目の当たりにさせている。それでもあなたはまだ気づかず、理解せずにいる。ゆえにあなたは、救いを得られない者ではないのか。サタンに属する者は神の言葉を理解できず、神に属する者は神の声を聞くことができる。わたしが語る言葉に気づいて理解する者はみな、救われる者、神を証しする者である。わたしが語る言葉を理解しない者はみな、神を証しすることができず、淘汰される者である。神の旨を理解せず、神の働きに気づかない者たちは、神を認識することができず、そのような人は神を証しできない。神を証ししたいと願うなら、神を知らなければならないし、神についての認識は、神の働きを通して成し遂げられる。結局のところ、神を知りたいと望むなら、神の働きを知らなければならない。つまり、神の働きを知ることが何より重要なのである。三段階の働きが終わるとき、神を証しする者たちの集団、つまり神を知る者たちの集団が作られる。この人たちはみな神についての認識があり、真理を実践することができる。人間性と理知を備え、全員が三段階の救いの働きを知っている。これが最後になし遂げられる働きであり、彼らは六千年にわたる経営の働きの結晶であって、最後にサタンを打ち負かした最も有力な証しである。神を証しできる者は、神の約束と祝福を受けることができ、最後の時に残る集団、神の権威を持ち、神を証しする集団になる。もしかすると、あなたがたの全員がこの集団の一員になれるかもしれない、あるいは半分か、わずか数人だけがそうなるかもしれない。それはあなたがたの意志と追求にかかっている。

墮落した人類は、 受肉した神による救いをさらに必要としている

神が受肉したのは、自身の働きの対象がサタンの霊や肉体を持たない何かではなく、人間、つまり肉体を持ち、サタンに墮落させられた存在だからである。人間の肉体が墮落しているからこそ、神は肉体を持つ人間を働きの対象とした。さらに、人間は墮落の対象なので、神は救いの働きの全段階で、人間を自身の働きの唯一の

対象としている。人間は死すべき存在であり、血と肉から成っているが、人間を救える唯一の存在は神なのである。そこで、自身の働きでよりよい成果が得られるよう、神は働きを行うために、人間と同じ属性を持つ肉とならねばならない。神が働きを行うために受肉しなければならないのはまさに、人間が肉体を持つ存在であり、罪を克服することも、肉体を捨て去ることもできないからである。受肉した神の実質と身分は、人間の実質および身分とまったく異なるものだが、その外見は人間と変わらず、普通の人と同じように見える。受肉した神は普通の人間の生活を送り、その神を見る者は、普通の人間との違いを見いだせない。この普通の外見と普通の人間性は、受肉した神が普通の人間性において神性の働きをするのに十分である。受肉した神の肉体は普通の人間として働きを行うことを可能にし、人々のあいだでの働きを容易にし、さらに、その普通の人間性は、人々のあいだで救いの働きを遂行するのに役立つ。受肉した神の普通の人間性は人間のあいだに多くの混乱を招いたが、そうした混乱は神の働きの成果に影響を与えていない。つまり、受肉した神の普通の肉体による働きは、人間にとってこの上なく有益なのである。たいていの人は受肉した神の普通の人間性を受け入れないが、それでも神の働きは成果を上げることができ、そうした成果は受肉した神の普通の人間性のおかげで達成される。この点に疑問の余地はない。肉における神の働きから、人間は、神の普通の人間性について人間のあいだに存在する観念から受け取る物事の十倍、数十倍のものを得る。そして、そうした観念は最終的に、神の働きに残らず飲み込まれる。また、神の働きが達成した成果、つまり、人間が持つ神についての認識は、人間が神について抱く観念をはるかにしのぐ。神が肉において行う働きは想像もできないし、測りようもない。神の肉体はどの人間の肉体とも異なっているからだ。外見は同じでも、実質は異なっている。神の肉体は、神に関する数多くの観念を人間のあいだに生み出す。しかし、神の肉体はまた、人間が多くの認識を得られるようにする。そして、似たような外見を持つすべての人を征服することさえできる。受肉した神は単なる人間ではなく、人間の外見をもつ神であり、神を完全に把握する、あるいは理解することは誰にもできないからである。目に見えず、触れることもできない神は誰からも愛され、誰からも歓迎される。神が人間の目には見えない、ただの霊であるならば、人間が神を信じることは容易である。人々は自分の想像を自由に働かせ、神の姿として、どんな姿でも好きなものを選び、それに喜んで満足していられる。このように、人々は自分の神が最も好むこと、この神が人に望むことなら何でも、何のとがめもなく行うことができる。さらに、人々は、自分よりも神に忠実で信心深い者は誰もいない、他の人はみな異邦の犬で、神に背いていると信じている。これが、神への信仰が漠然としていて、教義に基づいている人々が求める

ものだと言える。彼らが求めているのはどれも同じようなもので、ほとんど違いがない。これは単に、人々の想像している神の姿が異なっているというだけで、その実質は実際のところ同じなのだ。

人間は、自分の信仰がいかげんなものであっても気に留めず、好きなように神を信じる。これは、誰も妨げることのできない「人間の権利と自由」の一つである。人々は他の誰のものでもない、自分自身の神を信じているからである。これはその人自身の私有財産であって、ほとんど誰もがこうした私有財産を持っている。人間はこの資産を貴い宝とみなしているが、神にとっては、これ以上卑しく無価値なものはない。この人間の私有財産以上に、神への敵対をはっきり示すものはないからである。神が具体的な形態でもって肉となり、人が見て触れることのできる存在になったのは、受肉した神の働きの故である。受肉した神は形のない霊ではなく、人間が見て触れることのできる肉体である。しかしながら、人々が信じる神々のほとんどは、形がなくて曖昧模糊としている、肉体を持たない神である。このように、受肉した神は、神を信じる大半の者たちの敵となり、また同様に、神の受肉という事実を受け入れられない者たちも神の敵となった。人間は考え方や反抗心からではなく、この私有財産のせいで観念にとらわれている。大半の人が死ぬのはこの私有財産のせいであり、人間のいのちを損なっているのは、見ることも触れることもできず、現実には存在しない、この漠然とした神である。人間のいのちが失われるのは、受肉した神のせいではなく、ましてや天の神のせいでもなく、人間が想像で思い描く神のせいである。神が受肉した唯一の理由は、墮落した人間が必要としているからである。人間が必要としているのであって、神が必要としているのではない。神のすべての犠牲と苦しみは人類のためであって、神自身の益のためではない。神には賛否も報奨もない。神はもともと持つもの以外、将来何らかの収穫を得るわけではない。神が人類のために行うこと、人類のために犠牲にすることはすべて、何か大きな報酬を得るためではなく、純粹に人類のためである。受肉した神の働きには想像を絶する困難が数多く伴うが、それが最終的に上げる成果は、霊が直接行う働きの成果をはるかに超える。肉体による働きは多くの困難を伴う。肉体は霊のような偉大な身分を持たないし、受肉した神は霊のような超自然的な業を行えず、ましてや霊と同じ権威など有していない。しかし、この平凡な肉の行う働きの実質は、霊が直接行う働きの実質をはるかに上回る。そしてこの肉自体が、全人類の必要に応えるものなのだ。救われるべき者たちにとって、霊の使用価値は、肉のそれよりはるかに劣る。霊の働きは、全宇宙、すべての山、川、湖、大海に及ぶ。しかし、肉の働きは、神が接するすべての人とより効果的に結びつく。そのうえ、触れることのできる形を持つ神の肉体は、人間に理解しやすく、信頼しやす

く、神についての人間の認識をいっそう深めることができ、神の実際の業の深い印象を残すことができる。霊の働きは神秘に包まれていて、死すべき人間には理解し難く、見ることはそれ以上に難しい。だから、無意味な想像に頼るしかない。しかし、肉の働きは正常で、現実に基づいており、豊富な知恵を含み、人間の肉眼で見ることでできる事実である。人間は神の働きの知恵を直に経験できるから、豊かな想像力を働かせる必要はない。これが受肉した神の働きの正確さと本物の価値である。霊は、人間の目に見えず、想像し難いことしかできない。たとえば、霊による啓示、霊による感動、それに霊の導きなどである。しかし、頭脳を有する人間にとって、こうしたものは何ら明瞭な意味を持たない。こうしたものは感動や、漠然とした意味しかもたらさず、言葉による指示を与えられない。しかしながら、受肉した神の働きは大いに異なる。言葉を用いて正確な導きができるし、明確な意図、目指すべきはっきりとした目標がある。だから、人間は手探りしながら歩きまわる必要がないし、想像力を働かせる必要も、ましてや推測する必要もない。これが肉における働きの明瞭さであって、霊の働きとの大きな違いである。霊の働きは限られた範囲においてのみ適しており、肉の働きに取って代わることができない。肉の働きは、霊の働きよりもはるかに正確な、必要とされる目標と、ずっと現実的で価値ある認識とを人間に与える。墮落した人間にとって最も価値ある働きは、正確な言葉と目指すべき明確な目標を与える働き、そして見て触ることのできる働きである。現実的な働きと時宜にかなった導きだけが人間の嗜好に合う。そして、現実の働きだけが人間を墮落した邪悪な性質から救える。それを成し遂げられるのは受肉した神だけであり、受肉した神だけが、人間をかつての墮落した邪悪な性質から救えるのだ。霊は神に本来備わる実質だが、こうした働きは受肉した神の肉体にしかできない。霊が単独で働きを行なうとすれば、その働きが効果を上げることは不可能だろう——これは明確な事実である。大方の人は、この肉体の故に神の敵になっているが、神が働きを完了するとき、神に敵対する者たちは敵であることをやめるだけでなく、逆に神の証人となる。そうした人たちは神に征服された証人、神の心にかない、神から切り離すことのできない証人になる。神は肉体における働きの重要性を人間に知らしめる。そして人間は、人間の存在意義にとってこの肉体がどれほど重要であるかを知り、人間のいのちの成長に対するその本当の価値を知り、さらにこの肉体が、人間にとって離れることが到底できない、生きるいのちの泉となることを知るだろう。受肉した神の肉体は、本来の神の身分と地位には遠く及ばないし、人間からすると神の実際の地位と相容れないものと思われるだろう。しかし、神の真の姿や身分を持たないこの肉体は、神の霊が直接行うことのできない働きを行える。それが神の受肉の真の意味と価値であり、この意味と価値を人間は理

解し、受け入れることができない。人類はみな神の霊を仰ぎ、神の肉体を見下すが、彼らがどう判断し、どう考えるかに関係なく、この肉体の真の意味と価値は霊のそれをはるかに上回る。もちろん、これは墮落した人類だけに関連することである。真理を求め、神の出現を待ち望むすべての人にとって、霊の働きは感動や啓示、理解不能で想像もできない不思議な感覚、そして、それは偉大で、超越的で、崇めるべきものだが、誰にも達成できず手に入れることのできないものだという感覚しか与えられない。人間と神の霊は、両者のあいだに遠い隔たりがあるかのように、互いを遠くから見ることしかできない。また、人間と神が目に見えない境界で隔てられているかのように、似ることが決してない。実際のところ、これは霊から人間に与えられた幻影である。なぜなら、霊と人間は種類を異にしており、同じ世界で共存することは決してなく、霊には人間的な要素が何もないからである。だから、人間は霊を必要としない。霊には、人間に最も必要な働きを直接行うことができないからである。肉の働きは求めるべき真の目標、明確な言葉、そして、神が現実的で、正常で、謙虚で、普通であるという感覚を人間に与える。人間は神を畏れているかもしれないが、たいていの人は神と心安く付き合える。人間は神の顔を見、神の声を聞くことができるし、遠くから見する必要はない。この肉体は人間にとって近づきやすく、また遠くの不可思議な存在ではなく、見て触れることができる存在だと感じられる。なぜなら、この肉体は人間と同じ世界にあるからである。

肉体において生きるすべての者にとって、性質を変えるには追い求めるべき目標が必要であり、また神を知るには、神の本当の業と神の本当の顔を見る必要がある。この二つは神の受肉した肉体でのみ可能なことであり、いずれも普通の現実の肉体でのみ成し遂げられる。だからこそ受肉が必要なのであり、墮落した全人類がこれを必要としている。人々は神を知る必要があるので、漠然とした超自然的な神の姿を心から消し去らなければならない。そして、墮落した性質を捨て去る必要があるのだから、まずはその墮落した性質を知らなければならない。人間の力だけで漠然とした神の姿を心から消し去ろうとしても、望ましい成果は得られない。人々の心にある漠然とした神の姿を言葉だけで暴いたり、捨て去ったり、一掃したりすることはできない。そうしたところで、これら深く根付いているものを人々から消し去るのは不可能だろう。そうした漠然とした超自然的なものを、実際の神と神の真の姿によって置き換え、人々にそれらを徐々に知らしめることでのみ、目指すべき成果が得られる。人間は、過去に求めていた神が漠然とした超自然なものであることに気づく。この成果を上げられるのは、霊による直接の導きではなく、ましてや特定の個人の教えでもなく、受肉した神なのである。受肉した神が正式に働きを行うとき、人間の観念が露わになる。なぜなら、受肉した神の正常さと現実性は、

人間の想像の中にある漠然とした超自然的な神とは正反対なものだからだ。人間が本来持つ観念は、受肉した神と対比して初めて明らかになる。受肉した神と比較しなければ、人間の観念が明らかになることはない。言い換えれば、現実を引き立て役としなければ、漠然とした物事は明らかにならないのである。言葉によってこの働きを行える者は誰もいない。また、言葉によってこの働きを明確に表現できる者も誰一人いない。神の働きを行えるのは神自身だけであって、他の誰も神に代わってその働きをすることはできない。人間の言語がいかに豊かだろうと、神の現実性と正常さを言い表すことはできない。神が人間のあいだで自ら働き、自分の姿と実在とを完全に示して初めて、人間はより实际的に神を知ることができ、よりはっきり神を見ることができる。肉体を持つ人間には、この成果を上げることができない。もちろん、神の霊もまた、この成果を上げることができない。神は墮落した人間をサタンの影響から救えるが、この働きは、神の霊が直接成し遂げることでないものである。そうではなく、神の霊がまとう人間の肉体、そして受肉した神の肉体だけが成し遂げられるのだ。この肉体は人間であると同時に神であり、正常な人間性を備える一人の人間だが、完全な神性を備えた神でもある。だから、この肉体は神の霊でなく、霊とは大きく異なっているのだが、やはり人間を救う受肉した神自身であって、霊であると同時に肉体でもある。結局、どのような名で呼ばれようと、それはやはり人類を救う神そのものなのである。神の霊は肉体から切り離すことができず、肉の働きは神の霊の働きでもあるからだ。これはただ、この働きが霊の身分を用いて行われるのではなく、肉体の身分を用いて行われるということである。霊が直接行う必要のある働きは、受肉を必要としない。また、肉体が行う必要のある働きは、霊には直接できないものであり、受肉した神だけが可能である。これがこの働きに必要なことであり、また墮落した人間が必要とすることである。神の働きの三段階では、一つの段階だけが霊によって直接行われた。そして残りの二つの段階は受肉した神が実行し、霊が直接行うことはない。霊が行った律法の時代の働きは、人間の墮落した性質を変えることを伴わず、神に関する人間の認識と何の関わりもないものだった。しかしながら、恵みの時代と神の国の時代における、受肉した神の働きは、人間の墮落した性質と神についての認識に関わるもので、救いの働きにとって重要かつ不可欠な一部である。ゆえに墮落した人間には、受肉した神による救い、受肉した神の直接的な働きのほうが必要なのである。人間は、受肉した神による牧養、支え、潤し、滋養、裁き、そして刑罰を必要としており、受肉した神からのさらなる恵みと贖いが必要である。受肉した神だけが人間の心を知る者となり、牧者となり、現実存在する助けとなれる。そのすべてが、現在と過去の両方において受肉が必要とされる所以である。

人間はサタンのせいで墮落したが、神の被造物の中で最高のものである。そのため、人間は神の救いを必要としている。神の救いの対象はサタンではなく人間であり、救われるべきものは人間の肉体、人間の魂であって、悪魔ではない。サタンは神が滅ぼす対象であり、人間は神の救いの対象である。人間の肉体はサタンによって墮落させられているので、まず人間の肉体が救われなければならない。人間の肉体は極めて深く墮落しており、神に敵対するものになっており、公然と神に敵対し、神の存在を否定するまでになっている。この墮落した肉体はまったく手に負えず、肉体の墮落した性質以上に取り扱いにくく、変えにくいものはない。サタンは人間の肉体に入って混乱させ、人間の肉体を使って神の働きを妨害し、神の計画を妨げる。それゆえ人間はサタンとなり、神の敵になった。人間が救われるには、まず征服されなければならない。そのため、神はなそうと意図した働きを行い、サタンと戦うべく、挑戦に立ち上がり、受肉したのだ。神の目的は墮落させられてしまった人間の救いと、自分に反抗するサタンを打ち負かし、滅ぼすことである。神は人間を征服する働きによってサタンを破り、同時に墮落した人類を救う。したがって、それは二つの目的を一度に果たす働きである。神は肉において働き、肉において語り、すべての働きを肉において引き受ける。人間とよりよく交わり、人間をよりよく征服するためである。神の最後の受肉において、神による終わりの日の働きは肉において完結する。すべての人間を種類ごとに分け、自身の経営全体を完結させ、また肉における働きもすべて終わらせる。地上での働きがすべて終わると、神は完全に勝利する。神は肉において働きを行いつつ、人類を完全に征服し、自分のものとしている。これは、神による経営がすべて終わるということではないか。神が肉における働きを終えるとき、サタンを完全に打ち破り、勝利しているので、サタンには、もはや人間を墮落させる機会がない。神が最初に受肉したときの働きは、人間の罪の贖いと赦しだった。そして今、それは人類を征服して完全に自分のものとする働きであり、サタンには働きを行う術がすでになく、完全に敗れ、神が完全に勝利する。これが肉の働きであり、神自身が行う働きである。神による三段階の働きの最初のもは、霊が直接行ったものであり、肉によるものではなかった。しかし、神による働きの三段階のうち、最後の働きは受肉した神が行うもので、霊が直接行うものではない。中間段階の贖いの働きもまた、神が受肉して行った。経営の働き全体を通して最も重要な働きは、人間をサタンの影響から救うことである。主要な働きは墮落した人間を完全に征服することで、それによって、征服された人間の心に本来あった神への畏敬の念を回復し、正常な生き方を送れるようにする。つまり、神の被造物としての正常な生き方である。この働きこそが最も重要で、経営の働きの核心である。三段階にわたる救いの働きのうち、最初の段

階である律法の時代の働きは、経営の働きの核心から遠いものだった。それは救いの働きをわずかに表したにすぎないし、人間をサタンの領域から救う神の働きの始まりではなかった。最初の段階の働きは霊が直接行ったが、それは、律法の下で人間は律法を守ることだけしか知らず、それ以上の真理を知らなかったから、律法の時代の働きには、人間の性質の変化がほとんど関わっておらず、人間をサタンの領域からいかに救うかという働きとは、さらに関係がなかったからである。そのため、神の霊は極めて単純な、人間の墮落した性質とは関係ない段階の働きを終わらせた。この段階の働きは、経営の核心とはほとんど無関係で、人間の救いという正式の働きともあまり関係がなかった。ゆえに、神が受肉して自ら働く必要はなかった。霊の働きはさりげなく行われ、測り難いものであり、人間にとっては非常に恐ろしく、近寄り難いものである。霊は救いの働きを直接行うのに適していないし、人間に直接いのちを施すのにも適していない。人間に最も適しているのは、霊の働きを人間に近い形に変えることであり、それはつまり、最も人間に適しているのは、神が普通の正常な人間になって働きを行うということである。これには、神が受肉して霊に取って代わり、働きを行うことが必要であり、人間にとって、神が働くのにこれ以上ふさわしい方法はない。これら三段階の働きの中で、二つの段階は肉体によって行われたが、その二つの段階は経営の働きの中の肝要な部分である。二度の受肉はそれぞれ補い合うもので、互いを完全に補完する。神による受肉の第一段階は、第二の段階の基礎を敷いたのだが、神の二度の受肉が一つの全体をなし、互いに相容れないものではないと言える。この二つの段階は経営の働き全体にとってまことに重要なものなので、神が受肉した身分においてこの二段階を実行する。こう言ってもいいだろう――神による二度の受肉の働きがなければ、経営の働き全体が停止し、人類を救う働きは空虚な言葉でしかなかっただろう。この働きが重要かどうかは、人間の必要、人間の墮落の現実、サタンの不服従のひどさ、およびサタンによる働きの妨害の深刻さに左右される。この任務にふさわしい者は、その働き手が行う働きの性質と、その働きの重要性によって決まる。この働きの重要性という点で言えば、どのような方法を用いるか、つまり神の霊が直接働きを行うか、それとも受肉した神が行うか、あるいは人間を通して行うかという観点から見て、選択肢から最初に除かれるべきは、人間を通して行う方法である。また働きの性質という点では、霊による働きの性質と肉の働きの性質を比べたとき、霊によって直接なされる働きよりも、肉によってなされる働きのほうが、人間にとってより有益で、多くの利点をもたらすと、最終的に判断される。霊と肉のどちらによって働きを行うべきか決める際、神はこのように考えたのである。各段階の働きには意味と根拠がある。それらは根拠のない想像ではなく、恣意的に行われるものでもな

い。そこにはある種の知恵が働いている。それが神によるすべての働きの背後にある真実である。とりわけ、受肉した神が自ら人間のあいだで働くような偉大な働きにおいては、さらなる神の計画がある。そのため、神の知恵と神の存在全体があらゆる行為、考え、および働きの構想に反映されている。これがより具体的かつ体系的な神のありかたである。こうした緻密な考えや構想は人間にとって想像し難く、信じることも難しく、またそれ以上に、知ることが困難である。人間による働きは一般的な原則に沿って行われ、それは人間にとって極めて満足のゆくものだ。しかし、神の働きと比べると、あまりに大きな隔たりがある。神の業は偉大で、神の働きは壮大な規模を誇っているが、その陰には、人間には想像もできない数多くの綿密な計画や工夫がある。神の働きの各段階は原則に沿って行われるだけでなく、人間の言語では表現できないことが数多く含まれている。そしてそれらは、人間には見えないものである。霊の働きであろうと、受肉した神の働きであろうと、いずれも神の働きの計画を含んでいる。神は無意味に働きをせず、取るに足りない働きもしない。霊が直接働くとき、そこには神の目標がある。また神が働きのために人間になるとき（つまり外形を変えるとき）、そこにはさらに多くの神の目標がある。そうでなければ、どうして進んで身分を変えるだろう。そうでなければ、卑しく見なされ迫害される人に、どうして進んでなるだろう。

受肉した神の働きはこの上なく有意義である。それは働きについて語られ、最終的に働きを完結させるのは受肉した神であって霊ではない。神はいつか地上に来て、人間に姿を見せ、誰一人残すことなく人類全体を自ら裁き、一人ひとり試みると信じる人がいる。このように考える者は、この受肉の働きの段階を知らない。神は人間を一人ひとり裁きはしないし、一人ずつ試みもしない。それは裁きの働きではない。人類の堕落はどれも同じではないか。人類の実質はすべて同じではないか。裁かれるのは人間の堕落した実質、サタンのせいで堕落した人間の実質、そして人間のあらゆる罪である。神は些細で取るに足らない人間の過ちを裁かない。裁きの働きは代表的なものであり、特定の誰かのために行われるものではない。そうではなく、この働きでは、一群の人々が全人類を代表して裁きを受ける。受肉した神は一群の人々に自ら働きかけることにより、自身の働きを用いて人類全体の働きを代表し、その後、その働きは徐々に広まる。裁きの働きもそのように行われる。神は特定の人や特定の人を裁くのではなく、人類全体の不義を裁く――例えば、神への敵対、神に対する不遜、神の働きの妨害などである。裁かれるのは人類による神への敵対の実質であって、この働きが終わりの日の征服の働きである。人間が目撃する受肉した神の働きと言葉は、終わりの日に行われる大きな白い玉座の前での裁きの働きであり、これは過去に人間が着想したものだが、受肉した神が現

に行っている働きこそまさに、大きな白い玉座の前での裁きなのである。今日の受肉した神は、終わりの日に人類全体を裁く神である。この肉体と神の働き、言葉、そして性質全体が神の総体である。受肉した神による働きの範囲は限られているし、宇宙全体に直接関わるものではないが、裁きの働きの実質は、全人類に対する直接の裁きであって、中国の選民のためだけでも、少数の人のためでもない。受肉した神の働きの間、この働きの範囲は全宇宙に及びはしないが、全宇宙への働きを代表しており、受肉した肉体による働きの範囲内でその働きを終えた後、神は直ちにこの働きを宇宙全体に広める。それはちょうど、イエスの福音が彼の復活と昇天の後、全宇宙に広まったのと同じである。霊の働きであろうと、あるいは肉の働きであろうと、それは限られた範囲内で実行される働きだが、宇宙全体への働きを代表している。終わりの日、神は受肉した身分において現れ、それによって自身の働きを行うが、受肉した神は、大きな白い玉座の前で人間を裁く神である。霊であるか肉体であるかにかかわらず、裁きの働きを行うのは、終わりの日に人類を裁く神である。これは、神の働きによって規定されたことであって、神の外見やその他の要素によって決まるものではない。人間はこうした言葉について観念を抱いているが、受肉した神が全人類を裁き、征服することは誰も否定できない。人間がそれをどう考えようと、事実は結局のところ事実である。「働きは神によってなされるが、その肉体は神ではない」とは誰も言えない。これは戯言に過ぎない。この働きは、受肉した神以外にはできないからである。この働きはすでに完了しているのだから、それに続き、神による人間の裁きの働きが再度出現することはあり得ない。二度目に受肉した神は経営全体の働きをすでにすべて完結させており、神の働きの第四段階というものはない。裁かれるのは人間、すなわち肉体を持つ墮落した人間であり、直接裁かれるのはサタンの霊ではないのだから、裁きの働きは霊の世界ではなく、人間のあいだで行われる。人間の肉体の墮落を裁くことについては、受肉した神以上にふさわしい者はおらず、その資格がある者も神以外にいない。仮に神の霊が直接裁いたならば、それはすべてを含むものではないだろう。そのうえ、そうした働きは、人間にとって受け入れがたいものだったろう。なぜなら、霊は人間と直接会うことができないからであり、そのため効果は即座に上がらず、まして人間が神の侵しがたい性質をより明確に見ることはできないだろう。受肉した神が人類の墮落を裁かなければ、サタンを完全に打ち負かすことはできない。受肉して普通の人間性を備えた神は、人間の不義を直接裁くことができる。これが神本来の聖さと非凡さのしるしである。人間を裁く資格は神だけにあり、また神はその地位にいる。神には真理と義があり、ゆえに人間を裁くことができるからである。真理と義のない者は、他人を裁くのにふさわしくない。この働きが神の霊によって行われ

たなら、サタンに勝利したことにはならないだろう。霊は本来、死すべき者たちよりも高い地位にあり、神の霊は本質的に聖く、肉体に優る。仮にこの働きを霊が直接行ったならば、人間の不服従を残らず裁くことができず、人間の不義をすべて露わにすることもできないだろう。裁きの働きもまた、神に関する人間の観念を通して行われ、人間は霊について何の観念も抱いたことがないからである。そのため霊は、人間の不義をよりよく暴くことができないし、まして、そうした不義を完全に明らかにすることもできない。受肉した神は、神を知らないすべての者の敵である。人間の観念と神への敵対を裁くことで、神は人類のあらゆる不服従を明らかにする。受肉した神の働きの成果は、霊の働きよりも明らかである。そのため、全人類の裁きは霊が直接行うのではなく、受肉した神の働きなのである。受肉した神は、人間が目で見えて触れることができる。また、受肉した神は人間を完全に征服できる。人間は受肉した神との関係の中で、敵対から従順、迫害から受容、観念から認識、そして拒絶から愛へと進化する。これが受肉した神による働きの成果である。人間は神の裁きを受け入れることでのみ救われ、また神の口から出る言葉を通してのみ、徐々に神を知るようになり、神に敵対しているあいだに神に征服され、神の刑罰を受けているあいだにいのちの糧を受ける。この働きはどれも受肉した神の働きであって、霊としての身分を持つ神の働きではない。受肉した神の働きは最も偉大で、最も深遠な働きであり、神による三段階の働きの中で最も大事な部分は、二段階にわたる受肉による働きである。人間の甚だしい墮落は、受肉した神の働きにとって大きな障害である。とりわけ、終わりの日の人々に対する働きは極めて困難で、その環境は敵意に満ちており、どの種類の人々の素質もまことに乏しい。しかし、この働きの終わりには、滞りなく望ましい結果を得る。これが肉の働きの成果であり、この成果は霊の働きの成果よりも説得力がある。神による三段階の働きは、肉において完結する。そしてそれらは、受肉した神によって完結しなければならない。最も重要かつ肝要な働きは肉においてなされ、人間の救いは神が受肉して自ら行わなければならない。人類はみな、受肉した神は人間と関係なさそうだと感じているが、実際には、この肉体こそが、人類全体の運命と存在に関わっているのだ。

神の働きのどの段階も人間のために実行され、いずれも全人類を対象とする。それは肉における神の働きだが、それでも全人類を対象とする。神は全人類の神であり、すべての被造物とそうでないものの神である。受肉した神の働きは範囲が限られており、この働きの目的も限られているが、神は働きを行うために受肉するたび、自身の働きの対象として極めて代表的なものを選ぶ。神は単純で平凡な集団を働きの対象とはせず、肉における働きの代表となれる人々の集団を選ぶ。この集団

が選ばれるのは、神の肉における働きの範囲が限られているからであり、神の受肉した肉体のために特に用意され、神の肉における働きのために特に選ばれる。神が働きの対象を選ぶのは、根拠のないことではなく、原則に沿ってなされる。働きの対象は、肉における神の働きに有益なものでなければならず、人類全体を代表でなければならない。たとえば、ユダヤ人はイエス自身による贖いを受け入れる中で、人類全体を代表することができた。また、中国人は受肉した神自身による征服を受け入れる中で、人類全体を代表できる。ユダヤ人が人類全体を代表したことには根拠があり、中国人が神自身による征服を受け入れる中で人類全体を代表することにも根拠がある。ユダヤ人のあいだで行われた贖いの働き以上に贖いの意義を示すものはない。また、中国人のあいだでなされる征服以上に征服の働きの完全性と成功を明らかにするものもない。受肉した神の働きと言葉は、少数の人々の集団にだけ向けられているように見えるが、実際は、この小集団のあいだにおける神の働きは全宇宙の働きであって、その言葉は全人類に向けられたものである。肉における神の働きが終わった後、神に付き従う人々は、自分たちのあいだで神が行った働きを広め始める。肉における神の働きで最もよい点は、神に付き従う人々に正確な言葉と勧告、そして人類に対する具体的な旨を残せることであり、ゆえにその後、神の信者はこの道を受け入れる人に対し、肉における神のすべての働きと全人類への旨をより正確に、より具体的に伝えることができる。受肉した神による人間のあいだでの働きだけが、神が人間と共に存在し、共に生活する事実を真に確立できる。この働きだけが、神の顔を見たい、神の働きを目撃したい、神自身の言葉を聞きたいという人間の願望を満たす。受肉した神は、ヤーウェの後ろ姿だけが人類に示された時代を終わらせ、また、人類による漠然とした神への信仰の時代を終わらせる。とりわけ、最後に受肉した神の働きは、すべての人間により現実的で実践的な美しい時代をもたらす。神は律法と教義の時代を終わらせるだけでなく、さらに重要なこととして、現実的かつ正常な神、義にして聖い神、経営計画の働きを明らかにする神、奥義と人類の終着点を示す神、人類を創り、経営の働きを終わらせる神、そして数千年にわたって隠されていた神を人類に明らかにする。神は漠然の時代を完全に終わらせ、人類全体が神の顔を求めても見つけられなかった時代を終わらせる。神は、人類全体がサタンに仕えた時代を終わらせ、全人類をまったく新たな時代へと完全に導く。これはみな、受肉した神が神の霊の代わって行った働きの結果である。神が肉において働くとき、神に付き従う者たちは、存在するように見えると同時に存在しないように見えるものを、それ以上求めて手探りせず、漠然とした神の旨を推測することをやめる。神が肉における働きを広めるとき、神に付き従う人々は、神が肉において行った働きをすべての宗教、すべての教派に伝え、神

のすべての言葉を全人類の耳に伝える。神の福音を受ける者が聞くことはみな、神の働きの事実であり、人間が自分で見たり聞いたりしたこと、そして事実であって、噂ではない。これらの事実は、神が働きを広める証拠であり、働きを広めるために用いる道具でもある。事実がなければ、神の福音はすべての国、あらゆる場所に伝わらない。事実がなく人間の想像だけであれば、神は決して宇宙全体を征服する働きを行えない。霊は、人間には触れることも見ることもできないものであり、また霊の働きは、神の働きのさらなる証拠や事実を人間に残せない。人間は決して神の本当の顔を見ないだろうし、存在しない漠然とした神をいつまでも信じるだろう。人間は決して神の顔を見ないし、神自身が語る言葉を聞くこともない。結局、人間の想像など虚しく、神の真の顔に取って代われない。神の本来の性質、そして神自身の働きを、人間が真似ることはできない。目に見えない天の神とその働きは、受肉した神が人間のあいだで自ら働いて初めて地上にもたらされる。これが、神が人間に姿を現す最も理想的な方法であり、この方法によって人間は神を見て、神の真の顔を知るようになる。そして、これは受肉していない神には不可能なことだ。神は自身の働きをすでにこの段階まで実行しているので、その働きはすでに最高の結果を生み出しており、完全な成功である。神自身の肉における働きは、その経営全体の働きをすでに九十パーセント完了させている。この肉体は、神によるすべての働きによき始まりをもたらし、また神によるすべての働きを要約しており、神によるすべての働きを広め、この働きのすべてに最終の周到な補足をした。したがって、別の受肉した神が第四段階の働きを行なうことはなく、第三の受肉した神による不思議な働きも存在しない。

肉における神の働きの各段階は、その時代全体の働きを代表し、人間の働きのように特定の期間を代表するものではない。だから、神による最後の受肉の働きが終わったからといって、神の働きが完全に終了したということではない。肉における神の働きは、時代全体を代表するものであって、神が肉において働いた期間だけを代表するものではないからだ。これは、神は受肉している期間に、その時代の働きをすべて終え、それからその働きがあらゆるところに広まるということに過ぎない。受肉した神は自身の職分を終えた後、将来の働きを神に付き従う人々に託す。このようにして、神によるその時代全体の働きが途絶えることなく続けられる。受肉した時代全体の働きは、それが全宇宙に広まって初めて完了したとみなされる。受肉した神の働きは新たな時代を開き、神の働きを続ける者たちは、神に用いられる者たちである。人間による働きはみな、受肉した神の職分の中にあり、その範囲を超えることはできない。受肉した神が働きを行うために来ていなければ、人間は古い時代を終わらせることができず、新たな時代を開くこともできないだろう。人

間による働きは、人間に可能な本分の範囲内に留まるものであり、神の働きを表すものではない。受肉した神だけが、なすべき働きを完了しに来ることができるのであり、神を除き、神に代わってその働きを行える者は誰一人いない。もちろん、わたしが述べているのは、受肉の働きのことである。この受肉した神は、まず人間の観念に合致しない働きの一段階を行い、その後はさらに別の、人間の観念に合致しない働きを行う。働きの目的は人間を征服することである。ある意味で、神の受肉は人間の観念に合致せず、それに加え、神は人間の観念に合致しない働きを行うので、人間は神についてますます批判的な見方をするようになる。神はただ、神について無数の観念を抱く人々のあいだで、征服の働きを行う。人間がどのように神を扱おうと、ひとたび神が自身の職分を果たすと、人々はみな神の支配の対象になっている。この働きの事実、中国人のあいだで反映されるだけでなく、人類全体がいかに征服されるかをも表している。これらの人々になされた成果は、人類全体になされる成果を予告するものであり、神が将来行う働きの成果は、それらの人々に対する成果さえも上回る。肉における神の働きは、鳴り物入りで宣伝されるようなものではないし、不明瞭なものに取り巻かれているものでもない。それは現実かつ実際のものであって、一足す一は二といったような働きである。それはすべての人から隠されているものではなく、誰かを欺くものでもない。人々が見るのは本物の現実的な物事であり、人間が得るものは、本当の真理と認識である。働きが終わると、人間は神について新たな認識を得、真に追い求める者は、もはや神に関して何の観念も持たない。これは、中国の人々に対する神の働きの成果というだけでなく、人類全体を征服する神の働きの成果を表している。と言うのも、人類全体を征服する働きにとって、この肉体、この肉体の働き、そしてこの肉体にまつわるすべての事柄以上に有益なものはないからである。それらは今日の神の働きに有益で、将来の神の働きにも役立つ。この肉体は人類全体を征服し、人類全体を自分のものとする。人類全体が神を見、神に従い、神を知るにあたり、これ以上に優れた働きはない。人間が行う働きは限られた範囲のものに過ぎないが、神が働きを行うときは、特定の人に語りかけるのではなく、人類全体、そして神の言葉を受け入れるすべての人に語りかける。神が告げる終わりは全人類の終わりであって、特定の人々の終わりではない。神は誰かを特別扱いすることも、不当に罰することもせず、人類全体のために働き、彼らに向かって話しかける。したがって、この受肉した神は、すでに人類全体を種類に応じて選り分け、人類全体を裁き、人類全体にふさわしい終着点を整えている。神は働きを中国でのみ行っているが、実際は、すでに全宇宙の働きを決意している。神は、言葉を発して一步一步采配するのに先立ち、自分の働きが人類全体に広まるのを待つわけにはいかない。それでは遅すぎはしないか。

今、神は将来の働きを前もって完了させることが完全に可能である。働いているのは受肉した神なのだから、無限の働きを限られた範囲内で行い、その後、人間が尽くすべき本分を尽くすようにさせる。これが、神の働きの原則である。神は一時的に人間と共に生活できるだけで、時代全体の働きが完了するまで人間と共にいることはできない。それは、神が自分の働きを前もって予言する神だからである。後に、神は言葉によって人類全体を種類に応じて選り分け、人類は神の言葉に沿って、神の順を追った働きに入る。免れる者は誰一人おらず、誰もがその通りに実践しなければならない。ゆえに将来、時代は言葉によって導かれるのであって、霊によって導かれるのではない。

肉における神の働きは、肉において行われなければならない。仮に霊が直接行ったとしても、それでは何の成果も得られないだろう。たとえ霊が行ったとしても、その働きはこれといった意味をもたず、結局は説得力を欠くだろう。被造物はみな、創造主の働きが有意義かどうか、それが何を表すのか、何が目的なのか、神の働きは権威と知恵に満ちたものかどうか、また、最高の価値と意義を持つものかどうかを知りたいと願う。神が行う働きは人類全体の救いのため、サタンを打ち負かすため、そして万物のあいだで自身の証しをするためになされる。したがって、神が行う働きには大きな意義があるはずだ。人間の肉体はサタンによって墮落させられており、何も見えなくさせられていて、まことに深く傷つけられた。神が自ら肉において働く最も根本的な理由は、救いの対象が肉体を持つ人間であり、サタンもまた人間の肉体を用いて神の働きを妨げているからである。サタンとの戦いは、実は人間を征服する働きであり、同時に、人間はまた、神による救いの対象でもある。このように、受肉した神の働きは不可欠なのだ。サタンは人間の肉体を墮落させ、人間はサタンの化身となり、神に打ち負かされるべき存在となった。このように、サタンと戦って人類を救う働きは地上で行われ、神はサタンと戦うために人間にならなければならない。この働きは極めて実際的なものである。神が肉において働いているとき、実際は肉においてサタンと戦っている。肉において働くとき、神は霊の領域で働きを行っており、霊の領域における働き全体を地上で現実のものにする。征服される者は神に逆らう人間であり、打ち負かされる者はサタンの化身（もちろん、これも人間である）、神に敵対する者であり、最終的に救われる者もまた人間である。このように、神が被造物の外形を持つ人間になることがますます必要であり、それによってサタンと真の戦いを繰り広げること、神に対して不服従で、神と同じ外形を持つ人間を征服すること、そして神と同じ外形を持ち、サタンによって傷つけられた人間を救うことができる。神の敵は人間であり、神の征服の対象は人間であり、神の救いの対象も神の被造物たる人間である。そのため、神は

人間にならなければならない。そのほうが、ずっと働きをしやすくなる。神はサタンに勝利し、人類を征服し、そのうえ、人類を救うことができる。この肉は普通で現実のものであるが、神はありふれた肉体ではない。神は人間に過ぎない肉体ではなく、人間でありながら神性を有する肉体なのだ。これが神と人間との違いであり、神の身分のしるしである。神が意図する働きを行い、肉における神の職分を果たし、人間のあいだで働きを完全に成し遂げられるのは、このような肉体だけである。そうでなければ、神による人間のあいだでの働きは、いつも空虚で不完全なものとなる。神がサタンの霊と戦って勝利を収めることができても、それでは墮落した人間の古い本性は決して解消されないし、神に不服従で敵対する者たちが神の支配に心から服従することもあり得ない。つまり、神は決して人類を征服できず、人類全体を得られないということである。地上における神の働きが完了しなければ、神の経営は決して終わらず、人類も誰一人安息に入れない。神がすべての被造物と共に安息に入れないければ、このような経営の働きに成果はなく、結果として神の栄光が消えてしまう。神の肉体には何の権威もないが、神が行う働きは成果を上げることになる。これが神の働きの明確な方向である。神の肉体に権威があるかどうかにかかわらず、神自身の働きを遂行できるなら、それは神自身である。この肉体がどれほど普通で平凡なものであっても、神がなすべき働きを行えるのは、この肉体が単なる人間ではなく、神だからだ。この肉体が人間にはできない働きを行えるのは、その内なる実質が人間のそれと異なっているためであり、それが人間を救えるのは、その身分が人間とは異なるからである。この肉体が人類にとって極めて重要なのは、それが人間で、またそれ以上に神であり、通常の間にはできない働きを行うことができ、地上で共に暮らす墮落した人間を救うことができるからである。神は人間と同じ外見を持つが、受肉した神はいかなる重要人物よりも人間にとって重要である。それは、神の霊には不可能な働きを行い、神自身について神の霊よりも優れた証しができ、神の霊よりも完全に人類を得ることができるからだ。その結果、この肉体は普通で平凡であっても、その人類への貢献と、人類の存在に対する意義により、極めて尊いものとなる。そしてこの肉体の真の価値と意味は、誰にとっても計り知れないものである。この肉体は直接サタンを滅ぼせないが、神は自身の働きによって、人類を征服してサタンを打ち負かし、完全に支配下に置くことができる。神がサタンを打ち負かして人類を救えるのは、受肉したからである。神は直接サタンを滅ぼしはしないが、その代わりに肉となり、サタンによって墮落させられた人類を征服する働きを行う。このようにして、神は自身の被造物のあいだで自分を証しでき、墮落した人間をよりよく救える。受肉した神がサタンを打ち負かすことは、神の霊が直接サタンを滅ぼすよりも偉大な証しであり、より説得力が

ある。受肉した神は、人間が創造主を知る手助けをよりよく行うことができ、自身の被造物のあいだでよりよく自分自身を証しできる。

神が宿る肉の本質

最初に受肉した神は地上で三十三年と半年にわたって生き、三年半のあいだだけ自身の職分を果たした。働きをしていた際も、また働きを始める前も、イエスは普通の人間性を有していた。普通の人間性を三十三年と半年のあいだ宿したのである。最後の三年半のあいだ、自分が受肉した神であることをイエスは明らかにした。また自身の職分を果たし始める前は、普通の正常な人間性を示し、神性の兆候は何も示さなかった。公に職分を果たし始めた後になって初めて、イエスの神性が示されたのである。最初の二十九年間の生活と働きは、イエスが本当の人間、人の子、および肉体を持つ人であることを立証した。イエスの職分は、彼が二十九歳になってようやく本格的に始まったからである。「受肉」というのは、神が肉において現れることであり、神はその肉の姿で、自分の創った人間のもとで働く。さて、神が受肉するには、まず肉の体、普通の人間性を備えた肉体でなくてはならず、それが最も基本的な前提条件である。実際、神が受肉するというのは、神が肉体において生き、働くということ、その実質において肉となり、一人の人間になるということの意味する。神の肉における生活と働きは二つの段階に分けられる。第一の段階は職分を始める前の生活である。神は普通の人間の家族において暮らし、ごく普通の人間性を有し、人間生活の通常の道徳や法に従い、人間が必要とする普通の物事（食物、衣服、睡眠、住まい）を必要とし、普通の人間の弱さ、普通の人間の感情を持ちつつ生活を送る。つまり、この最初の段階で、神は神性においてではなく完全に普通の人間として、あらゆる普通の人間的な活動を行いながら生きる。第二の段階は、職分を果たし始めた後の生活である。神はいまだ普通の人間の外形をまといつつ、通常の人間性において暮らし、超自然的なしるしは表向き何も示さない。しかし、純粋に自身の職分のために生きており、この期間の普通の人間性は、神性の普通の働きを維持するためにのみ存在する。そのころには、普通の人間性が職分を果たせるほどに成熟しているからである。そのため、生活の第二段階では、普通の人間性において職分を果たすことになり、それは通常の人間性と完全な神性を兼ね合わせた生活である。第一の段階で神がまったく普通の人間性において生活を送るのは、その人間性がいまだ神性の働き全体を維持することができず、依然として成熟していないからである。人間性が成熟し、自身の職分を担えるようになって初めて、自身が果たすべき職分を果たし始めることができるのだ。神は肉体を持

つ者として成長し、成熟する必要があるので、その生活の第一段階は普通の人間性におけるものである。第二段階に入ると、人間性が働きに着手し、職分を果たせるようになっているので、受肉した神が職分を果たしながら送る生活は、人間性と完全な神性を兼ね備えたものである。受肉した神が出生の瞬間から本格的に職分を果たし、超自然的なしるしや不思議を示し始めたなら、肉体の本質を一切持たないだろう。ゆえに、受肉した神の人間性は、肉体の本質のために存在するのである。人間性なくして肉は存在しない。また、人間性のない人は人間ではない。このように、神の肉の人間性は、受肉した肉に固有の性質である。「神は肉となっても完全に神であり、まったく人間ではない」と言うのは冒瀆である。なぜなら、このような発言はまったく存在せず、受肉の原則に反しているからである。神は職分を始めた後も、働きを行なうときは人間の外皮をまといつつ、依然として神性の中で生活する。ただその際、神の人間性は、神性が普通の肉体の中で働きを行えるようにするという目的だけを果たす。ゆえに働きを行うのは、人間性に宿る神性なのである。人間性ではなく神性が働きを行っているわけだが、その神性は人間性の中に隠れている。要するに、神の働きは完全な神性によってなされるのであって、人間性によってなされるのではない。しかし、働きを行うのは神の肉である。このような神は人間であり、同時に神であると言えるだろう。神は肉において生きる神となり、人間の姿と人間の本質を持つが、同時に神の本質も備えているからである。神の本質を備えた人間だからこそ、被造物であるすべての人間の上に立ち、神の働きを行えるどの人間よりも上位に位置する。そのため、このような人間の外形をまとうすべての者たちの中で、また人間性を有するすべての者たちの中で、神だけが受肉した神自身なのである。他はみな、被造物たる人間である。受肉した神と人間の双方に人間性があるものの、被造物である人間には人間性しかない。ところが、受肉した神は違う。受肉した神は、その肉体において人間性だけでなく、さらに重要なこととして、神性をも備えている。神の人間性は肉体の外見や毎日の生活において見ることができる。しかしその神性は感知しにくい。神の神性は人間性があって初めて表され、人々が想像するほど超自然なものではないので、人々がそれを見るのは極めて難しい。今日でさえ、人々が受肉した神の真の本質を理解するのは困難を極める。わたしがこれほど長く話したあとですら、あなたがたの大半にとってはいまだ謎であるはずだ。実を言うと、これはとても単純な問題である。神が肉になったのだから、その本質は人間性と神性が組み合わさったものである。この組み合わせこそが神自身、地上における神自身と呼ばれるのだ。

イエスが地上で送った生活は、肉体を持つ人間の普通の生活だった。彼は自身の肉体の正常な人間性において生きたのである。働きを行う、言葉を語る、あるいは

病人を癒やして悪霊を追い払うといったイエスの権威の大半は、彼が自身の職分を始めるまでは現れなかった。職分を果たす前の二十九歳までの生活は、イエスが普通の肉体を持つ人間に過ぎなかったことを十分証明している。そのため、そして、イエスがまだ職分を果たし始めていなかったため、人々はイエスに何の神性も見出さず、普通の人間、平凡な人間以上のものは目にしなかった——当時、イエスはヨセフの息子だと信じる人がいたように。人々は、イエスは普通の人間の息子だと思い、神の受肉した肉体であるとは知りようもなかった。職分を果たしながら、多くの奇跡を行ったときでさえも、たいていの人は、あれはヨセフの息子だと言った。イエスは普通の人間の外形をしたキリストだったからである。イエスの普通の人間性と彼の働きはいずれも、最初の受肉の意義を満たすために存在した。それにより、神が完全に肉へと到来したこと、そしてまったく普通の人間になったことが証明されたのである。働きを始める前の普通の人間性は、イエスが普通の肉体を持つ人間だったことの証拠である。また、イエスが後になって働きを行ったことも、通常の肉体を持つ人間だったことを証明している。なぜなら、彼は普通の人間性を持つ肉体において、しるしや不思議を行い、病人を癒やし、悪霊を追い払ったからである。イエスが奇跡を行えたのは、その肉体が神の権威を帯びており、神の霊がまとうものだったからである。イエスにこの権威があったのは、神の霊のためであり、イエスが肉体を持つ人間ではなかったということではない。病人を癒やして悪霊を追い払うことは、イエスが自身の職分において行う必要のある働きであり、人間性に隠された彼の神性の表れだった。どのようなしるしを示そうと、どのように自身の権威を表そうと、イエスはやはり普通の人間性において生き、普通の肉体を持つ人間だったのだ。十字架の上で死んだ後に復活するまで、イエスは普通の肉の中に宿っていた。恵みを授け、病人を癒し、悪霊を追い払うことはどれも彼の職分の一部であり、すべて普通の肉体において行われた働きである。十字架へと向かう前、イエスは何をしているときであっても、決して普通の人間の肉体を離れなかった。イエスは神自身であり、神自身の働きを行ったが、受肉した神だったので、食物を食べ、衣服を着、普通の人間と同じものを必要とし、普通の人間の理知、普通の人間の思考を持っていた。これはみな、イエスが普通の人間だったことの証拠であり、受肉した神の肉体は普通の人間性を持つ肉体であって、超自然的ではないことを示している。イエスの務めは神による最初の受肉の働きを完了すること、最初の受肉が果たすべき職分を果たすことだった。受肉の意義は、平凡な普通の人間が神自身の働きを行うということであり、つまり、神が人間性において神性の働きを行い、それによってサタンを打ち負かすということである。受肉とは、神の霊が肉になる、つまり、神が肉になるということであり、肉体が行う働きは、肉において

実現し、肉において表される霊の働きである。神の肉体以外には誰も、受肉した神の職分を果たすことはできない。つまり、他の誰でもなく、受肉した神の肉体だけが、つまりこの普通の人間性だけが、神性の働きを表せるのだ。最初に到来した際、二十九歳になるのに先立ち、神が普通の人間性を有していなければ、つまり生まれてすぐに奇跡を行うことができたなら、話せるようになってすぐに天の言語を話せたなら、また地上に初めて着いた瞬間、すべての世俗的な物事を理解し、すべての人の考えや意図を知ることができたなら、そのような人は普通の人間とは呼ばれなかっただろうし、そのような肉が人間の肉体と呼ばれることもなかったはずだ。仮にキリストがそうだったとすれば、神の受肉の意味と本質は失われるだろう。キリストが普通の人間性を有していることは、肉体を持つ受肉した神であることを示している。また、キリストが普通の成長過程を経ることは、普通の肉体であることをさらに証明している。そのうえ、キリストの働きは、キリストが神の言葉であり、神の霊であり、それが肉になったことを十分証明している。神が肉になるのは、それが働きに必要なからである。言い換えると、その段階の働きは肉体において、普通の人間性においてなされる必要があるからである。これが「言葉は肉となる」、「言葉は肉において現れる」ための前提条件であり、神による二度の受肉の背後にある真相である。イエスは生涯を通じて奇跡を行い、地上における働きが終わるまでは人間性の兆候を見せず、普通の人間が必要とするもの、弱さ、または人間的な感情がなく、生活の基本的な必需品を必要とせず、普通の人間のような考えもなかったと、人々は思っているかもしれない。そうした人たちは、イエスが超人的な頭脳、超越した人間性だけを持つと想像している。さらに、イエスは神なのだから、普通の人間のように考えたり暮らしたりすることはなく、普通の人、正真正銘の人間だけが、普通の人間のように考え、普通の人間のように生きるのだと考えている。これらはみな人間の発想、人間の観念であって、そうした観念は神の働きの本来の意図に反している。普通の人間の考えは、普通の人間の理知と普通の人間性を支え、普通の人間性は普通の肉の機能を支える。そして、普通の肉の機能は、肉における普通の生活をすべて可能にする。そうした肉において働くことでのみ、神は受肉の目的を果たすことができる。受肉した神が肉の外形だけは持つが、普通の人間のように思考しないとしたら、この肉は人間の理知を持たず、ましてや本物の人間性など持たないだろう。人間性を欠いたそうした肉が、どうして受肉した神が果たすべき職分を成就できようか。普通の精神は人間生活のあらゆる面を支える。普通の精神がなければ、それは人間ではないだろう。つまり、普通の考え方をしない人は精神を病んでおり、人間性がなく神性だけを持つキリストは、神の受肉した肉体だとは言えないのである。では、神の受肉した肉体に普通の人間性がない

ということがどうしてあり得ようか。キリストに人間性がないと言うのは、冒瀆ではないか。普通の人間が行う活動はどれも、普通の人間の頭脳の働きに依存している。それがなければ、人間は異常な振る舞いをする。黒と白、善と悪の違いを区別することさえできないだろう。また、人間の倫理観や道德律もないはずだ。同様に、受肉した神が普通の人間のように考えなかったとしたら、それは本物の肉体、普通の肉体ではない。そうした思考しない肉体が神性の働きを担うことはできないだろう。普通の肉体の活動を正常に行えず、まして地上で人間と共に暮らすことなどできないはずだ。そのため、神の受肉の意義、神が肉に到来することの本質は失われていたに違いない。受肉した神の人間性は、肉における普通の神性の働きを維持するために存在する。神の普通の人間的な思考が、その普通の人間性とあらゆる普通の身体的活動を維持する。神が普通の人間的な思考をするのは、神が肉において行うすべての働きを支えるためだと言えるだろう。この肉体に普通の人間の精神がなければ、神は肉における働きができず、肉においてすべきことを成就できないだろう。受肉した神は普通の人間の頭脳を持つが、その働きに人間の思考が混ざり込むことはない。人間性と頭脳を持ち合わせるという前提条件の下、神は普通の頭脳でもって人間性における働きを行うが、普通の人間の考えを行使することでその働きを行うのではない。神の肉体がどれほど崇高な考えを持とうと、神の働きが論理や思考に汚されることはない。つまり、神の働きは肉体の頭脳から生まれるのではなく、人間性における神性の働きの直接的な表現なのである。神の働きはすべて成就すべき職分であり、そのどれも頭脳の産物ではない。たとえば、病人の癒し、悪霊祓い、そして磔刑は、イエスの人間としての頭脳の産物ではなく、人間の頭脳を持つ人にはなし得なかったことである。同様に、今日の征服の働きも、受肉した神が果たすべき職分だが、人間の意志による働きではない。それは、受肉した神の神性が行うべき働きであって、肉体を持つ人間になし得る働きではない。ゆえに、受肉した神は普通の人間の頭脳を持ち、普通の人間性を有していなければならない。なぜなら、普通の頭脳を持つ人間性において、自身の働きを行わなければならないからである。これが受肉した神の働きの本質、受肉した神の本質そのものである。

自身の働きを行う以前、イエスは普通の人間性において暮らすに過ぎなかった。誰一人、イエスが神であるとは分からなかったし、イエスが受肉した神であることに気づかなかった。人々はただ、完全に普通の人間であるイエスを知っていたに過ぎない。イエスのまったく平凡な普通の人間性は、神が受肉して肉体になったこと、恵みの時代が受肉した神による働きの時代であり、霊による働きの時代ではないことの証拠である。これは、神の霊が完全に肉において現れたこと、また神が受肉した時代には、その肉体が霊によるすべての働きを行うことを証明した。普通の

人間性を持つキリストは、霊が顕現した肉体であり、普通の人間性、普通の理知、人間の思考を有している。「顕現」とは、神が人間になること、霊が肉になることである。わかりやすく言えば、神自身が普通の人間性を持つ肉体に宿るということで、それによって神の神性の働きを表す——これが顕現、または受肉の意味である。最初の受肉の間、神が病人を癒し、悪霊を追い払うことが必要だったのは、神の働きが贖うことだったからである。全人類を贖うべく、神は憐れみをもって赦す必要があった。イエスが十字架にかけられる前にした働きは、病人を癒やし、悪霊を追い払うことだったが、それは罪と穢れから人間を救うことをあらかじめ告げるものだった。当時は恵みの時代だったため、イエスが病人を癒やし、それによってしるしや不思議を示す必要があった。これがその時代の恵みを表すものだった。恵みの時代が、イエスに対する人々のの信仰のしるしである平和、喜び、そして物質的な祝福に象徴される恵みを施すことを中心にしていたためである。これはつまり、病人を癒し、悪霊を追い払い、恵みを授けることが、恵みの時代におけるイエスの肉に、生まれながらに備わった能力だったということである。そしてそれが、霊が肉において実現した働きだったのだ。しかし、イエスはそうした働きをしている間、肉体の中で暮らしており、その肉体を超越してはいなかった。どのような癒やしの業を行っても、イエスはやはり普通の人間性を備え、普通の人間生活を送った。神が受肉した時代には、肉が霊の働きのすべてを行ったとわたしが言うのは、イエスがどのような働きを行おうと、それは肉においてなされたからである。しかし、その働きのゆえに、人々はイエスの肉体が完全に肉体的な本質を持つとは考えなかった。と言うのも、その肉体は奇跡を行うことができ、また特別な場合には、肉を超越することができたからである。もちろん、例えば四十日間にわたる試みや、山上の変容などの出来事はみな、イエスが自身の職分を始めた後に起きたことである。ゆえに、イエスにおいては、神の受肉の意義が完結しておらず、部分的に成就したに過ぎない。働きを始める前、イエスが肉において送った生活は、どの点から見てもまったく普通のものだった。働きを始めた後は、人間の外形だけを保った。イエスの働きは神性の表れだったので、通常 of 肉の機能を超えていた。結局のところ、神の受肉した肉体は血と肉から成る人間とは違っていたのである。もちろん日々の生活では、食物や衣服、睡眠、住まいを必要とし、あらゆる普通の必需品を必要とするとともに、普通の人間の理知を持ち、普通の人間のように考えた。人々はそれでも、イエスの行った働きが超自然的だったことを除いて、イエスを普通の人間と見た。実際、イエスは何を行おうと、普通の正常な人間性において生きており、働きを行うときもその理知はひとときわ正常で、思考は他の普通の人間以上に明瞭だった。受肉した神は、このような思考と理知を持つ必要があった。と言う

のも、神性の働きは、ごく普通の理知を備え、思考が明瞭な肉体によって表現される必要があったからである。そうして初めて、神の肉は神性の働きを表せたのである。地上で暮らした三十三年半の期間を通し、イエスは普通の人間性を保っていたが、三年半にわたる職分の際に行った働きのせいで、人々はイエスが極めて超越的で、以前よりはるかに超自然的だと考えた。実際には、イエスの普通の人間性は職分を始める前も後も変わらなかった。イエスの人間性はずっと同じだったのだが、職分を始めた前後における相違のために、イエスの肉体について二つの異なる見方が生じた。人々が何を考えようと、受肉した神はずっと本来の普通の人間性を保っていた。神は受肉して以来、肉において生きたものの、その肉は普通の人間性を備えていたからである。イエスが自身の職分を果たしていようといまいと、その肉体の普通の人間性を取り除くことはできなかった。人間性こそ肉体の基本的な本質だからである。イエスが職分を果たし始める前、彼の肉体は完全に普通のままで、人間が行うあらゆる普通の活動に携わった。イエスは少しも超自然的な様子を示さず、奇跡的なしるしを何も見せなかった。当時、イエスは神を崇めるごく普通の人間に過ぎなかった。とは言え、その追求は他の誰よりも誠実で、真摯なものだった。イエスのまったく普通の人間性はこのように現れていた。職分を果たし始める前、イエスはまったく働きを行わなかったので、誰一人イエスの身分に気づかず、イエスの肉体が他の人のそれと違うとは分からなかった。イエスはたった一つの奇跡も行わず、神自身の働きをほんの少しもしなかったからである。しかし、職分を果たし始めた後も、イエスは普通の人間性の外形を保ち、普通の人間の理知をもって生活していた。だが、神自身の働きを始め、キリストの職分を引き受け、死すべき存在である生身の人間にはできない働きをしたため、人々は、イエスには普通の人間性がなく、身体は完全に普通の肉体ではなく、不完全な肉体なのだと思い込んだ。イエスが行った働きのゆえに、人々は、イエスは普通の人間性を持たない受肉した神だと言った。人々は神の受肉の意味を把握していなかったもので、これは誤った理解である。この誤解は、受肉した神によって表現された働きが神性の働きであり、普通の人間性を持つ肉体によって表されたからである。神は肉をまとい、肉の中で生きた。そして、人間性における神の働きが、その人間性の普通さを曖昧にした。そのため、神には人間性がなく、神性しかないのだと、人々は信じたのである。

最初に受肉した神は受肉の働きを完了させず、神が肉においてなすべき働きの最初の段階を完了させたただけである。ゆえに、受肉の働きを完了させるべく、神は再び肉体に戻り、肉体が持つすべての正常性と現実を生きている。つまり、神の言葉が完全に普通の平凡な肉体において現れ、それにより、肉体においてやり残した働きを完了させようというのである。本質的に、二度目に受肉した肉体は最初のもの

と似ているが、さらに現実的で、最初のものよりいっそう普通である。その結果、第二の受肉の苦しみは最初のそれよりも重いのだが、この苦しみは肉における職分の結果であって、墮落した人間の苦しみとは異なる。これはまた、神の肉体の普通さと現実から生じている。神が完全に普通かつ現実の肉体で職分を果たすため、その肉体は多くの困難に耐えなければならない。その肉体が普通で現実のものであればあるほど、神は自身の職分を果たす中で苦しむ。神の働きはごく普通の肉体、まったく超自然的でない肉体において表される。神の肉体は普通であり、同時に人間を救う働きを担わなければならないので、その苦しみは超自然的な肉体よりもはるかに大きい――この苦しみはみな、神の肉体の現実と普通さに由来する。受肉した二つの肉体が職分を果たしていた際に受けた苦しみから、受肉した肉体の本質が分かる。肉体が普通であればあるほど、神は働きを行う間、大きな苦難に耐えなければならない。働きを行う肉体が現実であればあるほど、人々の観念は厳しくなり、神が多くの危険に遭う可能性は高くなる。それでも、肉体が現実的であればあるほど、また肉体が普通の人間の必要と完全な理知を持っていればいるほど、神は肉における働きにより取り組むことができるようになる。十字架にかけられたのはイエスの肉体、罪の捧げ物としてイエスが捧げた肉体である。普通の人間性を持つ肉体という手段によってイエスはサタンに勝利し、人間を完全に十字架から救った。そして、二度目に受肉した神が征服の働きを行い、サタンを打ち負かすのは、完全な肉体としてである。完全に普通で現実的な肉体だけが征服の働き全体を行い、力強い証しをすることができる。つまり、人間の征服は、受肉した神の現実性と普通さによって効果的になるのであって、超自然的な奇跡や啓示によるのではない。この受肉した神の職分は語ることであり、それによって人間を征服し、完全にすることにある。つまり、肉において実現した霊の働き、および肉の本分は語ることであり、それによって人間を徹底的に征服し、明らかにし、完全にし、淘汰することである。したがって、肉における神の働きが完全に達成されるのは、征服の働きにおいてである。最初の贖いの働きは、受肉の働きの始まりに過ぎなかった。征服の働きを行う肉体は、受肉の働き全体を完了させるだろう。性別について言えば、一度目は男性、二度目は女性であり、これによって神の受肉の意義が完成し、神に関する人間の観念を一掃する。つまり、神は男性にも女性にもなれるのであり、本質的に、受肉した神には性別がないのである。神は男性と女性を造ったが、神に性の区別はない。この段階の働きで、神はしるしや不思議を行わず、それにより、言葉という手段を通して働きの成果が上がる。さらに、その理由は、受肉した神の今回の働きは病人を癒し、悪霊を追い払うためではなく、語ることで人間を征服するためであり、それはつまり、受肉した神の肉体が本来備えている能力

が、言葉を語って人間を征服するものであって、病人を癒やし、悪霊を追い払うものではないということである。普通の人間性における神の働きは、奇跡を行い、病人を癒し、悪霊を追い払うことではなく、語ることである。ゆえに、二度目に受肉した肉体は、一度目よりもずっと普通に見える。人々は、神の受肉が嘘ではないと分かっているが、この受肉した神はイエスの受肉と異なっている。どちらも神の受肉だが、完全に同じではないのである。イエスは普通の人間性、平凡な人間性を有していたが、多くのしるしや不思議を伴っていた。この受肉した神においては、人間の目にしるしや不思議は何も見えず、病人を癒すことも、悪霊を追い払うことも、海の上を歩くことも、四十日間の断食もない。イエスが行ったのと同じ働きを、神は行わないのだ。それは、神の肉体が本質的にイエスのものとはどこか異なるからではなく、病人を癒したり悪霊を追い払ったりすることは、神の職分ではないからである。神は自分の働きを取り壊すこともなければ、自分の働きを妨げることもない。神は自身の実際の言葉で人間を征服するのだから、奇跡で屈服させる必要はなく、ゆえにこの段階は受肉の働きを完了させるためにある。あなたが今日見る受肉した神は、ひとえに肉体であって、超自然的な要素は何もない。他の人々と同じく病気になるし、他の人々同様、食物や衣服を必要とする。つまり、完全に肉体なのである。今回、受肉した神が超自然的なしるしや不思議を行ったなら、病人を癒し、悪霊を追い払ったなら、あるいは一言で殺すことができたなら、どうして征服の働きを行えようか。どうして異邦人の国々に働きを広められようか。病人を癒やし、悪霊を追い払うのは、恵みの時代の働きであり、贖いの働きの第一歩だったが、神が人間を十字架から救った今となっては、神がその働きを行うことはもはやない。病人を癒やし、悪霊を追い払い、人間のために十字架にかけられたイエスと同じ「神」が終わりの日に現れたなら、その「神」は聖書における神の記述と同じで、人間には受け入れやすいかもしれないが、それは本質的に、神の霊ではなく悪霊が人間の肉をまとったものだろう。すでに完成させたことは二度と繰り返さないのが神の働きの原則だからである。したがって、神の二度目の受肉による働きは、最初の働きとは異なっている。終わりの日、神は普通の平凡な肉体で征服の働きを実現する。病人を癒やさず、人間のために十字架にかけられることもなく、ただ肉において言葉を語り、肉において人間を征服する。このような肉のみが神の受肉した肉体である。こうした肉体だけが、肉における神の働きを完了できるのだ。

この段階において、困難を経験していようが、あるいは職分を果たしていようが、受肉した神は受肉の意義を完成させるためにそうしている。なぜなら、今回が神の最後の受肉だからである。神は二回しか受肉できず、三度目はあり得ない。最初の受肉は男性で、二度目は女性であり、そこで神の受肉した姿は人間の心の中で

完全になる。さらに、二回の受肉により、肉における神の働きはすでに終わっている。一度目に受肉した神は、受肉の意義を完成させるために普通の人間性を備えていた。今回も神は普通の人間性を備えているが、この受肉の意味は異なっている。それはもっと深く、その働きにはより深い意義がある。神が再び肉になったのは、受肉の意義を完成させるためである。神がこの段階の働きを完全に終えると、受肉の意義全体、つまり肉における神の働きは完結し、肉において行う働きはそれ以上ない。つまりこれ以降、神が働きを行うために受肉することは二度とないのである。人間を救って完全にするためにだけ、神は受肉の働きをする。つまり、神が受肉して到来するのは、働きに資することを除いて、普通のことではないのである。働きのために受肉することで、神はサタンに対し、自分が肉体になっていること、普通の平凡な人間であることを示すが、それでも勝利を誇りつつ世界に君臨し、サタンを打ち破り、人類を贖い、人類を征服できることを見せつけるのだ。サタンの働きの目的は人類を堕落させることだが、神の働きの目的は人類を救うことである。サタンは人間を底なしの淵に捕らえるが、神はそこから人間を救う。サタンはすべての人間に自分を崇めさせるが、神は人間を自分の支配下に置く。神こそ創造主だからである。この働きはすべて、神の二度の受肉を通して成し遂げられる。本質的に、神の肉は人間性と神性が一体化したものであり、普通の人間性を備えている。そのため、受肉した肉体がなければ、神は人間を救うという成果を上げられず、また自身の肉体の普通の人間性がなければ、肉における神の働きがそうした成果を上げるのは不可能である。神の受肉の本質は、神が普通の人間性を持たなければならないということである。そうでなければ、受肉する本来の意図に反することになるからである。

受肉の意義がイエスの働きで完成しなかったとわたしが言うのはなぜか。それは、言葉が完全に肉とならなかったからである。イエスが行ったのは、肉における神の働きの一部分だけであり、彼は贖いの働きだけを行い、完全に人間を得る働きはしなかった。そのため、神は終わりの日に再度受肉したのである。この段階の働きはまた、普通の肉体においてなされる。つまり、人間性が少しも超越的でない、まったく普通の人間によって行われる。言い換えると、神は完全な人間になったのである。要するに、身分が神、完全な人間、そして完全な肉体であり、働きを行っている人になったのだ。人間の目に見えるのは、まったく超越的ではないただの肉体、天の言語を話すことができ、奇跡的なしるしは何も見せず、何の奇跡も行わず、ましてや大きな集会場で宗教の内情を暴いたりしない、ごく普通の人間である。人々にとって、第二の受肉の働きは、最初のものとはまるで違って見える。あまりに違うので、その二つには何の共通点もないように思えるほどであり、最初の働きで見られたことは、今回何も見られない。第二の受肉の働きは最初のものとは異

なっているが、それは両者の源が同一ではないということではない。同じかどうかは、それらの肉体によってなされる働きの性質に左右されるのであって、外形に左右されるのではない。三段階の働きのあいだに、神は二度受肉し、いずれの時も受肉した神の働きは新たな時代を開き、新しい働きをもたらした。二度の受肉は相補うものである。二つの肉体が実際には同じ源から来ていることを、人間の目で見極めるのは不可能である。言うまでもなく、これは人間の目や精神の能力を超えている。しかし、両者は本質において同じである。いずれの働きも同じ霊に由来しているからである。受肉した二つの肉体が同じ源から生じたものかどうかは、両者の生まれた時代と場所、あるいはその他のそうした要素ではなく、両者が表す神性の働きで判断できる。第二の受肉した肉体は、イエスが行った働きを一切行わない。神の働きは慣習に従うものではなく、なされるたびに新たな道を開くからである。第二の受肉は、人々の心における最初の肉体の印象を深めも固めもしないが、それを補って完成させ、神に関する人間の認識を深め、人々の心に存在する規則を残らず打破し、人々の心にある神の誤った姿を消し去る。神自身による働きのどの段階も、それ自体では神についての完全な認識を人に与えることはできないと言える。各段階は、全部ではなく、一部分だけを与えるのだ。神は自身の性質を完全に示したが、人間の理解力が限られているため、神についての認識はいまだ不完全なままである。人間の言語で神の性質を完全に言い表すのは不可能である。ましてや神の働きの一段階だけで、どうして完全に神を表せようか。神は普通の人間性の陰に隠れ、肉において働く。そして、その神性が現れて初めて、人間は神を知ることができるのであり、その外見を見て知るようになるのではない。神が受肉することで、人間は神の様々な働きによって神を知ることができるのだが、働きのどの二段階も同じものではない。このようにして初めて、人間は肉における神の働きについて完全に認識し、一つの面に縛られることがなくなる。二度の受肉による働きは異なるものだが、肉の本質とその働きの源は同一である。ただ、いずれも二つの異なる段階の働きをするために存在し、二つの別の時代に生じるということである。いずれにせよ、受肉した神の肉体は同じ本質と由来を持つが、これは誰も否定できない事実である。

神の働きと人間の実践

人間のあいだでなされる神の働きは、人間から切り離すことができない。なぜなら、人間はこの働きの対象であり、神によって造られたもののうち、神を証しすることができる唯一の被造物だからである。人間の生活と人間のあらゆる活動は、神から切り離すことができず、すべて神の手によって支配されており、神から独立し

て存在できる者は一人もいないとさえ言えるだろう。これは事実なので、誰も否定できない。神が行なうすべての働きは、人類の益のためであり、サタンの策略に対するものである。人間が必要とするすべてのものは神から来るのであり、神は人間のいのちの源である。したがって、人間は決して神から離れられない。さらに、神には人間から離れる意図など一度もなかった。神が行なう働きは、全人類のためであり、神の考えは常に思いやりがある。したがって、人間にとって、神の働きと考え（すなわち神の旨）はともに、人間が知るべき「ビジョン」なのである。このようなビジョンは、神による経営でもあり、また人間が行なうことのできない働きでもある。一方、神が自身の働きにおいて人間に要求することは、人間の「実践」と呼ばれている。ビジョンとは神自身の働きであり、あるいは人類に対する神の旨、もしくは神の働きの目標と意義でもある。また、ビジョンは経営の一部であるとも言える。なぜなら、この経営は神の働きにして、人間を対象とするものであり、つまり神が人間のあいだで行なう働きだからである。この働きは、人間が神を知るようになるための証拠と道のりであり、それは人間にとって極めて重要なものである。人々が、神の働きについての認識に注意を払う代わりに、神への信仰に関する教義や、取るに足らない詳細にのみ留意するならば、その人が神を知ることは決してない。またそれ以上に、神の心にかなうこともない。神の働きのうち、人が神を知る上で並外れて役立つものは、ビジョンと呼ばれている。そうしたビジョンは神の働きであり、神の旨であり、神の働きの目的と意義である。それらはどれも人間に恩恵をもたらす。実践とは、人間がなすべきこと、神に従う被造物がなすべきことを指し、それはまた人間の本分である。人間がなすべきことは、人間がまさに最初のときから理解していることではなく、神が働きの中で人間に要求することである。これらの要求は、神が働きを行なうに従って、次第に深遠に、かつ高度になってゆく。たとえば、律法の時代には、人間は律法に従わなければならない、また恵みの時代には、十字架を背負わなければならない。神の国の時代はそれと異なる。つまり、人間に対する要求は、律法の時代や恵みの時代におけるそれよりも高度である。ビジョンがより高度になるにつれ、人間に対する要求もさらに高くなり、また明瞭かつ現実的なものになってゆく。同様に、ビジョンもますます現実的になってゆく。これら多数の現実的なビジョンは、神に対する人間の服従を促進するだけでなく、それ以上に、神に関する人間の認識を促進する。

以前の時代に比べると、神の国の時代における神の働きはより実践的であり、ますます人間の実質や人間の性質の変化に向けられており、神に従う全員のために、より一層神自身を証しすることができる。言い換えれば、神の国の時代において、神は働きを行なう際、過去のいかなる時点にも増して自身に関することを示してい

るが、そのことは、人間の知るべきビジョンがそれ以前のどの時代よりも高度になっていることを意味する。人間のあいだにおける神の働きが前例のない領域に入ったので、神の国の時代に人間によって知られていたビジョンは、すべての経営の働きを通じて最高のものである。神の働きが前例のない領域に入ったので、人間が知るべきビジョンは、すべてビジョンの中でも最高のものとなり、その結果として生じる人間の実践もまた、以前のどの時代よりもさらに高度である。なぜなら、人間の実践は、ビジョンと共に段階的に変化し、ビジョンの完成とは、人間に対する要求の完成のしるしでもあるからである。神のすべての経営が止まるとすぐに、人間の実践も止まる。そして神の働きがなければ、人は過去の教義に固執するより他になく、それ以外に頼るべきものは何もない。新たなビジョンがなければ、人間による新たな実践はなく、完全なビジョンがなければ、人間による完全な実践もない。さらに高いビジョンがなければ、人間によるいっそう高度な実践もない。人間の実践は、神の歩みと共に変化し、同様に人間の認識と経験もまた神の働きと共に変化する。どれほど有能であるかにかかわらず、人間はやはり神から離れることができず、仮に神が一瞬でも働きを止めたなら、人間は神の怒りによってすぐさま死ぬだろう。人間には誇るべきことが何もない。なぜなら、現在における人間の認識がいかに高度であっても、また人間の経験がいかに深くても、人間を神の働きから切り離すことはできないからである。つまり、人間の実践と、人間が神への信仰において求めるべき事柄は、そのビジョンから切り離すことができないからである。神の働きの一つひとつには、人間が知るべきビジョンがあり、それらに続いて、人間にふさわしい要求がなされるのである。これらのビジョンが基礎としてなければ、人間が実践することはまったく不可能となり、揺るぎなく神に従うこともできないだろう。人間が神を知らない場合、あるいは神の旨を理解していない場合、人間が行なうことはどれも虚しく、神に認められることができない。人間の賜物がいかに豊富であっても、人間はなおも神の働きと導きから切り離すことができない。人間の行動がいかに優れていようと、あるいは人間がどれほど多くの行動をとろうと、それらの行動が神の働きに取って代わることはやはりできない。ゆえに、いかなる状況においても、人間の実践をビジョンから切り離すことはできないのである。新たなビジョンを受け入れない者には、新たな実践がない。彼らの実践は真理とまったく無関係である。なぜなら、彼らは教義を守り、死んだ律法に固執しているからである。彼らには新たなビジョンがまったくなく、その結果、新たな時代の事柄を何一つ実践しない。彼らはビジョンを失っており、そのせいで聖霊の働きも失い、また真理も失ってしまった。真理のない者たちは愚かさの子孫であり、サタンの化身である。どのような種類の人間であれ、神の働きのビジョンを持たずにい

ることも、聖霊の臨在を持たずにいることもできない。つまりビジョンを失うと、人は即座にハデスへ落ち、闇の中で暮らすのである。ビジョンのない人は、神に愚かに従う者であり、聖霊の働きを欠いている者であって、地獄で生きている。このような人は真理を追い求めず、それどころか神の名を看板のように掲げる。聖霊の働きを知らず、受肉した神を知らず、神の経営全体における三段階の働きを知らない者たちは、ビジョンを知らないのだから、彼らには真理が欠けている。そして、真理を自分のものにしていない者たちはみな、悪を行なう者ではなかろうか。進んで真理を実践し、神についての認識を求め、神と真に協力する者は、ビジョンがその基礎として機能している人々である。彼らは神によって認められる。なぜなら、彼らは神と協力するからであり、この協力こそ人間が実践すべきことなのである。

ビジョンの中には、実践への道が多数含まれている。ビジョンには、人間が知るべき神の働きと同じように、人間への実践的な要求も含まれている。過去には、様々な場所で開かれた特別な集会や大規模な集会において、実践の道の一側面についてしか語られなかった。そうした実践は、恵みの時代に実践されるべきものであり、神についての認識とはほとんど無関係だった。と言うのも、恵みの時代のビジョンは、イエスの磔刑のビジョンに過ぎず、さらに偉大なビジョンがなかったからである。人間が知るべきことは、磔刑を通じた人類の贖いの働きだけだったので、恵みの時代において、人間が知るべきビジョンは他になかった。このように、人間には神について乏しい認識しかなく、イエスの愛と慈しみに関する認識を別にすれば、人間が実践すべきこととしては、僅かばかりの単純で哀れなこと、今日とはまったくかけ離れていることしかなかったのだ。過去、集いがどのような形をとったかに関係なく、人間は神の働きの実践的な認識について話すことができず、ましてや人間が入るのに最も適した実践の道がどれであることを明言することなど誰にもできなかった。人間はただ、寛容や忍耐という基礎にいくつかの簡単な詳細を加えたに過ぎないのであって、その実践の本質には何の変化もなかった。なぜなら、同じ時代において、神はそれよりも新しい働きを何一つ行なわず、神が人間に要求したのは寛容と忍耐、または十字架を背負うことだけだったからである。このような実践を除けば、イエスの磔刑よりも高いビジョンはなかった。過去において、その他のビジョンに触れることは決してなかった。と言うのも、神はそれほど多くの働きを行なっておらず、人間に対して限られた要求しかしなかったからである。このように、何をしたかにかかわらず、人間はこれらの境界、つまり、人間が実践すべき単純かつ浅薄ないくつかのことという境界を越えることはできなかった。今日、わたしは他のビジョンについて話す。なぜなら、現在はさらに多くの働き、律法の時代と恵みの時代を数倍も上まわる働きが行なわれてきたからである。

人間に対する要求もまた、以前の時代に比べて数倍高い。人間がこのような働きを十分に認識できなければ、その働きは大きな意義を持たないだろう。つまり、生涯にわたる努力をその働きに捧げなければ、人間がそのような働きを十分に認識するのは難しいと言える。征服の働きにおいて、実践の道について話すだけでは、人間の征服は不可能だろう。また人間に対する要求をしないまま、ビジョンについて話すだけでは、人間の征服はやはり不可能になるだろう。実践の道以外に何も語られないなら、人間のアキレス腱を打つことも、人間の観念を一掃することもできず、ゆえに人間を完全に征服することも不可能だろう。ビジョンは人間を征服するための主要な道具だが、ビジョン以外に実践の道がないとすれば、人間には辿るべき道がなく、ましてや入りの手段などないだろう。これこそが、最初から最後まで神の働きの原則であり続けた。ビジョンには実践できるものもあるが、それとは別に実践に付け加えられるビジョンもある。人間のいのちと性質の変化の度合いには、ビジョンの変化も伴う。人間が自身の努力にしか頼らないのであれば、大きな変化は何一つ成し遂げられないだろう。ビジョンは、神自身の働きや神による経営について述べるものである。実践とは、人間の実践の道、人間の在り方を指す。神の経営のすべてにおいて、ビジョンと実践の関係は、神と人間の関係と同じである。仮にビジョンが取り除かれるなら、あるいは実践に言及しないでビジョンについて語られるなら、またあるいはビジョンのみが存在し、人間の実践が絶やされているなら、このような事柄を神の経営と見なすことはできず、ましてや神の働きが人類のためになされたとは言えないだろう。このような形では、人間の本分が取り除かれるだけでなく、神の働きの目的をも否定することになるだろう。始めから終わりまで、神の働きが関与することなく、人間が実践することのみを要求され、そのうえ、人間が神の働きを知ることが要求されないとしたら、そうした働きを神の経営と呼ぶことはなおさらできないだろう。人間が神を知らず、神の旨について無知であり、曖昧かつ抽象的な形で無闇に実践するなら、その人が十分な資格を有する被造物となることは決してないだろう。ゆえに、これら二つのことは、共に不可欠なのである。仮に神の働きしか存在しなければ、つまり神のビジョンのみが存在し、人の協力や実践が存在しないなら、そうした事柄を神の経営と呼ぶことはできないだろう。人間の実践と入りしかないならば、人間の入る道がどれほど高度でも、それは受け入れられないだろう。人間の入りは、働きやビジョンと歩調を合わせて徐々に変化しなければならず、気まぐれに変えることはできない。人間の実践の原則は、自由でも無制限でもなく、一定の範囲内に定められたものである。このような原則は、働きのビジョンと歩調を合わせて変化する。したがって、神の経営は最終的に、神の働きと人間の実践にかかっている。

経営の働きは、ひとえに人類のゆえに生じたのであり、そのことは、ひとえに人間の存在のゆえに経営の働きが生じたことを意味している。人類が存在する以前、あるいは天地と万物が創られた始まりの時には、経営はなかった。仮に神の働きのすべてにおいて、人間にとって有益な実践がなかったならば、つまり神が墮落した人類にふさわしい要求をしなかったならば（神によって行なわれた働きの中に、人間の実践に適した道がなかったならば）、その働きは神の経営とは呼べないだろう。神の働き全体に含まれるのが、墮落した人類に実践の取り組み方を教えることだけで、神が自身の事業を一切行なわず、神の全能や知恵をほんの少しも示さなかったとしたら、人間に対する神の要求がどれほど高度であっても、また神が人間のあいだでどれほど長く生活したとしても、人は神の性質について何も知ることがないだろう。そうした場合、この種の働きはなおさら、神の経営と呼ばれる価値がないだろう。簡単に言えば、神の経営の働きは、神によって行なわれる働きであり、神の導きの下で行なわれるすべての働きは、神に得られた者たちによってなされるのである。そうした働きは、経営という言葉で要約することが可能である。言い換えると、人間のあいだにおける神の働き、および神に従うすべての者たちによる神への協力が、経営と総称されるのである。ここでは、神の働きをビジョンと呼び、人間の協力を実践と呼ぶ。神の働きが高度であればあるほど（つまりビジョンが高度であればあるほど）、神の性質が人間にとっていっそう明白となる。そして、それが人間の観念にそぐわなければそぐわないほど、人間の実践と協力はさらに高度になる。人間に対する要求が高ければ高いほど、神の働きは人間の観念にそぐわないものとなり、その結果、人間の試練と、人間が満たすよう要求される基準もまたより高くなる。この働きが完了するときには、すべてのビジョンが完成され、人間が実践するよう求められることは、完全の極みに達するだろう。これはまた、各人が種類に応じて分類されるときでもある。なぜなら、人間が知るよう求められていることは、このときすでに人間に示されているからである。したがって、ビジョンが絶頂に達するとき、働きもそれに従って終わりを迎え、人間の実践もまた頂点に達するだろう。人間の実践は神の働きを基にしており、神の経営は、人間の実践と協力があって初めて完全に表される。人間は神の働きの傑作であり、神による経営の働き全体の目的であり、また神の経営全体の産物でもある。仮に人間の協力がなく、神が単独で働きを行なうなら、神の働き全体の結晶として機能するのはなく、神の経営にほんの少しの意義もないだろう。神の働きを除くと、適切な対象を選んで自身の働きを表し、その全能と知恵を証明することのみ、神は自身の経営の目的を達成し、この働きのすべてを用いてサタンを完全に打倒するという目的を達成することが可能となる。したがって、人間は、神の経営の働きにおいて

不可欠な部分であり、神の経営を結実させ、その最終目的を達成に導ける唯一の存在である。人間以外に、そうした役割を担える生物は存在しない。人間が神による経営の働きの真の結晶となるには、墮落した人類の不従順を完全に一掃しなければならない。それには、人間が様々な場合に適した実践を与えられ、また、それに対応する働きを神が人間のあいだで行なうことが要求される。このようにしてのみ、神による経営の働きの結晶たる人々の集団を得ることができる。人間のあいだでなされる神の働きは、それだけでは、神自身を証しすることができない。そうした証しを実現するには、神の働きに適した生きている人間が必要である。神は、まずこれらの人々に対して働きを行なう。すると彼らを通じて神の働きが表わされ、そのようにして、神のこのような証しが被造物のあいだでなされるのである。そして、この点において、神は自身の働きの目的を達成することになる。神はサタンを打ち負かすにあたり、単独で働きを行なうことはしない。なぜなら、神はあらゆる被造物のあいだで、自身を直接証しすることができないからである。仮に神がそうするならば、人間を完全に確信させることは不可能である。ゆえに神は、人間を征服するにあたり、人間に対して働きを行なわなければならない、そして初めてすべての被造物のあいだで証しを得ることができるようになる。働きを行なうのが神だけで、人間の協力がなく、また人間の協力が要求されないなら、人間は決して神の性質を知ることができず、神の旨に永遠に気づかないだろう。すると、神の働きを、神の経営の働きと呼ぶことはできないだろう。神の働きを理解することなく、人間自身だけが懸命に努力して、求め、必死に働くならば、人間はいたずらをしているようなものである。聖霊の働きがなければ、人間が行なうことはサタンのものであり、人間は反抗的であり、悪を行なう者である。墮落した人類によってなされるすべてのことの中にサタンが示され、神と相容れることは一切なく、人間が行なうことはどれもサタンの表われとなる。これまでに語られてきたすべてのことのうち、ビジョンと実践を含まないものは一切ない。人間は、自分の観念を捨てて従来備えていなかったものを得られるように、ビジョンという基礎の上に実践と、服従への道を見つける。神は、人間が神に協力すること、人間が神の要求に完全に服従することを求める。そして人間は、神自身によってなされる働きを目の当たりにすること、神の全能の力を経験すること、そして神の性質を知ることが求める。要約すると、これらが神の経営である。神が人間と一体となることが経営であり、それは最も偉大な経営である。

ビジョンに関連する物事は、おもに神自身の働きを指しており、実践に関連する物事は人間がなすべきことであり、神とは何の関係もない。神の働きは神自身により完成され、人間の実践は人間自身によって成し遂げられる。神自身によって行わ

れるべきことを人間が行なう必要はなく、人間が実践すべきことは神と無関係である。神の働きは神自身の職分であり、人間とは何の関係もない。この働きを人間が行なう必要はなく、それ以上に、人間は神によって行なわれる働きをなすことができない。人間が実践するよう要求されていることは、それが自分のいのちを犠牲にすることであれ、サタンに引き渡されて証しをすることであれ、人間が成し遂げなければならない。それはすべて、人間が成し遂げなければならないのである。神自身は、神がなすべきすべての働きを完成させ、人間が行なうべきことは人間に対して示され、それ以外の働きは、人間が行なうよう委ねられる。神は、余分な働きを行なわない。神は、神の職分に含まれる働きのみを行ない、人間に道を示し、道を開く働きを行なうだけであり、道を整える働きは行なわない。人間はそのすべてを理解すべきである。真理を実践するということは、神の言葉を実行に移すことを意味し、それはどれも人間の本分であり、人間がなすべきことであって、神とは何の関係もない。人間と同じく、神もまた真理の中で苦痛と精錬を受けるよう人間が要求するならば、人間は不従順である。神の働きは、神の職分を行なうことであり、人間の本分は反抗することなく神の導きのすべてに従うことである。神がいかに働きを行なおうと、神がいかに生きようと、人間は自身が当然成し遂げるべきことを達成しなければならない。人間に対して要求することができるのは、神自身だけである。つまり、神自身だけが人間に要求するに相応しいのである。人間は一切自分で選択してはならず、完全に服従して実践すること以外に何もすべきではない。これが人間の備えるべき理知である。ひとたび神自身によってなされるべき働きが完了すると、人間はそれを一步一步経験する必要がある。最終的に神の経営のすべてが完了したとき、もし人間が、神によって要求されたことをいまだ成し遂げていないなら、人間は罰せられるべきである。人間が神の要求を満たさないなら、それは人間の不服従のせいである。それは、神が自身の働きを十分徹底していないことを意味するのではない。神の言葉を実行に移せない者、神の要求を満たせない者、自分の忠誠を捧げ、自分の本分を尽くせない者たちは、全員罰せられる。現在、あなたがたが達成するよう求められていることは、追加の要求ではなく、人間の本分であり、すべての人が行なうべきことである。あなたがたが自分の本分を尽くすことさえできないのなら、あるいは本分をきちんと尽くすことができないのなら、それは自分自身に問題を招いているのではなかろうか。あなたがたは死を招いているのではなかろうか。どうしてあなたがたに、未来や前途があることを期待できようか。神の働きは人類のためになされるのであり、人間の協力は神の経営のためになされる。神がなすべき働きをすべて行なった後、人間は惜しむことなく実践し、神と協力するよう要求されている。神の働きにおいて、人間は努力を惜しまずに、自

分の忠誠を残らず捧げるべきであり、数多くの観念にふけったり、座して死を待っているのではない。神は人間のために自らを犠牲にできる。それではなぜ、人間は自分の忠誠を神に捧げられないのか。神は人間に対して心と意思を一つにしているのに、なぜ人間は少しばかり協力できないのか。神が人類のために働きを行なっているのに、なぜ人間は神の経営のために、いくばくかの本分を尽くせないのか。神の働きがここまで至ったのに、あなたがたは依然として見ているだけで行動せず、聞くだけで動こうとしない。このような人は滅びの対象ではなかろうか。神はすでに自身のすべてを人間に捧げたのに、なぜ人間は今日、熱心に自分の本分を尽くすことができないのか。神にとっては自身の働きが最優先であり、神による経営の働きはこの上なく重要なことである。人間にとっては、神の言葉を実践し、神の要求を満たすことが最優先である。あなたがたはみな、それを理解すべきである。あなたがたに語られる言葉は、あなたがたの本質の核心にまで達し、神の働きはかつてない領域に入った。多くの人が、この道が真実であるのか虚偽であるのかをいまだ理解していない。彼らは依然として待って見ているだけで、自分の本分を尽くしていない。むしろ彼らは、神の言葉と行動を逐一検証し、神の食べる物や着る物に重点を置き、彼らの観念はますます深刻なものとなっている。このような人は、何でもないことで騒ぎ立てているのではないか。このような人が、どうして神を求める者であり得ようか。またどうして彼らが、神に服従する意欲のある者であり得ようか。彼らは自分の忠誠と本分を心の奥へと押しやり、代わりに神の所在にばかり注意を向けている。彼らはとんでもない者たちである。人間が自分の理解すべきことをすべて理解し、実践すべきことをすべて実践しているならば、神は必ずや人間に祝福を授ける。なぜなら、神が人間に要求することは、人間の本分であり、人間がなすべきことだからである。自分の理解すべきことを理解できず、実践すべきことを実践できないなら、人間は罰せられる。神に協力しない者は神に敵対しており、また新しい働きを受け入れない者は、たとえそれに対して明らかに敵対していなくても、やはりそれに反対する者たちである。神が要求する真理を実践しない者はみな、たとえ聖霊の働きに特別な注意を払っていたとしても、神の言葉に対して故意に反抗し、服従しない人々である。神の言葉に従わず、神に服従しない人々は反抗的であり、神に敵対している。自分の本分を尽くさない人々は、神に協力しない者であり、神に協力しない人々は聖霊の働きを受け入れない者である。

神の働きがある段階に達し、神の経営がある段階に達するとき、神の心にかなう者たちはみな、神の要求を満たすことができる。神は自身の基準と、人間が達成可能なことに従って、人間に対する要求を行なう。神は、自身の経営について話しつつ、それと同時に人間のために道を示し、人間に生存への道を与える。神の経営と

人間の実践は、いずれも働きの同じ段階であり、同時に実施される。神の経営に関する話は、人間の性質の変化に関するものであり、人間がなすべきことと人間の性質の変化についての話は神の働きに関するものである。両者が切り離されることは一切ない。人間の実践は一步一步変化している。それは、人間に対する神の要求もまた変化しており、神の働きは常に変化し、前進しているからである。人間の実践が教義に囚われているままであれば、それは人間が神の働きと導きを失ったことを証明している。人間の実践が一切変わることも深まることもないのであれば、それは人間の実践が人間の意志に沿って実行されており、真理の実践ではないことを証明している。人間に歩むべき道がないならば、その人はすでにサタンの手中に落ち、サタンにより支配されており、それは、その人が悪霊に支配されていることを意味する。人間の実践が深まらないのであれば、神の働きが発展することはない。また神の働きに変化がなければ、人間の入りは止まることになる。それは避けられないことである。神の働き全体を通して、人間が常にヤーウェの律法を守っていたなら、神の働きは前進できなかっただろうし、ましてや時代全体に終止符を打つなど不可能だろう。人間が絶えず十字架に固執し、忍耐と謙遜を実践していたならば、神の働きが前進し続けることは不可能だろう。律法を守るだけの人々、十字架に固執し、忍耐と謙遜を実践しているだけの人々のあいだで、六千年におよぶ経営を終わらせることは決してできない。その一方、神を知り、サタンの手から取り戻され、サタンの影響から完全に脱した、終わりの日の人々のあいだでは、神による経営の働き全体が完結する。これが避けることのできない、神の働きの進路である。宗教の教会にいる者の実践が旧態化していると言われているのはなぜか。それは、彼らの実践していることが、今日の働きから切り離されているからである。恵みの時代においては、彼らが実践していたことは正しかったが、その時代が過ぎ去り、神の働きが変化するにつれて、彼らの実践は次第に旧態化していった。それは新たな働きと光に置き去りにされてしまったのである。聖霊の働きは、元来の基礎の上で、さらに何段階か深化している。しかし、それらの人々は、神の働きの元来の段階に留まったままで、旧来の実践と古い光をいまだに固守している。神の働きは3年ないし5年で大きな変化を遂げることがある。それならば、二千年のあいだにさらに大きな変化が起こるはずではないだろうか。人間に新たな光も実践もないならば、それは人間が聖霊の働きに追いついていないことを意味している。これは人間の失敗である。神の新たな働きの存在は否定できない。なぜなら、現在において、以前に聖霊の働きがあった者たちは、依然として旧態化した実践を守っているからである。聖霊の働きは常に前進しており、聖霊の流れの中にいるすべての者たちもまた一步一步、さらに深く前進し、変化しているはずである。彼らは、ある段

階で止まるべきではない。聖霊の働きを知らない者たちだけが、元来の働きの中に留まり、聖霊の新たな働きを受け入れない。不従順な者たちだけが聖霊の働きを得られないだろう。人間の実践が聖霊の新たな働きと歩調を合わせていないならば、それは今日の働きから間違いなく分離しており、今日の働きと相容れないことも確実である。このような旧態化した人々は、神の旨を成し遂げることが決してできず、まして最後に神の証しに立つ人々には決してなれないだろう。さらに、経営の働き全体を、こうした人々の一群のあいだで完結させることは不可能だろう。かつてヤーウェの律法を遵守していた者と、十字架のために苦しんだ者たちについて言えば、終わりの日の働きの段階を受け入れられないなら、彼らが行なったことはすべて無に帰し、無駄になるであろう。聖霊の働きの最も明瞭な表われは、現状を受け入れることであり、過去にしがみ付くことではない。現在の働きに追いついておらず、今日の実践から切り離されてしまった人々は、聖霊の働きに反抗し、それを受け入れない者たちである。このような人々は、神の現在の働きに背いている。彼らは過去の光にしがみ付くけれども、彼らが聖霊の働きを知らないことは否定できない。人間の実践における変化の話、過去の実践と現在の実践との違いの話、前の時代に実践がどう行なわれていたかの話、そして今日それがどのように行なわれているかの話を、これまで延々としてきたのはなぜか。人間の実践におけるそうした分割は、常に語られてきたが、それは聖霊の働きが常に前進しており、したがって人間の実践もまた常に変化することを求められているからである。人間がある段階に留まったままならば、それはその人が神の新たな働きと新たな光に追いつけないことを証明しているのであって、神の経営計画が変化しなかったことを証明しているのではない。聖霊の流れの外にいる者は、常に自分が正しいと考えるが、実際は、彼らにおける神の働きは遠い昔に停止しており、彼らには聖霊の働きが存在しない。神の働きはずっと前に、それとは別の人々の集団、すなわち神が新たな働きを完成させようと意図している集団に移された。宗教の中にいる者たちは神の新たな働きを受け入れることができず、過去の古い働きに固守するだけなので、神はこれらの人々を見捨て、新たな働きを受け入れる人々に対してこの新たな働きを行なう。これらの人々は神の新たな働きにおいて協力する者たちであり、このような形でのみ、神の経営計画を成し遂げることができる。神の経営は常に前進しており、人間の実践は絶えず高度化している。神は常に働きを行なっており、人間がいつでも必要とされているので、両者とも頂点に達し、神と人間は完全に一体となる。これこそが神の働きの成果の表われであり、神の経営全体の最終結果である。

神の働きの各段階には、それに対応する人間への要求もある。聖霊の流れの中にいる者たちはみな、聖霊の臨在と鍛錬を有しており、聖霊の流れの中にいない者た

ちはサタンの支配下にあり、聖霊の働きが一切ない。聖霊の流れの中にいる人々は、神の新たな働きを受け入れ、神の新たな働きの中で協力する者である。現在において、その流れの中にいる者たちが協力できず、そのとき神に要求された通りに真理を实践できないとすれば、そうした者は懲らしめられ、最悪の場合は聖霊に見捨てられる。聖霊の新たな働きを受け入れる者は聖霊の流れの中で生き、聖霊の気遣いと加護を授かる。進んで真理を实践する者は、聖霊により啓かれ、進んで真理を实践しない者は、聖霊に懲らしめられ、罰せられることすらあるだろう。どのような種類の人間であれ、そうした者が聖霊の流れの中にいる限り、新たな働きを神の名のために受け入れるすべての者に対して、神は責任を負う。神の名をたたえ、進んで神の言葉を実践する者は、神の祝福を得る。神に服従せず、神の言葉を実践しない者は、神の懲罰を受ける。聖霊の流れの中にいる人々は、新たな働きを受け入れる者であり、新たな働きを受け入れた以上、神に正しく協力すべきであり、自らの本分を尽くさない反逆者のように振る舞ってはならない。人間に対する神の要求はこれだけである。しかし、新たな働きを受け入れない者たちについては、この限りではない。彼らは聖霊の流れの外にいたので、聖霊の懲らしめや咎めは適用されない。そうした者たちは肉の中で一日中生活し、自分の頭脳の中で暮らすのであって、そうした者たちの行動はすべて、自分の脳による分析と研究から生み出された教義に沿ったものである。それは聖霊の新たな働きが求めることではなく、ましてや神との協力などではない。神の新たな働きを受け入れない者には神の臨在がなく、それ以上に、神の祝福と加護が一切ない。そうした者たちの言動の大半は、聖霊の働きによる過去の要求に固執している。それらは教義であり、真理ではない。そうした教義や規則は、それらの人々の集まりが宗教以外の何物でもないことを証明するのに十分である。そうした者は選民でも神の働きの対象でもない。そうした者たちの会合は、宗教の総会としか言いようがなく、教会とは呼べない。これは変えようのない事実である。そうした者たちには聖霊の新たな働きがない。彼らのなすことには宗教の匂いがあり、彼らの生は宗教の色彩を帯びている。そうした者たちには聖霊の臨在と働きがなく、ましてや聖霊の鍛錬と啓きを受ける資格などない。これらの人々は、全員いのちのない屍であり、霊のない蛆虫である。彼らには人間の反逆や反抗、人間による様々な悪行に関する認識が一切なく、ましてや神の働きや神の現在の旨などまったく知らない。彼らはみな無知で下劣な人間であり、信者と呼ばれるに相応しくなくである。彼らが行なってきたことに、神の経営に関連する事柄は一切なく、ましてや神の計画を損なうことなどできない。彼らの言動は過度に不快で惨めすぎ、触れる価値などまったくない。聖霊の流れの中にいない者によってなされたことは、どれも聖霊の新たな働きと無関係である。そ

のため、そうした者たちが何をしようと、彼らには聖霊の鍛錬がなく、それ以上に、聖霊の啓きもない。なぜなら、彼らはみな真理への愛を持たない者たちであり、聖霊から忌み嫌われ、見捨てられた者たちだからである。彼らは悪を行なう者と呼ばれる。なぜなら、彼らは肉において歩み、神の看板の下に、自分を喜ばせることなら何でも行なうからである。神が働きを行なう間、そうした者たちは神に対してわざと敵意を抱き、神と正反対の方向へ走る。人間が神と協力しないことは、それ自体が最も反逆的なことなので、神にわざと逆らうそうした人々は特に然るべき報いを受けるのではないだろうか。そうした人々の悪事について言及するなら、彼らを呪いたくてたまらない人もいるが、神はそうした者たちを無視する。人間にとって、彼らの行為は神の名に関わるもののように思われるが、実際のところ、神にとってそれらの行為は、神の名や神の証しとは何の関係もない。これらの人々が何をしようと、それは神と無関係であり、神の名とも、神の現在の働きとも無関係である。このような人々は自分自身を辱め、サタンを表わしている。彼らは怒りの日に向けて貯め込んでいる、悪事を行なう者たちである。今日、そうした者がどういった行動をとろうと、神の経営を阻害せず、神の新たな働きと無関係である限り、相応の報いを受けることはない。なぜなら、怒りの日はまだ到来していないからである。神がすでに取り扱ったはずだと人々が思っていることは多数あり、それら悪事を行なう者はできるだけ早く報いを受けるべきだと、人々は考えている。しかし、神の経営の働きはまだ終結しておらず、怒りの日もまだ到来していないので、不義なる者は不義な行ないを続ける。「宗教の中にいる人々には、聖霊の臨在や働きがなく、神の名を辱める。それでは、神はなぜ彼らを滅ぼさず、彼らの奔放な振る舞いをいまだ許容しているのか」と言う人がいる。サタンの表われであり、肉を表わすこれらの人々は、無知で卑劣な者たちであり、愚か者である。彼らは、神が人間のあいだでどのように働きを行なうかを理解するようになるのに先立ち、神の怒りの到来を目の当たりにすることはなく、ひとたび完全に征服されると、それら悪事を行なう者たちは、全員報いを受け、一人として怒りの日を逃れることができない。現在は人間の懲罰の時ではなく、征服の働きを実行する時であるが、神の経営を阻害する者がいればこの限りでなく、その場合、そうした者たちは、行動のひどさに応じた懲罰を受ける。神が人類を経営しているあいだ、聖霊の流れの中にいる者たちはみな神と関係している。聖霊に忌み嫌われ、見捨てられた者たちは、サタンの影響下で生き、彼らが実践することは、神とまったく関係がない。神の新たな働きを受け入れ、神と協力する者だけが、神と関係がある。なぜなら、神の働きは、それを受け入れるかどうかにかかわらず、すべての人ではなく、それを受け入れる者たちだけを対象とするからである。神が行なう働きには常に目的があ

り、気まぐれになされるのではない。サタンと関係している者たちは、神の証しをするのにふさわしくなく、ましてや神と協力するのにふさわしいはずがない。

聖霊の働きの各段階は、人間の証しも必要とする。働きの各段階は、神とサタンとの戦いであり、その戦いの対象はサタンである一方、その働きによって完全にされるのは人間である。神の働きが実を結ぶかどうかは、人間がどのように神の証しを行なうかによって決まる。この証しは、神に従う者に対して神が要求することであり、それはサタンの前でなされる証しであって、神の働きの成果を証明するものでもある。神の経営全体は三段階に分割され、各段階において、人間に対して適切な要求がなされる。さらに、時代が過ぎ去り進行してゆくにつれ、全人類に対する神の要求はより高くなる。このようにして、神によるこの経営の働きは、人間が「言葉は肉において現われる」という事実を目の当たりにするまで、一步一步絶頂に達する。そしてこのような形で、人間に対する要求がいっそう高くなり、人間が証しすることへの要求もさらに高度化する。人間が神と真に協力できればできるほど、神はますます栄光を得る。人間の協力とは、人間が行なう必要のある証しであり、人間が行なう証しは、人間による実践である。ゆえに、神の働きが然るべき成果を得られるかどうか、真の証しが存在し得るかどうかは、人間による協力と証しに密接に結びついている。働きが終わる時、つまり神による経営のすべてが終わりに達するとき、人間はより高い証しをするよう要求される。そして神の働きが終わりを迎えるとき、人間の実践と入りは頂点に達する。過去において、人間は律法と戒めに従うことを要求され、忍耐強く謙虚であることを求められた。現在、人間は神の采配のすべてに従い、神への至高の愛を備えるよう求められており、最終的には患難のただ中でも神を愛することを要求される。これら三つの段階こそが、神が自身の経営全体にわたって、段階ごとに人間に要求することである。神の働きの各段階は、その前の段階よりも一層深くなり、各段階における人間に対する要求は、その前の段階よりも一層深遠であり、神の経営全体はそのようにして次第に形を成す。人間の性質が神の要求する基準にますます近づくのはまさに、人間に対する要求がさらに高くなってゆくからであり、そのとき初めて、神の働きが完全に終わりを迎え、全人類がサタンの影響から救われるまで、人類は次第にサタンの影響から離れてゆく。その時になると、神の働きは終結し、人間の性質を変化させるために行なわれる、人間による神への協力が終わり、全人類が神の光の中で生き、それ以後は神への反抗や反逆がなくなる。また、神は人間に対して何も要求しなくなり、人間と神とのあいだには、一層調和の取れた協力、つまり人間と神が共にある生活、神の経営が完全に終結し、人間が神によってサタンの手から完全に救われた後に到来する生活がある。神の歩調にしっかり従えない者たちは、そうした生活を得

ることができない。彼らは自ら闇へと沈み、そこで泣いて歯ぎしりする。彼らは神を信じているが神に従わず、神を信じているが神の働きのすべてに従わない者である。神を信じている以上、人間は神の歩調に一步ずつしっかり従わなければならない。人間は「子羊が行く所はどこへでもついて行く」べきなのである。このような者たちだけが真の道を求める人々であり、聖霊の働きを知っている者である。奴隷のように文字や教義に従う人々は、聖霊の働きによって淘汰された者である。各期間において、神は新たな働きを開始し、また各期間において、人間には新たな始まりがある。もしも人間が、「ヤーウェは神である」または「イエスはキリストである」というような、それぞれに時代にのみ当てはまる真理に従うだけであれば、人間は聖霊の働きと歩調を合わせることが決してできず、聖霊の働きを得ることも永遠にできない。神がどのように働くかにかかわらず、人間はほんの僅かも疑うことなく、しっかりとついて行く。このようにすれば、どうして人間が聖霊によって淘汰されることがあるだろうか。神が何を行なうかにかかわらず、それが聖霊の働きであることを人間が確信し、疑念を抱くことなく聖霊の働きに協力し、神の要求を満たそうとする限り、どうして人間が罰せられることがあるだろうか。神の働きは一度も停止したことがなく、神の歩みも止まったことがない。また神の経営の働きが完了するのに先立ち、神は常に忙しく、休んだことがない。しかし、人間は違う。人間は、ほんの少し聖霊の働きを得ただけで、あたかもそれが決して変わらないかのように扱う。人間は、わずかに知識を得ただけで、より新しい神の働きの歩みに進んでついて行こうとしない。人間は、わずかな神の働きを見ただけで、すぐに神を一種の木の人形のように決めつけ、神はいつまでも人間の見るこの形のままであり、過去も未来も常にそのような形であると信じる。人間は、表面的な知識だけを得て、誇らしくなって我を忘れ、まったく存在しない神の性質や在り方をみだりに主張する。そして聖霊の働きの一段階について確信するあまり、神の新たな働きを宣べ伝えるのがどのような人であれ、人間はそれを受け入れない。これらの者たちは、聖霊の新たな働きを受け入れることができない人々である。彼らはあまりに保守的で、新しい物事を受け入れられない。このような人々は、神を信じてはいるが、神を拒む者たちである。人間は、イスラエルの民が「ヤーウェを信じるだけでイエスを信じなかった」のは間違っていたと信じているが、大多数の人々が「ヤーウェを信じるだけでイエスを拒む」という役、そして「メシアの再来を切望するがイエスというメシアには反対する」という役を演じている。それならば、聖霊の働きの一段階を受け入れた後も、人間が依然としてサタンの支配下で生き、依然として神の祝福を受けていなくても何ら不思議ではない。これは、人間の反抗心の結果ではなかろうか。現在の新たな働きに追いついていない世界各地のクリス

チャンはみな、神が自分たちの望みを一つひとつかなえてくれると思い込み、自分たちは幸運であるという希望にしがみついている。しかし、神が自分たちを第三の天へと引き上げるのはなぜかを、確信を持って述べることはできず、白い雲に乗ったイエスがどのようにして自分たちを引き上げに来るかについても確信しておらず、ましてや自分たちが想像している日に、本当にイエスが白い雲に乗って到来するかどうか断言できずにいる。彼らはみな不安であり、途方にくれている。自分たち、すなわち各教派から来た一握りの様々な者たちを、神が一人ひとり引き上げるかどうかさえ知らない。神が現在行なっている働き、今の時代、そして神の旨——彼らはそれらの事柄を一切把握しておらず、その日を指折り数えることしかできない。子羊の歩みに最後まで従う者のみが、最終的な祝福を得られる。一方、最後まで従えないにもかかわらず、自分はすべてを得たと信じている「賢い人々」は、神の出現を証しすることができない。彼らの一人ひとりが、自分は地上で最も賢い人間だと信じており、神の働きの継続的な発展を何の理由もなく中断させ、「この上なく神に忠実で、神に従い、神の言葉を守る」自分たちを神は天に引き上げると、絶対的な確信を持って信じているようである。彼らは、神が語った言葉に対して「この上なく忠実」であるにもかかわらず、彼らの言動は極めて忌まわしい。なぜなら、彼らは聖霊の働きに逆らい、欺瞞や悪を犯すからである。最後まで従わない者、聖霊の働きと歩調を合わせられない者、旧来の働きにしがみつくだけの者は、神への忠誠を果たせなかったどころか、神に逆らう者となり、新たな時代に拒絶され、罰せられる者となった。これ以上哀れなことがあるだろうか。多くの人たちが、古い律法を拒んで新たな働きを受け入れる者はみな、良心がないとさえ信じている。

「良心」についての話をするだけで、聖霊の働きを知らないそれらの人々は、最終的に自らの良心によって前途を絶たれる。神の働きが教義に従うことはなく、またそれは神自身の働きかもしれないが、神がそれに固執することはない。否定されるべきことは否定され、淘汰されるべきものは淘汰される。しかし人間は、神の経営の働きのほんの一部に固執し、自ら神に敵対している。それは人間の愚かしさではなかろうか。それは人間の無知ではなかろうか。人間が神の祝福を得られないことを恐れて臆病になり、用心し過ぎればし過ぎるほど、より大きな祝福を得ることと、最後の祝福を受けることがますます不可能となる。奴隷のように律法を守っている人はみな、律法に対してこの上ない忠誠を示している。そして律法に対してこのような忠誠を示せば示すほど、彼らは一層神に逆らう反逆者となる。というのは、今は律法の時代ではなく、神の国の時代であり、現在の働きと過去の働きを同じ言葉で語ることはできず、過去の働きを現在の働きと比較することもできないからである。神の働きは変化しており、人間の実践もまた変化した。それは、律法に

しがみつくことでも、十字架を背負うことでもない。ゆえに、律法や十字架に対する人間の忠誠が、神に認められることはないのである。

神の国の時代において、人間は徹底的に完全にされる。征服の働きの後、人間は精錬と患難を受ける。この患難のさなかに勝利し、証しに立つことができる者たちこそ、最終的に完全にされる者である。彼らは勝利者である。この患難のあいだ、人間はこの精錬を受け入れる必要があり、その精錬は神の働きの最後の実例である。それは、神の経営の働きがすべて完結する前に人間が精錬される最後の時である。そして神に従う者はみな、この最後の試験を受け入れなければならない。患難に苦しむ者に聖霊の働きと神の導きはないが、真に征服され、神を真に追い求める者たちは、最後に揺るぎなく立つ。彼らは、人間性を備え、神を真に愛する者たちである。神がどのように働こうが、これらの勝利者は証しを怠ることなく、ビジョンを失わずになお真理を実践する。彼らは大いなる患難から最終的に脱け出す者たちである。荒れた海で漁をする者たちは今でも居候できるものの、最後の患難から逃れられる者は一人もおらず、最後の試験から逃れられる者も誰一人いない。勝利する者にとって、そうした患難は極めて大きな精錬である。しかし、荒れた海で漁をする者にとって、それは完全なる淘汰の働きである。彼らがどのようにして試されるとしても、心の中に神がいる者の忠誠は変わることがない。しかし、心の中に神がいない者たちは、神の働きが自分の肉に有利でないならば、神に対する見方を変え、神のもとを離れさえする。これが、最後に揺るぎなく立てず、神の祝福を求めるだけで、神のために自分を費やし、神に自分自身を捧げる意欲が一切ない者である。このような下劣な人々は、神の働きが終わりを迎えるときに全員追放され、同情にも値しない。人間性が欠如している者たちは、神を真に愛することができない。状況が安全で平穏なとき、あるいは得られる利益があるとき、彼らは神に対して完全に従順であるが、ひとたび自分の望みが損なわれたり、最終的に否定されたりすると、彼らはただちに反乱を起こす。ほんのひと晩のうちに、彼らはにこやかで「心優しい」人間から、醜く残忍な殺人者となり、何の理由もなく、昨日までの恩人を生かしておけない敵として扱う。瞬きもせずに殺しを行なうこれらの悪魔らが追放されていないなら、それらは隠れた危険になるのではないか。人間を救う働きは、征服の働きが完了した後には実現しない。征服の働きが終わったとしても、人間を清める働きは終わっていない。そうした働きは、人間が完全に清められ、真に神に服従する者が完全にされ、自分の心に神がいない見せかけだけの者たちが取り除かれたとき初めて完了する。神の働きの最終段階において神を満足させない者たちは完全に淘汰され、淘汰される者たちは悪魔のものである。彼らは神を満足させることができず、神に対して反

抗するので、たとえこれらの人々が現在神に従っていても、彼らが最後に残る者であるという証明にはならない。「神に最後まで従う者は救われる」という言葉の中の「従う」は、患難の中でも揺るぎなく立つことを意味する。現在、多くの者たちが、神に付き従うのは簡単だと思っているが、神の働きが終わりを迎えようとしているときこそ、あなたは「従う」という言葉の真意を知るだろう。征服された後の現在も、依然として神に従えるからといって、あなたが完全にされる者たちの一人であることの証明にはならない。試練に耐えられない者、患難のただ中で勝利することができない者は、最終的に揺るぎなく立つことができず、ゆえに最後まで神に従うことができない。真に神に従う者たちは、自分の働きの試験に耐えられるが、真に神に従わない者たちは、神のいかなる試練にも耐えることができない。遅かれ早かれ、彼らは追放されるが、勝利者は神の国に留まる。人間が真に神を求めているかどうかは、その人の働きの試験、すなわち神の試練により判断されるのであり、それは人間自身の判断とは無関係である。神が誰かを気まぐれに拒むことはない。神が行なうすべてのことは、人間を完全に確信させられる。神は、人間に見えないことや、人間を確信させることができない働きを一切行なわない。人間の信仰が真実であるかどうかは、事実によって証明され、人間が決めることはできない。

「麦を毒麦に変えることはできず、毒麦を麦に変えることもできない」という言葉に疑いの余地はない。神を真に愛する者たちはみな最終的に神の国に留まり、神を真に愛する者を神が不公平に扱うことはない。神の国の中の勝利者たちは、その様々な役割と証しに応じて、祭司として、あるいは信者として仕えることになる。また患難のただ中で勝利した者たちは、みな神の国で祭司の集団となる。祭司の集団は全宇宙における福音の働きが終わったときに形成される。その時が到来すると、人間がなすべきことは、神の国において自分の本分を尽くし、神と共に神の国で生活することとなる。祭司の集団の中には、祭司長と祭司がいて、それ以外の者は神の子、神の民となる。これはすべて患難のあいだの神への証しによって決定される。それらは気まぐれで与えられた称号ではない。ひとたび人間の地位が確立すれば、神の働きは停止する。なぜなら、各人が種類に応じて分類され、それぞれの本来の地位に戻されるからであり、それは神の働きの成果のしるし、神の働きと人間の実践の最終結果、そして神の働きのビジョンと人間の協力の結晶だからである。最後に人間は神の国で安息を得て、神もまた自らの住まいに戻って休息する。これが神と人間との六千年にわたる協力の最終結果である。

キリストの本質は父なる神の旨への従順さである

受肉した神はキリストと呼ばれ、キリストは神の霊がまとう肉である。この肉はいかなる肉ある人間とも異なる。キリストは肉と血でできているのではなく、神の霊が受肉したものだからである。キリストは普通の人間性と完全なる神性の両方を有している。キリストの神性はいかなる人も有していないものである。キリストの普通の人間性は肉における普通の活動のすべてを支え、キリストの神性は神自身の働きを遂行する。キリストの人間性であれ、あれいは神性であれ、いずれも父なる神の旨に従うものである。キリストの本質は霊、すなわち神性である。ゆえに、キリストの本質は神自身のものである。この本質が神自身の働きを妨げることはなく、神が自身の働きを破壊することは決してあり得ず、自身の旨に逆らう言葉を語ることも決してない。ゆえに、受肉した神は自身の経営を妨げる働きは絶対に行わない。これはすべての人が理解すべきことである。聖霊の働きの本質は人を救うことであり、また神自身の経営のためである。同様に、キリストの働きも人を救い、神の旨を行うためのものである。自身が肉となったため、神は自身の肉において神の本質を実現し、よってその肉は神の働きを引き受けるのに十分である。神の霊の働きはすべて、受肉の期間中にキリストがなす働きに取って代わられる。また、受肉の期間を通してすべての働きの核心となるのがキリストの働きである。そこに他の時代の働きが混ざり合うことは決してあり得ない。また肉となる以上、神は肉の身分で働きを行う。そして、肉において到来する以上、神は自身のなすべき働きを肉において成し遂げる。神の霊であれ、キリストであれ、いずれも神自身であり、神はなすべき働きをなし、果たすべき職分を果たす。

神の本質そのものが権威を行使するが、キリストは神から来る権威に完全に服従することができる。霊の働きであれ、肉の働きであれ、それらが互いに矛盾することはない。神の霊は、すべての被造物におよぶ権威である。神の本質を有する肉体にも権威があるものの、肉となった神は父なる神の旨に沿った働きをすべて行える。こうしたことは、一人の人間には実現も想像もできない。神自身が権威だが、神の肉は神の権威に服従することができる。これが「キリストは父なる神の旨に服従する」と言われるときに込められた意味である。神が霊で、救いの働きを行えるように、人間になった神も救いの働きを行うことができる。いずれにせよ、神自身が神自身の働きをするのである。神は阻止することも、干渉することもせず、矛盾する働きを実行することもない。と言うのも、霊による働きの本質も、肉による働きの本質も同様だからである。それが霊であれ、あるいは肉であれ、いずれも一つの旨を行い、同じ働きを経営するために働きを行う。霊と肉は性質こそ異なるが、

本質は同じである。いずれも神自身の本質と、神自身の身分を持っている。神自身は不従順の要素を一切持たず、神の本質は良きものである。神はあらゆる美と善、そしてすべての愛の表れである。たとえ肉にあっても、神は父なる神に逆らうことを一切しない。自身の生命を犠牲にしてでも、父なる神に心から従い、他の選択はしない。神には独善や尊大さといった要素も、うぬぼれや横柄さといった要素もない。神は歪んだ要素を一切持たない。神に逆らうものはすべてサタンに由来する。サタンこそ、すべての醜悪さと邪惡の根源なのである。人がサタンと同様の性質を持っているのは、サタンに墮落させられ、手を加えられたからである。キリストはサタンによって墮落させられていないため、神の特性だけを持っており、サタンの特性はまったくない。働きがいかに困難でも、あるいは肉がいかに弱くても、神は肉において生きながら、神自身の働きを妨げることは決してせず、ましてや不従順な行いで父なる神の旨を捨て去ることは決してない。キリストは父なる神の旨を裏切るくらいなら、肉の痛みを受けるほうを選ぶだろう。イエスが祈りの中で、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさってください」と述べた通りである。人は自身の選択を下すが、キリストはそうしない。彼は神自身の身分を持っているが、肉体の視点から、父なる神の旨をなおも求め、父なる神から託されたことを果たす。人がこれを成し遂げるのは不可能である。サタンに由来する物事が神の本質を有することはあり得ず、神に逆らい、抵抗するものしかあり得ない。それが完全に神に服従することはできず、ましてや神の旨に進んで従うなど不可能である。キリスト以外の人間はみな神に逆らう行いをするのができ、神から委ねられた働きを直接引き受けられる者は一人もおらず、神の経営を自分自身が尽くすべき本分と考えられる者も一人としていない。キリストの本質は父なる神の旨への服従であり、神への不従順はサタンの特性である。これら二つの性質は相容れないものであり、サタンの特質を持つ者がキリストと呼ばれることはあり得ない。人が神に代わってその働きを行えないのは、神の本質がまったく備わっていないからである。人は自己の利益と将来の前途を目的として神のために働くが、キリストは父なる神の旨を行うために働くのだ。

キリストの人間性はキリストの神性によって支配されている。キリストは肉の姿をしているが、その人間性は肉を持つ人間とまったく同じものではない。キリストには固有の性格があり、これもキリストの神性によって支配されている。キリストの神性は弱さを持たず、キリストの弱さは彼の人間性に起因する。この弱さはある程度キリストの神性を制限するが、そのような制限は一定の範囲と時間内のものであり、無限ではない。キリストの神性による働きを行う時が来ると、それは彼の人

間性とは関係なく行われる。キリストの人間性はひとえに、神性によって支配される。キリストの人間性による普通の生活は別として、人間性による他の行動もすべて、キリストの神性の影響、働きかけ、指示を受ける。キリストは人間性を有しているが、それが神性による働きを邪魔することはない。それはまさに、キリストの人間性が神性に支配されているからである。キリストの人間性は、他者との接し方において成熟していないものの、それが神性による普通の働きに影響を与えることはない。キリストの人間性は墮落していないとわたしが言うのは、キリストの人間性がその神性に直接指揮され、普通の人よりも高度な理知を有しているという意味である。彼の人間性は、働きの中で神性の指揮を受けるのに最も適しており、神性による働きを表し、神性による働きに服従する能力が極めて高い。神は肉において働きを行うとき、肉体を持つ人が尽くすべき本分を決して見失わない。天なる神を真心でもって崇めることができるのだ。彼は神の本質を持ち、その身分は神自身のそれと同じである。それは、彼が地上に来て、人の外形を持つ被造物となり、かつて持っていなかった人間性を持つようになったということに他ならない。彼は天なる神を崇めることができるが、これが神自身であるということで、人には真似のできないことである。彼の身分は神自身である。彼が神を崇めるのは肉の観点からであり、ゆえに「キリストは天なる神を崇める」という言葉は間違いではない。彼が人に要求するのはまさに神自身の存在である。そうした事柄を要求するのに先立ち、彼は人間に求めることをすでにすべて成し遂げている。また、他者に要求をしておきながら、自分はそれらから免れるようなことはしない。そのすべてが彼の存在を成しているからである。彼はどのように働きを行おうとも、神に敵対するような行為はしない。人に何を要求しても、人がなし得る以上の要求はしない。彼が行うことはどれも、神の旨を行うことであり、神の経営のためである。キリストの神性はすべての人を超越し、ゆえに彼はあらゆる被造物の中で最高の権威である。この権威はキリストの神性、すなわち神自身の性質と存在そのものであり、それが彼の身分を決定している。よって彼の人間性がいかに普通でも、神自身の身分を持っていることは否定できない。彼がどのような観点から語り、どのように神の旨に従っても、神自身でないと言うことはできない。愚かで無知な者はしばしばキリストの普通の人間性を欠点と見なす。キリストがいかに自身の神性を表わし、明らかにしたところで、人は彼こそキリストだと認めることができない。そしてキリストが服従と謙虚さを示せば示すほど、愚かな人間はますますキリストを軽くあしらう。キリストに対して排他的、侮蔑的な態度をとり、一方で立派な姿の「偉人たち」を高い地位に置いて崇拝する者たちさえいる。神に対する人の抵抗と不従順は、受肉した神の本質が神の旨に従うという事実と、キリストの普通の人間性に由

来する。これが神に対する人の抵抗と不従順の根源なのである。キリストが人間性の衣をまとうておらず、被造物の観点から父なる神の旨を求めることもせず、超人間性を持っていたならば、人のあいだに不従順さはきつとないはずだ。人が常に、目に見えない天なる神の存在を信じようとするのは、天なる神に人間性がなく、被造物としての性質を一つたりとも有していないからである。そのため、人は常に、天なる神に最大の畏敬を抱き、キリストには侮蔑的な態度をとるのである。

キリストは地上で神自身の代わりに働きを行えるが、肉となった姿をすべての人に見せようとして来るのではない。すべての人が彼を見られるようにするために来るのではなく、自身の手によって人が導かれ、それにより、新たな時代へ入ることができるように来るのである。キリストの肉の役割は、神自身、つまり肉における神の働きを果たすことであり、人にキリストの肉の本質を十分理解させることではない。キリストがいかに働いても、彼のなすことが肉によって実現可能なことを超えることはない。キリストがいかに働いても、普通の人間性を持つ肉において働くのであり、神の真の顔を人に余すところなく明らかにしはしない。それに加えて、肉におけるキリストの働きは、人間が思うような超自然的なものでも、計り知れないものでもない。キリストは肉における神自身を表し、神自身がなすべき働きを自ら遂行するものの、天なる神の存在を否定したり、自身の業を大々的に公表したりすることはない。むしろ、自身の肉の中に謙虚に隠れたままである。キリスト自身以外でキリストを偽って名乗る者はみな、キリストの性質を有してはいない。そうした偽キリストの傲慢で自画自賛的な性質をキリストの性質と比べたならば、どのような肉体が真のキリストであるかが明らかになる。偽れば偽るほど、そうした偽キリストは自分自身を誇示し、人を欺くしるしや不思議をますます行うことができる。偽キリストは神の特性を有していないが、キリストは偽キリストの要素で汚されてはいない。神は肉の働きを完了させるためだけに肉となるのであり、単に人々が神を見られるように肉となるのではない。むしろ、彼は働きを通して自身の身分を明確にし、自身が表すものによって自分の本質を証明する。彼の本質は根拠のないものではない。彼の身分は自身の手によって握られてはいなかったのであり、それは彼の働きと本質によって決定される。彼は神自身の本質を持っており、神自身の働きを行えるが、やはり霊とは違って肉である。キリストは霊の特性を持つ神ではなく、肉の外形を有する神である。したがって、いかに普通で弱くとも、どのように父なる神の旨を求めても、彼の神性を否定することはできない。受肉した神の中にあるものは、普通の人間性とその弱さだけではない。そこにはキリストの肉における業とともに、彼の神性の不思議さと計り知れなさも存在する。ゆえに人間性と神性の両方が、現実かつ実際に、キリストの中に存在する。これは無意味なこと

でも、超自然的なことでもまったくない。彼は働きの実行を第一の目的として地上に来る。地上で働きを遂行するには、普通の人間性を有していることが必須である。そうでなければ、いかにキリストの神性の力が大きくても、その本来の機能を活用できない。キリストの人間性は非常に重要だが、それが彼の本質ではない。キリストの本質は神性である。ゆえに、彼が地上で自身の職分を始める瞬間は、彼が自身の神性の存在を表し始める瞬間なのである。彼の人間性は、自身の肉の普通の生活を維持するためだけにあり、それにより、彼の神性は肉において普通に働きを行うことができる。キリストの働き全体を指揮するのはキリストの神性なのである。働きを完了させるとき、彼は自身の職分をすでにまっとうしている。人が知るべきことはキリストの働き全体であり、彼は自身の働きを通して、人が彼を知ることが可能にする。働きを行う過程で、彼は自身の神性の存在を完全に表す。それは人間性によって汚された、あるいは人間の考えや振る舞いで汚された性質ではない。彼の職分がすべて終わりを迎えるとき、彼は表すべき性質をすでに残らず完全に表している。彼の働きが人の指示によって導かれることはない。彼の性質の表れもいたって自由であり、知性で支配されることも、思考で処理されることもなく、自然と明らかになる。これは、人には成し遂げられないことである。環境が厳しかったり、逆境に見舞われていたりしても、彼は適切な時に自身の性質を表すことができる。キリストである者がキリストの存在を表す一方、キリストでない者たちはキリストの性質を持たない。ゆえに、たとえすべての人が彼に抵抗したり、彼について観念を抱いたりしても、キリストの表す性質が神の性質であるということ、人間の観念に基づいて否定できる者はいない。真心でキリストを求め、意志を持って神を求めるすべての人が、キリストの神性の表れを基に、彼こそキリストだと認めるだろう。キリストに人の観念と一致しない側面があっても、それを基にキリストを否定することは決してない。人は極めて愚かだが、すべての人は、何が人の意志によるもので、何が神に由来するものかをはっきり知っている。多くの人は自分の意図の結果として、わざとキリストに反抗しているだけなのである。そうでなければ、キリストの存在を否定する理由など誰にもない。と言うのも、キリストの表す神性は確かに存在し、彼の働きは肉眼で確認できるものだからである。

キリストの働きと表れによって、キリストの本質が決定される。キリストは託された働きを、真心でもって完成させることができる。キリストは天なる神を心から崇め、真心でもって父なる神の旨を求めることができる。これはすべて、キリストの本質によって決定されている。そしてキリストの自然な表れも彼の本質によって決定されている。わたしがこれをキリストの「自然な表れ」と呼ぶのは、キリストの表れが模倣でも、人による教育の結果でも、人による長年の育成の結果でもない

からである。キリストはそれを学んだのでも、それでわが身を飾ったのでもない。むしろ、それは彼の中に本来備わっているものである。人はキリストの働き、表れ、人間性、そして普通の人間性による生活全体を否定するかもしれないが、キリストが真心でもって天なる神を崇拝すること、キリストが天なる父の旨を果たすために来たこと、そしてキリストが父なる神を求める際の誠実さを否定できる者はいない。キリストの姿は心地よい感覚をもたらさず、彼の説法に並外れた雰囲気はなく、また彼の働きは、人が想像するように、地を揺るがし、天を揺さぶるものではないが、彼は確かにキリストであり、真心でもって天なる父の旨を成し遂げ、天なる父に完全に服従し、死ぬまで従う者である。それは、彼の本質がキリストの本質だからである。この真実は人にとって信じがたいものだが、間違いなく事実である。キリストの職分が完全に果たされたとき、キリストの性質と存在が天なる神の性質と存在を表していることを、人は彼の働きから知るだろう。その時、キリストによるすべての働きの総和から、この者はまことに言葉が肉となった者であり、血と肉による人間とは違うことが分かるだろう。地上におけるキリストの働きの各段階はそれぞれ代表的な意味を持つが、それぞれの段階における実際の働きを経験する人は、彼の働きの意味を把握することができない。二度目に受肉した神による数段階の働きは特にそうである。キリストの言葉を見聞きしただけで、キリストに出会ったことのない者の大半は、キリストの働きについていかなる観念も持っていないが、キリストに出会い、その言葉を聞き、働きを経験した者は、働きを受け入れることが難しい。これはキリストの外見と普通の人間性が人の好みに合わないからではないのか。キリストが去ってからその働きを受け入れる者たちは、そのような困難に見舞われない。キリストの働きを受け入れるだけで、キリストの普通の人間性に接することがないからである。人は神に関する自身の観念を捨てることができず、それどころかキリストをあれこれ入念に調べる。これは、人がキリストの外見だけに注目し、キリストの働きと言葉を基に彼の本質を認識できないことが原因である。人がキリストの外見に目を向けず、キリストの人間性を論じるのを避け、人にはなし得ない働きをし、言葉を語る彼の神性についてしか語らないなら、人の観念は半分に減り、人の困難がすべて解決するまでになるはずだ。受肉した神による働きの間、人は彼を許容できず、彼について無数の観念を抱き、いつも抵抗し、不従順になる。人は神の存在を許容できず、キリストの謙虚さと隠れた性質に寛容を示すことができず、父なる神に従うキリストの本質を許すことができない。したがって、キリストは働きを終えた後、永遠に人と共に留まることができない。キリストが自分たちと共に暮らすことを、人が許そうとしないからである。キリストによる働きの期間中、人が寛容を示すことができれば、キリストが職分を果たし

た後も自分たちと共に暮らし続け、自分たちがキリストの言葉を徐々に経験していくのを彼に見られるなど、許容できるだろうか。そうなれば、多くの者がキリストのために躓くのではないだろうか。人は、キリストが地上で働くことだけを許す。これが人の寛容の限界である。キリストの働きがなければ、人ははるか昔にキリストを地上から追放していただろう。そうであれば、ひとたび働きが終わると、人はどれだけ寛容を示さなくなるだろうか。人はキリストを死に処し、死に至るまで拷問するのではないだろうか。キリストと呼ばれなければ、彼は人間のあいだで働きを行えなかったはずだ。キリストが神自身の身分でもって働きをせず、普通の人間としてのみ働いたなら、人はキリストが発する文章を一つも許容せず、ましてや彼の働きなどほんの少しも許容しなかっただろう。そのため、キリストは働きを行う中で、この身分しか持つことができない。このように、キリストの働きは、そうしなかった場合よりも強力である。なぜなら、人はみな立派な身分や地位のある者に従おうとするからである。神自身として働きを行う際、あるいは出現する際、キリストが神自身の身分を持っていなければ、働きを行う機会は一切ないだろう。キリストが神の本質とキリストの存在を有しているにもかかわらず、人は態度を和らげず、キリストが人類のあいだで容易に働くことを許さない。キリストは神自身の身分を持ちつつ働く。そのような働きは、そうした身分を持たずになされる働きより何十倍も強力だが、それでも人はキリストに対して完全に従順ではない。人はキリストの地位にのみ従い、キリストの本質には従わないからである。そうであれば、キリストがその地位から身を引く日が来たとき、キリストがわずか一日でも生き長らえることを、人は果たして許せるだろうか。神は人と共に地上で暮らし、自身の手による働きが後年もたらす効果を見たいと考えている。しかしキリストがわずか一日でも存在することを、人は許容できない。そのため、キリストは諦めるしかなかった。神がなすべき働きを人間のあいだでなし、職分を果たすのを許したのが、人の寛容と寛大さの限界である。キリストに直接征服された者たちはそうした寛大さを示すが、それでも、キリストが働きを終えるまで留まることを許すだけで、それ以上はたった一瞬でも留まることを許さない。そうであれば、キリストに征服されていない者たちはどうだろうか。受肉した神を人がこのように扱うのは、彼が普通の人間の外形を有するキリストだからではないのか。彼が神性だけを持ち、普通の人間性を持たなかったならば、人にとっての困難はいとも容易に解決されるのではないのだろうか。彼の本質はまさに天なる父の旨に従うキリストの本質であるにもかかわらず、人は彼の神性をしぶしぶ認めるだけで、普通の人としての彼の外形には興味を示さない。そのようなわけで、キリストは人間のあいだにいて喜びも悲しみも分かち合うという働きを取り消すしかなかった。人はもはやキリストの存在を許容できなかったからである。

人間の正常な生活を回復し、 素晴らしい終着点へと導き入れる

人は現在の働きと将来の働きを少しは理解しているが、人類が入る終着点については理解していない。被造物として、人は自身の本分を尽くすべきである。つまり、神のなすことが何であれ、神に付き従うべきである。わたしがあなたがたにどのような道を示そうとも、その道を歩むべきなのだ。あなたには、物事を自分で経営する術はなく、自分自身に対する支配力も持っていない。すべては神の采配に委ねられなければならない、一切は神の手中に握られている。神の働きによって人に結末、すなわち素晴らしい終着点が前もって与えられ、神がこれを用いて人を惹きつけ、自身に付き従わせるなら——つまり、神が人と取引をするなら——これは征服ではなく、人のいのちに働きかけることでもない。神が人間の結末を使ってその人を支配し、その人の心を得ようとするなら、それは人を完全にすることにも、人を得ることにもならず、ただ終着点を使って人を支配しようとしているだけだろう。人が気に掛けることといえば、将来の行く末、終着点、そして自分が何かよいことを望めるかどうかだけである。征服の働きの間、人に素晴らしい望みが与えられ、また人の征服に先立ち、人が追い求めるのに適した終着点が与えられるとしたら、人の征服はその効果を達成しないばかりか、征服の働きの効果に影響を及ぼすだろう。すなわち、征服の働きは、人から運命や前途を奪い取り、人の反抗的な性質を裁いて罰することでその効果を達成するのである。それは、人との取引、つまり人に祝福や恵みを与えることで達成されるものではなく、人の「自由」を剥奪し、人の前途を絶つことにより、人の忠誠心を明らかにすることで成し遂げられる。これが征服の働きの本質である。仮に最初から素晴らしい望みが与えられ、刑罰や裁きの働きがそのあとで行われるなら、人は自分の前途が開けることを基にして、この刑罰と裁きを受け入れるだろう。そして最終的には、すべての被造物による創造主への無条件の服従と崇拝が成し遂げられることはない。そこには盲目的で無知な従順さしかないか、さもなければ、人が神に対して無闇に要求するだけで、人の心を完全に征服することはあり得ないだろう。その結果、このような征服の働きで人を得るのは不可能であり、神を証しするなどなおさらできない。そのような被造物は自身の本分を尽くすことができず、ただ神と取引するだけである。これでは征服にならず、憐れみと祝福である。人の最も大きな問題は、自分の運命と前途のことしか考えず、それらを偶像化していることである。人は自分の運命と前途のために神を追い求めるだけで、神への愛から神を崇めることはない。そのため、人の征服においては、人の身勝手さや貪欲、そして神への崇拝を妨げるものは、すべて取り扱

われて排除されなければならない。そうすることで、人の征服の効果が達成される。その結果、人を征服する最初の段階で、人の野心や最も致命的な弱点を一掃し、これを通して神に対する人の愛を現し、人生についての認識を変え、また神に対する見方、自身の存在の意義などを変える必要がある。このようにして神に対する人の愛は清められる。つまり、人の心が征服されるのだ。しかし、すべての被造物に対する神の姿勢は、征服それ自体を目的として征服するというものではない。そうではなく、人を得るため、自らの栄光のため、そして人の最初の本来の姿を回復するために、人を征服するのである。征服することだけを目的として征服するならば、征服の働きの意義は失われてしまうだろう。つまり、人を征服した後、神が人に見切りをつけ、人の生死に気を留めないなら、これは人類に対する経営にも、人の救いのための征服にもならないだろう。征服された人が神のものとなり、最後に素晴らしい終着点へと到達することだけが、すべての救いの働きの中核であり、これによってのみ人を救う目的が果たされる。すなわち、人が素晴らしい終着点に到着し、安息に入ることだけが、すべての被造物が抱くべき前途であり、創造主によってなされるべき働きのものだ。仮に人がこの働きをしようものなら、それはあまりにも制限されたものになるだろう。人は、ある所までは行くことができて、永遠の終着点まで行くことはできないはずだ。自分の運命を決めることはできないし、自分の前途や未来の終着点を保証するなどなおさら不可能である。しかし神によってなされる働きは異なる。人を造ったからには、人を導く。人を救ったからには、その人を徹底的に救い、完全に獲得する。人を導くからには、その人を適切な終着点に連れて行く。そして、人を創造し、経営するからには、人の運命と前途に責任を負わなければならない。これこそが創造主によってなされる働きである。征服の働きは人の前途を絶つことでなされるが、人は最終的に、神が用意した適切な終着点へと導かれなければならない。人に終着点があり、運命を保証されているのはまさに、神が人に働きかけるからである。ここで言及されている適切な終着点とは、過去に一掃された人の望みや前途のことではない。この二つは異なるものなのだ。人が望んだり追い求めたりするものは、人にふさわしい終着点というよりもむしろ、途方もない肉の欲望を追い求めることから生じる渴望である。一方、神が人のために用意したものは、清められた人に与えられる祝福と約束であり、それは創世の後に神が人のために用意したものであって、人の選択、観念、想像、あるいは肉体によって汚されていない。この終着点はある特定の人に用意されたものではなく、全人類の安息の地である。したがって、この終着点は人類にとって最適な終着点なのだ。

創造主はすべての被造物を指揮することを意図している。神が何を行おうと、あ

なたはそれを放棄したり、それに背いたりしてはならないし、神に反抗すべきでもない。神による働きが最終的にその目的を達成したとき、それによって神は栄光を受ける。現在、あなたがモアブの子孫であるとか、赤い大きな竜の子孫であるとか言われたいのはなぜか。選民については何も語られず、被造物についてのみ語られるのはなぜか。被造物——これが人の本来の呼び名であり、人が本来持つ身分である。呼び名が異なるのは、働きの時代や期間が異なるからに過ぎない。実際、人はごく普通の被造物である。すべての被造物は、最も堕落したものであれ、最も聖いものであれ、被造物の本分を尽くさなければならない。征服の働きを実行するとき、神はあなたの前途や運命、あるいは終着点を利用してあなたを支配することはない。実際そのように働く必要はないのだ。征服の働きの目的は、人に被造物の本分を尽くさせ、創造主を崇めさせることである。そうして初めて、人は素晴らしい終着点に入ることができるのだ。人の運命は神の手によって掌握されており、あなたが自分を掌握することはできない。人はいつも自分自身のことであくせく動き回っているが、自分自身を掌握できずにいる。仮に自分の前途を知ることができ、自分の運命を掌握できるなら、それでもあなたは被造物だろうか。端的に言うと、神がどのように働いたとしても、その働きはすべて人間のためである。人の役に立つようにと神が造った天、地、そして万物を例に取ってみよう。神が人のために造った月、太陽、星、また動物や植物、春、夏、秋、冬などはすべて、人が生存するために造られた。したがって、神がどのように人を罰し、裁くにしても、それはどれも人の救いのためである。神が人から肉体の望みを剥奪したとしても、それは人を清めるためであり、人の清めは人の生存のためである。人の終着点が創造主の手の中にある以上、人はどうして自分自身を掌握できるだろうか。

ひとたび征服の働きが完了すると、人類は美しい世界へと連れて行かれる。もちろん、その生活はまだ地上にあるが、現在の人間の生活とはまったく違う。それは全人類が征服された後の生活であり、地上の人間にとって新しい始まりとなり、人類がそのような生活を送ることは、彼らが新しく美しい領域に入った証拠となる。それは地上における人と神の生活の始まりとなるのだ。そのような美しい生活の前提として、人は清められ征服された後、創造主の前に服従しなければならない。それゆえ、征服の働きとは、人類が素晴らしい終着点に入る前の、神の働きの最終段階である。そのような生活は地上における人類の未来の生活であり、地上で最も美しい生活、つまり人が待ち焦がれていたような生活であって、世界史上、人が決して達成したことのない生活である。それは六千年にわたる経営の働きの最終的な結果であり、人類が最も待ち望んでいたものであって、人間に対する神の約束でもある。しかし、この約束はすぐには実現されない。終わりの日の働きが完成され、人

が完全に征服されて初めて、すなわちサタンが完全に打ち負かされて初めて、人間は未来の終着点に入るのだ。人は精錬された後、罪深い本性がなくなる。それは、神がサタンを打ち負かしたからである、つまり、敵対勢力による侵略がなく、いかなる敵対勢力も人の肉体を攻撃できないのである。そのようにして、人は自由になり、聖くなり、永遠の中に入る。暗闇の敵対勢力が縛られて初めて、人はどこに行っても自由で、反抗や抵抗もなくなる。サタンは縛られなければならない、そうして人は無事でいられる。現在の状況になっているのは、サタンが地上のあちこちで問題を引き起こし、神の経営の働き全体がまだ終わっていないからである。ひとたびサタンが打ち負かされると、人は完全に解放される。人が神を得てサタンの支配下から抜け出すと、義の太陽を見ることになる。正常な人にふさわしい生活が取り戻され、正常な人が持っているべきもの――善悪を見分ける能力、衣食のあり方の理解、正常に生活する能力など――がすべて取り戻される。仮にエバが蛇に誘惑されていなければ、人は最初に創造された後、普通の生活を送っていたはずだ。人は食べ、服を着て、地上で普通の人の生活を送っていたはずなのだ。しかし人が墮落してから、このような生活は夢物語となり、現在でさえ、人はそのような物事をあえて想像しない。実際のところ、人が待ち望むこの美しい生活は不可欠である。人にそのような終着点がなければ、地上での墮落した生活は決して終わらないだろう。そして、そのような美しい生活がなければ、サタンの運命や、サタンが地上を支配する時代の終焉はないだろう。人は、暗闇の勢力が及ばない領域に達しなければならない。そうするとき、サタンが打ち負かされたことが証明される。このようにして、ひとたびサタンの妨害がなくなると、神は自ら人類を掌握し、人間生活全体を指揮して支配する。そのとき初めて、サタンが真に敗北したことになる。現在、人の生活は大方汚れの生活であり、依然として苦しみと患難の生活である。これではサタンの敗北と呼べない。人はいまだ苦難の海から脱しておらず、人生の苦痛、あるいはサタンの影響から抜け出しておらず、依然神に関して微々たる認識しか持っていない。人のすべての困難はサタンによって生み出され、人の人生に苦難をもたらしたのもサタンなので、サタンが縛られて初めて、人は苦難の海から完全に逃れることができる。しかし、サタンを束縛することは、人の心を征服し、獲得することで、また人をサタンとの闘いの戦利品にすることで成し遂げられる。

現在、人が勝利者になること、完全にされることを追い求めるのは、地上で正常な人の生活を送る以前に追求すべきことであり、サタンが束縛される以前に人が求めるべき目標である。実質的に、勝利者になって完全にされること、あるいは大いに用いられることを人が追い求めるのは、サタンの支配から逃れることである。人が追求しているのは勝利者になることだが、最終的な結果はサタンの支配から逃れ

ることである。サタンの支配から逃れることでのみ、人は地上で正常な人の生活、神を崇める生活を送ることができる。現在、人は勝利者になり、完全にされることを追い求めているが、それは地上で正常な人の生活を送る以前に求めるべきことである。それらのことは、おもに清められ、真理を実践するために、また創造主を崇めるために追求される。地上で正常な人の生活、困難や苦悩のない生活を送っているなら、人は勝利者になることをあえて追い求めはしないだろう。「勝利者になること」と「完全にされること」は、神が人に追求するよう与えた目標であり、これらの目標の追求を通して、人が真理を実践し、意義深い人生を送るようにしているのだ。その目的は、人を完全にして自分のものにすることであり、勝利者になることと完全にされることを追い求めるのは単なる手段に過ぎない。将来、人が素晴らしい終着点へと入るなら、勝利者になることや完全にされることについて言及されることはなく、被造物がそれぞれの本分を尽くすだけである。現在は、単に人間の範囲を定義するために、人にこれらのことを追求させているだけで、それによって人の追求はよりのつたものを絞ったもの、実践的なものになる。さもないと、人はぼんやりと上の空の状態で生き、永遠のいのちへの入りを追い求めるだろう。そうならば、人はますます衰れではないだろうか。目標や原則を持たずにこのような形で追い求めることは、自己欺瞞ではないだろうか。最終的に、このような追求が実を結ぶことは当然なく、人はいまだサタンの支配下で生きることになり、そこから脱出するのは不可能だろう。なぜ自分自身を、目的のないそうした追求に従事させるのか。永遠の終着点に入るとき、人は創造主を崇める。そして救いを得て、永遠の中に入ったので、人は何の目的も追求せず、またそれ以上に、サタンによって包囲される心配もない。この時、人は自分の立場を知り、本分を尽くす。そして、罰せられたり裁かれたりしなくとも、それぞれ自分の本分を尽くすだろう。その時、人は身分と地位の両方において被造物となる。高低の差はもはやない。各人がそれぞれの役割を果たすだけである。ただし、人は依然として人類の秩序ある適切な終着点の中で生きており、創造主を崇めるために本分を尽くす。そしてこの人類こそが永遠の人類となるのだ。その時、人は神に照らされた生活、神の配慮と加護の下での生活、そして神と共に生きる生活を獲得することになる。人類は地上で正常な生活を送り、すべての人が正しい軌道に乗る。六千年の経営計画は徹底的にサタンを打ち負かすことになるだろう。つまり、神は創造直後の人間の本来の姿を回復させ、そのようにして、神の本来の意図が成就する。最初、人類がサタンによって墮落させられる前、人間は地上で正常な生活を送っていた。その後、サタンに墮落させられて、人はこの正常な生活を失った。そこで、神の経営の働きと、人の正常な生活を取り戻すためのサタンとの戦いが始まった。六千年にわたる神の経営の働きが終

わって初めて、全人類の生活が地上で正式に始まり、そして初めて人は素晴らしい生活を送って、神は最初に人を創造したときの目的と、人の本来の姿を回復する。したがって、ひとたび人が地上で人類の正常な生活を始めると、勝利者になることや完全にされることを追求しなくなる。と言うのも、人は聖くなるからである。人が語るところの「勝利者」や「完全にされる」というのは、神とサタンとの戦いのあいだに人に与えられた、追い求めるべき目標である。そして、それらの目標が存在するのはひとえに、人が墮落したからである。あなたに目標を与え、その目標を追求させることで、サタンは打ち負かされるのだ。勝利者になったり、完全にされたり、用いられたりすることをあなたに求めるのは、サタンを辱めるために証しすることをあなたに要求しているのである。最後に、人は地上で正常な人の生活を送り、聖くなるだろう。そうなるとき、それでも彼らは勝利者になることを求めるだろうか。彼らはみな被造物ではないか。勝利者になることと、完全なものにされることについて言えば、それらの言葉はサタンと人の汚れを指している。この「勝利者」という単語は、サタンや敵対勢力に勝利することを指しているのではないだろうか。自分は完全にされたとき、あなたが言うとき、あなたの中のどこが完全にされたのか。それは、あなたが神への崇高な愛に達せるよう、墮落したサタンの性質を自分から取り除いたということではないのか。そのようなことは、人の中にある汚れたもの、そして、サタンと関連して語られる。それらは神と関連して語られるのではない。

現在、あなたが勝利者になることと完全にされることを求めないなら、将来、人類が地上で正常な生活を送るとき、そのような追求の機会はないだろう。その時には、あらゆる種類の人間の最後が明かされている。その際、あなたがどのような種類のものかが明らかにされ、勝利者になることや、完全にされることを願っても、それは不可能である。人は反抗心のゆえに、明らかにされてから懲罰を受けるだけである。その時、人間が追求するものは、他の人たちよりも高い地位ではない。勝利者になることを追求する人もいれば、完全にされることを追求する人もおり、また神の長子になることを追求する人もいれば、神の子になることを追求する人もいる。しかし、彼らはこれらのことを追求しない。すべての人が神の被造物となり、すべての人が地上で生活し、すべての人が神と共に地上で暮らす。今こそ、神とサタンとの戦いの時である。この戦いはまだ終わっておらず、人はいまだ完全に神のものとされていないので、これは移り変わりの期間である。それゆえ、人は勝利者になること、あるいは神の民の一員になることを追い求めるよう要求される。現在は地位に区別があるものの、時が来ればそのような区別はなくなる。勝利を得た人の地位はすべて同じで、全員が資格のある人間となり、地上で平等に生きる。つまりそれは、誰もが資格のある被造物となり、全員に同じものが与えられるという意

味である。神の働きの時代が異なり、神の働きの対象も違うので、この働きがあなたがたになされるなら、あなたがたは完全にされ、勝利者になる資格を持つ。仮にそれが国外でなされたとしたら、そこの人々こそが征服される最初の集団、完全にされる最初の集団となる資格を持つだろう。現在、この働きは国外ではなされていない。ゆえに、他国の人々に、完全にされ、勝利者になる資格はなく、最初の集団になるのは不可能である。神の働きの対象、神の働きの時代、そして神の働きの範囲が異なっているので、最初の集団、つまり勝利者たちがいて、完全にされる第二の集団も存在するだろう。完全にされた最初の集団がひとたび生まれると、模範と見本も存在するようになる。そのため将来的に、完全にされた第二、第三の集団も生まれるだろうが、永遠の中ではみな同じであり、地位による分類もない。彼らはただ異なる時に完全にされるのであって、地位の違いはまったくない。すべての人が完全にされ、全宇宙におよぶ働きの終わりが来ると、地位の区別はなく、すべての人が平等な地位を持つ。現在、この働きがあなたがたのあいだでなされているのは、あなたがたが勝利者になるためである。仮にこれが英国でなされたら、あなたがたが最初の集団になるのと同じように、英国で最初の集団が生まれるだろう。それはただ、あなたがたの中で現在の働きが実行され、あなたがたが特に祝福されて恵みを授けられているだけのことである。この働きがあなたがたのあいだでなされなかったとしたら、あなたがたが二番目の集団、もしくは三番目、四番目、五番目の集団となるだろう。これは単に働きの順序の違いによるものである。一番目と二番目の集団があることは、一方の地位が高く、もう一方の地位が低いという意味ではない。それは単に、この人たちが完全にされる順番を意味しているだけである。現在、これらの言葉があなたがたに伝えられているが、もっと早くに知らされなかったのはなぜか。その理由は、過程がなければ、人々は極端に走る傾向があるからである。たとえば、イエスは当時、「わたしは去ったときと同じように、再び来る」と言った。現在、多くの人がこの言葉に取り憑かれ、白い衣を着て天に携挙されるのを待つことばかり望んでいる。したがって、早急に語るべきでない言葉が多数ある。早急に語ってしまうと、人は極端に走るからである。人の霊的背丈はあまりに低く、これらの言葉の真相を見抜くことができないのだ。

人類が地上で真の人間生活を達成し、サタンの全勢力が縛られると、人は地上で楽に生きるようになる。物事も現在ほど複雑ではなくなるだろう。人間関係、社会関係、複雑な家族関係など、なんと厄介で苦痛に満ちていることか。地上の人間生活はとてもみじめだ。ひとたび征服されると、人の心と思いは変化し、神を畏れて愛する心を持つだろう。神を愛することを求める全宇宙の全員が征服されると、つまりサタンが打ち負かされ、サタン——暗闇の全勢力——が縛られると、地上にお

ける人の生活は困難でなくなり、地上で自由に生きられる。人の生活に肉の関係がなく、肉の複雑さもないなら、どれほど楽なことだろう。人の肉的な関係はあまりに複雑で、人がそのようなものを持つことは、いまだサタンの影響から解放されていない証拠である。もしあなたが兄弟姉妹の一人ひとりと同じ関係を持ち、家族のそれぞれとも同じ関係を持っていたら、あなたは何の心配もないだろうし、誰かを心配する必要もないだろう。これ以上によいことはないはずだし、そうすれば苦しみの半分から解放されるに違いない。地上で正常な人間の生活を送ると、人は天使のようになる。依然として肉体を持っはいるが、天使のようになるのだ。これは最後の約束、人に授けられる最後の約束である。現在、人は刑罰や裁きを経ているが、人間がそのような経験をするを、あなたは無意味だと思うのか。刑罰や裁きの働きが何の理由もなく行われるだろうか。以前、人を罰して裁くことは、人を底なしの穴に落とすことだと言われてきた。それはつまり、人の運命と前途を奪い取るという意味である。これはただ一つのこと、つまり人を清めるためである。神は人を故意に底なしの穴に落しておいて、人間に見切りをつけるのではない。むしろ、人の中にある反抗心を取り扱い、最終的に人の中にあるものが清められ、神に対して真の認識を持ち、人が聖なる者のようになるためである。それがなされるならば、すべてのことが成し遂げられるだろう。実際、人の中にある、これらの取り扱われるべきものが取り扱われ、人が鳴り響くような証しをするとき、サタンもまた打ち負かされ、たとえ人の中に生来あるものがいまだ完全に清められず、少しは残っていても、ひとたびサタンが敗北すると、もはやサタンが困難をもたらすことはなく、その時こそ人は完全に清められている。人はそのような生活を経験したことがないものの、サタンが打ち負かされるとすべて決着がつき、人の中にある些細なことはすべて解決される。おもな問題が解決されると、他のあらゆる問題も解決する。神が今回地上で受肉している期間、人のあいだで自ら働きをなすとき、その働きはすべて、サタンを打ち負かすために行われる。そして、神は人を征服し、あなたがたを完全にすることで、サタンを敗北させるのだ。あなたがたが鳴り響くような証しをするとき、これもまた、サタンの敗北のしるしとなる。サタンを打ち負かすにはまず、人が征服され、最終的には完全にされる。ただし、これは実質的にサタンの敗北であると同時に、全人類がこのむなしい苦悩の海から救われることでもある。この働きが全宇宙で実行されるのか、中国で実行されるのかにかかわらず、そのすべてはサタンを打ち負かすためであり、また人が安息の地に入れるよう、全人類に救いをもたらすためである。受肉した神、つまりこの普通の肉体はまさに、サタンを打ち負かすためなのだ。受肉した神の働きは、神を愛する天下の全員に救いをもたらすために用いられ、それは全人類を征服するためであり、さらに

は、サタンを打ち負かすためである。神による経営の働き全体の中核は、全人類に救いをもたらすためのサタンの敗北と切り離せない。この働きの多くにおいて、あなたがたに証しをさせることが常に語られているのはなぜか。そしてその証しは誰に向けられているのか。それはサタンに向けられているのではないか。この証しは神のためになされ、神の働きがその効果を上げたことを証しするためのものである。証しをすることは、サタンを打ち負かす働きと関係している。仮にサタンとの戦いがなければ、証しをするよう人に求められることはないだろう。神が人を救うと同時に、サタンの前で神に証しをするよう人に対して求めるのは、サタンが打ち負かされるべき存在だからである。人を救い、サタンと戦うために、神はそれを用いるのだ。したがって、人は救いの対象であり、またサタンを打ち負かす道具でもある。そのため、人は神の経営の働き全体の核心に置かれており、サタンは滅ぼす対象、つまり敵に過ぎない。あなたは、自分は何もしていないとを感じるかもしれないが、あなたの性質が変わることで、証しとなっている。そしてこの証しは人に対してなされるのではなく、サタンに向けられている。人はそのような証しを享受するのに適していない。神によってなされた働きを、どうして人が理解できようか。神の戦いの対象はサタンであり、人は救いの対象に過ぎない。人には墮落したサタンの性質があるので、この働きを理解できない。それはサタンによる墮落のゆえであり、人が生まれつきそうだというわけではなく、サタンによって仕向けられているのだ。現在、神のおもな働きはサタンを打ち負かすことである。つまり、人を完全に征服し、その結果、人がサタンの前で、神に最後の証しをするためである。このようにして、すべてのことが成し遂げられる。多くの場合、あなたの肉眼では、何みなされなかったように見えるが、実際、働きはすでに成し遂げられている。人は、成し遂げられたすべての働きが目に見えることを要求するが、わたしはそれをあなたの目に見えるようにすることなく、働きを成し遂げたのだ。と言うのも、サタンが服従したからであり、そのことは、サタンが完全に打ち負かされ、神の知恵、力、権威のすべてがサタンに勝利したことを意味する。これこそがなされるべき証しであって、人にとって明白な表れがなく、肉眼では見えなくても、サタンはすでに打ち負かされたのだ。この働きのすべてがサタンに向けられており、サタンとの戦いのゆえに実行される。したがって、人には成功したように見えない多くのことがあるものの、神の目から見れば、ずいぶん前に成功しているのだ。これは神によるすべての働きに秘められた真実の一つである。

ひとたびサタンが打ち負かされると、つまり人が完全に征服されると、この働きはすべて救いのためであり、この救いの手段は人々をサタンの手から取り戻すことなのだと、人は理解するだろう。六千年にわたる神の経営の働きは、律法の時代、

恵みの時代、神の国の時代の三段階に分かれている。これら三段階の働きはすべて人類の救いのためである。すなわち、それらはサタンによってひどく墮落させられた人類の救いのためなのだ。けれども、それは同時に、神がサタンと戦うためでもある。したがって、ちょうど救いの働きが三段階に分かれているように、サタンとの戦いも三段階に分かれており、神の働きにおけるこの二つの側面は同時に行われる。サタンとの戦いは実際、人類の救いのためであり、また、人類を救う働きは一段階で見事に成し遂げられるものではないから、サタンとの戦いもまたいくつかの段階と期間に分けられる。そして戦いは、人間の必要と、サタンによる人間の墮落の程度に応じて、サタンに対して遂行される。おそらく人は、二つの軍勢が戦うのと同じように、神が武器を取ってサタン相手に戦うのだらうと、想像の中で考えているだろう。これが人の知能で想像できる限度であり、この上なく曖昧で、非現実的な考えだが、人はそう信じている。そして、人の救いの手段はサタンとの戦いだ、わたしがここで言うものだから、人はそのような戦いの様子を想像する。人の救いの働きは三段階で実行された。つまり、サタンとの戦いは三段階に分割され、それによってサタンを完全に打ち負かすのだ。しかし、サタンとの戦いという働き全体に秘められた真相は、人に恵みを施し、人の罪の捧げ物となり、人の罪を赦し、人を征服し、人を完全にするといういくつかの段階を通して、その効果が達成されるということである。実際、サタンとの戦いは、武器を手にしてサタンに立ち向かうものではなく、人の救い、人のいのちへの働き、そして人の性質を変えることであり、それによって人は神を証しする。サタンはこのようにして打ち負かされるのだ。人の墮落した性質を変えることを通して、サタンは打ち負かされる。サタンが敗北すると、つまり、人が完全に救われると、辱めを受けたサタンは完全に縛られ、こうして人は完全に救われることになる。ゆえに、人の救いの実質はサタンとの戦いであり、サタンとの戦いはおもに人の救いに反映される。人が征服される終わりの日の段階は、サタンとの戦いの最終段階であり、また、人をサタンの領域から完全に救う働きでもある。人の征服の秘められた意味は、サタンの化身、つまりサタンに墮落させられた人間が、征服に引き続いて創造主のもとへと戻ることであり、これによって人はサタンを捨て、完全に神へと立ち返る。このようにして、人は完全に救われることになる。したがって、征服の働きはサタンとの戦いにおける最後の働きであり、サタンを打ち負かす神の経営の最終段階である。この働きがなければ、人の完全な救いは最終的に不可能で、サタンの完全な敗北も不可能なはずだ。そして、人類は決して素晴らしい終着点に入ることができず、サタンの影響から自由になることもできない。したがって、人の救いの働きを、サタンとの戦いが終結する前に完了させることはできない。なぜなら、神の経営の働きの核心は人

類の救いだからである。最初の人類は神の手の中にあったが、サタンによる誘惑と墮落によって、人はサタンに縛られ、悪しき者の手中に落ちてしまった。こうしてサタンは、神の経営の働きで打ち負かされる対象となった。サタンは人間を自分の所有物としたが、人は神による経営全体の資本なので、人が救われるには、サタンの手から取り戻されなければならない。すなわち、サタンの虜となった人間を取り戻す必要があるのだ。かくしてサタンは、人間の古い性質の変化、人間の本来の理知を回復する変化によって打ち負かされなければならない。こうして、虜となっていた人間をサタンの手から取り戻すことができる。人がサタンの影響や束縛から自由になると、サタンは辱められ、人は最終的に取り戻され、サタンは打ち負かされる。そして人はサタンの暗闇の影響から解放されたので、この戦い全体の戦利品となり、戦いが終わるとサタンは懲罰の対象となる。その後、人類を救う働き全体が完了するのである。

神は被造物に対して悪意を抱いておらず、サタンを打ち負かすことだけを願っている。神の働きのすべては――それが刑罰であろうと裁きであろうと――サタンに向けられている。それは人類の救いのために実行され、いずれもサタンを打ち負かすためであり、目的は一つである。つまり、サタンと最後まで戦うことである。そしてサタンに勝利するまで、神は決して休まず、サタンを打ち負かして初めて休息する。神によってなされるすべての働きはサタンに向けられており、また、サタンに墮落させられた人たちはみなサタンの領域で支配され、サタンの領域で生きているので、サタンと戦ってそれを打破しなければ、サタンがその人たちへの掌握を緩めることはないだろうし、彼らが神のものとされることもないだろう。そうした人たちが神のものとされなければ、それはサタンが打ち負かされておらず、敗北していないことを証明するはずだ。ゆえに、六千年にわたる神の経営計画の最初の段階で、神は律法の働きをなし、第二段階で恵みの時代の働き、すなわち磔刑の働きをなしたのであって、第三段階では人類征服の働きを行う。このすべての働きは、サタンが人類を墮落させた度合いに応じており、それはすべてサタンを打ち負かすためであって、どの段階もサタンを打ち負かすためである。六千年にわたる神の経営の働きの実質は、赤い大きな竜に対する戦いであり、人類を経営する働きもまた、サタンを打ち負かす働き、サタンと戦いを交える働きである。神は六千年にわたって戦い、このようにして、人を最終的に新たな領域へと導き入れるために、六千年も働いてきたのだ。サタンが打ち負かされるとき、人は完全に自由になる。これこそが現在の神の働きの方向ではないだろうか。これがまさに、現在の働きの方向である。つまり、人を完全に解放して自由にするのである。その結果、人はどんな規則にも支配されず、あらゆる束縛や抑制にも制限されなくなる。この働きはすべて、あなたがたの霊的背丈と必要に応じてなされる。つまり、あなたがたに成し遂

げられることが何であれ、それがすべて施されるということだ。それは、「アヒルを追いやって木に止まらせる」というような、あなたがたに何かを課すものではない。そうではなく、この働きはどれも、あなたがたの実際の必要に応じてなされるのである。それぞれの段階の働きは、人の実際の必要と要求に応じてなされる。働きの各段階はサタンを打ち負かすためなのだ。実際、最初は創造主と被造物のあいだに壁はなかった。そうした障壁はすべてサタンによって生み出されたのである。人はサタンによる妨害と墮落のせいで何も見えなくなり、触れることもできなくなった。人は犠牲者であり、欺かれた者である。ひとたびサタンが敗北すると、被造物は創造主を見上げ、創造主は被造物に目を注ぎ、自ら彼らを導くことができる。人が地上で送るべき生活はそれしかない。したがって、神の働きはおもにサタンを打ち負かすことであり、サタンが敗北すると、すべてが解決される。あなたは今、神が人々のあいだに来たというのは単純なことではないと分かっている。神はあなたがたの欠点を毎日見つけて、あれこれ指摘するために来たのではなく、単に自らの容貌、話し方、生き方を見せるために来たのでもない。神が肉となったのは、ただあなたがたに神を見上げさせるためでも、あなたがたの目を開くためでもなく、自身が語る奥義と自身が開いた七つの封印を聞かせるためでもない。むしろ、神はサタンを打ち負かすために肉となったのだ。神は人を救うために、またサタンと戦うために、自ら受肉して人のもとに来た。これが神の受肉の意義である。仮にそれがサタンを打ち負かすためでなければ、このような働きを自らすることはないだろう。神は人々のあいだで自身の働きをなすため、自分自身を自ら人に明かすため、また、人が神を見上げられるようにするために地上へ来た。これは些細なことだろうか。いや、実に驚くべきことである。人の想像とは違い、神が来たのは、人が神を見上げるようにするため、また神は実在し、漠然として空しい存在ではなく、いと高き方であるが同時に謙虚であることを、人に理解させるためである。これはそれほど単純なことだろうか。神が肉の姿をとってサタンと戦い、自ら人を牧さなければならないのはまさに、サタンが人の肉体を墮落させ、人間こそ神が救おうと意図する存在だからである。神の働きに有益なのはこれしかない。二度にわたって受肉した神の肉体はサタンを打ち負かすために存在し、また、より効果的に人を救うために存在した。なぜなら、サタンと戦う存在は、それが神の霊であれ、受肉した神の肉体であれ、神をおいて他にいないからである。要するに、サタンと戦いを交える者が天使のほではなく、ましてやサタンに墮落させられた人間であるはずもない。天使にその戦いを行う力はなく、人間はさらに無力である。このように、人のいのちに働きかけることや、人を救うために自ら地上に来ることを望むなら、神は自ら肉となり、つまり自ら肉をまとい、神の本来の身分と、神がしな

ければならない働きをもって、人々のあいだに来て人間を救わなければならない。仮にそうではなく、この働きをしたのが神の霊か人間だったなら、この戦いからは何も生じず、終結することも決してないだろう。神が肉となり、人々のあいだで自らサタンとの戦いに臨んで初めて、人に救いの機会があるのだ。さらに、その時初めてサタンは辱められ、利用する機会も、企てる計画も一切なくなる。受肉した神によってなされる働きを、神の霊が成し遂げることは不可能であり、肉なる人間が神に代わって成し遂げることはなおさら不可能である。と言うのも、神がなす働きは人のいのちのため、人の墮落した性質を変えるためだからだ。人がこの戦いに加わるとしたら、無残に混乱してただ逃げるだけで、自分の墮落した性質を変えることはまったくできない。十字架から人間を救ったり、反抗的な人類全員を征服したりするなど、人間には不可能であり、原則を超えない古い働きを多少するか、サタンの敗北とは関係ない他の働きをすることしかできないだろう。それならなぜ、思い煩う必要があるのか。人間を獲得することも、ましてサタンを打ち負かすこともできない働きに何の意味があるのか。したがって、サタンとの戦いは神自身によってのみ遂行され得るのであって、人には到底不可能である。人の本分は服従して付き従うことである。なぜなら、人は天地創造に類する働きも、そのうえサタンと戦う働きを遂行することもできないからである。人はただ神自身による指導の下、創造主を満足させることができるだけであり、それを通してサタンは打ち負かされる。これが人にできる唯一のことである。それゆえ、新しい戦いが始まるたびに、つまり新しい時代の働きが始まるたびに、この働きは神自身によってなされ、それを通して、神はその時代全体を導き、全人類のために新しい道を切り開く。それぞれの新しい時代の幕開けは、サタンとの戦いの新たな始まりであり、それによって人間は、さらに新しく美しい領域、そして神自身が導く新たな時代に入る。人は万物の主人だが、神のものとされた人たちはサタンとのすべての戦いの実となるだろう。サタンは万物を墮落させる者であり、すべての戦いが終わると敗北者になり、これらの戦いに続いて懲罰される者でもある。神、人、サタンのうち、サタンだけが忌み嫌われ、拒絶される者である。その一方で、サタンのものにされ、神によって取り戻されない人たちは、サタンに代わって懲罰を受ける者たちである。これら三者の中で、神だけが万物に崇められるべきである。一方、サタンに墮落させられたが、神によって連れ戻され、神の道に従うようになった人たちは、神の約束を受け取り、神のために邪惡な者たちを裁く者となるだろう。神は必ずや勝利し、サタンは必ずや敗北するが、人々の中には、勝利する者と敗北する者がいる。勝利する者たちは勝利者に属し、敗北する者たちは敗北者に属する。これはそれぞれの者を種類によって分類することであり、神によるすべての働きの最後の終結であ

る。それはまた、神によるすべての働きの目的でもあり、決して変わることはない。神の経営計画のおもな働きの核心は、人の救いに焦点を当てており、神はおもにこの核心のため、この働きのため、さらにはサタンを打ち負かすために、肉となるのである。神が初めて肉となったのも、サタンを打ち負かすためだった。神は最初の戦いの働き、すなわち人類の贖いの働きの完了させるべく、自ら肉となり、自ら十字架にかけられた。同じように、この段階の働きも、人のあいだで働き、自ら言葉を語り、人に神を見させるべく肉となった神自身によってなされるのだ。もちろん、神が途中で他の働きもすることは避けられないが、自身の働きを自ら行うおもな理由は、サタンを打ち負かすため、全人類を征服するため、そしてこれらの人々たちを獲得するためである。したがって、神の受肉による働きは決して単純なことではない。仮にその目的が、神は謙虚に隠れていて、実在する存在だと人に示すことだけで、この働きをするためだけだったなら、神が肉となる必要はなかっただろう。たとえ肉とならなかつたとしても、自身が謙虚に隠れた存在であること、そして自身の偉大さと聖さを人間に直接明かすことができただろう。しかし、そのようなことは人類を経営する働きとは何の関係もない。それらによって人を救ったり、人を完全にしたりすることは不可能で、ましてやサタンを打ち負かすことなどできない。サタンを打ち負かすことにおいて、聖霊が霊と戦うだけなら、そのような働きの実際の価値はさらに低いだろう。人を獲得することはできず、人の運命と前途を台無しにしてしまうはずだ。このように、現在の神の働きには深遠な意味がある。それは、人が神を見られるようにするため、人の目が開かれるようにするため、あるいは人に多少の感動と励ましを与えるためではない。そのような働きに意味はない。この種の認識についてしか語るができないなら、それはあなたが神の受肉の真の意義を分かっていない証拠である。

神の経営計画全体の働きは、神自身によって直接行われた。第一段階、すなわち創世は神自身によって直接行われたのであり、そうでなければ誰も人類を創造できなかったはずだ。第二段階は全人類の贖いであり、それもまた神によって直接行われた。第三段階は言うまでもない。神の働きはすべて、なおさら神自身が終わらせなければならないのである。全人類を贖い、征服し、獲得し、完全にすることは、すべて神自身が直接遂行する。神がこの働きを自ら行わないとしても、人が神の身分を表すことはできないし、神の働きを行うこともできない。サタンを打ち負かし、人類を獲得するために、また、地上での正常な生活を人に与えるために、神は自ら人を導き、人のあいだで自ら働く。神の経営計画全体、そして神によるすべての働きのために、神は自らこの働きをしなければならない。もし人が、神が来たのは人が神を見られるようにするため、また人を幸せにさせるためだと思わない

なら、そのような認識には何の価値もなく、何の意義もない。人の認識はあまりにも浅いのだ。神が自ら遂行して初めて、この働きは余すところなく完全に行われる。人が神に代わってそれを行うことはできない。人には神の身分も本質もないのだから、神の働きを行うのは不可能である。たとえ人がその働きを行ったとしても、何ら効果はないだろう。最初に神が肉となったのは贖いのためであり、全人類を罪から贖い、人間が清められ、罪を赦されるようにするためだった。征服の働きも神自身によって人のあいだでなされる。この段階において、神が預言しか語らないのであれば、預言者か、誰か賜物のある者がいて、その人が神に代わることもできよう。預言しか語られないのであれば、人が神に取って代わることもできよう。しかし、人が自ら神自身の働きを行い、人間のいのちに働きかけようとしても、この働きを行うのは不可能だろう。それは神自身によって直接なされなければならない。言葉の時代において、仮に預言しか語られないのであれば、預言者イザヤかエリヤがいて、その働きを行うだろうし、神自身が直接それを行う必要はないはずだ。この段階においてなされる働きは、単に預言を語ることだけではないので、また言葉の働きを用いて人を征服し、サタンを打ち負かすほうがより重要なので、人がこの働きを行うのは不可能であり、神自身によって直接なされなければならない。律法の時代、ヤーウェは神の働きの一部を行い、その後、預言者を通していくつかの言葉を語り、多少の働きをなした。それは、人がヤーウェに代わってその働きを行うことができ、預言者は物事を預言し、神に代わって夢を解き明かすことができたからである。初めになされた働きは、人の性質を直接変える働きではなく、人の罪とも関係がなく、人は律法を守ることを要求されていた。それゆえ、ヤーウェが肉となって人に姿を見せることはなかったのである。その代わり、ヤーウェはモーセをはじめとする人たちに直接語り、自身の代わりに語らせ、働きを行わせ、人のあいだで直接働かせた。神の働きの第一段階は人を導くことだった。それがサタンとの戦いの始まりだったのだが、この戦いはまだ正式には始まっていなかった。サタンとの正式な戦いは神の最初の受肉とともに始まったが、それは今日に至るまでずっと続いている。この戦いにおける最初の戦闘は、受肉した神が十字架にかけられたときである。受肉した神が十字架にかけられたことでサタンは敗北したが、それはこの戦いで成功に終わった初めての段階だった。受肉した神が人のいのちに直接働きかけることを始めたときこそが、人を取り戻す働きの正式な始まりである。これは人間の古い性質を変える働きなので、サタンと戦いを交える働きだった。初めにヤーウェによってなされた働きの段階は、単に地上における人の生活を導くことに過ぎなかった。それは神の働きの始まりであって、いかなる戦いも、いかなる大きな働き

もいまだ含んではいなかったが、来たるべき戦いの働きの基盤を築いた。その後、恵みの時代になされた第二段階の働きには、人の古い性質を変えることが含まれていたが、それは神自身が人のいのちに働きかけたことを意味する。これは神自身によってなされなければならず、神が自ら肉となることを必要とした。仮に神が肉となっていなければ、他の誰一人として、この段階の働きにおいて神に代わることはできなかっただろう。と言うのも、それはサタンと直接戦う働きを表していたからである。人が神に代わってこの働きを行ったとしたら、たとえサタンに立ち向かって、サタンは服従しなかっただろうし、サタンを打ち負かすことは不可能だったはずだ。サタンを打ち負かすのは、受肉した神でなければならなかった。なぜなら、受肉した神の本質は依然として神であり、受肉した神はやはり人のいのち、そして創造主だからである。何があろうと、神の身分と本質は変わらない。そのため神は肉をまとい、サタンを完全に服従させる働きを行った。終わりの日の働きの段階において、仮に人がこの働きをなし、言葉を直接語ることになっても、それらを語ることはできないだろう。そして、仮に預言が語られたとしても、その預言が人間を征服することは不可能だろう。神は肉をまとうことで、サタンを打ち負かし、完全に服従させるために来る。神がサタンを完全に打ち負かし、完全に人を征服し、完全に人を自分のものにするとき、この段階の働きは完了し、成功に終わる。神の経営において、人が神の代役を務めることはできない。特に、時代を導いて新たな働きを始めることは、なおさら神自身によって直接なされる必要がある。人に啓示を与えたり、預言をもたらしたりするのは、人間でも可能なことだが、もしそれが、神によって直接行われるべき働き、また神自身とサタンとの戦いの働きであるなら、人間がその働きをなすことは不可能である。サタンとの戦いがなかった第一段階の働きにおいて、ヤーウェは預言者たちによって語られた預言を用いて、自らイスラエルの民を導いた。その後、第二段階はサタンとの戦いになり、神自身が直接肉となり、肉の中に入ってこの働きを行った。サタンとの戦いに関することは何であれ、神の受肉も関係している。つまり、人間がその戦いを行うのは不可能だということである。仮に人間が戦うことになっても、サタンを打ち負かすことは不可能だろう。いまだサタンの支配下にある人間が、どうしてサタンと戦う力を持てようか。人は真ん中にいる。もしもサタンのほうに傾くなら、あなたはサタンに属しているが、神を満足させるなら、あなたは神に属す。人が神に代わってこの戦いの働きをなさそうとするなら、人にそれが可能だろうか。仮にそうしていたら、とうの昔に滅びていたのではなかろうか。とうの昔に冥府へ入っていたのではなかろうか。このように、人が神に代わってその働きをなすことはできない。つまり、人には神の本質がなく、あなたがサタンと戦いを交えたとしても、サタンを打ち負かす

ことは不可能だろう。人にはある程度の働きしかできない。幾人かを勝ち取ることはできるだろうが、神自身の働きにおいて神の代役を務めることはできない。どうして人がサタンと戦うことなどできようか。あなたが戦いを始めるよりも早く、サタンはあなたを虜にするだろう。神自身がサタンと戦い、それを基に人が神に付き従い、服従して初めて、人は神のものとされ、サタンの束縛から逃れられる。人が自分自身の知恵と能力で達成できることは、あまりにも限られている。人には人間を完全にしたり、導いたり、さらには、サタンを打ち負かししたりするなど不可能である。人の知能と知恵で、サタンの企みを阻止することはできない。ゆえに、どうして人がサタンと戦うことなどできようか。

完全にされたいと思う者たち全員に、完全にされる機会がある。だからみな落ち着いていなければならない。将来、あなたがたの全員が終着点に入るだろう。しかし、完全にされたいと思わず、素晴らしい領域に入る意欲がないなら、それはあなた自身の問題である。進んで完全にされようとし、神に忠誠を尽くす者たち、服従する者たち、そして自分の役割を忠実に果たす者たち——そのような人たちはみな、完全にされることが可能である。現在、自分の本分を忠実に尽くさない者たち、神に忠誠を尽くさない者たち、神に服従しない者たち、とりわけ、聖霊の啓示と照らしを受けながら、それを実践しない者たち——そのような人たちはみな、完全にされることが不可能である。神に進んで忠誠を尽くし、服従する者は、たとえ多少無知であっても、みな完全にされることが可能である。進んで追求する全員が完全にされ得るのだ。この点で心配する必要はまったくない。あなたが進んでこの方向を追求する限り、完全にされることが可能である。わたしはあなたがたのうち誰も見捨てたり、淘汰したりするつもりはないが、人が懸命に努力しないなら、あなたは自分自身に破滅をもたらすだけである。あなたを淘汰するのはわたしでなく、あなた自身なのだ。あなた自身が懸命に努力しないなら——怠慢で、自分の本分を尽くすことも、忠誠を尽くすこともなく、真理を追求せずについて好き勝手なことをし、無謀に振る舞い、自分の名声と富のために争い、異性に対して不道德な接し方をするなら、あなたは自分の罪の結果を自分で負わなければならない、誰の同情にも値しない。わたしの目的は、あなたがたの全員が完全にされることであり、少なくとも、あなたがたが征服され、その結果、この段階の働きが成功のうちに完了することである。神の願いは、一人ひとりが完全にされ、最終的に神のものとされ、神によって完全に清められ、神に愛される者となることである。あなたがたは落伍者だとか、素質が乏しいなどとわたしが言おうと、気にすることはない。これはすべて事実である。わたしがこう言っても、それは、わたしがあなたがたを見捨ててるつもりであり、あなたがたに望みを失ってしまったという証拠ではなく、まし

てや、あなたがたを救う気はないという証拠などではない。現在わたしは、あなたがたを救う働きをなすために来ている。つまり、わたしがなす働きは、救いの働きの続きなのだ。完全にされる機会は各人に与えられている。あなたが進んで完全にされようと思うなら、また、あなたが追求するなら、最後にその成果を上げることができ、あなたがたの誰一人として見捨てられることはないだろう。あなたの素質が乏しければ、わたしはその乏しい素質に見合ったことをあなたに要求する。あなたの素質が優れていれば、わたしはその優れた素質に見合ったことをあなたに要求する。あなたが無知で無学なら、わたしはあなたの無学に見合ったことを要求する。あなたに教養があるなら、わたしはあなたに教養があるという事実に見合ったことを要求する。あなたが高齢なら、わたしはあなたの年齢に見合ったことを要求する。あなたに人をもてなすことができるなら、わたしはそれに見合ったことを要求する。あなたに人をもてなすことができず、特定の役割しか果たせないと言うのなら、それが福音を伝えることであれ、教会の管理であれ、その他の一般的な事柄に対応することであれ、あなたが果たす役割に応じて、わたしはあなたを完全にする。忠誠を尽くすこと、最後の最後まで従うこと、神への崇高な愛を求めること――これこそあなたが達成しなければならないことであり、この三つ以上に優れた実践はない。最終的に、人はこれら三つを達成することを要求される。そして、それらを達成できるなら、その人は完全にされるだろう。しかし何にもまして、あなたは真剣に追い求め、消極的になるのではなく、積極的に前に進み、上を目指さなければならない。すべての人に完全にされる機会があり、完全にされることが可能であると、わたしはすでに言った。これは事実だが、あなたが自分の追求において向上しようとしなかった場合は別である。また、これら三つの必要条件を満たすことができないなら、あなたは最後に淘汰されるはずだ。すべての人が追いつき、すべての人が聖霊の働きと啓きを得て、最後まで服従できることを、わたしは望んでいる。なぜなら、これこそが、あなたがた一人ひとりが尽くすべき本分だからだ。あなたがたがみな本分を尽くしたとき、その全員が完全にされ、鳴り響く証しを持つだろう。証しを持つ者はみなサタンに勝利し、神の約束を得た人である。そして彼らこそ、素晴らしい終着点で生き続ける人である。

神と人は共に安息へと入る

はじめ、神は安息の中にいた。当時、地上には人類も他の何物もなく、神はまだまだ何の働きもしていなかった。人類が存在するようになり、さらに人類が墮落して初めて、神は経営の働きに取りかかった。それ以降、神は安息から去り、人類のあ

いだで忙しく働き始めた。神が安息を失ったのは人類が墮落したため、また大天使が裏切ったためである。サタンを打ち負かさず、墮落した人類を救わなければ、神は決して再び安息に入れない。人に安息がないので、神にも安息がない。そして神がもう一度安息の中に入るとき、人も安息の中に入る。安息の中の生活とは、戦いがなく、汚れがなく、いつまでも続く不義がない生活である。言い換えれば、それはサタンによる妨害や墮落のない生活（ここで「サタン」は、敵の勢力を指す）であり、神に敵対するいかなる勢力の侵入も受けない。それはまた、万物がそれぞれの種類に従い、創造主を崇める生活であって、そこでは天地が完全に平穏である。これが、「安息に満ちた人類の生活」という言葉の意味である。神が安息の中に入るとき、地上にはいかなる不義も残らず、敵勢力の侵入もなくなる。人類も新しい領域へと入り、サタンに墮落させられた人類ではもはやなく、サタンに墮落させられた後に救われた人類となる。人類の安息の日々は、神にとっての安息の日々でもある。神が安息を失ったのは、人類が安息の中に入ることができないからであり、神がもともと安息に入れなかったからではない。安息の中に入るとは、あらゆる物事の動きが止まる、または発展が中断するという意味ではなく、神が働きをやめる、あるいは人間が生活をやめるという意味でもない。サタンが滅ぼされた、サタンに同調する悪人たちがみな懲罰を受けて一掃された、そして神に敵対するすべての勢力が存在しないというのが、安息に入ったしるしである。神が安息の中に入るといのは、神が人類を救う働きをそれ以上しないことを意味する。人類が安息の中に入るといのは、人類がみな神の光の中で、そして神の祝福の下で生き、サタンの墮落がなく、不義も生じないことを意味する。神の気遣いの下、人類は地上で正常に生活するのである。神と人が共に安息に入るといのは、人類が救われたこと、サタンが滅ぼされたこと、人における神の働きが全部終わったことを意味する。神はもはや人の中で働き続けず、人ももうサタンの支配下で生きることがなくなる。このように、神はもう忙しく働かず、人はもう絶えず動き回らない。神と人は同時に安息の中に入る。神は本来の場所に戻り、各人もそれぞれの場所に帰る。これは、ひとたび神の経営全体が終わった後に、神と人が身を置く終着点である。神には神の終着点があり、人には人の終着点がある。神は安息の中にあっても、地上における全人類の生活を導き、その間、神の光の中にあって、人は天にいる唯一の真の神を崇める。神はもはや人のあいだで生きず、人も神と一緒に神の終着点で生きることができない。神と人は同じ領域の中で生きることができず、むしろ、それぞれの生き方がある。神は全人類を導く存在であり、全人類は神の経営の働きの結晶である。人間は導かれる存在であり、神と同じ実質を有していない。「安息」とは、自分自身の本来の場所に帰ることを意味する。それゆえ神が安息に入ると

き、それは神が本来の場所に戻ったことを意味する。神が地上で生きること、あるいは人のあいだにあって苦楽を共にすることはもはやない。人が安息に入るとは、人が真の被造物になったことを意味する。人は地上から神を崇め、正常な人間の生活を送る。人々はもう神に背くことも逆らうこともなく、原初のアダムとエバの生活に戻る。これが、神と人が安息に入った後の、それぞれの生活と終着点である。サタンが打ち負かされることは、神とサタンとの戦いにおける必然的な傾向である。こうして、神が経営の働きを終えた後に安息に入ることと、人が完全に救われ安息に入るとは、同様に避けられない傾向となった。人の安息の場所は地上にあり、神の安息の場所は天にある。人は安息の中で神を崇め、地上で生きる。一方、神は安息の中で残りの人類を導くが、地上からではなく天から導く。神が依然として霊である一方、人は依然として肉である。神と人にはおのおの異なる安息の仕方がある。神は安息に入っているあいだも、人のもとに来て姿を見せる。人は安息に入っているあいだ、神に導かれて天を訪れ、そこでの生活を享受する。神と人類が安息に入った後、サタンはもはや存在しない。同様に、邪惡な者も存在しなくなる。神と人類が安息に入る前、かつて地上で神を迫害した邪惡な者たち、そして地上で神に不従順だった敵たちはすでに滅ぼされている。彼らは終わりの日の大災難によって根絶されているのだ。そうした邪惡な者たちが徹底的に滅ぼされた後、地上でサタンの嫌がらせを見ることはなくなる。そのとき初めて、人は完全な救いを得て、神の働きが完全に終わる。これが、神と人が安息に入る前提である。

万物の終わりが近づいたことは、神の働きの完結と、人類の発展の終結を示す。それは、サタンによって墮落させられた人類が発展の最終段階を迎えたこと、アダムとエバの子孫たちが繁殖を完了させたことを意味する。それはまた、サタンに墮落させられたこのような人類が引き続き発展していくことが、いずれ不可能になることを意味する。初めアダムとエバは、墮落させられてはいなかった。しかし、エデンの園から追放されたアダムとエバはサタンに墮落させられていた。神と人が共に安息に入るとき、エデンの園から追放されたアダムとエバ、そして彼らの子孫は最終的に終焉を迎える。未来の人類は依然としてアダムとエバの後裔から成っているが、サタンの支配下で暮らす人々ではない。彼らはむしろ、救われ、清められた人々である。このような人類はすでに裁かれ、罰せられた、聖なる者である。そうした人々は最初的人类とは異なっており、最初のアダムとエバとは人間性がまったく違うと言えるだろう。それらの人たちは、サタンに墮落させられたあらゆる人の中から選び出された人々であり、神の裁きや刑罰の中で揺るぎなく立った人々である。彼らは墮落した人類の中で生き残った最後の人々の集団であり、そうした人だけが神と共に最後の安息に入ることができる。終わりの日における神の裁きと刑罰

の働き、すなわち、最後の清めの働きの中で揺るぎなく立てる者たちが、神と共に最後の安息に入る者たちである。このように、安息に入る者はみな、神による最後の清めの働きを経たあと、サタンの支配から解放され、神によって得られている。最終的に神によって得られたこのような人々が、最後の安息へと入るのである。神による刑罰と裁きの働きの目的は、本質的に、最後の安息のために人類を清めることである。こうした清めがなければ、人類の誰も、種類に応じて異なる種類に選り分けられることができず、安息に入ることもできない。この働きは、人類が安息に入るための唯一の道なのである。神による清めの働きだけが人類の不義を清め、神による刑罰と裁きの働きだけが人類の不従順な要素を明るみに出す。それによって、救われる人と救われない人、留まれる人と留まれない人が選り分けられる。この働きが終わるとき、留まることを許された人はみな清められ、人類のより高い境地に入って、地上でのさらにすばらしい第二の人生を享受する。言い換えると、彼らは人類の安息の日を開始し、神と共存するのである。留まることを許されない者たちは罰せられ、裁かれたあと、正体が完全に暴かれる。その後はみな滅ぼされ、サタンと同じように、地上で生き残ることをそれ以上許されない。未来の人類に、この種類の人々はもはや含まれない。このような人々は最後の安息の地に入る資格がなく、神と人類が共有する安息の日に加わる資格もない。なぜなら、彼らは懲罰の対象であり、邪悪で、不義なる人だからである。彼らはかつて贖われ、また裁かれ、罰せられたことがあり、神への奉仕をしたこともある。しかし、終わりの日が来るとき、彼らはやはり、自身の邪悪のゆえに、そして不従順さと、贖う術もない有様の結果として、淘汰され、滅ぼされる。彼らが未来の世界に再び生まれることはないし、未来の人類のあいだで生きることもない。死者の霊であれ、いまだ肉体の中で生きている人であれ、人類の中の聖なる者たちがひとたび安息に入ると、悪を働く者や救われなかった者はみな滅ぼされる。悪を働くこれらの霊や人々、または義人の霊や義を行う人々が、どの時代に属していたとしても、悪を行う者はみな最後に滅ぼされ、義なる人はみな生き残る。人あるいは霊が救いを受けるかどうかは、終わりの時代の働きによってのみ決まるのではなく、むしろ、神に逆らってきたかどうか、あるいは神に背いてきたかどうかによって決まるのである。悪事を犯して救われなかった以前の時代の人々は、間違いなく懲罰の対象となる。そして、悪事を犯して救われない今の時代の人々も、間違いなく懲罰の対象となる。人々は善悪を基に分類されるのであって、生きる時代を基に分類されるのではない。ひとたびこのように分類された後も、人々はただちに懲罰されたり報いを受けたりするのではない。むしろ神は、終わりの日における征服の働きを遂行して初めて、悪を行う者を罰し、善を行う者に報いる働きを行う。実を言えば、人類の救いという働

きを始めて以来ずっと、神は人類を善と悪に選り分けている。それは単に、働きが完了して初めて、神が義なる人に報いて悪人を罰するということに過ぎない。働きを終えるや否や人々を種類ごとに選り分け、その後すぐ、悪を罰して善に報いる任務に取りかかるというわけではないのである。そうではなく、神の働きが完全に終わって初めて、この任務がなされるのである。悪を罰し、善に報いるという神の最終的な働きの目的は、ひとえに全人類を徹底的に清めることであり、それによって、完全に聖くなった人類を永遠の安息に導き入れることができる。神のこの段階の働きこそが最も重要であり、神による経営の働き全体の最終段階である。神が悪しき者たちを滅ぼさず、彼らが留まることを許してしまえば、どの人間もやはり安息の中に入ることができず、神も全人類をよりよい領域に導き入れることができない。このような働きが完結することはないだろう。神の働きが終わるとき、全人類は完全に聖いものとなる。このようにして初めて、神は安息の中で安らかに暮らせる。

今日もなお、人々は肉体に属するものを手放すことができない。肉体の享楽、俗世、金銭、墮落した性質を捨てられず、大多数の人は思うままに追求している。実際、このような人々は、心の中に神をまったく抱いておらず、なお悪いことに、神を畏れない。彼らは心の中に神を抱いていないので、神が行うすべてのことを理解できず、神の発する言葉を信じることなどなおさらできない。このような人々はあまりにも肉体に属する者である。あまりにも深く墮落させられ、いかなる真理も持っていない。その上、神が受肉できることを信じない。受肉した神を信じない者、つまり目に見える神と、その働きや言葉を信じず、その代わりに、目に見えない天なる神を崇拜する者はみな、心の中に神を持たない人である。このような者たちは神に従わず、反抗する。彼らには人間性も理知もなく、真理を持たないのは言うまでもない。さらに、このような者たちにとっては、見て触れることができる神はそれ以上に信じられず、見ることも触れることもできない神こそが最も信頼でき、自分に喜びをもたらしてくれる。彼らが求めるのは実際の真理ではなく、いのちの本質でもなく、ましてや神の旨などではない。むしろ彼らは、刺激を求めている。自分の欲望を実によく満たすことができるものなら何であれ、彼らは間違いなくそれを信じ、追い求める。彼らはただ自分の欲望を満たすためだけに神を信じるのであって、真理を求めるためではない。このような者たちはみな悪を行う人ではないのか。彼らはひどく自信過剰で、天なる神が彼らのような「善良な人々」を滅ぼすとは信じない。むしろ、自分たちは神のために多くのことを行い、神にかなりの「忠誠」を示したのだから、神は自分たちを生き残らせ、しかも手厚く報いてくれると思っている。仮に彼らが目に見える神を追い求めるなら、自分の欲望が満たされなかった瞬間、すぐさま神に反撃するか、烈火のごとく怒るはずだ。このよう

な人たちは、自身の欲望を満たそうとばかりしている卑劣な人間であることを、自ら示している。つまり、真理の追求において誠実な人々ではないのである。このような者たちは、キリストに付き従ういわゆる悪人である。真理を求めないこのような者たちは、真理を信じることが到底できず、人類の未来の結末を感じ取るなどなおさらできない。なぜなら、目に見える神の働きと言葉を一切信じず、人類の未来の終着点を信じられないこともそこに含まれるからである。したがって、たとえ目に見える神に付き従っていても、やはり悪を働いて真理をまったく求めず、わたしが要求する真理を実践することもない。自分が滅ぼされることを信じないこれらの者たちは、それとは逆に、まさに滅ぼされる対象そのものである。彼らはみな、自分はとても賢明だと思い込んでいて、自分が真理を実行する人だと考えている。彼らは自分の悪行を真理と考え、ゆえにそれを大事にする。このような悪人はひどく自信過剰で、真理を教義と捉え、自分の悪事を真理と捉えるが、最後は自分の蒔いたものを刈り取るだけである。自信過剰で傲慢であればあるほど、その人は真理を得ることができず、天なる神を信じれば信じるほど、その人は神に逆らう。このような者たちはみな懲罰を受ける人である。人類が安息の中に入る前に、各種の人が懲罰を受けるか、それとも報われるかどうかは、その人が真理を求めたかどうか、神を知っているかどうか、目に見える神に従えるかどうかによって決まる。目に見える神に奉仕してきたが、神を知らず、神に服従しない者はみな、真理のない人である。このような者たちは悪を行う人であり、悪を行う人は間違いなく懲罰を受ける対象である。しかも彼らは、自身の悪行に応じて罰せられる。神は人間による信仰の対象であり、また人間が服従するに値する存在である。だが、漠然とした目に見えない神だけを信じる者たちは、神を信じない人であり、神に服従することができない。このような者たちが、神の征服の働きが終わるまでに、目に見える神をいまだ信じることができず、目に見える受肉した神に従わず、逆らい続けるなら、このような「漠然派」は間違いなく滅びの対象となる。あなたがたの中にも、そのような者がいる。つまり、受肉した神を口では認めるが、受肉した神に服従するという真理を実践できない者は、すべて最後に淘汰され、滅ぼされる。さらに、口先では目に見える神を認め、目に見える神が表す真理を飲み食いする一方、漠然とした見えない神をも追い求める人は、必ずや滅びの対象になる。このような者たちは、神の働きが終わった後に来る安息の時まで留まることができず、こうした者たちと類似した人も、その安息の時まで留まれない。悪魔的な者たちは、真理を実行しない人である。彼らの本質は神への抵抗と不従順であって、神に服従する意図が少しもない。このような者はみな滅ぼされる。あなたが真理を持っているかどうか、神に逆らっているかどうかは、あなたの本質によって決まるのであり、あなたの外見

や、時おり示す言動の仕方によって決まるのではない。人が滅ぼされるかどうかは、その人の本質によって決まる。すなわち、振る舞いと真理の追求によって明らかになる本質で決まるのである。働くということにおいて互いに同じで、同じ程度の量の働きを行う人々のうち、人間としての本質が善であり、真理を持っている者こそが生き残る人である。一方、人間としての本質が悪であり、目に見える神に逆らう者は滅びの対象である。人類の終着点に関する神の働きや言葉はすべて、各人の本質に応じて人々を適切に取り扱う。間違いは一切起こらず、過ちも一切ない。人が働きを行うときにのみ、人間の感情や意義が混ざり込む。神が行う働きは実に適切で、神はいかなる被造物も謗らない。現在、将来の人類の終着点を理解することができず、わたしが発する言葉を信じない者が多くいる。真理を実践しない者と同様に、信じない者はみな悪魔である。

現在、追求する人としらない人は、まったく違う二種類の人であり、その終着点も極めて異なる。真理に関する認識を追求し、真理を実践する者は、神に救われる人である。真の道知らない者は、悪魔にして敵である。彼らは大天使の後裔であり、滅びの対象になる。漠然とした神を信じる敬虔な信徒であっても、同時に悪魔なのではないか。良心こそあるが真の道を受け入れない者たちは悪魔であり、その本質は神に逆らうものである。真の道を受け入れない者たちは、神に逆らう者である。このような者は、たとえ多くの苦難に耐えたとしても、やはり滅ぼされる。俗世を捨てたがらず、父母のもとから離れることに耐えられず、肉の享樂を捨てられない人は神に従順でなく、みな滅びの対象となる。受肉した神を信じない人はみな悪魔であり、またそれ以上に、そのような人は滅ぼされる。信仰を持つが真理を実践しない人、受肉した神を信じない人、神の存在をまったく信じない人もみな、滅びの対象となる。留まることを許される人はみな、精錬の苦しみを経て揺るぎなく立った人である。これらは、真に試練を耐えた人である。神を認めない人はみな敵である。すなわち、受肉した神を認めない者は誰であっても、この流れの中にいようと外にいようと、みな反キリストである。神を信じない反抗者でないならば、サタンや悪魔、神の敵となることなどないはずだ。彼らは神に逆らう者ではないのか。自分には信仰があると言い張りながら、真理を持たない人ではないのか。祝福を得ることしか求めず、神のために証しをすることができない人ではないのか。今日、あなたは依然としてこのような悪魔と付き合い、良心と愛を悪魔に向けている。そうであれば、あなたはサタンに善意を示しているのではないか。悪魔と徒党を組んでいるのではないか。今日に至ってもなお、善悪を区別できず、神の旨を求めようとすることも、いかなる形であれ神の意図を自分のものとして抱けるようになろうとすることもないまま、無闇に愛情深く、慈悲深くあり続けるなら、そのよ

うな人の結末はなおさら悲惨なものになるだろう。受肉した神を信じない者はみな神の敵である。敵に対して良心と愛を抱けるなら、あなたには正義感が欠けているのではないか。わたしが忌み嫌い、反対する者と相容れて、依然として敵に対する愛や個人的な感情を抱いているなら、あなたは不従順ではないのか。わざと神に逆らっているのではないか。このような者に真理があるのか。敵への良心、悪魔への愛、そしてサタンへの憐れみを抱いているなら、そのような者は故意に神の働きを乱しているのではないか。イエスだけを信じて、終わりの日の受肉した神を信じない者、自分は受肉した神を信じていると口では言い張るが、悪を行う者はみな反キリストであり、神を信じさえしない者がそうであることは言うまでもない。このような者はみな滅ぼされる。人が他の人を判断する基準は、その人の振る舞いである。行いが善い者は義であり、行いが悪い者は邪惡な者である。神が人を判断する基準は、その人の本質が神に従うものかどうかである。つまり、その人の振る舞いがよいか悪いか、語る言葉が正しいかそうでないかにかかわらず、神に服従する者は義なる人であり、そうしない者は敵にして悪人である。善行によって将来のよき終着点を得ようと願う者もいれば、立派な言葉を使ってよき終着点を獲得しようと望む者もいる。神は人の振る舞いを見て、あるいは人の語る言葉を聞いて、それからその人の結末を決めるのだと、誰もが間違っただけ信じている。それゆえ、多くの人々がこれを利用して神を騙し、束の間の恩恵を自分に授けさせようとしている。将来、安息の中で生き残る人々はみな患難の日を経験しており、しかも神のために証しをしている。彼らはみな自身の本分を尽くしてきた人であり、自らの意志で神に服従してきた人である。奉仕する機会を利用して真理の実践を免れようと思う人たちはみな、留まることを許されない。神は各人の結末を定めるにあたり、適切な基準に基づいている。神は人の言動だけに基づいてそれを決定するのではなく、一期間の行いを基に決定するのでもない。人がかつて神に奉仕したからといって、神がその者の悪行に対して寛大に対処することは決してなく、また、人が神のために一時期費やしたからといって、その人を死から免れさせることもない。誰一人として自分の悪の報いから逃れられず、誰一人として自分の悪行を覆い隠し、滅びの責め苦から逃れることもできない。人が本当に自身の本分を尽くせるのであれば、祝福を受けるにしろ災いに苦しむにしろ、その人は神に対して永遠に忠実であり、見返りを求めないということを意味する。祝福が見えれば神に忠実だが、いかなる祝福も見えなければ忠実でなくなり、結局神のために証しをすることができず、尽くすべき本分を尽くすこともできないなら、かつて神に忠実に奉仕した人であっても、やはり滅びの対象になる。要するに、邪惡な者は永遠に生きられず、安息の中に入ることもできない。義なる者だけが安息の主人なのである。ひとたび人類が正しい

軌道に乗れば、人々は正常な人間生活を送るようになる。誰もが自身の本分を尽くし、心から神に忠実である。彼らは不従順と墮落した性質を完全に脱ぎ捨て、不従順になることも抵抗することも一切なく、神のために、そして神のゆえに生きる。彼らはみな、神に完全に服従することができる。これこそが神と人類の生活、神の国の生活、安息の生活である。

まったく信仰心のない子供や親戚を教会に連れて来る者はみな、あまりに自己中心的であり、親切心を示しているに過ぎない。このような者たちは、自分が連れて来た人たちが信じるかどうか、あるいはそれが神の旨であるかどうかを考慮せず、愛情深さだけに集中する。中には、自分の妻や両親を神の前に連れて来る者もいる。聖霊がそれに同意しているかどうか、あるいは聖霊が働いているかどうかにかかわらず、彼らは神のためにやたらと「才能ある人材を導入」し続ける。そうした不信者に親切心を広げたところで、何の益が得られるのか。聖霊の臨在がないこれらの者たちがしぶしぶ神に付き従っても、人が考えるように救われることはできない。救われる人を獲得するのは、実はそれほど容易ではない。聖霊の働きと試練を経験せず、受肉した神によって完全にされていない者は、決して完全にされ得ない。したがって、神に名目上付き従い始めた瞬間から、こうした者たちには聖霊の臨在がないのである。彼らの状況と実情に照らして考えると、完全にされることはまったくあり得ない。そのため、聖霊も彼らに対してさほど多くの精力を費やすつもりはなく、またいかなる形であれ、啓きや導きを一切施さない。ただ自分に付き従うのを許すだけで、最後になって彼らの結末を明らかにする——それだけで十分なのだ。人の熱意や意図はサタンから来るものであり、そうしたものが聖霊の働きを完成させることは決してあり得ない。どのような人であっても、聖霊の働きがなければならぬ。人が人を完全にするなど可能だろうか。夫はなぜ妻を愛するのか。妻はなぜ夫を愛するのか。子供たちはなぜ親に対して従順なのか。親はなぜ子供たちを溺愛するのか。人々は実際にどのような意図を心に抱いているのか。自分の計画と利己的な願望を満たすことが彼らの意図ではないのか。本当に神の経営計画のために行動するつもりなのか。本当に神の働きのために行動しているのか。被造物の本分を尽くすつもりがあるのか。神を信じ始めて以来、聖霊の臨在を得ることができずにいる者は、聖霊の働きを決して得られない。このような者たちは間違いなく滅ぼされる対象である。そうした人に対してどれだけ多くの愛を持っていても、聖霊の働きに取って代わることはできない。人の熱意と愛は人の意図を表すのであって、神の意図を表すことも、神の働きに取って代わることもできない。神を信じるとはどういうことかを実際に知らぬまま、名目上神を信じ、神に付き従う振りをする者たちに、最大限の愛や憐れみを向けたところで、彼らはやはり神の同情

を得られず、聖霊の働きを得ることもないのである。心から神に付き従う人は、たとえあまり素質がなく、多くの真理を理解できずにいたとしても、やはり聖霊の働きを時おり得ることができる。しかし、素質がかなり優れているが、心から信じない人は、聖霊の臨在を決して得られない。そのような人が救われる可能性は絶対にはないのである。たとえ神の言葉を読んだり、時おり説教を聞いたりしても、あるいは賛美歌を歌って神を称えたとしても、結局は安息の時まで生き残ることができない。人が心から追い求めているかどうかは、他の人が彼らをどう評価するか、あるいは周囲の人が彼らのことをどう見るかによって決まるのではなく、聖霊が彼らに働きかけるかどうか、彼らに聖霊の臨在があるかどうかによって決まる。またそれ以上に、性質が変化するかどうか、そして聖霊の働きを一定期間経験した後、神についての認識を得たかどうかによって決まる。聖霊が人に働きかけていれば、その人の性質は次第に変化し、神を信じることへの見方も次第に純粹になっていく。どれだけ長く神に付き従っているかに関係なく、変化を経験したならば、聖霊がその人に働きかけていることを意味する。その人が変化しなかったなら、それは聖霊がその人に働きかけていないことを意味する。そのような者たちが何らかの奉仕をしても、そうするように突き動かしているのは、祝福を得たいという願望である。時おり奉仕したところで、性質の変化を経験する代わりにはなれない。最後には、彼らはやはり滅ぼされる。なぜなら、神の国では効力者は不要であり、性質が変化していない人が、完全にされ神に忠実な人たちに奉仕する必要もないからである。

「一人が主を信じれば、家族全員に幸運が訪れる」という昔に語られた言葉は、恵みの時代にふさわしいものだが、人の終着点とは関係がない。この言葉はただ、恵みの時代の一段階だけにふさわしいものだったのである。この言葉は、人が享受する平安と物質的な祝福を暗示していた。一人が主を信じれば家族全員が救われるということではなく、一人が祝福を受けると家族全員が安息へと導かれるということでもない。人が祝福を受けるか、それとも災いに苦しむかは、その人の本質によって決まるのであって、他の人と共有する共通の本質によって決まるのではない。神の国にはそのような言い習わしも規則もあり得ない。人が最後に生き残れたなら、それはその人が神の要求を満たしたからである。そして、人が最終的に安息の時まで留まれないなら、それはその人自身が神に従順でなく、神の要求を満たしていないからである。どの人にもふさわしい終着点がある。この終着点は各人の本質によって決まるのであり、他の人とは絶対に関係ない。子供の悪行が親になすりつけられることはなく、子供の義を親が共にすることもできない。親の悪行が子供になすりつけられることはなく、親の義を子供と共有することもできない。誰もが自分の罪を担い、誰もが自分の祝福を享受する。他の人の代わりになることは誰にもで

きない。これが義である。人間の視点から見れば、親が祝福を受ければ子供も祝福を受けることができ、子供が悪を行えば親がその罪を償わなければならない。これは人の見方、人のやり方であって、神の見方ではない。あらゆる人の結末は、その人の行動に由来する本質によって決まるのであり、それは必ず適切に決定される。他人の罪を担える者は誰もおらず、他人の代わりに懲罰を受けることはなおさらできない。これは絶対的なことである。親は子供をかわいがるが、だからといって親が子供に代わって義を行えるということではない。また、子供が親に孝行しても、親に代わって義を行えるということではない。これが「ふたりの者が畑にいと、ひとりを取り去られ、ひとりに残されるであろう。ふたりの女がうすをひいていと、ひとりを取り去られ、ひとりに残されるであろう」という言葉の真意である。子供を深く愛するがゆえに、悪を行う子供を安息の中に連れていくことはできず、自身が義を行うがゆえに自分の妻（あるいは夫）を安息の中に連れていける者も誰一人いない。これは神の行政上の規則であり、一人として例外はいない。結局のところ、義を行う者は義を行う者であり、悪を行う者は悪を行う者である。義なる者は生き残ることを許され、悪を行う者は滅される。聖なる者は聖なる者であり、汚れてはいない。汚れた者は汚れた者であって、どの部分も聖くない。滅ぼされるのはみな悪しき者であり、生き残るのはみな義なる者である。悪を行う者の子供が義を行っても、義なる者の親が悪を行っても、それは変わらない。信者の夫と不信者の妻はもともと関係がなく、信者の子供と不信者の親も関係がない。これら二種類の人間はまったく相容れない。安息へと入るのに先立ち、人には肉親があるものの、ひとたび安息の中に入ると、語るべき肉親はもはやなくなる。本分を尽くす者は本分を尽くさない者の敵であり、神を愛する者と神を憎む者は互いに敵対する。安息の中に入る者と滅ぼされた者は、相容れることのできない二種類の被造物である。本分を尽くす被造物は生き残ることができ、本分を尽くさない被造物は滅びの対象になる。さらに、これは永遠に続く。あなたが夫を愛するのは、被造物の本分を尽くすためだろうか。あなたが妻を愛するのは、被造物の本分を尽くすためだろうか。あなたが未信者の親に孝行するのは被造物の本分を尽くすためだろうか。神を信じることに関する人の観点は正しいだろうか、それとも間違いだろうか。なぜあなたは神を信じるのか。あなたは何を得たいのか。あなたはどのように神を愛しているのか。被造物の本分を尽くすことができない者、全力を出すことができない者は滅びの対象になる。今日の人々には、血の繋がりだけでなく肉体的関係もあるが、今後これは完全に打ち破られる。信者と未信者は相容れず、むしろ互いに敵対する。安息の中にいる人は、神が存在することを信じ、神に服従する。一方、神に従順でない者はみな滅ぼされてしまう。地上にはもう家族がなくなる。そ

うであれば、どうして父母が、どうして子供が、どうして夫婦関係があるだろうか。信仰と不信仰の不一致こそが、このような肉の関係を完全に断ち切ってしまうのである。

人類の中に家族はもともと存在せず、男女という二つの異なる種類の人間がいただけだった。家族は言うまでもなく、国も存在していなかったが、人の墮落のゆえに、あらゆる種類の人々が個々の一族へと組織化し、やがて国と民族に発展した。これらの国と民族は個々の小さな家族から成っており、こうして、あらゆる種類の人がそれぞれ異なる言語と境界を基に、種々な人種のあいだに分布するようになった。実を言えば、世界の中の人種がどれほど多くても、人類の祖先は一人しかいない。最初は二種類の人間しかおらず、その二種類は男と女だった。しかし、神の働きの進展、歴史の移り変わり、地形の変遷のゆえに、この二種類の人間は、程度の差はあっても、次第により多くの種類の人へと発展した。要するに、どれほど多くの人種が人類を構成していても、全人類はやはり神の創造物なのである。人々がどの人種に属していても、彼らはみな神の被造物、アダムとエバの後裔である。彼らは神の手によって造られたのではないが、神が自ら造ったアダムとエバの後裔である。どの種類に属していても、人はみな神の被造物である。神によって造られた人類に属する以上、彼らの終着点は人類が持つべき終着点である。そして彼らは、人類を体系化する規則に沿って分けられる。つまり、悪を行う人も、義を行う人もみな、結局のところ被造物なのである。悪を行う被造物は最後に滅ぼされ、義を行う被造物は生き残る。これが、二種類の被造物に対する最も適切な采配である。悪を行う者は自身の不従順のゆえに、自分は神の創造物だがサタンに捕らわれ、ゆえに救いを得られないことを否定できない。義をもって振る舞う被造物は生き残るが、自分が神に造られながらもサタンに墮落させられ、その後救いを受けたという事実は否定できない。悪を行う者は神に逆らう被造物である。救われることがなく、しかもすでにサタンによって徹底的に捕らわれた被造物なのである。悪を行う人もまた人である。彼らは極めて深く墮落させられた人であり、救われることのない人である。そのような者が被造物であるように、義を行う人も墮落させられているが、彼らは墮落した性質を進んで捨て去り、神に服従できるようになった人である。義を行う人は義に満ちているわけではない。むしろ、彼らは救いを受けて墮落した性質を捨て去り、神に服従できる人である。最後に揺るぎなく立つが、それは彼らがサタンに墮落させられなかったということではない。神の働きが終わった後、すべての被造物の中には、滅びる者もいれば生き残る者もいる。これは神の経営の働きの必然的な流れであり、否定できる者は誰もいない。悪を行う者は生き残ることを許されず、最後まで神に服従して付き従う者は必ずや生き残る。この働きは人類

を経営する働きなので、生き残る者もいれば淘汰される者もいる。これが異なる種類の人々に対するそれぞれの結末であり、神の被造物に最もふさわしい采配である。人類に対する神の究極の采配は、家族を壊し、民族を破壊し、国境を打ち破ることで、人類を区分することである。その采配においては家族も国境もなくなる。なぜなら、人は結局のところ、一人の祖先を持ち、神の被造物だからである。要するに、悪を行う被造物はみな滅ぼされ、神に服従する被造物は生き残る。このようにして、安息の時が来るときには家族も国もなく、特に民族は存在しなくなる。このような人々こそ、最も聖なる人である。最初、人類が地上で万物を管理できるように、アダムとエバが造られた。人はもともと万物の主人だったのである。ヤーウェが人を造る目的は、人が地上で生き、地上の万物を管理するようにさせることだった。と言うのも、人はもともと墮落させられておらず、悪を行うことができなかったからである。しかし、人は墮落させられた後、もはや万物の管理者でなくなった。神の救いの目的は、人のこの機能を回復し、人の当初の理知、当初の従順さを回復することである。安息の中にいる人類こそ、神が救いの働きによって成し遂げようと望む成果を表すものである。それはもはやエデンの園のような生活ではないだろうが、本質は同じである。人類は墮落させられる前の初期の人類ではなく、墮落させられ、後に救われた人類なのである。救いを受けたこれらの人々は、最終的に（すなわち神の働きが終わった後）安息に入る。同様に、懲罰されるべき人々の結末も最後に徹底的に明らかにされ、神の働きが終わった後、彼らは滅ぼされるだけである。つまり、神の働きが終わった後、悪を行う者と救われた者はみな暴かれる。なぜなら、あらゆる種類の人（悪を行う者であれ、救われた者であれ）を暴く働きは、すべての人に対して同時に行われるからである。悪を行う者と、留まることを許された者が同時に明らかにされる。したがって、あらゆる種類の人々の結末が一斉に明かされるのだ。神は、悪を行う者を脇にのけ、少しずつ裁いて懲罰する前に、救われた人々の集団が安息の中へ入ることを許さない。それは事実と一致しない。悪を行う者が滅ぼされ、生き残れる人が安息の中に入ったとき、宇宙全体における神の働きが完成する。祝福を受ける者と災いに苦しむ者とのあいだに優先順位はない。祝福を受ける者は永遠に生き、災いに苦しむ者は永遠に滅びる。これら二段階の働きは同時に完結するのである。服従される者たちの義が明らかにされるのはまさに、不従順な者たちが存在するからであり、悪を行う者たちが自分の悪行のゆえに受けた災いが明らかにされるのは、祝福を受ける者がいるからこそである。神が悪を行う者を暴かなければ、心から神に服従する者たちが太陽を見ることは決してないだろう。神に服従する者たちを神がふさわしい終着点へと導かなければ、神に従順でない者たちは当然の報いを受けられない。これが神の働きの手順

である。悪を罰して善に報いるというこの働きを神が行わなかったら、神の被造物は決してそれぞれの終着点に入れない。ひとたび人類が安息に入ると、悪を行う者たちは滅ぼされ、全人類は正しい軌道に乗り、あらゆる種類の人が自分の果たすべき機能に応じて各々の種類に属する。これこそが人類の安息の日であり、人類の発展の必然的な潮流である。そして人類が安息に入って初めて、神の偉大な究極の成果が完成する。これが神の働きの最終部分である。この働きは全人類の退廃した肉体の生活と、墮落した人類の生活をすべて終わらせる。それ以降、人間は新しい領域の中に入る。すべての人間が肉において生きることになるが、その生活の実質は墮落した人類の生活と大いに異なる。その存在の意義も、墮落した人類の存在のそれとは異なる。これは新しい種類の人の生活ではないものの、救いを受けた人類の生活、人間性と理知が回復した生活だと言える。このような者たちはかつて神に従順でなかった人、神に征服された後に救われた人である。こうした者たちはまた、神の名誉を汚したものの、後になって神に証しをした人である。神の試練を経て生き残った彼らの存在は、最も意義のある存在である。彼らはサタンの前で神の証しをし、生きるにふさわしい人なのだ。滅ぼされる者たちは、神の証しに立つことができず、このまま生き続けるのにふさわしくない人である。彼らの滅びは自らの悪しき振る舞いの結果であり、そうした滅びが彼らにとって最善の終着点である。将来、人が美しい領域へと入るとき、人々がきっとあると想像するような、夫と妻、父と娘、あるいは母と息子のような関係は一切ない。その際、それぞれの人は各々の種類に従い、家族はすでに打ち砕かれている。サタンは完全に失敗していて、人類をかき乱すことはもはやなく、人には墮落したサタンの性質がなくなっている。そのような従順でない者たちはすでに滅ぼされていて、服従する人だけが残る。このように、元のまま生き残れる家族はほとんどない。どうして肉の関係が引き続き存在できようか。人による過去の肉の生活は完全に禁じられる。そうなれば、人々のあいだで肉の関係がどうして存続できようか。墮落したサタンの性質がなければ、人の生活はもう以前の古い生活ではなく、新しい生活である。親は子供を失い、子供は親を失う。夫は妻を失い、妻は夫を失う。現在、人々のあいだには肉体の関係がある。しかし、ひとたび誰もが安息に入ると、そうした関係はもはや存在しなくなる。この種の人こそが義と聖さを持ち、この種の人こそが神を崇められるのだ。

神は人類を創造し、人類を地上に置き、それ以来ずっと導いてきた。その後は人類を救い、人類のための罪の捧げ物となった。それでも最後に、神は人類を征服して完全に救い、本来の姿を回復させなければならない。これが、神が最初からずっと携わってきた働きである。つまり、人を本来の姿と人間らしさに回復させる働き

である。神は自身の国を打ち立て、人の本来の姿を回復させるが、それは地上における、そしてあらゆる被造物のあいだにおける自身の権威を回復させることを意味する。人はサタンに堕落させられた後、神を畏れる心だけでなく、被造物が持つべき機能を失ってしまい、それゆえ神に従順でない敵になった。人はみなサタンの支配下で暮らし、サタンの命令に従った。それゆえ、神は被造物のあいだで働くことができず、被造物の畏敬を勝ち取ることがますますできなくなった。人は神に造られ、神を崇めなければならないが、神に背を向けて代わりにサタンを崇めた。サタンが人の心の中の偶像になったのである。こうして、神は人の心における立場を失ったのだが、それはつまり、人を造った意義を失ったということである。したがって、神が人を造った意義を回復しようとするなら、人の本来の姿を回復させ、堕落した性質を人から取り除かなければならない。人をサタンの手から奪い返すには、人を罪から救わなければならない。このようにして初めて、神は次第に人の本来の姿と機能を回復させ、そして最後に、神の国を回復する。それら不従順の子らを最後に滅ぼすのも、人がよりよく神を崇め、よりよく地上で生きられるようにすべく行われる。神は人類を造ったのだから、人に自身を崇めさせる。神は人の本来の機能を回復させたいのだから、徹底的に、しかも混じりけが少しもないように、それを回復させる。神が自身の権威を回復することは、人に自身を崇めさせること、自身に従わせることを意味する。それは、人を神のゆえに生きるようにさせること、神の権威の結果として神の敵を滅ぼすことであり、また神についての一切が人々のあいだで、誰にも拒否されることなく存続できるようにすることである。神が打ち立てようと望む国は神自身の国である。神が願う人間は自身を崇める人間、完全に服従して神の栄光を表す人間である。神が堕落した人間を救わなければ、神が人を造った意義は失われる。神は人のあいだで権威を持たなくなり、神の国が地上で存続することもできない。神に不従順な敵を滅ぼさなければ、神は完全な栄光を得ることができず、地上で神の国を打ち立てることもできない。人類の中の不従順な者たちを徹底的に滅ぼし、完全にされた者たちに安息をもたらすというのが、神の働きが完結したこと、および神が偉業を成し遂げたことのしるしである。人類が本来の姿を回復し、各自の本分を尽くし、自分の正しい立場を守り、神の采配のすべてに従うことができるなら、神は自身を崇める人々の一団を地上で得て、自身を崇める国を地上に打ち立てたことになる。神は地上で永遠の勝利を得、神に敵対する者たちはみな、永遠に滅びる。これにより、人類を創造したときの神の本来の意図が回復し、神が万物を創造したときの意図が回復し、また地上における神の権威、万物の中での神の権威、敵のあいだでの神の権威も回復する。これらは神が完全に勝利を得たことの象徴となる。その後、人類は安息に入り、正しい軌道に

乗った生活に入る。神も人類と共に永遠の安息へ入り、神自身と人間が共有する永遠の生活を始める。地上の汚れと不従順は消えており、嘆き悲しむ声も消える。そして、神に敵対する世のあらゆるものも存在しなくなる。神と、神から救いをもたらされた人たちだけが残る、また神の創造物だけが残る。

あなたがイエスの霊体を見る時、 神はすでに天地を新しくしている

あなたはイエスに会いたいと思うか。イエスと共に生きたいと思うか。イエスの語る言葉を聞きたいか。もしそうであれば、イエスの再臨をどのように歓迎するのか。あなたは完全に備えができているか。どのようにしてイエスの再臨を歓迎するのか。イエスに付き従う兄弟姉妹は皆、イエスをよく歓迎したいだろう。しかしあなたがたは考えてみたことがあるだろうか――イエスが再び来る時、あなたにイエスが本当に分かるのか。あなたがたはイエスの語る全てを本当に理解するだろうか。イエスの働きの全てを本当に、無条件に受け入れるだろうか。聖書を読んだことのある者は皆、イエスの再臨について知っており、聖書を読んだことのある者は皆、一心にイエスの再臨を待ち望む。あなたがたは皆、その瞬間の訪れにひたすら執着しており、その誠意は賞賛すべきものであり、あなたがたの信仰は本当に羨望に値する。しかし、あなたがたは自分が重大な間違いを起こしていることに気づいているか。イエスはどのように戻って来るのか。あなたがたはイエスが白い雲に乗って再臨すると信じているが、わたしはあなたがたに問う。この白い雲とは何を意味しているのか。イエスの再臨を待つ多くの信者がいる中、どの人々のところにイエスは降臨するのか。もしイエスが最初にあなたがたのところへ再臨するとしたら、他の人々はこのことをあまりに不公平だと考えないだろうか。わたしは、あなたがたが非常に誠意のある、イエスに忠実な人であることを知っているが、あなたがたはイエスに会ったことがあるのか。あなたがたはイエスの性質を知っているのか。あなたがたはイエスと共に生活したことがあるのか。あなたがたはどれだけ本当にイエスのことを理解しているのか。このような言葉のせいで気まずい状態になると言う人もあるだろう。彼らはこう言う。「わたしは聖書を隅から隅まで何回も読んだ。イエスを理解できないことなどあるだろうか。イエスの性質は言うまでもなく、わたしはイエスが何色の服を好むかさえ知っている。あなたはわたしがイエスを理解しないと言うが、わたしを見くびっているのではないか」。このような問題については、争わないようあなたに提案する。落ち着いて、次のような問題について話し合う方が良い。一つ目は、何が実際に何が理論かを、あなたは知っている

のか、ということ。二つ目は、何が観念で何が真理かを知っているのか、ということ。そして三つ目は、何が想像で、何が現実かを知っているか、ということである。

自分がイエスを理解していないという事実を認めない人たちもいる。それでも尚わたしは、あなたがたがイエスを少しも理解しておらず、イエスの言葉をひとつも理解していないと言う。それは、あなたがたはそれぞれ聖書に書いてあることのために、他の誰かが言ったことのためにイエスに付き従っているからである。あなたがたはイエスに会ったことがないし、ましてや一緒に住んだこともなければ、わずかな時間を彼と共に過ごしたことさえない。そうであれば、イエスに関するあなたがたの理解は理論だけではないか。現実性が欠けているのではないか。イエスの肖像画を見たことのある人もいるだろうし、イエスが住まった家を訪れたことのある人もいるだろう。イエスの着た服を触ったことがある人もいるかもしれない。たとえあなたがイエスの食したものと同じものを食べたとしても、あなたのイエスに対する理解は実際的なものではなく理論上のものでしかない。いずれにせよ、あなたはイエスに会ったこともなく、肉となったイエスとともに過ごしたことは一度もないのだから、あなたのイエスに関する理解はどこまでも現実味の欠けた空論でしかない。おそらくわたしの言葉はあなたにとってほとんど興味のないものだろう。だがあなたに聞く。例えば、あなたが自分の最も尊敬する作家の作品を何冊も読んだとする。あなたはその作者と一度も一緒に時間を過ごしたことがなくても、その作者を完全に理解できるだろうか。その人の性格がどのようなものか分かるだろうか。その作家がどのような人生を送っているか、あなたに分かるだろうか。その作家の感情が理解できるだろうか。あなたは自分が尊敬する人すら完全に理解することができないのに、どうしてイエス・キリストを理解できるだろうか。イエスに関するあなたの理解は想像と観念に満ちており、真理と現実性の欠片もない。どうしようもなく粗末で、肉的なもので満ちている。そのような理解しかないのに、どうしてイエスの再臨を歓迎するに相応しい者となり得ようか。肉的な空想と観念に満ちた人を、イエスは受け入れない。イエスを理解しない人たちがどうしてイエスを信じる者となり得ようか。

あなたがたはパリサイ人がイエスに逆らったことの根源を知りたいか。あなたがたはパリサイ人の実質を知りたいか。彼らはメシアに関する空想に満ちていた。さらに、彼らはメシアが来ると信じていただけで、いのちの真理を追い求めなかった。だから今日になっても未だに彼らはメシアを待ち続けている。いのちの道に関して何の認識もなく、真理の道がどのようなものかも知らないからである。あなたがたに訊くが、これほど愚かで頑固で無知な人々が神の祝福を得るなど、どうしてあり得ようか。彼らがメシアを見るなど、どうしてあり得ようか。彼らは聖霊の働

きの方向を知らなかったために、イエスの語った真理の道を知らなかったために、さらにはメシアを理解しなかったためにイエスに敵対した。彼らはメシアに会ったことがなく、メシアとともに過ごしたこともないために、彼らはみな、ただメシアの名前に固執しながら、できる限りのことをしてメシアの実質に逆らうという過ちを犯した。これらのパリサイ人の実質は頑固で、傲慢で、真理に従うものではなかった。彼らの神への信仰の原則は、「どれほど説教が奥深く、どれほど権威が高かろうとも、あなたがメシアと呼ばれない限り、あなたはキリストではない」というものだった。この信仰は不合理でばかばかしくないであろうか。あなたがたにさらに問う。あなたがたが全くイエスを理解してこなかったことを考えれば、最初のパリサイ人たちと同じ誤りを簡単に起こしてしまうのではないか。あなたは真理の道を識別することはできるのか。あなたがキリストに逆らわないとあなたは本当に請け合えるか。あなたは聖霊の働きに従うことができるのか。自分がキリストに逆らうかどうかはわからないのなら、あなたは既に死ぬぎりぎりのところに生きているとわたしは言う。メシアを理解しなかった人々は皆、イエスに逆らい、イエスを拒絶し、イエスを中傷することができた。イエスを理解しない人々は皆、イエスを拒み、イエスをののしることができる。そればかりか、彼らはイエスの再臨をサタンの惑わしとして見ることができ、さらに多くの人々が受肉し再来したイエスを非難するであろう。これらのことのせいで、あなたがたは恐ろしくならないのか。あなたがたが直面することは聖霊に対する冒涇であり、諸教会に向けた聖霊の言葉を台無しにし、イエスが表した全てをはねつけることとなる。それほど混乱しているのなら、イエスから何を得られるというのか。あなたがたが頑なに自分の間違いに気づくのを拒絶しているのならば、イエスが白い雲に乗って肉に戻ってくる時にイエスの働きをどのようにしてあなたがたが理解できるというのか。わたしは言う。真理を受け取らず、白い雲に乗ったイエスの再臨を盲目的に待つ人々は、確実に聖霊を冒涇することになり、彼らは滅ぼされる種類である。あなたがたは単にイエスの恵みを望んでおり、この上なく幸せな天国を楽しみたいだけであるが、イエスの語る言葉に従ったことはなく、肉に戻ったイエスが表した真理を受け入れてこなかった。あなたがたはイエスが白い雲に乗って戻るという事実と引き替えに何を差し出すのか。あなたがたが繰り返し罪を犯しては何度も告白を口にするという誠意か。白い雲に乗って戻ってくるイエスへの捧げ物としてあなたがたは何を差し出すのか。自らを称賛する長年の仕事という資本だろうか。あなたがたは戻ってきたイエスに信用してもらうために何を差し出すのだろうか。それはあなたがたの、いかなる真理にも従わない傲慢な本性だろうか。

あなたがたの忠誠心は言葉の中のみであり、あなたがたの認識は単に知的で観念

的であり、あなたがたの労働は天国の祝福を受けるためのものであるが、それではあなたがたの信仰はどのようなものでなければならないのか。今日なお、あなたがたは真理の言葉の一つ一つに対し、耳を貸そうとしない。あなたがたは神が何かを知らない。キリストが何かを知らない。あなたがたはヤーウェを畏れる方法を知らない。どのように聖霊の働きに入っていくのかを知らない。あなたがたは神自身の働きと人の惑わしの区別の仕方を知らない。ただ、自分自身の考えに沿わない、神が表した真理の言葉を非難することだけを知っている。あなたの謙虚さはどこにあるのか。あなたの従順はどこにあるのか。あなたの忠誠心はどこにあるのか。真理を求める気持ちはどこにあるのか。あなたの神への畏敬はどこにあるのか。わたしはあなたがたに言う。しるし故に神を信じる者は、滅ぼされる部類であることは確かである。肉に戻ったイエスの言葉を受け取ることができない者は、地獄の子孫であり、天使長の末裔であり、永遠の破滅を逃れることのできない部類である。多くの者はわたしの言うことに耳を傾けないかもしれない。だがそれでも、天からイエスが白い雲に乗って降臨するのをあなたがたが自分の目で見ると、これは義の太陽が公に現れることであると、わたしはイエスに付き従ういわゆる聖徒全員に伝えたい。おそらく、その時あなたにとって大いなる興奮の時となるであろう。だが、あなたがイエスが天から降臨するのを見る時は、あなたが地獄へ落ち、懲罰を受ける時でもあることを知るべきである。それは神の経営（救いの）計画の終わりの時であり、神が善良な人々を報い、邪悪な者たちを罰する時である。神の裁きは人間がしるしを見る前に、真理の現れだけがある時には終わっている。真理を受け入れてしるしを求めることがなく、故に清められている人々は、神の玉座の前に戻り、造物主の胸に抱かれる。「白い雲に乗らないイエスは偽キリストだ」という信念に執着する者たちだけは、永久に続く懲罰を受けなければならない。彼らはただしるしを示すイエスしか信じず、厳しい裁きを宣言し、真の道といのちを解き放つイエスを認めないからである。そのような者たちは、イエスが白い雲に乗って公に戻ってくる時に扱うしかない。彼らはあまりに頑なで、自信過剰で、傲慢である。どうしてこのような墮落した者たちがイエスに報いてもらえるだろうか。イエスの再臨は、真理を受け入れることのできる者には大いなる救いであるが、真理を受け入れることのできない者にとっては、罪に定められるしるしである。あなたがたは自分自身の道を選ぶべきで、聖霊を冒涇したり真理を拒んだりするべきではない。あなたがたは無知で傲慢な者でなく、聖霊の導きに従い真理を慕い求める者にならないといけない。そうすることでのみ、あなたがたの益となる。わたしは、注意深く神への信仰の道を歩むようにあなたがたに助言する。結論を急いではない。さらに、あなたがたは神への信仰において、無頓着であったり、軽率であってはな

らない。少なくとも、神を信じる者は謙虚で畏敬の念に満ちているべきだということを知らなければならない。真理を聞いたことがありながら鼻であしらうものは愚かで無知である。真理を聞いたことがありながら不注意に結論を急いだり非難したりする者は、おごりで包まれている。イエスを信じる者は誰も、他人をののしったり非難したりする権利はない。あなたがたは皆、理知を備え、真理を受け入れる者でなければならない。真理の道を聞き、いのちの言葉を読んだのち、自分の信念と聖書に沿っている言葉は一万語にひとつだと信じているかもしれない。そうであれば、その一万分の一の言葉の中で求め続けなければならない。それでもわたしはあなたに謙虚であり、自信過剰にならず、思い上がらないようにと助言する。あなたの心が抱いている神へのわずかな畏敬の念から、より大きな光を得ることになる。もしあなたがこれらの言葉をよく吟味し、繰り返し思い巡らすならば、それらが真理かどうか、それらがいのちかどうか分かるであろう。ほんの数行読んだだけで、「これは聖霊によるちょっとした照らしでしかない」とか、「これは人々を惑わすために来た偽キリストだ」と盲目的に非難する人たちもいるであろう。そのようなことを言う人たちは、無知ゆえに目が見えなくなっている。あなたは神の働きや知恵をほとんど理解していない。わたしはあなたに助言する。最初からやり直さない。終わりの日における偽キリストの出現のせいで、神の言葉を盲目的に非難してはならない。惑わされることを恐れる為に、聖霊を冒瀆する者となってはならない。それはとても残念なことではないであろうか。もし良く調べた後で、これらの言葉が真理ではない、道ではない、神が表したことではないと未だに信じるならば、あなたは最後に懲罰を受けなければならず、祝福されない。もしこれほどわかりやすく明確に話された真理を受け入れられないなら、あなたは神の救いにそぐわないのではないのか。あなたは神の玉座の前に戻るほど祝福されている人ではないのか。このことを考えなさい。軽はずみで衝動的になってはいけない。神への信仰をまるでゲームのように考えてはいけない。あなたの終着点のために、前途のために、そしてあなたのいのちのために、考えなさい。自分をもてあそんではならない。あなたはこれらの言葉を受け入れることができるであろうか。

キリストと相容れない人は疑いなく神の敵である

すべての人はイエスの真の顔を見たい、イエスと共にいたいと思っている。イエスを見たいとも、イエスと共にいたいとも思わない兄弟姉妹がいるとはわたしは思わない。イエスを見る前には、つまり、受肉した神を見る前には、たとえばイエスの外観、話し方、生き方などについて、あなたがたはあらゆる考えを抱くことであ

ろう。しかし、ひとたび本当にイエスを見たら、あなたがたの考えはすぐに変わる。なぜか。その理由を知りたいか。人間の考えを見過ごすことはできないというのは本当である。しかしそれ以上に、キリストの本質は人間が変えることを許さない。あなたがたはキリストのことを仙人、あるいは賢人だと考えているが、誰一人としてキリストを神性の本質をもつ普通の人と見なしていない。したがって、昼も夜も神に会うことを切望している人の多くが実は神の敵であり、神と相容れないのである。これは人間側の間違いではないだろうか。今でさえ、あなたがたは自分の信心と忠実は十分なので自分はキリストの顔を見るのに相応しいと考えている。しかし、わたしはあなたがたに実際的なものをさらに多く備えるように強く勧告する。これは、過去、現在、未来において、キリストと触れ合う人の多くが失敗したから、また失敗するからである。彼らは皆パリサイ人の役割を演じる。あなたがたの失敗の理由は何か。それはまさに、あなたがたの観念の中に立派で称賛に値する神がいることである。しかし実際は人間が望むとおりではない。キリストは立派でなく、特に小柄である。キリストは人間であるというだけでなく、ごく普通の人間である。キリストは天に上ることができないだけでなく、地上を自由に動き回ることさえできない。そのため、人々はキリストを普通の人間として扱う。人々はキリストと共にいるときにキリストを気軽に扱い、不注意に話しかけ、そのあいだじゅう「真のキリスト」の到来をいまだに待っている。あなたがたは既に到来したキリストを普通の人間とみなし、その言葉を普通の人間の言葉とみなしている。このため、あなたがたはキリストから何も受け取っておらず、代わりに自らの醜さを完全に光にさらけ出しているのである。

キリストと触れ合う前に、あなたは自分の性質が完全に変化したと、自分はキリストの忠実な追従者であり、キリストの祝福を受けるに自分ほど値する人は他にいないと、多くの道を旅し、かなりの働きを行ない、多くの成果をもたらしてきたので、あなたは最後に栄冠を受ける人の一人になるに違いないと信じているかもしれない。しかし、あなたが知らないかもしれない真実が一つある。すなわち、人間の墮落した性質と反抗心と抵抗は、人間がキリストを見るときに暴露され、そのときに暴露される反抗心や抵抗は他のどの時よりも絶対的に完全に暴露される。それは、キリストは人の子、すなわち普通の人間性をもつ人の子であるため、人間はキリストに栄誉を与えることも尊敬することもないからである。神が肉において生きているために、人間の反抗心は徹底的に、詳細まで鮮明に光にさらけ出される。それで、キリストの到来は人類の反抗心をすべて明るみに出し、人類の本性を際立たせた、とわたしは言うのである。これは「山から虎をおびき出す」、「洞窟から狼をおびき出す」と呼ばれる。あなたは自分は神に忠実であるとあつかましくも言うの

か。自分は神に絶対的な服従を示しているとあつかましくも言うのか。自分は反抗的ではないとあつかましくも言うのか。「神がわたしを新しい環境に配置するたびに、わたしはいつも不平を言わずに服従し、さらに、神についての観念も一切抱かない」と言う人がいる。また、「神がわたしに何を課しても、わたしは力の限りを尽くし、決して怠けない」と言う人もいる。ならば、わたしはあなたがたに問う。キリストと共に生きるとき、あなたがたはキリストと相容れることができるのか。そして、どれだけの時間のあいだ、キリストと相容れるのか。一日か。二日か。一時間か。二時間か。あなたがたの信仰は確かに称賛すべきものかもしれないが、粘り強さという点では、あなたがたは大したことはない。ひとたび本当にキリストと共に生きようになると、あなたの独善性とうぬぼれは言葉と行動をとおして少しずつさらけ出され、あなたの行き過ぎた欲望、不服従な考え方、不満もまた自然に明らかになる。最終的には、あなたの傲慢はさらに大きくなり、水と油のように、あなたとキリストは相容れなくなり、そうなるあなたの本性は完全に露わになる。そのとき、あなたの観念はそれ以上隠すことはできなくなり、あなたの不満も自然に表れ、あなたのいやしい人間性は完全にさらけ出される。しかし、そのときでさえ、あなたは自分の反抗心を認めることを否定し続け、代わりに、このようなキリストは人間には受け入れ難く、人間に対して厳し過ぎ、もしキリストがもっと優しくれば完全に服従するだろうと考える。あなたがたは自分の反抗心には正当な理由があり、キリストが自分に何かを強要しすぎるときだけキリストに反抗するのだと考える。あなたがたは自分がキリストを神として見ておらず、キリストに従う意志がないことを一度たりとも考慮したことがない。むしろ、キリストがあなたの望みどおりに働きを行なうことを執拗なまでに主張し、キリストがあなたの考え方と一致しないことを一つでもすれば、直ちにキリストは神ではなく、一人の人間だと考える。あなたがたの中には、このようにキリストと争ったことがある人が多くいるのではないのか。あなたがたが信じているのは結局のところ誰なのか。そして、あなたがたはどのように追い求めているのか。

あなたがたはキリストを見たいと常に思っているが、自分をそのように高く評価しないことをわたしは勧める。誰でもキリストを見ることができるが、誰もそうするに相応しくない、とわたしは言う。人間の本性は邪悪、傲慢、反抗心に満ちているため、キリストを見た瞬間にあなたの本性はあなたを破壊し、あなたを死に至らせる。あなたの兄弟（あるいは姉妹）との関わりは、あなたについて特に何も示さないが、あなたがキリストと関わる時には、事はそのように単純ではない。何時でも、観念が根を張り、傲慢が芽を出し、反抗心はイチジクの実をつけるかもしれない。そのような人間性をもっていて、どうしてあなたがキリストと関わるに相応

しくなれるのだろうか。あなたは毎日、その一瞬一瞬に本当にキリストを神として扱うことができるのか。あなたは本当に神への服従という現実をもっているのか。あなたがたは心の中で立派な神をヤーウェとして礼拝しつつ、目に見えるキリストを人間とみなしている。あなたがたの理知はあまりに劣っており、あなたがたの人間性はあまりに卑しい。あなたがたはキリストを神として常に見ることができない。ときどき、そのような気分になったときだけ、あなたがたはキリストをひっつかまえて、神として礼拝する。このため、あなたがたは神の信者ではなく、キリストと戦う共犯者の集団である、とわたしは言うのである。他人に親切にする人でさえ報われるのに、キリストはあなたがたのあいだでそのような働きをしたものの、人間からは愛も報いも従順も受け取っていない。これは胸が張り裂けるようなことではないのか。

あなたの長年の神への信仰の日々において、あなたは誰ものろったことはなく、何も悪いことをしたことがないかもしれない。しかし、あなたのキリストとの関わりにおいて、あなたは真実を語れず、誠実に振る舞えず、キリストの言葉に従えない。そのため、あなたは世界で一番腹黒く邪悪な人である、とわたしは言う。あなたは親戚、友人、妻（あるいは夫）、息子や娘、両親には、極めて親切かつ献身的で、決して他人を利用したりはしないかもしれない。しかし、キリストと相容れることができないのなら、キリストと調和して交流することができないのなら、たとえばあなたが隣人を助けるためにすべてを捧げたり、父や母、そして家族の者たちを細やかに世話したりしても、あなたはそれでも悪意があり、さらにずるがしこい策略に満ちている、とわたしは言う。他人と仲良くしているから、あるいは少しの善行を行なうからというだけで、自分のことをキリストと相容れる人だと思っはならない。あなたは自分の親切な意図が天の恵みをだまし取れると思っているのか。少しの善行をすることが、従順になることの代わりになると思っているのか。あなたがたのうち誰も取り扱われ、刈り込まれることを受け入れることができず、皆がキリストの普通の人間性を受け入れることに困難を覚える。それにもかかわらず、自分の神への従順をいつも自慢している。あなたがたのこんな信仰はそれに相応しい報いを引き起こす。気まぐれな幻想にふけり、キリストを見たいと望むのはやめなさい。あなたがたの霊的背丈はあまりに小さく、それゆえキリストを見る資格さえないからである。反抗心を完全に拭い去り、キリストと調和できるようになったときに、神は自然にあなたに現れる。もしあなたが刈り込みや裁きを経験せずに神を見に行くのであれば、あなたは疑いなく神の敵になり、破滅することになる。人間の本性は元来神に敵対している。すべての人間はサタンの深遠なる墮落にさらされたからである。もし人間がその墮落の只中から神と関わろうとしても、そこから何一つ良いものが生まれないことは確実である。人間の言動は、事あるごとに人間

の墮落を確実にさらけ出し、神との関わりにおいて、人間の反抗心はあらゆる面で明らかにされる。知らず知らずに、人間はキリストに反対し、キリストを欺き、キリストを拒絶するようになる。これが起こると、人間はますます危険な状態に陥り、これが続けば、人間は懲罰の対象になるであろう。

神との関わりがそれほど危険ならば、神から遠ざかっている方が賢明ではないかと考える人がいるかもしれない。このような人は一体何を得られるのか。彼らは神に忠実でいることができるのか。確かに、神との関わりは極めて難しい。しかし、それは人間が墮落しているからであり、神が人間と関わりをもてないからではない。あなたがたにとっては、自己を知るという真理にさらなる努力を捧げるのが最善であろう。なぜあなたがたは神に気に入られていないのか。なぜあなたがたの性質は神に嫌われるのか。なぜあなたがたの話す言葉は神にとっていまわしいのか。少々の忠実を示したとたんに、あなたがたは自分を称賛し、わずかな犠牲に対する褒美を要求する。ほんの少しの従順を示しただけで、他者を見下し、多少のささいな業を達成しただけで、神を軽蔑する。神を迎えもてなす代償として、金、贈り物、称賛を要求する。硬貨を一、二枚与えると、心が痛む。硬貨を十枚与えると、祝福と特別扱いを望む。あなたがたのそのような人間性は、話すのも聞くのも正に不快である。あなたがたの言動に何か称賛に価するものはあるのか。本分を尽くす人と尽くさない人、指導者と追随者、神を迎えもてなす人とししない人、寄付する人とししない人、言葉を説く人と受ける人など、このような人々は皆、自分を称賛する。これを可笑しいとは思わないのか。自分は神を信じていると十分に知りつつ、あなたがたはそれでも神と相容れることができない。自分には全然とりえがないことを十分に知りつつ、それでも自慢することにこだわる。あなたがたはもはや自制心を持たないところまで自分の理知が劣化してしまったとは感じないのか。そのような理知しかなくて、どうして神と関わる資格があるのか。あなたがたはこの重大事に自分のことが心配ではないのか。あなたがたの性質は既に、神と相容れるのが不可能なところまで劣化している。このような状態で、あなたがたの信仰は滑稽ではないか。あなたがたの信仰はばかげていないだろうか。あなたは自分の未来にどのように取り組むつもりなのか。辿るべき道をどのように選ぶつもりなのか。

招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない

わたしは地上において、わたしの追随者となる多くの者を求めてきた。これらの追随者の中には、祭司として仕える人々、先導する人々、神の子、神の民、奉仕をする者たちがいる。彼らがわたしに示す忠誠に基づき、わたしは彼らを分類する。

すべての者が種類に準じて分類されたとき、つまり、人間のそれぞれの種類の本性が明らかにされたとき、人類に対するわたしの救いの目的を達成するために、わたしは彼らの一人ひとりをそれぞれしかるべき区分の中に含め、種類ごとに相応しい場所につかせる。わたしが救いたい者をそれぞれの集団ごとにわたしの家に招き、これらの人々すべてが終わりの日のわたしの働きを受け取れるようにする。同時に、わたしは彼らを種類に従って分類し、一人ひとりをその行いに基づいて報いるか、あるいは懲罰する。これがわたしの働きを成す歩みである。

今、わたしは地上に暮らし、人間のもとで生活している。人々は皆、わたしの働きを経験し、わたしの発言に注目している。そうした中で、わたしの追従者たちがわたしからいのちを受け、それゆえに彼らがたどることのできる道を得られるように、彼ら一人ひとりにあらゆる真理を授ける。わたしは神、いのちを与えるものだからである。わたしの何年もの働きのあいだ、人間は多くを得て、多くを捨ててきたが、それでもやはり人間は真にわたしを信じていないとわたしは言う。なぜなら、人間はわたしが神であることを口先では認めるものの、わたしが話す真理には異議を唱え、さらには、わたしが彼らに要求する真理を実践することなどないからである。つまり、人間は神の存在だけを認め、真理の存在は認めない。神の存在だけを認め、いのちの存在は認めない。神の名だけを認め、神の本質は認めない。その熱心さゆえに、わたしは人間を軽蔑している。人間はわたしを欺くために、耳に心地よい言葉を使うだけで、誰一人としてわたしを真に崇拝する者はいないからである。あなたがたの言葉には、蛇の誘惑がある。さらに、それは極端なまでに不遜で、まさに大天使の宣言そのものである。その上、あなたがたの行いは不名誉なまでにぼろぼろに裂けてちぎれている。あなたがたの過度の欲望や貪欲なもくろみは聞くに堪えない。あなたがたは皆、わたしの家の蛾、強い嫌悪をもって捨て去られる対象になった。なぜなら、あなたがたの誰一人として真理を愛さず、それどころか、祝福されることを欲し、天に昇ることを欲し、キリストが地上でその力を振るう荘厳な光景を見ることを欲するからである。しかし、そこまで深く墮落し、神が何であるかを全く知らないあなたがたのような人が、どうして神に従うに値することがあり得ようか。それについて考えたことがあるのか。どうしてあなたがたが天に昇れようか。そのように荘厳な光景、その壮麗さにおいて前例のない光景を見るに値する存在に、どうしてあなたがたが成り得ようか。あなたがたの口は偽りと汚れ、裏切りと傲慢の言葉に満ちている。誠実な言葉をわたしに語ったこともなければ、聖なる言葉もなく、わたしの言葉を経験するにあたり、わたしへの服従の言葉を語ったこともない。最後には、あなたがたの信仰はどのようになるのだろうか。あなたがたの心の中には欲望と富しかなく、あなたがたの頭の中には物質的なこと

しかない。日々、あなたがたはわたしから如何にして何かを得ようかと計算している。日々、わたしからどれほどの富と幾つの物質的なものを得たかを数えている。日々、さらに多くの、もっと高水準のものを享受できるようにと、あなたがたにさらなる祝福が施されるのを待ちわびている。あなたがたの思考の中にいつ何時も存在するのはわたしではなく、わたしからもたらされる真理でもなく、むしろあなたがたの夫や妻、息子、娘、あるいは食べるものや着るものなのだ。あなたがたは自分が如何にして、より多くの、より良い享樂を得られるかということを考えている。たとえ胃がはち切れんばかりに満腹したところで、あなたがたはやはり屍ではないのか。たとえ外見を豪華に着飾ったところで、あなたがたはやはり、いのちのない歩く屍ではないのか。あなたがたは食べ物のために、髪に白髪が交じるまで懸命に働くが、誰もわたしの働きのために毛一本として犠牲にすることはない。あなたがたは常に、体を酷使し頭を悩ませて、自分自身の肉体のため、息子や娘のために働き詰めだが、あなたがたのうちの誰一人として、わたしの意に憂慮することも気遣いを見せることもない。あなたがたがわたしから、なおも得ることを望んでいるものは何なのか。

働きを行うにおいて、わたしは決して急き立てられることはない。人間がわたしに対してどのように従うかに関係なく、わたしは一つひとつの歩みに沿って、わたしの計画通りに働きを行う。したがって、あなたがたがこれほどわたしに反抗しているにもかかわらず、わたしはなおも働きを止めず、語らねばならぬ言葉を語り続ける。わたしは予め定めていた人々を、わたしの言葉の聴衆となるようわたしの家に呼ぶ。わたしの言葉に従い、わたしの言葉を慕い求めるすべての人々を、わたしの玉座の前に置く。わたしの言葉に背を向ける人々、わたしに従わず服従しない人々、公然とわたしに挑む人々は一人残らず、最後の懲罰を待つべく脇へ追いやる。すべての人々は墮落の只中、邪惡な者の手の下に生きており、それゆえに、わたしに従う人々のうちで真理を慕い求めている者はそれほど多くない。つまり、ほとんどがわたしを真に崇拜していない。彼らは真理をもってわたしを崇拜しておらず、墮落や反抗、不正直な手段を通してわたしの信賴を獲得しようとしているのである。それゆえに、「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」とわたしは言うのである。招かれる人々は著しく墮落しており、皆が同じ時代に生きており、選ばれる人々はその中のほんの一部である。そうした人々は真理を信じ、認め、真理を実践する人々である。それらの人々は全体のごく一部に過ぎず、それらの人々のあいだから、わたしはさらなる栄光を受ける。これらの言葉に照らして評価した場合に、あなたがたは自分が選ばれる者の中にいるか否かわかるだろうか。あなたがたの最後はどのようになるだろうか。

既に言ったように、わたしに従う人々が多いが、わたしを真に愛すものは少ない。おそらく、「もしわたしがあなたを愛していなかったなら、こんなに大きな代償を払っていたででしょうか。あなたを愛していなかったなら、ここまで従ってきたででしょうか」と言う者がいるかもしれない。確かに、あなたには多くの理由があり、そして確かにあなたの愛はとても大きい。しかし、あなたのわたしへの愛の本質は何なのか。「愛」と呼ばれるものは、純粋で汚れのない感情を指し、心をもって愛し、感じ、思いやりをもつということである。愛においては条件、障壁、距離がない。愛においては疑念、偽り、悪賢さもない。愛においては取引も不純なものもない。愛するならば、偽ったり、不平を言ったり、裏切ったり、反抗したり、強要したり、何かを得ようとしたり、一定の量を得ようとしたりすることはない。もし愛するならば、喜んで自分の身を捧げ、苦難に耐え、わたしと融和するようになる。あなたは自分の持つすべてのものをわたしのために捨てるだろう。家族、将来、青春、結婚をあきらめるだろう。そうでなければ、あなたの愛は愛などではなく、偽りと裏切りである！ あなたの愛はどのような愛なのか。真の愛なのか。あるいは偽物なのか。あなたはどれほど捨ててきたのか。どれほど捧げてきたのか。わたしはあなたからどれほどの愛を受けてきたのか。あなたは分かっているのか。あなたがたの心は悪、裏切り、偽りに満ちている。そうであるなら、あなたがたの愛はどれほど汚れているのか。あなたがたは、自分はわたしのためにすでに十分あきらめてきたと思っている。自分のわたしへの愛はすでに十分だと考えている。しかし、それならば、あなたがたの言葉と行動はなぜいつも反抗的で不正直なのか。あなたがたはわたしに従うものの、わたしの言葉を認めない。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしを脇へ置く。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしを疑っている。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしの存在を受け容れられない。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしが誰であるかに相応しくわたしを扱わず、事あるごとに物事がわたしにとって困難になるようにしてしまう。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、あらゆる事柄においてわたしを騙し欺こうとする。これを愛とみなすのか。わたしに仕えるものの、わたしを恐れない。これを愛とみなすのか。あなたがたはあらゆる面で、あらゆる事柄においてわたしに反対する。こうしたすべてを愛とみなすのか。あなたがたが非常に多くを捧げてきたのは確かであるが、わたしがあなたがたに要求することをあなたがたは一度として実践したことがない。これを愛とみなすことができるだろうか。注意深く考えると、あなたがたの中にはわたしへのかすかな愛も感じられない。これほど長年働きを行い、あれだけ多くの言葉を与えてきた後に、あ

なたがたは実際にどれほどのことを得ているのか。このことは注意深く振り返るに値しないか。わたしはあなたがたに忠告する。わたしのもとにわたしが招く人々は、一度も墮落したことがない人々ではない。むしろ、わたしが選ぶ人々は、わたしを真に愛する人々である。したがって、あなたがたは自分の言葉と行いに注意して、自分の意図や考えにおいて一線を超えないように検討しなければならない。終わりの日に際して、わたしの怒りがあなたがたから決して離れないということがないように、わたしの前にあなたがたの愛を捧げるべく最善を尽くしなさい！

あなたはキリストと相容れる道を探さなければならない

わたしは人のあいだで多くの働きをしてきたが、その間、多くの言葉も発した。これらの言葉は人の救いのためであり、人がわたしと相容れるようにと発したものである。しかし、わたしと相容れる者を、地上ではほんの数名しか得ていない。だからわたしは、人はわたしの言葉を重んじないと言う。それは、人がわたしと相容れないからである。このように、わたしの行う働きは、単に人がわたしを崇めるようにするためだけではなく、さらに重要なこととして、人がわたしと相容れられるようにするのが目的である。人は墮落させられ、サタンの罠の中で生きている。誰もが肉に生き、利己的な欲求の中で生きていて、わたしと相容れる者は彼らの中に一人もいない。わたしと相容れると言う者もいるが、このような人はみな漠然とした偶像を崇めている。彼らはわたしの名を聖いものとして認めているが、わたしに反する道を歩んでおり、彼らの言葉は傲慢とうぬぼれに満ちている。みな心の底でわたしに敵対しており、わたしと相容れないからである。毎日、彼らは聖書にわたしの痕跡を探し、適当に「都合の良い」節を見つけては、いつまでも読み続け、それを聖句として唱える。彼らはわたしと相容れる方法を知らず、わたしに敵対することが何を意味するかも知らない。闇雲に聖句を読むだけなのだ。彼らは聖書の中に、見たことがなく、見ることもできない漠然とした神を閉じ込め、暇なときに取り出して眺めている。彼らはわたしの存在を聖書の範囲内でしか信じず、わたしと聖書を同一視している。聖書がなければ、わたしはいない。わたしがなければ、聖書はない。彼らはわたしの存在や業を無視し、その代わりに聖書の一字一句に極端な特別の注意を払う。また、さらに多くの人々が、聖書で預言されていない限り、わたしは自分のしたいことを何もしてはいけないとさえ信じている。このような人は聖書の文章を重視し過ぎているのだ。彼らは言葉と表現を大事にするあまり、聖書の語句を用いてわたしの発する一言一句を評価したり、わたしを批判したりするほどだ、と言える。彼らが求めているのは、わたしと相容れる道ではなく、また、

真理と相容れる道でもなく、聖書の語句と相容れる道なのだ。また、聖書に合致しないものは例外なく、わたしの働きではないと信じている。そうした人々はパリサイ人の忠実な子孫なのではないか。ユダヤのパリサイ人は、モーセの律法を用いてイエスを罪に定めた。彼らは当時のイエスと相容れることを求めず、律法の字句に忠実に従うあまり、イエスが旧約の律法に従っておらず、またメシヤでもないとは断罪して、最後は無実のイエスを十字架にかけたのである。彼らの本質は何だったのか。真理と相容れる道を求めていなかったのではないか。彼らは聖書の一字一句にこだわり、わたしの旨に注意を払わず、わたしの働きの手順や方法にも無関心だった。真理を求める人たちではなく、あくまで字句に固執する人たちだった。彼らは神ではなく、聖書を信じていた。つまり、彼らは聖書の番犬なのである。聖書の権益を守るため、聖書の権威を維持するため、そして聖書の評判を保護するため、彼らは慈悲深いイエスを十字架にかけさえした。単に聖書を守るため、そして人々の心における聖書の一字一句の地位を維持するために、そうしたのだ。だから、彼らは自分の前途と罪の捧げ物を捨て、聖書の教義に合致しないイエスを断罪して死に処したのである。彼らはみな、聖書の一字一句に隷属していたのではないか。

では、今日の人々はどうか。キリストは真理を解き放つために来た。しかし、人々は天に入って恵みを受け取れるよう、そのキリストをこの世から追い出すほうを選ぶ。彼らは聖書の権益を守るために真理の到来を完全に否定し、また聖書の永続を確実にするため、再び受肉したキリストをまたも十字架にかけるほどである。心がかくも悪意に満ち、本性がかくもわたしを敵視している人間が、どうしてわたしの救いを受けられようか。わたしは人のあいだで暮らしているが、人はわたしの存在を知らない。わたしが人に光を照らしても、人はわたしの存在を知らずにいる。わたしが怒りを人の上に放っても、人はますます強くわたしの存在を否定する。人は字句と相容れること、聖書と相容れることは求めるが、真理と相容れる道を求めてわたしの前に来る者はただの一人もいない。人は天のわたしを見上げ、天のわたしに特別な関心を向けているが、肉におけるわたしに気を配る者は誰一人いない。人のあいだで生きるわたしがあまりに平凡だからである。聖書の字句と相容れることしか求めない者、漠然とした神と相容れることしか求めない者は、わたしの目には哀れに映る。それは、彼らの崇めているのが死んだ字句と、計り知れない宝を与えられる神だからである。彼らが崇めているのは、人の思いのままになる神、存在しない神である。では、そうした者はわたしから何を得られるのか。人はただ言いようもなく低劣である。わたしに敵対する者、わたしに限りない要求をする者、真理を愛さない者、わたしに反抗心を抱く者——そのような者たちがどうしてわたしと相容れることができるのか。

わたしに敵対する者たちは、わたしと相容れない人であり、真理を愛さない者たちも同じである。また、わたしに反抗する者たちは、いっそうわたしに敵対し、わたしと相容れることができない。わたしと相容れないすべての者たちを、わたしは悪しき者の手に引き渡す。そうした人々を悪しき者による墮落に委ね、彼らの有害さを自由に暴かせ、最後は悪しき者に手渡し、食い尽くされるに任せる。どれだけ多くの人がわたしを崇めるかなど、わたしは気にしない。つまり、どれだけ多くの人がわたしを信じているかなど、わたしは気にしないのだ。わたしが問題にするのは、どれだけ多くの人がわたしと相容れるかである。それは、わたしと相容れない人はみな、わたしを裏切る悪しき者だからだ。彼らはわたしの敵であり、わたしは自分の敵を家で「祀り」はしない。わたしと相容れる者たちは、永遠にわたしの家でわたしに仕える。そして、わたしに敵対する者たちは、永遠にわたしの懲罰を受けて苦しむ。聖書の字句しか大事にしない者、真理に関心がなく、わたしの足跡を求めることもしない者——そうした者たちはわたしに敵対する。なぜなら、聖書に従ってわたしを限定し、聖書の中にわたしを閉じ込め、わたしに対してこの上ない冒瀆を働くからである。そうした者たちがどうしてわたしの前に出られようか。その人たちはわたしの業、わたしの旨、そして真理に注意を払わず、文字——殺す文字——に執着している。そのような者たちが、どうしてわたしと相容れることができようか。

わたしは実に多くの言葉を発し、わたしの旨と性質も明らかにしてきた。それなのに、人々はわたしを知り、わたしを信じることがいまだできずにいる。あるいは、人々はわたしに従うことがいまだできないと言える。聖書の中で生きる者、律法の中で生きる者、十字架の上で生きる者、教義に従って生きる者、わたしが今日行う働きの中で生きる者——この中の誰がわたしと相容れるのか。あなたがたは、祝福と見返りを受け取ることばかり考え、実際にわたしと相容れるにはどうすればよいか、わたしに敵対するのを避けるにはどうすればよいかなど、少しも考えようとしたことがない。わたしはあなたがたにまったく失望している。実に多くをあなたがたに与えてきたのに、あなたがたからほとんど何も受け取っていないのだから。あなたがたの欺き、あなたがたの傲慢、あなたがたの貪欲、あなたがたの途方もない欲望、あなたがたの裏切り、あなたがたの不服従——これらのどれに、わたしが気づかずにいるというのか。あなたがたはわたしに対していい加減で、わたしをからかい、わたしを侮辱し、わたしを欺き、わたしに要求し、わたしに犠牲を強いる——そうした悪行がどうしてわたしの懲罰を免れようか。こうした悪行はどれもわたしへの敵意の証拠、あなたがたがわたしと相容れない証拠である。あなたがたは誰もが、わたしと相容れると信じているが、仮にそうだとすれば、誰にその反論できな

い証拠が当てはまるのか。あなたがたは、自分はわたしにこの上なく誠実で、忠実だと信じている。あなたがたは、自分はまことに親切で、思いやりがあり、わたしに多くを捧げてきたと思っている。あなたがたは、自分はわたしに十分過ぎるほど奉仕したと思っている。しかし、そうした考えを自身の行いに照らし合わせたことはあるのか。あなたがたはひどく傲慢で、ひどく貪欲で、ひどくいい加減だとわたしは言う。あなたがたがわたしを馬鹿にする手口は甚だしく狡猾で、あなたがたは下劣な意図や手段に満ち溢れている。あなたがたの忠誠はごくわずかでしかなく、あなたがたの誠意はあまりに薄く、あなたがたの良心はさらに乏しい。あなたがたの心にはあまりに多くの悪意があって、誰もあなたがたの悪意から逃れられない。このわたしでさえそうである。あなたがたは、自分の子ども、夫、あるいは自己保存のためにわたしを締め出す。わたしのことを気にかける代わりに、自分の家族、子ども、地位、そして将来を気かけ、自分を満足させることに意を払っている。あなたがたは話したり行動したりする中で、わたしのことをいつ考えたのか。凍えるような日は、自分の子ども、夫、妻、あるいは親に考えが向く。灼熱の日もまた、わたしはあなたがたの思いの中に場所を占めていない。本分を尽くすときは、自分の利益、自分の身の安全、自分の家族のことを考えている。あなたはわたしのためにいったい何をしたというのか。あなたはいつ、わたしのことを考えたのか。わたしとわたしの働きのために惜しむことなく身を捧げたことがいつあったというのか。あなたがたがわたしと相容れる証拠はどこにあるのか。わたしに対するあなたの忠誠はどこに実在しているのか。わたしへの従順さはどこに実在しているのか。あなたの意図が、わたしから祝福を受けるためではなかったことがいつあったのか。あなたがたはわたしを騙し、欺き、真理を弄び、真理の存在を隠し、真理の実質を裏切る。このような形でわたしに逆らうのであれば、あなたがたの未来には何が待っているのか。あなたがたはただ、漠然とした神と相容れることを求めるだけで、漠然とした信仰しか求めないが、キリストとは相容れない。あなたがたの悪事は、悪しき者たちが当然受けるものと同じ報いを引き起こすのではないか。そのとき、あなたがたは、キリストと相容れない者は誰一人怒りの日から逃れられないことに気づき、キリストに敵対する者にどのような報いがなされるかを知るだろう。その日が来れば、神への信仰によって祝福され、天に入るというあなたがたの夢は、すべて碎かれる。しかしながら、キリストと相容れる者たちは違う。そのような者はまことに多くを失い、多くの苦難を経てきたが、わたしが人類に伝える嗣業をすべて受け取る。最終的に、わたしだけが義なる神であり、わたしだけが人類を美しい終着点に導けるということを、あなたがたは理解するだろう。

あなたは本当に神を信じる人なのか

もしかすると、あなたは神を信じる道をすでに一年、あるいは二年以上歩いているかもしれないし、その間の人生において、多くの苦難に耐えてきたかもしれない。あるいは、大した苦難に遭っておらず、その代わりに多くの恵みを受け取ってきたかもしれない。またあるいは、苦難も恵みも経験しておらず、いささか平凡な人生を送ってきたかもしれない。それでもなお、あなたはやはり神に付き従う者である。そこで、神に付き従うという主題について交わることにしよう。しかしながら、わたしはこれらの言葉を読むすべての人に、神の言葉は、神を認め、神に付き従う者に向けられており、神を認めるか認めないかにかかわらず、すべての人に向けられているわけではないということを断っておかなければならない。神は大衆に向かって、世界中のすべての人に向かって話していると信じているなら、神の言葉があなたに影響を及ぼすことは一切ない。だから、あなたはこれらの言葉をすべて心に留めるべきであり、その外部にいつも自分自身を置いてはならない。いずれにしても、わたしたちの家で起きていることについて話そう。

現在、あなたがたはみな、神を信じることの本当の意味を理解すべきである。わたしが以前に話した神を信じることの意味は、あなたがたの肯定的な入りに関連していた。しかし、今日はそうではない。今日わたしは、あなたがたの神への信仰の実質について分析したい。もちろん、これはあなたがたを否定的な面から導くものである。わたしがそうしなければ、あなたがたは自分の本当の顔を決して知らず、自身の敬虔さと忠実さを永遠に誇り続けるだろう。わたしがあなたがたの心の奥底にある醜さを暴かなければ、あなたがたの一人ひとりが自分の頭に冠を乗せ、すべての栄光を自分自身のために取っておく、と言っても言い過ぎではない。あなたがたは自分の傲慢で自惚れた本性に突き動かされて自分の良心を裏切り、キリストに逆らって反抗し、自身の醜さをさらけ出し、それによってあなたがたの意図、観念、度を過ぎた欲望、欲に満ちた目が明るみに出る。それでもなお、あなたがたは、自分は生涯にわたってキリストの働きに情熱を捧げてきたなどと話し続け、キリストによってはるか昔に語られた真理を何度も何度も繰り返す。これがあなたがたの「信仰」、すなわち「不純なもののない信仰」なのである。わたしはずっと、人に厳しい規範を守らせてきた。わたしは、己の意図によってわたしを欺き、わたしに条件を突きつける者を嫌悪するので、あなたの忠誠が意図や条件を伴うものならば、あなたのいわゆる忠誠などむしろないほうがよい。わたしが人に望むのは、わたしに絶対的に忠実であり、すべてのことをある一語のために、その一語を証明するために行うことだけである。その一語とは「信仰」である。あなたがたがわた

しを喜ばせようとしてお世辞を使うのを、わたしは軽蔑する。と言うのも、わたしは常に誠実さでもってあなたがたに接しているからであり、ゆえにあなたがたも、わたしに対して本当の信仰でもって振る舞ってほしいと願う。信仰に関して言えば、自分は信仰があるので神に付き従うのであり、そうでなければ、そのような苦しみに耐えることはないはずだと、多くの者は考えるかもしれない。そこであなたに尋ねる。神の存在を信じているのなら、あなたが神を畏れないのはなぜか。神の存在を信じているのなら、あなたの心に神への畏れがほんの少しもないのはなぜか。キリストは神の受肉であるということをあなたは受け入れている。それではなぜ、あなたは彼を侮り、彼に対して不敬な態度で振る舞うのか。なぜあからさまに彼を批判するのか。なぜ彼の行動をいつも探るのか。なぜ彼の采配に従わないのか。なぜ彼の言葉に従って行動しないのか。なぜ彼をゆすり、捧げ物を奪い取ろうとするのか。なぜキリストの立場から話すのか。彼の働きと言葉が正しいかどうかをなぜ判断するのか。なぜ彼のいないところで図々しくも彼を冒瀆するのか。これらをはじめとする物事が、あなたがたの信仰を形作っているのか。

あなたがたの言動には、キリストに対するあなたがたの不信仰の諸要素が露呈している。あなたがたの行いの動機と目的には、どれも不信仰が浸み込んでいる。また、あなたがたのまなざしにさえ、キリストへの不信仰が含まれている。あなたがた一人ひとりが、一瞬一瞬、不信仰の要素を抱いていると言えるだろう。つまり、あなたがたの体中を巡る血液には、受肉した神に対する不信仰が浸み込んでいるので、あなたがたはいつキリストを裏切るかわからないということである。したがって、あなたがたが神への信仰の道に残す足跡は現実のものでないとわたしは言う。神への信仰の道を歩むあなたがたは、しっかりと地に足をつけておらず、単に動作を繰り返しているに過ぎない。あなたがたはいつもキリストの言葉を完全に信じず、すぐに実践することができずにいる。これが、あなたがたにキリストへの信仰がない理由である。また、キリストについての観念を絶えず持っていることが、あなたがたにキリストへの信仰がないもう一つの理由だ。キリストの働きをいつも疑うこと、キリストの言葉に耳を傾けようとしないこと、キリストの行う働きが何であれ、それにいつも意見を持ち、その働きを正しく理解できないこと、どんな説明を受けても、観念を捨て去るのに苦労することなど、これらはすべて、あなたがたの心の中に入り混じっている不信仰の要素なのである。あなたがたはキリストの働きに付き従い、決して遅れをとらないが、心の中にはあまりに多くの反逆心が入り混じっている。この反逆心こそが、あなたがたの神への信仰における不純物なのである。おそらくあなたがたは、そうではないと思うだろうが、その中から生まれる自分の意図を認識できないなら、必ずやあなたは滅びる者の一人となる。なぜな

ら、神によって完全にされるのは、神を真に信じる者だけであり、神に懐疑的な者は完全にされず、ましてや神が神であることを信じたことがないのに、神に渋々付き従う者が完全にされることなど絶対にないからである。

真理を喜ばず、裁きとなればもっと喜ばない人がいる。むしろ権力と富に喜びを見出すのだが、そのような人は権力の亡者と呼ばれる。彼らはもっぱら、影響力を持つ世界中の教派や、神学校出身の牧師や教師だけを探し求める。真理の道を受け入れたにもかかわらず、彼らは半信半疑で、心と意思のすべてを捧げることができず、神のために自分を費やすことを語りはするが、その視線は偉大な牧師や教師に注がれており、キリストは一顧だにしない。彼らの心は名声、富、栄誉に釘付けになっている。また、そのような小人物がかくも多くの人を征服でき、かくも平凡な者が人を完全にすることができるなど、問題外だと考えている。塵と糞の中にいるこれらの取るに足らない人々が神に選ばれた民であるなど、絶対にあり得ないと思っているのだ。そのような人々が神の救いの対象であれば、天と地がひっくり返り、すべての人が大笑いするだろうと、彼らは信じている。神がそのような取るに足らない人々を選んで完全にするのであれば、あの偉人たちこそ神自身になると信じている。彼らの考え方は不信仰によって汚れている。実際のところ、彼らは信じていないどころか、まったく馬鹿げた獣である。地位、名声、権力だけに価値を置き、大規模な集団や教派しか尊重しないからである。彼らはキリストに導かれる者など一顧だにしない。キリストに、真理に、そしていのちに背を向けた裏切り者に過ぎないのだ。

あなたが敬慕するのはキリストのへりくだりではなく、有力な地位にある偽の羊飼いたちである。あなたはキリストの素晴らしさや知恵を敬愛しないが、世の汚れにふける放蕩な者たちを愛している。あなたは、枕するところもないキリストの苦しみを笑うが、捧げものを狙い、放蕩な生活を送る屍を敬愛する。あなたはキリストのそばで苦しもうとせず、あなたに肉、言葉、支配しか施さない無謀な反キリストの腕に喜んで飛び込む。今でさえ、あなたの心は彼らに、彼らの評判に、彼らの地位に、そして彼らの影響力に向いている。それなのに、あなたはキリストの働きを飲み込みがたいものにする態度をとり続け、進んでそれを受け入れようとしない。だから、あなたにはキリストを認める信仰がないと、わたしは言うのである。あなたが今日に至るまでキリストに従ってきたのは、他に選択肢がなかったからに過ぎない。一連の気高いイメージが、あなたの心にいつまでもそびえている。彼らの言葉や行ないの一つひとつが忘れられず、影響力がある言葉や手腕も忘れられない。あなたがたの心の中では、彼らは永遠に至高で、永遠に英雄なのである。しかし、これは今日のキリストにはあてはまらない。彼はあなたの心の中で永遠に取る

に足りない存在であり、畏れる価値も永遠にない。なぜなら、彼はあまりにも普通すぎ、あまりにも影響力がなさすぎ、高尚さからかけ離れているからである。

いずれにしても、真理を重んじない者はすべて、不信者にして真理を裏切る者だとわたしは言う。そのような人は決してキリストの承認を得られない。自分の中に不信仰がどれほどあるのか、キリストへの裏切りがどれほどあるのか、あなたはもう突き止めたのか。わたしはあなたに以下のことを勧める。真理の道を選んだ以上、誠心誠意献身すべきである。あいまいであったり、気のりのしない態度であったりしてはならない。神は世界にも、一人の人間にも属さず、真に神を信じ、礼拝し、献身的で忠実なすべての人に属するのだと知るべきである。

現在、あなたがたの中には多くの不信仰が残っている。自分自身の内側をしっかりと見つめなさい。そうすれば、必ず答えが見つかる。真の答えが見つければ、自分が神の信者ではなく、むしろ神を欺き、冒瀆し、裏切る者、神に忠実でない者であることを認める。そのときあなたは、キリストは人ではなく、神であると悟る。その日が来ると、あなたはキリストを敬い、畏れ、真に愛する。今、信仰はあなたがたの心の三割しか占めておらず、残りの七割は疑いが占めている。キリストによる言動はどれも、あなたがたにキリストについての観念や意見を与えがちであり、そうした観念や意見は、キリストに対するあなたがたの完全な不信仰から生じる。あなたがたは目に見えない天なる神だけを敬慕し、畏れ、地上の生けるキリストなど一顧だにしない。これもあなたがたの不信仰ではないのか。あなたがたは、過去に働きを行った神だけを慕い、今日のキリストを直視しようとしない。このすべてが、あなたがたの心にいつまでも入り混じり、今日のキリストを信じない「信仰」なのである。わたしは決してあなたがたを過小評価しない。あなたがたの内にはあまりに多くの不信仰があり、あなたがたには詳細に吟味されねばならない不純なところが多すぎるからである。このような不純物は、あなたがたが信仰を一切持たないことのしるしである。このような不純物は、あなたがたがキリストを捨てたこと目の印であり、あなたがたにキリストの裏切り者という烙印を押す。このような不純物は、キリストに関するあなたがたの認識を覆うベール、あなたがたがキリストのものとされることを妨げる障壁、あなたがたがキリストと相容れるのを妨げる障害物、そしてキリストがあなたがたを認めない証拠である。今こそ、あなたがたの人生のあらゆる部分を吟味する時である。そうすることは、想像し得るあらゆる形で、あなたがたに益をもたらす。

キリストは真理をもって裁きの働きを行う

終わりの日の働きとは、すべての人をその性質に応じて区分し、神の経営（救いの）計画を締めくくることである。時が近づき、神の日が来たからである。神の国に入る人すべて、すなわち神に最後の最後まで忠実な人すべてを、神は神自身の時代に連れて行く。しかし、神自身の時代が来る前は、神の働きは人間の行いを観察したり、人間の生活について調べたりすることではなく、人間の不服従を裁くことである。神の玉座の前に来る人すべてを、神は清めなければならないからである。今日まで神の足跡に従ってきた人はすべて神の玉座の前に来る人であり、これゆえに、最終段階の神の働きを受け入れる人の一人ひとは神の清めの対象である。言い換えれば、最終段階における神の働きを受け入れる人は誰もが、神の裁きの対象なのである。

過去に語られた神の家から始まる裁きにおいて、その言葉における「裁き」は、終わりの日に神の玉座の前に来る人々に神が今日下す裁きのことを指す。終わりの日が来ると、神は天に大きな卓を据え、その上には白い布が広げられ、すべての人が地にひざまずいているところに神が大きな玉座につき、一人ひとりの人間の罪を明らかにし、それにより人々が天国に昇るか火と硫黄の湖に落とされるかを決める、というような超自然的な想像の表象を信じている人もおそらくいるであろう。人が何を想像しようと、それが神の働きの本質を変えることはできない。人の想像は人の思考の産物以外の何物でもない。それは人の脳に由来し、人が見たり聞いたりしてきたものからまとめられ組み合わせられたものである。したがって、その生み出された表象がいかにかげりなくとも、それは漫画でしかなく、神の働きの計画にとって代わることはできない、とわたしは言うのである。結局のところ、人間はサタンにより墮落させられてきている。それならば、どうして人間に神の考えを推し量ることができるのか。神による裁きの働きを何かとてつもないものであると人間は考える。神自身が裁きの働きを行うのだから、その働きは最大規模のもので、人間には到底理解できず、それは天のいたるところに鳴り響き、地を揺らすはずである、と人間は考える。そうでなければどうしてそれが神による裁きの働きでありえようか。それは裁きの働きであるので、神が働くときは特に堂々と威厳があるはずで、裁かれている人々は涙を流して叫び、ひざまずいて憐れみを請うているはずであると人間は考える。そのよう情景は確かに荘厳で、深く感情を揺さぶるであろう……誰もが、神の裁きの働きを奇跡的なものであると想像する。しかし、あなたは知っているのか。神はずいぶん前より人間のあいだでの裁きの働きを開始したというのに、あなたは惰眠を貪っていることを。神の裁きの働きが正式に始まったとあなた

が思うときには、神はすでに天と地を新しくしていることを。その時、おそらくあなたは人生の意味をちょうど理解しだしたばかりかもしれないが、神の容赦ない懲罰の働きが、まだ深く眠りにについているあなたを地獄に落とす。その時になって初めて、神の裁きの働きがすでに終わったことにあなたは突然気づくのである。

わたしたちの貴重な時間を無駄使いして、このような忌まわしく嫌な話題についてこれ以上話すのをやめよう。代わりに、裁きを構成するものについて話そう。

「裁き」という言葉を出せば、ヤーウェがあらゆる地域の人々に指示すべく語った言葉、イエスがパリサイ人を非難すべく語った言葉を、あなたはたぶん思い浮かべるであろう。それらの言葉の厳しさにもかかわらず、それらは神の人への裁きの言葉ではなく、様々な環境において、つまり異なる脈絡において、神が語った言葉にすぎなかった。それらの言葉は、終わりの日のキリストが人間を裁きつつ語る言葉とは違う。終わりの日のキリストはさまざまな真理を用いて人間を教え、人間の本質を明らかにし、人間の言動を解剖する。そのような言葉は、人の本分や、人はいかに神に従うべきか、人はいかに神に忠実であるべきか、いかに正常な人間性を生きるべきかや、また神の知恵と性質など、さまざまな真理を含んでいる。これらの言葉はすべて人間の本質とその堕落した性質に向けられている。とくに、人間がいかに神をはねつけるかを明らかにする言葉は、人間がいかにサタンの化身であり、神に敵対する力であるかに関して語られる。神は裁きの働きを行うにあたって、少ない言葉で人間の本性を明らかにすることはない。むしろ長い期間にわたり、それをさらけ出し、取り扱い、刈り込む。こうしたさまざまな方法のさらけ出し、取り扱い、刈り込みはどれも、通常の手がかりが取って代わることはできず、人間が一切持ち合わせていない真理でなければ取って代われない。このような方法のみが裁きと呼ばれることができる。このような裁きを通してのみ人間は屈服し、神について徹底的に納得し、さらに神についての真の認識を得ることができる。裁きの働きがもたらすのは、神の真の顔と人間自らの反抗的性質についての真相を人が認識することである。裁きの働きにより、人は神の心、神の働きの目的、人には理解することのできない奥義についてかなり理解できるようになる。また、それにより人は自分の堕落した本質と堕落の根源を認識し知るようになり、人間の醜さを発見する。これらの効果はすべて、裁きの働きによりもたらされる。それは、実際に、この働きの本質は神を信じる人すべてに神の真理、道、いのちを開く働きだからである。この働きが神による裁きの働きである。もしこれらの真理を重要視せず、いかにこれらを避けるかや、いかにこれらとは関わりのない新しい逃げ道を見つけるかしか考えないのならば、あなたは恐ろしい罪人である、とわたしは言う。もしあなたに神への信仰があるのに、神の真理や心を追い求めず、またあなたを神に近づける道を

愛さないなら、あなたは裁きを逃れようとしている人であり、偉大な白い玉座から逃げる操り人形であり裏切り者である、とわたしは言う。神の目から逃げる反抗的な者を神は誰一人として容赦しない。そのような人はさらに重い懲罰を受ける。裁かれるために神の前に来る人で、その上、清められた人は、永遠に神の国に住むであろう。もちろん、これは未来に属することである。

裁きの働きは神自身の働きであり、そのため当然ながら神が自ら行わなければならない。それは神の代わりに人が行うことはできない。裁きとは真理を用いて人類を征服することなので、この働きを人のあいだで行うために神が受肉した姿で再び現れることは疑いもないことである。つまり、終わりの日のキリストは真理を用いて世界各地の人々を教え、彼らにあらゆる真理を知らしめる。これが神の裁きの働きである。多くの人が神の二度目の受肉について悪い感情をもっている。神が肉になって裁きの働きを行うということが、人には信じがたいからである。それでも、しばしば神の働きは人間の期待を大幅に超え、それは人間の知性には受け入れがたいことである、とわたしは言わなければならない。人は地上の蛆虫にすぎないが、一方、神は宇宙を満たす至高の存在であるからである。人の知性は蛆虫だけを生み出す汚水のたまった穴に似ており、一方、神の考えが指揮する働きの各段階は神の知恵の結晶である。人は常に神に敵対しようとしているが、これに関しては、最後に誰が負けるかは自明であると、わたしは言う。自分のことを黄金より価値があるとみなさないように、わたしはあなたがたに強く勧める。もし他人が神の裁きを受け入れられるなら、なぜあなたにはできないのか。他人に比べてあなたはどれくらい高位に立っているのか。もし他人が真理の前に頭を垂れるなら、なぜあなたもそうできないのか。神の働きには止めることのできない勢いがある。あなたのした「貢献」のためだけに神は裁きの働きを繰り返すことはなく、このような好機を逃すと、あなたは無限の後悔に苛まれることになる。もしわたしの言葉を信じないなら、天空にある偉大な白い玉座があなたに裁きを下すのを待っていなさい。すべてのイスラエル人がイエスを拒絶し否定したが、それでもイエスによる人類の贖罪の事実は全宇宙に、そして地の果てまで広がったことを知らなければならない。これは神がはるか昔に成し遂げた一つの現実ではないのか。もしイエスがあなたを天に引き上げるのをいまだに待っているのなら、あなたは頑固な一片の枯れ木^[a]であるとわたしは言う。あなたのような真理に不忠実で、祝福だけを

脚注

a. 「一片の枯れ木」とは、中国語の慣用句で、「救いがたい」という意味である。

求める偽信者をイエスは認めることはない。それどころか、何万年も焼かれるように火の湖にあなたを投げ入れるのに憐れみを一切見せないであろう。

裁きとは何か、真理とは何かをいま理解しているか。もししているならば、裁かれることに従順に従うよう強く勧める。さもなければ、神に称賛され、神の国に連れて行かれる機会を得ることは決してないであろう。裁きを受け入れるだけで清められることのできない人、つまり裁きの働きの只中において逃げる人は、永遠に神に嫌われ拒絶される。彼らの罪は、パリサイ人の罪よりもさらに多く、深刻である。彼らは神を裏切り、神の反逆者だからである。奉仕することさえ相応しくないそのような人は、さらに過酷で、加えていつまでも終わることのない懲罰を受ける。言葉では一度は忠誠を誓いながらその後、神を裏切った反逆者を神は容赦することはない。このような人は霊、魂、体の懲罰を通して報復を受けることになる。これこそ、神の義なる性質の明示ではないのか。これが人を裁き、明らかにする神の目的ではないのか。神は裁きのあいだにあらゆる邪惡な行いをする人々すべてを邪惡な霊がはびこる場所に引き渡し、邪惡な霊に彼らの肉体を好きなように破壊させる。彼らの肉体は死臭を放つ。これは彼らにふさわしい報復である。神は、それら不忠実な偽信者、偽使徒、偽働き人の罪を一つひとつその記録書に書き留める。そして、その時が来ると、神は彼らを不浄な霊の真中に投げ入れ、不浄な霊が彼らの全身を思うままに汚すようにし、そのため彼らは決して生まれ変わることはなく、二度と光を見ることはない。一時期は神に仕えるが最後まで忠実であり続けることのできない偽善者は、神が邪惡なものに含めて数え、そのため彼らはみな悪人とぐるになり、烏合の衆の一部となる。最後には神は彼らを滅ぼす。キリストに忠実であったことがない人、自らの強みをもって何らの貢献をしたことのない人を神は脇へやり、省みることはなく、時代が変わるときに彼らをすべて滅ぼす。彼らはもはや地上には存在せず、神の国へ入ることなどなおさらありえない。神に誠実であったことはないが、状況のせいで強制的に神を表面的に取り扱うことになった人は、神の民のために奉仕する人に含めて数えられる。これらの人々のうちほんの一部だけが生き残るが、大半は基準に達しない奉仕をする人々とともに滅ぶ。最後に、神と同じ考えをもつ人すべて、神の民と子ら、そして神に祭司となるよう予め定められた人々を、神は神の国に連れて行く。彼らは神の働きの結晶となる。神が制定した範疇のどれにも当てはめることのできない人は、未信者に含めて数えられる。彼らの結末がどうなるか、あなたがたは確実に想像できることであろう。わたしは既に言うべきことをすべてあなたがたに語った。あなたがたが選ぶ道は、あなたがただけの選択である。あなたがたが理解すべきことはこれである。神の働きは神と足並みをそろえることのできない人を誰も待たず、神の義なる性質はどんな人にも憐れみを示さない。

あなたは知っていたか。 神が人々のあいだで偉大な業を成し遂げたことを

古い時代は過ぎ去り、新しい時代が到来した。年々歳々、来る日も来る日も、神は多くの働きを行ってきた。神はこの世にやって来て、やがてこの世から去っていった。その周期が幾世代にもわたって繰り返された。今日も、神は以前と同じように、なすべき働き、まだ完了していない働きを行い続けている。と言うのも、今日に至るまで、神はいまだ安息に入っていないからである。創造の時から今日まで、神は多くの働きをなしてきた。しかしあなたは、神が今日、以前よりもはるかに多くの働きを行い、その働きの規模も以前に増してずっと壮大であることを知っていたか。だからわたしは、神は人々のあいだで偉大な業を成し遂げたと言うのである。神の働きは人にとっても、また神にとっても、すべて非常に重要である。なぜなら、神の働きの一つひとつは人に関連するものだからである。

神の働きは見ることも触れることもできず、ましてや世間の人が見ることなどできないのに、いったいどうして偉大なものだと言えるのか。どのようなことが偉大だと思われるのか。神がどのような働きを行うにせよ、それがすべて偉大であることは、確かに誰にも否定できない。しかし、神が今日行う働きは偉大だと、わたしが言うのはなぜか。神は偉大な業を成し遂げたと言わし言うとき、そこには間違いなく、人間がまだ理解していない多くの奥義が関わっている。今からそのことについて話そう。

イエスは、彼の存在を受け入れられない時代に飼料おけの中で生まれたが、たとえそうでも、世はイエスの行く手を遮ることができず、イエスは神の配慮の下、三十三年にわたって人々のあいだで暮らした。その数十年の生涯において、イエスは世の辛酸を嘗め、地上でみじめな生活を味わった。また全人類を贖うべく、十字架にかけられるというとても重い重荷を背負った。イエスはサタンの支配下で生きるすべての罪人を贖い、そして最後に、イエスの復活した体は安息の場に戻った。今や、神の新しい働きが始まったが、それはまた新しい時代の始まりでもある。神は、新しい救いの働きを始めるために、贖われた人々を神の家へと導き入れる。今回、救いの働きは過去の時代よりも徹底している。聖霊が人の中で働き、人が自ら変化するようにさせているのではなく、イエスの体が人のあいだに現れ、この働きを行っているのでもないし、ましてや、その他のやり方でこの働きが行われているのでもない。むしろ、受肉した神が自ら働きを行い、それを導いているのだ。人を新しい働きへと導き入れるために、神はそのような形で働きを行う。これは偉大なことではないか。神はこの働きを、人類の一部や預言を通して行うのではな

く、むしろ神自身がそれを行う。一部の人は、これは偉大なことではなく、人に大いなる喜びをもたらすことはできないと言うかもしれない。しかし、神の働きはこれに留まらず、もっと偉大で数も多いと、わたしはあなたに言う。

今回、神は霊体ではなく、まったく普通の体で働きを行うために来る。さらに、それは神の二度目の受肉の体というだけではなく、神はその体を通して肉へと戻る。それはごく普通の肉体である。他の人々との違いを生み出すものは何も見受けられないが、今までに聞いたこともない真理をこの人から受け取ることができる。この取るに足らない肉体は、神から来る真理の言葉のすべてを具現化し、終わりの日の神の働きを引き受け、人が理解する神の性質全体を表すものである。あなたは天の神を見ることを大いに望んでいるではないか。あなたは天の神を理解することを切に願っているではないか。あなたは人類の終着点を見ることを大いに欲しているではないか。この人はこれらの秘密、つまり、今まで誰一人としてあなたに語ることはできなかった秘密のすべてをあなたに語るだろう。また、あなたが理解していない真理についても語るだろう。この人は、あなたにとっての神の国への門であり、新しい時代への導き手である。このような普通の肉が、数多くの測り知れない奥義を握っているのである。この人の行いはあなたには不可解かもしれないが、この人が行う働きの目標全体は、人々の思うように、この人が単なる肉ではないことを理解するのに十分である。なぜならこの人は、終わりの日における神の旨と、神が人類に示す配慮を表しているからである。あなたは天地を揺るがすかのような彼の言葉を聞くことができず、燃え上がる炎のようなその目を見ることもできず、また、鉄の杖のような神の懲らしめを受けることもできないが、その言葉から神が怒りに満ち溢れていることを聞き、神が人類に憐れみを示しているのを知ることができる。あなたは神の義なる性質と神の知恵を見ることができ、またそれ以上に、全人類に対する神の憂慮に気づくことができる。人は終わりの日の神の働きにより、地上で人々のあいだで生きている天の神を見られるようになり、また神を知り、神に従い、神を畏れ、神を愛することができるようになる。これが、神が二度目に肉へと戻った理由である。今日人が見るものは、人と同じ姿の神、一つの鼻と二つの目を持つ神、目立たない神であるが、最終的に神は、あなたがたに次のことを示すだろう。すなわち、この人が存在していなければ、天と地は巨大な変化を経験し、この人が存在していなければ、天は薄暗くなり、地上は混沌に陥り、全人類は飢饉と疫病の中で暮らすことになる、ということである。終わりの日にあなたがたを救うべく、受肉した神が来ていなければ、神はずっと前に全人類を地獄で滅ぼし尽くしていたはずだということを、神はあなたがたに示すだろう。またこの肉が存在していなければ、あなたがたは永遠に大罪人で、死体のままであるということ、神

はあなたがたに示すだろう。この肉が存在しなければ、全人類は避けることのできない災難に直面し、終わりの日に神が人類へと繰り出す、さらに厳しい懲罰から逃れるのは不可能であるということを、あなたがたは知るべきである。この普通の肉が生まれていなければ、生きようと懇願しても生きられず、死を願っても死ねない状態に陥るだろう。この肉が存在しなければ、今日、あなたがたは真理を得て神の玉座の前に来ることができず、それどころか、あなたがたの深い罪ゆえに、神によって罰せられるだろう。神が肉へと戻ることがなければ、誰にも救いの機会はなかったはずだということを、あなたがたは知っていたのか。また、この肉が来なければ、神はずっと以前に古い時代を終わらせていたはずだということを、あなたがたは知っていたのか。そうであれば、あなたがたは神の二度目の受肉をなおも拒むことができるのか。あなたがたは、この普通の人から多くの利点を引き出すことができるのに、なぜ喜んでこの人を受け入れようとししないのか。

神の働きは、あなたには理解できないことである。自分の決定が正しいかどうかを完全に把握することも、神の働きが成功し得るかどうかわかることもできないのなら、この普通の人自分が自分にとって大いに助けとなるかどうか、また、神が本当に偉大な働きを行なったかどうかを、運に任せて見てみようとししないのか。しかし、わたしはあなたに告げなければならない。ノアの時代、人々は神が見るに堪えないほど飲み食いしたり、勝手気ままに結婚したり結婚させたりしていたので、神は大洪水を引き起こして人類を滅ぼし、ノアの家族八人とあらゆる種類の鳥と獣だけを残した。とは言え、終わりの日に神が残すのは、最後まで神に忠誠を尽くしたすべての人々である。どちらも神が見るに耐えないほどの、ひどい墮落の時代であり、またどちらの時代の人々も、自分たちの主である神を否定するほどひどく墮落し、拒絶されていたが、神が滅ぼしたのはノアの時代の人々だけだった。どちらの時代の人々も神にひどくつらい思いをさせたが、終わりの日の人々に対し、神は今日に至るまで忍耐深い。それはなぜか。あなたがたはその理由を考えたことがないのか。本当に知らないなら、わたしがあなたがたに話そう。終わりの日に神が人々に恵みを授けられるのは、彼らがノアの時代の人々ほど墮落していないからでも、神に悔い改めを示したからでもない。まして、終わりの日の技術が進歩するあまり、神が人々を滅ぼす気になれないからでもない。むしろ、神には終わりの日に一群の人々に対して行う働きがあり、神はその働きを、肉において自ら行うからである。そのうえ、神はこの集団の一部を選んで救いの対象、神の経営計画の果実とし、それらの人々を次の時代へと導く。したがって、何があろうと、神によって支払われたこの代価は、ひとえに終わりの日における神の受肉の働きに備えるものだったのだ。あなたがたが今日に至ったという事実は、この肉のおかげである。あなたがた

に生存の機会があるのは、神が肉の中で生きているためである。この幸運はすべて、この普通の人のゆえに得られたものである。それだけではない。最後にすべての国はこの普通の人を崇め、この取るに足りない人に感謝し、従うだろう。全人類を救い、人と神の対立を和らげ、両者の距離を縮め、神と人の考えをつなげたのは、この人がもたらした真理、いのち、道だからである。いっそう偉大な栄光を神にもたらしたのもこの人である。このような普通の人は、あなたの信頼や敬愛を受けるに値しないだろうか。このような普通の肉はキリストと呼ばれるに相応しくないだろうか。このような普通の人々が、人々のあいだで神の表れになることはできないのか。人類を災難から免れさせたこのような人は、あなたがたの愛に、抱きしめたいというあなたがたの願望にふさわしくないのか。彼の口から発せられる真理を拒み、自分たちのあいだに彼が存在するのを忌み嫌うならば、あなたがたの運命は最後にどうなるだろうか。

終わりの日における神の働きのすべては、この普通の人を通して行われる。この人はすべてのものをあなたに授け、またそれ以上に、あなたに関係するすべてのことを決定できる。このような人が、あなたがたが思っているように、言及する価値もないほど取るに足らないということがあり得るだろうか。この人の真理はあなたがたを完全に納得させるのに十分ではないのか。この人の業の証しは、あなたがたを完全に納得させるのに十分ではないのか。あるいは、この人がもたらす道は、あなたがたが歩む価値などないということなのか。結局あなたがたがこの人を忌み嫌い、見捨て、距離を置く理由は何なのか。真理を表すのはこの人であり、真理を施すのはこの人であり、あなたがたに従うべき道をもたらすのもこの人である。あなたがたが依然として、これらの真理の内に神の働きの痕跡を見つけられないということがあり得ようか。イエスの働きがなければ、人類が十字架から降りることはできなかったはずだが、今日の受肉がなければ、十字架から降りる者たちが神に認められることは決してないし、新しい時代に入ることもできない。この普通の人の到来がなければ、あなたがたに神の本当の顔を見る機会はなく、またその資格もない。と言うのも、あなたがたはみな、はるか昔に滅ぼされているべき対象だからである。二度目に受肉した神の到来のゆえに、神はあなたがたを赦し、あなたがたに憐れみを示してきた。いずれにしても、最後にわたしがあなたがたに言い残さなければならない言葉はやはりこうである。受肉した神であるこの普通の人は、あなたがたにとって極めて重要である。これこそが、神が人々のあいだで成し遂げた偉大なことなのだ。

終わりの日のキリストだけが人に 永遠のいのちの道を与えられる

いのちの道は誰でも持てるものではなく、また誰にとっても簡単に得られるものではない。いのちは神からしか生じ得ないからである。つまり、神自身のみがいのちの実質を有しており、神自身のみがいのちの道をもっている。ゆえに、神のみがいのちの源であり、永遠に流れつづけるいのちの生ける泉なのである。世界を創造してからずっと、神はいのちの活力に関する多くの働きを行ない、人にいのちをもたらす多くの働きを行ない、人がいのちを得られるよう多大な代価を払ってきた。神自身が永遠のいのちであり、そして神自身が、人が復活する道だからである。神が人の心にはいないことは決してなく、常に人の中に生きている。神は人の生活の原動力であり、人の存在の根幹であり、誕生後の人の存在にとっての豊かな鉱床である。神は人を生まれ変わらせ、人が自分のすべての役割においてしっかり生きられるようにする。神の力と、消えることのない神のいのちの力のおかげで、人は何世代も生きてきた。その間ずっと、神のいのちの力は人の存在の支えであり、神は普通の人間が誰も払ったことのない代価を払ってきた。神のいのちの力は、いかなる力にも勝る。そのうえ、いかなる力をも超越する。神のいのちは永遠であり、神の力は非凡であり、神のいのちの力はいかなる被造物や敵の力によっても圧倒されない。時や場所に関係なく、神のいのちの力は存在し、明るい輝きを放つ。天地は激変するかもしれないが、神のいのちは永遠に不変である。万物は過ぎ去るかもしれないが、神のいのちは依然として残る。神は万物の存在の源であり、それらの存在の根幹だからである。人のいのちは神に由来し、天の存在は神に拠り、地の存在は神のいのちの力から生じる。活力を有するいかなる物体も神の主権を越えることはできず、生気を有する何物も神の権威の及ぶ範囲から逃れることはできない。このようにして、誰もが神の支配下で服従し、神の命令の下で生きなければならない、誰も神の手から逃れられない。

おそらく、あなたの今の望みはいのちを得ること、あるいは真理を得ることである。いずれにせよ、あなたは神を見つけないかと願っている。つまり、頼ることができて自分に永遠のいのちを施せる神を見つけないのである。永遠のいのちを得たいと望むなら、まずは永遠のいのちの源を理解し、神がどこにいるのかを知らねばならない。わたしはすでに、神のみが永久不変のいのちで、神のみがいのちの道をもっていると言った。神は永久不変のいのちであり、ゆえに永遠のいのちである。神のみがいのちの道なので、神自身が永遠のいのちの道である。ゆえに、まずは神がどこにいるのか、そしてその永遠のいのちの道を

得るにはどうしたらよいかを理解しなければならない。では、この二つの点について、それぞれ交わりを行なおう。

あなたが本当に永遠のいのちの道を得たいと望み、飽くことなく探し続けているなら、まずこの質問に答えてほしい。今日、神はどこにいるのか？ おそらくあなたは、「当然、神は天に住んでいる。あなたの家には住んでいないはずだ」と答えるだろう。あるいは、神は明らかに万物の間にいると言うかもしれない。もしくは、神は各々の心の中にいると言うかもしれないし、神は霊界にいると言うかもしれない。これらのどれも否定はしないが、問題を明確にしなければならない。神が人の心の中に住んでいるというのはまったく正しいわけではないが、かと言って完全に間違っているわけでもない。と言うのも、神を信じる者の中には、その信仰が本物である者と偽物である者、神が認める者と認めない者、神を喜ばせる者と神が嫌う者、そして神が完全にする者と神が排除する者がいるからである。だからわたしは、神は一握りの人の心にのみ住んでいると言うのであり、この人たちは疑いなく真に神を信じ、神に認められ、神を喜ばせ、神はこの人たちを完全にする。神はこのような人たちを導く。彼らは神に導かれているのだから、神の永遠のいのちの道をすでに見聞きした人である。神への信仰が偽物であり、神に認められず、神に嫌われ、排除される者たちは、必ずや神に拒絶され、いのちの道を得られず、神がどこにいるのかを知らずにいる。対照的に、心に神を住まわせている者は、神がどこにいるかを知っている。彼らは、神が永遠のいのちの道を授ける者たちであり、神に従う者たちである。あなたは今、神がどこにいるかを知っているか。神は、人の心の中と、人の傍らの両方にいる。神は霊界に、そして万物の上にいるだけでなく、それ以上に、人が存在する地上にいる。ゆえに、終わりの日の到来により、神の働きの段階は新たな領域へとすすんだのである。神は万物の中の全てに対する支配権を握っており、人の心の支えであり、さらに神は人の間に存在している。このようにしてのみ、神はいのちの道を人類にもたらし、人をいのちの道へと導くことができる。人がいのちの道を得て生存できるよう、神は地上に来て人の間で生きる。同時に、神は万物の中の全てを指揮し、神が人の間で行なう経営への協力を容易にする。したがって、神は天と人の心にいるという教義を認めるだけで、人の間における神の存在の真理を認めないなら、あなたがいのちを得ることは決してないし、真理の道を得ることもない。

神自身がいのちであり、真理であり、神のいのちと真理は共存している。真理を得られない者がいのちを得ることは決してない。真理による導き、支え、施しがなければ、あなたは文字と教義、そして何より死しか得られない。神のいのちは常に存在し、神の真理といのちは共存する。真理の源を見つけられなければ、いのちの

糧は得られない。いのちの施しを得られないなら、真理を一切得られないことは間違いなく、ゆえに想像と観念を除けば、あなたの全身はただの肉、臭い肉でしかない。書物の言葉がいのちに数えられることはなく、歴史の記録が真理として崇拝されることはなく、過去の規則が神によって今語られている言葉の記録になることはないと知りなさい。神が地上に来て、人の間で生きているときに表わすものだけが真理であり、いのちであり、神の旨であり、神が現在働く方法である。神が過去の時代に語った言葉の記録を現代に適用するのなら、あなたは考古学者であり、あなたに最もふさわしい表現は歴史的遺産の専門家ということになる。なぜなら、あなたは常に神が過去の時代に行なった働きの痕跡を信じており、神がかつて人の間で働いた際に残した神の影しか信じておらず、神がかつての信者に与えた道しか信じていないからである。あなたは、神による今日の働きの方向を信じておらず、今ある神の栄光に満ちた顔を信じておらず、現在神が表わしている真理の道を信じていない。ゆえに、あなたが完全に浮世離れした空想家なのは間違いない。今、人にいのちをもたらすことのできない言葉になおも固執するなら、あなたは望みのない一片の枯れ木^[a]である。あなたは保守的に過ぎ、あまりに強情で、理知に無頓着だからである。

受肉した神はキリストと呼ばれるので、人に真理を与えられるキリストは神と呼ばれる。ここには何の誇張もない。なぜなら、そのキリストは神の実質を有し、神の性質を有し、その働きには知恵があり、これらはどれも人間の手の届かないものだからである。キリストを自称しながら神の働きを行なえない者は、詐欺師である。キリストは、単なる地上における神の顕現ではなく、人の間で働きを行ない、それを完成させるにあたって神が宿った特有の肉体でもある。この肉体は誰でも取って代われるものではなく、地上における神の働きを適切に引き受け、神の性質を表わし、神を十分に象徴し、人にいのちを与えられる肉体である。遅かれ早かれ、キリストになりすましている者たちはみな倒れる。彼らはキリストを自称しながら、キリストの実質を何ひとつ有していないからである。ゆえにわたしは、キリストの真偽は人が定められるものではなく、神自身が答えて決めるものだという。このようにして、あなたが真にいのちの道を求めるなら、神は地上に来ることで、人にいのちの道を授ける働きをしているということをまず認め、そして神が地上に来て人にいのちの道を与えるのは終わりの日であることを認めなくてはならない。それは過去のことではなく、今起きていることなのだ。

脚注

a. 「一片の枯れ木」とは、中国語の慣用句で、「救いがたい」という意味である。

終わりの日のキリストはいのちをもたらし、変わることなく永遠に続く真理の道をもたす。人はこの真理を通していのちを得ることができ、この真理を通してのみ、神を知り、神に良しと認められる。終わりの日のキリストが与えるいのちの道を求めないなら、あなたは決してイエスに良しと認められず、天国の門をくぐる資格も得られない。なぜなら、あなたは歴史の操り人形であり、歴史に囚われた人だからである。規則や文字に支配され、歴史に束縛される者は、決していのちを得ることができず、永遠のいのちの道も得られない。と言うのも、彼らがもっているのはどれも、玉座から流れるいのちの水ではなく、何千年も執着してきた汚水だからである。いのちの水を施されない者は永遠に死体であり、サタンの玩具であり、地獄の子である。そのような者がどうして神を目にできようか。ひたすら過去にしがみつき、足踏みしながら現状を維持しようとし、現状を変えて歴史を棄てようとするなら、あなたは絶えず神に反することになるのではないか。神の働きの歩みは、押し寄せる波や轟く雷鳴のごとく広大で力強い。それでも、あなたは自分の愚かさに固執して何もしないまま、座して滅びを待っている。このままで、あなたは小羊の足跡に従う者だと見なされようか。あなたが神として固執するものが、常にあたらしく古びない神だと正当化できようか。あなたの黄ばんだ本の言葉があなたを新しい時代に運んでくれることがあろうか。神の働きの歩みをたどれるよう導いてくれようか。そして、それらがあなたを天国に引き上げられるだろうか。あなたがその手でつかんでいる物は、つかの間の慰めを与えられる文字でしかなく、いのちを与えられる真理ではない。あなたが読む聖句は、あなたの舌を肥やせるだけで、あなたが人生を知るうえで助けとなる哲学の言葉ではなく、ましてやあなたを完全にしよう導く道などではない。この食い違いを見て、あなたはよく考えてみようとは思わないのか。そこに含まれる奥義をあなたに理解させることはないのか。あなたは、自分で自分を天に引き上げ、神に会わせることができるのか。神が来なくても、あなたは自らを天に引き上げ、神と共に家族の幸福を楽しむことができるのか。あなたはいまだに夢を見ているのか。それなら、わたしは勧める。夢を見るのを止めよ。今働いているのが誰かを見よ。今、終わりの日に人を救う働きをしているのが誰かを見よ。そうしなければ、あなたが真理を得ることは決してなく、いのちを得ることも決してない。

キリストが語る真理に頼ることなくいのちを得たいと望む者は、地上で最も愚かな者であり、キリストがもたらすいのちの道を受け入れない者は、幻想の世界で迷子になった者である。ゆえにわたしは、終わりの日のキリストを受け入れない者は神から永遠に忌み嫌われると言う。キリストは、人が終わりの日に神の国へと入る門であり、それを迂回できる者は誰一人いない。キリストを通してでなければ、誰

も神によって完全にされることはない。あなたは神を信じているのだから、神の言葉を受け入れ、神の道に従わなければならない。真理を受け取ることも、いのちの施しを受け入れることもできないのに、祝福を得ることだけを考えることはできない。キリストは、自身を真に信じる者にいのちを施せるよう、終わりの日に来る。その働きは、古い時代を終わらせ新しい時代に入るためのもので、新しい時代に入る人が必ず進まなければならない道である。キリストを認められず、非難したり、冒涇したり、さらには迫害したりするなら、あなたは永遠に火で焼かれなければならない、神の国には決して入れない。このキリストこそが聖霊の顕現であり、神の顕現であり、神が地上での働きを託した者だからである。したがって、終わりの日のキリストによってなされる一切のことを受け入れられないなら、あなたは聖霊を冒涇しているとわたしは言う。聖霊を冒涇する者が受ける報いは、誰の目にも自明である。これもあなたに言うが、あなたが終わりの日のキリストに抵抗し、終わりの日のキリストを足蹴にするなら、その結末をあなたに代わって引き受ける人は誰もいない。さらに、これから先、あなたが神に認めてもらう機会はない。たとえ自らの罪を贖おうとしても、あなたが神の顔を拝することは二度とない。なぜなら、あなたが抵抗したのは人ではなく、あなたが足蹴にしたのは卑小な存在ではなく、他でもないキリストだからである。あなたはその結末がどのようなものか知っているのか。あなたが犯すのは小さな過ちではなく、重罪である。だから、わたしはすべての人に忠告する。真理の前に牙をむき出したり、軽率に批判したりしてはいけない。あなたにいのちをもたらせるのは真理以外になく、あなたが生まれ変わり、再び神の顔を仰げるようにするものは、真理以外にはないからである。

終着点のために十分な善行を積みなさい

わたしはあなたがたのもとで多くの働きを行い、また当然ながら相当数の言葉を発してきた。しかし、わたしの言葉や働きは、終わりの日の働きの目的を完全に達成していないと感じないではいられない。終わりの日には、わたしの働きは特定の人のためではなく、わたしの本来の性質を明示するためだからである。しかし、無数の理由から、おそらく時間が足りないとか仕事に忙殺されているなどの理由で、人はわたしの性質からわたしについて何か知るようにはならなかった。ゆえに、わたしは新しい計画、最後の働きに着手し、働きにおける新しいページを開く。それにより、わたしを見る人はみな、わたしの存在ゆえに胸をたたいて、とめどなく泣くことになる。それは、わたしがこの世に人類の最後をもたらし、その時から、わたしの性質をすべて人類の前にあらわにするからである。そうして、わたしを知る

人みな、そしてわたしを知らない人もみな、その目を喜ばせ、確かにわたしが人間の世界に、全てのものが増える地上に来たことを知るのである。これがわたしの計画であり、人類の創造以来の唯一のわたしの「告白」である。あなたがたは、わたしの一挙一動を集中して見守るように。わたしの杖が再び人類に向けて、わたしに敵対する者すべてに向けて迫りつつあるからである。

天と共に、わたしはすべき働きを始める。そのため、わたしは人々の流れの中を縫うように進み、天と地の間を行き来する。だれもわたしの動きを察知せず、わたしの言葉に気づかない。ゆえに、わたしの計画は依然として順調に進んでいる。あなたがたの感覚があまりにも麻痺してしまったため、わたしの働きの段取りにあなたがたは少しも気づかないだけである。しかし、いつの日か必ず、あなたがたはわたしの意図を理解する。今日、わたしはあなたがたと共に生き、共に苦しみ、随分前から人間のわたしに対する態度を理解するようになっている。このことについてはこれ以上話すことは望まず、ましてやこの辛い話題の事例をさらに挙げてあなたがたを辱めたくない。わたしの唯一の願いは、あなたがたが行なったことすべてを心の内に留め、再会した日にはそのひとつひとつを数え上げることができるようにすることである。わたしはあなたがたの誰にも濡れ衣を着せたくない。わたしは常に正しく、公正に、りっぱに行動してきたからである。もちろん、あなたがたも誠実であり、天と地、また良心に逆らうようなことを何一つしないこともわたしは願っている。これがわたしがあなたがたに求める唯一のことである。多くの人は自分が甚だしい過ちを犯したので心が落ち着かず、またたった一つの善行すらしてこなかったので自分を恥じている。しかし、自分の罪を恥ずかしいとは全く思わず、ますます悪くなる者も多く、まだ完全に暴露されていない自分の醜い顔の覆いを完全に引き剥がし、わたしの性質を試そうとする。わたしは誰かの行動を気にすることも注意深く見ることもない。むしろ、情報収集であれ、地上を動き回ることであれ、関心のあることを行なうことであれ、わたしはすべき働きをする。大切な時には、一秒も遅れることも早まることもなく、落ち着いて迅速に当初の計画通りに人間のもとで働きを進める。しかし、わたしの働きの各過程で、捨て去られる人もいる。わたしは彼らがへつらうようなやり方や、見せかけの卑屈さを嫌悪するからである。わたしが忌み嫌う者は、意図的であろうがなかろうが確実に捨てられる。つまり、わたしが嫌悪する全ての者がわたしのもとから遠く離れていることを望んでいる。言うまでもなく、わたしの家に留まっている邪悪な者を見逃すことはない。人が懲罰を受ける日が近いので、卑劣な魂を全てわたしの家から急いで追い出そうとは思わない。なぜなら、わたしにはわたしの計画があるからである。

今こそ、わたしが一人一人の終わりを決めるときであり、人間への働きを開始す

る段階ではない。一人一人の言動、わたしに従うためにたどった道、生来の属性や最終的にどのようにふるまったかをわたしは記録帳に一つずつ書き留める。こうすることで、どのような人であってもわたしの手から逃れることはなく、みながつたしに定めるように同類の人と共にいることになる。わたしは、一人一人の終着点を、年齢や年功、苦しみの量、とりわけ憐れみを誘う度合いではなく、真理を自分のものになっているかどうかに基づいて決める。これ以外の選択肢はない。神の旨に従わない人はみな懲罰されることをあなたがたは悟らなければならない。これは不変の事実である。よって、懲罰される者はみな神の義ゆえに、その数々の邪惡な行為への報いとして懲罰されるのである。計画を立てた当初から、わたしは計画を一切変更していない。人間に関する限り、わたしが言葉を伝える対象は、わたしが本当に認める人と同様に、その数が減っているように見えるだけである。しかし、わたしの計画は決して変わっていないことを主張する。むしろ、常に変わったり、弱ったりしているのは人間の信仰と愛であり、そのため人はわたしにへつらっていたかと思うと、わたしに対して冷たくなったり、あげくにはわたしを捨てたりすることさえできてしまうほどである。あなたがたに対するわたしの態度は、うんざりして嫌惡感を抱くまでは熱くも冷たくもなく、最終的には懲罰を与えることとなる。しかし、懲罰の日、わたしは依然としてあなたがたを見るが、あなたがたはもはやわたしを見ることはできない。あなたがたと一緒に生活はわたしにとってすでに退屈でつまらないものとなっているため、言うまでもなく、違った生活の環境を選んだ。それはよりあなたがたの惡意に満ちた言葉による痛みを避け、あなたがたの耐え難く卑劣なふるまいを避け、あなたがたがもはやわたしを騙したりいい加減に扱ったりすることがないようにするためである。あなたがたから去る前に、わたしは真理に沿わないことをしないようにと依然として熱心に勧めなければならない。むしろ、あなたがたはすべての人が喜ぶようなこと、すべての人に益をもたらすこと、自分自身の終着点に益をもたらすことをするべきである。さもないと、災いの只中で苦しむのは、他ならぬあなた自身となる。

わたしの憐れみは、わたしを愛し、自分を否定する人に向けて現わされる。そして、邪惡な者にもたらされる懲罰はわたしの義なる性質の証明そのものであり、それ以上にわたしの怒りの証である。災いがやって来ると、わたしに反抗する者はみな飢饉や疫病に苛まれ、涙を流す。あらゆる惡事を犯してきたが、長年わたしに従って来た者でも罪の償いを免れることはできない。何百万年の時を通して誰も目にしたことのないような災いに陥り、絶えず恐怖と不安の中に生きることになる。そして、わたしだけに忠誠を示して従ってきた人は喜び、わたしの力に拍手喝采する。彼らは言葉に表せないほどの満足感を体験し、わたしが人類にいまだかつて与

えたことのないような喜びの中に生きる。わたしは人の善行を宝とし、悪行を忌み嫌うからである。わたしが初めて人類を導き始めたときから、わたしと心と同じとする人の集まりを獲得することを熱望してきた。わたしと同じ心を持たない人については、わたしは決して忘れない。彼らに報いを与え、その様子を楽しみながら眺める機会を待ち望みながら、彼らに心の中で憎み続ける。今日、遂にその日を迎え、もはや待つ必要はない。

わたしの最後の仕事は人を懲罰するためだけではなく、人の終着点を決めるためでもある。さらに、わたしのすべての業と行ないをあらゆる人が認識するためである。わたしは一人一人にわたしが行ってきたことは全て正しく、わたしの行ってきたことは全てわたしの性質の表現であることを知って欲しいと思っている。人類を生み出したのは人の行いではなく、とりわけ大自然の行いではなく、創造世界のあらゆる生けるものを育むのはわたしである。わたしの存在なしには、人類は滅びる他なく、酷い災難を経験するだけである。人間はだれであろうとも美しい太陽や月、緑にあふれる世界を再び見ることはない。人類は極寒の夜や、避けられない死の影の谷に遭遇するだけである。わたしは人類の唯一の救いである。わたしは人類の唯一の望みであり、さらに、わたしは全人類がその存在を託すその者である。わたしがいなくて、人類はすぐに停滞してしまう。わたしがいなくて、たとえだれもわたしに注意していなくても、人類は壊滅的被害を受け、あらゆる亡霊に踏みつけられる。わたしは誰にもできない働きを行ない、人間が何らかの善行によりわたしに報いることを望むだけである。わたしに報いることができた人は僅かだが、それでもわたしは人間界での旅を終え、わたしの展開を続ける働きの次の段階を始める。なぜなら、わたしが長年人間のもとを行き来してきたことは実を結び、わたしは極めて喜ばしく思っているからである。わたしが気にするのは人の数ではなく、むしろ彼らの善行である。いずれにしても、わたしはあなたがたが自分の終着点のために十分な善行を積むよう望む。そうすれば、わたしはどれほど満足することか。さもないと、あなたがたの誰も自分に降りかかる災いを免れることはできない。災いはわたしを起源とし、もちろんわたしが采配を振る。もしあなたがたがわたしの目に良いと映ることができなければ、災いの苦しみから免れることはない。患難の中にあっては、あなたがたのふるまいも行いも完全には適切とはされなかった。あなたがたの信仰と愛はうわべだけで、あなたがたは自分たちの臆病さか屈強さしか示さなかったからである。これに関しては、わたしは良いか悪いかの評価のみをする。わたしの関心は引き続きあなたがた一人一人の行動と自己表現の仕方であり、それに基づいてわたしはあなたがたの終着点を決定する。しかし、わたしには明白にしなければならないことがある。すなわち、患難の時にわたしに全く

忠誠を示さなかった者にわたしはもはや憐れみは与えない。わたしの憐れみはそこまでしか届かないからである。さらに、わたしは、かつてわたしを裏切った者は誰も好まず、ましてや友の利害を裏切る者と係ることを望まない。それが誰であれ、これがわたしの性質である。あなたがたに伝えなければならないことがある。つまり、わたしを悲しませる者は誰であれ、再びわたしから寛容な扱いを受けることはなく、これまでわたしに忠実であった者はとこしえにわたしの心に留まるのである。

あなたは誰に忠実なのか

現在、あなたがたが過ごしている日々は決定的である。それはあなたがたの終着点と運命にとってこの上なく重要である。そのため、今日もっているものすべてを大切にし、過ぎゆく一瞬一瞬を大切にしなければならない。この生涯を無駄に生きたことにならないように、可能な限りの時間を作り出し、最大の成果を獲得できるようにしなければならない。なぜわたしがこのようなことを言うのか、あなたがたは当惑しているかもしれない。率直に言うと、わたしはあなたがたのうちの誰の振る舞いにも全然喜んでいない。わたしがあなたがたについて抱いた望みは、現在のあなたがたの有り様ではなかったからである。そのため、こう言うことができる。あなたがた一人ひとは危機に瀕しており、あなたがたの助けを求めたかつての叫び、真理を追求し光を求めた以前の強い願望は終わりに近づいている。これはあなたがたが最後に表す報いであり、わたしがまったく期待していなかったものである。わたしは事実とは異なることを話したくない。というのは、あなたがたがわたしを大いに落胆させたからである。おそらく、あなたがたはこれをそのまま黙って受け入れたくないし、現実と向かい合いたくもないのであろう。しかしわたしは真剣にあなたがたに尋ねなければならない。この数年間、あなたがたの心は一体何で満たされていたのか。あなたがたの心は誰に忠実なのか。これらを唐突な質問と言ってはならない。なぜこのようなことを尋ねるのか、とわたしに聞いてはならない。心得なさい。あなたがたをよく知り過ぎ、あなたがたのことを思い過ぎ、あなたがたの振る舞いと行動に心を砕き過ぎたために、わたしはあなたがたに申し開きをするように止むことなく求め、苦い困難に耐えたのである。しかし、あなたがたはわたしに無関心と耐えがたいあきらめでしか報いない。あなたがたはわたしに対してこんなに怠惰である。わたしがこれを一切知らないことなどありえるだろうか。そう信じているなら、それはあなたがたがわたしに心からやさしく接しないという事実のさらなる証拠である。だからわたしは、あなたがたは自己欺瞞に陥っている、と言うのである。あなたがたは皆とても賢いので自分がし

ていることさえ知らない。それでは、あなたがたは何を用いてわたしに申し開きをするつもりなのか。

わたしが最も関心を寄せている問題は、あなたがたの心は一体誰に忠実なのかということである。あなたがた一人ひとりが自分の考えを整理して、自分は誰に忠実なのか、誰のために生きているのか、と自問することもわたしは望んでいる。おそらく、あなたがたはこの問題を熟考したことはないであろうから、わたしが答えをあなたがたに明らかにしてはどうだろうか。

記憶がある人なら誰でも、人間は自分のために生き、自分自身に忠実であるという事実を認める。あなたがたの答えが完全に正しいとはわたしは思わない。あなたがたは一人ひとりがそれぞれの生活において存在し、それぞれの苦しみと格闘しているからである。それで、あなたがたは自分が愛する人々や自分の気に入るものに忠実なのである。あなたがたは自分自身に全面的に忠実ではない。一人ひとりが周囲の人や出来事や物に影響されるので、あなたがたは自分自身に真に忠実ではないのである。わたしがこのように言うのは自分に忠実であることを是認するためではなく、あなたがたの何か一つのことへの忠実をさらけだすためである。長年にわたり、わたしはあなたがたのうちの誰からも忠実を受けたことがない。あなたがたは何年もの間わたしに従ってきたものの、忠実の片鱗さえわたしに示したことはない。そのかわりに、自分が愛する人々や自分の気に入るものの周りを回ってきただけである。そうするあまりに、いつでも、どこへ行こうとも、あなたがたはこれらを心に留め、見捨てたことはない。あなたがたが自分の愛する何か一つのことにならなったり情熱的になったりするのは、必ずわたしに従っているときや、さらにはわたしの言葉に耳を傾けているときである。それゆえ、わたしがあなたがたに求める忠実を、あなたがたは「愛玩物」に忠実であり、それを可愛がるために代わりに使っている、とわたしは言うのである。あなたがたはわたしのために犠牲の一つや二つ払うかもしれないが、それはあなたがたのすべてを表しておらず、あなたがたが本当に忠実なのはわたしであると示してもいい。あなたがたは自分が情熱を感じる活動に関わる。息子や娘に忠実な人もいれば、夫や妻、富や仕事、上司、地位、女性に忠実な人もいる。自分が忠実なことについては、うんざり感じたり悩まされたりすることは決してない。それどころか、そういうものをさらに大量に、さらに高品質のものを所有することにますます熱心になり、決してあきらめない。わたしとわたしの言葉は、あなたがたの情熱の対象の後ろに押しやられる。それらは最下位に置かれるより他にない。この最下位をこれから発見し、忠実になるもののために空けておく人さえいる。そのような人の心の中にわたしの形跡がわずかでもあったことはない。わたしがあなたがたに求め過ぎるとか、あなたがたを不当に非

難しているとか、あなたがたは思うかもしれない。しかし、あなたがたが家族と幸せなひと時を過ごしているあいだに、わたしに忠実であったことは一度としてなかったという事実を少しでも考えたことがあるだろうか。そのような時にあなたがたは痛みを感じないのか。心が喜びで満たされるとき、労働の報いを受けるとき、あなたがたは自分には十分な真理が備わっていないことに失望しないのか。わたしの承認を受けられなかったためにあなたがたはいつ泣いたのか。あなたがたは自分の息子や娘のために知恵を絞り苦心するが、それでも満足しない。彼らのためにはまだ十分に勤勉ではない、彼らのためにできる限りのことをしていないと信じる。しかし、わたしに対しては、あなたがたはいつも怠惰で不注意であった。わたしはあなたがたの記憶の中にいるだけで、心の中に長く留まることはない。わたしの献身と努力をあなたがたが感じることは永遠になく、その価値を深く感じたことはない。少しのあいだ考えるだけで、それで十分だと信じる。このような「忠実」はわたしが長いあいだ切望してきたものではなく、長いあいだ嫌悪してきたものである。それにもかかわらず、わたしが何を言おうと、あなたがたは相変わらず一つ二つのことを認めるだけで、全面的に受け入れることはできない。あなたがたは皆とても「自信」があり、わたしが語った言葉から何を受け入れるかを常に取り好みするからである。もしあなたがたが現在もこのままであるならば、わたしにはあなたがたの自信を取り扱う方法が幾つかある。さらに、わたしの言葉はすべて真実であり、どれも事実を歪曲していないことをあなたがたに認めさせる。

もし今わたしがあなたがたの前に現金を置いて選択の自由を与えたならば、そしてその選択を理由にあなたがたを非難しないならば、あなたがたのほとんどが現金を選び、真理を放棄するであろう。あなたがたのうち優秀な人は現金をあきらめ、しぶしぶ真理を選ぶ。一方、中間の人は片手に現金をつかみ、もう片手に真理をつかむ。あなたがたの真の姿がこのように明らかになるのではないだろうか。真理と自分の忠実の対象のどちらかを選ぶとき、あなたがたは皆このような選択をするが、あなたがたの態度に変化はない。そうではないだろうか。あなたがたのうちには正誤のあいだを揺れ動いた人が多くいるのではないのか。是と非、黒と白の対立において、家族か神か、子どもか神か、平和か分裂か、富か貧困か、地位か平凡か、支持されるか捨てられるかなどについて、あなたがたは自分がした選択を知っているはずである。平和な家族と崩壊した家族では、あなたがたは前者を選び、躊躇することなくそのように選択した。富と本分でも、岸边に戻る^[a]覚悟さえないま

脚注

a. 「岸边に戻る」とは中国語の慣用句で、「悪の道から離れる」という意味。

ま再び前者を選んだ。贅沢と貧困でも前者を選んだ。息子、娘、妻、夫とわたしでも前者を選び、観念と真理でも再び前者を選んだ。あなたがたのありとあらゆる邪悪な行いに直面して、わたしはあなたがたへの信頼を完全に失った。あなたがたの心が柔和にされることにここまで抵抗するとは、わたしはただただ驚く。長年の献身と努力は明らかにあなたがたの放棄と絶望しかわたしにもたらさなかった。しかし、あなたがたへのわたしの希望は日ごとに大きくなる。わたしの日はすべての人の面前に完全にさらけ出されているからである。それなのに、あなたがたは暗く邪悪なものを求めることに固執し、それを手離すことを拒否する。それでは、あなたがたの行く末はどうなるのか。あなたがたはこのことを注意深く考えたことがあるのか。もし再び選択するように言われたならば、あなたがたはどういう立場を取るのか。やはり前者を選ぶのか。やはりあなたがたは失望と痛ましい悲しみをわたしにもたらすのであろうか。やはりあなたがたの心には温かさはわずかしかなないのであろうか。やはりあなたがたはわたしの心を慰めるために何をすべきか気づかないのであろうか。この時点であなたがたは何を選ぶのか。わたしの言葉に従うのか、あるいはうんざりするのか。わたしの日はあなたがたのまさに目の前にさらけ出されており、あなたがたが直面しているのは新しい生活と新しい出発点である。しかし、この出発点は過ぎ去った新しい働きの始まりではなく、古いものの終結であることをあなたがたに告げなければならない。すなわち、これは最後的一幕なのである。この出発点について、何が尋常でないかをあなたがたは皆理解できるとわたしは考える。しかし、そう遠くないある日には、あなたがたはこの出発点の真の意味を理解する。だから一緒にそこを通過して進み、最終幕を迎え入れよう。しかし、あなたがたに関してわたしが懸念を抱き続けるのは、不正義と正義に直面するとあなたがたは必ず前者を選ぶことである。しかし、それはすべて過去のことである。わたしも、あなたがたの過去についてはすべて忘れることを望んでいるが、それはとても困難である。それでも、そうするのにとてもよい方法がある。未来と過去を入れ替え、あなたがたの過去の影を一掃させ、現在の真のあなたがた自身と取り替えるのである。そのためには、わたしはあなたがたを煩わせて再度選択を迫らなければならない。あなたがたはいったい誰に忠実なのか。

終着点について

終着点の話になると、いつもあなたがたは話をとりわけ真剣に受け止める。さらに、それはあなたがた全員が特に敏感になるのである。好ましい終着点を得るために、地面に頭を打ち付けて神にひれ伏さずにはいられない人たちもいる。あなたが

たが切望する気持ちはわたしにも理解でき、それを言葉で表すことは不要である。あなたがたは自分の肉が災いに陥ることは望まないということでは、それでも永遠に続く罰を将来受けたくはないということである。あなたがたはもう少し自由に、もう少し気楽に生きたいだけである。それゆえ、終着点の話になると、あなたがたはことさら動揺し、十分注意しないと神の怒りを買ひ、ゆえに然るべき報いを受けるかもしれないと深く恐れる。あなたがたは自分の終着点のためであれば、躊躇なく妥協してきた。また、あなたがたのうちかつて不従順で軽薄であった多くの人が突然極めて優しく素直になり、その素直さは他の人たちに寒気を起こさせる程である。しかし、あなたがたには皆「素直な」心があり、不満であれ虚偽であれ、忠実心であれ、何ら隠しだてすることなく心のうちにある秘密をわたしに絶えず打ち明けてきた。要するに、あなたがたは本質的な本性の奥にあるそのような事柄を極めて腹藏なくわたしに「告白」してきた。もちろん、わたしはそうした事を回避したことはない。なぜなら、それはわたしにはとても普通の事となったからである。あなたがたは毛髪を一束失うほどの心労の末に神の承認を得るよりも、むしろ終着点のために火の海に飛び込むほうが良いと考えているであろう。わたしがあなたがたに対して教条主義的すぎるということではなく、あなたがたの忠実心はわたしの行うあらゆることに正面から対峙するにはあまりに乏しいということである。わたしがたった今言ったことを理解できないかも知れないので、簡単に説明する。あなたがたが必要としているのは真理といのちではなく、行動原理でもなく、いわんやわたしが骨折って行う働きでもない。あなたがたが必要としているのは、富や地位、家族、結婚など、すべて肉において持っている物事である。あなたがたはわたしの言葉や働きを完全に軽視しているので、あなたがたの信仰をひとことで概括できる。それは「おざなり」である。あなたがたは自分が絶対的に専心しているものを達成するためなら何もいとうことはない。しかし、神への信仰に関する事のために同様にはしないであろうことをわたしは知った。むしろ、あなたがたは比較的忠実で比較的真剣なだけである。最大限に誠実な心のない者は神への信仰における失敗であるとわたしが言うのはこのためである。よく考えなさい。あなたがたのうちに失敗は多くあるのか。

神への信仰における成功は人の独自の行動の結果として達成されるということを知らなければならない。人が成功せずに失敗するのもまた、本人の行動が原因であり、他の要素には一切の影響はない。神を信じるよりも困難で苦勞を伴う事柄を成し遂げるためなら、あなたがたは何でもするであろうし、それを極めて真剣に扱うであろうと思う。それゆえに過ちを許容することさえも嫌うであろう。これがあなたがた全員が自分の人生に注ぎ込んできた絶え間ない努力である。あなたがたは自

分の家族であれば欺いたりしないであろう状況において、肉にあるわたしを欺くことすらできる。これがあなたがたの一貫した振る舞いであり、あなたがたが生きる原則である。あなたがたはわたしを騙し、完璧に美しく望み通りの終着点を得るために、依然として偽りの姿を表出しているのではないのか。あなたがたの忠実心は、あなたがたの誠実さと同様に、一時的なものでしかないことにわたしは気付いている。あなたがたの志とあなたがたが支払う代償は現在のためだけであり、将来のためではないのではないのか。あなたがたは美しい終着点を確保するために、最後に一つの努力をしたいだけである。あなたがたの唯一の目的は取り引きをすることである。真理に対する負債を抱えないようにするためにこの努力をするのではなく、わたしが支払った代償を償還するためなどであるはずがない。つまり、自分の欲しいものを得るために利口な戦略を用いる用意があるだけで、そのために戦う覚悟はない。それがあなたがたの心からの願いではなかろうか。あなたがたは自分自身を隠してはならず、自分の終着点についてのために食事や睡眠ができなくなるほど頭脳を苦しめてはならない。最後にはあなたがたの結末は既に決まっているというのが本当ではないのか。あなたがたは開かれた正直な心でもってできる限り自分の本分を尽くし、必要な代償であれば何でも払う覚悟をしなければならない。あなたがたが述べた通り、その日が来た時、神のために苦難を受けて代償を払った者を神がいい加減に扱うようなことは決してない。このような信念は保つ価値のあるものであり、決して忘れないことは正しい。このような方法でなければ、あなたがたに関してわたしの気が安まることはない。さもないと、あなたがたは永遠にわたしの気が安まることのない人たちとなり、あなたがたは永遠にわたしの嫌悪の対象となる。あなたがた全員が自らの良心に従い、わたしのために自己のすべてを与え、わたしの働きのために努力をいとわず、わたしの福音の働きに一生涯分の精力を捧げるならば、わたしの心はあなたがたのためにいつも歓喜して飛び跳ねるのではないのか。そのように、あなたがたに関してわたしは心をすっかり安らげることができるのではないのか。あなたがたにできるのは、わたしが期待する事のうちごくごく僅かでしかないことは残念である。それならば、あなたがたはどうして厚かましくも自分が望むことをわたしに求めることができるのか。

あなたがたの終着点と運命は、あなたがたにとって極めて重要であり、由々しき懸念である。十分注意して物事を行わなければ、終着点がなくなり、自分で自分の運命を破滅させたことになる。あなたがたは考えている。しかし、自分の終着点のためだけに努力する人は空しい努力をしていることに気が付いたことがあるのか。そのような努力は本物ではなく、虚偽である。その場合、自分の終着点のためだけに努力する人は、今にも最終的な失敗をする極みにいる。なぜならば、神への信仰

における失敗は偽りに起因するからである。わたしは媚びへつらわれたり、熱狂的に扱われるのを好まないと前に述べた。わたしの真理や期待と向き合う正直な人をわたしは好む。それ以上に、わたしの心に最大の思いやりと配慮を示し、わたしのために人が何もかも捨て去ることができることを好む。わたしの心が慰められるのは、この方法のみによる。今、あなたがたに関してわたしが嫌いなことはいくつあるのか。今、あなたがたに関してわたしが好むことはいくつあるのか。あなたがたが自分の終着点のために表明したあらゆる醜悪さに、あなたがたの誰も気付いていないということがありえるのか。

わたしの心の中では、肯定的かつ上向きの大志をもつ心に苦痛を与えることを望まず、またとりわけ忠実に自分の本分を尽くしている者の勢力を減衰させることを望まない。しかし、それでもなお、あなたがたの不足や心の一番奥にある汚れた魂をあなたがた一人ひとりに思い起こさせなければならない。そうするのは、あなたがたがわたしの言葉に対峙するときに真の心を捧げられることを望むゆえである。なぜなら、人間のわたしに対する欺きをわたしは最も嫌悪するからである。働きの最終段階において、わたしが望む唯一のことは、あなたがたが最高の成果を披露でき、自己を完全に献身し、もはや半信半疑ではなくなることである。もちろん、あなたがた全員が好ましい終着点を得ることもわたしは望んでいる。それでもなお、わたしには要求がある。それは、あなたがたがわたしにあなたがたの唯一で最終的な献身をすることで最善の決断を下すことである。もし誰かにその唯一の献身がないならば、その人がサタンの大切な所有物であることは確実であり、わたしがその人を用いるために確保することはもはやなく、その人を家に帰し、その両親に世話をさせる。わたしの働きはあなたがたにとって大いなる助けである。わたしがあなたがたから得ることを望むのは、正直で上昇志向の心であるが、いまのところわたしの手は空のままである。考えてみなさい。もし将来、わたしが依然として言い尽くせないほどの悲痛な思いをしているとしたら、あなたがたに対するわたしの態度はどのようなものとなるであろうか。今と同じくらいあなたがたに愛想よくするであろうか。わたしの心は現在と同様に安らかであろうか。骨折って畑を耕したが一粒も収穫を得なかった者の気持ちがあなたがたにわかるだろうか。強い衝撃を受けた者の心がどれほどひどく傷ついているかわかるだろうか。かつてはあれほど希望に満ちていたのに誰かと仲たがいで訣別せねばならない者の苦渋を感じることができるだろうか。挑発された者から放たれる怒りを目にしたことがあるだろうか。敵意と欺きをもって扱われた者の復讐を切望する気持ちを理解することができるのか。そうした者の心性がわかるならば、神の報復の時の態度を想像するのは困難ではないはずである。最後に、あなたがた全員が自分の終着点のため真剣に努力する

ことを望むが、努力には虚偽的な方法を用いるべきではない。さもなければ、あなたがたにわたしの心は落胆し続けることになる。そして、そのような落胆は何につながるか。あなたがたは自分をごまかしているのではないのか。自分の終着点のことを心配しつつそれを破滅させるのは、最も救いがたい人間である。たとえそのような者が憤慨し怒ったとしても、誰が同情するであろうか。とにかく、わたしは依然としてあなたがたが適切かつ良好な終着点を得ることを願っており、それにもまして、あなたがたのうち誰一人として災いに陥らないことを願っている。

三つの訓戒

神を信仰する者は、万事において他ならぬ神に忠実でなければならず、万事において神の意図に従えなければならない。誰しもがこの教えを理解している。しかし、無知、愚かさ、墮落といった人間のさまざまな問題ゆえに、これらの真理は何よりも明白であり基本的なものであるにもかかわらず、完全には実行されていない。そのため、あなたがたの結末が確定する前に、まずはあなたがたにとって最も重要なことをいくつか伝えなければならない。話を続ける前に、あなたがたはまず次のことを理解しておかなければならない。わたしが話すことは全人類に向けた真理である。それは特定の人物やある種の人物だけに向けたものではない。だからこそ、あなたがたはわたしの言葉を真理の視点から理解することに専念し、真摯に集中して耳を傾けなければならない。わたしの話す言葉や真理はどれ一つとして無視してはならず、わたしの言葉はどれも軽く扱ってはならない。あなたがたが生活において、真理に無関係なことを数多く行なってきたことをわたしは知っている。そこでわたしはあなたがたに特に求めたい。それは、真理のしもべとなり、邪悪さや醜さの奴隷になることなく、真理を蹂躪したり、神の家のどの一角をも汚したりしないということである。これは、わたしからあなたがたへの戒めである。それでは、話を始めよう。

一つ目に、あなたがたは自らの運命のために神の承認を求めなければならない。つまり、自らが神の家の一員であることを認識している以上、あなたがたは神に心の平安をもたらさなければならず、万事において神を満足させなければならない。言い換えると、あなたがたは行いにおいて原則にかなっており、かつ真理と一致しなければならないということである。それを実行できなければ、あなたは神に嫌い捨てられ、あらゆる人々から拒絶される。ひとたびそのような窮状に陥れば、あなたは神の家の一員ではなくなる。それはまさしく、神に承認されていないことを意味する。

二つ目に、あなたがたは神が誠実な人を好むことを知らなければならない。実質的に神は誠実であり、神の言葉は常に信頼できる。それだけでなく、神の行動は完璧で疑う余地がない。だからこそ神は、神に対して絶対的に誠実な人を好むのである。誠実であるということは、自らの心を神に捧げること、万事において神に真実であること、万事において神に隠し立てしないこと、事実を隠さないこと、立場の上および下の人を欺こうとしないこと、神にこびへつらうためだけに行動しないことを意味する。要するに、言動において純粹であり、神も人も欺かないということである。極めて単純な話だが、あなたがたにとっては多大な努力を要することだろう。多くの人々は誠実な言動を保つよりもむしろ地獄へ落ちるのを好む。不誠実な人のためにわたしが別の扱いを用意しているのも不思議ではない。もちろん、あなたがたにとって誠実であることがどれだけ難しいかは十分に分かっている。あなたがたは皆、とても賢く、自身のつまらない物差しで人々を測ることに非常に長けているので、わたしの働きは、ごく単純なものとなる。あなたがたはそれぞれに秘密を胸に抱えている。だからこそわたしはあなたがたを一人ずつ惨事に遭わせ、火をもって「教え」を受けさせる。そうすると、その後あなたがたはわたしの言葉を完全に信じられるようになる。そして最後には、あなたがたに「神は誠実だ」と言わせ、そのときあなたがたは「人間の心はよこしまだ」と感情を爆発させ、嘆き悲しむことになる。そうなれば、あなたがたはどんな精神状態になっているだろうか。おそらく、今のように勝ち誇っていないだろう。ましてや今のように「深遠かつ難解」でもない。神の面前ではとりすまして真面目にする者もいて、何とか「行儀よく」しようとするが、霊の面前では牙をむき、爪を振りかざしている。そういった人を誠実とみなすだろうか。あなたが偽善者で、「対人関係」を心得ているなら、あなたは間違いなく神をぞんざいに扱おうとしている人であるとわたしは言う。あなたの言葉が言い訳や取るに足らない弁明ばかりなら、あなたは真理を実践したがない人であるとわたしは言う。共有するのを躊躇するような秘密を数多く持っているなら、自分の秘密、つまり自分自身の困難を光の道を求めるために他者の前に明かすのがどうしても嫌だというなら、あなたは簡単には救いを得られない人であり、暗闇から簡単には脱せない人であるとわたしは言う。真理の道を求めることで喜びを感じるのであれば、あなたは常に光の中で暮らす人である。神の家において効力者であることに心から満足し、誰に知られずとも熱心かつ誠実に働き、常に与え、何も得ようとしないのであれば、あなたは誠実な聖徒であるとわたしは言う。なぜなら、見返りを求めずに、ただ誠実であるからである。あなたが正直であろうとするなら、自らをすべて費やそうとするなら、神のために命を捧げて固い証しを立てられるなら、自身のことばかりを考えたり顧みたりせずに、神を満足させるこ

としか知らないほどに誠実であるなら、このような人は光の中で生まれ、神の国で永遠に暮らすことができる、わたしは言う。真の信仰と真の忠誠心があなたの中にあるかどうか、神のために苦しんだ経験があるかどうか、そして神に完全に従ってきたかどうかを、あなたは知っているはずである。それらに欠けるのであれば、あなたの中には従順ではない心、偽り、欲、不満が残っている。心が誠実とはかけ離れているために、神から肯定的に認められたことがなく、光の中で暮らしたこともない。人の運命の結末は、誠実で血の通った心を持っているかどうか、純粋な魂を持っているかどうかにかかっている。極めて不誠実で、邪悪な心を持ち、汚れた魂を持っている人は、その人の運命に刻まれているとおりに、罰せられるところに最後は必ずたどり着く。自分はとても誠実であると主張しながらも、真理に従った行動をとれず、真実の言葉を口にできないのに、あなたはまだ神からの見返りを待っているのか。神にひとみのように大切な存在だと見なされることを、まだ望んでいるのか。そのような考えは本末転倒ではないか。あなたは万事において神を欺いている。では、そのような汚れた手を持つ人を神の家がどうして受け入れることができるのか。

あなたがたに伝えたい三番目のことは次のとおりである。神を信仰しつつ生きていく過程で、誰もが神に抵抗し欺く行為をしたことがある。背きとして記録する必要のない悪事もあるが、許されないものもある。行政命令を破る行いが多くあり、それらは神の性質に背くものだからである。自身の運命を心配する人の多くは、そのような行為は何であるか尋ねるかもしれない。あなたがたは自身の本性が尊大かつ傲慢で、事実に従いたがらないことを知らなければならない。この理由から、あなたがたがよく自省した後に、わたしはあなたがたに少しずつ伝えていく。あなたがたには、行政命令の内容をより良く理解し、神の性質を知る努力をすることを強く勧める。そうしなければ、あなたがたは口を閉じていられずに、はばかりことなく大げさな言葉を使って好き勝手な話をする。そして無意識のうちに神の性質に背いて暗闇に落ち、聖霊と光の存在を失ってしまう。行動が原則にかなっていないために、すべきでないことをして言うべきでないことを言うために、あなたは相応の報いを受ける。あなたの言動が原則にかなっていても、神の言動は極めて原則にかなっていることを知らなければならない。あなたが報いを受ける理由は、あなたが人ではなく神に背いたからである。生涯のうちに神の性質に何度も背くなら、あなたは地獄の子になる運命にある。人から見れば、数回しか真理に反する行動を取っておらず、ただそれだけのことのように見えるかもしれない。しかし神から見れば、あなたはすでにそのために捧げる燔祭さえ、もはやない人であることに気づいているのか。神の行政命令を数回破ったうえに、後悔の兆候を一切見せないのだ

から、神が人を懲罰する地獄に落ちる以外にあなたに手段はないのである。一握りの人が、神に従いながらも原則を破る行いをいくつか犯したものの、取り扱われて導かれた後、次第に自身の墮落に気づいた。そしてその後は現実の正しい道に入り、今日もしっかりと地に足をつけている。そのような人が最後に残る人である。それでもなお、わたしが求めるのは正直な人である。あなたが正直な人で、原則に沿った行いをするなら、あなたは神に全幅の信頼を寄せられる人になれる。行動において神の性質に背かず、神の心意を求め、神に畏敬の念を持つ心があるなら、あなたの信仰は基準に達している。神を畏れず、畏敬の念から震える心がない人は皆、神の行政命令をほぼ確実に破る。多くの人が自身の情熱の力で神に仕えているが、神の行政命令を理解していないばかりか、神の言葉がほのめかしている意味を少しも感じていない。そのため、しばしば善意から神の経営を妨害するような行いをしてしまう。深刻な場合、このような人は追い出され、神に従うさらなる機会を奪われ、地獄に落とされ、神の家とのあらゆる関係を絶たれてしまう。そのような人は自らの無知な善意に任せて神の家で働くが、神の性質を怒らせて終わる。同じやり方がここでも容易に応用できるだろうという無駄な考えから、神の家でも役人や権力者に仕える方法を実践する。神は子羊ではなくライオンの性質を持っているということを全く想像していない。そのため、人が神と初めてかかわっても、神の心は人の心とは異なるために交流することができない。多くの真理を理解して初めて、あなたは次々に神のことを知るようになる。この認識は言葉や原理では構成されていないが、あなたが神との緊密な信頼関係を持つための手段となる宝として、神があなたを好む証拠として用いることができる。認識の現実性に欠け、真理を備えていないなら、あなたの情熱的な奉仕は神の憎しみと嫌悪しかもたらさない。神への信仰は単なる神学の勉強ではないことを今ではあなたも理解しているはずである。

わたしの戒めの言葉は簡潔だが、述べたことはすべてあなたがたに最も欠けているものである。わたしが今話すことは、人間のもとでのわたしの最後の働きのためであり、人の結末を決定するためであることを、あなたがたは知らなければならない。何の目的も達さない働きをすること、腐食した木材のように見込みのない人を導き続けること、ましてや、ひそかに悪意を抱く人を先導することなど、わたしは望まない。わたしの言葉の背景にある真剣な意図と、人類へのわたしの貢献を、おそろくいつの日かあなたがたは理解するであろう。おそろくいつの日か、あなたがたは自身の結末を決めることを可能にするこの言葉が伝えていることを理解するであろう。

過ちは人間を地獄へ導く

わたしはあなたがたに何度も警告し、あなたがたを征服するための真理を数多く与えてきた。現在、あなたがたはみな、以前よりもはるかに豊かであると感じ、人間のあるべき姿の原則を多数理解し、誠実な人がもつべき常識を多数備えるようになってきた。そのすべてが、あなたがたが長年かけて得てきた収穫である。あなたがたの成果は否定しないが、その長い年月において、あなたがたがわたしに対して犯してきた数々の反抗や反逆もまた否定しないと、率直に述べる必要がある。なぜなら、あなたがたのなかに聖人は一人もいないからである。あなたがたは例外なくサタンによって墮落させられた人間であり、キリストの敵である。現在に至るまで、あなたがたは数え切れないほどの過ちと反抗を犯してきたので、わたしが自分の言ったことを絶えず繰り返しているのは、少しも奇妙なことではない。わたしはあなたがたとそのように共存したくないが、あなたがたの将来と終着点のため、ここでもう一度、すでに述べたことを繰り返す。あなたがたがわたしを満足させること、そしてそれ以上に、わたしの発する一言一句を信じ、わたしの言葉の深い含意を推し量れるようになることを、わたしは願っている。わたしの話を疑ってはならず、ましてやわたしの言葉を好きなように取り上げ、勝手に放り投げてはならない。それは容赦できないことである。わたしの言葉を批判してはならず、ましてやそれらを軽々しく扱ったり、神は常に自分たちを試みているとか、さらには、神が語ったことは正しくないなどと言ってはならない。わたしはそれらも容赦できない。あなたがたがそのような疑念をもってわたしとわたしの話を扱い、わたしの言葉を一切認めず、わたしを無視するので、わたしはあなたがた一人ひとりに対して真剣に言う。わたしの話を哲学と関連づけたり、わたしの言葉をほら吹きや嘘と一緒にしたりしてはならない。ましてや、わたしの言葉に侮蔑をもって反応してはならない。おそらく、わたしがいま述べていることをあなたがたに伝えたり、かくも慈悲深く語ったりすることができる者は今後おらず、ましてやそれらの要点を辛抱強く説明できる者などいないだろう。あなたがたは良き時代を回想したり、むせび泣いたり、悲痛にうめいたりしつつ、今後の日々を過ごすだろう。あるいは、ひとかけらの真理やいのちの施しもないまま暗い夜を過ごしていたり、単に絶望して待っていたり、すべての理知を失うほど深く後悔しながら生きていたりするだろう……。こうした可能性から逃れられる者は、あなたがたの中に事実上存在しない。あなたがたのうち誰一人として神を真に崇拝する立場におらず、放縦と邪悪の世界に耽溺するとともに、いのちや真理と関係なく、実際にはそれらに反する無数の物事を、自分の信仰、霊、魂、そして肉体に採り入れるからで

ある。そうしたわけで、わたしがあなたがたに望むのは、光の道へ導かれるようになることである。わたしの唯一の望みは、あなたがたが自分を思いやり、自分の面倒を見られるようになること、そして自分の終着点に重点を置きすぎず、その一方で自分の行動や過ちに無関心でないことである。

長年にわたり神を信じている者はみな美しい終着点を心から望んでおり、神を信じるすべての者は幸運が突然自分に訪れることを望んでいる。また知らないうちに、天国のどこかで安らかに落ち着いていたいと誰もが願う。しかし、こうした美しい考えをもつ人々は、自分が天から舞い降りるそのような幸運を得たり、果ては天国で居場所を得たりする資格があるかどうかを一切知らない、わたしは言うておく。現在、あなたがたは自分のことをよく知っているが、それでも終わりの日の災いと、邪悪な者たちを懲罰する全能者の手から逃れることを願っている。美しい夢を抱き、物事が自分の望み通りになるよう願うことは、誰かの思いつきではなく、サタンが墮落させてきたすべての人々の共通点であるかのように思われる。たとえそうでも、わたしは依然として、あなたがたの途方もない欲望と、祝福を得ることへの熱望に終止符を打ちたいと思う。あなたがたの過ちが多数あり、反抗した事実が増え続ける一方であることを考えると、どうしてそうした事柄があなたがたの美しい未来像にふさわしいだろうか。好きなように生き続けることを望み、自分を抑えるものがないまま間違った状態に留まり、それでもなお夢を叶えたいというのであれば、朦朧としたまま目を覚まさないよう勧める。なぜなら、あなたの夢は空虚であり、義なる神の前において、神はあなたを例外にはしないからである。ただ夢を叶えたいのであれば、決して夢見ず、むしろ永遠に真理と事実を直視しなさい。これが、あなたが救われる唯一の方法である。具体的に言って、この方法にはどのような段階があるだろうか。

まずは自分の過ちに残らず目を向け、真理と一致しない行動、および考えをすべて検討しなさい。

これは容易に実行できることであり、知力のある者ならば可能なはずだ。しかし、過ちと真理の意味をまったく知らない者は例外である。基本的な知力がない者だからである。わたしは、神に認められ、正直であり、行政命令の重大な違反を犯したことがなく、自分の過ちを容易に識別できる人々に話をしている。これはあなたがたに求めることのうち、容易に達成できるものであるが、あなたがたに求める唯一のことではない。いかなる場合も、あなたがたがこの要求を密かに笑い飛ばさないこと、また何より、それを見下したり軽視したりしないことを願う。あなたがたはそれを真剣に扱わねばならず、無視してはならない。

二番目に、自分の過ちと反抗の一つひとつについて、それに相当する真理を探

し、その真理でそれらの事例を解決しなければならない。それから自らの過った行ない、および反抗的な思想や行為を、真理の実践と置き換えなさい。

三番目に、常にずる賢く狡猾な者ではなく、正直者にならねばならない。（ここで再び、あなたがたに正直者となるようわたしは求める。）

この三つをすべて成し遂げられるなら、あなたは幸運な者であり、夢が叶う者であり、幸運を手にする者である。あなたがたは魅力に乏しいこの三つの要求を真剣に捉えるかもしれないし、あるいは無責任に扱うかもしれない。いずれにせよ、わたしの目的は、あなたがたの夢を叶え、あなたがたの理想を実現させることであり、あなたがたをからかったり馬鹿にしたりすることではない。

わたしの要求は単純かもしれないが、わたしがあなたがたに伝えている事柄は、一足す一は二といった単純なものではない。あなたがた全員がそれについて適当に話したり、空虚で大げさな話をだらだら続けたりするだけであれば、あなたがたの青写真と望みは永遠に白紙のままだろう。長年にわたって苦しみ、大いに努力しているが、その結果を示せない者に対し、わたしは憐憫の情をまったく抱かないだろう。それとは逆に、わたしの要求を満たしていない者に対し、わたしは報いでも、ましてや同情でもなく、懲罰をもって扱う。おそらくあなたがたは、長年にわたって付き従ってきた者として、自分は何であれ大いに努力してきたので、単に効力者として神の家で茶碗一杯の飯を得られるはずだと想像しているだろう。あなたがたの大半がこのように考えると言える。なぜなら、あなたがたは自分が利用されるのではなく、いかに利用するかを原則を常に追求してきたからである。それゆえ、ここで真剣に伝えるが、わたしにとって、あなたの大いなる努力がどれほど賞讃に値するか、あなたの資格がどれほど素晴らしいか、あなたがどれほど忠実にわたしに従っているか、あなたがどれほど名高いか、あなたの姿勢がどれほど改善されたかなどはどうでもよい。わたしの要求を満たさない限り、あなたは決してわたしの賞讃を得ることができない。そうした考えや打算はできるだけ早くすべて捨て、わたしの要求を真剣に扱い始めなさい。さもなければ、わたしは自分の働きを終えるためにあらゆる者を灰にし、よくてもわたしの長年にわたる働きと苦難を無に帰するであろう。なぜなら、わたしは自分の敵と、邪悪の臭気を漂わせながらサタンの姿をしている者たちを、わたしの国に連れ込むことも、次の時代に導くこともできないからである。

わたしには多くの望みがある。あなたがたが適切かつ行儀良く振る舞い、忠実に自分の本分を尽くし、真理と人間性を備え、自分がもつすべてのもの、および自分の命さえも神に捧げられる人になることなどを、わたしは望んでいる。これらの望みはどれも、あなたがたに欠けている物事、そしてあなたがたの墮落と反抗から生

じたものである。あなたがたとの対話がどれも、あなたがたの注意を引きつけるのに十分でなかったならば、おそらくわたしは話を止めるしかないだろう。しかし、あなたがたはその結果がどうなるかを理解している。わたしは休むことがないので、話をしていなければ、人々が目を向ける何かをするだろう。わたしは誰かの舌を腐らせたり、身体をばらばらにして死なせたり、神経の異常を起こして多くの点で醜悪な姿にさせたりすることもできる。あるいは、それぞれの人のために用意した苦悶を味わわせることもできる。そのようにすれば、わたしは喜び、きわめてうれしく、大いに満足するであろう。これまで常に「善には善、悪には悪をもって報いよ」だったのだから、なぜ今もそうであってはならないのか。あなたがわたしに反対し、何らかの批判をしたいのであれば、わたしはあなたの舌を腐らせるであろうし、それにわたしは限りなく喜ぶ。なぜなら、あなたが行なってきたことは最終的に真理ではなく、ましてやいのちに何の関係もないのに対し、わたしが行なうことはすべて真理であり、わたしの業はどれも、わたしの働きの原則と、わたしが定めた行政命令に関係しているからである。したがって、わたしはあなたがた一人ひとりに対し、善行を積み重ね、かくも多くの悪事を止め、時間がある際にはわたしの要求に注意するよう強く勧める。そうであれば、わたしは喜びを感じるだろう。言うておくが、あなたがたが肉に傾ける努力のうち、そのわずか千分の一でも真理に捧げる（ないしは施す）のであれば、あなたは頻繁に過ちを犯さず、口が腐ることもないだろう。これは明白なことではないか。

あなたが過ちを犯せば犯すほど、あなたが良い終着点を得る機会は少なくなる。それとは逆に、あなたの過ちが少なければ少ないほど、あなたが神に賞讃される確率は高くなる。あなたの過ちが増えすぎて、わたしがあなたを許せないところまで来たら、あなたは自分が赦される機会を完全に台無しにしたことになるだろう。その場合、あなたの終着点は上でなく下となるだろう。あなたがわたしを信じないのであれば、大胆になって間違ったことを行ない、その結果を知るがよい。あなたが真理を実践する熱意ある者ならば、自らの過ちを赦される機会が確実にあり、反抗する回数もますます減ってゆくだろう。あなたが真理を実践することを望まない者ならば、神の前における過ちは確実に増えてゆき、反抗する回数もさらに増加を続け、最後は限界に達する。その時こそ、あなたが完全に滅ぼされる時である。そしてそれは、祝福を受けるというあなたの美しい夢が無に帰する時である。自分の過ちを、未熟で愚かな者の単なる間違いだと考えてはならない。また真理を実践しなかった言い訳として、自分の素質が劣っているからそうできなかったと言ってはならない。それ以上に、自分が犯した過ちを、しつけがなっていない人間の振る舞いだと考えてはならない。自分を許すことに長けていて、自分に寛大になるのが得意

であれば、あなたは決して真理を得ることがない臆病者であり、自分の過ちがいつまでもあなたにつきまとい、あなたはそのせいで真理の要求を永遠に満たせず、いつまでもサタンの忠実な仲間となるだろう、と言っておく。わたしの勧告は依然として同じである。すなわち、自分の隠れた過ちに気づかないまま、自分の終着点だけを気にしてはならない。過ちを真剣に受け止め、自分の終着点に関する懸念のために、その過ちを一切見過ごしてはならない。

神の性質を理解することは極めて重要である

あなたがたに成し遂げてもらいたいと願っていることは数多くあるが、あなたがたのすべての行いと生活における一切のことが、わたしの求める事柄を完全に成就することはできないため、わたしは単刀直入にわたしの心の思いを説明するしかない。あなたがたの判断力、および理解力が極めて乏しいことを考えると、あなたがたは、わたしの性質と本質に関してはほとんど無知であると言える。それゆえ、それらについて急遽、あなたがたに伝える必要がある。あなたがこの件について以前どれだけ理解していたか、あなたに理解しようとする気持ちがあるかどうかにかかわらず、わたしはこれらについて詳しく説明しなければならない。これはあなたがたにとって全く馴染みのないものではないが、あなたがたは、それに含まれる意味について理解しているようにも、熟知しているようにも見えない。この件について、あなたがたの多くは、おぼろげに理解しているのみであり、それは部分的で不十分な理解である。真理をよりよく実践する、つまりわたしの言葉をよりよく実践することができるようあなたがたを助けるには、あなたがたがまずこの件について理解することを優先しなければならないとわたしは考える。そうしなければ、あなたがたの信仰は曖昧で偽善的、かつ宗教的な虚飾で満たされたままとなるであろう。神の性質を理解しなければ、神のためにあなたが行うべき働きを為すことは不可能である。神の本質を知らなければ、神に対して尊敬と畏怖の念を持つことも不可能であり、いいかげんな形式主義と言い逃れだけで、さらには救い難い冒涇のみが残るであろう。神の性質を理解することは極めて重要であり、神の本質についての認識は疎かにできないものの、これらの問題を徹底的に調べ、掘り下げて考える者はいなかった。あなたがたが皆わたしの発布した行政命令をないがしろにしているのは明らかである。神の性質を理解しなければ、神の性質を簡単に侵害する恐れがある。神の性質を侵害することは、神自身を激怒させることに等しく、このような場合、あなたの行動は最終的には行政命令に違反することになるだろう。ここであなたが認識すべきことは、神の本質を知るときに神の性質を理解できること、そ

して神の性質を理解するとき、行政命令を理解することにもなるということである。もちろん、行政命令に含まれている多くのことは神の性質が関わるものであるが、それらに神の性質の全てが表されているわけではないので、神の性質をもっとよく理解するために更に一步踏み出すことが必要となる。

わたしは今日、日常の会話のようにあなたがたに話しているのではない。したがって、わたしの言葉を真摯に受け止めるだけでなく、それらについて深く考えなければならない。すなわち、わたしは、あなたがたがわたしの語った言葉に注ぐ努力は少な過ぎると言っているのである。神の性質のこととなると、熟考する意欲は更に低下し、これに対して努力を費やす人もほとんどいない。このため、わたしは、あなたがたの信仰が大言壮語にしか過ぎないと言うのである。今でさえも、あなたがたの誰一人として自分の最も致命的な弱点に真の努力を注いではいない。あなたがたのためにあれこれ苦心したにも関わらず、あなたがたはわたしを失望させた。誰もが神を無視し、真理を欠く生活を送っているのも当然である。このような人々が聖徒と見なされることがあろうか。天の戒律はそのようなことを許さない。このことについて、あなたがたの理解はあまりにも乏しいので、わたしはさらに語らざるを得ない。

神の性質というのは、人間の性格とは異なるため、誰にも極めて抽象的な問題に思われ、しかも、簡単には受け入れられないテーマである。神にもまた喜怒哀楽があるが、これら感情は人のものとは異なる。神には神そのものと神が持っているものがある。神が表し、明らかにするものは、全て神の本質と神の身分の表れである。神そのものと神が持っているもの、および神の本質と身分は、人が取って代わることができるものではない。神の性質には、人類への神の愛、人類への慰め、人類への憎しみが包含されており、しかも人類に対する完全な理解が包含されている。しかし、人の性格は楽観的、活氣的、または無感覚である。神の性質とは、万物と全ての生けるものの支配者、全ての創造物の主に属するものである。彼の性質は尊厳、権勢、崇高さ、偉大さ、そして何よりも至高性を表す。彼の性質は権威の象徴であり、あらゆる正義の象徴であり、また、あらゆる美と善の象徴である。しかもそれは、暗闇やいかなる敵の勢力にも圧倒されず、侵害されることのない者の象徴^[a]であり、同時に、いかなる被造物も背くことができない（そして背くことが許されない）者の象徴^[b]である。彼の性質は最高権力の象徴なのである。一個人で

脚注

a. 原文では「されることがないことの象徴」。

b. 原文では「背くことができない（そして背くことが許されない）ことの象徴」。

あれ複数であれ、いかなる人間も神の働きや性質を阻害できないし、阻害してはならない。しかし人間の性格は、動物よりもわずかに優位であることの象徴に過ぎない。人間は、自身の中にも自身においても、何の権威も自主性も、自分自身を超越する能力もないが、本質的に、様々な人々、出来事、または物に振り回されて怖じ気づく者である。神の喜びとは、正義と光の存在と現れに起因し、暗闇と邪惡の消滅の故である。彼は、人類に光と良い生活をもたらしたことを喜ぶ。彼の喜びは正義の喜びであり、あらゆる肯定的なものの存在の象徴、そして何よりも吉兆の象徴である。神の怒りは、不義の存在と、それによる妨害が自身の人類に害をもたらしていることに起因し、それは邪惡と暗闇の存在、また、真理を駆逐するものの存在の故であり、そしてそれ以上に、良いものと美しいものに反するものの存在の故である。彼の怒りは、全ての否定的な物事がもはや存在しないことの象徴であり、さらには、彼の聖さの象徴である。彼の悲しみは、彼が望みを持っているにも関わらず暗闇に落ちた人類に起因し、彼が人のためにする働きが彼の期待にかなわず、彼が愛する人類がみな光りの中で生活できるようになっていないからである。彼は罪のない人類、正直だが無知な人、そして善良だが自分の見解を持っていない人に対して悲しみを感じている。彼の悲しみは彼の善良さと憐れみの象徴であり、美しさ
と慈愛の象徴である。彼の幸せは、もちろん彼の敵を打ち負かすこと、そして人の真心を得ることからもたらされる。さらに、それは全ての敵の勢力の駆逐と消滅、そして人類が良き平和な生活を得ることから生じる。彼の幸せは人の喜びとは異なり、むしろそれは良い実を集めるときの気持ちであり、それは喜びにまさる感情である。彼の幸せとは、人類が今後苦しみから解き放たれ、光の世界に入ることの象徴である。一方、人類の感情は全て己の利益の目的のために生じ、義、光、または美しいもののために生じるのではなく、ましてや天の恵みのために生じるものではない。人類の感情は利己的で暗闇の世界に属している。それは神の意志のために存在するものではなく、ましてや神の計画のために存在するものではないため、人と神のことを同等に語ることは決してできない。神は永遠に至高かつ尊厳ある方であり、一方人間は永遠に下劣で、価値もない。これは、神が永遠に犠牲を払い、人類のために自身を捧げているからである。しかし人は、いつも自分の為
に得る努力し
かしない。神は人類の生存のために永遠に労苦しているが、人が光や義に寄与することは全くない。人が一時期働いたとしても、それは一回の打撃にも耐えることができない。人の働きは常に自分のためであって、他の人のためではないからである。人は常に利己的であるが、神は永遠に無私無欲である。神は公正なもの、良いもの、そして美しいものの全ての源であるが、人は醜いものと邪惡なもの全てを継承し、表現する者である。神が自身の義と美しさの本質を変えることは決してない

が、人はいかなる時や状況においても、義を裏切り、神から遠く離れてしまう可能性がある。

わたしが語った語句の全てには、神の性質が含まれている。わたしの言葉を慎重に熟考するとよい。必ずそれらから多くの利益を得るであろう。神の本質を把握することは非常に難しいが、わたしはあなたがた全員に神の性質について少なくともいくらかの認識があると信じている。ゆえにわたしは、あなたがたが行ってきた、神の性質に背かない事柄をさらに多くわたしに示すことを望むのである。そうすればわたしは安心するだろう。例えば、いかなる時にも心の中で神を思いなさい。何かを行う時は、神の言葉に従って行いなさい。全てのことに於いて神の意図を探し求め、神を軽視したり神の栄誉を汚したりする事は行わないようにしなさい。さらに、神を心の奥に追いやって心の中の未来の空虚さを埋めないようにしなさい。もしそのようなことをするならば、あなたは神の性質を侵害することになるのである。また、生涯を通じて決して神を冒瀆する事を口にしたり、神に対して不平を言ったりせず、さらには、神があなたに委ねた全ての事を生涯、正しく行うことができ、神の言葉の全てに従うならば、行政命令に背くことを避けたことになる。例えば、「なぜわたしは彼が神であると思わないのか」、「これらの言葉は聖霊の啓示に過ぎないと思う」、「わたしに言わせれば、神がなす全ての事柄が正しいとは思わない」、「神の人間性が自分の人間性より優れているとは思わない」、「神の言葉はどうしても信憑性に欠ける」、または同様の批判的な事柄を言ったことがあるならば、罪を告白し、悔い改めることを勧める。あなたは、人間ではなく神自身を侵害したため、そうしなければ赦しの機会を得ることが決してないからである。あなたは、人を裁いているだけだと思っているかもしれないが、神の霊はそうには考へない。神の肉体を軽視することは、神を軽視することと同じである。もしそうであるならば、あなたは神の性質を侵害したことになるのではないだろうか。神の霊によってなされる事柄の全ては、神の肉体における働きを維持し、その働きを十分に行うためのものであることを覚えておかなければならない。これを怠るならば、あなたは神を信じることに於いて決して成功を収めることができない者であると言おう。あなたは神の怒りを買ったため、神はそれに見合う懲罰を使ってあなたに教訓を与えるであろう。

神の本質を知るようになることは、ささいな事ではないのである。あなたは、神の性質を理解しなければならない。そうすることによって、知らないうちに神の本質を少しずつ認識するようになるだろう。これを認識するとき、あなたはより高尚で、より美しい状態へと邁進するだろう。最後には、自分の醜悪な魂を恥だと感じるようになるであろう。さらには、その恥から隠れられる場所がどこにもないと感

じるだろう。その時、あなたの行為において神の性質を侵害することがますます減り、あなたの心はますます神の心に近づき、徐々に神への愛が心の中に育つであろう。これは、人類が美しい状態に入っているしるしである。しかし、あなたがたはまだこの状態に達していない。あなたがたは皆、自分の運命のためにあちこち奔走しているが、努めて神の本質をよりよく知ろうと思う者がいるだろうか。この状態が続くならば、神の性質をほんのわずかしら分かっていないために、無意識のうちに行政命令に背くことになるだろう。今あなたがたが行なっていることは、神の性質を侵害する行為の礎を築くことではないだろうか。あなたがたに神の性質を理解するよう求めることは、わたしの働きと無関係ではない。と言うのは、頻繁に行政命令に背くならば、あなたがたのうち懲罰を逃れることができる者がいるであろうか。そうならば、わたしの働きの全てが無駄になるのではないか。このため、わたしは今もあなたがた自身の行いを入念に吟味することに加え、自らの歩みに注意を払うようにあなたがたに求めるのである。これは、あなたがたに対するより高度な要求であり、あなたがたが皆これについてよく考え、真剣に扱うことを願う。あなたがたの行いがわたしの激しい怒りを買う日が来るならば、その結果はあなたがただけが考慮するものであり、あなたがたの代わりに罪を負う人は他にいないのである。

どのように地上の神を知るか

あなたがたはみな、神の前で報われ、神の寵愛を受けたいと願っている。神を信じ始めた者は誰でもそのようなことを望むものである。誰もが高尚な物事を追い求めることに夢中になり、誰ひとり他者に後れを取りたくないからである。これが人というものである。まさにそれゆえに、あなたがたの多くが絶えず天の神の機嫌を取ろうとしているのだが、実際には、あなたがたの神に対する忠実さと正直さは、自分自身に対する忠実さと正直さに比べてずっと劣っている。わたしはなぜそう言うのか。なぜならわたしは、神に対するあなたがたの忠実さを全く認めておらず、それどころか、あなたがたの心の中にいる神の存在を否定しているからである。言うなれば、あなたがたが崇拜する神、あなたがたが敬慕する漠然とした神は、そもそも存在していないのである。わたしがこれほどまでに断言できるのは、あなたがたが真の神からあまりにも遠ざかっているからである。あなたがたの忠実さの根拠は、あなたがたの心の中にある偶像である。一方、わたしについて言えば、あなたがたは偉大とも非力とも思っていない神を、言葉で認めているにすぎない。神から遠ざかっていると言うのは、つまりあなたがたが漠然とした神を身近に感じている一方で、真の神からは遠く離れているということである。「偉大ではない」と言う

のは、今日あなたがたの信じている神が、大した能力のない人間、大して高貴ではない人間のようにしか見えていないことを指している。そして「非力ではない」と言うのは、その人が雲を呼び雨を降らせることはできないにしても、神の霊に呼びかけて天と地を揺るがすほどの働きをさせ、人々をすっかり困惑させることができるという意味である。表面上は、あなたがたはみな地上のキリストに非常に従順なようだが、実質はキリストを信仰してもいなければ愛してもいない。つまり、あなたがたが本当に信じているのは自分自身の感情の漠然とした神であり、あなたがたが本当に愛しているのは、日夜恋い慕うものの直接会ったことがない神なのである。キリストに対するあなたがたの信仰はわずかでしかなく、愛はない。信仰とは信じることと信頼することである。愛とは心の中で崇拜して敬慕し、決して離れないことである。しかし、今日のキリストに対するあなたがたの信仰と愛は、そこに遠く達していない。信仰について言えば、あなたがたはキリストをどのように信仰しているのか。愛について言えば、あなたがたは彼をどのように愛しているのか。あなたがたはただ彼の性質を全く理解しておらず、ましてや彼の実質などなおさら知らないのに、どのようにして彼を信仰するというのか。彼に対するあなたがたの信仰の実体はどこにあるのか。どのように彼を愛しているのか。彼に対するあなたがたの愛の実体はどこにあるのか。

今日まで多くの人々が躊躇なくわたしについてきた。またこの数年間、あなたがたは大変な疲労に苦しんできた。あなたがたひとりひとりの生来の気質や傾向を、わたしはすみずみまで明確に把握してきた。あなたがたのひとりひとりと関わり合うのはとてつもなく難儀である。遺憾なのは、わたしがあなたがたのことを大いに把握しているというのに、あなたがたはわたしのことを全く理解していないということである。あなたがたは混乱している瞬間に誰かの策略に引っ掛かったのだと、人々が言うのも無理はない。事実、あなたがたはわたしの性質について何も理解せず、ましてやわたしが何を考えているのか洞察することなどなおさらできない。今日、あなたがたのわたしに関する誤解は雪だるま式に膨れ上がり、わたしに対する信仰は混乱した信仰のままである。あなたがたはわたしを信仰しているのではなく、わたしの機嫌をとり、わたしにへつらおうとしていると言うのがより適切だろう。あなたがたの動機は非常に単純である。誰であれ、報いてくれるなら従うし、大きな災難を免れさせてくれるなら信じる。神でもいいし他の何らかの神でもいい。そのどれも自分には関係ない、というのである。このような人はあなたがたの中に大勢おり、この事態は非常に深刻である。もしいつの日か、キリストの実質を理解しているがゆえに彼を信仰しているという人があなたがたのうちどれほどいるかを調べたとしたら、おそらくわたしが納得できる人は一人としていないだろう。

したがってこの問いについてくらいは考えてもよからう。あなたがたの信じる神はわたしと非常に異なっている。ならば、あなたがたの神への信仰の本質とは何か。あなたがたの神なるものを信じれば信じるほど、あなたがたはわたしからさらに逸れていく。ならば、この問題の本質とは何か。あなたがたのうち誰一人としてこのような問いについて考えたことがないのは明らかだが、そのことの重大さが頭に浮かんだことはあるのか。このような形で信じ続けた末の結果を考えたことはあるのか。

今日、あなたがたは多くの問題に直面しているが、あなたがたの中で問題解決に長けた人は一人もいない。このような状況が続けば、損するのはあなたがた自身に他ならない。この問題を突き止めるのをわたしは手伝おう。しかし、その解決はあなたがた次第である。

わたしは他者を疑わない者を好む。そして真理を快く受け入れる者を好む。この二種類の人々をわたしは大いに保護しよう。わたしから見ると彼らは正直な人々だからである。もしあなたが嘘つきなら、全ての人々や物事に対し慎重で疑い深くなるだろうから、わたしに対するあなたの信仰も疑念を基盤にして成り立つことになる。そのような信仰をわたしは決して認めない。真の信仰がないあなたには、真の愛はなおさらない。そして気の向くままに神を疑い、神への憶測を巡らせがちなら、あなたは間違いなくあらゆる人々の中で最も不正直である。あなたは神が人間のようにありうるかどうか憶測する。許し難いほど罪深く、狭量な性質で公正さと分別に欠け、正義感がなく、邪悪な策略に溺れ、不誠実でずるく、悪事や闇を喜ぶ、といった具合である。人は神のことを少しも知らないがゆえに、このような考えをもつのではないか。このような信仰は罪以外の何物でもない。中には、わたしを喜ばせるのはまさに媚びへつらいごまをする者たちであり、そのような技量のない者は神の家では歓迎されずに居場所を失う、と信じている者すらいる。長年かけてあなたがたが得た認識はこれだけなのか。これがあなたがたの手に入れたものなのか。わたしに関するあなたがたの認識はこのような誤解にとどまらない。さらに悪しきは、あなたがたによる神の霊への冒涇と、天に対する悪口である。あなたがたのような信仰のせいで、あなたがたはますますわたしから逸れていき、わたしとさらにひどく敵対するだけだとわたしが言うのは、それゆえである。長年にわたって働くあいだずっと、あなたがたは多くの真理を目の当たりにしてきた。しかしどのような事柄がわたしの耳に入ってきたか、あなたがたは知っているのか。あなたがたのうち喜んで真理を受け入れる人はどれほどいるのか。あなたがたはみな、自分たちは喜んで真理の代価を払うと信じているが、真理のために本当に苦しんだ者が、あなたがたの中にどれほどいるというのか。あなたがたの心の中には不義しかなく、そのため誰もが同じように不正直で心が曲がっていると思うのである。受肉

した神が普通の人間のように優しい心や慈愛を持ち合わせていないこともありうる、と信じるに至るほどに。さらに、あなたがたは高潔さや憐れみ深く慈愛に満ちた性質は天の神にのみ存在すると信じている。あなたがたは、そのような聖人は存在せず、ただ闇と悪が地上を支配するのみだと信じているが、その一方で神とは、人々が善きものや美しきものに対する自らの切望を託す先であり、人々によって作られた伝説上の人物なのである。あなたがたの頭の中では、天の神とは非常に立派で正しく偉大な、崇拜し敬慕する価値のあるものであり、一方、地上の神は天の神の単なる代役、単なる道具にすぎないということになっている。あなたがたは、この地上の神は天の神に等しいはずがない、まして天の神と比較するなど話にならないと信じている。神の偉大さと栄誉に関して言えば、これらは天の神の栄光に属するものだが、人間の本性や墮落となると、それらは地上の神もその一部を有している特質だというのである。天の神は永遠に高貴だが、地上の神は永遠に取るに足りず、弱く、無能である。天の神は感情的になることなく、ひたすら義であるが、地上の神には利己的な動機しかなく、公平さも分別もない。天の神は少しも曲った所がなく永遠に誠実だが、地上の神には常に不正直な面がある。天の神は人間を深く愛するが、地上の神が人間に示す配慮は不十分で、人間を全く顧みないことすらある。このような誤った認識がもう長い間あなたがたの心の中にあり、将来にわたり永続する可能性もある。あなたがたはキリストの全ての行いを不義な視点から見ており、キリストの働きの全ても、キリストの身分も実体も、悪人の視点から評価する。あなたがたは重大な過ちを犯し、先人の誰もがなさなかったことをなしてきた。つまり、あなたがたは頭に王冠を戴せた高貴な天の神だけに仕え、取るに足りないと思えあまり自分の目には映らない地上の神のことは、決して留意しないのである。これはあなたがたの罪ではないか。神の性質に背くあなたがたの典型的な例ではないか。あなたがたは天の神を崇拜する。あなたがたは高貴な像を崇拜し、雄弁で名高い者たちを尊ぶ。あなたは、その手を富で満たしてくれる神の命令には喜んで従い、望みを全て叶えてくれる神を渴望する。あなたが崇拜しない唯一のものは高貴でないその神であり、あなたが嫌う唯一のことは、誰からも高く評価されないその神と関わることである。あなたがやりたがらない唯一のことは、あなたに一銭ももたらさないその神に仕えることであり、あなたが恋い慕うよう仕向けることのできない唯一の者は、魅力のないその神である。この神はあなたの視野を広げられず、あたかも宝物を見つけたかのように感じさせることもできず、ましてやあなたの願いをかなえることもできない。ならば、なぜあなたは彼について行くのか。このような問いについて考えたことはあるのか。あなたのしていること

はそのキリストに背くだけではない。より重大なのは、天の神に背くということである。これが神を信仰するあなたがたの目的ではあるまい。

あなたがたは神に喜んでもらうことを切望するが、神から遠く離れている。何が問題なのか。あなたがたは神の言葉こそ受け入れるものの、神の取り扱い、神の刈り込みは受け入れず、まして神の采配の一つ一つを受け入れること、神を完全に信仰することなどできない。ならば何が問題なのか。つまるところ、あなたがたの信仰とは、ひよこが生まれることのない空っぽの卵の殻なのである。あなたがたの信仰は真理をもたらすこともいのちも与えることもなく、代わりに支えと希望という錯覚を与えてきた。この支えと希望という錯覚こそが、あなたがたが神を信じる際の目標であり、真理やいのちが目的ではないのである。だからこそわたしは、あなたがたの神への信仰の流れが、盲従と無恥によって神の機嫌を取ろうとする行為以外の何物でもなく、決して真の信仰と見なすことはできない、と言うのである。このような信仰からどうしてひよこが生まれようか。言い換えれば、このような信仰が何を成しうるだろうか。あなたがたが神を信じる目的は、自分の目標を達成するために神を使うことである。これは神の性質に背いたことを表すさらなる事実ではないか。あなたがたは天の神の存在は信じ、地上の神の存在を否定するが、わたしはあなたがたの見方を認めない。わたしは地に足を着け地上の神に仕える人だけを賞賛し、地上のキリストを認めようとしない人は決して賞賛しない。そのような人は、どれほど天の神に忠実であろうとも、最後は悪人を罰するわたしの手から逃れられない。このような人は悪人である。彼らは神に敵対し、キリストに喜んで従ったことのない邪悪な者たちである。無論、キリストを知らない者、さらにはキリストを認めない者もみなこれに含まれる。あなたは天の神に忠実でありさえすれば、キリストに対して好きなように行動してもよいと思っているのか。それは誤りである。あなたがキリストを知らないのは、天の神を知らないということである。あなたがいかに天の神に忠実であろうとも、それは空論と見せかけにすぎない。と言うのも地上の神は、人間が真理を受け取ってより深遠な認識を持つだけでなく、それ以上に、人間を断罪し、そののちに事実を掴んで悪人を罰することに貢献するからである。これによる有益な結果と有害な結果をあなたは理解したのか。そのような結果をあなたは経験したのか。わたしは、あなたがたがこの真理を早晚理解できるよう願っている。すなわち、神を知るには、天の神だけでなく、より重要なこととして地上の神を知らなければならない、ということである。優先順位を取り違えたり、主要なものよりも二次的なものを優先させたりしてはならない。このようにすることでのみ、あなたは神と真によい関係を築くことができ、より神に近づき、あなたの心をより神に近づけることができるのである。あなたがわたしを長年信仰

し、わたしと長らく関わってきたにもかかわらず、わたしから遠く離れたままならば、あなたは度々神の性質に背いており、あなたの最後は実に測りがたいものになるはずだ、とわたしは言う。わたしと長年関わっても、それによってあなたが人間性と真理を有する人物へと変化せず、その上さらに、あなたの本性に悪の道が根付き、傲慢さが以前の倍になるだけでなく、わたしに関する誤解も増大し、わたしを単なる仲間と見なすまでになってしまったのならば、あなたの厄災はもはや皮膚の表面どころではなく、まさに骨まで貫いていることになる。あなたに残されたのは自分の葬儀の準備が整うのを待つことだけである。その時になって、あなたの神になるようわたしに懇願するには及ばない。あなたは死に値する罪を、許されざる罪を犯したからである。たとえわたしがあなたを哀れむことがあったとしても、天の神はあなたの命を取り上げると断言するだろう。あなたが神の性質に背いたことはありふれた問題などではなく、非常に重大な性質をはらむ問題だからである。その時が来ても、前もって教えてくれなかったとわたしを責めてはならない。話は全てここに戻ってくる。あなたがキリスト、すなわち地上の神を普通の人間と見なして関わるならば、つまり、その神は一人の人間にすぎないと信じるならば、そのときあなたは滅びることになる。これが、あなたがた全員に対するわたしの唯一の警告である。

極めて深刻な問題——裏切り（1）

わたしの働きはまもなく完成する。あなたがたと共に過ごした長い年月は、耐えがたい記憶となっている。わたしは絶え間なく自分の言葉を繰り返し、新たな働きを展開し続けた。もちろん、わたしの忠告はわたしが行うそれぞれの働きに必要な要素である。わたしの助言がなければ、あなたがたはみな道を逸れ、完全に途方にくれることさえあるだろう。わたしの働きはまもなく完了し、終わりの時を迎えようとしているが、わたしはまだあなたがたに助言を与え、忠告の言葉を聞かせようと思っている。わたしはただ、あなたがたがわたしの苦心を無駄にせず、そしてそれ以上に、わたしの配慮と思いやりを理解して、わたしの言葉を人としての振る舞いの基盤とすることを願うのみである。それがあなたがたの聞きたい言葉かどうか、喜んで受け入れられる内容か、または不快ながらも受け入れるしかないものかどうかによらず、あなたがたは必ず真剣に受け止めなければならない。さもなければ、あなたがたのいい加減で無神経な性質と態度はわたしをまったく不快にし、嫌悪さえ抱かせるであろう。わたしはあなたがた全員が、わたしの言葉を何度も何度も――何千回も――繰り返し読んで、心に刻み込むことさえできるようになることを切に願っている。そうすることによってのみ、あなたがたはわたしの期待を裏切

らないようになれる。しかし現在のところ、そのように生きている者は皆無だ。逆に、あなたがたは欲しいだけ飲み食いする放縦な生活に浸り、わたしの言葉で心と霊を豊かにしている者は一人もいない。このためわたしは、人間の本当の顔についての結論に至ったのだ。人はいつでもわたしを裏切れるものであり、わたしの言葉に完全に忠実になれる者はいない、と。

「人間はあまりにもサタンによって墮落させられており、もはや人間の姿をしていない。」多くの人々は現在、この言葉のある程度認識している。わたしがこう言うのは、この「認識」というものが、真の認識とは逆の、単なる表面的な認知だからである。あなたがたの誰も、自分を正確に評価したり徹底的に分析したりできないため、常にわたしの言葉に対して半信半疑でいる。しかし今回は、事実を例にとって、あなたがたの抱える最も深刻な問題を説明しよう。その問題とは裏切りである。あなたがたは皆、「裏切り」という言葉を知っている。なぜならほとんどの者が、何かしらの形で他人を裏切ったことがあるからだ。たとえば夫が妻を裏切り、妻が夫を裏切る。息子が父を裏切り、娘が母を裏切る。奴隷が主人を裏切り、友達同士が互いに裏切り合う。親戚同士が裏切り合い、売り主が買い主を裏切る、などである。こうした例にはすべて裏切りの本質が含まれている。つまり裏切りとは、約束を破る、道徳の原則に反する、あるいは人間の倫理に反する行為の形態であり、人間性の喪失を示している。一般に、この世に生まれた一人の人間として、何らかの形で他人を裏切ったことを覚えているかどうか、あるいはすでに何度も他人を裏切ってきたかどうかに関わらず、何かしら真理への裏切りとなることをしたことはあるだろう。あなたは両親や友人を裏切ることができるのだから、他人も裏切ることができるし、さらにわたしを裏切り、わたしが忌み嫌う事を行うこともできる。言い換えれば、裏切りとは単なる表面的な不道徳行為ではなく、真理に対立するものである。これがまさに、人間のわたしに対する反抗と不従順の根源なのだ。このためわたしは、このことを次のように要約した。すなわち裏切りは人間の本性であり、この本性が、各人とわたしの調和を妨げる天敵なのである。

わたしに完全に従うことができない行為は裏切りである。わたしに忠実であることができない行為は裏切りである。わたしを欺き、嘘でわたしを騙すことは裏切りである。多くの観念を抱き、至る所でそれらを広めることは裏切りである。わたしの証しと利益を護れないことは裏切りである。心の中ではわたしから遠く離れていながら、作り笑いを浮かべるのは裏切りである。こうした行為はすべて裏切りであり、あなたがたはこれまでいつもこうした行為が可能だったし、これらはあなたがたの間で当たり前のこととなっている。あなたがたの誰一人として、これを問題だと考える者はいないが、わたしはそうは考えない。わたしは自分に対する誰かの裏

切りを些細なこととして扱うことはできず、無視することもできない。今、わたしがあなたがたの間で働きを行っているときに、あなたがたはこのように行動している。いつの日かあなたがたを見守る者がいなくなったら、あなたがたは皆、お山の大将を名乗るのではないか。そのときが到来し、あなたがたが大惨事を引き起こしたとき、誰がその後始末をするのだろうか。あなたがたは、一部の裏切り行為は単なる一時的なもので、いつもそうしているわけではなく、そんなに深刻に捉えて、自分の自尊心を傷つけるには値しないと考えている。ほんとうにそう思っているのなら、あなたがたは正気でない。そのように考えることは、反逆の見本であり典型である。人間の本性とはその者のいのちであり、人が生存のために依存する原則で、人がそれを変えることはできない。裏切りの本性を例に取ろう。あなたが親戚や友人を裏切ることができるなら、それは裏切りがあなたのいのちの一部であり、生来の本性であることを証明している。このことは誰も否定できない。たとえばある人が他人から盗むことを楽しむなら、この盗みの楽しさは、その人のいのちの一部である。その人は盗みをするときもあれば、しないときもあるかもしれないが、盗みをしようとしまいと、それはその盗みが単なる一種の行為だという証明にはならない。むしろそれは盗みが彼らのいのちの一部であり、すなわち彼らの本性であることを証明している。それが彼らの本性なら、良い物を見ても盗まないことがあるのはなぜか、と問う人もいる。その答えは至って簡単である。彼らが盗まない理由はたくさんある。たとえば、人目を盗んでかすめ取るには大きすぎるとか、実行するのによいタイミングがないとか、高価すぎたり警備が固すぎたり、さらには特に関心がなかったり、自分にどう役立つかわからなかったりという場合もある。こうしたあらゆる理由が考えられるが、いずれにせよ、彼らがそれを盗むかどうかによらず、その考えが単なる一瞬の思いつきだと証明することはできない。それどころか、それは彼らの本性の一部であり、改善することは困難なのだ。このような人は一度盗めば満足するものではなく、何か良い物を見つけたり適当な状況に置かれたりすればいつでも、他人のものを自分のものだと言主張するという考えが湧く。だからわたしは、この考えの根源は単に時折意識されるものではなく、その人の本性の中にあると言うのだ。

誰でも自分の言葉や行動により、自分の本当の顔を表すことができる。この本当の顔とはもちろん、その者の本性である。もしあなたがひねくれた話し方をするなら、あなたはひねくれた本性をしている。あなたの本性が狡猾なら、あなたは狡猾く振る舞い、人々を容易に手玉にする。あなたの本性が陰険なら、あなたの言葉は聞こえが良いかもしれないが、あなたの行動はその陰険さを隠せない。あなたの本性が怠惰なら、あなたの言う事はすべて自分のいい加減さや怠惰さの責任を逃れる

ためのものであり、あなたの行動は遅くおざなりで、真実を隠すことに長けている。あなたの本性が同情的なら、あなたの言葉は合理的であり、行動もまた真理によく則したものになるだろう。あなたの本性が忠実なら、あなたの言葉は間違いなく誠実であり、あなたの行動のし方は堅実で、主人を不安にするようなことはない。あなたの本性が好色あるいは金銭に貪欲なら、あなたの心は大抵それらのことで一杯であり、人が簡単に忘れられず、かつ人に嫌悪感を与えるような、常軌を逸した不道德な行動を無意識のうちにとるだろう。そしてさきほど言ったように、裏切りの本性を持っているなら、その本性から抜け出すことはまず不可能であろう。自分が誰にも不正を行ったことがないからといって、自分に裏切りの本性がないと楽観してはならない。そのように考えるなら、あなたは本当に胸がむかつくような人間だ。わたしが語る言葉は、その都度すべての人々に向けて語ったものであり、一個人や特定の種類の人間にだけ向けたものではない。あなたが一つのことについてわたしを裏切ったことがないからといって、あらゆることでわたしを裏切れないという証明にはならない。結婚生活が挫折する中、真理の探求において自信を失う人々もいる。また、家族の崩壊によってわたしへの忠誠の義務を投げ捨ててしまう人もいる。またつかの間の喜びや興奮を求めて、わたしを見捨てる人もいる。光の中に生き、聖霊の働きの喜びを自分のものとするよりも、暗い谷底に落ちることを選ぶ人もいる。またある人々は、富への欲を満たすために友人の助言を無視し、現在もなお自分の過ちを認めて道を正すことができずにいる。さらに、わたしの保護を受けるため一時的にわたしの名のもとで生きる人々もいれば、命にしがみつき死を恐れるために、やむを得ず少しだけ献身する者もいる。これらをはじめとする、高潔さのかけらもない不道德な行ないは、まさに人々が心の奥底で長い間わたしを裏切ってきた行為ではなかろうか。もちろん、人々が前もってわたしを裏切ることを計画していたわけではないことは知っている。彼らの裏切りは彼らの本性の自然な現れなのだ。わたしを裏切りたいと思う者は誰もおらず、わたしを裏切るようなことをして喜ぶ者もない。それどころか、彼らは恐怖に震えているではないか。ではあなたがたは、こうした裏切りをどうやって埋め合わせ、現在の状況をどうやって変えられるか、考えているだろうか。

極めて深刻な問題——裏切り（２）

人間の本性はわたしの本質とまったく異なる。人間の墮落した本性はすべてサタンに由来しており、人間の本性はサタンに操られ墮落させられているからである。つまり人間は、サタンの邪悪と醜悪さの影響下で生きながらえている。人間は真理

の世界や聖なる環境で育つものではなく、ましてや光の中で生きてはいない。ゆえに、誰も生まれつきその本性の中に真理を備えていることはあり得ず、ましてや神を畏れ神に従う本性を持って生まれることはあり得ない。その逆に、人間は神を拒み、神に反抗する本性を備えており、真理への愛は抱いていない。わたしが話したいのはこの本性、すなわち裏切りという問題についてである。裏切りは各人の神への反抗の根源である。これは人間だけが有する問題であり、わたしにはない。人によっては、「すべての人間はキリストと同様この世界に生きているのに、なぜすべての人間は神を裏切る本性を備えており、キリストは備えていないのか」と問う者がいる。この問題について、あなたがたに明確に説明しなければならない。

人間の存在の基本は、魂が繰り返し生まれ変わることである。言い換えれば、各人は魂が生まれ変わると、肉としての人間の命を得る。人の身体が生まれると、その命は肉が最終的に限界に達するまで、すなわち最後の瞬間まで続き、そして魂はその殻を離れる。この過程は何度も繰り返され、人間の魂は幾度となく行っては戻り、人類の存在が維持される。肉の命は人間の魂の命でもあり、人間の魂はその肉の存在を支えている。つまり各人の命はその者の魂に由来し、本来肉に宿っているものではない。したがって、人間の本性は人間の肉ではなく魂に由来する。各人がサタンの誘惑や苦悩、墮落をどのように経験したかを知っているのは、各人の魂のみである。人間の肉がそれらを知る由はない。そのため人間は無意識のうちにますます汚れ、邪悪にかつ暗黒になってゆくと同時に、わたしと人間の間の距離もますます広がり、人間の日々もますます暗黒になってゆく。人間の魂はサタンに掌握されており、そのため人間の肉もまたサタンに占領されたのは言うまでもない。このような肉、このような人間が、どうやって神に反抗せずにいられようか。どうやって生来、神に適合する者であり得るだろうか。わたしがサタンを中空へと投げ落としたのは、サタンがわたしを裏切ったからだが、ならばどうして人間がその影響から逃れ得るだろうか。これが、人間の本性が裏切りである理由だ。あなたがたはこの理由を理解すれば、キリストの本質もある程度信じることができるはずだ。神の霊が纏っている肉は神自身の肉である。神の霊は至高であり、全能で、聖く、義である。同様に、神の肉も至高であり、全能で、聖く、義である。このような肉は、人間にとって義であり有益なこと、聖いこと、栄光あること、そして力あることしか行えず、真理や道義に反することはできず、ましてや神の霊を裏切るようなことはできない。神の霊は聖なるものであるため、神の肉はサタンが墮落させることのできないものであり、人間の肉とは本質が異なる。サタンにより墮落させられているのは人間であって神ではないため、サタンが神の肉を墮落させることは一切できない。このため、人間とキリストは同じ空間にあるにもかかわらず、人間だけがサ

タンにより占有され、利用され、囚われている。それに対し、キリストはサタンによる墮落の影響を永久に受けることがない。なぜならサタンが最も高い場所に昇れることは決してなく、神に近付くことも決してできないからである。今日あなたがたは全員が、わたしを裏切るのはサタンにこのように墮落させられた人間だけであることを理解しなければならない。裏切りの問題がキリストに関わることは一切ないのである。

サタンにより墮落させられた魂はすべて、サタンの領域に囚われている。キリストを信じる者のみが分離され、サタンの軍勢から救われ、今日の神の国へと導かれた。これらの人々は、もはやサタンの影響下にはいない。それでもなお、人間の本性は人間の肉に根ざしている。つまり、あなたがたの魂は救われているが、あなたがたの本性は依然として昔のままであり、あなたがたがわたしを裏切る可能性はいまだに100パーセントである。このために、わたしの働きはこれほど長期に及んでいるのだ。あなたがたの本性が手に負えないからである。現在あなたがたは皆、自分の本分を尽くすため全力を尽くして苦難に耐えているが、それでも一人一人がわたしを裏切り、サタンの領域、サタンの陣営に戻り、昔の生活へと戻る可能性がある。これは否定できない事実である。そのときあなたがたは、現在のように人間性や人間としての姿をわずかでも示すことはできないであろう。深刻な場合は神により滅ぼされ、さらに永遠に罪に定められ、厳罰に処されて、生まれ変わることも二度とないであろう。これがあなたがたを待ち受ける問題である。わたしがこのように警告しているのは、第一に、わたしの働きが無駄にならないようにするためであり、第二に、あなたがた全員が光の日々を生きられるようにするためである。実のところ、わたしの働きが無駄かどうかは重大な問題ではない。重要なのは、あなたがたが幸せな生活と素晴らしい未来を得られることである。わたしの働きは人間の魂を救う働きである。あなたの魂がサタンの掌中に陥ったなら、あなたの身体も平安の中に生きることができない。わたしがあなたの身体を護っていれば、あなたの魂も確実にわたしの庇護を受ける。わたしがあなたを本気で忌み嫌ったなら、あなたの身体と魂は、即座にサタンの掌中に陥るであろう。そうなったときの自分の状況を想像できるか。もしいつの日か、わたしの言葉があなたがたにとって意味をなさなくなったら、わたしはあなたがたをすべてサタンに引き渡し、サタンはわたしの怒りが完全に消えるまであなたがたに激しい苦悶を与えるか、あるいはわたし自らが、救いようのないあなたがたに懲罰を与えることになる。あなたがたのわたしを裏切る心は変わりようがないからである。

今あなたがたは皆、できるだけ早く自分自身をふり返り、わたしに対する裏切りが自分の中にどの程度残っているかを確認しなければならない。わたしはあなたが

たの答えをはやる思いで待ち望んでいる。わたしといい加減に向き合うのはやめなさい。わたしは人間に対してふざけることは一切なく、すると言ったことを必ず実行する。わたしはあなたがた全員が、わたしの言葉を真剣に捉え、それをSF小説のように考えなくなることを願っている。わたしが望むのはあなたがたの具体的な行動であり、想像ではない。そして、あなたがたはわたしの次の質問に答える必要がある。1. あなたが真に効力者であるならば、一切の怠慢や消極性を示すことなく、わたしに忠実に奉仕できるだろうか。2. あなたはわたしが一度もあなたを称賛したことがないと知っても、一生わたしのもとに留まり、奉仕を続けることができるだろうか。3. あなたが大いに努力したにもかかわらず、わたしがあなたに冷淡であったとしても、ひっそりとわたしのために働き続けることができるだろうか。4. 何かをわたしのために費やした後に、わたしがあなたの些細な要求に応えなかったとしたら、わたしに失望し、落胆したり、さらには激怒したり罵声を浴びせたりするだろうか。5. あなたがわたしに対して常に忠実で、わたしを非常に愛してきたにもかかわらず、病や貧窮の苦しみを受けたり、友人や親戚に見捨てられたり、その他の人生における不幸に見舞われたとしたら、それでもわたしに対する忠誠や愛が続くだろうか。6. あなたが心に思い描いてきた物事が、一つもわたしの行ったことと一致しないとしたら、あなたはどのように将来の道を歩むだろうか。7. あなたが望むものを一切受け取れなかったとしても、引き続きわたしに付き従うか。8. あなたがわたしの働きの目的や意味をまったく理解できなかったとしても、勝手に判断したり結論を出したりしない、従順な者であることができるだろうか。9. わたしが人間と共にあった間に述べたすべての言葉と行ったすべての働きを、大事にすることができるか。10. あなたはわたしに忠実に付き従い、何も受け取れないとしても、生涯を通してわたしのために苦難に耐えることができるか。11. わたしのために、自分が将来生存するための道を考えたり、計画したり、それに備えたりするのを慎めるか。これらの質問は、あなたがたに対するわたしの最終的な要求であり、わたしはあなたがた全員からの返答を期待している。もしあなたがこれらの質問のうち1つか2つの要求を満たしているなら、引き続き努力する必要がある。これらの要求のうち1つも達成できるものがないなら、あなたは間違いなく地獄へ落とされる部類の人間だ。そのような人々に、わたしはこれ以上何も言う必要はない。そのような者は間違いなく、わたしと調和できる者ではないからである。どんな状況であろうとわたしを裏切る者を、どうしてわたしの家に留めておくことができようか。多くの場合にわたしを裏切る可能性がある者については、わたしはまず彼らの行動を観察してから、その他の処分を行う。しかしどのような状況下にせよ、わたしを裏切る可能性がある者すべてを、わたしは決して忘れ

ることはなく、心の中に留め、その邪惡な行いに報いる機会を待つ。わたしが挙げた要求はすべて、あなたがたが自分で検証すべき問題である。あなたがた全員がこれらの問題を真剣に検討し、わたしと正しい加減に向き合わないことを願っている。わたしは近い将来、わたしの要求に対するあなたがたの答えを確認する。その時には、あなたがたにそれ以上の物事を要求することはなく、より熱心な忠告を与えることもないだろう。代わりにわたしは自分の権威を行使する。残すべき者は残され、報いられるべき者は報いられ、サタンに引き渡されるべき者はサタンに引き渡され、厳罰を受けるべき者は厳罰を受け、滅ぶべき者は滅ぼされるであろう。そのようにしてわたしの日には、わたしを侵害する者は誰もいなくなる。あなたはわたしの言葉を信じるだろうか。あなたは報いを信じるだろうか。わたしを騙し裏切る邪惡な者を、わたしがすべて罰することを信じるだろうか。あなたはその日が早く来ることを望むか、それとも遅く来ることを望むか。あなたは罰に怯える者であろうか、罰に耐えなければならないのにわたしに反抗する者であろうか。その日が来た時、あなたは自分が明るく笑っているか、それとも泣きながら歯ぎしりしているかを想像できるだろうか。あなたはどんな結末を得ることを望むか。あなたは自分がわたしを100パーセント信じているか、それともわたしを100パーセント疑っているかを、真剣に考えたことがあるか。自分の行動や態度が自分にどのような結末や最後をもたらすかを、よく考えたことがあるか。わたしの言葉が一つずつ実現されることを真に望んでいるか、あるいはわたしの言葉が一つずつ実現されることを強く恐れているか。わたしが自らの言葉を実現するためにまもなく立ち去ることを望んでいるなら、あなたは自分の言葉や行動をどのように扱うべきか。わたしが立ち去ることを望まず、わたしの言葉がすべてただちに実現されることを望まないなら、そもそもなぜわたしを信じているのか。あなたは自分がなぜわたしに従っているかを本当に知っているのか。それが単に自分の視野を広げるためなら、そのような苦悩を受ける必要はない。それが祝福を受けて今後の災禍を避けるためなら、なぜあなたは自分の行動について懸念しないのか。なぜ、自分がわたしの要求を満たせるかどうかを自問しないのか。またなぜ、自分が今後やって来る祝福を受けるにふさわしいかどうかを自問しないのか。

あなたがたは自分の行いを考慮すべきである

あなたがたの生活における行いや行動はどれも、わたしの言葉の一節が毎日あなたがたに施され、あなたがたを補給しなければならないことを示している。と言うのも、あなたがたに欠けているものがあまりに多く、あなたがたの認識と受け取る

能力があまりに乏しいからである。あなたがたは日常生活の中で、真理も優れた理知もない雰囲気と環境の中で生きている。あなたがたには生き延びるうえでの元手がなく、わたしや真理を知る基盤もない。あなたがたの信仰は、漠然とした抽象的な信念、あるいは極めて教条的な知識と宗教的儀式の上に築き上げられているに過ぎない。わたしはあなたがたの動きを日々見守り、あなたがたの意図や悪い果実を吟味しているが、わたしの不動の祭壇の上に心と霊を本当に捧げた人を、わたしは一人も見つけたことがない。だから、わたしがあらわしたいと思っている言葉のすべてをそのような人間に注ぐことで、時間を無駄にしたくはない。まだ完成していない働きと、人類のうちわたしがまだ救っていない人たちがみな、わたしの心にある計画の対象である。にもかかわらず、わたしに従う人たちがみな、わたしの救いと、わたしの言葉によって人に授けられる真理とを受けとることをわたしは望む。あなたがいつの日か目を閉じるとき、暗雲が空を漂い、泣きわめく声が決して止まることのない、荒れた冷たい世界ではなく、芳香が空気を満たし、生ける川の水が流れる領域を見るよう、わたしは望んでいる。

毎日、一人ひとりの行いと思いは唯一の方の目に留まっており、それらは同時に、彼ら自身の明日に向けて準備されている。これはすべての生ける者が歩かなければならない道であり、わたしがすべての者に予め定めた道であり、誰もこれを逃れられず、例外となる者もない。わたしが語った言葉は数えきれず、さらに、わたしが行なった働きは計り知れない。一人ひとりがその生来の本性、およびその本性がもたらす出来事に応じて、その人がなすべきあらゆることを自然に遂行する様子を、わたしは毎日見ている。多くの人は知らないうちに、「正しい軌道」にすでに乗っているが、それは様々な人を明らかにすべく、わたしが定めたものである。わたしはずっと以前からこれら様々な種類の人間を違った環境に置いており、一人ひとりがそれぞれの場所で、生まれ持った特性を表わしてきた。彼らを縛る者は誰もいないし、彼らを誘惑する者もない。彼らはひとえに自由であり、彼らが表わすものは自然に生じる。彼らを抑制するものはただ一つ、わたしの言葉である。だから、死を免れるためだけにわたしの言葉をしぶしぶ読み、決して実践しない者もいる。一方、わたしの言葉の導きと施しがなければ日々耐え難いことに気づき、自然とわたしの言葉をいつも手放さない者もいる。時が経つにつれ、彼らは人生の奥義、人類の終着点、人間であることの価値を発見する。わたしの言葉の前で、人類はこのような有様でしかない。そしてわたしは、物事を自然の成り行きに任せているに過ぎない。わたしは人に無理強いして、わたしの言葉を自らの生存の基盤にさせることは一切しない。だから、良心をもたず、自分の存在に何の価値もない人たちは、静かに事の成り行きを観察したあと、大胆にもわたしの言葉を投げ捨て、自

分の好きなようにする。彼らは真理や、わたしから生じるすべてのものにうんざりし始める。さらに、彼らはわたしの家にいることにもますますうんざりする。このような人たちは、自分の終着点のために、また懲罰を逃れるために、たとえ奉仕をしていても、わたしの家でしばらく暮らす。しかし、彼らの意図や行動は決して変わらない。このことは、祝福を求める彼らの願望を膨らませ、一度神の国に入ってからその後永遠に留まり、果ては永遠の天国に入る願望をも膨らませる。わたしの日がすぐに来るのを切望すればするほど、彼らはますます、真理が障害になっている、自分の道をふさぐ躓きの石になっていると感じる。彼らは、真理を追求する必要も、裁きと刑罰を受け入れる必要もなく、それに何より、わたしの家で卑屈に振る舞い、わたしの命令どおりにする必要も一切ないまま、神の国に足を踏み入れて天国の祝福を享受することを待ち切れずにいる。これらの人々がわたしの家に入るのには、真理を求める心を満たすためでも、わたしの経営に協力するためでもない。彼らの目的は、来たる時代に滅ぼされない人の一人になることだけである。よって彼らの心は、真理とは何か、真理をどのように受け入れるかを知ったことがない。そのような人たちが真理を実践することも、自分の墮落の深さを認識することもないまま、「しもべ」としてわたしの家でずっと暮らしていたのはそれが理由である。彼らは「忍耐強く」わたしの日が来るのを待ち、わたしの働きの仕方に翻弄されても疲れを知らない。しかし、彼らがどんなに努力しようと、あるいはどんな代価を支払おうと、彼らが真理のために苦しんだり、わたしのために何かを与えたりしているのを見た人はいない。彼らは心の中で、わたしが古い時代を終わらせる日を見たくてたまらず、さらに、わたしの力と権威がいかに偉大であるかを見出すことを待ちきれずにいる。彼らが決して急いで行おうとしなかったこと、それは自らを変え、真理を追い求めることである。彼らは、わたしがうんざりしているものを愛し、わたしが愛しているものにうんざりしている。わたしが憎むものを慕いつつ、わたしが忌み嫌うものを失うことを恐れている。彼らはこの邪惡な世に生きながら、それを憎んだことは一度もなく、わたしが滅ぼすことを心底恐れている。彼らは矛盾した意図をもち、その中でわたしが忌み嫌うこの世を愛しているが、わたしが急いでこの世を滅ぼすこと、そして自分が真の道から逸れてしまう前に、破滅の苦しみを免れ、次の時代の主人へと変えられることを切望している。これは、彼らが真理を愛さず、わたしから生じる一切のものにうんざりしているからである。祝福を失わないよう、しばらくは「従順なる人たち」になるだろうが、彼らの祝福を求める気持ちや、滅びて燃える火の池に入ることを恐れる気持ちは決して覆い隠せない。わたしの日が近づくにつれ、彼らの願望は着実に強くなる。そして災いが大きければ大きいほど、わたしを喜ばせ、長い間切望してきた祝福を失わないよう

にするには、まずどこから始めたらよいのかわからず、ますます無力になる。わたしの手がその働きを始めるやいなや、このような人たちは先駆者として仕えるべく行動を起こしたがる。自分がわたしの目に留まらないことを深く恐れ、群れの最前列に押し入ることだけを考える。彼らは自分が正しいと思うことを行い、それを口にするが、自分の行為や行動が真理にまったく沿っておらず、自分の所業がわたしの計画をただ妨害し、干渉するだけであることを知らない。彼らは大いに努力するかもしれないし、困難に耐えようとする意志や意図は真実かもしれないが、彼らがする一切のことはわたしとなんら関係ない。なぜなら、彼らの行いが善意から生じるのを一度も見たことはないし、ましてやわたしの祭壇に何か置くのも見たことがないからである。これが、彼らが長年わたしの前でしてきた行いである。

もともと、わたしはあなたがたにもっと真理を与えたいと望んだが、真理に対するあなたがたの態度があまりにも冷たく無関心なので、わたしはあきらめざるを得ない。自分の努力が無駄になることは望まないし、人々がわたしの言葉をもちながら、あらゆる点でわたしに逆らい、わたしを中傷し、わたしを冒瀆することを行うのを見たくはない。あなたがたの態度と人間性の故に、わたしは自分の言葉のごく一部分、あなたがたにとって非常に大切な部分だけをあなたがたに与え、人類を試す働きとして役立てる。いま初めて、わたしの下した決断と計画があなたがたの必要とするものに合致していたこと、そしてそれ以上に、人類に対するわたしの態度が正しいものであることを、わたしは本当に確信した。あなたがたが長年にわたりわたしの前で見せてきた振る舞いは、前例のない解答をわたしにもたらした。その解答に対する問いは、「真理と真の神の前で、人の態度はどのようなものか」である。わたしが人間に捧げてきた努力は、人間を愛するわたしの本質を証明し、人がわたしの前で行なってきた一つひとつの行動は、真理を憎んでわたしに反抗する人間の本質を証明している。わたしはいつでも、わたしに従うすべての人を気にかけているが、わたしに従う人はいかなるときも、わたしの言葉を決して受け取ることができない。彼らはわたしの提案さえ受け入れることができない。これがわたしを何より悲しませることである。たとえわたしの態度が誠実で、わたしの言葉がやさしくても、誰一人わたしを理解できたことがないし、そのうえ、誰一人わたしを受け入れられたこともない。誰もが、わたしにまかされた働きを、自分の考えにしたがって行おうとしている。わたしの旨を求めず、ましてやわたしが何を求めているかを尋ねることなどない。彼らはわたしに逆らいながら、依然としてわたしに忠実に仕えていると主張している。多くの人たちは、自分が受け入れられない真理、あるいは自分が実践できない真理は、真理ではないと信じている。そのような人たちの中で、わたしの真理は否定され、投げ捨てられるものになっている。それと同時

に、人々は言葉でこそわたしを神として認めているが、わたしのことを真理でも、道でも、いのちでもない部外者だとも信じている。誰一人、次の真実を知る人はいない。わたしの言葉は永久不変の真理である。わたしは人間にいのちを施す者であり、人類の唯一の案内人である。わたしの言葉の価値と意味は、人間に認められているかどうか、受け入れられているかどうかではなく、言葉自体の本質によって決定される。たとえこの地上の誰一人としてわたしの言葉を受け入れられないとしても、わたしの言葉の価値と、それがどれだけ人類の助けになるかは、どんな人にも計り知れない。だから、わたしの言葉に逆らい、反論し、あるいはわたしの言葉をまったく軽蔑している人に直面するとき、わたしの立場はこうである。時と事実をわたしの証人とし、わたしの言葉が真理であり、道であり、いのちであることを示そう。そして、わたしが言ったことはすべて正しく、人はそれを備えるべきであり、さらに、人はそれを受け入れるべきであることを、時と事実の実証させよう。わたしに従うすべての者たちに次の事実を知らせる。わたしの言葉を完全に受け入れられない人たち、わたしの言葉を実践できない人たち、わたしの言葉に目的を見いだせない人たち、そしてわたしの言葉によって救いを受け入れられない人たちは、わたしの言葉によって罪に定められた人たちであり、さらには、わたしの救いを失った人たちである。そして、わたしのむちは決して彼らを外さない。

2003年4月16日

神は人間のいのちの源である

産声を上げてこの世に生まれてきた瞬間から、あなたは自分の本分を尽くし始める。あなたは神の計画のため、神の定めのために自分の役割を果たして、人生の旅を始める。背景が何であれ、また前途がどうであれ、天の指揮と采配から逃れられる者はいない。また自分の運命を支配できる者もない。なぜなら、万物を支配するその方しかそのような働きはできないからである。人類が誕生して以来、神は宇宙を経営し、万物の変化の法則とそれらの運行の軌跡を指揮しながら、ずっとこのように働いてきた。万物と同様に、人間は秘かに、知らないうちに、神から来る蜜と雨露によって養われている。他のあらゆるものと同様に、人は知らないうちに神の手による指揮のもとに生存している。人の心と霊は神の手中に握られており、人の生活の一部始終が神の目に見られている。あなたがこのことを信じているかどうかにかかわらず、生きているものであれ死んでいるものであれ、万物は神の思いによって移ろい、変転し、新しくされ、消滅する。これこそが神が全てのものを統治する方法である。

夜が静かにしのび寄って来ても、人は気づかない。なぜなら、人の心は夜がどのようにして近づくのかも、それがどこから来るのかも感知できないからである。夜が静かに過ぎ去ると、人は日の光を歓迎するが、光がどこから来て、どのように夜の闇を追い払ったかについては、なおさら知るよしもなく、まして気づいてもいない。こうして繰り返される昼と夜の移り変わりによって、人は一つの時期から次の時期へ、一つの歴史的背景から次の歴史的背景へと導かれ、それと同時に、それぞれの時期における神の働きと、それぞれの時代における神の計画が確実に遂行される。人は神と共にこれらの時期を歩んできたが、神が万物と全ての生けるものの運命を支配することも、神がどのように万物を指揮し導くのかも知らない。これは太古の昔から現代まで、人には知るよしもないことであった。その理由は、神の業があまりにも隠され過ぎているからでも、神の計画がまだ実現されていないからでもない。それは、人の心と霊が神からあまりに遠く離れているため、神に従いながらもサタンに仕え続けるまでなり、しかも、まだそのことに気づいていないからである。神の足跡と顕現を積極的に探し求める者は一人もいない。また進んで神の配慮と加護の中で生存しようとする者もない。その代わりに、この世と邪悪な人類が従う生存の掟に適應するために、邪悪な者、サタンの腐敗に頼ることを人は望む。この時点で人の心と霊は、サタンへの貢物となり、その餌食となった。その上、人間の心と霊はサタンの住みかとなり、サタンの恰好の遊び場となった。こうして人間は、人間であることの原則について、また人間存在の価値と意義についての理解を気づかないうちに失うのである。神の律法、そして神と人の間で交わされた契約は、人の心の中で次第に薄れ、人は神を求めることも神に注意を払うことも止めてしまう。時間が経つにつれ、人は神が人間を創造した理由も、神の口から出る言葉や神から来る全てをもはや理解しなくなる。それから人は神の律法と掟に抵抗し始め、人の心と霊は麻痺してしまう……。神は自らが最初に創造した人間を失い、人間は元々持っていた根源を失う。これが人類の悲哀である。実際のところ、全ての始まりから現在に至るまで、神は人類のために悲劇を上演してきたのであり、その悲劇の中で人間は主人公でもあり被害者でもある。そして、この悲劇の監督が誰であるのか答えることのできる者はいない。

この広大な世界で、大海は変じて田園となり、田園は変じて大海となり、これが何度も繰り返されている。万物のあいだのあらゆるものを統治する方を除いては、この人類を導き案内できる者はいない。この人類のために労したり備えたりできる力ある者は存在せず、ましてや人類を光の終着点へと導き、この世の不正から解放できる者などいるはずもない。神は人類の未来を嘆き、人類の墮落を悲しみ、人類が一步一步、滅びと戻ることのできない道に向かって進んでいることに心を痛めて

いる。神の心を引き裂き、神を棄てて邪惡な者を求めたこのような人類がどこに向かっているのか、考えたことのある者は一人もいない。まさにこれこそが、誰も神の怒りを感知せず、誰も神を喜ばせる道を求めようともせず、神のもとへ近づこうとすることもなく、さらには、誰も神の悲しみと痛みを理解しようとししない理由である。神の声を聞いた後でさえ、人は自分の道を歩み続け、頑なに神のもとから離れ去り、神の恵みと配慮を避け、神の真理を避けて、神の敵であるサタンに自身を売ることの方を好む。そして、人がこのまま頑なであり続けるなら、後ろを振り向くこともなく神を見捨てたこの人間に対して神がどのようにふるまうかについて、誰が考えたことがあるのか。神が繰り返し人に思い起こさせ、勧告する理由は、人間の肉体と魂にはとうてい耐えられないような、未だかつてない災難を神はその手に準備しているからだということを知る者はいない。この災難は単に肉体の懲罰だけではなく、魂の懲罰でもある。あなたは知らなければならない。神の計画が無駄になり、神の喚起と勧告が報われないなら、神はどのような怒りを注ぐであろうか。それは今までどんな被造物も経験したことも聞いたこともないようなものである。だからわたしは、この災難は前例がなく、二度と繰り返されることはないと言う。なぜなら、神の計画とは今回一度だけ人類を創造し、一度だけ人類を救うことだからである。これが最初であり、また最後である。それゆえ、今回人類を救おうとする神の苦心や切なる期待を理解できる者は一人もいない。

神はこの世界を創造し、神が命を授けた生きものである人間を世にもたらした。次に、人間は両親と親族を持つようになり、もはや孤独ではなくなった。人間は、最初にこの物質的世界に目を向けて以来、神の予定の中で存在するように定められてきた。神から出る命の息は、成人へと成長する間ずっとあらゆる生きものを維持する。この過程で、人は神の配慮のもとに成長していると感じる者はいない。むしろ、人は両親の愛情のこもった世話のもとで成長し、人の成長を促すのは自身の生命本能だと思う。それは、人間は誰が自分に命を授けてくれたのか、どこからそれが来たのかを知らず、ましてや、生命本能がどのようにして奇跡を生み出すのかなど知るよしもないからである。人は食物が生命維持の基礎であり、根気が人間生存の源であり、頭の中にある信念が人間の生存を左右する資本であるということだけを知っている。神の恵みと施しにはまったく気づかないので、神によって授けられた命を人は浪費する……。神が日夜世話しているこの人類のうち、一人として自主的に神を礼拝しようとはしない。神は計画通りにひたすら人に働きかけ続けるだけで、人には何も期待しない。人がある日夢から覚めて、命の価値と意義、人に与えた全てのもののために神が支払った代価、そして人が神のもとへ戻ってくるのを待つ神の切なる心遣いを突然悟ることを願いつつ、神は働き続けている。人間の生命

の起源と存続をつかさどる奥義を探究した者はいない。これら全てを理解している神だけが、神からあらゆるものを受け取ったにもかかわらず感謝することもない人間から受ける傷や打撃に黙って耐える。人間はいのちがもたらす全てのことを当然のここのように享受する。そして同様に、神が人間によって裏切られ、忘れられ、ゆすり取られるのも「当然のこと」とする。神の計画が本当にこれほど重要であると言えるだろうか。人間、すなわち神の手から出たこの生きものが本当にそれほど重要だと言えるだろうか。神の計画は確かに重要である。しかし、神の手で創造されたこの生きものは、神の計画のために存在する。それゆえ、この人類に対する憎しみ故に神は自らの計画を台無しにすることはできない。神が全ての苦痛に耐えるのは、神の計画のためであり、また神が吐いた息のためであり、人間の肉のためではなく、人間のいのちのためである。神がそうするのは、人の肉ではなく、神が吐き出したいのちを取り戻すためである。これこそが神の計画である。

この世に生まれて来る人間は皆、生と死を通らなければならない。そして、その大多数は死と再生の周期を経てきた。生きている者はやがて死に、死者もやがて戻ってくる。これは全て生きものそれぞれのために神によって用意された命の過程である。けれども、この過程と周期こそが人が目を向けるようにと神が願っている真実である。それは、神が人に授けたいのちは無限であり、肉体、時間、空間により制限されないということである。これこそが神によって人に授けられたいのちの奥義であり、いのちが神から来た証拠である。多くの人はいのちが神から来たことを信じないかもしれないが、神の存在を信じるか否定するかにかかわらず、人間は神から出る全てのものを必然的に享受する。ある日突然、神が心変わりし、世界に存在する全てのものを取り返し、自らが与えたいのちを取り戻すことを望むならば、万物は存在しなくなる。神は自らのいのちを用いて全てのもの、生きているもの生きていないものの両方に施し、神の力と権威により全てを秩序正しく整える。これは誰にも想像することも理解することもできない真実であり、これらの理解し難い真実は、まさに神のいのちの力の表れであり、証しである。今あなたに秘密をひとつ告げよう。神のいのちの偉大さとその力は、いかなる被造物にとっても計り知れないものである。過去と同様、現在もそうであり、来たるべき未来もそうである。わたしが伝える第二の秘密はこうである。いのちの形や構造がどのように異なっていようとも、全ての被造物のいのちの源は神に由来する。あなたがどのような生命体であっても、あなたは神によって定められたいのちの軌道に逆らうことはできない。いずれにせよ、わたしが唯一望むのは、人間が次のことを理解することである。神の配慮、加護、施しがなければ、人間はどれほど勤勉に努力しても、どれほど熱心に奮闘しても、人が受けるように定められている全てのものを受けるこ

とはできない。神からのいのちの施しがなければ、人間は生きる価値や命の意義を失ってしまう。神のいのちの価値を勝手気ままに浪費する人が、これほど何も気にかけないことをどうして神が許すだろうか。前にも言ったように、神があなたのいのちの源であることを忘れてはならない。神が授けた全てのものを人が大切にしないならば、神は始めに与えたものを取り返すだけではなく、自身が与えた全てのものの二倍の代価を、人間に支払わせる。

2003年5月26日

全能者のため息

あなたの心の中には非常に大きな秘密がある。あなたはそのことにまだ気がついていない。なぜなら光のない世界でずっと生きてきたからである。あなたの心と霊はあの悪い者に取上げられてしまった。あなたの目は暗闇のせいで見えなくなり、空の太陽も夜のきらめく星も見ることができない。あなたの耳は欺瞞的な言葉で塞がれ、ヤーウェのとどろきわたる声も玉座から流れる水の音も聞こえない。あなたは正当にあなたのものであるすべて、全能者があなたに与えたものすべてを失った。あなたは終わりのない苦しみの中に入った。自分を救う力もなく、生き残る希望もなく、ただもがき駆け回ることしかできず……。その瞬間から、あなたはあの悪い者に苦しめられるように運命づけられ、全能者の祝福から遠く離れ、全能者の施しの届かないところにおり、後戻りできない道を歩いている。百万回の呼び声もあなたの心と霊を奮い起こす見込みはない。あなたはあの悪い者の手の中で深い眠りにについている。悪い者は境界も、方向も、道しるべもない広大な領域へとあなたを誘惑した。それ以来、あなたは本来の純粋さと無邪気さを失い、全能者の気づかいを避けるようになった。あなたの心の中では、あの悪い者があらゆることにおいてあなたを操縦し、あなたのいのちになった。あなたはもはや悪い者を恐れることも、避けることも、疑うこともしない。代わりにあなたは悪い者を心の中で神として扱う。あなたは悪い者を祀り、礼拝するようになる。あなたと彼は物体とその影のように切り離せなくなり、共に生き、共に死のうと決意する。あなたは自分がどこから来て、なぜ生まれ、なぜ死ぬのか全く知らない。あなたは全能者を見知らぬ人として見る。あなたは全能者の起源を知らず、ましてあなたのために全能者が行なった全てのことなど知るよしもない。全能者から来るあらゆることがあなたにとって憎むべきものになった。あなたはそれを大事にしないし、その価値も知らない。全能者からあなたが施しを受けた日から、あなたはあの悪い者とともに歩いている。あなたは悪い者とともに何千年もの風雨を耐え抜いてきて、悪い者とともにあなたのいのちの源であっ

た神に立ち向かう。あなたは悔い改めを一切知らず、ましてや自分が滅亡の淵に達したことなど知りもしない。あなたは悪い者があなたを誘惑し苦しめてきたことを忘れてしまった。あなたは自分の始まりを忘れてしまった。そのようにして今日この日まで、一步一步悪い者はあなたに害を与えてきた。あなたの心と霊は麻痺し、腐敗してしまった。あなたはもはや人の世の苦悩について不満を言うこともなく、世の中が不公平であるとは信じない。まして、全能者が存在するかどうかなど気にすることもない。このようになったのは、あなたが随分前に悪い者を真の父と思うようになり、もはや彼から離れることはできないからである。これがあなたの心の中の秘密である。

夜明けが到来すると、明けの明星が東に輝きだす。それは以前にはそこになかった星で、静寂な星空を照らし、人々の心の中で消された光を再び燃え立たせる。人々はこの光のおかげでもはや孤独ではない。この光はあなたも他人も同様に照らす。しかし、あなただけが暗夜に眠りについたままである。あなたには音も聞こえず光も見えない。あなたは新天新地、新しい時代の到来にも気付かない。なぜなら、あなたの父が、「我が子よ、起きなくてよい。まだ早い。外は寒い。外に出るな。剣や槍があなたの目を射抜かないように」とあなたに言うからである。あなたは自分の父の忠告だけを信じる。なぜなら父はあなたより年を取っており、あなたを心から愛しているので、父だけが正しいと信じているからである。そのような忠告と愛があるために、あなたはもはや世界には光があるという言い伝えを信じなくなり、世界にまだ真理があるかどうかを気にかけなくなる。あなたはもはや全能者からの救済を望むなどということはしない。あなたは現状に満足していて、もはや光の到来を期待しないし、言い伝えられる全能者の出現に注意することもない。あなたに関する限り、あらゆる美しいものは復活させることができず、存在することもできない。あなたの目には、人類の明日、人類の未来は消滅し、跡形もなくなっている。あなたは父の衣に必死になってしがみつき、困難を喜んで分かち合い、あなたの旅の友、長旅の方角を失うことをひどく恐れている。広大でもやの掛かった人の世があなたがたの多くを作り上げ、この世の様々な役割を満たすことにひるまず屈せず立ち向かうようにさせた。それにより、死を全く恐れない多くの「戦士」が作り出された。さらには、自らの創造の目的さえ知らない無感覚で麻痺した人間の群れが次々に生まれた。全能者の目はこの苛酷な苦しみにある人類の一人ひとりを眺めている。全能者に聞こえるのは苦しむ人々の泣き叫ぶ声であり、全能者に見えるのは苦しめられた人々の恥知らずな有様であり、全能者が感じるのは救いの恩恵を失った人類の無力と不安である。人類は全能者の配慮を拒絶し、自らの道を歩くことを選び、全能者の目による詮索を避けようとする。彼らはむしろ深海の苦さ

を、最後の一滴まで、かの敵とともに味わう方を好む。全能者のため息は人類にはもはや聞こえない。全能者の手はもはやこの悲劇的な人類に進んで優しく触れることはない。全能者は何度も何度も奪還し、何度も何度も失う。このように全能者の働きは繰り返される。その瞬間から全能者は疲れ、うんざり感じ始め、その掌中にある働きを止め、人々の間をさまよい歩くのを止める……。人間はこのような変化の一切、このような全能者の行き来にも、全能者の悲しみと憂いにもまったく気づかない。

この世界にあるすべてが、全能者の思いによって、全能者の目の下で、急激に変化している。人類が一度も聞いたことのない事が、突然到来する一方、人類が常に所有してきたものが、知らないうちに消え去ってしまう。誰も全能者の所在を推し量ることはできないし、まして全能者の生命力の超越性や偉大さを感じる事など到底できない。人には知覚できない事を知覚できるゆえに全能者は超越的である。人類によって捨てられたにもかかわらず人類を救う方であるゆえに全能者は偉大である。彼は生と死の意義を知っている。それだけでなく、被造物たる人類の存在の法則を知っている。彼は人類の存在の基礎であり、人類を再び復活させる贖い主である。彼は幸せな心に悲しみという重荷を負わせ、悲しむ心を幸福で引き上げる。これらは全て彼の働きのためであり、彼の計画のためである。

全能者のいのちの供給から離れた人類は、存在の目的を知らないが、それでも死を恐れている。支えもなく援助もないが、人類は依然として目を閉じようとせず、自らの魂を感じることもない肉の塊として頑なにこの世における下劣な存在を引きずっている。あなたはこのように何の希望もなく生き、他人も何の目的もなく生きている。伝説のあの聖なる者だけが、苦しみにもめきながら彼の到来を待ち焦がれる人々を救う。この信念は知覚のない人々においてはまだ実現していない。しかし人々はまだそれを切望している。全能者は深い苦しみの中にあつたこのような人々に慈しみを抱く。同時に、全能者は何の知覚もないこのような人々にうんざりしている。なぜなら、人間から答えを得るのに、あまりにも長く待たねばならなかったからである。全能者は探したい、あなたの心と霊を探し、あなたに水と食料を施したい、あなたを目覚めさせたいと思っている。それにより、もはやあなたが渇きと飢えを感じないようにである。あなたが疲れているとき、この世の荒廃のようなものを感じはじめるとき、途方に暮れてはならない、泣いてはならない。全能神という、見守る者がいつでもあなたが来るのを抱擁して迎えるからである。彼はあなたのそばで見守り、あなたが立ち返るのを待っている。あなたが記憶を突然回復する日を待っている。すなわち、あなたが神から来たのであり、いつであつたかは不明だが道に迷い、いつであつたかは不明だが路上で気を失い、いつであつたか

は不明だが「父」ができたことに気づく日を。さらに、全能者がずっと見守ってきたということ、とても長い間あなたが帰ってくることを待っていたということに気づく日を。全能者は切実な思いで見守り、そして答えのない応答を待っている。全能者が見守り、待っているというのはきわめて貴重なことであり、それは人間の心と霊のためである。このように見守り、待っていることは無期限かもしれないし、終わりの段階にあるのかもしれない。しかし、あなたは自らの心と霊がたった今どこにあるのかを正確に知らなくてはならない。

2003年5月28日

神の現れによる新時代の到来

六千年間にわたる神の経営（救いの）計画が終わりを告げようとしている。そして、神の国の門は神の現れを求めるすべての人にすでに開かれている。兄弟姉妹たちよ、何を待っているのか。あなたがたが探し求めているものは何か。神の現れを待っているのか。神の足跡を探し求めているのか。神の現れがどれほど待ち望まれていることか。だが、神の足跡を見出すことはいかに難しいことか。今のような時代に、このような世界で、神の現れる日をこの目で見えるために何をすべきであろうか。神の足跡をたどるには何をすべきであろうか。神の現れを待つすべての人が、このような疑問を抱いている。あなたがたもこのような疑問を何度か抱いたが、その結果はどうであったのか。神はどこに現れるのか。神の足跡はどこにあるのか。答えは見つかったのか。多くの人は、「神は自分に従う人々に現れ、神の足跡はわたしたちのただ中にある。単純なことだ」と答える。決まり切った答えであればだれにでも言える。だがあなたがたは、神の現れとは何かを、神の足跡とは何かを本当に理解しているのか。神の現れとは、神がその働きを行うためにみずから地上に来ることである。神としての身分と性質をもち、また神に固有の方法で、一つの時代を始め、別の時代を終わらせる仕事を行うために、神は人類のもとに下ってくる。このような神の現れは儀式の一形式ではない。それはしるしでも、図画でも、奇跡でも、大いなる幻でもない。ましてや宗教的な過程でもない。それは、実際に手で触れ、目で見ることのできる現実的で実際的な事実である。このような現れはただ表面的な動作をするためでも、短期間の作業のためのものでもない。それは、神の経営計画の中にある一つの働きの段階のためである。神の現れは必ず何かの意味があり、必ず神の経営計画と関係している。ここで言う「現れ」は、神が人を案内し、導き、啓く「現れ」とは全く異なる。神は自身を現す度に、神の大いなる働きの一段階を実行する。この働きは他のどの時代の働きとも異なる。それは人

には想像もできないもので、人が経験したことがないものである。その働きは、新しい時代を到来させ、古い時代を完結させるもので、人類を救う働きの新しく向上したかたちである。さらには、人類を新しい時代に導き入れる働きである。これが神の現れの意義である。

ひとたび神の現れが何であるかがわかれば、神の足跡をどのように探し求めるべきであろうか。この問いに答えるのは難しくはない。神の現れるところはどこであれ、そこに神の足跡も見つかる。このような説明は単純に聞こえるが、実際にはそれほど単純ではない。多くの人は、神がどこに現れるか、ましてや神がどこに現れるつもりか、あるいは現れるべきかを知らないからである。聖霊の働きがあるところには神が現れると、感情にかられて考える人がいる。または、霊的な指導者がいるところに神が現れると思っている。あるいは、名声が高い人のいるところであれば、どこであれ神が現れると思っている。そうした考えが正しいかどうかは、今のところは深く考えないでおこう。このような問題を解説するには、まず目的をはっきりさせる必要がある。わたしたちが探し求めているのは神の足跡である。霊的な指導者を求めているのでもなく、ましてや有名人でもない。わたしたちがたどっているのは神の足跡である。このため、神の足跡を探し求めているわたしたちは、神の心意、神の言葉、神の発する声を探り求めなければならない。神が語る新しい言葉があるところには神の声があり、神の足跡があるところには神の業があるからである。神による表現があるところに神が現れ、神が現れるところには真理、道、いのちがある。神の足跡を探し求める中で、あなたがたは「神は真理であり、道であり、いのちである」という言葉を無視していた。そのため、真理を受け取っても神の足跡を見出したとは思わない人が多いのである。ましてや、神の現れを認めることなどない。なんと大きな過ちであることか。神の現れは人の観念と一致することはない。ましてや神は人の言うままに現れない。神は自らの判断で、自らの計画に従って働く。さらに、神にはその目的と方法がある。神がどのような働きをしようと、人と話し合ったり人の助言を求める必要はない。ましてや神が人間一人一人にその働きを知らせる必要などなおさらない。これが神の性質であり、さらにそれはすべての人が認識すべきことである。もし神の現れをその目で見、神の足跡をたどりたいと願うなら、自分自身の観念を捨て去らなければならない。神にこれをせよあれをせよと命じてはならない。ましてや神を自分の枠の中に閉じ込めたり、自分の観念の中に押し込めたりすべきでない。そうではなく、どのように神の足跡をたどるべきか、どのように神の現れを受け止めるべきか、どのように神の新しい働きに従うべきかを、自分に問うべきなのである。これが人のすべきことである。人は真理ではなく、真理を自分のものにしていないので、人は探し求め、受け入れ、従うべきである。

アメリカ人であれ、イギリス人であれ、国籍がどこであれ、自分の国籍の枠を乗り越え、自分自身を超越し、被造物としての立場から神の働きを見なくてはならない。そうすれば、神の足跡を枠にはめることはない。それは、現在は特定の国や民族に神が現れることは不可能だと多くの人が考えているからである。神の働きはなんと意義深く、神の現れはなんと重要なことか。どうして人の観念や考えで測ることができようか。そのため、神の現れを探し求めるためには、国籍や民族性という観念を突き抜けるべきである、とわたしは言うのである。そうして初めて、自分自身の観念に制約されることなく、神の現れを迎えるにふさわしくなる。そうでなければ、暗闇の中にいつまでもとどまり、神から認められることもない。

神は全人類の神である。神は自らを一つの国や民族の所有物とみなさない。神が自ら計画したとおりに働きを行い、いかなる形式や国、民族にも限定されることはない。これまであなたはこのような形式を想像したこともなかったかもしれないし、そのような形式を否定するかもしれない。神が現れる国や民族はたまたま誰からも差別されている地上で一番遅れている国や民族かもしれない。しかし、神には神の知恵がある。神はその偉大な力とその真理と性質により、神と心をつなぐ人々の一群を本当に得ている。それは神が完成させたいと願う人々の一群で、神に征服され、あらゆる試練と困難、あらゆる迫害に耐え、最後の最後まで神に従うことのできる一群である。いかなる形式や国にも限定されない、神の出現の目的は、その計画どおりに働きを完成させることである。それはちょうど神がユダヤの地で肉となったときと同じである。神の目的は全人類をあがなうことで十字架の働きを完成させることであつた。しかし、ユダヤ人は神がそれを行うのは不可能だと考えた。神が肉となって、主イエスの姿をとるのは不可能だと考えたのである。この「不可能」が、ユダヤ人が神を罪に定め、神に敵対する根拠となった。そして、最終的にはイスラエルの破滅へとつながった。今日、多くの人が同じような間違いを犯している。神は今すぐにでも現れると強く主張しながら、同時に神の現れを断罪している。その「不可能」が再び、神の現れを自分たちの想像できる範囲に押し込めているのである。神の言葉に出会うと、多くの人が騒々しく大笑いするのをわたしは見てきた。しかし、その笑いはユダヤ人による神への断罪と冒瀆とどこか違うであろうか。あなたがたは真理を目の前にしても敬虔さがなく、ましてや真理を慕い求める態度もない。ただ手あたり次第に研究し、気楽に待っているだけである。そのように研究し、待っていることで得られるものは何なのか。神から直に導きを受け取ることができると思っているのか。神の発言を聞き分けることができないなら、どうして神の現れをその目で見る資格があるというのか。神が現れるところでは、真理が表され神の声がある。真理を受け入れることができる人だけが神の声を

聞くことができる。そしてそういう人だけが神の現れを見ることができる。観念を捨てなさい。落ち着いて、これらの言葉を注意深く読みなさい。真理を慕い求めるなら、神はあなたを照らし、あなたは神の心意と言葉を理解できるようになる。

「不可能」だと思うことについての意見を捨て去りなさい。人が何かを不可能だと思えば思うほど、それは実現しやすくなる。神の知恵は天より高く、神の思いは人の思いより高く、神の働きは人の考えや観念をはるかに超越するからである。何かが可能であればあるほど、そこには探し求めることのできる真理がある。人の観念と想像を超えるものであればあるほど、そこには神の心意がある。神がどこに現れようとも、神はやはり神であり、神の本質が現れる場所や方法で変わることはないからである。神の性質は、神の足跡がある場所によらず、いつも同じである。神の足跡がどこにあらうとも、神は全人類の神である。それはちょうど主イエスはイスラエル人の神というだけでなく、アジア、ヨーロッパ、アメリカの人々の神でもあり、さらに、全宇宙で唯一無二の神であるのと同じである。だから、神の言葉に神の心意を探し求め、神の現れを発見し、神の足跡に従おう。神は真理であり、道であり、いのちである。神の言葉とその現れは同時に存在する。また、神の性質と足跡はいつでも人類に対して開いている。兄弟姉妹たちよ。あなたがたがこれらの言葉に神の現れを見てとり、新しい時代に向かって進みながら、神の足跡をたどり始め、神の現れを待ち望む人のために用意された美しく新しい天地に入れることを望む。

神は全人類の運命を支配する

人類の一員として、また敬虔なクリスチャンとして、神が委ねる任務を全うするために心と体を捧げるのはわたしたちすべての責任であり、義務である。なぜならわたしたちの全存在は神から来たものであり、神の統治のおかげで存在しているからである。わたしたちの心と体が神の委ねる任務のためでも、人類の義なる目的のためでもないなら、わたしたちの魂は神の任務のために殉教した人々に値せず、わたしたちにすべてを与えた神にはなおさら値しないと感じるだろう。

神はこの世界を創造し、この人類を創造し、さらに神は古代ギリシア文化ならびに人類の文明の設計者でもあった。神のみがこの人類を慰め、神のみが日夜人類のことを思いやる。人類の発展と進歩は神の統治と切り離すことはできない。また、人類の歴史と未来は神の計画から切り離せない。あなたが真のクリスチャンならば、あらゆる国または民族の興亡は、神の意図に従って起こるということを必ず信じているであろう。神のみが国や民族の運命を知っており、神のみがこの人類の進

むべき道を制御する。人類が良い運命を望むなら、また国が良い運命を願うなら、人類はひれ伏して神を礼拝し、神の前で悔い改め、罪を告白しなければならない。さもなければ人類の運命と終着点は避けることのできない災難となる。

ノアが箱舟を造った時代を振り返って見なさい。人類はひどく墮落し、人々は神の祝福から迷いはぐれ、もはや神の配慮は得られず、神の約束を失ってしまっていた。闇の中を神の光なしに生きていた。そして人の本性は放縦となり、おぞましい墮落に身を任せた。このような人々はもはや神の約束を受けることはできなかった。彼らは神の顔を見るにも、神の声を聞くにも相応しくなかった。なぜなら彼らは神を見捨て、神から与えられたものすべてを放棄し、神の教えを忘れてしまったからである。彼らの心は神から遠く離れて行くばかりで、それにつれてあらゆる理知と人間性を失い墮落し、邪悪さを増していった。そして彼らは死に歩み寄り、神の怒りと罰を受けた。ノアだけが神を礼拝し、悪を避けたので、神の声を聞くことができ、神の指示を聞くことができた。ノアは神の言葉の指示に従って箱舟を造り、あらゆる種類の生物をそこに集めた。こうしてひとたびすべての準備が整うと、神は世界に破滅をもたらした。ノアとその家族七人だけが破滅を逃れて生き残ったが、それはノアがヤーウェを礼拝し、悪を避けたからであった。

それでは現代に目を向けてみなさい。ノアのように神を礼拝し、悪を避けることのできる義人はいなくなってしまった。それでもなお、神はこの人類に恵み深く、この終末の時代においても人類の罪を赦す。神の現われを切望する人々を神は探し求める。神の言葉を聞くことができる人々、神の任務を忘れず、心と体を神に捧げる人々を神は探し求める。神の前で赤子のように従順で、神に抵抗しない人々を神は探し求める。あなたが何の勢力にも妨げられずに神に献身するならば、神はあなたを好意の眼差しを注ぎ、祝福を受ける。たとえあなたが地位が高く、名声があり、知識が豊富で、有り余るほどの資産の持ち主で、多くの人々の支持を得ていたとしても、それらのものが、あなたが神の前に出て神の召命と任務を受け、神の命じることを行う妨げにならないならば、あなたの為すことはすべて地上で最も意義深い行いであり、人類の最も義なる事業となる。もしあなたが地位や自分自身の目標のために神の召命を拒むならば、あなたの為すことはすべて神にのろわれ、さらには忌み嫌われるであろう。あなたは大統領かもしれない、あるいは科学者、牧師、長老かもしれないが、あなたの地位がどんなに高くても、自分の知識と能力を頼りにして事業に着手するならば、あなたは必ず失敗し、必ず神の祝福をのがすことになる。神はあなたの為すことは何も受け入れず、あなたの事業が義であるとは認めず、あなたが人類の益のために働いているとは見なさないからである。あなたの為すことはすべて、人類の知識と力を用いて人から神の保護を奪い去ることだ

が、それは神の祝福を否定するために行われると神は言う。あなたは人類を暗闇の方向へ、死の方向へ、人が神と神の祝福を失ってしまった終わりなき存在の始まりへ導いていると神は言う。

人類が社会科学を考案して以来、人の精神は科学と知識に占領されてしまった。それから科学と知識は人類を支配する道具となり、もはや神を礼拝するための十分な余地は人にはなくなり、神を礼拝するための好ましい条件もなくなった。人の心の中で占める神の位置はどこまでも低められた。心の中に神が無いまま、人間の内面世界は暗く、希望も無く、空虚である。そのため、人類の心と精神を満たすために多くの社会学者や歴史家、政治家が登場し、社会科学の理論や人類進化の理論、神が人を創造したという真理に矛盾するその他の理論を発表した。こうして、神が万物を造ったという真理を信じる人はますます少なくなり、進化論を信じる人の数はさらに増加した。神の働きの記録と旧約聖書の時代の神の言葉を神話や伝説として取り扱う人々はますます多くなっている。人々の心は、神の威厳と偉大さに、神が存在し万物を支配しているという信条に対して無関心になっている。人類の生存、そして国家と民族の運命はもはや人にとって重要ではなく、人は飲食と快楽の追求にしか関心のない虚しい世界に生きている。……神が今日どこで働きを行っているのか、あるいは神が人の終着点をいかに支配し、定めているのかを自らすすんで探し求める人はほとんどいない。こうして、人間の文明は、人間の知らないうちに、ますます人の望みどおりには行かなくなり、こんな世界に生きている自分達はすでに亡くなった人々に比べて不幸せだと感じている人さえ数多くいる。過去に高度の文明を築いた国々の人たちでさえそのような不満をあらわにしている。なぜなら、神の導きなしには、支配者や社会学者が人類の文明を維持するためにどんなに頭を悩ませても何の役にも立たないからである。誰も人の心の中の空洞を埋めることはできない。誰も人のいのちとなることはできず、どのような社会学的理論も人を悩ませる虚しさから人を解放することはできないからである。科学、知識、自由、民主主義、余暇、快適さなどは、人間につかの間の慰めしかもたらさない。これらのものがあっても、人はやはり必然的に罪を犯し、社会の不正を嘆く。これらのものは、人の探求への渴望や欲求を抑えることはできない。人は神によって造られたからであり、人の無意味な犠牲や探索はさらなる苦悩につながるだけで、人類の将来にどのように向き合うべきか、目の前にある進路にどのように対峙すべきか分からないまま人を常に恐怖に怯えたままにさせるからである。人は科学や知識を恐れるまでになり、空虚感をそれ以上に恐れるようになる。この世であなたが自由な国に住んでいようと、人権のない国に住んでいようと、人類の運命から逃れることは決してできない。あなたが支配者であろうと、被支配者であろうと、人類の運命、奥

義、そして終着点を探求したいという願望から逃れることは到底できない。ましてや、途方にくれるほどの空虚感から逃れることなどできない。全人類に共通するこの現象を社会学者は社会現象と呼んでいる。しかし、このような問題を解決できる偉人が現れることはない。人間は結局、人間に過ぎず、神の地位といのちに取って代わられる人間はいない。誰もが食べる物があり、平等で自由で公平な社会だけが人類に必要なのではない。人類に必要なのは神の救いと神によるいのちの満たしである。神の救いといのちの満たしを受けて初めて、人間の必要、探究心、そして霊的空虚感が解決されるのである。一つの国や民族の人々が神の救いや配慮を得ることができなければ、その国や民族は暗黒に向かって、衰退への道を突き進み、神によって滅ぼされる。

あなたの国は今のところ繁栄しているかもしれない。しかし、国民が神から離れていくことを許すなら、その国はますます神の祝福から遠ざかることになる。あなたの国の文明はどんどん踏み躪られ、やがて人々は神に反対して立ち上がり、天を呪うことになる。こうして一国の運命は人の知らないうちに破滅する。神は強大国々を興して神に呪われた国々を取り扱い、さらには、そうした国々を地球上から一掃することさえあり得る。一つの国や民族の興亡は、その支配者が神を崇拝しているかどうか、その国民が神に近づき、神を崇拝するように導いているかどうかにより決まる。しかし、この終末の時代に、真に神を求め神を崇拝する人はますます少なくなっているので、神はキリスト教を国教とする国々に特別な恩恵を授ける。神はそれらの国々を結集させて世界において比較的義である陣営を形成する。一方、無神論の国々と真の神を崇拝しない国々は義なる陣営の敵になる。このようにして、神はその働きを行うための場所を人類の中に持つだけでなく、義なる権威を行使できる国々を獲得し、神に抵抗する国々に制裁と制限が課せられることを許可する。しかしそれにも関わらず、神を崇拝するために進み出でくる人がこれ以上いないのは、人間が神からあまりにも遠く離れてしまい、神をあまりにも長く忘れてしまっているからである。地上にはただ義を行使し、不義に抵抗する国々が残るだけである。しかし、これは神の願望とは程遠い。どの国の支配者も神が自国民を統括することを許さず、どの政党も神を崇拝するために人々を結集させないからである。神は各国、民族、政権政党の中心において、さらには各人の心の中においてでさえ、本来の正当な位置を失った。確かにこの世界には義なる勢力が存在するが、神が人の心の中で何の地位も占めていない統治は脆弱である。神の祝福がなければ、政治の舞台は混乱に陥り、一撃に耐えられなくなってしまう。人類にとって神の祝福がないことは、太陽がないようなものである。支配者がどれほど熱心に国民のために貢献しようが、どれほど多くの義なる会議を人類が開催しようが、どれも流れを逆転させるこ

とはなく、人類の運命を変えることもない。人々が衣食に困らない国、平和に共に暮らす国はよい国であり、良い指導者の国だと人は考える。しかし、神はそうは思わない。神は、神を崇拝する者のいない国は滅ぼすべき国であると考えている。人の考え方は、神の考え方とはあまりにも食い違っている。だから、もし国の長が神を崇拝しなければ、その国の運命は悲劇的なものとなり、その国に終着点はない。

神は人間の政治に参加しないが、国または民族の運命は神に支配されている。神はこの世界と全宇宙を支配している。人の運命と神の計画は密接に関連しており、誰もどの国も民族も神の統治から免れない。人間の運命を知りたいなら神の前に来なければならない。神に従い、神を崇拝する人々を神は繁栄させ、神に抵抗し、拒絶する人々に衰退と絶滅をもたらす。

神がソドムを滅ぼしたときの聖書の場面を思い出してみるがよい。また、ロトの妻がどうして塩の柱になったかも考えてみるがよい。ニネベの人々が荒布をまとい、灰の中に座していかに罪を悔い改めたかを思い返し、二千年前にユダヤ人たちがイエスを十字架に釘づけにしたあと何が起きたかを思い起こしてみるがよい。ユダヤ人はイスラエルから追放され、世界中の国々に逃亡した。多くは殺され、ユダヤ民族全体が、前例のない亡国の苦痛に苛まれた。彼らは神を十字架に釘付けにし――凶悪な罪を犯し――そして神の性質を侵害した。彼らは自分たちが為したことの代価を払い、その行動の責任の一切を取らなければならなかった。彼らは神を罪に定め、神を拒絶したので、たどる運命は一つしかなかった。すなわち、神の罰を受けたのである。これが彼らの支配者たちがその国と民族にもたらした苦い結果と災害であった。

今日、神は働きを行うために世界に戻ってきた。神が最初に留まった所は、独裁的支配の典型、すなわち無神論の頑強な砦、中国である。神はその知恵と力によって一群の人々を獲得した。この間に、神は中国共産党にあらゆる手段をもって追跡され、塗炭の苦しみにさらされ、枕する場所もなく、避難場所を見つけることもできなかった。それにも関わらず、神は意図した働きを続行している。つまり神は声を発し、福音を広める。誰も神の全能性を推し量ることはできない。神を敵と見なす国、中国で、神は決してその働きをやめてはいない。それどころか、ますます多くの人々が神の働きと言葉を受け入れている。神は最大限可能な限り、人類の一人一人を救うからである。わたしたちは、いかなる国家も勢力も神が果たそうと願うものの前に立ちだかることはできないと信じている。神の働きを妨害し、神の言葉に抵抗し、神の計画をかき乱し阻害する者たちは最終的には神に罰せられる。神の働きに逆らう者は地獄に送られる。神の働きに反抗する国家は滅ぼされる。神の働きに反対するために立ち上がる民族は地上から一掃され、消滅する。すべての民

族、国家、そしてあらゆる業種の人々が神の声に耳を傾け、神の働きに目を向け人類の運命に留意することで、神を至聖、至尊、至高たる、人類唯一の崇拝の対象とし、アブラハムの子孫がヤーウェの約束の下に生きたように、最初に神が造ったアダムとエバがエデンの園で暮らしたように、人類全体が神の祝福の下に生きることができるようにすることをわたしは強く勧める。

神の働きは強い波のように打ち寄せる。誰も神を引き留めることはできず、誰も神の前進を停止させることはできない。神の言葉に注意深く耳を傾け、神を探し求め渴望する人々だけが神の歩みをたどり、神の約束を受けることができる。そうしない者は圧倒的な災難を被り、当然受けるべき罰を受ける。

神を知ることこそ、神を畏れ悪を避ける道である

あなたがたはみな、自分が生涯を通じてどのように神を信じてきたかを吟味し直す必要があります。神に付き従う中で、自分が神を真に理解し、真に認識し、真に知るようになったかどうか、そして神がさまざまな種類の人間に対しどんな姿勢で臨むのかを真に知っているかどうか、さらに神が自分にどのような働きを行なっているかと、自分の一つ一つの行為をどのように定義しているかを、真に理解しているかどうか確かめる必要があるのです。この神はあなたの隣におり、あなたの進む方向を導き、あなたの運命を定め、あなたの必要を満たしてくれる神です。結局のところ、あなたはこの神をどの程度理解しているのでしょうか。この神について、どの程度本当に知っているのでしょうか。神が毎日あなたにどんな働きを行なっているかを知っていますか？ 神のあらゆる働きの基盤となっている原則や目的を知っていますか？ 神があなたをどのように導くかを知っていますか？ 神がどんな方法であなたを養うかを知っていますか？ どんな方法であなたを導くのかを知っていますか？ あなたから何を徳たいと思っているか、あなたの中で何を成し遂げたいと思っているかを知っていますか？ あなたが取るさまざまなふるまいに対し、神がどのような態度で臨むかを知っていますか？ 自分が神に愛される人間かどうかを知っていますか？ 神の喜び、怒り、悲しみ、歓喜の根源と、その背後にある思いや考え、そして神の本質を知っていますか？ 究極的に、自分が信じている神がどのような神であるかを知っていますか？ こうした質問やその他類似の疑問は、あなたがこれまで一度も理解せず、考えたこともないものでしょうか。神への信仰を追求する中で、神の言葉を真に味わい経験することを通して、神に関する誤解が解けたことはあるでしょうか。神の鍛錬と懲らしめを受けた後に、真に神への服従と思いやりを得たことがあるでしょうか。神の刑罰と裁きのただ中で、人間の反抗心

とサタンのような本性を知り、神の聖さをほんの少しでも理解するようになったことがあるでしょうか。神の言葉による導きと啓示によって、新たな人生観を持つようになったでしょうか。神から送られた試練のただ中で、人間の背きに対する神の不寛容だけでなく、神があなたに何を要求しているかや、いかにしてあなたを救おうとしているか、感じ取ったことがあるでしょうか。神を誤解するということがどういうことかや、その誤解を解く方法を知らないなら、あなたは神との真の交わりに入ったことが一度もなく、神を理解したこともないか、または少なくとも、一度も神を理解したいと望んだことがないのだと言えます。神の鍛錬と懲らしめとは何かを知らないなら、神への服従と思いやりとは何かを知っているはずもなく、少なくとも真に神に服従したり神を思ったりしたことは一度もないのです。神の刑罰と裁きを受けたことがないなら、神の聖さとは何であるかがわかるはずもなく、ましてや人間の反抗についての理解はさらに曖昧になるでしょう。正しい人生観や正しい人生の目的を持ったことが一度もなく、いまだに人生における将来の道について戸惑いと迷いの中にあり、前に進むことさえ躊躇しているのなら、あなたは間違いなく神の啓きと導きを受けたことがないのであり、さらに神の言葉によって真に与えられたことも満たされたこともないのであります。まだ神の試練を受けていないのなら、人間の背きに対する神の不寛容とは何かを知る由もなく、究極的に神があなたに何を求めるのかも理解できず、ましてや人間を救う神の働きとは究極的に何なのかなどわかるはずありません。何年神を信じていようとも、神の言葉から何も経験せず認識もしていないのなら、その人は間違いなく救いへの道を歩んでおらず、その人の神への信仰には内容がなく、神に関する認識も間違いなく皆無であり、神を畏れるとはどういうことか見当もつかないのは言うまでもありません。

神が所有するもの、神の存在そのもの、神の本質、神の性質――これらはすべて、神の言葉の中で人間に知らしめられています。神の言葉を体験するとき、人間はその言葉を実践に移す過程で、神が語る言葉の背後にある目的と、その言葉の根源や背景を理解するようになり、そしてその意図された効果を理解し認識するようになります。こうしたことはすべて、真理といのちを得て、神の意図を把握し、性質を変えられ、神の支配と采配に服従できるようになるために、人間が経験し、把握し、獲得しなければならないことなのです。こうしたことを経験し、把握し、獲得すると同時に、人間は徐々に神を理解するようになり、そしてそのときには神に関する認識もさまざまな程度で獲得しています。この理解と認識は、人間が想像したり作り上げたりした物事からではなく、心の中で理解し、経験し、感じ、確認した物事から生まれます。そうした物事を理解し、経験し、感じ、確認して初めて、人間の神に関する認識は中身のあるものとなります。このときに人間が得る認識だ

けが、實際的で現実的かつ正確であり、そしてこの神の言葉を理解し、経験し、感じ、確認することで神に関する真の理解と認識を得るという過程こそが、まさしく人間と神との真の交わりなのです。こうした交わりの中で、人は神の意図を真に理解し把握し、神の所有するものと神の存在そのものを真に理解し知るようになり、神の本質を真に理解し知るようになるとともに、神の性質を徐々に理解し知るようになって、神があらゆる創造物を支配しているという事実についての確信と正しい定義に到達し、神の身分と地位についての確かな姿勢と認識を得ることになります。こうした交わりの中で、人の神に関する考えは徐々に変化し、人は根拠もなく神について想像したり、神への疑念を勝手に膨らませたりすることをやめ、神を誤解したり、罪に定めたり、神を裁いたり、疑ったりもしなくなります。その結果、神と議論することや対立することが減り、神に反抗する機会も減ります。そして逆に神への思いやりと服従が強くなり、神への畏敬の念がより現実的で深遠なものとなっていきます。こうした交わりの中で、人間は真理の供与といのちの洗礼を受けるだけでなく、同時に神に関する真の認識を得ることになります。こうした交わりの中で、人間はその性質を変えられて救いを得るだけでなく、同時に被造物としての神に対する真の畏敬と崇拝を獲得することになります。こうした交わりを経ることで、神への信仰はもはや白紙の状態でも、言葉だけの約束でも、一種の盲目的な追求や偶像化でもなくなります。こうした交わりによってのみ、人間のいのちは成熟に向かって日々成長することになり、そのとき初めてその性質が徐々に変えられて、神への信仰は漠然とした不確実なものから、少しずつ本物の服従と思いやりへ、本物の畏敬へと変化していきます。そして神に付き従う過程で、人は次第に消極的な態度から積極的な態度へ、否定的な者から肯定的な者へと進歩していきます。このような交わりによってのみ、人間は神に関する真の理解と把握、そして真の認識に到達するのです。大半の人々は神との真の交わりに入ることがないため、神に関する彼らの認識は理論のレベル、文字と教義のレベルに留まります。つまり大多数の人が、何年神を信じてきたかに関わらず、神を知ることに関してはいまだに信仰を始めた当初と変わらず、封建的迷信と空想的色合いを伴う伝統的な形の敬意という土台の上で身動きできずにいるのです。神に関する認識が当初の段階に留まっているということは、その認識がほとんど存在しないことを意味します。人間が神の地位と身分を肯定したことを別にすれば、人の神に対する信仰は未だに漠然とした不確かな状態にあるのです。このような状態で、人は神に対する真の畏敬の念をどれほど持ち得るでしょうか。

神の存在をどれほど固く信じていようとも、それが神に関する認識や神への畏敬の代わりになることはありません。神の祝福や恵みをどれほど享受してきたとしても、それが神に関する認識の代わりになることはありません。神のために自らのす

べてを捧げ、身を費やす意欲がどれだけあろうとも、それが神に関する認識の代わりになることはありません。神が語った言葉に非常に精通しており、諳んじてすらすらと暗証さえできるとしても、それが神に関する認識の代わりになることはありません。神に従う意欲がいかに強くても、神との本物の交わりや神の言葉の本物の経験を持ったことがないなら、神に関する認識は空虚な無に根ざしたものか、終わりのない幻想に過ぎなくなります。たとどこかで神とすれ違ったとしても、あるいは神と直接対面したとしても、神に関するあなたの認識は皆無であり、その神に対する畏敬は空しい標語や理想的な概念に過ぎないのです。

多くの人々が神の言葉を日々読み返しており、場合によってはその中の代表的な言葉を貴重な財産としてすべて注意深く暗記したり、さらには随所で神の言葉を説教して、他の人々を神の言葉によって養い援助したりもしています。彼らはそうすることが神について証しをし、神の言葉について証しをすることであり、神の道に従うことだと考えています。さらに、それが神の言葉に従って生きることであり、神の言葉を実生活に活かすことであり、そうすることで神の称賛を得て、救われ完全にされるとも考えています。しかし彼らは神の言葉を説教する一方で、実践では神の言葉に従うことも、神の言葉にあらわされているものに自らを一致させようとすることも一切ありません。むしろ神の言葉を利用することで、策略によって他人からの敬服や信頼を得たり、自らの経営の中に入ったり、神の栄光をかすめ取ったりしています。そして神の言葉を広めることで得られる機会を利用して、神の働きと称賛を得ようといったずらに願っているのです。どれだけの年月が経とうとも、こうした人々は神の言葉を説教する中で神の称賛を得られていないだけでなく、神の言葉を証しする中で従うべき道を見いだすこともできず、神の言葉によって他の人々を養ったり助けたりする中で自分自身を養うことも助けることもなく、そうしたすべてのことを行う中で神を知ること、自らの中に純粹に神を畏れる心と呼び覚ますこともできずにいます。逆に彼らの神に関する誤解は深まるばかりで、神への不信感も深刻になる一方であり、神に関する想像は大げさになるばかりです。彼らは神の言葉に関する理論に満たされ導かれて、完全に自らの本領を発揮し、苦もなく自分の能力を活かしているかのようであり、あたかも自分の人生の目的や使命を見出し、新しいいのちを得て救われたかのようであり、朗読のように神の言葉を饒舌に語りながら、真理を得て神の意図を把握し神を知る道を見出したかのようであり、また神の言葉を説教する中でしばしば神と直接顔を合わせているかのように見えます。さらに彼らはしばしば「感極まって」涙を流し、しばしば神の言葉の中の「神」に導かれて、神の真摯な配慮と優しい思いやりを絶えず掴んでいるように見えると同時に、人間に対する神の救いと経営を理解し、神の本質を知るに至り、

神の義なる性質を理解しているかのようにも見えます。そうした土台に基づいて、彼らはより固く神の存在を信じ、より強く神の高貴な地位を認識し、より深く神の荘厳さと超越性を感じているように見えます。彼らは神の言葉に関する表面的な認識に耽溺しており、その信仰は成長し、苦難に耐える決意は強まり、神に関する認識が深まっているかのように見えます。しかし実際に神の言葉を体験するまでは、神に関する認識や神についての考えが、すべて自らの勝手な想像と推測から生まれていることにはほとんど気付きません。彼らの信仰は神のいかなる試練にも耐えることができず、彼らの言うところの靈性と背丈は神の試練にも検証にも一切耐えられません。彼らの決意は砂上の楼閣以外の何物でもなく、いわゆる神に関する認識もまた、自分の空想による虚構にすぎません。事実こうした、いうなれば神の言葉に多くの努力を費やした人々は、真の信仰、真の服従、真の思いやり、あるいは神に関する真の認識というものを、悟ったことが一切ありません。彼らは理論、想像、知識、賜物、伝統、迷信、さらに人類の道徳的価値観さえも、神を信じ従うための「元手」や「武器」に変え、さらには神を信じ従うための基盤とさえしています。また同時に、彼らはそうした元手や武器を魔法の護符に作り変え、それを通して神を知り、神による検証、試練、刑罰、裁きに対処しようとしています。そして最終的に彼らが得るものは、宗教的含みや封建的迷信、そしてあらゆる空想的で異様で謎めいたものに染まった、神についての結論に過ぎません。彼らが神を知り定義する方法は、ただ「天」や「天の親方」を信じている人々と同じ型に嵌まっており、一方で神の現実性、本質、性質、その所有するもの、神の存在そのものといった、真の神自身に関するものすべては、彼らの認識では把握できず、彼らの認識とはまったく無関係で、北極と南極ほどにかけ離れています。このように、彼らは神の言葉による施しや栄養によって生きているにもかかわらず、神を畏れ悪を避ける道を、本当の意味で辿ることができずにいるのです。その真の原因は、彼らが神と親しんだことがなく、本当に神と接したことも交わったこともないからで、そのため彼らが神との相互理解に達することは不可能であり、神を純粹に信仰し、神に付き従い、崇める心を自らのうちに呼び起こすこともできないのです。神の言葉をこのように見なし、神をこのように見なししているというその見方と態度のため、彼らは努力の末に手ぶらで帰ることになり、神を畏れ悪を避ける道を進むことは永遠にできないよう運命付けられているのです。彼らが目指す目標と彼らが進んでいる方向は、彼らが永遠に神の敵であり、永遠に救いを得られないことを示しているのです。

ある人が長年にわたって神に従い、神の言葉による糧を長年享受していながら、その人が抱いている神の定義が、偶像に敬意を払いひれ伏す者の定義と本質的に同じであるなら、それはその人が神の言葉の現実を得ていないことを意味します。そ

それはただその人が神の言葉の現実に入ったことがなく、そのために現実、真理、意図、そして人類に対する要求など、神の言葉に含まれるものすべてが、その人にとってはまったく無関係なものだからです。すなわち、こうした人が神の言葉の表面的な意味についてどれほど熱心に取り組んでも、すべては無益です。なぜならその人が追求しているのは単なる言葉であり、したがってその人が得るものも必然的に単なる言葉であるからです。神が語る言葉は、外見上平易であるか深遠であるかに関わらず、すべて人がいのちに入るために欠くことのできない真理であり、人間が霊と肉の両方において生き延びることを可能にする、生ける水の泉なのです。神の言葉は、人間が生き続けるために必要なもの、日常生活を送るための原則と信条、救いを得るために進むべき道と目標と方向性、神の前に被造物として持つべきすべての真理、そしていかに神に服従し神を崇めるべきかについてのすべての真理を与えてくれます。神の言葉は人間の生存を保証するものであり、人間の日々のパンであり、人間が強くなり立ち上がることを可能にする頑強な支えでもあります。神の言葉には、被造物である人類が生きるべき正常な人間性の真理の現実が豊かに含まれており、人間が堕落から解き放たれサタンの罠を避けるための真理も豊かに含まれており、さらに創造主が被造物である人間に与えるたゆみない教え、訓戒、励まし、慰めも豊富に含まれています。神の言葉は、肯定的なものすべてを理解できるよう人間を導き啓発する灯台であり、人間がすべての義なる良いことを実際に生きて所有するための保証であり、人々と出来事や物事が測られる基準であり、人間を救いや光の道へと導く道標でもあります。人間は神の言葉の実体験の中でのみ、真理といのちを施され、その中でのみ、正常な人間性とは何か、有意義な生涯とは何か、本物の被造物とは何か、神への真の服従とは何かを理解できるようになります。そしてその中でのみ、人間がいかに神を思いやるべきか、被造物としての本分をいかに尽くすべきか、真の人間らしさをいかに身につけるべきかを理解できるようになり、さらにその中でのみ、本物の信仰や本物の崇拜とは何を意味するのか、天地と万物の支配者が誰であるかを理解できるようになり、またその中でのみ、全ての被造物の主である方がどのような手段で万物を支配し、導き、養うかを理解できるようになり、さらにすべての被造物の主である方がいかに存在し、現れ、働きを行うかを理解し把握できるようになるのです。神の言葉の実体験から離れれば、人が神の言葉と真理に関する真の認識と洞察を持つことはありません。そうした者はまさしく生きる屍であり、完全な抜け殻であり、創造主に関する認識はその者とは一切無関係です。神の目から見れば、そうした者は決して神を信じたことも神に従ったこともなく、そのため神はその人を信者とも従う者とも認めず、ましてや本物の被造物と認めることもないのです。

本物の被造物というものは、創造主が誰であるか、人間はなぜ創造されたのか、被造物としての責任をどう果たすべきか、すべての被造物の主をどう崇拝すべきかを知り、創造主の意図と願いと要求を理解し、把握し、知り、思いやらなければなりません。そして創造主の道、すなわち神を畏れ悪を避ける道に沿って行動しなければならないのです。

神を畏れるとはどういうことでしょうか。そして、どうすれば悪を避けられるのでしょうか。

「神を畏れる」ということは、得体の知れない恐れや恐怖心を持つことではなく、回避することでも距離をおくことでもなく、偶像化や迷信でもありません。それは敬慕、尊敬、信頼、理解、思いやり、従順、献身、愛であり、無条件で不平のない崇拝、報い、そして帰服です。神に関する本物の認識がなければ、人間に本物の敬慕、本物の信頼、本物の理解、本物の思いやりや従順は存在せず、ただ恐怖と不安、懷疑、誤解、回避、逃避があるばかりです。神に関する本物の認識なくして、人間に本物の献身や報いはあり得ません。神に関する本物の認識なくして、人間に本物の崇拝や帰服はあり得ず、ただ盲目的な偶像化と迷信があるのみです。神に関する本物の認識がなければ、人類は神の道に沿って行動することも、神を畏れることも、悪を避けることも到底できません。逆に、人間が関与するあらゆる活動や行為は、反抗と反逆、神についての中傷的な非難や悪意的な裁き、そして真理や神の言葉の真意に反した悪行に満ちることになるでしょう。

ひとたび神を本当に信頼すると、人は本当に神に従い、神を頼るようになります。本当に神を信頼し頼って初めて、人は本物の理解と認識を得ることができます。神に対する真の理解にともなって、神への真の思いやりが生じます。神に対する本物の思いやりがあって初めて、人間は本当に服従できるようになり、神に対する本物の服従があって初めて、人は本当に献身することができます。神への本物の献身があって初めて、人は無条件に不満なく報いることができます。本物の信頼と依存、本物の理解と思いやり、本物の服従、本物の献身と報いがある初めて、人は真に神の性質と本質とを知り、創造主の身分を知ることができます。創造主を真に知って初めて、自らのうちに本物の崇拝と帰服とを目覚めさせることができます。創造主に対する真の崇拝と帰服がある初めて、人は真にその悪の道を捨てること、つまり悪を避けることができるようになるのです。

これが「神を畏れ、悪を避ける」ことの過程であり、また神を畏れ、悪を避けるということの全容でもあります。これは神を畏れ悪を避けることを成し遂げるために、越えなければならない道なのです。

「神を畏れ、悪を避ける」と神を知ることが、無数の線で不可分に繋がって

おり、その関連性は自明です。悪を避けたいと望むなら、まず神を真に畏れなければなりません。神を真に畏れることを望むなら、まず神に関する真の認識を得なければなりません。神に関する真の認識を得たければ、まず神の言葉を体験し、神の言葉の現実に入り、神の懲らしめと鍛錬、刑罰と裁きを経験しなければなりません。神の言葉を経験したいと望むなら、まず神の言葉と向き合い、神と顔を合わせて、人や出来事や物事に関わるあらゆる環境の中で神の言葉を体験する機会を与えてくれるよう、神に求めなければなりません。神や神の言葉と向き合うことを望むなら、まず単純で正直な心を持ち、いつでも真理を受け入れる準備をし、苦難に耐える意志、悪を避ける決意と勇気、そして本物の被造物になるという志を持たなければなりません……。このようにして一歩ずつ前進すれば、あなたはますます神に近づき、あなたの心はますます純粹になり、あなたの人生と生きる価値は神に関する認識とともに一層有意義で豊かになり、より輝かしいものとなってゆくでしょう。そしていつの日か、創造主はもはや不可解なものではなくなり、一度も自分から隠されてはいなかったと感じられるようになり、創造主があなたから顔を隠したことは一度もなく、決して遠く離れてはおらず、絶えず頭の中で追い求めても感じ取ることができないようなものではなく、実際にあなたの左右に立って真にあなたを見守り、あなたのいのちを満たし、運命を支配しているのだと感じられるようになります。神は遠く離れた地平の彼方に存在するのではなく、雲の上に隠れているのでもありません。神はあなたのすぐ側で、あなたのすべてを支配しており、あなたが持つすべてのものであると同時に、あなたが持っている唯一のものなのです。こうした神は、あなたが心から神を愛し、神にすがりつき、寄り添い、敬愛し、神を失うことを恐れるようにしてくれるとともに、もう神を放棄したり背いたりせず、神から逃げたり遠ざかったりもしたがらないようにしてくれます。あなたはただ神を思いやり、神に服従し、神が与えるすべてに報い、神の支配に従うことだけを望むようになるのです。そしてもはや神に導かれ、養われ、見守られ、保護されることを拒まなくなり、神があなたに命じることや定めることを拒まなくなります。ただ神に従い、神の横で共に歩むことを望み、そして神を自分にとって唯一のいのちとして受け入れ、唯一の主、唯一の神として受け入れることを望むようになるのです。

2014年8月18日

神の裁きと刑罰に神の出現を見る

わたしたちは主イエス・キリストに従う他の何億人もの人々と同じように、聖書の律法と戒めに従い、主イエス・キリストの豊かな恵みを受け、主イエス・キリストの名の下に集まり、祈り、賛美し、仕えている。そしてそのすべてを、主の配慮と加護のもとに行っている。わたしたちは時として弱くなったり強くなったりするが、自分たちの行動はすべて主の教えに従うものだと思っている。そのため言うまでもなく、自分たちが天の父の旨を行う道にいても信じている。わたしたちは主イエスの再来を、その輝かしい降臨を待ち望んでおり、また地上における生活の終わりと、神の国の出現、そしてヨハネの黙示録に預言されたことすべての実現を待ち望んでいる。主が到来して災害をもたらし、善人をねぎらい、悪人を懲らしめ、そして主に従いその再臨を歓迎するすべての人々を天に引き上げ主にまみえさせる。このことを考えるたび、わたしたちは感動し、終わりの日に生まれ、幸運にも主の到来を目の当たりにすることを喜ばずにはいられない。わたしたちは迫害の苦難を受けているが、その見返りに「永遠の重い栄光をあふれるばかりに」受けたのだ。何と素晴らしい祝福だろうか。こうしたすべての切なる願いと主から授けられた恵みによって、わたしたちは油断なく祈るようになり、より熱心に集っている。おそらく来年、明日、さらには誰も予想できないほど早く、主は突然やって来て、主をひたすら待ち望んできた人々のもとに現れることだろう。主の出現を目の当たりにする最初の集団となるために、天に引き上げられる人々の一員となるために、みな遅れを取らないよう、我先にと争っている。わたしたちはその日のために、どんな犠牲もいとわず、すべてを捧げてきた。仕事をあきらめた者や家族を捨てた者もいるし、結婚を放棄した者、蓄えをすべて寄付した者もいる。何という無私無欲の献身であろう。このような誠意と忠誠心は、過去の聖徒たちさえも超えるに違いない。主は自らが好む者に恵みを与え、自らが好む者に憐れみをかけるので、わたしたちの献身や支出はもうずっと前から神の目に留まっているものとわたしたちは信じている。そしてわたしたちの心を込めた祈りも神の耳に届いているし、主がわたしたちの献身に報いてくださるものと信じている。しかも神はこの世を造る前からすでにわたしたちを慈しんでおり、誰もわたしたちに与えられた神の祝福や約束を取り上げることはできない。わたしたちはみな未来のための計画を立てており、当然のこととして献身や支出を、天に引き上げられ主に会うための逆手、または見返りの元手としている。さらには何のためらいもなく、わたしたちが将来玉座に就き、すべての国とすべての民族を支配する、あるいは王として治めるものと考えている。わたしたちはこれらのことをすべて、当然の、当たり前期待されるものと捉えているのである。

わたしたちは主イエスに逆らうすべての人々を軽蔑しており、彼らは皆最終的に滅ぼされることになる。一体誰が彼らに、主イエスが救い主であることを信じるなと言ったのか。もちろんわたしたちは主イエスに習って、世の人々に対し思いやりを持つときもある。彼らは理解していないのであり、わたしたちは寛容になって彼らを許すべきなのだ。わたしたちの行いはすべて聖書の言葉に従っている。聖書と一致しないものはすべて邪教であり、異端だからである。このような信念はわたしたち一人一人の心の中に深く根付いている。わたしたちの主は聖書の中にあり、聖書から離れなければ、主からも離れることはない。この原則に忠実であれば、わたしたちは救われるのだ。わたしたちは互いに励まし合い支え合っており、集まる時はいつでも、わたしたちの言動のすべてが主の旨に適い主に受け入れてもらえることを願っている。過酷な環境の中でも、わたしたちの心は喜びに満ちている。これほど簡単に手に届く祝福のことを思えば、棚上げにできないものなどあるだろうか。手放しがたいものなどあるだろうか。これらはすべて言うまでもないことであり、すべては神の目に注意深く見守られている。掃きだめから引き上げられたこの一握りの貧しい者であるわたしたちは、主イエスのすべての信奉者たちと同様に、天に引き上げられること、祝福を受けること、そしてすべての国を治めることを夢見ている。わたしたちの墮落は神の目の前にさらけ出されており、わたしたちの欲望と貪欲さは神の目から見れば罪に定められている。それでもこうしたことはみなごく普通に、ごく論理的に起こることなので、わたしたちの誰も自分の切望が正しいかどうかなどと疑問を持たないし、ましてや誰一人自分の固守しているすべてのことの的確さを疑いもしない。誰が神の旨を知ることができるというのだろうか。人が歩いているのは一体どんな道なのか、わたしたちは探すことも調べることも知らず、ましてや尋ねようとする関心などない。なぜならわたしたちが気にしているのは、自分たちが天に引き上げられるかどうか、祝福が受けられるかどうか、天の国には自分の居場所があるかどうか、いのちの川の水といのちの木の果実の分け前にあずかれるかどうかということだけだからである。わたしたちはこれらを得るために主を信じ、主に従っているのではないのか。わたしたちの罪は赦され、わたしたちは悔い改めて、苦き杯から飲み、十字架を背負った。わたしたちの払った代価を主が受け入れないなどと誰が言えるだろう。わたしたちが油を十分準備していなかったなどと誰が言えるだろう。わたしたちはあの愚かな乙女にも、捨てられた者の一人にもなりたくない。しかもわたしたちはしばしば神に祈り、偽キリストに騙されないようにと主に求めている。それは、聖書に次のようにあるからだ。「そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。にせキリストたちや、にせ預言者たちが起っ

て、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう」(マタイによる福音書 24:23-24)。わたしたちは皆こうした聖書の言葉を記憶に刻み、すべて諳んじていて、それらを貴重な宝であり、いのちであり、救われ天上に引き上げられるかどうかを決める信用状だと考えているのだ。

何千年もの間、生者はその願望や夢を携えて亡くなっていったが、その人たちが天の国へ行ったのかどうかについて、誰一人本当に知る者はない。死者は戻って来るが、過去に起こったことはすべて忘れてしまい、依然として先人の教えや歩んだ道に従っている。このためどれほど月日が経とうとも、主イエスが、神が、わたしたちのすることをすべて本当に受け入れてくれるかどうかは誰にもわからない。わたしたちはただ一つの結果を待ち望み、これから起こるすべてのことを想像するだけだ。しかし神は沈黙を守り通しており、人間の前には一切姿を現さず、言葉を発することもない。だからわたしたちは聖書に従いしるしに基づいて、自らの意思で神の旨と性質を判断している。わたしたちは今では神の沈黙に慣れてしまい、自分たちの行動が正しいか間違っているかの判断を自らの見方で測ることに慣れてしまった。そして神のわたしたちに対する要求ではなく、自分の知識、観念、道徳的倫理に依存することに慣れてしまった。神の恵みを享受することに慣れてしまい、神の助けが必要な時にいつでも神が与えてくれることに慣れてしまった。さらに神に向かって両手を伸ばしてあらゆるものを求め、神にあれこれ指図することに慣れてしまい、ただ規則を守るだけで、聖霊の導きに注意を払わないことにも慣れてしまった。そしてそれ以上に、自分自身が自分の主人である日々に慣れてしまった。わたしたちはこのようにして、一度も面と向かって会ったことがない神を信じている。神の性質とはどんなものか、神が所有するものと神そのものとはどんなものか、神はどのような姿をしているのか、神が現れたときわたしたちはそれが神だとわかるだろうか、などという疑問はどれも重要ではない。重要なのは、神がわたしたちの心の中にいるということと、わたしたちが皆神を待ち望んでいるということであり、わたしたちは神の姿をこうだあだと思像できるだけで十分なのだ。わたしたちは自分の信仰を評価し、自分の霊性を大切にしている。わたしたちはすべてを不潔なものに見なし、すべてのものを踏みつけていく。わたしたちは栄光なる主を信じる者なので、その旅路がいかに長く困難であろうとも、いかなる苦難と危険に晒されようとも、わたしたちが主に従って行くとき、わたしたちの歩みを止めることができるものは何もない。「いのちの水の川は、水晶のように輝き、神と小羊の御座から出ていた。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰

ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する」(ヨハネの黙示録 22:1-5)。この言葉を唱えるたびに、わたしたちの胸は無限の喜びと満足感に満たされ、目からは涙が溢れ出る。主がわたしたちを選ばれたことに感謝し、主の恵みに感謝する。わたしたちは神からこの世で百倍もの報いを受け、来世では永遠の命を与えられている。もし神に今死になさいと言われれば、わたしたちは一言の文句も言わずそうするだろう。ああ主よ、どうぞ早く来てください。わたしたちがどれほどあなたを待ち焦がれており、あなたのためにすべてを捨てたかをご覧になって、もう一分も、一秒も遅らせないでください。

神は沈黙しており、わたしたちの前に姿を現したことはないが、神の働きは止むことがない。神は全世界を見渡し、あらゆる物事を支配しており、人の言葉と行動の一切をつぶさに見ている。神はその経営を計画に従ってゆっくりと慎重に行っており、それは静かに、特に劇的な効果も見せず進行しているが、神の歩みは一步一步進んでますます人類に近付き、神の裁きの座は電光石火の速さで宇宙に設けられ、その直後に神の玉座がわたしたちのもとに降りて来る。それは何と神々しい光景であり、威厳と神聖に満ちた情景だろうか。鳩のように、うなり声をあげるライオンのように、聖霊がわたしたちのもとにやって来る。神は知恵であり、義であり、威厳である。神は権威を持ち、愛と憐れみに満ちて、そっとわたしたちの間にやって来る。誰も神の到来に気づかず、誰もその到来を歓迎せず、その上誰も神がこれからしようとしていることを知らない。人の生活は相変わらずで、心にも変化は無く、毎日がいつも通りに過ぎていく。神はわたしたちの間に、普通の人のように、信仰者の中で最も取るに足らない者として、平凡な一信者として生きている。彼には独自の探求や目標があり、そのうえ神は普通の人にはない神性を備えている。誰もその神性の存在に気づいておらず、誰も彼と人の本質の違いを見抜いていない。彼はわたしたちの目には取るに足らない一人の信者にしか見えないので、わたしたちはのびのびと恐れることもなく彼と共に暮らしている。彼はわたしたちの一挙一動を観察しており、わたしたちの考えや思いつきはすべて彼の前に晒されている。誰一人として彼の存在に関心を持たないし、その役割を想像もせず、さらに誰一人その正体をかけらも疑っていない。わたしたちはただ自分たちの活動を継続している。あたかも彼はわたしたちと何の関係もないとでも言うように。

聖霊がたまたまこの人を「通して」一編の言葉を発することもあり、それは非常に意外なことに感じられるが、わたしたちはそれを神の発した声だと認め、すぐに神から出たものとして受け入れる。なぜならその言葉を誰が発しようと、それが聖霊から出たものである限り、わたしたちはそれを受け入れるべきであり、否

定することはできないからだ。次の発言はわたしを通して出されるかもしれないし、あなたや他の誰かをを通して出されるかもしれない。それが誰にかかわらず、すべては神の恵みなのだ。しかしそれが誰であろうと、その人を崇拜してはならない。何があろうとその人が神であることはありえないし、そのようなごく普通の人を選んでわたしたちの神とすることは決してできないからだ。わたしたちの神は非常に偉大でかつ尊い。どうしてそのような取るに足らない人が、神に代わることなどできようか。さらにわたしたちは神が天の国へと連れ戻しに来てくれるのを待っているのに、そのような重大で困難な仕事を、そんな取るに足らない人がどうして行えようか。主が再臨するとすれば、白い雲の上に乗って現れるはずなのだから、すべての人がそうとわかるだろう。それは何と荘厳なことだろうか。どうして神が平凡な人々の中にそっと隠れていることなどできるだろうか。

しかしそれでも、人々の間に紛れているこの平凡な人こそが、わたしたちを救うための新しい働きを行っているのだ。この人は何も説明することはないし、来た理由を話すこともなく、ただ意図した働きを整然と、自分の計画に沿って行うだけだ。彼はますます頻繁に声を発し、発言するようになる。それには慰め、励まし、忠告、警告から非難や懲らしめまで、そして穏やかで優しい口調から荒々しく荘厳な言葉までがあり、そのすべてが人に憐れみを与えるとともに戦慄を植え付ける。彼が言うことはすべて、わたしたちの奥深くに隠された秘密に命中し、彼の言葉はわたしたちの心を突き刺し、霊を突き刺し、わたしたちを耐え難いほど恥じ入らせ、どこに隠れてよいかわからない気持ちにさせる。そしてわたしたちは、この人物の心の中にいる神は本当にわたしたちを愛しているのか、一体何をしようとしているのか、と疑い始める。もしかすると、このような痛みには耐えなければ天国に引き上げてもらえないのだろうか。これからの行く先や未来の運命について、わたしたちは頭の中で思案する。しかしそれでもまだ、誰一人として神がすでに肉体を得てわたしたちの間で働きを行っているとは考えない。神はこれほど長い間わたしたちと共にあり、これほど多くの言葉をわたしたちに面と向かって語ってきたが、わたしたちはいまだにそのような平凡な人を、自分たちの未来の神だとは認めたがらないし、ましてその取るに足らない人に自分たちの未来と運命の支配を任せたりはしたがないのだ。わたしたちは彼から絶えることのないいのちの水を享受し、彼を通して神と向き合いながら生活している。しかしわたしたちは天におられる主イエスの恵みには感謝するが、神性を備えたこの普通の人の気持ちには一切注意を払ってこなかった。それでも彼は従来どおり、肉体の中に隠れて謙虚に仕事を続け、その心の奥に秘めた思いを表し、人類が彼を拒んでも気にもならないかのように、また人の稚拙さも無知も永久に赦すかのように、自らに対する人々の非礼をひたすら黙認しているのだ。

わたしたちが知らないうちに、この取るに足らない人はわたしたちを神の働きの一つ一つの段階へと導き入れてきた。わたしたちは数え切れないほどの試練に耐え、数々の懲らしめを受け、死をもって試される。そして神の義なる威厳に満ちた性質を知り、神の愛と憐れみも享受し、神の偉大な力と知恵を感じられるようになり、神の愛らしさを目のあたりにし、そして人類を救いたいという神の強い願いを目にする。この平凡な人の言葉を通して、わたしたちは神の性質と本質を知り、神の旨を理解し、人の本性と本質をも理解し、そして救いへの道と完全にされるための方法を知るようになる。その言葉はわたしたちを「死なせ」、そして「生き返らせる」。その言葉は安らぎを与えるが、同時に罪悪感と恩義の念でわたしたちを苦しめもする。その言葉はわたしたちに喜びと平安をもたらすが、同時に無限の痛みも与える。わたしたちは時にその手によって屠られる子羊のようであり、時に最愛のもののようにその慈愛を享受する。また時にはその人の敵のようでもあり、そのまなざしのもとでその怒りによって焼かれ灰にされる。わたしたちは彼に救われる人類であり、その目から見れば蛆であり、彼が日夜見つけ出そうと躍起になっている迷える子羊である。彼はわたしたちに対して慈悲深くもあれば、わたしたちを軽蔑もし、立ち上がらせ、慰め励まし、導き啓き、懲らしめ鍛え、そして呪いさえする。彼は昼も夜もわたしたちのことを心配し続け、昼も夜も守り気遣い、決してわたしたちの傍を離れず、わたしたちのためにその心血を注ぎ、いかなる代償も払う。この小さく平凡な肉体から出る言葉の中に、わたしたちは神のすべてを享受し、神がわたしたちに授けた終着点を見た。それにもかかわらず、わたしたちの心の中ではいまだ虚栄心のために問題が起こっており、このような人を積極的に神として受け入れることができずにいる。この人はわたしたちに非常に多くのマナや、多くの喜びを与えたが、それでもわたしたちの心の内にある主の地位を奪うことはできない。わたしたちはこの人の特別な身分と地位を嫌々ながらに尊重しているのだ。彼が口を開いて、わたしたちに自分が神であることを認めるよう求めない限り、わたしたちは決してこの人を、まもなく現れる、そして同時にすでにわたしたちのもとで長く働いてきた神として、あえて認めようとはしないだろう。

神は発話を続けており、さまざまな方法や観点をを用いてわたしたちにすべきことを諭しつつ、同時にその心を言葉に表している。その言葉は生命力を備えており、わたしたちが歩むべき道を示し、真理とは何かを理解させてくれる。わたしたちはその言葉に引き付けられるようになり、その口調や話し方に注目し始め、そして無意識のうちに、この目立たない人の心の内に関心を持ち始める。彼はわたしたちのために労力を惜しまず、わたしたちのために睡眠も食欲もなくし、涙を流し溜息をつき、病気に苦しみ、わたしたちの終着点と救いのために屈辱を耐え忍び、わたし

たちが鈍感で反抗的なために心から涙と血を流している。このような存在とその持てるものは、普通の人を超えているし、墮落した人間が誰一人として所有も到達もできないものだ。彼には普通の人にはない寛容と忍耐力が備わっており、その愛はどんな被造物にも授けられていないものなのだ。わたしたちの考えをすべて知り、わたしたちの本性や本質をこれほど明確かつ完全に把握し、人類の反抗的で墮落した性質を裁き、天国の神の代理としてわたしたちに語りかけ、このようにわたしたちに働きかけることができる人は、この人をおいて他にいない。彼以外に神の権威、英知、そして威厳を授けられている者はいない。この人からは神の性質、そして神が所有するものと神そのものが、あますところなく発せられている。この人以外に、わたしたちに道を示し、光をもたらせる者はいない。彼以外に、神が天地創造から今日まで明かしてこなかった奥義を明らかにできる者はいない。彼以外に、わたしたちをサタンの束縛やわたしたち自身の墮落した性質から救える者はいない。彼は神を体現しており、神の心の奥底にあるものと訓戒、そして全人類に対する神の裁きの言葉を表現している。彼は新しい時代、新しい紀元を開き、新たな天地と新しい働きを到来させた。そして彼はわたしたちに希望をもたらし、漠然としていたわたしたちの生活を終わらせ、わたしたちの全存在をもって救済の道を完全にはっきりと目撃できるようにしてくれたのである。彼はわたしたちの存在そのものを征服し、わたしたちの心を得た。その瞬間からわたしたちの心は覚醒しており、霊が生き返ったように思われる。この平凡で取るに足らない人物、わたしたちの間で生きながらも長年わたしたちに拒否され続けてきたこの人こそ、わたしたちが寝ても覚めても絶えず思い続け、日夜待ち望んできた主イエスではないだろうか。そう、彼なのだ。実際そうなのだ。この人こそがわたしたちの神なのだ。彼こそが真理であり、道であり、いのちである。彼はわたしたちがもう一度生きて光を見ることができるようにし、わたしたちの心のさまよいを止めてくれたのだ。わたしたちは神の家に戻り、神の玉座の前に戻り、神と顔を合わせ、神の顔を目撃し、行く手にある道をこの目で見た。今、わたしたちの心は完全に彼に征服され、わたしたちはもはや彼が誰であるか疑わず、もうその働きや言葉に反抗することもなく、ただ彼の前にひれ伏す。わたしたちの望みは、ただ残りの人生をずっと神の足跡に従って生きること、神に完全にされること、そして神の恵みとわたしたちへの愛に報い、神の指揮と采配に従い、神の働きに協力し、できる限りのことをして神に委ねられた物事を全うすることだけである。

神に征服されることは、まるで武術の試合のようだ。

神の言葉は一つ一つがわたしたちの急所を突き、わたしたちは傷ついて恐れに満たされる。彼はわたしたちの観念、想像、そして墮落した性質を明らかにする。す

すべての言動から思いや考えの一つ一つに至るまで、わたしたちの本性や本質は神の言葉によって暴かれ、わたしたちは恥じ入って隠れる場所もなく恐怖に震える。彼はわたしたちの行動、目的や意図、そして自分でも知らなかった墮落した性質まで、すべてを一つ一つわたしたちに示すので、わたしたちは自分の惨めな不完全さをすべて見せつけられ、さらには完全に打ち負かされた気持ちになる。彼はわたしたちが反抗したことを裁き、神を冒瀆し糾弾したことでわたしたちを罰し、自分たちが神の目には何の贖うべき特徴もなく、生きたサタンなのだと思わせる。希望は粉々にされ、もはや神に理不尽な要求をしたり、神への下心を抱いたりすることもなく、夢さえも一夜にして消え去る。これは誰一人として想像できず、受け入れることもできない事実である。一瞬のうちにわたしたちは内面の平静を失い、この先どうやって進んでいけばいいのか、どうやって信仰を保っていけばいいのかなくなる。まるで自分たちの信仰が振り出しに戻ったような、そして主イエスに会ったことも、主を知ったこともないような気持ちになる。目の前のすべてがわたしたちを困惑させ、ためらいに揺れ動かせる。わたしたちは狼狽し、落胆し、そして心の奥深くには抑えきれない憤りと屈辱感がくすぶる。そしてうっづんを晴らそう、出口を探そうと試み、さらには救い主イエスを待ち続けて、イエスに胸中を打ち明けようとさえ考える。表面上は平静で、高慢でも謙虚でもないように見えるときもあるが、心の中ではこれまでにない喪失感に苛まれている。ときには表面上いつになく冷静に見えることもあるかもしれないが、内面は荒れた海原のような苦悶に揺れている。彼の裁きと刑罰はわたしたちの希望と夢のすべてを奪い去ったため、贅沢な望みはみな葬られ、わたしたちはあの人を救い主で自分たちを救えるのだと信じようとはしなくなる。彼の裁きと刑罰はわたしたちと神との間に亀裂を作り、それがあまりに深いため、誰も渡ろうとさえしない。彼の裁きと刑罰によって、わたしたちは人生で初めてこれほどの挫折と屈辱を感じたのである。わたしたちは彼の裁きと刑罰によって、神の名誉と人の侮辱に対する神の不寛容とを本当に認識した。それと比べると、わたしたちはなんと卑しく汚れていることか。彼の裁きと刑罰によってわたしたちは初めて、いかに自分たちが傲慢で尊大か、いかに人間が決して神と同等でなく、神と肩を並べることは一切ないかを悟らされた。神の裁きと刑罰によって、わたしたちはもうこのような墮落した性質の中で生きることをやめたい、この本性と本質からできるだけ早く抜け出したい、神にとって卑劣で不快なものでなくなりたいと願うようになった。神の裁きと刑罰によって、わたしたちは神の言葉に喜んで従うようになり、もはや神の指揮と采配に反抗することはなくなった。彼の裁きと刑罰によって、わたしたちは生き残ることを再び切望するようになり、喜んで彼を救い主として受け入れるようになった……。わたしたちは

征服の働きから抜け出し、地獄から、死の影の谷から抜け出した……。全能神はわたしたちを、この一群の人々を得たのだ。神はサタンに打ち勝ち、数多くの敵を打ち倒したのだ。

わたしたちはごく普通の、墮落したサタンのような性質を持つ人々の集団であり、有史以前から神によって運命の定められた、神が掃きだめからすくい上げた貧しい者たちである。わたしたちはかつて神を拒絶し糾弾したが、今は神に征服されている。わたしたちは神からいのちを受け、永遠のいのちの道を授かった。地球上のどこにいても、どのような迫害や試練を受けても、全能神の救いから離れることはできない。なぜなら神こそわたしたちの創造主であり、唯一の贖い主であるからだ。

神の愛は泉の水のように溢れ出て、あなたやわたしや他の人々に、そして真理を求め神の出現を待ち望むすべての人々に与えられる。

太陽と月が交互に昇るように、神の働きは決して止むことがなく、あなたやわたしや他の人々に、そして神の足跡に従い神の裁きと刑罰を受け入れるすべての人々に行われる。

2010年3月23日



全 能 神 教 会

福音ウェブサイト

<https://jp.kingdomsalvation.org>



当教会ウェブサイト



アプリのダウンロード

YouTube: <https://l.kingdomsalvation.org/jp/video>

Facebook: <https://l.kingdomsalvation.org/jp/facebook>

Email: contact.jp@kingdomsalvation.org